シンポジウム

日本の細石刃文化

I

— 日本列島における細石刃文化 —

2003年10月

八ケ岳旧石器研究グループ

シンポジウム

日本の細石刃文化

I

— 日本列島における細石刃文化 —

2003年10月

八ケ岳旧石器研究グループ

シンポジウム「日本の細石刃文化」開催にあたって

1953 年 12 月 26 日、長野県野辺山高原の矢出川遺跡において、由井茂也・芹沢長介・岡本勇らの手によって、日本列島で初めて細石刃文化が発見された。以来、本 2003 年で 50 年、矢出川に落とされた最初の点から、今日では北海道から九州におよぶ 1792 個所の細石刃文化遺跡の存在を知るに至った。

私たち八ケ岳旧石器研究グループは、矢出川遺跡における細石刃文化発見の年から 40 年目にあたる 1993 年、野辺山高原においてシンポジウム『細石刃文化研究の新たなる展開』を開催した。40 周年シンポは、地域の様相や様々な研究の課題を討論していただく場になった。それから早くも 10 年の歳月がながれ、このたび 50 周年の記念シンポジウムを開催する運びとなった。今回は、同じ佐久地域ではあるが、会場を八ケ岳山麓から浅間山麓に移し、本 2003 年に新しくオープンした浅間縄文ミュージアムにおいてシンポジウムをおこなうこととなった。

20 世紀末、旧石器遺跡捏造という重大な事件を我々は経験し、大きな痛みと反省を促されることとなったが、半世紀におよぶ細石刃文化研究の道程を振り返って勇気付けられ、21 世紀の研究の道を切り開いてゆくことに思いを新たにするのである。

本シンポジウム開催にあたっては、多忙な日常をぬってご寄稿いただいた全国の研究者の皆様、参加者の皆様に厚く御礼を申し上げる次第である。

2003 年 10 月 18 日

八ケ岳旧石器研究グループ
代 表 **堤　　隆**

シンポジウム **日本の細石刃文化 概要**

日　時　2003 年 10 月 18 日（土）・19 日（日）
場　所　〒389-0207　長野県北佐久郡御代田町馬瀬口 1901-1
　　浅間縄文ミュージアム
主　催　八ケ岳旧石器研究グループ
共　催　浅間縄文ミュージアム

シンポジウム　日本の細石刃文化　I

―　日本列島における細石刃文化　―

凡　例

① 本文中、遺跡一覧表の石器組成においては、紙面の都合上重要な器種の点数のみを掲載した。したがって、例えば剥片などの出土点数を省いてあるが、表中、遺物の出土点数の総計は実数となっているため、合計に食い違いが生じているものもある。ご注意願いたい。属性の詳細については、付録のデータ記録をご参照いただきたい。

② 各地域において、遺跡分布図のNo.と遺跡一覧表のNo.は対応する。

③ 各遺跡の報告書等の出典については、南部九州地域・北部九州地域・南関東地域については、膨大なため印刷表示せず、附属のデータ記録に収録した。

④ 北海道東部と西部地域において、名寄地域と旭川地域の下記 18 遺跡について表記載・分布図記載の重複がある。ご注意いただきたい。

（下記が重複遺跡、番号は北海道東部のNo.を例示）

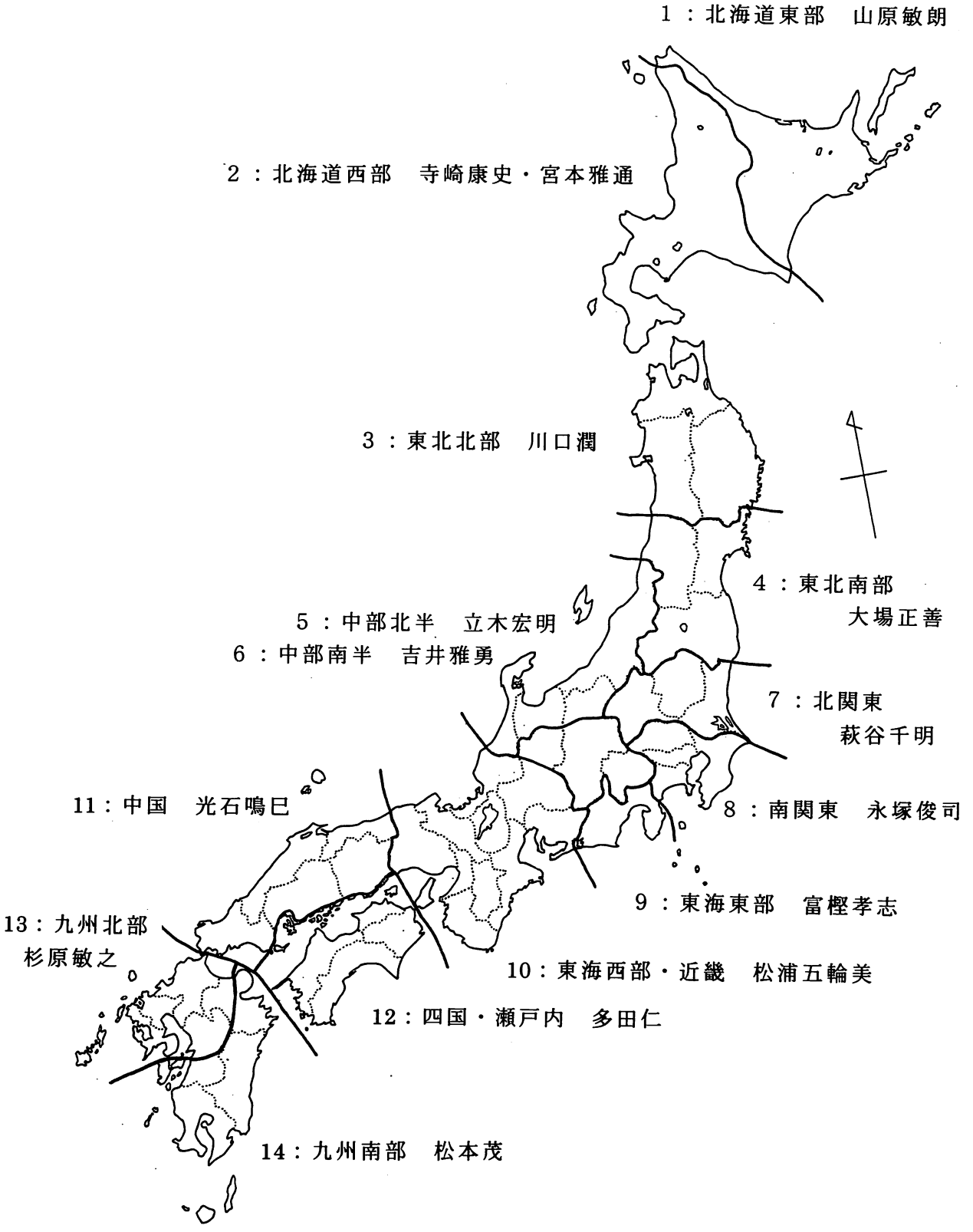
18：旭岡１、19：末広８、20：射的山、22：桜岡２、23：桜岡５、28：北瑛、29：日東、31：嵐山２、32：旭東１、33：朝日１、34：日進２、35：東町、36：モサンル、37：西町１、38：高瀬、39：北町Ｃ、40：佐藤、42：桜ヶ丘

⑤ 列島各地域の遺跡分布基本図は、1／200 万に統一した。
それ以外の詳細分布図は、縮尺を統一していない。

⑥ 石器の図は、スケールの明示がない限り、1／2 で掲載している。

目　次

北海道東部の細石刃石器群　・・・・・・・・・・山原敏朗・・・・・・・・・　1
北海道西部の細石刃文化　・・・・・・・・・・・寺崎康史・宮本雅通・・・25
東北北部地域の細石刃文化　・・・・・・・・・・川口　潤・・・・・・・・・53
東北地方南部の細石刃文化　・・・・・・・・・・大場正善・・・・・・・・・72
中部地方北部地域の細石刃文化　・・・・・・・・立木宏明・・・・・・・・・99
中部地方南部地域の細石刃文化　・・・・・・・・吉井雅勇・・・・・・・・ 128
北関東の細石刃文化　・・・・・・・・・・・・・萩谷千明・・・・・・・・ 156
南関東地域の細石刃文化　・・・・・・・・・・・永塚俊司・・・・・・・・ 184
東海東部における細石刃文化　・・・・・・・・・富樫孝志・・・・・・・・ 234
近畿・東海西部の細石刃文化　・・・・・・・・・松浦五輪美・・・・・・・ 253
中国地方における細石刃文化　・・・・・・・・・光石鳴巳・・・・・・・・ 268
四国・瀬戸内地域の細石刃文化　・・・・・・・・多田　仁・・・・・・・・ 291
九州北部地域の細石刃文化　・・・・・・・・・・杉原敏之・・・・・・・・ 321
東南部九州地域の細石刃石器群　・・・・・・・・松本　茂・・・・・・・・ 368
日本列島における細石刃文化遺跡　2003　・・・・・・・・・・・・・・・・ 415



※　地域区分はあくまで便宜的である。

細石刃文化の地域的様相　執筆分担

北海道東部の細石刃石器群

山原　敏朗

1　研究の経過

１９５３年　　吉崎昌一により北見市豊田遺跡で北海道最初の旧石器が確認される
１９６１年　　吉崎昌一による湧別技法の提唱
１９６３年　　白滝団体研究会による学際的な調査、編年案の提示
１９６９年　　加藤晋平による常呂パターンの提唱
１９７９年　　鶴丸俊明による細石刃核型式の整理
１９８３年　　千葉英一による北海道の旧石器編年の提示
１９８５年　　長沼孝による美利河技法の提唱
１９８８年　　嶋木遺跡で古相とされる細石刃核が出土
１９９５年　　木村英明による社会行動論的研究の提示
１９９５年～　　（財）北海道埋蔵文化財センターによる白滝遺跡群の調査
１９９９年　　日本考古学協会釧路大会での集成

北海道東部における細石刃石器群の調査研究は、質、量ともに豊富な資料の存在を背景に数多く行われてきた。本地域の旧石器時代研究の大部分は細石刃石器群とこれに関連する研究といっても過言ではないが、上述の項にはその影響が比較的長期にわたっていると思われるものを抜粋して示した。以下、90年代後半までについて、若干の補足をしたい。

1970年代前半までにおいては吉崎昌一による白滝遺跡群を中心とした調査研究、大井晴男・加藤晋平・藤本強らによる常呂川流域の調査研究が著名である。もちろん、他の研究者やグループの調査も数多く行われているが、両研究グループはその継続性において他の研究者やグループとの違いを際立たせており、長期にわたって蓄積された成果の厚みが後の当該地域研究に及ぼした影響の強弱になって現れているように思われる。

この時期の議論において、今一度注目すべきものを一つあげるとするならば、それは「細石刃核・彫器」論争（矢島 1984）の経緯と思われる。この論争の重要性については幾つかあげられるが、一つにはある石器に対し、細石刃核か彫器かということを議論するにとどまらず、例えば大井晴男がいうように（大井・久保 1972）、技術形態学的に「峠下型細石刃核」と認識されている一つの石器に対し、細石刃核と彫器という別器種（別形式）に分離させて理解する視点に対しての議論にまで及んでいるところにある。同様なことは「広郷型細石刃核・多面体彫器」や「小型精製舟底形石器・幌加型細石刃核」に関してもいえ、これらの石器は、一つの石器に対し器種あるいは形式を設定することでさえ単眼的理解だけで解決できるほど実態が単純なものではないことを示している。これらの石器を検討する場合、一定の技術形態学的特徴を有する石器＝一形式・一器種という理解だけではその石器の本質を把握できないのではないかという疑問を生じさせることは筆者一人ではないと思われ、別の視点も加味された新たな分析概念を模索すべく思考の転換が必要と思われる。さらに、この議論は細石刃の本質とは何かという当該期の根本的命題（鶴丸 2002）に極めて近い位置で行われており、それが先送りにされている状況は、裏を返せばそれについての議論が今日に至るまであまり深化していないということもできるであろう。

また、この論争やその周囲で示されている多様な思考の表出状況は、秩序的関係を有しない構成員が無から生み出す過程で生じやすい錯綜性を例示していると思われるが（秩序的関係を有する構成員ならば公表される前に

一定の整理が行われるであろう)、それ故に感じるのが学問的議論の純粋性である。今日的にはそれらの見解の結果的是非を評価するよりも、むしろ当時の研究姿勢自体を学ぶべきと考える。

なお、現在では鶴丸俊明に代表されるような細石刃核型式の整理で概ね理解の一致をみているものと認識している(鶴丸 1979)。ただし、その「細石刃核」型式の幾つかについては、仮説共有の状態のまま今日まで至っているともいえ、必ずしも明瞭な解答が提示されたうえでの理解の一致ではないことを付言しておく。

鶴丸の細石刃核型式の整理以後、上述のような錯綜状況は沈静化するが、おそらくそれは同世代の研究者に一定の共通認識が育ちつつあり、鶴丸の整理は多少の小異はあれ、彼らを代表したものになっているためと理解している。それとともに、鶴丸の整理が細石刃核としたものに技術的な系統性の枠組みを持たせたことで、そのような説明が不足気味であった従来の見解より説得力のあるものであったことも大きいように思われる。鶴丸の整理は、概ね同じ認識に立って細石刃核型式(または製作技術型式)群を序列化、系統化する議論を可能にさせたといえ、以降の当該期議論はそのほとんどが編年的問題へと移行していく。

細石刃石器群の編年的問題については、研究当初から細石刃核・彫器論争と並ぶ主要課題の一つで、吉崎昌一を核に議論されてきたといえる。しかし、吉崎自身が幾度か自らの編年案を大きく修正してきたことに象徴されるように、しばらくはその方向性さえなかなか見出せない状況が続いていた。その最大の原因が層位的事例の少なさに起因することについては従来から指摘されてきたが、別の原因としては出土した遺物群の一括性に対する認識の問題であったと思われる。遺跡環境によっては土地の反復利用が高頻度化する可能性や平面的な分布のまとまりが考慮され始めるとともに、遺物群の一括性に対する問題が強く意識され始め、遺存状況のよい、あるいは平面分布の把握が可能な石器群を選択的に分析対象とする方法が一般化していく過程で、徐々にある種の方向性が生じてきたことは、その認識が編年的議論に大きく影響していたことを裏付けていると思われる。

このような認識のもと編年的議論に一応の方向性を得たのは、80 年代に入ってからと思われ、その代表的な見解が千葉英一の編年案であろう(千葉 1985)。千葉の編年案は、序列が想定可能な細石刃核型式によって指標され、それまでの調査成果を考慮しながら簡潔に整理された形で提示されている。千葉と同様な見解は他にもみられるが、その明解さ故に 90 年代前半までは北海道の代表的な編年案として取上げられてきた。上述した鶴丸の整理が細石刃核やその技術についての共通理解を持たせたものならば、千葉の見解は、それに賛同するかどうかはともかく、以降彼の編年案を踏まえて議論されていることからみても、この方面での議論的枠組みに一定の整理をつけ、編年的問題の議論に交点を持たせたものといえる。

道南の美利河 1 遺跡の調査は、峠下型細石刃核が細石刃石器群の古相に位置づけられることをほぼ確定させ、千葉の編年案の一部を追証するとともに、従来までに提示された細石刃核母型製作技術とは異なる技術(美利河技法)が存在することを接合資料によって明らかにした。この「美利河技法」は、それまで提示されてきた細石刃核型式と細石刃(核母型)製作技術型式が必ずしも対応しないことを示して細石刃核・彫器論争以来の活発な議論に発展したが、視点を少し変えれば 70 年代以降の議論対象が細石刃核型式や細石刃(核母型)製作技術関連に集中していることを端的に示しているといえ、それ故に議論が活発化したとも考えられる。それは、美利河 1 遺跡での成果を踏まえ、新たな分析概念として提示された木村英明のテクノ・コンプレックスにしても(Kimura1991)、概念的には石器群の総合性まで発展させることが可能ではあるものの、その提示例を見る限り意識はあくまで細石刃(核母型)製作技術を中心としていることからもうかがえる。もちろん、他の重要な視点や見解も提示されてはいたが(加藤・桑原 1969、松沢 1973、藤本 1982、鶴丸 1985 等)、必ずしも継続的な議論になっているものばかりとは限らない。ある意味、他の対象を犠牲にしてこれに集中していたともいえるが、一方で同時代の報告書の記述内容で推し量れるように、70 年代初頭までみられたような各石器・技術の比較的等質的な目配りが自然消滅的に失われてしまったようにも思われる。もっとも、山田晃弘や白石典之等の論文は石器群の総合性を重要視しており、そうした点は評価できるが(山田 1986、白石 1993)、やはり細石刃(核母型)製作技術関連に比較すれば他の対象項目は分析がやや粗く、彼らの意図とは裏腹に細石刃製作技術関連以外の研究成果の蓄積が相対的に進んでいないことを体現している。

このような経緯の中で、白滝産黒曜石の動きと荒屋型彫器の石材選択性に着目して当該期の集団関係を理解しようとした木村英明の論文は、加藤晋平による常呂パターンの提唱（加藤・桑原 1969）以来の北海道独自の遺跡間関係論として評価される（木村 1995）。遺跡間関係をどう理解するかは常呂パターンという概念が身近で提示されていたが故に、どの研究者も胸中に有していたことと思われるが、それを中心的視座に置いた本格的な論文は加藤以来久しくなかった。ただし、集団関係論の前提には一集団の領域規模を推測、規定する必要があると思われることから、とくに東部地域内での集団領域については、さらなる説明が必要であろう。当時の自然環境を考慮すると、例えば白滝地域を核とした集団が湧別川流域及びその近隣という狭い面積のみを行動領域にしていたとは想定し難い。

90 年代後半から今日までの研究は、それまで単発的であった細石刃、彫器、掻器、舟底形石器、尖頭器等に視点が向けられ、細石刃核やその母型製作技術以外に分析対象が拡大される傾向がみられるが、その背景には石器群の総合的理解という視点が実際には消化不良をおこしており、総合的理解のために必要な等質的で詳細な検討の即時実行が困難であるという現実に直面していることを最近の研究者が実感しているためと思われる。換言すれば、当該石器群の総合的理解のためは、個々の石器や技術の分析または一石器群の中での総合的分析を当該期石器群の総合的体系化を追及する作業と同時並行で行わなければならない作業であることを認識しているためと思われる。とはいえ、鶴丸が指摘するように（鶴丸 2002）、資料の質、量と相反し研究者の少なさが根本的問題であることは確かである。

2　遺跡の分布

北海道東半部は大規模黒曜石原産地を上流域にかかえる湧別川、常呂川、十勝川の各流域に遺跡が多く分布していることが周知されている。このうち、湧別川では上流域（白滝遺跡群）に、また常呂川では中流域に遺跡が集中している状況がうかがえるが、これらは調査または調査成果の公開が各流域の一定地域に集中しているためで、必ずしも遺跡分布の実態を表しているわけではない。常呂川流域の場合、黒曜石原産地に所在する置戸町の遺跡数が一覧表では少ないが、実際は白滝遺跡群と同様、当該期の遺跡が濃密に分布しているとみて間違いない。一方、十勝川流域では湧別川や常呂川流域と比べ、黒曜石採取地から離れた場所での遺跡の発見例が多い。また、上述の２流域より相対的に平野部の面積が広いことが特徴としてあげられ、そうした地理環境の相違が遺跡分布や石器群の内容を特徴付ける可能性があろう。

白滝産黒曜石原産地の所在する山塊の北側に位置する地域でも確認された遺跡の数が増加している。忍路子遺跡や札滑遺跡等の細石刃核型式の指標遺跡が所在する西興部村の東隣にある滝上町は白滝村に南接し、多くの遺跡が存在することが最近紹介されている（出穂 2001）。白滝や置戸の黒曜石原産地からオホーツク海側に抜けるルートとして注目すべき地域といえる。なお、同様なことは置戸町に南接する陸別町でもいえ、内容は不明瞭ながら多くの遺跡が存在することが知られている（後藤 1994）。

この他、天塩川上流域や石狩川上流域でも遺跡が比較的集中している。このうち、天塩川上流域の下川町にはチャート産地があり、遺跡の多さはそれとの関連によると思われる。ただし、出土した石器には黒曜石製も多く、黒曜石原産地等から北方に向かう内陸ルート上での非黒曜石石材の補給地と位置づけることも可能であろう。旭川周辺は石狩川の支流が多く合流する地域であるとともに白滝、置戸地域から道央方面に向かうルート上にあたる。今後は、それぞれの地理的環境を踏まえて地域間関係または遺跡間関係を理解していく必要があろう。

なお、遺跡一覧表で取上げた遺跡は、「細石刃文化期の遺跡」ではなく、「細石刃石器群が発見された遺跡」を基準としている。また、細石刃・細石刃核との関連で問題となる「舟底形石器」が発見された遺跡も含まれていることをお断りしておく。

3　細石刃技法と石材

細石刃製作技術についてはこれまで幾度か整理されてきた（鶴丸 1979、木村 1983、千葉 1985 等）。使用される

名称に若干の相違はあるものの、ほぼ同様な認識と理解される。鶴丸の整理においては、北海道の細石刃核形式は、削片系と非削片系に大別され、前者では札滑型、白滝型、忍路子型、蘭越型、峠下型、後者では幌加型、広郷型（射的山型）、置戸型（紅葉山型）、勢雄型等が設定されており、多くの場合それらの型式が生じる細石刃製作技術に技法（技術型式）の名称が付けられている。これらを細石刃核とする見解は筆者も概ね同様の認識であるが、勢雄型とされた対象資料はピエス・エスキーユ的使用によるものと思われるため、筆者は細石刃核とは認識していない。これらに加えて、美利河１遺跡で提唱された美利河技法の議論において、札滑型細石刃核＝湧別技法の関係が成立しないことが強調されており、美利河技法で生じた札滑型類似の細石刃核は美利河型と呼称されている（千葉 1993）。

さて、上述したように、細石刃核・彫器論争は明解な説明が提示されて決着したわけではない。そのため、これに関する筆者なりの認識を示しておくと、彫器の場合、その主要な刃部が彫刻刀面の側縁部であり、しかも刃部再生が行われる頻度が高いという認識を前提とする限り、最終剥離面は側縁に接する剥離面となることが多いことが想定される。実際、彫刻刀面が複数の面を形成していたとしても、彫器と分類される石器ではそうした切り合い関係であることが非常に多い。一方、細石刃核は両側縁に鋭利な刃部を有する細石刃を剥離するための石核である以上、一般的な石刃核と同様、剥離の進行に伴う打点位置の移動はジグザグ状になることが想定されるため、最終剥離面は必ずしも彫器のような偏向性は示さないと考えられる。つまり、一つの見方ではあるが、両者の区分は樋状剥離面同士の切り合い関係の状況からある程度は可能なのではないかと考えられ、そのような視点から再度観察した場合、細石刃核として分類した鶴丸の整理は概ね妥当なものと理解される。

石材については本地域が大規模な黒曜石産地を複数抱えていることもあり、黒曜石が使用されることが一般的であるが、特定の黒曜石原産地と一定の製作技術との関係をうかがわせる状況も看取される。例えば、十勝地域においては、近在に十勝三股の黒曜石原産地があるものの、札滑型またはそれに類似する細石刃核や尖頭器等、とくに大型の両面調整の石器類では白滝産黒曜石が多用される傾向にある（山原 2003）。また、広郷型は常呂川流域に濃密に分布することが知られているが、白滝遺跡群中の上白滝２遺跡 sb9 においては置戸産の黒曜石で製作された広郷型が含まれており、そのつながりの強さを傍証している（長沼ほか 2001）。これらの現象は黒曜石原石の性状に起因する製作上の有利さが目的製作物別に存在したためと推測されるが、それも含め当該集団の行動戦略が石材産地と遺跡の距離という要因を超えた枠組みで運用されていたことを示している（木村 1995）。

以下、幾つかの技術的問題については私見を補足的に記しておきたい。

両面調整母型の形態と細石刃剥離の技術的関係にについて

吉崎昌一が湧別技法を提唱した際に、細石刃核母型は両面調整の尖頭器形態を想定していたが（吉崎 1961）、実際その母型とみられる両面調整の石器は対称形の尖頭器のような形態ではなく、少なくとも一方の端部は辺を形成するように製作された非対称で「不整形な」形態とみてよいであろう。母型とみなされる両面調整石器のうち、辺を有する側では、辺の一方はやや角張り、他方は角を有しない形態となっているが、この場合やや角張っている端部の若干下位から削片剥離が行われているとみなされる。また、削片剥離の加撃部と想定される部分には、抉りや縁辺の潰しが観察されることがあり（筑波大学遠間資料研究グループ編 1990、山原 1998b）、これらは削片剥離の前処理として施されていると理解される。

仮に、対称形尖頭器形態を母型として想定した場合、削片剥離自体が非常に困難な作業であると推測され、一定の成功率が確保できるとは思えない。たとえ、上述したような前処理で末端まで抜けるような削片剥離が可能であったとしても、削片剥離直後の形態は打面と作業面となる縁辺との角度が鋭角となるため、削片剥離直後に大規模な器体変形を伴った稜成形の加工が施されることを想定しない限り、剥離角自体は細石刃剥離に適したものとはいえない状況になろう。そうした問題を意識してか、鶴丸の模式図では打面形成後に先端部を大きく除去することが想定されているが（鶴丸 1979）、管見の限りそのような剥片は観察しておらず、稜付きの剥片はあくまで、小型の稜付き石刃の範疇におさまるものである。それ故、細石刃剥離にあたっては、削片剥離直後に補正的な調整が多少施されるにしても、稜付き細石刃剥離開始段階から概ね適当な剥離角を有する状態であったと考

えられる。つまり、辺を有する端部は製作段階から細石刃剥離作業箇所としてあらかじめ設定され、従って削片剥離もまた、細石刃を剥離する上で適正な剥離角となるように事前に想定されて行われていたと考えられる。換言すれば、不整形とされる母型形態は削片剥離直後からの細石刃剥離が可能な形態という想定に基づき製作された形態と思われ、その意味では定型的な形態と理解される。このような母型形態は、居辺17遺跡でみられるように一部の忍路子型細石刃核母型でも同様で、峠下型もまたそれに準じると推測される。

このように考えた場合、湧別技法の二次削片は最初の削片剥離で適正な剥離角や打面形状が形成されなかった場合に行われたものと理解することが可能であり、必ずしも細石刃核最大幅＝打面幅を求めるもの（鶴丸1979）ではなく、また素材供給を第一義的な目的とするもの（筑波大学遠間資料研究グループ編1990）でもないと思われる。後者についていえば、原産地から離れると削片素材の石器は急減（削片自体も減少する）するため、たとえ原産地付近でそうした素材が多くみられるとしても、それはあくまで原産地付近での現象といえ、広域的に行われる行為ではないと思われる。

なお、両面（片面）調整の細石刃核やその母型において、その側面に石刃状の縦長剥片を剥離した痕跡を残すものが時にみられる。面的な加工を行う場合、剥離が巧く面の中央の稜を超えなければ加工の進行とともに中央部の厚みが相対的に増し、同一方向からの剥離では中央部の厚みを減じることは非常に困難となる。また、そのような細石刃核から剥離された細石刃では平行な両側縁を有するものが得られにくい。そのため、細石刃核側面にみられる石刃状の縦長の剥離痕は、器面の稜付近の厚さを減じることが第一義的な目的で、目的的に剥離されたものではないと筆者は理解している。

幌加技法について

幌加技法は元来、モーランによって提唱された舟底形石器の製作技術であるが（Moran,R.E.1967）、細石刃製作技術としても次第に使用されるようになり（鶴丸1979）、現在ではむしろ後者の枠組みにおいて理解されている場合が多いと思われる。「舟底形」の細石刃核が長期間維持される北海道の地域伝統からみれば、幌加技法は「舟底形」形態の細石刃核出現以降は常時行使されうるものといえ、本地域に関する限り特定の時期的位置づけはできないのではないかと思われる。実際、これまでの調査例をみてもその可能性は高い。石材利用の効率性を高めるため加工前の母岩形状に応じて選択的に行使されていたことが推測され、それ故に他の技術との共伴が成立するものと考えられる。ただし、共伴する他の細石刃核型式に関連して、幅や高さ等一部の属性には異同が生じている場合もみられる。なお、この型式を最古型式とする見解もあるが、美利河技法や蘭越型細石刃核が真に最古かということも含め、細石刃出現の背景を今以上に熟慮しなければその是非を判断することは困難であろう。

一方、舟底形石器は、筆者の場合、一般的にみられる大きさの細石刃を剥離することが想定できない規格を有する「舟底形」の石器に対して呼称している。最近の調査例からみると、相対的に甲板面幅の狭い粗製舟底形石器や小型の精製舟底型石器は特徴的な尖頭器や周縁加工左刃彫器もしくは一部の細石刃核型式に伴う可能性が高い。小型の精製舟底形石器の場合１～数条の細長い剥離痕が端部にみられるものもある。これらは幅と高さにおいて非常に規格化されており、幅でみると5㎜前後と10～15㎜の2種類が少なくとも存在するようであるが、両者は共伴せずに出土する場合がほとんどである。

粗製品と精製品との関係についていえば、筆者は粗製の舟底型石器は小型精製品の未成品であると理解している（山原1999）。その理由としては、精製品における甲板面のリングの状況からは相対的に大型の粗製品のそれと変わらない大きさの素材を利用していると推測されること、粗製品に破損品が多く、しかもそれらは幅を減じる途中で破損している状況が多くみられること等による。また、細長い剥離痕がみられる小型の精製品は一種の核であり、微小な石刃状剥片を得ることが目的の石器と推測している（山原1999）。一種の核とする理由としては、剥離痕の残り方が他の石核類のそれと同様で、刃部調整のような剥離痕ではないことに加え、幅5㎜前後のものについては、そこから剥離された微小な石刃が専用の押圧具の使用を想定しない限り剥離することが困難と思えるような打点部の特徴をみせるためである。もっとも、細石刃核とするには剥離された石刃状の剥片が小さすぎるため、一般的な大きさの細石刃と同様な植刃としての利用を想定することが困難であるという批判が予想

されたことから一種の核という表現を使用しているが、技術系統上は幌加技法とする細石刃核製作技術に絡むものとして理解される。それ故、幌加技法による石器製作技術は、両面調整の石器や石刃の製作技術と同様のレベルでの素材または母型製作技術として認識する必要があると思われる（山原 2002）。

蘭越型細石刃核の形成過程と石刃剥離から細石刃剥離への移行現象について

柏台 1 遺跡では石刃剥離の進行に伴う石刃核の小型化の過程で「細」石刃剥離に転じ、最終的に蘭越型の細石刃核が生じる工程が接合資料から復元されたが（福井・越田 1999）、それはこれまでに想定された蘭越技法の枠組みを越える製作工程であったといえる。その成果を踏まえたうえで、寺崎康史は出土した蘭越型類似の石核を並べ、小型化する様相を漸移的に理解している（寺崎 1999）。しかし、こうした過程を理解するにはまず、一石器群での脈絡で理解しなければならないと思われ、そのようにみた場合、柏台 1 遺跡では石刃剥離段階と「細」石刃剥離段階との間には一種の間隙が存在するように筆者には理解され、必ずしも等質的な「細」石刃化過程を踏んでいるようには思われない。というのも筆者にはその「間隙」の中で石核の器面調整が変質しているように思われるし、剥離された石刃類も個体別ごとに検討し、石刃類を同一方向（幅広の打面方向）から剥離されたものに限定すると、幅の値が漸移的に変化しているようにはみえず、一定の「谷間」が存在するように思われるからである。つまり、当該集団が石刃と「細」石刃とを意識的に区分していると推測されるが、この課題については剥離技法の変化等の検討も合わせて行う必要があろう。

こうした同一石核のリダクション過程において看取される石刃から「細」石刃剥離への移行現象は、奥白滝 1 遺跡の紅葉山型においてもみられるものである。しかし、蘭越型は基本的に作業面が固定されて剥離が進行するのに対し、紅葉山型では打面調整や再生作業に合わせ、頻繁に作業面を 90 度あるいは 180 度転移させながら進行している。前者のあり方は細石刃石器群の一般的様相といえるが、後者のあり方はむしろ石刃鏃石器群の石刃剥離工程と類似しているといえ（山原 2000）、同一視するものではないと思われる。とはいえ、これら同一個体のリダクションの過程で生じる「細」石刃剥離への移行現象は、細石刃とは何かということを今一度議論する必要があることを暗示していると思われる。

4　組成の特徴

北海道の細石刃石器群は、掻器、彫器を一般的に組成しており、石器群によっては、それぞれが 100 点以上出土することもある。また、打面の小さい石刃を得ることを目的としている石刃技法を伴うことが多いため、筆者はこれらをもって本地域の細石刃石器群の基本的な組成と理解している（寺崎・山原 1999）。しかし、石器群によって組成状況は大きく変化し、画一的な出土状況ではないことから、背後に複雑な要因が存在することは想像に難くない。

彫器は周縁加工左刃彫器が当該石器群に最も一般的にみられるもので、これらは刃部となる彫刻刀面が背面側に位置するものと、側面～腹面側に位置するものとに大別される（山原 1997a）。前者は黒曜石製のものが多いのに対し、後者では非黒曜石製（多くは頁岩）のものが顕著といえ、他の石器が黒曜石製で全て占められていたとしてもこの種の彫器だけは非黒曜石製のものが組成に加わる状況が少なくない。北海道東半の黒曜石石材主体の地域における両者のこのような石材利用の相違は、周縁加工左刃彫器を少なくとも二つに区分する必要があることを示しており、従来から理解されてきた頁岩と周縁加工左刃彫器の密な関係は側～腹面型に該当することになる。周縁加工左刃彫器は細石刃関連資料を伴わない尖頭器や舟底形石器を有する石器群も含め、細石刃出現以降の石器群に多くに伴うものではあるが、広郷型もしくは白滝型細石刃核を有する石器群においてはそれ（とくに側～腹面型）が占める割合が減少し、かわって形態加工がほとんどなく刃部が側縁とほぼ並行するものや交叉形あるいは右刃のものが多くみられる傾向にある（日本考古学協会釧路大会 1999 年度実行委員会 1999）。紅葉山型を伴う石器群では奥白滝 1 遺跡等最近調査された白滝遺跡群の資料をみる限り、周縁加工左刃彫器を伴わない可能性が高く、無形態加工で刃部が側縁と並行するものが伴っている（長沼他 2002）。研究の比較的早い段階で型式設定された幌加型彫器は、いまだ詳細な説明がないものの、筆者は大型石刃を素材にした背面型で緩斜刃の左

刃彫器と理解している。幌加型彫器は大型石刃を素材としているが故に、それを得ることが可能な石材供給と技術力を背景に有していなければ製作できないものであると思われることから、広範な地域で一般的に出土する想定は困難である。大型石材の量が相対的に少ないと推測される十勝地域で現在まで確認されていないことがそうした見解を生じさせているのであるが、白滝や置戸地域においても出土例が蓄積されているとは必ずしもいえないため、かなり特殊な条件の下で製作されていた可能性も否定できない。

掻器もまた彫器とともに一般的に組成される石器であるが、一石器群内における彫器と掻器の分布はあまり重複しないことから、従来から負の分布関係にあるという指摘が提示されている（畑・田原 1975）。筆者も十勝地域の事例からそうした現象を微地形との関連で検討したことがある（山原 1997b）。幾つかの例外はあるものの、こうした関係は現状においても多く確認されることから、概ね肯定されるものと思われる。掻器はとくに忍路子型細石刃核を伴う石器群において出土量が著しく多い。もちろん他の石器群においても出土量が多いものはみられるが、この石器群の場合、むしろ多量に出土することが一般的現象ともいえる。また、札滑型や峠下型の一部には刃部が両面から調整された刃角の小さい掻器が伴う。

他に一般的に組成する剥片石器としては削器があり、一石器群における出土量は決して多くはないものの、錐形石器も組成に含まれることが稀ではない。削器については調査報告者によって認定基準の相違が大きく、組成比較の精度を下げる要因になっている石器ではあるが、加工の規模が大きく定型性の認識することが可能な削器はそれほど多くないようである。錐形石器は縄文時代のそれでは回転による顕著な磨耗痕がよく観察されるが、当該期においては同様の磨耗痕は現状では確認していない。

また、忍路子型や広郷型等の細石刃核型式には有舌尖頭器、尖頭器、石斧、舟底形石器を伴うことが知られている。一方で、これらは細石刃関連資料を伴わずに出土する場合もみられる。有舌尖頭器を指標とする石器群でいえば、細石刃の関連資料の有無によって時期差と考える見解もあるが、筆者はその組成差が時期差となる根拠を見出すことができないため、否定的である（山原 1998a）。なお、舟底形石器は、広郷型に伴う可能性は高いものの、忍路子型に伴うかどうかは微妙で、少なくとも北海道東半の遺存状態が良好な遺跡の調査例においては確認されていない。

5　編年

北海道においては層位的な事例が少ないため、必ずしも確定的な編年が成立しているとはいえず、新たな事例で修正され続けている状況である。しかし、断片的な出土事例を積み重ねると、ある程度の編年関係は見出すことが可能である。

従来どおり、細石刃核関連を指標として取上げると、美利河1遺跡の出土状況、及び恵庭a火山灰層下位から出土した柏台1遺跡の状況から、少なくとも峠下型や蘭越型、美利河技法が古い段階で出現していることは明瞭であろう。一方で恵庭a火山灰層の上位からは暁遺跡にみられるように峠下型、と札滑型（湧別技法）がセットで存在しており、両型式の組み合わせは緑丘B遺跡の他、幾つかの遺跡でも確認される。忍路子型もまた恵庭a火山灰層上位からの出土例しかみられない。忍路子型や広郷型には有舌尖頭器や石斧を伴うことから、以前から相対的に新しいと理解されてきたが、現状においてもそれを覆す事例は見当たらない。これらを考慮すると、峠下型、蘭越型―峠下型、札滑型―忍路子型、広郷型（ただし両者の関係は不問）という変遷枠は概ね妥当な見解かと思われる（寺崎 1999）。

このうち、他の細石刃核型式とも共伴する峠下型は、古相と新相で細別される特徴を有していることが指摘されている（寺崎 1999、山田 1999）。また、蘭越型とみなされる残核形態は柏台1遺跡の接合資料から復元された製作工程以外で生じる可能性も否定できず、そのことも含め古い段階にのみ限定されるものかどうかは検討の余地があり、加えて大陸側では峠下型とともに蘭越型の出現頻度が高いとする木村英明の指摘が妥当ならば（木村 1988）、それを考慮した検討も必要であろう。

忍路子型と広郷型との関係、及び白滝型や紅葉山型の位置付けについては、それらを伴う石器群全体の様相を

一層踏まえて議論する必要がある。このうち、紅葉山型はこれらより古く位置づける見解とより新しく位置づける見解に別れるが、筆者は後者の見解に賛同する。紅葉山遺跡における広郷型との共伴の是非はともかく、良好な接合資料が得られた奥白滝１遺跡の資料からみると、「石刃」の大きさこそ異なるものの、製作工程のシステムや技術的諸属性が、石刃鏃石器群のそれに類似すると理解されること、またそのことも含め類似資料は国内ではなく、むしろ大陸の新石器時代資料に求められると考えられるためで、古く位置づけられる可能性は極めて低い。

忍路子型と広郷型とは一定の技術的特徴を共有するものの、現状において確実な共伴例はみられない。両細石刃核を伴う石器群においては主体的に使用される原石形状が大きく異なるため、石材の相違により生じた一種の「常呂パターン」的関係で同時性のある石器群と理解する研究者も少なくない。ただし、一定の技術的特徴を共有するとはいえ、石刃技法に関する属性の一部や組成される石器の型式レベルまたは細別型式レベルでの諸特徴からみると、むしろ異なる様相の方が多いといわざるを得ず、そうした相違の中には石材や機能に起因する相違とは考え難いものもみられる。「常呂パターン」的関係とするならば、その点についての明瞭な説明がなければ説得力に欠ける。

白滝型は湧別技法という製作技術的共通性から札滑型との関連が指摘され、また忍路子型との規格や器面調整の共通性から札滑型以後、忍路子型以前と理解されてきたように推測される。しかし、組成の項で述べたように、この種の細石刃核が伴う石器群では周縁加工左刃彫器よりも他型式の彫器が目立つため、周縁加工左刃彫器の以降の継続性からみると、この位置づけは非常に不可解な現象となる。一方で、白滝型に類似する細石刃核を有する函館市石川１遺跡では札滑型を有する石器群との共通性を示す石器群であり、新潟県樽口遺跡の様相も含めて考えると、従来どおりの見解を追認させているようにもみえる。また、最近調査された元町２遺跡や中本遺跡の石器群の様相をみると、広郷型との関係を強調する必要がある。つまり、組成される他の石器の諸特徴に統一的な共通性や系統性がみられないのが、理解を困難にさせている。このようにみると、比較的新しい時期に出現した型式であると理解することは妥当と思われるが、それ以上の理解については現状において非常に困難な資料といえる。

編年的議論の視点に関していえば、これまでの経緯は製作工程を主とする技術的系統関係だけではこの問題が解決できないことを示しているように思われる。製作技術は石材環境や消費過程での変異も生じやすく、また、技術を行使した集団が一系統の新古関係にある集団とも限らないため、技術的異同＝編年的関係とするリスクは大きい。しかし、一方でそれらを超えた同時性のある共通枠の存在もまた否定できない。分析の対象枠を拡大し、編年的指標（それ以前に石器群のグループ化）が可能となる技術的要素や石器型式の特徴を多く見出すことが必要であろう。

細石刃石器群の時期区分は未だ統一的な区分に意見が収斂してはいないが、忍路子型や広郷型に有舌尖頭器や石斧等の新出の石器が組成されることから、時期区分の基準にされていることが多い。筆者は細石刃石器群出現をもって北海道の後期旧石器時代後半期としているが、その枠組みにおいて自身もまたこれら新出の石器が組成される時期以降を後半期後半とし、それ以前の細石刃石器群を後半期前半として区分している（寺崎・山原 1999）。さらに、前半期は恵庭ａ火山灰層下位から出土する峠下型、蘭越型、及び美利河技法を伴う石器群を前半期古相、上位から出土する峠下型、札滑型を伴う石器群を新相として理解している。

加えて、前半においては押圧剥離の使用が細石刃剥離や彫器の削片剥離等細長い剥片の剥離に限定される可能性が推測されるのに対し、後半においては両面調整の石器や細石刃核における器面調整等の仕上げ段階にも押圧剥離が導入されているとみなすことができるため、器面調整における押圧剥離の導入が剥離技法からみた場合の画期になるのではないかと推測している。その脈絡において、白滝型細石刃核や小型精製舟底形石器もまた新相の石器と理解することが可能であるし、以降の石器時代の様相も含めてみると、押圧剥離の採用枠が段階的に拡大していくと理解することも可能であろう。

6　様相

周縁加工左刃彫器からみた様相

ここでいう周縁加工左刃彫器は、いわゆる荒屋型彫器及びそれに類似する特徴を有する彫器を指しているが、本州島の資料から提唱された荒屋型彫器の定義を厳密に運用すると、北海道においては周縁加工左刃彫器群の一部を指しているに過ぎないことから、とりあえずこの名称を使用している。また、周縁加工左刃彫器は掻器に比べ素材の加工方法や技術に多様性がみられるばかりでなく、北海道島の後期旧石器時代後半期石器群において、最も一般的にみられる石器の一つであるため、細石刃石器群の枠組みを超えた検討が可能な資料群である。

周縁加工左刃彫器のうち、刃部が側～腹面型に位置するものでは素材の選択、規格、形態加工の状況、刃部に関する属性等で石器群ごとの特徴がみられ、とくに黒曜石製のもので把握しやすい。ここでの詳細な検討はできないが、十勝地域の刃部側～腹面型の資料で定量的に検討すると、前半の新相段階（峠下型、札滑型）の石器群（暁遺跡第1地点、南町2遺跡スポット3、上似平遺跡A・D・Eブロック）、後半期の忍路子型を伴う石器群（大空遺跡、居辺17遺跡）と一部の有舌尖頭器石器群（稲田1遺跡）、細石刃を伴わず舟底形石器や扁平な尖頭器を伴う石器群（落合遺跡、南町1遺跡）では明瞭な相違がみられ、それは平面形態だけを取上げても比較的理解しやすい。加えて、有舌尖頭器石器群の別の一群（札内N遺跡）ではこれらとは異なる独自の特徴を有する資料群を伴うため、周縁加工左刃彫器からみると、以上４つの石器群グループに区分することが可能で（山原 2003）、他の石器の型式学的異同や技術的特徴の異同とも概ね整合する。北海道東半全域に視野を拡大しても、同様な様相が看取されるため（山田1999、高倉2000、長沼他2001・2002）、この種の彫器が石器群理解のための指標的役割を担う可能性は高いと考えられる。加えて、十勝地域での明瞭な出土例がみられない前半古相段階（美利河1遺跡Ⅰ群、北進遺跡等）においても、上述のものとは異なる特徴を有していることから、北海道全域では少なくとも細石刃石器群出現以降の石器群を５グループに区分することがこの種の彫器からみれば可能と考えられる。この場合、本州でみられる「荒屋型」彫器はその特徴が前半期新相に伴うこの種の彫器群に相対的に近く、とくに東北北部の資料は非常に類似しているといえる。また、大陸側においては北海道とある程度共通する枠組みが存在するようにも看取され、細石刃製作技術や尖頭器類だけでなく、この種の彫器の動向にも注意を向ける必要があると思われる。

さて、この種の彫器の機能については暁遺跡第1地点出土の黒曜石製資料の使用痕の観察からその主要刃部が彫刻刀面と素材腹面側が接する縁辺であること、また刃部背面型と側～腹面型とでは線条痕や微細剥離痕の様相が異なるため両者が異なる機能を有し、とくに後者の場合骨角等のより硬質のものを対象にしていたのではないかと推測した（山原 1997a）。このうち、主要刃部が彫刻刀面と素材腹面側が接する縁辺であることについては、使用痕が観察される部位が他の資料においても同様であることから、現状においてもその認識を変更する必要はないと思われる。

なお、広郷型を有する石器群では、背面型は一般的にみられるものの側～腹面型は少なく、かわって刃部が側縁とほぼ並行するものや交叉形で形態加工がほとんどないものが多いという様相がみられる。しかし、同様な刃部傾斜角を有するこれらが側～腹面型の機能の代替的役割を担っていると考えれば、機能的相違を背景とする二つの刃部形態の共存が後半期の彫器の一般的な様相であると理解することが可能である。また、全体的にみると背面型は相対的に前半で少なく、後半で増加する状況がうかがえる。

北海道において、周縁加工左刃彫器の出現は細石刃石器群として議論の余地のある数例を除けば、細石刃の出現と概ね軌を一にしているとみなされる。しかし、その終焉は後半期後半における様相（細石刃を伴わない石器群にも多量に出土する状況がみられる一方、幾つかの細石刃を伴う石器群では伴わないか、もしくは出土量が一般的に少ない）をみる限り、ある時期一斉に製作されなくなったのではなく、段階的に使用が限定されていく過程において製作されなくなったものと推測される。加えて、この種の彫器が骨角器製作の一翼を担っていたとすれば、その出現は骨角器製作の変革とも重なり、またその終焉は次なる骨角器製作の変革によるものと推測されるが、後半の出土状況を考慮すると、その終焉は必ずしも細石刃を用いた植刃器と軌を一にするようなものではないことを意味していると思われる。

細石刃石器群の展開

北海道における細石刃石器群は柏台1遺跡の出土状況により、本州より古い段階から成立していたことが確認されたが、この石器群の様相は基本的に従来の一般的な細石刃石器群の枠内で理解可能なものである。しかし、それまで最古段階の細石刃核とされてきた嶋木遺跡の資料は、それらとは様相を異にする。細石刃の認識方法によって細石刃核自体の認識方法も変わるとは思われるが、少なくとも細石刃石器群とする場合、細石刃の量産性とその規格に統一性のある状況をもって認識されるものと思われるため、細石刃核とするかどうかの是非はともかく、嶋木遺跡の石器群を細石刃石器群として呼称することには無理があると認識する。また、越川遺跡で細石刃様石器と呼称された資料は、その報告で推測する限り、空港南A遺跡下層で出土したものと同様のものと思われる（明石 1982）。空港南A遺跡の場合、一般的な細石刃とはやや異なり加撃力が非常に強かったと推測されるため、偶発的とみなすことも可能ではあるが、ここでは狭い範囲の試掘坑からまとまって出土しているため、一概には断言できない。結論は出せないが、これまでのものとは異なる資料が存在する可能性をうかがわせる。

細石刃石器群のうち、前半においては細石刃に伴う他の石器組成が相対的に単純なこともあり、石器群間の関係も比較的把握しやすい。木村英明の集団関係論において、それが明瞭に表現可能なのはこの時期に焦点を当てていることも要因の一つとしてあげられる。しかし、後半の細石刃石器群は有舌尖頭器や石斧等の新出の石器が組成されることに加え、それらが細石刃を伴わずに出土する場合もみられることが問題を一層複雑にさせている。当該期は集団関係論以前にまず多様な内容の石器群を体系的に整理し、これらの石器群間関係の基本的認識の枠組みを共有していく過程が必要であり、それなくしては集団関係論自体の議論がかみ合わない。

後半の細石刃石器群においてまず、問題となるのが有舌尖頭器石器群と細石刃石器群との関係である。忍路子型や広郷型に有舌尖頭器が伴うことは以前から指摘されてきたが、細石刃を伴わない有舌尖頭器石器群の理解については見解が分かれる。筆者は一石器群に属する石器や技術の個々の特徴の異同から、細石刃を伴わない一部の有舌尖頭器石器群もまた忍路子型を製作した集団に帰属すると理解している。とくに、周縁加工左刃彫器の諸特徴における類似性と他の石器群のそれとの異差性をみると、この両者を時期的に分離することは非常に困難と思われる。また、稲田1遺跡等幾つかの石器群では細石刃核は有しなくとも少量の細石刃を伴う石器群がみられ、大空遺跡では隣接する集中域においてともに細石刃を有しがらも一方では細石刃核が、もう一方では有舌尖頭器がそれぞれみられる等の出土状況をみても、両者は緩やかな負の関係にあると理解され、上述の関係を想定せざるを得ないと思われる。

広郷型を伴う石器群では、従来前期白滝文化の所産として理解されてきた大型石刃を有する石器群が、この石器群に帰属すると認識されつつある（出穂 1995、寺崎 1995、山原 1998a 等）。大型石刃剥離技術の可視的特徴（とくに打点設定部付近の前処理）から推測される剥離技法が一般的な石刃剥離技術以上に高度なものであるという推測、及び大型石刃剥離技術の可視的特徴を含めて組成される石器の特徴が広郷型のそれと共通するためである。加えて、川西C遺跡で出土した恵庭a火山灰層下位の石刃石器群が前期白滝文化とされたものとは全く異なっていたことも、その認識を追証したといえよう。忍路子型を伴う石器群との関連が想定される資料以外の有舌尖頭器石器群（札内N遺跡や東麓郷1遺跡等）と比較すると、有舌尖頭器を含めた尖頭器類や石斧、及び上述の大型石刃関連資料において、広郷型に伴う石器群にもみられる特徴を有している。

これらに加え、最近では従来あまり議論の対象にあげられなかった舟底形石器や左右非対称の扁平な尖頭器を指標とする石器群の調査例が多くなり、この石器群も考慮しなければ、細石刃石器群の展開だけでなく、北海道の旧石器時代の終末を理解することが困難な状況になっている。十勝地域中央部の資料でみる限り、忍路子型関連の石器群と舟底形石器を有する石器群とでは時期差と理解するのが適当と考えられるが（山原 2002）、これらに広郷型関連がどう絡むかはこの地域に調査例がないため不明瞭である。ただし、総体的にみるとその特徴は後者に近いように思われる。なお、モサンル遺跡も後者の石器群グループに含まれるが、これらが本州で提唱された御子柴・長者久保文化と同じ石器群グループとして認識できるものとは思えない。

筆者の見解はともかく、これらの石器群に白滝型や紅葉型を伴う石器群を含めると、後半の石器群の多様性と

その複雑さは理解されるものと思われる。また、このような状況から後半においては、少なくとも単系的な時間軸で石器群を列挙することは困難であるといえ、「常呂パターン」的石器群間関係を有する集団が複数存在していた可能性をも視野に入れなければならない。筆者は過去に忍路子型と広郷型とを時間軸で解釈したこともあったが（山原 1998a）、その視点からみると、より新しい要素がみられるからといって即それが石器群の新古関係になるとは限らないことにもなるため、自身の当時の見解もまた当該期全体を見通したものではなかったと現在では認識している。

なお、後半の諸石器群のほとんどは本州の縄文時代草創期に相当する時期に位置づけられるものと考えられるが、以上のような様相からみると、本州と同じ変遷をたどるとは限らないといえる。もちろん、本地域が北東アジア全体の動向に沿っていることは明瞭ではあるが、一方でそれとも異なる「地域」としての視座は必要である。しかし、これまでの研究動向をみると、本地域は北東アジア的視野と日本的視野の狭間に埋没する危険性をはらんでいるといえ、それ故、当該期の検討にあたっては草創期の概念や枠組みにとらわれずに本地域の「移行期」を独自のものとして認識し、その継続性を以降の時期も含めて理解していくこともまた必要であろう。付言すれば、北海道東半部において、石器群の内容が多様で画一化していない状況は当該期だけでなく縄文早期に相当する時期にもみられるものである。

おわりにかえて

時間的制約と石器群の多様な内容から、ここでは幾つかの課題を述べるにとどまってしまった。これまで提示されてきたすべての事項に言及することができなかったことを深くお詫び申し上げる。ただ、基本的な研究課題については上述したことに含まれていると思われ、それぞれの課題について議論が活発化されればこの地域の研究もより進展するであろう。そのためには、何より、研究者の育成と研究環境の整備が必要ではなかろうか。

主要引用文献

明石博志 1982『帯広空港南Ａ遺跡・宮本遺跡範囲確認調査報告書』帯広先史文化研究会

出穂雅実 2001「第二章　先史」『続滝上町史』

出穂雅実 1995 北見市中本遺跡の再検討」『950923 北海道考古学会研究会発表資料』

大井晴男・久保勝範 1972「北見市本沢遺跡の調査」『北見郷土博物館紀要』２

加藤晋平・桑原護 1969『中本遺跡』永立出版

木村英明 1983「細石器（北海道地方）」『季刊考古学』第４号

木村英明 1988「シベリアと北海道の石器」『古代史復元』1　講談社

木村英明 1995「黒曜石・ヒト・技術」『北海道考古学の諸問題』

後藤秀彦 1994「陸別町の先史・先住文化の考察」『陸別町史』

白石典之 1993「北海道における細石刃石器群の展開」『物質文化』第 56 号

高倉　純 2000「北海道北見市吉井沢遺跡Ｂ地点出土細石刃石器群の再検討」『北海道旧石器文化研究』第５集

千葉英一 1985「日本の旧石器―北海道―」（1）～（3）『考古学ジャーナル』245～247

千葉英一 1993「新道４遺跡における細石刃石器群」『考古学と関連化科学』吉崎昌一先生還暦記念論集

筑波大学遠間資料研究グループ 1990『湧別川』遠軽町教育委員会

鶴丸俊明 1979「北海道地方の細石刃文化」『駿台史学』第 47 号

鶴丸俊明 1985「黒曜石供給の一形態とその技術」『考古学ジャーナル』244

鶴丸俊明 2002「北海道旧石器考古学の論点」『北海道考古学』第 37 輯

寺崎康史・山原敏朗 1999「地域研究 50 年の成果と展望　北海道地方」『旧石器考古学』58

寺崎康史 1995「広郷型ナイフ形石器について」『今金町地域研究』第１号

寺崎康史 2000「北海道細石刃石器群理解への一試論」『先史考古学論集』第８集

長沼孝ほか 2001『白滝遺跡群』Ⅱ　(財) 北海道埋蔵文化財センター
長沼孝ほか 2001『白滝遺跡群』Ⅲ　(財) 北海道埋蔵文化財センター
日本考古学協会 1999 年度釧路大会実行委員会　1999『海峡と北の考古学』資料集Ⅰ
畑　宏明・田原良信 1975「水口遺跡」『日本の旧石器文化』3　雄山閣
福井淳一・越田賢一郎 2000『千歳市柏台 1 遺跡』(財) 北海道埋蔵文化財センター
藤本　強 1982「常呂川流域の細石刃」『北海道考古学』第 11 輯
松沢亜生 1973「樽岸ブレイド・テクニック」『石器時代』10
矢島國男 1984「先土器時代」『北海道考古学』第 20 輯
山田晃弘 1986「北海道後期旧石器時代における石器製作技術構造の変遷に関する予察」『考古学雑誌』第 71 巻第 4 号
山田　哲 1999「北海道の前半期細石刃石器群についての研究」『先史考古学論集』第 8 集
山原敏朗 1997a「彫器の形態・技術・機能」『先史考古学論集』第 6 集
山原敏朗 1997b「北海道の遺跡立地と石器の出土状況」『考古学ジャーナル』413
山原敏朗 1998a「北海道の旧石器時代終末期についての覚書」『北海道考古学』第 34 輯
山原敏朗 1998b「北海道帯広市暁遺跡の細石刃製作技術について」『北方の考古学』野村崇先生還暦記念論集
山原敏朗 1999『帯広・落合遺跡』2　帯広市教育委員会
山原敏朗 2000「浦幌町吉野台細石器遺跡の石器資料について」『帯広百年記念館紀要』第 18 号
山原敏朗 2002『帯広・落合遺跡』3　帯広市教育委員会
山原敏朗 2003「石器変形論からみた周縁加工左刃彫器群の形態認識について」『古代文化』第 55 巻第 4 号
吉崎昌一 1961「白滝遺跡と北海道の無土器文化」『民族学研究』第 26 巻第 1 号
Kimura,H.(ed.)1992 "Reexamination of the Yubetsu technic and study of the Horokazawa-toma lithic culture"
Moran,R.E.1967 'The Preceramic period of Hokkaido:An outline' "Artic Anthoropology" vol.Ⅳ-No. 1

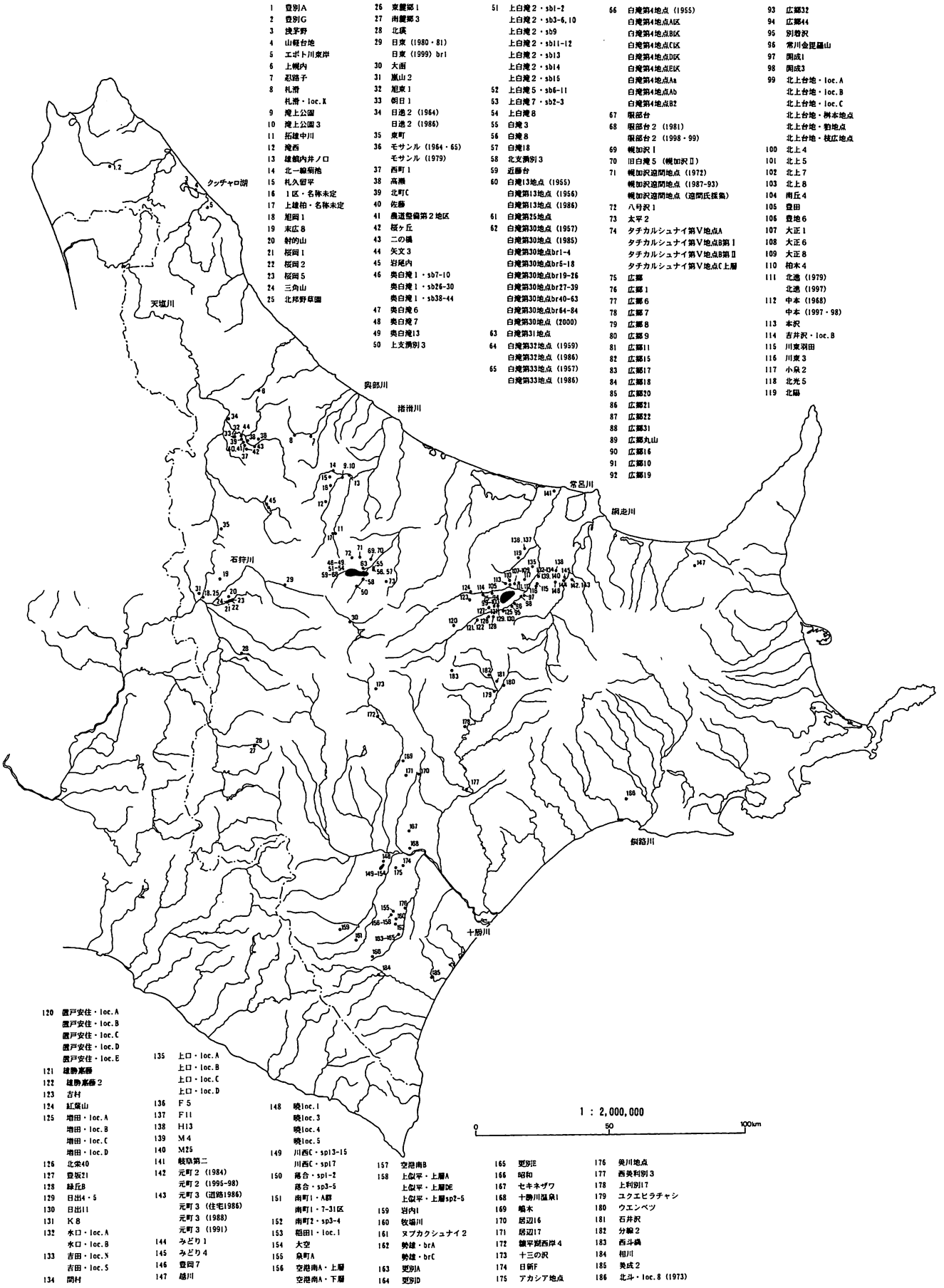
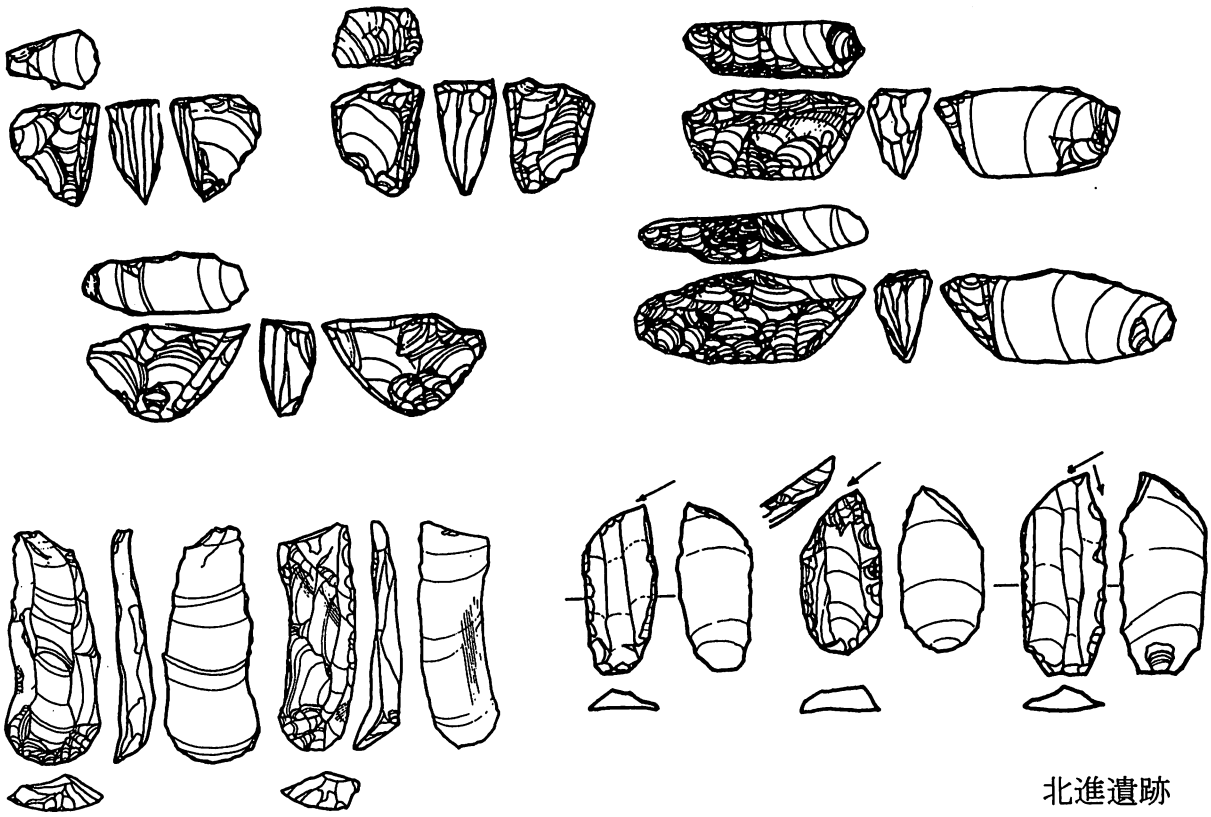
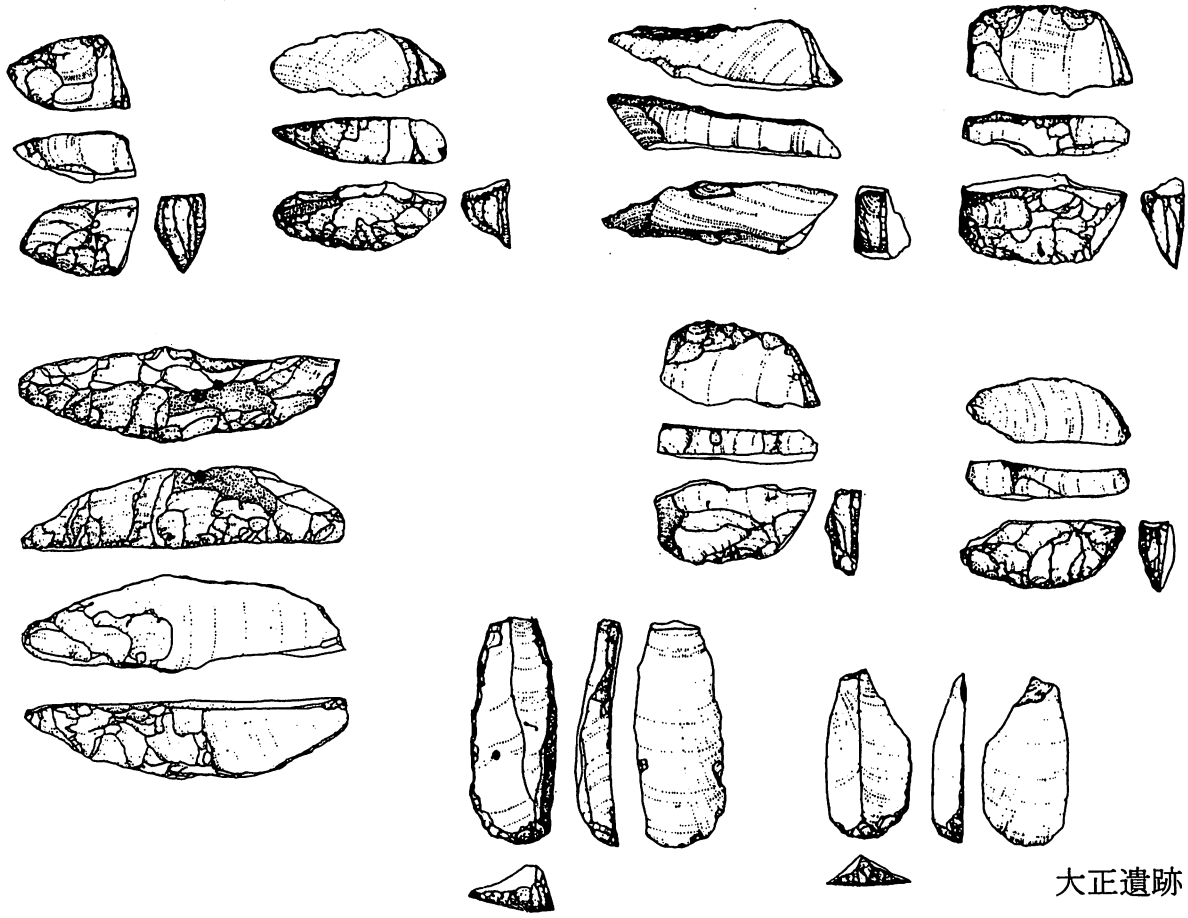


図1　北海道東部の細石刃石器群の分布



北進遺跡



大正遺跡

図２　北海道東部の細石刃石器群

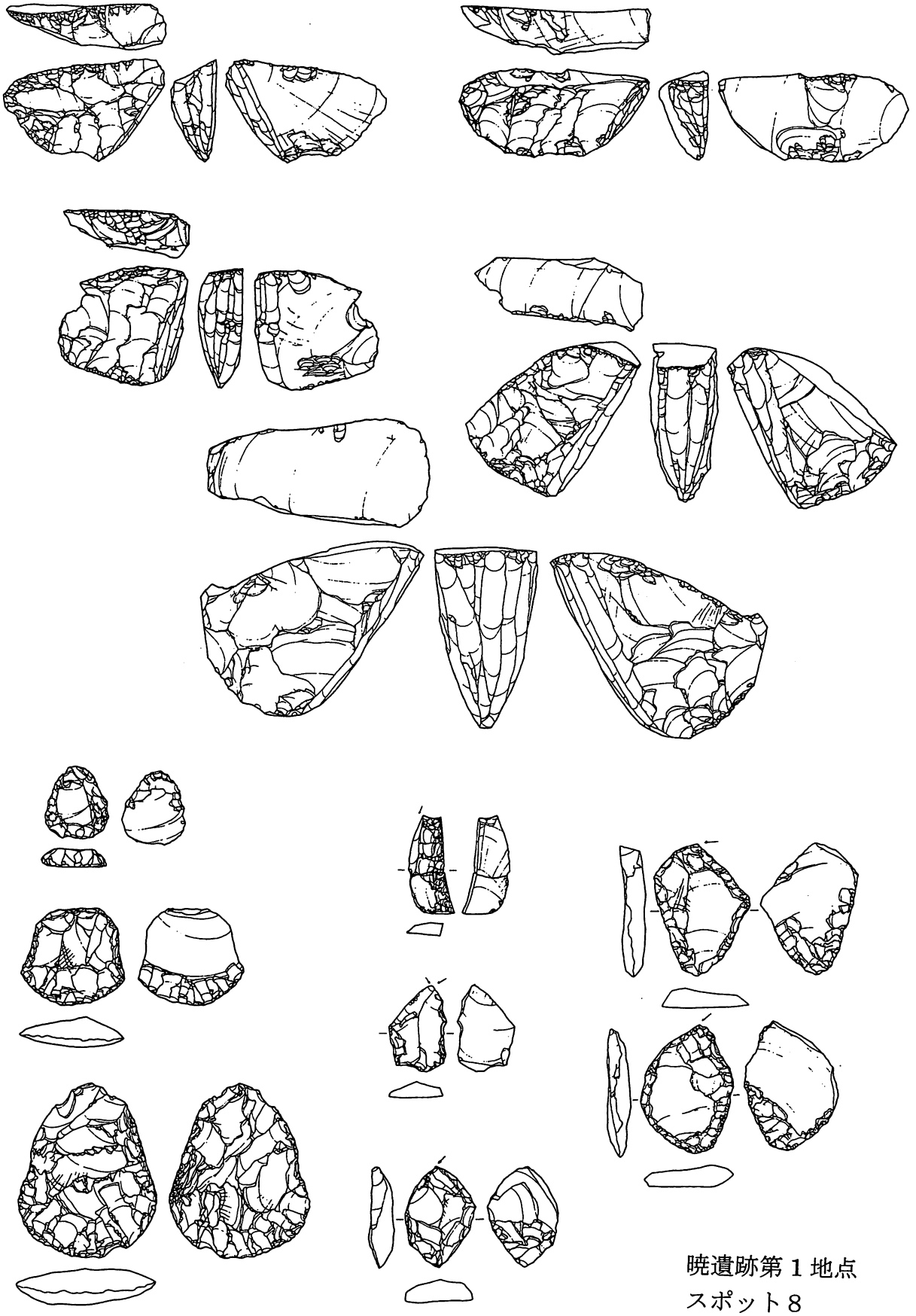
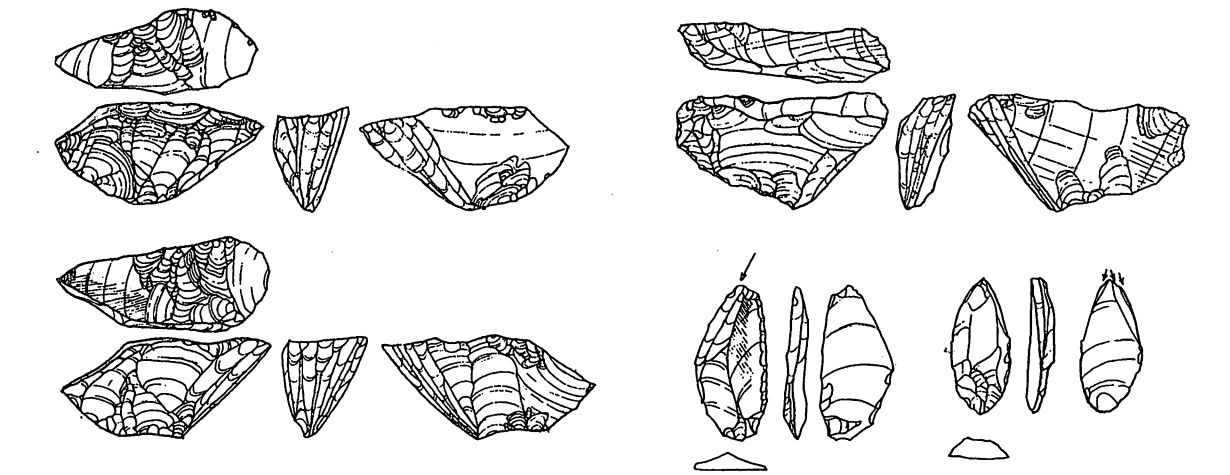
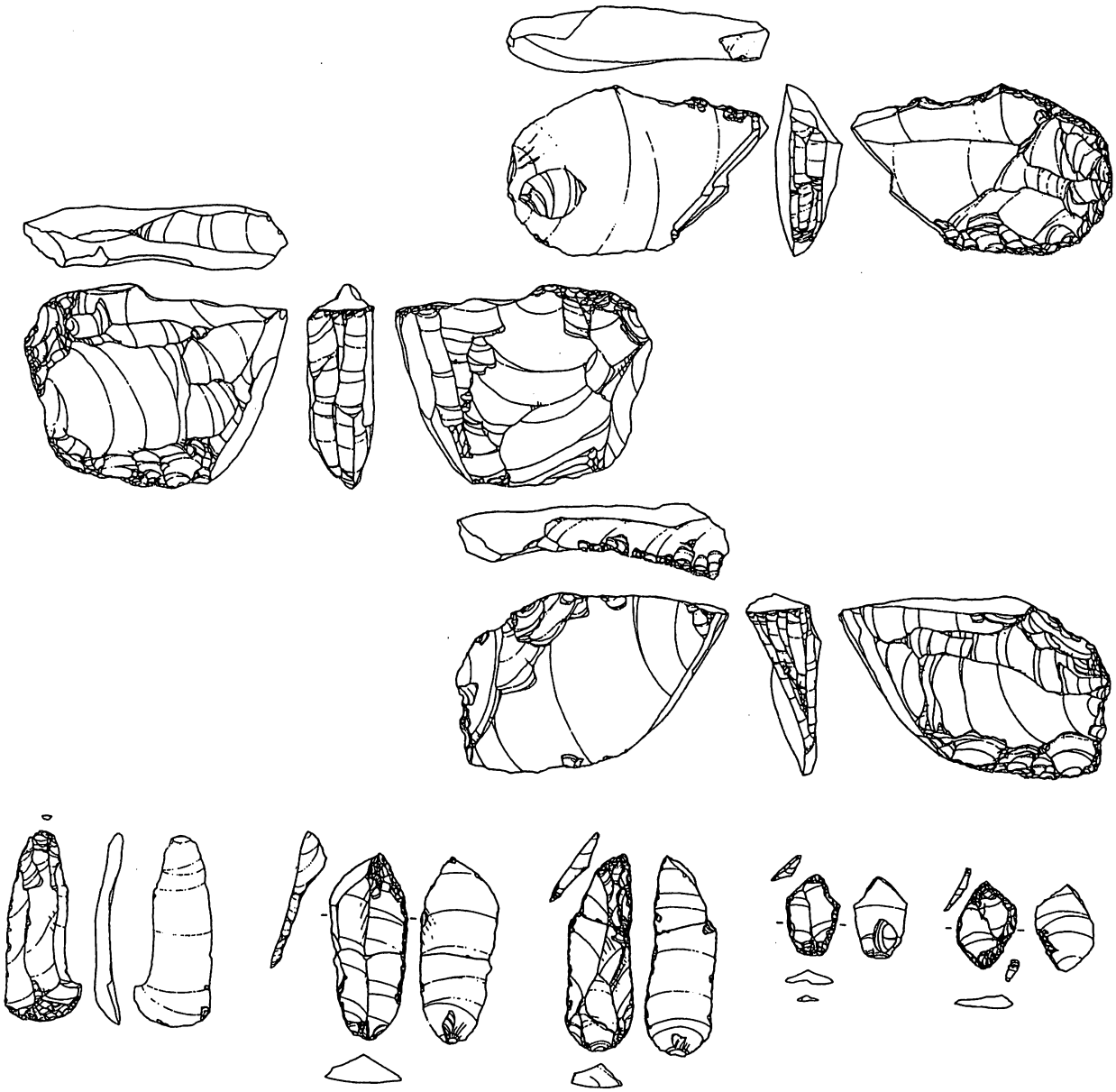


図３　北海道東部の細石刃石器群



本沢遺跡



緑丘Ｂ遺跡

図４　北海道東部の細石刃石器群

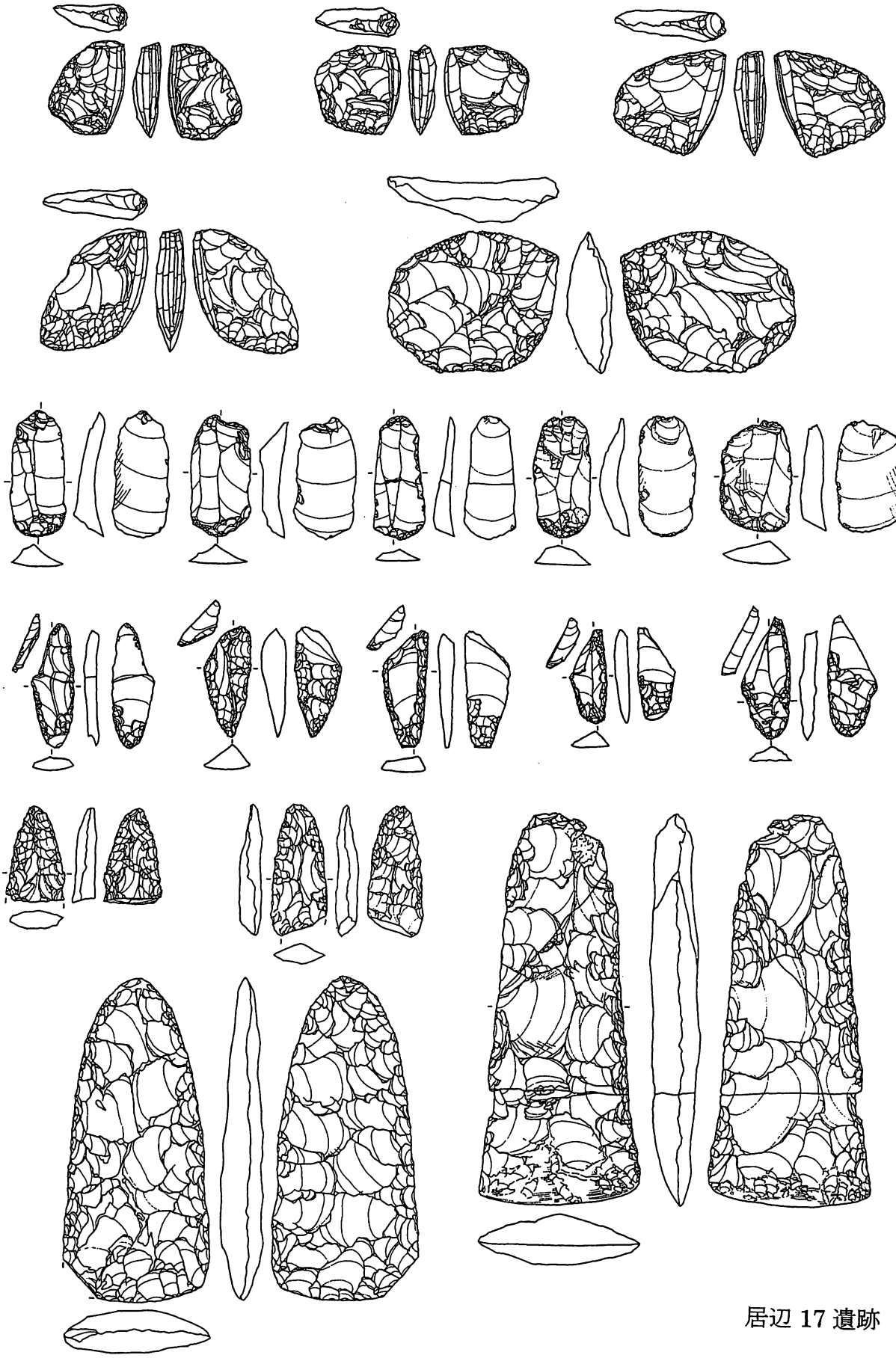
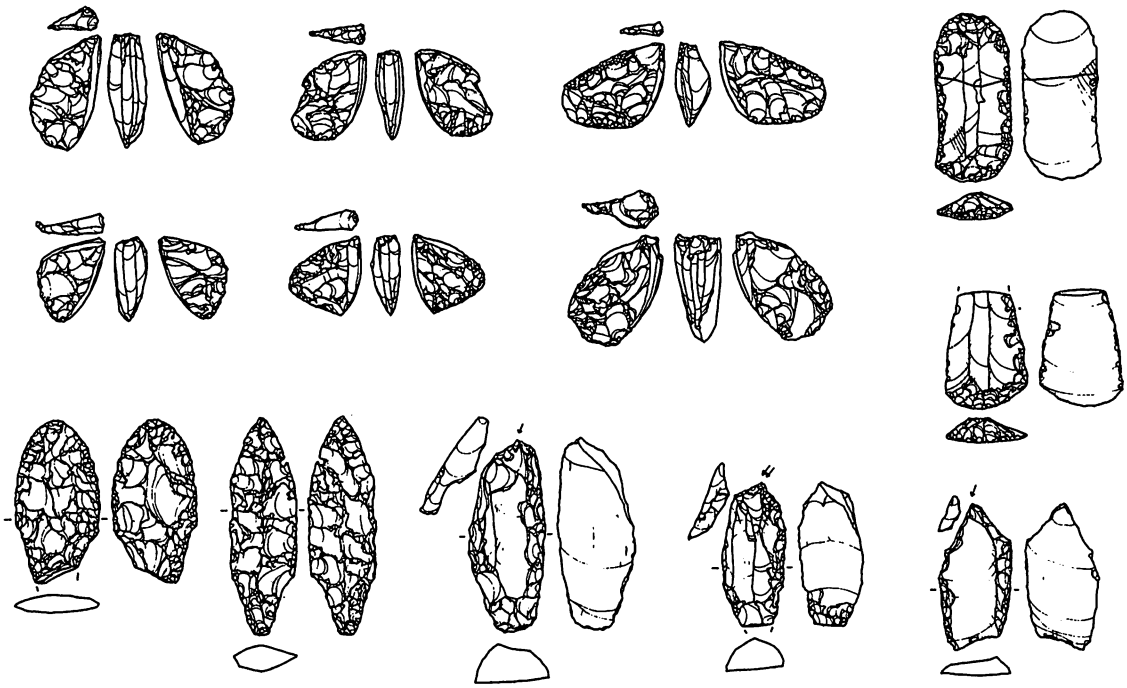
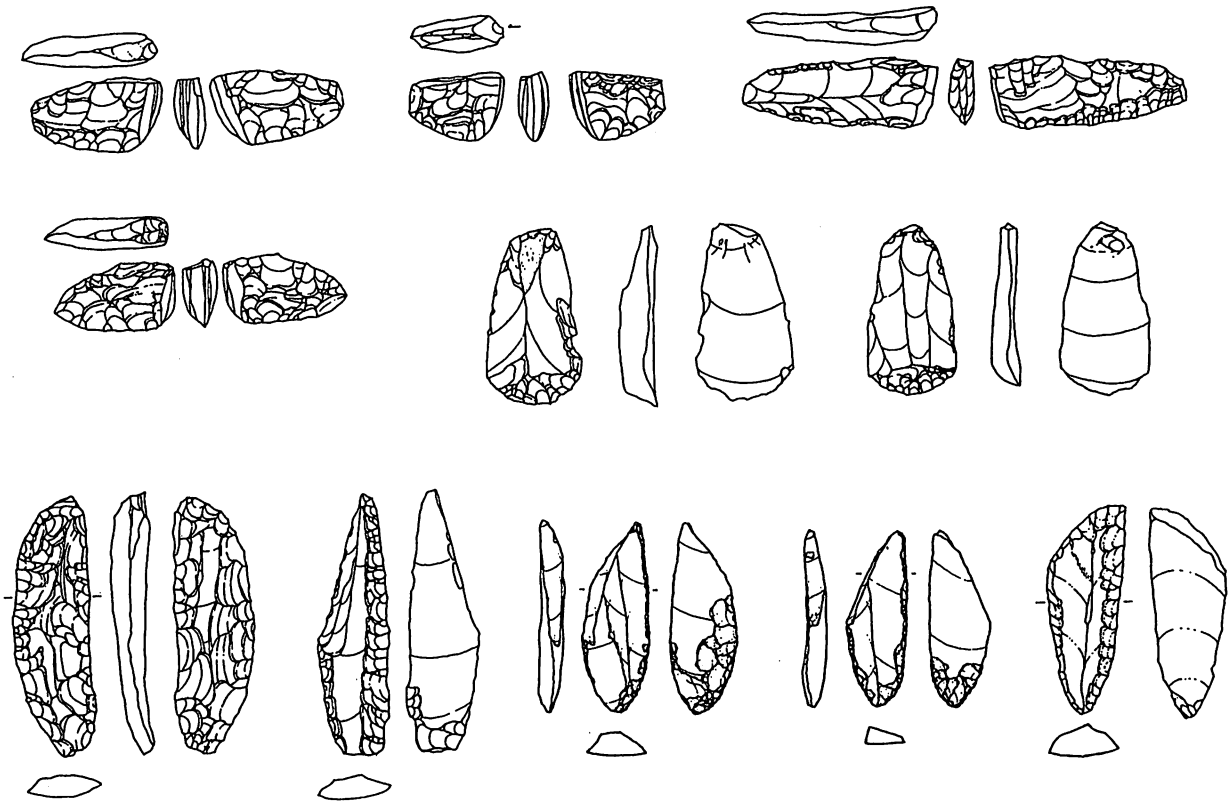


図 5　北海道東部の細石刃石器群



大空遺跡スポット２・４



吉井沢遺跡Ｂ地点

図６　北海道東部の細石刃石器群

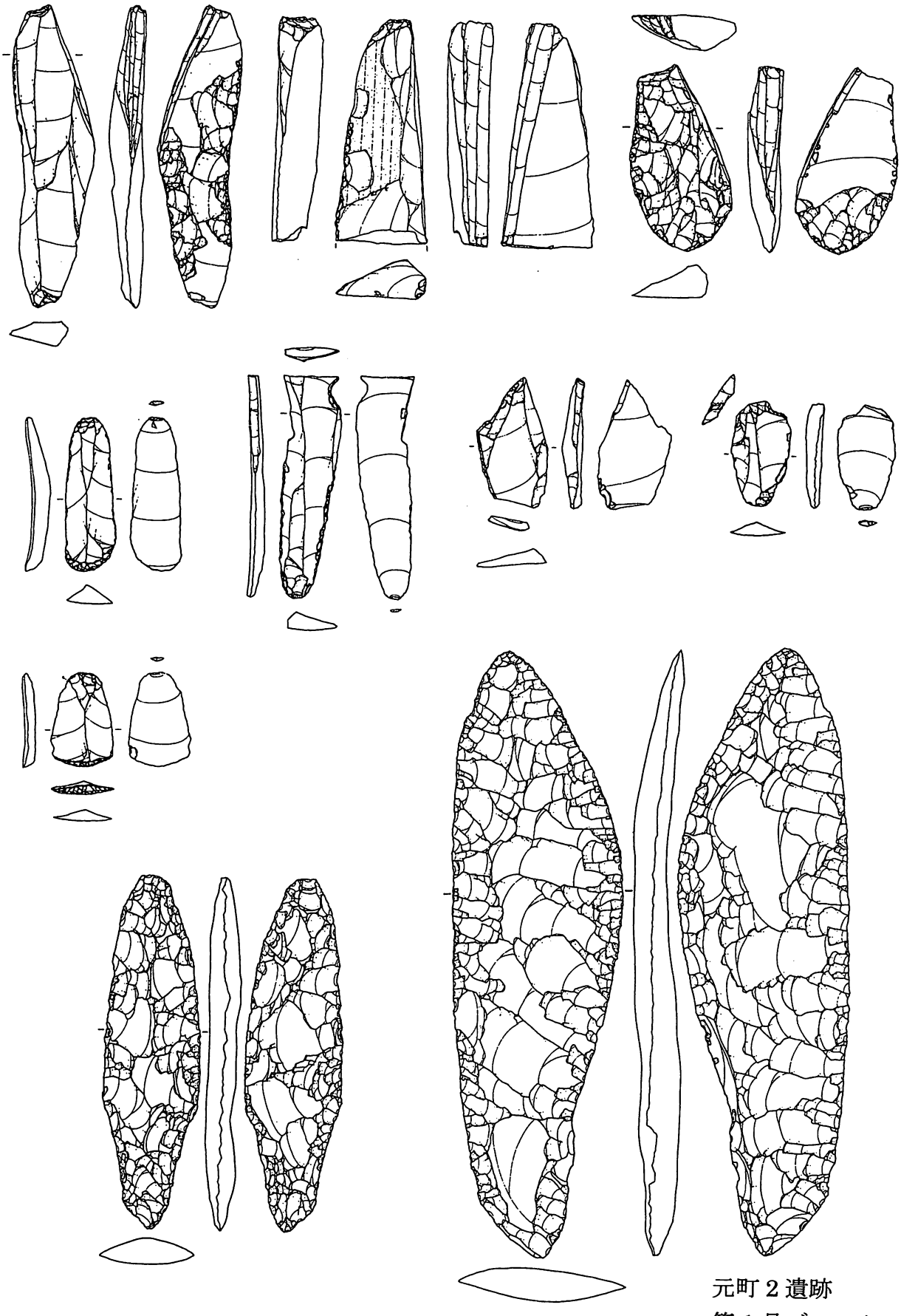
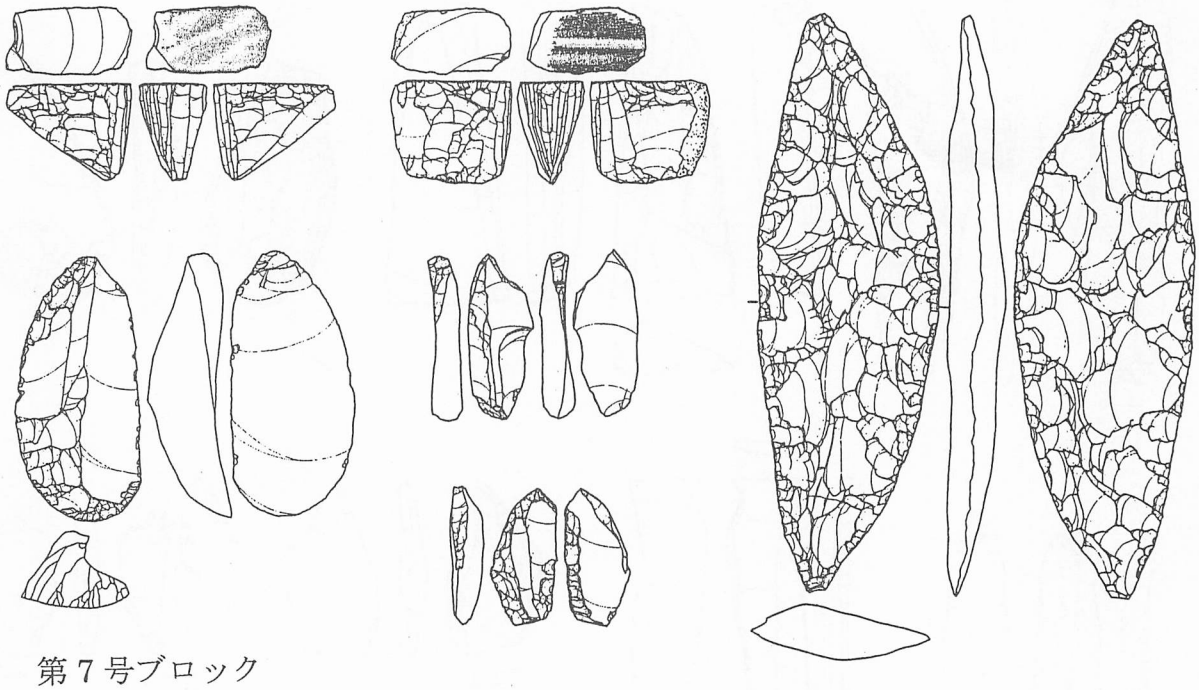
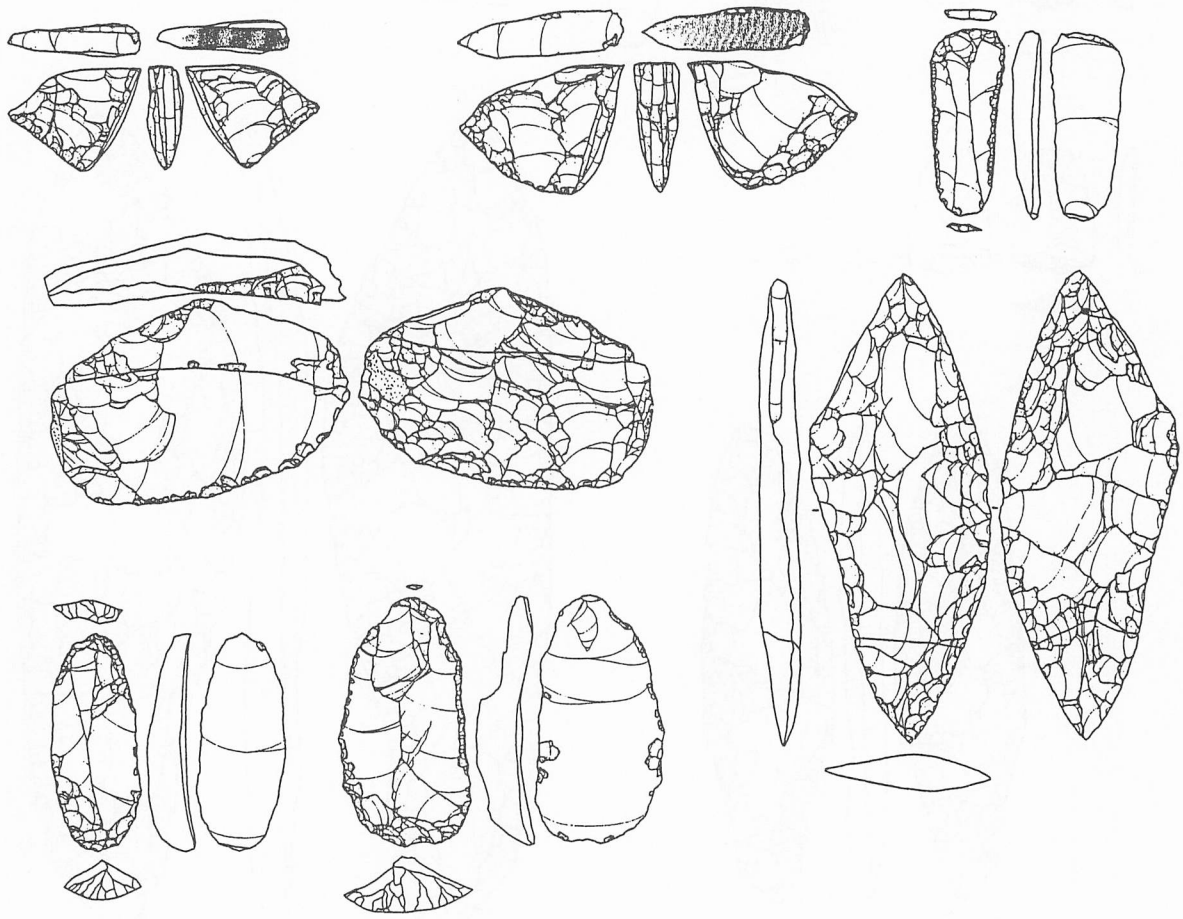


図７　北海道東部の細石刃石器群



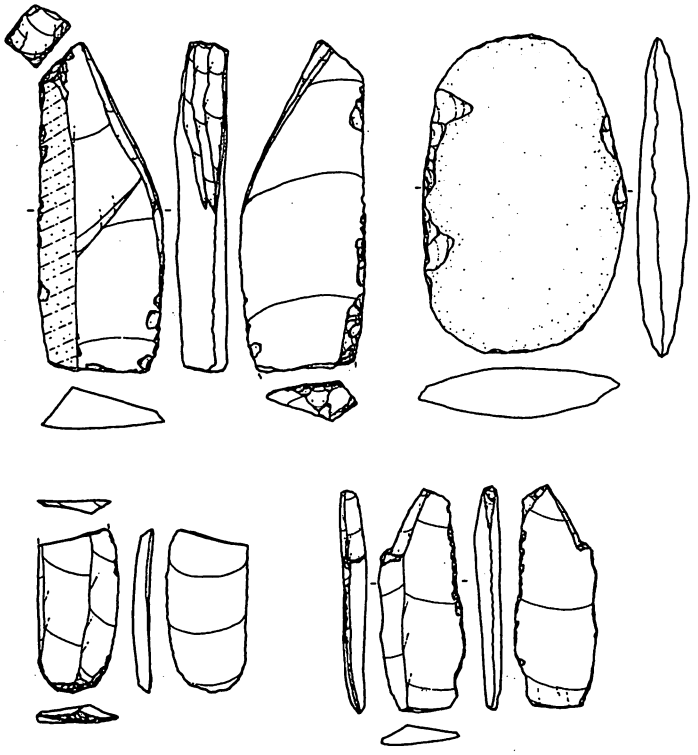
第７号ブロック



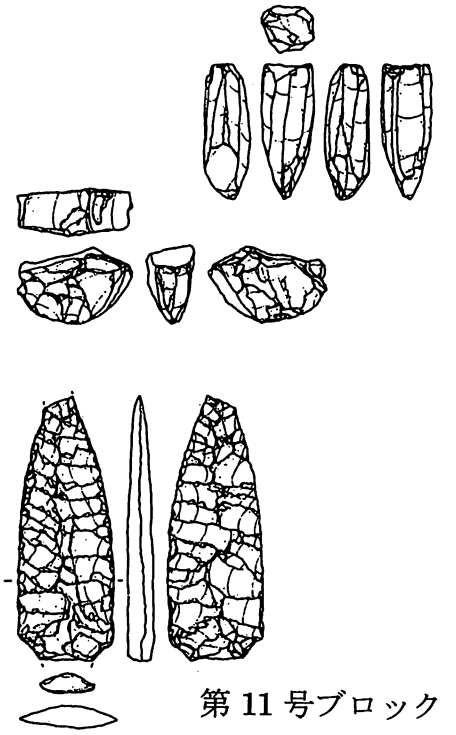
第８号ブロック

元町２遺跡

図８　北海道東部の細石刃石器群

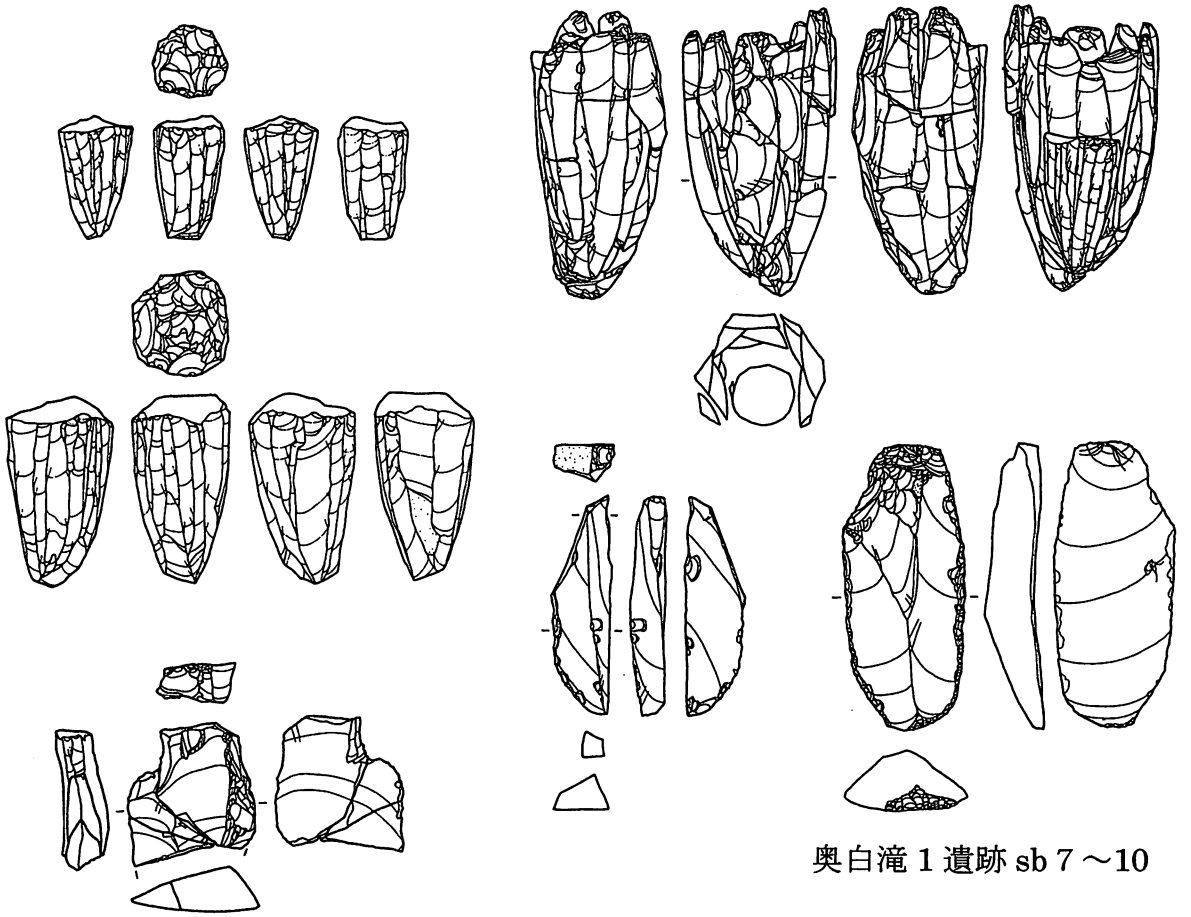


第 13 号ブロック



第 11 号ブロック

中本遺跡



奥白滝 1 遺跡 sb 7 ～10

図 9　北海道東部の細石刃石器群

表1　北海道東部の細石刃石器群一覧表

		組成																					
NO.	遺跡名	細石刃	細石核	削器	搔器	彫器	錐	打製石斧	局部磨製石斧	ナイフ形石器	尖頭器	有舌尖頭器	舟底形石器	顔料原材	土器	総計	遺構	発掘	標高	地域	年代	文献	細石刃核型式
1	豊別A	○	○	○	○	○					○								80			新岡・佐藤1977	札
2	豊別G		○																100			新岡・佐藤1977	
3	浅茅野	○	○	○	○	○											炉、柱穴？	有	27	クッチャロ湖		山崎1969	峠
4	山軽台地	○	○																10	クッチャロ湖		出穂・高倉1998	札
5	エポト川東岸												○						40	クッチャロ湖		出穂・高倉1998	
6	上幌内	○				○														幌内川流域		山崎1979	
7	忍路子		○		○	○						○							130	興部川流域		[illegible]	峠・蘭・忍
8	札滑	○	○		○	○												有	80	興部川流域		吉崎芹沢1974	札
	札滑・loc.K	275	>2		25	<25	2					9				3098		有		渚滑川流域		桑原1977	幌・広
9	滝上公園	○	○	○	○	○					○	○	○							渚滑川流域		出穂2001	白
10	滝上公園3		○	○	○	○														渚滑川流域		出穂2001	
11	拓雄中川	○	○	○	○	○														渚滑川流域		出穂2001	
12	滝西	○	○	○	○	○														渚滑川流域		出穂2001	峠・札
13	雄鎮内井ノ口	○	○	○	○	○				○	○	○								渚滑川流域		出穂2001	忍
14	北一線朝治	○	○	○	○	○														渚滑川流域		出穂2001	
15	札久留平	○	○	○	○	○			○			○								渚滑川流域		出穂2001	
16	1区・名称未定																			渚滑川流域		出穂2001	
17	上雄柏・名称未定												○							渚滑川流域		出穂2001	
18	旭岡1		○																120	石狩川流域		石川1987、友田1994	蘭・忍
19	末広8	○	○	○			○												170	石狩川流域		友田1994	峠
20	射的山	○	○	○	○	○		○			○	○	○					有	170	石狩川流域		佐藤1961、友田1994	広・〔白〕
21	桜岡1					○													160	石狩川流域		友田1994	未・峠
22	桜岡2	○	○		○	○													150	石狩川流域		友田1994	広？
23	桜岡5	4	1	6	5	5			*		1		5			468		有	150	石狩川流域		友田他2001	
24	三角山																		180	石狩川流域		友田1994	
25	北邦野草園																		120	石狩川流域		友田1994	
26	東鷹栖1				29	12			1		35	1	1		無紋	2797		有	355	石狩川流域		杉浦1987	〔峠〕
27	南鷹栖3		○																360	石狩川流域		杉浦1987	札
28	北瑛	○	○		○	○					○							有		石狩川流域		[illegible]	白
29	日東（1980・81）	○	○	○	○	○											焼土1	有	365	石狩川流域		木村1985	広
	日東（1999）br1	183	7		9	2										1256	炭化物集中?	有			16,940±80、16,570±120	長沼・佐藤2000	広、〔白〕
30	大函	○																	760	石狩川流域		長沼・佐藤2000	
31	嵐山2	75	8	9	20	7					4					1750		有	130	石狩川流域		石川1987	忍
32	旭東1		○		○	○					○							有	150	天塩川流域		氏江他1982	
33	朝日1	○	○	○	○	○					○	○							110	天塩川流域		氏江1984	幌・峠・札
34	日進2（1964）	○	○	○	○	○												有	98	天塩川流域		山崎1964	札・白
	日進2（1986）	○		○	○	○	○					○						有				鈴木1988	
35	東町		1	1														有	150	天塩川流域		広田他2000	峠
36	モサンル（1964・65）			9	18	8	1	2		1			1			7350		有	200	天塩川流域		芹沢1982	[illegible]
	モサンル（1979）	5		7	4	3	1				1		1			1172		有		天塩川流域		上野・宮塚1983	
37	西町1	72	10	28	22	40					33	3	37					有	150	天塩川流域		今井1999	峠・忍・蘭
38	高瀬		○	○	○	○		○			○		○					有	150	天塩川流域		大沼1985	〔広・峠〕
39	北町C		○		○	○	○	○			○	○							207	天塩川流域		大沼1985	蘭・広・円錐・札
40	佐藤	○	○	○	○														150	天塩川流域		大沼1985	札
41	農道整備第2地区		○	○	○													有	145	天塩川流域		大沼1985	幌
42	桜ヶ丘	○	○	○	○	○							○					有	170	天塩川流域		鈴木他1986	峠
43	二の橋	○	○			○													180	天塩川流域		下川町教委1993	札
44	矢文3												○						150	天塩川流域		下川町教委1993	
45	岩尾内		○																	天塩川流域		山崎他1979	広
46	奥白滝1・sb7-10	245	16	2	28	6	1									2,706	炭化物集中	有	460	湧別川流域	15,250±150、15,570±130	長沼他2002	紅
	奥白滝1・sb26-30	2		1	2	1						26				6,439		有				長沼他2002	
	奥白滝1・sb38-44			64	23	2	2	1				252	1			29,939		有				長沼他2002	
47	奥白滝6		○																470	湧別川流域		松谷1987b	広？
48	奥白滝7	○		○	○	○					○	○						有（試掘）	520	湧別川流域		長沼他2000	
49	奥白滝13	○			○							○						有（試掘）	535	湧別川流域		長沼他2000	蘭?
50	上支湧別3		○	○	○	○					○	○	○			13		有（試掘）	510	湧別川流域		松谷1987b	札
51	上白滝2・sb1-2	5		39	42	9	1					62				4,988	炭化物集中	有	440	湧別川流域	17,660±180、16,520±50	長沼他2001	
	上白滝2・sb3-6,10	14	4	5		3					8					5,888	炭化物集中	有			11,860±110、13,760±170	長沼他2001	札
	上白滝2・sb9	69	12	12	15	3										1,799		有				長沼他2001	広
	上白滝2・sb11-12			4	6	1	1				7		20			3,281	炭化物集中	有			10,360±100、9,940±40	長沼他2001	
	上白滝2・sb13			42	22	13	3				16	1	40			5,766		有				長沼他2001	
	上白滝2・sb14	17														64		有				長沼他2001	
	上白滝2・sb15			125	125	179	3					431				26,923		有				長沼他2001	忍
52	上白滝5・sb6-11			31	28	69	2	2			27		67			9,758	炭化物集中	有	434	湧別川流域	18,520±150、18,860±140	長沼他2002	
53	上白滝7・sb2-3			18	7	5					85		○			12,669		有	450	湧別川流域		長沼他2000	
54	上白滝8	○	○	○	○	○	○		○	○		○	○			1,304,100	炭化物集中	有	447	湧別川流域		北埋文1998	峠・幌
55	白滝3				○	○					○	○	○			41,281		有	370	湧別川流域		長沼他2002	
56	白滝8	○		○	○	○							○			4,036		有	380	湧別川流域		[illegible]	
57	白滝18			○	○							○	○			47,853		有	380	湧別川流域		[illegible]	
58	北支湧別3		1													7		有（試掘）	330	湧別川流域		松谷1987b	峠
59	近藤台	3									2		2			961		有	490	湧別川流域		畑・千葉1982	白
60	白滝13地点（1955）			○	○	○							○					有	420	湧別川流域		北大調査団1960	
	白滝第13地点（1956）			○	○	○							○					有				吉崎1961	
	白滝第13地点（1986）	○	○		○	○					○							有（試掘）				松谷1987b	札
61	白滝第25地点	○		○	○						○		○					有	400	湧別川流域		北大調査団1960	
62	白滝第30地点（1957）	○	○		○	○					○							有（試掘）	430	湧別川流域		吉崎1961	白
	白滝第30地点（1985）		○		○						○		○					有（試掘）				松谷1987b	白
	白滝第30地点br1-4	40	1	2	10	3	1					34	2			933		有				松村・瀬下2003	忍・〔峠〕
	白滝第30地点br5-18	129	7	1	10	5	1						8			29,897		有				松村・瀬下2003	峠
	白滝第30地点br19-26	47	2	5	2	8	1					12	16			6,598		有				松村・瀬下2003	札・幌
	白滝第30地点br27-39	42	2	10	7	4	4	2				19	3			15,062		有				松村・瀬下2003	札・幌
	白滝第30地点br40-63	179	4	12	7	3						16				23,748		有				松村・瀬下2003	忍・未
	白滝第30地点br64-84	81	4	7	26	2						15				8,196		有				松村・瀬下2003	札
	白滝第30地点（2000）	○		○	○								○			4,267		有				[illegible]	
63	白滝第31地点												1			36		有	422	湧別川流域		白滝地団研1963	
64	白滝第32地点（1959）	99	15	3	3	2					4		1			6,514	配石	有	410	湧別川流域		[illegible]	白
	白滝第32地点（1986）	○			○						○					2,956		有（試掘）				松谷1987b	
65	白滝第33地点（1957）				○	○					○		○				焼土1	有（試掘）	430	湧別川流域		吉崎1961	広・〔白〕
	白滝第33地点（1986）		○		○	○	○				○		○			4,574		有（試掘）				松谷1987b	札・白？
66	白滝第4地点（1955）				○								○					有	430	湧別川流域		吉崎1961	
	白滝第4地点A区	16	1	11	21	3	2					8				27,085		有				松谷1987a	忍

表2　北海道東部の細石刃石器群一覧表

NO.	遺跡名	細石刃	細石核	削器	掻器	彫器	錐	打製石斧	局部磨製石斧	ナイフ形石器	尖頭器	有舌尖頭器	舟底形石器	顔料原材	土器	総計	遺構	発掘	標高	地域	年代	文献	細石刃核型式
	白滝第4地点B区	1		1	3		1					3				3,579		有				松谷1987a	広
	白滝第4地点C区	8	1	2	8		2					16				17,217		有				松谷1987a	
	白滝第4地点D区	13	2	10	6	3	3					7	4			13,012		有				松谷1987a	広
	白滝第4地点E区	2		4	6	4	1					12	1			9,149		有				松谷1987a	
	白滝第4地点Aa	2	1	7	5	1		1					7			2,997		有				松村・細下2002	
	白滝第4地点Ab	60	8	5	30	2	1						1			4,924		有				松村・細下2002	幌
	白滝第4地点B2												1			189		有				松村・細下2002	
67	服部台	507	52	20	62	52				2	78	62	106			31,693		有	460	湧別川流域		杉原・戸沢1975	峠・白
68	服部台2（1981）	207	93	225	96	99		○			352	21	17			>200,000		有	465	湧別川流域		畑・千葉1982	峠・札
	服部台2（1998・99）	○	○	○	○	○	○			○	○		○			798,030		有				北埋文2001	紅・〔白〕
69	幌加沢Ⅰ				7	3							18			8,466		有	370	湧別川流域		白滝地団研1963	
70	旧白滝5（幌加沢Ⅱ）		○																390	湧別川流域		白滝地団研1963	忍
71	幌加沢遠間地点（1972）		1	8	2	1					4		5			1,147		有	620	湧別川流域		米村1977	
	幌加沢遠間地点（1987-93）	844	21	93	67	11	5				61					171,215		有				木村1992	札・幌・美
	幌加沢遠間地点（遠間氏採集）	121	154	63	63	83	3	37		○	141		98									筑波1990	峠・札・白・幌
72	八号沢1	○	○																800	湧別川流域		木村1995	札
73	太平2		○	○															660	湧別川流域		山原2002	札・幌
74	タチカルシュナイ第Ⅴ地点A	280	○	11	69	84	27		2		50	21	5			20,839		有	85	湧別川流域		吉崎1973	札・白
	タチカルシュナイ第Ⅴ地点B第Ⅰ	10	1			1					1					581		有				吉崎1973	白
	タチカルシュナイ第Ⅴ地点B第Ⅱ	○	○		4	○	1									1,132		有				吉崎1973	峠
	タチカルシュナイ第Ⅴ地点C上層	271	8	11	2	16	1				4					4,683		有				吉崎1973	札・白・幌
75	広郷	○	○	○	○	○	○		○				○			3,054		有	120	常呂川流域		大場・大谷1959	広・〔白〕
76	広郷1	○																	120	常呂川流域		鶴丸1981	
77	広郷6	○	○	○	○						○							有（試掘）	110	常呂川流域		鶴丸1981	広
78	広郷7	○																	120	常呂川流域		鶴丸1981	
79	広郷8		○	○	○	○					○	○						有	125	常呂川流域		鶴丸1981、宮1988	〔蘭・広〕
80	広郷9	○																	120	常呂川流域		鶴丸1981	
81	広郷11	○	○	○	○	○												有（試掘）	120	常呂川流域		鶴丸1981	広
82	広郷15		○															有（試掘）	120	常呂川流域		鶴丸1981	広
83	広郷17		○																120	常呂川流域		鶴丸1981	広
84	広郷18	9			3							1				489		有	125	常呂川流域		久保他1980	
85	広郷20	1,720	33	57	18	57	○	○			5					3,442		有	130	常呂川流域		久保他1980	広・幌
86	広郷21		○																140	常呂川流域		鶴丸1981	広
87	広郷22		○																120	常呂川流域		鶴丸1981	広
88	広郷31		○	○	○	○													120	常呂川流域		鶴丸1981	蘭
89	広郷丸山	○	>10		○	○		2										有	120	常呂川流域		大場他1984b	広
90	広郷16	○	○																120	常呂川流域		鶴丸1981	蘭
91	広郷10		○																120	常呂川流域		鶴丸1981	蘭
92	広郷19	○	○	○	○	○		○			○	○						有（試掘）	120	常呂川流域		鶴丸1981	
93	広郷32		○																100	常呂川流域		鶴丸1981	忍
94	広郷44		○																100	常呂川流域		鶴丸1981	幌
95	別当沢	○			○	○										842		有	120	常呂川流域		大場・大谷1959	
96	常川金毘羅山		○								○								120	常呂川流域		鶴丸1981	白
97	開成1			○	○	○					○	○	○					有	113	常呂川流域		立川他1979	
98	開成3	1	1									3						有	114	常呂川流域		立川他1979	蘭
99	北上台地・loc.A	○	○	○	○	○					○							有	100	常呂川流域		大場他1984a	忍・〔広〕
	北上台地・loc.B	○	○	○	○	○	○				○						炉1	有				大場他1984a	忍
	北上台地・loc.C	○	○	○	○	○					○							有				大場他1984a	忍
	北上台地・斜本地点	○	○	○	○	○					○						礫群1	有				宮1988	[illegible]
	北上台地・狛地点			○	○	○					○	○						有				宮1988	〔広〕
	北上台地・枝広地点	○		○	○	○	○											有				宮1988	
100	北上4		○																100	常呂川流域		鶴丸1981	白
101	北上5		○			○		○				○							100	常呂川流域		鶴丸1981	峠・幌
102	北上7		○																100	常呂川流域		鶴丸1981	蘭・忍
103	北上8																		80	常呂川流域		鶴丸1981	忍
104	南丘4	10																有	185	常呂川流域		太田2000	
105	豊田												1						140	常呂川流域		…鶴丸1981	
106	豊地6	○			○						○							有（試掘）	120	常呂川流域		鶴丸1981	
107	大正1	31	≧10	≧1	9		1？									912		有	122	常呂川流域		大井1963	峠・美？
108	大正6		○			○													120	常呂川流域		鶴丸1981	忍
109	大正8																		120	常呂川流域		鶴丸1981	
110	柏木4		○		○							○							180	常呂川流域		鶴丸1981	峠
111	北進（1979）	180	42	5	14	54							○			1,744			105	常呂川流域		菅野・久保1980	峠・蘭・美？
	北進（1997）	6		2		3														常呂川流域		太田1998	
112	中本（1968）				27	15	10				3		14				住居址？	有	100	常呂川流域		加藤・桑原1969	〔広〕
	中本（1997・98）	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○					有				日本考古学協会1999	峠・白？・広
113	本沢	1,153	19		2	13										2,652		有	187	常呂川流域		大井・久保1972	峠
114	吉井沢・loc.B		4	37	63	22	1									1,157		有	198	常呂川流域		[illegible]	忍
115	川東羽田	○				○					○								100	常呂川流域		戸沢・鶴丸1968	
116	川東3	○	○		○						○							有（試掘）	110	常呂川流域		鶴丸1981	忍
117	小泉2		○	○	○														70	常呂川流域		鶴丸1981	蘭・広
118	北光5		○																80	常呂川流域		鶴丸1981	幌
119	北陽	○	○		○	○												有	130	常呂川流域		鶴丸1981	峠・広
120	豊戸安住・loc.A	65≦	12≦	2	17	<33						14	22			11,879		有	270	常呂川流域		戸沢1967	峠・白・広・紅
	豊戸安住・loc.B	74≦	2≦	4	8	<22						4	8			11,713		有					札・広
	豊戸安住・loc.C	13≦	2≦	5	6	<18			1			5	6			7,035		有					峠・幌・広
	豊戸安住・loc.D	1≦	1≦	7	3	<16			1			2	1			2,920		有					峠・広
	豊戸安住・loc.E	71≦	2≦	7	9	<135			1			7	2			3,941		有					峠・白・広・紅
121	雄勝嘉藤		○	○	○	○													240	常呂川流域		出穂1998	広
122	雄勝嘉藤2	○		○														有		常呂川流域			
123	吉村	89	3		15	28	2	1			1					1,681		有	300	常呂川流域		小野他1971	広
124	紅葉山	225	≒11	1	11	2					1		2			2,185		有	220	常呂川流域		藤本1964	広・紅・（忍）
125	増田・loc.A	○	4		3	2										250		有	190	常呂川流域		鶴丸1975	峠
	増田・loc.B	1			1	1										172		有					
	増田・loc.C	45				1									無紋2	215		有					
	増田・loc.D				9	7					5		12			>6500		有					
126	北栄40	2,000	23	7	56	42	3									4,915		有	211	常呂川流域		瀬川・鶴丸1990	峠・札・広
127	豊坂21	26	9	14	9	5	4			3			1			715		有	253	常呂川流域		…・鶴丸1994	峠

表3　北海道東部の細石刃石器群一覧表

		組成																					
NO.	遺跡名	細石刃	細石核	削器	掻器	彫器	錐	打製石斧	局部磨製石斧	ナイフ形石器	尖頭器	有舌尖頭器	舟底形石器	原料原材	土器	総計	遺構	発掘	標高	地域	年代	文献	細石刃核型式
128	緑丘B	831	4	12	6	33	2									3,423		有	235	常呂川流域		[illegible]	峠・札
129	日出4・5	9		10	8	2					3		1			3,952		有	136	常呂川流域		橋爪1981	
130	日出11		1	4	17	9	4		1		5	4	1			2,471		有	134	常呂川流域		橋爪1985	忍
131	K8		○																160	常呂川流域		加藤・鶴丸1973	広
132	水口・loc.A	80	7	2	80	7					1						炉1	有	73	常呂川流域		畑・田原1976	忍
	水口・loc.B	8	1	1	2						3							有				畑・田原1975	忍
133	吉田・loc.N				42	12					5	1					炉4	有	70	常呂川流域		加藤他1970	忍〔蘭〕
	吉田・loc.S		4		105	11	2	1	1		1						炉2	有				加藤他1970	忍
134	岡村	183	4		19	11	2	1		○?	1					1,096		有	70	常呂川流域		小野他1971	広
135	上口・loc.A				○	○			3		○	○					住居址？	有	100	常呂川流域		加藤1969	
	上口・loc.B				○	○					○	○						有				加藤1969	
	上口・loc.C		2		12						2							有				[illegible]	忍
	上口・loc.D					○												有				加藤1969	
136	F5		○		○							○								常呂川流域		加藤・藤本1965	札
137	F11		○		○	○					○									常呂川流域		加藤・藤本1965	広
138	H13	○		○	○	○														常呂川流域			
139	M4		○																	常呂川流域		加藤・藤本1965	広
140	M25		○									○								常呂川流域		[illegible]	忍？
141	岐阜第二		1			2	1									168		有	16	常呂川流域		宇田川・藤本1977	
142	元町2（1984）												5			525		有	20	網走川流域		荒尾1986	
	元町2（1995-98）	○	○	○	○	○	○	○			○	○	○					有				[illegible]	白・幌・広
143	元町3（道路1986）	○	○	○	○	○	○				○	○	○					有	28			荒尾1988a	忍
	元町3（住宅1986）	○	○	○	○	○	○				○	○	○					有				荒尾1988b	忍
	元町3（1988）	25	2	10	27	1	1				1							有				荒尾1989	忍
	元町3（1991）	○	○	○	○	○	○				○	○						有				荒尾1994	忍
144	みどり1	○	○	○	○	○	○				○	○	○					有	30	網走川流域		荒尾1991a	[illegible]
145	みどり4		1													1		有	20	網走川流域		荒尾1991b	広
146	豊岡7	○	○	○	○													有	139	網走川流域		小野2001	忍
147	越川	6?														54		有（試掘）	176	斜里川流域	23,430+820−750	曽根他1991	
148	暁loc.1	8,332	50	250	34	171							3			33,851		有	45	十勝川流域		[illegible]	峠・札・幌・広
	暁loc.3	10	2		2	6												有				[illegible]	峠
	暁loc.4	≧579	15	≧30		11							2					有				[illegible]	峠・幌
	暁loc.5	10		4												80	礫群1	有				北沢1991	峠
149	川西C・sp13-15	12		4	1	1										182		有	65	十勝川流域		北沢1998	札
	川西C・sp17	3		2	1	1							2	○		608	焼礫片集中3	有				北沢2000	
150	落合・sp1-2			6	1	6	1		*		3		○			1,829		有	69	十勝川流域		北沢1992a	
	落合・sp3-5			13	8	48	8	2	1		1		24			6,256		有				山原1999・02	
151	南町1・A群			27	17	70	6		1		3	4	88			30,204		有	79	十勝川流域		[illegible]	
	南町1・7-31区	11		1		1										61		有				北沢・山原1995	
152	南町2・sp3-4	174	1		1	2										708	掘込炉1	有			13790±190（B）	北沢・山原1995	札
153	稲田1・loc.1	27		13	95	58			*		5	28				16,956		有	73	十勝川流域		北沢・山原1997	忍・（札）
154	大空	248	7	19	27	8					1	8				8,674		有	83	十勝川流域		北沢1993	忍
155	泉町A	66	7	1		1										316		有	153	十勝川流域		北沢1992b	幌・糸（峠?）
156	空港南A・上層	○	○	○	○	○					○	○						有（試掘）	155	十勝川流域		[illegible]	〔忍・幌〕
	空港南A・下層	○?				○												有（試掘）				[illegible]	
157	空港南B	70		7	1	5					*					898		有	152	十勝川流域		佐藤・北沢1986	忍
158	上似平・上層A	≧365		1		2							3			≧635		有	148	十勝川流域		[illegible]	札
	上似平・上層DE	≧17	4		1	3										≧90		有				明石1978	峠
	上似平・上層sp2-5	27		26	14	11			*		2	5				1,854		有				佐藤・北沢1987	忍・来
159	岩内1	1				1										2		有	240	十勝川流域		山原2002b	
160	牧場川	○	○		○	○													140	十勝川流域		松井1983	札・幌
161	ヌプカクシュナイ2		○			○													280	十勝川流域		佐藤・北沢1985	峠
162	勢雄・brA	○														335		有	146	十勝川流域		辻1977	美
	勢雄・brC												6			<419		有				辻1977	
163	更別A	○	○																160	十勝川流域			
164	更別D	○																	155	十勝川流域			
165	更別E	○																	160	十勝川流域			
166	昭和	○	○		○	○												有（試掘）	200	十勝川流域		笹島2003	忍
167	セキネザワ	○																		十勝川流域			
168	十勝川温泉1	○	○															有	28	十勝川流域		佐藤1989	札
169	嶋木		○?	○	○	○?												有	295	十勝川流域		加藤・山田1988	
170	居辺16			1	2	2							3			≧1,726		有	254	十勝川流域		辻1985	
171	居辺17	165	35	101	182	25	6	2	4		12			○		29,551		有	264	十勝川流域		大矢2001	忍
172	鹿平湖西岸4	○	○																500	十勝川流域			札・幌
173	十三の沢										○		○						800	十勝川流域			札
174	日新F			2	1								1			478		有	125	十勝川流域		森内2002	
175	アカシア地点	○																	60	十勝川流域		松井1983	
176	美川地点	○	○	○	○	○							○						105	十勝川流域		笹島1999	峠
177	西美利別3	○				○												有（試掘）		十勝川流域			広
178	上利別17		○		○				○										155	十勝川流域		宮塚1982	幌
179	ユクエピラチャシ		1	1														有	245	十勝川流域		大島居2001	白
180	ウエンベツ												○						220	十勝川流域		後藤1994	
181	石井沢												○						240	十勝川流域		後藤1994	
182	分線2												○						280	十勝川流域		後藤1994	
183	西斗満				○						○		○						390	十勝川流域		後藤1994	
184	相川																			歴舟川流域		後藤1995	広
185	美成2																		30	当縁川流域		後藤1995	峠
186	北斗・loc.8（1973）		1															有	24	釧路川流域		沢1977	忍

北海道西部の細石刃文化

寺崎康史・宮本雅通

1　研究の経過

1954年黒松内町樽岸遺跡の発掘調査は北海道における本格的な旧石器時代の研究の幕開けとなった。翌55年にはニセコ町西富遺跡が発掘調査され、これが北海道における最初の細石刃の発見となる（児玉・大場1957）。この調査が郷土史研究的側面が強いのに対して、荒屋型彫器の系統的研究という極めて強い目的意識のもとに1958・59年に調査されたのが、芹沢長介・吉崎昌一らによる蘭越町立川遺跡である。調査により荒屋型彫器が有舌尖頭器に伴うことが新たに確認され、北海道の細石刃石器群の複雑性を顕わすこととなった（吉崎1960）。その後、各地において地元の研究者により調査が行われるようになる。倶知安町峠下遺跡（名取・松下1961）、旭川市射的山遺跡（佐藤1961）、名寄市内の遺跡及び下川町モサンル遺跡（山崎1963、1964、1979）などが挙げられる。モサンル遺跡は東北大学により1964・65年に発掘調査が実施された（岩本1972、芹沢1983）。

1970年代に入っても学術調査が主流であり、1972・73年には千歳市祝梅上層遺跡の発掘調査（吉崎1977）、1975年には赤井川流域の分布調査（上野・宮塚1976）、また翌76年には赤井川村都遺跡の発掘調査が行われ（木村1978）、蘭越型細石刃核の剥離技術研究が進んだ。

1970年代の終わりから80年代には状況が一変し、開発事業に伴う調査事例が急増することとなる。1979年のモサンル遺跡（上野編1981）にはじまり、1981年千歳市メボシ川２遺跡の調査（田村1983）、1983年今金町美利河１遺跡（長沼編1985）、知内町湯の里４遺跡（畑編1985）、1985年下川町桜ヶ丘遺跡（鈴木編1986）、1986年木古内町新道４遺跡（千葉ほか1988）、函館市石川１遺跡（長沼編1988）、鷹栖町嵐山２遺跡（西田編1988）、名寄市日進２遺跡（鈴木編1988）というように行政機関による調査が実施された。なかでも北海道埋蔵文化財センターが調査を行った美利河１遺跡、新道４遺跡、石川１遺跡では良好なブロックの発見に加え、頁岩という接合作業が行い易い石材を用いているなどの好条件が揃っていたこともあり、当該地域の細石刃文化研究を進展させる契機となった。

1990年代から現在に至っても、開発事業に伴う行政発掘によって細石刃石器群の発見が相次いでいる状況に変わりはない。1990年千歳市丸子山遺跡（田村編1994）、1992年八雲町大関校庭遺跡（三浦・柴田1993）、1993年今金町神丘７遺跡、1994～95年・1999年長万部町オバルベツ２遺跡（佐藤編2002、大島他編2000）、1996・97年下川町西町１遺跡（今井編1999）、1996・97年千歳市オサツ16遺跡（大島編1997）、1997・98年千歳市柏台１遺跡（福井編1999）、1999年上川町日東遺跡（長沼・佐藤編2000）、2000年旭川市桜岡５遺跡（友田他編2001）、2000・01年今金町ピリカ遺跡（寺崎編2001・2002）、2002年千歳市オルイカ２遺跡（阿部編2003）が主なものである。この中でも柏台１遺跡の調査は、恵庭ａ降下軽石堆積物（En-a）の下位より細石刃石器群が出土し、その出現が今から約２万年前に遡ることを明らかにしたことで貴重なものとなった。学術調査では今金町美利河１遺跡K地点が國學院大學により1996年より継続して行われている（宮尾1997）。1996・97年には札幌国際大学によって射的山遺跡が調査された。2002年からは北海道大学によって旭川市桜岡６遺跡が調査されている。

2　遺跡の分布

北海道西部において細石刃関連資料が認知された遺跡は64ヶ所を数える。このほか、単発的に彫器やスクレイパーが出土あるいは採集された報告がいくつかあるが、今回はこれに含めていない。前回の集成時点（寺崎・長沼1993）と比べ、石狩低地帯の千歳市周辺において新たな遺跡の追加が目立つが、これは高速道路等の建設に伴う緊急調査によるものである。開発の及ばない地域においては新たな遺跡の追加は低調であるが、潜在的には膨大な数の遺跡が存在していると予想される。

渡島半島南部では、湯の里４、新道４、石川１の３遺跡が津軽海峡に注ぐ河川流域に立地し、現海岸線から比較的近距離に位置する。渡島半島北部では、美利河１遺跡が太平洋側と日本海側の分水嶺付近に立地し、大関校庭、上八雲１遺跡は山間部に立地する。尻別川流域では、上流域と中流域とで二つの分布のまとまりがあり、いずれも河川の合流点付近に立地する。余市川・赤井川流域は黒曜石原産地の遺跡群で、都遺跡は赤井川と余市川の合流点付近の舌状台地上に立地する。また、都遺跡の北、赤井川カルデラの東壁に遺跡が点在する。石狩低地帯は、約４万年前の支笏火砕流堆積物によってそのほぼ全域が覆われ、なだらかな丘陵地形が形成された。その火砕流台地を北流する千歳川流域に遺跡が集中する。これらはほとんどがEn-aの上位が風化したローム層中より発見されている。柏台１遺跡はEn-aの下位からの出土であり、本道における細石刃石器群の出現年代を大幅に古く遡らせた。石狩川上流域では、石狩川及びその支流の形成する段丘上に遺跡が立地する。北見峠を挟んで東側にはすぐ白滝遺跡群が広がっており、これら黒曜石原産地遺跡群との密接な関係が予想される。天塩川上流域では、支流の名寄川流域の河岸段丘上に遺跡が立地する。なお、オバルベツ２遺跡はこれまで見てきた細石刃石器群の分布傾向とは異なり、現海岸線から近距離の海岸低地に面した低い段丘面上に立地する。天瑞寺裏や静川５、湯の里４、新道４遺跡も同様に現海岸線から近い点で共通している。

3　細石刃技法と石材

当該地域には峠下技法による峠下型、美利河技法による美利河型、蘭越技法による蘭越型、湧別技法による札滑型と白滝型、幌加技法による幌加型、忍路子技法による忍路子型、広郷技法による広郷型、紅葉山技法による紅葉山型の８つの細石刃製作技法と９つの細石刃核型式が知られている。

峠下技法：峠下型彫器として峠下遺跡においてはじめて注意された（名取・松下1961）。その後、訓子府町増田遺跡において、素材準備から細石刃剥離に至る工程が復原された（小野他1972）。以下に、鶴丸（1979、1989）の説明を要約する。①通常、片面調整石器が素材として用いられ、非調整面からの側方剥離により打面が確保される。したがって、断面はD字形をなす。②打面は、素材の調整面を表に、非調整面を裏にして置いた場合、右から左に向かって形成される場合が大多数である。通常は他端に抜けない、短い打面である。③細石刃剥離は加撃面形成点側で行われるが、細石刃剥離面は石核原形の形状を反映して非調整面側にねじれる場合が多い。峠下型細石刃核は、湯の里４、新道４、上八雲１、美利河１、ピリカD地点、オバルベツ２、目名５、峠下１、都、ユカンボシE10、キウス７、オサツ16（A地点）、西町１、北町C、モサンル、桜ヶ丘、東町、天瑞寺裏遺跡にあり、最も数量が多く、かつ広範囲に分布するものである。新道４遺跡の接合資料により美利河技法と同一の技術体系に含められていることが明らかになった。石材には渡島半島部では頁岩が用いられることが多いが、湯の里４の１点、ピリカD地点では黒曜石が用いられている。特にピリカD地点では13点の峠下型細石刃核のうち12点が黒曜石で占められる。黒松内低地帯以北では黒曜石が用いられることが多いようである。

美利河技法：美利河１遺跡出土の４点の接合資料により提唱され（長沼編1985、長沼1990）、新道４遺跡の豊富な接合資料により追認された（千葉ほか1988、千葉1993）。１次素材には礫もしくは剥片を用いる。この場合、将来の打面相当部を見越した形状のものが選択される。打面相当部及び下縁から対向する調整により全体を舟形に整形する。打面相当部には長軸に対して直交する横位の調整が施される。断面四角形の平形の第１次削片によって打面が準備され、水平な打面が得られるまで２枚目以降の削片がとられるが、この過程においても打面及び下縁側から器体調整が行われる。細石刃剥離が進行する過程においても器体調整は行われ、残核形状は相似的に小さく、しかも精緻な両面調整になっていく。このため、残核のみの観察では美利河型の認定は困難である。上記２遺跡以外の美利河型の明確な類例はオバルベツ２（第Ⅱ地点）、柏台１（A地区）にある。いずれも頁岩製である。美利河型の可能性があるものとしては、都遺跡第３地点（上野・宮塚1976）、同Loc.29D地点（木村1978）出土のものなどがある。

蘭越技法：蘭越型細石刃核は吉崎昌一によって提唱され（吉崎1960）、木村英明によってその技術工程が明らかにされ、蘭越技法と認識された（木村1978）。この技法の工程はさらに、柏台１、オバルベツ２の接合資料によっ

て確実なものとなった。１次素材には礫もしくは剥片が用いられ、打面部と作業面を予め設定し、背縁、下縁を交互剥離あるいは片側剥離により作り出したものが２次素材として準備される。横断面形は作業面側が厚く、背縁側が尖る卵型をなす。打面調整・側面調整→打面再生→目的剥片剥離を繰り返し、徐々に器体は相似的に減少する。打面再生は例外なく作業面側から行われ、しばしば背縁稜まで取り込むものがある。柏台１の接合資料によると得られた目的剥片の大きさは、長さで2～12cm、幅で0.5～2.5cmの開きがあるとされ、我々が便宜的に分類するところの石刃と細石刃が連続して量産されていたこととなる。蘭越型細石刃核は、湯の里４、富里、美利河１、オバルベツ２、立川１、昆布西１、西富、都、柏台１、静川５、旭岡１、西町１遺跡にある。美利河１の２点と都遺跡例を除いて、すべて頁岩が用いられている。

湧別技法：吉崎（1961）によって提唱されたこの技法は、おおよそ以下の手順による。両面調整石器を用意して２次素材とする。この素材を数回連続的に縦割りにする。１次削片とし舟形削片、２次以降の削片としてスキー状削片が剥離される。縦割りによって生じた平坦面を打面として、一端もしくは両端において細石刃剥離を行う。湧別技法によりながらも残核として白滝型と札滑型の２種類の細石刃核がある。白滝型は、打面を形成した打点側に擦痕を付し、その部分で細石刃剥離を行う。白滝型は峠下１、瑞穂、丸子山、旭岡１、射的山、日進２、日東、モサンルにおいて知られており、丸子山、日進２、日東の例以外はすべて表面採集資料である。すべて黒曜石が用いられている。

札滑型には擦痕が付けられず、白滝型よりも大形である。また、打面形成後に側面調整が施されることがある。札滑型は学校平、モサンルにおいて採集されている。発掘調査では神丘７において頁岩製の札滑型が２点、オルイカ２遺跡においては黒曜石製の札滑型が破損例も含めて４点出土している。

白滝型と札滑型を区別する際、打面に付けられた擦痕の有無がその分類基準となっている。黒曜石製以外の石質で打面に擦痕が付いた細石刃核は今のところ知られておらず、擦痕の目的が滑り止めである可能性が高い。もしそうであるならば、擦痕が付けられる必要のなかった黒曜石以外の石質を用いた場合、擦痕のない白滝型があっても良いこととなる。逆に擦痕の目的を考慮せず、擦痕が付けられることを白滝型の必須条件としたならば、黒曜石以外の白滝型は存在しないことになるであろう。石川１遺跡では頁岩を石材とした石核原形に削片が接合する湧別技法の過程を示す良好な資料が得られている。石川１の細石刃核はその器体の調整が精緻で薄く、大きさの点からすると札滑型というよりはむしろ白滝型といえる。湧別技法に関しては、札滑型か白滝型かの分類基準を形態はもとより石材の点からも再検討しなければならないであろう。

忍路子技法：忍路子型彫器として吉崎により注意され、端野町吉田遺跡の調査において細石刃核としての機能が考えられるようになった（加藤ほか1970）。嵐山２及びオサツ16（Ｂ地点）の接合資料からすると半月形を呈する両面調整石器が２次素材と考えられる。断面は凸レンズ状をとる。つぎに、直線状の側縁側に長軸に平行するように断面三角形の削片を剥離して打面を形成する。細石刃剥離は、石核の短軸方向を中心に行われるが、必要に応じて打面再生が行われるためその角度によって長軸方向に向かうこともある。大関校庭、ピリカＥ、立川１、都、中島松６、茂漁４、メボシ川２、祝梅上層、丸子山、オサツ16（Ｂ地点）、嵐山２、モサンル、西町１において出土している。大関校庭以外はすべて黒曜石製である。

広郷技法：多面体彫器、射的山型彫器といわれていたものが、道東部の間村・吉村遺跡の資料分析により細石刃核としての機能があったと考えられるようになった（加藤ほか1971）。その後、鶴丸により整理され、最初の発見地である広郷遺跡の名称が用いられ、その細石刃剥離手順は以下のように説明される（鶴丸1979、1989）。石刃の端部に左下がりに側方剥離を行って打面とし、石核原形とする。細石刃剥離は石刃の側縁を削りとるように石核の中心部に進む。両端に打面をもつ例も多いが、その時にも同様な手順を踏むため、両側縁に細石刃剥離面が形成される。この場合、極端に剥離が進んだものは、棒状の残核となる。日東遺跡においては細石刃核に細石刃が接合する資料が得られている。その他に美利河１、ピリカＥ、富田、射的山、母子里３、モサンルにおいて出土、採集されている。美利河１、ピリカＥのみ頁岩で、他は黒曜石が用いられている。

幌加技法：舟底形石器製作技術としてモーランによって規定されたものである。剥片の剥離面、もしくは礫の打

割面を確保し、その面から周辺部を剥ぎ落として加撃面の形状を整え、必要に応じて下端からの調整も加えて底縁を形成し、舟形の石核原形とする。細石刃剥離は一端もしくは両端で行われる。湯の里４、新道４、富里Ｂ、桜岡５などで出土し、頁岩と黒曜石が用いられている。

紅葉山技法：留辺蘂町紅葉山遺跡で初めて出土した（藤本1964）。白滝村奥白滝１遺跡石器ブロック７～10より良好な接合資料が多数得られており、これによると石刃剥離の延長上で細石刃剥離が行われていることが明らかとなっている（長沼ほか編2002）。峠下１、昆布西１採集のものがこれに分類される。いずれも黒曜石製である。

４　組成の特徴

ここでは、最近15年間に報告書が刊行された遺跡の中で代表的なものを取り上げ、その石器組成を概観する。

湯の里４遺跡　平面分布の上で異なる二つの石器群が区分され、Ａ群は有舌尖頭器、尖頭器、両面調整石器、掻器、彫器等、Ｂ群は細石刃、峠下型細石刃核、彫器、錐器、舟底形石器、台形石器等からなる。また、蘭越型細石刃核及びかんらん岩製の玉、琥珀製の垂飾が１ヶ所からまとまって出土した。調査区全域からは中～小形の石刃核が多数出土している。峠下型細石刃核は比較的大形のものに属す。掻器は石刃あるいは縦長剥片を素材に刃部裏面に加工されるものもある。

新道４遺跡　細石刃、細石刃核、削器、掻器、彫器、石刃等からなる。細石刃核の製作に関連する資料が非常に多く、細石刃核の製作跡と考えられる。彫器、掻器類は非常に少ない。細石刃核は峠下型、美利河型、幌加型が出土しているが、接合資料により峠下型と美利河型が同一母岩から製作されていることが明らかとなった。また最長30㎝にも達する長大な石刃が作られており、そのような石刃と細石刃核とが同一母岩の関係にある例もある。削器や掻器等の素材には、長狭な石刃が用いられている。

石川１遺跡　細石刃、細石刃核、尖頭器、両面調整石器、彫器、掻器、錐器等からなる。細石刃核は両面調整素材を縦割りする湧別技法による。接合資料により両面調整石器の調整剥片が掻器や削器の素材として利用されていることが明らかとなった。両面調整石器はそれ自体、削器と石核の二つの役割を果たすものと想定されている。彫器の素材は縦長剥片もしくはポイントフレイクが利用され、いわゆる荒屋型に通ずる。錐器はすべてメノウ製で、両極技法による削片から作られている。尖頭器については豊富な接合資料が得られており、原石段階からその製作過程が復元されている。なお、本石器群には石刃技法を示す資料は顕著ではない。

美利河１遺跡　Ａ地点では層位的に上下関係のある複数の石器群が確認され、下層より峠下型、蘭越型細石刃核の石器群、上層より広郷型細石刃核、有舌尖頭器、大形尖頭器の石器群が発見された。下層の峠下型細石刃核は比較的小形の部類に属す。新道４遺跡の所見から、この小形峠下型のグループに美利河型細石刃核の一群が共伴する可能性が指摘され（千葉ほか1988）、分布の上からもその蓋然性が高い。蘭越型細石刃核を含むブロックからはかんらん岩製の玉が発見され、湯の里４、柏台１遺跡の例ともあわせ、蘭越型細石刃核と玉製品とは密接なセット関係にある可能性が高い。一方、Ｄ地点においては細石刃、峠下型細石刃核、彫器、掻器、尖頭器、両面調整石器、石刃等からなる、まとまった石器群が出土した。またこれには、石刃の裏面を舌状に加工した尖頭器や石刃の裏面末端部にのみ加工された石器等、特異な石器が含まれている。

オバルベツ２遺跡　長万部町教育委員会及び北海道文化財保護協会による調査区から細石刃、細石刃核、掻器、彫器、削器、石刃、石核、砥石、垂飾等が出土した。細石刃核は蘭越型、峠下型、美利河型があり、蘭越型と峠下・美利河型とは地点を違えて分布する傾向が認められる。蘭越型細石刃核の打面再生削片が多数みられ、石核調整の進行とともに頻繁に石核高が減じられていく様子が窺える。美利河型、峠下型細石刃核の石器群に伴って滑石製の垂飾が出土している。

オルイカ２遺跡　細石刃、札滑型細石刃核、両面調整石器、彫器、掻器、削器、石核等からなる。掻器は幅広の剥片を素材するものが多く、形状はいわゆる角二山型に類する。両面調整石器は素材、形態とも石川１遺跡出土例との類似が指摘されている。細石刃関連資料は黒曜石が、彫器及び掻器は頁岩が利用されており、石材と石器器種との間に明瞭な選択性がみてとれる。

オサツ16遺跡　A地区は峠下型細石刃核を伴う石器群で、石刃素材の彫器、掻器等が組成する。B地区では1ブロックから膨大な量の細石刃、忍路子型細石刃核、彫器、掻器が出土した。忍路子型細石刃核は一方の側縁が直線的な両面調整石器を素材に石核長軸方向に打面が作出されるタイプのものである。掻器は石刃が利用されるが概して寸詰まりで、忍路子型細石刃核に伴う特有の形状を成している。緑色片岩製の磨製石斧片がこれに伴っている。

柏台1遺跡　蘭越型細石刃核を伴う石器群、美利河型細石刃核を伴う石器群、掻器を主体とする不定形剥片石器群の3つの石器群が識別された。蘭越型細石刃核を伴う石器群と美利河型のそれが平面分布を異にするという傾向は、ここにおいても認められる。蘭越型細石刃核を伴う石器群には、細石刃、彫器、掻器、削器、琥珀玉、顔料及びその関連遺物が含まれる。豊富な接合資料が得られており、蘭越技法の剥離過程が細かく解明されている。彫器及び掻器は石刃を素材とするもので、形状は美利河1、オバルベツ2と共通し細長い。なお、顔料の原料はマンガン鉱、針鉄鉱等で、焼成の後に粉末化され利用されたらしい。黒色のものは美利河産のピリカ型マンガンとされている。

日東遺跡　細石刃、広郷型細石刃核、掻器、彫器、削器、石刃等からなる。掻器及び彫器は大形厚手の石刃が用いられている。細石刃核に細石刃が多数接合した接合資料が得られており、広郷型において初めて技術的な復元が試みられている。石材についてみると、細石刃関連資料はすべて黒曜石が用いられているが、掻器や石刃の一部には珪岩、メノウ製のものも散見される。

5　編年と様相

道央部には恵庭a降下軽石堆積物（En-a）が分布しており、千歳市及び恵庭市周辺の発掘調査では細石刃石器群はEn-a最上位の風化土層より出土するのが一般的であった。これまでに祝梅上層、メボシ川2、丸子山上層、オサツ16遺跡から忍路子型が、キウス7、ユカンボシE10、オサツ16遺跡から峠下型が、丸子山上層から白滝型がそれぞれ確認されている。最近ではオルイカ2から札滑型細石刃核が出土している。しかし、1997年の柏台1遺跡の調査において細石刃石器群がEn-aより下位の火山灰質シルト層から出土したことにより、層位によるある程度の序列化が可能となった。柏台1遺跡においてEn-aの下位より出土したのは蘭越型細石刃核と美利河型細石刃核であった。En-aの降下年代は17,000y.B.P.と推定されており、それ以前の年代であることは確実である。

美利河1遺跡においてもテフラが絡んではいないが、層位的な石器群の把握がなされており、広郷型細石刃核石器群より下層に蘭越型細石刃核石器群、峠下型と美利河型が組み合わさった石器群が発見されている。このように峠下型と美利河型が共伴する例は新道4遺跡やオバルベツ2遺跡でも確認されており、峠下型＋美利河型のセット関係は認められて良いだろう。ただし、この場合の峠下型は小形のもので峠下1類（寺崎1999）としたものである。

以上の事例によって、今のところ最も古相の細石刃石器群といえるのは蘭越型細石刃核石器群と峠下1類＋美利河型細石刃核石器群であるが、両者の関係については不明である。ともに14C年代は2万年前後である。

峠下型はEn-a最上位の風化土層から出土しており、これらは峠下1類よりも大形の峠下2類と思われる。本道においては峠下型は長期間、かつ広範囲に存続するもののようである。帯広市暁遺跡では峠下2類に札滑型が共伴しており、両者が十勝地方においては同時代性を有していたことが考えられる。道西部においては峠下2類を代表する石器群は湯の里4遺跡B群であり、裏面基部加工の施される荒屋型彫器が伴う。オルイカ2遺跡では札滑型細石刃核に同様の彫器が伴っており、峠下2類との時間的近似性を物語っている。オルイカ2の石器群は札滑型細石刃核石器群の特徴を良く表しており、石刃技法を伴わない、両面調整の際にできる剥片などから彫器、削器などを製作する両面調整石器群といえる。同様の石器群は石川1からも得られており、縦長剥片はあるものの石刃は顕著に認められず、オルイカ2同様の彫器、削器あるいは両面調整石器を有している。いずれにしても、峠下2類、札滑型、白滝型は時間的には近似したものと考えられる。幌加型もこれらの細石刃核に客体的に伴うものであろう。さて、北海道において両面加工の尖頭器がどの段階から出現するのかについて論者のひとりは以前、湧別技法（白滝型）と連動して尖頭器が出現するものと述べたことがあるが（寺崎1999）、ピリカ遺跡D地点より峠下2類細石刃核に伴って有舌尖頭器、石刃素材の舌部を有する尖頭器が出土したことから、再考の必要がある。

忍路子型と広郷型細石刃核石器群には有舌尖頭器・局部磨製石斧が確実に伴出するようになる。しかし両者の時

間的な前後関係については不明である。道西部において発掘調査による出土事例のない紅葉山型については今後の資料の増加を待ちたい。

6　研究の課題

北海道においては層位的な事例に乏しく、編年作業が思うように進まないのが現状である。道央部においては広域テフラを含むロームの堆積状態が良好で柏台１遺跡のようなEn-a下位の細石刃石器群の発見例も今後期待できるが、層厚15～30cmのEn-a上位風化ローム層中での文化層の重複の可能性は低いであろう。こうした状況の中では、細石刃核の原材の選択から残核に至るまでの技術研究をさらに推し進め、石器組成を考慮し、各細石刃石器群の特徴を抽出、比較することが重要となってくる。この場合の技術研究の基礎は接合資料による工程の復原に求めるべきであろう。技術研究と同時に、早急に進めなければならないのは鶴丸俊明の指摘があるように細石刃そのものの微視的な研究である（鶴丸2001）。細石刃をはじめとする使用痕分析が今後一層重要となってこよう。

柏台１遺跡ではEn-a下位から細石刃石器群と同時に、「不定形剥片石器群」とされた一群が発見されている。調査者は14Ｃ年代と層別遺物出土量から後者を古いとしながらもその判断には慎重である。同様の問題はオバルベツ２遺跡にもあり、ブロック３ではナイフ形石器が出土したが、これは北海道における東北系のナイフ形石器の初めての発掘事例となった。ここにおいても細石刃石器群との明確な前後関係はとらえられていない。今金町神丘２遺跡の広郷型ナイフ形石器も含めて、ナイフ形石器と細石刃石器群との時空的関係の究明が課題である。

最後に石材についてであるが、３の細石刃技法と石材のところでもわかるように、９つの細石刃核型式の中で、美利河型、白滝型、紅葉山型については出土例が少なく不明なところがあるものの、その他については頁岩でも黒曜石でも同様な技法を用いて細石刃が製作されている。このことは北海道では西部と東部の石材環境を超えて、互いに石器製作技術が連動していたと考えられる。北海道東部、中央部においても渡島半島部の頁岩が用いられていると推定されるが、石材ネットワークの解明のためには、秦（2003）が東北地方において行っているような頁岩の産地推定方法の開発が望まれるところである。

末筆ながら、本稿の図版作成には藤田征史氏にご協力いただいた。記して謝意を申し上げる。

引用参考文献　（一覧表の出典以外のもの）

小野爾良・加藤晋平・鶴丸俊明　1972「北海道訓子府町増田遺跡の第一次調査」『考古学ジャーナル』No.71

加藤晋平・畑　宏明・鶴丸俊明　1970「エンド・スクレィパーについて」『考古学雑誌』第55巻3号

加藤晋平・鶴丸俊明・水村孝行　1971「多面体彫器の問題」『考古学ジャーナル』No.57

鈴木忠司編　1994　「日本細石刃文化地名表」『京都文化博物館研究報告　朱雀』第７集

千葉英一　1993「新道４遺跡における細石刃石器群の検討」『先史学と関連科学』吉崎昌一先生還暦記念論集刊行会

鶴丸俊明　1979「北海道地方の細石刃文化」『駿台史学』第47号

鶴丸俊明　1989「東アジアにおける細石刃製作技術」『季刊　考古学』第29号

鶴丸俊明　2001「北海道旧石器考古学の論点－今日的焦点と展望－『北海道考古学』第37輯

寺崎康史・長沼孝　1993　「北海道西部の細石刃文化」『細石刃文化研究の新たなる展開』

長沼　孝　1990「美利河１・石川１遺跡の分析」『北海道考古学』第26輯

長沼　孝・鈴木宏行・直江康雄編　2002『白滝遺跡群Ⅲ』

寺崎康史　1999「北海道細石刃石器群理解への一試論」『先史考古学論集』第８集

秦　昭繁　2003「東北地方の珪質頁岩石材環境」『考古学ジャーナル』No.499

引用参考文献　（一覧表の出典、一覧表番号と対応）

1　畑宏明編 1985 『知内町湯の里遺跡群』 北海道埋蔵文化財センター

2　千葉英一ほか 1988 『木古内町新道４遺跡』 北海道埋蔵文化財センター

3　長沼孝編 1988 『函館市石川１遺跡』 北海道埋蔵文化財センター

4　松橋純吉ほか 1972 「厚沢部町富里Ｂ遺跡採集の無土器時代の遺物」 『桧山考古学研究会会誌』1

5　木村アヤ子 1975 「桧山郡厚沢部町の表採資料について」 『桧山考古学研究会会誌』4

6　三浦孝一・柴田信一 1993 『大関校庭遺跡』 八雲町教育委員会

7　吉崎昌一 1961「白滝遺跡と北海道の無土器文化」『民族学研究』26(1)

8　寺崎康史 1989 『今金町の遺跡』 今金町教育委員会

9　寺崎康史 1989 『今金町の遺跡』 今金町教育委員会

10　長沼孝編 1985 『今金町美利河１遺跡』 北海道埋蔵文化財センター

寺崎康史 1998 「〈図版解説〉北海道今金町美利河１遺跡Ｃ地点出土の石刃接合資料」 『古代文化』50(4)

寺崎康史編 2001 『ピリカ遺跡Ⅰ』 今金町教育委員会

寺崎康史編 2002 『ピリカ遺跡Ⅱ』 今金町教育委員会

宮尾亨 1997 「今金町美利河１遺跡Ｋ地点」 『第11回東北日本の旧石器文化を語る会予稿集』

11　寺崎康史 1989 『今金町の遺跡』 今金町教育委員会

12　大島秀俊ほか編 2000 『長万部町オバルベツ２遺跡（２）』 北海道文化財保護協会

佐藤稔編2002 『オバルベツ２遺跡（２）』 長万部町教育委員会

13　白石典之編 1991 『黒松内町の遺跡』 黒松内町教育委員会

14　白石典之編 1991 『黒松内町の遺跡』 黒松内町教育委員会

15　白石典之編 1991 『黒松内町の遺跡』 黒松内町教育委員会

16　白石典之編 1991 『黒松内町の遺跡』 黒松内町教育委員会

17　吉崎昌一 1960 『立川』 市立函館博物館

吉崎昌一 1977 「立川以後」 『立川』（復刻） みやま書房

18　児玉作左衛門・大場利夫 1957 『狩太遺跡』 狩太町教育委員会

19　児玉作左衛門・大場利夫 1957 『狩太遺跡』 狩太町教育委員会

20　篠原忠男 1983 『ニセコ町内遺跡分布調査報告書Ⅱ』 ニセコ町教育委員会

21　篠原忠男 1983 『ニセコ町内遺跡分布調査報告書Ⅱ』 ニセコ町教育委員会

22　名取武光・松下亘 1961 『峠下遺跡調査報告書』 倶知安町教育委員会

23　名取武光・松下亘 1961 「倶知安町の遺跡と先住民」 『倶知安町史』

24　名取武光・松下亘 1961 「倶知安町の遺跡と先住民」 『倶知安町史』

25　木村英明 1978 「余市川・赤井川流域の先土器石器群について」 『北海道考古学』14

26　木村英明 1978 「余市川・赤井川流域の先土器石器群について」 『北海道考古学』14

佐川俊一編 2000 『赤井川村都遺跡』 北海道埋蔵文化財センター

27　上野秀一・宮塚義人 1976 「北海道余市郡赤井川村都遺跡出土の石器について」 『北海道考古学』12

木村英明 1978 「余市川・赤井川流域の先土器石器群について」 『北海道考古学』14

28　木村英明 1978 「余市川・赤井川流域の先土器石器群について」 『北海道考古学』14

29　上野秀一ほか 1982 『札幌市文化財調査報告書XXV』 札幌市教育委員会

30　松谷純一編 1988 『中島松６・７遺跡』 恵庭市教育委員会

31　松谷純一編 1997 『茂漁４遺跡』 恵庭市教育委員会

32　上屋真一編 1994 『ユカンボシＥ５遺跡低地面における調査』 恵庭市教育委員会

33　越田賢一郎・末田正卓編 1998 『恵庭市ユカンボシE10遺跡』 北海道埋蔵文化財センター

34 大島秀俊編 1997 『千歳市オサツ16遺跡（2）』 北海道文化財保護協会
大島秀俊編 1998 『千歳市オサツ16遺跡（3）』 北海道文化財保護協会
35 熊谷仁志・鎌田望編 1998 『千歳市キウス５遺跡（6）Ｂ地区・Ｃ地区』 北海道埋蔵文化財センター
鎌田望編 1999 『千歳市キウス５遺跡（7）キウス７遺跡（6）』 北海道埋蔵文化財センター
36 皆川洋一編 1998 『千歳市キウス７遺跡（5）』 北海道埋蔵文化財センター
37 阿部明義編 2003 『千歳市オルイカ２遺跡』 北海道埋蔵文化財センター
38 田村俊之編 1994 『丸子山遺跡における考古学的調査』 千歳市教育委員会
39 田村俊之編 1983 『メボシ川２遺跡における考古学的調査』 千歳市教育委員会
40 吉崎昌一 1977 「立川以後」 『立川』（復刻） みやま書房
41 福井淳一編 1999 『千歳市柏台１遺跡』 北海道埋蔵文化財センター
42 大泉博嗣ほか 1998 『柏原27・ニナルカ・静川５・６遺跡』 苫小牧市埋蔵文化財センター
43 吉崎昌一 1958 「舟底形石器資料」 『貝塚』82
44 千葉英一ほか 1989 『深川市納内３遺跡』 北海道埋蔵文化財センター
45 西田茂編 1988 『鷹栖町嵐山２遺跡』 北海道埋蔵文化財センター
46 斎藤武一・清杉久義 1958 「旭川市旭ヶ丘遺跡発見の無土器文化」 『郷土の科学』22
47 西田茂編 1988 『鷹栖町嵐山２遺跡』 北海道埋蔵文化財センター
友田哲弘 1994 「先土器時代の上川」 『新旭川市史 第１巻通史』
48 佐藤忠雄・野田武夫 1961 『射的山』 永山町教育委員会
49 友田哲弘ほか編 2001 『桜岡５遺跡』 旭川市教育委員会
50 友田哲弘ほか編 2001 『桜岡５遺跡』 旭川市教育委員会
51 長沼孝・佐藤剛編 2000 『上川町日東遺跡』 北海道埋蔵文化財センター
52 斎藤武一 1960 「美瑛町北瑛発見の船底形石器について」 『あけぼの』 旭川商業高校郷土部ノート１
53 野村崇 1977 「旧石器時代の文化」 『石狩川中流域の先史遺跡』 空知地方史研究協議会
54 山崎博信 1964 『名寄日進遺跡篠原地点』 名寄市立図書館
鈴木邦輝編 1988 『名寄市日進２遺跡・日進31遺跡』 名寄市教育委員会
55 山崎博信 1963 「北海道名寄市旭東南出地点の遺跡」 『道北文化研究』３
56 氏江敏文 1984 「名寄市朝日１遺跡出土の遺物」 『道北文化研究』13
57 大沼忠春 1985 『北町地区の遺跡』 下川町教育委員会
58 大沼忠春 1985 『北町地区の遺跡』 下川町教育委員会
59 大沼忠春 1985 『北町地区の遺跡』 下川町教育委員会
60 今井真司編 1999 『西町１遺跡』 下川町教育委員会
61 鈴木邦輝編 1986 『桜ヶ丘遺跡』 下川町教育委員会
62 岩本圭輔 1972 「北海道モサンル遺跡の石器」 『歴史』42 東北史学会
山崎博信 1979 『モサンル遺跡』 下川町教育委員会
上野秀一編 1981 『モサンル』 下川町教育委員会
芹沢長介編 1983 『モサンル』 東北大学文学部考古学研究会
63 広田良成編 2000 『和寒町東町遺跡』 北海道埋蔵文化財センター
64 福士廣志 1991 「小平町天瑞寺裏遺跡出土の峠下型細石核」 『留萌市海のふるさと館紀要』２
65 高橋稀一 1969 「富良野盆地の先史」 『富良野地方史』

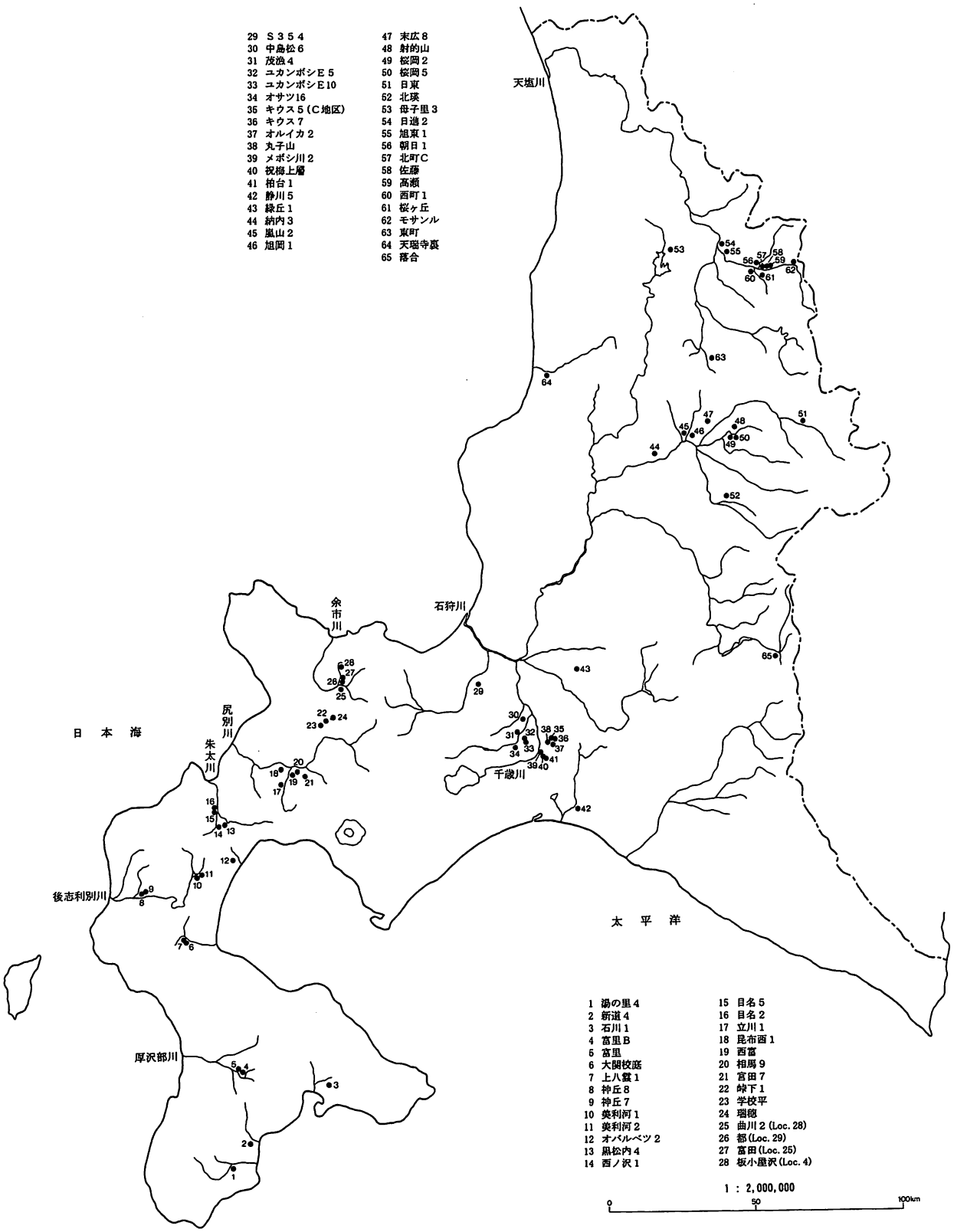
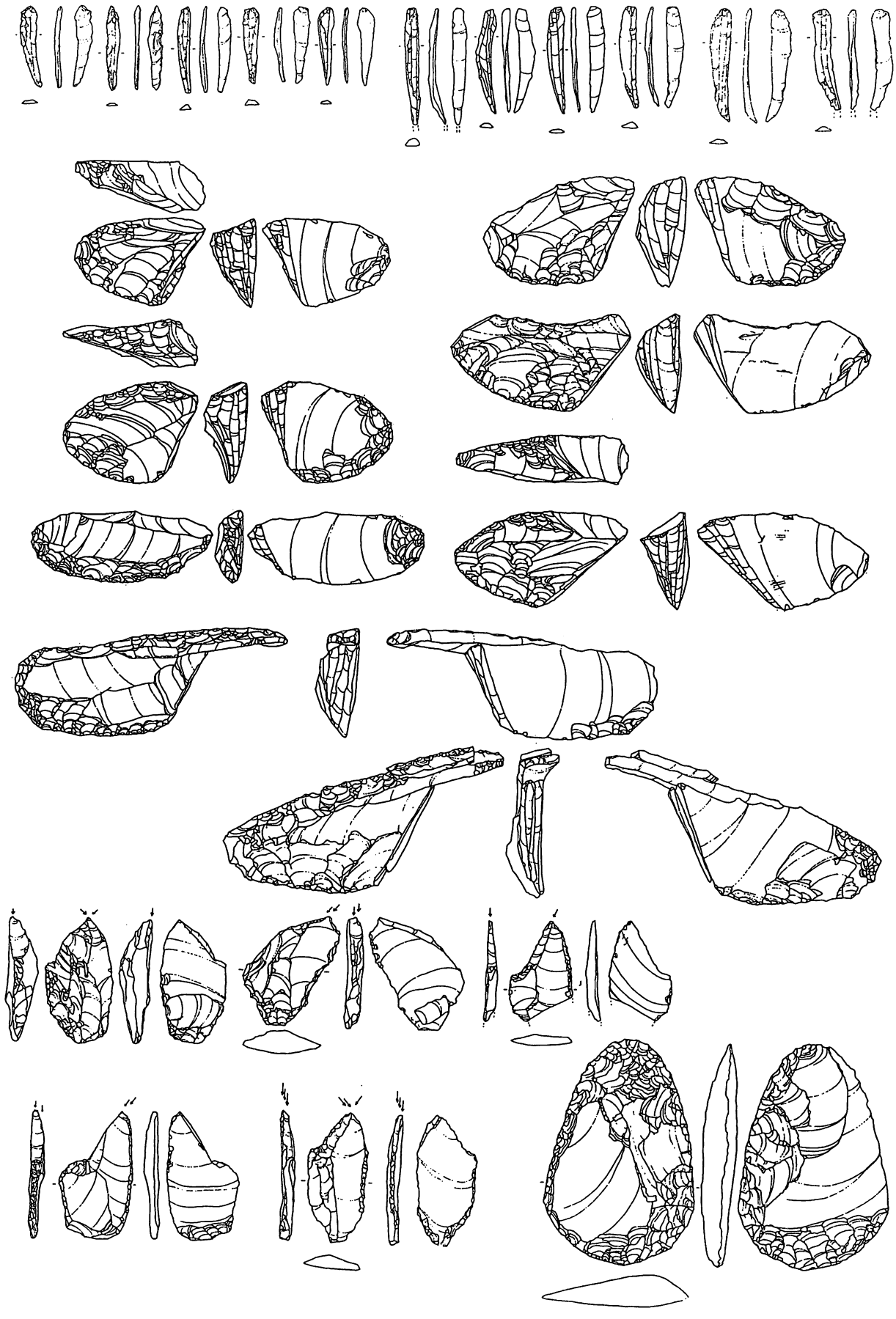
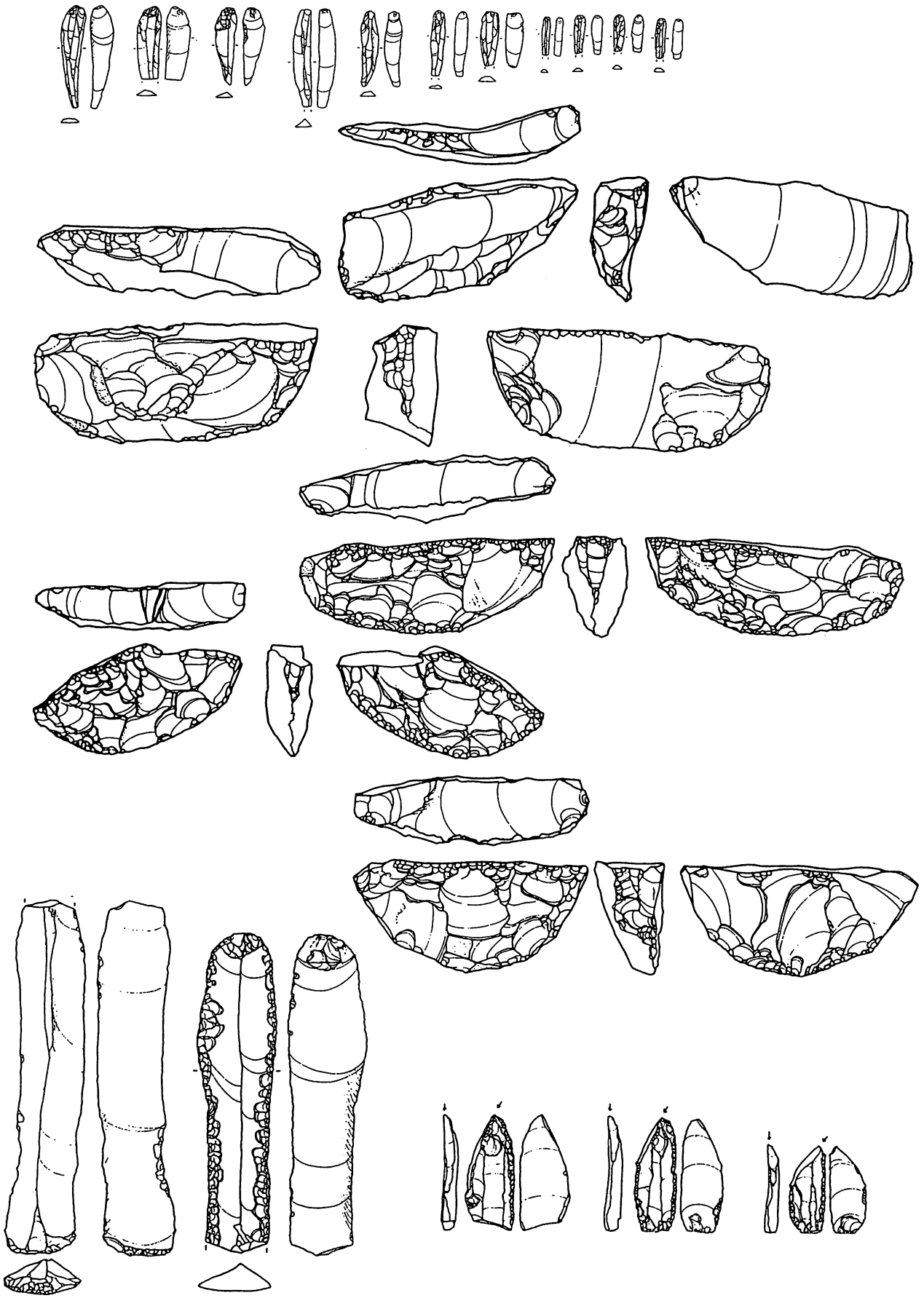


図１　北海道西部の細石刃遺跡の分布



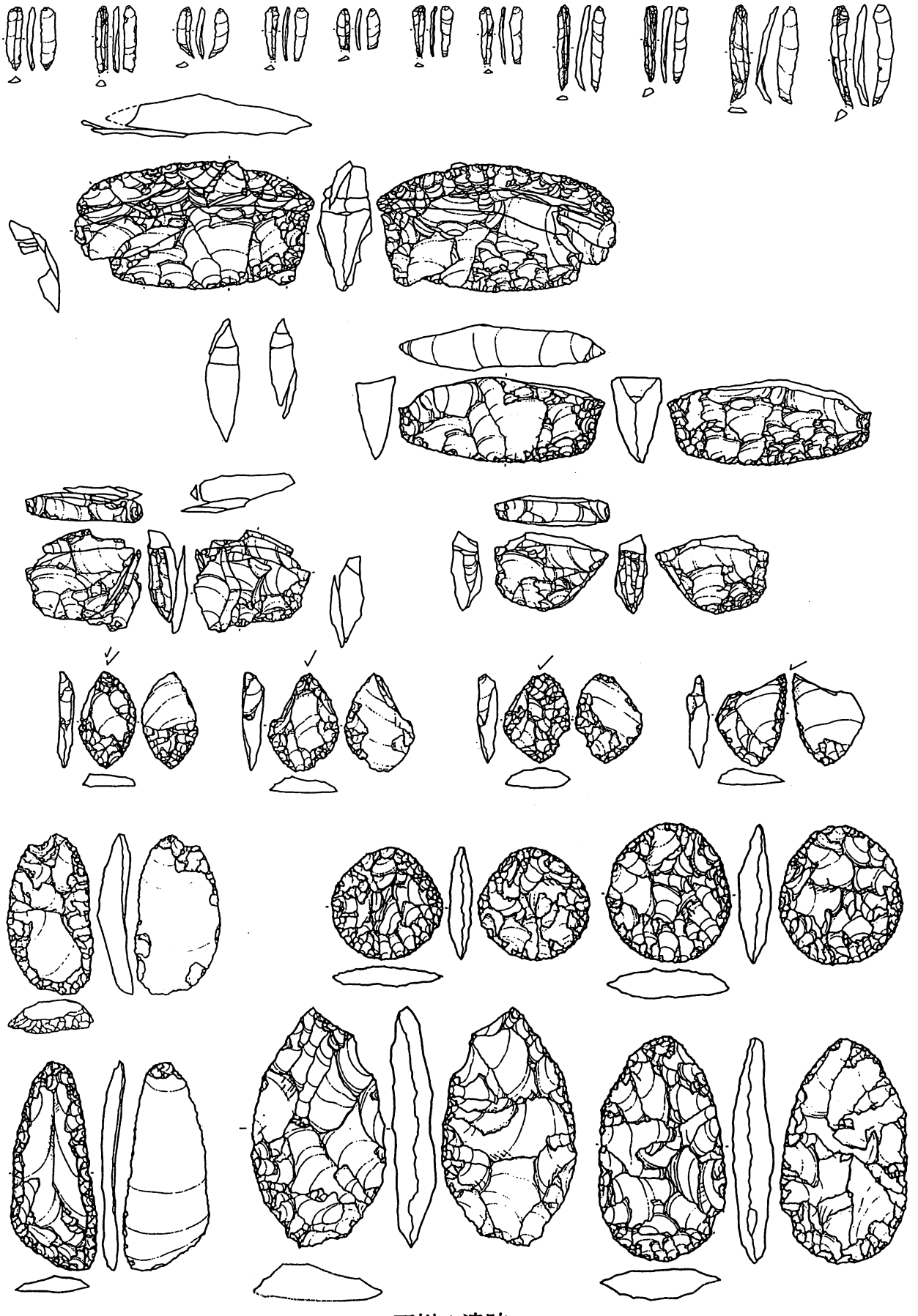
湯の里４遺跡

図２　北海道西部の細石刃文化の石器



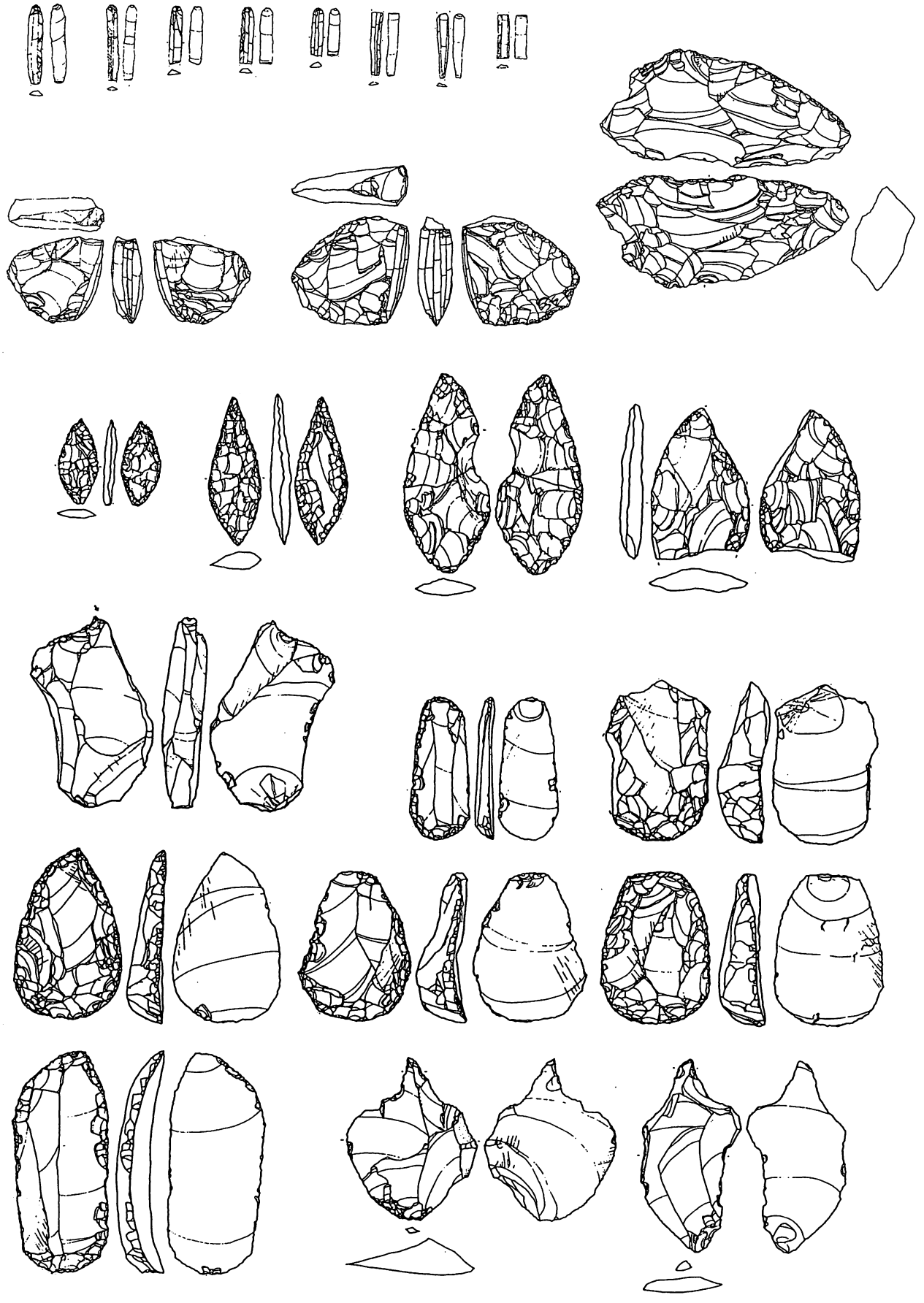
新道４遺跡

図３　北海道西部の細石刃文化の石器



石川１遺跡

図４　北海道西部の細石刃文化の石器



大関校庭遺跡

図５　北海道西部の細石刃文化の石器

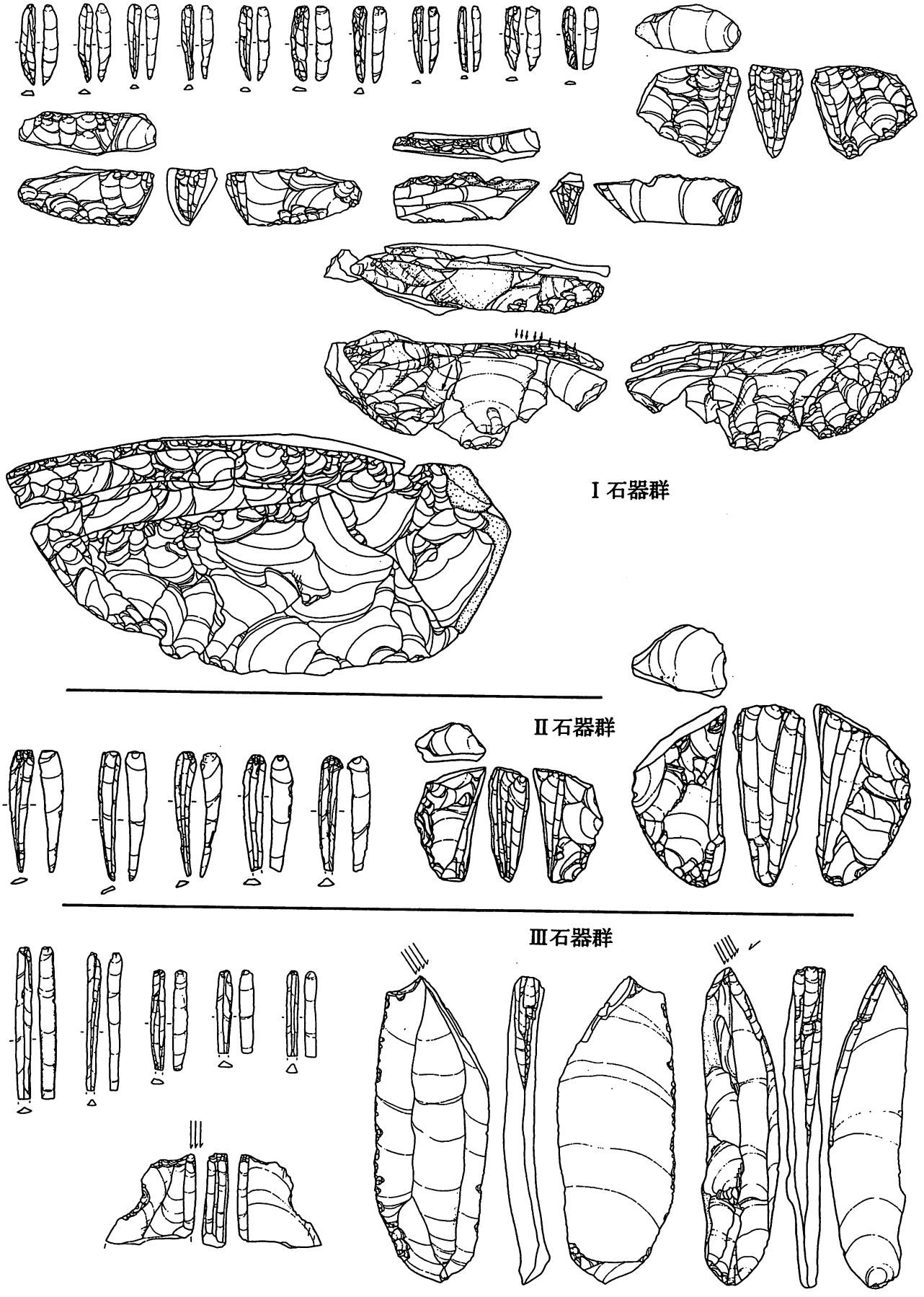
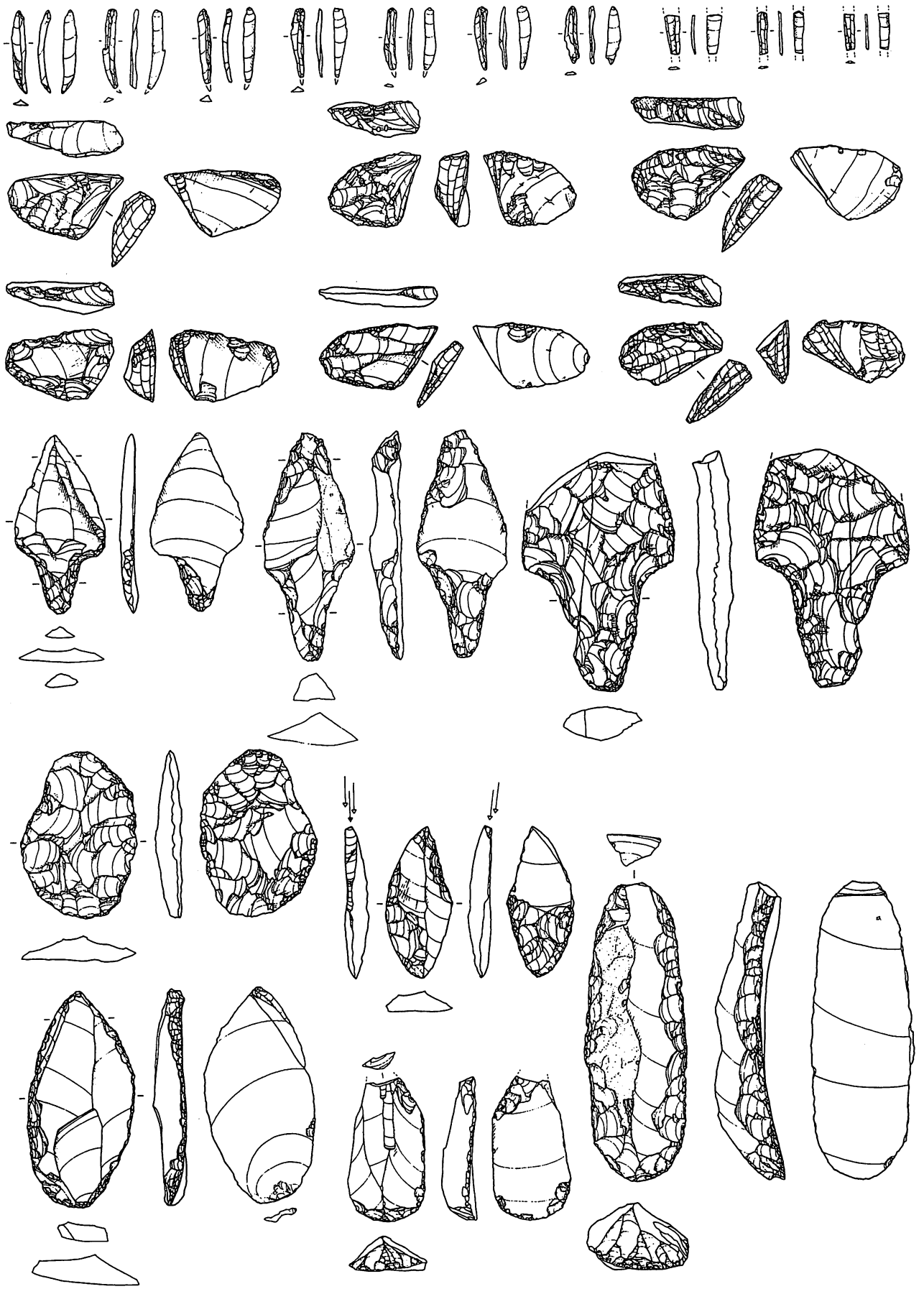
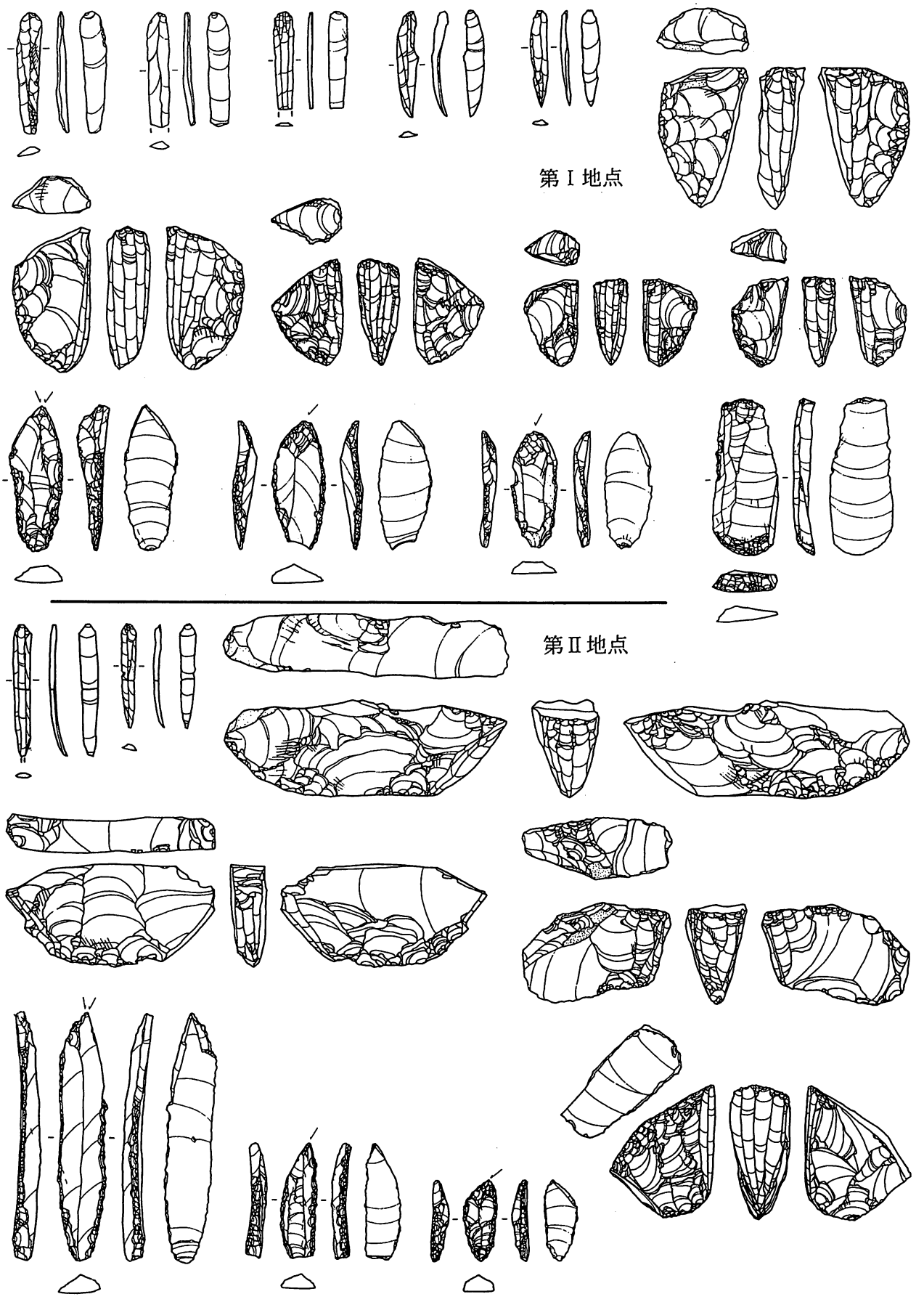


図６　北海道西部の細石刃文化の石器



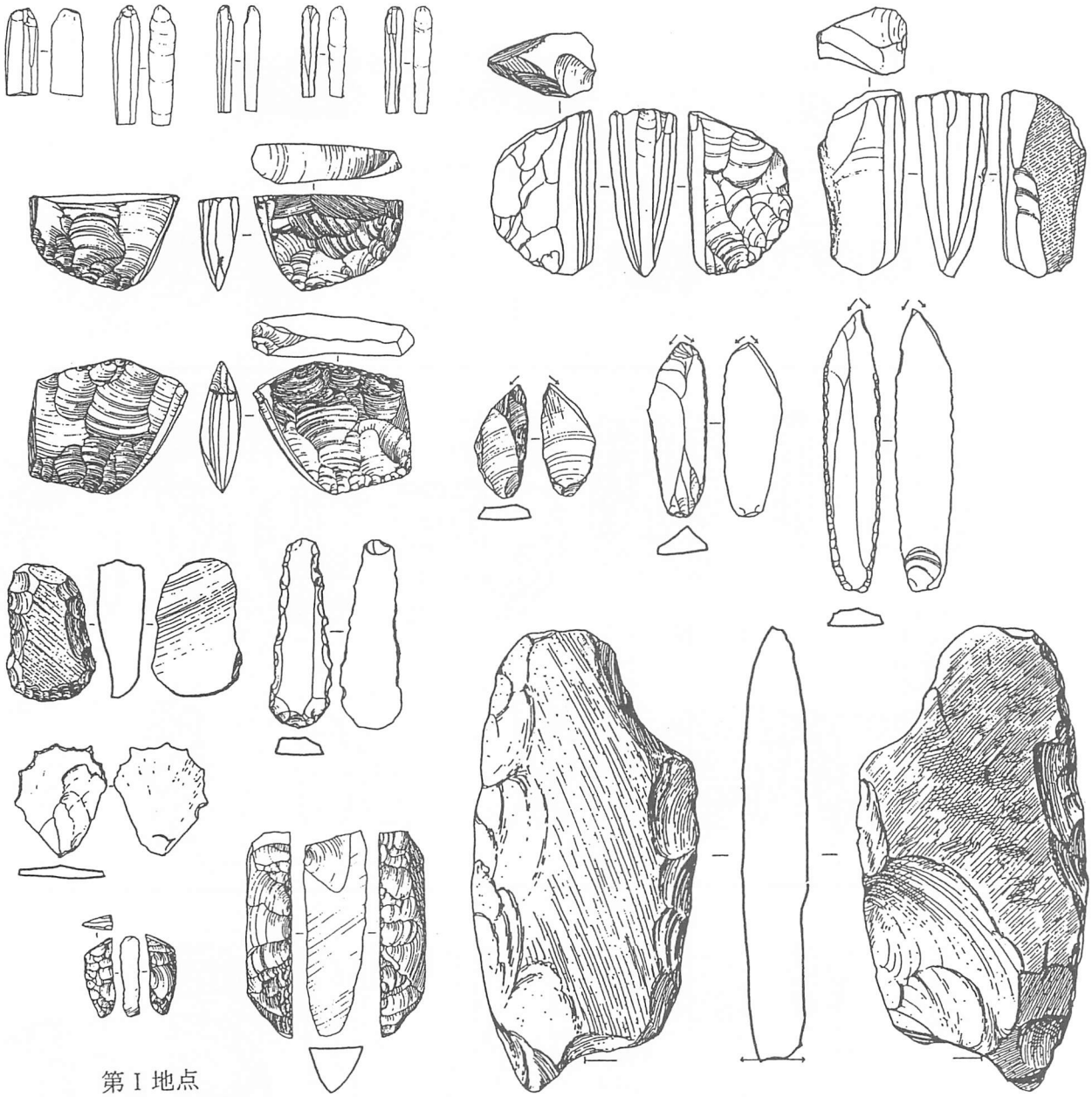
ピリカ遺跡D地点

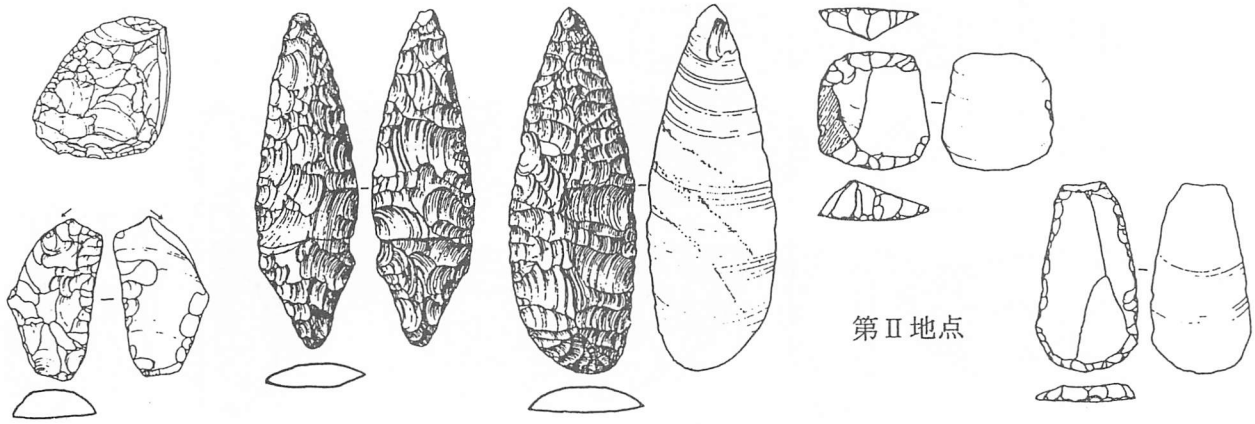
図７　北海道西部の細石刃文化の石器



オバルベツ２遺跡

図８　北海道西部の細石刃文化の石器





立川１遺跡

図９　北海道西部の細石刃文化の石器

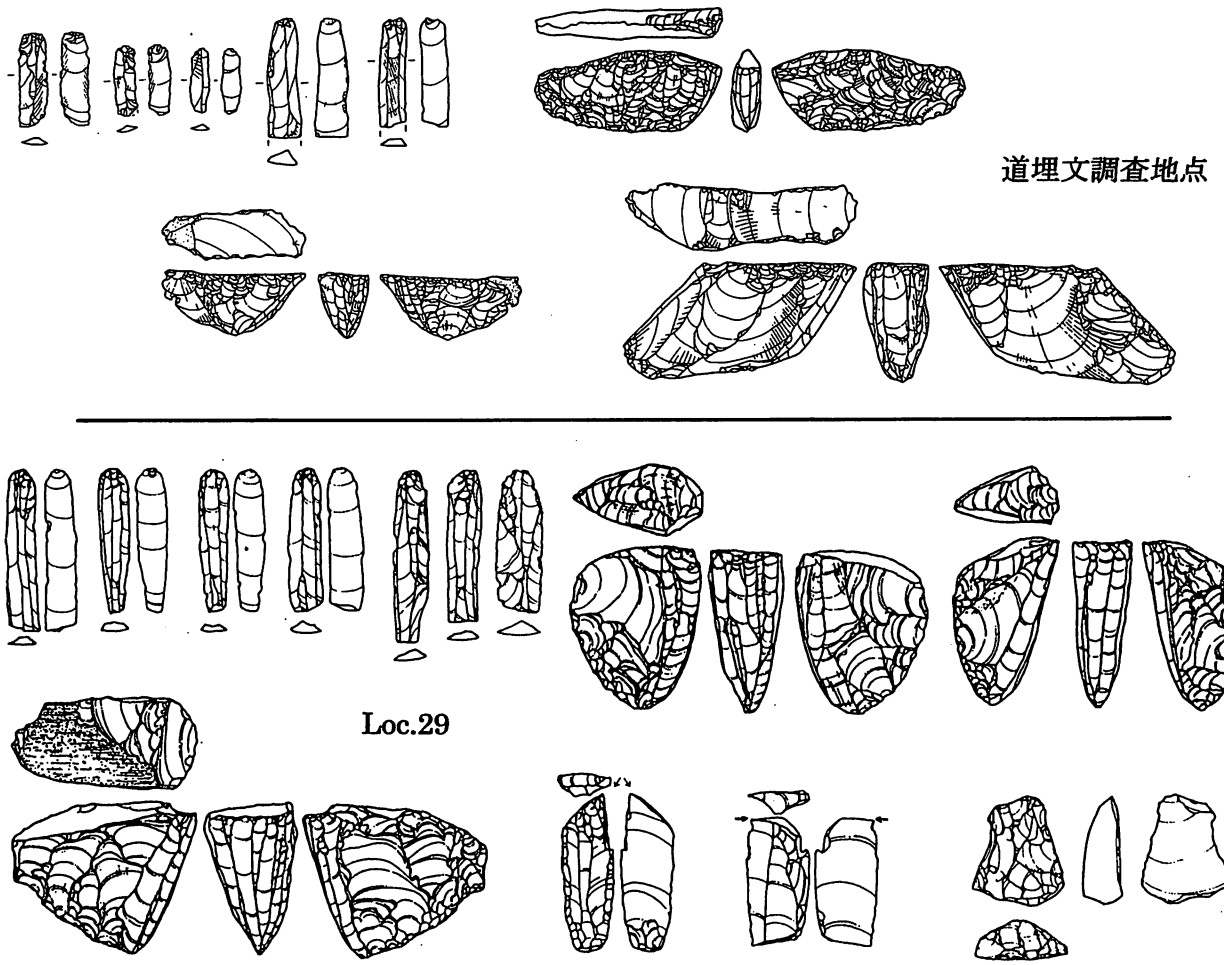


図 10　北海道西部の細石刃文化の石器

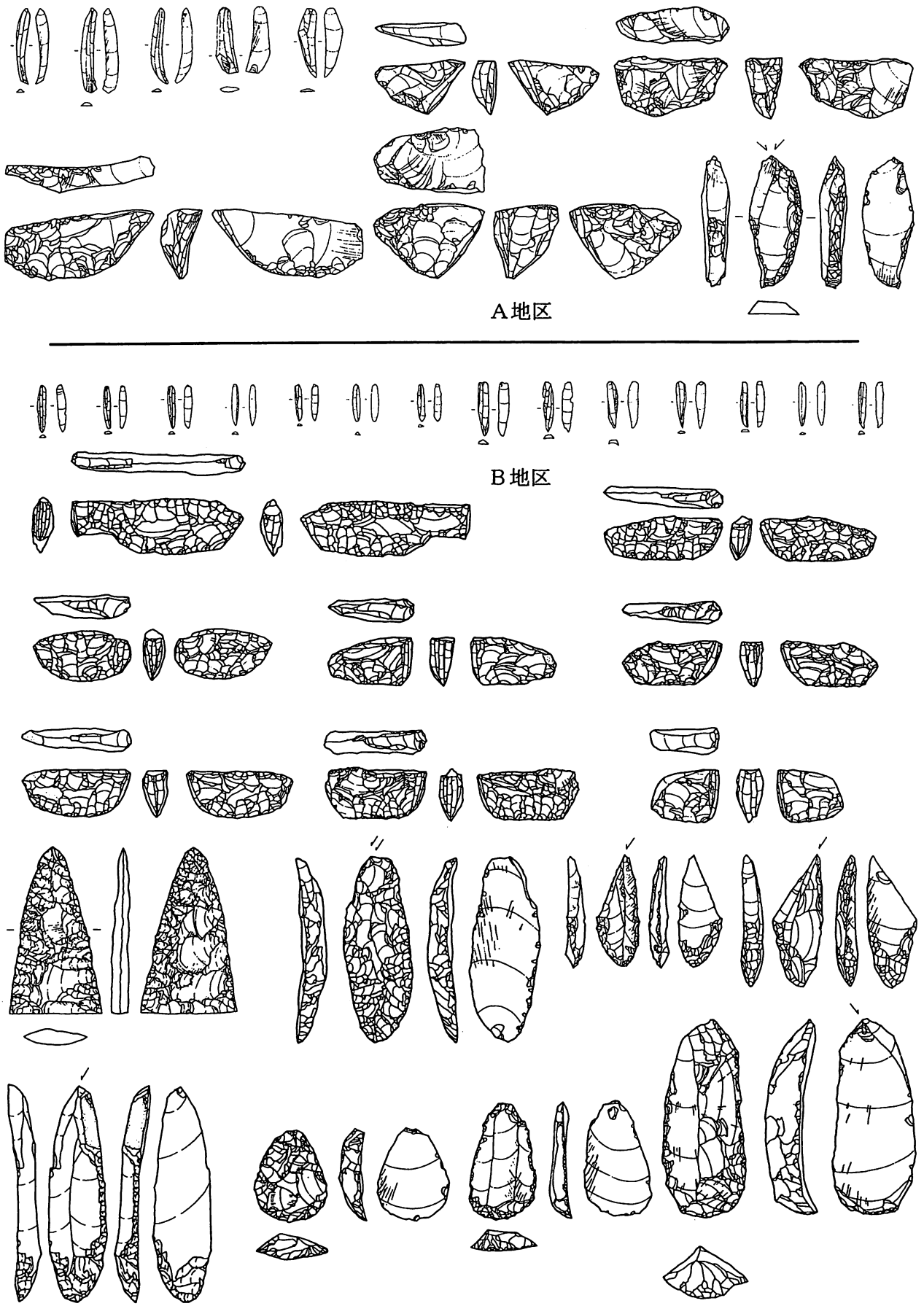
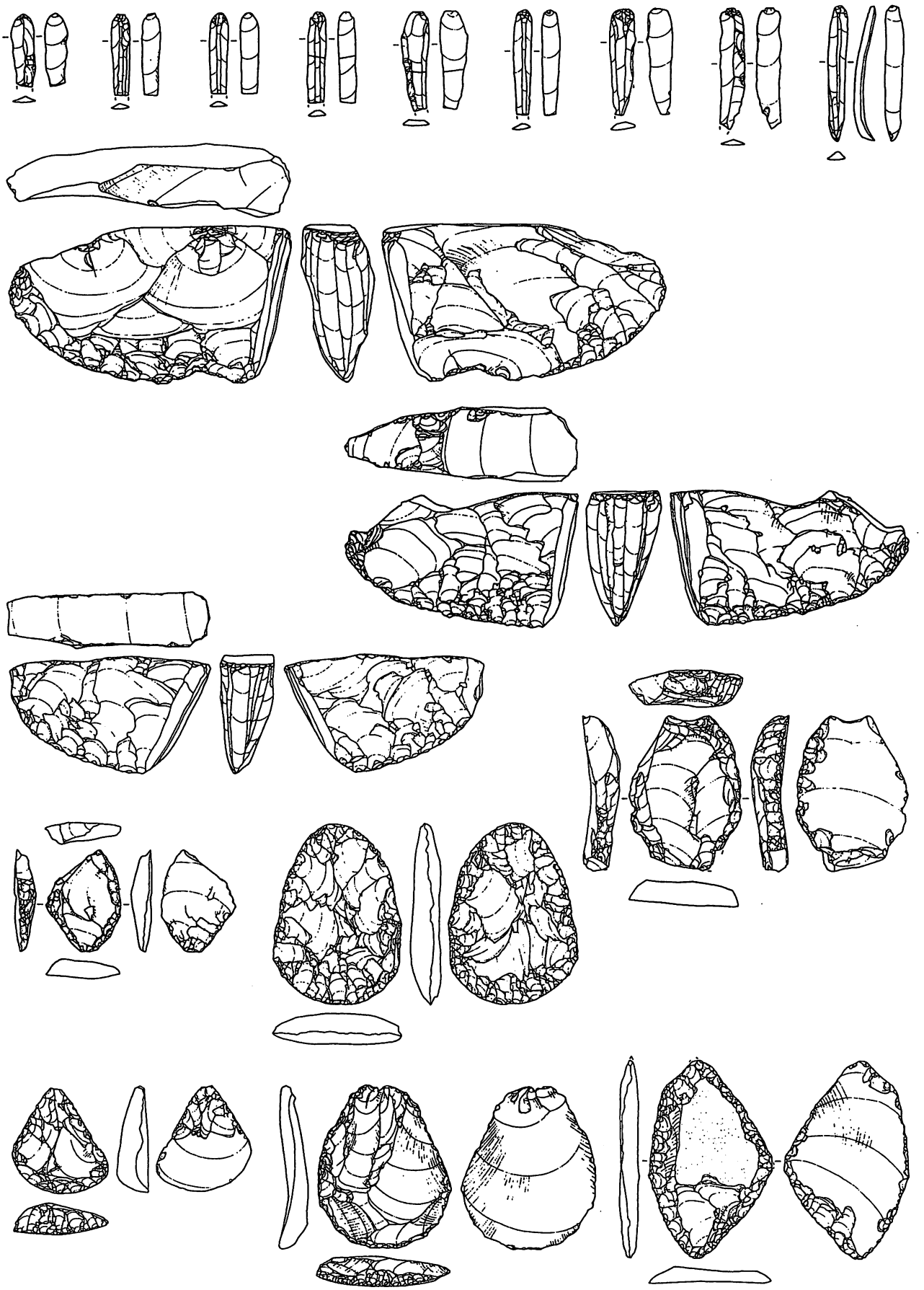
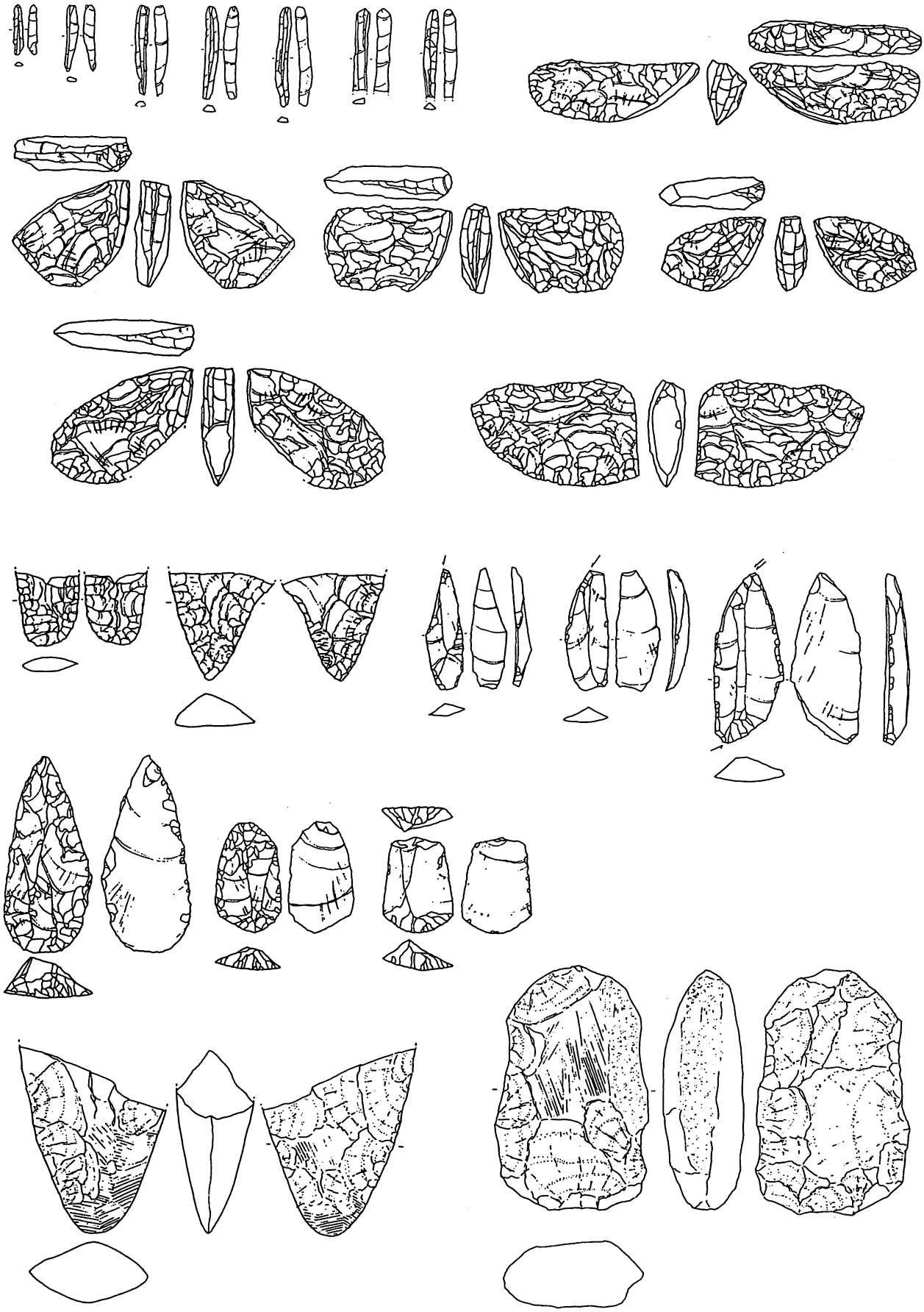


図 11　北海道西部の細石刃文化の石器



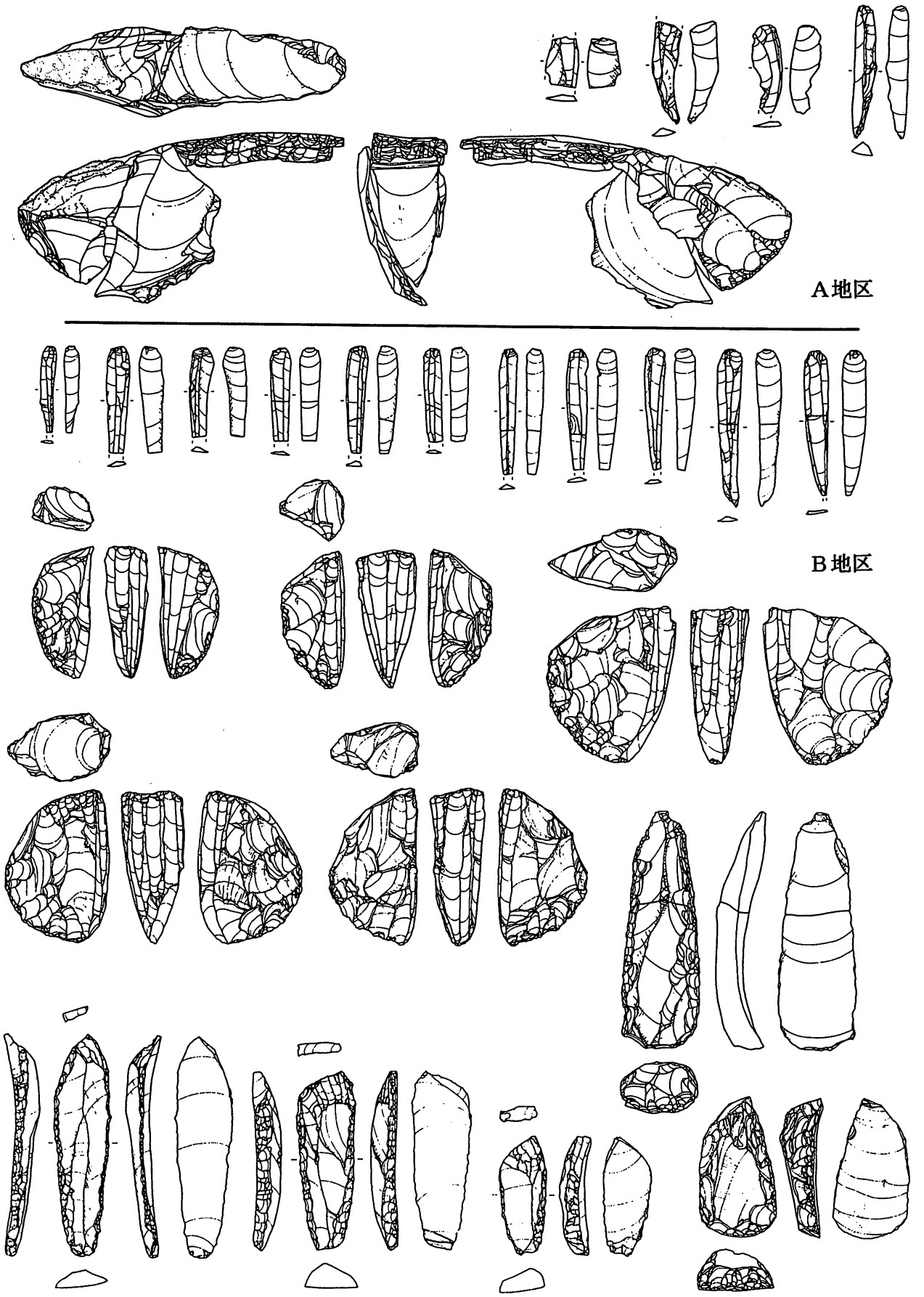
オルイカ２遺跡

図 12　北海道西部の細石刃文化の石器



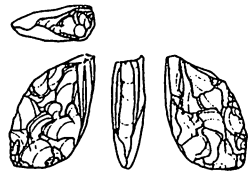
メボシ川２遺跡

図 13　北海道西部の細石刃文化の石器

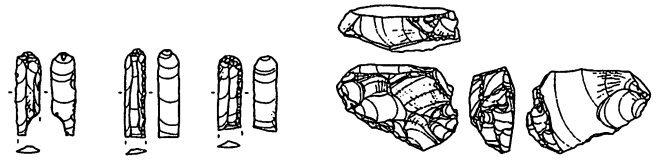


柏台１遺跡

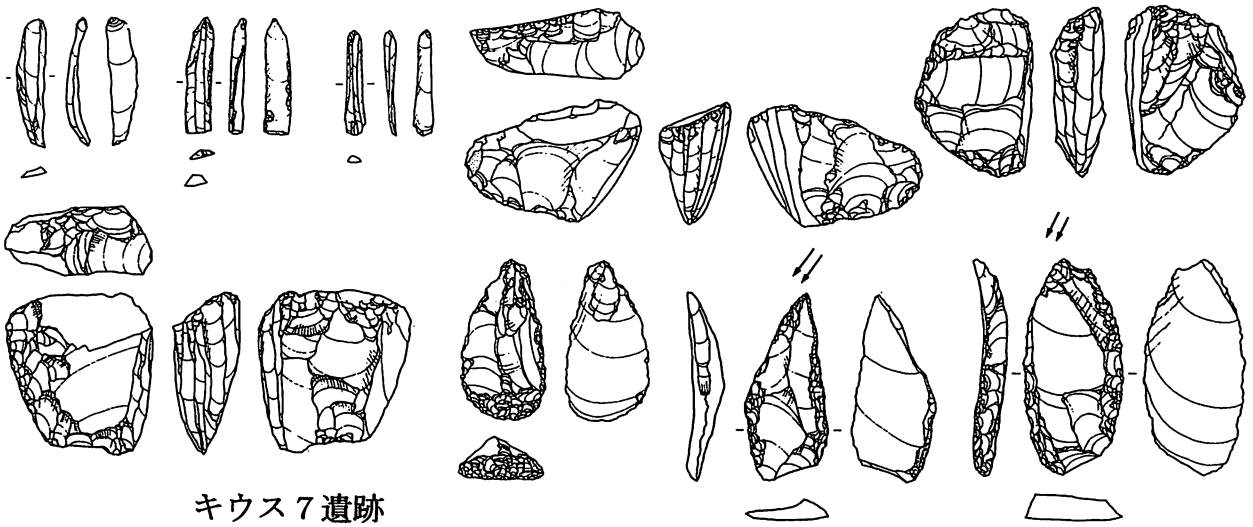
図 14　北海道西部の細石刃文化の石器



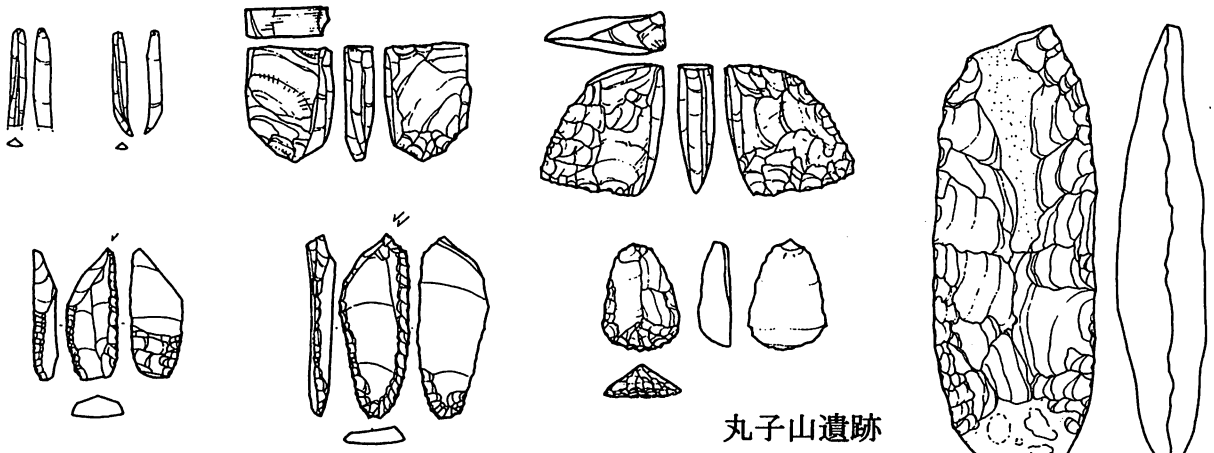
茂漁４遺跡



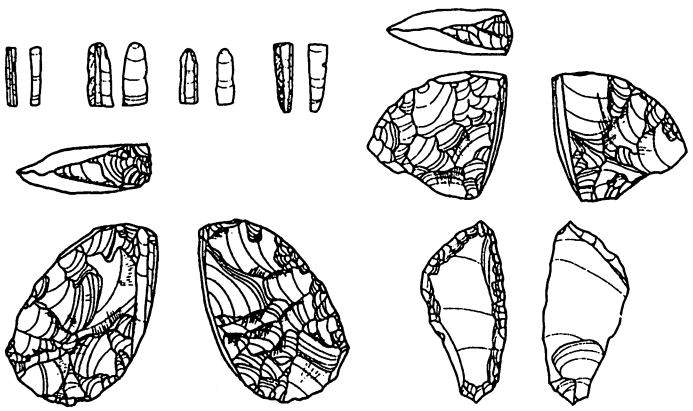
ユカンボシＥ10遺跡



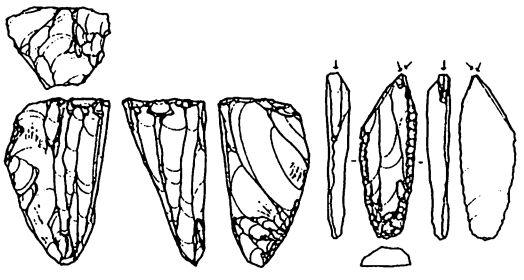
キウス７遺跡



丸子山遺跡

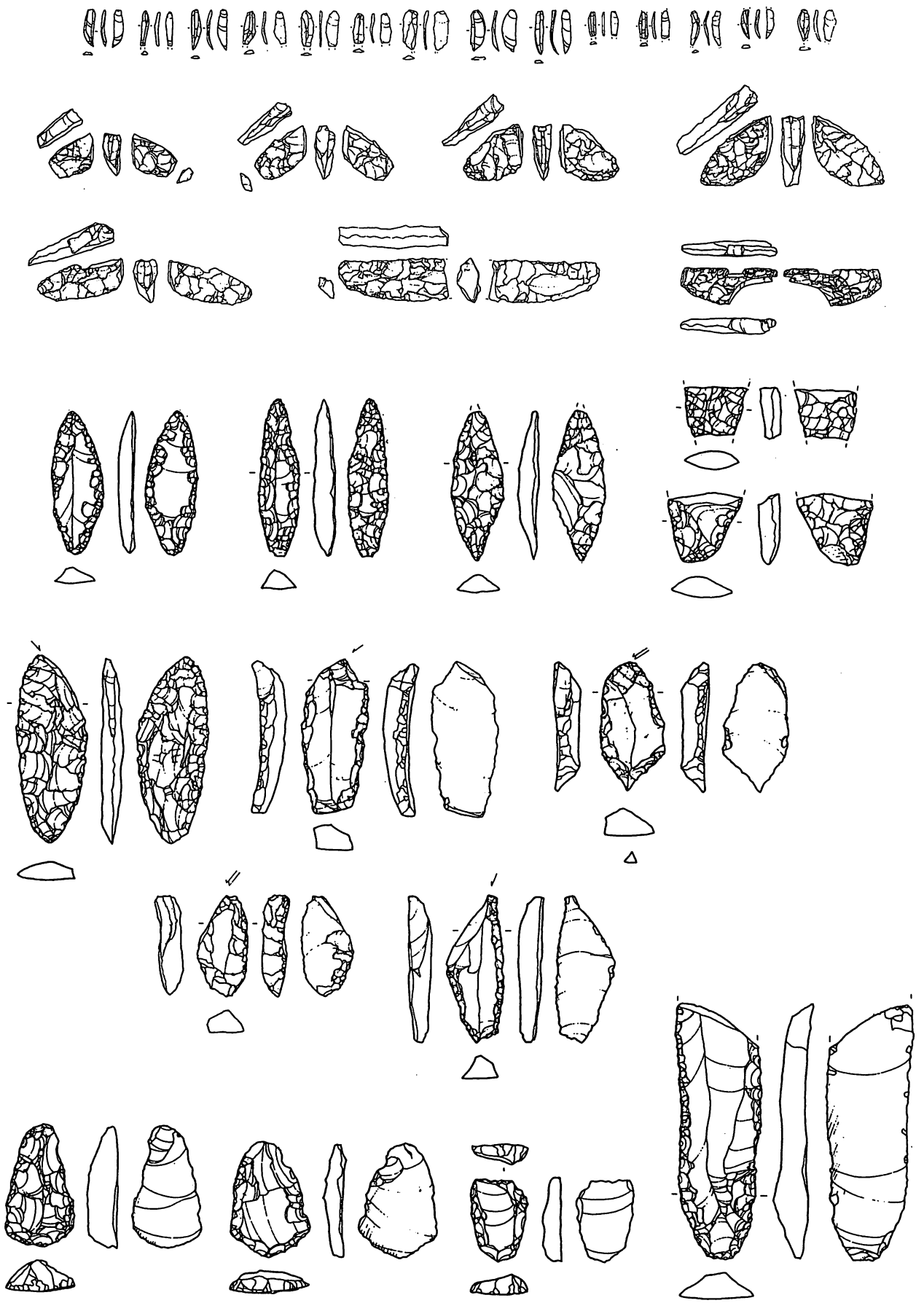


祝梅上層遺跡



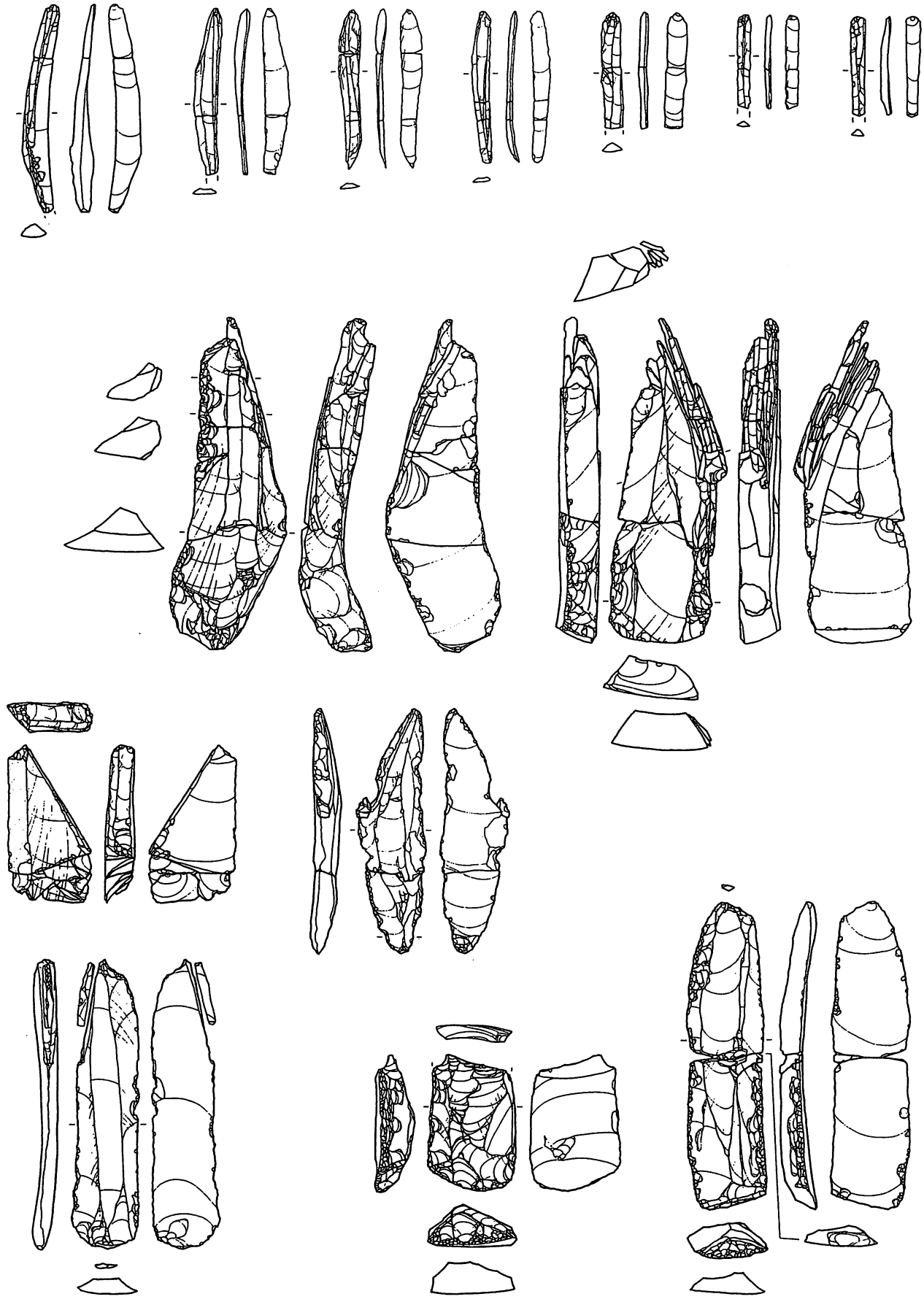
静川５遺跡

図 15　北海道西部の細石刃文化の石器



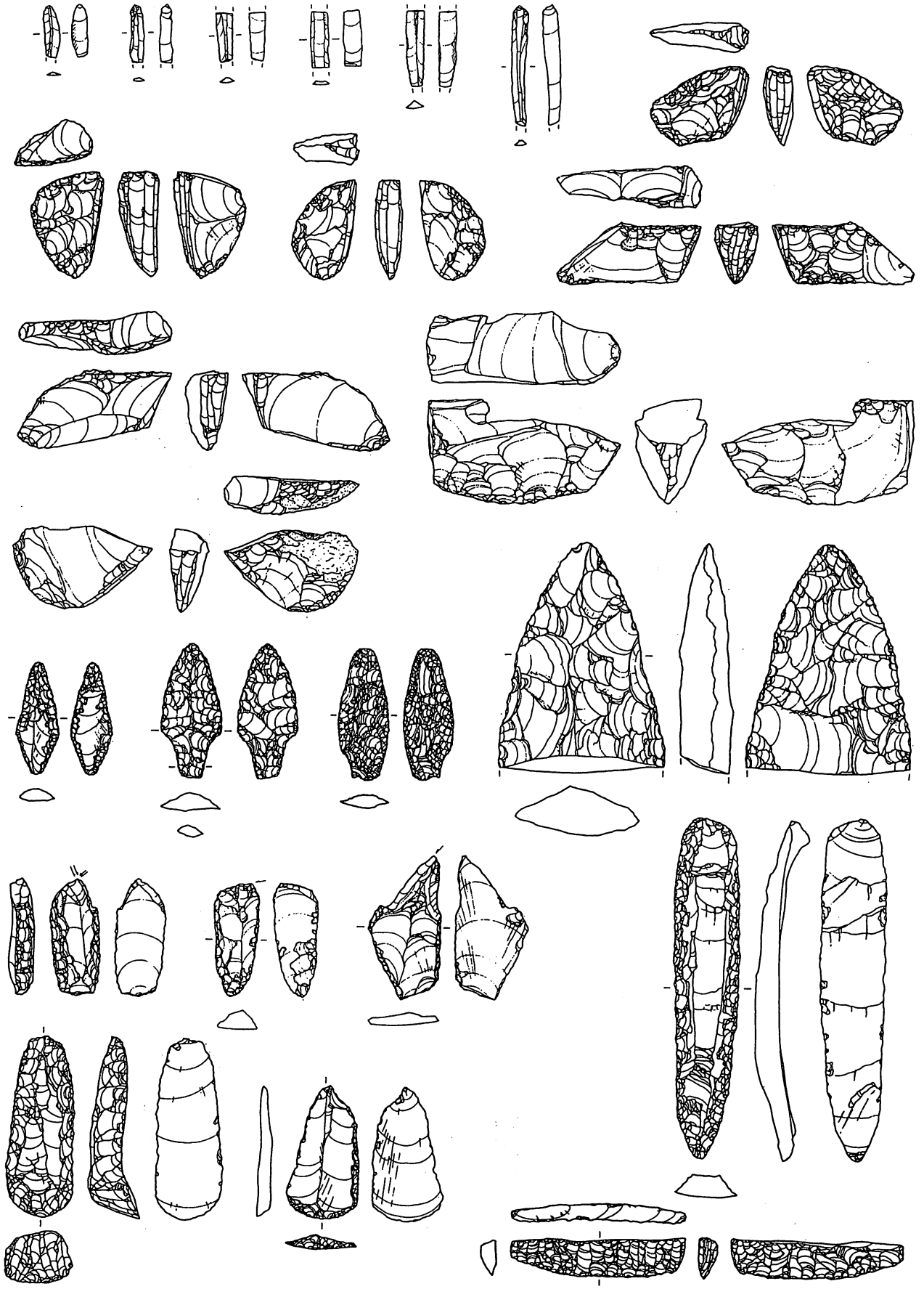
嵐山２遺跡

図 16　北海道西部の細石刃文化の石器



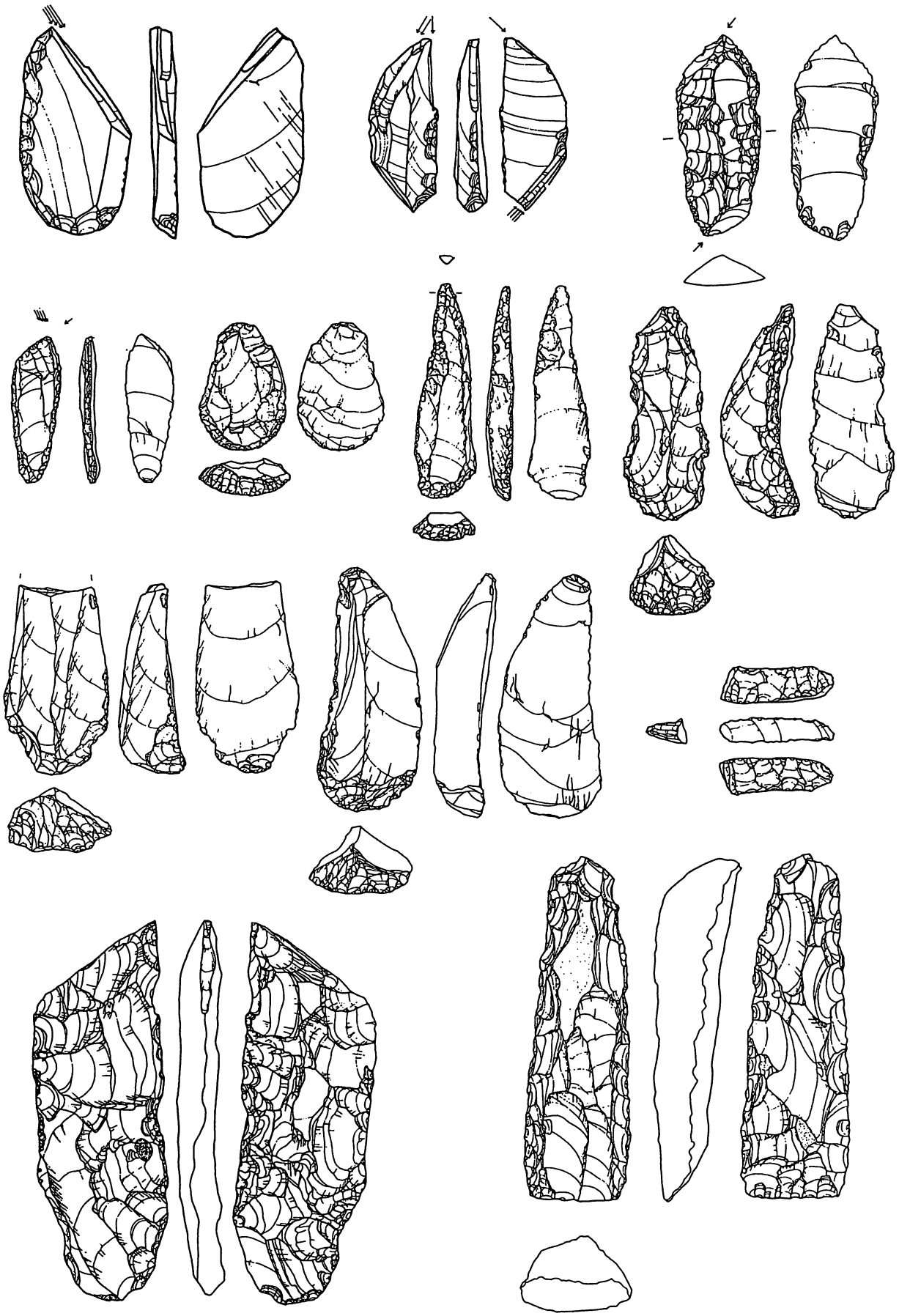
日東遺跡

図 17　北海道西部の細石刃文化の石器



西町１遺跡

図 18　北海道西部の細石刃文化の石器



モサンル遺跡

図 19　北海道西部の細石刃文化の石器

表１　北海道西部の細石刃遺跡一覧表

No.	遺跡名	細石刃	細石核	両面調整石器	削器	掻器	彫器	錐	模形石器	ノッチ	楔形石器	舟底	石刃	打斧	局磨	磨製	ナイフ形石器	台形	尖頭器	有舌	剥片	剥片	石核	石器未	礫物	垂飾	土製	総計	集中	遺構	発掘	標高	地域	細石刃検型式
1	鍋の里４	533	15	6	20	21	20	9				3	○			1	2		20	4	○	○	○	○		5	約20,000	4	墓1	有	30	渡島半島南部	蘭越型、峠下型、幌加型
2	新道４	951	88		3	3	3						83			15					416	22,335	39					23,939	2		有	16	渡島半島南部	峠下型、美利河型、幌加型
3	石川１	88	2	17	26	4	23	8								3			10		273	8,301	7					8,762	7		有	35	渡島半島南部	白滝型？
4	富里Ｂ		○		○	○	○					○	○									○								無	100	渡島半島南部	幌加型？
5	富里		1		6	1	2					1	9									1					21			有	60	渡島半島南部	蘭越型
6	大開校庭	63	3	15	56	15	2	4					218						5			7,742	46				8,169			有	70	渡島半島北部	忍路子型
7	上八雲１（ﾄﾘﾍﾞﾂA,B）	○	○																											有	75	渡島半島北部	峠下型、忍路子型
8	神丘８	○					○						○																	無	45	渡島半島北部	
9	神丘７	○	○		○	○	○	○																						有	50	渡島半島北部	札滑型
10	美利河１（A,B地点）	1,107	30	29	137	39	88	18				46	804	5		65			53			105,872	198		7		109,498	13		有	155	渡島半島北部	峠下型、美利河型、蘭越型、広郷型
	美利河１（C地点）	○	○		○	○	○	○					○									○	○				約12,230			有	180	渡島半島北部	広郷型
	ピリカ（D地点）	490	13	14	29	8	23	5	1	7	1		900			5			25		128	27,392	101				29,145	4		有	135	渡島半島北部	峠下型
	ピリカ（E地点）	73	2	2	5	11	10	3	5	4	4		115	2		4			3		33	15,964	45		14	6	16,306			有	150	渡島半島北部	忍路子型、広郷型
	美利河１（K地点）	○	○		○	○	○						○	○	○							○	○							有	180	渡島半島北部	広郷型
11	美利河２		○			○													○											無	160	渡島半島北部	蘭越型？
12	オバルベツ２（保護協会）	2			3		2	2					110					8	3		1	1,331	4	6			1,513	5		有	7	渡島半島北部	蘭越型
	オバルベツ２（町教委第Ⅰ地点）	455	21		8	7	8	2		1			93								89	2,403					3,087	1		有	9	渡島半島北部	蘭越型
	オバルベツ２（町教委第Ⅱ地点）	242	11		8	1	9	1		1	1	1	81			2					55	1,527	7		3		1,950	9		有	9	渡島半島北部	蘭越型、峠下型、美利河型
13	黒松内４		○		○																○	○								無	45	渡島半島北部	峠下型
14	西ノ沢１	○																												無	55	渡島半島北部	
15	目名５	○	○																											無	40	渡島半島北部	峠下型
16	目名２	○				○	○																							無	15	渡島半島北部	
17	立川１	29	2			11	6					3	35			3	2					223					314			有	120	尻別川流域	蘭越型、忍路子型
18	昆布西１	○	○																											無	80	尻別川流域	紅葉山型
19	西富	○	○		○	○													○											有	50	尻別川流域	蘭越型
20	相馬９		○																											無	140	尻別川流域	
21	宮田７	○	○																											無	175	尻別川流域	
22	峠下１	1	7				1	2											1						2		14			有	220	尻別川流域	峠下型、白滝型、紅葉山型
23	学校平	○	○																											無	365	尻別川流域	札滑型
24	瑞穂		○																											無	220	尻別川流域	白滝型
25	曲川２（Loc.28）	○	○		○	○	○												○											無	143	余市・赤井川流域	
26	都（Loc.29）	39	4	8	2	4	1					1	71						25		1	195	4				355			有	213	余市・赤井川流域	蘭越型
	都（道埋文地点）	21	3		3		1						15								7	4,600	13				4,663			有	151	余市・赤井川流域	忍路子型
27	富田（Loc.25）	○	○	○	○	○	○												○		○	○	○							無	185	余市・赤井川流域	広郷型
28	板小屋沢（Loc.4）	○	○		○																									無	175	余市・赤井川流域	
29	Ｓ３５４		1				1																							有	25	石狩低地帯	
30	中島松６		1																								1			有	10	石狩低地帯	忍路子型
31	茂漁４		1			3																7					11			有	6	石狩低地帯	忍路子型
32	ユカンボシＥ５		1				1																				2			有	18	石狩低地帯	
33	ユカンボシＥ10	13	1		3																	26					43			有	17	石狩低地帯	峠下型
34	オサツ16（A地区）	129	5		6		8	3					30								38	2,012					2,260	4	土坑5	有	50	石狩低地帯	峠下型
	オサツ16（B地区）	1,019	90	5	82	174	135	14		8									2			31,123	3				32,503	2		有	50	石狩低地帯	忍路子型
	オサツ16（G地区）	51			5	1																					57	1		有	50	石狩低地帯	
35	キウス５（C地区）	5			7	20	2						5	1								449	2				491	1		有	24	石狩低地帯	
		2											1														3			有	25	石狩低地帯	
36	キウス７	71	4		6	1	9	3					4						1		2	293	1				395	1		有	45	石狩低地帯	峠下型
37	オルイカ２	107	4	2	29	8	6	2													3	570	1				784	2		有	14	石狩低地帯	札滑型
38	丸子山	10			10	40	3	5					7									445	6				525	3		有	22	石狩低地帯	忍路子型
39	メボシ川２	320	17	1	36	97	11	1					160	3		2				3		2,022	2				2,675	4		有	10	石狩低地帯	忍路子型
40	祝梅上層	○	○		○		○																○							有	21	石狩低地帯	忍路子型
41	柏台１（細石刃石器群）	626	5		2	13	4						40									2,631	1	1	42		3,365	7		有	13	石狩低地帯	蘭越型、美利河型
42	静川５		1				2																				3			有	20	石狩低地帯	蘭越型
43	緑丘１		1																											無	65	石狩低地帯	
44	納内３	10	2		1														6	1	14						34			有	165	石狩川上流域	
45	嵐山２	75	8	5	8	21	7					2	2						4		19	1,601					1,752	3		有	120	石狩川上流域	忍路子型
46	旭岡１		○									○	○									○								無	115	石狩川上流域	蘭越型
47	末広８	16	2		4			1					3						1											無	160	石狩川上流域	
48	射的山		4		4	4													3	7										有	150	石狩川上流域	広郷型、白滝型
49	旭岡２	12	1		3	1	3						1																	無	150	石狩川上流域	
50	旭岡５	4	1			11	5					5	18						1		9	404	2				450	2		有	150	石狩川上流域	幌加型
51	日東（道埋文地点）	335	9		3	13	3						27						2		6	2,303					2,702	1		有	365	石狩川上流域	広郷型
52	北鎮		○			○																								有	240	石狩川上流域	
53	母子里３		1			1															1						3			無		天塩川上流域	広郷型
54	日進２	11	○		23	6	8	1						1					4											有	98	天塩川上流域	白滝型、札滑型
55	旭東１		○			○	○												○											有	140	天塩川上流域	
56	朝日１	○	○		○	○	○			○			○						○	○	○	○								有	110	天塩川上流域	
57	北町Ｃ	○	○	○	○	○	○	○					○						○			○								有	200	天塩川上流域	忍路子型
58	佐藤	○	○				○																							有	150	天塩川上流域	
59	高畑	○	○	○	○	○	○					○		○					○				○							有	150	天塩川上流域	峠下型、広郷型
60	西町１	72	10	2	28	22	40					37	517						33	3	10	○	20							有	146	天塩川上流域	峠下型、忍路子型、蘭越型
61	仮ヶ丘	○	○	○		○						○	○						○		○	○	○							有	170	天塩川上流域	峠下型
62	モサンル	○	○	○	○	○	○	○	○					○	○				○	○		○								有	190	天塩川上流域	峠下型、広郷型
63	東町		1		2																						3			有	145	天塩川上流域	峠下型
64	天場寺裏		○																											無	30	その他	峠下型
65	高台	○	○																											有		その他	

東北北部地域の細石刃文化

川口　潤

1　研究の経過

１９６０年代　秋田県東成瀬村大柳沼採集の黒曜石製細石刃石核の紹介（豊島　1967）

１９７１～　大台野遺跡研究グループによる岩手県大台野遺跡の調査および報告。細石刃石器群（Ｉｅ文化層）を検出（菊池　1975他）。

１９７５～　秋田県協和町教育委員会による米ケ森遺跡の第４次、第５次調査および報告。細石刃、細石刃石核を検出（藤原他　1977）。

１９７７～　青森県立郷土館による青森県大平山元Ⅱ・Ⅲ遺跡の調査。Ⅱ遺跡で大平山元技法Ａ・Ｂを提唱、Ⅲ遺跡では野岳休場型細石刃石核を検出（三宅他　1980・81）

１９８０年　吹越遺跡採集の細石刃の紹介（角鹿　1980）。

１９８１年　青森県教委の分布調査により木造町丸山遺跡において黒曜石製細石刃石核を採集。翌８２年、福田友之氏の踏査により同遺跡から頁岩製細石刃石核を採集（福田他　1989）。

１９８１年　秋田市教委による下堤Ｄ遺跡の調査。荒屋型彫刻刀形石器を伴う石器群検出（菅原　1982）。

１９８９～　青森県内諸遺跡出土の黒曜石を産地同定。細石刃関係の資料はいずれも県内産との同定結果が得られる。（藁科他　1989、福田　1990）。

１９８９年　青森県蟹田町教委による大平山元Ⅱ遺跡の発掘調査。湧別技法関連資料を検出（横山　1992）

１９９０年　秋田県教育委員会による八竜町鴨子台遺跡の調査。両面調整石器から得られた稜付き削片を検出。（秋田県教育委員会　1992）

１９９２年　秋田市教委による狸崎Ｂの発掘調査。細石刃石器群検出（秋田市教委　1992）。

１９９３年　岩手県玉山村大橋遺跡採集の細石刃の紹介（高橋他　1993）。

１９９３～　岩手県埋文センターによる金ヶ崎町柏山館跡遺跡の発掘調査。細石刃石器群検出（菊池他　1996）。タール状の付着物のある細石刃も１点確認。

１９９３～　岩手県埋文センターによる湯田町峠山牧場Ⅰ遺跡Ａ地点の発掘調査。細石刃の文化層を含む７枚の文化層を確認（高橋他　1999）。

１９９８年　青森県立郷土館による木造町丸山遺跡の調査。湧別技法関連の石器群検出。（大湯　2000）

１９９８～　青森県五所川原市教委による隠川（２）遺跡の発掘調査。１点の荒屋型彫刻刀形石器を検出。（山口　2000）

１９９９年　岩手県埋文センターによる滝沢村大崎遺跡の発掘調査。細石刃を１点検出（中川他　1999）。

２００１～　岩手県埋文センターによる早坂平遺跡の発掘調査。Ｔｏ－Ｈ下位から荒屋型彫刻刀形石器を含む細石刃石器群検出。（北村他　2002）

2　遺跡の分布

Ａ　青森県　津軽半島脊稜山脈の東側に蟹田川左岸の河岸段丘上に立地する大平山元Ⅱ遺跡・Ⅲ遺跡、西側に丸山遺跡、隠川（２）が所在する。各遺跡の標高はそれぞれ約２５m、３０m、１５m、５０mである。吹越遺跡は下北半島南部の陸奥湾沿岸の標高約１０mの砂丘地帯において検出されている。

B　秋田県　鴨子台遺跡は八郎潟北岸に近い成合台地と呼ばれる標高３５m前後の海成段丘上、米ケ森遺跡は雄物川支流の荒川流域の君ケ野段丘上に立地する。下堤D遺跡、狸崎遺跡は共に御所野台地上に立地する。前者は台地北部、後者は標高約３５mの台地南西部に位置する。

C　岩手県　大台野遺跡は奥羽山脈の西縁に位置し北上川水系最大の支流である和賀川に合流する鬼ケ瀬川と支流の細内川が形成した標高約２８０mの段丘上に位置する。峠山牧場Ⅰ遺跡A地区は和賀川右岸の標高約３００mの中位段丘面上に、柏山館跡遺跡は井沢川支流永沢川に挟まれた標高約７５mの中位段丘面に位置する。大崎遺跡は北上川右岸の標高約１９０mの丘陵上で確認され、大橋遺跡の資料は北上川支流の丹藤川上流部に作られた標高約７００mの岩洞湖畔で採集したものである。早坂平遺跡は川井川と遠別川によって形成された標高２２０～２４０mの河岸段丘上に位置する。

岩手県内の細石刃文化期の遺跡は東北北部の中にあっては概して標高が高い傾向にある。また、早坂平遺跡の確認により、荒屋型彫刻刀形石器の分布が太平洋側にも及ぶことがわかった。

3　細石刃技法と石材、組成の特徴

A　青森県

大平山元Ⅱ遺跡　a、b、cの各石器文化が認識されている。Ⅱa石器文化は舟底形石器、尖頭器、彫器、ナイフ形石器、掻器、削器、石錐等で構成される。舟底形石器はホロカ技法によるとされる。Ⅱb石器文化は片面加工の尖頭器で特徴付けられる。Ⅱc石器文化は尖頭器、彫器、石核、扇形削片等で構成される。石器製作技術の分析を通じて大平山元技法A、Bが提唱されたが、後者は湧別技法の母体となった可能性が指摘されている。石材のほとんどは頁岩である。１９８９年の調査では細石刃剥離を行わないままに繰り返しスキー状削片を剥離した接合資料が複数検出されている。

大平山元Ⅲ遺跡　a、b、c三つの石器文化が確認されている。Ⅲa石器文化は野岳休場型の範疇で認識できる黒曜石製細石刃石核で特徴付けられるが、表採によるものであり、石器組成は不明である。後の分析によると、黒曜石は県内折腰内産との結果が得られている（藁科他　1989）。Ⅲb石器文化は大平山元技法A、Bによる石器を保有し、Ⅱc石器文化に対比できる。石材は頁岩主体である。

丸山遺跡　非削片系黒曜石製と削片系珪質頁岩製の細石刃石核が１点ずつ採集され、1998年の県立郷土館が実施した発掘調査でも湧別技法との共通性が伺われる資料が出土している。削片系の細石刃石核、削片、掻器、削器等が組成する。黒曜石製の細石刃が１点出土したが、採集で得られたような非削片系の細石刃石核は検出されなかった。削片系のものは採集資料に加えて新たな細石刃石核や削片を得ることができたが、細石刃は検出することができなかった。他時期の遺物の混入が考え難いことから、限定された一時期の石器組成がある程度把握できた例として貴重である。黒曜石は大平山元Ⅲ遺跡同様県内折腰内産との結果が得られている（藁科1989他）。細石刃石核には稜付き削片を素材とした物が含まれるようである。

横浜町吹越遺跡　黒曜石製細石刃５点と頁岩製細石刃９点を含め、２０点の資料が採集されている（角鹿1980）大きさは長さ4.5㎝、幅１㎝を超えるものを含んでおり、細石刃としてみると比較的大形の部類に属する。石錐、彫刻刀形石器様の石器もみられる点は注意される。ただ、石刃鏃文化に属するものではないかとの見方も表明されており（加藤　1993）、再検討の余地が残る。黒曜石は県内深浦産？との結果が得られている（福田　2000）。

B　秋田県

下堤D遺跡　細石刃、彫刻刀形石器、削器、両面調整石器等で構成される。石材は全て頁岩である。両面調整石器とされたものは湧別技法によるものと思われる。細石刃が剥離された痕跡はないが、検出された２点はともに削片が剥離された後の姿を留めている。

狸崎B遺跡　細石刃が組成するⅠ群石器は、細石刃、ナイフ形石器、彫刻刀形石器、掻・削器からなる。

鴨子台遺跡　細石刃は出土していないものの両面調整石器から得られた稜付きの削片、掻器２点等８点の関

連資料が得られている。全て珪質泥岩・頁岩である。

C　岩手県

大台野遺跡　Ｉｅ文化層として認識された石器群は、細石刃、細石刃石核、掻器等で構成される。石材は頁岩が主体を占める。検出された１点の細石刃石核も頁岩製であるが、両設打面の所謂半円錐形のものであり、湧別技法によるものではなさそうである。荒屋型彫刻刀形石器も検出されていない。

大崎遺跡　８８点出土した旧石器時代遺物の中に細石刃が１点含まれている。

大橋遺跡　５５点の細石刃が採集されている。石材は頁岩、粘板岩、チャートである。

柏山館遺跡　Ⅱａ（上）文化層で 11 点の細石刃、チョッパー、ハンマーストーン、台石各１点等が確認されている。細石刃の内１点にはタール状物質が付着していたが、分析の結果はアスファルトではなく、ニカワということであった。

峠山牧場Ⅰ遺跡Ａ地区　旧石器時代の石器集中区が 31 箇所確認され、第１から第７までの文化層に区分されている。細石刃を含むのは第６文化層であり、２つのブロックからなる。細石刃６点と船底形の細石刃石核２点が出土している。石材は珪質凝灰質泥岩と珪質泥岩である。細石刃以外にも豊富な資料に恵まれており、台形様石器主体の第１・第２文化層、掻器を特徴的に保有する第３文化層、ナイフ形石器主体の第４・第５文化層、局部磨製石斧を保有する第７文化層が確認されている。東北北部の旧石器文化の編年を考える上で重要な遺跡であるには違いないが、「特に第３～第５文化層の分離を確定するには、それぞれの文化層と同様の石器群を単独で検出した類例を探し、検証していく研究が必要であろう。」（会田　2000）との指摘もある。細石刃を含む文化層ではないが、分析に供された 61 点の黒曜石の内、60 点は深浦産で、１点のみが男鹿産のものであった（藁科　1999）。

早坂平遺跡　約２万点の石器が出土しており、その中に細石刃関連資料が含まれる。細石刃、細石刃核、荒屋型彫刻刀形石器はＴｏ－Ｈの下位から出土している（北村他　2002）。

4　編　年

東北北部地区における細石刃石器群を年代的に位置づけるには、まだ資料的制約が大きい。

資料数が多い大平山元遺跡群は、Ⅱ遺跡、Ⅲ遺跡ともそれぞれ三つの石器文化に区分されているが、層位や分布からそれを裏付けるのは困難で、概念的な区分である感が否めない。大平山元遺跡群では近年の発掘調査で北海道系のテフラも検出されつつあるが、位置的にテフラの堆積に恵まれない地域であることから、テフラを指標とした編年は組みにくい。

岩手県にはテフラとの関係が把握できる遺跡がある。峠山牧場Ⅰ遺跡Ａ地区では８枚の文化層が識別され、ＡＴとの関係も把握されている。ただ、４０㎝足らずの層厚の中で区分された文化層なので、再検討の余地も残されているように思われる。早坂平遺跡では十和田八戸火山灰（Ｔｏ－Ｈ）を含む層とその直下から「荒屋系細石刃石器群」が出土している（北村他　2002）。Ｔｏ－Ｈの年代は、それに埋積された埋没樹木が各地で検出されている青森県で多数測定されている。ＡＭＳによる放射性炭素年代測定値では 12,380±110～13,080±60ＢＰとの結果が得られており（谷口他　2001）、今後はウイグルマッチングでより正確な年代が得られる可能性もある。青森県長者久保遺跡の石器群はこうした埋没樹木の下位から出土したものであり、「荒屋系細石刃」と「長者久保石器群」は、どちらもＴｏ－Ｈの下位であると言うことはできるが、現段階では層位的にそれ以上言及することはできない。

削片系と非削片系の関係では青森県の様相が興味深い。青森県で削片系細石刃石器群に関連する資料が出土しているのは大平山元遺跡群と丸山遺跡である。どちらの遺跡も削片系が珪質頁岩製、非削片系が県内産黒曜石製である。それぞれの遺跡に異なる二者の細石刃製作技術と石材が存在することになる。この二者の編年的位置づけを探る材料は乏しいが、両者が共存していた可能性は否定しがたいようにも思われる。

5　様　相

青森県の様相を概観してみる。細石刃文化関連の資料は、大平山元Ⅱ・Ⅲ遺跡、丸山遺跡、吹越遺跡、隠川（2）遺跡等で出土している。大平山元Ⅱ・Ⅲ遺跡では、舟底形石器や大平山元技法Bによる石核が確認されている。技法Bは湧別技法の母体となったとの見解も示されているが、両遺跡からは湧別技法そのものを示す細石刃や石核は出土していない。湧別技法に関連した接合資料は、大平山元Ⅱ遺跡の 1989 年の調査でも複数得られている（横山 1992）。それらは両面調整のブランクから複数本のスキー状削片を剥離する点では湧別技法と共通するものであるが、細石刃は剥離していない。この時の調査では他に荒屋型の範疇で捉えられる彫刻刀形石器も出土しており、石器製作技術だけではなく、石器組成の面からも湧別技法との共通性が伺われる。荒屋型彫刻刀形石器は隠川（2）遺跡の調査でも１点出土している（山口　2000）。

1998 年に県立郷土館が実施した丸山遺跡の発掘調査で出土した資料も湧別技法との共通性を伺うことができるものである。細石刃石核、削片、掻器、削器等が出土しているが、削片系頁岩製の細石刃は検出されていない。青森県内の削片系細石刃関連資料は湧別技法と共通する要素が強いものの、典型的な湧別技法とは異なった様相を示し、それにより剥離された細石刃は確認できていない。大平山元Ⅱ遺跡のように細石刃剥離にまで至らないものと、丸山遺跡のように細石刃石核に細石刃剥離痕が見られるものの細石刃が検出されない遺跡がある。調査上の問題である可能性もなくはないが、遺跡内に細石刃がほとんど残されないという特徴を読みとることもできそうである。

丸山遺跡発掘調査の契機となったのは採集された２点の細石刃石核であった。１点は珪質頁岩製の削片系、もう１点は黒曜石製の非削片系のものである。それ以前に大平山元Ⅲ遺跡でも丸山遺跡同様黒曜石製の非削片系細石刃石核が採集されており、野岳・休場型の範疇に属するものとして西南日本との関連が指摘されている（三宅 1981）。大平山元遺跡群でも削片系細石刃関連資料が出土していることから、丸山遺跡の発掘調査ではそうした異なる二者の技術、形態の細石刃関連資料の関係を把握することに主眼がおかれた。調査の結果、両者を明確に区分する根拠は得られておらず、共存していた可能性も比定できない。こうしたありかたも青森県の特徴の一つと言えるのかも知れない。黒曜石の原産地が注目されるところであったが、その後の分析で両遺跡とも県内産黒曜石を使用したものであることが判明した（福田 1990）。

これら以外に細石刃文化関連の資料として紹介された石器が青森県内にはいくつかある。今別町山崎遺跡からは湧別技法の可能性が考えられる黒曜石製の削片と頁岩製の舟底形石器が報告されている（畠山、小笠原他 1982）が、これらは技術的、層位的に再検討の余地がある。また、蓬田村瀬辺地遺跡採集の石器が「細石刃様石片」として報告され（大高　1972）、県立郷土館の風韻堂コレクションに納められている。実見したところ、平面形は細石刃的であっても、剥離面の構成や剥離の方向から判断すると細石刃とは言えないように思われる。

6　研究の課題

バイカル湖周辺から、サハリン、北海道を経由して本州に入ってきたと考えられる細石刃石器群をしばしば「北方系細石刃石器群」という（佐藤　2002 他）。「北海道から本州に入ってきた」と簡単に言い放っても特に違和感なく受け止められがちだが、いつどのように入ってきたかは明確ではない。

北海道の細石刃文化が本州に波及したのは少なくとも最終氷期最寒冷期を過ぎてからのことであろう。その最終氷期最寒冷期ですら陸続きとはならなかった可能性の高い津軽海峡を、「北方系細石刃石器群」はどのように越えてきたのであろうか。陸橋がない場合でも氷橋の存在は十分想定しうる。しかし、北海道と東北北部の細石刃文化の様相を較べると、容易ならざる存在として津軽海峡が横たわっていたことを伺い知ることができる。

北海道の細石刃文化期の遺跡は、その最南端の新道４遺跡や湯の里４遺跡に至ってもあくまで北海道的であるのに対し、東北北部の遺跡では少なからず北海道的要素が欠落する。それが端的に表れるのは黒曜石である。

例えば函館市の石川１遺跡で検出された黒曜石は白滝産であり、それより南の木古内町新道４遺跡の黒曜石は赤井川産である。最南端の知内町湯の里４遺跡の黒曜石は十勝産７５％、白滝産１３％、赤井川産６％である（寺

崎・長沼　1993)。これに対し、青森県内の旧石器時代遺跡から出土した黒曜石は、細石刃文化期のものも含め全て深浦をはじめとした県内産の黒曜石である。岩手県でも峠山牧場Ⅰ遺跡A地点で分析に供された黒曜石は1点が男鹿産で他は深浦産であった。

青森県内に限って黒曜石の動向をみると、旧石器時代から縄文時代草創期・早期にかけては深浦産が主体であり、縄文時代前期中葉以後に出来島産（木造町）黒曜石の利用が認められるようになる。県内産黒曜石が海峡を越えて北海道に渡るのは縄文時代早期中葉以後、逆に北海道から海峡を越えてもたらされた黒曜石を確認できるのはそれより後の縄文時代早期末ことであり、旧石器時代の例は確認できていない。最初に海峡を越えたのは本州側からが早期中葉の深浦産であり、北海道側からが早期末の赤井川産ということになる（福田1999他)。

白滝産黒曜石に着目してみると、細石刃文化期には石川1遺跡や湯の里4遺跡など北海道南端の遺跡でも確認することができる。以後縄文時代においても早期中葉の函館市中野A・B遺跡、中期後半の松前町寺町貝塚など晩期の遺跡に至るまでその利用を追跡することができる（福田　1999)。即ち、白滝産黒曜石は、細石刃文化期以後縄文時代各期にわたって繰り返し北海道南端にまで供給されつづけていたのである。にも関わらず津軽海峡を越えて青森県に白滝産が入り込んだのを確認できるのは縄文時代前期中葉のことである。一旦入り込んだ後は各期にわたって追跡することができるが、細石刃文化期を含めた縄文前期前葉以前はそれを確認することはできない。一方、目を北に転じると、白滝産を始めとした北海道産黒曜石は、細石刃文化の段階でも宗谷海峡を越えたサハリンのソコル遺跡や間宮海峡を越えた沿海州の遺跡でも確認することができる。サハリン南部のアゴンキ5遺跡では完新世に至っても北海道産黒曜石が多く出土するという（木村　1998)。宗谷海峡では海峡成立以前においても以後においても人や物の動きが一方的なものではなかったことがわかる。

他県の例は調べを尽くしていないが、こうした黒曜石の動向を見る限りにおいて、細石刃文化期の津軽海峡は間宮海峡や宗谷海峡に較べると大きな障壁だった可能性が考えられる。

細石刃製作技術をみても、新道4遺跡や湯の里4遺跡までは峠下型が明確に存在し、蘭越型の要素も湯の里4遺跡まで確認できる。所謂立川ポイントも湯の里4遺跡で出土している。これに対し、本州側では札骨型・白滝型や幌加型の範疇で認識しうる資料はあっても、蘭越型、オショロッコ型、美利河型などは確認できない。一部資料に峠下型を見いだす見方もあるが（加藤　1990、栗島　1993)、さらなる検討が必要であろう。

このようにみると、一口に「北海道から本州に入ってきた」といっても、北海道から本州に波及したのは極めて限定的な一群になるのではないだろうか。海峡を越えた群と越えなかった群の違いは何を意味するのであろうか。その違いの要因が時期を示唆するものであるならば、それぞれの年代を究明する必要もでてこよう。あわせてその背景も考慮しなければならない。

細石刃文化期における海を挟んだ地域間の黒曜石の流通という点では、神津島産黒曜石の動向も気になる。本州における神津島産黒曜石の存在は、陸橋や氷橋が考えがたいがために舟に結びつけて考えられることが多い。しかし、舟の存在を想定するには、舟の製作技術や航海技術など検討しなければならない課題も多岐にわたる。かつて、青森県内の縄文時代早期の遺跡の黒曜石が神津島産と同定され、後にそれが新たに発見された原産地である北海道豊泉産の黒曜石であることが判明したことがある（藁科@@)。伊豆半島周辺に神津島産類似の未知の原産地が埋もれている可能性も少なからずあるのではなかろうか。旧石器時代の舟が想定できるのであれば、細石刃文化期の津軽海峡を挟んだ地域間の黒曜石や石器製作技術の往来はより緊密なものであってもいいように思われる。

ところで、各地の氷床や湖底堆積物等の分析から、更新世から完新世に向かう過程の中で温暖期を挟んで数度の大きな寒の戻りがあったことが判明している。そうした気候の変動は、津軽海峡を取り巻く環境にどのような影響を与えたのであろうか。少なからず顕れたと思われるその影響と、細石刃石器群や黒曜石の動向がどのように関連するのか、或いは関連しないのか。関連するとすればその年代はいつ頃かも検討しなくてはならない。

また、最古ドリアス期より前の年代測定値が得られている大平山元Ⅰ遺跡や長者久保遺跡と細石刃石器群との関係も究明すべき大きな課題の一つといえよう。

引用文献

会田容弘　2000　「1999年の考古学会の動向　旧石器時代　東北」『考古学ジャーナル』460

秋田市教育委員会　1992　「狸崎Ｂ遺跡」『秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書』

大高　興　1972　「瀬辺地遺跡の細石器様石片について」『うとう』７８

大湯卓二　他　2000　「第２編　木造町丸山遺跡」『東北町長者久保遺跡　木造町丸山遺跡』青森県立郷土館調査報告第44集

角鹿扇三　他　1980　「吹越砂丘遺跡」『角鹿扇三蒐集考古学資料集』

加藤晋平　1993

加藤　稔　1990　「東北日本の細石刃核」『考古学古代史論攷』

北村忠昭・米田寛・長村克稔　2002「早坂平遺跡」『第１６回『東北日本の旧石器文化を語る会』予稿集

菊池強一　1975　「大台野遺跡」『日本の旧石器文化』２

菊池強一　他　1996　柏山館跡発掘調査報告書　岩手県発掘調査報告書第２４２集

木村秀明　1998　「マンモスハンティング　－　シベリアと北海道の旧石器文化」『科学』68－４

栗島義昭　1993　「湧別技法の波及　－削片系と在地系の細石刃核について－」『土曜考古』17

斎藤典芳　他　1992　「鴨子台遺跡」『一般国道７号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』

佐藤勝宏　2002　「北方系細石刃石器群を残した人類の行動形態」『考古学研究』４９－１

菅原俊行　他　1982　『秋田市下堤Ｄ遺跡発掘調査報告書』

高橋義介・菊池強一　1999　『峠山牧場Ⅰ遺跡Ａ地区発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第291集

高橋昭治　他1993　「岩手県岩洞湖大橋遺跡の石器群」岩手考古学５

谷口康弘・川口潤　2001　「長者久保・神子柴文化期における土器出現の14Ｃ年代・較正暦年代」『第四紀研究』40－６

寺崎康史・長沼孝　1993　「北海道西部の細石刃文化」『細石刃文化の新たなる展開　Ⅰ』

豊島昂　1967　「先土器文化」『秋田県の考古学』

中川重紀　他　1999　「岩手県滝沢村大崎遺跡調査速報」　第13回『東北日本の旧石器文化を語る会』予稿集

畠山　昇・小笠原幸範　他　1982　『山崎遺跡(1)(2)(3)発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第68集

福田友之　他　1989　「古代人の生活と祭」『岩木山』

福田友之　1990　「津軽海峡の先史文化交流」『考古学古代史論攷』

福田友之　1999　「黒曜石を巡る交流」『海を渡った縄文人』

福田友之　2000　「第２節　黒曜石製石器の産地分析」『東北町長者久保遺跡　木造町丸山遺跡』青森県立郷土館青森県立郷土館調査報告第44集

藤原姫敏　他　1977　『米ケ森遺跡発掘調査報告書』

三宅徹也　他　1980　『大平山元Ⅱ遺跡発掘調査報告書』青森県立郷土館調査報告第８集

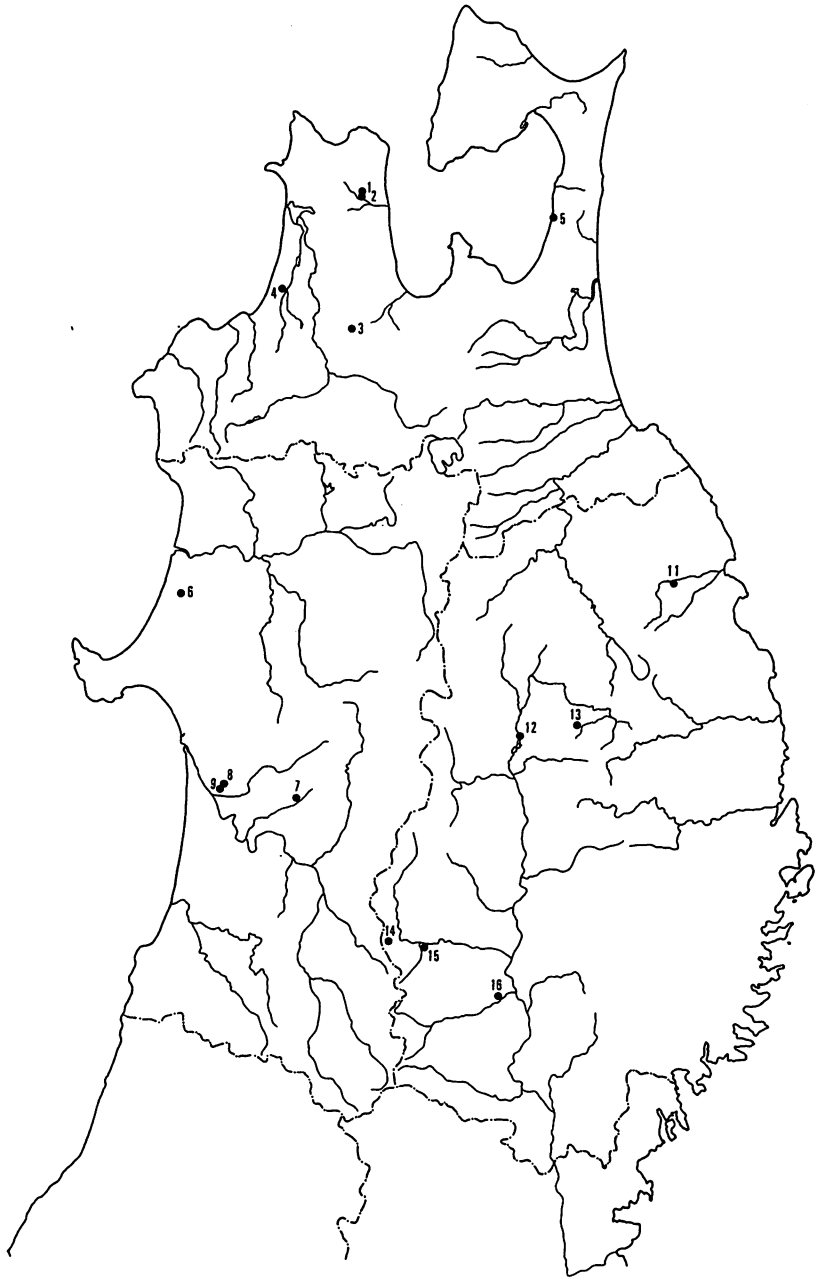
三宅徹也　他　1981　『大平山元Ⅲ遺跡発掘調査報告書』青森県立郷土館調査報告第11集

山口航生2000　「第３節　旧石器時代の出土遺物」『隠川（２）外遺跡発掘調査報告書』五所川原市教育委員会

横山裕平　1992　『大平山元Ⅱ遺跡発掘調査報告書』蟹田町教育委員会

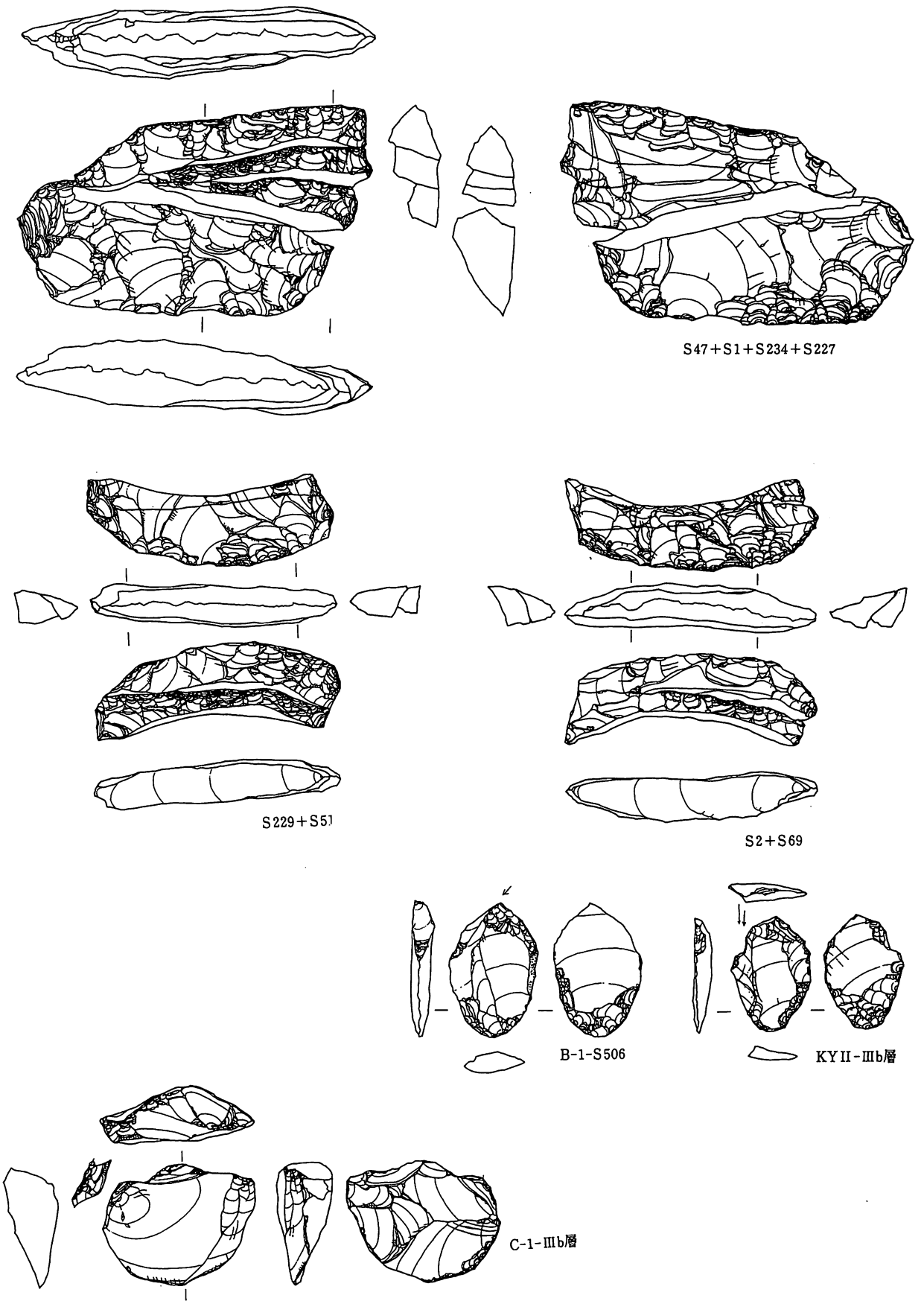
藁科哲男他　1989　「上北郡六ヶ所村表館１遺跡を中心とした青森県内主要遺跡出土の石材産地分析」『表館１遺跡発掘調査報告書Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第１２０集

藁科哲男　1999　「峠山牧場Ⅰ遺跡Ａ地区出土の黒曜石製遺物の石材産地分析」『峠山牧場Ⅰ遺跡Ａ地区発掘調査報告書』

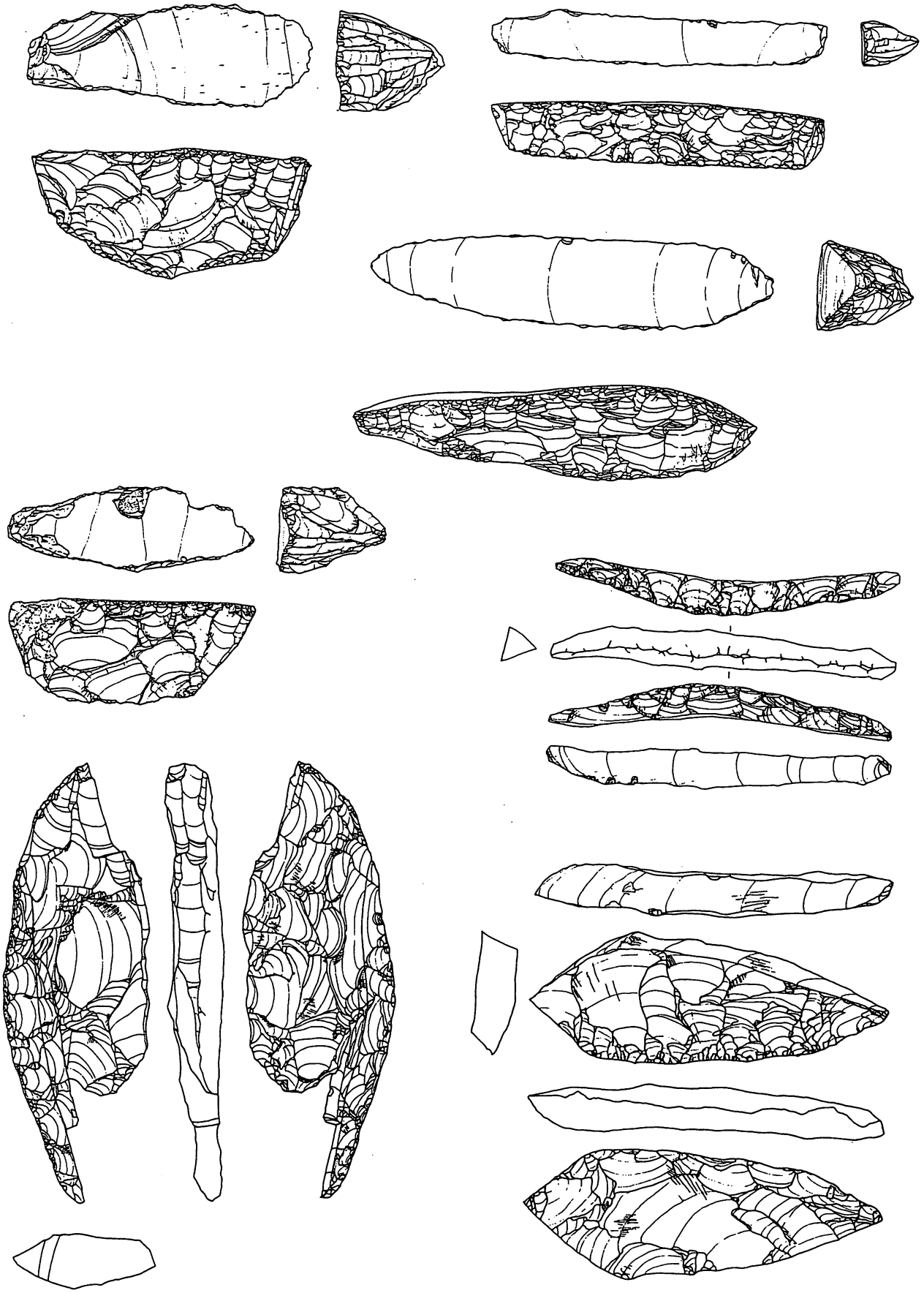


1 大平山元Ⅱ
大平山元Ⅱ
2 大平山元Ⅲ
3 隠川（2）
4 丸山
5 吹越
6 鴨子平（第1群）
7 米ヶ森
8 下堤D（1地区）
9 狸崎B（B区Ⅰ群）
10 大柳沼
11 早坂平
12 大崎
13 大橋（第1地点）
14 大台野（Ⅰe文化層）
15 峠山牧場Ⅰ（第6文化層）
16 柏山館跡（Ⅱa（上）文化層）

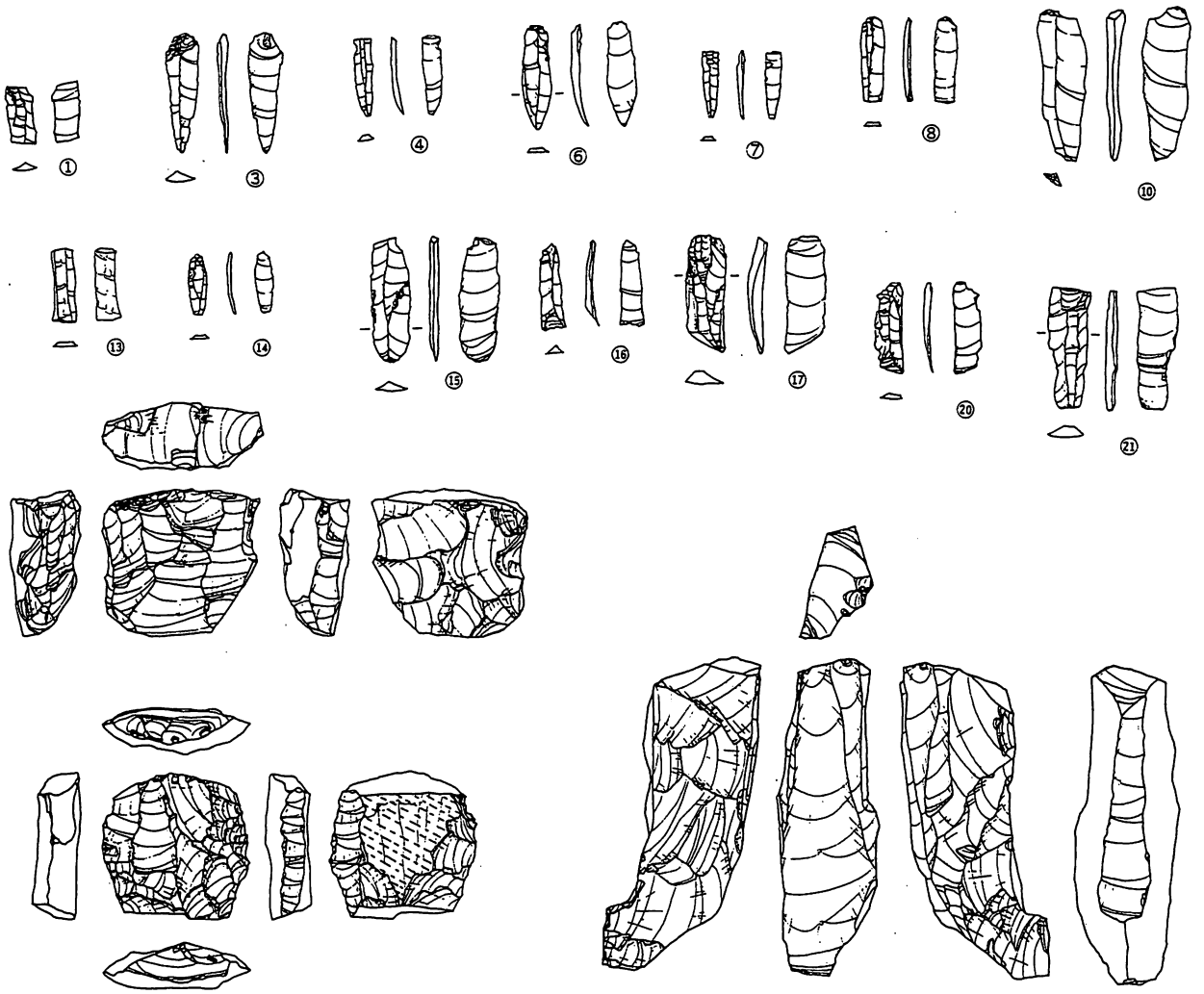
図　東北北部地域の細石刃文化遺跡の分布



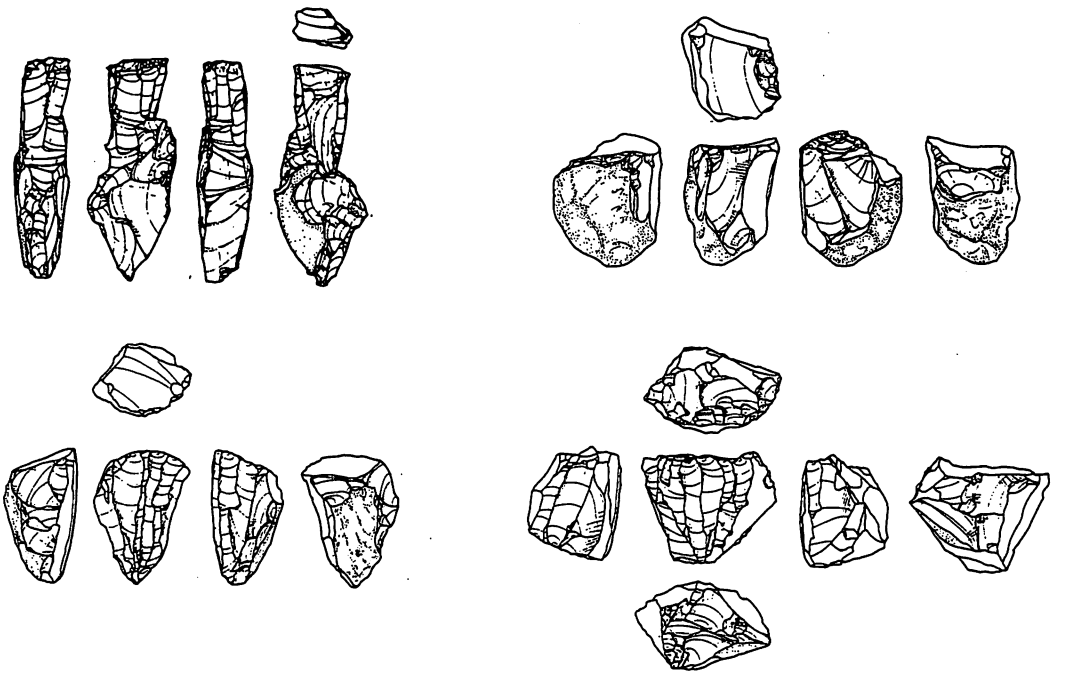
第1図　青森県大平山元Ⅱ遺跡－1（横山　1992）



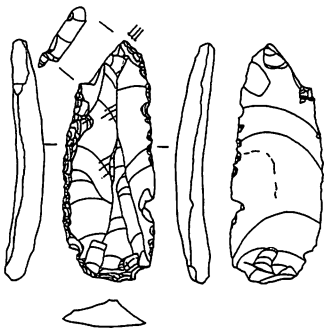
第2図　青森県大平山元Ⅱ遺跡－2(三宅　1980)



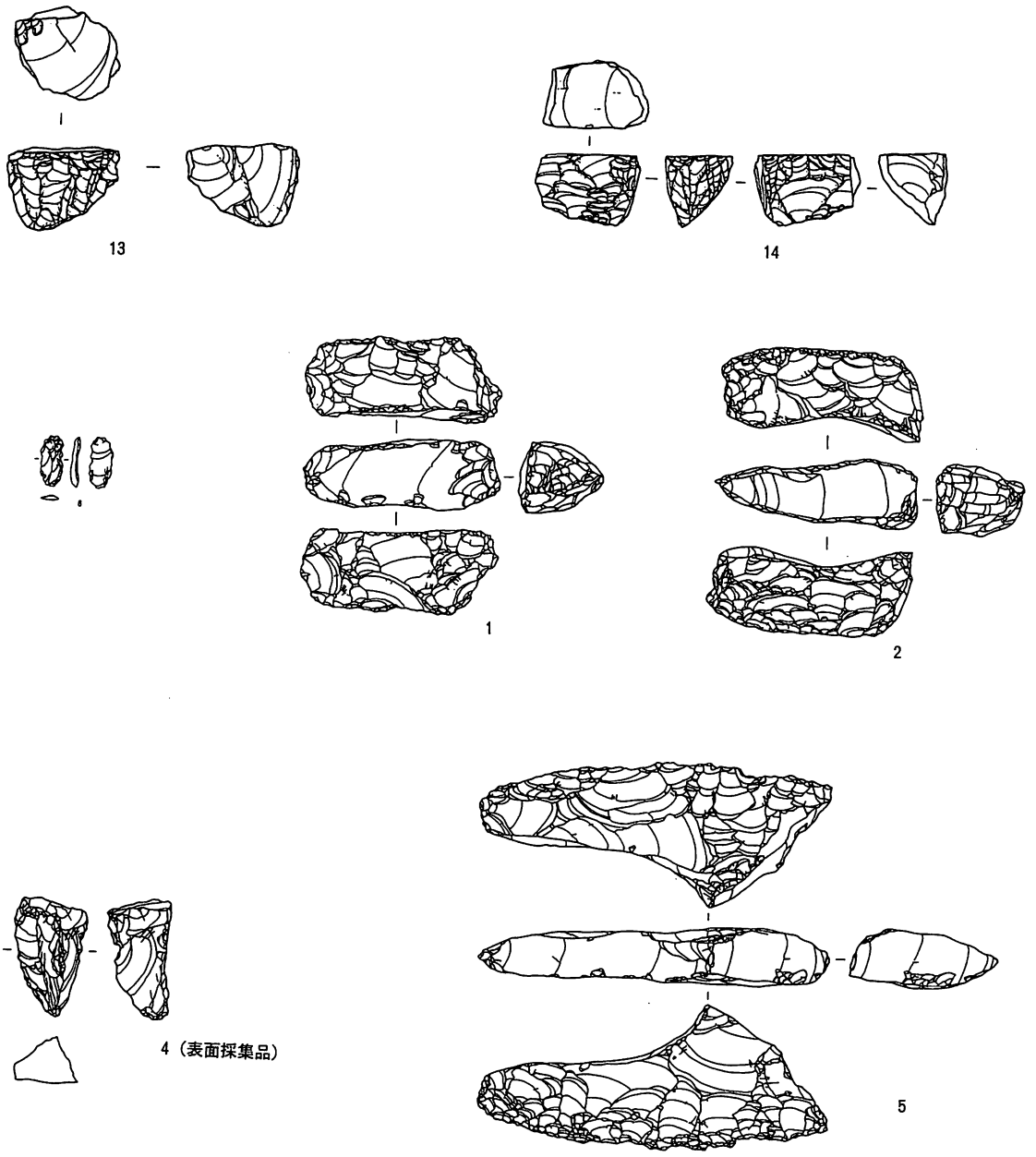
第3図　青森県大平山元Ⅱ遺跡－3(三宅　1980)



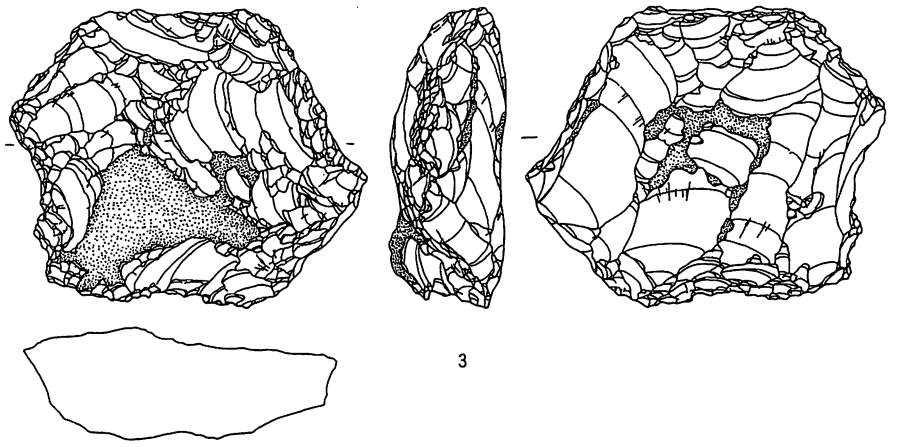
第4図　青森県大平山元Ⅲ遺跡(三宅　1981)

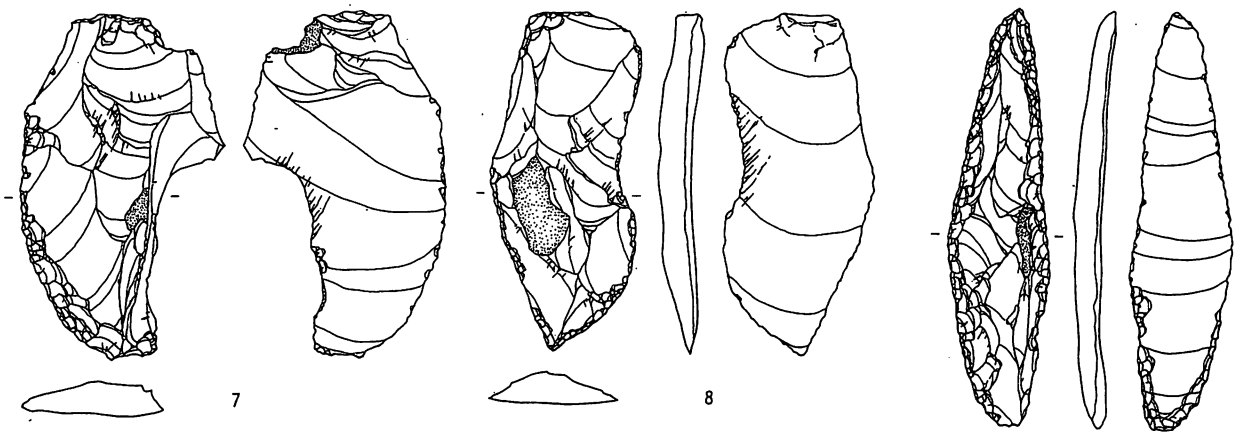


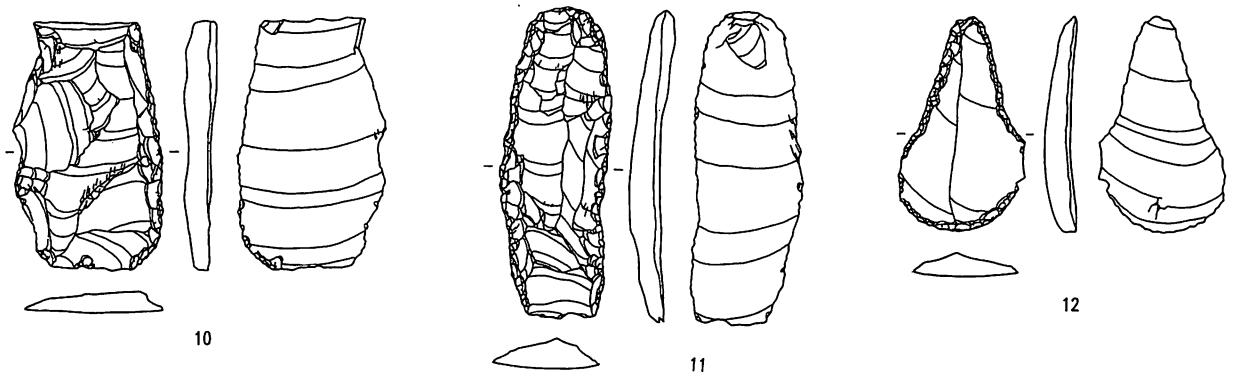
第5図　青森県隠川(2)遺跡(山口　2000)



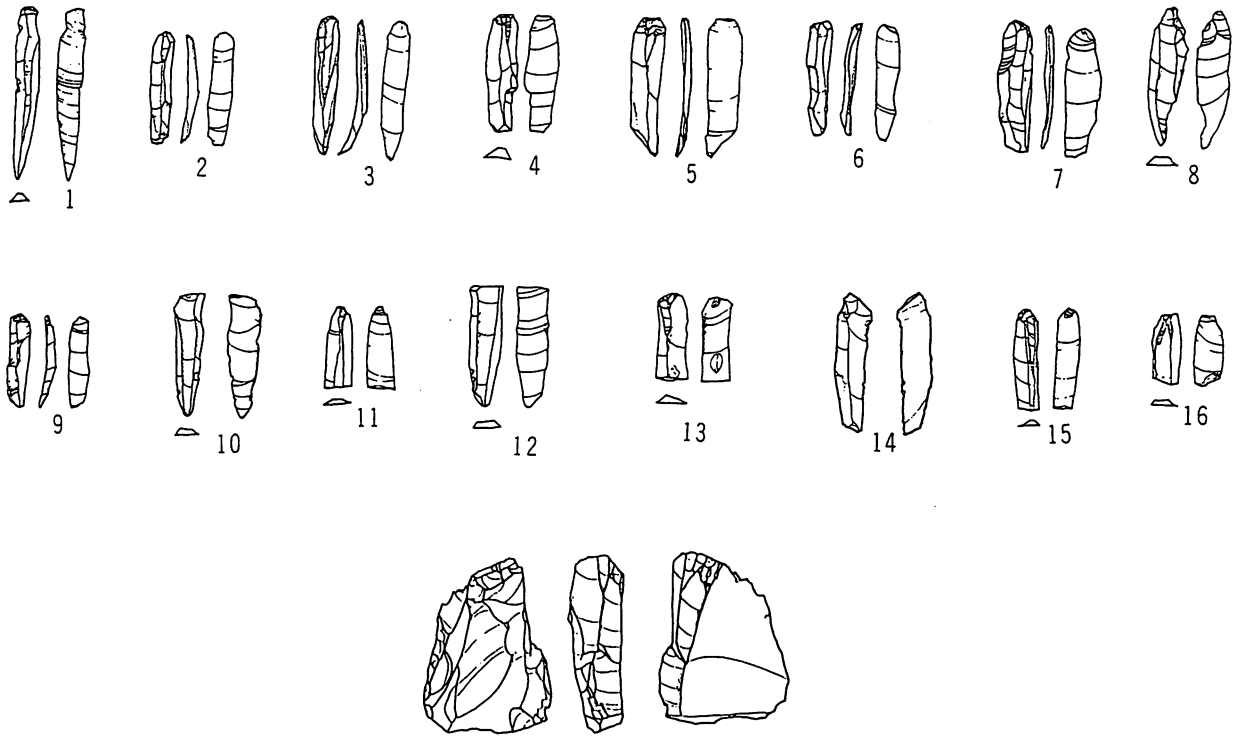
第6図　青森県丸山遺跡－1(大湯　2000)



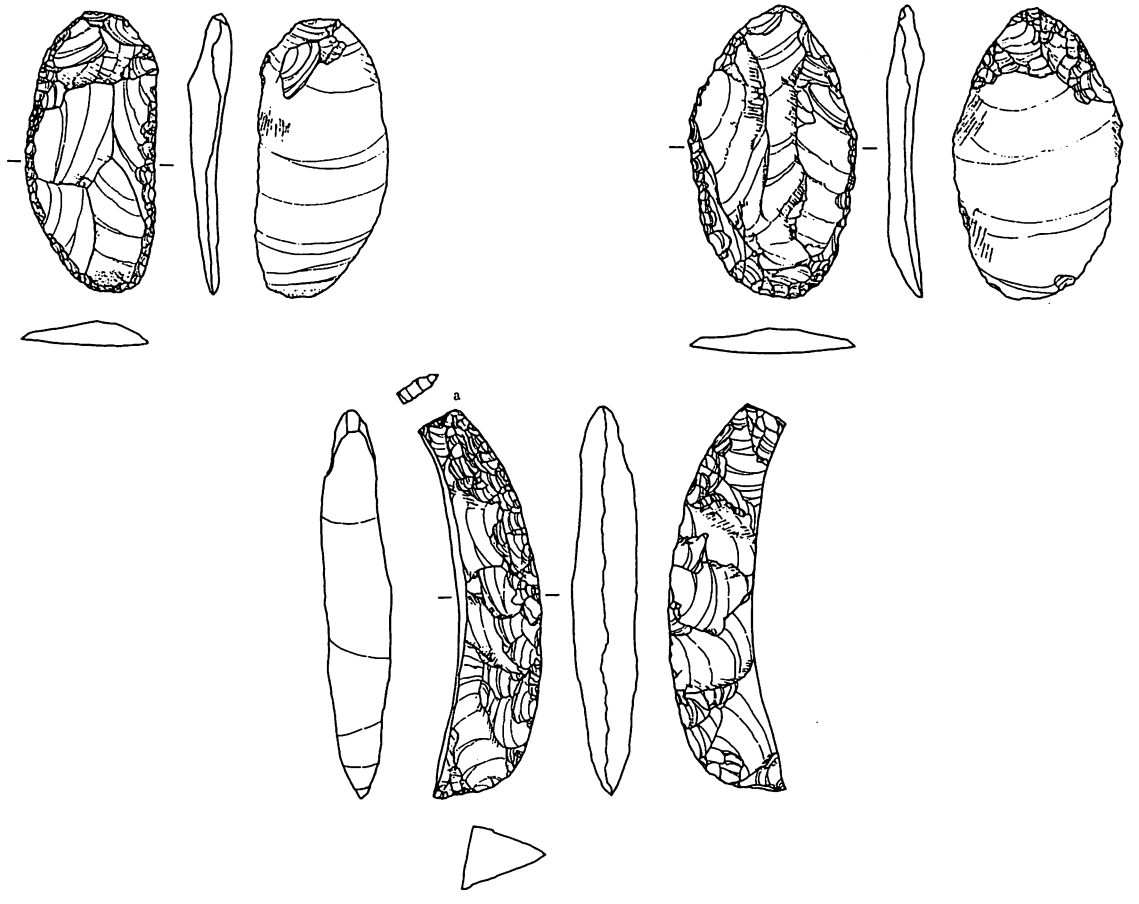




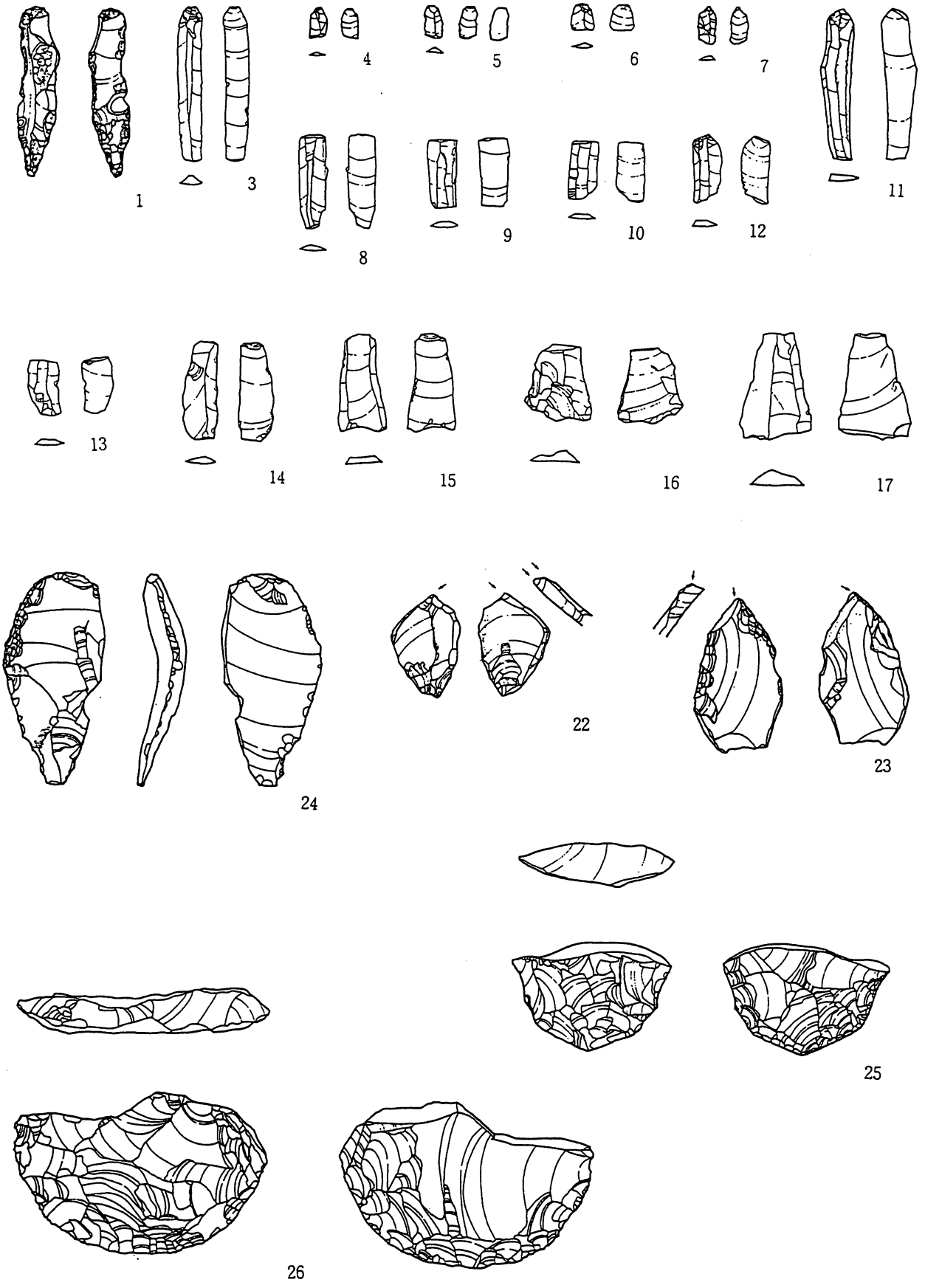
第7図　青森県丸山遺跡－2（大湯　2000）



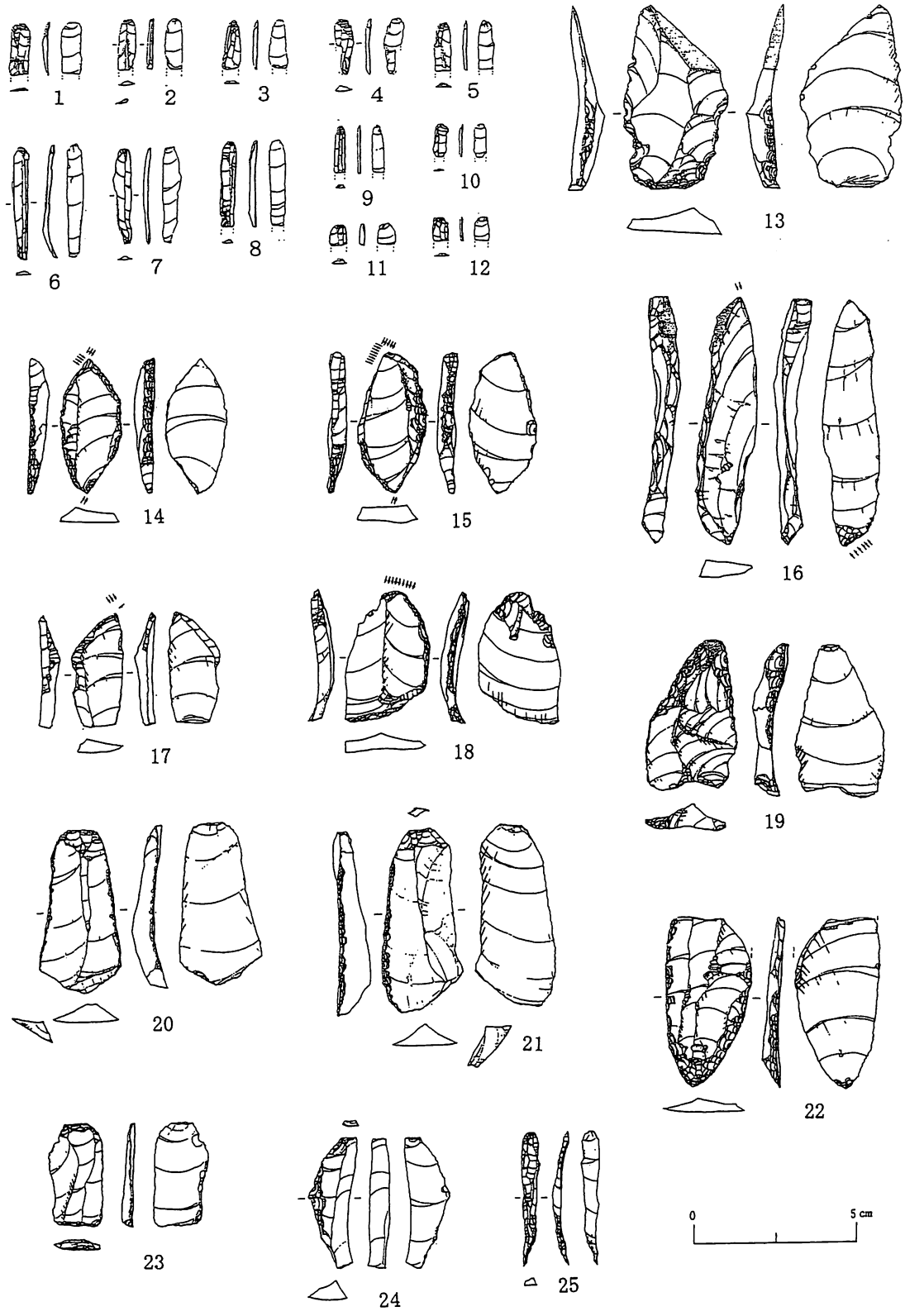
第8図　秋田県米ヶ森遺跡（藤原他　1977）



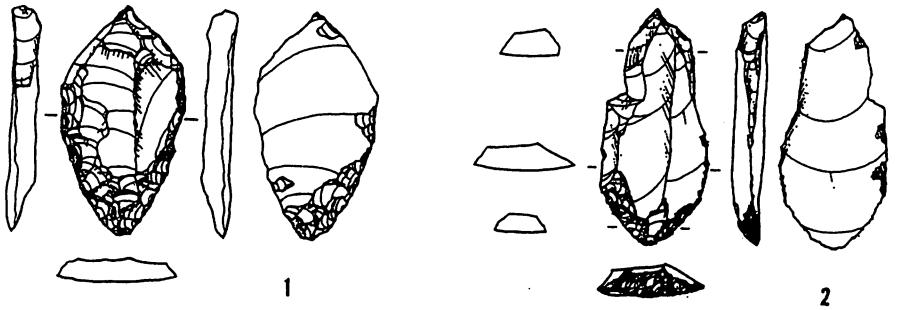
第9図　秋田県鴨子平遺跡（秋田県教委　1992）



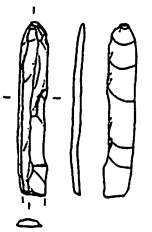
第10図　秋田県下堤D遺跡(菅原　1982)



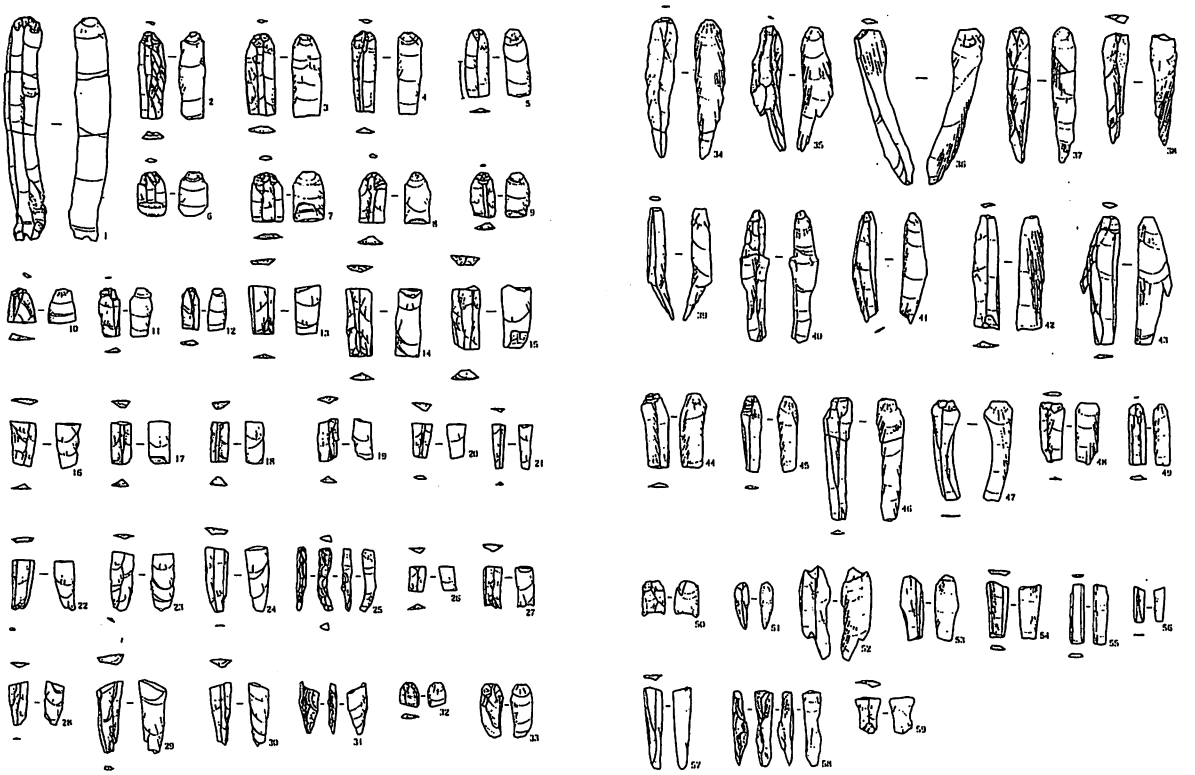
第11図　秋田県狸崎B遺跡(秋田市教委　1992)



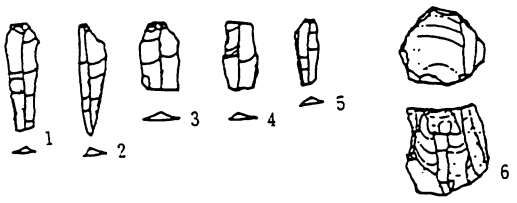
第12図　岩手県早坂平遺跡（北村他　2002）



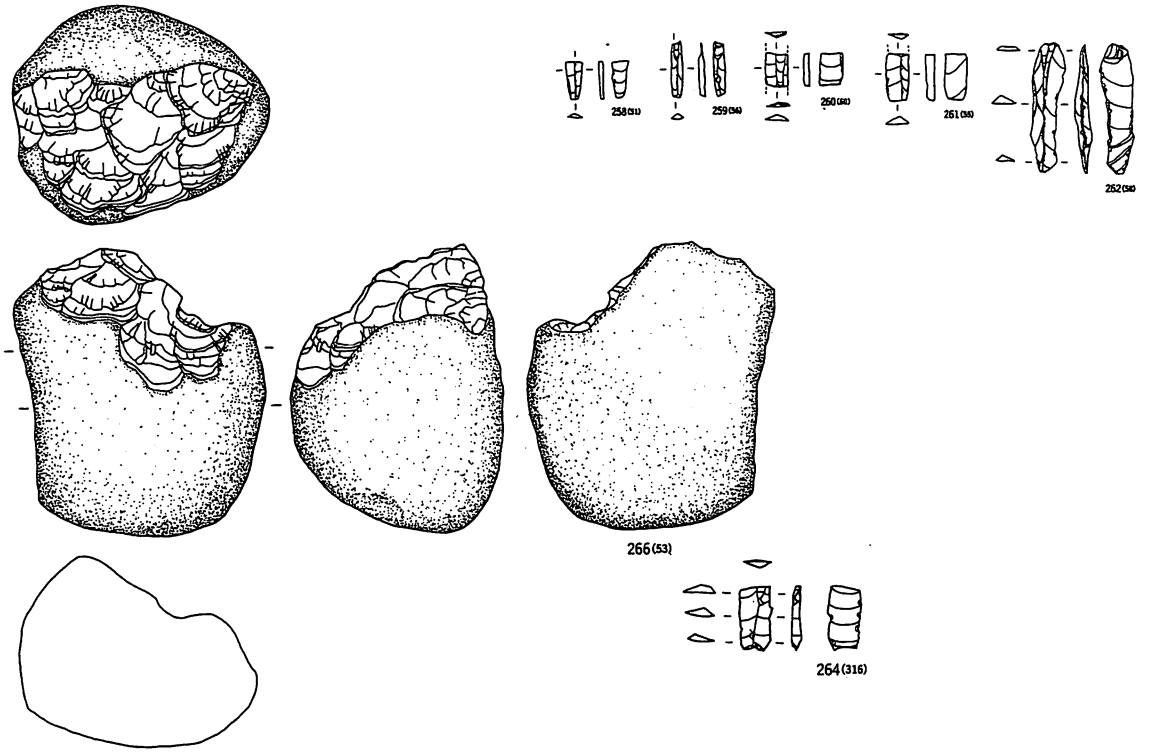
第13図　岩手県大崎遺跡（中川他　1999）



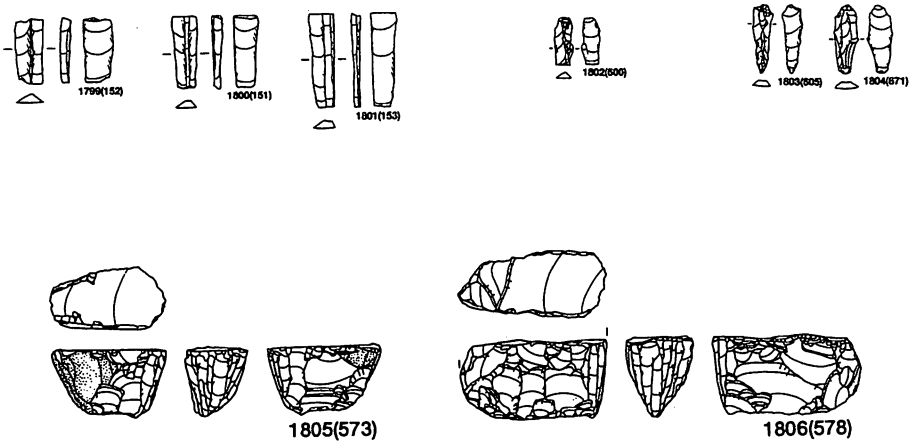
第14図　岩手県大橋遺跡（高橋他　1999）



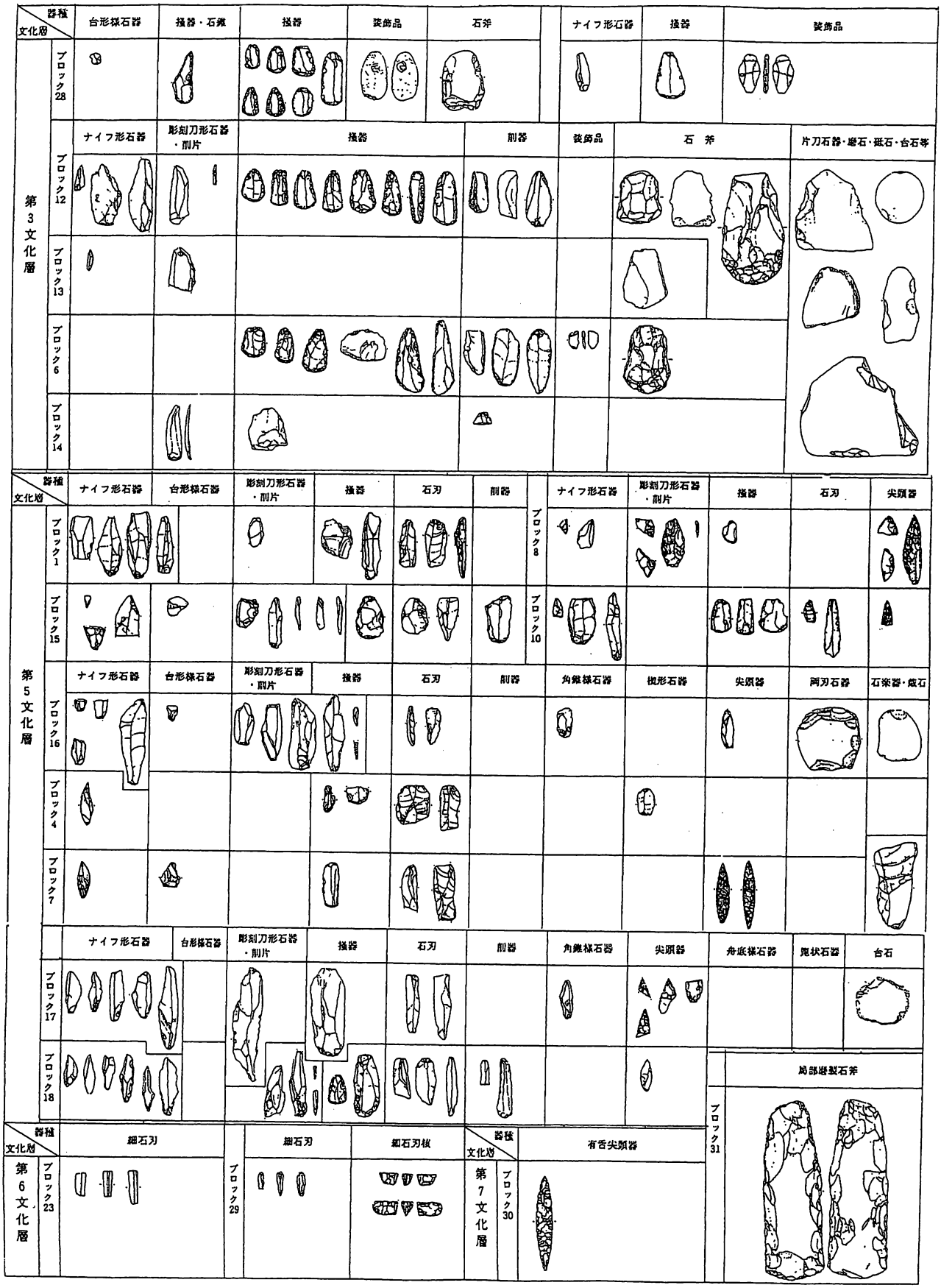
第15図　岩手県大台野遺跡（菊池　1975）



第16図　岩手県柏山館跡遺跡（菊池他　1996）



第17図　岩手県峠山牧場Ⅰ遺跡A地点（高橋他　1999）



第18図　岩手県峠山牧場Ⅰ遺跡A地点の文化層(高橋他　1999を一部省略)

表１　東北北部地域の細石刃文化遺跡一覧表

NO.	遺跡名	組成 細石刃	細石核	削器	掻器	彫器	錐	楔形石器	打製石斧	局部磨製石斧	礫器	磨石	敲石	ナイフ形石器	尖頭器	削片	土器	総計	石器集中	遺構	発掘	標高	地域	年代	文献	備考
1	大平山元Ⅱ	23	12		13	19						1	5	10	22	25					有	25	津軽半島		三宅徹也　他 1980	
	大平山元Ⅱ		○	○	○	○			○				○	○	○			1899			有	25	津軽半島		横山裕平 1992	
2	大平山元Ⅲ		○	○	○	○								○	○			1500以上			有	30	津軽半島		三宅徹也　他 1981	
3	隠川（２）					1												1			有	50	津軽山地西縁		山口航生 2000	
4	丸山	1	4	5	1											1					有	15	津軽半島西部		大湯卓二　他 2000	
5	吹越	14				1	1											20				10	下北半島西縁		角鹿爾三　他 1980	
6	鴨子平（第１群）				2											1		12	５カ所		有	35	八郎潟北岸		斎藤典芳　他 1992	
7	米ヶ森	約30	1																		有		雄物川水系		藤原姫敏　他 1977	
8	下堤Ｄ（１地区）	5	2	1		2								○		○		約250点			有	35	御所野台地		菅原俊行　他 1982	
9	狸崎Ｂ（Ｂ区１群）	○	○	○	○	○															有	35	御所野台地		秋田市教育委員会　1992	
10	大柳沼		1																			560			豊島昂　1967	
11	早坂平	○	○	○	○	○			○				○	○		○			18カ所以上		有	230	県東北部		北村忠昭・米田寛・長村克稔　2002	
12	大崎	1			3	6								5	1			88			有	190	北上川水系		中川重紀　他 1999	
13	大橋（第１地点）	55																			有	700	北上川水系		高橋昭治　他 1993	
14	大台野（Ⅰe文化層）	62	1		3																有	280	北上川水系		菊池強一 1975	
15	峠山牧場Ⅰ（第６文化層）	6	2															8	２カ所		有	300	北上川水系		高橋義介・菊池強一　1999	
16	柏山館跡（Ⅱa（上）文化層）	7									3		2					25	１カ所		有	75	北上川水系		菊池強一　他 1996	ニカワ状物質付着細石刃

東北地方南部の細石刃文化

大場 正善

1 研究の経過

（1911年に山形県寒河江市西覚寺で楔形細石刃核、1918年に同市米沢でファーストスポールが採集される。）

1958年　山形県朝日村越中山遺跡A地点の発掘調査の際、同Dで削片系の楔形細石刃核が採集される。このことにより、東北地方における細石刃文化の存在が加藤稔により確認される。

1960年～　山形県各地で、細石刃文化関連の遺物が採集される（朝日町小松野遺跡、新庄市山屋B遺跡、最上町月楯遺跡、越中山遺跡D、同E、鶴岡市杉ヶ沢A〔高坂〕遺跡）。

1964年　『山形県史考古資料篇』と『山形県の無土器文化』で、山形県各地で採集された旧石器遺物の集成。

1970年　山形県大石田町角二山遺跡の発掘調査。削片系細石刃石器群の遺物が大量に出土する。
越中山Sの第1次発掘調査。

1971年　越中山Sの第2次発掘調査。第1・2次調査で、ホロカ技法をもつ細石刃石器群が確認される。

1973年　山形県小国町湯ノ花遺跡の第1次発掘調査。

1978年　福島県会津若松市小石ヶ浜遺跡で採集されたホロカ型細石刃核、荒屋型彫刻刀形石器などが『福島考古』19で紹介される。

1979年　湯ノ花の第2次発掘調査。

1980年　山形県西川町月山沢遺跡の発掘調査。細石刃、ファーストスポール、槍先形尖頭器が出土する。

1981年　東北歴史資料館で「旧石器時代の東北」展の開催。東北地方の旧石器文化が集成される。

1982年　山形県総合学術調査報告『最上川』で、山形県内の細石刃石器群が集成される。
福島県石川町薬師堂遺跡の発掘調査。細石刃、ホロカ型細石刃核、ナイフ形石器などが出土する。

1983年　越中山S'の第1次発掘調査。細石刃、尖頭器、エンドスクレイパーなどが出土する。
湯ノ花の第3次発掘調査。

1985年　湯ノ花の第4次発掘調査。採集資料と第1～4調査で細石刃、楔形細石刃核・ホロカ型細石刃核、スポール、尖頭器、ナイフ形石器、彫刻刀形石器、エンドスクレイパーなどが確認される。

1989～93年　福島県福島市学壇遺跡群の発掘調査。細石刃、楔形細石刃核、スポール、荒屋型彫刻刀形石器角二山型スクレイパー、ナイフ形石器、尖頭器などが出土する。

1991年　『東北地方の細石刃文化の展開』で、加藤稔により東北地方の細石刃文化期編年案が提示される。

1992年　山形県寒河江市金谷原遺跡で細石刃、楔形細石刃核、舟底形石器などが採集される。

1994年　山形県寒河江市高瀬山遺跡1期地区の発掘調査。ホロカ型細石刃核などが出土する。

1998年　宮城県古川市名生館遺跡の発掘調査。細石刃、荒屋型彫刻刀形石器などが出土する。
福島県白河市一里段A遺跡の発掘調査。楔形細石刃核が出土する。

1999年　福島県会津若松市笹山原No.12遺跡の発掘調査。上層で細石刃、楔形細石刃核？、エンドスクレイパーなどが出土する。

2001年　笹山原No.27で多量の細石刃、剥片の木口を作業面にした細石刃核、楔形細石刃核ブランク、スポール、荒屋型彫刻刀形石器などが採集される。

2002年　笹山原No.27の発掘調査。

2003年　笹山原No.16の発掘調査。ファーストスポールが出土する。

2　遺跡分布と遺跡群の分布傾向

東北地方南部の細石刃文化遺跡は 45 ヶ所を数えるが、北海道や関東・中部地方などに対して少なく、その分布密度も低い。多くは日本海側に偏り、とくに珪質頁岩を多く産出する寒河江川と最上川は東北地方南部でもっとも遺跡が集中する。太平洋側では珪質頁岩があまり産出しない地域にも遺跡があるが、その数は極端に少ない。

ⅰ　宮城県

迫川流域：1 遺跡　花山村大穴山遺跡（第 1 図）は、迫川流域の長崎川と草木川に挟まれた台地に立地する。ここでは、細石刃核と思われるもの 1 点が採集されている。

鳴瀬川・江合川流域：1 遺跡　古川市名生館遺跡（玉造柵擬定地、第 2 図）は江合川南岸の高位段丘南東、岩出山町と古川市の境界付近に位置する。ここでは官衙跡から北西に約 320m 離れた 98 年度の調査地で、肘折－尾花沢軽石層（H－O：約 10000 年前）下位のソフトローム層から、珪質頁岩製の荒屋型彫刻刀形石器を含む 4 点の石器が、ほかに、同一時期とみられる石器 2 点が出土している。また名生館では、以前の調査で H－O 下位から頁岩製の剥片が、表土層から珪質頁岩製の彫刻刀形石器などが出土している。

ⅱ　山形県

月光川・荒瀬川流域：2 遺跡　鳥海山南麓、月光川北岸の遊佐町宮山坂 F 遺跡（第 3 図）では、珪質頁岩製の細石刃、楔形細石刃核、荒屋型彫刻刀形石器などが採集されている。また、荒瀬川南岸の八幡町八森遺跡では、東山型ナイフ形石器群と神子柴長者久保石器群の出土した場所から約 30m 離れた地点で、珪質頁岩製の荒屋型彫刻刀形石器 1 点が出土している。

赤川流域：10 遺跡　庄内平野南端部の、梵字川と赤川の東岸に形成した立石段丘群には、学史的に有名な越中山遺跡群がある。越中山での細石刃文化遺跡は 8 ヶ所が確認されている。細石刃文化遺跡は、高位段丘（GtⅠ面：K、M、O、Q、S、S'地点）と中位段丘（GtⅡ面：D、E 地点）に立地する。ただし、高位段丘に立地する K、O、Q、S'地点から採集された資料は、本来、S 地点のものであった可能性がある。なお、M 地点の正確な場所については、不明である（加藤 1978）。

S 地点（第 10 図）では、発掘調査で珪質頁岩製のホロカ型細石刃核をもつ細石刃石器群が、礫群とともにまとまって出土している。E 地点（第 5 図）では黒耀石製で打面に擦痕をもつホロカ型細石刃核が、Q 地点（第 9 図）では舟底形石器が採集されている。D 地点（第 4 図）では珪質頁岩製の楔形細石刃核が、M（第 6 図）、O 地点（第 7 図）ではファーストスポールが採集されており、削片系細石刃石器群の存在を伺わせる。K（第 8 図）、M、S 地点では荒屋型彫刻刀形石器が、D、E、S'地点（第 11 図）では槍先形尖頭器とともに確認されている。

越中山の対岸に位置する朝日村上野山遺跡（第 22 図）では、楔形細石刃核と考えられるものが採集されている。赤川下流域の庄内平野南部丘陵に位置する鶴岡市杉ヶ沢 A（高坂）遺跡（第 21 図）では、ナイフ形石器、エンドスクレイパーなどとともに頁岩製の舟底形石器 1 点が採集されている。

戸前川流域（新庄盆地）：1 遺跡　新庄盆地を西流する戸前川北岸の新庄市山屋 B 遺跡（第 12 図）では、ナイフ形石器、尖頭器などとともに珪質頁岩製の楔形細石刃核 1 点が採集されている。

小国川流域（最上盆地）：1 遺跡　小国川南岸の最上町月楯遺跡（第 23 図）では、頁岩製の稜柱形細石刃核 1 点が採集されているが、そのほかの遺物は採集されていない。

寒河江川流域：7 遺跡　遺跡数は多いものの、発掘調査でまとまった資料が出土した遺跡は少なく、多くは採集により確認された遺跡である。

寒河江川南岸の西川町月山沢遺跡（第 13 図）では、発掘調査で尖頭器とともに細石刃、ファーストスポールが出土。このほか、楔形細石刃核、スポールが採集されている。石材は珪質頁岩が大半で、一部に玉髄がある。

同川北岸の西川町弓張平公園（第 25 図）では頁岩製のスポールが、同川南岸の寒河江市西覚寺・米沢遺跡（第 27 図）では、明治・大正時代に珪質頁岩製のファーストスポールと楔形細石刃核ブランクが採集されている。同

川北岸の西川町朴木清水遺跡では、珪質頁岩製のホロカ型細石刃核が採集されている（第26図）。

最上川流域：8遺跡　当該地域でもっとも遺跡が集中する地域であるが、寒河江川流域と同様にまとまった資料が出土した遺跡は少ない。最上川中流域東岸の大石田町角二山遺跡（第17～19図）は、丹生川と朧気川に挟まれた尾花沢Ⅰ段丘面の西先端に位置し、遺跡の眼下に最上川をのぞむ。ここでは、発掘調査でH－O下位の粘土層から、削片系細石刃石器群の遺物が大量に出土し、表面採集資料を合わせれば6000点近くに上る。この遺跡では、集中的な石器製作が行われているが、遺跡は石材が入手できる場所から若干離れた地点に立地する。湧別技法による楔形細石刃核のほかには、剥片の木口を作業面にした細石刃核、稜柱形細石刃核が若干ある。また、多数の荒屋型彫刻刀形石器と角二山型スクレイパーが出土している。石材は大半が珪質頁岩・頁岩で、一部に黒耀石、鉄石英などがある。なお、ここでは礫群が確認されている。

同川北岸の寒河江市金谷原遺跡（第15図）では、頁岩製の細石刃、楔形細石刃核、舟底形石器、ファーストスポールなどが採集され、試掘調査でも細石刃が出土している。渋谷孝雄によれば、東根市東根城跡の2001年度発掘調査では楔形細石刃核が出土しているという。

最上川と寒河江川の合流点付近にある寒河江市高瀬山遺跡1期地区（第16図）では、上層から頁岩製のホロカ型細石刃核が出土している。また、寒河江川より北に位置する最上川西岸の河北町奥土入遺跡（第28図）では、珪質頁岩製のホロカ型細石刃核が、最上川と朝日川の合流点付近、現在の上郷ダムの北岸に位置する小松野遺跡（第30図）では、石刃と頁岩製の舟底形石器が採集されている。

立谷川流域：1遺跡　山寺を流れる立谷川と紅葉川の合流点付近に立地する山形市所部遺跡（第29図）では、珪質頁岩製のスポール、角二山型スクレイパー、尖頭器などが採集されている。

荒川流域：1遺跡　小国盆地の東縁、荒川流域の田沢川西岸の河岸段丘上に立地する小国町湯ノ花遺跡（第20図）では、ナイフ形石器と尖頭器とともに、荒屋型彫刻刀形石器を組成しない細石刃石器群がまとまって出土している。この遺跡で採集・出土している細石刃核には楔形、ホロカ型、剥片の木口を作業面にしたものがあり、そのうち黒耀石製の楔形・ホロカ型細石刃核には、打面に擦痕をもつ。この遺跡は、石材が入手できる場所から離れた位置にあり、ナイフ形石器・尖頭器石器群も同様に、遺跡内で石器製作が行われた痕跡はわずかである。石材は珪質頁岩、頁岩、黒耀石、玉髄がある。なお、ここでは礫群と炉址が確認されている。

iii　福島県

浜通り地方：3遺跡　夏井川流域の好間川南岸に立地するいわき市屋敷前遺跡（第32図）では、頁岩製の荒屋型彫刻刀形石器2点が出土している。また、真野川と上真野川との合流点から南に約1.4km離れた鹿島町真野土城跡（第31図）では、頁岩製のファーストスポール1点が採集されている。

阿武隈川流域：3遺跡　阿武隈川の上流域東岸の石川町薬師堂遺跡（第36図）では、切出形ナイフ形石器とともに頁岩製のホロカ型細石刃核（報文中では円錐形の細石刃核：柳田1992）の細石刃石器群が発掘調査により出土。

中流域南岸の福島市学壇遺跡群（第34・35図）ではナイフ形石器、有樋尖頭器、尖頭器、局部磨製石斧などとともに細石刃、楔形細石刃核、スポールを利用した細石刃核、荒屋型彫刻刀形石器、角二山型スクレイパーをもつ削片系細石刃石器群が発掘調査で出土している。石器集中ブロックはV区とVI区で62ヵ所検出され、とくにVI区23号ブロックでは細石刃とスポールがまとまって出土している。石材はほとんどが珪質頁岩である。

中通り地方南端に位置する一里段A遺跡（第33図）では、珪質頁岩製の楔形細石刃核1点が出土している。

猪苗代湖周辺・阿賀川流域：6遺跡　猪苗代湖西岸の大野原段丘に立地する、会津若松市笹山原遺跡群（No.8・12・16・27）に集中する。とくに笹山原No.27遺跡（第41図）では、非在地産の珪質頁岩製と在地産の白色凝灰質頁岩製の細石刃、剥片の木口を作業面にした細石刃核、楔形細石刃核ブランク、スポール、荒屋型彫刻刀形石器、角二山型スクレイパーなどが大量に採集されている。荒屋型彫刻刀形石器の総数は、100点を越えている。ただし、遺跡は以前のほ場整備により破壊されたことが、2002年の発掘調査で確認されている（浅川・高原2002）。頁岩製のホロカ型細石刃核、荒屋型彫刻刀形石器などが採集された小石ヶ浜遺跡（第37図）は、笹山原No.27

の付近と考えられる。また、赤井川の笹山原No.12付近の川底からは、頁岩製のホロカ型細石刃核が採集されている。ほ場整備は、笹山原No.27からNo.12付近まで及んでいるものとみられる。

笹山原No.8北地点（第38図）では、細石刃が採集されている。笹山原No.12（第40図）では発掘調査により、上層の浅間板鼻黄色軽石層（As－YP：約13000～14000年前）に相当する層位から、頁岩製の細石刃、楔形細石刃核？、エンドスクレイパーなどが出土している。會田容弘によれば、笹山原No.16の2003年度の発掘調査でファーストスポールが出土しているという。

会津盆地西縁の北端、阿賀川南岸の会津坂下町鍛冶山遺跡（第39図）では、2号墳の墳丘盛土から珪質頁岩製の荒屋型彫刻刀形石器1点が出土している。

3　細石刃技法と石材

湧別技法とホロカ技法　東北地方南部の細石刃技術は、湧別技法とホロカ技法の2つの技法が基盤となる。その主要な石材は珪質頁岩であり、これについで黒耀石とわずかに玉髄がみられる。珪質頁岩の原産地から離れた場所に位置する名生館、真野土城、学壇などでも、固執して珪質頁岩が用いられている。

角二山の湧別技法の接合資料には、大型の盤状剥片を素材とし、細石刃核の下縁のみ両面加工を施して、未加工部分に打面を作り出しているものがある。笹山原No.27の楔形細石刃核ブランクにも完全に両面加工されていないものがみられる。学壇の楔形細石刃核ブランクは入念に整形されたものではなく、またスポールを細石刃核に利用したものがある。当該地域の湧別技法には、技術的に柔軟なものであったことが考えられる。

越中山Sでは、ホロカ技法の良好な接合資料が得られている。越中山Sの細石刃石器群は、当初、新潟県川口町荒屋遺跡との類似性から「荒屋技法」との関連性が指摘されてきた（上野・加藤1973）。しかし、その見解は石井浩幸により、ホロカ技法をもつ細石刃石器群であると修正されている（石井1986）。

東北地方南部の湧別技法は、細石刃剥離の過程で頻繁に側面調整を施していることが多い（加藤1991）。そのため、笹山原No.12の細石刃核のように楔形かホロカ型か判断に迷うものが少なからず存在する。それは、細石刃核の打面が側面調整に大きく切られることから、打面作出がスポールの剥離によるのか素材剥片の主要剥離面なのかよく判らず、細石刃核型式の決定は、残核形態からの判断だけでは危険をともなうだろう。

黒曜石と細石刃技術　越中山E、角二山、湯ノ花では黒耀石製の細石刃核がある。湯ノ花の楔形・ホロカ型細石刃核と越中山Eのホロカ型細石刃核には、打面に擦痕がみられる。当該地域では、打面に擦痕が施されることが白滝型細石刃核に限定されることはなく、細石刃技術そのものと黒耀石との間に密接な関わりがあったのかもしれない（加藤1991）。會田によれば、湯ノ花の黒耀石製細石刃の打面を顕微鏡観察した際に、擦痕が認められるという。なお、新潟県朝日村樽口遺跡の報告では、湯ノ花採集の黒耀石製石器の産地同定が行われ、秋田県男鹿産との結果が得られている（藁科・東村1996）。

その他の技法　このほか、稜柱形細石刃核、剥片の木口を作業面にした細石刃核がわずかにみられる。これらは、湧別・ホロカ技法をもつ細石刃石器群に混じって出土していることがほとんどである。角二山では、稜柱形細石刃核に珪質頁岩と黒耀石が用いられている。笹山原No.27では、剥片の木口を利用した細石刃核が多い。

細石刃石器群の技術構造　角二山と越中山Sの母岩別分析・接合資料では、細石刃以外のトゥール生産に関わる細石刃石器群の技術構造（山田1986）が解明されている。角二山では細石刃核が準備される過程で剥離された剥片や、スポールがトゥールの素材として供給されている（宇野・上野1975、剣持1979、桜井1992）。学壇でも調整剥片とそれを素材にした角二山型スクレイパーが接合し、これらと同一母岩のスポールがあることから角二山と同じ技術構造が伺われる（西村ほか1995）。ホロカ型細石刃核の接合資料が得られた越中山Sでも、一つの母岩が消費される過程でトゥール類が生産されたことが明らかになっている（石井1986）。

当該地域の細石刃文化の技術構造は、細石刃技術の中に取り込まれていることが多い（橋本1993）。しかし、必ずしもすべてがそうであるとは限らず、角二山では細石刃技術以外に縦長剥片剥離技術が存在し、湯ノ花でも北海道の細石刃石器群や、青森県蟹田町大平山元Ⅱ遺跡、新潟県下田町中土遺跡などと同様に石刃技術がある。

笹山原 No. 27 遺跡の採集資料　これまで、在地産の多種類石材を用いた湧別技法石器群は確認されてこなかった（山田 1999）が、笹山原 No.27 の発見により覆されることになる。笹山原 No.27 で採集された資料からは、少量の非在地産と見られる珪質頁岩製の細石刃石器群とともに、大量の在地産と考えられる白色凝灰質頁岩製の細石刃石器群が確認されている（會田 2001、浅川・高原 2002）。珪質頁岩製の石器は小型で精巧に作られているのに対して、白色凝灰質頁岩製の石器は大型で粗雑である。剥離コントロールの難しい白色凝灰質頁岩の材質によるものかもしれないが、いずれにしても在地と非在地の石材に違いがみて取れる。ただし、採集資料からの見解であるため、両者の関係はどういったものであるのかは、不明である。なお、在地の石材を利用した楔形細石刃核は、その大半がスポールを剥離した段階で終わっている。

4　組成の特徴

東北地方南部の細石刃石器群は、基本的な石器組成として荒屋型彫刻刀形石器、角二山型スクレイパーと、サイドスクレイパー、尖頭状スクレイパー、石錐などがある。ただし湯ノ花、月山沢では、荒屋型彫刻刀形石器と角二山型スクレイパーがない。細石刃核や荒屋型彫刻刀形石器は単独で出土することが多いが、角二山型スクレイパーは単独でみつかることは少ない。細石刃石器群が礫器、局部磨製石斧、有舌尖頭器、土器と共伴した例は、いまのところない。

角二山と湯ノ花のスポールは、彫刻刀形石器などのトゥール素材であり、擦痕をもつものもある。とくに湯ノ花のものは、スポールの腹面に擦痕がある。そのため、スポールは細石刃剥離の副産物ではなく、トゥールの素材に用いられ（桜井 1992）、スポールそのものが何らかの作業に使用されたのであろう。

越中山 S'、月山沢、学壇では尖頭器が細石刃石器群とともに出土し、また越中山 D・E、山屋 B、湯ノ花、笹山原 No.27 では、尖頭器が採集されている。さらに湯ノ花、学壇では石刃素材のナイフ形石器、彫刻刀形石器、エンドスクレイパーなどとともに出土している。

5　編年

東北地方の細石刃文化期編年は、当該地域が層位的に恵まれない地域であるために、北海道の細石刃技術伝統と東北地方のそれとを対比することによって位置づけようとした（上野・加藤 1973、矢島 1979）。加藤稔は、東北地方の細石刃核の型式分類をして、北海道の細石刃核諸型式との対比を行い、東北地方の細石刃文化期編年を提示している（加藤 1990・1991）。その中で加藤は、峠下技法に対比するものと考えている「類峠下技法」を見出し、東北地方の細石刃文化は湧別技法の波及以前に展開し、杉久保型ナイフ形石器をもつ集団と融合した、と考えている。したがって、東北地方の湧別技法の前半段階にいたっても、依然としてナイフ形石器、神山型彫刻刀形石器がともなうものとみている。また、石井浩幸は、その初期に新潟県関川村荒川台遺跡にあるような稜柱形細石刃核にナイフ形石器を組成するものとし、その後、角二山から越中山 S へと変化していくものと考えている。また、後半段階では月山沢、越中山 S'、高瀬山 L（第 16 図）のように、石器組成に占める尖頭器の割合が高いものとみている（石井 1993）。しかし、北海道の細石刃編年と対比する意識が強く、一型式内での変異を一つの型式として認めてしまうきらいがあると思われる。また、型式設定された資料の多くが、採集品であることにも考慮しなくてはならない。さらに、「類峠下技法」とされる石核が出土した福島県東村谷地前 C 遺跡は、ナイフ形石器文化期後半段階に位置づける意見がある（柳田 1992）。

上述した通り、東北地方の細石刃技術は湧別技法とホロカ技法を基調としており、おおむね北海道からの波及が考えられる。しかし、少なくとも峠下・蘭越・オショロッコ・広郷技法の波及はないものと考える。そのため、当該地域での細石刃文化の波及は湧別技法出現以降の、ごく短期間に限定されるものだろう（橋本 1993）。

いずれにしろ石器群の出土層位、テフラ層序との関係、石器群の直接的な上下関係が明らかになってこそ、編年研究が成り立つものと考える（山田 1999）。細石刃文化の編年についても、例外ではない。現段階でテフラ層序との関係が明らかものは角二山、名生館で H－O（町田ほか 1984）の下位からと、笹山原 No.12 で As－YP

（町田ほか 1984）相当から出土している。したがって、東北地方南部の細石刃文化は、少なくとも約 10000～14000 年前のあいだに展開したものと推測する。

6 様相

当該地域の細石刃文化は湧別・ホロカ技法を技術基盤とし、これに荒屋型彫刻刀形石器、角二山型スクレイパー、サイドスクレイパー、尖頭状スクレイパー、石錐などを組成する。ただし、湯ノ花、月山沢では荒屋型彫刻刀形石器、角二山型スクレイパーがみられない。稜柱形細石刃核と剥片の木口を作業面にした細石刃核は、いまのところ削片系・ホロカ技法をもつ細石刃石器群とともに出土することが多く、関東以西にあるような、矢出川技法を主体とした細石刃石器群はない。珪質頁岩以外の在地の石材を用いた削片系細石刃石器群は、笹山原 No.27 のみである。また、湯ノ花、越中山 E では、白滝型または擦痕をもつホロカ型細石刃核がある。湯ノ花の北方約 15km に位置する樽口では、白滝型細石刃核をもつ細石刃石器群がまとまって検出されている。また、両遺跡では、男鹿産の黒耀石が使われていることからも、石材流通や技術的な交流があったものと想定される（藁科・東村 1996）。ただし、これらの石器群の関係については、層位的な裏づけがないため、時期差、集団差、場の性格の違いなのかは不明である。細石刃文化の前段階や後続する段階についても、不明であるといわざるを得ない。

湯ノ花では、細石刃石器群とナイフ形石器石器群が平面分布の上で分かれており、両石器群で共有した母岩もみられない。しかし、垂直分布では両者はほぼ同一のレベルから出土している。したがって、両者の共伴関係については不明であり、同じことは学壇でもいえる。

当該地域の細石刃文化の遺構は 3 例のみで、湯ノ花の調査以降、検出例はない。越中山 S では、ブロックのそばに礫群が検出され、その周辺からは多数のエンドスクレイパーが出土している。角二山では、台石とともに 4m～6m の範囲に分布する礫群が検出され、その周辺からは大量の細石刃が出土している。石器の平面分布からは、2 つの機能が推定されている。湯ノ花の礫群は、1×3mの範囲に分布し、大半が焼けており、焼土や炭化物も検出されていることから、炉址と推定されている。

7 研究の課題

東北地方南部地域の細石刃文化研究は、停滞しているといわれて久しい。1993 年のシンポジウム以降（石井 1993）、10 年が経過しているが、名生館、笹山原 No.12、一里段 A などでの検出、笹山原 No.27 での採集以外の成果はあまりない。それゆえに当該地域の細石刃文化の編年、遺跡・遺跡群構造、石材、環境、生業などに対する研究は、依然として進んでいないのが現状であろう。細石刃石器群の技術全体が復元されたものは少ないため、東北地方の細石刃石器群の技術復元も、今後の課題として残る（石井 1986）。当該地域はいまだ資料蓄積の段階にあるといっても過言ではない。

そのような中にあって、笹山原 No.27 での採集には目を見張るものがある。遺跡自体は破壊されているが、今後猪苗代湖周辺で同じような遺跡が発見され、発掘調査により在地、非在地の石材を用いた細石刃石器群の関係が明らかになることを期待する。

太平洋側、とくに宮城県での検出例は少ない。笹山原 No.27 のような在地の石材に適応した石器群の存在が予想される一方で、いまの現状が当該地域の細石刃文化の本来的な姿なのかもしれない。

（謝辞）　今回、本稿の執筆にあたり、資料見学、情報提供、意見交換などで多くの方々から、ご援助とご教示をいただきました。末筆でありますが、記して謝意を呈します。また、東北地方南部地域の細石刃文化について、取りまとめる機会を与えていただきました諏訪間順・堤　隆両氏に、厚く御礼を申し上げます。
會田容弘・石井浩幸・大川貴弘・鹿又喜隆・川崎利夫・黒坂雅人・小林貴宏・酒井英一・佐川正敏・渋谷孝雄・鈴木　雅・須田良平・高原要輔・武田純子・藤原妃敏・三浦　実・水戸部秀樹・山田晃弘・大石田町立歴史民俗資料館・致道博物館・東北歴史博物館・福島県立博物館・山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館（敬称略）

引用・参考文献（紙数の都合上、すべてを揚げていない）

會田容弘　2001「福島県会津若松市笹山原No.16遺跡」『第15回 東北日本の旧石器文化を語る会予稿集』、pp.144～149。

阿部　司・小島克則　2002「笹山原No.12遺跡」『笹山原遺跡群発掘調査報告書』3、pp.69～109。

天野順陽　1999「名生館遺跡」『名生館遺跡・下草古城本丸跡ほか』宮城県文化財調査報告書181集、pp.1～65。

石井浩幸　1986「越中山遺跡群における細石器文化の探究」『庄内考古学』20、pp.33～50。

石井浩幸　1987「細石器文化の技術基盤と展開」『山大史学』6、pp.14～38。

石井浩幸　1991a「越中山遺跡群における細石器文化の探究Ⅱ」『山形考古』4－4、pp.31～47。

石井浩幸　1992b「山形県寒河江市金谷原遺跡の細石刃石器群」『古代文化』43－12、pp.34～40。

石井浩幸　1993「東北地方南部の細石刃文化」『細石刃文化研究の新たなる展開Ⅰ－列島諸地域における細石刃文化の様相－』pp.322～353。

上野秀一・加藤　稔　1973「東北地方と細石刃技術とその北海道との関連について」『北海道考古学』9、pp.25～50。

宇野修平　1987「寒河江川流域の先土器文化」『西村山の歴史と文化』、pp.74～98。

宇野修平・上野秀一　1975「角二山遺跡」『日本の旧石器文化』2、pp.96～111、雄山閣。

柏倉亮吉　1964『山形県の無土器文化』山形県文化財調査報告書14。

加藤　稔　1969「旧石器時代」『山形県史　資料編』11・考古資料、pp.16～37。

加藤　稔　1975「越中山遺跡」『日本の旧石器文化』2、pp.112～137、雄山閣。

加藤　稔　1982「コメント　山形の細石刃核について」『越中山かわら版』6、pp.24～34。

加藤　稔　1989「東北日本の細石刃核－「湧別技法＝角二山型」以前の諸型式について－」『伊東信雄先生追悼記念論文集』、pp.25～49。

加藤　稔　1992『東北日本の旧石器文化』、雄山閣考古学選書35、雄山閣。

加藤　稔　1991「東北日本の細石刃文化の展開」『山形県立博物館研究報告』12、pp.13～88。

加藤　稔・石井浩幸　1993「越中山遺跡S'地点調査予報」『山形考古』5－1、pp.12～21。

加藤　稔ほか　1982「最上川・荒川流域の細石刃文化」『最上川』山形県総合学術調査報告書、pp.768～819。

剣持みどり　1979「角二山細石刃石器群の構造」『山形考古』3－2、pp.9～26。

酒井忠一・加藤　稔　1973『越中山遺跡の研究序説』。

桜井美枝　1992「細石刃石器群の技術構造－山形県角二山遺跡の分析－」『加藤稔先生還暦記念論文集』、pp.441～462。

佐藤信行　1976「築館町史」、pp.195。

高原要輔・浅川文雄　2002「福島県会津若松市笹山原No.27遺跡」『第16回 東北日本の旧石器文化を語る会予稿集』、pp.93～96。

東北歴史資料館編　1981『旧石器時代の東北』。

東北歴史資料館編　1985『江合川流域の旧石器－宮城県江合川流域旧石器時代遺跡分布調査報告書－』東北歴史資料館資料集14。

西村博之ほか　1995『学壇遺跡群－南福島ニュータウン埋蔵文化財発掘調査報告－』福島市埋蔵文化財報告書第67集。

橋本勝雄　1993「略説・日本細石器文化研究の現状と課題」『史館』24、pp.1～22。

藤原妃敏　1985「日本の旧石器－第9回－　－東北（3）－」『考古学ジャーナル』259、pp.28～31。

藤原妃敏　1987「鍛冶山出土の彫刻刀形石器」『鍛冶山2号墳』会津坂下町文化財調査報告第12集、pp.31。

藤原妃敏　1999『福島県の旧石器時代遺跡』福島県立博物館調査報告書第34集。

宮城県多賀城跡調査研究所編　1983『名生館遺跡Ⅲ』多賀城関連遺跡発掘調査報告書第8冊、pp.49。

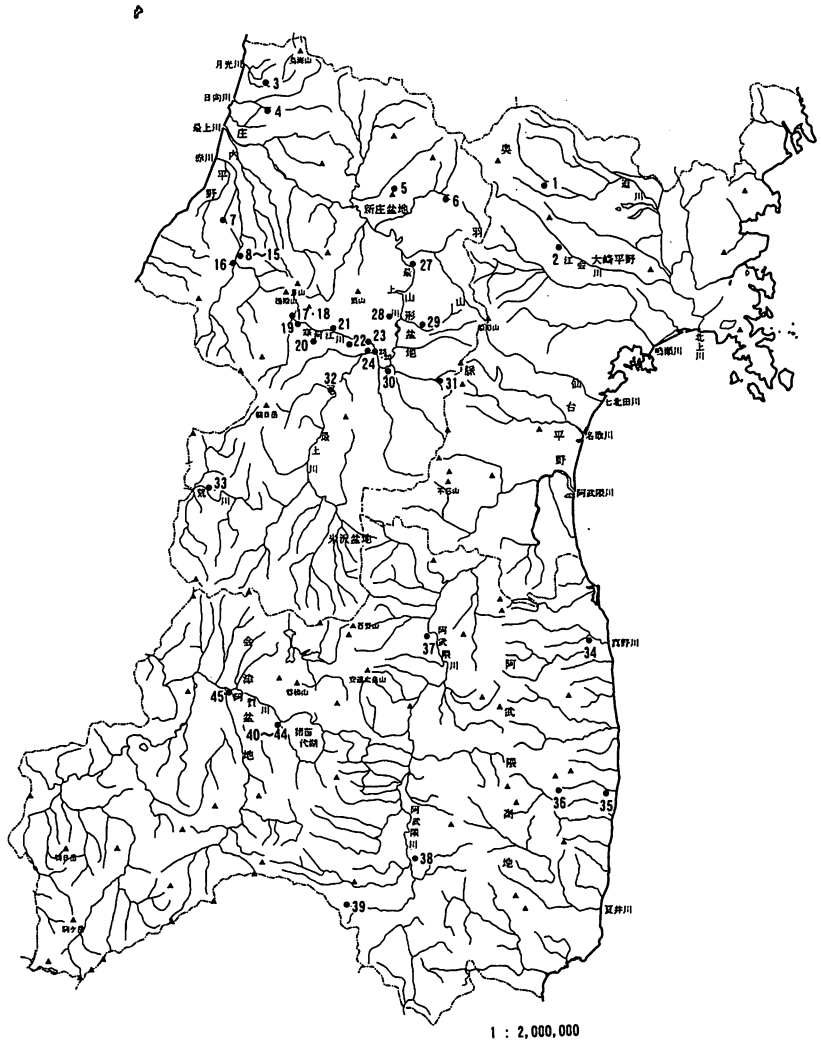
矢島國雄　1979「東北地方の細石器文化」『駿台史学』47、pp.51～65。

柳田俊雄　1992「阿武隈川流域における旧石器時代の石器群とその出土層位について」『加藤稔先生還暦記念論文集』、pp.129～156。

山田晃弘　1999「東北地方」『石器文化研究』7、pp.11～20。

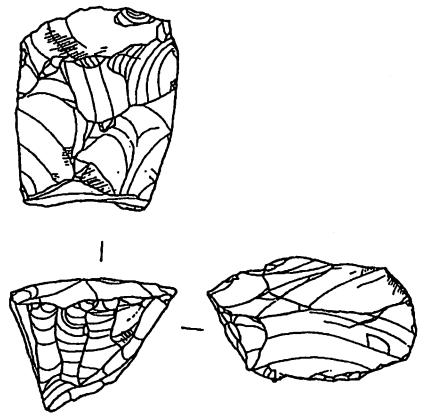
渡部光一ほか　1978「会津若松市小石ヶ浜遺跡の石器」『福島考古』19、pp.15～20。

藁科哲男・東村武信　1996「第12節　石材産地分析を行った旧石器時代の石器について」『奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅴ樽口遺跡』、pp.186～188。

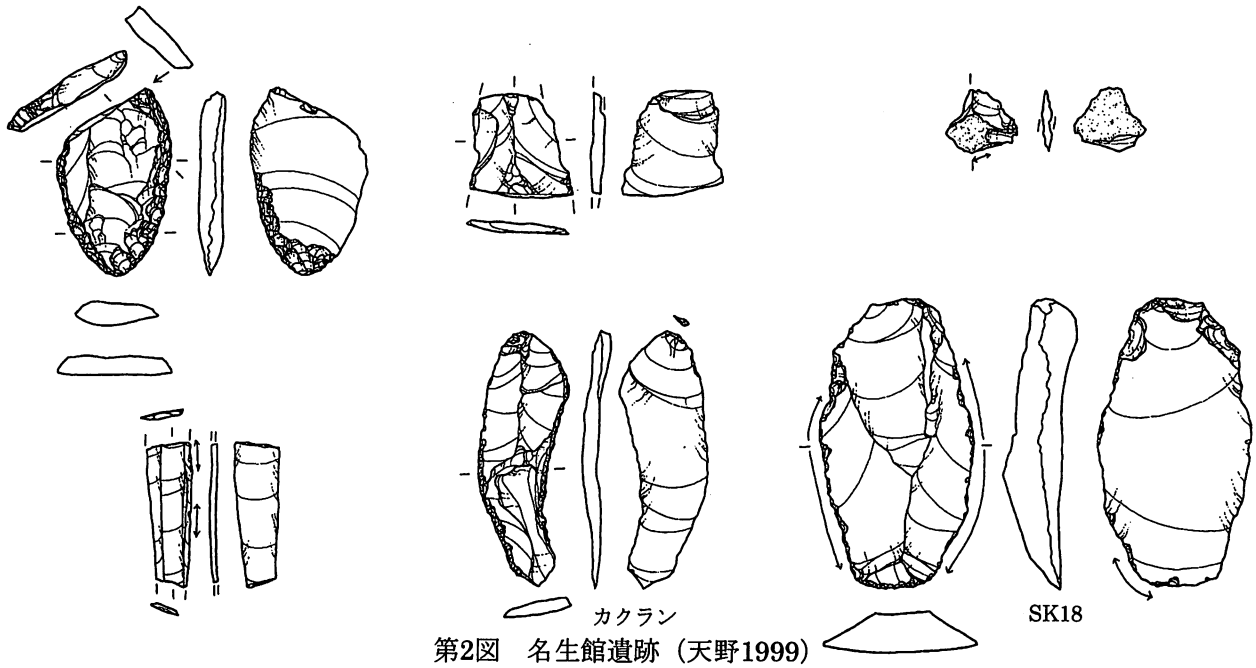


1	大穴山	16	上野山（遺跡群）	31	所部
2	名生館	17	弓張平公園内	32	小松野
3	宮山坂F	18	弓張平L	33	湯ノ花
4	八森	19	月山沢	34	真野土城
5	山屋B	20	お仲間林	35	本町
6	月橋	21	朴木清水	36	屋敷前
7	杉ヶ沢A（高坂）	22	貂沢山	37	学壇（遺跡群）
8	越中山　D地点	23	西覚寺・米沢	38	薬師堂
9	越中山　E地点	24	金谷原	39	一里段A
10	越中山　K地点	25	高瀬山L	40	小石ヶ浜
11	越中山　M地点	26	高瀬山I期	41	笹山原No. 8　北地点
12	越中山　O地点	27	角二山	42	笹山原No. 12
13	越中山　Q地点	28	奥土入	43	笹山原No. 16
14	越中山　S地点	29	東根城	44	笹山原No. 27
15	越中山　S'地点	30	滝	45	鍛冶山

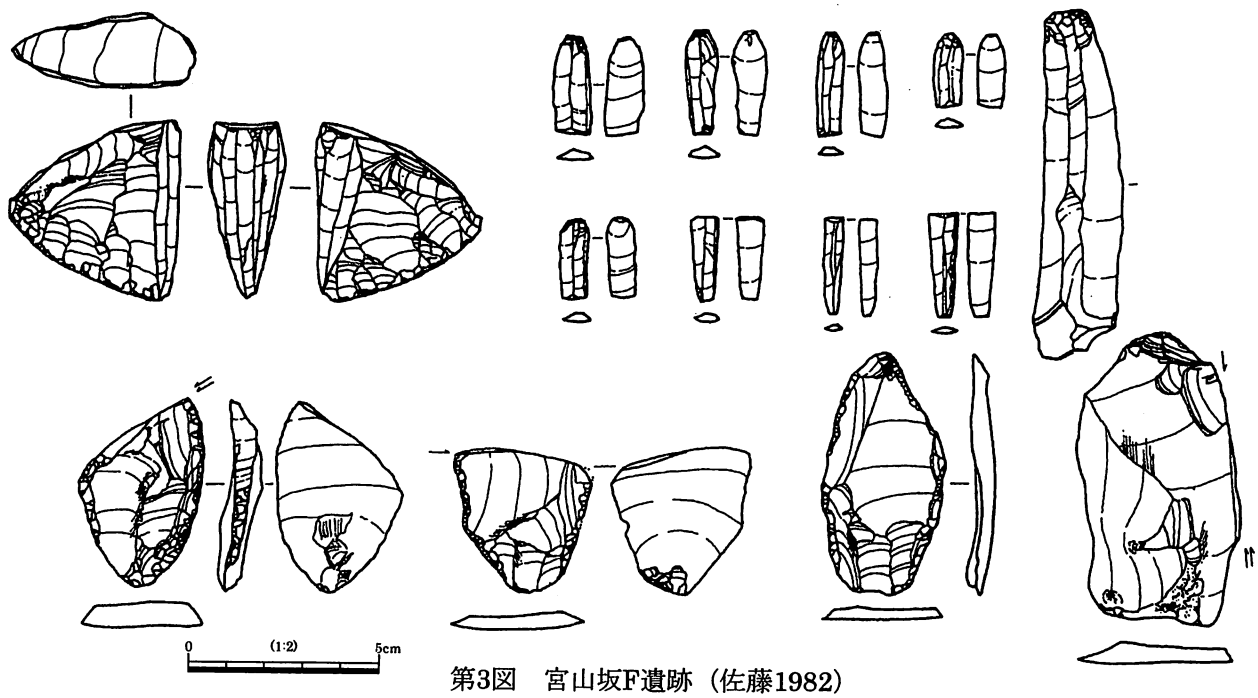
図　東北地方南部の細石刃文化遺跡の分布



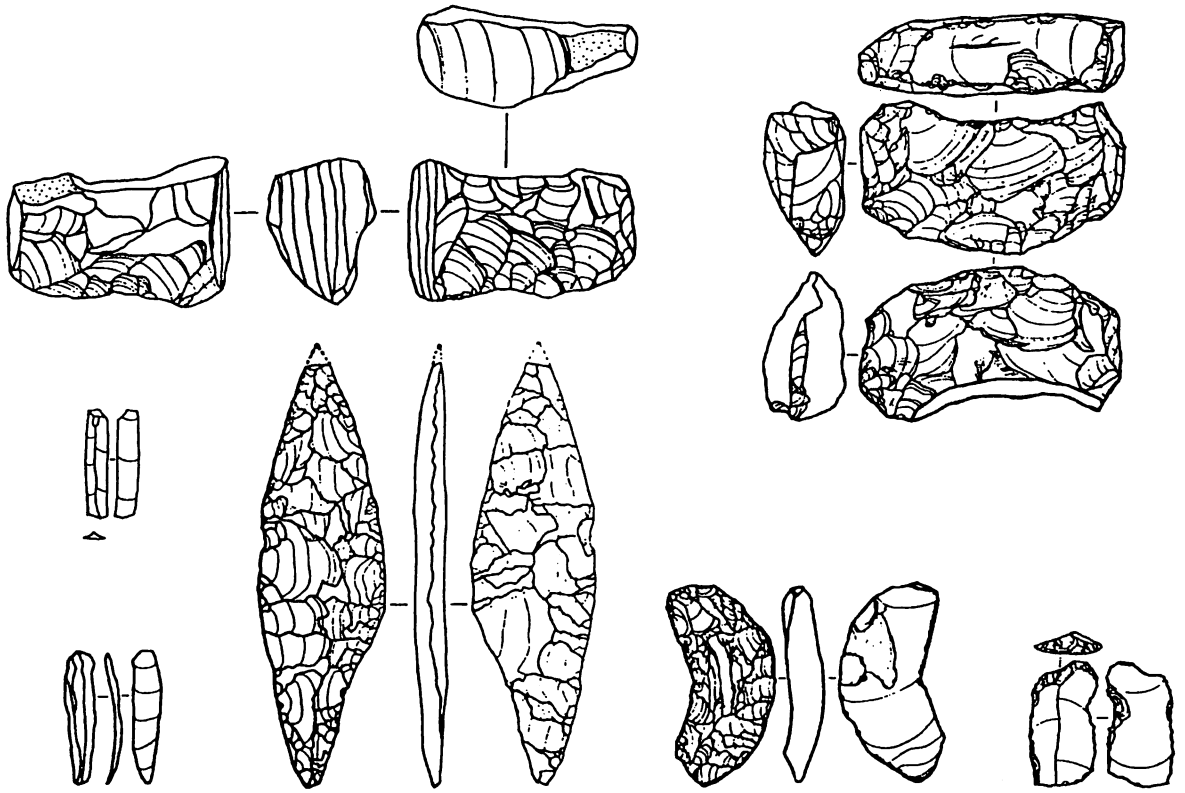
第1図　大穴山遺跡（佐藤1976）



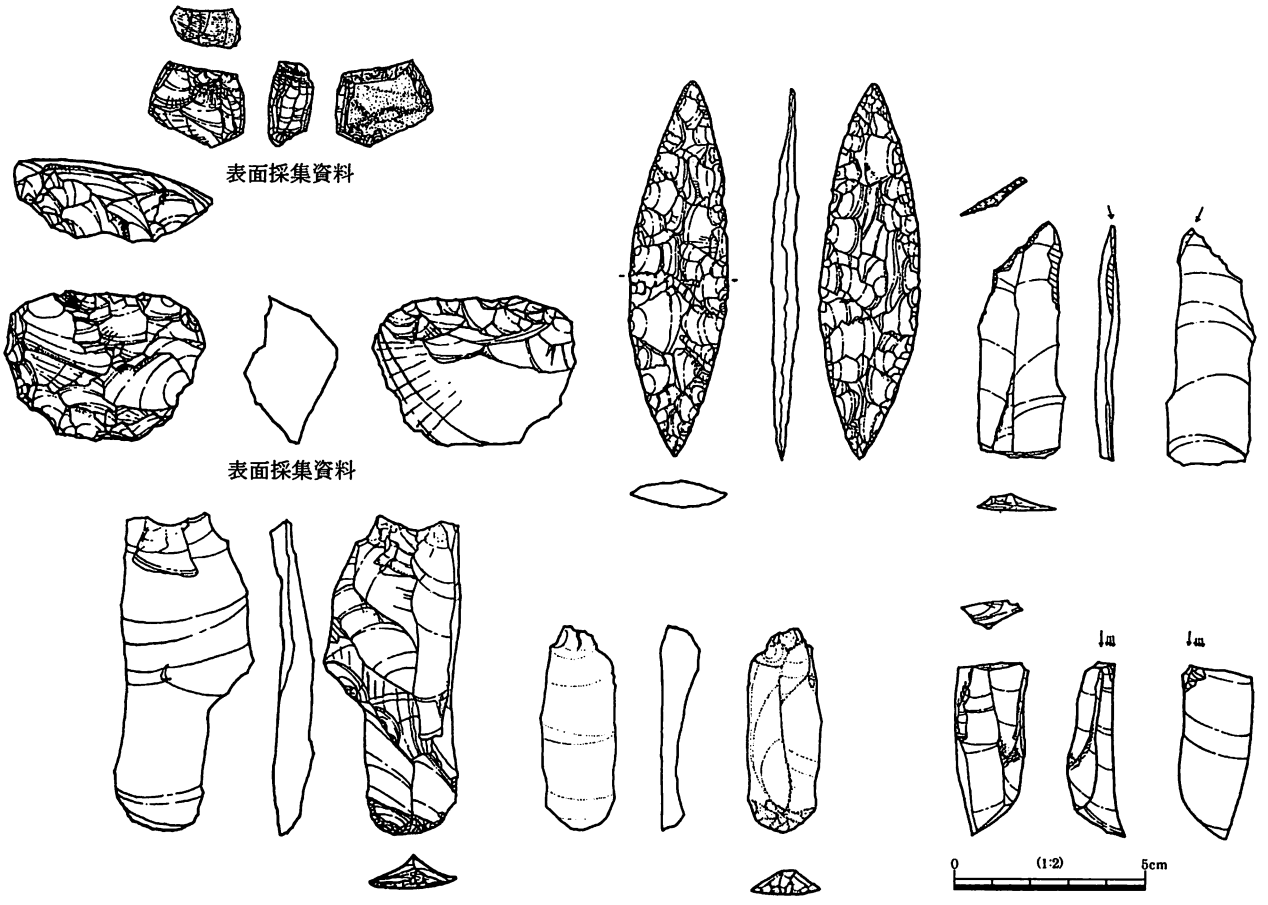
第2図　名生館遺跡（天野1999）



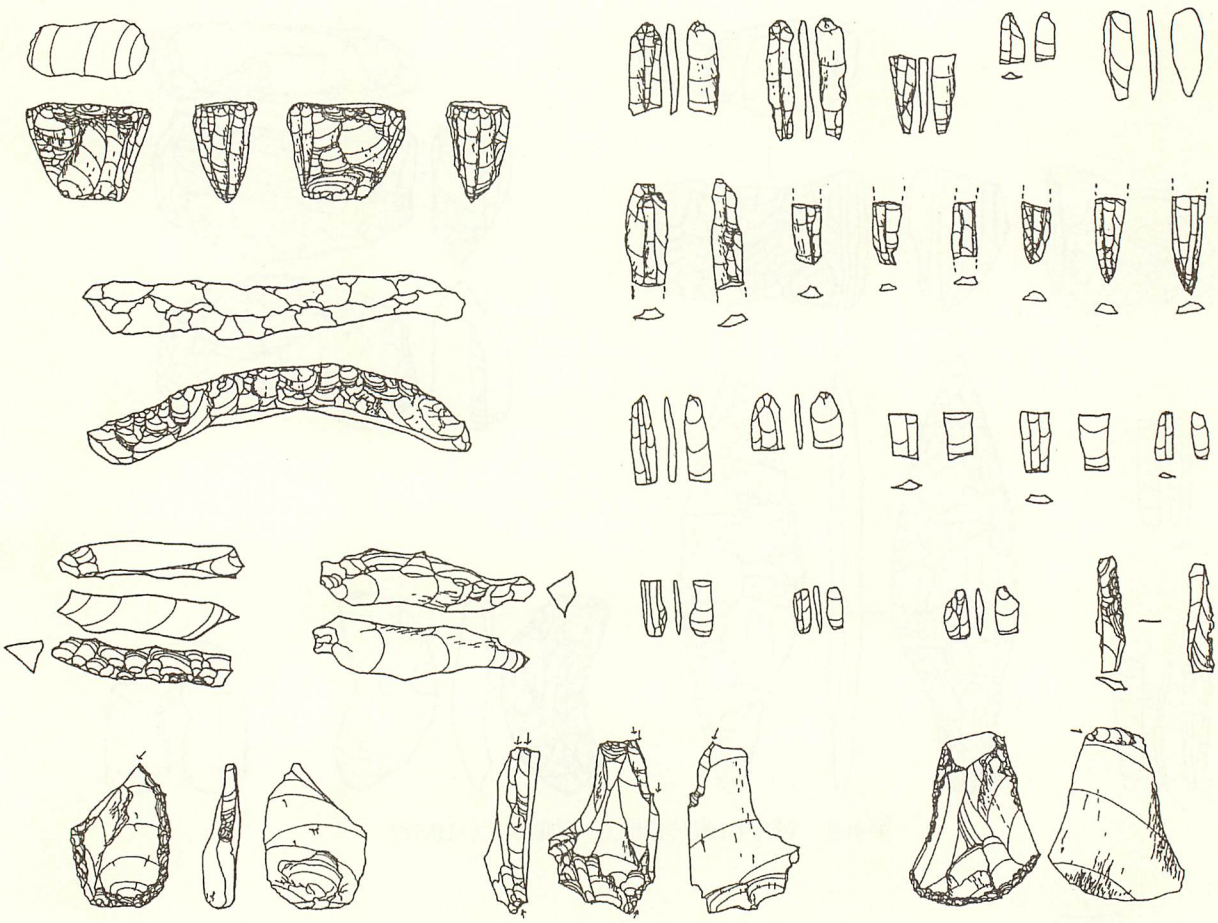
第3図　宮山坂F遺跡（佐藤1982）



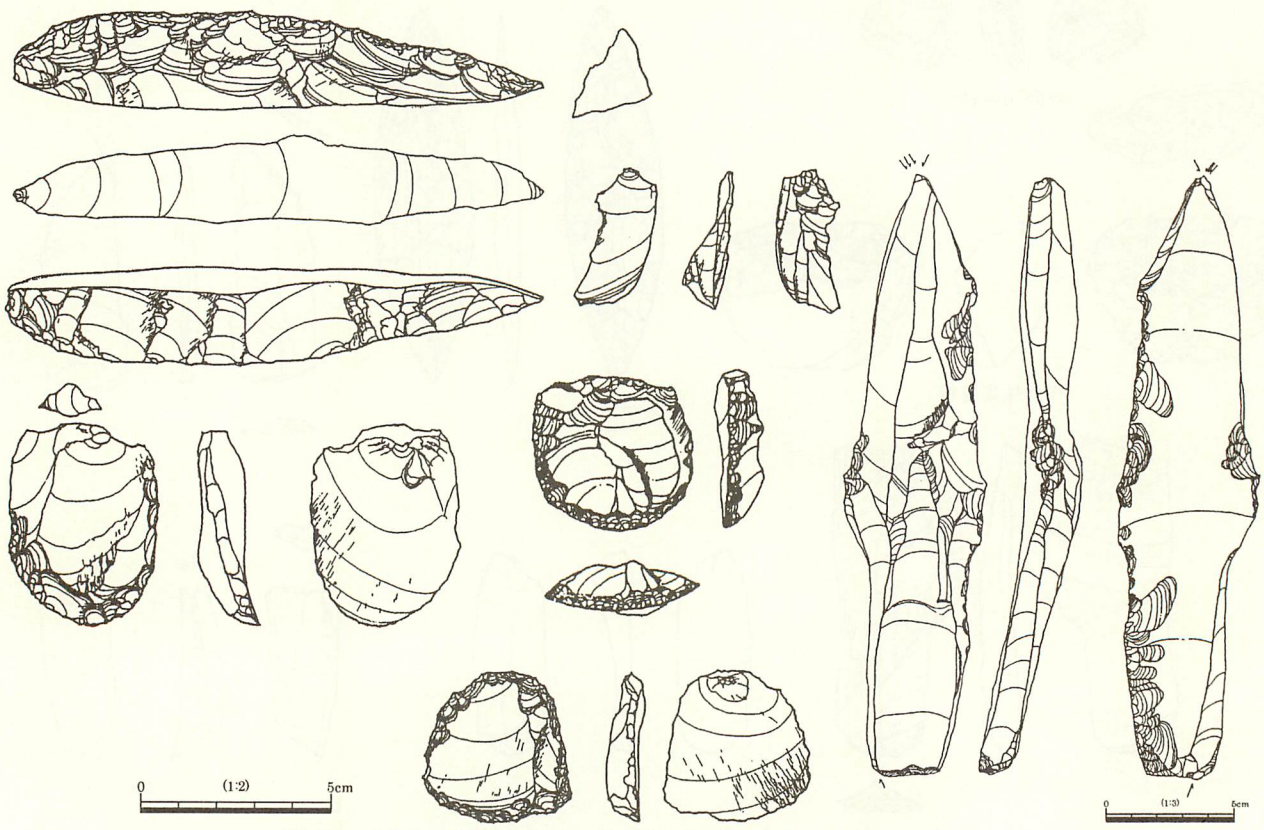
第4図　越中山遺跡D地点（加藤ほか1982）



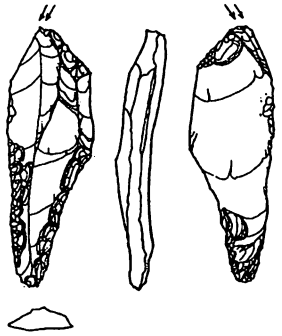
第5図　越中山遺跡E地点（加藤ほか1982）



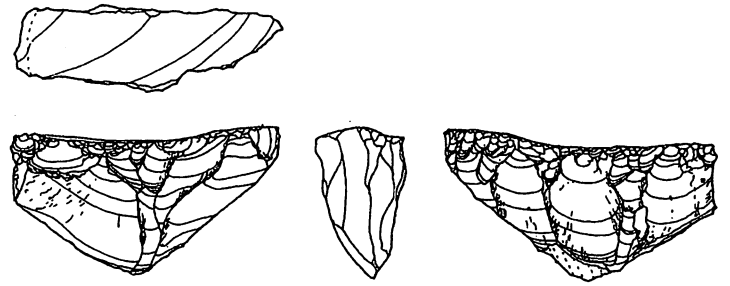
第6図　越中山遺跡M地点（石井1986）



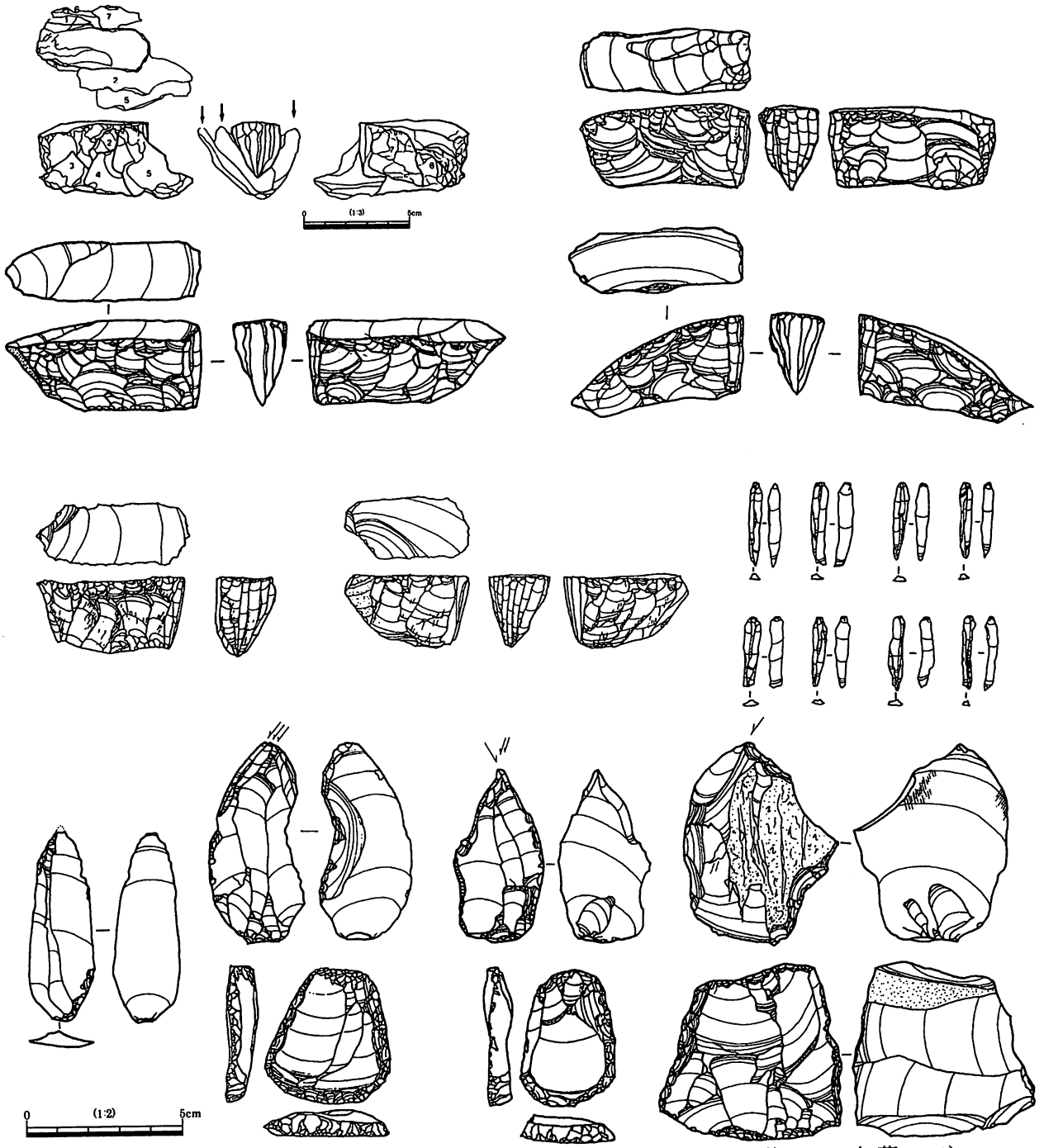
第7図　越中山遺跡O地点（酒井・加藤1973、石井1986）



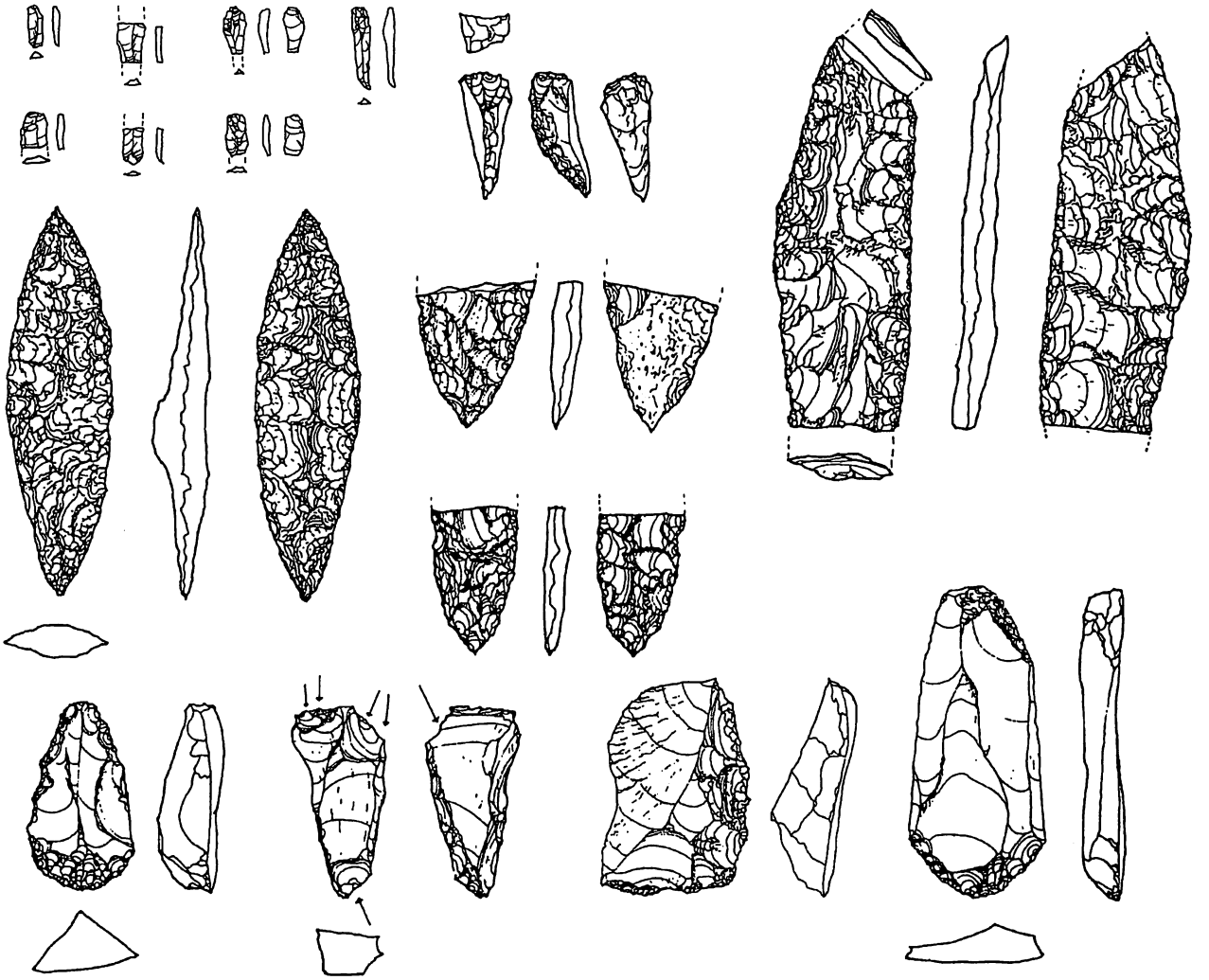
第8図　越中山遺跡K地点（石井1991a）



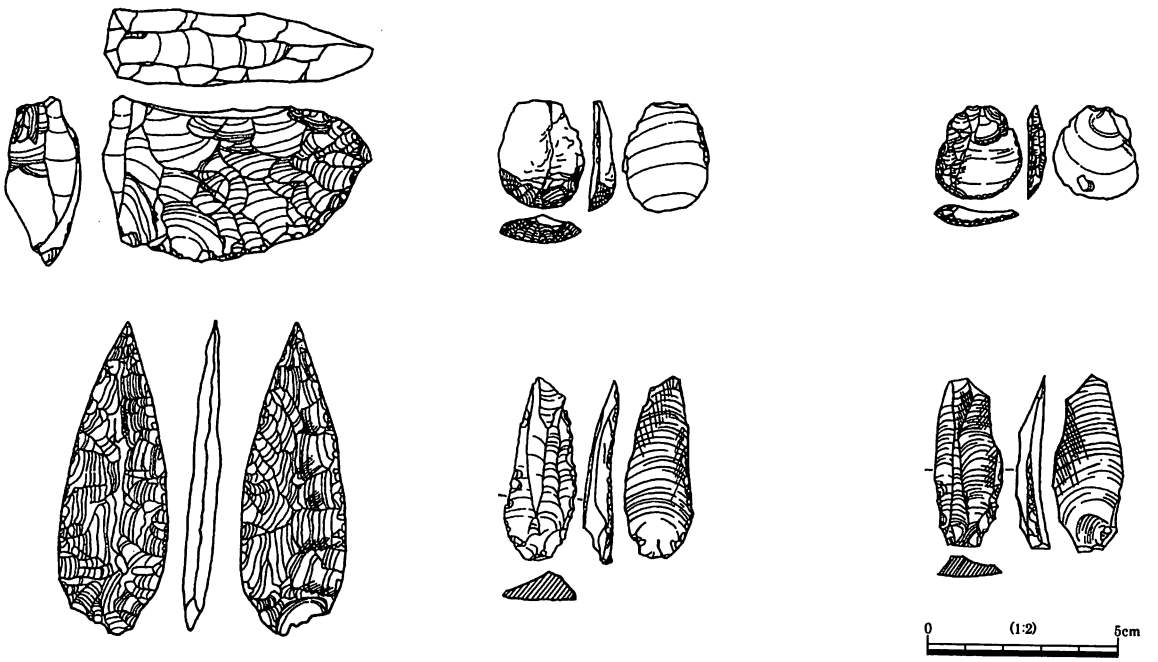
第9図　越中山遺跡Q地点（石井1986）



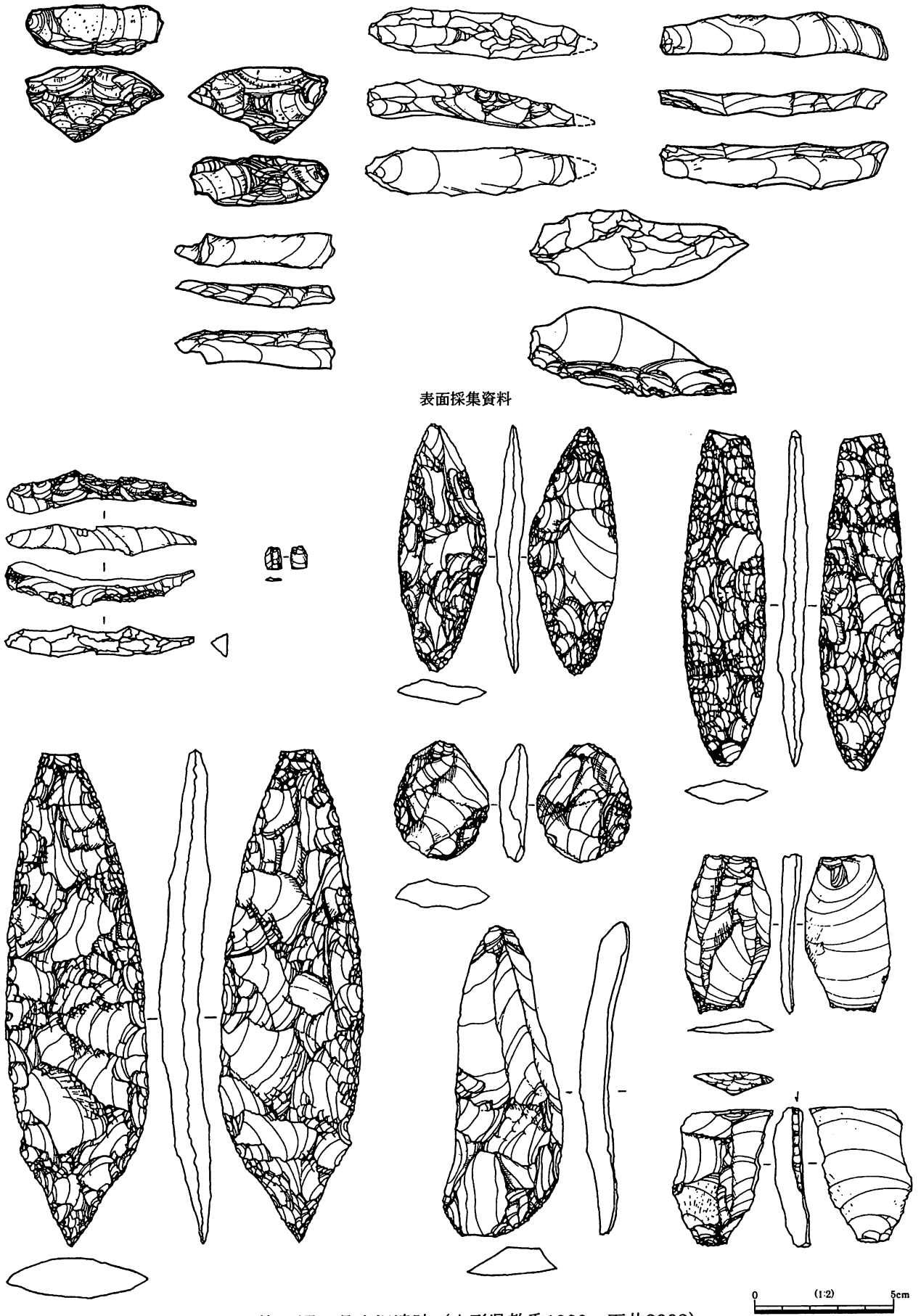
第10図　越中山遺跡S地点（酒井・加藤1973、加藤ほか1982、石井1988、加藤1991）



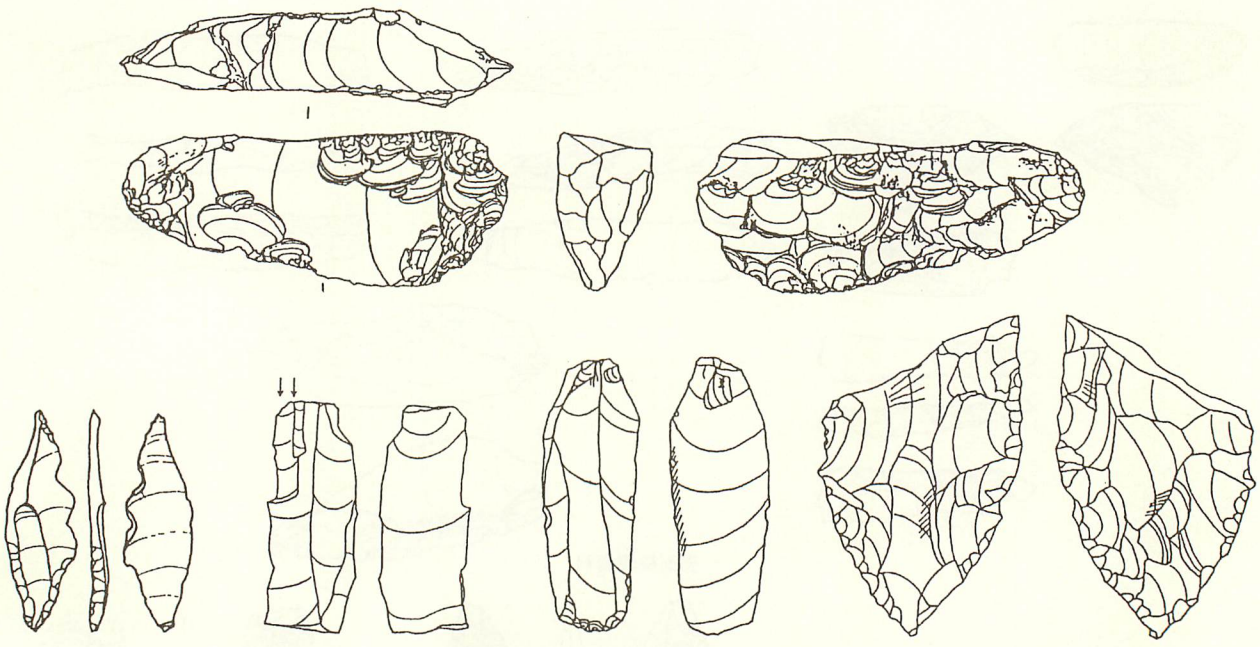
第11図　越中山遺跡S'地点（加藤・石井1993）



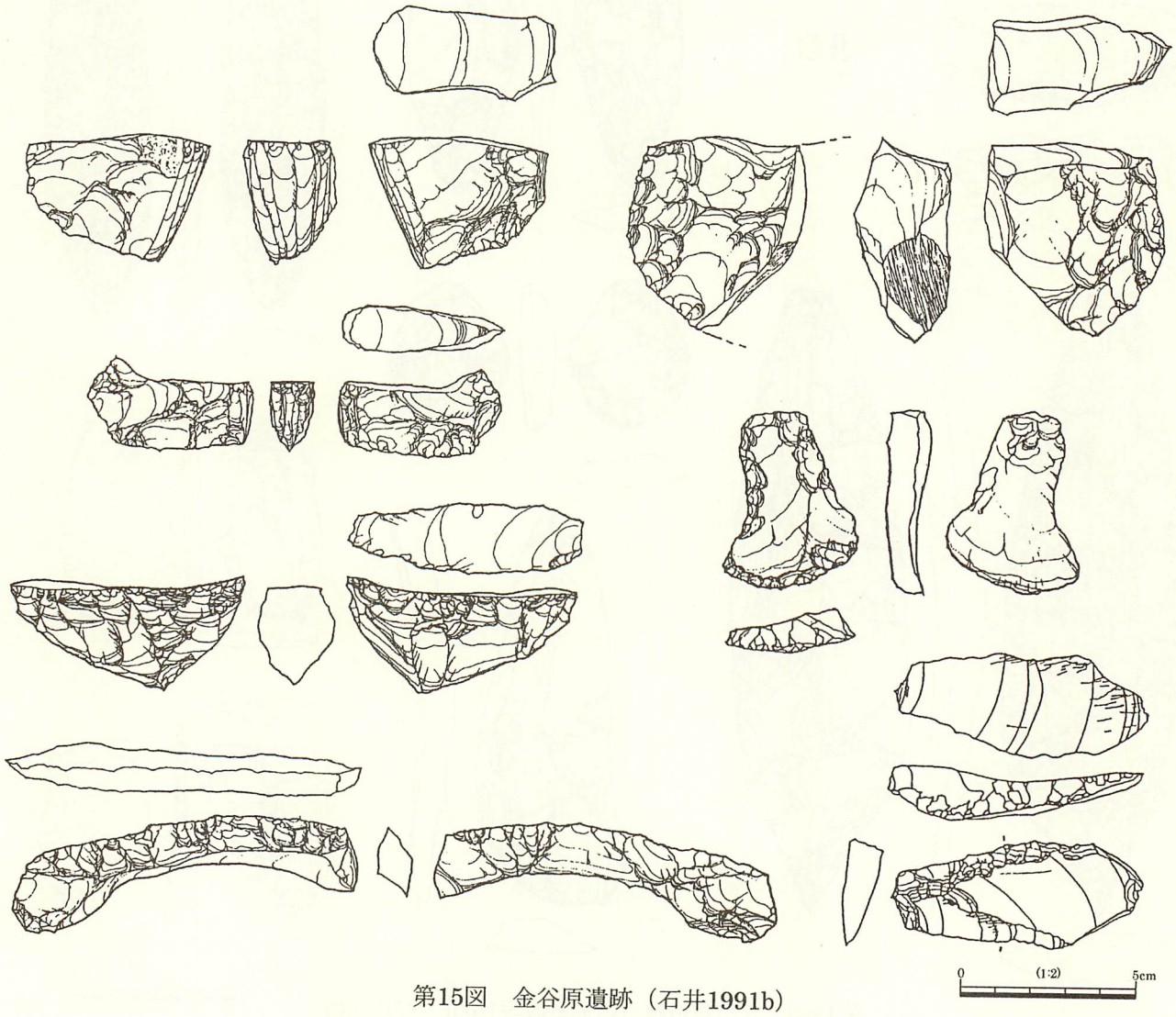
第12図　山屋B遺跡（加藤1964）



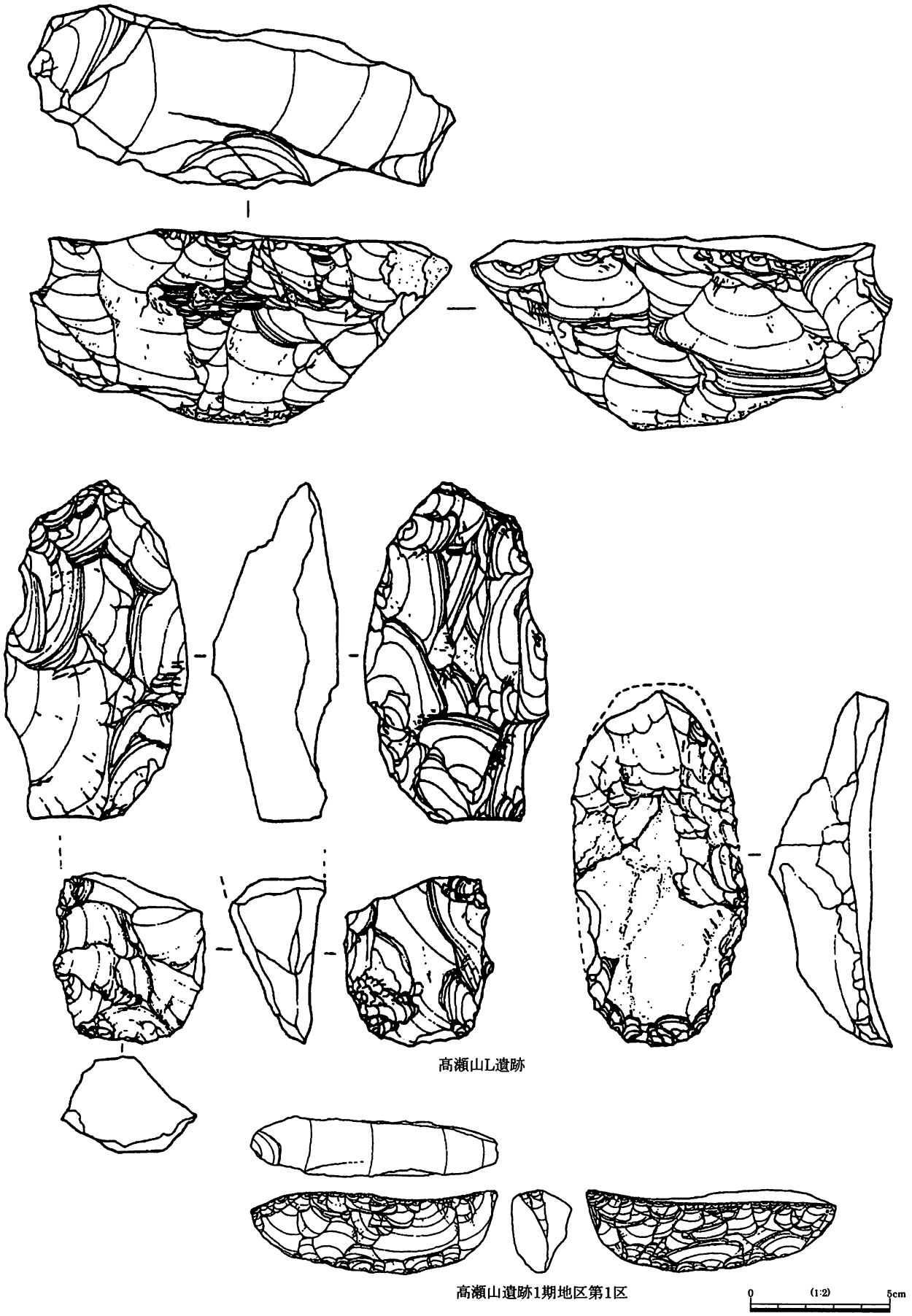
第13図　月山沢遺跡（山形県教委1980、石井2002）



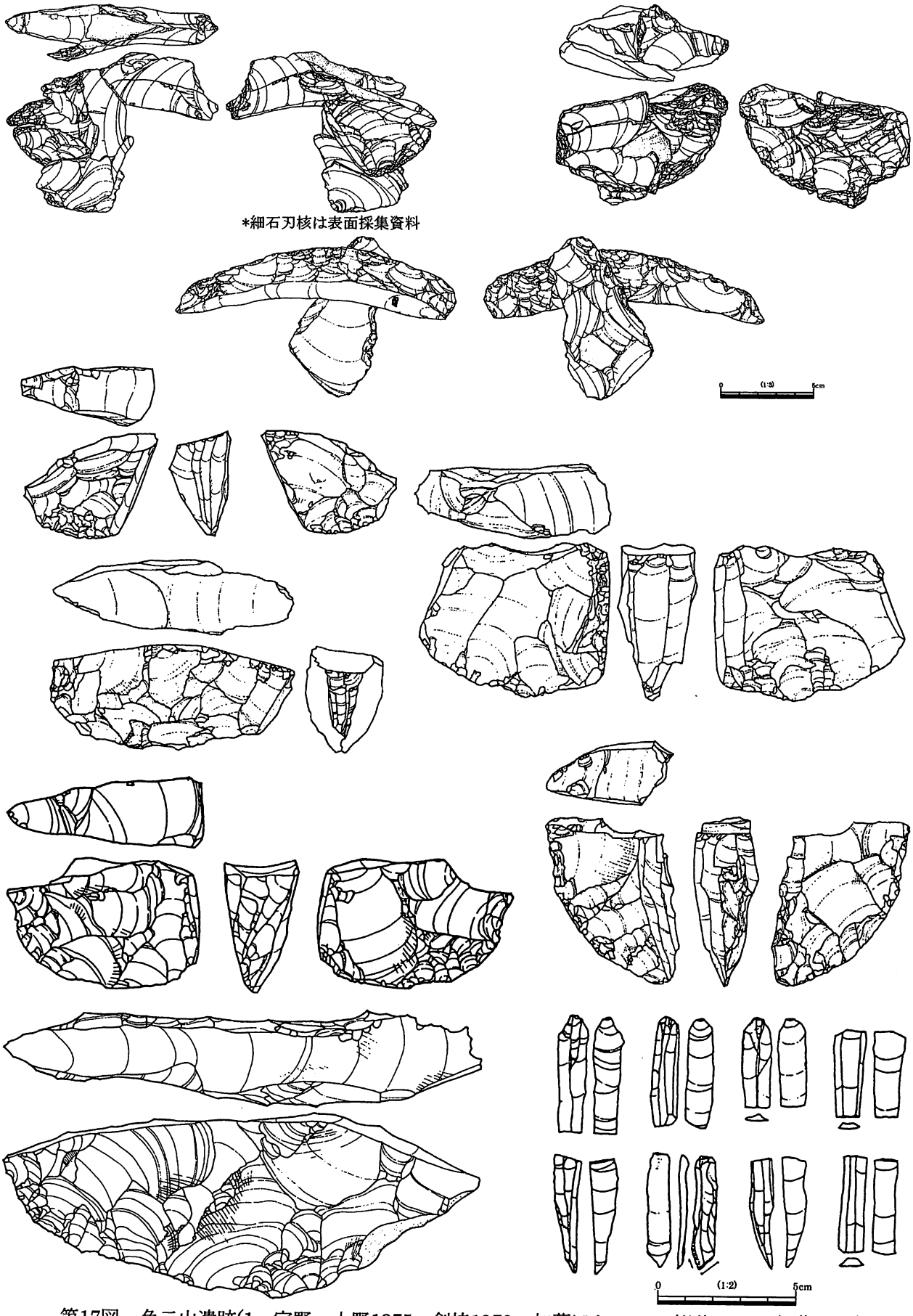
第14図　お仲間林遺跡（加藤1992）



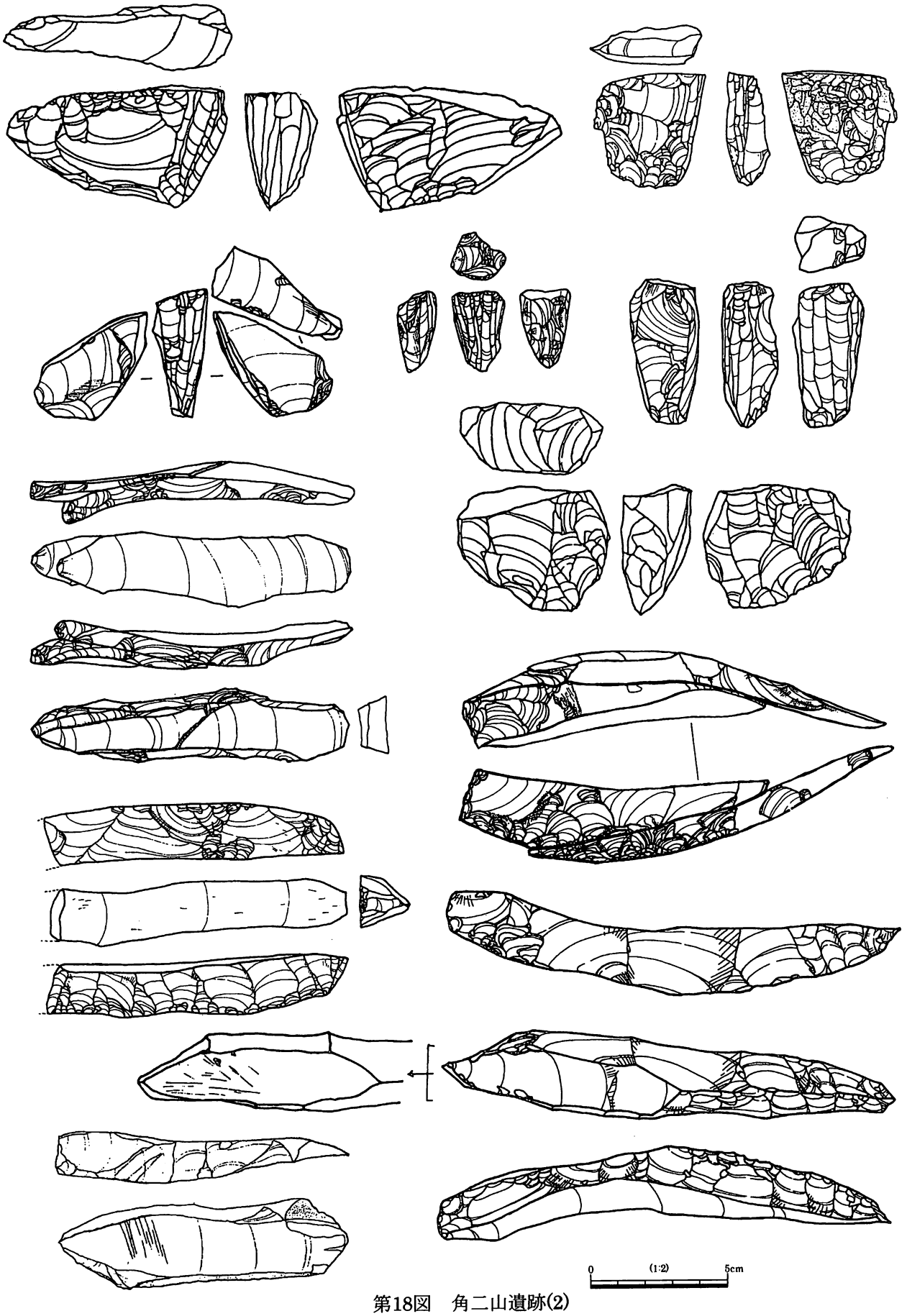
第15図　金谷原遺跡（石井1991b）



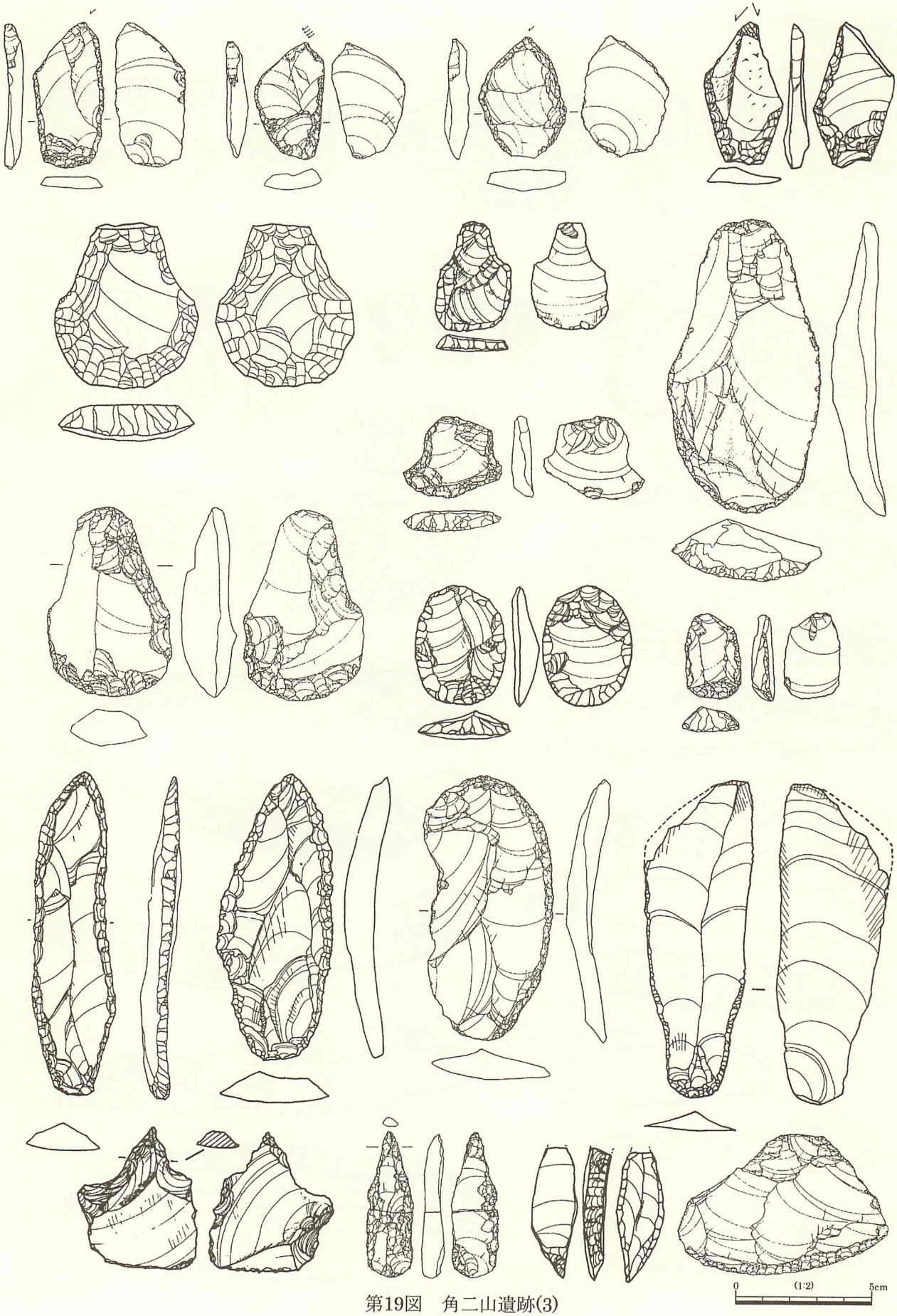
第16図　高瀬山L遺跡・1期地区第1区（石井1985、齊藤・水戸部2002）



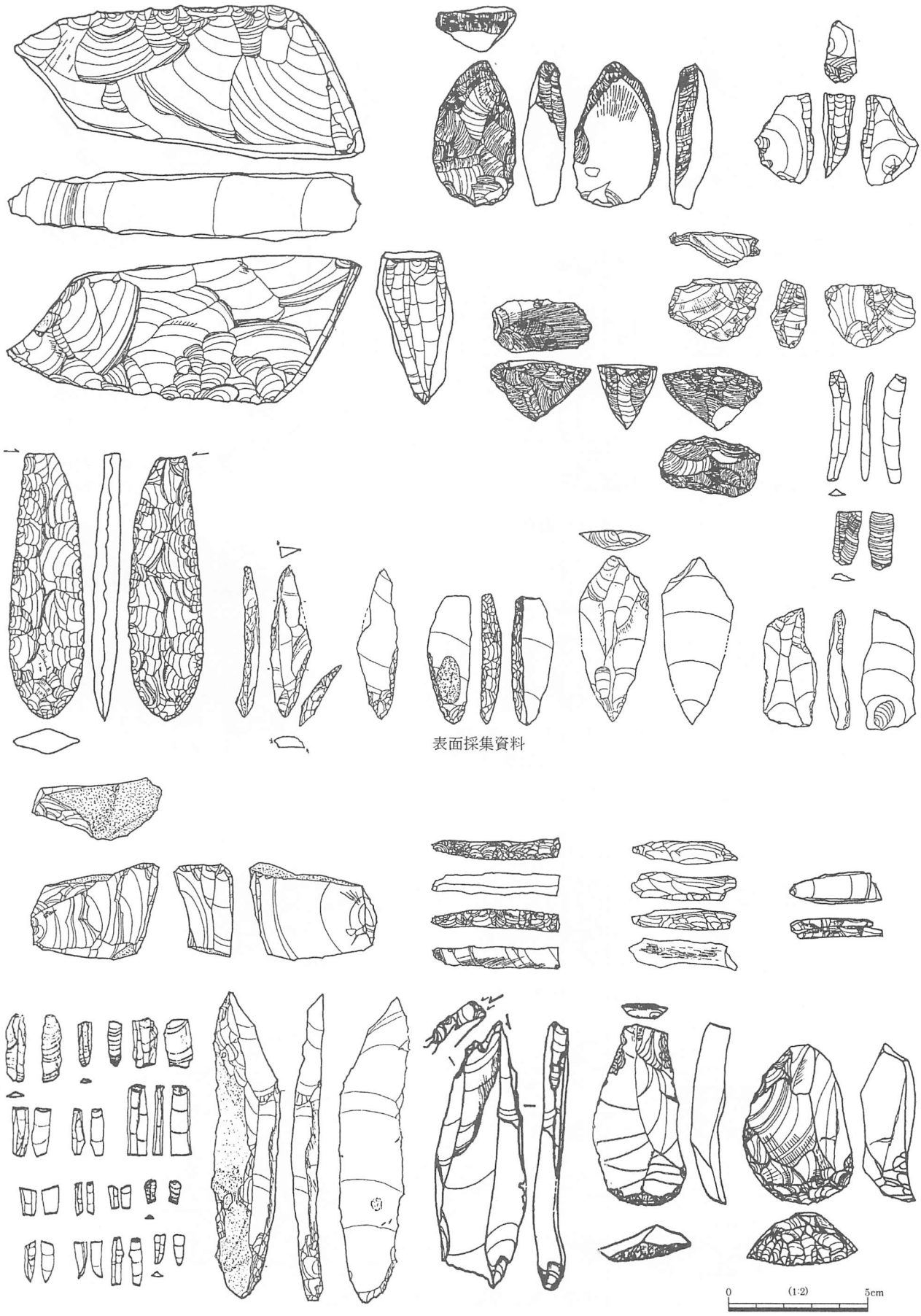
第17図　角二山遺跡(1：宇野・上野1975、剣持1979、加藤ほか1982、桜井1992、加藤1991)



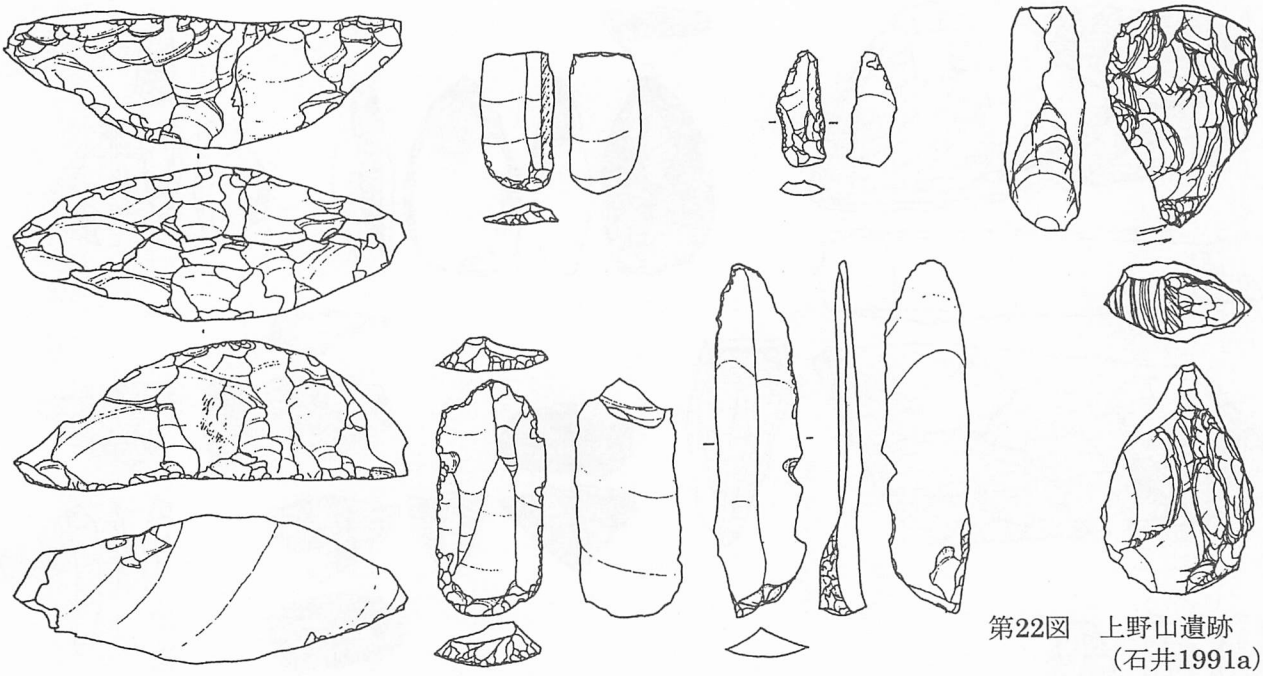
第18図　角二山遺跡(2)



第19図　角二山遺跡(3)

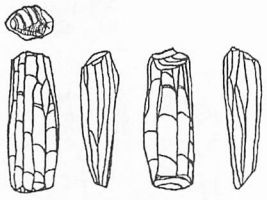


第20図　湯ノ花遺跡（上野・加藤1973、加藤ほか1982、門脇1982）

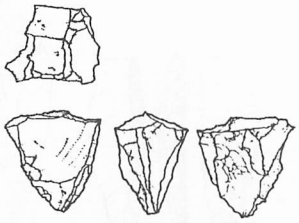


第21図　杉ヶ沢A（高坂）遺跡（小野1979）

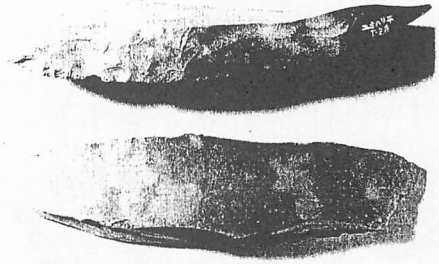
第22図　上野山遺跡
（石井1991a）



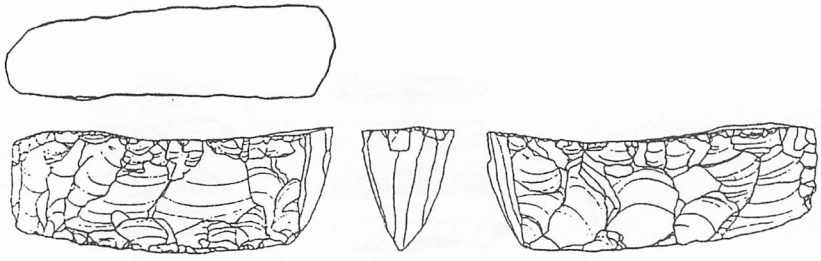
第23図　月楯遺跡
（柏倉1964）



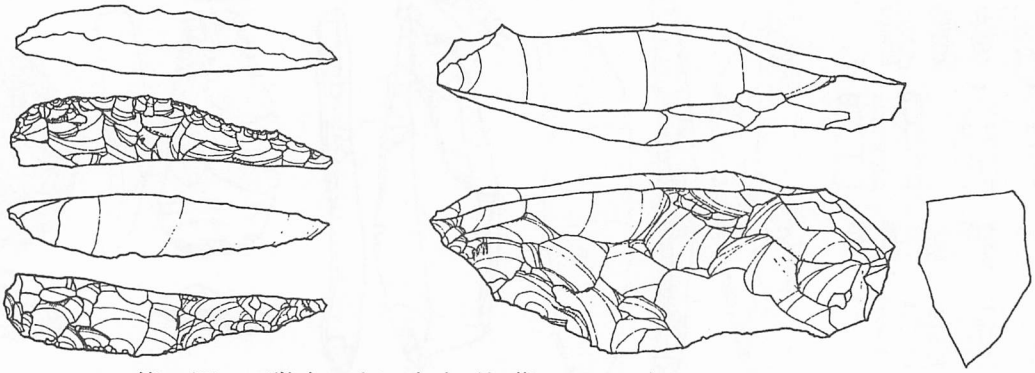
第24図　弓張平L遺跡
（加藤ほか1982）



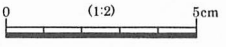
第25図　弓張平公園内
（山形県教委1993）
＊縮尺不同

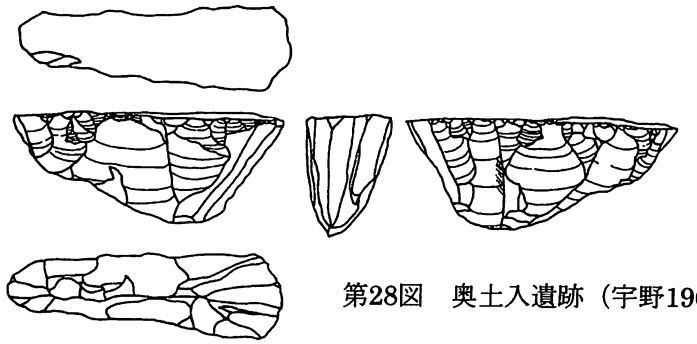


第26図　朴木清水（宇野1987）

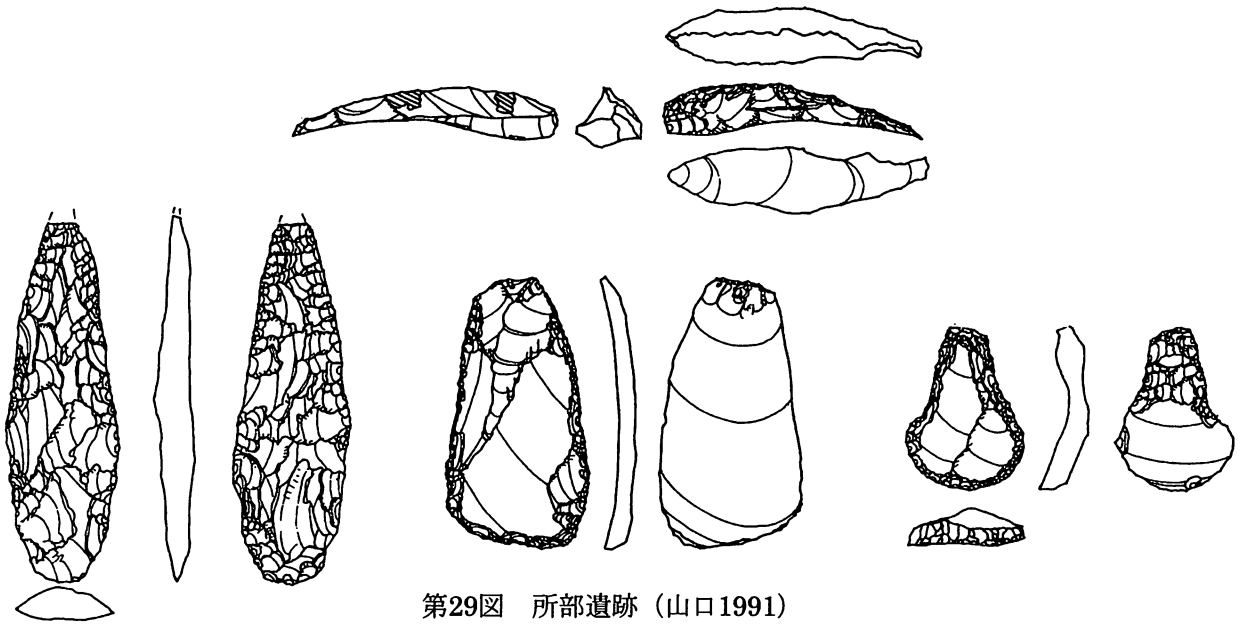


第27図　西覚寺・米沢遺跡（加藤ほか1982）

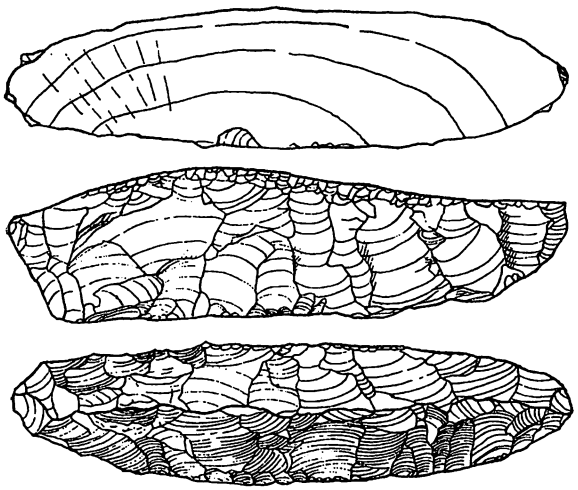




第28図　奥土入遺跡（宇野1967）

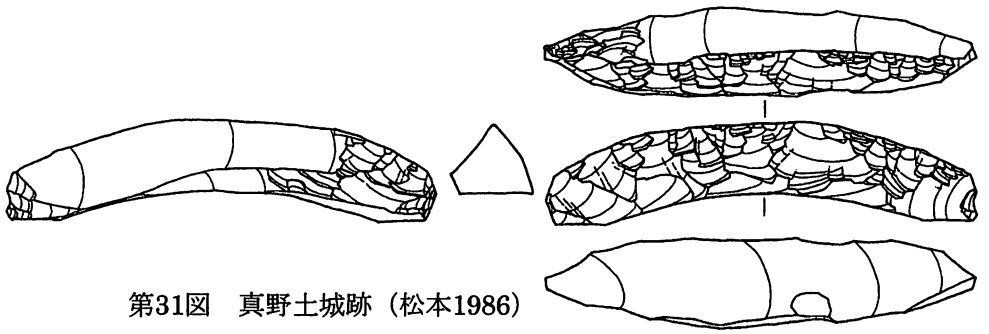


第29図　所部遺跡（山口1991）

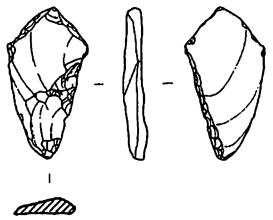


第30図　小松野遺跡（柏倉1964）

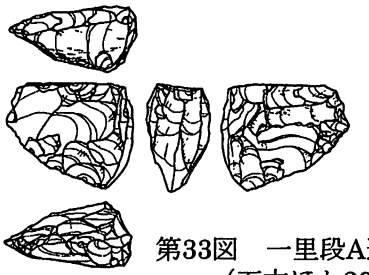
0　(1:2)　5cm



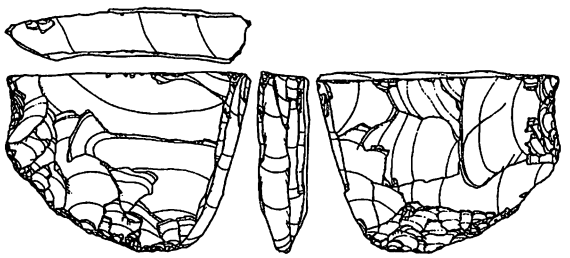
第31図　真野土城跡（松本1986）



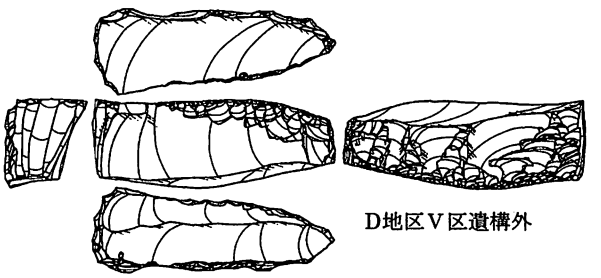
第32図　屋敷前遺跡
（いわき市教委1988）



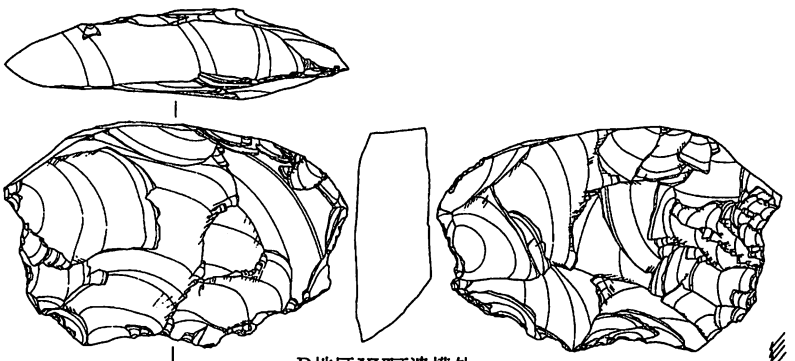
第33図　一里段A遺跡
（石本ほか2000）



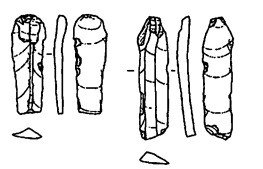
A地区Ⅸ区遺構外



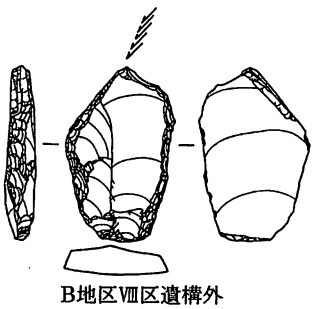
D地区Ⅴ区遺構外



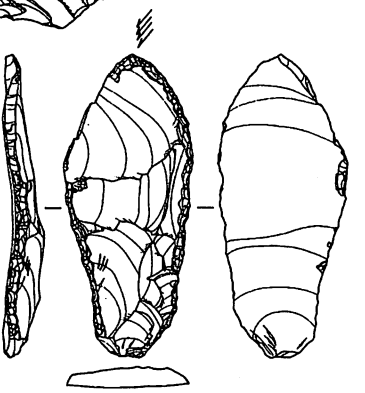
D地区XVI区遺構外



D地区ＸⅠ区17号ブロック



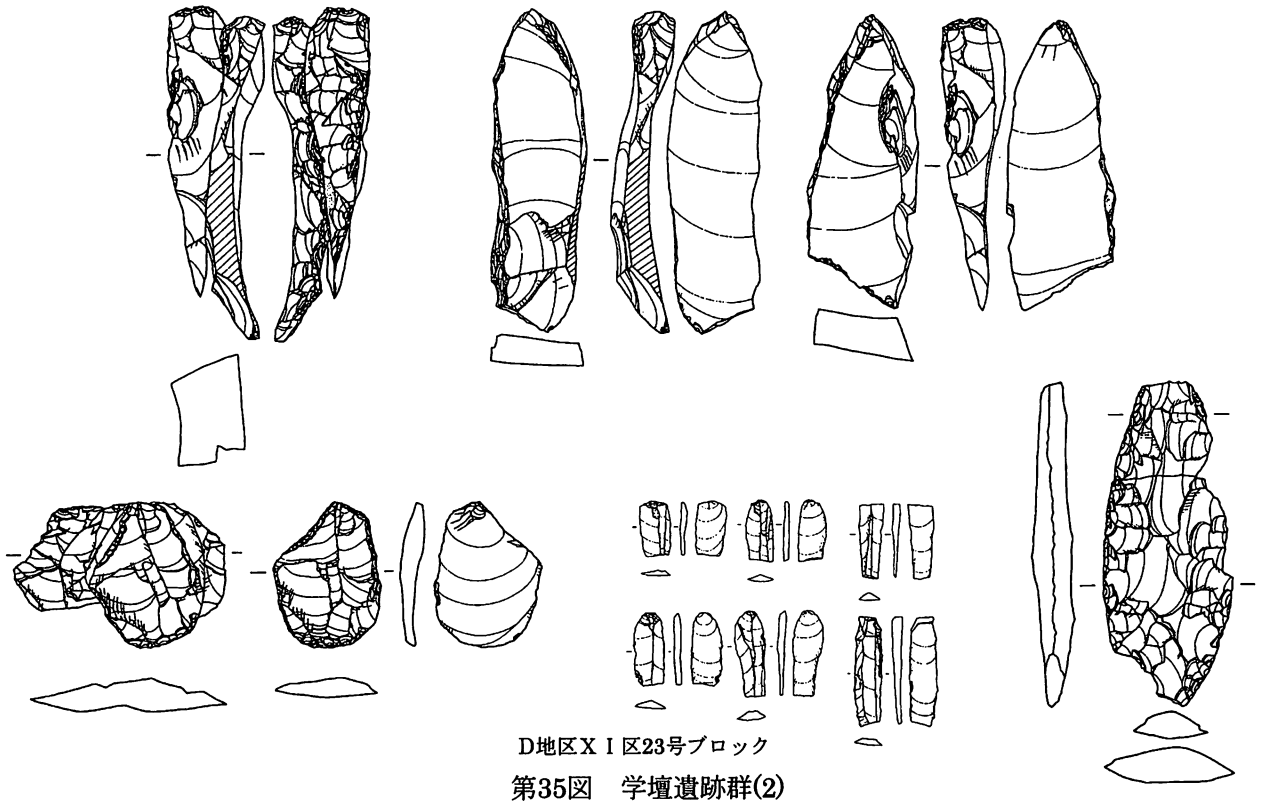
B地区Ⅷ区遺構外



D地区Ⅴ区遺構外

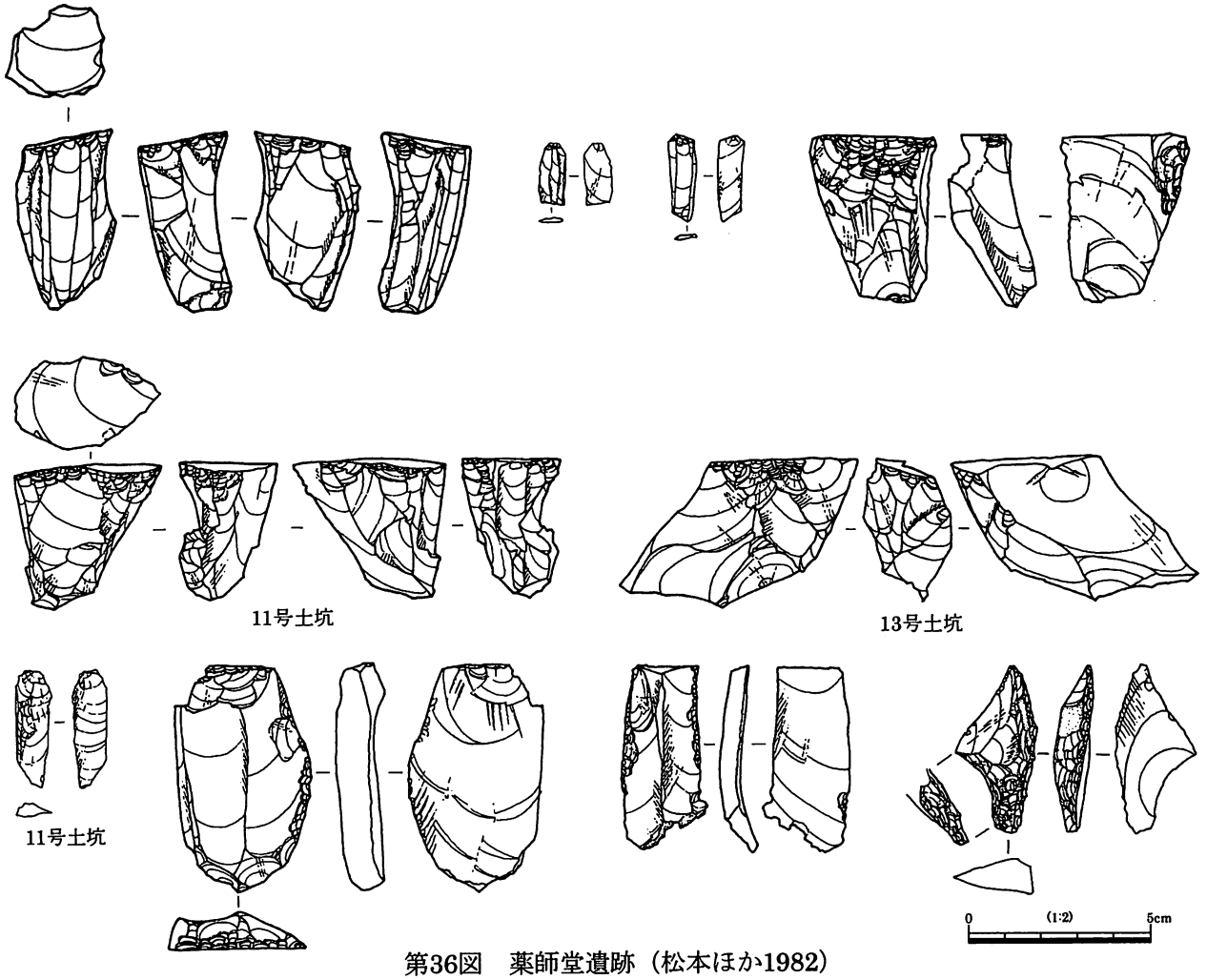
0　(1:2)　5cm

第34図　学壇遺跡群(1)（西村ほか1995）

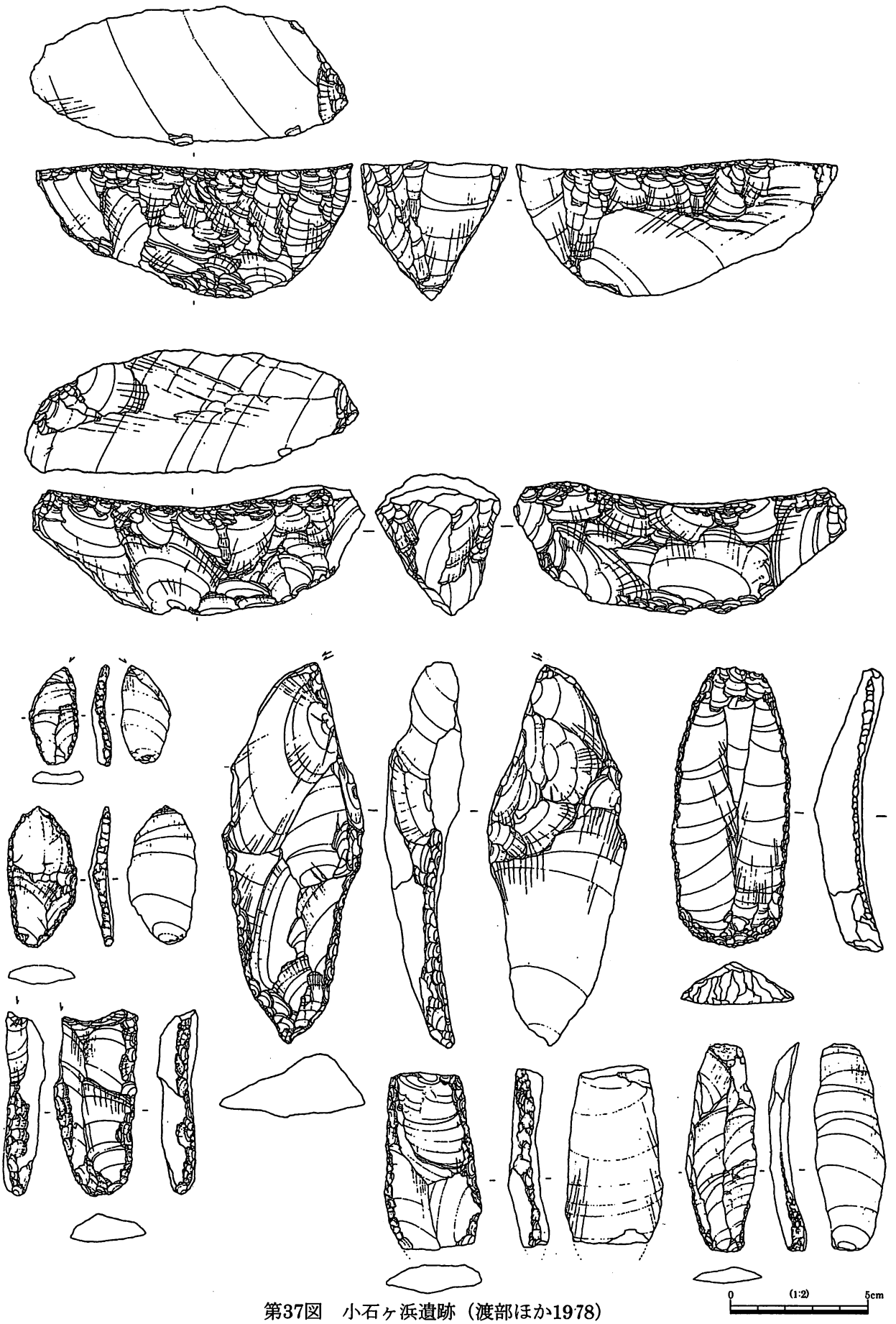


D地区ＸⅠ区23号ブロック

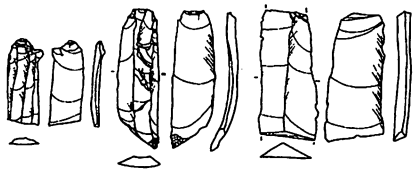
第35図　学壇遺跡群(2)



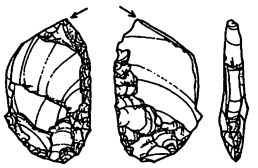
第36図　薬師堂遺跡（松本ほか1982）



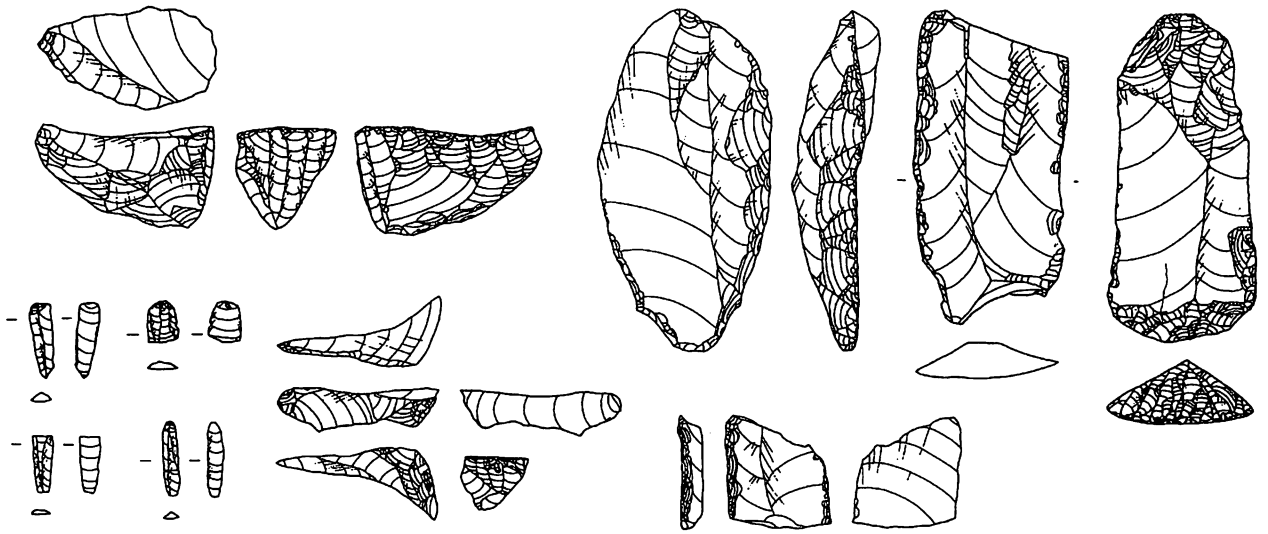
第37図　小石ヶ浜遺跡（渡部ほか1978）



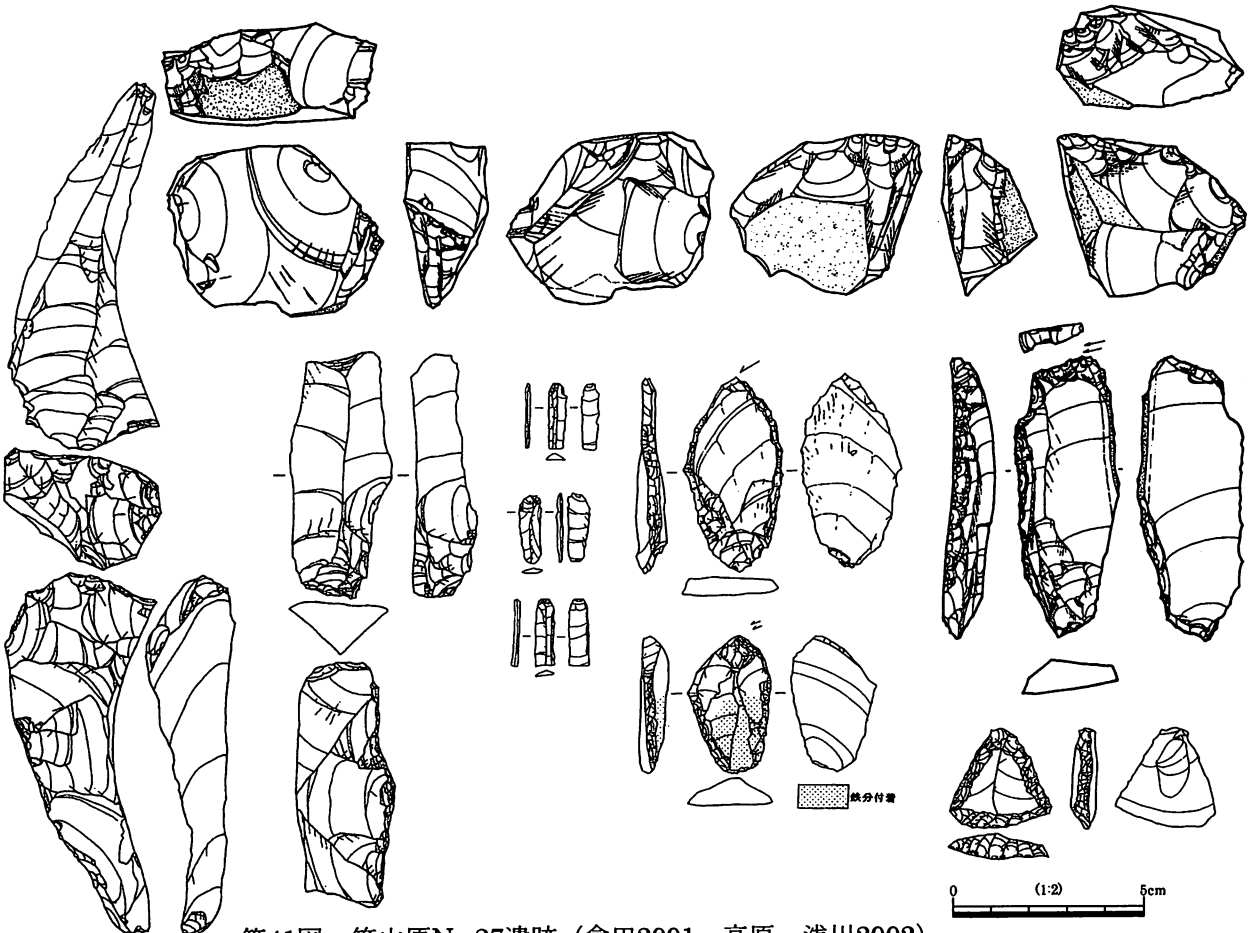
第38図　笹山原No.8遺跡北地点（藤原1999）



第39図　鍛冶山遺跡（古川・藤原1987）



第40図　笹山原No.12遺跡上層（阿部・小島2000）



第41図　笹山原No.27遺跡（會田2001、高原・浅川2002）

表　東北地方南部の細石刃文化遺跡一覧表

		組成																				
NO.	遺跡名	細石刃	細石核	削器	掻器	彫器	錐	打製石斧	局部磨製石斧	ナイフ形石器	尖頭器	有舌尖頭器	石鏃	削片	土器	総計	遺構	発掘	標高	地域	年代	文献
1	大穴山		1													1			170	迫川流域		佐藤信行1976、花山村市史編纂委員会1978
2	名生館	1		1	1	1										6		有	43～45	江合川流域	H-0下	宮城県多賀城跡調査研究所1983、天野順陽1999
3	宮山坂F	8	1			2										14			83	月光川流域（烏海山南麓）		佐藤禎宏1982
4	八森					1										1			42～38	荒雄川流域		佐藤禎宏・大川貴弘2003
5	山屋B		1	○	2	○				○	1					多数			135	戸前川流域（新庄盆地）		加藤　稔1964
6	月循		1													1			275	小国川流域（最上盆地）		柏倉亮吉1964
7	杉ヶ沢A（高坂）		1	2	3	5				○						58			100	赤川流域（庄内平野南部丘陵）		柏倉亮吉1964、小野一彦1979
8	越中山　D地点	2	2	1	1	○					1					?			105	赤川流域		加藤　稔ほか1982、石井浩幸1991
9	越中山　E地点	2	1		2	2				1	1					多数		有	25	赤川流域		加藤　稔ほか1982
10	越中山　K地点					1										1		有	130	赤川流域		石井浩幸1991a
11	越中山　M地点	21	1		1	5								3		多数			135	赤川流域		石井浩幸1986
12	越中山　O地点				3	1					○			1		多数			125	赤川流域		西井忠一・加藤　稔1973、石井浩幸1986
13	越中山　Q地点		1													多数		有	129	赤川流域		石井浩幸1986
14	越中山　S地点	79	5	10	17	4				2				2		多数	礫群1	有	130	赤川流域		西井忠一・加藤　稔1973、加藤　稔ほか1982、石井浩幸1988
15	越中山　S'地点	5		4	3	1	1			1	5					170		有	129.5	赤川流域		加藤　稔・石井浩幸1993
16	上野山（遺跡群）		1							○		○				多数			70～120	赤川流域		石井浩幸1991a
17	弓張平公園内													1		多数			?	寒河江川流域		山形県教育委員会1993
18	弓張平L		1													多数		有	560	寒河江川流域		加藤　稔ほか1982
19	月山沢	1			9	1					10			1		多数		有	9～375	寒河江川流域		山形県教育委員会1980、石井浩幸2002
20	お仲間林		1		1	1				2	1					多数		有	284	寒河江川流域		加藤　稔1992
21	朴木清水		1													1			130	寒河江川流域		宇野修平1987
22	猪沢山		1													2			340	寒河江川流域		上野秀一・加藤　稔1973
23	西覚寺・米沢		1											1		2			160	寒河江川流域		加藤　稔ほか1982
24	金谷原	○	4	○	○	○								○		?			117	最上川流域		石井浩幸1991b
25	高瀬山L		1	1	1			1			3				2000以上			有	100	最上川流域		石井浩幸1985
26	高瀬山1期		1													多数		有	110	最上川流域		齊藤主税・水戸部秀樹2002
27	角二山	1212	9	6	32	29	2	1			1			31		5763	礫群1	有	77.5	最上川流域（尾花沢盆地	H-0下	宇野修平・上野秀一1975、剣持みどり1979、加藤　稔ほか1982、桜井美枝1992
28	奥土入		1													1			180	最上川流域		宇野修平1967
29	東根城		1													1		有	125	最上川流域		
30	滝		1													1			100?	最上川流域		柏倉亮吉1964
31	所部				○						○			1		多数			290?	立谷川流域		山口博之1991
32	小松野		1													1			190	最上川流域		柏倉亮吉1964
33	湯ノ花	30	1	2	10	12				2	2			8		多数	礫群1、炉	有	160	荒川流域		上野秀一・加藤　稔1973、加藤　稔ほか1982、門脇耕一1982
34	真野土城													1		1			20	浜通り		松本　茂1986
35	本町		1										1			1		有	21	浜通り		富岡町史市史編纂委員会1987
36	屋敷前					2										2		有	35	浜通り		いわき市教育委員会1988、同1999
37	学壇（遺跡群）	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○		10436		有	0～190	阿武隈川流域		西村博之ほか1995
38	薬師堂	2	2	○	○			○		2	○		○			156		有	0～275	阿武隈川流域		松本　茂ほか1982
39	一里段A		1													1		有	381	阿武隈川流域		石本　弘ほか2002
40	小石ヶ浜		2	1	1	3										9			?	猪苗代湖		渡部光一ほか1978
41	笹山原No. 8　北	2														3			520	猪苗代湖		藤原紀敏1999
42	笹山原No. 12	4	1	3	1									1		11		有	525	猪苗代湖	As-YP相当	阿部　司・小島克則2000
43	笹山原No. 16													1		1			530	猪苗代湖		
44	笹山原No. 27	○	○	○	○	○				○	○			○		多数			530	猪苗代湖		會田容弘2001、高原要輔・浅川文雄2002
45	鍛冶山					1										1		有	230	阿賀川流域		古川利意・藤原紀敏ほか1987

中部地方北部地域の細石刃文化

立木　宏明

1　研究の経過

中部地方北半の細石刃文化の研究経過について、年代ごとに遺跡の発見史を中心に記載する。

1950～1960年代

中部地方北半の細石刃文化について、初めて報告がなされたのは1953年、芹沢長介氏・麻生　優氏による野尻湖畔樋ヶ崎遺跡出土の「船底形石器」として記載（芹沢・麻生1953）された細石刃石核（森嶋　1976、菅沼・野尻湖人類考古グループ1994）および駒井和愛氏が報告した新潟県上越市五智海岸周辺出土遺跡出土の黒曜石製細石刃石核（駒井1953・1954）である[注1)]。芹沢・麻生両氏による論考ではヨーロッパの例を引いて「core scraper」の一種とし、1951年に相沢忠洋氏によって発掘された枡形遺跡[注2)]（相沢1956）の石器との類似を指摘して「この特色ある石器は無土器文化のある時期のtype toolとして考えられるようになるかもしれない」と結んでいる。この指摘が芹沢氏らによる以降の細石刃遺跡探求の端緒の一つとなったと考えられる。

また、駒井氏はこの石器の発見と氏が蒙古高原で採集した石核と似たチャート製の石核が桐生の近くから発見された[注3)]のをあわせ、「我が国にも欧亜に弘布している細石器文化があったことが証明されるに至った」と述べている（駒井　1954）。駒井氏が戦前の蒙古高原での成果を基に「細石器文化」の追求を戦後に国内でも行っていたことを示す重要な報告である。

また、1954年春には戦前、神田五六氏により採集された信濃川流域の飯山市安田神社遺跡の黒曜石製細石刃石核が芹沢・麻生両氏により注意され（麻生・戸沢・1956）、1955年夏には飯山市オリハンザ遺跡の細石刃が樋口昇一・麻生両氏によって確認されている（麻生・戸沢1956）。1957年には中川成夫・芹沢長介両氏を中心とした新潟県中魚沼郡地域（妻有郷）の考古学的調査によって十日町市愛宕山遺跡の船底形石器が報告されている（中川・芹沢他1958、菅沼2003）。このように単品資料を中心に資料の蓄積がはかられた。

1957年８月には星野芳郎・井口通泰両氏によって荒屋遺跡が発見され（星野・井口1968）、1958年に芹沢長介氏を中心として荒屋遺跡の第１次調査が実施されている（芹沢　1959）。荒屋遺跡の発見により矢出川遺跡と異なる細石刃石核の形態と荒屋型彫器の有無などが確認された。1950年代までの経緯を見ていくと芹沢氏らによる細石刃遺跡の探求は千曲川上流域の矢出川遺跡（戸沢1964、芹沢・柳沢1982）から始まり、野尻湖近辺を経由し千曲川・信濃川を下る形での流域研究も意図されたようである。

1962年には荒屋遺跡と同様の石器群を探求していた長岡市立科学博物館の中村孝三郎氏により、下田村中土遺跡が発見され、1964年８月に調査された（中村1965ａ、新潟石器研究会1996）。くしくも1964年４月には滝沢浩氏により「本州における細石刃文化の再検討」と題された論文中（滝沢1964）に荒屋遺跡を検討する中で触れ「荒屋遺跡は、本州において、孤立した遺跡であることを再認識したい。」と述べられた直後である。1963年には野尻湖底総合調査第二次の際に杉久保Ｃ遺跡が調査され細石刃が１点出土し、既出資料として荒屋型彫器３点、掻器１点などが出土している（森嶋1976）。1968年には荒屋遺跡から魚野川の直線距離で約6.5km上流で荒屋遺跡の発見者である星野芳郎・井口通泰両氏により堀之内町月岡遺跡が発見され[注4)]、同年、中村孝三郎氏により発掘調査が行われた（中村・小林1975）。それと前後して中村氏による細石刃遺跡を目的とした調査が、1963年には六日町上ノ台遺跡（佐藤他1989、小熊編1998）、1969年に下田村藤平遺跡（中村他1972）、1971年に三島町千石原遺跡（中村他1973）で行われている[注5)]。

1968年には荒屋遺跡出土石器をもとに大塚和義氏が「荒屋技法」が提唱した（大塚1968）。その後、大塚氏の提

唱をめぐって多くの議論が行われており、技法研究のケーススタデイーとして重要な論文となった（永塚1997他）。

1970年代初頭までに調査された遺跡の中でも荒屋遺跡と中土遺跡は細石核の型式学的な変遷の標準遺跡とされ、多くの論考に記載されている（麻生1965、中村1965ｂ他）。

1970～1980年代初頭

この年代においては発掘調査例は少ないが当地域で継続的な分布調査の成果やそれらをもとにした論考が発表されている（三条商業高校社会科クラブ考古班　1971・1980、三条ジュニア考古学クラブ　1973、中村1978、佐藤　1981、中島1982）。1981年に発表された佐藤雅一氏の論考では五十嵐川流域の旧石器編年を関東地方との石器群編年との対比で行っており、地域流域編年をいち早く行った事例で注目される（佐藤1981）。1976年には小矢部市日の宮遺跡から単独出土ながら細石刃石核が１点出土している（上野他1978、山本1992）。全国的な視野にたった研究としては小林達雄氏による「システム論」による研究成果が公表されている（小林1970）。

1979年には織笠昭氏により中部地方北部の細石器文化の様相比較が荒屋・月岡・中土遺跡の３遺跡の細石核型式と石器組成および石器制作技術の観点から詳細に述べられている。この報告の中では未報告であった荒屋遺跡の１次調査資料の一部（扁平石核等）が精密な実測図として公表されたことが特筆される。

1979年以降に森嶋　稔氏が発表した３本の論文では、細石刃石核の型式の地域差と生態環境の関わりに触れ、中部高地では「矢出川型」の細石刃石核が「中部高地の南部の高原地帯に分布する一群」と、楔形細石刃石核が「北部の河川地帯に分布する一群」とに明瞭に分けられるとした（森嶋1979、1985ａ・ｂ）。

1980年代

1980年代に入り発掘調査例が徐々に増加する。1982・1985年に野尻湖発掘調査団が陸上発掘調査の一環として向新田遺跡の調査を行い、良好な細石刃石器群を検出している（野尻湖人類考古グループ1987）。

1984年には特異な細石刃石核が出土する関川村荒川台遺跡が発見され（阿部・高橋1986）、その後1986年から継続調査が実施された（阿部1992ｂ他）。その調査成果から豊富な接合資料等をもとに「荒川台技法」が提唱されている（阿部1993ｂ）。また、神山型彫器と基部調整のナイフ形石器を特徴とする石刃石器との伴出関係などに注目が集まった。

1987～1989年にかけては湯沢町大刈野遺跡が調査され（佐藤1989、佐藤他1988・1991）、細石刃、細石刃石核、大形の尖頭器、無文土器などが出土している。この調査では、地質学者との連携で広域火山灰と出土層位との関係をあきらかにした点が特筆される。前述の野尻湖の調査とともに、このころから旧石器時代の調査には火山灰分析を行うことが常態化している。1987年には見附市田井Ａ遺跡の確認調査が行われ少量ながら黒曜石製の円錐形細石刃石核と細石刃が出土した（田中他1097）。同年には綿貫俊一・堤　隆氏により荒屋遺跡採集資料が公表された（綿貫・堤1987）。この報文の中で荒屋型彫器の型式学的な属性に関して、彫刀面に直行した剥離を「フラットグレイバー状剥離」と命名し見いだした点が注目される。また、この時点では荒屋遺跡出土遺物は採集品を含め膨大な量の存在が知られていたが[註6]、発掘資料を含めて公表された実測図が少なく検討が難しい状況にあった。荒屋遺跡の採集資料の公表も中村孝三郎氏により発見者の星野芳郎氏採集石器の紹介（中村1961・1966・1978）、前述の大塚氏による紹介があったが非常に少なかった。この論考の後に採集品の発表が積極的に行われるようになった。現在では荒屋遺跡採集資料の報告は中村・大塚氏報告以外に管見では10件以上（西井1975、立木1988、富樫1990、美安1995、竹岡1996、立木他1996、山本1998、加藤1998、菅沼1999、徳澤1999、山本2002、笠井・阿部2003、長沼・佐野2003）あり、今後も積極的な公表が望まれる。1988・1989年には、荒屋遺跡２・３次調査が行われた（芹沢他1990）。１次調査の調査者であるの芹沢長介氏を中心とするもので、調査区も１次調査の継続として行われた。調査では多くの遺構と多数の石器の出土が目を引いた。中でも概報の中で示された細石刃石核と荒屋型彫器の接合例は、長年交わされた荒屋遺跡での彫器など剥片石器の素材に係わる議論の重要な手がかりとなった。

1987年には橋本勝雄氏は東日本の細石刃文化について研究動向を述べる中で当地域について触れている。北方系の細石刃石器群は新潟県では８遺跡、富山県１遺跡があげられている。

1988年には水原町大平遺跡の発掘調査が実施された。出土資料は少量ながら採集資料もあわせると削片系細石刃

石核と細石刃、掻器・削器が出土している（小野1989、小野他1991）。一部、彫器等が含まれるがその後の採集品などから杉久保型ナイフ形石器、神山型彫器などが追加（菅沼2000）されており、複数の石器群が存在するようである。

1989年には堀之内町月岡遺跡の確認調査が実施され、石器集中地点が１か所確認された（鈴木・田海1990）。しかし、中村氏が1968年に発掘した地点は明瞭には確認できなかった。

1990年代～2003年10月現在

1990年には信濃町上ノ原遺跡が調査された（中村1992）。荒屋遺跡についで当域では２例目となる細石刃文化期の遺構が確認された。あわせて稜柱形の細石刃石核が多量に出土し、尖頭器と局部磨製石斧が出土している。同年には飯山市千苅遺跡出土石器が再報告され、既報告の２点の細石刃石核に加え、細石刃石核母型が２点追加された（中島1990）。

1991年には加藤稔氏により東北日本の細石刃文化についての氏の集大成的な論文が公表され、中部地方北部の遺跡についても言及されている（加藤1991）。同年、中里村千溝遺跡から細石刃石核が１点単独出土している（佐藤他1994）。1993年には『シンポジウム　細石刃文化研究の新たなる展開』誌上で高橋春栄・沢田　敦・立木宏明・菅沼　亘・吉井雅勇氏による中部北半・北陸地方の細石刃文化の集成が行われた（高橋他1993）。その時点で集成されたのは33遺跡である。同書には菅沼亘氏による編年案が示されている。同年、吉井雅勇氏による「中部日本の細石刃文化」の論考があり（吉井1993）、細石刃石核型式と石材の関係や石器組成などから北方系細石刃石器群の在地化の過程を検討している。

1993～1995年には新潟県朝日村樽口遺跡が調査され、いわゆる白滝型の細石刃石核を持つ石器群とホロカ型の細石刃石核を持つ石器群が出土した（立木他1996）。1994年には菅沼亘氏等により野尻湖周辺の細石刃石器群が椎ヶ崎遺跡等の再実測図とともに発表された（菅沼・野尻湖人類考古グループ）。1995年には白石典之氏によって中部・関東地方の細石刃石器群の検討が行われている（白石1995）。

1996年に津南町小坂平遺跡の細石刃石核が１点単独出土している（佐藤他1999）。同年には新潟石器研究会において中土遺跡出土遺物の再検討が行われ、再図化がなされるとともに母岩別分類と分布状況の検討からナイフ形石器群と細石刃石器群との分離が行われた（新潟石器研究会1996）。同年、津南町正面中島遺跡が調査された、削片系の細石刃石器群で荒屋型彫器やスクレーパー類が伴出した（佐藤・佐野2002）。また、同年、筆者は中部地方北部の細石刃石器群を含めた編年案を示した（立木1996）。

1997年には朝日村中原野北遺跡Ｃ地点の非削片系細石刃石核と細石刃が報告されている（高橋・立木1997）。

1998年には吉井雅勇氏による新潟県内の北方系細石刃石器群に関する論考と（吉井1998）、加藤学氏による角二山型掻器に関する論考がある（加藤1998）。1999年には新潟県内の細石刃石器群の総括的な編年案が示されている（吉井1999）。1999年と2002年には荒屋型彫器に関する論考が３編ある（加藤1999、鹿又2002、山科2002）。また、切り口は異なるが荒屋遺跡等を題材とした論考が２編出されている（永塚1997、加藤2001）。　2001年には再度、荒屋遺跡の範囲確認調査が行われ、遺跡が広範囲に広がることが確認された（沢田・田海2002）。

野尻湖周辺では、国道・高速道などの開発に伴う発掘調査で少量ながらも細石刃文化関連資料が出土している。遺跡名を上げると信濃町仲町遺跡（渡辺2001・2002、鶴田2002）、上ノ原遺跡（谷他2000）、大久保南遺跡（谷他2000）、裏ノ山遺跡（谷他2000）である。

2000年には津南町上原Ｅ遺跡で白滝型の細石刃石核を含む細石刃石器群が検出された（佐藤他2000、佐藤2001）。尖頭器、石斧などを含む組成の石器群である。同年、報告例の少ない富山県で富山市向野池遺跡採集の細石刃石核が１点報告されている（高橋2000）。

2　遺跡の分布と遺跡群の分布傾向

今回の報告では50遺跡（図版１）が確認された。1993年の集成時には33遺跡であることから、17遺跡が増加していることになる。中部地方北部では長野県と新潟県にまたがって流れる千曲・信濃川を代表として、多くの河川が

日本海に流れる。それらの流域ごとに特徴のある石材が解明されつつあり（中村1986、佐藤他1988、阿部1995他）、分布傾向をつかむには流域ごとに区分することが有効である。先回の例にならい流域ごとの分布状況を北から確認する。流域ごとのまとまりが遺跡群としてのまとまりとなる場所が多い。

三面川流域

それぞれ、河岸段丘上に位置する。上流域で１遺跡と中流域で１遺跡が確認されている。上流域の樽口遺跡は河川の合流点に位置する。朝日連峰を介して北に約30ｋｍほどで、山形県越中山遺跡群に南に約20ｋｍで山形県湯ノ花遺跡にいたる。

荒川流域

飯豊連峰と朝日連峰から流れる荒川の河岸段丘上に荒川台遺跡のみ１遺跡が確認されている。

加治川流域

４遺跡が確認されている。上車野Ｇ遺跡、上ノ山Ｃ遺跡、熊谷内遺跡が加治川右岸の開析扇状地上にあり、田家池ノ平遺跡は五頭山麓から伸びる馬ノ背状の尾根に立地する。

阿賀野川流域

３遺跡が阿賀野川中流域の右岸に分布する。大平遺跡は五頭山麓の扇状地上に位置し、中道遺跡、行塚遺跡Ｂ地区は開析された尾根上に位置する。

五十嵐川流域（信濃川支流）

５遺跡が確認されている。支流上流域に２遺跡（中土・御淵上遺跡）、支流中・下流域に３遺跡（藤平・小戸谷・吉野屋遺跡）５遺跡ともに河川の段丘上および丘陵上に位置する。

刈谷田川流域（信濃川支流）

１遺跡（田井Ａ遺跡）ある。丘陵上の緩斜面に位置する。

鵜川流域

１遺跡ある。海岸近く（海岸段丘？）に位置する。船底型石器が１点出土している。

魚野川流域（信濃川支流）

３遺跡あり、丘陵上および段丘上にある。支流上流域には大刈野遺跡、下流域には月岡・荒屋遺跡が所在する。荒屋遺跡は魚野川と信濃川の合流点に所在する。

信濃川中流域

２遺跡ある。信濃川左岸の段丘上に瓜割遺跡と天上原遺跡がある。最近確認された瓜割遺跡は小千谷市から長岡市にかけての信濃川が沖積地へ進出する部分にあたる旧石器時代遺跡の希薄な地点での発見に意義がある。

信濃川上流域

６遺跡ある。全て信濃川の河岸段丘上にあり、近年の遺跡増加がめざましい地域である。

千曲川下流域

７遺跡確認されている。先回の集成時には資料集成が欠落していた地点である。全て信濃川の河岸段丘上に位置する。便宜的に区分した信濃川上流域と連続する地域である。小野平遺跡のみ標高1,000m内外の高地にある。

関川流域

関川左岸の海岸近くに位置すると考えられる。

野尻湖周辺

10遺跡確認された。狭い地域に高密度に分布している。湖に面する丘陵斜面上および湖岸に位置する。遺跡の性格として野尻湖との密接な関係が窺われる。

神通川流域

呉羽山丘陵上に所在する向野池遺跡が１遺跡確認されている。

小矢部川流域

小矢部川段丘上に日の宮遺跡が１遺跡確認されている。

その他

新潟県佐渡地方と石川県では明確な細石刃文化の遺跡は確認されなかった。但し、畑野町三宮遺跡で細石刃様の剥片が２点（橋本他2003）採集されている。小松市念仏林遺跡では細石刃石核の可能性が指摘されている珪質頁岩製の石核が１点出土している（松山1993）。佐渡地方には縄文時代草創期の痕跡が確実にあり（小熊・立木1998）、将来、当該期の遺跡が確認される可能性がある。また、石川県は東海・近畿地方に繋がる回廊的な位置にあり、北方系の細石刃石器群の分布が中国地方まで広がる傾向を考慮すれば、今後の発見が期待される。また、富山県では大沢野町小長谷遺跡で船底形細石刃石核の検出（西井1983）が報じられているが詳細は不明である。

以上のような現状をまとめると、河岸段丘上に立地する傾向が高く、河川水系との密接な関係を伺うことが出来る。柏崎市剣野Ａ遺跡や上越市五智周辺などは、当時の海水面の低下を考慮しても、海岸線に近い地域での活動痕跡を示すものであろう。

３　組成の特徴

今回集成された50遺跡のうち石器総数が50点以上確認される遺跡は、樽口遺跡、荒川台遺跡、中土遺跡、月岡遺跡、荒屋遺跡、正面中島遺跡、上原Ｅ遺跡、向新田遺跡、上ノ原遺跡（１次）の９遺跡である。それ以外は単体での出土が多い。各遺跡の石器数については組成表にまとめてあ。以下、流域ごとに解説を加える。なお、解説の一部には、1993年の記載（高橋他1993）を使用した。

三面川流域

中原野北遺跡（図版２－１～４）からは、残核形態が円錐形の細石刃石核が２点採集されている（高橋・立木1997）。厚手の剥片を素材としており、報告時には「船野型」を考慮に入れたが、現時点ではホロカ型と稜柱形の細石刃石核の二者が考えられ、判断を保留したい。

樽口遺跡Ａ－ＭＳ文化層（図版３）からは総数5484点が出土した。細石刃、白滝型を含む細石刃石核、細石刃石核母型、細石刃石核削片、削器、掻器、彫器（荒屋型）、尖頭器などがある（立木他1996）。石材はほとんどが黒曜石で一部珪質頁岩と無斑晶質安山岩などがみられる。樽口遺跡Ａ－ＭＨ文化層（図版４）からは総数204点が出土し、細石刃、ホロカ型の細石刃石核、削器、掻器、彫掻器、彫器、尖頭器などが確認された。石材はほとんどが珪質頁岩で若干の玉随も出土している（立木他1996）。

アチヤ平遺跡（図版２－５）からは、黒曜石製の削片系細石刃石核が１点出土している（富樫他2002）。近隣の樽口遺跡に類似した細石刃石核が出土している。但し、段丘面は縄文時代草創期～早期に形成されており、縄文時代前期以降に搬入された遺物と考えられている。

荒川流域

荒川台遺跡（図版５－１～９）細石刃、細石刃石核、削器、掻器、彫器、尖頭器、ナイフ形石器、石核などが出土している。細石刃製作技術は「荒川台技法」（阿部1993ｃ）によるものである。現在までに２次調査までの詳細な報告（阿部1992ｂ、阿部編2002）がなされているが、細石刃石器群とナイフ形石器と彫器などを含む石刃石器群との共伴関係についてはは結論が出ていない。石材は頁岩が主体で少量の黒曜石が入る。

加治川流域

上車野Ｇ遺跡（図版２－６）からは珪質頁岩製のホロカ型細石刃石核が１点採集されている（高橋他1993）。上ノ山Ｃ遺跡（図版２－７）からは珪質頁岩製の削片系の細石刃石核母型が１点採集されている（高橋1990）。田家池ノ平遺跡（図版２－８・９）からは玉随製の稜柱形細石刃石核が２点出土している（小林2000）。小形石刃石核の可能性も考慮されている。熊谷内遺跡からは珪質頁岩製の荒屋型彫器が１点出土している[注7)]。

阿賀野川流域

中道遺跡（図版２－10）からは珪質頁岩製の削片系細石刃石核が１点採集されている（菅沼1991）。行塚遺跡Ｂ地区（図版２－11）では珪質頁岩製の荒屋型彫器が１点出土している（高橋他1993）。大平遺跡（図版５－10～22）からは採集品を含めて細石刃、細石刃石核、削器、掻器、彫器、尖頭器などが出土している（小野他1991）。石材

は珪質頁岩、玉髄などがある。同遺跡からは杉久保型ナイフ形石器、神山型彫器などが採集（菅沼2000）されており複数の石器群が存在する。

五十嵐川・刈谷田川流域

吉野屋遺跡（図版６－１）からは細石刃石核が２点採集されている（三条ジュニア考古学クラブ1973）[注8]。おそらく、削片系の細石刃石核である。藤平遺跡からは細石刃、細石刃石核母型、スクレイパー類が出土している（中村他1972）。御淵上遺跡（図版６－２）からは珪質凝灰岩製の稜柱形の細石刃石核が１点出土している（立木1988）。ナイフ形石器、尖頭器などが出土した発掘地点（中村1971）より南に80m離れた地点から単独採集された。小戸谷遺跡からは珪質頁岩製の荒屋型彫器１点が採集されている。

鵜川流域

剣野Ａ遺跡から珪質頁岩製の細石刃石核母型の可能性がある資料が出土している（伊藤・品田1987）。

信濃川中流域

瓜割遺跡（図版６－13・14）からは珪質凝灰岩製の削片系細石刃石核母型と珪質頁岩製の削片が各１点出土している（駒形他2000）。天辺原Ａ遺跡からは珪質頁岩製の荒屋型彫器が１点採集されている。

魚野川流域

月岡遺跡（図版８）からは発掘資料が１、２次で378点あり（中村・小林1983）、採集資料も相当の数ある（鈴木・田海1990）。細石刃、削片系細石刃石核、細石刃石核母型、細石刃石核削片、荒屋型彫器を含む彫器、掻器、石刃石核などが出土している。石材は珪質頁岩が大部分を占める。

荒屋遺跡（図版９）からは発掘資料で約7,000点の石器が出土している（芹沢1959、芹沢他1990、沢田・田海2002）。それ以外、採集品も前述したとおり数多く存在する。出土石器は細石刃、削片系およびホロカ型の細石刃石核、細石刃石核母型、細石刃石核削片、掻器、削器、彫器、鏃型石器、石錐、礫器、扁平石核などが出土している。彫器は、荒屋型彫器が大部分を占める。19基の遺構が重複して検出されている。石器石材の多くは、珪質頁岩である。一部、凝灰岩や黒曜石を含む。

大刈野遺跡（図版10－１～３）では、３次にわたる調査により、細石刃、削片系細石刃石核、細石刃石核母型、彫器、尖頭器などが出土している（佐藤1989、佐藤他1988・1991、吉井1998）。石材は珪質頁岩を主体に、黒曜石、チャートなどが出土している。

上ノ台Ｉ遺跡（図版10－４・５）では、細石刃、削片系細石刃石核[注9]、スクレイパー類、荒屋型彫器などが採集されている（佐藤他1989、山本1997、織田1999）。石材は珪質頁岩が用いられている。

信濃川上流域

愛宕山遺跡（図版10－６）からは、珪質頁岩製の船底形石器が１点採集されている（中川・芹沢他1958）。千溝遺跡（図版10－７）からは珪質頁岩製のホロカ型細石刃石核が１点出土している（佐藤他1994）。屋敷田遺跡からは細石刃３点と荒屋型彫器が１点出土している（津南町役場1984、高橋他1993）。細石刃は玉随製１点、珪質頁岩製２点、彫器は珪質頁岩製である。釜堀川東遺跡（図版10－８）からは珪質頁岩製の荒屋型彫器が１点出土している（高橋他1993）。小坂平遺跡（図版10－９）からは珪質頁岩製の削片系細石刃石核が１点出土している（佐藤他1999）。

上原Ｅ遺跡（図版10－10～15）には発掘調査終了時の総計2,536点の石器があり、細石刃、細石刃石核（白滝型を含む）、細石刃石核削片、尖頭器、削器、掻器、彫器、石刃、石斧調整剥片などが出土している（佐藤他2000、佐藤他2001）。石材は黒曜石を主体とし、頁岩（珪質頁岩を含む）、凝灰岩、安山岩などがある。

正面中島遺跡（図版11）からは総計156点の比較的まとまった資料群が出土している。細石刃、削片系の細石刃石核母型、細石刃石核削片、削器、掻器、彫器、礫器などが出土している（佐藤・佐野2002）。材は珪質頁岩を主体とし、頁岩、玉随、緑色凝灰岩などで構成される。

関川流域

五智周辺（図版10－16）で黒曜石製の稜柱形の細石刃石核が出土している（駒井1953・1954）。

千曲川下流域

オリハンザ遺跡（麻生・戸沢1956）、真宗寺裏遺跡（高橋1980a）、大塚遺跡（高橋1974）、北竜湖遺跡（高橋1980ａ）、宮中遺跡（高橋1980ａ）、安田神社遺跡（高橋1980a）から細石刃、細石刃石核が出土しているが詳細は不明である。

千苅遺跡（図版12－１～４）からは削片系と稜柱形の細石刃石核各１点と細石刃石核母型２点が出土している（中島1982、1990）。小野平遺跡（図版12－５）からは珪質頁岩製の削片系の細石刃石核が出土している（森嶋1976）。

野尻湖周辺

樋ヶ崎遺跡（図版12－６）からは珪質頁岩製のホロカ型細石刃石核が出土している（森嶋1976）。杉久保Ｃ遺跡（図版12－７～10）からは荒屋型彫器と掻器が出土している（森嶋1976）。向新田遺跡からは比較的まとまった資料が出土している（野尻湖人類考古グループ1987）。細石刃、細石刃石核、スクレイパー類が出土している。石材は黒曜石、チャート、珪質凝灰岩、黒色頁岩など多様な石材が用いられている。仲町遺跡（図版13－１～14）は広範囲におよぶ遺跡であり、発掘地点ごとに異なる多様な石器が出土している。１・２は各々単独資料である（吉松・小林1975、中村他1978）。「荒川台技法」に類似する製作技法が用いられていると指摘されている（菅沼・野尻湖人類考古グループ1994）。石材は玉髄と珪質凝灰岩である。国道関係の調査でも細石刃、細石刃石核（３～14）が多数出土している（渡辺2001・2002、鶴田2001）。上ノ原遺跡からは町教委による１次調査では細石刃、細石刃石核、彫器、スクレイパー類、局部磨製石斧などが出土している（中村1992）。遺構としては、石囲い炉が５基検出されている。石器石材は黒曜石、珪質頁岩などである。稜柱形の細石刃石核を主体としているようであるが未報告のため詳細は不明である。上信越道による調査では黒曜石製の稜中形細石刃石核１点と細石刃１点が出土している。大久保南遺跡（図版13－17）からは黒曜石製のホロカ型細石刃石核が１点出土している（谷他2000）。また、町教委の調査では削片系の細石刃石核と同削片の出土が報じられている[注10]。裏ノ山遺跡（図版13－18～26）からは細石刃と細石刃石核が出土している。

神通川流域

向野池遺跡（図版13－27）から黒曜石製の稜柱形細石刃石核が１点出土している（高橋2000）。

小矢部川流域

日ノ宮遺跡Ａ地区（図版13－28）から頁岩製の削片形細石刃石核が１点出土している（山本1992）。

４　編年と様相

当地域における編年研究は、1990年以降の資料増加で、急速に見直しが迫られる状況になった（吉井1998）。また、当地域の編年に影響を与えている北海道地域の動向では、複数型式が同一石器群に入り込み、従来の細石刃石核残核型式から導かれた編年を組み立てることには無理が生じている（木村1995）。特に当地域では、荒屋遺跡と中土遺跡および月岡遺跡に代表される石器群の編年を巡って研究史の初期から議論され、細石刃石核型式での順列で異なる編年（逆転する編年）が組み立てられた経緯がある（加藤2001）。

さて、現状ではどう考えればよいのか。前述した北海道と同様な問題があり、寺崎康史氏が述べるように個々の細石刃石核製作技術は充分なされたとはいえない状況である（寺崎1999）。寺崎氏は次のようにしてきしている「細石刃核の素材選択から残核にいたる全工程を通じた細石刃生産技術をもって、「技法」あるいは「型式」を設定し直す必要があり、そうして識別された「技術型式」は当該地域の細石刃石器群の編年および地域性を考察する上で、今なお有効性を保っていると考える。」まさに当地域でもこの方向性が必要であろう。但し、これを実践すべき石器群は当地域で思い当たる資料群は樽口遺跡、荒川台遺跡、荒屋遺跡、上原Ｅ遺跡など数遺跡である。単品資料群が多い当地域では全てをこれにおきあてるのは難しい現状もある。単品資料を生かし共通理解を図るために、今回の編年にあたっては暫定的に旧型式名を用いての説明にならざるを得ないが、1993年の菅沼　亘氏の分類（高橋他1993）、1999年の吉井雅勇氏の分類（吉井1999）を参考に若干の修正を加えて説明を行う。当地域の細石刃石器群を細石刃石核型式および技法を中心に分類し、代表的な遺跡を示す。

Ⅰ類　荒川台技法および矢出川技法による細石刃石核をもつ石器群

ａ　荒川台技法と矢出川技法によるもの（荒川台遺跡、仲町遺跡）

ｂ　矢出川技法によるもの（田井Ａ遺跡、上ノ原遺跡（１次）、向新田遺跡）

Ⅱ類　削片系およびホロカ技法による細石刃石核をもつ石器群

ａ 札滑型によるもの　（大平遺跡、中土遺跡、正面中島遺跡）

ｂ 札滑型とホロカ型によるもの（荒屋遺跡、月岡遺跡）

ｃ　白滝型とホロカ型によるもの。（樽口遺跡Ａ－ＭＳ、上原Ｅ遺跡）

ｄ　ホロカ型によるもの。（樽口遺跡Ａ－ＭＨ））

当地域の細石刃石器群の層位的な検出例がなく、筆者が前に検討したように風化火山灰層の堆積も薄い状況である（立木1996）。編年的には近隣地域の事例に頼らざるをえないのが現状である。例えば群馬県赤城山麓の層位事例では浅間山起源の火山灰をかいして市之関前田遺跡（「野岳・休場型」）がＡｓ－ＳＰ直下辺りに、柏倉吉見沢遺跡（ホロカ型）や頭無遺跡（削片系）の出土層位がAs－YP直下から出土しており（細野1991）、この成果に基づけばⅠ類からⅡ類の変遷が当地域で想定できる。

資料数が多いⅠａ類の荒川台遺跡は、荒川台技法による細石刃石核が中心に稜柱形（矢出川型）の細石刃石核もみられる（阿部編2002）。また、野尻湖近隣の仲町遺跡からも類似した形態の細石刃石核が含まれ、遠く北海道での類例の指摘もあるが、この地域に分布の中心を持つ型式群の可能性がある。荒川台技法による資料は、在地の珪質頁岩を主体としており、黒曜石と異なる石材属性に適応した技術型式なのかもしれない。石刃石器群の共存については、筆者は現状では否定的に考えている。Ⅰｂ類の田井Ａ遺跡では稜柱形の細石刃石核と細石刃が少量出土しているが、全体の様相は不明である。また、上ノ原遺跡（１次）は本報告未刊のため内容の詳細は不明である。向新田遺跡は菅沼氏の指摘があるように尖頭器石器群が重複して同層位に存在する可能性が高く組成的な様相の検討が難しい（菅沼・野尻湖人類考古グループ1994）。このような現状では、Ⅰa類とⅠｂ類の新旧分別は現状では困難である。むしろ、荒川台遺跡などの様相からはセツルメントの違いによる差異との見方を強くしている。稜柱形の細石刃石核は、矢出川遺跡出土の細石刃石核との類似から一括して矢出川技法による
細石刃石核としているが、今後の検討により西南日本に分布する細石刃石核との型式学的検討により細分される可能性をひめている。

Ⅱ類はａ～ｄ類の４類型に分けた。筆者はかつて「削片系のみ保有する段階（中土・大平）から削片系＋ホロカ型の段階（荒屋・月岡）」を想定した（立木1996）。特にこのときに根拠として重視したのは東北地方の変遷観（桜井1991など）などを根拠にしており、それに加えて大平遺跡の大形の削器・掻器類と中土遺跡の精緻な細石刃石核製作技術と大形の削器・掻器類、荒屋型彫器の欠如などに北方系細石刃石器群の第１段階世代の移動装備を描き、精緻なものから崩れたものへの変遷（在地化）を想定した。しかし、その後の批判にあるように（加藤2002）、当地での証明は難しい状況であった。現状では、その後に調査された正面中島遺跡などには珪質頁岩製の削片系細石刃石核に同石材の大形削器・掻器に荒屋型彫器が伴い（佐藤・佐野2002）、先の想定は崩れている。また、荒屋遺跡などは多種多様な石器が出土しており、7,000点あまりの発掘資料と大平・中土遺跡などの数十から百点規模の遺跡を単純比較するのは難しいと考えている。荒屋遺跡などは複数の遺構をもつことや膨大な遺物量から存続時期の長い遺跡であるいことも考慮に入れる必要がある。よって現状ではⅡａ類とⅡｂ類の遺跡の差異は先に菅沼氏が指摘した「セツルメント・パターンの差」（新潟石器研究会1996）が大きな要因で、組成の差異はあるが大枠では時期的な差異は無いと考える。

Ⅱｃ類の樽口遺跡Ａ－ＭＳ文化層[注11)]では白滝型の細石刃石核にホロカ型の細石刃石核（図版３－15）も加わる。両者とも黒曜石を使用しており、一連の製作技術で製作されている。その他、削器、掻器、彫器、尖頭器などが出土している。概報段階ではあるが樽口遺跡と類似した石器群が確認された上原Ｅ遺跡（佐藤他2000）では、石斧なども出土しており樽口遺跡の尖頭器などと共に新しい要素が入りこんでいる。北海道地方の編年（寺崎1999）との併行関係からも細石刃石器群の中では新しい段階と考えられる。Ⅱｄ類は樽口遺跡Ａ－MH文化層がある。ホロカ

型の細石刃石核と大形の削器・掻器・彫器・彫掻器や尖頭器の組み合わせである（立木他1996）。この組成は土器出現期の遺跡である青森県大平山元Ⅰ遺跡（三宅他1979、谷口編1999）などの組成に類似し、新しい要素と考えている。Ⅱｃ類とⅡｄ類の関係であるが別系統で同時期に存在する石器群であろう。当地域では白滝型の細石刃石核をもつⅡｃ類は当地域においては客体的で、珪質頁岩の削片系とホロカ型を主体とする細石刃石核をもつ石器群が主体的である。

以上のことから、Ⅱｃ類とⅡｄ類はⅡａ類、Ⅱｂ類よりは新しい段階に位置づけられる可能性が高い。但し、珪質頁岩製の削片系の細石刃石核は新規としたⅡｃ・Ⅱｄ類の時期まで存続すると考えている。

石材の様相では黒曜石産地同定分析について新知見があり、Ⅰ類とした荒川台遺跡では秋田県男鹿半島と長野県和田峠（阿部・井上2003）、Ⅱ類の上原Ｅ遺跡では長野県小深沢、秋田県脇本海岸（佐藤2003）などの結果が出されている。先に出されているⅡ類の樽口遺跡の秋田県男鹿半島、長野県和田峠（立木他1996）の結果と合わせて広域な石材の移動が確認されている。

5　研究の課題

最後に今後の研究の課題について４項目について述べたい。

A　編年研究

先行する尖頭器石器群との関係である。つまり細石刃使用の始まりの問題である。当地域においては細石刃石器群に先行する石器群は真人原遺跡に代表される尖頭器石器群がある（小野編2002）。当遺跡にはまったく細石刃等の出土は無く、過渡期的な要素は認められない。Ⅰ類とした石器群との間に過渡期的な様相の石器群がるのか今後の検証が必要である。また、単品資料を中心に稜柱形細石刃石核が出土する遺跡も多くあり、西南日本、関東などの類似する細石刃石核との比較検討も必要である。一方、細石刃使用の終末期も問題となる。Ⅱｃ・ｄ類のなかに後代に引き継がれる大形の尖頭器、彫掻器、石斧などが存在しており、神子柴遺跡などに代表される移行期の石器群ともあるいは並行関係にある可能性もあり、今後の資料増加と検討の必要性を感じている。

B　細石刃製作技術

寺崎氏が述べた細石刃製作の全工程が分かる技術の研究は、当地域を対象にしたものでは、「荒川台技法」（阿部1993）の設定がその良いケーススタデイーとなろう。豊富な接合資料により具体的な工程を明らかにしている。また、筆者も白滝型の製作技術について接合資料をもとに若干の新知見を見いだしたが（立木他1996）、接合により概念化された技法がより具体的なることは明らかである。その中で技法の再設定を行い、具体化することが必要と考えている。また、阿部朝衛氏により石器製作の技能差を問題にされている（阿部2003）。旧石器時代人の技能が等質なものであるとの考えが漠然と頭の隅にあった筆者にとっては、目から鱗の考えであった。当然技能の差によって最終形態が変わる可能性が高い。違う視点で言えば、例えば石器製作の上級者が作ったと思われる樽口遺跡の小形の細石刃石核（図版３－14）などは、単体資料であれば最終形態から判断して擦痕が無ければ稜柱形細石刃石核と誤認しかねない危険性をはらんでいる。それを見極める視点が必要であろう。

C　石材研究

石材については、今回あまり触れられなかったが、いくつか課題が残されている。Ⅱ類の荒屋遺跡に代表される茶色あるいは灰色の硬質な珪質頁岩の産地が今だ不明な点である。筆者が実見した群馬県などの荒屋型彫器の素材となる石材は筆者の知る限り、荒屋遺跡と同様の産地と考えられるが、肝心の新潟県においては珪質頁岩は七谷層という地質層序に含まれるが、これほど良質なものは産しないようである。むしろ、東北地域に産する可能性が高いと考えているが未知の産地がこの地域にある可能性もあり追求必要がある。また、黒曜石については在地のものを使用せず遠距離のものを使用している実態が明らかになってきた。黒曜石の産地同定を進めることがさらに必要であろう。

D　使用痕分析

沢田　敦氏により中土遺跡の細石刃を使用痕分析が行われ（新潟石器研究会1996）、鹿又喜隆氏により荒屋遺跡

の彫器の使用痕分析が行われ二重パテナの様相が明らかにされた（鹿又2002）。使用痕分析研究により石器の解釈、遺跡の解釈に広がりを与えることが可能となる。当地域においっても分析例を増加させることが期待される。

個別の課題についてあげてきたが、そのほかにも行動領域の問題、石器素材の追求や彫器・掻器などの個別形態の研究など今後の検討課題は多い。

末筆ではあるが本稿の執筆および地名表作成にあたり、阿部朝衛・小熊博史・小野　昭・勝山百合・加藤　学・小林高範・佐藤雅一・沢田　敦・菅沼　亘・鈴木　暁・鈴木俊成・高橋春栄・田中耕作・堤　隆・土橋由理子・中島栄一・中村由克・細野高伯・麻柄一志・増子正三・山川史子・山本　克・吉井雅勇・渡辺哲也・渡邊朋和の諸氏よりご教示・指導を受けた。図版作成には阿部泰之氏、澤野慶子氏の助力を得た。記して感謝申し上げる次第である。

注

注１　遺物の所在および正確な出土地点は不明である。「縄文式土器を出す遺跡から出土」と記載されているため、細石刃石核かどうか疑問が残るが、実測図から判断すると円錐形の細石刃石核の可能性が高いと指摘されている（上越市2003）。

注２　報告では赤城山麓の遺跡としか記載されていないが、群馬県枡形遺跡と判断した（相沢1956）。

注３　注２と同じく群馬県枡形遺跡の出土品を指していると思われる。

注４　星野芳郎氏等の月岡遺跡の表採遺物の一部は現在、東京国立博物館に所蔵されている。

注５　三島町千石原遺跡は先回の集成では細石刃文化の遺跡として扱ったが、写真からの判断ではあるが石刃石器群（ナイフ形石器群）の可能性が高いため除外した。

注６　発掘資料（１～３次）と採集品を含めて2001年時点で細石刃石核（細石刃石核母型含む）63点、彫器727点などをふくめ7206点が知られている（加藤2001）。さらに採集品には剥片類がカウントされていない可能性も高く、未公表の資料を含めるとおそらく彫器だけでも1,000点、総計で10,000点を超える資料が存在するのではないかと思われる。

注７　新発田市教育委員会のご教示による。

注８　１点は三条ジュニア考古学クラブの採集品（筆者未実見）、１点は2002年に長岡市立科学博物館に照会された石器である（筆者実見）。

注９　星野洋治氏による採集資料（筆者未実見）。

注10　読売新聞長野県版1996年７月20日付

注11　樽口遺跡の細石刃石器群の分離については、批判（加藤2002、佐野2002）もあり、若干説明する。その批判は平面的・垂直的に重複分布するブロックを異なる文化層として分離したことにある。報告書（立木他1996）の平面分布図は紙面の都合で出土石器全点を掲載した平面図のため、包含層位以外のⅠ～Ⅲ層の遺物も収録されており、ブロックもそれに合わせて広く取られている。崖錐堆積の影響で崖際に石器が押し流されているためＡ－ＭＨ文化層ブロック３は10m程度の円の範囲にあるが、実際のプラーマリーな層であるⅣ層の大形遺物は４m範囲に収まる。Ａ－ＭＳ文化層ブロック４についても同じ事が言え、Ⅳ層の大形遺物は４m範囲に収まり、ブロック間に数mの間隔がある。実際の調査時にも異なるブロックと認識して調査しており、石器形態、石材の違い、接合関係の有無などから、異なる石器群と認識した。あえて言えば石器群としては異なるが、編年的には同段階でありうる、当地に滞在した時期が重ならない（集団同士の接触がない）わずかな時期差を想定していた。当地域においては層位的に出土する例が無く、例え重複して同層位でも異なる時期の石器群が出土する可能性が高い。樽口遺跡においてもナイフ形石器群は異なる時期で平面的に重複して出土している。また、報告書に掲載した時期別変遷模式図が遺跡内のみの変遷を表したことが誤解を招いた面も否めないが、報告書のまとめに記したとおり、ホロカ型の存続時期に白滝型が波及したことを考慮にいれており、大枠では編年的には同時期と考えていた（立木1996）。以上を含めて樽口遺跡の細石刃石器群については別稿で詳しく述べる予定である。

引用・参考文献

相沢忠洋　1956　「北関東赤城山麓に於けるマイクロ・コアの発見」『貝塚』58

麻生　優　1965　「細石器文化」『日本の考古学Ⅰ　先土器時代』161～172頁　河合書房

麻生　優・戸沢充則　1956　「無土器文化」『信濃史料』第一巻下　５～25頁　信濃史料刊行会

阿部朝衛　1987　「新潟県関川村荒川台遺跡発掘調査」『法政考古学』第12集　17～23頁　法政考古学会

阿部朝衛　1990　「新潟県荒川台遺跡の発掘調査」『帝京史学』第５号　271～275頁　帝京大学文学部史学科

阿部朝衛　1991a　「新潟県荒川流域の遺跡踏査」『帝京史学』第６号　235～241頁　帝京大学文学部史学科

阿部朝衛　1991b　「新潟県関川村荒川台遺跡採集の石刃石器と細石刃核」『法政考古学』第16集　59～81頁　法政考古学会

阿部朝衛　1992a　「旧石器時代」『関川村史』通史編　35～57頁　新潟県関川村

阿部朝衛　1992b　「新潟県関川村荒川台遺跡第１次調査報告」『法政考古学』第18集　１～136頁　法政考古学会

阿部朝衛　1993a　「新潟県荒川流域の遺跡踏査（２）」『帝京史学』第８号　441～453頁　帝京大学文学部史学科

阿部朝衛　1993b　「細石刃技法の把握－荒川台技法－」『細石刃文化研究の新たなる展開』Ⅱ　161～171頁　八ヶ岳旧石器研究グループ・佐久考古学会

阿部朝衛　1993c　「新潟県荒川台遺跡の細石刃生産技術の実体－荒川台技法の提唱－」『法政考古学』第20集　１～22頁　法政考古学会

阿部朝衛　1994　「新潟県荒川台遺跡第四次調査略報」『帝京史学』第９号　415～423頁　帝京大学文学部史学科

阿部朝衛　1995　「新潟県北部地域における石器材料の調査」『帝京史学』第10号　353～372頁　帝京大学文学部史学科

阿部朝衛　1996　「新潟県北部地域における旧石器時代研究の現状と課題」『北越考古学』第７号　１～34頁　北越考古学研究会

阿部朝衛　2003　「旧石器時代の技術伝承と社会」『考古学ジャーナル』504　４～６頁ニュー・サイエンス社

阿部朝衛・高橋春栄　1986　「新潟県関川村荒川台遺跡の細石刃核」『考古学雑誌』第72巻第４号　102～109頁　日本考古学会

阿部朝衛編　2002　『荒川台遺跡－1989年度調査－』　帝京大学文学部史学科

阿部朝衛・井上　巌　2003　「荒川台人の行動領域－黒曜石化学分析結果をもとに－」『帝京史学』第18号　260～300頁　帝京大学文学部史学科

家田順一郎　1984　「４．小外谷Ａ地点」『国営総合農地開発事業予定地内埋蔵文化財確認調査報告書』　下田村教育委員会

池田　亨　1979　『上ノ原遺跡』　六日町教育委員会

伊藤恒彦・品田高志　1987　「剣野Ａ遺跡表採の先土器時代遺物」『柏崎市立博物館館報』Ｎｏ．２　105～107頁　柏崎市立博物館

上野　章他　1978　『富山県小矢部市日の宮遺跡発掘調査報告書』　富山県教育委員会

江口善次　1961　「先史時代」『岡山村史』第二編通史　23～34頁　飯山市公民館岡山支館

遠藤孝司　1990　『市内遺跡群細分布調査報告書』　小千谷市教育委員会

大塚和義　1968　「本州における湧別技法に関する一考察」『信濃』20－４　１～10頁　信濃史学会

織田拓男　1999　「六日町上ノ原地区採集の石器について」　『越佐補遺些』第４号　82～83頁　越佐補遺些の会

小熊博史編　1998　『特別展図録　越後長岡の考古学者　中村孝三郎の軌跡』　長岡市立科学博物館

小熊博史・立木宏明　1998　「佐渡島における縄文時代草創期の遺物」『新潟考古』第９号　133～149頁　新潟県考古学会

小野　昭　1989　「大平遺跡の調査結果（予報）」『水原郷土誌料』22　１～20頁　水原町教育委員会

小野　昭・菅沼　亘・藤田英忠　1991　「水原町大平遺跡の調査」『水原郷土誌料』第22集　１～20頁　水原町教育委員会

小野　昭編　『真人原遺跡Ⅲ』　真人原遺跡発掘調査団

織笠　昭　1979　「中部地方北部の細石器文化」『駿台史学』第47号　81～98頁　駿台史学会

笠井洋祐・阿部英二　2003　「川口町荒屋遺跡採集の細石刃石核削片」『越佐補遺些』第８号　７～８頁　越佐補遺些の会

加藤　学　1998　「いわゆる角二山型掻器の検討―荒屋遺跡採集の掻器から―」『新潟考古学談話会会報』第19号　24～34頁　新潟考古学談話会

加藤　学　1999　「荒屋型彫器の地域間対比―素材剥片の検討を中心として―」『新潟考古学談話会会報』第20号　１～11頁　新潟考古学談話会

加藤　学　2001　「荒屋遺跡と中土遺跡―共通点と相違点の実体把握と検討―」『研究紀要』第３号　１～26頁　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

川上貞夫他　1979　『上野林丘陵埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ　行塚遺跡　小山崎遺跡』　安田町教育委員会

川上貞夫他　1980　『上野林丘陵埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ（概報）　中道遺跡』　安田町教育委員会

鹿又喜隆　2002　「重複する使用痕の実験研究－出土資料による分析方法の再構築にむけて－」『文化』第66巻第１・２号　202～183頁　東北大学文学会

木村英明　1995　「黒曜石・ヒト・技術」『北海道考古学の諸問題』第31輯　３～63頁　北海道考古学会

小林達雄　1970　「日本列島に於ける細石刃インダストリー」『物質文化』16　物質文化研究会

小林　弘　2000　「新発田市田家池ノ平遺跡の旧石器（２）」『北越考古学』第11号　49～61頁　北越考古学研究会

駒井和愛　1953　『先史のアジア　アジアの歴史文庫』　福村書店

駒井和愛　1954　『考古学入門』　要書房

駒形敏朗・小熊博史・立木宏明　2000　『瓜割遺跡―土地区画整理事業に伴う発掘調査―』　長岡市教育委員会

桜井美枝　1991　「北方系細石刃文化の南下」『考古学ジャーナル』341　２～７頁　ニュー・サイエンス社

桜井美枝　1992　「細石刃石器群の技術構造－山形県角二山遺跡の分析－」『東北文化論のための先史学歴史学論集』　441～462頁　加藤　稔先生還暦記念会

佐藤雅一　1981　「五十嵐川流域の先土器時代遺跡」『三条考古学研究会機関誌』第２号　１～36頁　三条考古学研究会

佐藤雅一　1986　「六日町上ノ原地区採集の石器」『魚沼文化』26　17～25頁

佐藤雅一　1989　「新潟県南魚沼郡湯沢町・大刈野遺跡出土の石器群」『第二回長野県旧石器文化研究交流会－発表要旨－』　長野県旧石器文化交流会

佐藤雅一　2001　「津南町胴抜原Ａ遺跡・上原Ｅ遺跡の調査概要」『新潟県考古学会第13回大会　研究発表会発表要旨』　７～10頁　新潟県考古学会

佐藤雅一　2003　「遺跡の立地と集団の動き－新潟県・信濃川上流域における活動痕跡の様相－」『季刊　考古学第83号』　37～41頁　雄山閣

佐藤雅一他　1988　『大刈野遺跡』　湯沢町教育委員会

佐藤雅一他　1991　『大刈野遺跡－第３次発掘調査－』　湯沢町教育委員会

佐藤雅一他　1989　『上ノ台Ⅱ遺跡－第２次発掘調査－』　六日町教育委員会

佐藤雅一・石坂啓介・富樫雅彦　1994　『千溝遺跡』　中里村教育委員会

佐藤雅一他　1995　「第一章　堀之内町の考古　第三節　堀之内町の遺跡と遺物　（三）月岡遺跡」『堀之内町史』資料編　38～45頁　堀之内町史編さん室

佐藤雅一他　1999　『下モ原Ⅱ遺跡　小坂平遺跡』　津南町教育委員会

佐藤雅一・山本　克他　2000　『平成12年度津南町遺跡発掘調査概要報告書』　津南町教育委員会

佐藤雅一・山本　克他　2001　「平成12年度新潟県津南町遺跡発掘調査の成果」『第13回長野県旧石器文化研究交流会－発表要旨－』　78～87頁　長野県旧石器文化交流会

佐藤雅一・佐野勝宏　2002　『正面中島遺跡―国営農地再編パイロット事業に伴う遺跡発掘調査報告書―』　津南町教育委員会

沢田　敦・田海義正　2002　『荒屋遺跡―範囲確認調査報告書―』　川口町教育委員会

三条商業高校社会科クラブ考古班　1971　『五十嵐川流域における先史遺跡』

三条商業高校社会科クラブ考古班　1980　『五十嵐川流域における先史遺跡』VOL.２

三条ジュニア考古学クラブ　1973　「三条周辺の無土器時代の石器」『三条ジュニア考古学クラブ機関誌』　５～26頁

上越市　2003　『上越市史』考古資料編

白石典之　1995　「中部日本における細石刃石器群の展開」『群馬考古学手帳』５　１～28頁　群馬土器観会

菅沼　亘　1991　「北蒲原郡安田町中道遺跡の細石核」『北越考古学』第４号　74～75頁　北越考古学研究会

菅沼　亘　1999　「北魚沼郡川口町荒屋遺跡の採集資料について―彫刻刀形石器の分析を中心に―」『新潟考古』第10号　143～164頁　新潟県考古学会

菅沼　亘　2000　「新潟県水原町大平遺跡採集の彫刻刀形石器」『北越考古学』第11号　62～63頁　北越考古学研究会

菅沼　亘　2003　「愛宕山遺跡採集の船底形石器」『十日町市教育委員会文化財課年報』７　14～15頁　十日町市教育委員会文化財課

菅沼亘・野尻湖人類考古グループ　1994　「野尻湖周辺の細石刃石器群」『野尻湖博物館研究報告』第２号　23～33頁　信濃町立野尻湖博物館

鈴木重美　1958　「越後川口町荒屋遺跡の発掘から」『ミクロリス』第16号　29～32頁　明治大学考古学研究会

鈴木俊成・田海義正・山田　清　1990　『月岡遺跡・古長沢遺跡』　堀之内町教育委員会

芹沢長介　1957　『考古学ノート１　先史時代（Ｉ）』　日本評論新社

芹沢長介　1959　「新潟県荒屋遺跡における細石刃文化と荒屋型彫刻刀について（予報）」『第四紀研究』第１巻第５号　174～181頁　日本第四紀学会

芹沢長介　1967　「日本における旧石器の層位的出土例と^{14}Ｃ年代」『日本文化研究所研究報告』第３集　59～110頁　東北大学日本文化研究所

芹沢長介　1974　『古代史発掘１　最古の狩人たち』　講談社

芹沢長介　1986　『旧石器の基礎知識』考古学シリーズ11　東京美術

芹沢長介　1990　「荒屋以降三十年」『第３回　東北日本の旧石器文化を語る会予稿集』（記念講演発表要旨　文責　加藤　稔）37～42頁　東北日本の旧石器文化を語る会

芹沢長介・麻生　優　1953　「北信・野尻湖底発見の無土器文化（予報）」『考古学雑誌』第39巻第２号　日本考古学会

芹沢長介・柳沢和明　1982　「矢出川遺跡」『長野県史　考古資料編』　全一巻（二）主要遺跡（北・東信）　549～558頁　長野県

芹沢長介・須藤　隆・会田容弘・山田しょう　1990　『荒屋遺跡－第２・３次発掘調査概報－』　東北大学考古学研究室・川口町教育委員会

髙橋　桂　1971　「考古篇」『飯山の文化財』　７～25頁　飯山市教育委員会

髙橋　桂　1974　「古代人のあしあと」『ふるさと　飯山の歴史と自然』　７～23頁　市制施行二十周年記念事業実行委員会

髙橋　桂　1980ａ　「第１章　瑞穂のあけぼの」『新編　瑞穂村史』　105～137頁　瑞穂村

髙橋　桂　1980ｂ　「木島平のあけぼの」『木島平村誌』歴史編　原始・古代　301～343頁　木島村史刊行会

髙橋春栄　1990　「新発田市上ノ山Ｃ遺跡採集の船底形細石刃核」『北越考古学』第３号　52～53頁　北越考古学研究会

髙橋春栄・沢田　敦・立木宏明・菅沼　亘・吉井雅勇　1993　「中部北半・北陸地方の細石刃文化」『細石刃文化研究の新たなる展開』Ｉ　298～321頁　八ヶ岳旧石器研究グループ・佐久考古学会

髙橋春栄・立木宏明　1997　「新潟県朝日村中原野北遺跡Ｃ地点採集の石器」『新潟考古』第８号　31～37頁　新潟県考古学会

髙橋春栄・沢田　敦　1999　「阿賀野川以北の旧石器時代の様相」『第12回東北日本の旧石器文化を語る会』　予稿集　２～17頁　東北日本の旧石器文化を語る会

髙橋真実　2000　「附編　向野池遺跡採集の細石刃石核」『境野新遺跡・向野池遺跡』　10～12頁　富山市教育委員会・富山市埋蔵文化財調査委員会

滝沢　浩　1964　「本州における細石刃文化の再検討」『物質文化』３　１～24頁　物質文化研究会

竹岡俊樹　1996　「彫刻刀形石器の分析（上・下）～「荒屋型・神山型・上ヶ屋型彫器」の再検討」『古代文化』第48巻第７号・第48巻第９号　33～42頁・25～38頁　財団法人古代學協会

田中　靖他　1988　『耳取遺跡等範囲確認調査報告書』　見附市教育委員会

谷　和隆他　2000　『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書15　－信濃町内　その１－　裏ノ山遺跡・東裏遺跡・大久保南遺跡・上ノ原遺跡　旧石器時代　本文編・図版編』　日本道路公団・長野県教育委員会・長野県埋蔵文化財センター

谷口康浩編　1999　『大平山元Ⅰ遺跡の考古学調査』　大平山元Ⅰ遺跡発掘調査団

立木宏明　1988　「２．資料紹介　（２）旧石器時代の遺跡」『ＦＩＥＬＤ　ＮＯＴＥ』第５号　66～92頁　新潟大学考古学研究部

立木宏明　1991　「書評・紹介　東北大学考古学研究室編　『荒屋遺跡―第２・３次発掘調査概要―』」『新潟考古』第２号　80～84頁　新潟県考古学会

立木宏明　1996　「中部地方北部における後期旧石器時代後半から縄文時代草創期前半石器群の再検討」『甘粕健先生退官記念論文集』　甘粕　健先生退官記念論文集刊行会

立木宏明・北村　亮・田海義正・塩原知人他　1996　『奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅴ　樽口遺跡』　朝日村教育委員会

津南町役場　1984　『津南町史』資料編　上巻　津南町

鶴田典昭　2002　「信濃町仲町遺跡の調査」『第14回長野県旧石器文化研究交流会－発表資料－』　１～９頁　長野県旧石器文化研究交流会

寺崎康史　1999　「北海道細石刃石器群理解への一試論」『先史考古学論集』第８集　71～88頁

富樫秀之他　2002　『奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書ⅩⅢ　アチヤ平遺跡上段』　朝日村教育委員会
富樫雅彦　1990　「荒屋遺跡採集の石器について」『新潟考古』第１号　25～28頁　新潟県考古学会
徳澤敬一　1999　「川口町荒屋遺跡採集の彫刻刀形石器」『越佐補遺些』第４号　74～81頁　越佐補遺些の会
戸沢充則　1964　「矢出川遺跡」『考古学集刊』第２巻第３号　１～35頁　東京考古学会
中川成夫・芹沢長介他　1958　「妻有地方の考古学的調査」『妻有郷－新潟県中魚沼郡学術調査報告書－』　77～113頁　新潟県教育委員会
中島庄一　1982　「北信地域における尖頭器を伴出した石器群について－千苅遺跡出土の石器群を中心に－」　信濃』34－４　11～24頁　信濃史学会
中島　庄一　1990　「千苅遺跡の既存資料」『千苅遺跡の研究』　21～32頁　飯山市教育委員会
永塚俊司　1997　「荒屋系細石刃石器群における一つの定点」『人間・遺跡・遺物３－麻生優先生退官記念論集－』　90～117頁　発掘者談話器会
長沼正樹・佐野勝宏　2003　「川口町荒屋遺跡採集の両面調整石器」『越佐補遺些』第８号　９～11頁　越佐補遺些の会
長野県　1981　『長野県史』考古資料編　全１巻（１）遺跡地名表
中村孝三郎　1961　「越後の石器」『長岡市立科学博物館研究報告』第２号　53～88頁　長岡市立科学博物館
中村孝三郎　1965a　『中土遺跡　長岡市立科学博物館研究報告７』　長岡市立科学博物館
中村孝三郎　1965b　「中部地方北部の先土器時代」『日本の考古学Ⅰ　先土器時代』　242～263頁　河出書房
中村孝三郎　1966　『先史時代と長岡の遺跡　長岡市立科学博物館研究報告８』　長岡市立科学博物館
中村孝三郎　1971　『御淵上遺跡　長岡市立科学博物館研究報告10』　長岡市立科学博物館
中村孝三郎　1989　『千石原（第二次）発掘報告書』　三島町教育委員会
中村孝三郎・中島栄一・松井　寛　1972　「嵐北の考古」『嵐北－文化財総合調査報告－』新潟県教育委員会
中村孝三郎・小林達雄・竹田祐司　1973　『千石原遺跡　長岡市立科学博物館研究報告11』　長岡市立科学博物館
中村孝三郎・小林達雄　1975　「月岡遺跡」『日本の旧石器文化』２　242～254頁　雄山閣
中村孝三郎　1978　『越後の石器』　学生社
中村由克　1986　「野尻湖・信濃川中流域の旧石器時代遺跡群と石器石材」『信濃』第38巻第４号　237～252頁　信濃史学会
中村由克　1990　「北信地域の旧石器時代終末期資料」『第３回長野県旧石器文化研究交流会－発表要旨－』　47～49頁　長野県旧石器文化交流会
中村由克　1992　「長野県上ノ原遺跡における細石器文化の遺構（Ⅰ・Ⅱ）」『考古学ジャーナル』342・343　42～44頁・33～36頁　ニュー・サイエンス社
中村由克　1997　「長野県上ノ原遺跡における瀬戸内系石器群と遺跡の立地」『旧石器考古学』55　９～18　旧石器文化談話会
中村由克　2000　「信濃町吹野原Ａ遺跡の11年度調査」『第12回長野県旧石器文化研究交流会－発表資料－』　64～70頁　長野県旧石器文化研究交流会
中村由克他　1978　『野尻仲町水道工事立会調査報告』　信濃町水道課
新潟石器研究会　1996　「新潟県中土遺跡出土遺物の再検討」『長岡市立科学博物館研究報告』第31号　123～158頁　長岡市立科学博物館
西井龍儀　1975　「立見遺跡」『日本の旧石器文化』２　255～280頁　雄山閣
西井龍儀　1983　「富山県の先土器時代研究の現状と課題」『北陸の考古学　石川考古学研究会々報』第26号　23～39頁　石川考古学研究会
野尻湖人類考古グループ　1987　『野尻湖遺跡群の旧石器文化Ⅰ』
橋本勝雄　1989　「東日本の細石器文化－東北・北陸・中部高地・関東・東海地方の研究動向－」『考古学ジャーナル』306　12～21頁ニュー・サイエンス社
橋本博文　2003　「新潟大学考古学研究室2002年佐渡調査」『佐渡・越後文化交流史研究』第３号　１～66頁　新潟大学大学院現代社会文化研究課プロジェクト佐渡・越後の文化交流史研究
林　茂樹他　1970　『杉久保Ａ遺跡緊急発掘調査報告　－長野県上水内郡信濃町野尻湖底－』　信濃町教育委員会
広田永二・中澤幸男　1994　「津南町の縄文時代草創期遺跡」『新潟考古』第５号　105～118頁　新潟県考古学会
星野芳郎・井口通泰　1968　『新潟県北魚沼郡小出・掘之内・川口地区遺跡調査概覧』
松山和彦　1993　『念仏林遺跡　石川県土地開発公社串町用地整備事業に係る発掘調査報告書』　石川県立埋蔵文化財センター
三宅徹也他　1979　『大平山元Ⅰ遺跡発掘調査報告書』　青森県立郷土館

美安慶子　1995　「荒屋遺跡採集の彫刻刀形石器について」『佐久考古通信』65　８～９頁　佐久考古学会

宮田千里　1997　「津南町小坂平遺跡出土の細石刃石核について」『越佐補遺些』第２号　９～11頁　越佐補遺些の会

森嶋　稔　1976　「第一章　旧石器時代」『長野県上水内郡誌』第二巻歴史編　１～51頁

森嶋　稔　1979　「中部高地における細石器の展開とその系統」『研究ノート３　地域研究の方向』　107～125　千曲川水系考古学研究所

森嶋　稔　1985ａ　「中部高地における二つの細石刃文化」『考古学ジャーナル』243　２～７頁　ニュー・サイエンス社

森嶋　稔　1985ｂ　「中部高地の楔形細石刃石核」『信濃』37－11　158～168頁　信濃史学会

八木次男・佐藤雅一　1988　「旧石器時代から縄文時代草創期の遺物－魚野川流域を中心として－」『新潟県考古学談話会会報』第１号　新潟考古学談話会

山科　哲　2002　「荒屋型彫器の刃部再生」『駿台史学』第115号　27～56頁　駿台史学会

山田晃弘　1984　「彫刻刀形石器の制作技術」『考古学ジャーナル』229　22～25頁　ニュー・サイエンス社

山中一郎　1982　「新潟県荒屋遺跡の彫器」『考古学論考　小林行雄博士古稀記念論文集』　５～40頁

山本正敏　1992　「小矢部市日の宮遺跡Ａ地区出土船底形細石核」『埋文とやま』40　７頁　富山県埋蔵文化財センター

山本　克　1997　「六日町上ノ台Ⅰ遺跡採集の彫刻刀形石器」『越佐補遺些』第２号　５～８頁　越佐補遺些の会

山本　克　1998　「川口町荒屋遺跡採集の彫刻刀形石器」『越佐補遺些』第３号　５～６頁　越佐補遺些の会

山本　克　2000　「上原Ｅ遺跡」『平成12年度津南町遺跡発掘調査概要報告書』　18～21頁　津南町教育委員会

山本　克　2002　「川口町荒屋遺跡採集の石器について（２）」『越佐補遺些』第７号　５～６頁　越佐補遺些の会

吉井雅勇　1993　「中部日本の細石刃文化」『新潟考古学談話会会報』第12号　７～13頁　新潟考古学談話会

吉井雅勇　1998　「新潟県における北方系細石刃石器群について」『新潟県考古学談話会会報』第19号　14～23頁　新潟考古学談話会

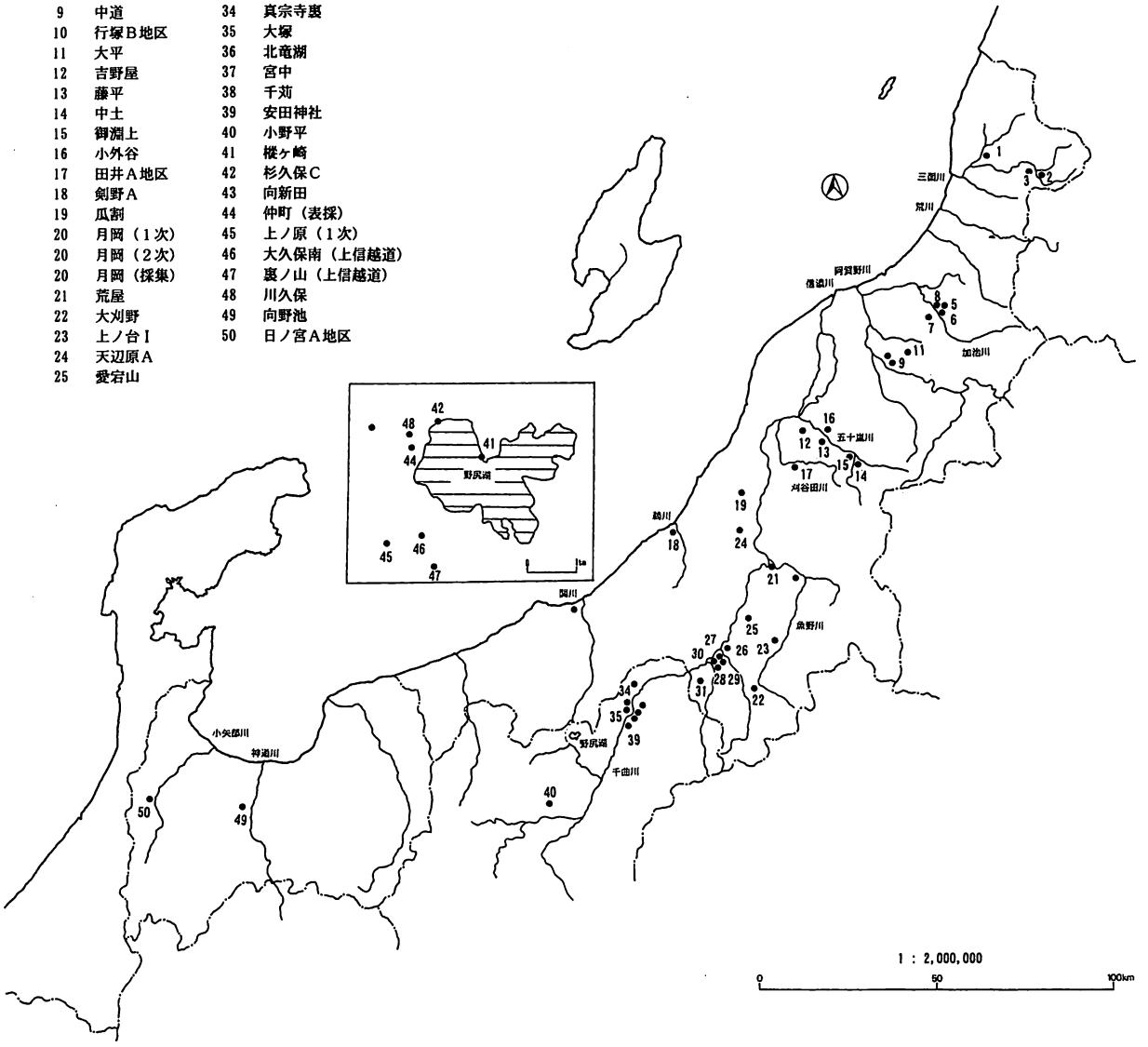
吉井雅勇　1999　「第１章旧石器時代第２節地域と編年第５項細石刃石器群」『新潟県の考古学』　40～44頁　高志書院

吉松雄一・小林　＊　1975　「野尻湖畔町浦遺跡の石器について」『長野県考古学会誌』22号　31～33頁　長野県考古学会

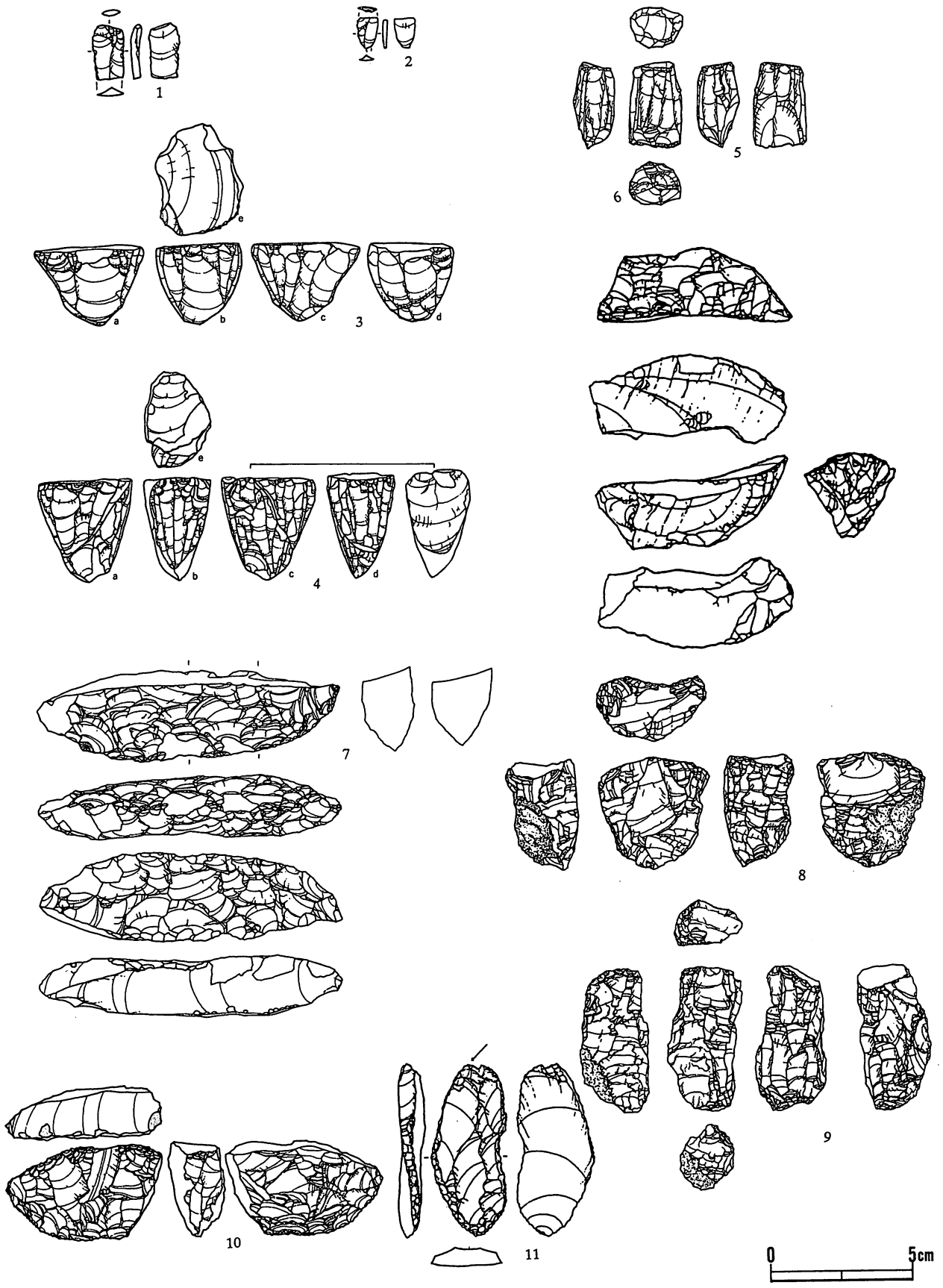
渡辺哲也　2001　「信濃町仲町遺跡の12年度調査」『第13回長野県旧石器文化研究交流会－発表資料－』　１～７頁　長野県旧石器文化研究交流会

渡辺哲也　2002　「信濃町仲町遺跡の調査－平成13年度の成果－」『第14回長野県旧石器文化研究交流会－発表資料－』　10～17頁　長野県旧石器文化研究交流会

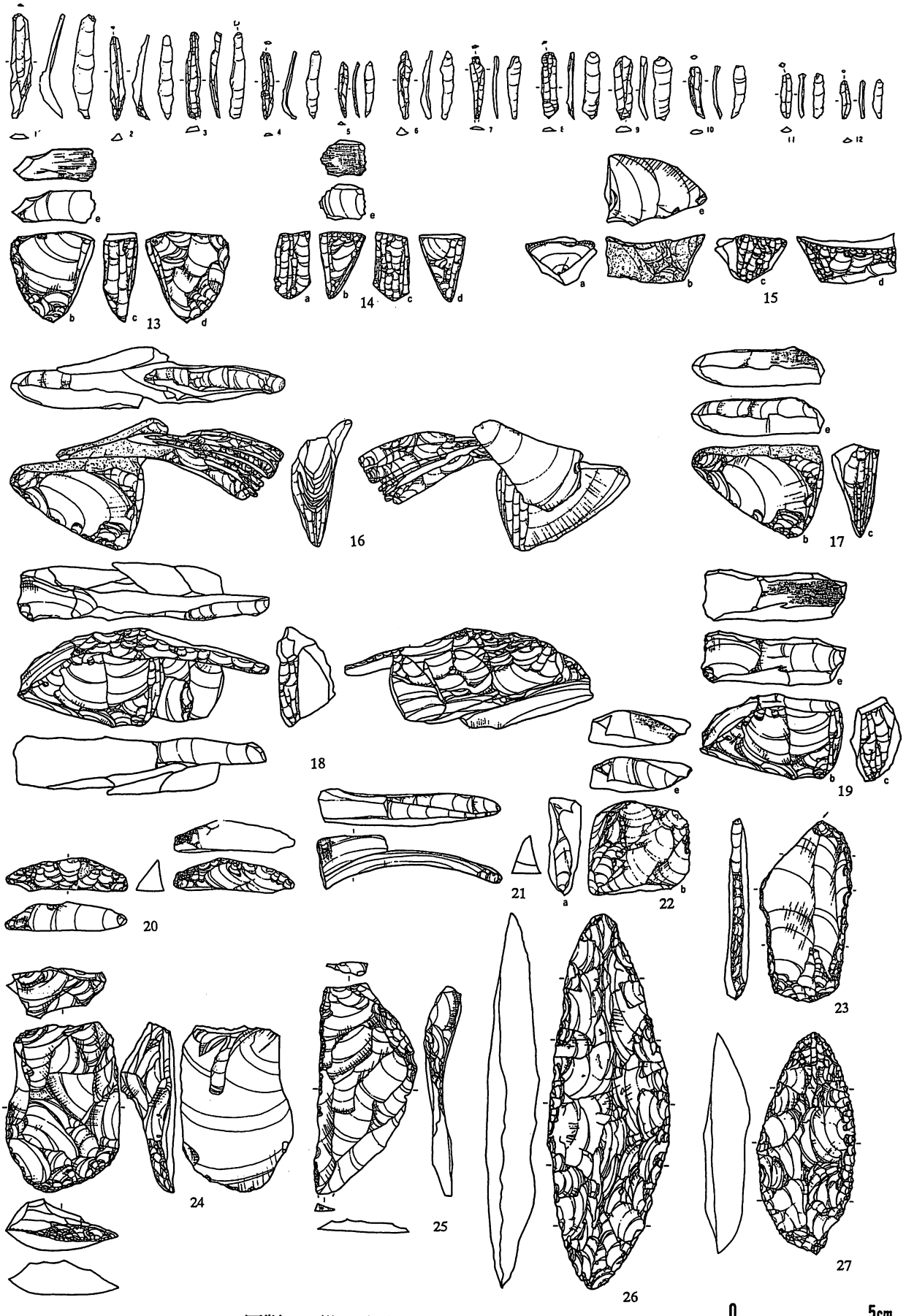
綿貫俊一・堤　隆　1987　「荒屋遺跡の細石刃文化資料」『長野県考古学会誌』54号　１～20頁　長野県考古学会



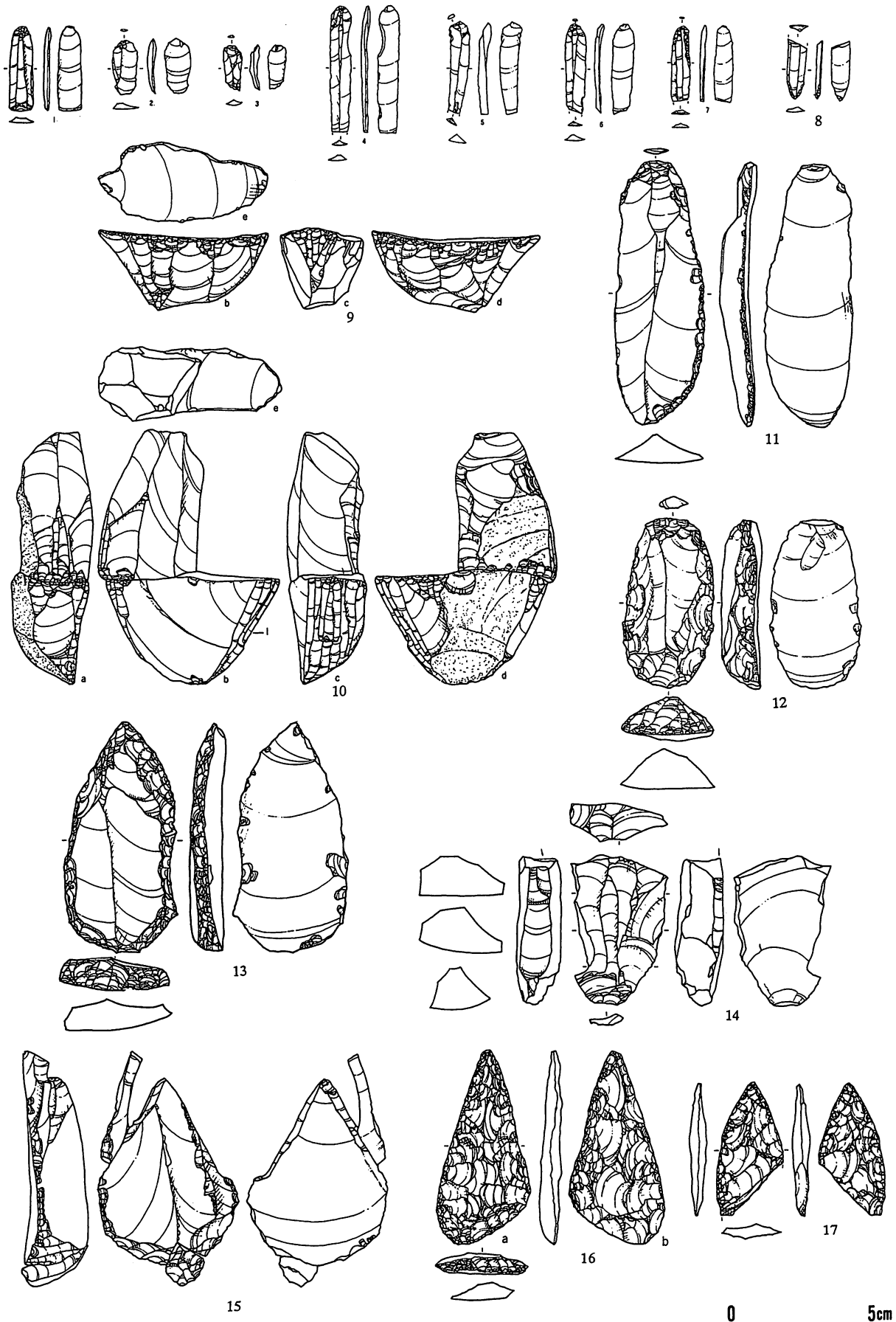
図版 1　中部地方北部地域の細石刃文化遺跡



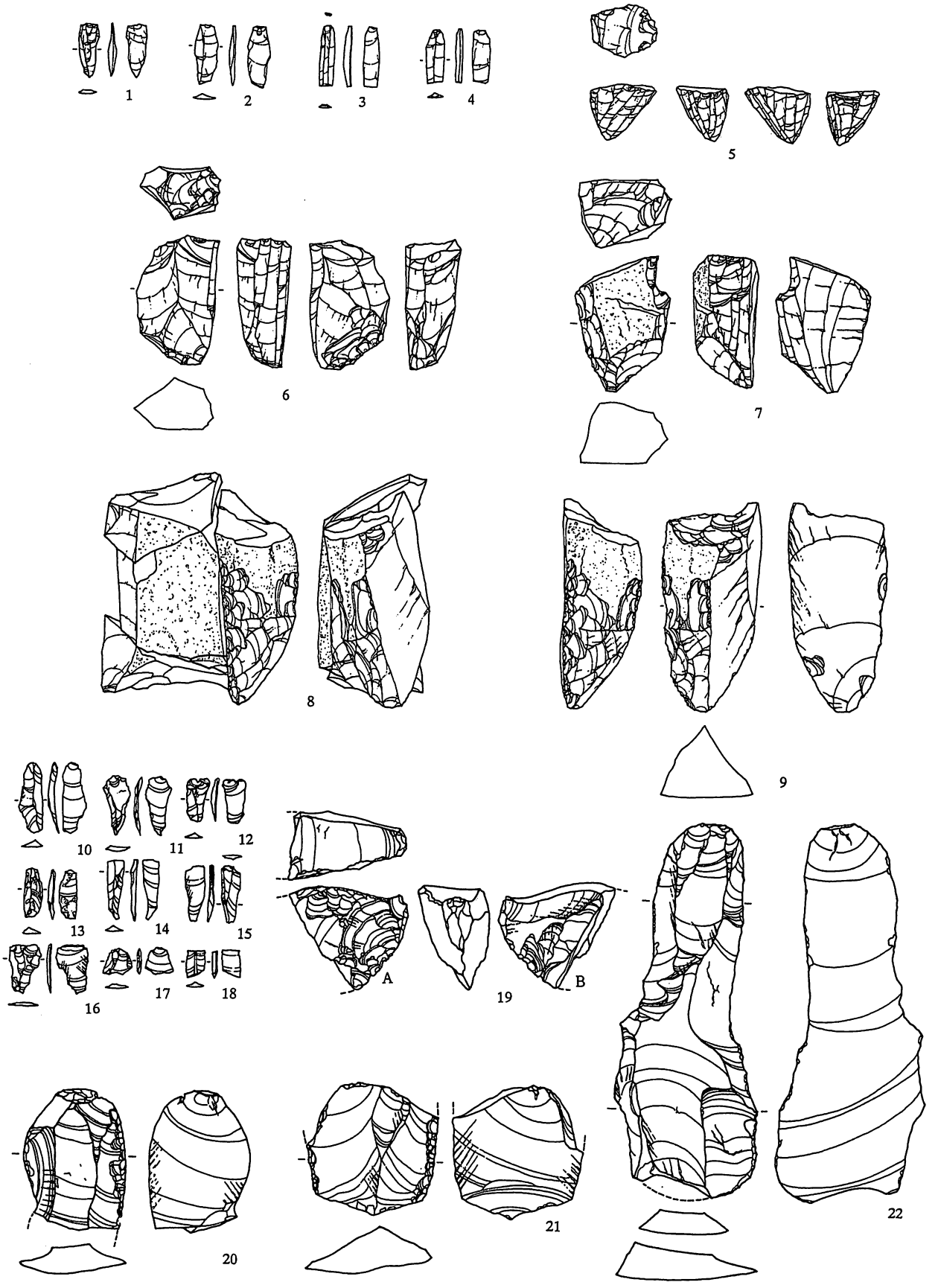
図版２　中原野北遺跡〔1〕(1~4)、アチヤ平遺跡〔3〕(5)、上車野 G 遺跡〔5〕(6)、上ノ山 C 遺跡〔6〕(7)、田家池ノ平遺跡〔7〕(8･9)、中道遺跡〔9〕(10)、行塚遺跡 B 地区〔10〕(11)



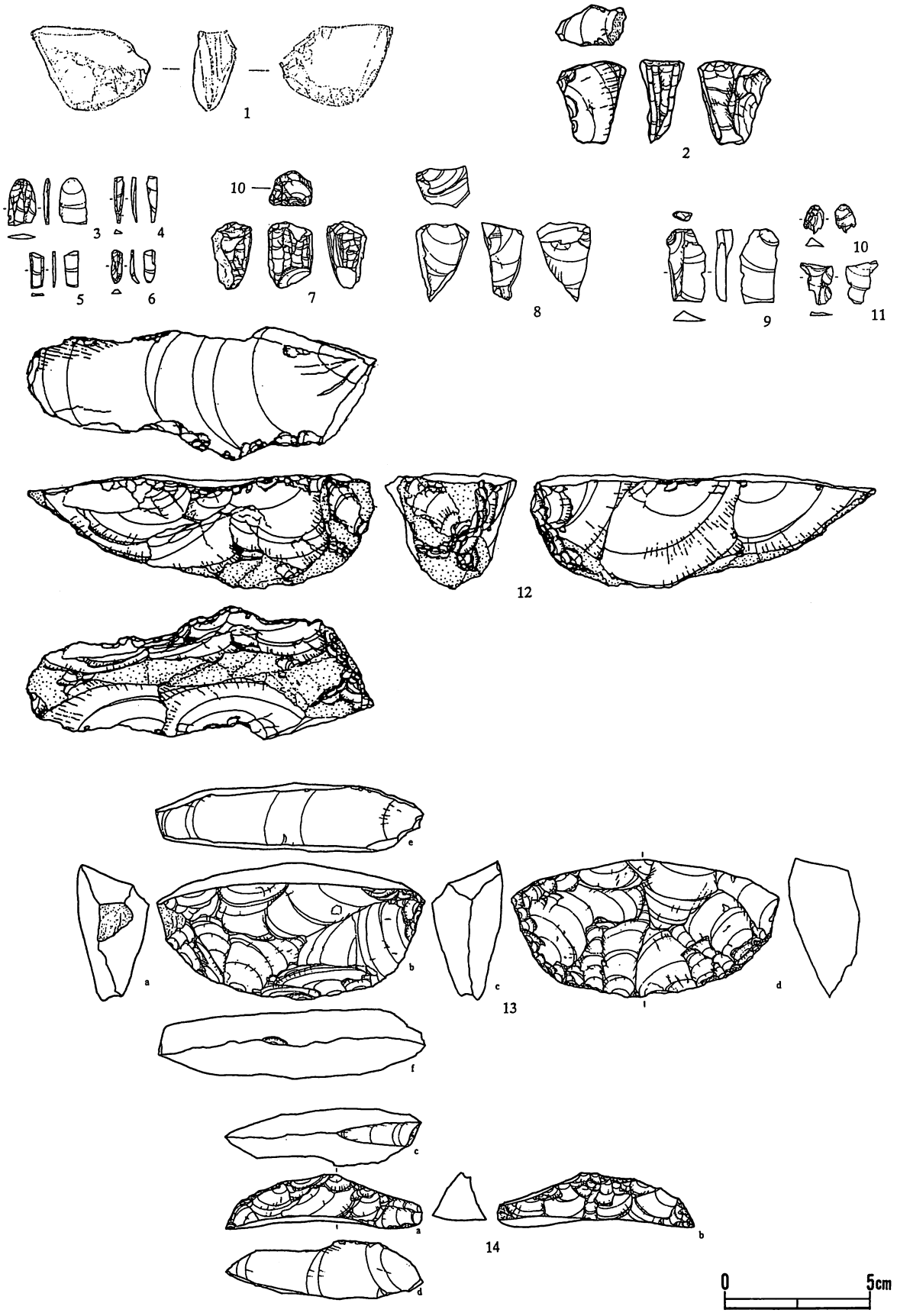
図版3　樽口遺跡A－MS文化層〔2〕(1~27)



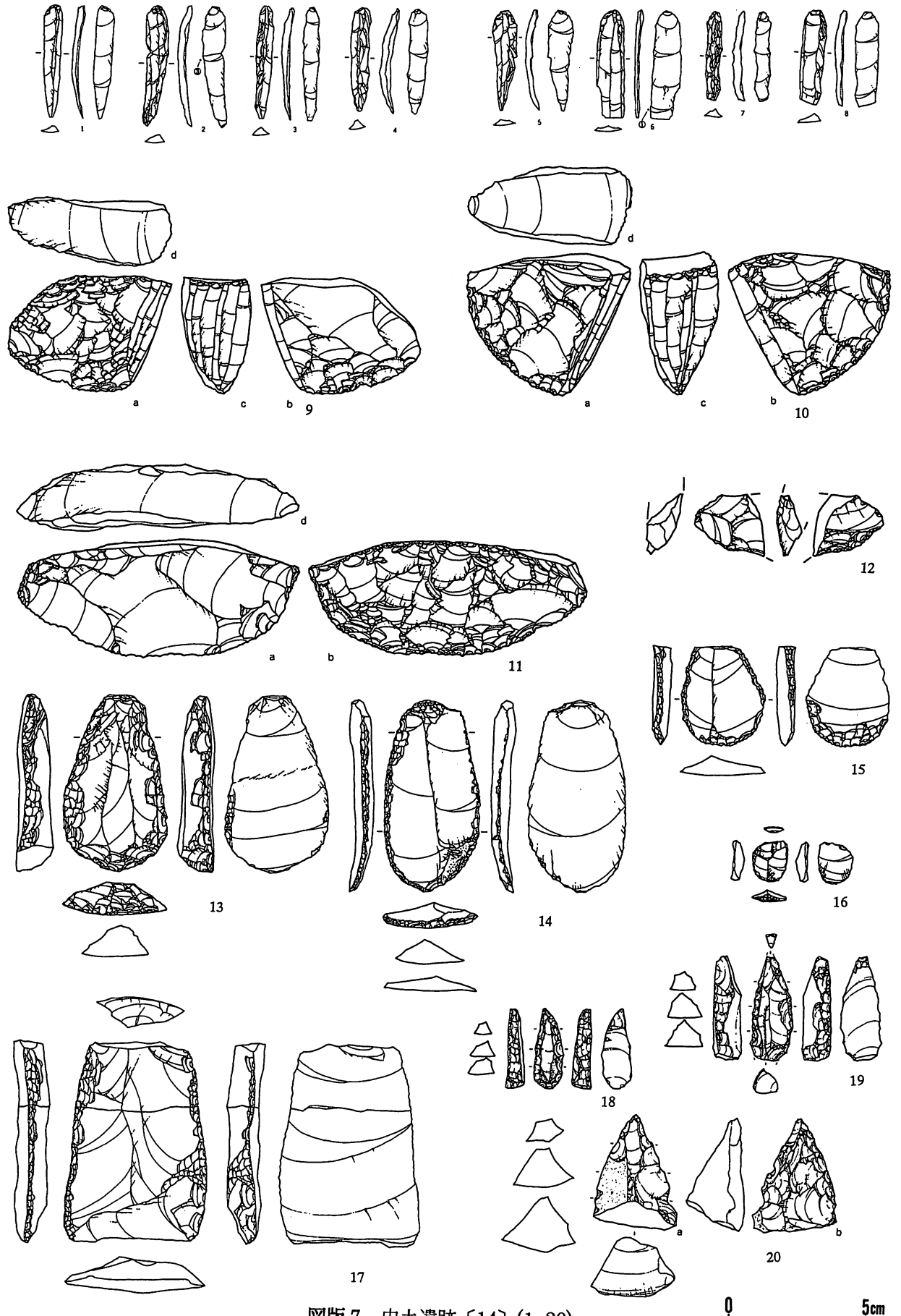
図版 4　樽口遺跡 A－MH 文化層〔2〕(1~17)



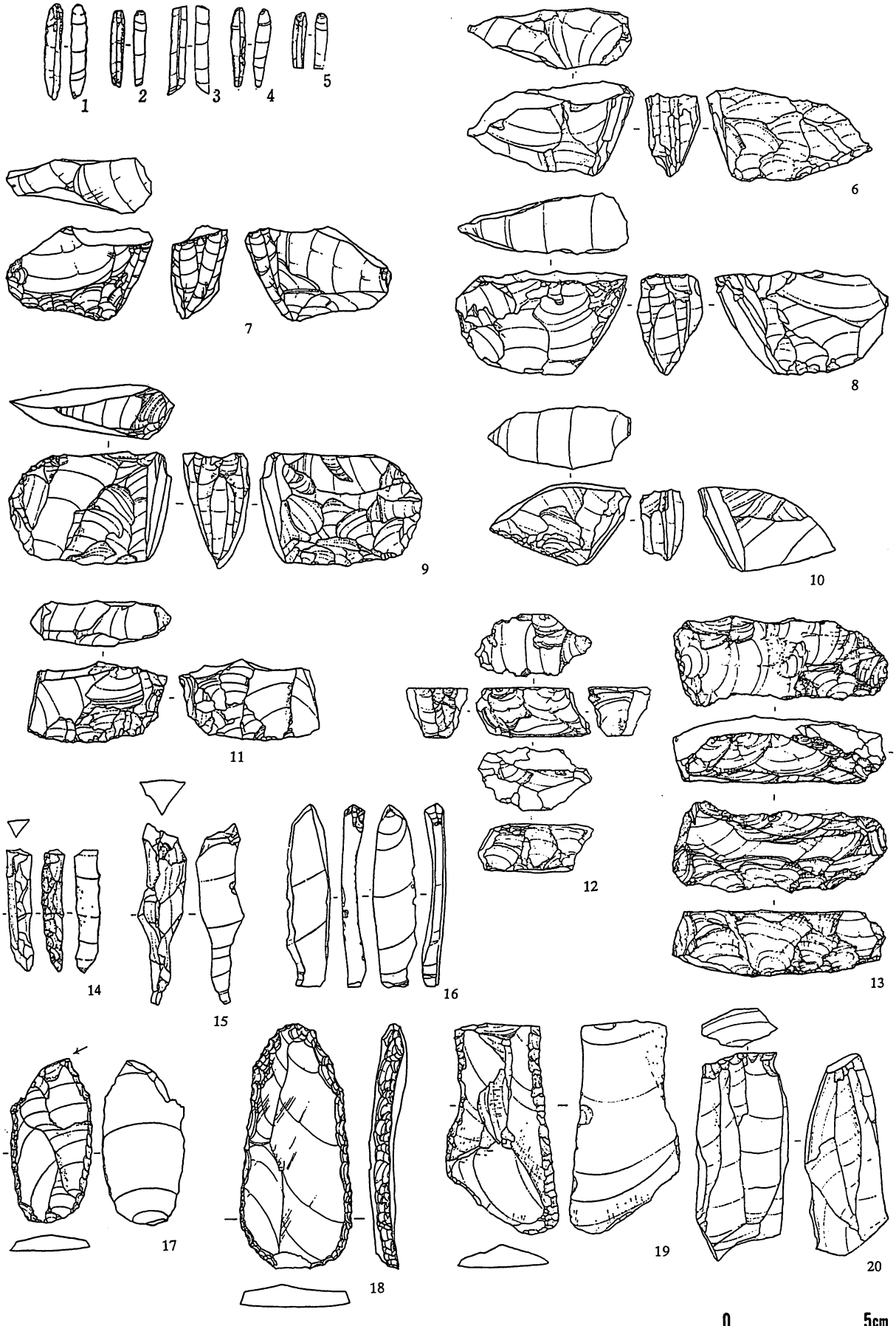
図版5　荒川台遺跡〔4〕(1~9)、大平遺跡〔11〕(10~22)



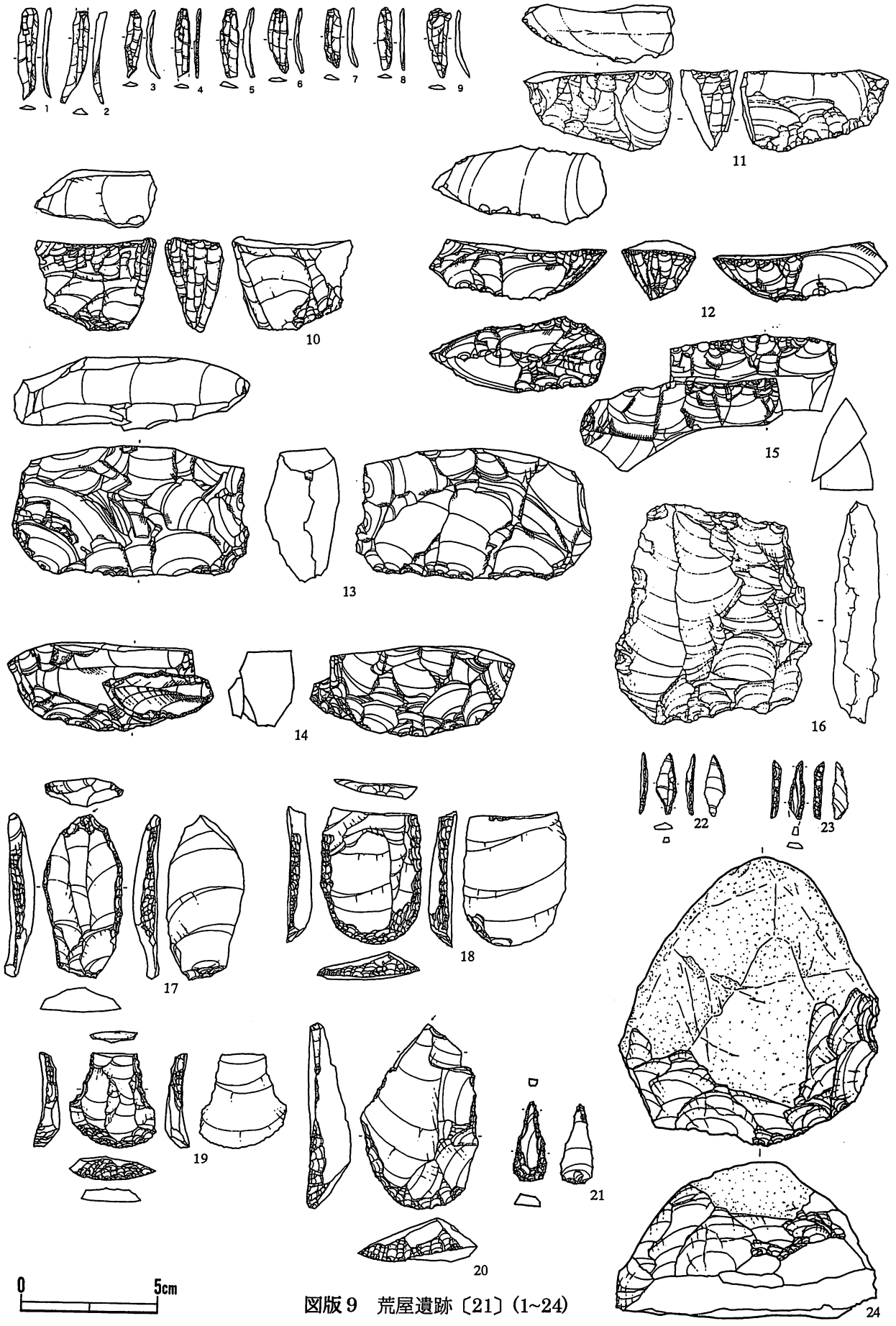
図版6　吉野屋遺跡〔12〕(1)、御淵上遺跡〔15〕(2)、田井遺跡A地区〔17〕(3~11)、剣野A遺跡〔18〕(12)、瓜割遺跡〔19〕(13・14)



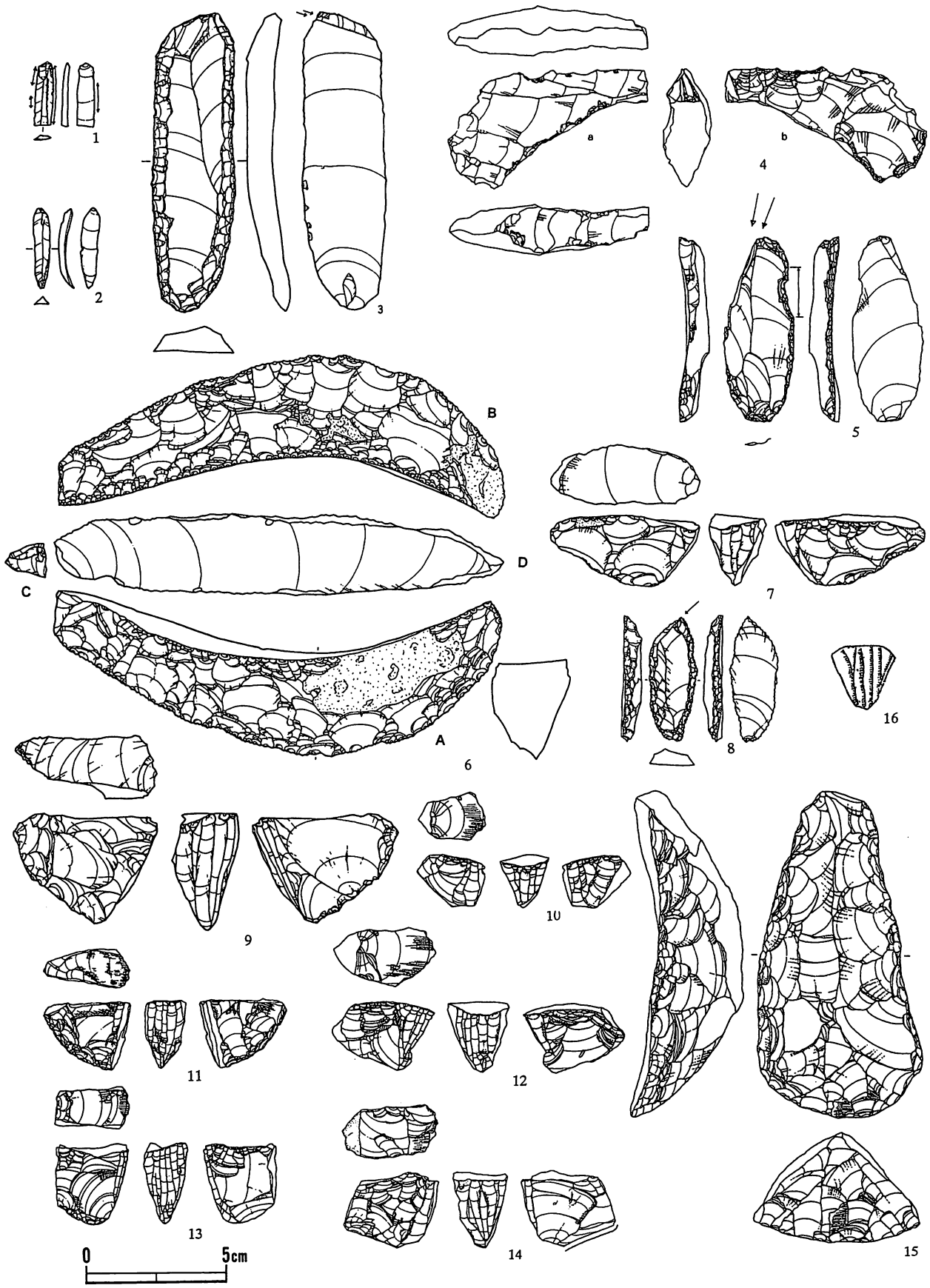
図版7　中土遺跡〔14〕(1~20)



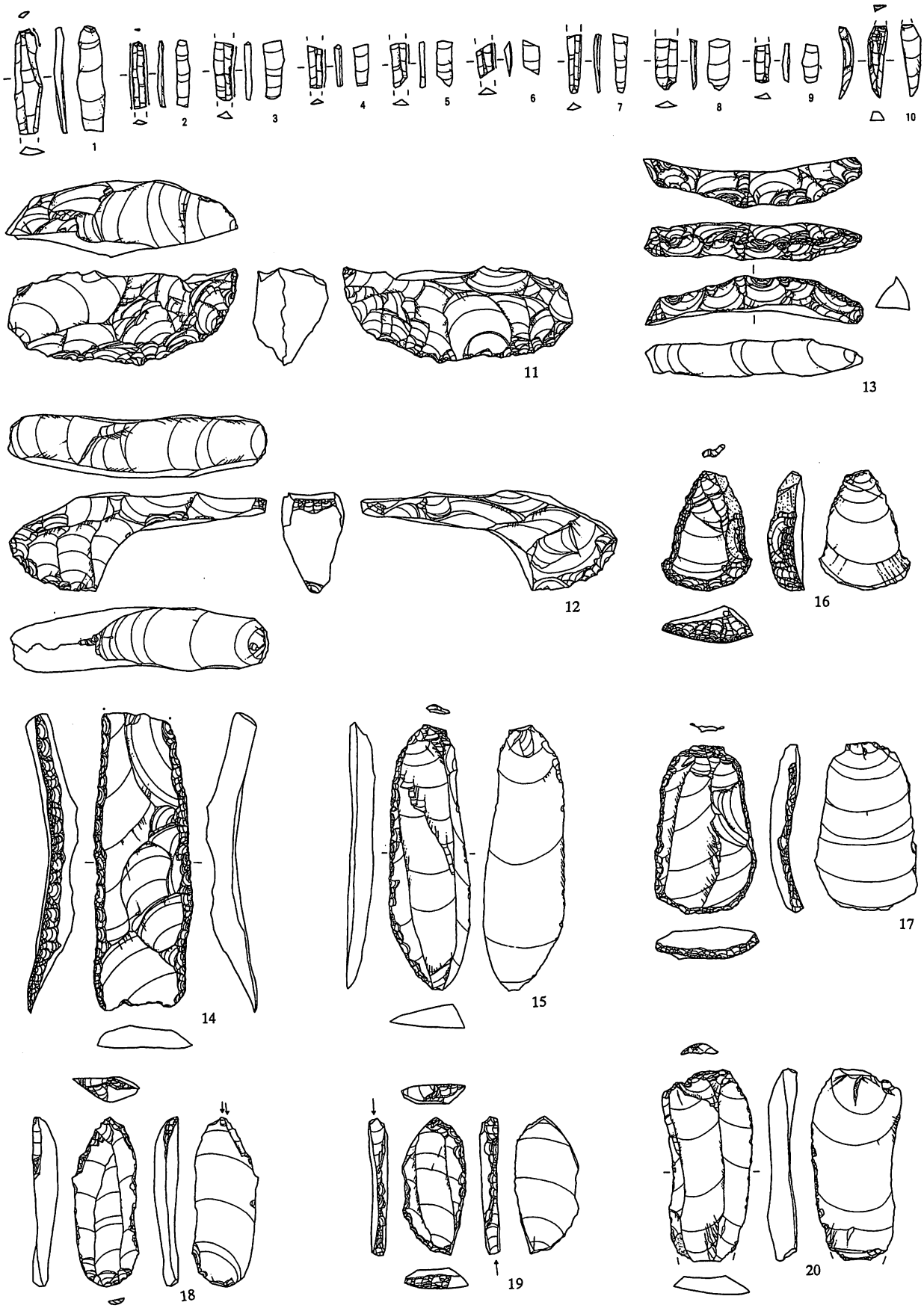
図版８　月岡遺跡〔20〕(1~20)



図版９　荒屋遺跡〔21〕(1~24)

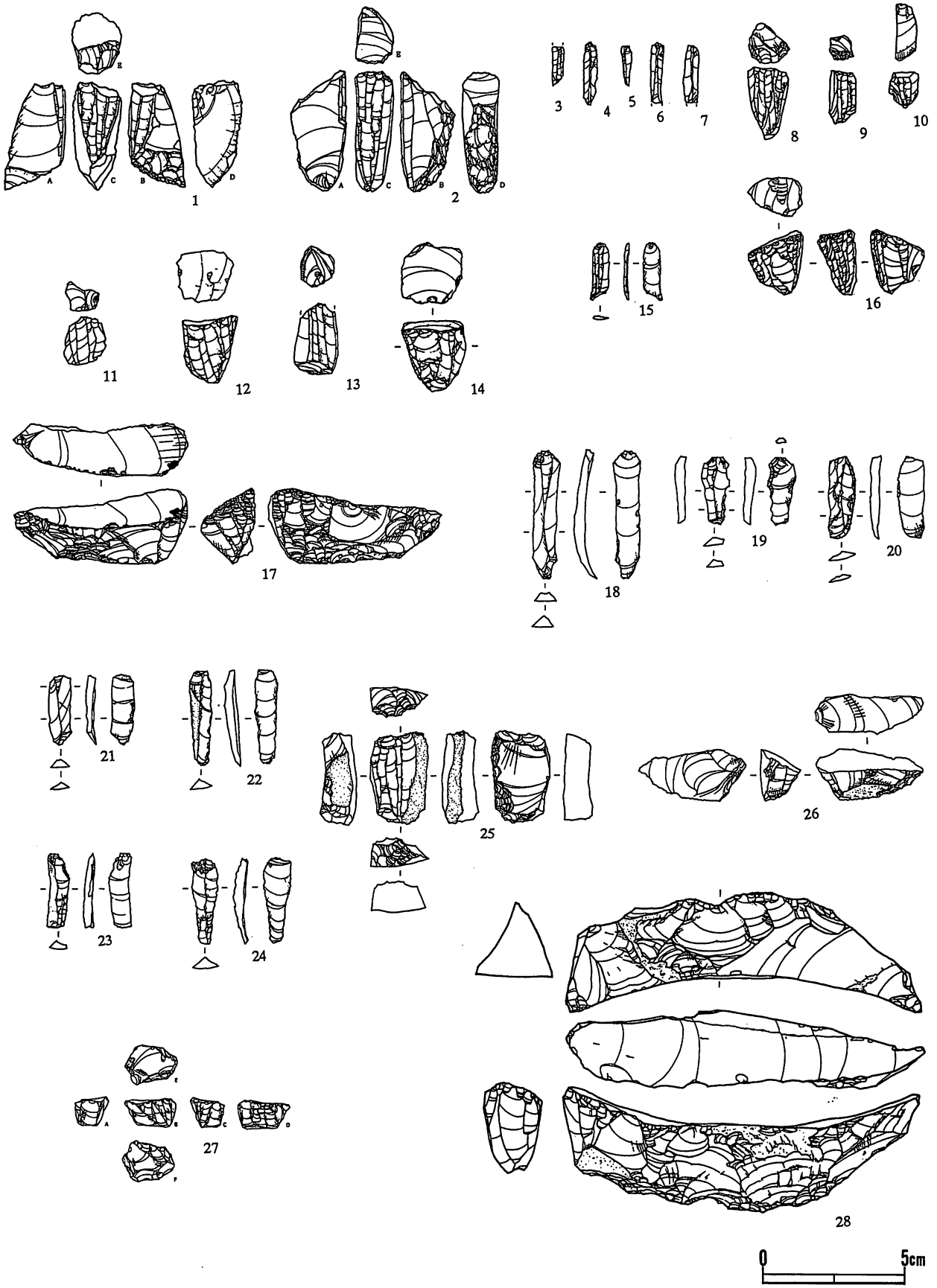


図版 10　大刈野遺跡〔22〕(1~3)、上ノ台Ⅰ遺跡〔23〕(4･5)、愛宕山遺跡〔25〕(6)、千溝遺跡〔26〕(7)、釜堀川東遺跡〔28〕(8)、小坂平遺跡〔29〕(9)、上原Ｅ遺跡〔31〕(10~15)、五智周辺〔32〕(16)



図版 11　正面中島遺跡〔30〕(1~20)

図版 12　千苅遺跡〔38〕(1~4)、小野平遺跡〔40〕(5)、樅ヶ崎遺跡〔41〕(6)、杉久保 C 遺跡〔42〕(7~10)、向新田遺跡〔43〕(11～23)



図版 13　仲町遺跡〔44〕(1~14)、上ノ原遺跡〔45〕(15・16)、大久保南遺跡〔46〕(17)、裏ノ山山遺跡〔47〕(18~26)、向野池遺跡〔49〕(27)、日ノ宮遺跡A地区〔50〕(28)

表１　中部地方南部地域の細石刃遺跡一覧表

		組								成													
NO.	遺跡名	細石刃	細石核	細石核母型	削器	掻器	彫器	錐	局部磨製石斧	礫器	ナイフ形石器	尖頭器	有舌尖頭器	細石核削片	土器	総計	石器集中	遺構	発掘	標高	地域	年代	文献
1	中原野北	2	2													4				40m	三面川流域		高橋・立木1997
2	樽口（A－MS文化層）	1220	16	13	25	19	1					8		102		5484	4		有	205m	三面川流域		立木・北村他1996
2	樽口（A－MH文化層）	118	3		6	21	2					1				204	3		有	205m	三面川流域		立木・北村他1996
3	アチヤ平		1													1			有	170m	三面川流域		富樫他2002
4	荒川台	○	○		○	○	○				○								有	86m	荒川流域		阿部・高橋1986他
5	上車野G		1													1				95m	加治川流域		高橋他1993
6	上ノ山C			1												1				105m	加治川流域		高橋１９９０
7	田家池ノ平		2													2				50m	加治川流域		小林２０００
8	熊谷内						1									1			有	65m	加治川流域		
9	中道		1													1			有	20m	阿賀野川流域		川上他1980、皆沼1991
10	行塚B地区	2					1									3			有	20m	阿賀野川流域		川上1979、高橋他1993
11	大平	9	1		5	1	3				1	1				29			有	70m	阿賀野川流域		小野1989、小野他1991
12	吉野屋		2													2				30m	五十嵐川流域		三条ジュニア考古学クラブ1973
13	藤平	○		1		○													有	70m	五十嵐川流域		中村他1972他
14	中土	22	3	1	6	9	12	2		1				1		79	1		有	115m	五十嵐川流域		中村1965、新潟石器研究会1996
15	御淵上		1													1			有	120m	五十嵐川流域		中村1971、立木1988
16	小外谷						1									1			有	50m	五十嵐川流域		家田1984、高橋他1993
17	田井A地区	10	1	1												33			有	45m	刈谷田川流域		田中他1988
18	剣野A			1															有	30m	鵜川流域		伊藤・品田1987
19	瓜割		1											1		2			有	33m	信濃川中流域		駒形・小熊・立木2000
20	月岡（1次）	92	5		10	3	14							9		355	1		有	120m	魚野川流域		中村・小林1975
20	月岡（2次）	1	1			2								1		23	1		有	120m	魚野川流域		鈴木・田海1990
20	月岡（採集）	○	○	○	○	○	○	○												120m	魚野川流域		中村・小林1975、鈴木・田海1990、佐藤
21	荒屋（1．2．3次）	1163	○(56)		○(21)	○(21)	574	4		6		7		8		6923	1	土坑17、竪穴住居状遺構1、炉1	有	85m	魚野川流域	13,200±350BP (Gak948)	芹沢1959、芹沢他1990
21	荒屋（4次）	20		1	1	1	23			4				1		305			有	85m	魚野川流域		沢田・田海2002
21	荒屋（採集）	○	○	○	○	○	○	○				○	○	○						85m	魚野川流域		中村1961他
22	大刈野	○	○		○	○	○										7		有	400m	魚野川流域		佐藤1989、佐藤他1988・1991
23	上ノ台I	4	2		○	1	1									8以上			有	320m	魚野川流域		佐藤1986、1988、1989、山本1997、織田
24	天辺原A						1									1				110m	信濃川中流域		遠藤1990、高橋他1993
25	愛宕山																			180m	信濃川上流域		皆沼2003
26	干溝		1													1			有	210m	信濃川上流域		佐藤・石坂・富樫1994
27	屋敷田	3					1									4				210m	信濃川上流域		津南町役場1984
28	釜畑川東（堤ノ上遺跡周						1									1				310m	信濃川上流域		高橋他1993、広田・中沢1994
29	小坂平		1													1			有	320m	信濃川上流域		佐藤他1999
30	正面中島	19			15	11	11			1				2		156	3		有	250m	信濃川上流域		佐藤・佐野2002
31	上原E	○	○		○	○			○			○		○			2		有	450m	信濃川上流域		佐藤・山本他2000、佐藤2002
32	五智周辺		1													1				30m	関川流域		駒井1953・1954
33	オリハンザ	12														12				520m	千曲川下流域		麻生・戸沢1956、高橋1971
34	真宗寺裏	○																		310m	千曲川下流域		高橋1980ａ
35	大塚	○																		350m	千曲川下流域		高橋1974、高橋1980ａ
36	北竜湖		○																	500m	千曲川下流域		高橋1980ａ
37	宮中	○																		350m	千曲川下流域		高橋1980ａ
38	千苅		2	2															有	320m	千曲川下流域		中島1982・1990
39	安田神社		1													1				350m	千曲川下流域		高橋1980ａ
40	小野平		1																	1000m	千曲川下流域		森嶋1985
41	樅ケ崎		1													1				654m	野尻湖周辺		芹沢・麻生1953、皆沼・野尻湖人類考古グ
42	杉久保C					1	3									4			有	654m	野尻湖周辺		林他1970、森嶋1976、皆沼・野尻湖人類湖人
43	向新田	29	8		45	○	1			2		1							有	657m	野尻湖周辺		野尻湖人類考古グループ1987
44	仲町（表採）		1													1				660m	野尻湖周辺		吉松・小林1975
44	仲町（水道工事）		1													1			有	660m	野尻湖周辺		中村他1978、皆沼・野尻湖人類考古グループ
44	仲町（国道）	○	○																有	660m	野尻湖周辺		渡辺2001、鶴田2002、渡辺2002
45	上ノ原（1次）	46	23	7	○	35	3		1									石囲い炉5基	有	706m	野尻湖周辺		中村1992
45	上ノ原（5次）		2													2			有	710m	野尻湖周辺		中村1997
45	上ノ原（上信越道）	1	1													2			有	708m	野尻湖周辺		谷他2000
46	大久保南（上信越道）		1													1			有	708m	野尻湖周辺		谷他2000
47	裏ノ山（上信越道）	7	2													9			有	710m	野尻湖周辺		谷他2000
48	川久保		1													1				660m	野尻湖周辺		
49	向野池		1													1			有	30m	神通川		高橋2000
50	日ノ宮A地区		1													1			有	40m	小矢部川流域		上野他1978、山本1992

中部地方南部地域の細石刃文化

吉井　雅勇

1　研究の経過

A　野辺山原

1953年　　吹雪のなか、矢出川遺跡で芹沢長介らにより細石刃文化の存在が国内で初めて確認される。

1954年　　芹沢長介による矢出川遺跡の第1次調査(9月)。芹沢・杉原による第2次調査(11月)。

1963年　　明治大学考古学研究室による矢出川遺跡の第3次調査。

1974～79年　京都女子大考古学研究会による野辺山原の分布調査。畑1枚1枚の綿密な踏査や聞き込み調査により、数多い旧石器時代遺跡の分布の詳細が明らかになる。

1979～81年　明治大学考古学研究室による矢出川遺跡群総合調査。考古学と自然科学の学際的な調査により、遺跡群の成り立ちや石器文化・古環境の解明が進む。

1990年　　八ヶ岳旧石器研究グループによる中ッ原5B地点の調査。野辺山原における北方系削片系の細石刃文化の様相が明らかにされる。

1992年　　八ヶ岳旧石器研究グループによる中ッ原1G地点の第1次調査。

1993年　　八ヶ岳旧石器研究グループによるシンポジウム「細石刃文化研究の新たなる展開」が開催される。全国の細石刃文化遺跡が集成され、細石刃文化研究に対して議論がなされる。

1995年　　八ヶ岳旧石器研究グループによる中ッ原1G地点の第2次調査。5Bと1Gで遺跡間接合を確認。

B　和田峠周辺

1957年　　信州ローム研究会による男女倉Ⅲ地点の調査。翌年Ⅳ地点調査。

1964年　　尖石考古館による鷹山第Ⅰ遺跡の調査。稜柱形細石核・細石刃が出土。

1975年　　森嶋稔らによる男女倉H地点の調査。稜柱形細石核が数点出土。

1989～91年　森嶋らによる男女倉遺跡群の分布(試掘)調査。男女倉遺跡群の広がりが明らかになるとともに、稜柱形細石核が数点出土。

C　開田高原・日和田高原

1959～62年　樋口昇一・森嶋稔・小林達雄による柳又A・B地点の調査。いわゆる「柳又ポイント」のほか、細石刃文化の存在が層位的に把握される。

1989～90年　村道工事に先立つ柳又C地点の調査。稜柱形細石核と削片系楔形細石核が層位的に出土。

1989～95年　國學院大学考古学研究室による柳又A地点の継続的な調査。削片系細石刃文化の様相が構造的に明らかにされる。

1989年　　千葉大学考古学研究室麻生優による日和田高原池ノ原遺跡の調査。削片系細石刃文化の様相の一端が明らかにされる。

2001年　　飛騨考古学会旧石器分科会・永塚俊司による池ノ原遺跡採集資料の報告。これまで断片的に紹介されてきた資料を一同にし、再実測図の提示、出土地点の詳細、石器群の特徴をまとめる。

D　その他の地域

1989～95年　国道工事に先立ち宮ノ前遺跡の調査。削片系楔形細石核出土層位から尖頭器状の木製品が出土。

2000年　国道工事に先立ち天神尾根遺跡の調査。これまで細石刃石器群が未確認であった佐久地域で、分割系

細石刃石器群(ホロカ)がはじめて確認される。

2　遺跡の分布

A　野辺山原

標高 1340～1350m の矢出川遺跡群は、ゆるやかに矢出川へと続く扇状地面上に立地する。これらには、稜柱形細石核を主体とする遺跡が 14 箇所(第 2 図 1～14)ほど分布し、三次にわたって調査された矢出川第Ⅰ遺跡からは、表採品を含めて 600 個以上もの細石核が出土した。矢出川遺跡群は湿原のなかの微高地に立地していたことが、古環境の復元調査からわかっている〔明治大学考古学研究室編 1982 ほか〕。

一方、標高 1270m 前後の中ッ原遺跡群は、比高差 40m の西川と比高差 50m の板橋川に画された台地上の微高地南面に立地する。削片系楔形細石核を有する 2 遺跡(同 16・17)が確認されている。

系統の異なる両遺跡群は、その立地においても対照的で興味深い。ただし、両遺跡群とも分割系舟底形細石核も少量含む点は注意を要する。

ほかにも茶セギ(同 15)、葭ノ頭(同 18)、柏垂(同 19)、西ノ腰 A(同 20)、切草 B(同 21)、葭ノ尻(同 22)、馬場平(同 23)があり、柏垂の頁岩製削片系楔形細石核は、当地において稀少な存在であり注目される。

B　和田峠周辺

黒曜石原産地として数多くの旧石器遺跡が展開するなかで、当該期の遺跡は、男女倉遺跡群(第 3 図 25～29)、1545m の和田峠頂上(同 30)、鷹山遺跡群(第 1 図 32・33)、標木平(同 34)などがある。男女倉は男女倉川と和田川による標高 1205～1240m の河岸段丘、鷹山・標木平は高松山・虫倉山・大笹山に囲まれた標高 1360～1380m の盆地地形に立地している。当地域で確認されているものはすべて稜柱形細石核で、鷹山Ⅰにおいて比較的まとまった数量が出土しているほかは、各遺跡とも数点が確認されているにすぎない。

C　開田高原

三方が山に囲まれた高原性盆地地形を流れる西野川沿いの段丘に柳又 A・C(35・36)、越(37)があり、標高は 1122～1140m である。3 遺跡とも発掘調査が行われ、柳又 A・C では稜柱系・分割系・削片系細石刃石器群、越では稜柱系細石刃石器群が確認された。

D　日和田高原

日和田高原は、御嶽北側の山麓に広がり、長峰峠を挟んだ開田高原の約 8km 北西に位置する。そのなかで、飛騨川の最源流である幕岩川とその支流により開析された南北にのびる舌状の丘陵(1300～1320m)に池ノ原(第 1 図 38)、槍柄原(同 39)が立地する。前者からは、削片系楔形細石核を主体とする良好な石器群が得られている。

E　その他の地域

天神小根(第 1 図 24)は、群馬県境の志賀川と八重久保川の合流部南向き緩斜面に立地し、標高は 847m である。これまで細石刃石器群が未確認の地域であったが、分割系舟底形細石核が出土した。宮ノ前(同 42)は、飛騨地方北部に位置し、急峻な地形を蛇行して北流する宮川によって形成された河岸段丘南緩斜面に立地し、標高は 430m である。削片系楔形細石核が確認され、同石器群出土層位から尖頭器状の木製品が出土した。

3　細石刃技法と石材

ここでは、これまで本文中で使用してきたように、①稜柱系(稜柱形)細石核、②分割系(舟底形)細石核、③削片系(楔形)細石核という細石核原形の製作技術とその形態を示す細石核の型式名称を用いる。

A　野辺山原

矢出川遺跡群では 600 点以上もの細石核が出土した矢出川Ⅰ、68 点の矢出川Ⅳ、16 点の矢出川Ⅹに資料がまとまり、数点の細石核をもつ単発的な遺跡も含めて、その大部分は稜柱系細石核である。しかし、少量ではあるが、第 4 図 41・42、第 6 図 27 などの分割系細石核も一部含まれる。また、第 6 図 26・28 は削片系細石核の可能性も考えられる資料であるが、検討を要する。細石核と細石核原形で 25 点確認された中ッ原 5B と 1G では、

第7図26が分割系細石核である以外は、すべて削片系細石核と捉えることができる。ほかに柏垂には珪質頁岩の削片系細石核1点(第12図2)が採集されている。

使用石材は、矢出川Ⅰでは、ほとんどが黒曜石で、わずかにチャート・珪質頁岩または粘板岩が用いられる〔戸沢1964〕。採集資料を分析したところ、麦草峠・双子池6点、和田峠2点、霧ヶ峰5点、未発見の仮称NK産4点、神津島5点という結果が得られた〔藁科1996〕。中ッ原5Bにおける使用石材の重量比は、緑色チャート10.3%、黒曜石29.3%、チャート10.3%、その他(ホルンフェルス、硬質頁岩、安山岩、凝灰岩、石英、下呂石)14.3%、中ッ原1Gでは黒曜石90.0%、緑色チャート6.7%、チャート3.2%、その他(ガラス質安山岩)0.1%である。前者では細石刃関連資料の大部分が黒曜石で、加工具類にチャート等の石材が多用される傾向があり、さらに加工具は完成品として遺跡外から搬入されたものが多い。他方、後者では細石刃関連資料は5Bと同様であるが、加工具類の場合、黒曜石とチャートの使用頻度は拮抗している。後述するように中ッ原5Bと1Gでは遺跡間接合(第11図9)が確認できるなど、両石器群の技術的・時空間的共有性は高いにも関わらず、使用石材の面では、5Bでは緑色チャートが半数近くを占める一方で、1Gでは黒曜石が実に9割に及ぶという石器群の相違点が報告されている〔八ヶ岳旧石器研究グループ1996〕。石材産地でいえば、チャートと緑色チャートは千曲川周辺の秩父層群中に嵌入するものと推定されるいわゆる在地の石材と捉えてよいものである。また、5Bには下呂石(=玻璃質安山岩、岐阜県下呂町湯ヶ峰に産出)や珪質頁岩という遠隔地の石材も含まれている。一方、黒曜石の原産地は分析の結果、5Bで24点中9点がNK、6点が霧ヶ峰、5点が双子池、2点が和田峠、そして麦草峠と不明が1点ずつ、1Gで17点中11点が双子池、霧ヶ峰・麦草峠・NKが2点ずつと報告された〔藁科1996〕。

B　和田峠周辺

黒曜石原産地に近い当地域10遺跡の細石核31点は、すべて稜柱系細石核で、石材は黒曜石である。

C　開田高原

柳又A第Ⅴ文化層では、削片系細石核(第13図35～37、第14図1・2・6・7)が主体を占めるものの、分割系細石核(第14図3・4・8・9)、稜柱系細石核(同5)も出土している。一方、柳又Cでは、第Ⅰ文化層から削片系細石核(第17図20)と分割系細石核(同21・24・25)、第Ⅱ文化層からは稜柱系細石核(同17～19・22・23・26)がそれぞれ出土した。越は、稜柱系細石核(第18図11～15)のみからなる。

使用石材は、柳又Aの場合、重量比でチャート63.0%、黒曜石15.4%、下呂石12.5%、その他11.1%で、細石刃関連資料は黒曜石と下呂石、加工具はチャートと、器種別に石材が選択されている〔國學院大學文学部考古学研究室1997〕。さらに細石刃関連資料を詳しくみれば、削片系と分割系は黒曜石と下呂石、稜柱系は黒曜石に分かれている。黒曜石を分析した結果、和田峠6点・星ヶ塔4点という結果が得られている〔鈴木ほか1990〕。柳又Cでは、報告書に具体的な石材比率が掲載されていないために詳細は不明であるが、観察表をみるかぎり、細石刃関連資料、加工具ともに黒曜石と下呂石が石材組成率を二分しているようである。そのなかで、削片系と分割系は下呂石・黒曜石・頁岩、稜柱系は黒曜石が使われている〔青木・内川・高橋1993〕。越では、全体の重量比がチャート83.7%、下呂石6.6%、黒曜石2.4%、その他7.3%で、器種別にみれば細石刃関連資料は黒曜石、加工具はチャートと、石材利用の状況は柳又Aに酷似する〔松原1999〕。なお、81点の黒曜石に対して産地同定を行ったところ、和田峠44点、霧ヶ峰36点、男鹿1点という結果が示された〔望月1999〕。

D　日和田高原

池ノ原ではほとんどが削片系細石核で、1点(第20図2)のみ分割系細石核が確認されている。そして、その使用石材は、細石核・同原形で黒曜石12点、チャート5点、下呂石5点、細石刃で黒曜石21点、チャート7点、下呂石7点と、細石刃関連資料は黒曜石の割合が高い。また、加工具ではチャート、下呂石が多用されている〔飛騨考古学会旧石器分科会・永塚2001〕

E　その他の地域

天神小根では分割系細石核(第12図12・13)があり、石材は頁岩を主体とし、チャート、ガラス質黒色安山岩、安山岩、凝灰岩、黒曜石が用いられている〔須藤2001〕。宮ノ前では削片系細石核(第21図7～10)が出土し、報

告によれば7・10は黒曜石製で打面に擦痕が観察されるという。石材は、下呂石、チャート、黒曜石が多用され、ほかに硬質頁岩、輝石安山岩、流紋岩がある〔早川ほか1998〕。

4　組成の特徴

これまで述べてきた遺跡のなかで、発掘調査によりその組成が明らかになっているものは矢出川Ⅰ、中ッ原5B、中ッ原1G、柳又A(第Ⅴ文化層)、柳又C第Ⅰ文化層、同第Ⅱ文化層、越、宮ノ前の7遺跡8文化層である。そして、これらは保有する細石核の組み合わせから、(A)稜柱系のみ：柳又CⅡ・越、(B)稜柱系(主体)＋分割系：矢出川Ⅰ、(C)削片系のみ：中ッ原1G・宮ノ前、(D)削片系(主体)＋分割系：中ッ原5B・柳又CⅠ、(E)稜柱系・分割系・削片系が混在：柳又Aに分類される。

A　稜柱系のみ

掻器・削器・加工痕を有する剥片は安定して組成する。越では、ほかに尖頭器・石刃・敲石・礫器・台石が加わる。ただし、尖頭器・石刃については、出土位置と他地域における石器群との比較から、(稜柱系)細石刃関連遺物との共伴関係に疑問が残る。

B　稜柱系(主体)＋分割系

矢出川Ⅰのみであるが、掻器・削器を有する。遺跡内からナイフ形石器が出土しているが、細石刃石器群には共伴はしないものと考えられる。

C　削片系のみ

掻器・削器・加工痕を有する剥片のほか礫器・磨石・敲石が組成する。ほかに中ッ原1Gの切断剥片、宮ノ前の楔形石器は数量的に充実しており、特に前者は製作技法および使用方法〔吉田1996〕を含め注目すべき石器といえる。宮ノ前からは加工痕・被熱痕をもつ尖頭器状の木製品が出土した〔山田1998〕。

D　削片系(主体)＋分割系

掻器・削器・加工痕を有する剥片・礫器・磨石・敲石がある。ほかに中ッ原5Bでは彫器・錐・切断剥片、柳又CⅠでは尖頭器・石刃が加わる。中ッ原5Bの彫器は、在地石材であるチャートを用いた荒屋型彫器と認識されるものである。同石器は、分布や使用石材の観点から重要な石器といえる。

E　稜柱系＋分割系＋削片系

柳又Aのみである。柳又Cと比較してもわかるように、少なくとも稜柱系と削片系の細石刃石器群が混在したものと理解されるため、厳密な意味での石器組成は述べられないが、細石刃関連資料のほか、尖頭器・彫器・彫掻器・掻器・削器・抉入石器・加工痕のある剥片・楔形石器・石刃・石斧・敲石・礫器が出土した。注目すべき石器として、彫掻器と石刃があり、また、掻器にはチャート製の角二山型掻器1点が含まれる。

5　編年と様相

当地域で、層位的に編年を構築することは困難である。そのなかで唯一、柳又Cにおいて、稜柱系細石刃石器群(第Ⅱ文化層)の上から削片系細石刃石器群(第Ⅰ文化層)が出土した。これは、相模野台地や群馬県下における層位的出土例と矛盾するものではないことから、野辺山原でもこれと同一の変遷過程がたどれると、地区ひろげて解釈しても問題はなかろう。つまり、当地域では稜柱系→削片系というおおまかな流れを追うことができる。

諏訪間順氏は、自身が示した相模野台地の段階変遷と照らし合わせ、いくつかの問題点を含むとしながらも「(細石刃文化第1段階)：野岳・休場型細石刃核のみ」→「(同第2段階)：野岳・休場型細石刃核＋船野型細石刃核」→「(同第3段階)：削片系細石刃核のみ」→「(同第4段階)：神子柴系尖頭器＋削片系細石刃核」という中部日本(野辺山原)における段階区分を提示し、堤隆氏もこれを支持した[9]〔諏訪間1991、堤1993〕。

一方、谷口康浩氏は、柳又A・Cの分析をとおして、細石刃文化から縄文時代草創期前半にかけての変遷を「(段階Ⅰ)：西南日本に共通する野岳・休場技法が主流をなし、中部地方北部の北方系細石刃文化と対峙した段階」→「(段階Ⅱ)西南日本的な在来の細石刃文化に代わり、北方系細石刃文化が南漸し、その二次的な分布圏を形成し

た段階」→「(段階Ⅲ)北方系の槍先形尖頭器文化である神子柴・長者久保文化が、段階Ⅱの地盤を継承するように出現し、これを契機として槍先形尖頭器を伴う石器群が派生した段階」→「(段階Ⅳ)有舌尖頭器が発生し、分布圏を近畿地方から中国・四国地方にまで拡大した段階」と捉えた。そして、第14図1～4の細石核[2]について、既存の非削片系細石核には同定できず、北方系削片系細石核の受容を契機として、楔形の形式だけを採択した中部地方南部において派生したもの(＝技術構成の変容)とした。

両氏の変遷案で最も異なる点は、分割系細石核の系統を諏訪間氏が「西南日本の船野型細石核」としたのに対して、谷口氏は「北方系削片系細石核の受容を契機として在地で派生したもの」と捉えたことである。しかし、筆者は両氏の見解とは異なり、当地域の分割系細石核には彫掻器(柳又A)や石刃(天神小根、柳又A・CⅠ)が組成することから、これは北方に系統が求められる技術(細石核)、つまりホロカ型細石核であると考えている。北方系削片系細石刃石器群に組成する荒屋型彫器が出土した中ッ原5Bにも分割系細石核(原形)が含まれることも、この考えの傍証となっている。今後のさらなる資料の増加をまてば、西南日本系稜柱系細石核＋分割系(船野型)細石核→北方系削片系細石核＋分割系(ホロカ型)細石核という変遷が想定できるかもしれない。

次に、削片系細石刃石器群についてふれてみたい。北方にその系統が求められる削片系細石刃石器群は、東北地方においては在地石材である良質な珪質頁岩を用い、また、荒屋型彫器や角二山型掻器という示準石器を装備することが多い石器群である。かつて筆者は、これらの石器製作技術については東北日本の珪質頁岩を用いた削片系細石刃石器群の一次的波及と、それを受容した結果、在地石材[3]を用い、かつ、技術システムを変異させた二次的展開を想定した〔吉井1991〕。具体的な石器群をあげれば「柏垂」→「中ッ原1G・5B、柳又CⅠ」となる。さらに、石器組成の面から詳しくみれば、柳又CⅠは石刃と尖頭器を有するが、中ッ原1G・5Bには組成しないことから、前者が縄文的で、より新しい様相を備えているといえようか[4]。

以上の点から、はなはだ乱暴ではあるが、当地域における細石刃文化期の編年案をまとめると、Ⅰa期：稜柱系細石刃石器群(矢出川・柳又CⅡ／黒曜石主体)、Ⅰb期：稜柱系＋分割系細石刃石器群(矢出川／黒曜石主体)、Ⅱa期：北方系削片系細石刃石器群(柏垂／東北産珪質頁岩)、Ⅱb期：北方系削片系＋北方系分割系細石刃石器群(中ッ原1G・5B／在地石材)、Ⅱc期：北方系削片系＋北方系分割系細石刃石器群＋尖頭器・石刃(柳又CⅠ／在地石材)となろうか。ただし、Ⅱb期とⅡc期は時間的差異として位置付けるのではなく、遺跡によるセトルメントシステムの相違という可能性も想定する必要があるのかもしれない。

いずれにしても、珪質頁岩を用いた削片系細石刃石器群の東北日本からの波及は、当地域の細石刃文化にとって大きなインパクトであり、縄文時代前夜に位置付けられるその後の細石刃文化(中ッ原1G・5B)に、多大な影響を及ぼしたことは想像するに難くない[5]。

7　研究の課題

前回のシンポジウムからの10年間で、当地域においては新たな資料や新たな研究など、いくつかの新知見が得られた。ここでは、それらのこともふまえて次の2点を研究課題としておきたい。

1点目は、編年研究周辺の問題である。具体的には、細石刃文化の成立問題も含めた稜柱系細石刃石器群の実態、分割系細石刃石器群の系統とほかの細石刃石器群との共伴関係、削片系細石刃石器群の本質(変容・変形はあったのかなど)と縄文時代草創期の関連性である。2点目は、石材利用・獲得を含めた集団の活動形態の問題である。これについては、加藤学氏や堤氏らにより、すでに興味深い内容が論じられている〔加藤1996、堤2002など〕。しかし、より具体的に集団の活動形態を明らかにするためには、石材の獲得(直接・間接等)のみだけではなく、互いに複雑に起因している様々な現象をひとつひとつ紐解いていかなければならない。

いずれにしても、以上の課題は当地域のみで解決できるものではなく、東北アジアを含めたより広域的な視点で究明していかなくてはならないものである。

本稿を作成するにあたり、保坂康夫氏・長屋幸二氏・堤隆氏からご教示いただいた。深く感謝申し上げる。

註)

1) このなかで、野辺山原出土の分割系細石核を「船野型細石刃核」としたのは、相模野において「船野型」と認識されたもの〔鈴木 1983、堤 1984・1987〕を、そのまま野辺山原に踏襲したためであろうか。

2) 筆者は、第 14 図 1・2 の細石核は削片系の細石核と考え、中ッ原　　5B の同様の技術によるもの(第 7 図 21・22)と捉えている。

3) 中ッ原で用いられている石材の産地との距離はすべて水平距離で、緑色チャート：10～15km、チャート：5～17km、麦草峠・双子池：約 20km、和田峠・霧ヶ峰：約 40km〔堤・吉田 1996〕。また、柳又～下呂石(岐阜県下呂湯ヶ峰)は約 35km である

4) 各細石核が混在する柳又 A では、尖頭器・石刃に加えて彫掻器も組成するなど、より縄文時代草創期色が強い。東北地方の事例を参考にすれば、これらは分割系または削片系細石刃石器群に組成するものと予想される。

5) 例えば、黒曜石から在地石材という使用石材の変化、散発的ではない定量の石器を装備していたと考えられる石器群の増加があげられ、ほかにも生業の変化(内水面漁撈)〔加藤 1981、佐藤 1992〕等も考えられよう。

引用・参考文献

麻生　優　1991「Ⅰ．岐阜県・池の原遺跡の調査概要」『日本旧石器時代から縄文時代への推移に関する構造的研究』

青木　豊・内川隆志・高橋真実　1993『柳又遺跡 C 地点』長野県開田村教育委員会ほか

大竹憲昭　1993「和田峠地区　ト B03a」『長野県黒耀石原産地遺跡分布調査報告書(和田峠・男女倉谷)Ⅲ』　長野県和田村教育委員会

小口達志・由井一昭　2000「中ッ原第 5 遺跡 B 地点の新資料」『MICRO BLADE』創刊号　八ヶ岳旧石器研究グループ

加藤晋平「旧石器時代の漁撈活動－先土器時代の経済活動を考える上で－」『信濃』33-4

加藤　学　1996「中ッ原 5B・1G 地点をめぐる行動形態の復元」『中ッ原第 1 遺跡 G 地点の研究Ⅱ』

川上村教育委員会　1992『川上村誌　先土器時代編』

京都女子大学考古学研究室　1980『信濃野辺山原の分布調査Ⅱ』

國學院大學文学部考古学研究室　1990『柳又遺跡 A 地点　第 1 次発掘調査報告書』

國學院大學文学部考古学研究室　1992『柳又遺跡 A 地点　第 2 次発掘調査報告書』

國學院大學文学部考古学研究室　1993『柳又遺跡 A 地点　第 3 次発掘調査報告書』

國學院大學文学部考古学研究室　1996『柳又遺跡 A 地点　第 6 次発掘調査報告書』

國學院大學文学部考古学研究室　1997『柳又遺跡 A 地点　第 7 次発掘調査報告書』

佐久考古学会・八ヶ岳旧石器研究グループ　1993『シンポジウム細石刃文化研究の新たなる展開』

佐藤宏之　1992「北方系削片系細石器石器群と定住化仮説」『法政大学大学院紀要』29

信州ローム研究会　1972『男女倉』

鈴木次郎　1983「細石器（本州地方）」『季刊考古学』4　雄山閣出版

鈴木正男・戸村健児・金山喜昭　1990「黒曜石の分析」『柳又遺跡 A 地点　第 1 次発掘調査報告書』

須藤隆司　2001「佐久市天神小根遺跡の調査」『第 13 回長野県旧石器文化研究交流会―発表資料―』

諏訪間順　1991「細石刃石器群を中心とした石器群の変遷に関する予察」『中ッ原第 5 遺跡 B 地点の研究』

芹沢長介・柳沢和明　1982「矢出川遺跡」『長野県史　考古資料編』全 1 巻(2) 主要遺跡(北・東信)　長野県

高山考古学研究会　1976「高山市及びその周辺の先土器時代遺物について(1)」『岐阜県考古』5 岐阜県考古学会

谷口康浩　1991「木曽開田高原柳又遺跡における細石刃文化」『國學院雑誌』92－2　國學院大學

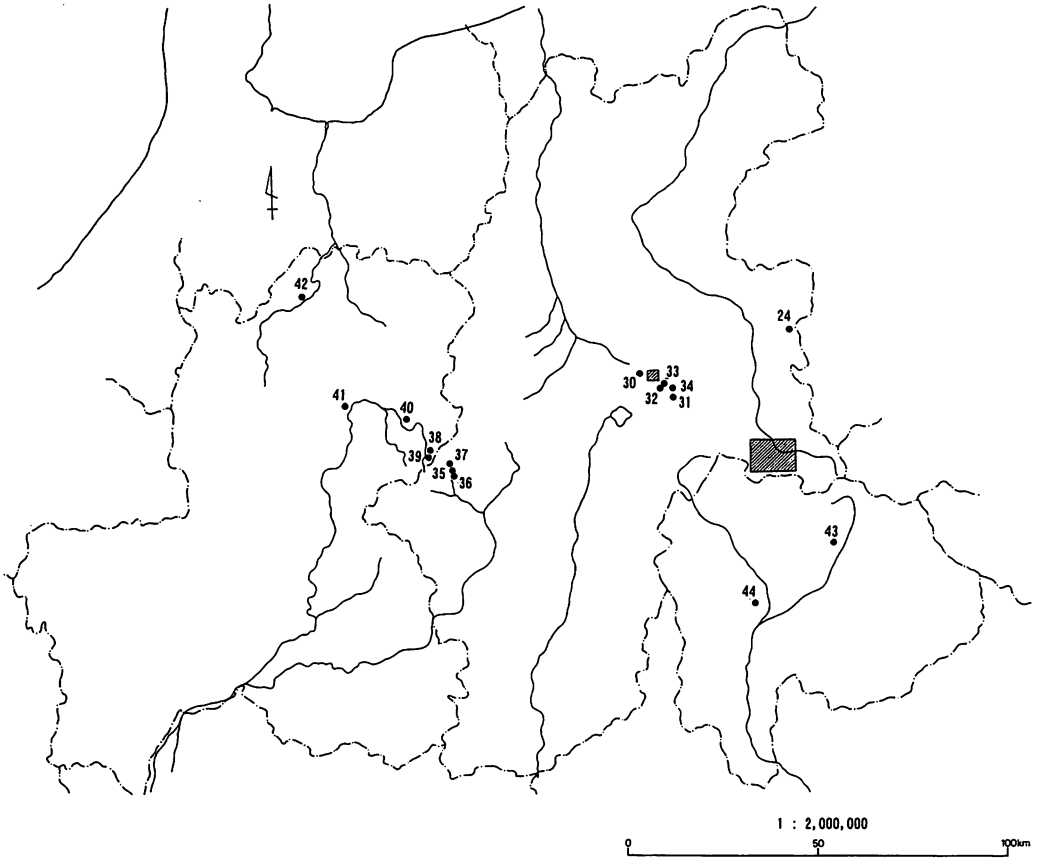
堤　隆　1983「矢出川遺跡採集の細石刃文化資料について」『旧石器考古学』26　旧石器文化談話会

堤　隆　1984「第Ⅴ章 遺構と遺物　第 1 節 第Ⅰ文化層(a)」『一般国道 246 号(大和・厚木バイパス)地域内遺跡発掘調査報告』Ⅲ　神奈川県大和市教育委員会

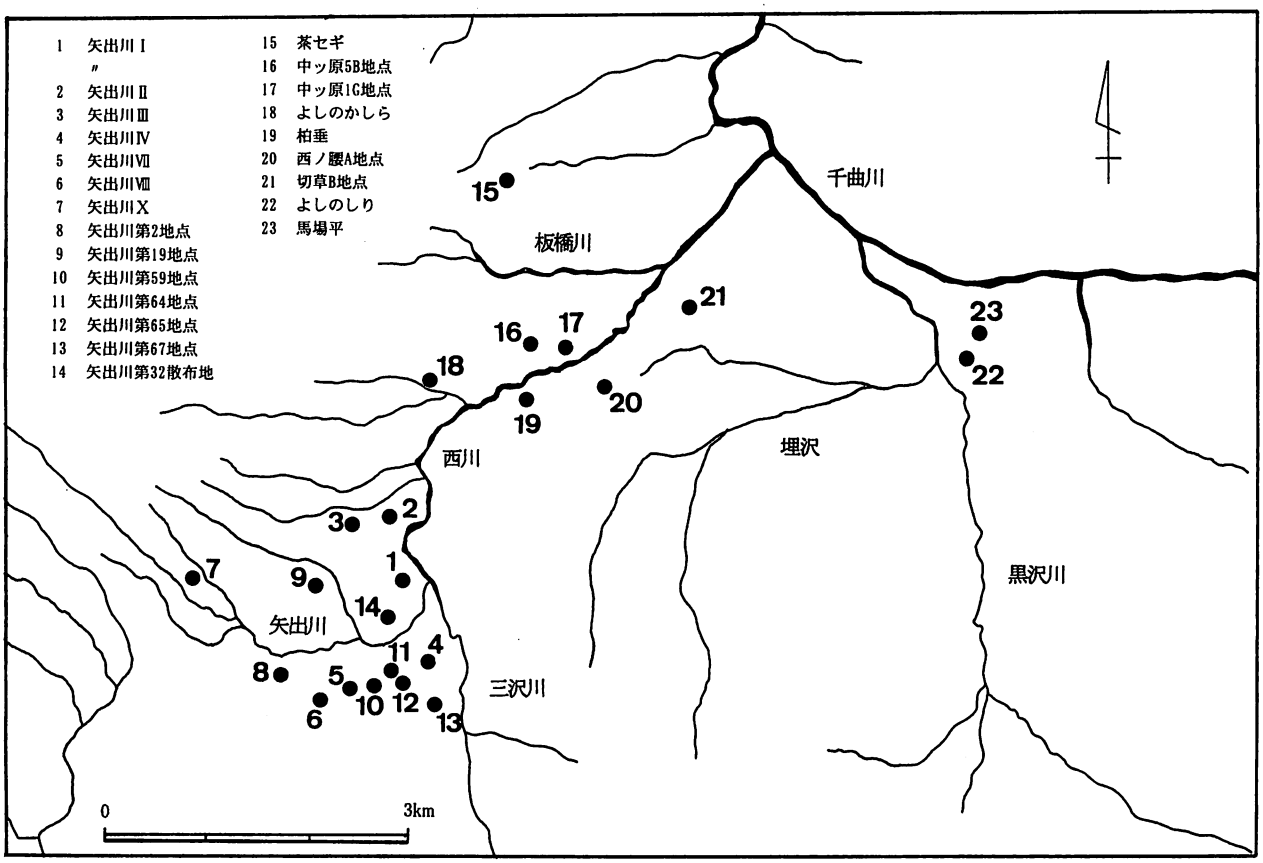
堤　隆　1986「矢出川遺跡における船野系の細石刃文化資料について」『旧石器考古学』32　旧石器文化談話会

堤　隆　1987「相模野台地の細石刃石核」『大和市史研究』13　大和市
堤　隆　1991「野辺山原における細石刃文化の様相」『中ッ原第5遺跡B地点の研究』
堤　隆　1993「本州中央部の細石刃文化」『シンポジウム細石刃文化研究の新たなる展開』
堤　隆　1996「野辺山高原における細石刃文化の新資料」『中ッ原第1遺跡G地点の研究Ⅱ』
堤　隆　1993「本沢地区　ホA27」『長野県黒耀石原産地遺跡分布調査報告書(和田峠・男女倉谷)Ⅲ』　長野県和田村教育委員会
堤　隆　2002「信州黒曜石原産地をめぐる後期旧石器時代の資源開発と資源需給－後期旧石器時代を中心として－」『國學院大學考古学資料館紀要』18
堤　隆　2002「中部高地における黒曜石研究の現状と課題」『黒耀石文化研究』創刊号　明治大学黒耀石研究センター
堤　隆・吉田政行　1996「八ヶ岳東麓における石材環境と旧石器時代の石材利用」『中ッ原第1遺跡G地点の研究Ⅱ』
尖石考古館　1966『蓼科』
戸沢充則　1964「矢出川遺跡」『考古学集刊』第2巻下　東京考古学会
戸沢充則・安蒜政雄ほか　1982『概報・矢出川遺跡群―1981年度の分布調査―』　長野県南牧村教育委員会
永塚俊司　1996「細石刃生産システムとその工程分割・遺跡間連鎖」『中ッ原第1遺跡G地点の研究Ⅱ』
中村龍雄　1977『黒曜石』上巻　和田峠 星ヶ塔
中村龍雄　1978『黒曜石』下巻　霧ヶ峰 鷹山
早川正一ほか　1998『宮ノ前遺跡発掘調査報告書』　岐阜県宮川村教育委員会ほか
飛騨考古学会旧石器分科会・永塚俊司　2001「岐阜県高根村日和田池ノ原遺跡群の報告(その1)」『飛騨と考古学Ⅱ　旧石器特集号』　飛騨考古学会
保坂康夫　1985「山梨県下の先土器時代資料の検討－1－」『研究紀要』2　山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
保坂康夫　2002「山梨県内の細石刃石器群研究－中道町下向山遺跡の旧石器時代資料の再検討－」『山梨県史だより』23　山梨県教育委員会県史編さん室
堀田雄二　1982「鷹山遺跡における細石器文化について」『上小考古』12　上小考古学研究会
松原和也　1999『越遺跡』　長野県開田村教育委員会ほか
宮里　学　1994「石器」『鋳物師屋遺跡』　山梨県櫛形町教育委員会
明治大学考古学研究室　1980『報告・野辺山シンポジウム1979』
明治大学考古学研究室　1981『報告・野辺山シンポジウム1980』
望月明彦　1999「黒曜石の産地推定」『越遺跡』　長野県開田村教育委員会ほか
森嶋　稔　1975『男女倉』　長野県教育委員会ほか
八ヶ岳旧石器研究グループ　1991『中ッ原第5遺跡B地点の研究』
八ヶ岳旧石器研究グループ　1995『中ッ原第1遺跡G地点の研究Ⅰ』
八ヶ岳旧石器研究グループ　1996『中ッ原第1遺跡G地点の研究Ⅱ』
山田昌久　1998「宮ノ前遺跡出土の木質遺物」『宮ノ前遺跡発掘調査報告書』
由井一昭・堤　隆　1985「長野県南佐久郡川上村柏垂遺跡採集の細石刃石核」『古代文化』37－6　古代学協会
由井一昭・鳥居　亮　2000「中ッ原第1遺跡G地点の細石刃文化資料」『MICRO BLADE』創刊号　八ヶ岳旧石器研究グループ
由井茂也・吉沢　靖・堤　隆　1990「信濃野辺山原の細石刃文化」『古代文化』42－11　古代学協会
吉朝則富　1984「高根村の先史時代」『高根村史』　岐阜県高根村
吉井雅勇　1991「中ッ原第5遺跡B地点における細石刃剥離技術について」『中ッ原第5遺跡B地点の研究』
吉田政行　1996「剥片折断技術の実験的方法による一考察」『中ッ原第1遺跡G地点の研究Ⅱ』

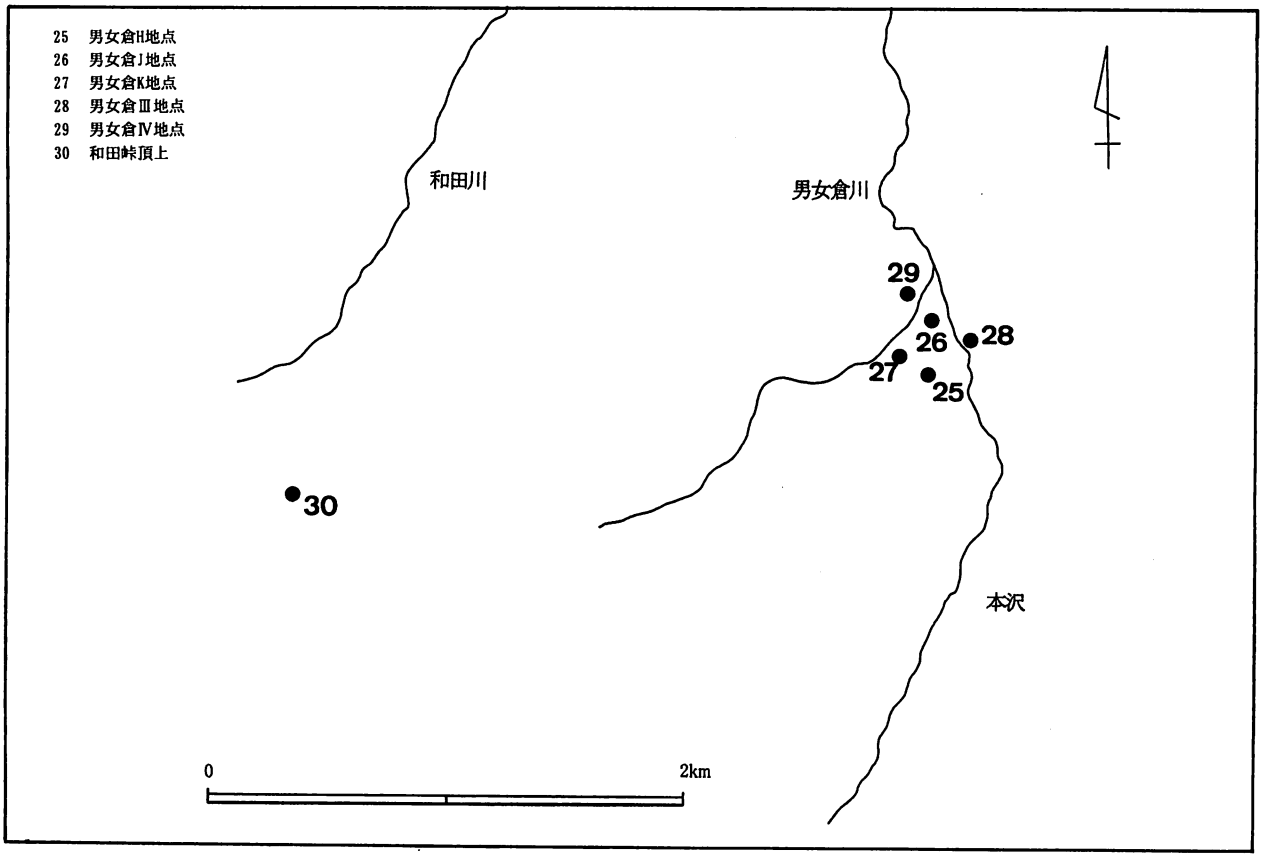
1 矢出川Ⅰ
〃
2 矢出川Ⅱ
3 矢出川Ⅲ
4 矢出川Ⅳ
5 矢出川Ⅶ
6 矢出川Ⅷ
7 矢出川Ⅹ
8 矢出川第2地点
9 矢出川第19地点
10 矢出川第59地点
11 矢出川第64地点
12 矢出川第65地点
13 矢出川第67地点
14 矢出川第32散布地
15 茶セギ
16 中ッ原5B地点
17 中ッ原1G地点
18 よしのかしら
19 柏垂
20 西ノ腰A地点
21 切草B地点
22 よしのしり
23 馬場平
24 天神小根
25 男女倉H地点
26 男女倉J地点
27 男女倉K地点
28 男女倉Ⅲ地点
29 男女倉Ⅳ地点
30 和田峠頂上
31 御座岩岩陰
32 鷹山Ⅰ
33 鷹山Ⅳ
34 標木平
35 柳又A地点
36 柳又C地点
37 越
38 池ノ原
〃
39 槍柄原
40 上野
41 宮峠A
42 宮ノ前
43 込山
44 鋳物師屋



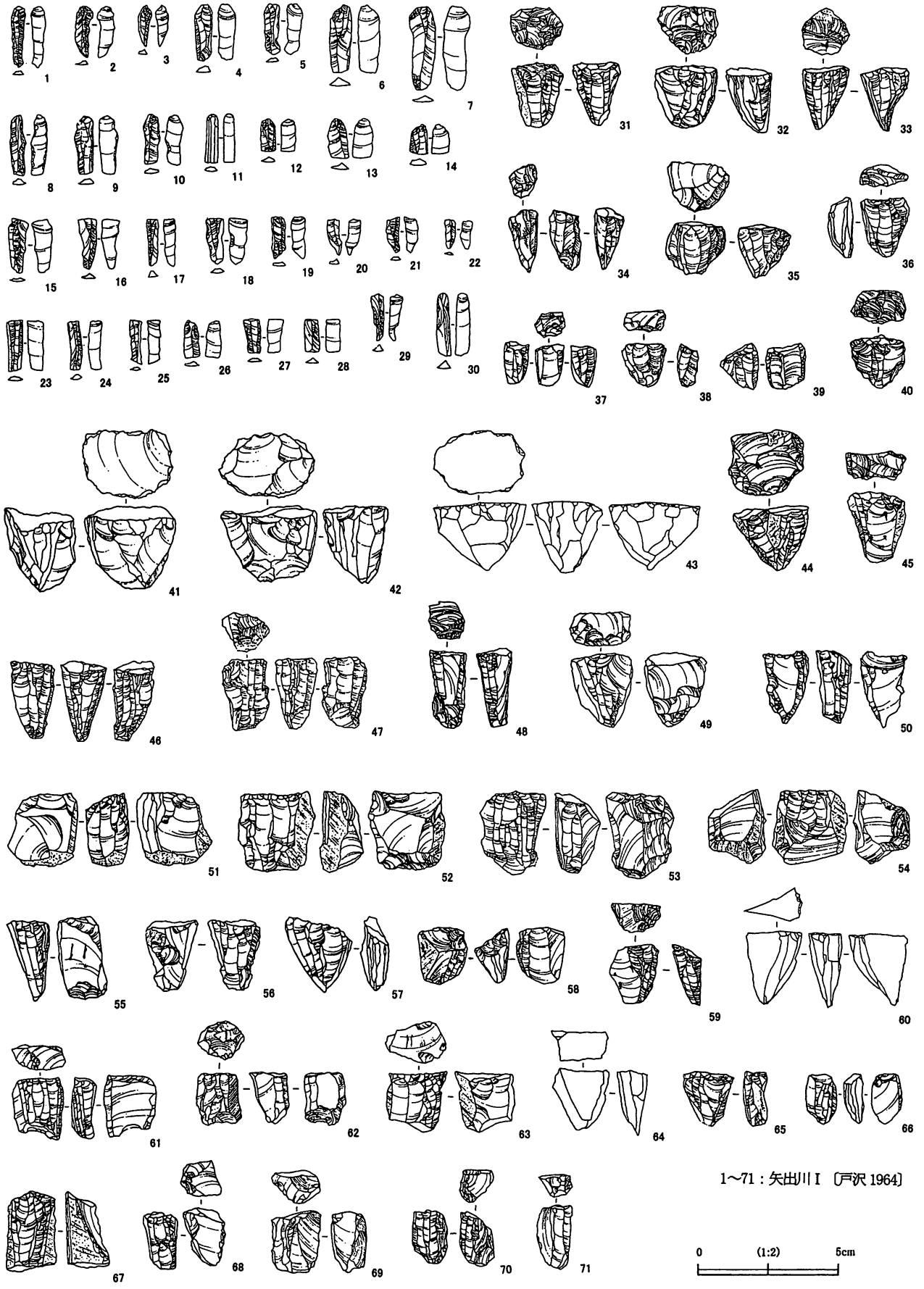
第1図　中部地方南部地域の細石刃遺跡の分布



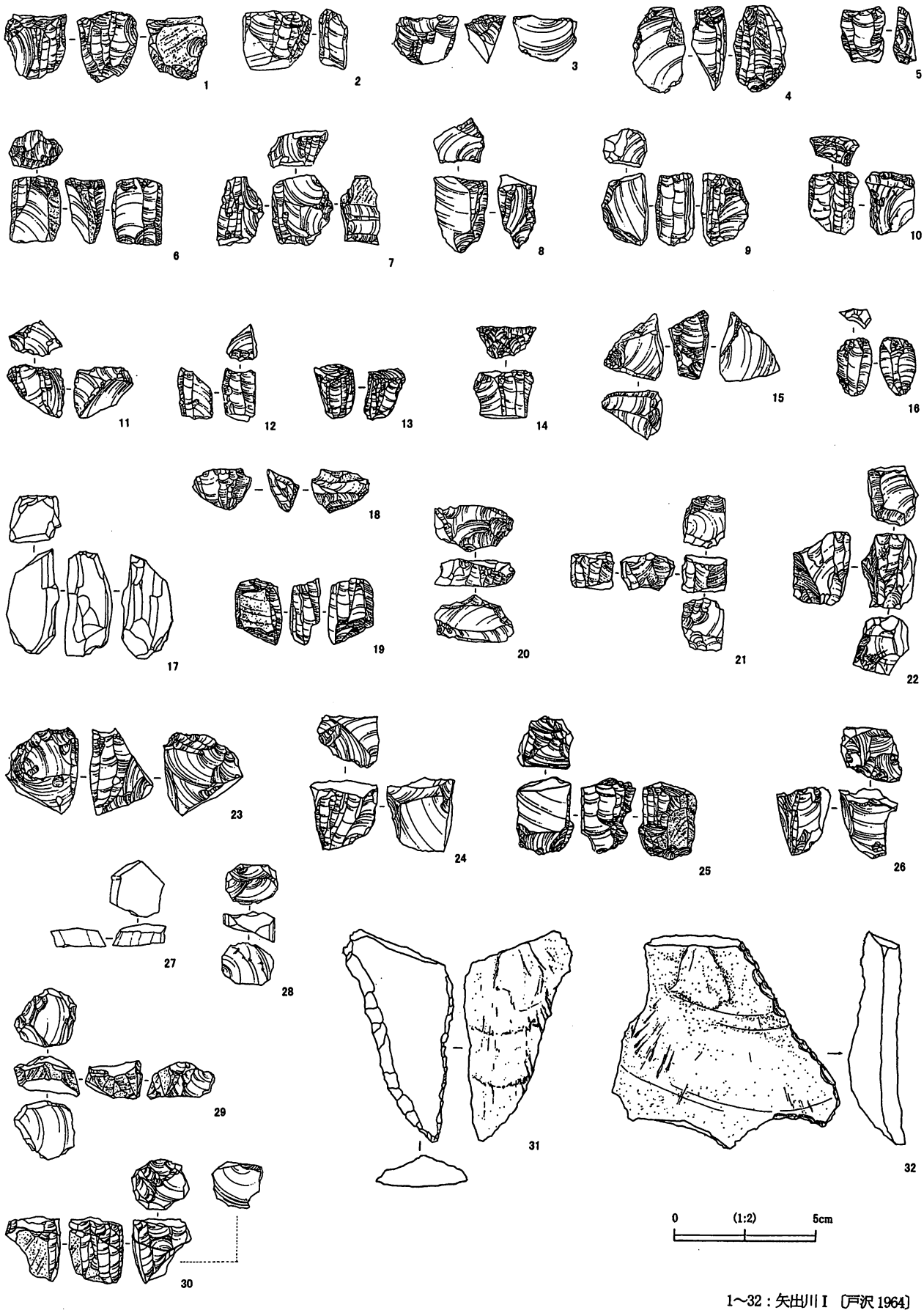
第２図　野辺山原における細石刃文化遺跡の分布



第３図　和田峠周辺における細石刃文化遺跡の分布

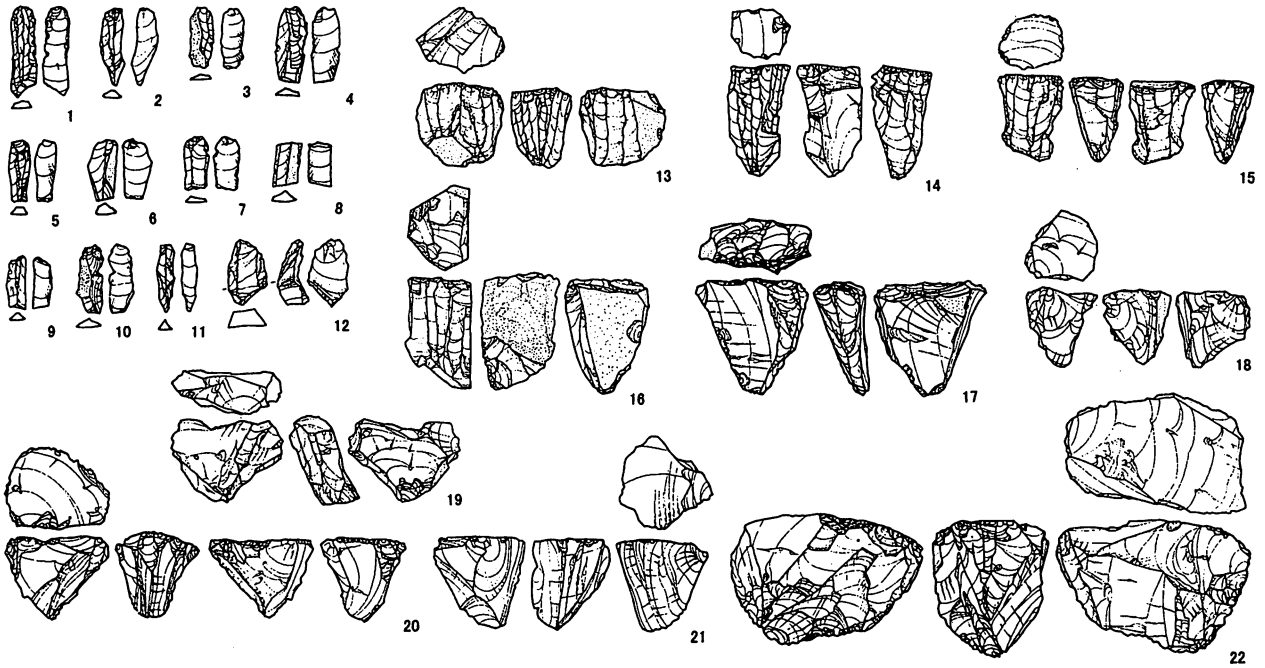


第4図　野辺山原の石器(1)



1～32：矢出川Ⅰ〔戸沢 1964〕

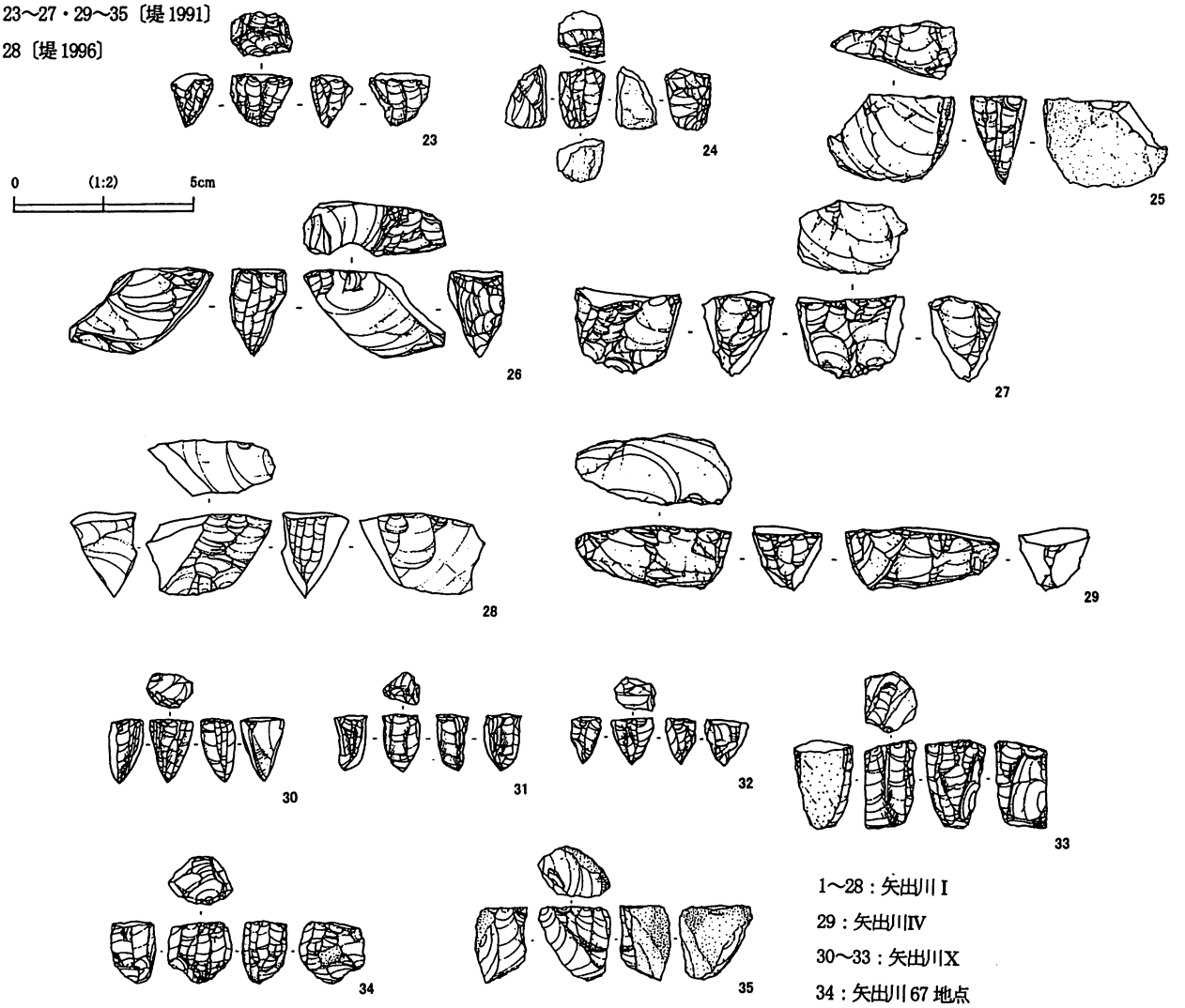
第5図　野辺山原の石器(2)



1～22〔芹沢・柳澤1982〕

23～27・29～35〔堤1991〕

28〔堤1996〕



1～28：矢出川Ⅰ

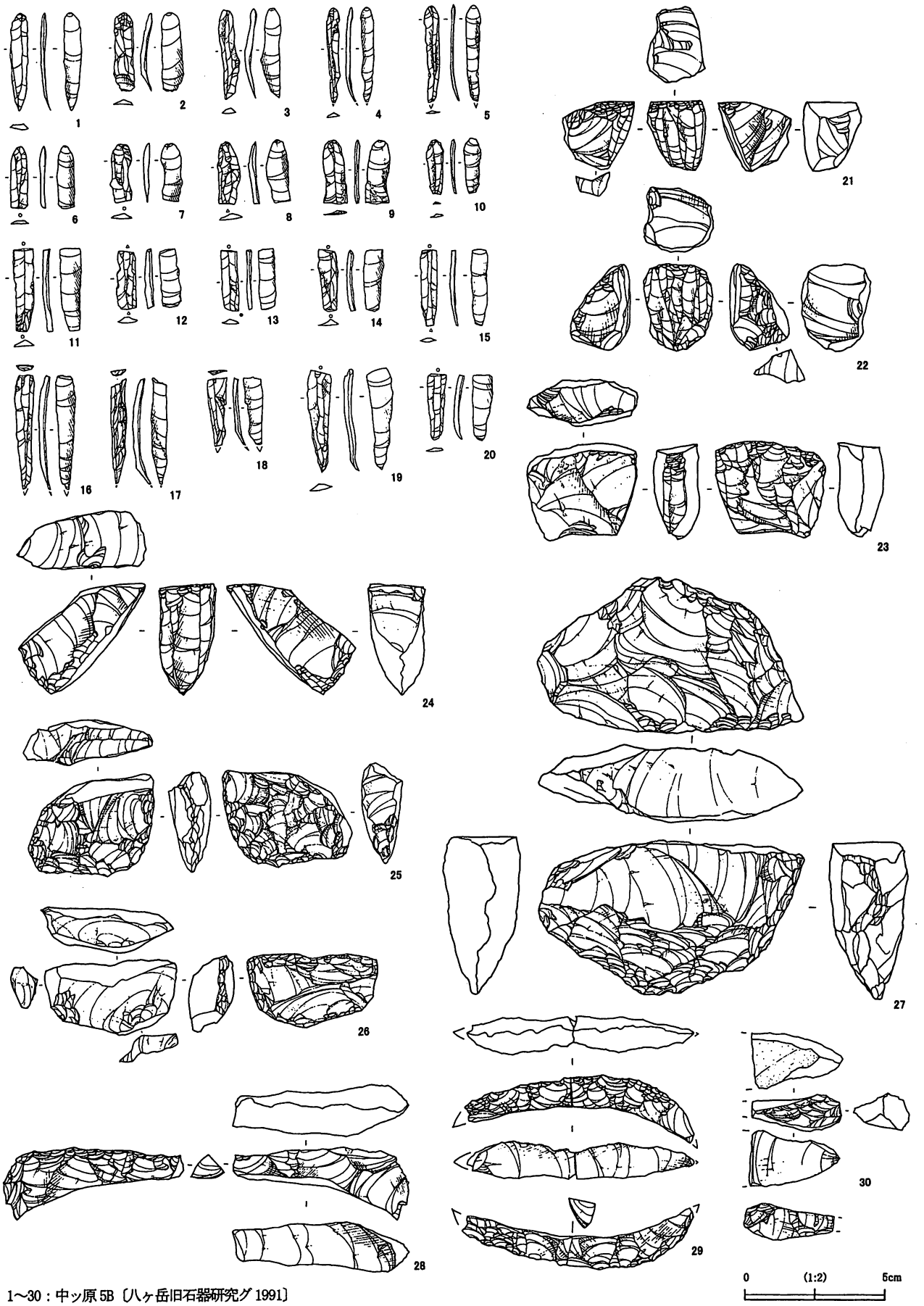
29：矢出川Ⅳ

30～33：矢出川Ⅹ

34：矢出川67地点

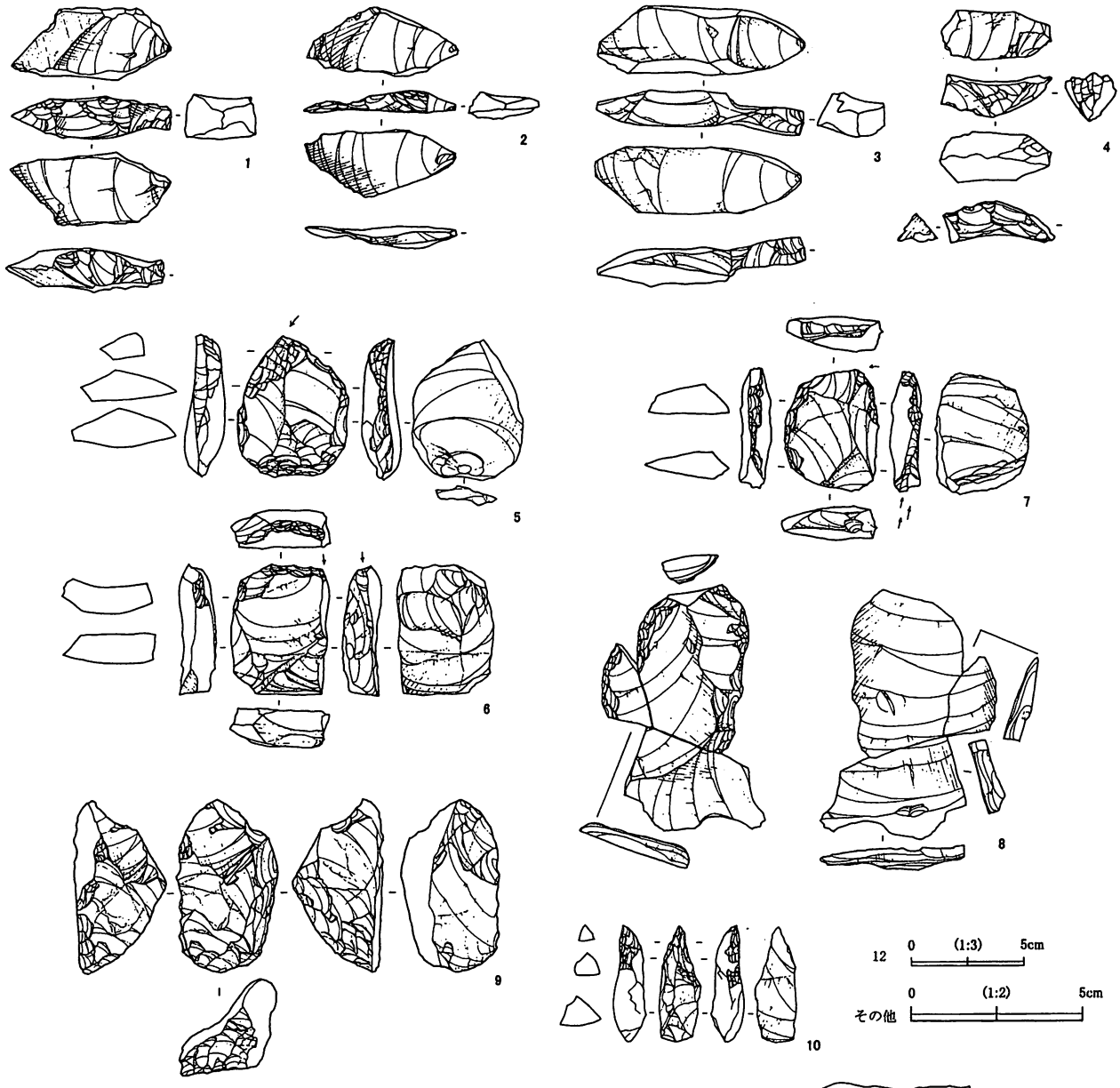
35：矢出川32散布地

第6図　野辺山原の石器(3)



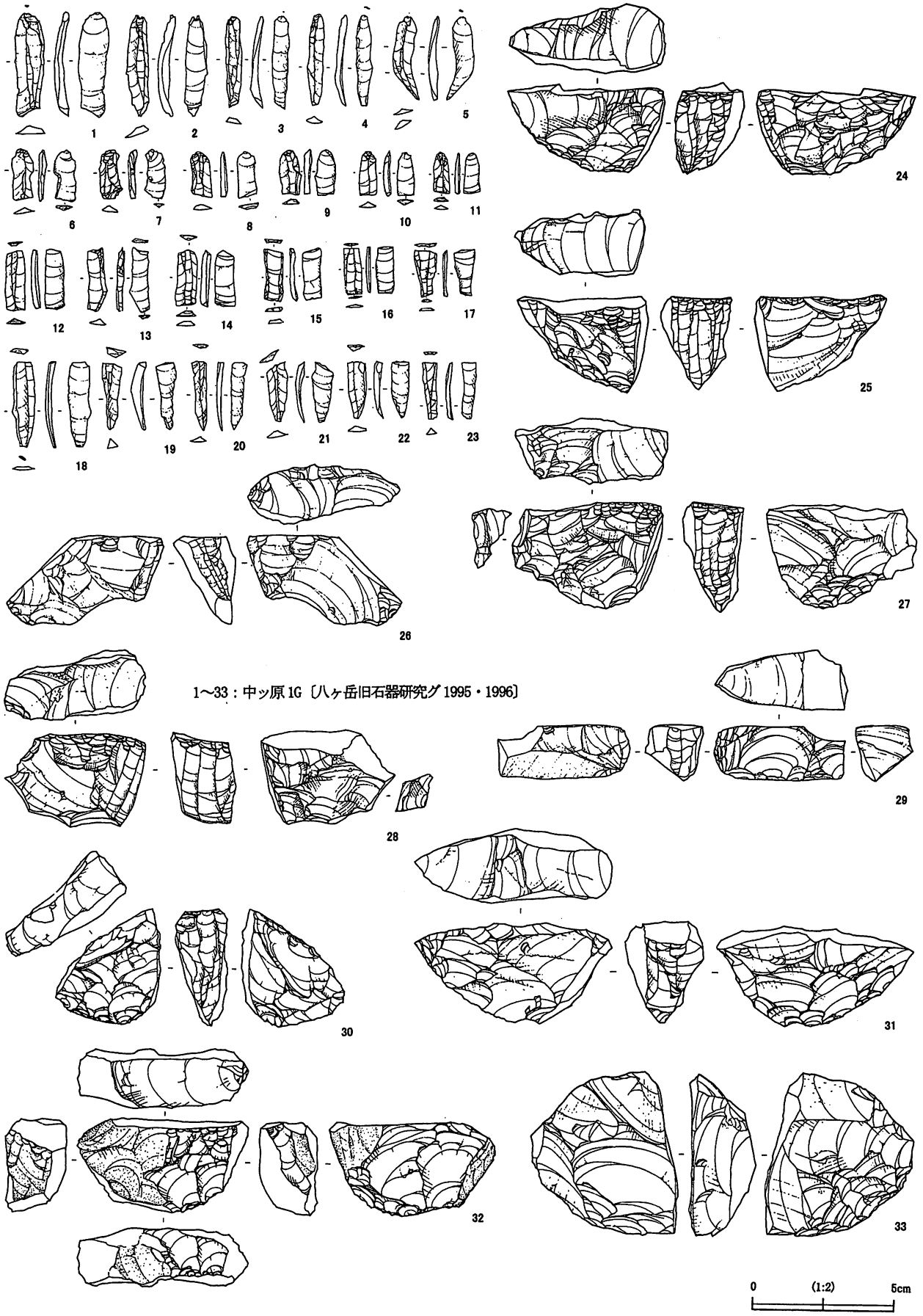
1～30：中ッ原5B〔八ヶ岳旧石器研究グ 1991〕

第7図　野辺山原の石器(4)



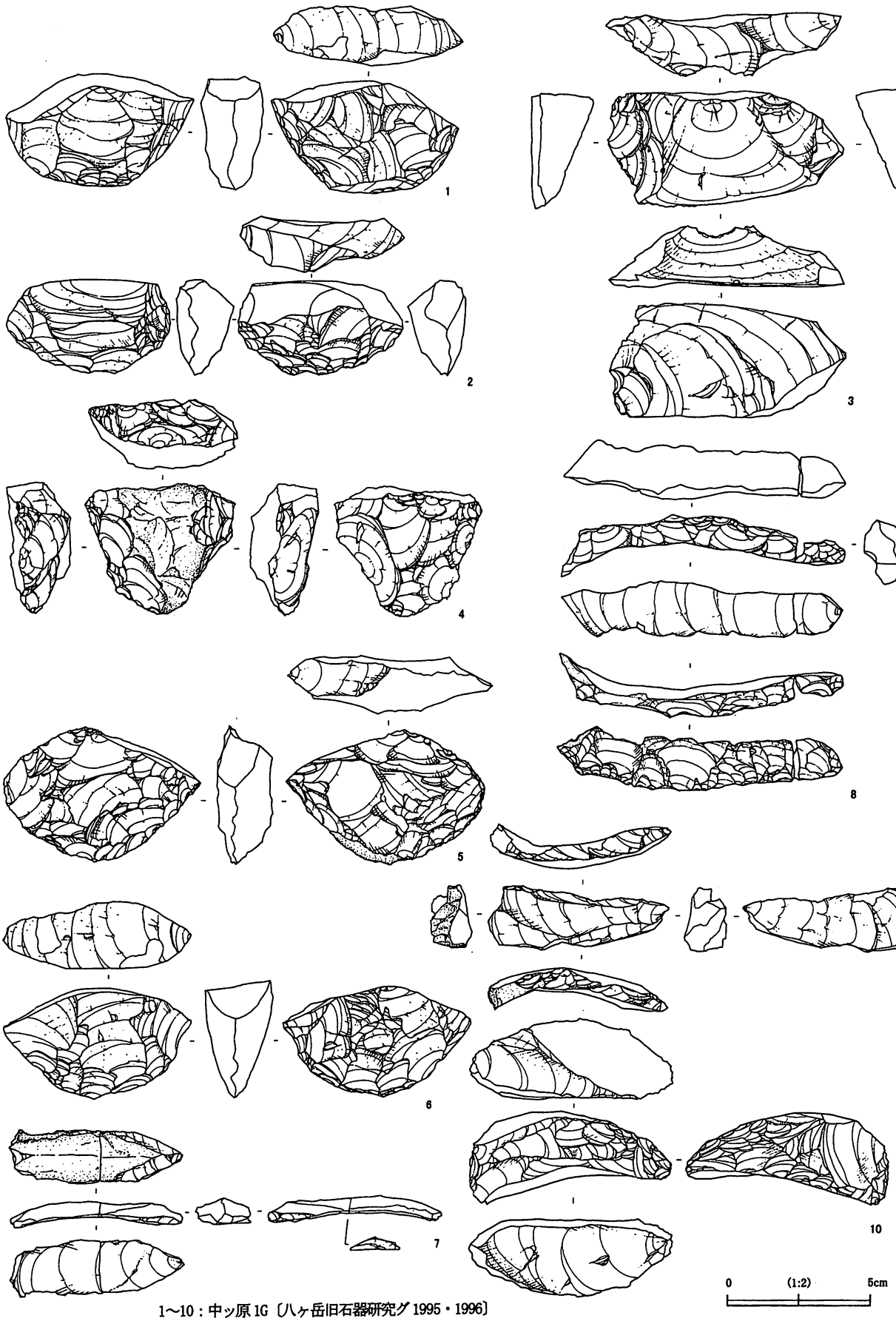
1～12：中ッ原5B〔八ヶ岳旧石器研究グ 1991〕

第8図　野辺山原の石器(5)



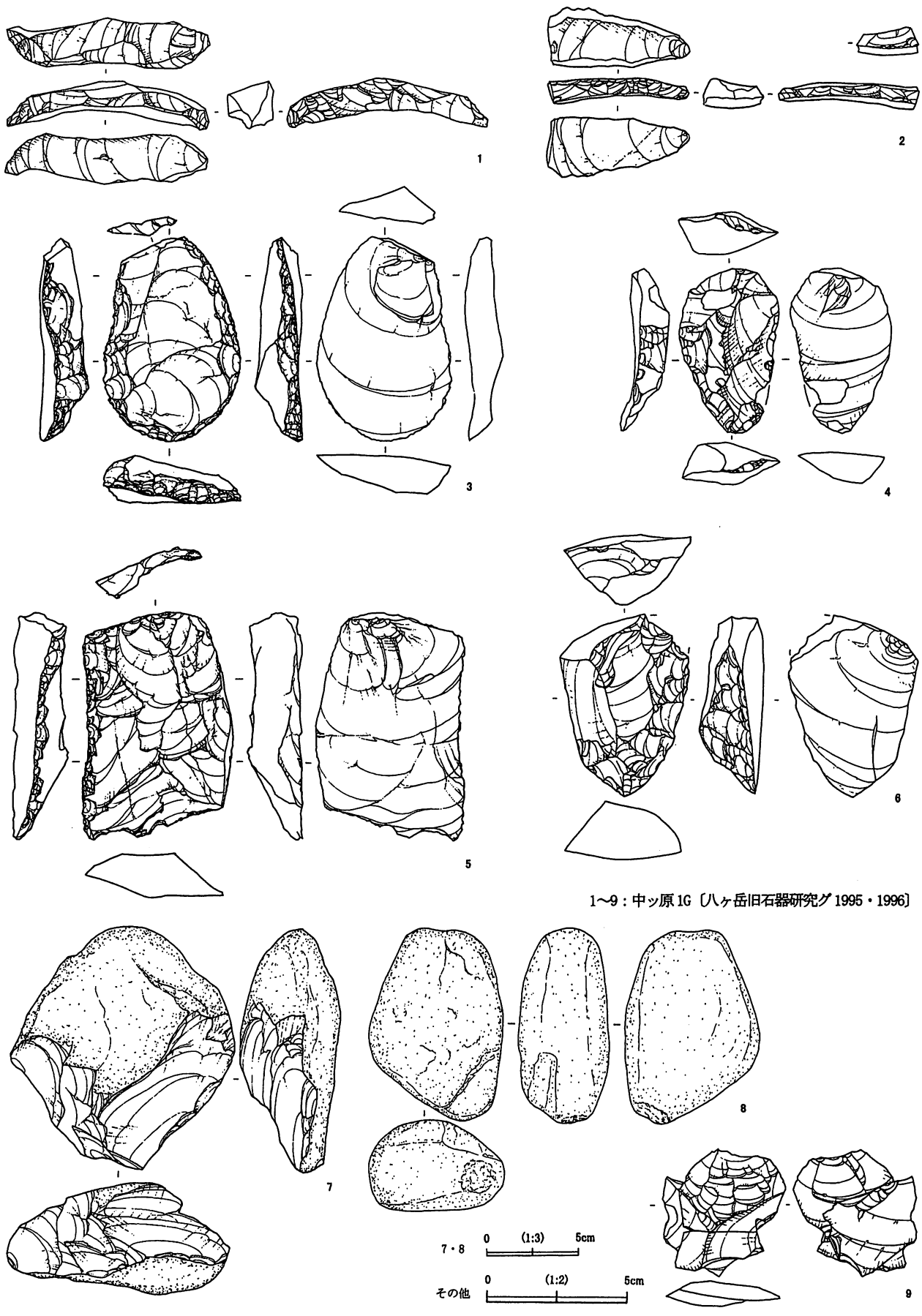
1～33：中ッ原1G〔八ヶ岳旧石器研究グ1995・1996〕

第9図　野辺山原の石器(6)



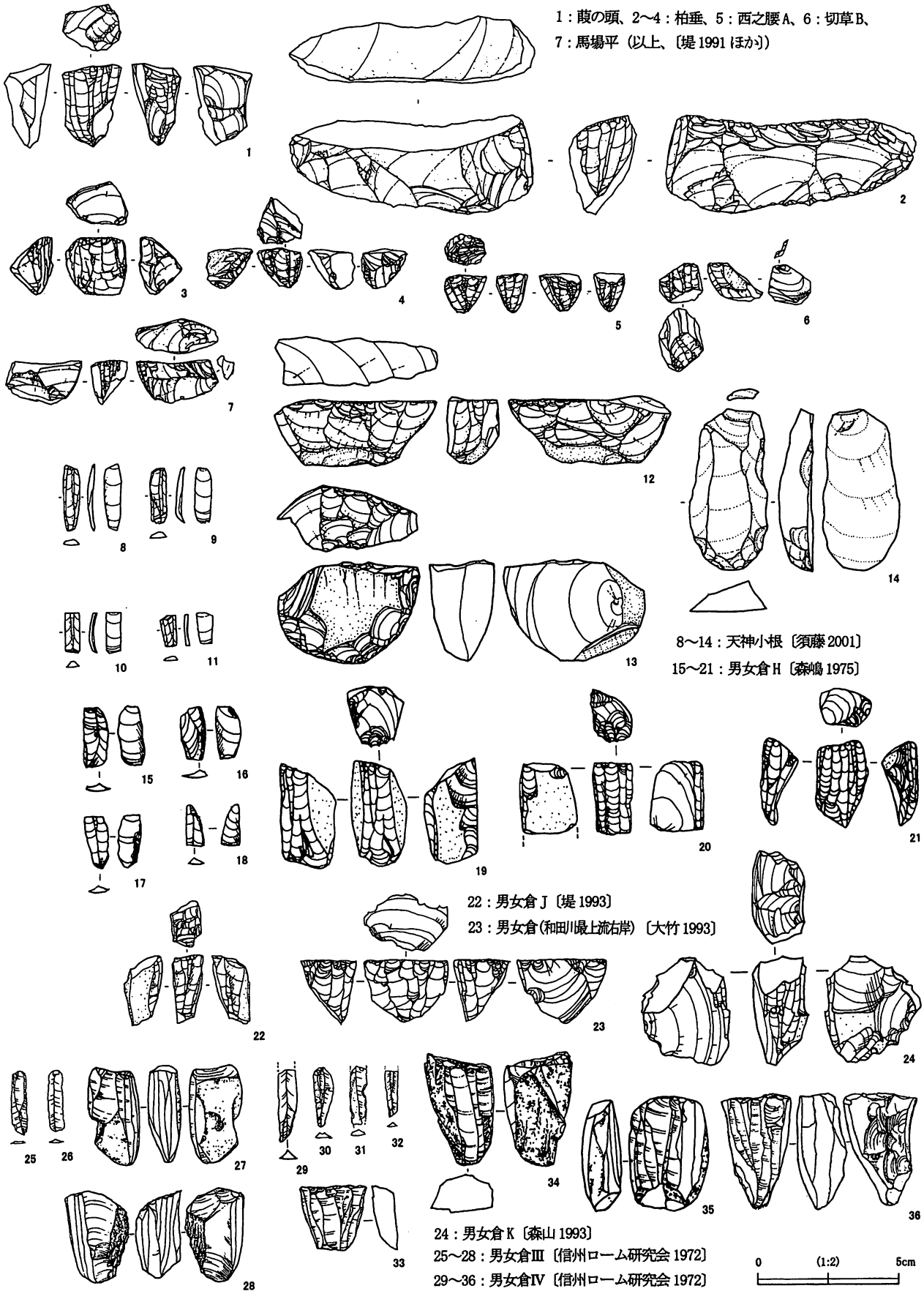
1～10：中ッ原1G〔八ヶ岳旧石器研究グ1995・1996〕

第10図　野辺山原の石器(7)

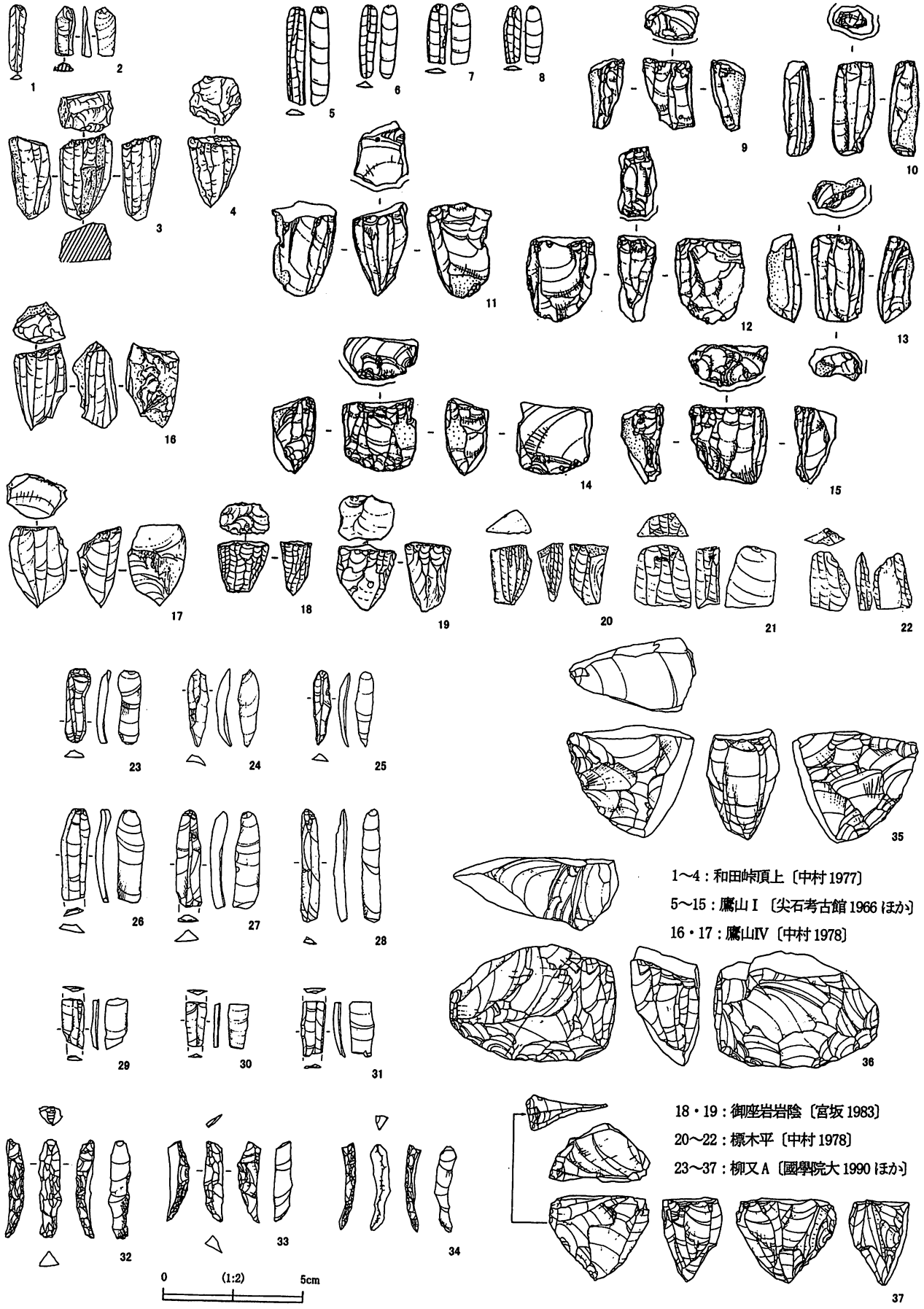


1〜9：中ッ原1G〔八ヶ岳旧石器研究グ 1995・1996〕

第11図　野辺山原の石器(8)

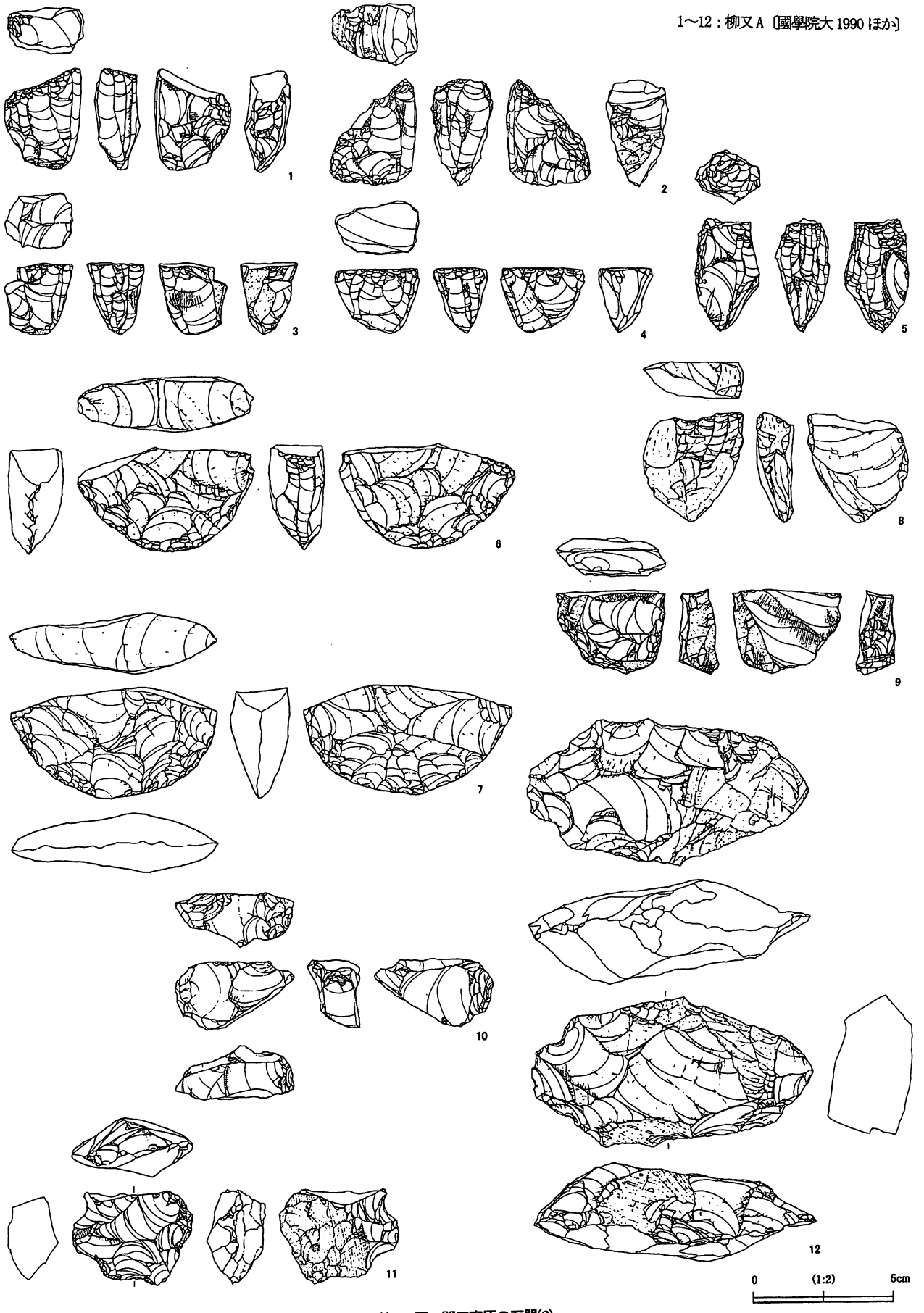


第12図　野辺山原(9)・和田峠周辺(1)の石器

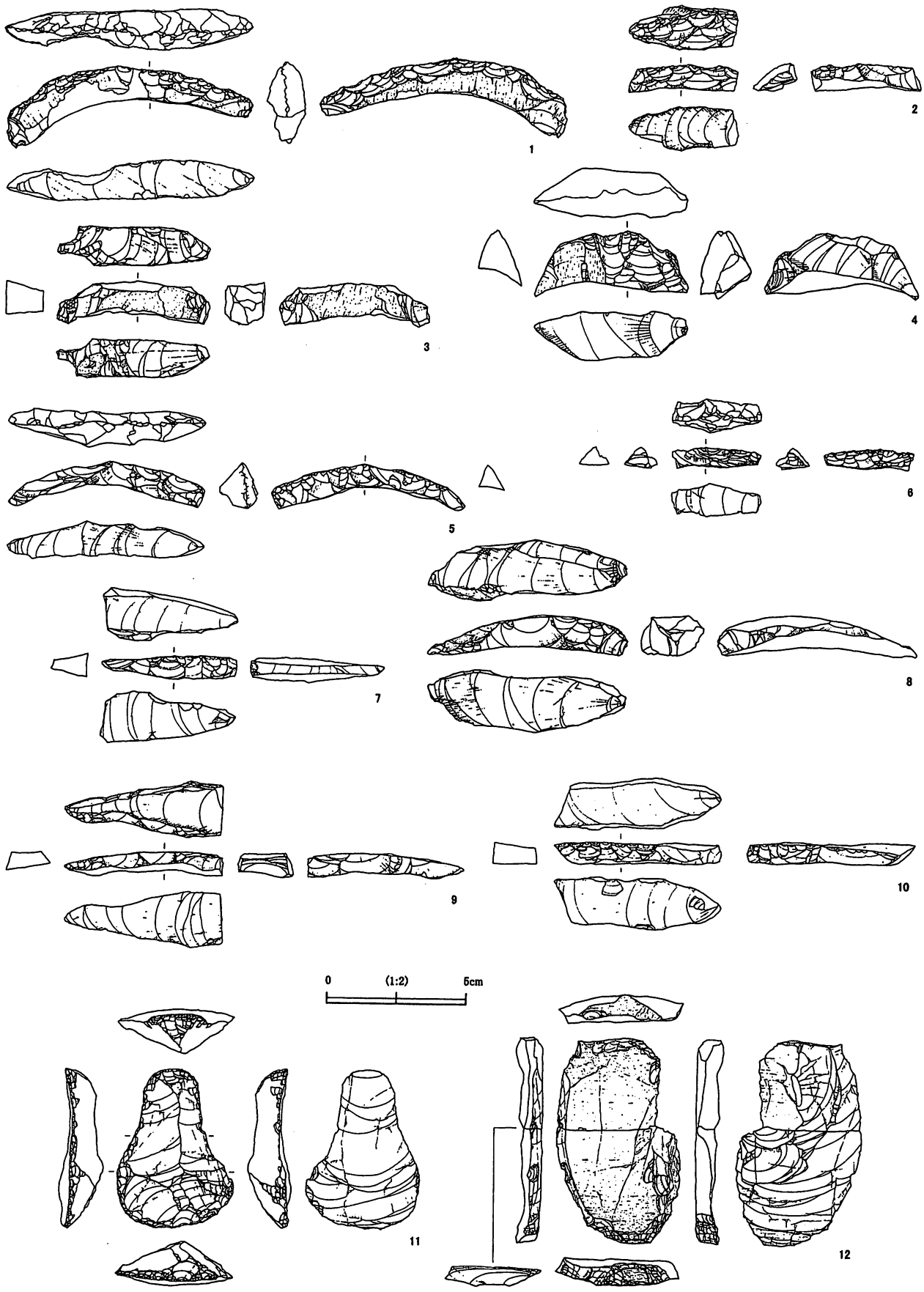


1～4：和田峠頂上〔中村 1977〕
5～15：鷹山Ⅰ〔尖石考古館 1966 ほか〕
16・17：鷹山Ⅳ〔中村 1978〕
18・19：御座岩岩陰〔宮坂 1983〕
20～22：標木平〔中村 1978〕
23～37：柳又A〔國學院大 1990 ほか〕

第 13 図　和田峠周辺(2)・開田高原(1)の石器

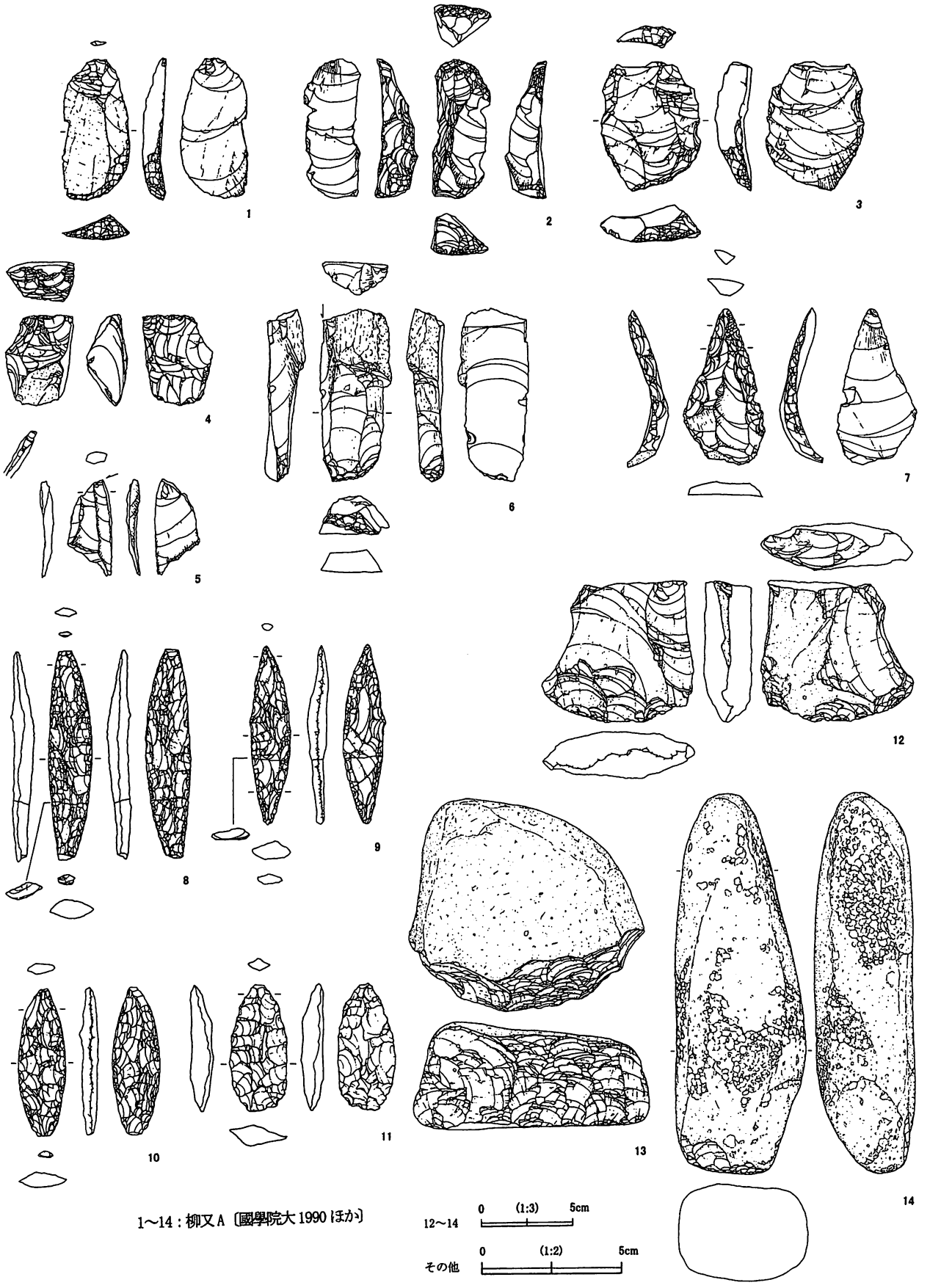


第14図　開田高原の石器(2)

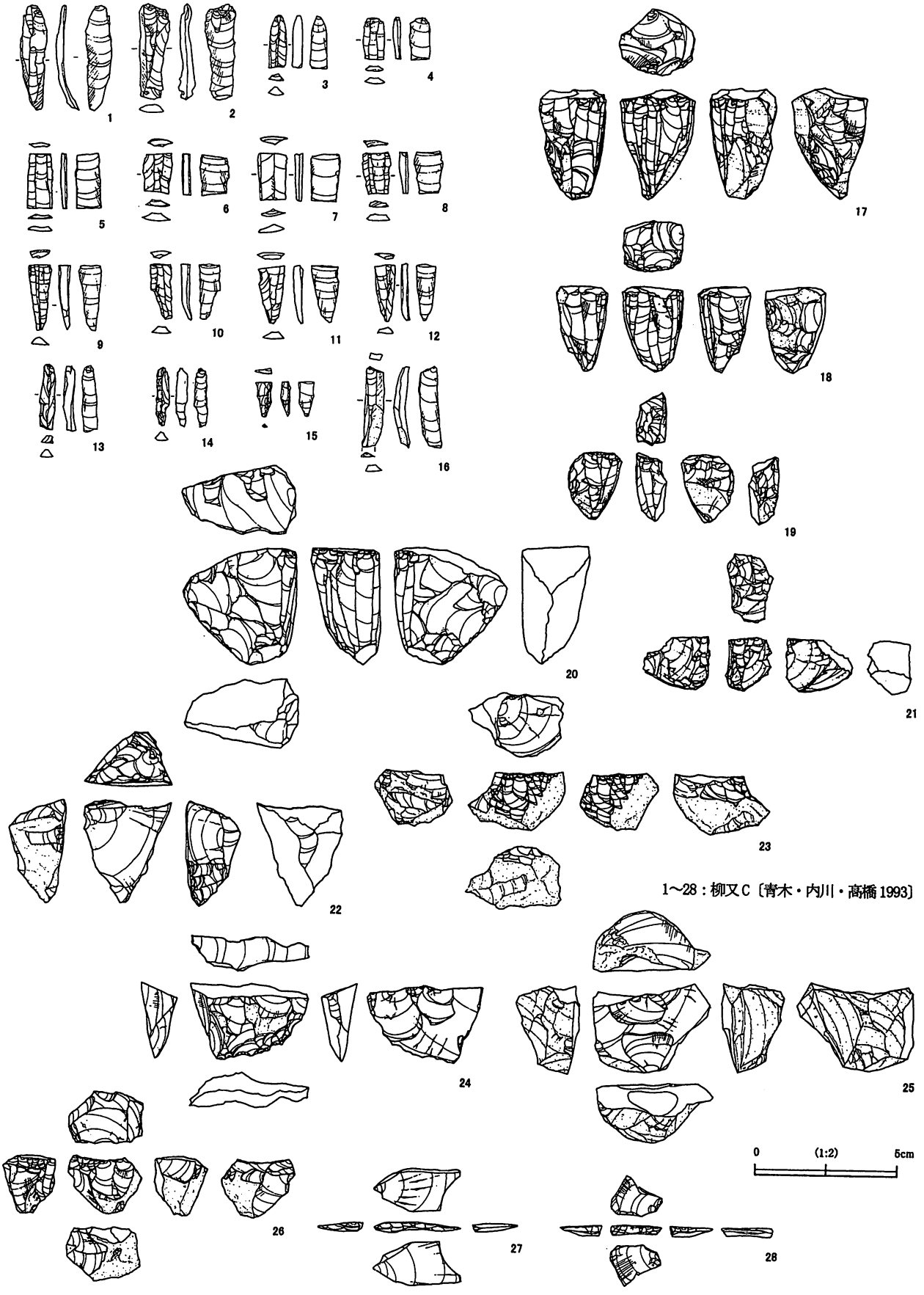


1～12：柳又A〔國學院大1990ほか〕

第15図　開田高原の石器(3)

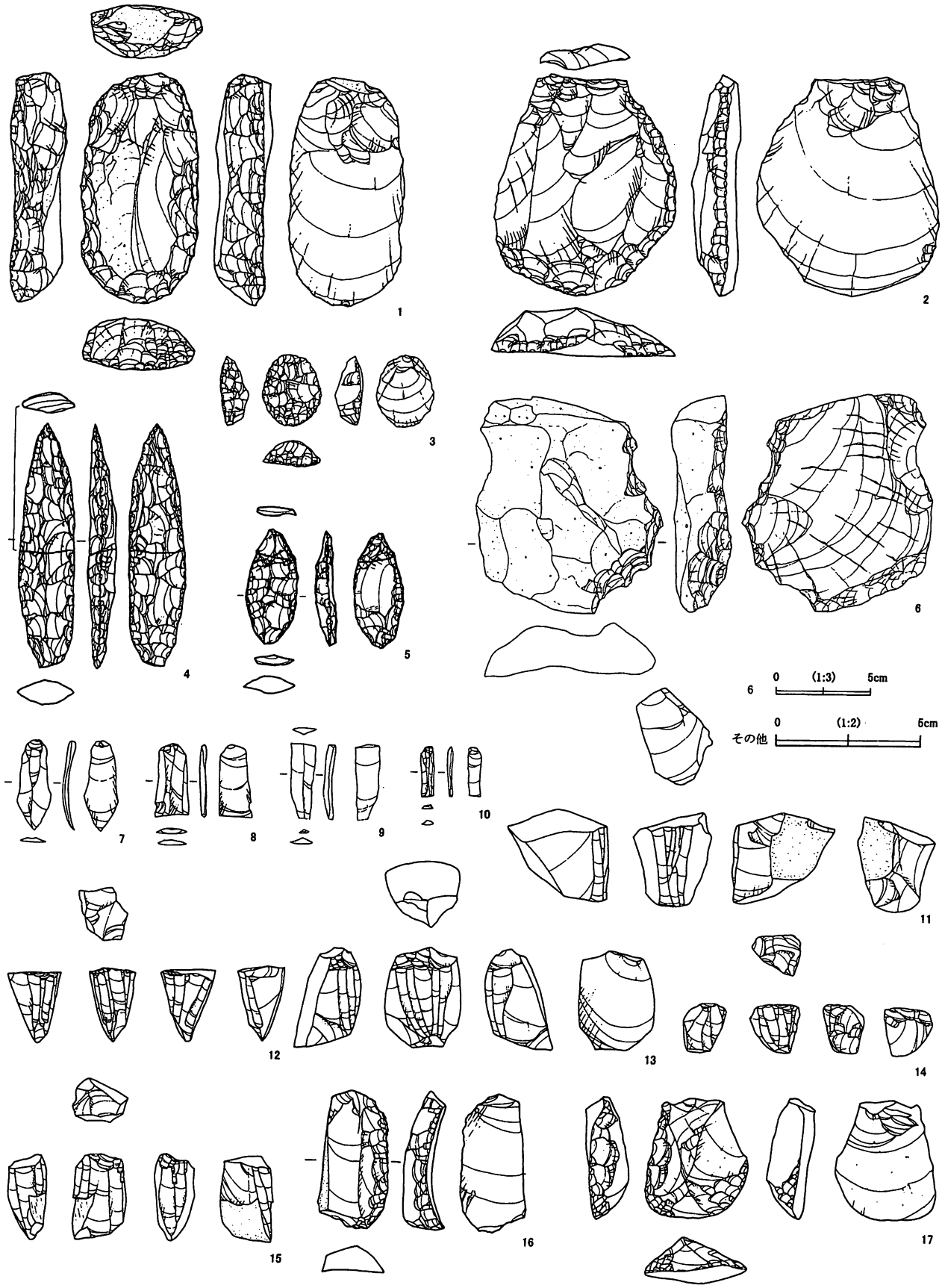


第16図　開田高原の石器(4)



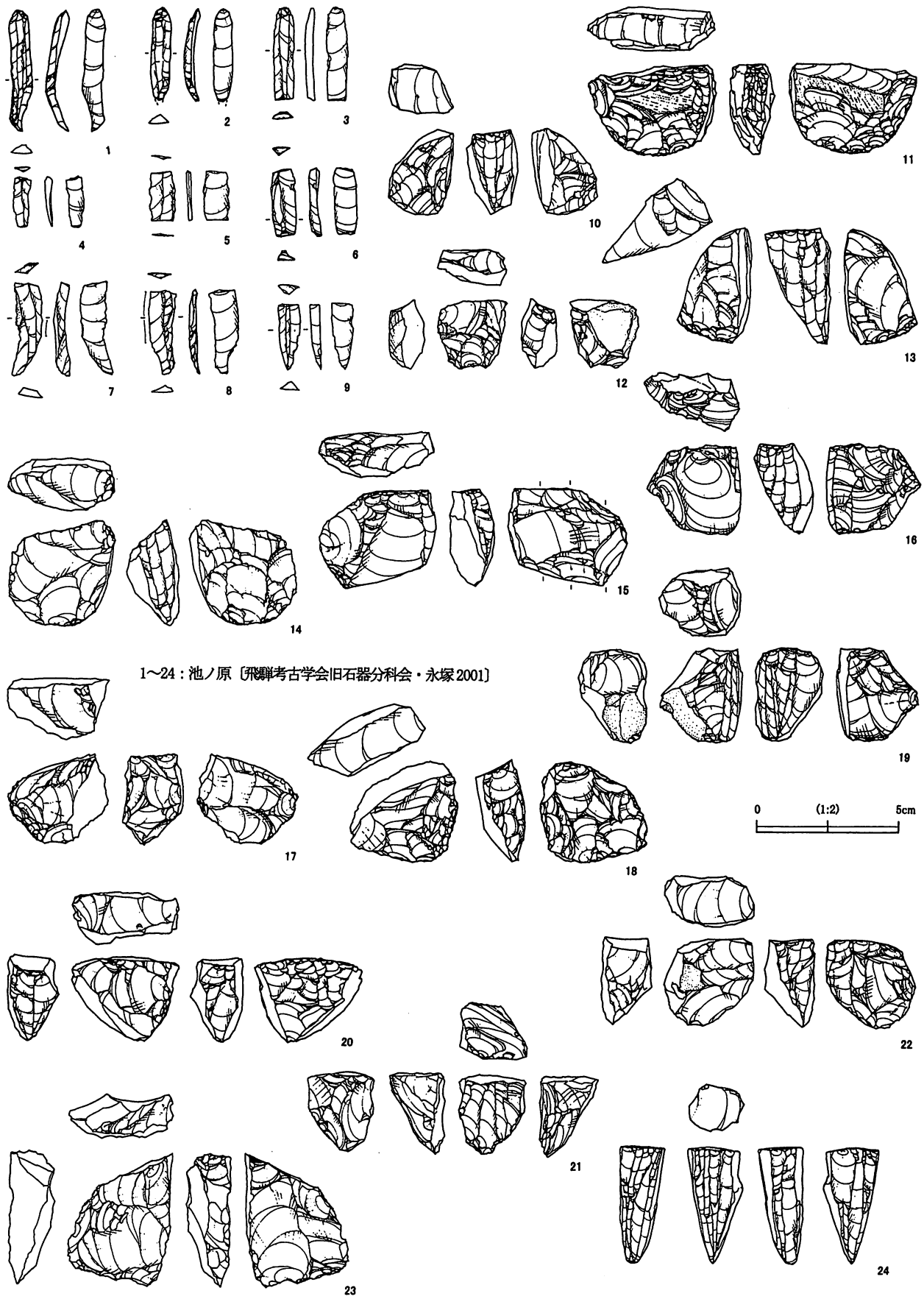
1～28：柳又C〔青木・内川・高橋1993〕

第17図　開田高原の石器(5)



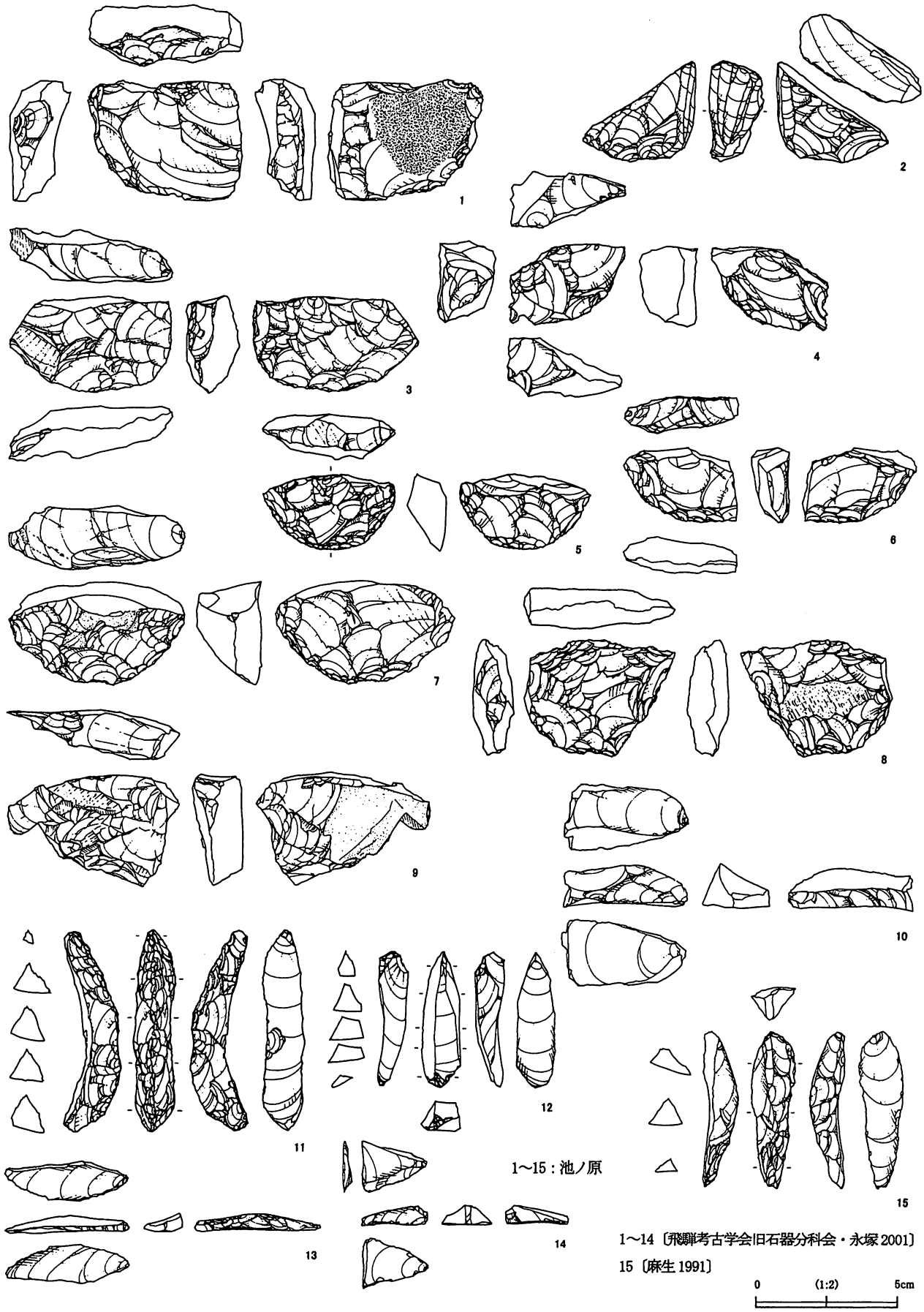
1～6：柳又C〔青木・内川・高橋1993〕、7～17：越〔松原1999〕

第18図　開田高原の石器(6)



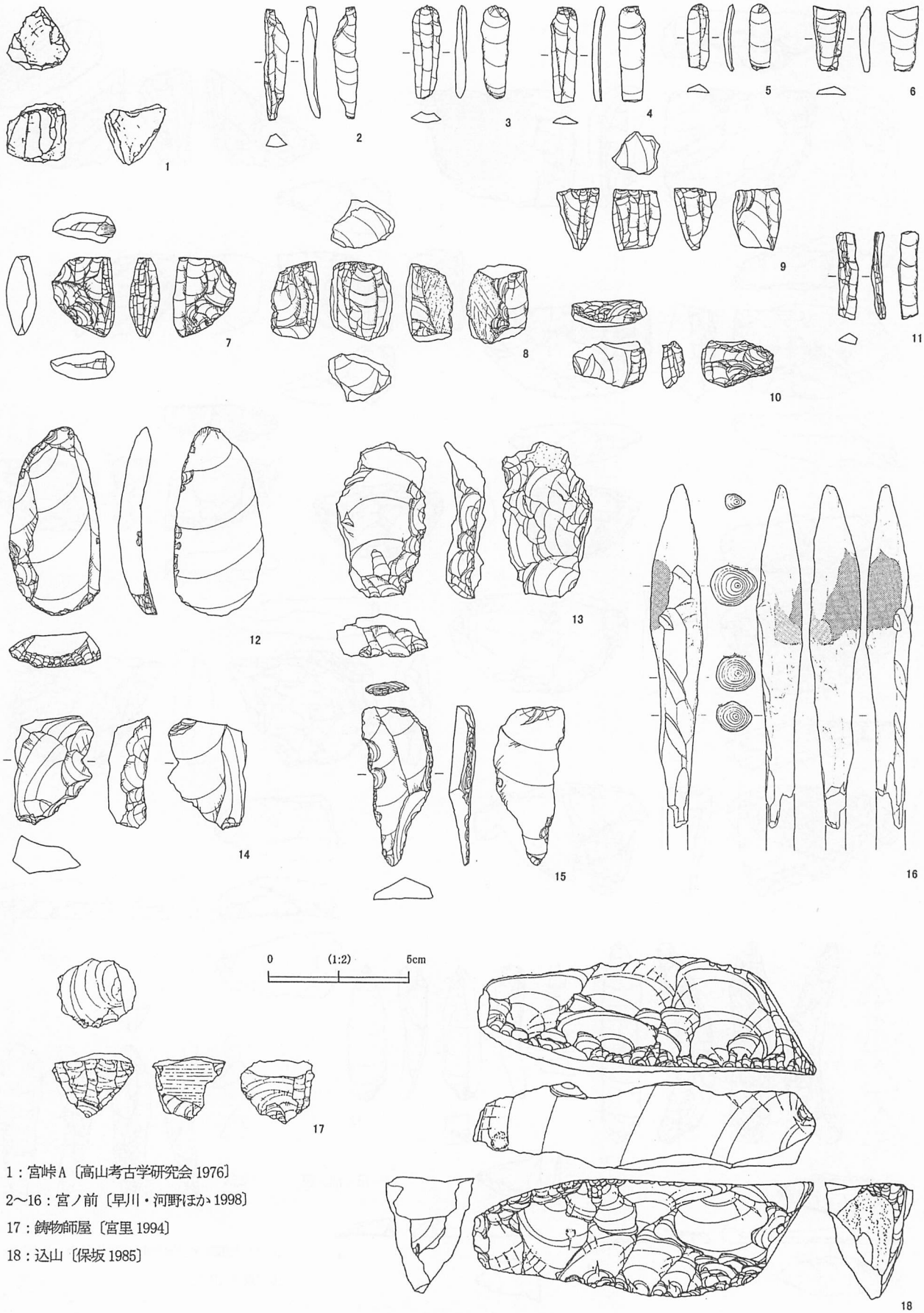
1～24：池ノ原〔飛騨考古学会旧石器分科会・永塚2001〕

第19図　日和田高原の石器(1)



1～14〔飛騨考古学会旧石器分科会・永塚2001〕
15〔麻生1991〕

第20図　日和田高原の石器(2)



1：宮峠A〔高山考古学研究会 1976〕
2〜16：宮ノ前〔早川・河野ほか 1998〕
17：鋳物師屋〔宮里 1994〕
18：込山〔保坂 1985〕

第21図　日和田高原(3)・飛騨北部・山梨県の石器

表１　中部地方南部地域の細石刃遺跡一覧表

		組成																								
NO.	遺跡名	細石刃	細石核	細石核…	削器	掻器	彫器	錐	楔形石器	打製石斧	局部磨製石斧	礫器	磨石	敲石	ナイフ形	尖頭器	剥片	総計	石器集中	遺構	発掘	標高	地域	年代	文献	備考
1	矢出川Ⅰ	250	145		17	9									4			約1240			○	1340m	野辺山原		戸沢1964	明治大
	〃	4750	499		○							○						76				〃	〃		堤1993	個人表採
2	矢出川Ⅱ	4																				1340m	〃		〃	
3	矢出川Ⅲ		1																			1340m	〃		〃	
4	矢出川Ⅳ	152	68																			1345m	〃		〃	
5	矢出川Ⅶ		1																			1350m	〃		〃	
6	矢出川Ⅷ	3	1																			1350m	〃		〃	
7	矢出川Ⅹ	68	16																			1360m	〃		〃	
8	矢出川第2地点	1																				1345m	〃		〃	
9	矢出川第19地点	21	5																			1365m	〃		〃	丸山山頂
10	矢出川第59地点	2																				1335m	〃		〃	
11	矢出川第64地点	1																				1335m	〃		〃	
12	矢出川第65地点	1																				1340m	〃		〃	
13	矢出川第67地点		1																			1350m	〃		〃	
14	矢出川第32散布地		1																			1340m	〃		〃	
15	茶セギ		1																			1285m	〃		京都女子大1980	
16	中ッ原5B地点	160	5	3	9	3	5	1				1	1				18	1235	2箇所	配石2	○	1270m	〃		八ヶ岳旧石器研1991、小口・由井2000	
17	中ッ原1G地点	177	9	8	10	2						2	1	1			22	1638	1箇所	配石2	○	1275m	〃		八ヶ岳旧石器研1995・1996、由井・島居2000	
18	よしのかしら	1																1				1270m	〃			
19	柏垂	1	3																		○	1304m	〃		芹沢・柳沢1982、川上村教委1992ほか	
20	西ノ腰A地点		1																			1270m	〃		川上村教委1992	
21	切草B地点		1																			1260m	〃		川上村教委1992	
22	よしのしり	4																				1176m	〃		川上村教委1992	
23	馬場平		2																		○	1166m	〃		芹沢・柳沢1982、川上村教委1992ほか	
24	天神小根	22	1	1	2	1												970	2箇所		○	847m	志賀川流域		須藤2001	
25	男女倉H地点	4	3																		○	1220m	和田峠周辺		森嶋1975	
26	男女倉J地点		1																		○	1205m	〃		堤1993	
27	男女倉K地点		1																		○	1240m	〃		森山1993	
28	男女倉Ⅲ地点	3	2																		○	1210m	〃		信州ローム研1972	
29	男女倉Ⅳ地点	4	4																		○	1220m	〃		信州ローム研1972	
30	和田峠頂上	2	2																		○	1545m	〃		中村1977	
31	御座岩岩陰		4																		○	1390m	〃		尖石考古館1966	
32	鷹山Ⅰ	78	9																		○	1380m	〃		尖石考古館1966	
33	鷹山Ⅳ		2																		○	1360m	〃		中村1978	
34	標木平		3																			1310m	〃		中村1978	
35	柳又A地点	287	11	10	35	23	3		1	2		5		2		15	15	3668	2箇所？	配石2、礫	○	1122m	開田高原		國學院大1990ほか	
36	柳又C地点	179	5	5	7	9						1				2	7	1299	4箇所	焼土坑2	○	1122m	〃		國學院大1993ほか	2枚の文化層
37	越	24	4	33	6	5						4		1		6		712	2箇所？	配石22、礫	○	1140m	〃		松原1999	
38	池ノ原	27>	14	13>	21>	23>		1							13>	15>	6>					1300m	日和田高原		永塚ほか2001	A～C地点表
	〃	7				1									2			56			○	〃	〃		麻生1991	B地点、千葉
39	檜柄原	1	1															1				1320m	〃		石原1984	
40	上野		1															1				940m	〃		〃	平畑遺跡
41	宮峡A		1															1				790m	飛騨川流域		高山考古学研究会1976	
42	宮ノ前	37	8	1	50	37		1	27			7	12	17	1	12	1	不明	不明		○	430m	宮川流域		早川ほか1998	発掘資料の
43	込山		1															1				950m	笛吹川高位段丘面		保坂1985	
44	鋳物師屋		1															1				285m	釜川右岸扇状地		宮里1994	

北関東の細石刃文化

萩谷　千明

1．研究の推移

主要な調査に関すること

1946 49年　群馬県岩宿遺跡でローム層中に露出した細石刃様の剥片が相澤忠洋氏により注意される。

1951年　群馬県宮城村桝形遺跡の第1次調査。船底形細石核の出土が報告される。

1963年　栃木県那須町逆室遺跡の調査。

1973年　桝形遺跡の第2次調査。

1975年　茨城県ひたちなか市後野遺跡の調査。荒屋型彫器をもつ削片系細石核をもつ細石刃石器群と神子柴文化の石器群が層位的な上下関係をもって出土。

1977年　茨城県那珂町額田大宮遺跡の発掘調査。船底形細石核をもつ細石刃石器群に石斧が伴うとされた。

1978年　茨城県竜ヶ崎市沖餅遺跡の発掘調査。船底形細石核をもつ細石刃石器群を検出。

1982年　茨城県日立市宮脇遺跡の発掘調査。船底形細石核をもつ細石刃石器群が検出される。

1987年　群馬県前橋市頭無遺跡の発掘調査。浅間板鼻黄色軽石群直下の層位から荒屋型彫器を組成する削片系細石核をもつ細石刃石器群が検出。

1989 年　群馬県宮城村市之関前田遺跡の発掘調査。野岳休場系細石核を持つ石器群が浅間-白糸軽石混じり層から検出される。

1991年　群馬県宮城村柏倉芳見沢遺跡の発掘調査。浅間板鼻黄色軽石層直下から船底型細石核をもつ細石刃石器群が検出される。

1996年　茨城県取手市柏原遺跡の発掘調査。

1999年　岩宿II石器文化の再検討により，細石刃が数点含まれる可能性があると報告される（島田1999年）。

主要な遺跡の発掘調査等は概略上記の通りである。岩宿遺跡の発掘調査のきっかけとなったのは，細石刃様の剥片であったことが発見者である相澤忠洋氏や発掘調査の報告者となった杉原荘介氏によって異口同音のように語られている。戦前以来提起された縄文時代の初頭の石器群への関心がもたれた頃より「細石刃文化」は注意されていた。細石刃文化の進展を考えるうえで本地域が果たした学史的な役割は重要であるが，上記の遺跡のほかは資料数・石器組成のまとまりをもつ遺跡がほとんどないのがこの地域の特徴でもある。

最近は，既存の資料の再評価・再実測が行われており，今後の研究の深化が期待される。

資料の集成，編年研究に関すること

1978年　小田静夫「関東地方の細石器文化」。

1991年　麻生敏隆「群馬県における細石器文化の様相」。

1993年　岡本東三「縄紋文化移行期石器群の諸問題」

1993年　桜井美枝「北関東の細石刃文化」

1994年　萩谷千明「IV期　細石器文化　」

1995年　橋本勝雄「茨城の旧石器時代」

2000年　西井幸雄・川口武彦・芹沢清八・萩谷千明「北関東」

2002年　永塚俊司「石器群の様相　細石器　」

北関東における細石刃文化に属すると考えられる遺跡は，1993年シンポジウムにおける桜井美枝氏による集成

（28か所）以降，何回かにわたる資料集成が行われ，この10年間に2倍強の遺跡数の増加となった。それらの多数は茨城県南部での事例である。石器群の編年研究は，群馬県における火山灰層序を基本とした所見をベースに，石材構成の変化，石器群の構成を軸としていくつかの編年案が示されている。

2．遺跡の分布や遺跡群の分布傾向について

A．茨城

遺跡の分布は標高20　30mの台地や丘陵状に立地する。1993年では空白が大きかった県南部での遺跡の増加が著しい。

B．栃木

10遺跡前後と，遺跡数がそれほど増えていない。平野部の舌状台地や丘陵上に遺跡が立地することが指摘されている。

C．群馬

赤城山南麓の扇状地上に遺跡が多いように見受けられる。南部の平野部でも数遺跡が増加した。

以上のように，遺跡数は増加したものの，全体としての傾向については，1993年の桜井氏による所見と大きな変化はない。集成された3分の2は程度の遺跡では細石核の単独出土や採集品であり，遺跡群を構成していたかどうか議論を進めるには論拠に乏しいのが現状といえよう。

ところで，北関東の地形を大まかに見ると茨城・栃木・群馬の3県ともに北部の山地と南部の平野部とに区分できることが理解されよう。南部の平野部には利根川・渡良瀬川・鬼怒川・那珂川・久慈川といった関東地方を代表する河川とその支流が網の目のように流れ，後期更新世を通じて様々な地形面を形成したり，河川の流路を変えた。このような平野部の様相が，第Ⅰ群のまとまった資料に乏しく，第Ⅲ群が広範囲に認められるという，遺跡の分布に影響を与えていた可能性がある。

また，茨城県における細石刃石器群の遺跡数は増え，県内平野部のほぼ全域に遺跡が広がったように見えるが，北浦東岸の鹿島台地，北浦・霞ヶ浦に挟まれた行方台地においては遺跡が空白である。この2つの台地は，利根川を挟んで南岸に位置する下総台地同様，樹枝状に開析され複雑な舌状台地を形成している。今後の資料集成や発掘調査例の増加によってかなり多数の遺跡が増加することが予想される。

3．細石刃技法と石材

（1）稜柱形細石核（1）　細石刃の剥離までの過程は矢出川技法（安蒜1979）として説明されている。石核再生には作業面に直交させる打撃により打面再生剥片を剥離する方法と，細石刃剥離のための打面から作業面更新する剥片を剥離する方法とがある。多くの場合，黒曜石を石材として利用しているが一部チャートを石材としているものがある。南関東での事例ではより古い段階の細石刃文化の細石核石材として用いられており，北関東においても市之関前田遺跡の火山灰層序からより古相の段階で用いられる石材とされる。

（1-2）稜柱形細石核（2）　原石から応分に打ち割られた素材に細石刃剥離のための打面を設定し，打面から打ち下ろしを行い亜船底状の細石核原形を準備する。石核の再生には打面再生は行われず，もっぱら作業面の更新が行われるものと予想されるが，作業面再生剥片はほとんど報告されていない。

石材は群馬県での事例では赤谷層産出の黒色頁岩やチャートを用いたものが知られる。これらの細石核を船底形として南関東でいう「船野型細石核」の仲間として考える研究者もいるが，筆者は細石刃用石材の在地化に伴う石核整形の制約によるものと考えており，「稜柱形細石核（1）」の変容と見ている。

（2）船底形細石核　幌加型細石核の整形技法（鶴丸1979）に説明されるが，石核を船形と見立てときの下縁部の調整が行われているものとそうでないものが存在する。甲板面に見立てた打面からの側縁加工により整形されるが，精緻に作られたものと粗雑に作られたものが存在する。

石材はいわゆる在地素材を用いる場合が多く，群馬県では黒色頁岩を石材としたものが多く，少数のチャート

を石材とするものがある。茨城県では硬質頁岩，頁岩，チャート，ガラス質安山岩が石材として用いられている。

（3）削片系細石核　湧別技法により細石核が準備されるが，札滑型（鶴丸 1979）で説明される細石核原形とするものと，細石核原形の準備過程で剥離された稜付き削片・スキー状削片を細石核原形に転用するものとがある。打面は削片の剥離でできた平坦面を用いるが，削片剥離により石核原形がねじれ，打面からの側面調整により形状の修正を行うものが多い。側面調整が卓越する場合，前述の船底形細石核との識別が困難なことがある。石核の再生は，スキー状削片を打面再生剥片として剥ぎ取る場合と，作業面再生剥片を剥ぎ取る場合とがある。

石材はほぼ硬質頁岩に集約されるが，茨城県宮脇遺跡（1）や栃木県赤羽根（43）例のようにやや緻密でない珪質頁岩が用いられることがありこの石材の仲間が何に分類されるか興味深い。また，群馬県稲荷山Ⅴ遺跡（51）では黒曜石製の細石核が削片形細石核の可能性がある（小菅 1994）と紹介されているが，現時点では当該地域にほかに類例がないため今後の類例の増加を待つこととしたい。

4．石器組成の特徴と石器群の様相

石器組成の特徴は，細石刃剥離技術と他の剥片石器類の製作技術と併せて大きくⅠ　ⅢⅠの3群分類されるが，Ⅱ群とした石器群には後述するように削片系細石核による細石刃技法を併せもつ可能性があるものが存在し，これを仮にⅡb群と呼称することにする。

Ⅰ群の石器群

稜柱形細石核をもつ。群馬県市之関前田遺跡(55)の石器群を例にとって見ておく。石器群は細石刃，大小のスクレイパー類，礫器・敲石の石核石器が認められる。細石刃の製作は黒曜石にほぼ限られ（稀少石材として硬質頁岩が存在した），小形スクレイパーは細石核の調整剥片を素材とする。大型のスクレイパー類は黒色安山岩・黒色頁岩などいわゆる在地系の緻密な石材を利用し，素材となる剥片は90度方向の打面転移を繰り返すことにより得られるもので，不定形であり，石材の面からも，素材の獲得の面からも，さらには石器としての大きさや重量からも小形スクレイパーとは容易に峻別ができる。礫器・敲石などの石核石器は遺跡近辺の河床や傾斜地から容易に採集される粗粒の輝石安山岩等が石材として選ばれている。

このように，稜柱珪細石核をもつ石器群は，石器の製作目的によって石材を選択する傾向にあり，細石刃の剥離，剥片石器の製作，石核石器としての加工と利用という3つの石器製作技術が共存している。このようなⅠ群の石器群のあり方をかつて「構造Ⅰ」として理解したことがあった。この石器群は栃木県坂田北(39)遺跡のほか，他期の石器群の混在があったり，採集資料だったりと制約があるが，茨城県行屋西遺跡A地点・B地点(32，33)，栃木県寺野東遺跡(41)，群馬県武井遺跡峯岸地区(52)の石器群などがⅠ群の石器群と見なしてよいだろう。

Ⅱ群の石器群

船底形細石核をもつ。細石刃に伴う石器として，大形の石刃状の縦長剥片とそれらを素材とした掻器・削器がある点において各石器群とも共通している。明確な彫器は今のところない（報告書中には彫器を伴うという記述がなされているものがあるが，素材となる剥片に対する「彫刀面」の作出が規則的でなく，剥片の端部がはじけたものとして理解した方が妥当であろう）。石斧（額田大宮遺跡(3)），尖頭器（沖餅遺跡？(23)，柏倉芳見沢遺跡(57)）を伴う可能性が指摘されているものがある。

硬質頁岩を石材とする額田大宮遺跡(3)例をのぞき，細石刃・細石核用の石材と剥片石器用の石材とは，黒色頁岩・黒色安山岩・チャートと共通した石材が用いられている。また，剥片石器の素材として石刃状の縦長剥片が用いられているが，これらの石刃状剥片の石核は知られていない。柏倉芳見沢遺跡(57)の略報では縦長剥片を素材とした2点の船底形細石核の接合例が紹介されており（細野 1991），細石刃の剥離も一連の石器製作工程の中に組み込まれる可能性をもっている。これら船底形細石核と大形石刃状剥片の剥離技術をもつ石器群を「構造Ⅱ」として理解した。

これらの石器群は上記の石器群のほか，群馬県桝形遺跡(55)が代表的である。また，石器群から細石刃・船底形細石核を欠くが群馬県北山遺跡例(48)もこれらの石器群の範疇として群馬県内の複数の研究者から指摘されて

おり，北関東の細石刃文化をもっとも特徴づける石器群といえよう。

IIb群の石器群

茨城県額田大宮遺跡(3)では，硬質頁岩を素材とする稜付き削片が出土しており，また，茨城県宮脇遺跡(1)例では報告中に記載のなかった資料中に，ねじれた稜付き削片や打面再生剥片（スキー状削片のはじけたものか？）が存在していた。これらは硬質（珪質？）頁岩を石材としていた。これらは全体としてはII群の石器群および石器製作構造を基本とするが，削片系細石核による細石刃技法を併せもっている可能性が高く，茨城県北部における地域色の強い細石刃文化のあり方を示すかもしれない。

III群の石器群

削片形細石核をもつ。剥片石器の石材は硬質頁岩に集約され，石器の製作技術は荒屋技法（大塚1968）で示されたように，１つ個体から剥片を剥ぎ取りながら彫器・掻器・削器などの素材を準備し，その後両面調整石器様に整形された残核から稜付き削片やスキー状削片を取り細石核原形を準備するという，すべての剥片石器製作工程が一体化した石器の製作構造をもっており，これを「構造III」と呼んだ。

この「構造III」と呼んだ石器群には，茨城県後野遺跡B地点(6)，中原遺跡(21)，柏原遺跡(26)，上原遺跡(61)，群馬県頭無遺跡(64)，採集資料ながらまとまったものとして大雄院前遺跡(47)などがあり，荒屋型彫器・角二山型掻器・携帯用の靴ベラ状の両側縁に刃部をもつ削器など石器群を構成する器種は各遺跡群を越えて斉一性をもっている。これらの石器群は最近まとまった例としての報告が多く，北関東ではもはや一般的にみられる石器群であるといっても良いだろう。

5．編年

当該地域の細石刃文化の編年は，群馬県内での細石刃石器群の出土層位を参考にいくつかの編年案が示されたのは前述の通りである。

群馬県における細石刃石器群は浅間-白糸軽石（As-SP：約17,500年前に噴出*）混じり層から出土している。第I群の石器群では市之関前田遺跡(55)において浅間-板鼻褐色軽石層（As-BP Group：約20,000-18,000年前に噴出*）の直上まで出土していることを根拠に，当該区域での細石刃石器群の最古の段階とし，武井遺跡峯岸地区が後続する点，浅間-板鼻黄色軽石（As-YP：約13,500年前に噴出*）直下から出土した第II群の桝形遺跡(56)，柏倉芳見沢(57)，第III群の頭無遺跡(64)例を新しい段階とする点では，研究者間の意見の一致をみている。

麻生氏は，(1)《遠隔地石材→在地系石材》という石材利用の観点から，《市之関前田（I群）→頭無（III群）→桝形（II群)》という変遷と，(2)細石核の形態変化から《I群→II群→III群》，(3)II群・III群とが層位的に分離できないことから《I群→II群・III群（併存)》という３通りの変遷案を示している（麻生1991）。

桜井氏は，細石刃技法に注目し，I群を〈黒曜石の調整打面の細石核→在地系石材の平坦打面の細石核〉，II群を〈下縁調整をもつ船底形細石核→下縁調整をもたない細石核（細石刃技法の在地化)〉，III群を東北地方との結びつきが強いと捉えた。II群とIII群との関係については，(i) 南関東では削片系細石核が第III群よりも後続すると考えられること，(ii)本州東北部での細石核の組み合わせの変遷観〈削片系細石核→削片系細石核＋船底形細石核〉をひいて，《I群→III群→I群》の変遷案を示した。ここにおいても第II群と第III群とは併存していた可能性があることが示されている（桜井1993）。

萩谷は，南関東での層位的事例による細石刃石器群に着目し，細石刃用の石材が〈黒曜石主体→黒曜石・在地系石材併用→在地系石材主体〉に変化すること，I群に分類される石器群がL1H層からL1S層まで継続し，削片系細石核＋石槍とも時間的に併行する可能性があること。また，各群に分類された石器群の石器製作と石器組成のちがい（石器群の構造の差異），各石器群自体が排他的な構造をもつことから，《I群（古い様相）→I群（新しい様相）→I群（新しい様相）・II群・III群（併存)》という変遷案を示した。なお，II群の石器群については長期間継続した可能性があると含みをもたせた（萩谷1994）。

最近報告された群馬県上原遺跡ではAs-SP混じり層の上位から出土することが報告されたものの，As-YPは検

出されなかったとのことであり，各石器群を層位的に分離することにはまだ成功していないのが現状であろう。

栃木県においては，細石刃石器群を出土した遺跡が，茨城・群馬に比べきわめて少ない。I 群の石器群が数か所でまとまって検出されているが，II 群・III 群の石器群がまとまって出土した事例がほとんど知られていない（逆室の石器群は II 群の範疇に入る可能性がある）。県南部と中央部では火山灰の給源が異なっているが，I 群の石器群が出土した寺野東では As-YP 付近，坂田北では男体-今市軽石付近（Nt-I：約 12,000-13,000 年前*）付近からそれぞれ出土しているといい（森嶋 2002），今後の資料の増加により編年案の提示が期待される。

茨城県においては岩宿時代の編年案が橋本勝雄氏により提示されている（橋本 1995）。その編年表によれば《I 群→III 群→II 群》との変遷が示されている。編年の根拠は詳しく示されてはいないが，周辺地域での編年案や，石器組成などを参考にしたものと思われる。浅間山・榛名山・赤城山・男体山といった火山灰の給源から茨城県は遠いため，ローム層の堆積も薄く，層位的に異なる細石刃石器群が検出される期待がもっとも薄い地域である。

以上のようにこの地域における細石刃石器群の編年案には，火山灰層を鍵層として石器群の大まかな編年案が示されたが，遺跡が多く見つかっている平野部・丘陵・山麓扇状地ともに火山灰の堆積状況はそれぞれ一様でなく，火山灰編年による石器群編年の細分は困難を伴うことが予想される。

6．課題

それぞれの項目の末尾に，課題点や展望を示したため重複を避けられないが，(1) III 群の分布と生業の問題，(2) 細石刃石器群の編年をめぐる問題との 2 点について述べたいと思う。

(1) 分布と生業

北関東においては先述したように南部の平野部には利根川・渡良瀬川・鬼怒川・那珂川・久慈川といった関東地方を代表する河川とその支流が網の目のように流れ，後期更新世を通じて様々な地形面を形成したり，河川の流路を変えたためか，南関東の下総・武蔵野・相模野の各台地ほど中小の河川による台地の樹枝状の開析がそれほど進んでいないように見え，南関東とは対照的な地形を呈しているように思われる。こうした地形の様相の差異が，細石刃石器群をもつ遺跡の分布にも大きな影響を与えた可能性があると考えている。

最近報告された中原遺跡・柏原遺跡・上原遺跡は III 群の石器群であり，もはや北関東において III 群の石器群が発見されることはそれほど珍しいことではなくなってきている。これらの石器群は硬質頁岩を石材として，在地系の石材はあまり使用していないことから，本州東北部に拠点をもつ集団が季節的に長駆移動し，また拠点となる地域に回帰というする生活形態をもっていたであろうことが複数の研究者から指摘されているが，大河川とその大きな支流の流域にこれらの遺跡の多くが知られていることは，その反映と思われる。

この石器群から想定される生業については大きく 2 つの考え方がある。

その一つとして当該の石器群をもつ集団とサケ・マス類の内水面漁労との関連を示唆する意見がある。これは第 III 群の遺跡が大きな河川流域に分布し，こうした河川がサケ・マス類が遡上する場という考え方に基づくものと考えられ，新潟県荒屋遺跡におけるサケ類の脂肪酸の検出といった事例から強化されつつあったが，2000 年に発覚した「前期旧石器遺跡」捏造事件から派生した，脂肪酸分析のデータの信頼性にかかる疑義から振り出しに戻された観がある。

ほかの考えは，III 群に類似した組成をもつ道東の石器群は草原的な景観に多数立地すること（鈴木 1993・1996），同様の石器群をもつシベリア・極東地域での動物遺体からは内水面漁労が積極的に行われたか疑問視する意見（加藤 1996a, b）にみられるように，シカなどの狩猟集団が遺跡を残したとみる考え方である。

このように細石刃文化，特に「北方系」とされる石器群をもつ集団の生業に関わる問題は意見の一致をみておらず，生業をめぐる問題は岩宿時代全般に共通する資料の制約から仮説の域を越えるものではない。なお筆者は，北関東を中心とした地域（この場合，埼玉・千葉県も含む）が日本最大の平野部が広がる地帯であったことを考慮し，後者を支持している。

いずれの立場を取る場合においても，この地域における自然科学的な分野での研究は，現時点においてはテフ

ラの同定が中心で，当時の植生や景観の復原を目指したものに乏しい。こうした点を克服することが生業にかかる問題の解決の第一歩となると考える。

（2）編年の問題

編年については，現時点においては石器群の出土層位と火山灰との関係から複数の編年案が示されているが，10年前と状況は大きく変化していない。異なった構造をもつ細石刃石器群どうしが同一の堆積状況をもった地域で層位的に出土している事例がないこと，そして，各石器群の構造が排他的で，各石器群ともモザイク状に当該地に併存していた可能性すらあることも一因となっている。

なお，石刃状の剥片やそれを素材とする石器群および石斧や尖頭器との伴出から，後出する神子柴文化との関連をひいて，第II群の石器群を新しい段階とする説もあり，今後編年案はそうした方向に集約されるのかもしれない。しかしながら，現時点では各研究者がそれぞれ示したように併存の可能性があるとした方が，今後発見の資料や既存の資料の再検討にあたる際，より慎重な分析が行われるものと考える。そこで，ここでIIb群と呼んだ石器群に注目しておきたい。この石器群は，石刃状の剥片とそれを素材とした掻器・削器に，船底形細石核をもつ構造IIの石器群に削片系細石核をもつ可能性がある。こうした石器群の詳細な分析により，変遷の細分が可能になる期待がもたれる（茨城県北部にモザイク状に分布する地域相として落ち着くかもしれないが）。

火山灰編年により，細石刃文化の各石器群の変遷の大まかな枠組みは示されているが，これまで群馬県内で知られたまとまった数量の細石刃石器群は，先行するとされる槍先形尖頭器をもつ石器群とは火山灰編年では層位的な前後関係が区分できないという弱点もある（軽部・中島 1994）。樋状剥離を有する尖頭器をもつ石器群のように，槍先形尖頭器をもつ石器群の前半段階を細石刃文化に併行すると考える研究者はいないと思うが，後半段階の石器群については南関東での問題と同様，一部併存する可能性がある。この問題については槍先形尖頭器をもつ石器群のより詳細な分析と，より良好な火山灰の堆積状況を示す遺跡の検出を待たなければならない。

後続の文化についても一言二言述べておく。後野遺跡における層位的な出土事例から，また群馬県におけるAs-YPを鍵層にした比較検討により，細石刃文化と神子柴文化とは層位的な上下関係が見出されている。一部の研究者からは第III群の細石刃文化と神子柴文化が併存したという意見があるが，これには首肯できない。

また，ある研究者は柏倉芳見沢遺跡から土器が出土していると一般書店でも入手可能な考古学専門誌に載せている。単純な遺跡名の取り違えと思うが，柏倉芳見沢遺跡ではブロック外から「尖頭器」に分類される石器は出土しているが，共伴については保留とされている。また，As-YP下層からの土器片の出土の事実はないということを発掘調査の参加者として明記しておく。

細石刃石器群の研究の現役を離れて10年以上がたつ筆者に，今回与えられた課題はなかなか気の重いものであった。各県の出土地や石器群の集成は，ここ数年の間に文中に示した各氏によりまとめられたものを利用させていただいたが，他人の褌で相撲を取ったものであり何とも気分がしっくり来ない。また，当該する石器群の研究課題にしても，シンポジウムの主催者が期待したようなものとしてまとめられたかどうか不安はつきない。関係各位のご寛恕をいただければ幸いに存じる。

今回の資料集成および資料の調査にあたり，宮脇遺跡の資料の見学に際して日立市郷土博物館，生田目和利氏のお世話になった。生田目氏には報告書で記載されていない資料について貴重なご意見を戴いた。茨城県内の情報について鴨志田篤二氏，斉藤弘道氏，諸星良一氏にお世話になった。諸星氏には，文献の提供と貴重なご意見を戴いた。栃木県の情報に際しては芹沢清八氏から文献の提供と貴重なご意見を多数賜った。群馬県については麻生敏隆氏，小菅将夫氏からご意見・アドバイスをうかがった。大雄院前遺跡の荒屋型彫器は新井進氏の採集資料である。今回のシンポジウムに際して未発表の資料の実測図の公開についてご快諾いただいた。これらの皆様に記して感謝申し上げたいと存じる。

(*) 炭素14法による年代測定による。ここでは較正年代は用いられていない。

引用参考文献

(個々の遺跡に関する文献以外)

麻生敏隆 1991「群馬県における細石器文化の様相」(『中ッ原第5遺跡B地点の研究』八ヶ岳旧石器研究グループ)

安蒜政雄 1979「日本の細石核」(『駿台史学』47)

稲田孝司 2001『遊動する旧石器人』(岩波書店)

岡本東三 1994「縄紋文化移行期石器群の諸問題」(『環日本海地域の土器出現期の様相』, 雄山閣)

岡本東三 2003「多岐亡羊の縄紋文化起源論」(『季刊考古学』83, 雄山閣)

小田静夫 1979「関東地方の細石器文化」(『駿台史学』47)

加藤博文 1996a,b「細石刃石器群における生業活動の検討 − シベリアからの視点 −」(「古代文化」48−3, 4)

軽部達也・中島誠 1994「III期 − 槍先形尖頭器文化 −」(第2回岩宿フォーラム『群馬の岩宿時代の変遷と特色』予稿集)

桜井美枝 1993「北関東の細石刃文化」(『細石刃文化研究の新たなる展開』I・佐久考古学会・八ヶ岳旧石器研究グループ)

佐藤宏之 1992『日本旧石器時代の構造と進化』(柏書房)

島田和高 2000「岩宿発掘1949-1950:基礎整理編 明治大学考古学博物館収蔵資料(旧石器時代)の再検討・再評価」(『明治大学博物館研究報告』5)

杉原荘介 1956『群馬県岩宿発見の石器文化』(明治大学文学部研究報告)

鈴木忠司 1993「細石刃文化と生業」『細石刃文化研究の新たなる展開』II, 佐久考古学会・八ヶ岳旧石器研究グループ)

鈴木忠司 1996「採集経済と自然資源」(『考古学による日本歴史』16, 雄山閣)

鶴丸俊明 1979「北海道地方の細石刃文化」(『駿台史学』47)

戸沢充則 1975「岩宿へのながい道」(『どるめん』15, JICC出版局)

戸沢充則 1979「日本における細石器の研究」(『駿台史学』47)

2002年 永塚俊司「石器群の様相 − 細石器 −」(『茨城県における旧石器時代研究の到達点』ひたちなか市教育委員会・茨城県考古学会)

西井幸雄・川口武彦・芹沢清八・萩谷千明「北関東」(『旧石器から縄文へ − 遺構と空間利用 −』日本考古学協会2000年度鹿児島大会資料集第2集)

萩谷千明 1994「IV期 − 細石器文化 −」(第2回岩宿フォーラム『群馬の岩宿時代の変遷と特色』予稿集)

橋本勝雄 1989「東日本の細石刃文化 − 東北・北陸・中部高地・東海地方の研究動向 −」(『考古学ジャーナル』306, ニューサイエンス社)

橋本勝雄 1995「茨城の旧石器」(『茨城県考古学協会誌』7)

森嶋秀一 2002「周辺地域の様相 − 栃木県 −」『茨城県における旧石器時代研究の到達点』ひたちなか市教育委員会・茨城県考古学会)

(各遺跡の参考文献:番号は表と対応)

1 日立市教育委員会 1997『宮脇遺跡・宮脇A遺跡・宮脇B遺跡』

2 東海村遺跡調査会 1990『宮脇遺跡』

3 那珂町史編纂委員会 1978『額田大宮遺跡』

4 那珂町史編纂委員会 1990『那珂町の考古学』

5 那珂町史編纂委員会 1990『那珂町の考古学』

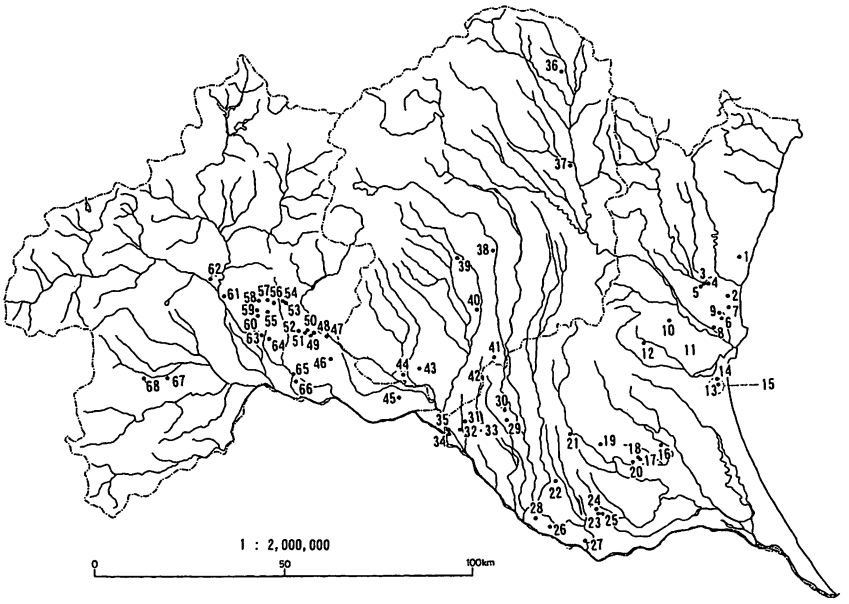
6 後野遺跡発掘調査団 1976『後野遺跡』

7 勝田市教育委員会 1981『原の寺瓦窯跡発掘調査報告書』, 川崎純徳ほか 1982『発生期土器の研究』(勝田文化研究会)

8 ひたちなか市教育委員会・ひたちなか市遺跡調査会 2000『三反田蜆塚貝塚 1999年度道路拡幅工事に伴う発掘調査概要 』

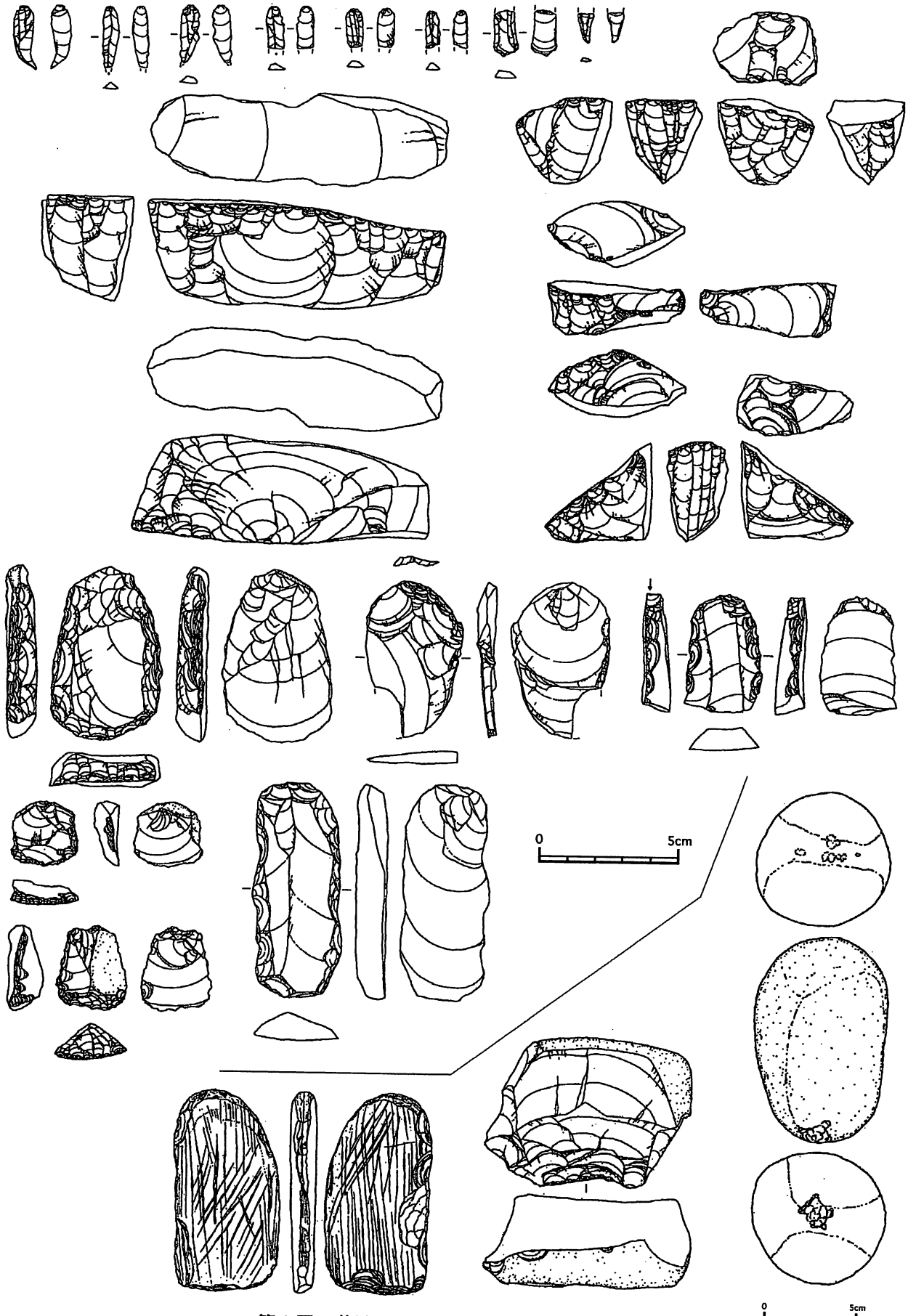
9 勝田市教育委員会 1989『昭和63年度市内遺跡発掘調査報告書』
10 国道50号線水戸バイパス埋蔵文化財発掘調査会 1987『常陸赤塚 - 国道50号線水戸バイパス道路建設に伴う発掘調査 - 』
11 黒沢浩 2001「川上博義氏寄贈の石器時代・古墳時代資料について」(『明治大学博物館研究報告』6)
12 (財)茨城県教育財団 1991『一般県道友部内原線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書』
13 鴨志田篤二・石崎勝三郎 1995「鹿島郡旭村新地遺跡の細石刃核」(『茨城県考古学協会誌』第7号)
14 鴨志田篤二・石崎勝三郎・吹野富美夫 1997「鹿島郡旭村出土の細石刃核」(『茨城県考古学協会誌』第9号)
15 永塚俊司 2002「石器群の様相 - 細石器」(『茨城県における旧石器時代研究の到達点 - その現状と課題 -』)
16 大正大学考古学研究会 1985「富士見台遺跡」(『鴨台考古』4)
17 永塚俊司 2002「石器群の様相 - 細石器」(『茨城県における旧石器時代研究の到達点 - その現状と課題 -』)
18 永塚俊司 2002「石器群の様相 - 細石器」(『茨城県における旧石器時代研究の到達点 - その現状と課題 -』)
19 (財)茨城県教育財団 1994『土浦北工業団地造成地内埋蔵文化財発掘調査報告書 II』
20 土浦市教育委員会・土浦市遺跡調査会 1997『三夜原東遺跡・新堀東遺跡・壱杯清水西遺跡』
21 (財)茨城県教育財団 2000『中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書 III』
22 (財)茨城県教育財団 1997『(仮称)萱丸地区土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書 根崎遺跡・西栗山遺跡』
23 (財)茨城県教育財団 1980『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書 3』
24 (財)茨城県教育財団 1981『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書 5』
25 永塚俊司 2002「石器群の様相 - 細石器」(『茨城県における旧石器時代研究の到達点 - その現状と課題 -』)
26 (財)茨城県教育財団 1999『取手都市計画事業下高井特定区画整理事業地内埋蔵文化財報告書 III』
27 茨城県誌編集委員会 1979『茨城県史・考古資料編(先土器・縄文時代)』
28 郷州原遺跡発掘調査会 1981『郷州原遺跡』
29 八千代町教育委員会 1998『氏神A遺跡発掘調査報告書』
30 霞ヶ浦用水埋蔵文化財発掘調査会・千代川村教育委員会 1998『村岡遺跡群発掘調査報告書』
31 総和町史編さん委員会 2002『総和町史 資料編 原始・古代・中世』
32 総和町史編さん委員会 2002『総和町史 資料編 原始・古代・中世』
33 総和町史編さん委員会 2002『総和町史 資料編 原始・古代・中世』
34 古河市史編纂委員会 1986『古河市史資料編 原始古代編』
35 田川良・道沢明 1974「古河市周辺採集の先土器時代資料」(『史館』4)
36 那須町教育委員会 1963『栃木県那須町脇沢遺跡・逆室遺跡調査報告書』
37 栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興財団 2000『那須官衙関連遺跡発掘調査報告 II』
38 中村紀男 1976「上の原遺跡」(『栃木県史資料編 考古 1』栃木県史編纂委員会)
39 伊藤和周ほか 1981「鹿沼市坂田北遺跡発掘調査概報」(『峰考古』3,宇都宮大学考古学研究室), 岩上照朗・森嶋秀一 2001『坂田北遺跡』(『鹿沼市史 資料編 考古』)
40 栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興財団 1990『小倉水神社裏遺跡』
41 栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興財団 1998『寺野東 I』
42 栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興財団 1997『金山遺跡 VI』
43 栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興財団 1984『赤羽根』
44 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団 『エグロ遺跡』
45 館林市教育委員会 1982『大袋I遺跡発掘調査報告書』
46 中里吉伸 1996「強戸口峯山遺跡」(『太田市市通史編原始古代』)
47 笠懸野岩宿文化資料館 2000『利根川流域の縄文草創期』, 新井進 2002「大雄院前遺跡と旧石器の発見」(『桐生史苑』41), 本書
48 井上唯雄・若月省吾 1983 「北山遺跡」(『笠懸村誌』別巻(1)

49 島田和高 2000「岩宿発掘 1949-1950:基礎整理編 明治大学考古学博物館収蔵資料(旧石器時代)の再検討・再評価(2)」(『明治大学博物館研究報告』5)
50 井上唯雄・若月省吾 1983「和田遺跡」(『笠懸村誌』別巻(1)
51 笠懸村教育委員会 1979『稲荷山遺跡』, 小菅将夫 1994「群馬県内出土の細石核2例」(『群馬考古学手帳』4)
52 内田憲治・能登健・大工原豊 1988「峯岸遺跡」(『群馬県史資料編』(1))
53 粕川村教育委員会 1986『粕川村の遺跡』
54 なし, 個人の採集品。遺跡は土取りにより消滅
55 宮城村教育委員会 1991『市之関前田遺跡』
56 宮城村教育委員会 1973『桝形遺跡発掘調査報告書』
57 細野高伯 1991「柏倉芳見沢遺跡の調査」(『第4回長野県旧石器文化研究交流会』)
58 原田恒弘・中束耕志 1985『勢多郡富士見村龍ノ口遺跡試掘調査報告(I)』(『群馬県立博物館調査報告書』1)
59 大胡町教育委員会 1994『日光道東遺跡』
60 大胡町教育委員会 1997『横沢新屋敷遺跡』
61 北橘村教育委員会 2001『銭神遺跡 箱田遺跡群補遺』
62 子持村誌編纂室 1987「狩猟採集と農耕の開始 (1)旧石器時代」(『子持村誌』上巻)
63 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1998『年報』17, 出土資料の一部は笠懸野岩宿文化資料館 2000『利根川流域の縄文草創期』・2001『日本人のルーツをさぐる』に掲載
64 前原豊・関根吉晴 1988「柳久保遺跡群頭無遺跡」(『第2回東北日本旧石器文化を語る会』予稿集)
65 新倉明彦・関口美枝ほか 2000「舞台遺跡」(『年報』19, (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団)
66 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991『下淵名塚越遺跡』
67 安中市教育委員会 1990『三本木遺跡・落合遺跡』
68 日本道路公団・群馬県教育委員会・松井田町遺跡調査会 1997『八代二本杉東遺跡・行田大道北遺跡』

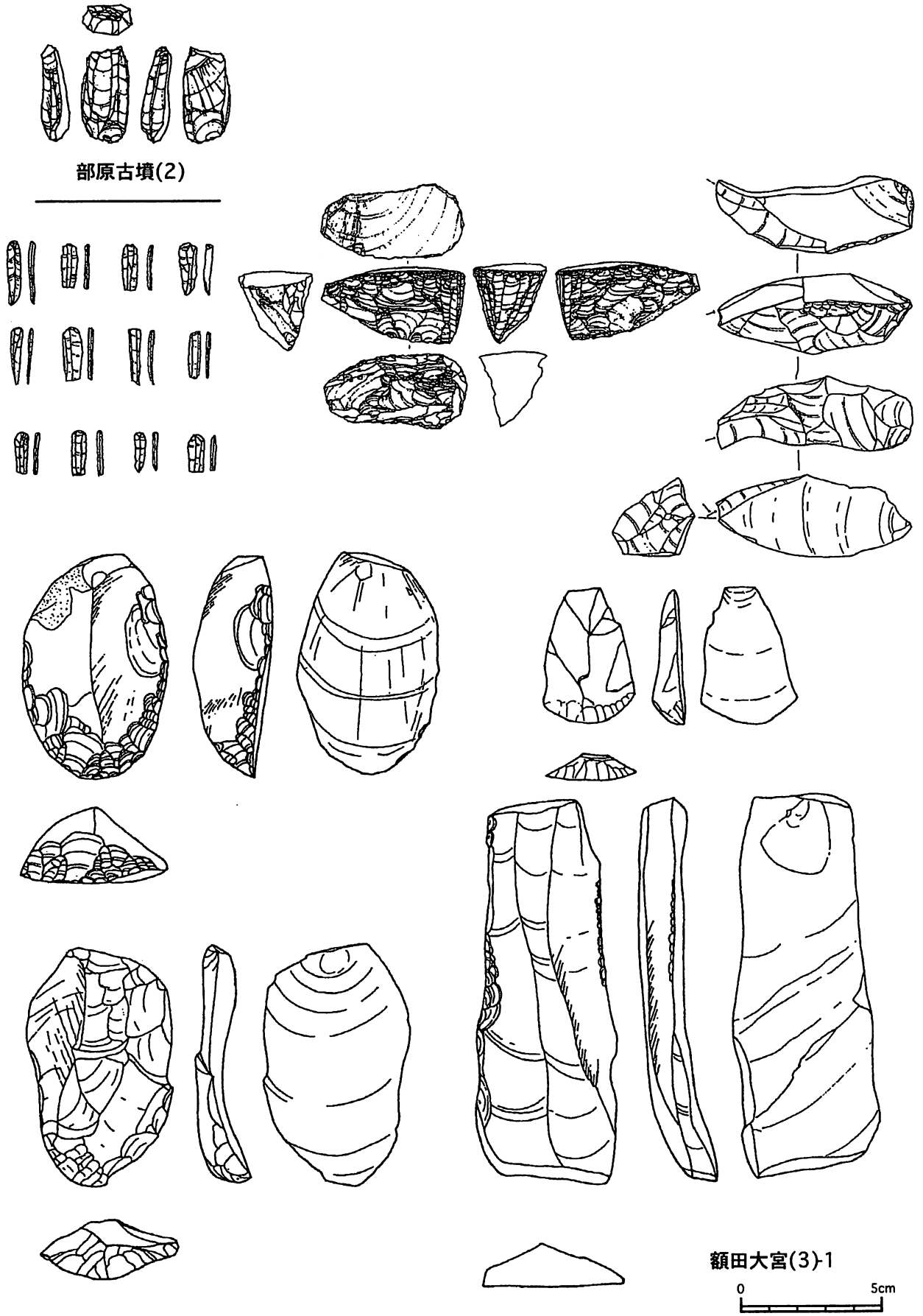


1	宮脇A	26	柏原	51	稲荷山V
2	部原古墳	27	花輪台	52	武井遺跡峯岸地区
3	額田大宮	28	郷州原	53	栗原東
4	新地	29	氏神A	54	遺跡名不詳
5	富士山	30	本田屋敷	55	市之関前田
6	後野	31	権現久保	56	桝形
7	原の寺	32	行屋西A地点	57	柏倉芳見沢
8	三反田蜆塚貝塚	33	行屋西B地点	58	龍ノ口
9	向野No.1	34	鴻巣C	59	日光道東
10	赤塚	35	風張	60	横沢新屋敷
11	田野	36	逊室	61	上原
12	五平	37	那須官衙関連	62	押出
13	荒地	38	上の原	63	鳥取福蔵寺II
14	上釜	39	坂田北	64	頭無
15	遺跡名不詳	40	小倉水神社裏	65	舞台
16	富士見台	41	寺野東	66	下淵名塚越
17	金沢	42	金山	67	落合
18	寺畑	43	赤羽根	68	行田大道北
19	原田北	44	エグロ		
20	壱杯清水西	45	大袋I		
21	中原	46	強戸口峯山		
22	西栗山	47	大雄院前		
23	沖餅	48	北山		
24	大羽谷津	49	岩宿遺跡A地点		
25	岡坪B	50	和田		

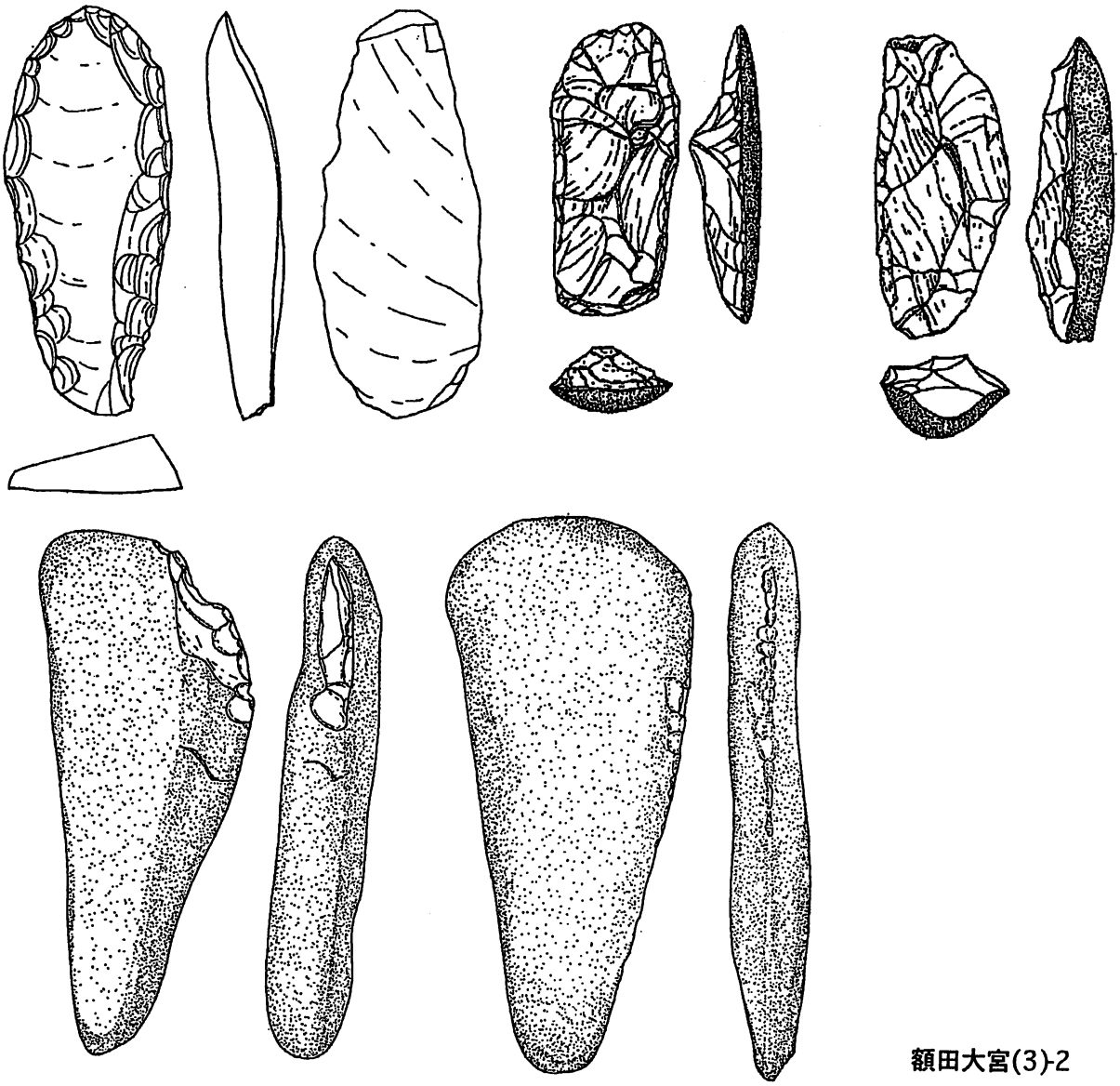
第1図　北関東の細石刃石器群出土遺跡の分布



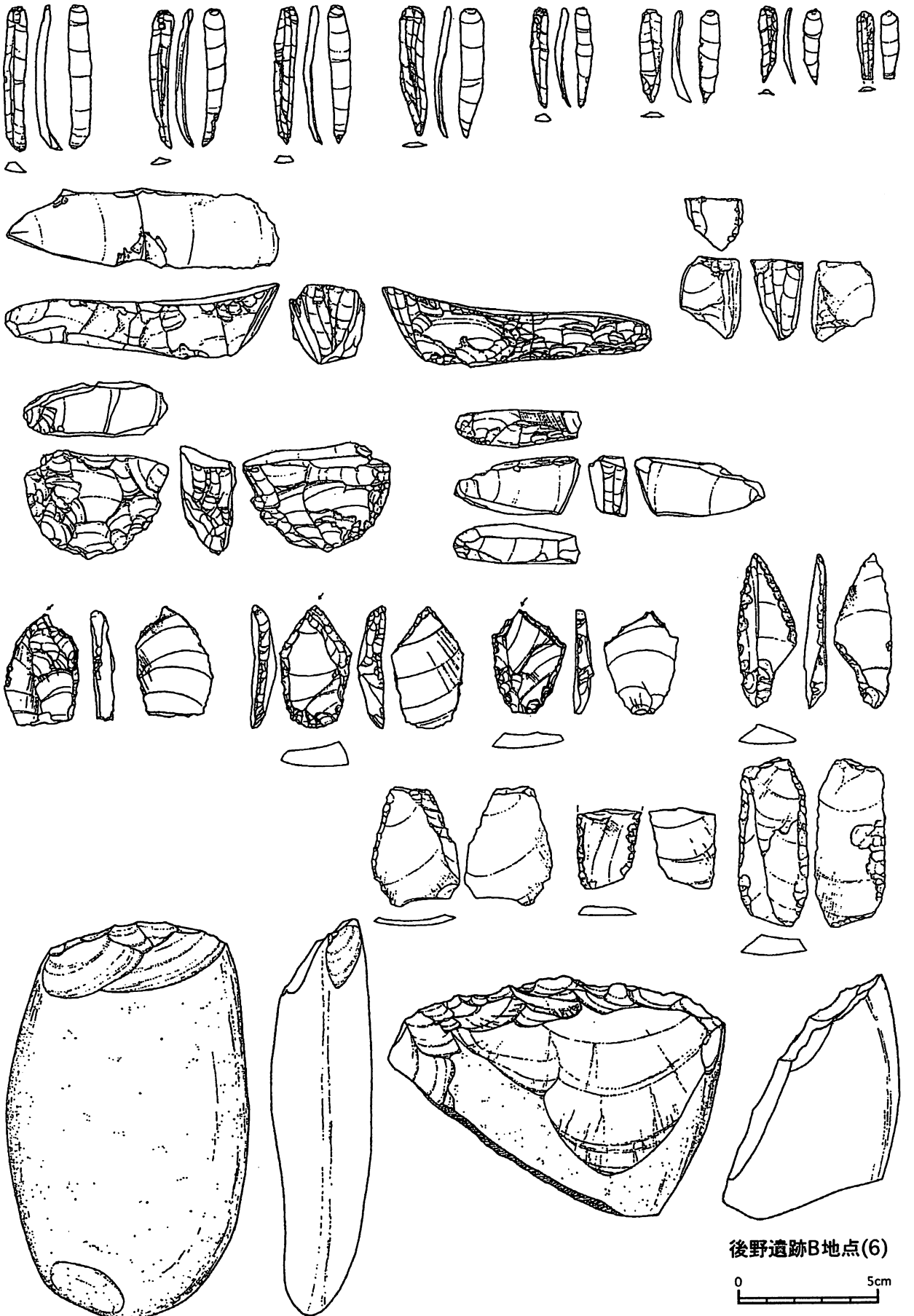
第２図　茨城県の細石刃石器群(1)　宮脇遺跡（1）



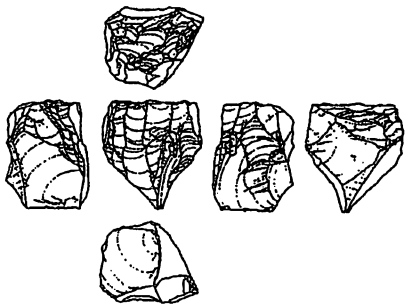
第３図　茨城県の細石刃石器群(2)



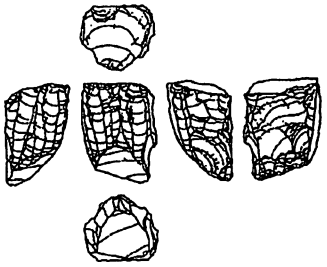
第４図　茨城県の細石刃石器群(3)



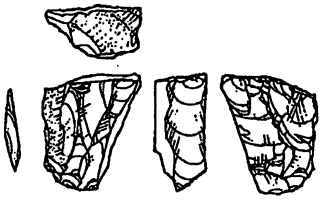
第５図　茨城県の細石刃石器群(3)



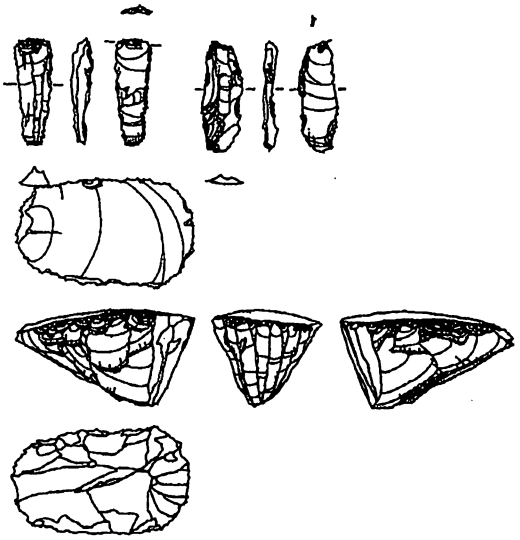
原の寺(7)

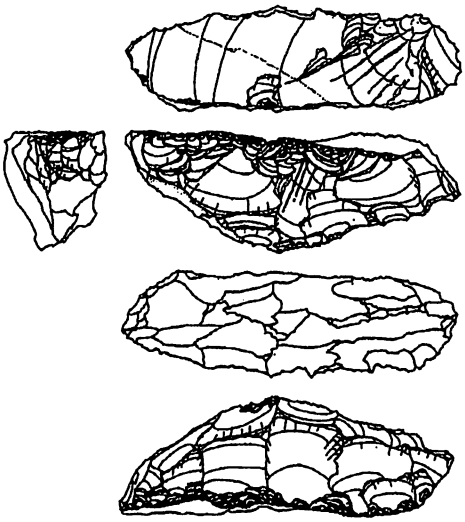


三反田蜆塚(8)

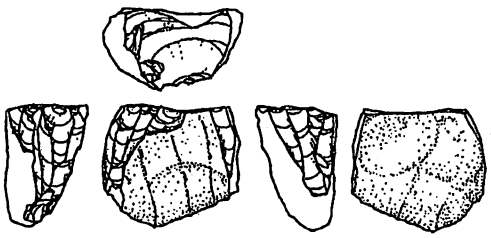


赤塚(10)

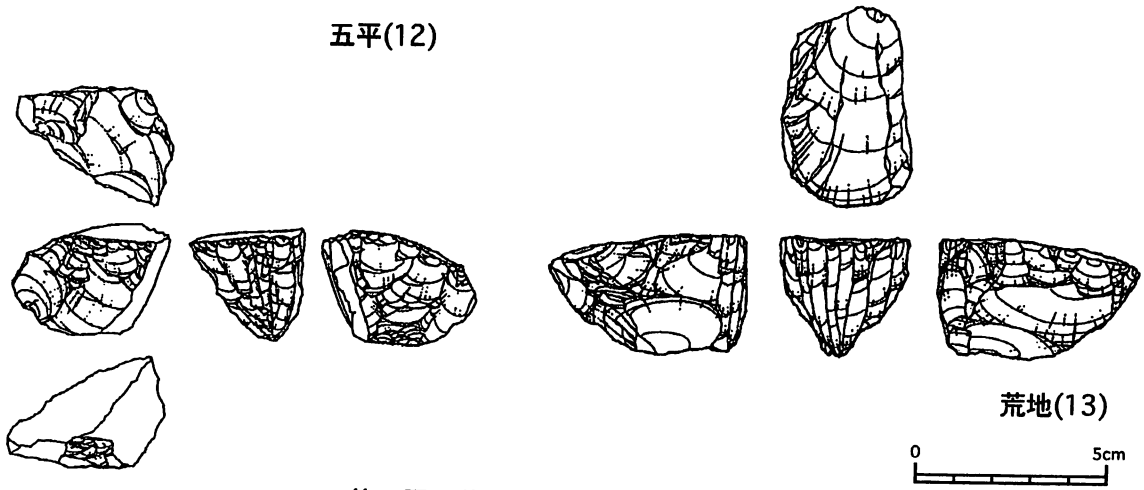




田野(11)



五平(12)

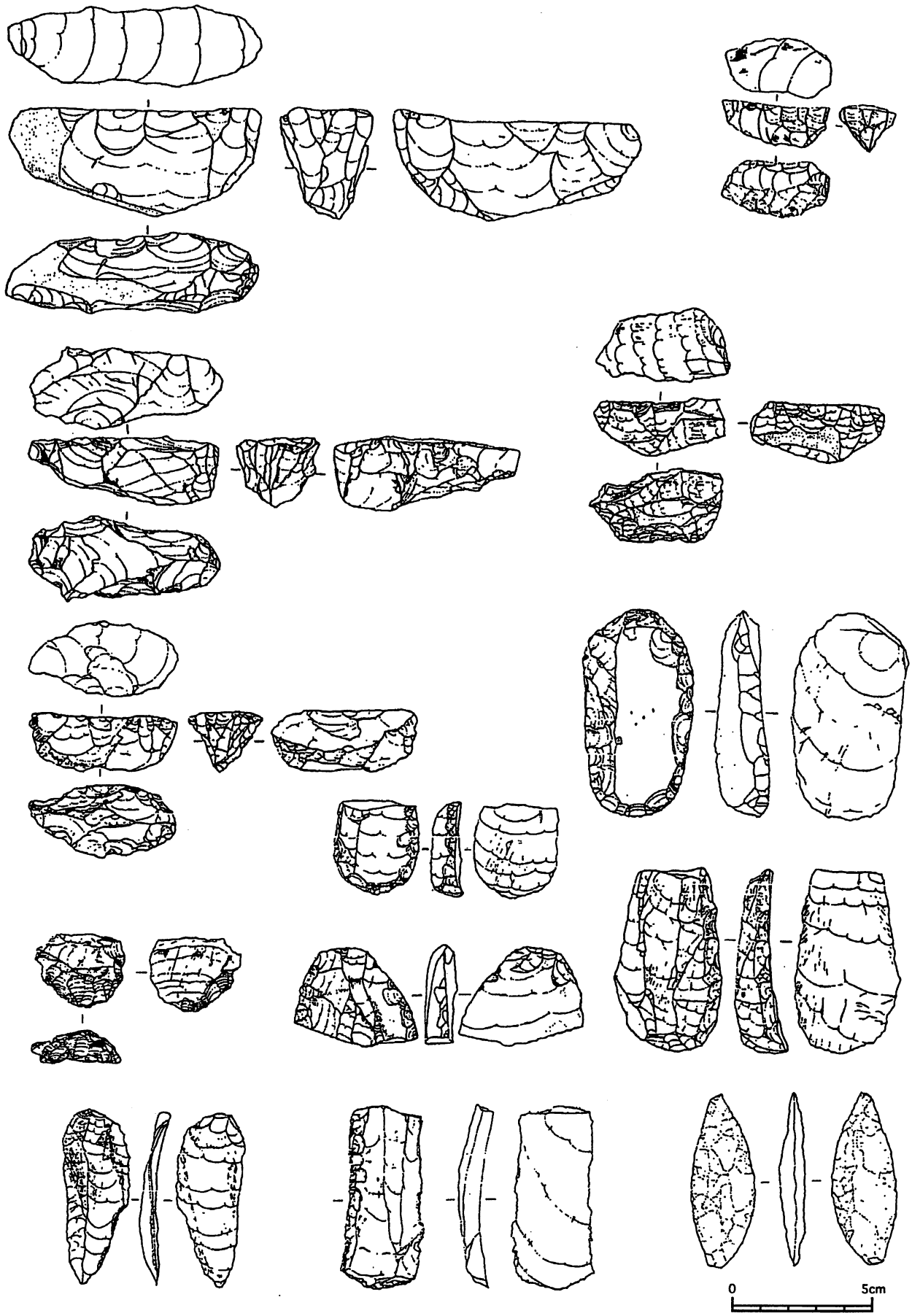


荒地(13)

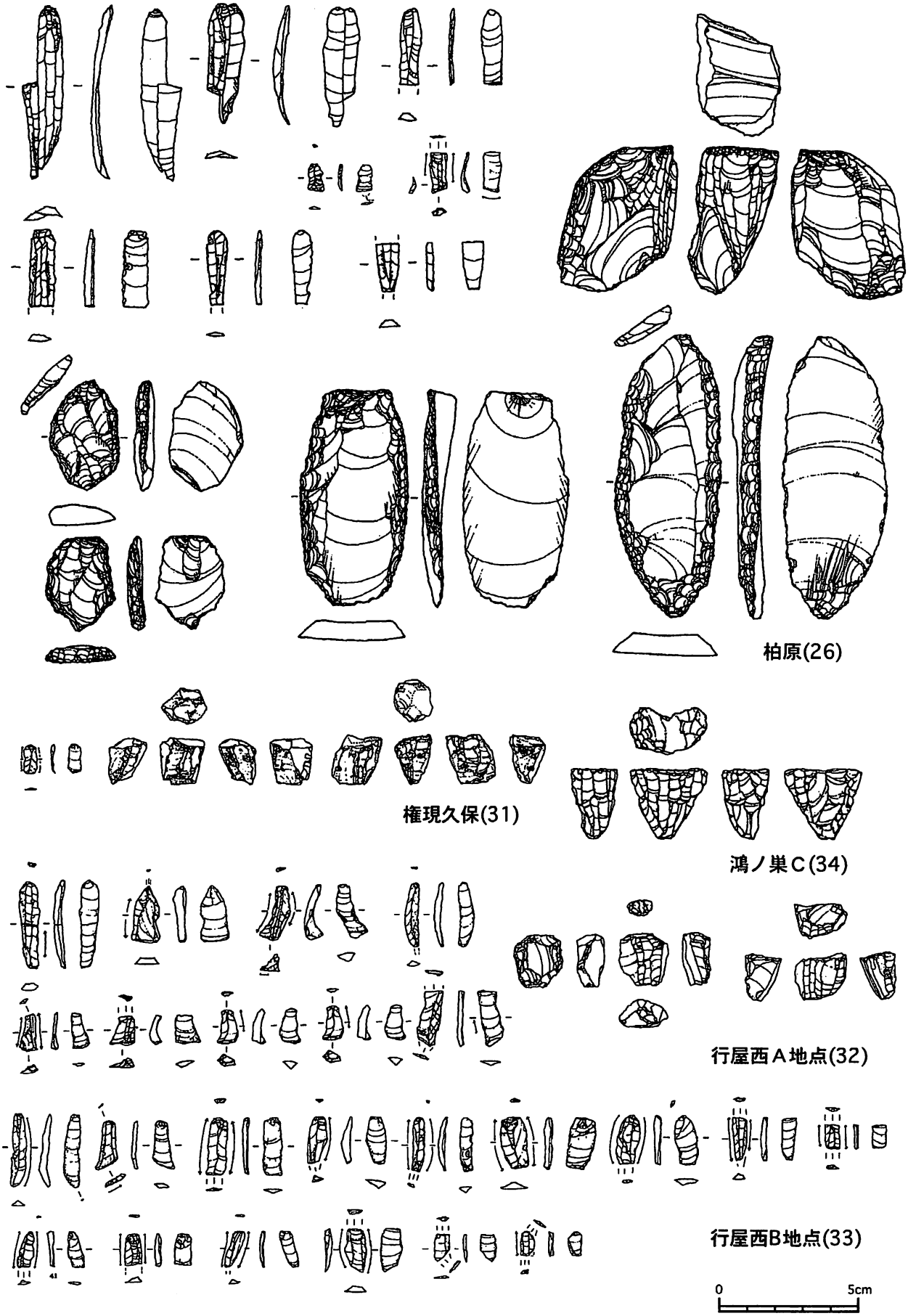
0 5cm

第６図　茨城県の細石刃石器群(5)

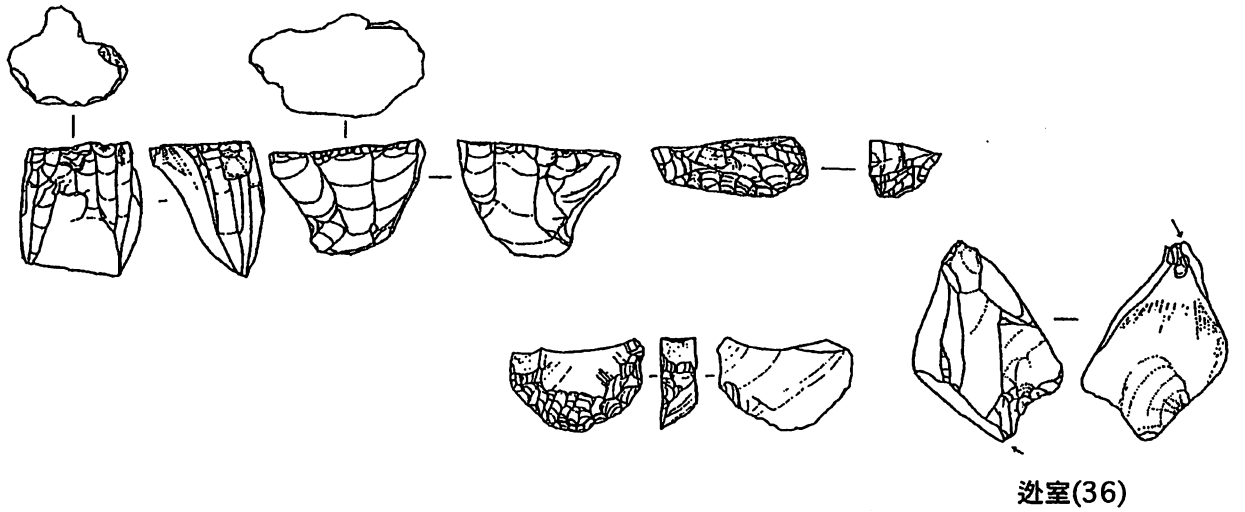
第７図　茨城県の細石刃石器群(6)



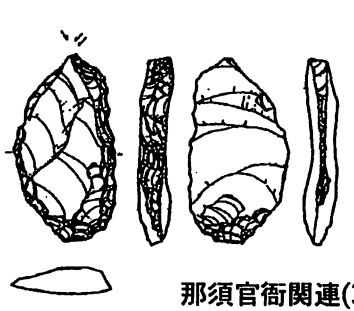
第８図　茨城県の細石刃石器群(7)　沖餅遺跡(23)



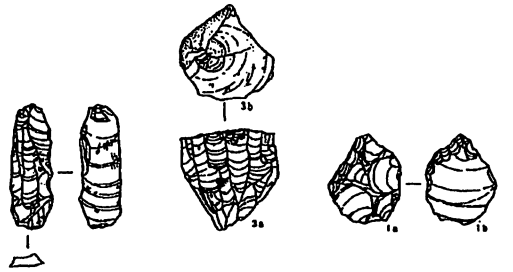
第９図　茨城県の細石刃石器群(8)



逆室(36)



那須官衙関連(37)

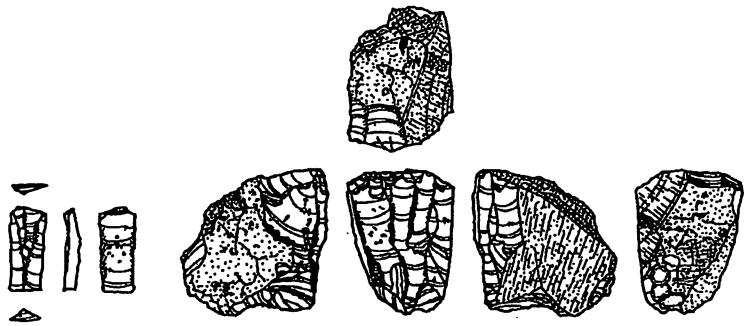


上の原(38)

坂田北(39)

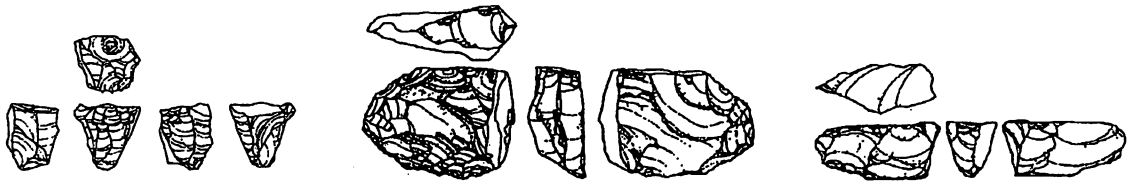
0 5cm

第10図　栃木県の細石刃石器群(1)



小倉水神社裏(40)

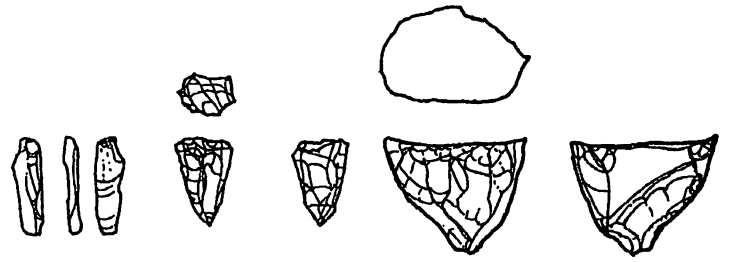
寺野東(41)



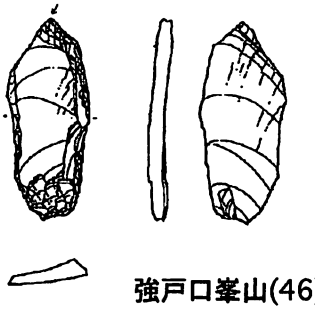
金山(42)　　赤羽根(43)　　エグロ(44)

0　5cm

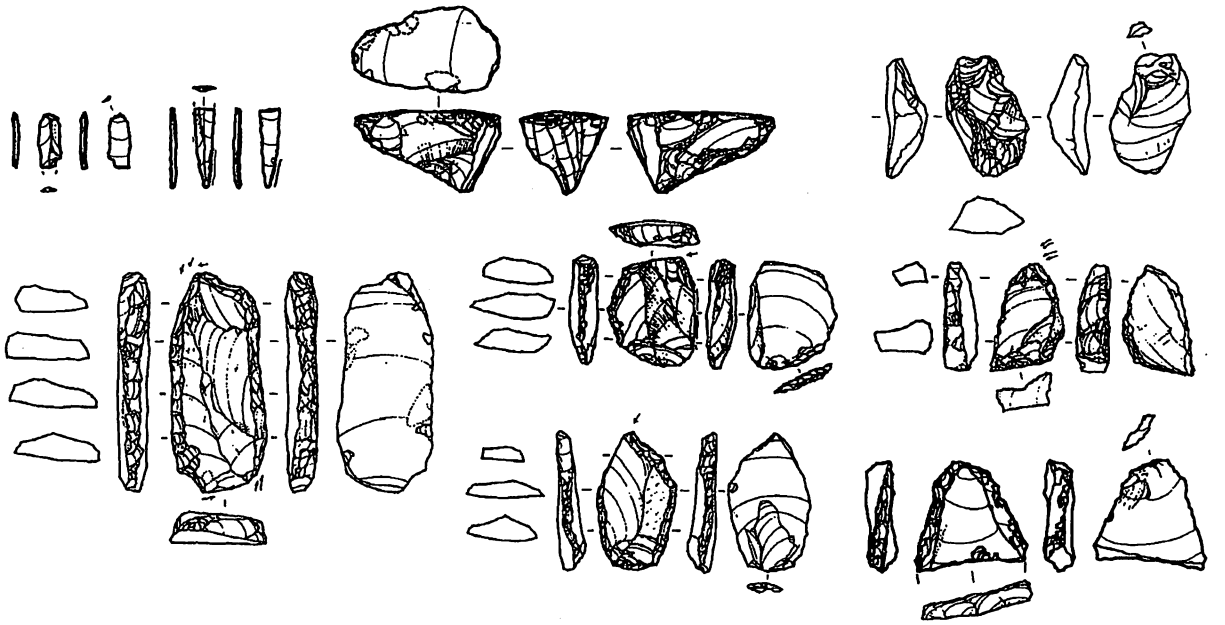
第11図　栃木県の細石刃石器群(2)



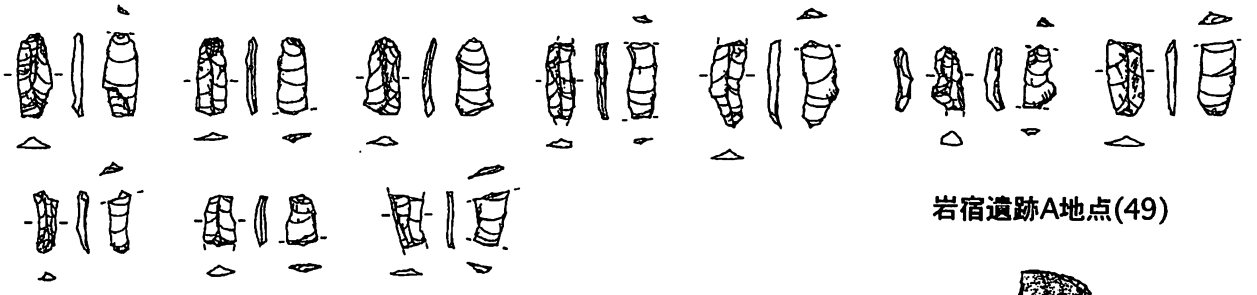
大袋 I (45)



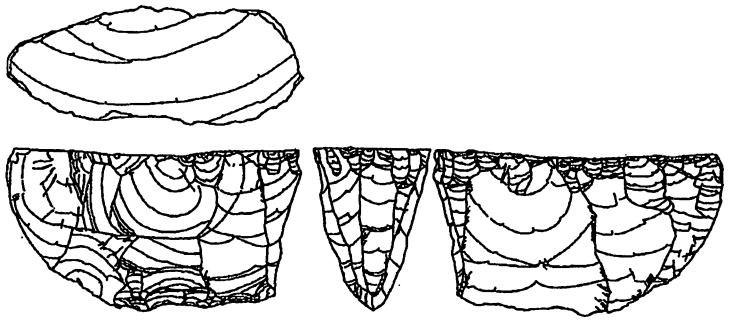
強戸口峯山(46)



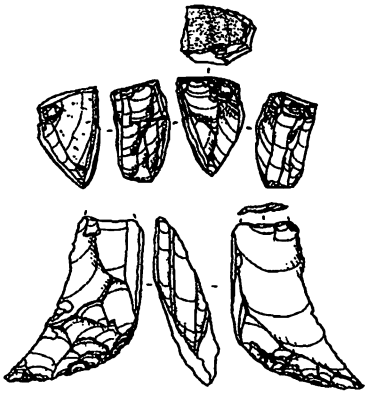
大雄院前(47)



岩宿遺跡A地点(49)



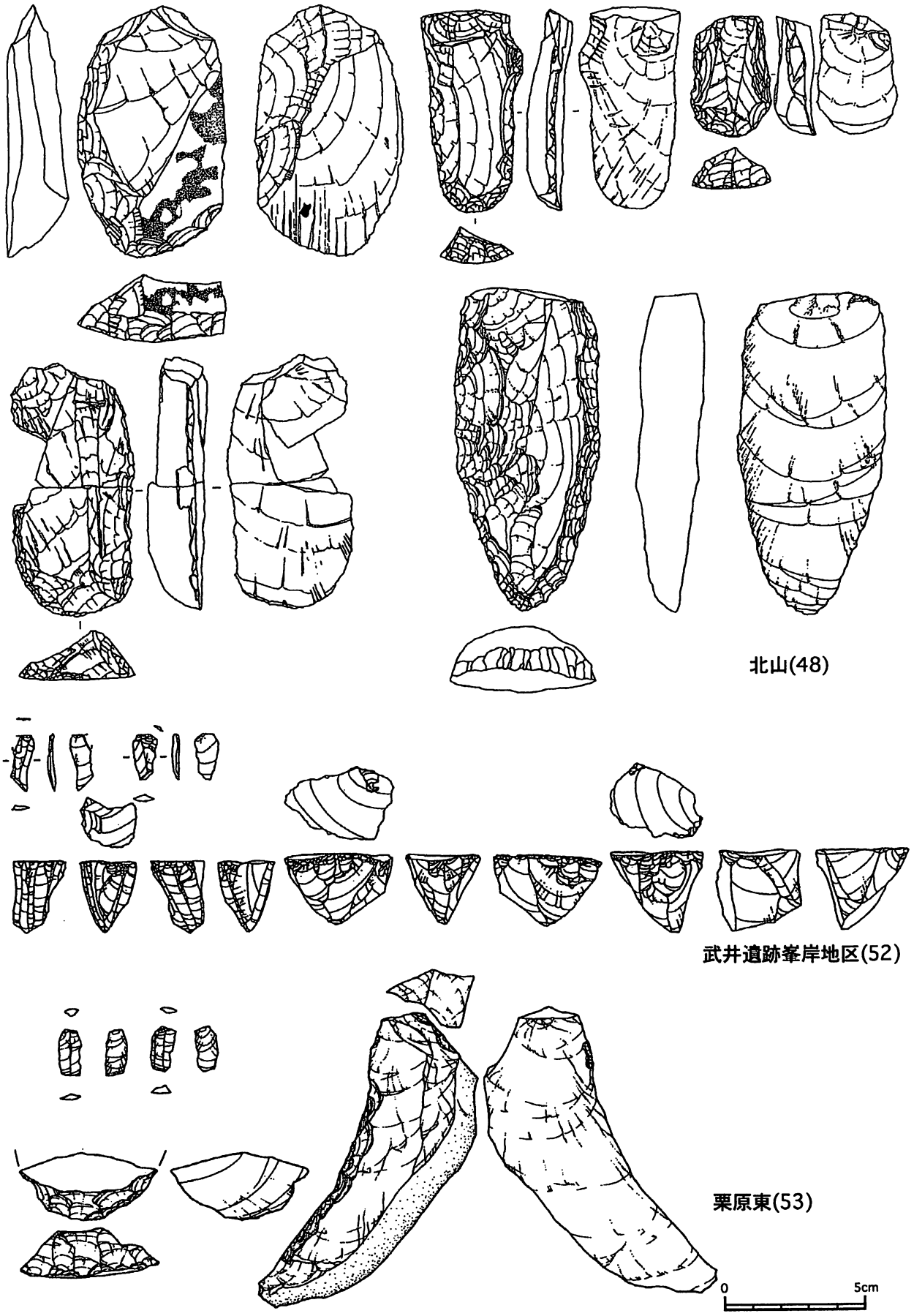
和田(50)



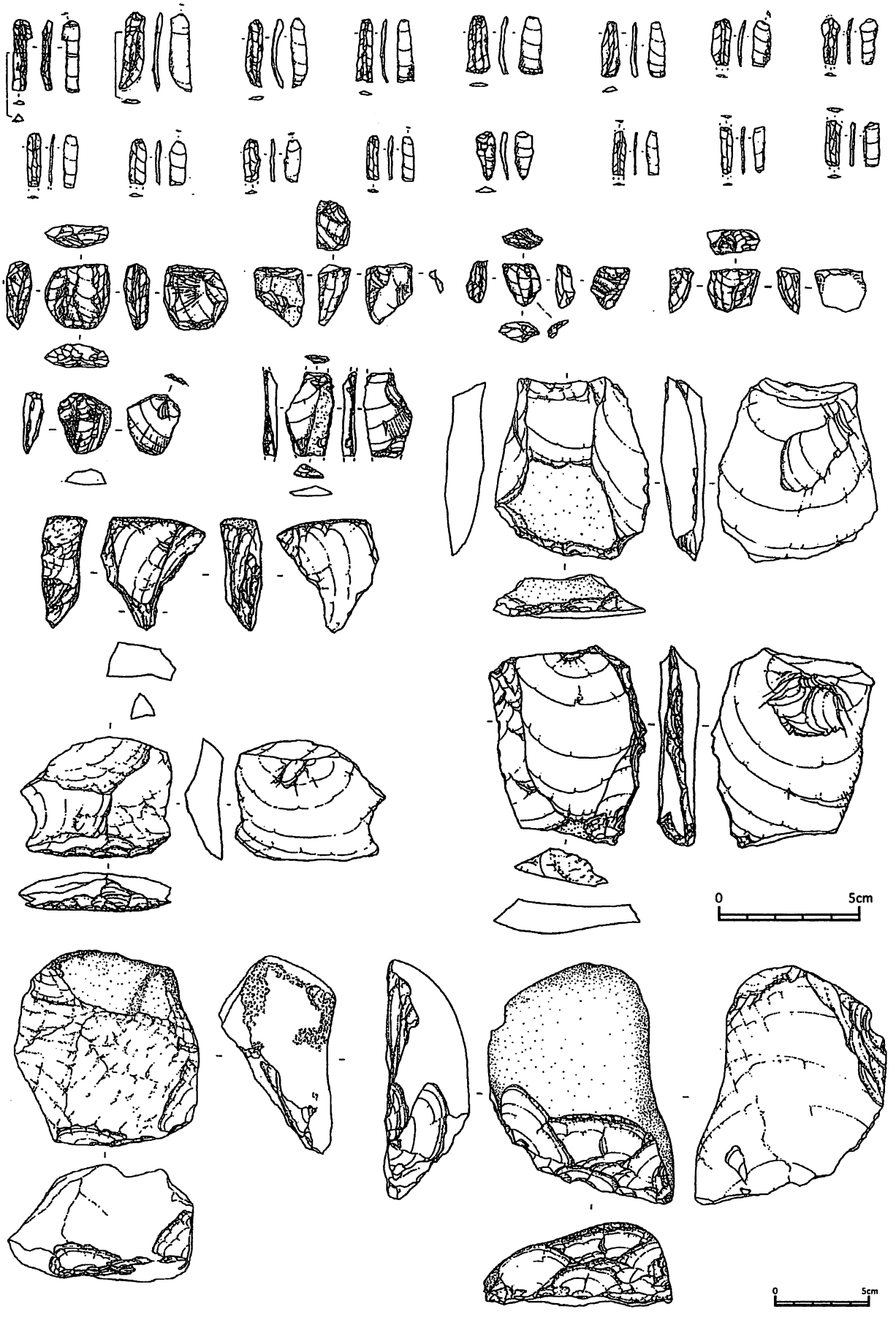
稲荷山 V (51)

0 5cm

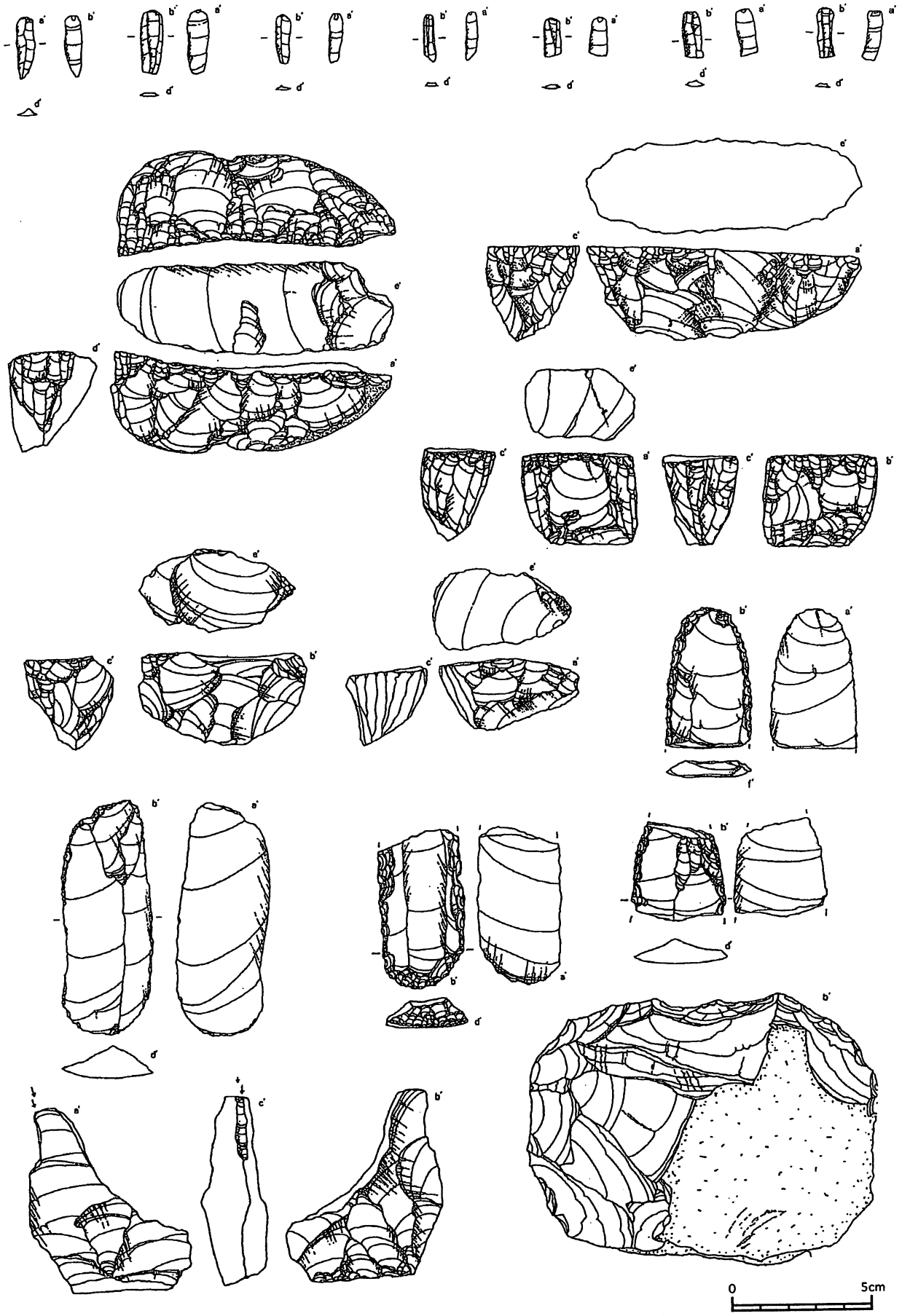
第12図　群馬県の細石刃石器群(1)



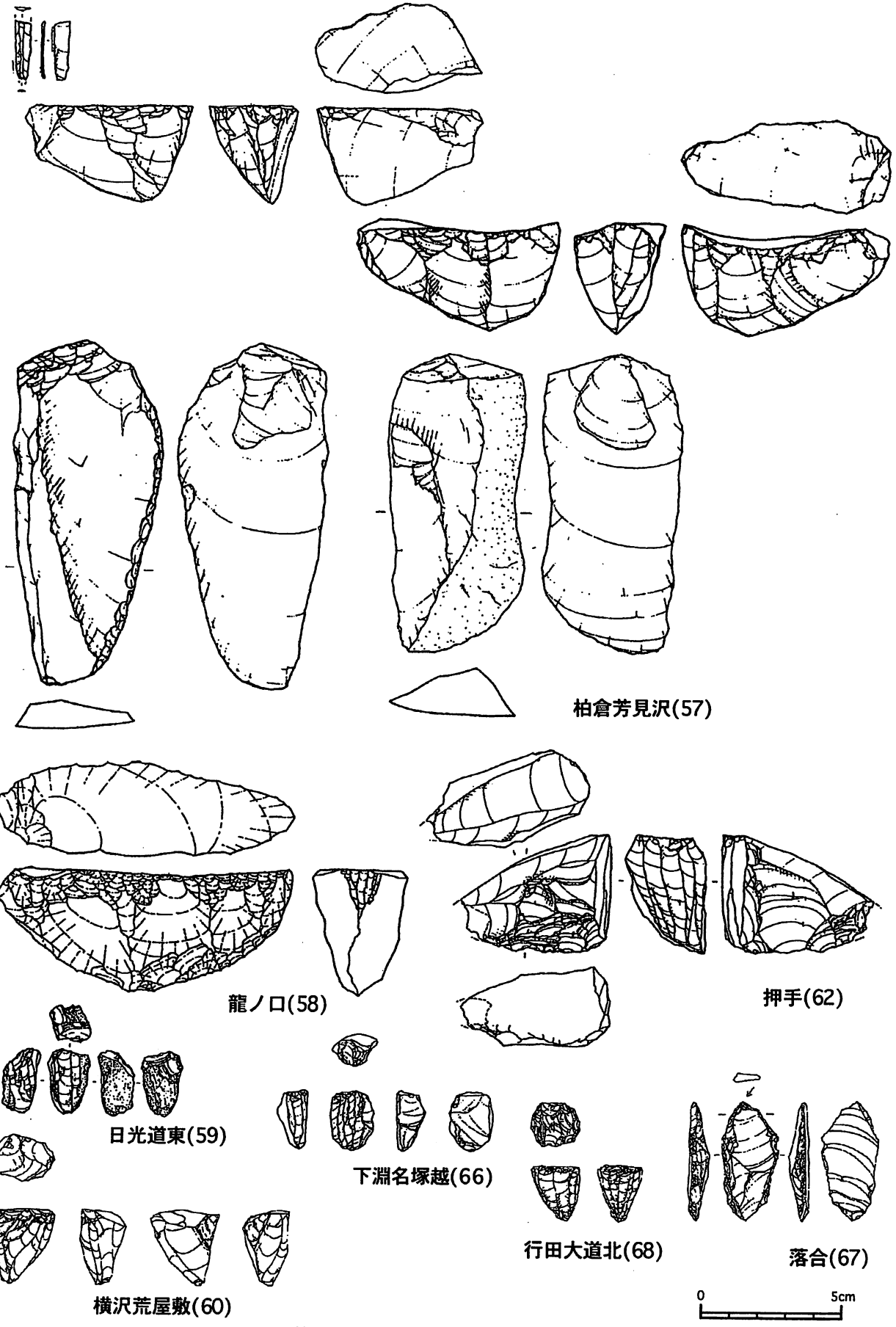
第13図　群馬県の細石刃石器群(2)



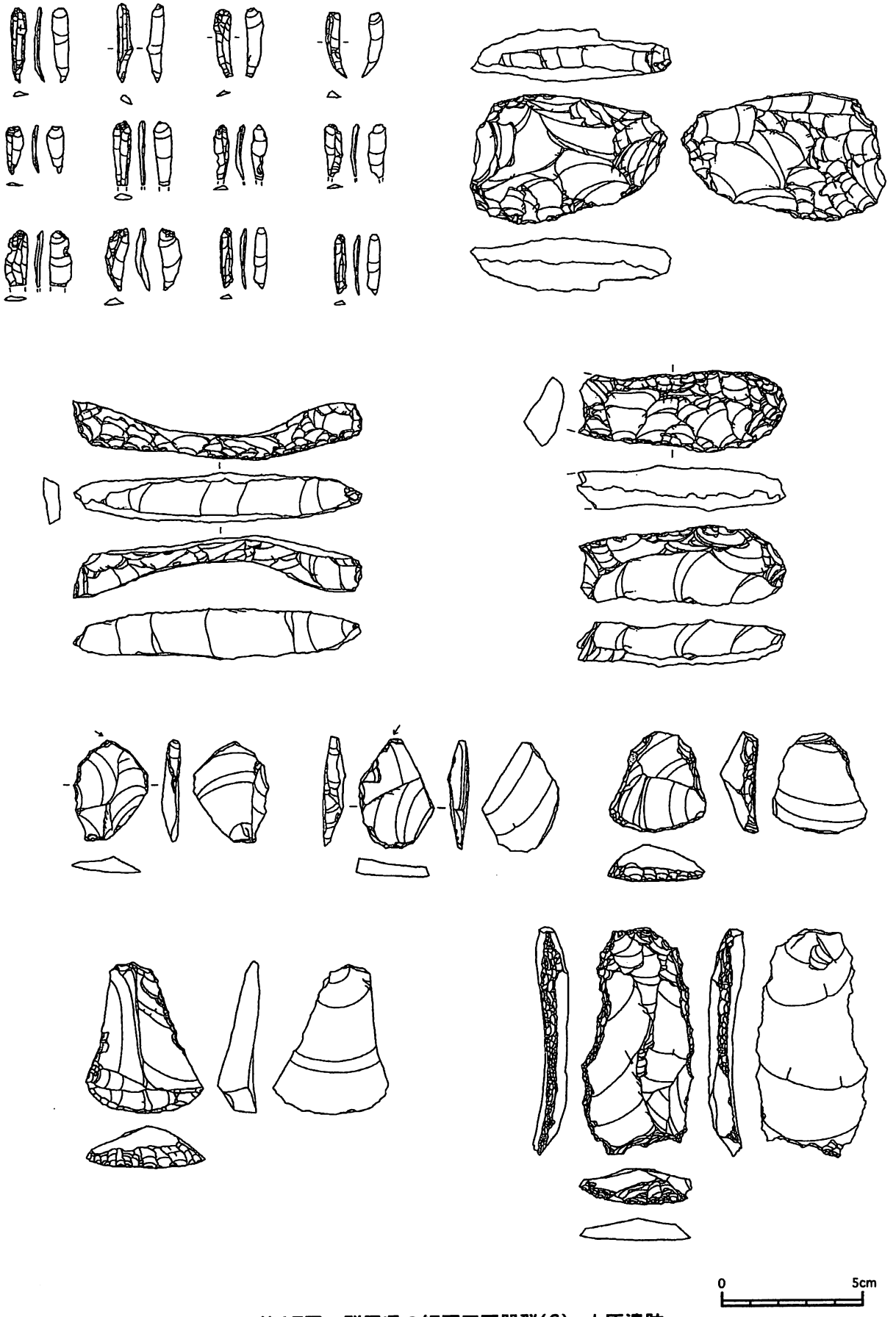
第14図　群馬県の細石刃石器群(3)　市之関前田(55)



第15図　群馬県の細石刃石器群(4)　桝形(56)



第16図　群馬県の細石刃石器群(5)



第17図　群馬県の細石刃石器群(6)　上原遺跡

第18図　群馬県の細石刃石器群(7)　頭無(64)

表1　北関東の細石刃石器群一覧表

NO	遺跡名	組成																		発掘	標高	地域	年代	備考
		細石刃	細石核	削器	掻器	彫器	錐	楔形石	打製石	局部磨	磨器	ナイフ	尖頭器	削片	土器	礫片	石器集中	遺構						
1	宮脇A	21	3											2?			1			○	45	阿武隈山地東縁の丘陵		
2	郡原古墳	4	2																	○	31	那珂台地(新川左岸)		
3	観田大宮	204	1	8	18				6		1			1			1			○	30	那珂台地(久慈川右岸)		
4	新地	14	6																	○	30	那珂台地(久慈川右岸)		
5	富士山	90	25																	○	30	那珂台地(久慈川右岸)		
6	後野	167	5	3		8					1						2~3			○	30	那珂台地(本郷川左岸)	黄褐色パミス下	
7	原の寺		1																	○	30	那珂台地(新川右岸の台地)		
8	三反田蟹塚貝塚		1																	○	20	那珂台地(那珂川左岸の台地)		
9	向野No.1				1															○	30	那珂台地(新川右岸の台地)		
10	赤塚																			○	34	東茨城台地		
11	田野		○																	表面採集		東茨城台地(桜川右岸)		
12	五平		2																	○	33	東茨城台地(猫沼前川右岸)		
13	荒地		2																	○	40	鹿島台地(大谷川右岸)		
14	上釜		1																	○	40	鹿島台地(大谷川右岸)		
15	遺跡名不詳																			○	-	鹿島台地		
16	富士見台		1																	○	10	新治台地(霞ヶ浦南岸)		
17	金沢		1																	○	24	新治台地		
18	寺畑					1														○	24	新治台地		
19	原田北																			○	25	新治台地		
20	老杯清水西																			○	26	新治台地(川尻川)		
21	中原		1	4	2	6											○			○	25	稲敷台地(花室川左岸)		
22	西栗山																			○	20	稲敷台地(西谷田川左岸)		
23	神餅		6	17	35									2			3以上			○	20	稲敷台地(大正堀川右岸)		
24	大羽谷津																			○	25	稲敷台地		
25	岡坪B																			○	25	稲敷台地		
26	柏原	104	2	1		3											5?			○	20	猿島台地(小貝川右岸)		
27	花輪台		1																	○	25	猿島台地		
28	鍋州原		1	1?																○	22	猿島台地(小貝川右岸)		
29	氏神A		1																	○	25	台地名不詳(鬼怒川右岸)		
30	本田屋敷		1																	○	21	台地名不詳(鬼怒川右岸)		
31	権現久保	1	2																	表面採集	16	猿島台地(宮戸川右岸)		
32	行屋西A地点	10	2																	表面採集	20	猿島台地(宮戸川左岸)		
33	行屋西B地点	22	2																	表面採集	20	猿島台地(宮戸川左岸)		
34	鴻巣C		1																	表面採集	15	猿島台地(渡瀬川右岸)		
35	風張		1																	表面採集	15	猿島台地		
36	逆室		2	2	1									3						○	400	那須野ヶ原扇状地		
37	那須官衙関連					1														○	140	木連川丘陵		
38	上の原	1	1	1																○	220	宝木台地		
39	坂田北	120	3					6									577	1		○	220	鹿沼台地(坂田山丘陵)		
40	小倉水神社裏	1	1											6						○	120	鹿沼台地		
41	寺野東	44	4																	○	43	猿島台地		
42	金山		1																	○	25	猿島台地		
43	赤羽根	1	1		1															○	28	佐野台地		
44	エグロ		1																	○	25	佐野台地		
45	大袋I	1	2														○			○	20	船林台地		
46	独戸口墓山					1														○	85	独立丘陵(八王子丘陵)		
47	大越院前	1	1	1?		3														表面採集	120	渡良瀬川柯岸段丘		
48	北山			2	9						1							1	配石?	○	130	筑れ山		
49	岩宿遺跡A地点	8?														8?				○	145	独立丘陵(鹿田山丘陵)		
50	和田		1																	○	170	独立丘陵(鹿田山丘陵)		
51	稲荷山V		1																	○	180	独立丘陵(鹿田山丘陵)		
52	武井遺跡崖岸地区		2																	○	155	筑れ山	As-Sr混じり層	
53	栗原東	2		7	1	1?						1?					90	2		○	470	赤城山南麓		
54	遺跡名不詳	○																		表面採集	300	赤城山南麓		
55	市之関前田	284	5	17								1						2		○	282	赤城山南麓	As-Sr混じり層	
56	桝形	39	17	16	1	1?					3						○			○	420	赤城山南麓	As-YP層下	
57	柏倉芳見沢	3	3	9							2			1			134	3		○	380	赤城山南麓	As-YP層下	
58	鹿ノ口		1																	○	440	赤城山南麓		
59	日光道東		1																	○	195	赤城山南麓の火砕流堆積物		
60	横沢新屋敷		1																	○	230	赤城山南麓の火砕流堆積物		
61	上原	51		1	2	2								1			183	4		○	245	赤城山西麓の火砕流堆積物	As-Sr混じり層上位	
62	押出		1																	○	230	利根川・吾妻川の柯岸段丘(双林寺面)		
63	鳥取福鹿寺II	○	○	○	○	○											○			○	130	赤城山南麓の火砕流堆積物		
64	頭無	121	1	10	1	9								1			425			○	120	赤城山南麓の火砕流堆積物	As-YP層下	
65	舞台																			○	90	大間々扇状地桐原面	As-Ok/As-YP間	
66	下淵名塚越		1																	○	60	大間々扇状地桐原面		
67	落合					1														○	227	碓氷川の柯岸段丘（基盤上は下部ローム）		
68	行田大道北	1	1																	○	310	碓氷川の柯岸段丘（基盤上は下部ローム）		

※　各遺跡の文献は、本文末の引用参考文献に示した数字と遺跡番号が対応する。

南関東地域の細石刃文化

永塚　俊司

はじめに

ここでいう南関東地域とは、行政区画で千葉県・埼玉県・東京都・神奈川県の４都県のことである。関東平野は盆地状の地形をなし、周辺部の山地・丘陵とそれに続く台地、大小河川の沿岸や東京湾を囲むように広がる低地からなる。埼玉・東京・神奈川では、西側にひかえる関東山地・丹沢山地に続く台地が南北に並び（相模野台地・武蔵野台地・入間台地・櫛引台地等）、荒川低地を挟んで中州状に大宮台地がある。千葉県は栃木県から南に「回廊状」をなす台地に連続するかたちで下総台地がひろがり、広く県内の北半を占めている。

細石刃石器群に限らず、後期旧石器時代の遺跡の多くはこれら台地上に立地する。石器群を検討する単位としては行政区分ではなく、今述べたような地形区分に従った方が、その特質を明らかにできると思われるものの、行政区画毎に行われる発掘調査と研究の実態、集成の便から、今回は各都県毎にその様相をまとめていくこととした。

１．千葉県の様相

研究の経過・編年・細石刃剥離技術　旧富里村七栄から採集された細石刃石核は1967年、篠原正氏によって紹介された（篠原1967）。これがおそらく千葉県で最初に公表された細石刃関連遺物であろう。

1970年代以降は、（財）千葉県文化財センターによって千葉ニュータウン・新東京国際空港・佐倉第三工業団地建設等に伴って調査された遺跡によって資料が蓄積されていく。その多くが、野辺山型（いわゆる「野岳・休場型」）の細石刃石核を伴うものであるが、佐倉市木戸場遺跡・成田市東峰御幸畑西遺跡で削片系のものが出土している。木戸場遺跡の資料は橋本勝雄氏によって再度検討された（橋本1988）。橋本氏は東日本に分布する「荒屋系細石刃石器群」の集成を行い、「古利根川」を境とした分布の偏在性を根拠に、内水面漁猟との関連を指摘した。この時期に検出された遺跡は、地域的には下総台地北半部の資料が大半を占めるが、袖ヶ浦市清水川台遺跡・夷隅郡大原町№244（安養山）遺跡の下総台地南縁部や丘陵地帯からの遺跡も少数ながら紹介されている。前者は嶺岡産と推測される珪質頁岩を主体的に用いている点で注目され、後者は立正大学考古学研究室による遺跡分布調査により細石刃石核が採集されたものである（実測図等は未公表）。

野辺山型の細石刃石核が多量に出土した佐倉市大林遺跡では、田村隆氏によって分析され、石器群全体の技術構成が利用石材とともに大きく３つに分離され、各遺跡によりその技術構成が選択される状況が指摘された。構成１は細石刃剥離に関するもの、構成２は一般的剥片剥離に関するもの、構成３は礫器状石核による剥片剥離に関するものである（田村1989）。そのような技術構成とその選択性は後期旧石器時代全般に見られるものと変わらぬもので、その連続性が指摘された（田村1989）。

一方、千葉県での細石刃石器群の編年案は資料の蓄積が進んだ70年代に新旧関係を論じた報告書がいくつか刊行された。それらは、ナイフ形石器・有樋尖頭器との共伴関係を拠り所として、細石刃石核の技術的な特徴を検討したものであった。下総編年は、武蔵野編年を参考として田村・橋本氏によって編まれ、細石刃石器群は３a期に位置づけられた（田村・橋本1984）。90年代に入り宇田川浩一氏は下総編年３ａ期を３期に細分した（宇田川1992）。県内の資料をまとめて扱った初めての編年案である。細石刃石核の作業面長・打面状況等の項目を統計処理した分析は、奇しくも相模野台地における細石刃石器群の変遷に対応するものであった。つまり、時期が新しくなるに従って、細石刃剥離作業面長が長くなり、石材は黒曜石主体から非黒曜石主体に変化するもので、新段階に削片系細石刃石器群を位置づけた。

その後、編年的な考察は、層位的出土事例の望めない下総台地においては停滞するが、田村氏による幾つかの提言が注目される。一つは通常、武蔵野編年でⅤ層～Ⅳ下層段階といわれる石器群に伴う細石刃様の石器について積極的に組み合わせ道具としての「細石器」の機能を評価していく方向性であり、大網山田台№4B・地国穴台E01の位置づけについて検討を行っている。また木苅峠遺跡の再検討の中で同氏は、有樋尖頭器に伴う細石刃の再評価を行い、いわゆる荒屋型彫刻刀形石器を伴う削片系の細石刃石器群の位置づけについて、下総台地に見られる細身柳葉形を呈する尖頭器石器群との関連を指摘している（田村2000、同2003）。

ここまで述べてきたように、いわゆる野辺山型と削片系の細石刃石核を特徴とする遺跡しか検出されなかった千葉県で、それらとは異なる特徴を有する船底型の細石刃石核をもつ石器群が、東金市の稲荷谷遺跡で報告された。これらの細石刃石核を野辺山型の範疇で捉えるかどうか焦点となる。また、成田市十余三稲荷峰遺跡では100点以上の細石刃石核、2000点に及ぶ細石刃が出土し、大規模な遺跡としてすでに概要が森本和男氏によって紹介されているが（森本1992）、調査からすでに10年以上が経過し、ようやく本報告が刊行されようとしている。

また、荒屋型彫刻刀形石器を伴う削片系の細石刃石器群は、着々と資料を蓄積し（木戸場A・東峰御幸畑西（空港№61）・大網山田台№8）、現在までのところ14遺跡で関連遺物が公表され、1997年には千葉県において開催された石器文化研究交流会にて周辺地域を含めた「北方系削片系細石刃石器群」について集成・検討がなされた（島立・永塚1997）。

遺跡の分布　関東屈指の面積を誇る下総台地における遺跡分布は密集地域と過疎地域に明瞭に分かれ、印旛沼を中心として北西方向に千葉ニュータウン関連遺跡群（北西地域）、東方向に新東京国際空港関連遺跡群（東地域）、南西方向に南志津地区・佐倉第三工業団地・内黒田地区関連遺跡群（南西地域）、南方向に一部の空白地域を挟んで大網山田台・土気遺跡群（南飛地域）が集中している。そのブロック状をなす分布密集地域以外の過疎地域は分布密度のみならず、遺跡の規模においても見劣りする遺跡が多い点も注目される。単なる開発の多寡による遺跡分布の偏在性と片付けられる問題ではないのであろう。また、各エリアで「荒屋系細石刃石器群」が分布する点も見逃せない。北西地域では「同石器群」の関連遺物が検出されているのみであるが、野辺山型細石刃石核を伴う石器群と荒屋系細石刃石器群の分布状況には特に大きな相違点を見いだすことはできない。

利用石材からみる遺跡分布は（あくまで、細石刃生産に関連する石材利用に絞ると）、北西地域は黒曜石を用いる遺跡が多く（一本桜南・船尾白幡・地国穴台など）、逆に南西地域は非黒曜石を主体とする遺跡が目立つ（大割・大林・星谷津など）。そして東地域は十余三稲荷峰（空港№67）で黒曜石の利用が突出するが、周辺遺跡では非黒曜石の利用もみられる。南飛地域もそれほど大きな偏りはみられない。また、嶺岡産と推測される珪質頁岩の分布をみると、下総台地南縁部の袖ヶ浦市の美生群第6地点や清水川台で主体的に用いているほか、北西地区や東地区で点在するように分布している（石頭第2・天神峰最上）。黒曜石・非黒曜石、それぞれに原産地が複数想定されるなか、詳細な分析・検討をとりあえずおいて、多少乱暴にまとめてしまえば、黒曜石は印旛沼を挟んで北側、非黒曜石は南側に偏在する傾向にあり、嶺岡産の珪質頁岩は南縁部を中心に広く点在する分布傾向が認められる。

細石刃生産に用いられる石材　細石刃石器群で、黒曜石の比率が比較的低いとされてきた下総台地であるが、十余三稲荷峰遺跡のような原石を多量に搬入し、細石刃生産を集中的に行ったとされる遺跡は特異ではあるものの、同遺跡を筆頭に、徐々に資料は増えつつある（玄番所・草刈場北・一本桜南・押沼第2（未報告）・椎名崎古墳B支群（未報告）等）。逆に、非黒曜石を用いた石器群が目立つと言うことである。今後、黒曜石原産地から遠く離れた遺跡での石器群の状況も、さらに詳しい分析が可能となろう。

黒曜石の原産地分析はほとんど行われていない状況であるが、信州系のものを中心に高原山産の黒曜石の割合がどのくらい含まれているのか注目される。下総台地における各時期の尖頭器石器群を分析した二宮・島立氏によると、信州産（53％）と高原山産(44％)がほぼ半々で、これに畑宿産（1％）と神津島産（2％）が僅かに加わるという、構成結果が報告されている。相模野台地で高比率を示す、伊豆・箱根産や神津島産の黒曜石が下総台地でどの様な割合を示すのか興味深い。細石刃石器群の分析が進めば、分析の進んだ周辺地域との関係とともに通時代的な比較・検討が可能とな

るであろう。

非黒曜石には、珪質頁岩・チャート・流紋岩等が用いられている。珪質頁岩には嶺岡産と推測されるものを含み、統一的な母岩分類による既報告の資料の見直しが可能となった場合、当時の石材獲得状況がより鮮明なものとなって立ち現れることであろう。

石器組成　単純に細石刃石器群に伴うその他の器種を概観すると、掻器・削器・彫器・石錐・楔形石器・礫器（石核）（大型剥片（刃部形成剥片）を含む）などが挙げられようか。比較的刃部がしっかりした掻器・削器や楔形石器を安定して伴う遺跡は、大林・大割・玄番所・天神峰最上などが挙げられ、構成1で非黒曜石を用いる遺跡に偏る傾向が見られる。礫器状石核（礫器）を伴う遺跡はそれほど多くなく、大林・南河原坂第3・向原などを挙げることができる。

削片系の細石刃石核を伴う石器群には掻器・削器・彫刻刀形石器が安定して組成するのは周知の通りであるが、それら以外に礫器状石核（礫器）とこれから剥離される大型剥片（刃部形成剥片）が組成の一翼を担うことが注目される。全ての遺跡で伴うという訳ではないが、木戸場・東峰御幸畑西・一鍬田甚兵衛山にみられ、野辺山型細石刃石核を伴う石器群と同様の技術構成を一面で示していることが理解される。また掻器・削器・彫刻刀形石器等の素材剥片生産は遺跡内では行われず完成品が搬入されている。

2．埼玉県の様相

研究の経過　埼玉県での研究は秩父地域での佐藤達夫・直良信夫氏による調査研究が初期の研究を飾る。特に佐藤氏は広く大陸から日本の細石刃石器群を捉える独自の視点をもち、研究初期の段階に秩父（吉丸）の石器群を、モンゴル・野辺山（丸山）等に見られる細石刃石器群と比較検討した（佐藤1954）。

埼玉県でも行政発掘において徐々にではあるが資料の蓄積が進み、単独・表採資料・上層遺構覆土内からの検出以外に小規模ながらブロックが検出されていった。1990年代前半までに、風早遺跡・中砂遺跡・打越遺跡・清橋遺跡等の遺跡報告書が刊行された。1989年には、水村孝行氏による県内の資料集成がなされたことにより、その内容が具体的に明らかとなる（水村1988）。以前から田中英司氏により注意されていた削片系の細石刃石器群関連遺物についても肯定的に触れ（田中1987）、今後の資料発見を示唆した。

そのような中で、1989年には白草遺跡の調査が行われ、荒屋型彫刻刀形石器を伴う削片系の細石刃石器群が検出された。同石器群は川口潤氏による、分析検討がなされた。また圏央道関連事業地内の同一路線から横田遺跡・柳戸遺跡・新山遺跡と隣接した遺跡から、次々と黒曜石を主体とした細石刃石器群が検出され注目された。西井氏は中砂・清橋・柳戸・新山遺跡の報告書作成を通じて、様々な視点から南関東地方における細石刃石器群との比較検討を行っている。また、横田遺跡では接合によって原石段階にまで復元された母岩の存在から、遺跡への搬入形態が明らかとなり、同じ黒曜石を利用した隣接する遺跡との関連に注目した田中・西井・仲田大人氏によってそれぞれ詳細な検討がなされている（仲田2002）。

また層位的な検出事例に乏しい同県において、具体的に編年的な考察を試みた論功は見あたらないようである。

遺跡の分布　埼玉県は県西部に秩父山地をひかえ、秩父山地に接して櫛引台地・江南台地・入間台地・武蔵野台地などの台地が丘陵を挟みながら県中央部を南北に並び、県東部には低地に囲まれた大宮大地が孤立するように分布している。そして県東部縁辺には下総台地の西端が極狭い範囲ではあるが分布する。遺跡分布は細石刃石器群に限ったことではないが、大宮大地を主体として、分布の濃淡はみられるが、ほとんどの遺跡が各台地を走る小河川流域に面した台地上に立地している。主な遺跡を検討した西井氏によると、相模野台地・下総台地では石器群の立地面が現在の水田面と比高差が10m程度ある遺跡が多いのに対して、埼玉の各遺跡では河川との比高差はほとんど見られない特徴が指摘されている。

石器群の詳細な検討がなされていないものの、吉丸遺跡・井ノ尻遺跡等は県中央から東部の台地から離れ、秩父山地・盆地に点在する。

「削片系」細石刃石器群とその関連遺物を保有する遺跡はこれまで幾つか紹介されてきたが、白草遺跡を除いてまと

まった石器群は検出されておらず、単独検出のものでも検討が必要なものもある状況ながら、その分布域は荒川低地より以東の大宮台地と加須低地に島状に点在する台地に偏在し、荒川をさらに遡った右岸に白草遺跡が分布する状況である。橋本氏の提唱する「古利根川ライン」とよく合致する分布状況といえる。

細石刃剥離技術と石材　県内の単独出土を含めた細石刃石核はそのほとんどがいわゆる野辺山型の範疇に含まれるが、荒屋型彫刻刀形石器を伴う削片系細石刃石核を特徴とする遺跡（白草）や、ホロカ型が散発的に報告されている（将監塚・向山）。後者については、石器群を形成しない単独出土のものでもあり、その位置づけについては特に検討を要するものと考える。

ブロックを形成する遺跡は黒曜石を主体とする石器群（大和田高明・横田・柳戸・新山）と黒曜石と非黒曜石の両方がみられる石器群（逆井・風早）、硬質頁岩を主体とする石器群（白草）に大きく分けられる。また、細石刃生産関係には黒曜石、その他のトゥールには非黒曜石を用いた遺跡もあるが（下向山・清橋）、これについては石材毎の技術構成の違いによるものと他時期の混在による違いの両者が考えられよう。そのどちらであっても、非黒曜石にはチャートが主に用いられているが、逆井では細石刃生産関係に「珪質岩」が主に用いられ、一般的剥片剥離には「ガラス質黒色安山岩」が原石状態で搬入されるなど、埼玉県の一般的傾向とは異なるが、下総台地にみられる石材・技術構成とよく似ている。逆井が中川低地を挟んで下総台地に隣接する、大宮台地東縁に位置する点は意味深である。また、同遺跡を除くと埼玉県には、下総台地にみられるような非黒曜石のみを用いた（黒曜石があっても極僅か）石器群はほとんどみられない。

黒曜石は、大和田高明（熱中性子放射化分析）・横田・柳戸・新山（蛍光X線分析）で原産地推定分析が行われている。大和田高明では高原山産を主体として和田峠産が客体的に伴い、横田・新山はほぼ信州系産で占められ、柳戸は信州系産と神津島産が組成するという分析結果が得られている。

また、逆井の細石刃石核には黒曜石製のものが２点あるが、「珪質岩」製のものと比較してその大きさに顕著な違いがみられ、黒曜石製のものの方が非黒曜石製のものと比較してかなり小さく、これは中砂遺跡にも同様な状況がみられる。また、逆井からは10点もの細石刃石核が出土しているが、それぞれに技術・形態的なバラエティーをもつことが指摘されている。周辺地域をみても同様の傾向が見られ、非黒曜石を用いた野辺山型細石刃石核の特徴といえる。

石器組成　石器群が全体的に小規模なものが多く、掻器・削器等が僅かに伴う程度で、共伴が問題とされるナイフ形石器や尖頭器もみられる（清橋・横田・白草）。特に削片系の細石刃石器群である白草でみられるような、スポールをはじめとする細石刃生産関連遺物や掻器・削器・彫刻刀形石器が安定して組成する点は群馬・千葉・茨城にみられる同系石器群と同様である。一方で、彫刻刀形石器と刃部再生により剥離されたスポールが多量に検出される点は、隣接県にみられない大きな特徴で、彫刻刀形石器を使った特定作業が顕著に行われていたことが推測される。堤氏により彫刻刀形石器の使用痕観察が実施された（堤1997）

礫器状石核（礫器）は風早・横田・白草で各遺跡数点ずつ組成するが、全体としてはそう多いとは言えない。井沼方遺跡では多量の礫器状石核（礫器）と剥片が接合したものが確認され、相模野台地の報恩寺との類似性が指摘されている。

楔形石器についても下総台地と比較して点数は少ないが、風早遺跡で最終的に？両極剥離による剥離が行われた「細石刃石核」は注意される。この種の石器は相模野台地では器種転換の一つと紹介され（本入こざっ原）、下総台地では細石刃剥離のための両極剥離と位置づけられている（天神峰最上遺跡）。はたまた最初から楔形石器として用いられたのかもしれない。

３．東京都の様相

研究の経過　芹沢長介氏による日本の細石刃石器群研究の記念碑的な論文である「関東及び中部地方に於ける無土器文化の終末と縄文文化の発生に関する予察」で、初めて根ノ上採集の細石刃石核が紹介される（芹沢1954）。その後、採集資料の幾つかの紹介があるが、瑞穂町の狭山Ｂ遺跡では、学術調査によって中・大形尖頭器とともに野辺山型と削

片系の細石刃石核が上層遺構覆土中から一括で検出された。南関東地域での細石刃石器群の調査事例としてはかなり古く、調査は1968年に実施され、報告書は1970年に刊行されたが、上層遺構内という特殊な出土状況や主要な遺物の紹介のみであったため、その全体像の把握は困難である。また、野川流域の調査を精力的に行った小田静夫氏は，中山谷（1975），新橋（1977），はけうえ（1980）、西之台B地点（1980）・田無南町（1992）の報告を行い，当該期の石器群のあり方を示していった。多摩ニュータウン遺跡の調査では、特に多量の細石刃・細石刃石核が出土したTNT769が著名である。現在までにTNT301・388などで良好な石器群が報告されている。

一方でこのように資料の蓄積が進むなか，比田井民子氏は相模野台地・武蔵野台地・下総台地に展開する細石刃石器群を同一ブロックから検出されるナイフ形石器・尖頭器等に注目し，その石器組成を中心に検討を行っている（比田井1985・1987）。また，細石刃に残された「キズ」に注目した研究も本地域で早くから開始され，1980年代を中心として岡崎里美氏・阿部祥人氏・大浦真紀子氏らによる観察・報告がなされている（大浦・阿部1986）。最近では多摩蘭坂遺跡出土の細石刃の使用痕を観察した米田寛氏の研究がある（米田2002）。

資料は着々と増えていくものの，埼玉・千葉県と同様に層位的な出土事例がほとんどなく，大半の遺跡が野辺山型の細石刃石核を持つ遺跡であることなどから，東京でもやはり編年に関する活発な議論はなされていない。ただ，近年報告書が刊行された天神町遺跡や雨間地区遺跡群C地点でのいわゆる「ホロカ型」に分類されうる資料の検出が注目されるものの，相模野台地における変遷観を参考にこれらを位置づけるしか方策がないのが現状といえよう。

遺跡の分布　遺跡分布という視点から見た東京都の地形は大きく三つに分離される。第一に荒川低地と多摩川に挟まれた武蔵野台地が狭山丘陵を挟んで西側に拡がる。武蔵野台地は段丘地形が発達し，いくつかの地形面にわかれる。第二に多摩川を挟んで武蔵野台地の南側には多摩丘陵が広がり，三浦半島の付け根まで丘陵地形が続いている。第３は武蔵野台地・多摩丘陵の西側に位置する関東山地である。関東山地と武蔵野台地の接する地域は帯状に丘陵・台地が走り複雑な様相を呈している。

さて，細石刃石器群が検出された遺跡分布の状況は，武蔵野台地では東西方向へ走る中小河川流域沿いの武蔵野面に遺跡が濃密に分布しており，旧石器時代研究で著名な野川流域をはじめ石神井川・白子川・仙川・目黒川流域に分布する。このように中小河川流域沿いに分布する傾向は後期旧石器時代各期において同様の傾向が指摘されるが，天神町遺跡のように国分寺崖線と府中崖線のちょうど中央に立地する特異な遺跡も存在する。多摩丘陵には多摩ニュータウン遺跡群が分布し，多摩川水系の大栗川・乞田川・三沢川流域と神奈川県との県境に当たる境川沿いの丘陵地帯に遺跡は点在する。武蔵野台地とは大きく景観が異なる。また，関東山地と武蔵野台地・多摩丘陵の接する地域に発達した丘陵・台地に分布する遺跡がいくつか知られ，秋留台地（雨間地区）・加住丘陵（下耕地）・小比企丘陵に数遺跡が点在する。「ホロカ型」の特徴を有する細石刃石核が検出された雨間地区C地点，削片系細石刃石核を伴う狭山B地点は丘陵地形上に分布する点は注意される。前者については，関東地方の細石刃石器群をまとめた橋本氏が指摘しているように，ホロカ型細石刃石核が関東地方周縁部に展開する丘陵部や山地裾部に分布する状況を補強する資料として理解され，今後同地域における同系石器群の検出が期待される。

ブロックを形成する遺跡で，ある程度の規模を有する石器群について細石刃生産関連に用いられる石材に注目してみると，黒曜石をメインとする遺跡は武蔵野台地中央部と多摩ニュータウン遺跡群を代表とす多摩丘陵に分布する。それに対して非黒曜石メインの遺跡について見てみると，武蔵野台地の中央部に点在するもの（天神町・宮ヶ谷戸・もみじ山・出山（新））とそれらから離れて武蔵野台地と関東山地をつなぐ丘陵・台地に分布する（雨間地区C地点・下耕地・狭山B）特徴を指摘できる。そして後者の地域には黒曜石をメインとする遺跡が分布しない点は注目されよう。

細石刃剥離技術と石材　削片系の細石刃石核は狭山Bにあるが，一緒に検出された尖頭器石器群と野辺山型細石刃石核との関係は明らかではない。千葉県・埼玉県にみられる硬質頁岩を主体とした荒屋型彫刻刀型石器を伴う削片系の細石刃石器群とは様相が異なるものの，細石刃石核の技術的特徴はよく似ているといえる。石材は報告書によると頁岩が用いられている。実測図からの判断で断定はできないが，TNT863にも単独出土ながらチャート製の楔形を呈する削片系らしき細石刃石核が出土している。ホロカ型は天神町・雨間地区C地点で検出され，石材はチャートや珪質頁岩が

用いられている。これら以外はほぼすべてが野辺山型の範疇に入るものと考えられるが，いくつか特徴的なものが出土している。まず，黒曜石を用いない野辺山型細石刃石核を主体とする石器群に，もみじ山・宮ヶ谷戸・出山（新）・下耕地がある。チャート・珪質頁岩・珪岩・泥質岩などが用いられることが多い。もみじ山・出山（新）の細石刃石核のには分厚い剥片素材で主要剥離面が石核の側面にあてられ，打面調整が施されず，背面に稜調整が施されているものなどの特徴を持つものが見られる。このような特徴は非黒曜石製の石材を用いる細石刃石核によく見られる。また，黒曜石を用いるもので，小振りな角礫を素材とし打面調整はほとんど施されず，打面からの側面調整が施されることがあるが，打面調整はほとんど見られず，平坦剥離面もしくは自然面をそのまま打面として設定するような細石刃石核が主体となる遺跡も注意される。具体的には，国分寺市No37・小山高町から出土した細石刃石核にそれらの特徴が見られる。「代官山型」との関連が指摘されている。

層位的な出土事例は，出山・根岸山などを挙げることができる。出山では石材利用の変遷が注意されるが，根岸山は概要しか公表されておらず詳細は不明である。また，ナイフ形石器石器群との層位的出土事例で，もみじ山におけるⅢ層下部（細石刃）・中部（ナイフ）・上部（ナイフ）の石器群の変遷については十分な検討と解釈が迫られる。

石器組成　細石刃石核の一遺跡あたりの出土点数が非常に少なく，ほとんどの遺跡が５点未満で，細石刃がある程度出土しても細石刃石核が伴わない例がいくつも見られる。供伴か否かで問題とされるナイフ形石器・尖頭器については，個々の石器群の問題となるのでここでは触れないこととする。その他の器種構成については周辺地域と比べてそれほど特記すべき点は見あたらないものの，荒屋型彫刻刀形石器をともなう削片系の細石刃石器群が検出されないことから，定型的な彫刻刀型石器・掻器・削器が多数検出される遺跡はほとんどない。野辺山型細石刃石核を伴う遺跡では，掻器・削器・ドリル・楔形石器等の剥片石器が検出されるが，各遺跡で状況は様々である。ただし，細石刃生産に黒曜石を用いた場合，その他のトゥールもしくはトゥール生産のための剥片剥離には積極的に黒曜石が用いられることはあまりなく，チャート・安山岩を中心とする非黒曜石が用いられる傾向にある（TNT301では刃部形成の安定した黒曜石製の掻器が検出されているが，このような例は少ない）。礫器状石核（礫器）についても，遺跡によって選択される技術構成が異なり，中山谷・雨間地区Ｃ地点のように多量に伴う場合もあれば，全く伴ない遺跡も存在する。また，国分寺市No37で「握斧」の存在が指摘されている。

４．神奈川県の様相

研究の経過　神奈川県の中央部に位置する相模野台地は，周囲を大磯丘陵・丹沢山地・多摩丘陵そして相模湾に囲まれた台地で，極めて閉鎖的な印象を受ける。ローム堆積が格段に良好な地域である同台地では，旧石器研究が早くから花開いた地域である。特にAT降灰以降の豊富な層位的出土事例の多さは，他の追随を許さず，関東のみならず日本全国の旧石器時代研究の指標となっている。細石刃石器群の研究はその筆頭で，L1H・B0・L1Sから層位的に検出される石器群の変遷については多くの研究者によって詳細な検討がなされている。

相模野台地における旧石器時代編年をまとめた矢島國雄・鈴木次郎両氏によって，相模野Ⅴ期に大別された細石刃石器群は（矢島・鈴木1976），その後の資料増加に伴い，諏訪間順氏によって編まれた編年案では段階Ⅸ～ＸⅠにあてられた（諏訪間1988）。

研究史については詳しく述べることはできないが，主要文献を掲載し、必要があれば以下の各項で随時，触れていきたいと思う。

遺跡の分布　神奈川県は相模川を中心にして西側に丹沢・箱根山地を控え，その山麓部に台地・丘陵が分布し，東側には相模野台地・多摩丘陵が広がる。大半の遺跡が相模野台地を流れる中小河川の流域に分布し，境川・引地川・目久尻川の流域が著名である。相模野台地を離れると急に遺跡数が減少するが，近年の相模川以西における開発による行政発掘調査で，新たな石器群が追加された。具体的には，宮ヶ瀬ダム関連のサザランケ遺跡，第一東海自動車道関連で三ノ下・下谷戸（No14），上粕屋・川上（No５）などである。また，眼下に太平洋を望む三浦半島長井台地でも打木原遺跡で質量共に充実した内容を持つ石器群が検出された。つまり，神奈川県の細石刃石器群は相模野台地を中心として，

三浦半島・多摩丘陵・相模野台地・県北山間部・丹沢南東山麓・箱根東山麓に広がっている。この成果は神奈川県立埋蔵文化財センターの旧石器時代研究プロジェクトチームによってまとめられた「旧石器時代終末における石器群の諸問題」に詳しい。

石器群の様相　充実したローム層の堆積を利用した段階編年が堤隆氏・砂田佳弘氏・諏訪間順氏らによって提出されている。ここでは報告書に記載された層名をもって以下にその概要を述べていきたい。

L1H上位：代官山Ⅲに代表される「代官山型」細石刃石核が特徴的に組成する。代官山Ⅲ・吉岡B区・打木原でまとまった資料が得られている。細石刃石器生産関係には黒曜石が専ら利用され，原産地分析によると伊豆・箱根系の黒曜石を主に用いている。全体的に器種構成は零細であるが，各遺跡で尖頭器や調整剥片が検出されるなど，尖頭器石器群との供伴が確実となりつつある。柏ヶ谷長ヲサⅣ・かしわ台駅前Ⅱでも同層準から黒曜石を用いた「野辺山型」の特徴を有する細石刃石核をもつ石器群が検出されている。柏ヶ谷長ヲサⅣでは蛍光X線による黒曜石の原産地分析が行われ，神津島産と分析された。また同遺跡には，削器・楔形石器をはじめ，豊富な礫器状石核（礫器）と大型剥片類が組成し，配石遺構をともなっている。細石刃剥離技術・石器組成・黒曜石原産地・配石遺構等から上記３遺跡との違いは明らかで，砂田氏による段階編年においてもこれら２遺跡は分離され，次段階に位置づけられている。また，近年の資料増加に伴い充実したL1H出土の細石刃を分析した深沢幸恵氏によっても，両石器群の違いが明確にされ，各遺跡の特徴が示されている（深沢1999）。

そのほかに同層準からは，吉岡A区・長堀南Ⅱ・慶応SFCⅠで小規模なブロックが検出されている。

B0下位：B0下位では上野第１Ⅲ－Ⅰ・Ⅲ群，上和田城山Ⅱ－４区，上草柳第３中央Ⅰ，宮ヶ瀬サザランケⅡｂで大きなブロックが検出されている。細石刃関連には黒曜石が専ら利用され，上野第１Ⅲ－Ⅰ群・上和田城山・サザランケの分析では，大半が信州系で占められる。細石刃石核は「野辺山型」で、石器組成は削器・掻器・楔形石器などが伴うが，上和田城山遺跡では「スクレイパー」が多数（18点）出土している。また上和田城山Ⅱ－４区では尖頭器を主体とするブロックが隣接するが，層位的に細石刃ブロックよりもやや下位に分布域が集中することが確認され，黒曜石原産地別の分布状況もこれを指示するとして，それらは供伴しないものと理解された。さらに本段階で一般的となる礫器状石核（礫器）と同石器から剥離された大型剥片が多量に出土する遺跡があり（上野第１Ⅲ－Ⅲ群・栗原中丸），一方で，細石刃・細石刃石核などを伴わないが，礫器状石核（礫器）が集中して本層準から検出された遺跡も注意される（宮ヶ瀬大野原Ⅱ・谷津山神）。同石器には，硬質細粒・中粒凝灰岩，玄武岩，砂岩などが用いられている。

上記の遺跡以外に同層準からは，上野第３Ⅰ・上和田城山Ⅱ１区１ブロック・杉久保蓮谷などの遺跡で小規模なブロックが検出されている。杉久保蓮谷では29点の黒曜石製細石刃が検出されたが，分析によると大半が柏峠産で，報告者は前段階（L1H上部）の細石刃石器群との関連を指摘している。

石器ブロック以外の遺構は礫群（上野第１Ⅲ－１群・上草柳第３中央Ⅰ）・配石（栗原中丸・宮ヶ瀬大野原）が検出されている。上和田城山Ⅱ４区からは炭化物集中・炉址が１基検出された。

B0中位：B0中位では，上野第１Ⅲ－Ⅱ群，上草柳第１－Ⅰ，かしわ台駅前Ⅰ，中村Ⅱ，草柳中村Ⅰ，三ノ宮・下谷戸Ⅲでまとまった資料が得られている。細石刃生産関係は，黒曜石を主体としながら，チャート・頁岩・凝灰岩・ガラス質黒色安山岩等の非黒曜石が入ってくる。ガラス質黒色安山岩は南関東を見渡しても，細石刃生産には用いられることのほとんどない石材であるが，三ノ宮・下谷戸Ⅲで利用されている。黒曜石は上野第１Ⅲ－Ⅱ群，上草柳第１－Ⅰ，三ノ宮・下谷戸Ⅲの分析で神津島産が大半を占め，一部，伊豆箱根系・信州系・高原山が認められた。ただし，草柳中村Ⅰの黒曜石は蓼科系を主体として信州系で占められる点が明らかとなり，従来から言われているB0中部から登場する神津島産の利用とはちょっと異なる分析結果となっている。細石刃石核の形態は「野辺山型」を主体としながら，上草柳第１－Ⅰで凝灰岩・頁岩などを用いたいわゆる「ホロカ型」の細石刃石核素材が検出されているものの，その後，同様の形態を呈した細石刃石核が発見されていないのが気になるところである。この時期の「野辺山型」細石刃石核は，黒曜石が信州系産から神津島産へシフトしたり，非黒曜石を用いたりして，素材となる原石形態が変わったためであろうか，細石刃石核の形態に豊富なバラエティーが見られる。最終形態はもちろんのこと，打面調整が施されなかったり，

作業面の設定位置や石核調整の方法等に一定の技術を見いだすと言うよりも，素材に合わせた細石刃剥離技術を駆使して細石刃を生産しているといった印象である。中村Ⅱでは非黒曜石を用いた細石刃石核が主体で，１点のみ黒曜石製があるが，その形態は使い切った「残核」状を呈した小型のものである。器種組成は削器類が主体で，掻器・彫器・錐・楔形石器・礫器等が伴う。礫器は概して低調であり，削器は大型のものが目立つ。一方で，三ノ宮・下谷戸Ⅲでは，楔形石器・礫器・敲石・台石が多数検出され，細石刃石核にも両極剥離が利用されている点で注目される。

上記の遺跡以外に同層準からは，田名塩田原Ⅰ，上野第５Ⅱ，相ノ原Ⅴ地点（２次調査），栗原中丸Ⅲ，栗原中谷Ⅰ，上粕屋・三本松遺跡で小規模なブロックが検出されている。田名塩田原Ⅰでは「船野型」細石刃石核が報告されている。

石器ブロック以外の遺構については，上記の12遺跡中７遺跡で礫群が１～２か所で検出されている。

B0上位：B0上位では，風間Ⅰｂ，台山Ⅱ，報恩寺，代官山Ⅱ，上粕屋・川上でまとまった資料が得られている。細石刃生産に，黒曜石を主体的に用いる遺跡（風間Ⅰｂ，台山Ⅱ，代官山Ⅱ）と，黒曜石と非黒曜石が同じような比率で利用される遺跡（報恩寺，上粕屋・川上）に分かれるようである。黒曜石は信州系産・柏峠産・神津島産などが利用されている。非黒曜石は報恩寺で「珪岩」，上粕屋・川上でガラス質流紋岩・珪質頁岩が見られる。細石刃生産以外の石器には凝灰岩・安山岩・砂岩・ホルンフェルス・チャートが利用される。細石刃石核は「野辺山型」が主体であるには違いないが，細かくは利用石材状況が異なる各遺跡で残核形態に違いが見られる。信州＋柏峠産の黒曜石を利用する台山Ⅱでは斉一性とれた残核形態が見られるのに対して，神津産とされる代官山Ⅱにはそのような特徴は見られない。また，非黒曜石がはいる報恩寺や上粕屋・川上では，豊富なバラエティを見せ，ゴロゴロした統一性のない残核となっている。さらに，上粕屋・川上では黒曜石製の「ホロカ型」細石刃石核の素材とされる資料が報告されている。器種組成は，B0各時期とあまり変わらないものの，報恩寺で削器・掻器が卓越し，多量の礫器状石核（礫器）と同石器から剥離された剥片が検出され，多くの接合資料が確認されている。礫器状石核（礫器）は，通常１～３点程度組成するものであるが，時折このように多く組成する遺跡が存在する。

上記以外に同層準からは，下九沢山谷Ⅰ，長堀北Ⅲ，深見諏訪山Ⅱ，上和田城山Ⅱ－３区で小規模なブロックが検出されている。

石器ブロック以外の遺構については，礫群が風間Ⅰｂ，長堀北Ⅲ，代官山Ⅱ，配石が深見諏訪山Ⅱ，掘り込み遺構が上和田城山Ⅱ－５区で検出されている。

B0：B0から検出された遺跡ではあるが，分布の中心がB0のどの辺りになるのか記載されていない遺跡のなかで，質量共に充実した遺跡がある。田名塩田B地区－Ⅱと用田鳥居前Ⅰで，両遺跡からは黒曜石を主体とした「野辺山型」細石刃石核がみられる。用田鳥居前Ⅰの黒曜石は神津島と伊豆箱根系で占められ極僅かに小深沢産を伴う。用田鳥居前Ⅰが細石刃生産関連石器しか検出されていないのに対して，田名塩田B地区Ⅱでは大型削器・錐・楔形石器・礫器状石核（礫器）が伴い、比較的充実している。特に黒曜石製の楔形石器は多量に検出され，他の細石刃石器群には見られない特異な存在である。

また，同層準からは南鍛冶山507で「ホロカ型」細石刃石核（凝灰質頁岩）が，吉岡B区で削片剥離により打面が形成された削片系の細石刃石核（珪質頁岩）が検出されている。

L1S～漸移層：黒曜石を主体とした「野辺山型」細石刃石核を特徴とした石器群（栗原中丸Ⅱ・本入こざっ原Ⅱ），非黒曜石が主体を占める「野辺山型」細石刃石核を特徴とした石器群（上和田城山Ⅰ，相模野№149L1S下部），「ホロカ型」細石刃石核を特徴とした石器群（下鶴間長堀Ⅰａ）に加えて，削片系細石刃石核を特徴とし，土器を伴う石器群（上野第１Ⅱ・勝坂45次）と伴わない石器群（長堀北Ⅱ）に大きく分かれよう。「野辺山型」「ホロカ型」を特徴とする遺跡は概してL1S下部から検出され，削片系細石刃石核はL1S中部・上部から検出される。栗原中丸Ⅱには多量の礫器状石核（礫器）が伴う。上和田城山Ⅰの細石刃石核は，多くの接合資料に恵まれ製作工程が把握できる良好な資料である。細石刃石核は概して大型で細石刃剥離があまり進行していないものが多い。石材は硬質細粒凝灰岩が主として用いられ，10～20cm近くある原石を搬入し打面転移しながらブロック状の素材を得ている。相模野№149では黒曜石が全く用いられず，凝灰質頁岩・チャート・黒色頁岩などが利用され，細石刃石核は裏面への横位からの調整や背縁に対

する稜調整が顕著で特徴的である。下鶴間長堀Ⅰａでは，凝灰岩・珪質凝灰岩などの在地系の石材を用いた「ホロカ」型の細石刃石核が多量に検出された。豊富な大型削器類も特徴的である。削片系細石刃石器群にはやはり在地系の非黒曜石が利用され，尖頭器石器群を主体とする石器群に客体的に伴うといったあり方である。尖頭器石器群に細石刃が伴う例は，寺尾Ⅰ・用田鳥居前（草創期）にも見られるが，両遺跡とも明確な細石刃石核は出土していない。

削片系の細石刃石核は，千葉県・埼玉県では硬質頁岩製の荒屋型彫刻刀形石器を伴ういわゆる「荒屋系細石刃石器群」とされるものであるが，本県におけるあり方とは大きく異なる。

本段階については土器供伴の絡みもあり，多くの研究者によって土器の登場・石器製作の系統等について活発な議論が展開されている。近年は，細石刃石器群が伴うような同段階の新たな資料が検出されていないことから，補正年代等の問題の方が大きく取り上げられ，その後の展開にあまり変化がないように思われる。

以上、微に入りすぎた感はあるが，L1H上位～L1Sに至る神奈川県の細石刃石器群について、その概要を述べてきた。全体を通して以下のような流れで捉えられている。

細石刃石核は「代官山型」→「野辺山型」→「削片系」という変遷の中に，「ホロカ」型が「野辺山型」の後半以降に登場する。利用石材の点では黒曜石→黒曜石・非黒曜石（在地系石材）→非黒曜石（在地系石材）という大きな流れがあり，黒曜石の原産地という視点からは，伊豆箱根系・神津島→信州系→神津島→神津島・伊豆箱根・信州→神津島という変遷を経ていることが理解されるものの、あくまで現状でそのような傾向があるという指摘にとどめておきたい。細石刃の大きさは小→大へ，石材・細石刃石核の変遷に沿って，剥がされる細石刃の大きさも変化していることが指摘されている。

ここ10年で、L1H・B0段階の野辺山型（代官山型を含む）細石刃石核をもつ石器群は資料増加が著しく、段階毎の詳細な検討が可能となってきた（仲田2003）。一方で、L1S段階の石器群は10年前からほとんど変わらぬ「顔ぶれ」である。特に、ホロカ型を特徴とする石器群や土器出現期前後に登場する削片系の細石刃石核を特徴とする新たな石器群の発見が待たれる。神奈川県は、関東近県で最も黒曜石原産地分析が進んでいる地域である。望月明彦氏・堤隆氏、かながわ考古学財団の功績によるものであるが（望月・堤1997）、近年は神奈川県の行政発掘調査の発掘報告書には、当たり前のように黒曜石の原産地分析の報告が掲載されている。段階毎の変遷の大きな流れは上記の通りであるが、中にはその流れに乗らない遺跡も当然存在する。それらについては、無理に段階変遷に押し込めたりするのではなく、慎重に検討する態度が望まれる。

5．南関東地域の様相と研究課題

細石刃生産は、「野辺山型（代官山型を含む）」「ホロカ型」「削片系」の３つの技術類型に分離される。

野辺山型は広く南関東地域にひろがり、最古段階から登場し長く継続する技術類型であるが、相模野台地における変遷から、信州系黒曜石の代替石材としての信州系以外の黒曜石や非黒曜石利用が顕在化する状況が読みとれようか。ただし、相模野台地L1H上部の伊豆・箱根産の黒曜石を用いた代官山型（吉岡B・打木原・代官山）、神津島産を特徴とする野辺山型（柏ヶ谷長ヲサ）に見られる、最古段階の細石刃石器群の石材利用についての解釈が求められるところである。ナイフ形石器・尖頭器との共伴関係については古くから指摘されてきた問題点ではあるが、その解決についての糸口はなかなか見えない。各遺跡での検討に委ねるしかないが、器種認定、垂直・平面分布、母岩分類（黒曜石の原産地分析）、製作痕跡等が問題となる。ただ、L1H段階の吉岡B・打木原では尖頭器・調整剥片との共伴関係が確認されたとの報告がある。石器群は大きく３つの構成（「細石刃剥離」「一般的な剥片剥離」「礫器状石核による剥片剥離」）を共時的に保有し、各遺跡の石器群の構造は選択された構成要素によって表現されたものと理解される。仲田氏が相模野台地で分析を行ったように、３つの技術構成のあり方を南関東地域全体で検討することも必要だろう。

ホロカ型は関東周縁の山間部に近接する地域に分布し、相模野台地ではB0中位以降に登場する。分布の偏在性は明らかで、下総台地では今のところ見つかっていない。在地系の石材が保証される地域で発達した技術類型であった。つ

まり、橋本氏が指摘するように信州系黒曜石から在地系の石材へと移行する際に石材獲得が保証されなかった地域では、非黒曜石を用いた野辺山型の技術類型が継続して残り、豊富な石材に保証された一部の地域にのみホロカ型が発達したと解釈されるのである(橋本1998)。信州系黒曜石が如何に望まれた石材であったのかそれを証明することは難しいが、まずそれを示すことも今後の課題である。

削片系は、遠く日本海側沿岸に産出する硬質頁岩を用いた荒屋型彫刻刀形石器を伴う荒屋系細石刃石器群と、在地系石材を用い、尖頭器や時には土器と共伴する石器群に分かれる。前者は「古利根川ライン」より東側に分布し(埼玉・千葉県に限定)、極めて特殊な分布状況ではあるが、下総台地での分布は野辺山型細石刃石核を特徴とする石器群の分布範囲に収まっている点では普遍的な遺跡立地といえよう。石材・細石刃剥離技術・石器組成ともに他の細石刃石器群と一線を画し、排他的な特徴を有する同石器群の位置づけは、削片系という同じ技術類型を有する相模野台地の石器群との対比から土器出現期もしくはその直前段階に併行すると考えられるものの、遺跡分布・石材・石器組成に大きな隔たりがあることは否めない。

ここまで見てきたように、南関東地域の中で神奈川県(特に相模野台地)が、いかに特殊な地域であるのか理解できた。同地域では層位的出土事例による変遷が確立されたが、周辺の南関東地域と特にその違いが明瞭となるのはホロカ型・削片系細石刃石核が登場するL1S段階である。これはこの時期に、南関東地域において地域性が顕在化した時期とも捉えられ、旧石器～縄文時代への移行期を巡る大きな変動の中で石器群の変遷をとらえることが必要となる。

紙数・時間を大幅にオーバーしてしまった。抽出すべき課題は各都県の様相の中で、読みとっていただきたい。

遺跡一覧表・分布図・石器実測図について

まず最初にお断りしておきたいのは，この一覧表はあくまで現時点で把握できたもののみを取り上げた集成途上のものである，という点である。文献未入手・文献名不明・遺跡分布図が不明のもの等多くの点で不備がある点は否めない。本来であれば，資料的な検討を十分にすべきところではあるが，それは叶わなかった。よって資料収集の基準は，現在までに刊行された論文・報告書等の著作物中に，「細石刃」・「細石刃石核」，もしくはその関連遺物についての記載されているものを対象としている。

この一覧はデジタルデータとして配布されるということであるので，それを下敷きに随時変更追加を行い，より正確な一覧表を作成するためのものとして利用していただければと思う。

なお文献の検索に当たっては，橋本勝雄氏にご協力いただいた。記して感謝申し上げる。

主要遺跡の石器実測図は，縮尺２分の１を基本とし，礫器・敲石等の大型石器については３分の１に統一した。

参考・引用文献(報告書を除く)

橋本勝雄　1998「〈研究ノート〉関東細石器考」『千葉県立中央博物館研究報告』5(2)

千葉県

篠原　正　1967「富里村七栄でみつかった細石器」『成田史談』13　成田史談会

田村　隆・橋本勝雄　1984　『房総考古学ライブラリー１　先土器時代』　(財)千葉県文化財センター

橋本勝雄　1988「〈研究ノート〉千葉県佐倉市木戸場遺跡Ａ地点「第１・第２ユニット」から」『研究連絡誌』21号　(財)千葉県文化財センター

田村　隆　1989「第６章　収束」『佐倉市南志津地区埋蔵文化財発掘調査報告書１』　(財)千葉県文化財センター

宇田川浩一　1992「研究ノート　千葉県細石刃文化期細分試案」『千葉県の歴史』44　千葉県史料研究財団

森本和男　1992「コンピューターによる細石器遺跡の分析」研究連絡誌34　(財)千葉県文化財センター

島立桂・永塚俊司　1997「千葉県における北方系細石刃石器群」『第４回　石器文化研究交流会－発表要旨－』　石器文化研究会

田村　隆　2000「木苅峠再訪－房総半島小型石槍の変遷－」『千葉県史研究』８　千葉県史料研究財団

田村　隆　2003「林小原子台再訪－東部関東における長者久保-神子柴石器群－」『考古学』Ⅰ　安斎正人編

埼玉県

佐藤達夫　1954「秩父吉丸の石器」『考古学雑誌』第39巻第3・4号合併　日本考古学会

田中英司　1987「埼玉の先土器文化」『埼玉県の文化財』第27号　埼玉県文化財保護協会

水村孝行　1988「埼玉の細石刃文化に関する覚書」『埼玉県立博物館　紀要』15　埼玉県立博物館

堤　　隆　1997「荒屋型彫刻刀形石器の機能推定－埼玉県白草遺跡の石器使用痕分析から－」『旧石器考古学』54　旧石器文化談話会

仲田大人　2002「黒曜石の供給形態と移動領域－細石刃石器群の石材獲得パターン－」『埼玉考古』37　埼玉考古学会

東京都

芹沢長介　1954「関東及び中部地方に於ける無土器文化の終末と縄文文化発生に関する予察」『駿台史学』4

比田井民子　1985「先土器時代終末期における複合石器文化」『考古学雑誌』70-3　日本考古学会

大浦真紀子・阿部祥人　1986「細石刃の使用痕－観察と予察－」『史学』56-2

比田井民子　1987「（研究ノート）関東　細石器遺跡　再考」『東京都埋蔵文化財センター　研究論集Ⅴ』（財）東京都埋蔵文化財センター

米田　寛　2002「細石刃の使用と場の機能－東京都多摩蘭坂遺跡と埼玉県横田遺跡の事例報告－」『法政考古学』28

神奈川県

鈴木次郎・矢島國雄　1976「相模野台地における先土器時代研究の現状」『神奈川考古学』1

鈴木次郎　1983「細石器（関東地方）－関東・中部南部を中心に－」『季刊考古学』4

諏訪間順　1988　「相模野台地における石器群の変遷について－層位的出土例の検討による石器群の段階的把握－」『神奈川考古』24

砂田佳弘　1988「相模野の細石器－その発生と展開に向けて－」『神奈川考古』24

堤　　隆　1991「相模野細石刃文化における石器装備の構造」『大和市史研究』17

砂田佳弘　1993「相模野細石器の出現－器種変遷と石材流通－」『國學院大學考古学資料館紀要』11

砂田佳弘　1994「相模野細石器の変遷」『神奈川考古』30

旧石器（先土器・岩宿）時代研究プロジェクトチーム　1994　「旧石器時代終末における石器群の諸問題」『神奈川の考古学第４集　神奈川の考古学の諸問題』神奈川県立埋蔵文化財センター

堤　　隆　1994「細石刃はどのようにつかわれたか？」『大和市史研究』20

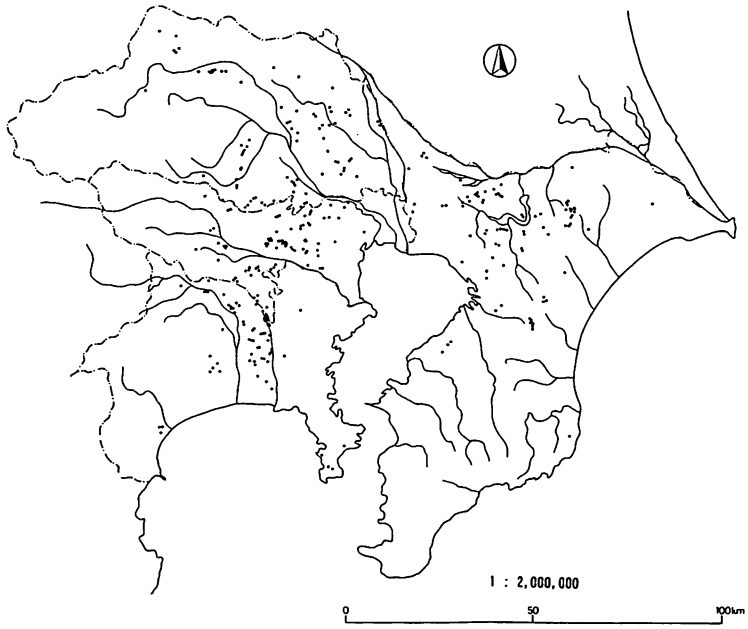
望月明彦・堤隆　1997「相模野台地における細石刃石器群の黒曜石利用に関する研究」『大和市史研究』23

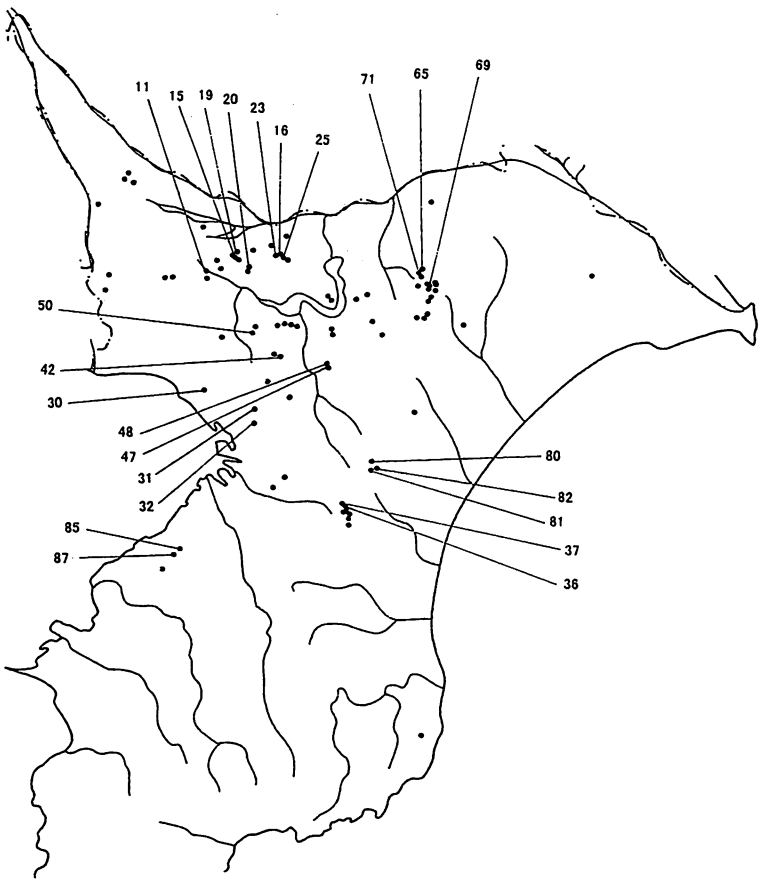
堤　　隆　1997「更新世最末期における礫器使用行動の意味－細石刃段階における礫器顕在化についての解釈－」　『長野県考古学会誌』82

深沢幸恵　1999「L1Hの細石器文化」『石器に学ぶ』2　石器に学ぶ会

仲田大人　2003「相模野細石刃石器群の技術構成」『考古学論叢　神奈川』11　神奈川考古学会

※　各遺跡の報告・参考文献は、膨大なため、印字をおこなわず、付録のデジタルデータ中に収録した。ご了承されたい。

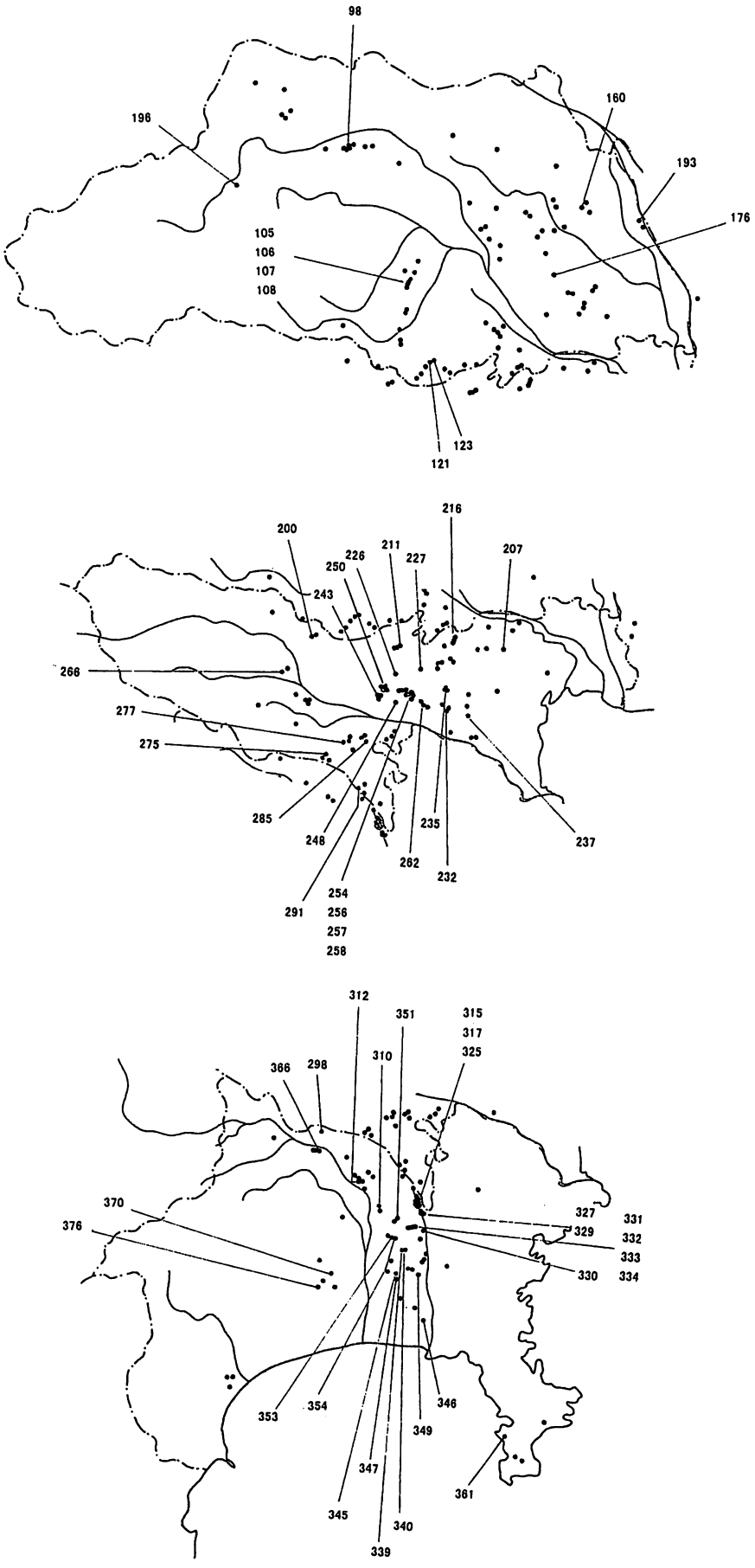




千葉県

11	復山谷遺跡
15	一本桜南遺跡
16	地国穴台遺跡
19	木苅峠遺跡
20	船尾白幡遺跡
23	石頭第2遺跡
25	向原遺跡
30	玄蕃所遺跡
31	草刈場北遺跡
32	荒久遺跡
36	南河原坂第3遺跡
37	北河原坂第2遺跡
42	大割遺跡
47	星谷津遺跡
48	木戸場遺跡A地点
50	大林遺跡
65	十余三稲荷峰(空港No.67)遺跡
69	東峰御幸畑西(空港No.61)遺跡
71	天神峰最上遺跡(空港No.64遺跡)遺跡
81	大網山田台No.4B遺跡
82	大網山田台No.8遺跡
85	清水川台遺跡
87	美生遺跡群 第6地点
80	稲荷谷遺跡

第1図 南関東地域の細石器出土遺跡(1)



埼玉県

98 白草遺跡
105 新山遺跡
106 向山遺跡
107 横田遺跡
108 柳戸遺跡
121 清橋遺跡
123 中砂遺跡
160 逆井遺跡
176 大和田高明遺跡
193 風早遺跡
196 吉丸遺跡

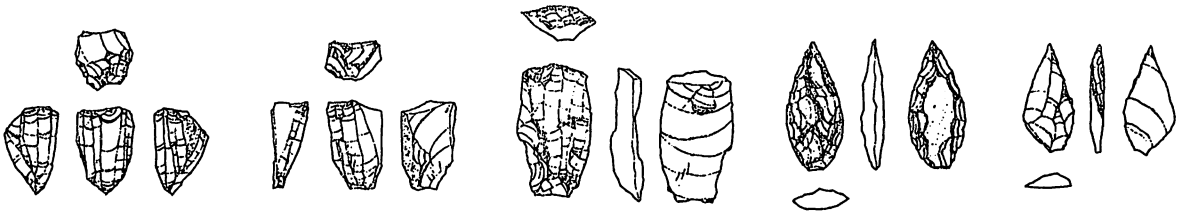
東京都

200 狭山B遺跡
207 根ノ上遺跡
211 下里本邑遺跡
216 もみじ山遺跡
226 鈴木遺跡
227 田無南町遺跡
232 第5中学校遺跡
235 御殿山1D遺跡
237 廻沢北遺跡
243 多摩間坂遺跡
248 天神町遺跡
250 国分寺No.37遺跡
254 はけうえ遺跡
256 西之台遺跡B地点
257 新橋遺跡
258 中山谷遺跡
262 出山遺跡
266 雨間地区遺跡群C地点
275 多摩ニュータウンNo.301遺跡
277 多摩ニュータウンNo.388遺跡
285 多摩ニュータウンNo.769遺跡
291 根岸山遺跡

神奈川県

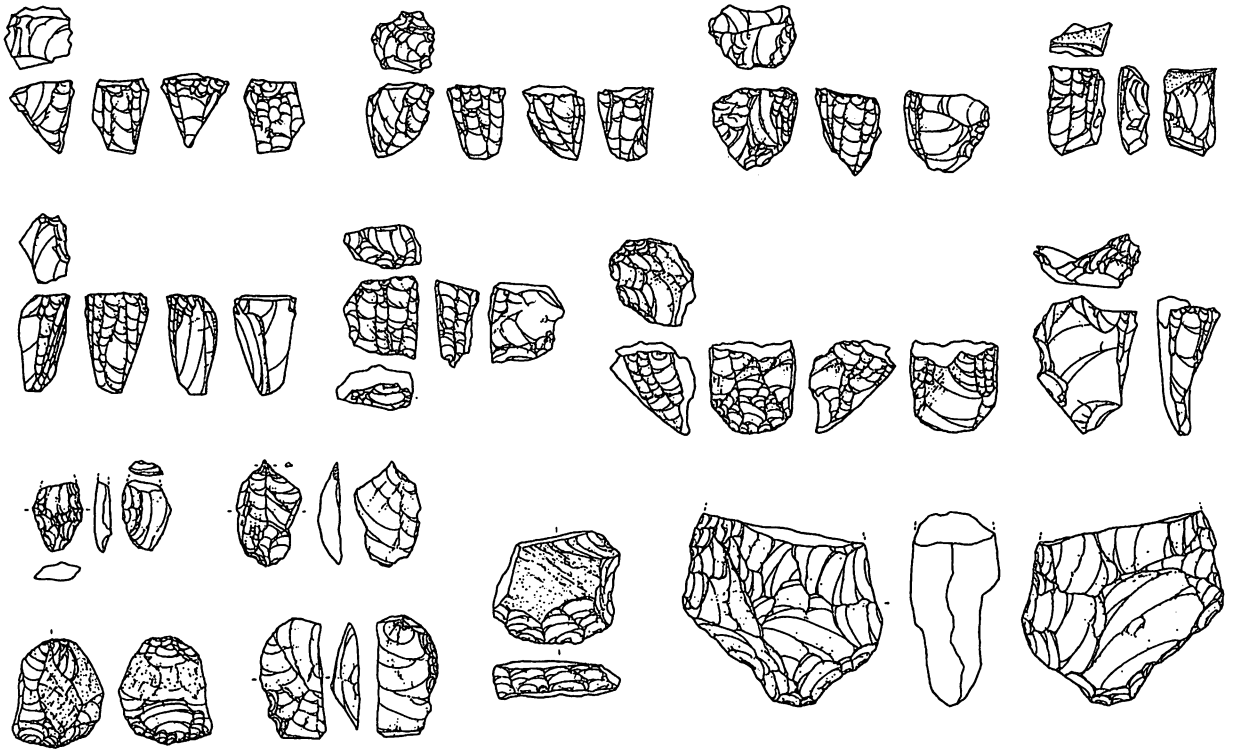
298 風間遺跡
310 勝坂遺跡
312 田名塩田遺跡群B地区
315 相模野No.149遺跡
317 上野第1遺跡
325 台山遺跡
327 長堀北遺跡
329 下鶴間長堀遺跡
330 深見諏訪山遺跡
331 上和田城山遺跡
332 上草柳第1遺跡
333 上草柳第3東遺跡
334 上草柳第3中央遺跡
339 報恩寺遺跡
340 寺尾遺跡
345 吉岡遺跡群B区
346 本入こざっ原遺跡
347 鳥居前遺跡
349 代官山遺跡
351 栗原中丸遺跡
353 柏ヶ谷長ヲサ遺跡
354 かしわ台駅前遺跡
361 打木原遺跡
366 宮ヶ瀬サザランケ遺跡
370 上柏屋・川上(No.5)遺跡
376 三ノ宮・下谷戸(No.14)遺跡

第2図　南関東地域の細石器出土遺跡(2)

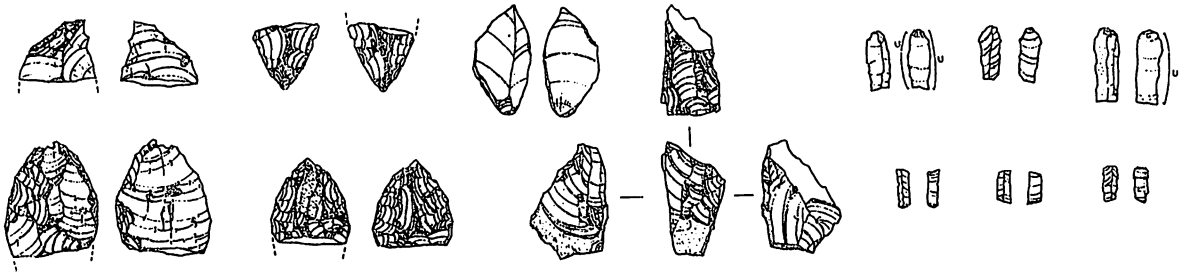


第3図　千葉県　星谷津遺跡

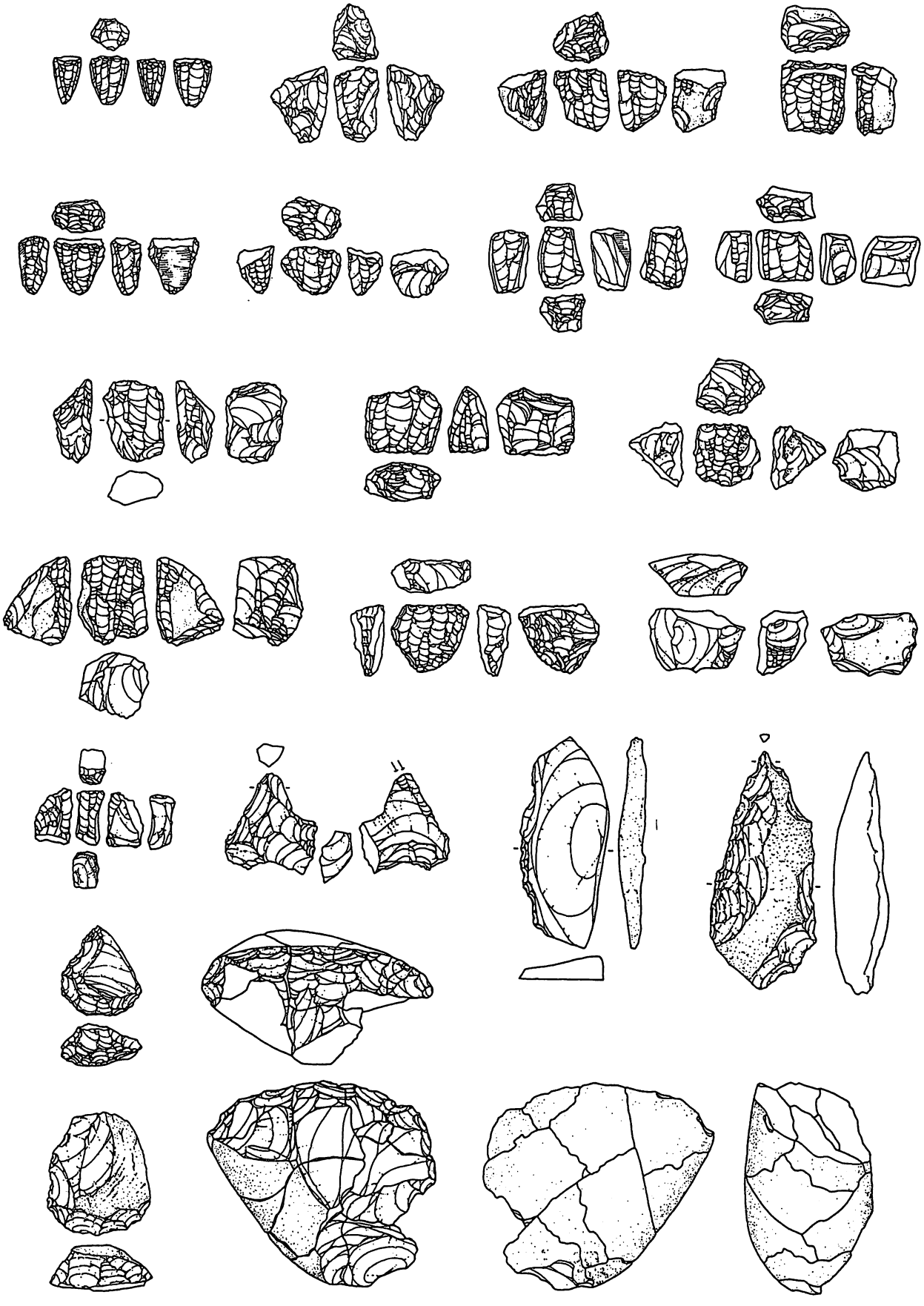
第4図　千葉県　船尾白幡遺跡



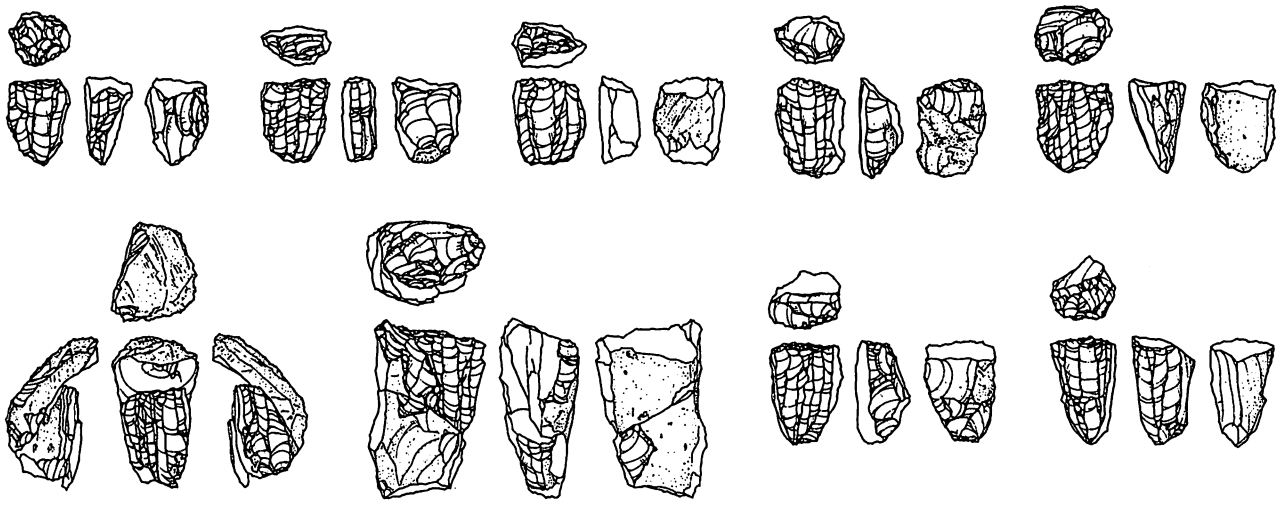
第5図　千葉県　大割遺跡



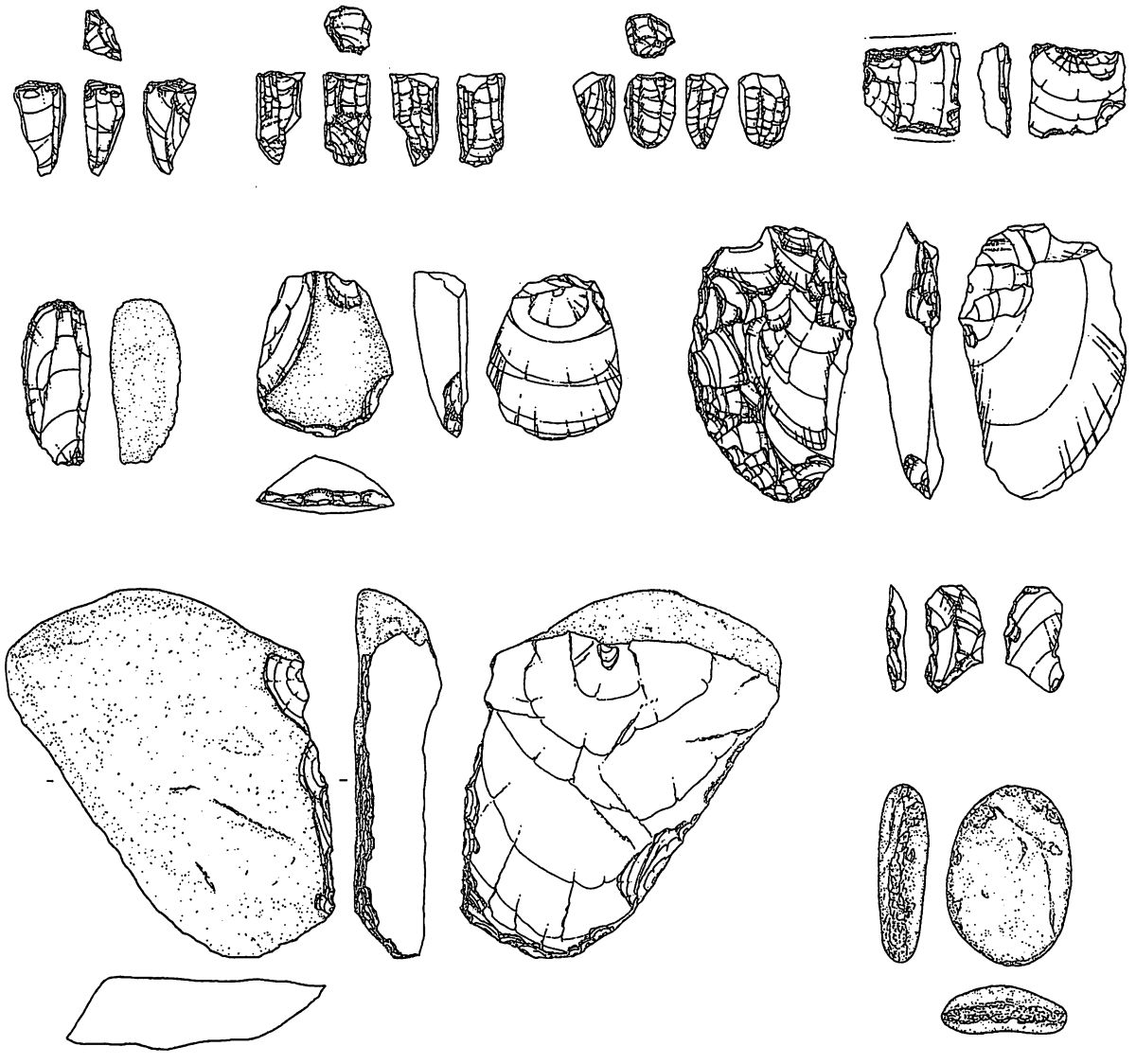
第6図　千葉県　木苅峠遺跡



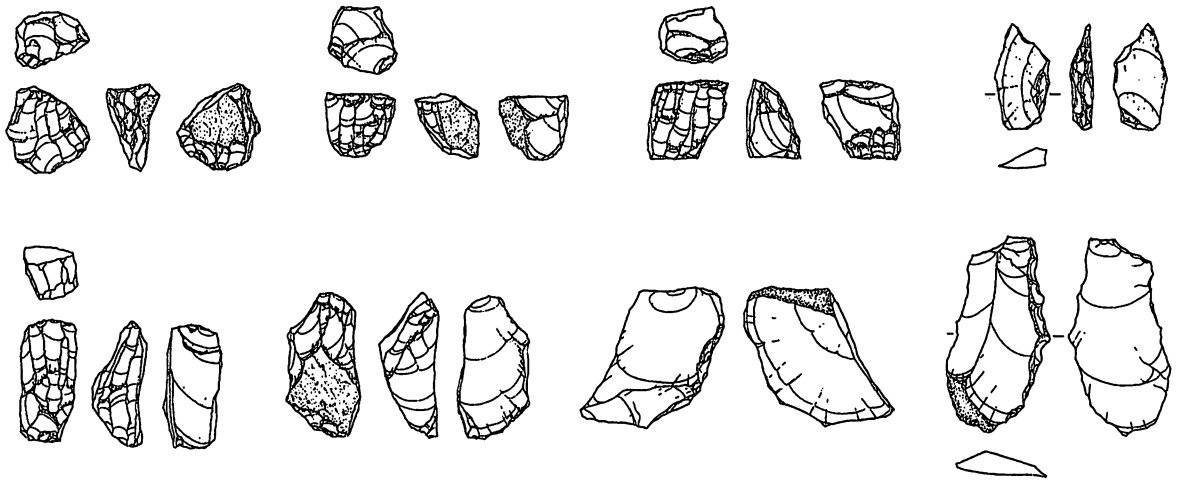
第7図　千葉県　大林遺跡



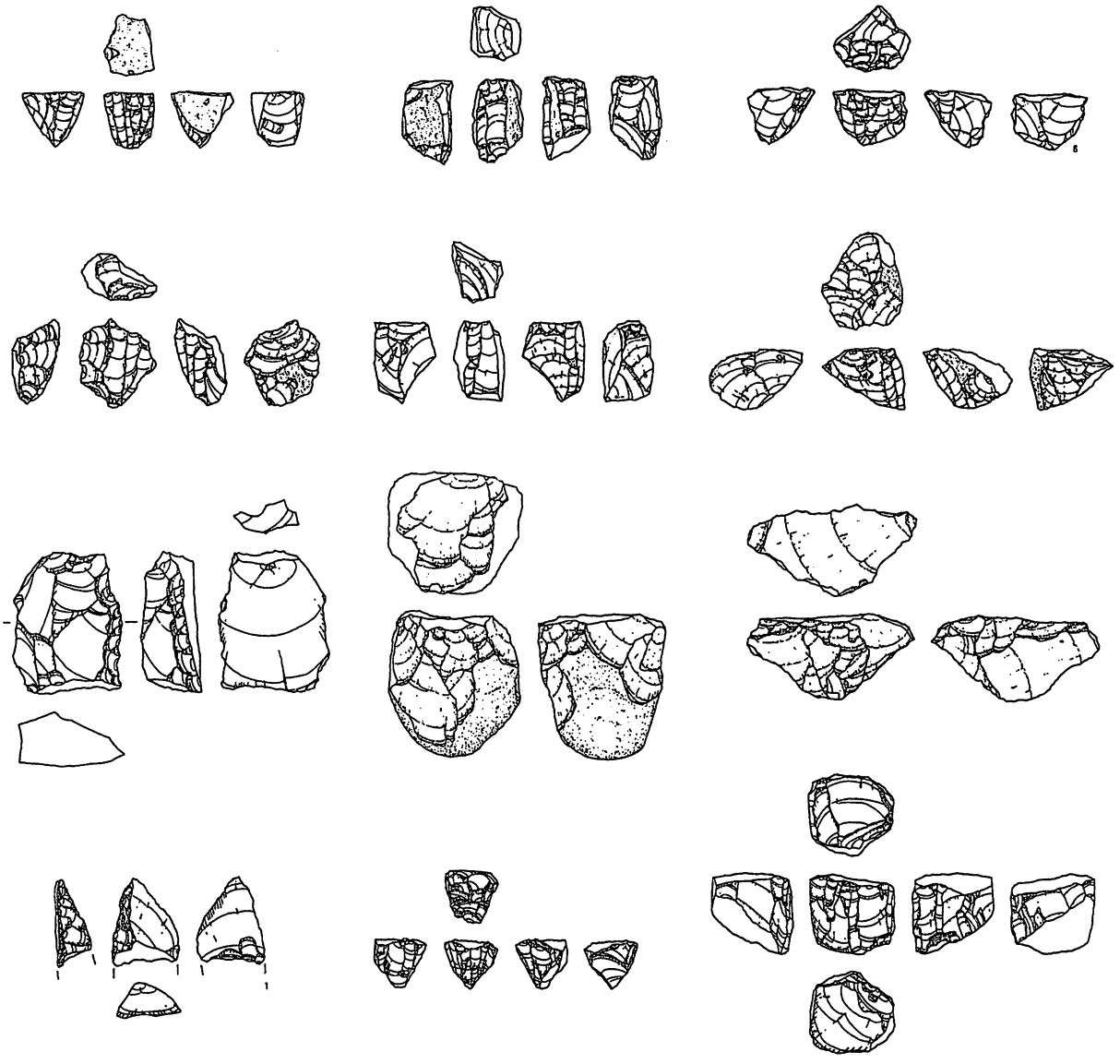
第8図　千葉県　十余三稲荷峰(空港No.67)遺跡



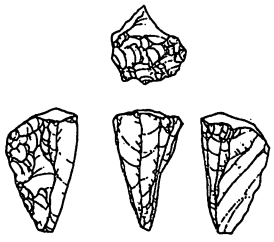
第9図　千葉県　南河原坂第3遺跡



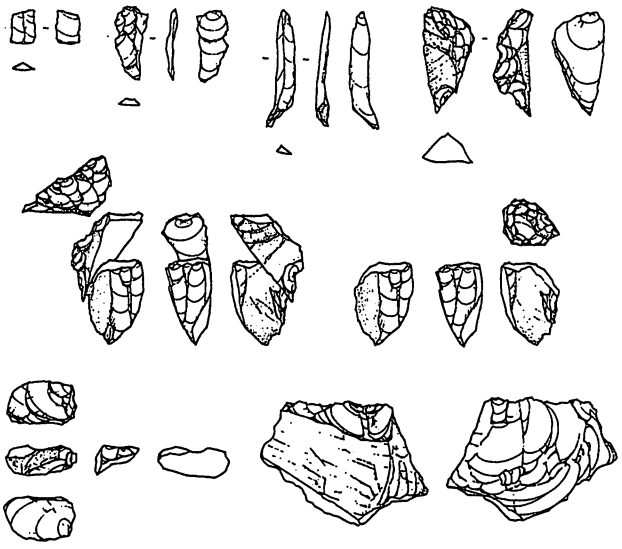
第10図　千葉県　石頭第2遺跡



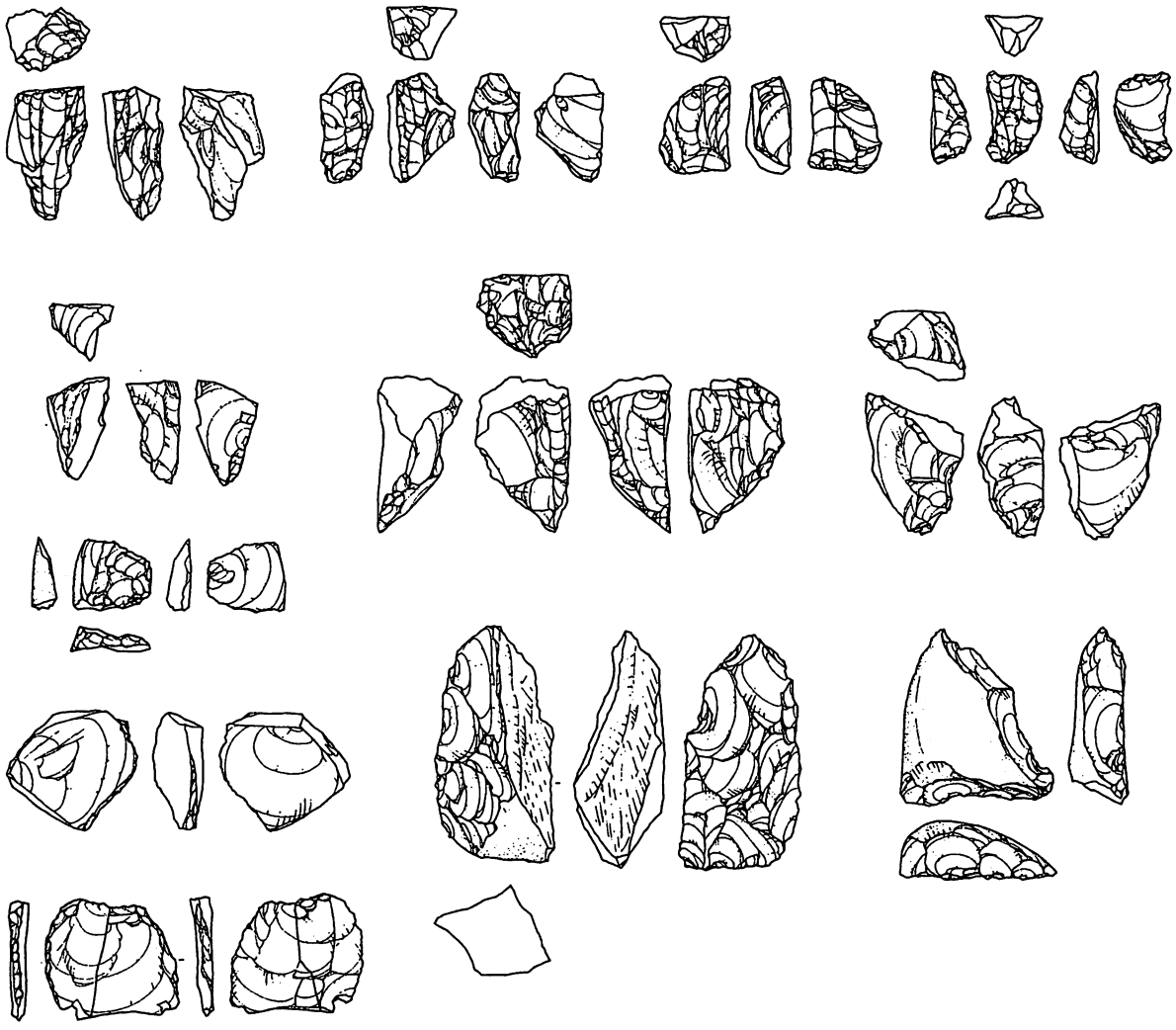
第11図　千葉県　一本桜南遺跡



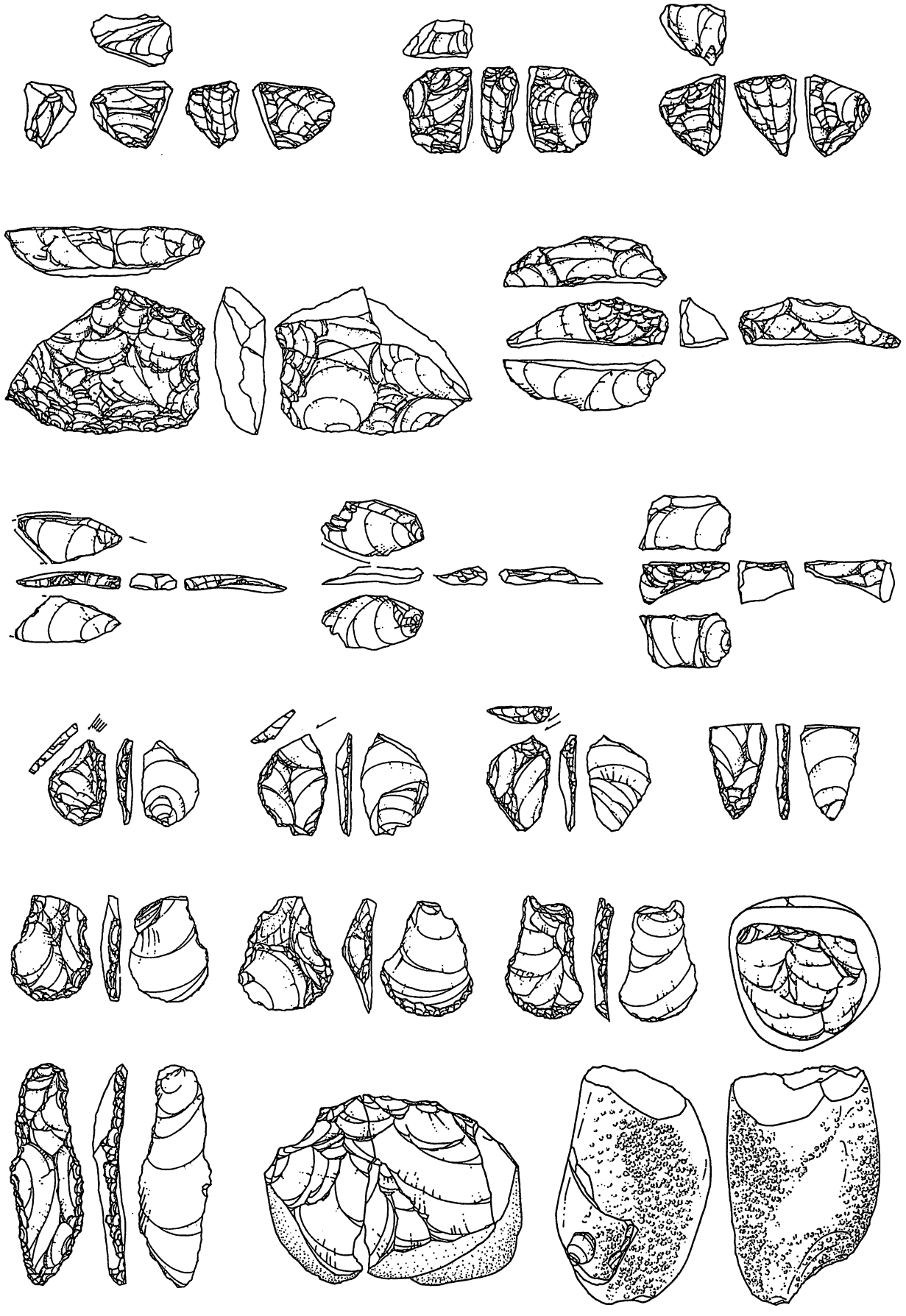
第12図　千葉県　清水川台遺跡



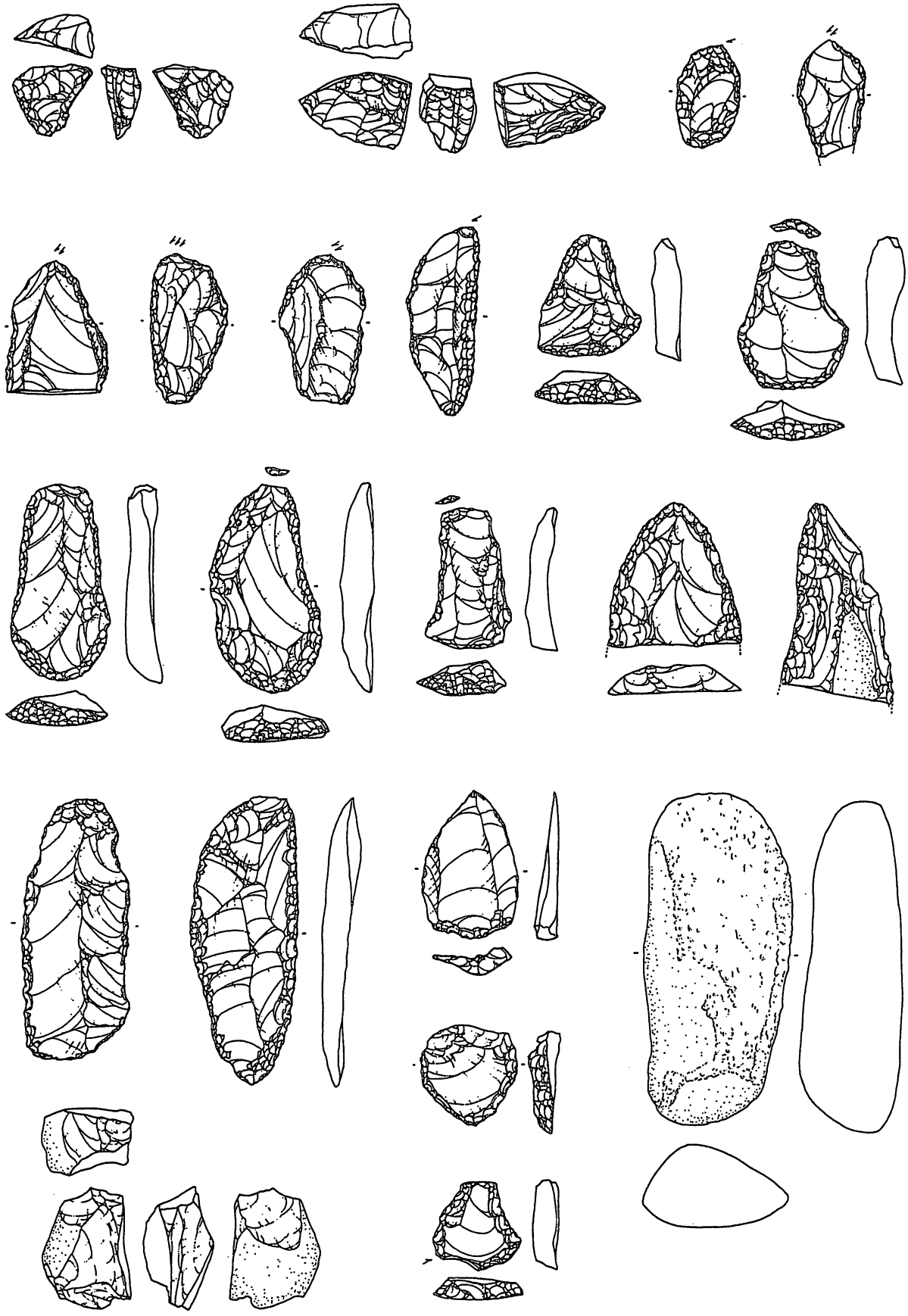
第13図　千葉県　美生遺跡群　第6地点



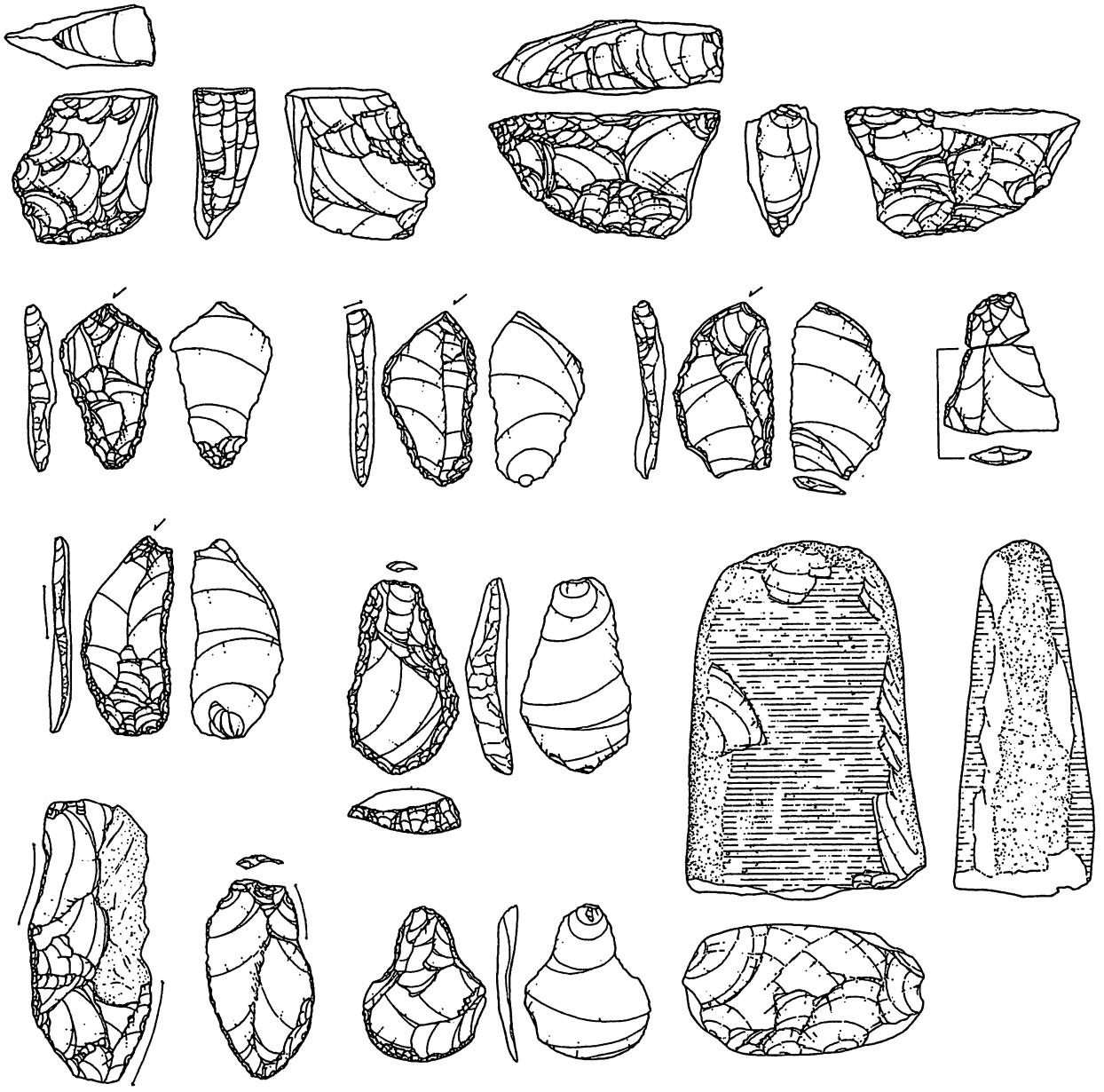
第14図　千葉県　天神峰最上遺跡（空港No.64遺跡）遺跡



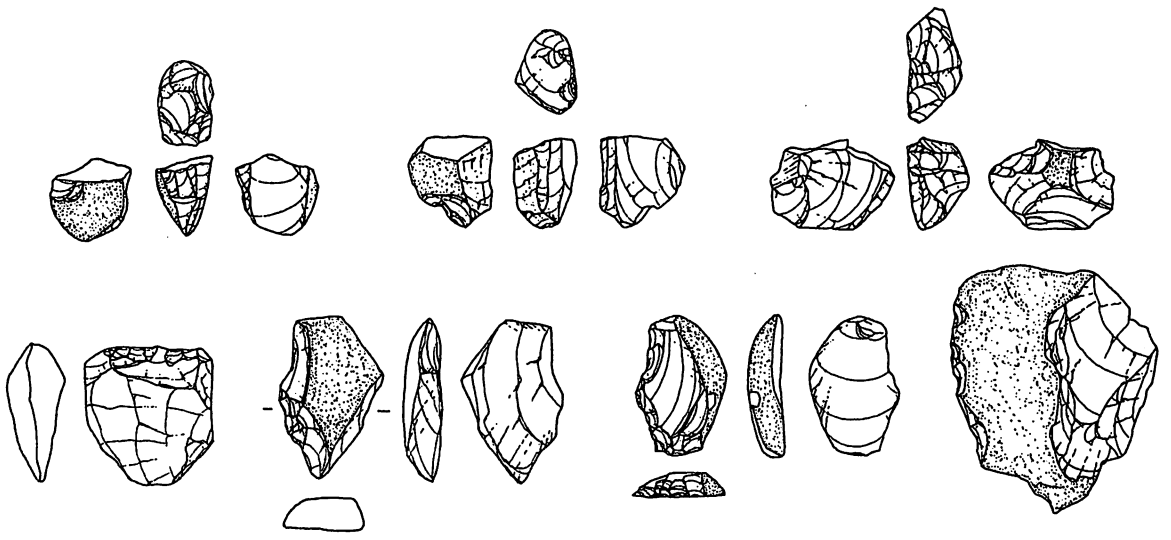
第15図　千葉県　東峰御幸畑西（空港No.61）遺跡



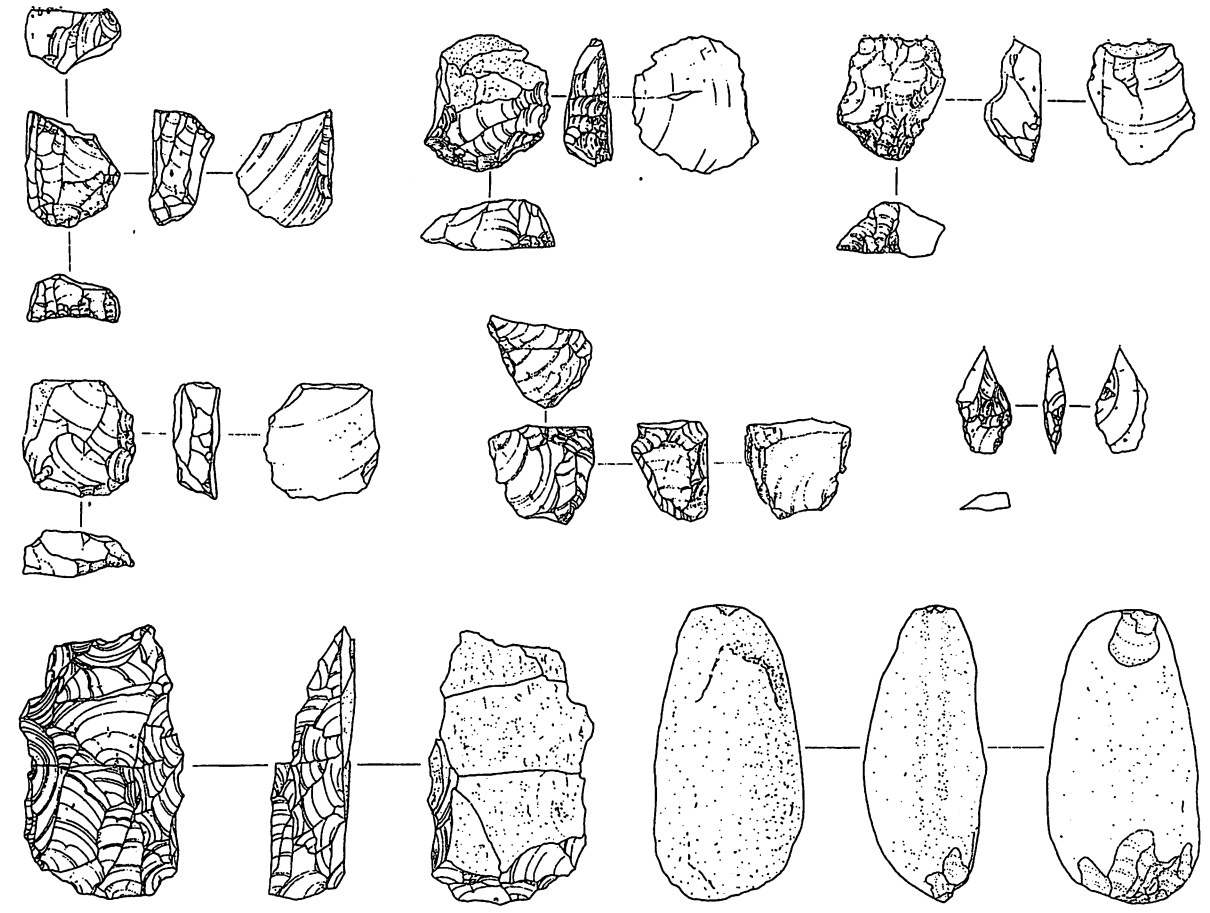
第16図　千葉県　木戸場遺跡A地点



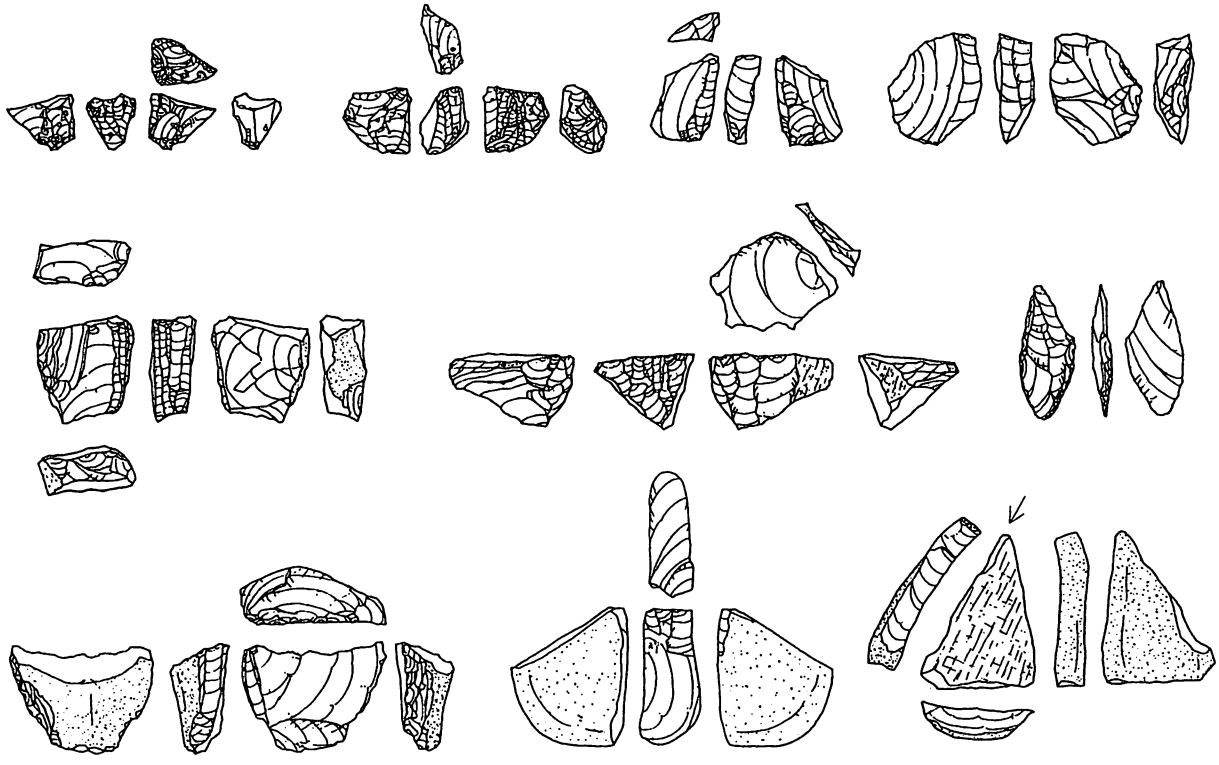
第17図　千葉県　大網山田台No.8遺跡



第18図　千葉県　大網山田台No.4B遺跡

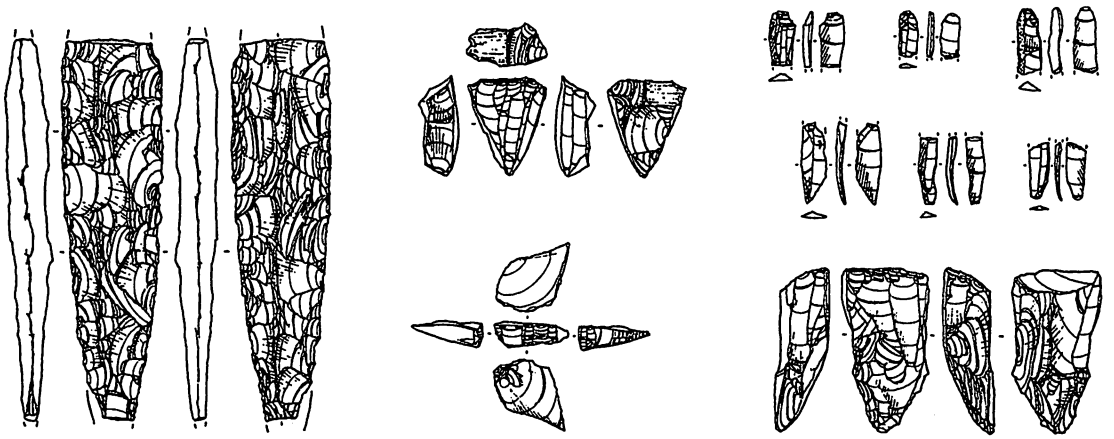


第19図　千葉県　地国穴台遺跡

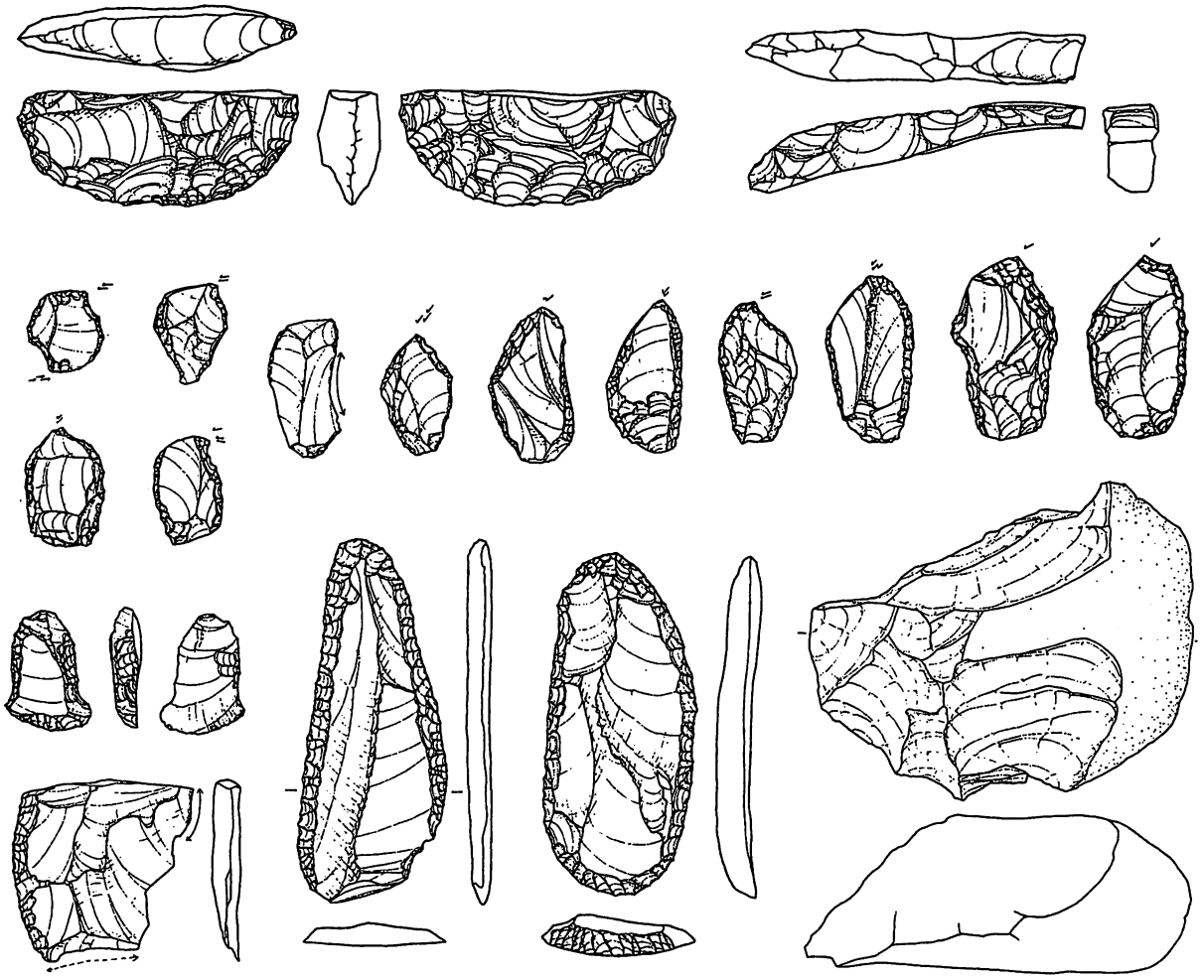


第20図　千葉県　稲荷谷遺跡

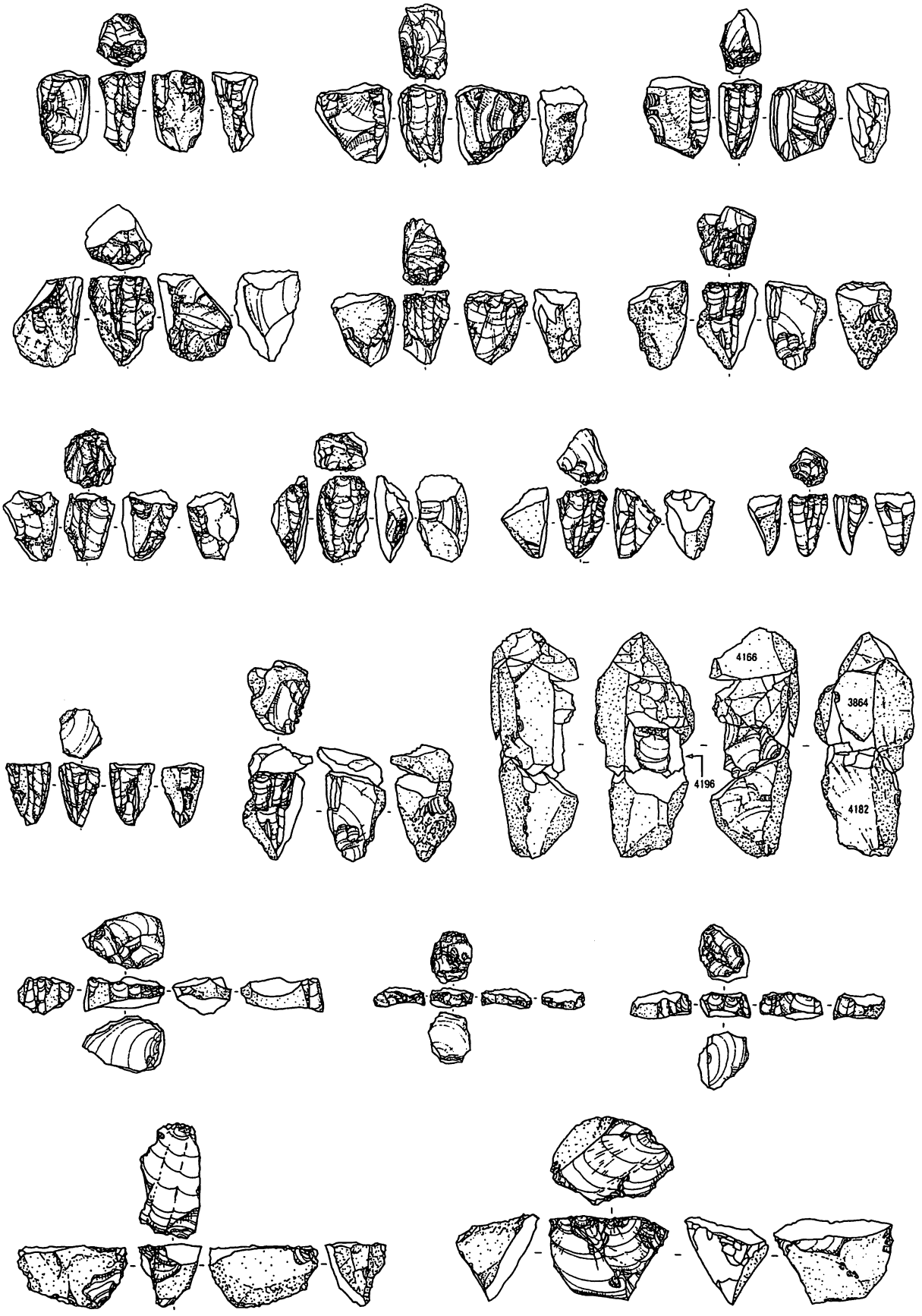
第21図　埼玉県　中砂遺跡



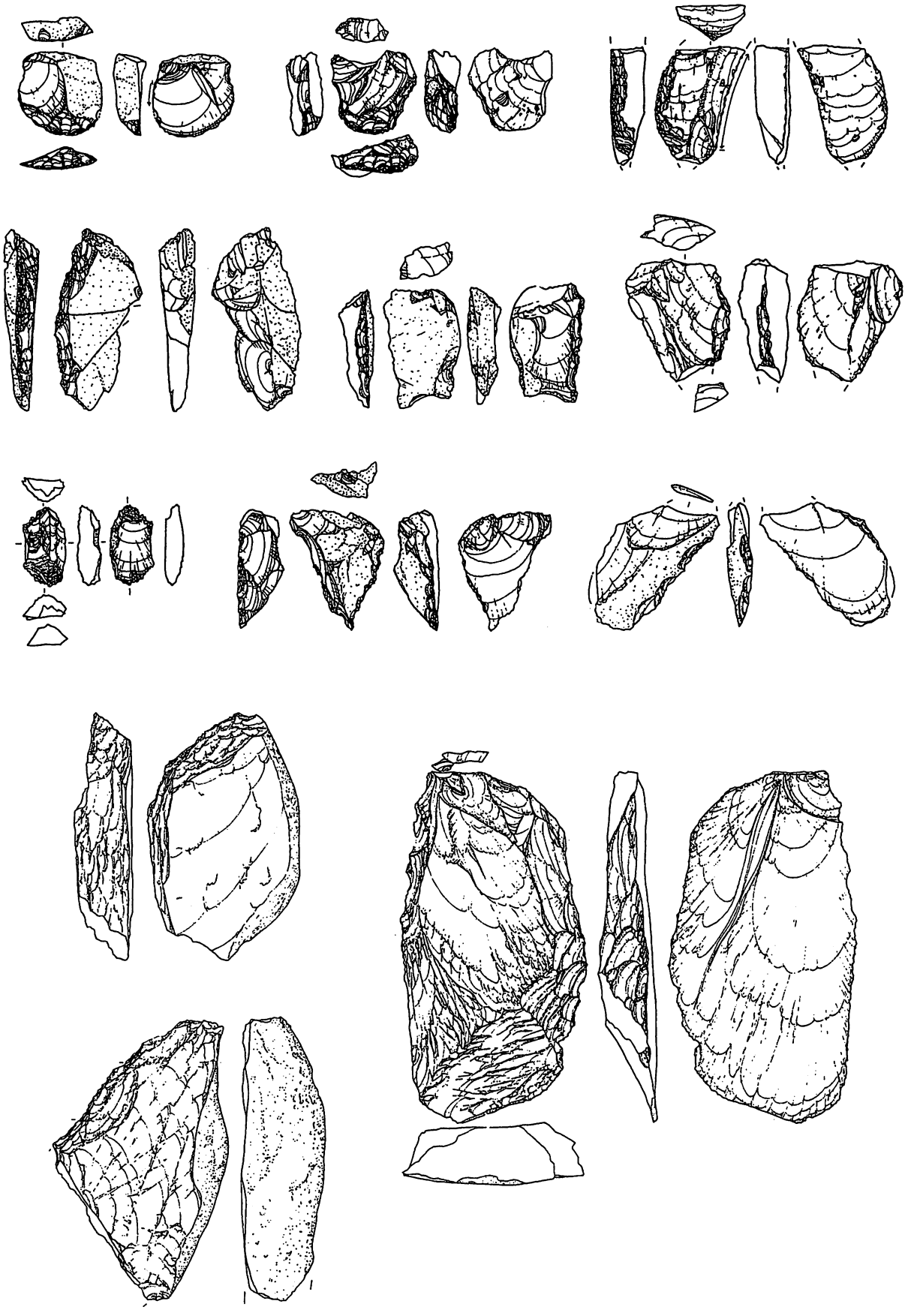
第22図　埼玉県　清橋遺跡



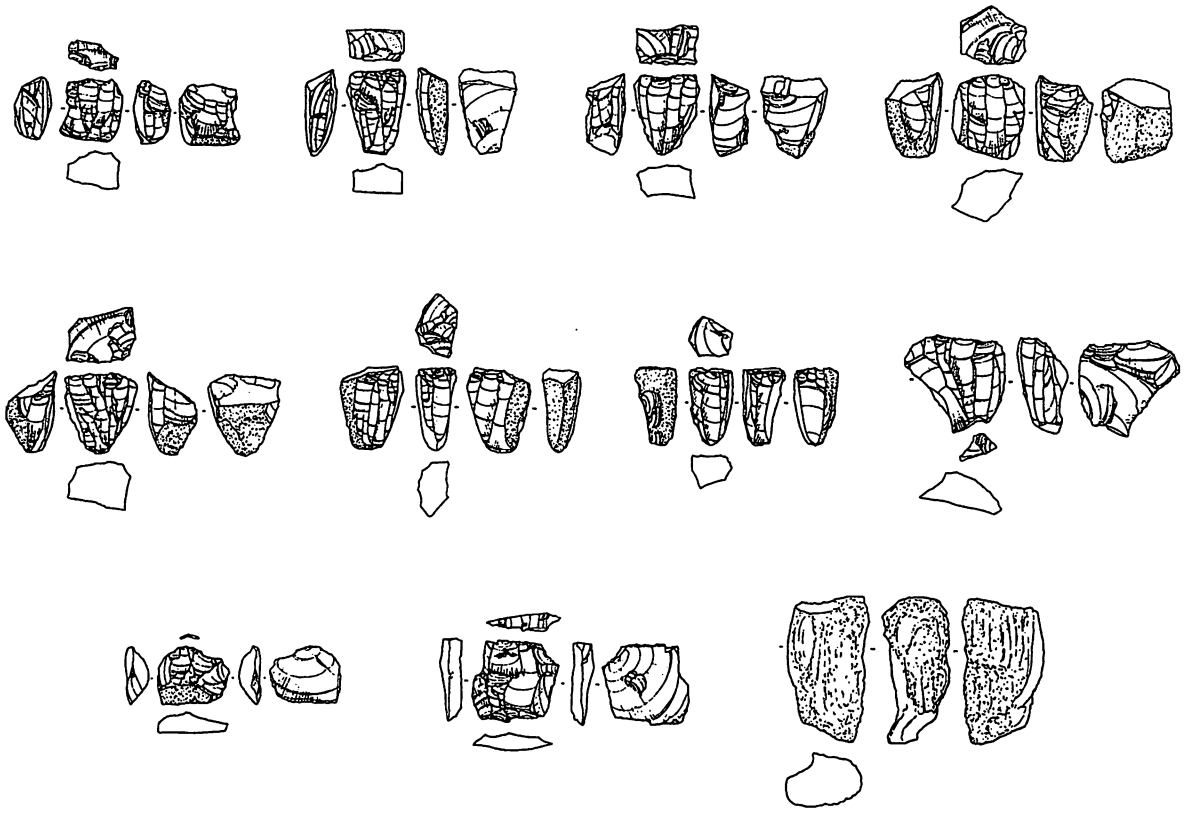
第23図　埼玉県　白草遺跡



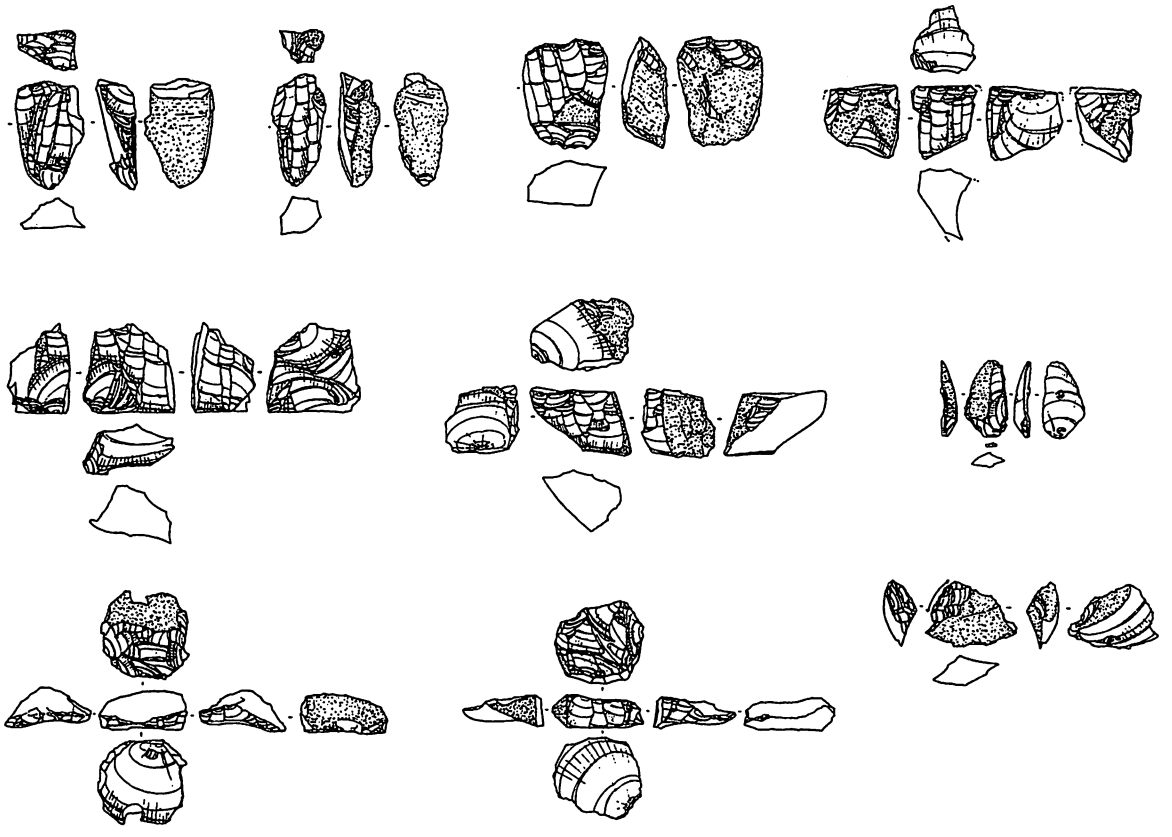
第24図　埼玉県　横田遺跡－1



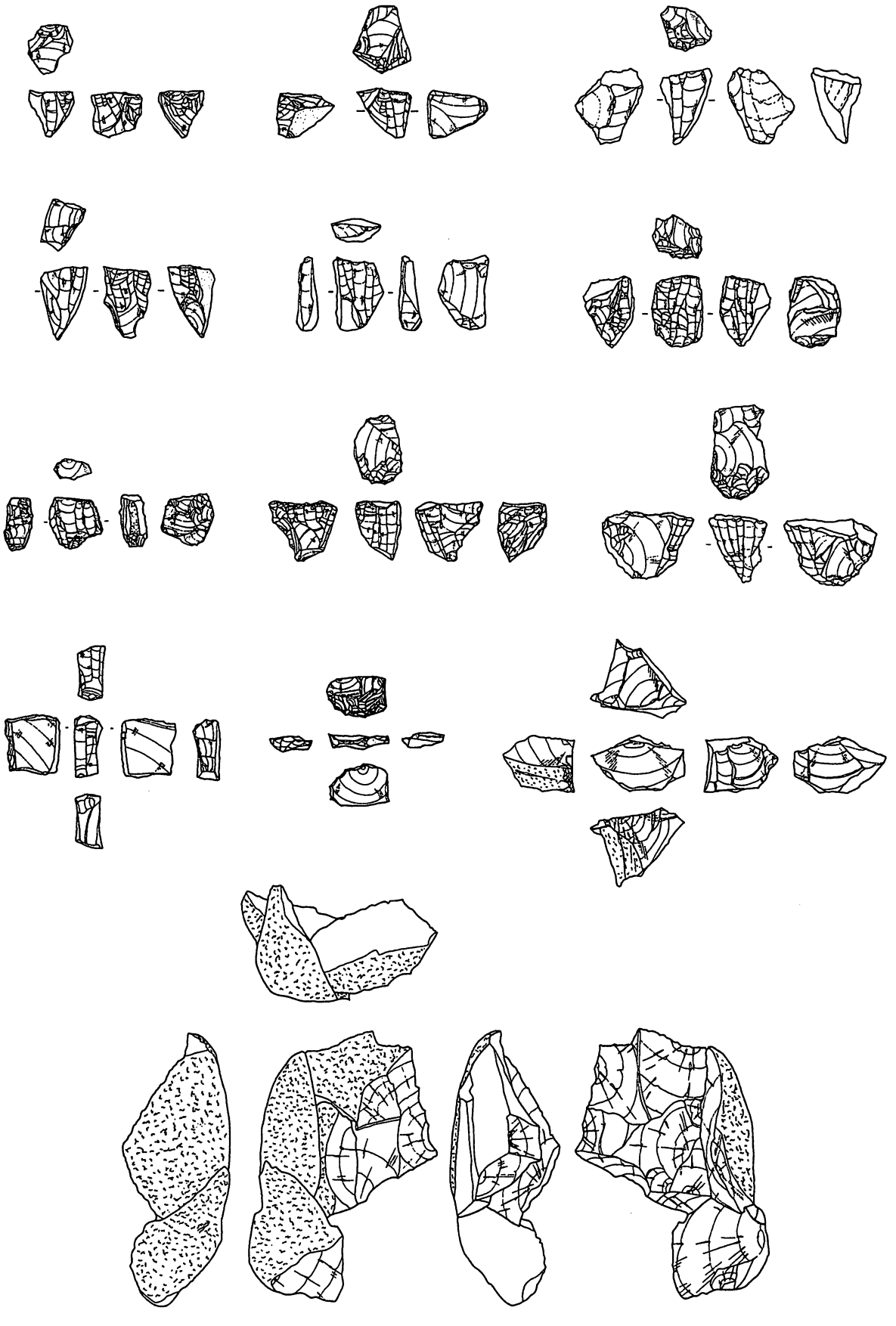
第25図　埼玉県　横田遺跡－2



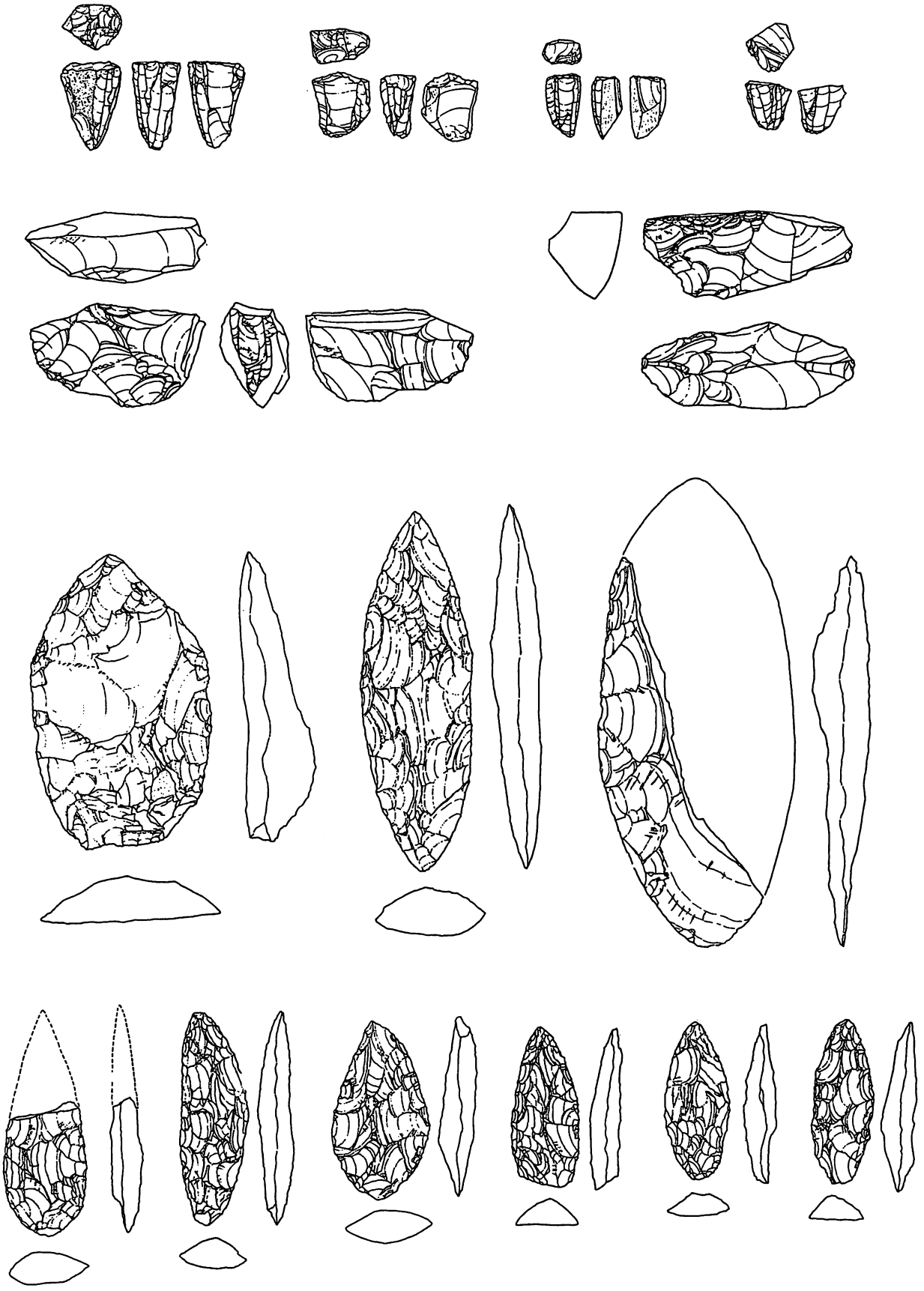
第26図　埼玉県　柳戸遺跡



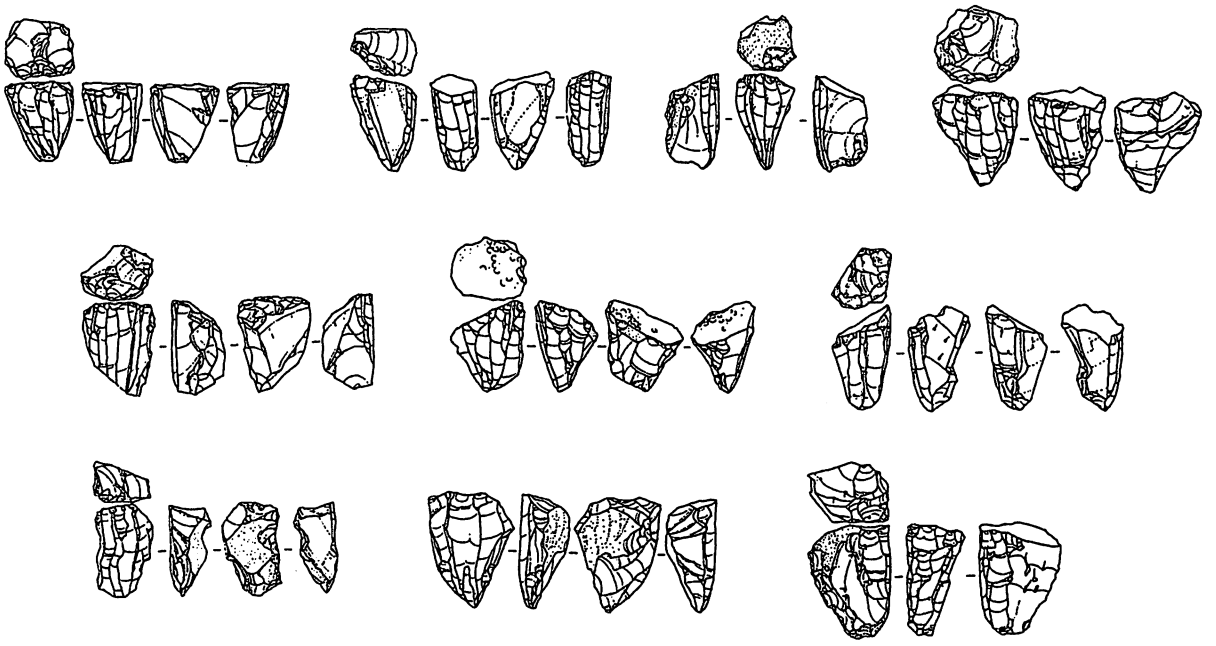
第27図　埼玉県　新山遺跡



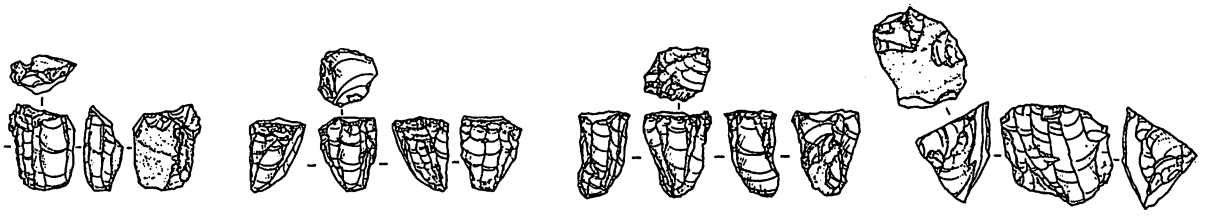
第28図　埼玉県　逆井遺跡



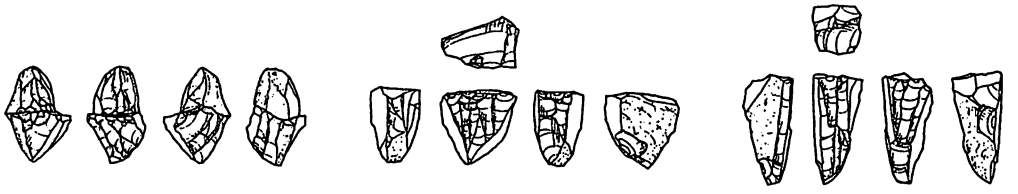
第29図　東京都　狭山B遺跡



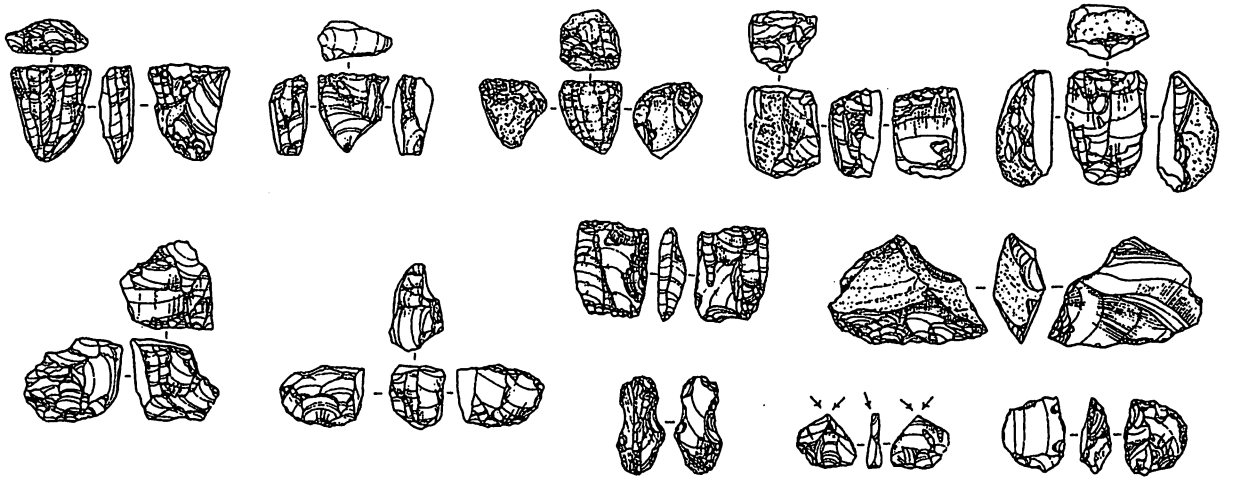
第30図　東京都　多摩ニュータウンNo.769遺跡



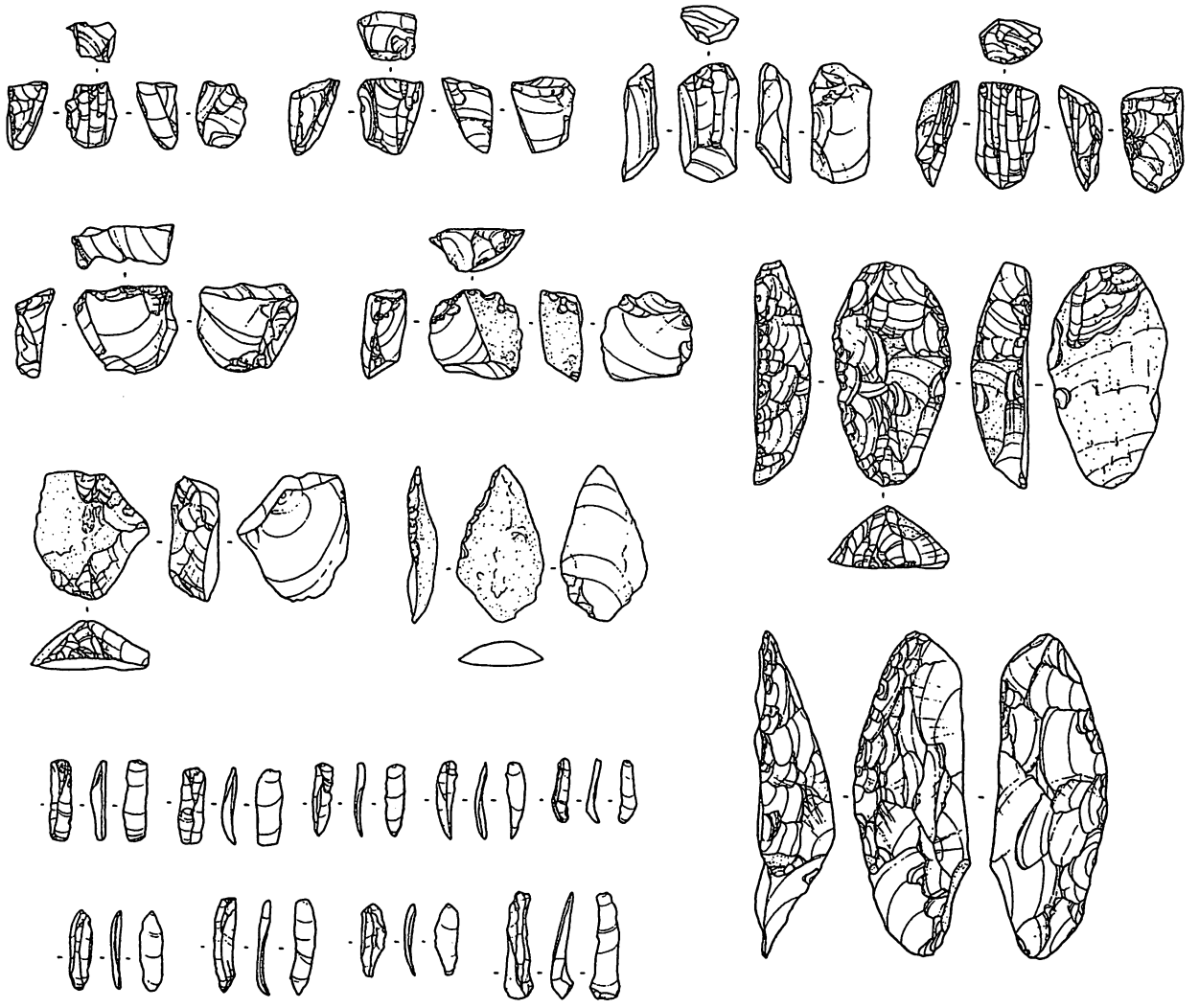
第31図　東京都　下里本邑遺跡



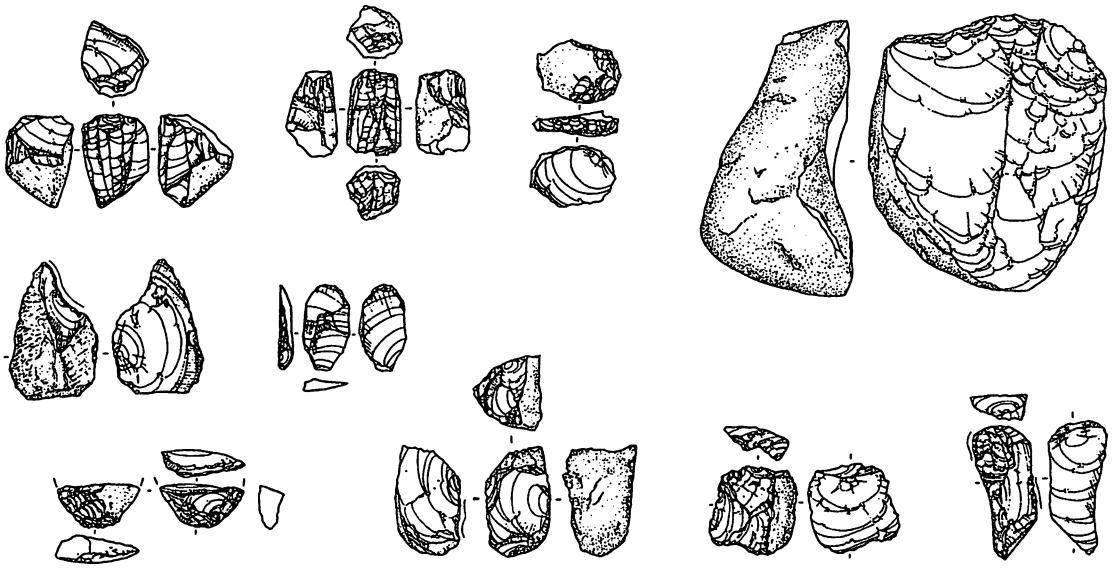
第32図　東京都　御殿山1D遺跡



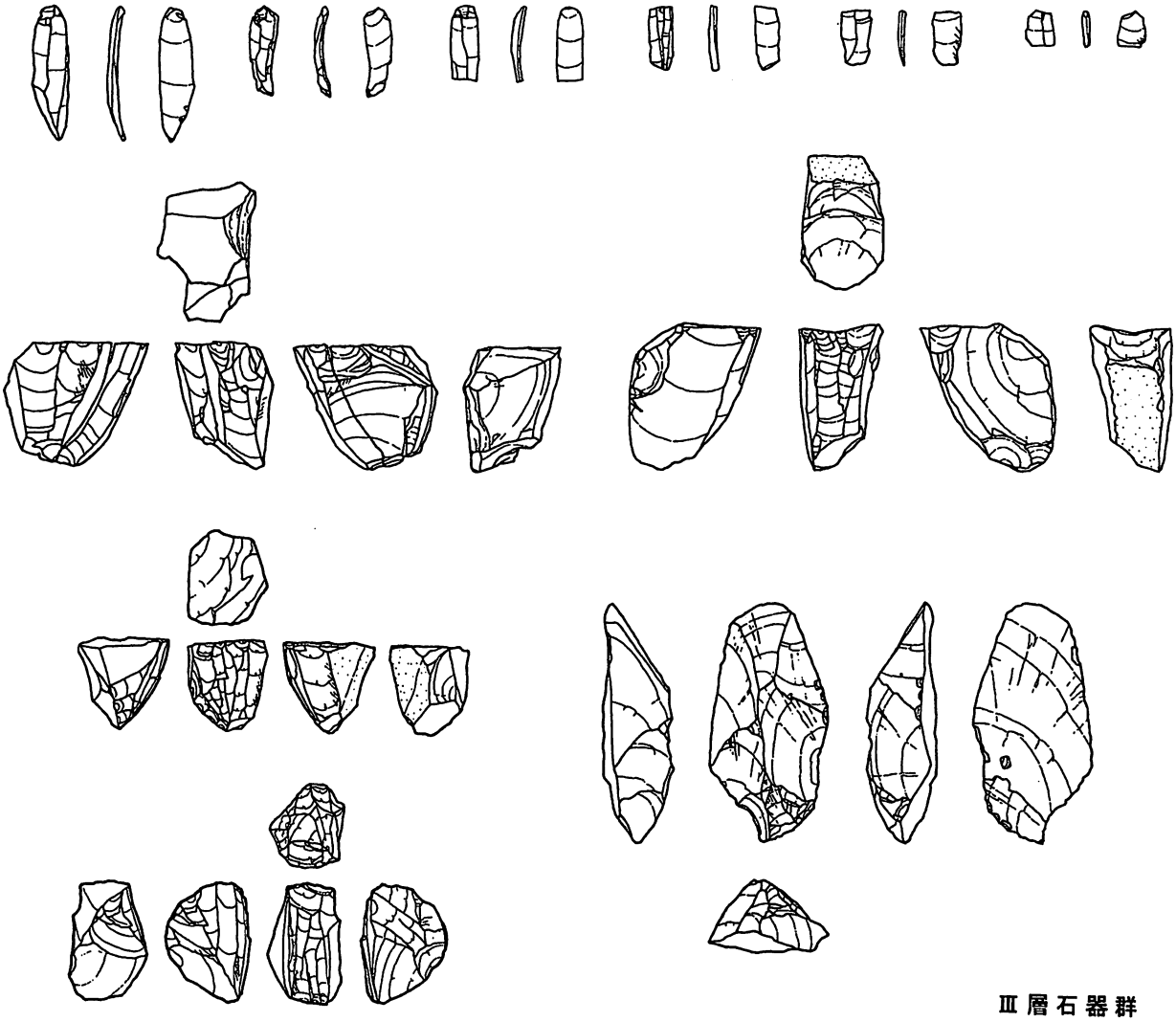
第33図　東京都　中村南遺跡

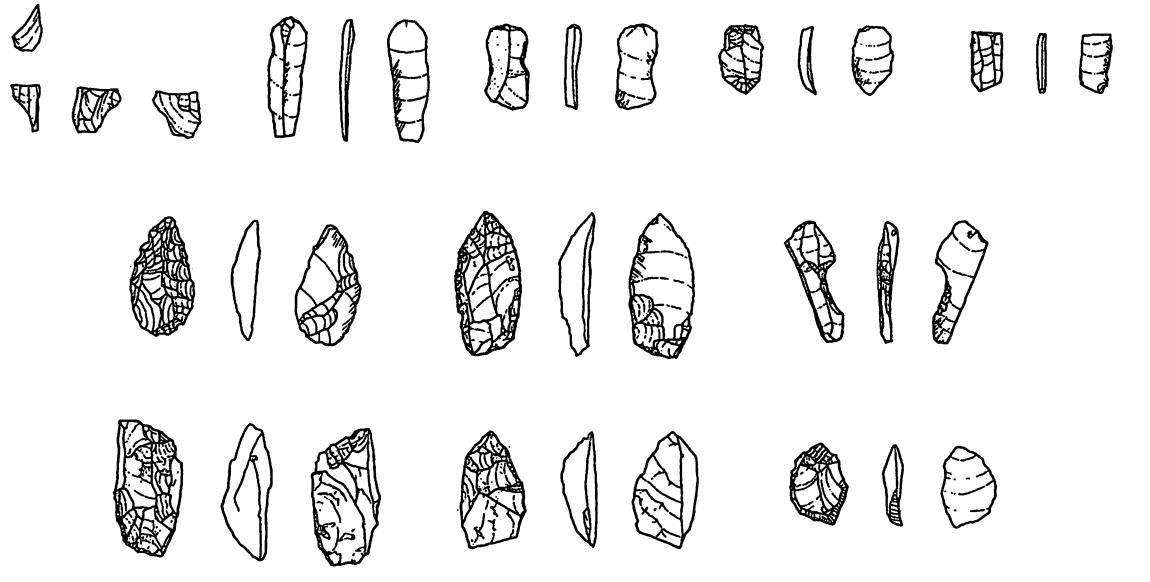


第34図　東京都　多摩ニュータウンNo.301遺跡

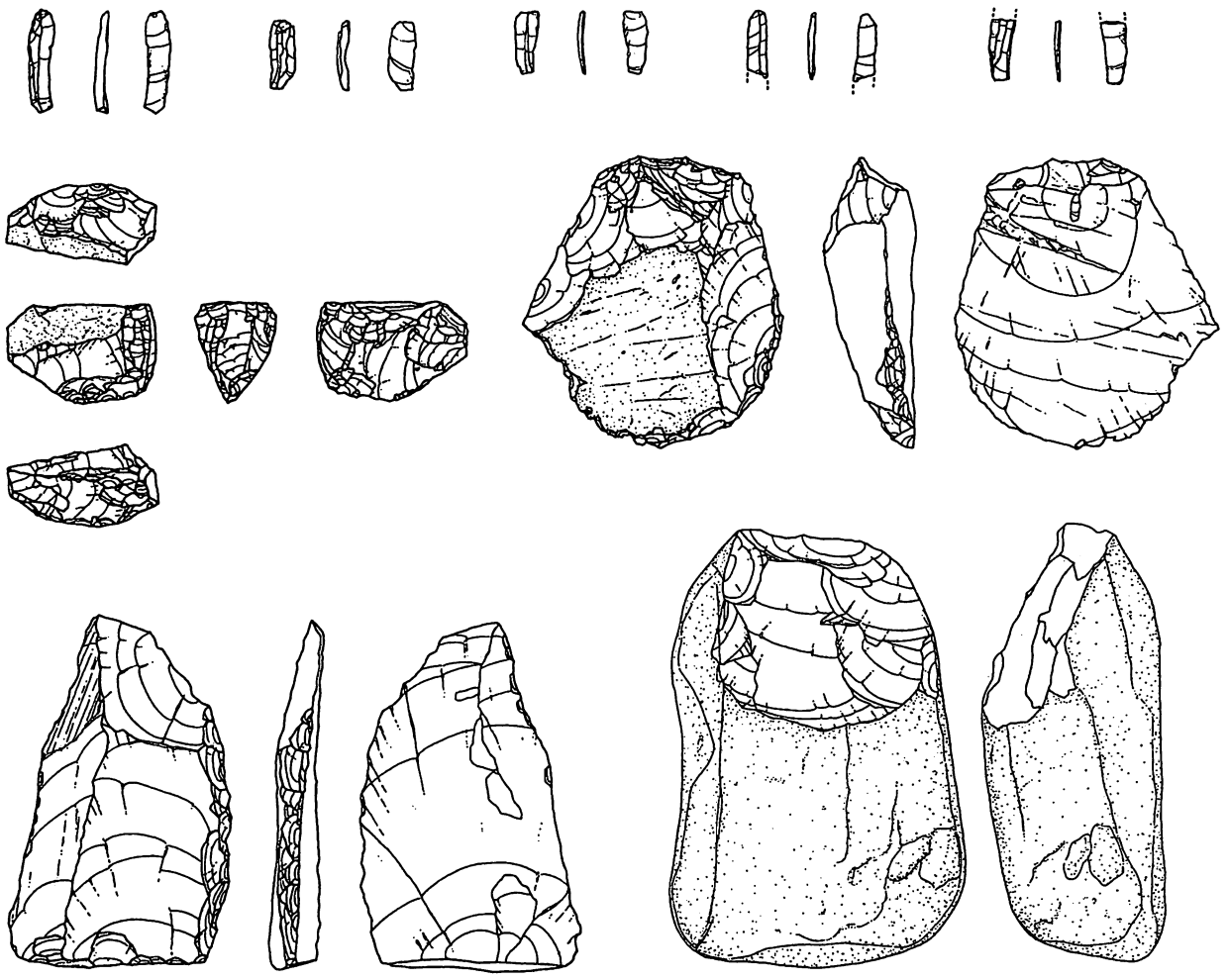


第35図　東京都　新橋遺跡

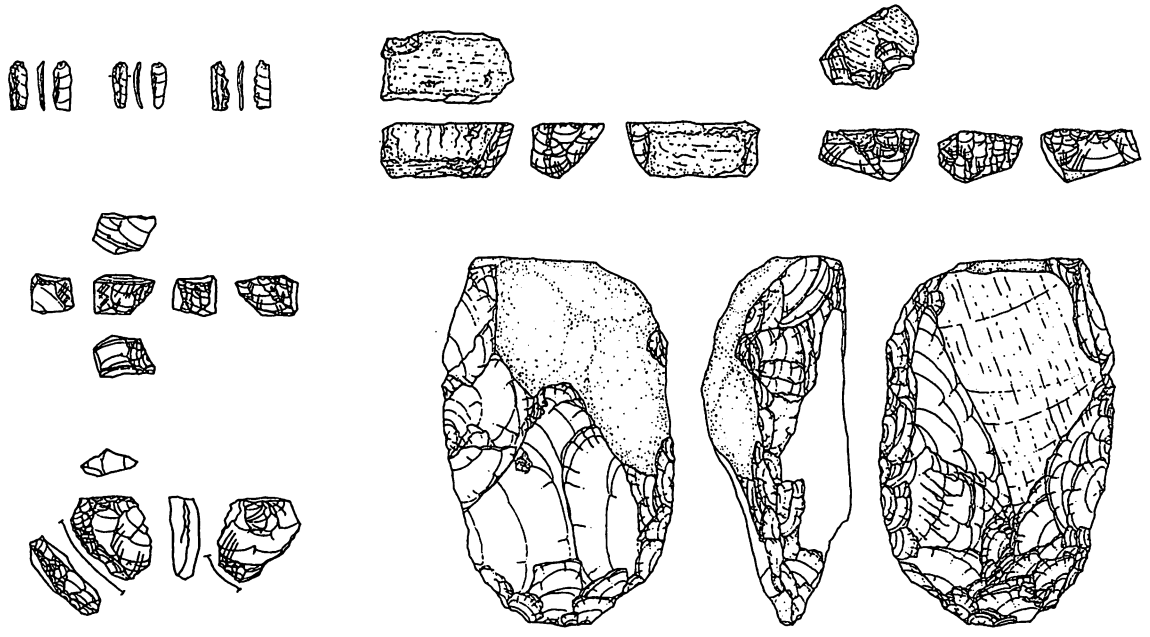




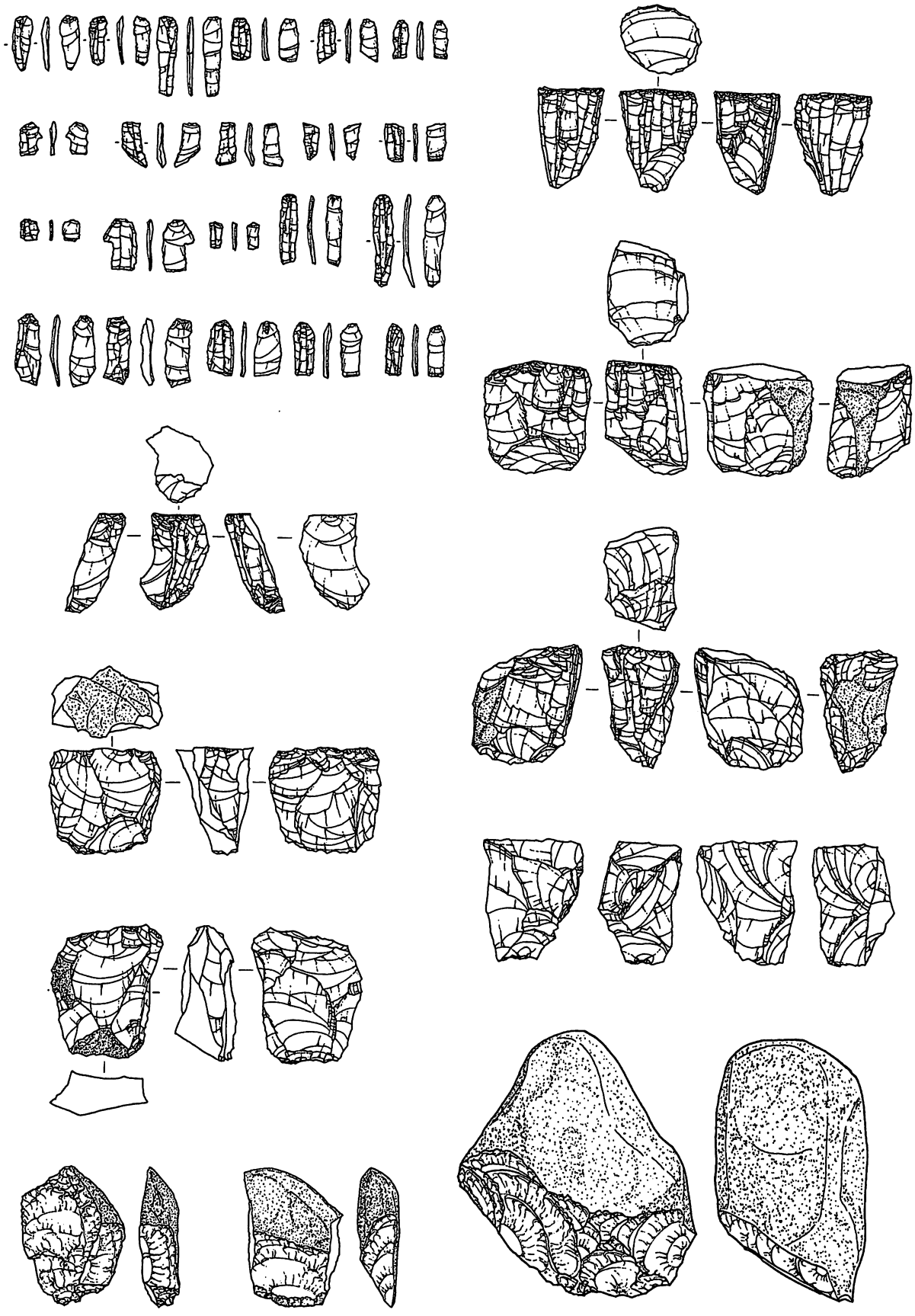
第36図　東京都　出山遺跡



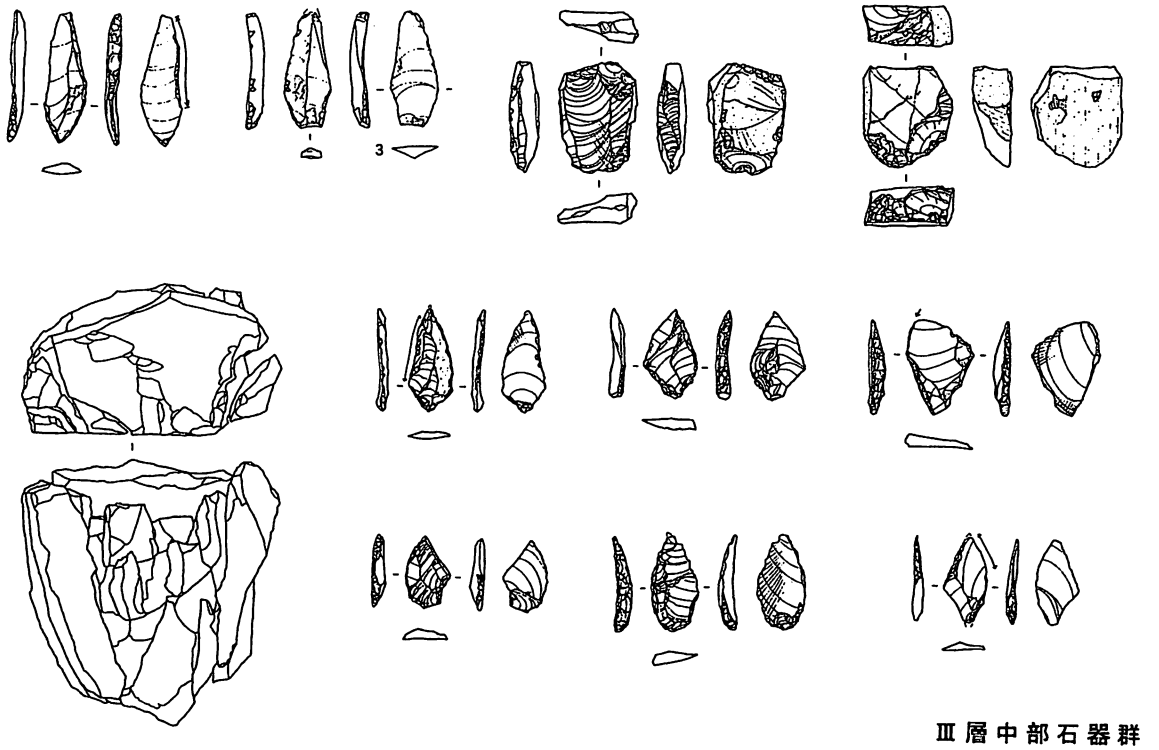
第37図　東京都　天神町遺跡



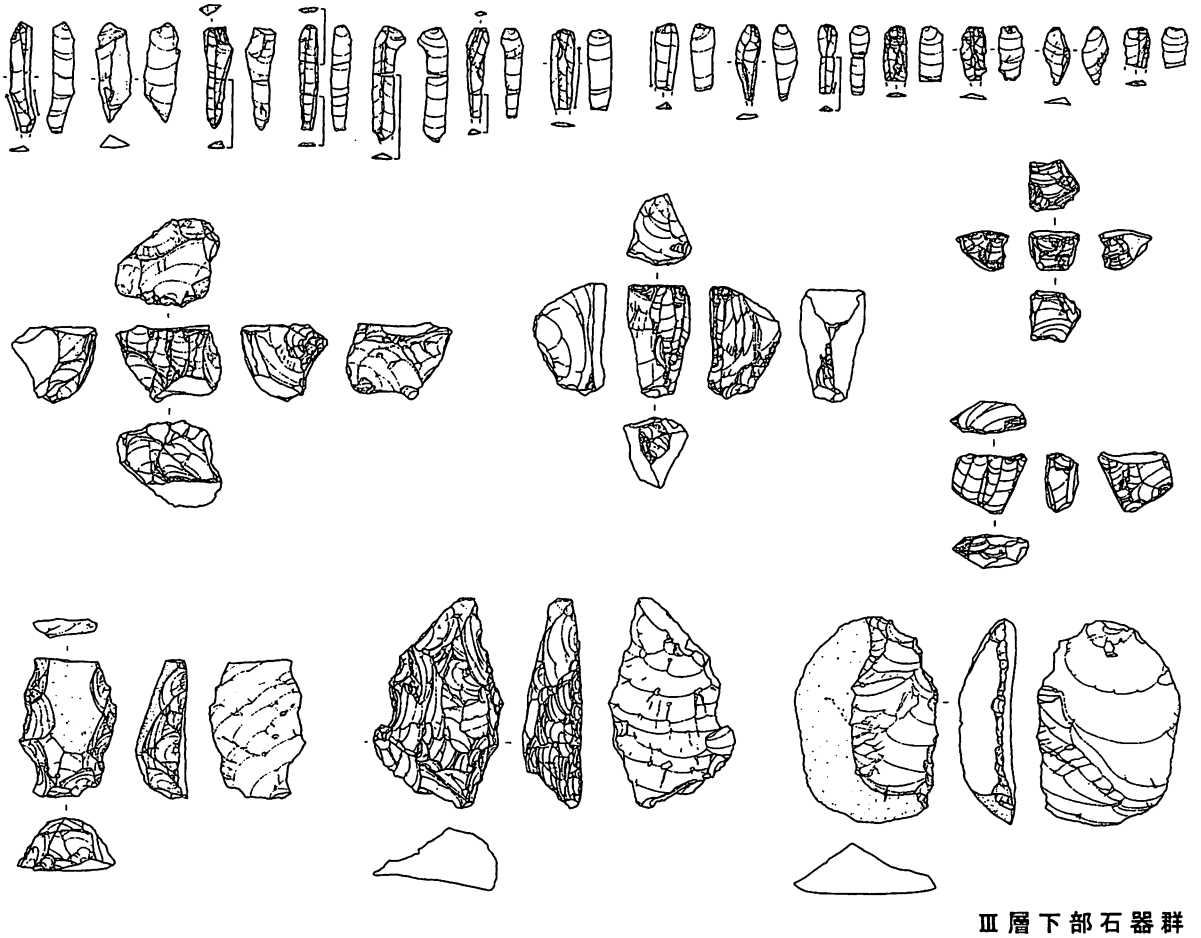
第38図　東京都　国分寺No.37遺跡



第39図　東京都　雨間地区遺跡群C地点

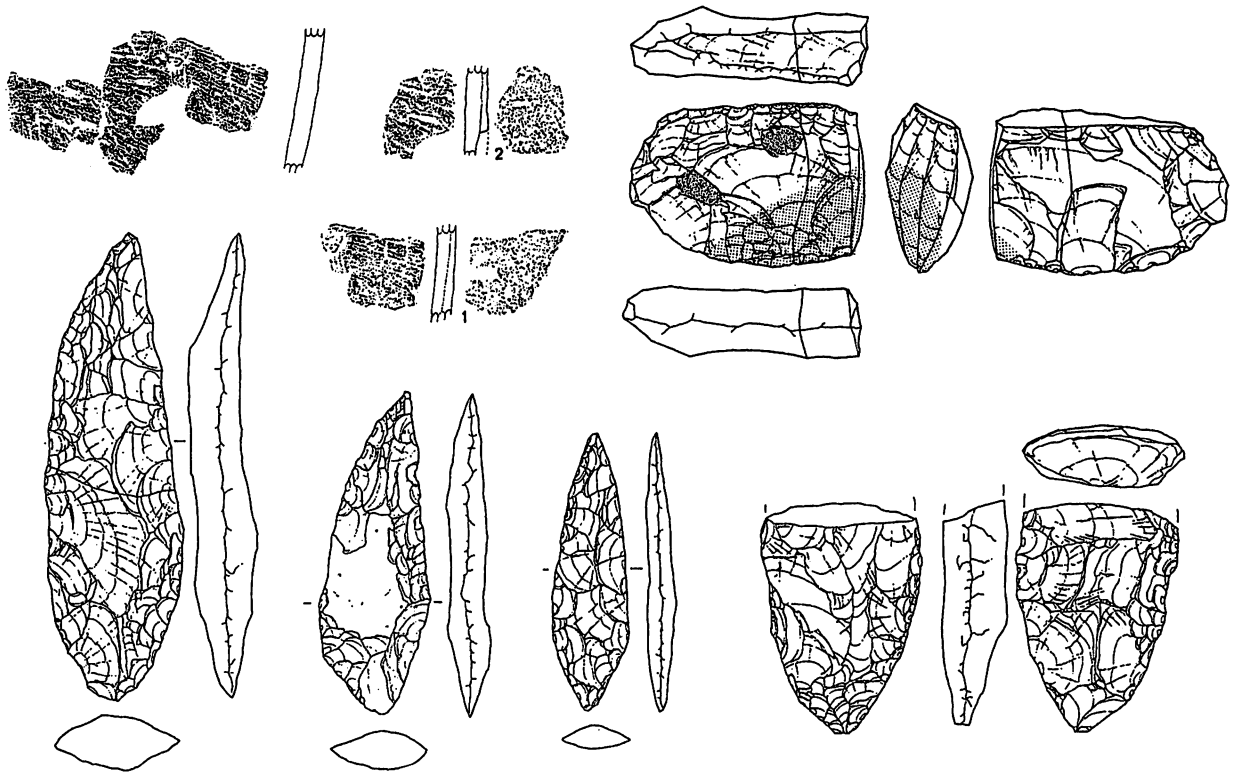


Ⅲ層中部石器群

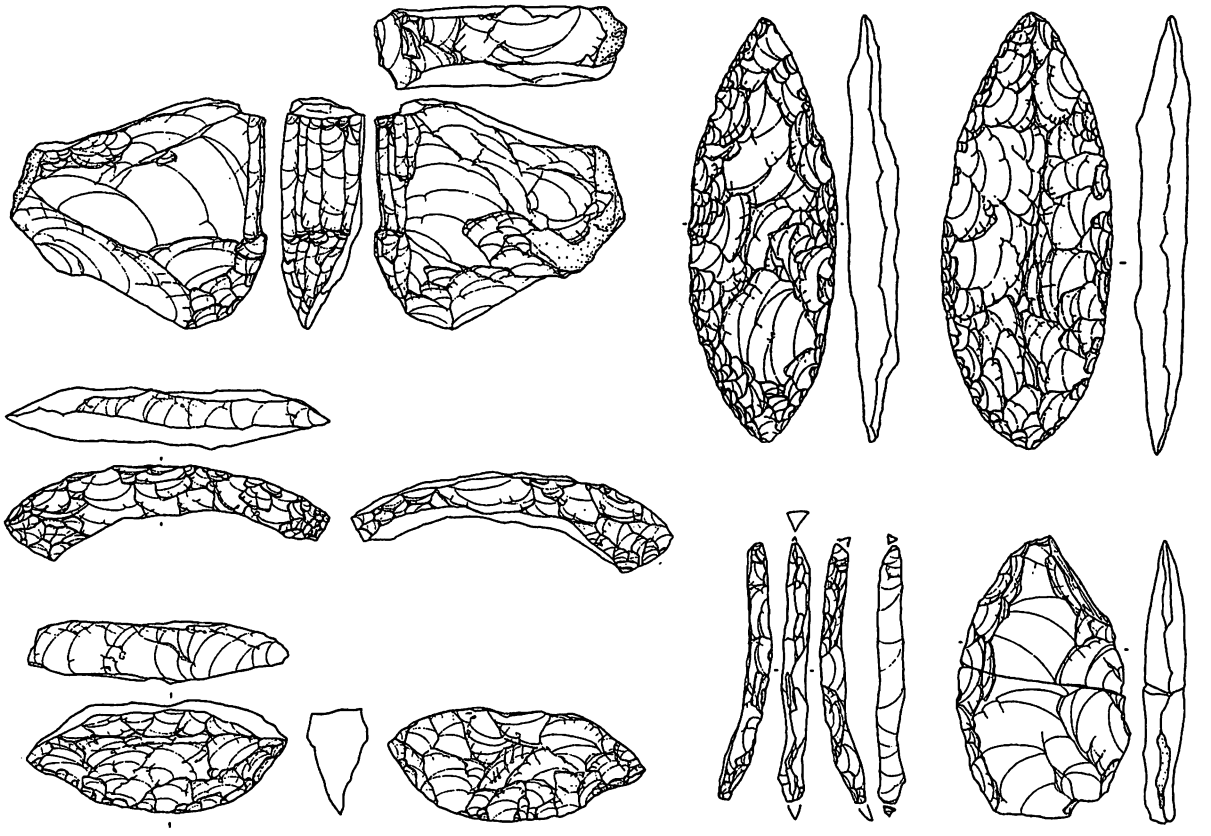


Ⅲ層下部石器群

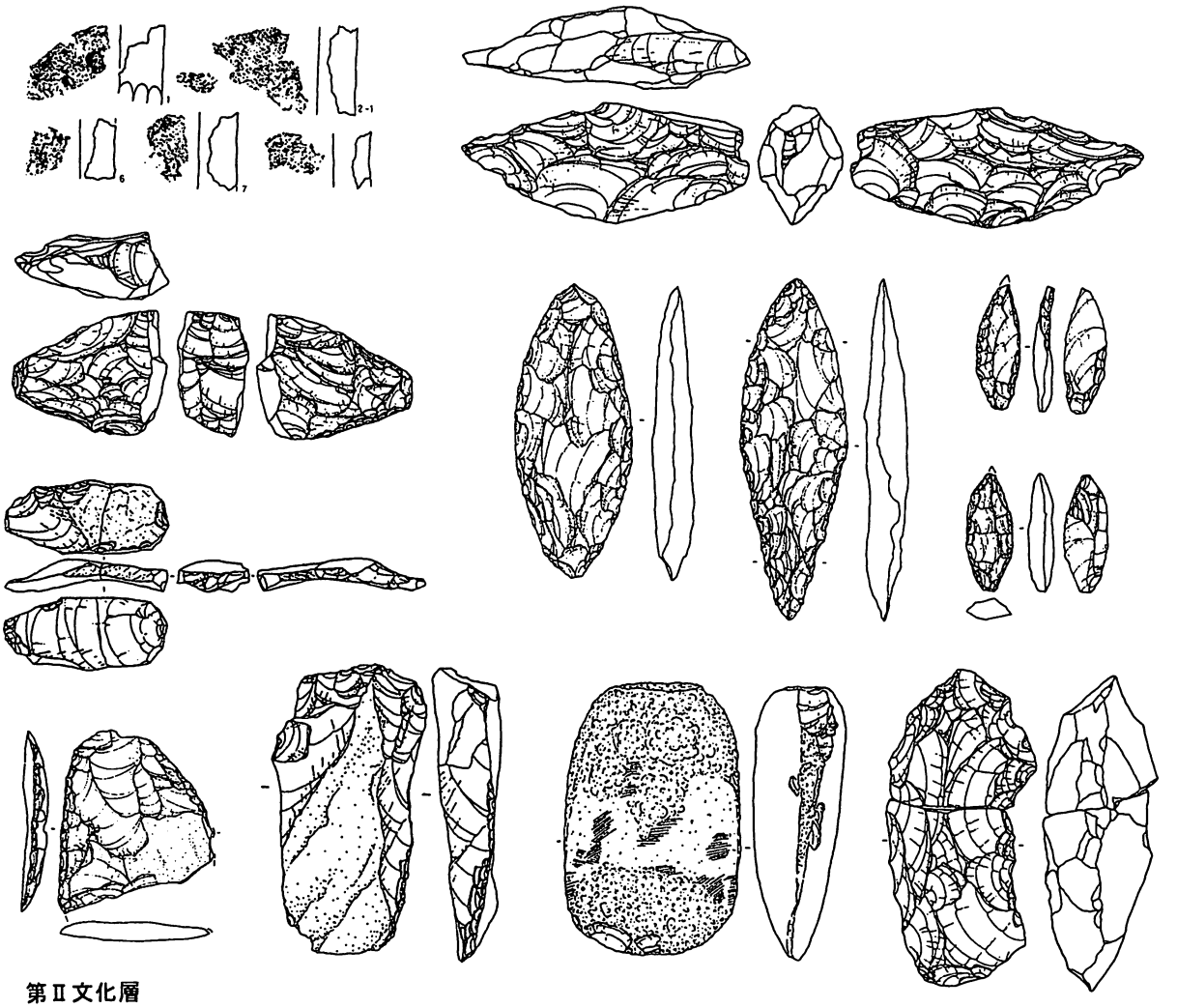
第40図　東京都　もみじ山遺跡



第41図　神奈川県　勝坂遺跡



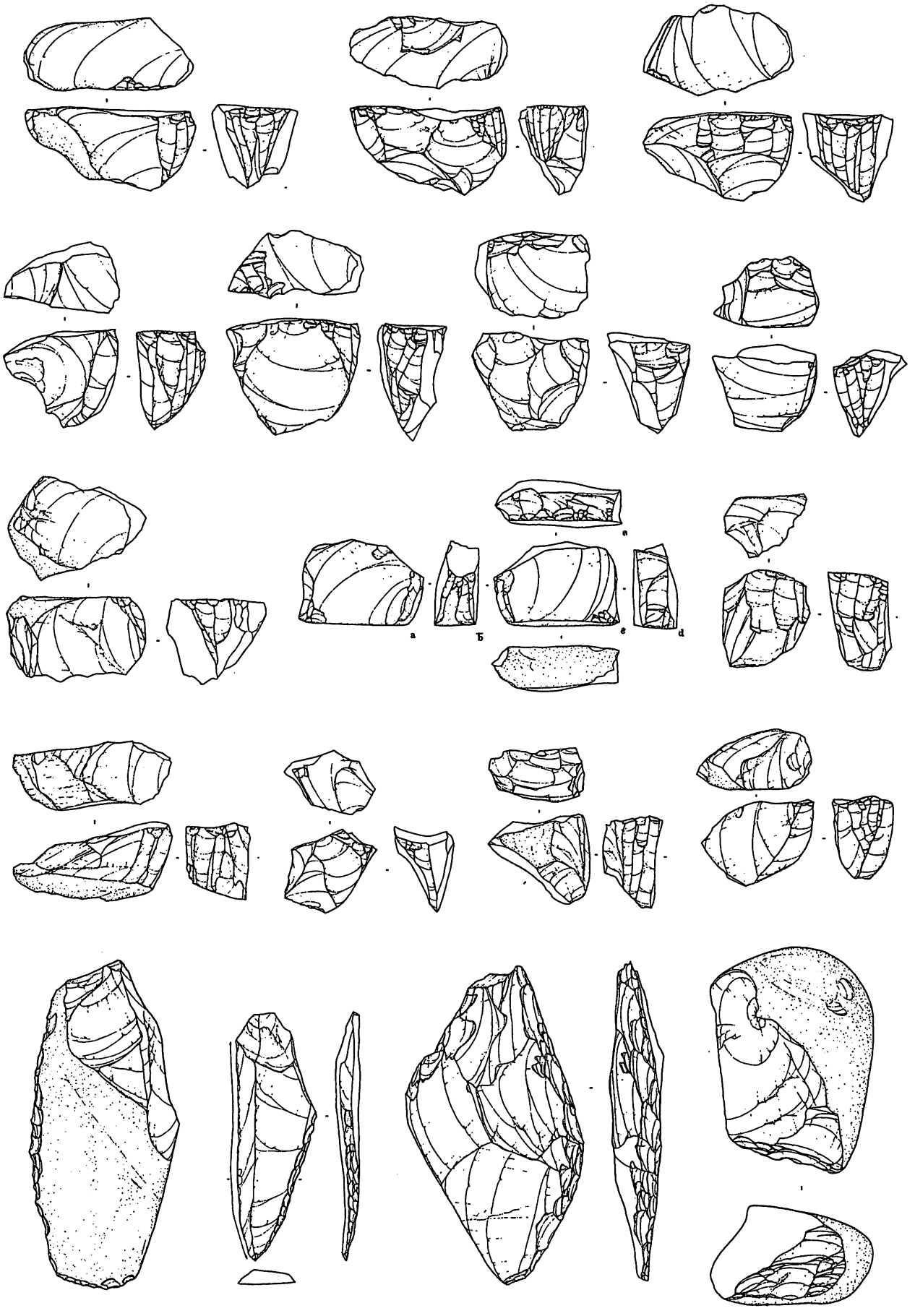
第42図　神奈川県　長堀北遺跡



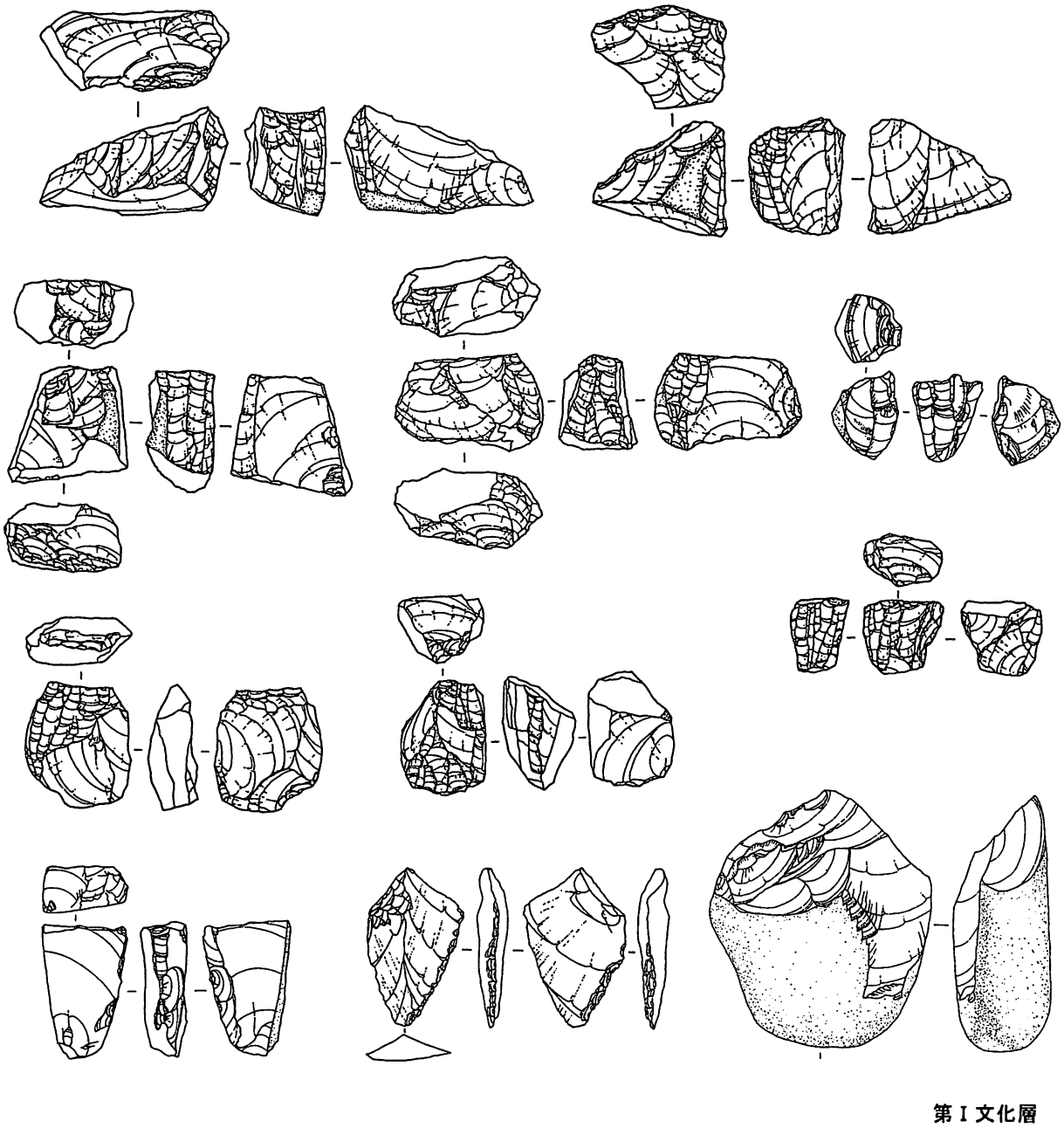
第Ⅱ文化層

第Ⅲ文化層

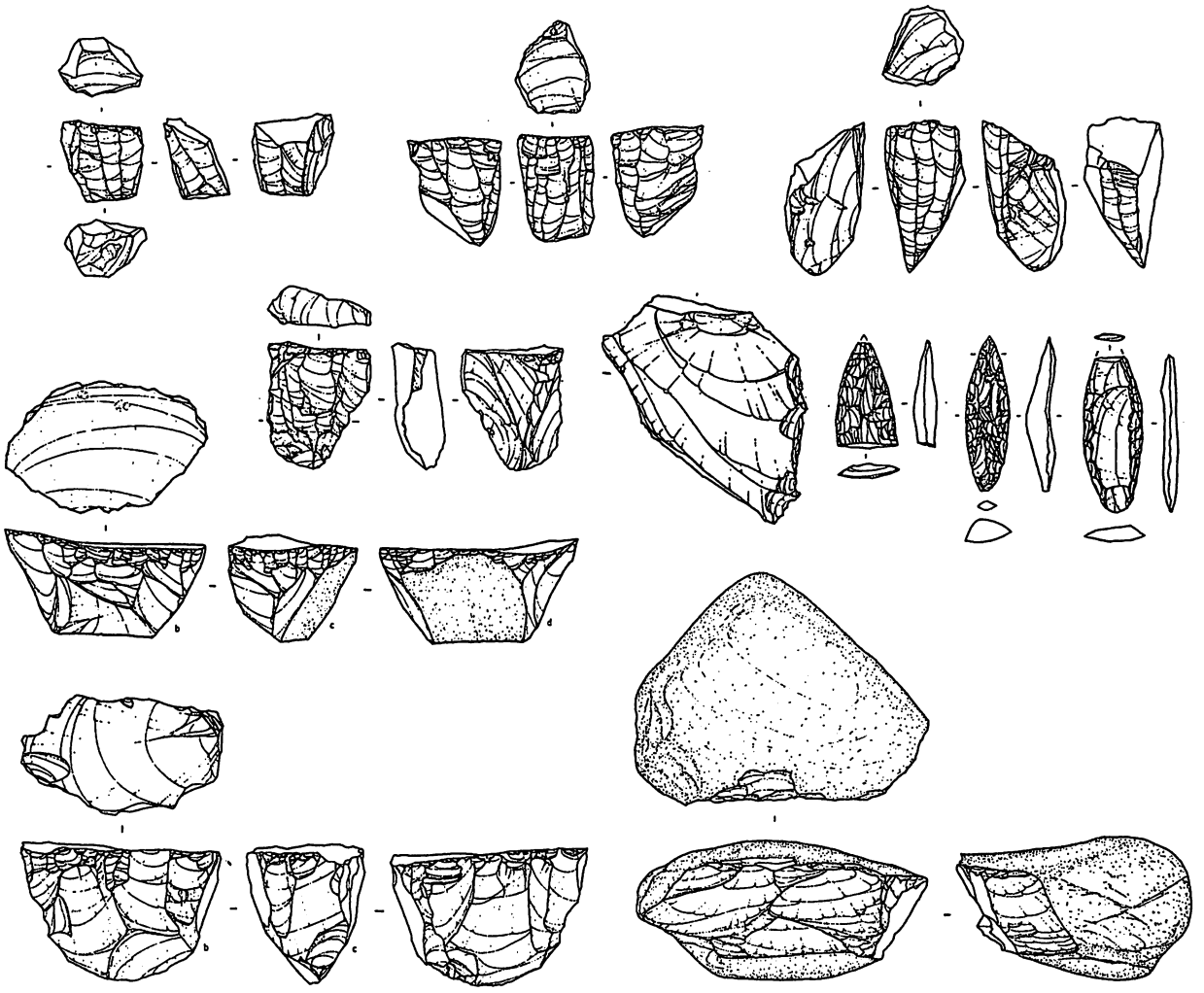
第43図　神奈川県　上野第1遺跡



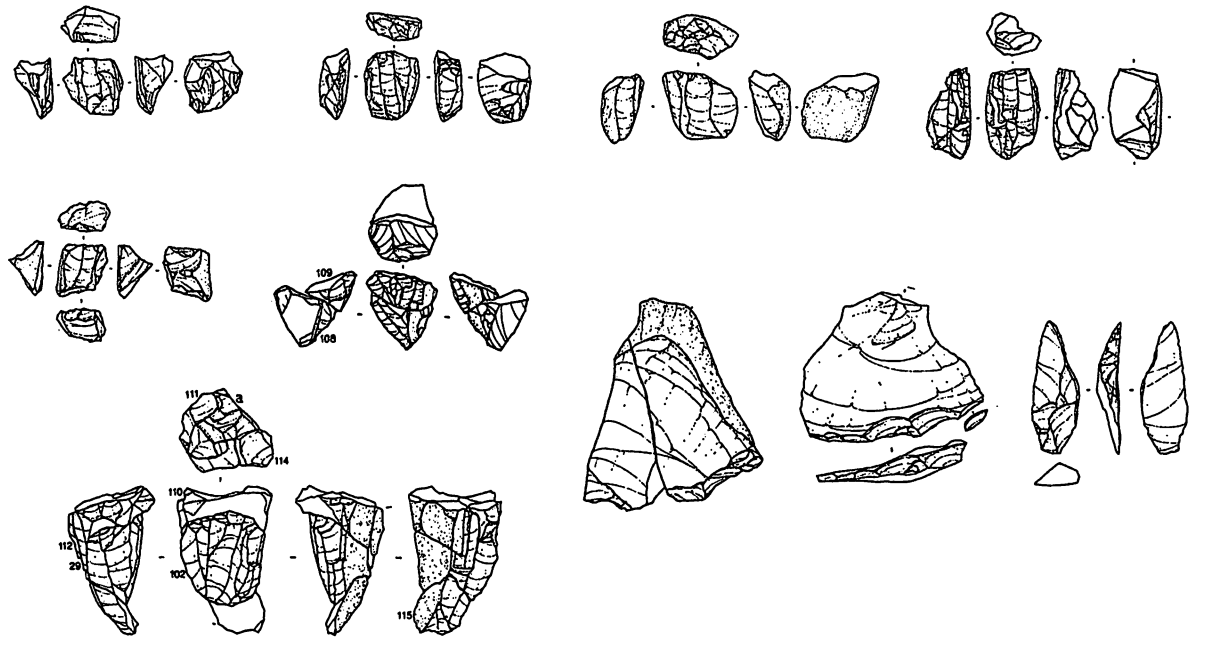
第44図　神奈川県　下鶴間長堀遺跡



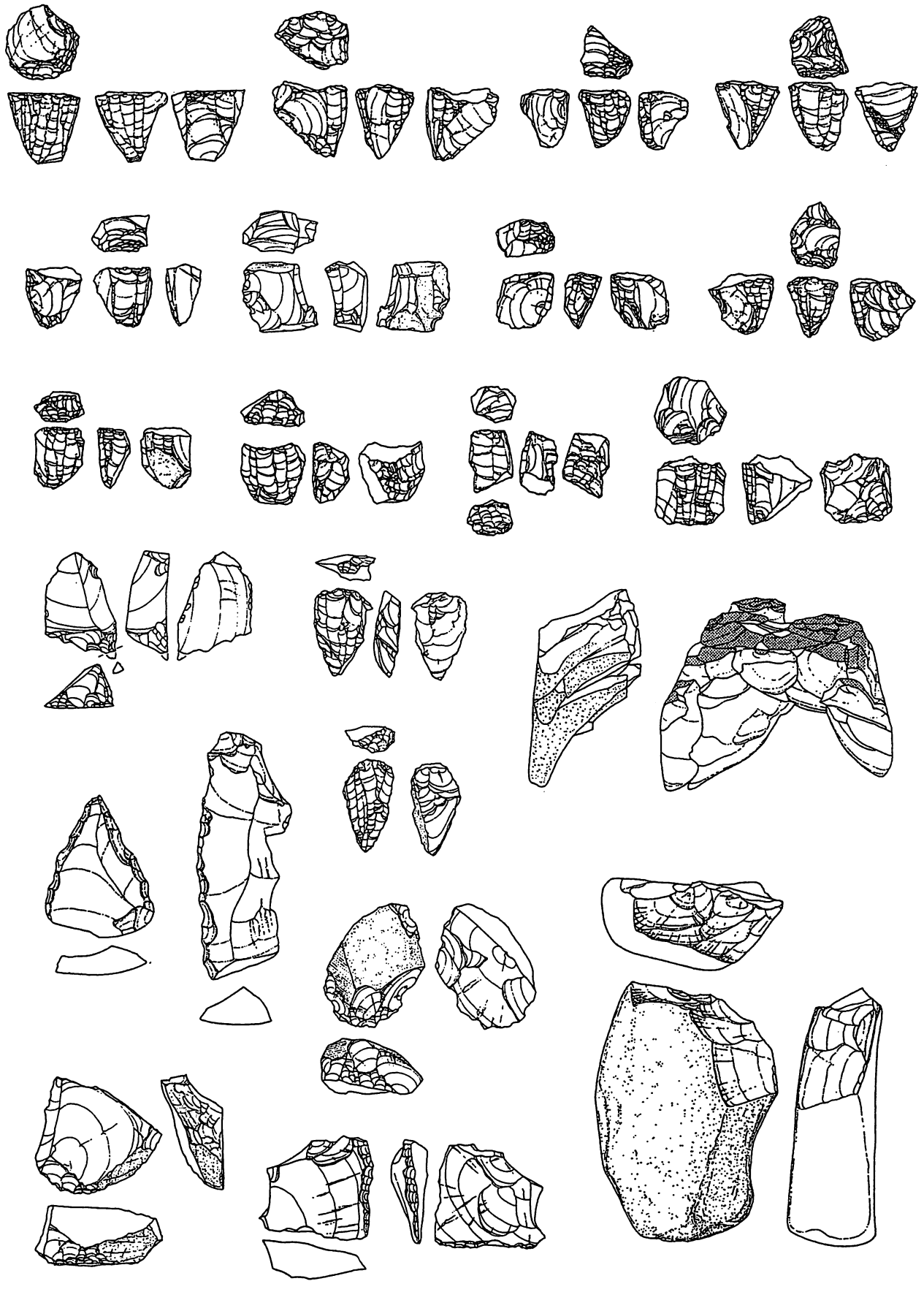
第45図　神奈川県　上和田城山遺跡



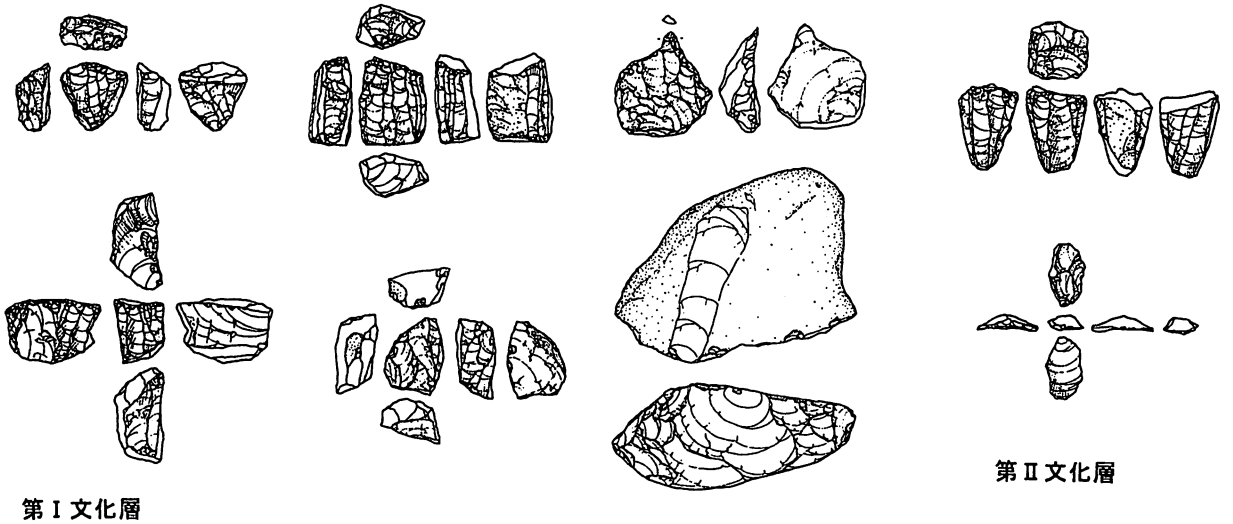
第46図　神奈川県　上草柳第1遺跡



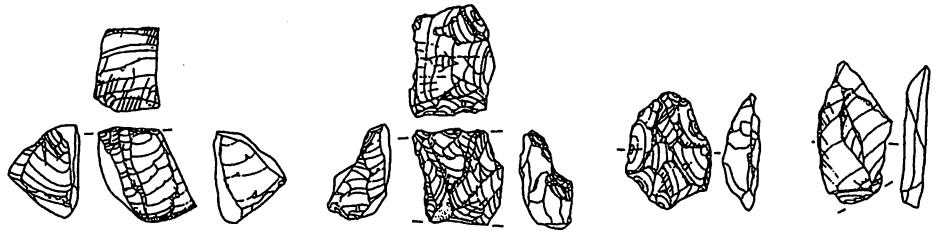
第47図　神奈川県　上草柳第3中央遺跡

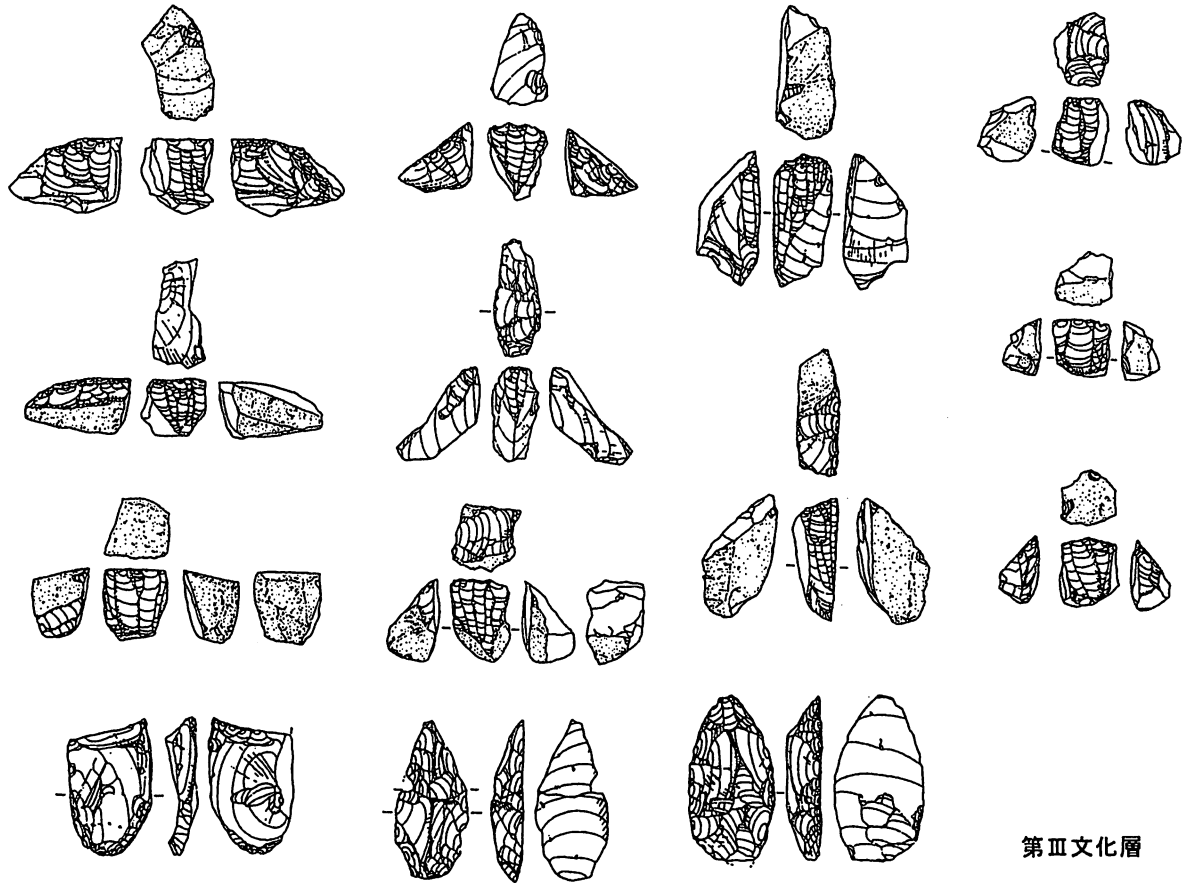


第48図　神奈川県　報恩寺遺跡

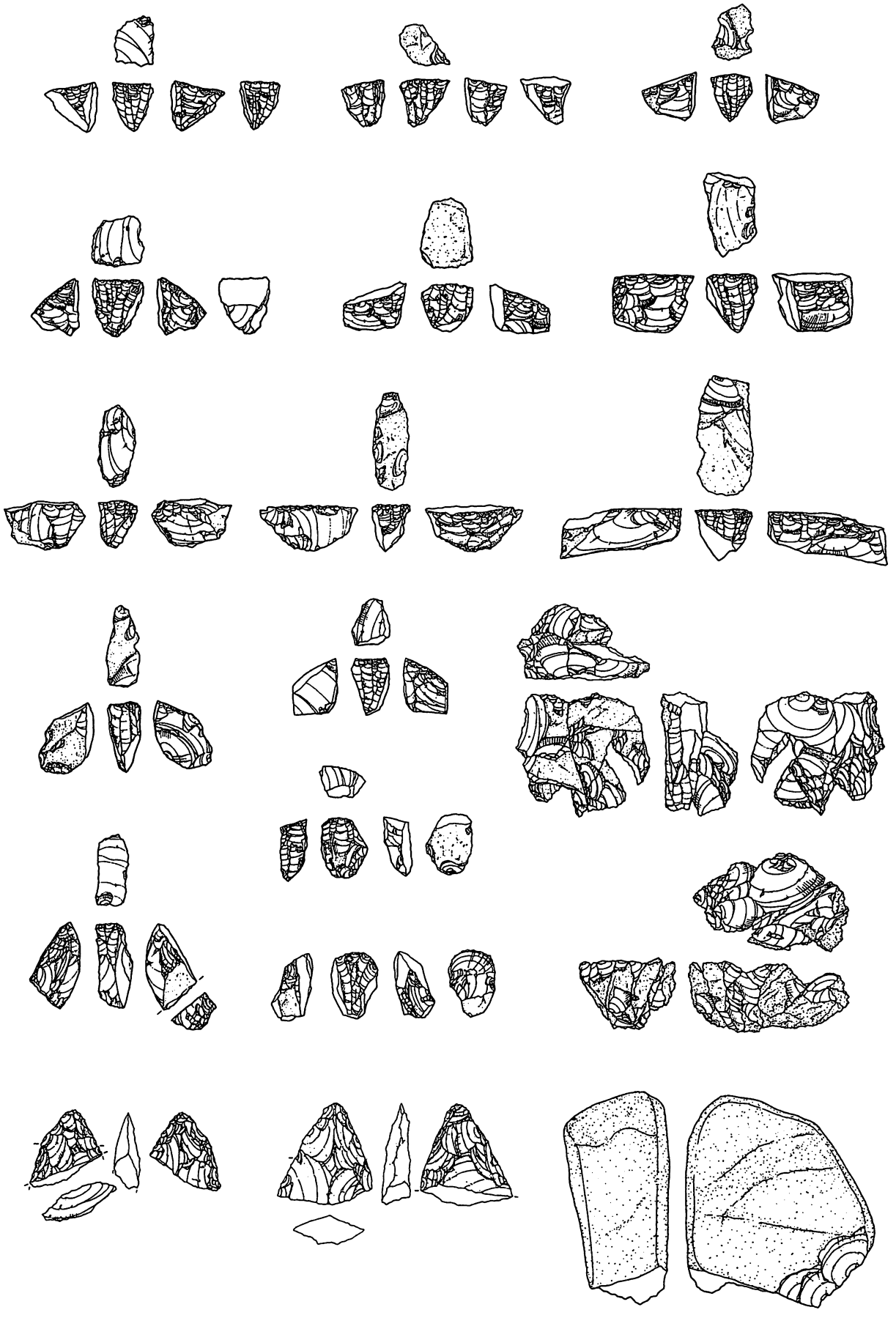


第49図　神奈川県　かしわ台駅前遺跡

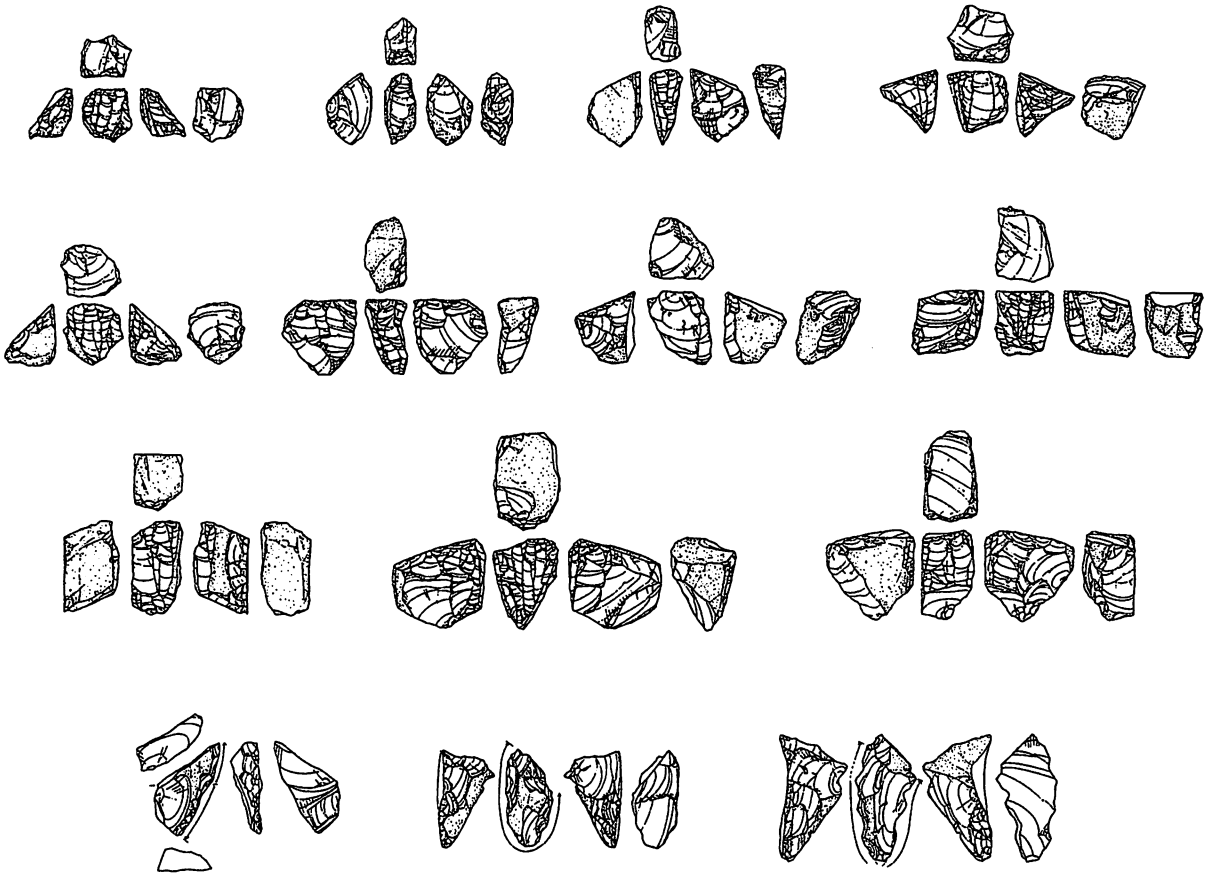




第50図　神奈川県　代官山遺跡

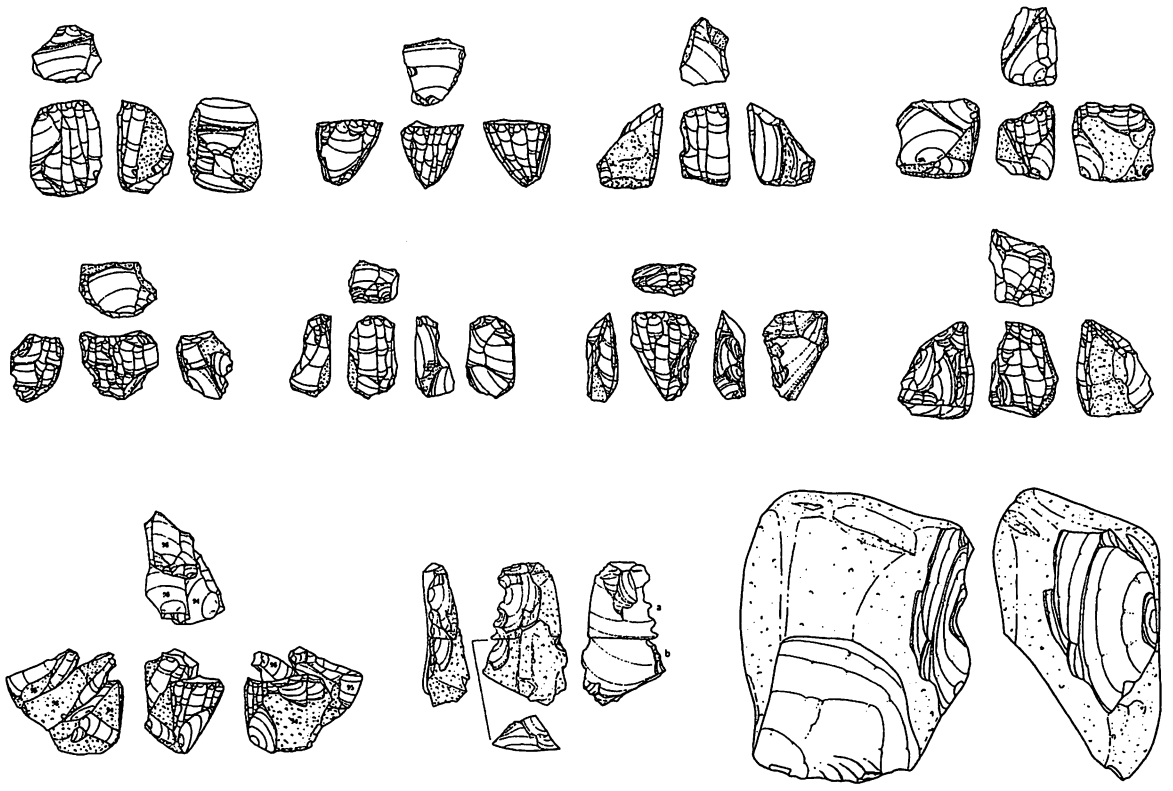


第51図　神奈川県　吉岡遺跡群B区

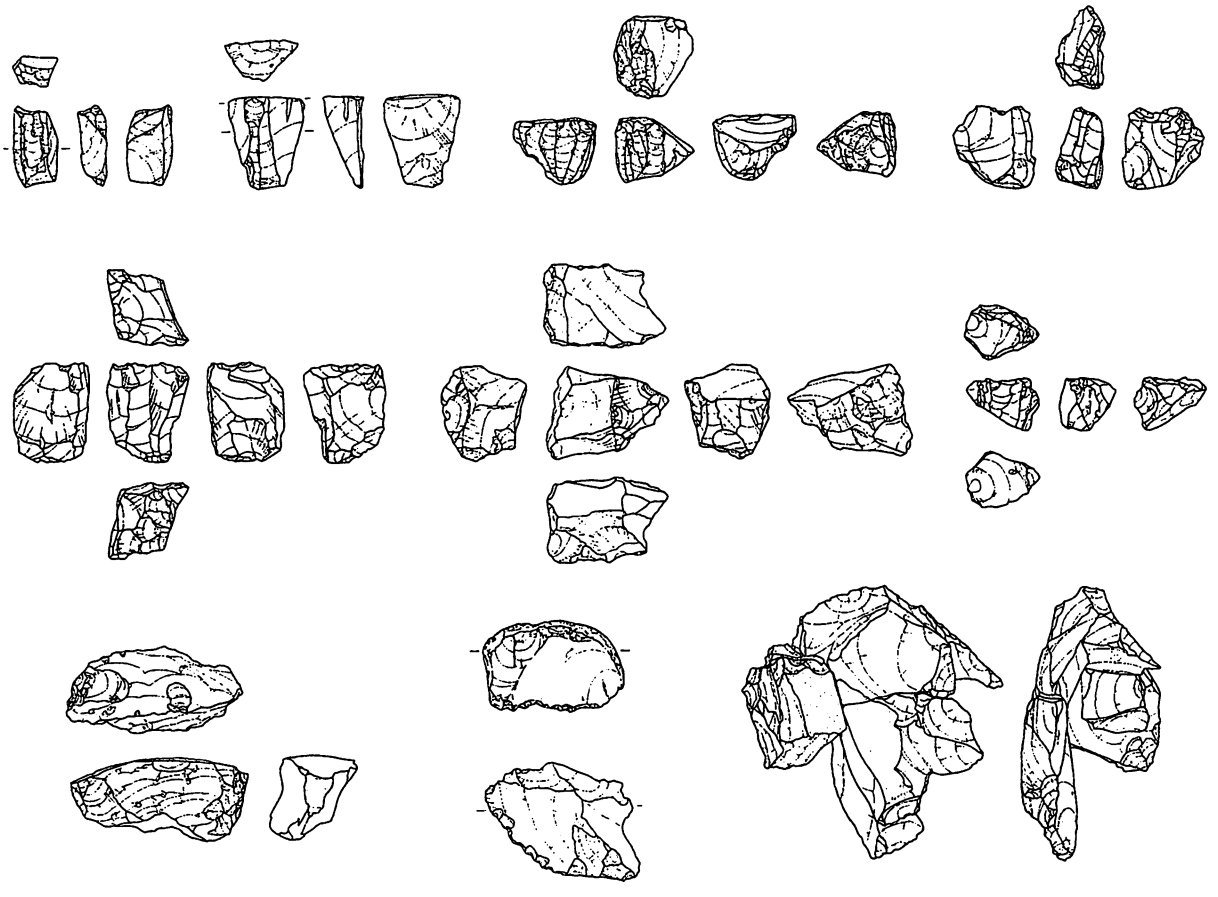


第52図　神奈川県　打木原遺跡

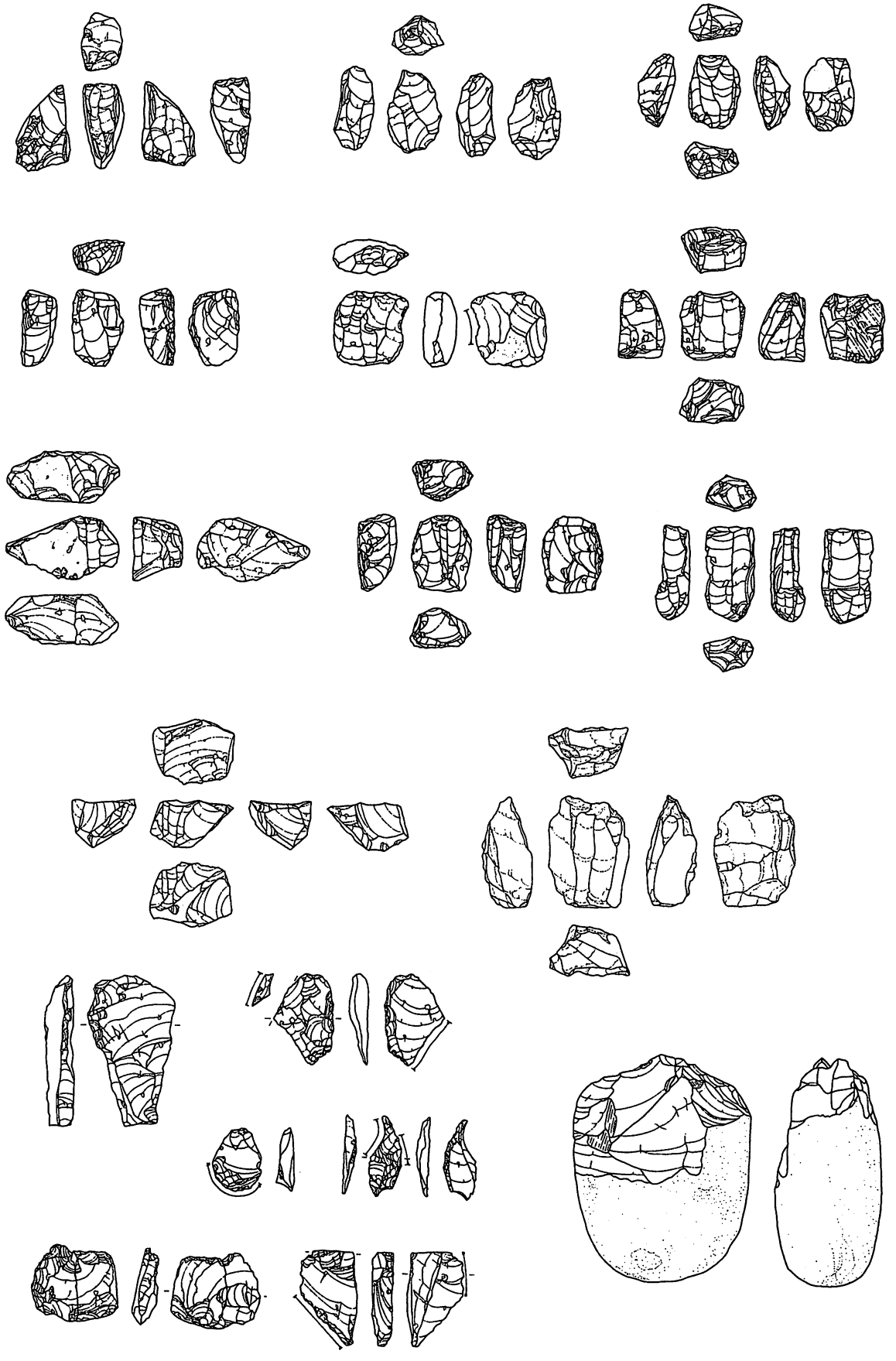
第53図　神奈川県　用田鳥居前遺跡



第54図　神奈川県　宮ヶ瀬サザランケ遺跡



第55図　神奈川県　上粕屋・川上（No.5）遺跡



第56図　神奈川県　三ノ宮・下谷戸(No.14)遺跡

表1　南関東地域の細石器遺跡一覧表

NO.	分布図	遺跡名	出土層位	細石刃	細石核	細石核原型	細石核削片	削器	掻器	彫器	彫器削片	錐	楔形石器	石斧	礫器	磨石	敲石	台石	ナイフ形石器	尖頭器	有舌尖頭器	石鏃	総計	土器	石器集中	遺構	発掘	標高	地域	年代	文献	備考
千葉県																																
1		鴇ノ巣		○																							有		下総台地		古内茂・矢戸三男 1974	文献未入手
2		水砂			1			1																	1		有	15	下総台地		齊藤一陽他 1982	下位の文化層と分布が重なる
3		畑人塚								1													1				有	18	下総台地		田村隆・原田昌幸 1986	表採資料
4		北谷津第Ⅱ			1																		1				有	18～20	下総台地		堀越勝仁・川端正政 1989	上層一括
5		和名ヶ谷下洲池			1																		1				無		下総台地		勝俣喜代治他 1965	表採資料
6		権現原			1			2															7		1	礫群1	有	25	下総台地		白石典之他 1987	
7		石揚		1	1														1				29		2		有	20～22	下総台地		安井健一他 1994	零細なブロック
8		五本松			2			1															3				有	25	下総台地		橋本勝雄他 1989	表採・単独出土
9		林跡			1																		1				有	25～29	下総台地		高橋博文 1992	ブロック外
10		一本桜		3					1														4		?		有	20	下総台地		野村幸希・中山吉秀・古内茂 1976	
11		復山谷　1～3次		34	13										2				3				52		3		有	20	下総台地		鈴木定明他 1978	点数はA・B・Fブロック
11		復山谷　4・5次		19	6			1							1					1					3	炭化物集中1	有	20	下総台地		田村隆他 1982	詳細な点数は不明
12		白井第一																									有		下総台地		鈴木定明 1978	
13		神々廻宮前B地点		4	1																		5		?		有	?	下総台地		末武直則 1985	
14		木苅地			1?																		1				有	22m	下総台地		小谷龍司 1994	上層包含層
15		一本桜南		3	13			3											1				20		3		有	22	下総台地		落合章雄他 1998	第10文化層
16		地国穴台			2				7（掻・削）						1				2				237		2		有	26.5	下総台地		天野努他 1974	
17		榎峠		3																			3				有	21～22	下総台地		鈴木道之助他 1974	グリッド一括
18		別所大山			1			1		1?													47		1		有	20～24	下総台地		鈴木道之助他 1975	
19		木苅峠		31	2				3（掻	1									5	3			2815		2		有	22～24	下総台地		鈴木道之助他 1975	点数は第5・10ユニット
20		船尾白幡		7	22			1		1		1													1		有	25～26	下総台地		野村幸希・中山吉秀・古内茂 1976	実測図掲載文のみ
21		泉		2	3	1																	15				有	22	下総台地		橋本勝雄他 1989	グリッド一括・表採
22		駒形北		2							2												24		1		有	29	下総台地		吉井昌寿他 1993	
23		石揚第2		25	9					2							1		1				38		4		有	26	下総台地		落合章雄他 1999	第4文化層
24		船尾町田																									有		下総台地		未報告	
25		向原		59	15				1						4					1					2		有	25	下総台地		高木博彦他 1974	
26		五斗蒔		1																			27		1		有	27	下総台地		落合章雄 1993	第7文化層
27		油作第1		17	5					1													約70		1		有	26	下総台地		橋本勝雄他 1991	一部、上層出土石器を含む
28		平賀惣行			1?																		1				有	25	下総台地		小谷龍司他 1994	表採
29		高津新山		○	○																		約200		1		有	14～22	下総台地		八千代市歴史民俗資料館 1999	
30		玄蕃所		31	3			15					10			1	2		125				393		1	礫群1?	有	21	下総台地		武藤康弘 1996	
31		草刈場北		9	5												1						64		1		有	29	下総台地		諏訪裕一 1995　菊池健一 2002	
32		荒久（1）		19								1	1										41		1		有	22	下総台地		田村隆他 1989	
33		文六第1		1	4	3				1									1	1			11		2?		有	93	下総台地		寺門義範・瀬笠昭他 1993	点数は5・6ブロック
34		文六第5			1																		1				有	95	下総台地		寺門義範他 1992	一括
35		文六第6		16				5	1				7										29		1		有	86～92	下総台地		諏訪部一他 1996	
36		南河原坂第3		26	4	2		4	3			1	2				2			1			45		4		有	92	下総台地		渋川吉生・島田和高・野口淳・吉川耕太郎 1996	F・H1・I1・J1地点
37		北河原坂第2		76	3			2?		3?									2?	2?			611		3		有	80～85	下総台地		山下亮介・桑原護他 1994	点数は実測図掲載分のみ
38		大崎第1		○	○				○																3～4		有	86～88	下総台地		山下亮介・桑原護他 1994	詳細は不明
39		根崎D地区		○																					?		有	28～30	下総台地		（財）千葉市文化財調査協会 1990	
40		バクチ穴			1																		1				有	50m	下総台地		大野康男他 1983	上層遺構・包含層
41		和良比本山Ⅳ地点		○	3					3															複数?		有	28	下総台地		斉藤他 1991	試掘調査時検出を含む
42		大割		29	16			3	2			1	11	1		1				1			294		3		有	26.5	下総台地		渡辺修一 1991	
43		西山No.3			2																		2				有	26	下総台地		木内達彦他 1993	グリッド一括
44		木戸先		1	2					2															1		有	31	下総台地		林田利之他 1994	異なる文化層と分布が重複
45		飯重新畑			1																		1				有	28	下総台地		榎尾義明他 1974	グリッド一括
46		石神第1（臼井南）		5	2					1													8				有	20	下総台地		小田静夫他 1975	上層遺構覆土中
47		星谷津		39	3														1	1			44		1		有	37	下総台地		鈴木道之助他 1978	
48		木戸場A地点		3	2			11	7	9	3						1	1					37		2		有	35	下総台地		矢戸三男他 1987	
49		御塚山			1																		1				有	26	下総台地		田村隆他 1989	表土中出土
50		大林		44	33	12		15		1		1	4		2				1				612		4	礫群1	有	25	下総台地		田村隆他 1989	
51		神楽場		4																			40		1		有	28	下総台地		林田利之他 1991	零細なブロック
52		高岡大山		3	1			1	2	1	3												11		1		有	34	下総台地		阿部寿彦他 1993	グリッド一括資料を含む
53		高岡大福寺			1		1																2				有	32	下総台地		阿部寿彦他 1993	表採資料
54		関野台貝塚		2				1		1													4		1		有	28	下総台地		小倉和重 1999	
55	×	岩富向原																									無		下総台地		星谷津遺跡の報告書中の周辺遺跡一覧に記載されているが詳細不明	
56		下岩芝栗毛			1?																		1				有	38m前後	下総台地		木内達彦 1994	上層包含層
57		堀越			2																		2				有	30	下総台地		佐藤容一郎 1992	グリッド一括
58		南大蔵		2																			2				有	36	下総台地		戸田哲也 1973	ソフトローム中より出土
59		古込（空港No.14）			3?																						有		下総台地		西野元他 1971	上層包含層出土
60		東三里塚吉野台（空港No.52）		5	2															2			22		2		有	41	下総台地		西野元他 1971	ブロック・点数は房総考古学ライブラリーより
61		木の根拓美（空港No.6）			1																		1				有	40	下総台地		野口行雄他 1981	上層包含層中出土
62		木の根東台（空港No.5）		4	3			15（掻・削）									2	1	2	1?			328		2		有	42	下総台地		野口行雄他 1981	
63		三里塚馬場		21	1			1											2				25		1		有	34～40	下総台地		小林清隆 1982	
64	×	天神峰							1														1				無		下総台地		小倉博・三門準 1982	表面採集
65		十余三稲荷峰（空港No.67）		2000以上	100以上	○		○	○	○			○		○				○	○			○		7		有	40	下総台地		桑本和男 1992	整理中
66		駒井野荒追		8							1	1											10		1		有	40	下総台地		林田利之 1993	
67		西内野第2地点		1?																			1				有	37m	下総台地		高花宏行 1993	単独　周辺に片面加工尖頭器ブロックあり
68		取香和田戸（空港No.60）		9	1	2		1															13		1		有	40	下総台地		小久貫隆史・新田浩三 1994	
68		取香和田戸（空港No.60）			1																		1				有	40	下総台地		永塚俊司他 2002	上層包含層出土
69		東峰御幸畑西（空港No.61）		14	4	2	3	7	9	10	11						2						62		1		有	40	下総台地		永塚俊司他 2000	グリッド一括含めると5ブロック
70		十余三稲荷峰東			2																		4		1		有	40	下総台地		永塚俊司他 2001	
71		天神峰最上遺跡（空港No.64遺跡）		25	9	8		5	2				5	1		1	1						57		3		有	36～41	下総台地		永塚俊司他 2001	
72		一鍬田甚兵衛山								1													8		1		有	42	下総台地		矢本節朗 1997	
73		一鍬田甚兵衛山西（空港No.16）			1																		1				有	41	下総台地		永塚俊司他 2001	単独出土
74		吹入台		1												1							7		1		有	40	下総台地		三浦和信他 1986	
75		織部長峰			1																		1				有	38	下総台地		宮重行・岡宮龍太郎 1999	上層包含層出土
76		桜井平		5	1																		10		1		有	52	下総台地		鶴岡孝之 1998	
77		香山新田新山（空港No.10）		1	1								1										3		2		有	41	下総台地		川島利道・岡宮龍太郎 1985	
78		岩山中袋（空港No.2）			3																		18		1		有	40	下総台地		小林信一・矢本節朗 1997	
79		凪台			1?																		1				有	44～50	下総台地		足立拓朗他 1995	上層グリッド一括
80		稲荷谷		3	10	8				○									○						4		有	75	下総台地		吉田直哉 2002	
81		大網山田台No.4B			3			6	1			2	11										276		1		有	76	下総台地		田村隆 1994	
82		大網山田台No.8		34	2			9	7	9	1				1								175		10		有	80	下総台地		田村隆 1994	
83		南麦台		1	3																		4				有	90～96	下総台地		山口直人・吉田直哉他 1994	グリッド一括・表採
84		草刈六之台			1					1													2				有		下総台地		白井久美子他 1994	上層遺構覆土内他
85		清水川台			1																		31		1		有	50	下総台地		佐久間豊他 1983	
86		境No.2			1?																		1				有	30m	下総台地		牛房茂行 1985	表採・上層包含層
87		美生遺跡群　第6地点		3	1			1															5		1		有	45	下総台地		浜崎雅仁 1994	
88		実籾川　No.244（安養山）			○																						無		丘陵縁辺		立教大学考古学研究会 1974	
89	×	実籾川　No.251（新田野貝塚）																									無		沖積平野		上記文献には記載されていない？	詳細不明
埼玉県																																
90		将監塚			1																		1					76～78	本庄台地		石塚和則他 1986	
91		古川端		1																								68	自然堤防		小久保徹他 1978	グリッド
92		安光寺		1?																								82	諏訪山丘陵		中島宏他 1981	上層遺構覆土中
93		如来堂A			1																		1					95～96	諏訪山丘陵		水村孝行他 1980	単独
94		東山		6	4																				1?			93～99	山崎山丘陵		水村孝行他 1980	縄文早期ブロックと混在

表2　南関東地域の細石器遺跡一覧表

							組									成																
NO.	分布図	遺跡名	出土層位	細石刃	細石核	細石核原型	細石核削片	削器	掻器	彫器	彫器削片	錐	楔形石器	石斧	礫器	敲石	磨石	台石	ナイフ形石器	尖頭器	有舌尖頭器	石鏃	総計	土器	石器集中	遺構	発掘	標高	地域	年代	文献	備考
95		鋼巻			1																				1			66~69	江南台地		埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1981	
96		円阿弥		1																			1						江南台地		利根川章彦他 1991	上層遺構出土
97		北篠場																					1					66~70	江南台地		川口潤 1993	グリッド
98		白草		478		1	6	2	2	21	226				1				2				4416		5			65	江南台地		川口潤 1993	ナイフ形石器2点あり
99		四反歩北		1																			1						江南台地		川口潤 1993	
100		荷鞍ヶ谷戸								1																			江南台地		川口潤 1993	表採
101	×	金山																													上野川勝他 1978	文献未確認
102		荻山南		1																			1					60	江南台地		上野川勝他 1978	表採
103		上前原		1	1																		2					60	江南台地		上野川勝他 1978	表採
104		曹原		9	1																							46	比企丘陵		山内幹夫 1973	表採資料
105		新山		56	6			2															156		3			45	入間台地		西井幸雄他 1995	
106		向山		5																								40	入間台地		西井幸雄他 1995	グリッド
107		横田		174	11	24			25掻器・削器			1	4	1	3	4		2	22	93			4409		17	礫群4		39	入間台地		田中英司他 1995	マイクロ・ナイフ・ポイント重複
108		柳戸		41	8				1														155		3			37	入間台地		西井幸雄他 1995	
109		後B		1																								35~38	入間台地		西井幸雄他 1996	単独
110		富士見一丁目		1	1																		2					32	入間台地		黒坂禎二 1998	単独・上層覆土中
111		鶴ヶ島中学校西																											入間台地		鶴ヶ島市教育委員会 1997	文献未確認
112		小岩井渡場																											秩父山地		飯能市史編集委員会 1988	文献未確認
113		向山			2																		2					63	入間台地		黒坂禎二・田中英司他 1995	上層単独
114		下向山		7	1																		8		1	礫群1?		60	入間台地		岡本健一他 1993	ポイントと重複　組成表は第2期のみ
115		宮地		8	4																								入間台地		戸門秀雄 1972　狭山市教育委員会 1972	表採資料
116		中野		5	2																								加治丘陵		戸門秀雄 1972	表採資料
117		坂東山																											入間台地		入間市遺跡調査会 1992	文献未確認
118		中桂																													入間市史編さん室 1986	文献未確認
119		砂川			1																							101	武蔵野台地		山田誠・森野譲 1990	
120		白旗塚		7	1																								武蔵野台地		山田誠・森野譲 1990	石材不明
121		清橋		26	1															1			113		3			94	低地		西井幸雄他 1986	マイクロに黒曜石、ポイントにチャート
122	×	北中原		1																											所沢歴史研究会編 1979	文献未確認
123		中砂		2	3			○	○						○				○	○					1			91	武蔵野台地		西井幸雄 1986	
124		中砂（第2地点）		4																								91	武蔵野台地		西井幸雄 1986	表採
125		中砂（第6地点）			1																							91	武蔵野台地		西井幸雄 1986	表採
126	×	野中		1																											所沢歴史研究会編 1979	文献未確認
127	×	橋戸		4																											所沢歴史研究会編 1979	文献未確認
128		お伊勢山		7	3																								狭山丘陵		長崎潤一他 1991	包含層
129		膳棚			1																							80~87	武蔵野台地		高山清司他 1970	トレンチ内
130		牛沼第1																											武蔵野台地		矢島洋一他 1984	文献未確認
131	×	番場			1																		1						武蔵野台地		埼玉県教育委員会 1994	表土中
132	×	№10																													川岸良明 1979	文献未確認
133		山下後			17																		1					76~81			中島敏視生他 1989	
134		和田																													志木市 1984	文献未確認
135		東台																											武蔵野台地		大井町史編纂委員会 1989	文献未確認
136		新開																											武蔵野台地		三芳町教育委員会 1981	文献未確認
137		古井戸山																													三芳町教育委員会 1981	文献未確認
138		関沢																											武蔵野台地		富士見市教育委員会 1976	文献未確認
139		打越		1	1																								武蔵野台地		荒井幹夫他 1976	文献未確認
140	×	南通																													志木市 1984	文献未確認
141		本目				1?																						20	武蔵野台地		佐々木保俊・高橋敦 1978	上層遺構調査中
142		池田		13																					1			44	武蔵野台地		佐々木保俊他 1977	下層石器群と重複　詳細は不明
143	×	№80																													新座市教育委員会市史編さん室 1984	文献未確認
144		市場坂																													新座市教育委員会 1988	文献未確認
145		上の原第1																											武蔵野台地		肥留正和・佐々木保俊 1978	文献未確認
146		泉水山		○	○																								武蔵野台地		朝霞市泉水山・下ノ原遺跡調査会 1983	表採
147	×	泉町南																													東洋大学 1976	文献未確認
148		長野中学校																											埋没台地		栗原文蔵 1963	文献未確認
149	×	騎西武家屋敷																													埼玉考古別冊5号に大宮大地に未報告ながら記載あ	文献未確認
150		下崎中郷					1																1					14	埋没台地		騎西町教育委員会 2001	近隣に荒屋型彫器が出土している遺跡あり。
151	×	萩原			1																							13			騎西町教育委員会 2001	
152	×	前			1																							13			騎西町教育委員会 2001	ブロック外
153	×	道上								1																		12~13			騎西町教育委員会 2001	試掘調査時出土
154		足利																											埋没台地		久喜市教育委員会 1980	文献未確認
155		雨沼Ⅰ			1					1																			大宮大地		上尾市教育委員会 1986	文献未確認
156	×	原市第1地点			1																							16	大宮大地		荒井幹夫他 1970	
157		在家																											大宮大地		上尾市教育委員会 1993	文献未確認
158		十二番耕地Ⅱ			1																							10~14	大宮大地		鈴木仁子他 1985	
159		石神		1?																											上尾市教育委員会 1988	文献未確認
160		逆井		46	10																		230		1	礫群1		9	大宮大地		金正始他 1997	組成表は礫群を除く
161		金原																											大宮大地		逆井の報告書では調査中とある	文献未確認
162		山崎北																											大宮大地		宮代町教育委員会 1986	文献未確認
163		提灯木山																											大宮大地		磯野治司 1996	文献未確認
164		阿弥陀堂																											大宮大地		北本市教育委員会 1997	文献未確認
165	×	柏原第2地点																													荒井幹夫他 1970	
166		砂ヶ谷戸Ⅱ																											大宮大地		桶川市教育委員会 1977	文献未確認
167		狐塚																													安岡路洋 1963	文献未確認
168		入耕地																											大宮大地		埼玉考古学会 1997	
169		タタラ山																											大宮大地		埼玉考古学会 1997	
170		天神前			1																								大宮大地		田中和之他 1991	
171		久台		2																								12	大宮大地		埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1984	
172		原		6	1																		11					13~14	大宮大地		村田章人 1997	上層遺構覆土中
173		大針			1																		1					15	大宮大地		西口正純・田中英司他 1990	グリッド出土
174	×	丸山第2																													先史文化研究会 1971	文献未確認
175		下郷		3																									大宮大地		荒井幹夫他 1970	表採資料
176		大和田高明－Ⅰ		3	1																		63		1			16	大宮大地		田代治他 1992	細石刃石核はブロック外
177		高台山		2																								14	大宮大地		大宮市 1968	
178	×	南中野																													浦和市遺跡調査会 1992	文献未確認
179	×	日進三丁目																													梅沢昇 1968	文献未確認
180	×	東北原		○	○																								大宮大地		水村孝行他 1986	
181		北宿																										15	大宮大地		］ 浦和市遺跡調査会 1981	文献未確認
182		馬場北		17	1																							15	大宮大地		浦和市遺跡調査会 1983	ナイフ？のブロックあり　コア：表採
183	×	駒前南																													浦和市遺跡調査会 1992	文献未確認
184		大間木内谷			1																		1					13	大宮大地		竹花博他 1985	上層包含層
185		井沼方		1				4					2		1		3			1			12		2	礫群2		15	大宮大地		小倉均他 1983	
186		明花向C区		3																								14	大宮大地		田中英司他 1984	表採・上層遺構覆土中
187		えんぎ山																											大宮大地		安岡路洋 1969	文献未確認
188		須黒神社			1																		1					11	大宮大地		荻野美代子・鈴木仁子他 1986	上層遺構覆土中
189		本田			1																		1					14.5	大宮大地		浦和市遺跡調査会 1987	ナイフブロックと混在？
190	×	本太三丁目																													中野達也 1992	文献未確認
191		石神貝塚			1																		1					16~17.3	大宮大地		元井茂他 1997	単独
192	×	遺跡名不明																													岩槻市 1985	文献未確認

表3　南関東地域の細石器遺跡一覧表

No.	分布図	遺跡名	出土層位	組成																												
				細石刃	細石核	細石核原型	細石核削片	削器	掻器	彫器	彫器削片	錐	楔形石器	石斧	礫器	磨石	敲石	台石	ナイフ形石器	尖頭器	有舌尖頭器	石鏃	総計	土器	石器集中	遺構	発掘	標高	地域	年代	文献	備考
193		風早		2	2				6:Sc	1					2								28		1			12	下総台地		田中英司他 1978	
194		米島貝塚		1?	1																							12~13	下総台地		小林達雄他 1963	
195	×	中小坂遺跡群 (97-7)		3																									入間台地		樋口尚武 1983	
196		吉丸																													佐藤達夫・小林茂 1964	
197	×	薬師堂		○?	○?																										直良信夫 1961	
198	×	柳田		○?																											埼玉県教育委員会 1973	
199	×	井ノ尻		○?																											直良信夫 1963	
東京都																																
200		狭山B		28	6			1	2			1		1					6	48							有	139	狭山丘陵		吉田格・比留間博編 1970	再堆積土及び上層遺構覆土中
201		浅間谷			1			2												17							有	150	狭山丘陵		吉田格・比留間博編 1970	表採
202		馬場		12	○																				1		有		丘陵		吉田格・久保田正寿 1983	
203	×	大柳		2																											安藤興一他 1967	
204	×	久保																									有				武蔵村山市教育委員会 1991	文献未確認
205		四葉地区		3	1																		4				有	38	武蔵野台地		山村貴輝編 1998	一括資料
206		前野田向第2		1																							有	23	武蔵野台地		小林保男・藤波啓容 1996	上層遺構覆土中
207		根ノ上		2	1																		3				有	不明	武蔵野台地		飯田真編 1988　芹沢長介 1954	採集　覆土一括
208		赤羽台		1?	1?																						有	20~23	武蔵野台地		大谷猛他 1986	上層遺構覆土など
209		No.1		1																									武蔵野台地		平野義和・新藤康夫 1973	表採
210		No.7			1																								武蔵野台地		平野義和・新藤康夫 1973	表採
211		下里本邑		45	4			○					○		○				1				393		4		有	66	武蔵野台地		戸沢充則・下里本邑遺跡調査団編 1982	縄文石器と混在
212		向山																									有				向山遺跡調査団 1986	文献未確認
213		中島		4	1															3			56		1		有	44	武蔵野台地		河野重義編 1995	
214		宮ヶ谷戸		11	1							1							28				41		6		有	45	武蔵野台地		窪田恵一・竹内俊之編 1995	第Ⅲ層文化層
215		丸山東		5																			5		2		有	38	武蔵野台地		窪田恵一・竹内俊之編 1995	第Ⅲ層文化層 10・11ブロック
216		もみじ山		90	5			3					1										99		3		有	43	武蔵野台地		窪田恵一・竹内俊之編 1995	Ⅲ層下部文化層
217		川北第2			1																		1				有	54	武蔵野台地		木田真・水戸部秀樹他 1996	表採
218		武蔵関北		21	1				2						1			1	10				284		4		有	63	武蔵野台地		河野重義編 1993	第1文化層
219		扇山B地点																									有				扇山遺跡調査団 1983	文献未確認
220		城山A地区		1	1																		2				有	60	武蔵野台地		松本完編 1984	ブロック外
221		尾崎		2																							有	34	武蔵野台地		飯江康子 1982	上層包含層
222		豊島園東方																									無				練馬区教育委員会 1982	文献不明
223	×	中村南		2?	3				1				1										7				無	34	武蔵野台地		小田静夫 1968	表採
224		下野谷		14	1																						有	58~60	武蔵野台地		中川寧他 1999	上層遺構出土（第1文化層）
225		鈴木D		13					2						1				4						○	配石1	有	72	武蔵野台地		鶴野孝・堀井晶子・砂田佳弘編 1980	器種組成はO-Po区のみ
226		鈴木（小学校地下通路）		65				6		1						1	2		3				177		1	配石3	有	74	武蔵野台地		戸田正勝 1984	第1文化層
227		田無南町		19				2															88		1	礫群1	有	60	武蔵野台地		都立学校遺跡調査会編 1992	旧石器時代3
228		真砂		9						1									10						5	礫群20	有	22	武蔵野台地		岡崎重見他 1987	砂川期の石器群と混在？
229		富士見台			2																						有	38	武蔵野台地		リチャード・L・ウイルソン他 1999	上層遺構覆土中など
230		井の頭池A地点		○				○											○						2?		有	47	武蔵野台地		山村貴輝編 1980	
231		長久保		26																			101		1		有	45~48	武蔵野台地		吉田格・高麗正編 1992	
232		第5中学校		26				1									1		3				121		2	礫群3?	有	46	武蔵野台地		山村貴輝・釣田光男編 1983	第1・2遺物集中地点
233		北野			1																				?		有		武蔵野台地		三鷹市史編さん委員会 1970	
234		御殿山第2地区C地点		1																							有	56	武蔵野台地		小口達志 1990	上層遺構覆土中
235		御殿山1D		50	5			6	2	3	2		2						12	27			139		4	礫群3	有	56	武蔵野台地		加藤秀之他編 1987	Ⅲ層中部石器群
236		高井戸東																									有				高井戸東遺跡調査会 1977	文献未確認
237		廻沢北		268	7	2														1			278		4		有	45	武蔵野台地		大竹憲昭・武藤康弘編 1981	Ⅳ上2層文化
238		烏山南原		6?																							有	46	武蔵野台地		松井泉他 1987	砂川期の石器群と混在？
239	×	稲荷丸北																									有				稲荷丸北遺跡調査団 1983	文献未確認
240		堂ヶ谷戸Ⅴ		7	1																		8		1		有	47	武蔵野台地		世田谷区教育委員会 2001	第1文化層
240		堂ヶ谷戸Ⅲ		6																			6				有	38	武蔵野台地		松井泉他 1987	上層遺構覆土中
241		下山Ⅱ		1	2			2							1								6		1		有	35~38	武蔵野台地		飯島隆司他 1985	Ⅲ層上部石器群
242	×	恵比寿																													恵比寿・三田埋蔵文化財調査会 1993	文献未確認
243		多摩蘭坂		92				5									1						98		1		有	60	武蔵野台地		来田寛他 2000	石器集中7
244		武蔵台			1																						有	80	武蔵野台地		河内公夫 1999	上層出土
245		武蔵台東			1															6			7		3	礫群4	有	78	武蔵野台地		西野善勝・上本進二他 1999	第Ⅲ下文化層
246		武蔵国分寺跡南方地区		2																							有		武蔵野台地		岡崎完樹他 1985	
247		武蔵野公園		2	1																				1		有	60	武蔵野台地		小田静夫・C.T.Keally編 1973	文献未確認
248		天神町		9	1				1														16		1	配石?1	有	55	武蔵野台地		坂詰秀一・菅田孝他編 1991	組成はSX9のみ
249	×	調布園																									有				都立学校遺跡調査会 1989	文献未確認
250		国分寺市No.37		11	4				1									2					105		1		有	76	武蔵野台地		井上慎也・上敷領久 1995	ソフトローム上部
251		恋ヶ窪東		○																					○		有		武蔵野台地		国分寺市教育委員会 1995	
252		武蔵国分寺跡北方地区			○				○																○		有	77	武蔵野台地		五十嵐彰 1998	報告書未刊
253		日影山		2																			26		1	礫群1	有	79	武蔵野台地		国武貞克他 1999	2号ブロック
254		はけうえ		45	1			2				1							1				294		4		有	71	武蔵野台地		小田静夫・阿部祥人 1980	第Ⅲ上層文化
255		西之台A		1	1																						有		武蔵野台地		伊藤富治夫 1992	
256		西之台B地点		65	1				1							1				1			600		1		有	67	武蔵野台地		小田静夫編 1980	第Ⅲ中層文化
257		新橋		33	2				1						1				1	1			73		1		有	20	武蔵野台地		中津由紀子・千浦美智子他編 1977	第Ⅲ層文化
258		中山谷（8次）		1											3								4		2		有	66	武蔵野台地		J.E.キダー・小田静夫編 1975	第Ⅲ層文化
258		中山谷（9次）		1	1			1							6			1					41		1		有	65	武蔵野台地		吉田格・伊藤富治夫編 1987	第Ⅲ層1号ブロック
259		野川中州北		20	4			17					2		3			1	20	47			2488		1	礫群あり	有	49	武蔵野台地		伊藤富治夫編 1989	西区第Ⅲ層1号ブロック
260		栗山																									有				栗山遺跡調査団 1975	文献未確認
261		武蔵野公園低湿地		5																							有	46	武蔵野台地		千葉寛他 1984	流入遺物
262		出山Ⅱ－Ⅲ層		○	○																		83		1		有	58	武蔵野台地		岡崎英一編 1985	Ⅲ層石器群
262		出山Ⅱ－Ⅳ層		○	○															○			537		1		有	58	武蔵野台地		岡崎英一編 1985	Ⅳ層上部石器群
263		東京天文台構内		2						1									1				12		1		有	56	武蔵野台地		吉田格・今村啓爾編 1983	第Ⅱ文化層2号ユニット
264		羽根沢台		3				2											6	1			191		2		有	54	武蔵野台地		高麗正編 1997	Ⅲa～Ⅲbユニット
265		弁財天池																									有				狛江市教育委員会 1992	文献未確認
266		雨間地区C地点		33	3	2									7		1	2					53		2		有	140	秋留台地		栗原伸好他 1998	
267		二宮（野辺敷石住居跡？）			1?																						有		秋留台地		河野重義 1976	
268		西野																									有				東京西線及び北八王子変電所遺跡調査会 1974	文献未確認
269		下耕地		2	3	11									2								18		2		有	88	加住丘陵		矢島國雄・三村久美編 1974	
270		石川天野C																									有				石川天野遺跡調査団 1984	文献未確認
271		小比企向原C																							?		有				滝口宏・戸田哲也 1987	概要のみで不明
272		小比企向原		4																			4								三村久美他 1971	表面採集
273		美山町赤根		26	2																						有	200~215	関東山地		松井泉他 1998	上層出土
274		丹木境			1																						有	160	加住丘陵		後藤和民他 2002	上層遺構覆土
275		T.N.T.No.301		46	4	2			4										1				57		2		有	170~175	多摩丘陵		比田井民子他 1992	
276	×	T.N.T.No.400																									有				比田井民子 1985　東京都教育委員会 1983	
277		T.N.T.No.388		4	9									1									14		2		有	94~101	多摩丘陵		石崎俊幸他 1987	第1文化層
278		T.N.T.No.426			1												1	1		7			1023		6		有	87	多摩丘陵		佐藤宏行編 1989	第1文化層
279		T.N.T.No.424		2																							有	88	多摩丘陵		宇佐見義春 1996	単独・一括
280	×	T.N.T.No.721		2																							有	85	多摩丘陵		竹尾進他 1989	単独
281	×	T.N.T.No.707																									有					文献不明
282		T.N.T.No.740		7	1			1											21						1	礫群2	有	130~150	多摩丘陵		比田井民子他 2002	第1文化層
283		T.N.T.No.454		6																			6				有	90~104	多摩丘陵		新井良博 1985	上層出土ほか
284		T.N.T.No.271・452		1																							有	80~84	多摩丘陵		川島雅人他 1987	上層遺構覆土中
285		T.N.T.No.769		300	20														1				1000		9	礫群・炭化物	有	120	多摩丘陵		阿部祥人編 1982	
286		T.N.T.No.863			1																						有	106	多摩丘陵		石崎俊幸他 1987	上層出土

表4　南関東地域の細石器遺跡一覧表

				組成																												
NO.	分布図	遺跡名	出土層位	細石刃	細石核	細石核原型	細石核削片	削器	掻器	彫器	彫器削片	錐	楔形石器	石斧	礫器	磨石	敲石	台石	ナイフ形石器	尖頭器	有舌尖頭器	石鏃	総計	土器	石器集中	遺構	発掘	標高	地域	年代	文献	備考
287		T.N.T.No366			1																			1				有	111	多摩丘陵		原川雄二他 1991	単独
288		T.N.T.No9		2	2																		4				有	95	多摩丘陵		千田利明 1999	
289		T.N.T.No249		3	4																1			8		1		有	170~179	多摩丘陵		竹武俊樹他 1998	かなりの斜面地のため土層堆積不良
290		小山高町		○	○	○														○	○					○	○	有		多摩丘陵		伊藤玄三・吉田正文他 1987	低位面・高位面
291		根岸山2文		85	6	5		2																324		2	配石1	有	113	相模野台地		関口昌和 1995	
291		根岸山3文			5																						1		有	113	相模野台地		関口昌和 1995	
292		木曽森野		5	1											1				2				40		2	礫群1・配石1	有	97	相模野台地		前田秀則 1993	
293		川島谷遺跡群第3地点		1																								有	87	多摩丘陵		大坪宣雄他 1984	上層流れ込み
294		なすな原		1				1						2	2						5			11	7			有	46~52	多摩丘陵		町田直子他 1984	縄文草創期
295	×	亀井																													町田市史編纂委員会 1974	文献未確認
296	×	多摩湖遺跡群																													「多摩湖の歴史」編集委員会 1980	文献未確認
297	×	王子ヶ城																													大場磐雄他 1969	文献未確認
神奈川県																																
298		風間-Ib	BBO U	19	1			15					5		6	8	20	10	1	6			91		3	礫群4	有	178	丘陵		麻生順司他 1989	
299		古淵B-2a	B1	7				1					1						8				17		2	礫群○	有	105	相模野台地		松井良他 1990	2a文化層のうち11・40ユニットのみマイクロ・点
300		中村-II	BBO II	10	5	3		2					1					1	1				23		1	礫群1	有	78~90	相模野台地		伊藤恒彦他 1987	
301		下九沢山谷-I	BBO U	1	1																								有	115	相模野台地		中村喜代重 1979	単独?(調査区外)
302		瀬戸村坂	BBOU~L1	○																										無		相模野台地		中村喜代重1979に記載	
303		上溝駅東南方			1																									無		相模野台地		岡本勇 1964	表採
304		塩田		4	1			1																		○		有		相模野台地		岡本勇 1964	
305		増原		○?	○?																								無	218~250			佐藤達夫 1978	表採資料
306	×	釜の上		○?	○?																								無				相模湖町教育委員会 1974	表採?
307		横山坂		○						○																				無				安藤洋一 1974	文献未確認　覚量型彫器?
308		田名塩田原-I	BBO II	1												1			1						2	礫群2	有	81	相模野台地		滝澤亮他 1993	
309		当麻第3地点			1																									有		相模野台地		白石浩之他 1977	上層遺構覆土内
310		勝坂第45次-草創期	2		1			6				1			2		3			10	2		584	21	3	礫群1・住居址	有	54~68	相模野台地		内川隆・高橋真実 1993	
311		新戸	L1S L1	3												1		3							7		2		有	46~51	相模野台地		御堂島正・砂田佳弘他 1988	
312		田名塩田B地区-II	BBO	107	18			4				1	17			1	4		1	1			154		1	配石?1	有	57	相模野台地		麻生順司他 1999	
313		相模野No39	L1H	1																										無		相模野台地		小野正敏編 1971	新旧採集
314		大和市No202	L1H U																		1			4		1		有	79	相模野台地		村澤正弘 1996	細石刃石核の調整剥片
315		相模野No149 L1S下部石器群	L1S L	62	11			6	1															206		1?	礫群1?	有	80~81	相模野台地		鈴木次郎 1989	
316		大和市No192																											無				豊田秀治 1990	文献未確認
317		上野第1-III-I群	BBO LL	225	6	3		3	1			1			1									239		7	礫群1	有	76~79	相模野台地		相田薫他 1986	
317		上野第1-III-III群	BBO LL	5											14									19		5		有	76~79	相模野台地	○	相田薫他 1986	
317		上野第1-III-II群	BBO II	95	5	2		3				1			1									107		24	礫群1	有	76~79	相模野台地		相田薫他 1986	
317		上野第1-II	L1S U	19	2		4	2	2						3			1		5	10			48	24	31	礫群4	有	76~79	相模野台地		相田薫他 1986	結晶片岩集中箇所1
318		上野第2	L1S U		1																									有	70~77	相模野台地		戸田哲也他 1984	単独出土
319		上野第3-I	BBO L		1											1									6		1		有	70~80	相模野台地		相田薫 1988	細石刃石核は単独
320		上野第5-II	BBO II		4								1							1			29		1	礫群2	有	76	相模野台地		小池聡他 1993	
321		上野第6																											有		相模野台地		上野遺跡第6地点発掘調査団 1994	文献未確認
322		相模野No146		1	1																								無		相模野台地		小野正敏編 1971	表採
323		相模野No154	L2	1?																										無		相模野台地		小野正敏編 1971	新旧採集
324		相ノ原V地点(2次調査)	BBO II	3					1																	1		有		相模野台地		伊東恒彦他 1990	
324		相ノ原V地点(4次調査)			1																									有		相模野台地		小池聡他 1997	グリッド
325		台山-II	BBO U	332	15			20				1					1						369		2		有	73	相模野台地		麻生順司他 1988　織笠昭他 1992	1号・2号ユニット
326	×	大和市No26																											無		相模野台地		大和市教育委員会 1990	文献未確認
327		長堀北-III	BBO U	7															1				8		4	礫群2	有	70	相模野台地		滝沢亮・小池聡 1991	
327		長堀北-II	L1S II	52	1	1	11						1						13			79		9	礫群4	有	70	相模野台地		滝沢亮・小池聡 1991	
328		長堀南-II	L1H	1											3					3			16				有	70	相模野台地		麻生順司他 1987	予備調査出土
329		下鶴間長堀-Ia	L1S L	321	27	15		16							3		1		1				383		1		有	72	相模野台地		堤隆他 1984	
330		深見諏訪山-II	BBO U	17	1			1															?		3	配石1	有	67	相模野台地		堤隆他 1983	
331		上和田城山II 1区1ブロック	BBO LL	2													3		2	1			8		1		有	50~54	相模野台地		中村喜代重他 1979　織笠昭他 1999	小石刃あり
331		上和田城山II 4区	BBO L1	52	4	1		18					1			17		37		12			142		3	炉址1・炭化物	有	50~54	相模野台地		中村喜代重他 1979　織笠昭他 1999	
331		上和田城山II 3区	BBO U	1											3									21		1		有	50~54	相模野台地		中村喜代重他 1979　織笠昭他 1999	
331		上和田城山II 5区	BBO U																							掘り込み遺構	有	50~54	相模野台地		中村喜代重他 1979　織笠昭他 1999	
331		上和田城山-I	L1S U	29	13	1		4							2	6	2						57		2	礫群2	有	50~54	相模野台地		中村喜代重他 1979　織笠昭他 1999	
332		上草柳第1-I	BBO II	152	6	5		4	1						1				1	4			174		2	礫群2・炭化物	有	65	相模野台地	○	堤隆他 1984　織笠昭他 1992	
333		上草柳第3東	L1S	3																2	1			12				有	65	相模野台地		堤隆他 1984　織笠昭他 1992	単独出土
334		上草柳第3中央-I	BBO L1	97	7	2		3					2						2				113		1	礫群1	有	65	相模野台地		堤隆他 1984　織笠昭他 1992	
335		上草柳第4	L1S-U~B1	2																				2		1		有	65	相模野台地		堤隆他 1984　織笠昭他 1992	細石刃2点のみ
336		草柳中村-I	BBO II	11				3											1				15		2		有	61.5	相模野台地		小池聡他 1990	
337		福田札ノ辻-I	L1S		1																									有	49	相模野台地		相田薫他 1988	単独出土
338		善光寺南側	L1S	2																				3		1		有	50	相模野台地		相田薫 1992	
339		報恩寺	BBO U	68	12	1		9	3			4			10				2?				595		1		有	47	座間丘陵		鈴木次郎・矢島國雄 1979	
340		寺尾-I	L1S	12		1			5						6			1			68			83	46	21		有	57	座間丘陵		鈴木次郎・白石浩之 1980	
341		綾瀬市No45	BBO U	1																										無	39	相模野台地		矢島國雄 1996	試掘調査
342		綾瀬市No138			1																									無	42	相模野台地		矢島國雄 1996	表採
343		宮久保			2?																									有	23~34	相模野台地		國平健三他 1987	2次堆積
344		吉岡A区	L1H U	1		1												1						44		1		有	42	高座丘陵		砂田佳弘他 1998	細石刃単独あり(1点)
345		吉岡B区	L1H U	1018	74	62									1	2		8			5			4634		4		有	47	高座丘陵	○	砂田佳弘他 1998	
346		吉岡B区	BBO		1																			1				有	25~43	高座丘陵		吉田政行他 2003	単独出土
346		本入こざっ原-II	L1S L	24	2			1					1				1		3				32		1		有	51~52	相模野台地		井関文明他 1996	
347		鳥居前-第1文化層	BBO	185	4											1									190		3		有	26~36	高座丘陵		栗原好伸他 2002	
347		鳥居前-草創期	L1S	3	1			1	1													8			172		1		有	26~36	高座丘陵		栗原好伸他 2002	第2石器集中地点
348		慶應義塾湘南藤沢キャンパス内-I	L1H UU		1																1					3	礫群2	有		高座丘陵		岡嶋唯巳・五十嵐彰 1992	
349		代官山-III	L1H U	461	35	8			1										1			4			511		7		有	40	相模野台地	○	砂田佳弘他 1986	
349		代官山-II	BBO U	12	4			1								2	1		1	1			22		7	礫群8	有	40	相模野台地	○	砂田佳弘他 1986	ブロック・礫群の細分に注意
350		南鍛冶山507	BBO		1			1							1									18		1		有	25	相模野台地		望月芳・網潤史 1996	
351		栗原中丸	BBO L1	3	3										8						1			167		6	配石1	有	68	相模野台地		浅野寛他 1988	
351		栗原中丸-III	BBO II	1													1			7					4	配石2	有	70	相模野台地		鈴木次郎他 1984	
351		栗原中丸-II	L1S L	117	1	2		9					3		44		7						183		12	配石1	有	70	相模野台地		鈴木次郎他 1984	
352		栗原中谷-I	BBO II	4																							1	礫群2	有	64	相模野台地		小池聡他 1990	
353		柏ヶ谷長ヲサ-IV	L1H U	155	2	4		2					2		3								168		1	配石2	有	51	相模野台地		堤隆他 1997	
354		かしわ台駅前-II	L1H UU	84	1																				85		1		有	48~57	相模野台地		小池聡他 1987	
354		かしわ台駅前-I	BBO II	141	4	4							1	1										161		1		有	48~57	相模野台地		小池聡他 1987	
355		杉久保蓮谷	BBO L	29																				52		1		有	40~50	相模野台地		井辺一徳他 2001	
356		上今泉中原			2?																		2				有	57~60	座間丘陵		伊東秀吉他 1992	上層出土
357		花見山			1																									有	50~60	多摩丘陵		坂本彰他 1995	上層遺構覆土内
358		亀谷狐穴																													大塚精夫・北川吉明 1981	文献未確認
359	×	中里		○																										無				呉平一比古 1980	表採
360	×	祥泉院		○																										無				呉平一比古 1980	表採
361		打木原	L1H U	150	11																				626		3		有	30	長井台地		佐藤明夫 2002	
362	×	長井畑嵐																														文献不明
363		大塚東																											有	120	三浦丘陵		長澤邦男他 1991	
364		赤坂(第1次)																											有				岡本勇編 1977	文献未確認
364		赤坂(第6次)			1?																									有				中村勉・緒崎千鶴子 1994	トレンチ内
365		長作			1																									無				大塚真弘・山田昌久・宇内正城 1974	表採
366		宮ヶ瀬サザランケ-IIb	BBO L	67	12	2		2							1		3							230		2		有	234~241	丹沢山地		鈴木次郎・重田昌他 1996	

表5　南関東地域の細石器遺跡一覧表

NO.	分布図	遺跡名	出土層位	細石刃	細石核	細石核原型	細石核剥片	細器	細器	細器	細器剥片	細	細器石器	石斧	細器	細石	細石	台石	ナイフ形石器	尖頭器	有舌尖頭器	石槍	細計	土器	石器集中	遺構	発掘	標高	地域	年代	文献	備考
367		宮ヶ瀬大野原（No.13D）－Ⅱ	BBO L												2			1					3			配石1	有	256～268	丹沢山地		森本次郎他 1998	細石器なし
368		虚尾		2																							有	102～104	丹沢山地		『虚尾遺跡』	
369		日向南新田	L13U～BBOU												5	1										細器2・炭化半	有	82	沢山地（丘陵部）		服部実喜他 1987	広範囲に敷面に検出
370		上粕屋・川上（No.5）	BBO U	56	6	1		2															65		1		有		宮岡丘陵		宍戸信吾・宮坂淳一 1998　諏訪哲伸 1994	
371	×	上粕屋・三本松（No.7）	BBO H		3																		17		1		有	40	河岸段丘		宍戸信吾・宮坂淳一 1998　諏訪哲伸 1994	
372		上粕屋・上尾崎（No.10）－Ⅱ	BBO	1											3								10		1		有		上粕屋扇状地		三鳳郷町他 1999	
373		沼目・坂戸		○	○			○						○	○		○			○					○		有		伊勢原台地		伊勢原市教育委員会 1990	
374	×	下糟屋上町登																													諏訪哲伸 1994	文献未確認
375	×	岡崎・天神下（No.77）																													諏訪哲伸 1994	文献未確認
376		三ノ宮・下谷戸（No.14）－Ⅲ	BBO H	825	36			7	1	1		2	16		8		7	10					4038		2	細器1	有	50～54			三鳳郷町他 1999	
377		久野一本松			1																		1				有		久野丘陵		大島慎一他 1985　小田原市 1995　諏訪	文献未確認　試掘調査
377		久野一本松	BBO		1			1				1	1										6		1	細器1	有	92	久野丘陵		鹿生隆町他 2002	
378		久野坂下窪			1																						有	60	久野丘陵		鹿生隆町他 2002	上層遺構覆土中
379		谷津山神	BBO L												15	1									4		有	60	谷津丘陵		山口隆志他 1992　小田原市 1995　諏訪	細石器無し
380	×	蒼葉内関戸			27																						無				大倉潤・加藤学 1995	表採

※1　分布図×は遺跡分布図にドッティングできなかった遺跡

※2　出土層位は被変川西のみ記載した

東海東部における細石刃文化

富樫　孝志

1　研究の経過

①休場遺跡発掘調査以前

1940～1950 年代がこの時期に当たる。各地高等学校の郷土研究部や郷土史研究者による遺跡の分布調査が行われ、旧石器時代遺跡の存在が次々に明らかになった。この時期に採集された資料も多い。瀬川 1995 によれば、1949 年に鈴木恒治氏により、ナーゴ山遺跡から細石刃が報告されているらしい。文献は未確認であるが、岩宿遺跡発見と同年に静岡県で旧石器の報告があったことになる。

②休場遺跡の発掘調査

1962 年と 1964 年の 2 回にわたって明治大学と沼津女子商業高校により休場遺跡が発掘調査され、多量の細石刃、細石核とともに石囲炉を2基検出した。愛鷹・箱根山麓では、ナイフ形石器文化に属する炉跡はいくつか発見されているが、細石刃文化に属する炉跡は、後に発見される野台遺跡の例とともに貴重な存在である。休場遺跡は 1979 年に国指定史跡となった。同年、岩宿遺跡も国史跡に指定されており、旧石器時代の遺跡としては全国初の指定である。そして、休場遺跡出土の細石核は、鈴木 1971 によって、野岳型とともに休場型として型式設定された。また 1968 年、秋本真澄氏によって、愛鷹・箱根西麓の資料集成が行われた。

③各地での発掘調査増加

1970 年代後半からは、各地で旧石器時代遺跡の発掘調査が行われるようになり、細石刃文化に属する資料も増え始めた。この時期の発掘調査としては、1977～1979 年に 5 次にわたって行われた寺谷遺跡の調査や 1978 年の中沢田円丸遺跡の調査を挙げることができる。

1980 年代に入ると、大規模開発が増加し、これに伴って発掘調査も増加する。主要遺跡の発掘調査を列記すると下記のようになる。

1981 年　広野北遺跡（～1982 年）
1983 年　中尾遺跡、野台遺跡
1985 年　中見代第Ⅱ・第Ⅲ遺跡（～1986 年）
1985 年　大奴田場遺跡、柳沢 B 遺跡、柳沢 C 遺跡（～1986 年）
1986 年　中村 C 遺跡
1988 年　五輪遺跡、観音洞 G 遺跡、陰洞 E 遺跡（～1989 年）
1989 年　山中城 E 遺跡（山中城跡三ノ丸第 1 地点）
1990 年　匂坂中遺跡（～1993 年）
1991 年　小平 B 遺跡、小平 C 遺跡
1993 年　上原遺跡
1995 年　高見丘Ⅳ遺跡（～1996 年）
1997 年　第 2 東名高速道路新設に伴う事前調査開始

これらの中で、中村C遺跡、山中城 E 遺跡、大奴田場遺跡、上原遺跡は、多量の細石核、細石刃が出土したことで特記できる。また、匂坂中遺跡は、8 万平方メートルという、おそらく1回の調査としては全国で最大と思われる広大な面積を調査し、旧石器時代集落の全貌を明らかにしたが、細石刃文化に属する資料はわずかであった。磐田原台地における細石刃文化期の実態を示唆している。近年、愛鷹山麓では、第2東名高速道路の事前調査によって、多数の旧石器時代遺跡

が調査されている。細石刃文化に関する資料がどれほどあるか明らかでないが、成果を期待したい。

調査事例の増加に対して研究事例はあまり多くない。ここでは報告書の考察ではなく、独立した研究事例を概観する。まず鈴木 1971 が挙げられる。ここで休場遺跡出土の細石核を野岳型とともに休場型として型式認定された。以後、野岳・休場型と併記され、休場遺跡の細石核が標準資料となる。次に高尾1981では、小塚A遺跡出土の細石核が再検討され、静岡県東部では珍しい船野型として評価された。1995 年には、静岡県考古学会によって、愛鷹・箱根山麓の旧石器時代の編年に関するシンポジウムが開かれ、その中で細石刃文化の編年が検討され、前嶋1996と砂田1996によって、編年が示された。両者とも同じ資料を対称としているが、石器群の評価に違いがあり、異なった編年となっている。今後の重要な検討課題である。

2　遺跡の分布

今回扱う東海東部の遺跡分布は、静岡県東部の愛鷹・箱根山麓と静岡県西部の磐田原台地に2分され、これ以外の地域ではきわめて希薄となる。また、愛鷹・箱根山麓は、併記されることが多いが、別の山麓であるため、ここでは別地域として扱う。

①箱根山麓

箱根山の外輪山が放射状に延びる尾根上に遺跡が分布している。遺跡が分布するのは山の中腹付近で、山頂、芦ノ湖に近い部分や逆に平野に近い部分には分布していない。箱根の黒曜石や近年確認された黒色緻密安山岩の原産地に近い所でもある。行政的には三島市、熱海市、函南町に属している。火山灰が厚く堆積しており、層位的に良好な地域である。登録された遺跡は多いが、ほとんどの遺跡が表面採集資料によって存在が知られているのみで、内容は明らかでない。この中で、山中城E遺跡、大奴田場遺跡、上原遺跡では、発掘調査によってまとまった資料が得られている。

②愛鷹山麓

富士山の南側にそびえる標高 1178mの愛鷹山の南側に広がる緩斜面に遺跡が分布している。遺跡が分布するのは、中腹から麓に近い部分で、国史跡の休場遺跡の標高280mを最高に、中沢田円丸遺跡の標高40mまで、高低差を持って分布している。行政的には沼津市、長泉町に属す部分である。愛鷹山の山裾は、西は富士市側、東は裾野市側にも広がっているが、遺跡は南側の沼津市、長泉町に集中している。箱根山麓とともに、火山灰が厚く堆積しており、層位的に良好な地域であり、発掘調査によって明らかにされた遺跡も多い。さらに第2東名高速道路の事前調査によって、現在も多くの遺跡が調査されている。

③富士川流域

富士山の西側麓になる。富士川の支流である芝川沿い、標高 200mに小塚 A 遺跡が知られている。近年、縄文時代草創期の大鹿窪遺跡が調査された。大鹿窪遺跡では細石刃などは出土していないが、小塚A遺跡とともに旧石器時代終末から縄文時代草創期にかけての研究に重要な資料を提供している。

④牧之原台地

大井川の南側に広がる広大な台地で、島田市にある吹原木遺跡で細石核、風西遺跡で細石刃が採集されている。後述する磐田原台地に似た印象のある台地だが、旧石器時代の遺跡はほとんど知られていない。近年、静岡空港の建設に伴って、大規模な発掘調査が行われているが、旧石器時代の資料は断片的である。実際に旧石器時代の遺跡は少ないのであろう。

⑤磐田原台地

静岡県内で、愛鷹・箱根山麓と旧石器時代遺跡の分布を2分する台地である。天竜川の東側に広がる細長い三角形の台地である。行政的には袋井市、磐田市、豊田町、豊岡村に属する。遺跡は、天竜川を望む台地の西側縁辺付近に集中している。寺谷遺跡、広野北遺跡、匂坂中遺跡、山田原Ⅱ遺跡など発掘調査された遺跡も多いが、層位的条件は悪く、文化層の認定は困難である。

⑥三方原台地

浜松市、浜北市に属する緩やかな地形の台地である。梶池遺跡と前原Ⅷ遺跡で単独資料が得られているのみである。

台地上で発掘調査が行われているが、旧石器時代の遺跡は発見されていないことから、旧石器時代遺跡自体が少ないのであろう。

これら以外に静岡市(旧清水市)の日本平遺跡で細石核採集の記録があるが、遺跡の分布域としては扱わない。

以上のように、遺跡分布は東部の愛鷹・箱根山麓と西部の磐田原台地に、ほぼ限られており、これ以外の地域では、旧石器時代の遺跡が極端に少なくなる。発掘調査の数が少ない訳ではないため、旧石器時代の遺跡が少ないのが実状なのであろう。この傾向は今後も変わらないと思われる。

3　技法と石材

これも遺跡の分布と同様、東部と西部で明確に分けることができる。要約して言えば、休場型・黒曜石の東部と船野型・シルト岩の西部である。

①愛鷹・箱根山麓

この地域で出土する細石核は、ほとんどが休場型と考えて良い。石材は、黒曜石にほぼ限定されており、他はチャートなどがわずかに見られる程度である。

石核の素材は、厚手の板状剥片や立方体の剥片が使われている。自然面を残すものも多く、手の平で転がせる程度の大きさの原石を使っていると思われる。打面調整は、多方向から行う場合が多いが、平坦打面や自然面打面のものも見られる。打面は、作業面に対して垂直になるものと鋭角に傾斜するものがある。休場遺跡の細石核は、特に傾斜がきつく、作業面との角度が70度程のものが多い。打面再生は頻繁に行っていたようである。大奴田場A遺跡では、長さ5cmを超える細石刃が目立つが、細石核の作業面の高さは、その半分程度であり、実際に打面再生剥片も出土していることから、打面再生の多さをうかがうことができる。なお、打面再生剥片の中には使用痕が付いているものや、山中城E遺跡では、削器や掻器に再加工した例も見られる。打面転移は少ないものの、数例見られる。転移方法は下設打面への転移の他に、90度の転移がわずかに見られる。

上記以外の技法としては、扁平な板状剥片を素材として、石核調整をあまり加えないまま小口面や側面を作業面としているもので、休場型とは考えられないものの、休場型に少数ながら伴う形態として考えられている。

石材は、黒曜石に限定されていると言って良い。近年は、沼津工業高等専門学校の望月明彦氏による原産地推定が積極的に進められており、出土資料全点の原産地推定によって多くの成果が上がっている。細石核に使われている黒曜石は、長野県産、神津島産、箱根産、伊豆半島の柏峠産が見られる。各産地の黒曜石が均等に用いられる例は少なく、偏る場合が多い。大奴田場A遺跡では長野県産、山中城E遺跡と上原遺跡では神津島産の黒曜石が主体である。

上記以外に断片的ながら、土手上遺跡と西洞遺跡では船野型細石核も認められる。また、愛鷹山麓の東にある小塚A遺跡でも船野型細石核がまとまって出土している。いずれも後述する磐田原台地の資料と技術的に共通しており、石材も頁岩などを使っている。

②磐田原台地

この地域で出土する細石核は、船野型が特徴的である。石核の素材は円礫を分割して得ている。打面は分割面に設定される場合が多い。打面調整はほとんど見られず、平坦面のまま細石刃を剥離している。打角は90度に近いものがほとんどである。打面再生と打面転移は見られないが、作業面を大胆に切り落とすような作業面再生が見られる。打面ではなく、作業面を再生することによって、細石刃剥離の進行に伴う打面と作業面の角度を調整していると考えられる。作業面は1面が原則のようであるが、広野北遺跡の接合資料に、表裏2面に作業面を設定した可能性を示すものがある。

船野型以外には、円柱状や角柱状になる細石核も見られる。これらも打面調整はみられず、打角が90度に近いなど、船野型と共通する属性を持っていることから、細石刃剥離が進行して船野型細石核が変形した姿か、あるいは、作業面を再生した剥片から、引き続き細石刃を剥離しても同様の石核を得ることができる。

石材は、台地の西側を流れる天竜川で採集できるシルト岩や硬質砂岩の円礫を使っている。磐田原台地では黒曜石のような搬入石材そのものが微量であり、細石核や細石刃には見られない。太平洋沿いに移動すれば、地形的な障害を受けることなく、また、天竜川で採集できる石材と同様の石材を、途中の大井川や安倍川で補給しながら、箱根や伊豆半島

の黒曜石原産地に至ることができるが、そのような行動を想定する根拠はない。

4　組成の特徴

組成の解明は必ずしも容易ではない。愛鷹・箱根山麓では良好な層位が見られるが、休場層上位から、ナイフ形石器や尖頭器と混ざって出土することが多く、細石刃文化に属する資料の分離は困難である。むしろ、無理に分離するのではなく、ナイフ形石器や尖頭器と共伴すると考えることもできるが、後述するように、現在では否定的である。また、磐田原台地では、層位的条件が悪く、細石刃文化に属する資料の抽出はなお困難である。

このような中で、箱根山麓の山中城E遺跡、大奴田場A遺跡、上原遺跡は、細石刃文化期の純層を調査したといって良く、組成の解明に重要な手がかりを与えている。この3遺跡の組成を見ると、細石刃、細石核の他には使用痕のある剥片が目立つくらいで、削器、掻器、彫器が数点伴う程度の単純な組成である。山中城E遺跡などに、細石核の打面再生剥片を掻器に転用している例が見られることから、細石核から剥離される調整剥片や再生剥片を再利用する技術構造を想定すれば、製作される器種も限定されてくるために、単純な組成になると考えられる。これらの事例によれば、従来指摘されていたナイフ形石器や尖頭器の共伴は否定的となる。

磐田原台地では、層位的条件の悪さから、文化層の認定ができないため、次善の策として、同時期と思われる遺物が分布する範囲を設定することで、文化層認定に代えている。これによって、細石刃文化に属する資料を抽出しているが、やはり、使用痕のある剥片が目立つ程度の単純な組成となっている。

以上のように、東海東部における細石刃文化に属する石器の組成は、単純な内容で、細石刃には多様なスクレイパーや彫器が伴うという、全国的な傾向から考えると異質ともいえる。

5　編年

先に示したように、層位的条件の良い愛鷹・箱根山麓でも、細石刃文化に属する遺物は、休場層の上位にまとまり、出土層による上下関係は見いだしにくい。そのため、出土層による細石刃文化の編年は容易ではない。そこで、前嶋1996と砂田 1996 では、神奈川県の相模野台地の編年を参考にした編年が示されている。両者では同じ資料を対象としているが、下記のとおり内容に違いが見られる。

前嶋 1996
第1段階　野台遺跡
第2段階　山中城E遺跡
第3段階　大奴田場A遺跡
第4段階　休場遺跡、柳沢C遺跡
第5段階　小塚A遺跡

砂田 1996
第1段階　野台遺跡、柳沢C遺跡
第2段階　山中城E遺跡、大奴田場A遺跡など
第3段階　休場遺跡
第4段階　小塚A遺跡

伊豆半島の柏峠産黒曜石を使用して典型的な休場型細石核を作る野台遺跡を最古に位置づける点と、船野型細石核がある小塚A遺跡を最新に位置づける点は共通している。

これに対して大奴田場A遺跡や柳沢C遺跡の位置づけに違いが見られる。前嶋1996、砂田1996ともにシンポジウムの発表要旨、コメントであるため、簡潔な内容となっており、各遺跡の位置づけの根拠は文章化されていない。両者の編年根拠を確かめないまま、筆者の意見を挟むのは適当ではなく、そもそも本稿の目的は、筆者の主張ではなく、東海東部における細石刃文化研究の現状と課題を整理することにあるので、編年2案があることを示すにとどめる。また、この編年案の後に報告された上原遺跡は、報告者によって、細石核にバリエーションが増えていることや細石核の打面再生剥片を転

用した掻器の存在から、山中城E遺跡に並行し、大奴田場A遺跡に後出する段階と位置づけている。

磐田原台地での細石刃文化に属する資料は、現在のところ、時期差を認める根拠はなく、同時期と見ておくのが適当であろう。

6　研究の課題

東海東部のおける細石刃文化の研究は、報告書の考察以外にまとまった研究例が少ないため、細石刃文化の研究そのものが今後の課題であり、具体的には先述した各項目すべてに課題が含まれている。

これまでの記述で明らかなように、東海東部の細石刃文化は、東部の愛鷹・箱根山麓と西部の磐田原台地に2分でき、両者の関連を考えたいところであるが、今のところ両者を結ぶ資料は存在しない。わずかに土手上遺跡や西洞遺跡、小塚A遺跡の船野型細石核が、東部にありながら磐田原台地の資料に類似しているが、静岡県中部地域に旧石器時代の遺跡自体がほとんどない現状では、これをもって愛鷹・箱根山麓と磐田原台地の関連を論ずることはできない。また、長野県の黒曜石原産地を取り込んだ広大な行動域が想定される愛鷹・箱根山麓と、搬入石材が極めて少なく、広域な行動域を想定しにくい磐田原台地では、余計に関連をうかがうことはできない。静岡県中部地域における旧石器時代遺跡の稀少さは今後も変わらないと思われることや、両地域をまたぐ行動域は、今のところ考えられないことなどから、愛鷹・箱根山麓と磐田原台地を分けて考える方が適当である。

①愛鷹・箱根山麓

望月明彦氏による黒曜石の非破壊・短時間分析法の開発により、黒曜石の全点産地推定が行われるようになり、様々な成果を上げると同時に、旧石器時代集団の行動論に新しい地平を開いた。すなわち、当時の集団が、長野県の黒曜石原産地を取り込んだ広域な行動域を持ち、愛鷹・箱根山麓と長野県の黒曜石原産地を往復する移動生活を送っていたことが明らかにされた。これに対し、神津島や柏峠といった近隣の黒曜石を主体とする石器群も認められることから、近隣石材を開発していた時期も想定できる。両時期の前後関係に興味が持たれるが、これには、先に示した編年2案を検討しなければならない。編年の検討にあたっては次の点が重要な視点となるであろう。休場型細石核には、遺跡ごとに形態変化がある可能性が指摘されているが、その内容を検討した例はない。また、休場型以外の細石核も確実に伴っているが、この形態を検討した例もない。さらに大奴田場A遺跡などでは、5cmを越える長い細石刃が存在する。これらの点の検討が編年研究の鍵になってくると思われる。

愛鷹・箱根山麓では、長野県出土資料や神奈川県出土資料との比較も重要である。共に黒曜石の原産地を共有しているため、比較検討することで、愛鷹・箱根山麓における細石刃文化の地域色が明らかにできると考えられる。

②磐田原台地

先に述べたように、編年については、今のところすべて同時期と考えておくのが妥当である。細石核については、船野型細石核とともに円柱状、角柱状の細石核が確実に存在する。これが、細石刃剥離が進行して変形した船野型細石核なのか、船野型とは別の形態が存在するのか、あるいは、作業面再生剥片の再利用なのか検討する必要がある。どの結論になるかによって、磐田原台地の細石刃文化の様相は異なってくる。

搬入石材の極少な磐田原台地では、黒曜石との結びつきが強い野岳・休場型細石核よりも、地元石材との結びつきが強い船野型細石核を採用したと考えられる。したがって、磐田原台地の細石刃文化を考えるにあたっては、愛知県、岐阜県の資料との比較が重要となってくる。天竜川で結ばれる長野県との関連は、今のところ薄いと考えられ、むしろ、海老山遺跡などとの関連が考えられるからである。

文献

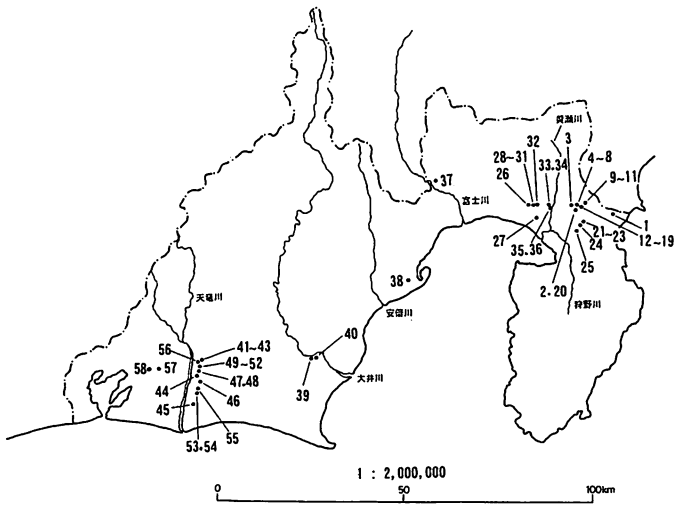
秋本真澄 1968　『伊豆の後期旧石器時代文化図録』

芦川忠利・池谷初恵 1994　『五輪・観音洞・元山中・陰洞遺跡Ⅰ・Ⅱ』三島市教育委員会

芦川忠利 2002　『初音ヶ原B遺跡第4地点』三島市教育委員会

池谷初恵・芦川忠利 1992　『三島スプリングスC.Cゴルフ場内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』三島市教育委員会

池谷初恵・寺田光一郎 1998　『中村分遺跡　天台 B 遺跡　台崎 C 遺跡』三島市教育委員会
池谷初恵・寺田光一郎 1997　『小平 C 遺跡　小平 B 遺跡』三島市教育委員会
磯部武男 1971　『静岡県牧之原台地の旧石器』『古代文化』第 23 号第 5・6 号
伊藤恒彦・長野康敏 2001　『上原遺跡』函南町教育委員会
伊藤恒彦・長野康敏 1989　『函南スプリングスゴルフ場用地内埋蔵文化財発掘調査報告書（Ⅰ）』函南町教育委員会
小野真一・秋本真澄 1972　『駿河小塚』芝川町教育委員会・加藤学園考古学研究所
笹原芳郎 1994　『焼場遺跡（A 地点）』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
笹原芳郎 1999　『西洞遺跡（ｂ区－１）発掘調査報告書』沼津市教育委員会
佐野一夫・太田好治 1989　『都田地区発掘調査報告書　上巻』浜松市教育委員会・財団法人浜松市文化協会
杉原荘介・小野真一 1965　『静岡県休場遺跡における細石器文化』『考古学集刊』第 3 巻第 2 号
鈴木忠司 1971　「野岳遺跡の細石核と西南日本における細石刃文化」『考古学集刊』第 3 巻第 2 号
鈴木忠司 1980　『寺谷遺跡』平安博物館
鈴木忠司 1994　『匂坂中遺跡群』磐田市教育委員会
鈴木忠司・竹内直文 1996　『匂坂中遺跡Ⅱ』磐田市教育委員会
鈴木恒治 1949　「三島市萩ヶ窪ナーゴ山遺跡中間報告」『郷のあゆみ』復刻第 1 号　県立沼津商業高校郷土研究部（文献未確認
瀬川裕市郎 1995「愛鷹・箱根山麓の旧石器時代研究のあゆみ」『愛鷹・箱根山ろくの旧石器時代編年』静岡県考古学会シンポジウム実行委員会より）
鈴木敏中ほか 1995　『山中城跡三ノ丸第 1 地点』三島市教育委員会
鈴木裕篤・瀬川裕市郎 1978　『中沢田円丸遺跡発掘調査概報』沼津市教育委員会
砂田佳弘 1996　「愛鷹・箱根山麓の細石器」『愛鷹・箱根山麓の旧石器時代編年』静岡県考古学会シンポジウム実行委員会
関野哲夫・鈴木淳一 1992　『尾上イラウネ遺跡発掘調査報告書Ⅱ』三島市教育委員会
高尾好之 1981　「駿河小塚出土の舟底形」『静岡県考古学研究』第 10 号
高尾好之 1988　『土手上・中見代第Ⅱ・第Ⅲ遺跡発掘調査報告書』沼津市教育委員会
竹花和晴・茶木清明・薄井孝子 1995　『大越遺跡』熱海市教育委員会
寺田光一郎 1989　『十石洞遺跡』三島市教育委員会　1989 年
富樫孝志 1998　『高見丘Ⅲ・Ⅳ遺跡』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
平川昭夫・廣瀬高文・前嶋秀張 1986　『中尾・イラウネ・野台』長泉町教育委員会
前嶋秀張 1996　「第４・5 期の石器群をめぐって」『愛鷹・箱根山麓の旧石器時代編年』静岡県考古学会シンポジウム実行委員会
山下秀樹 1985　『広野北遺跡』平安博物館
山村宏・小林ゆり 1982『京見塚遺跡発掘調査概報』磐田市教育委員会
山本恵一 1995　『土手上遺跡（ｂ・ｃ区）発掘調査報告書』沼津市教育委員会



1	大越	21	柳沢B（第Ⅱ文化層）	41	山田西原
2	十石洞（第３地点）	22	柳沢C	42	山田原Ⅱ
3	中村C	23	大奴田場A（第Ⅰ文化層）	43	山田原Ⅲ
4	観音洞G	24	上原（第Ⅰ文化層）	44	寺谷
5	観音洞B	25	下人原	45	京見塚
6	焼場（A地点）	26	休場	46	匂坂中
7	五輪	27	中沢田円丸	47	匂坂上６
8	陰洞E	28	中見代第Ⅱ	48	匂坂上７
9	山中城E（第Ⅰ文化層）	29	中見代第Ⅲ	49	藤上原３
10	海老ノ木平	30	土手上（b・c区）	50	藤上原６
11	願合寺	31	西洞（b区－１）	51	大谷原１
12	小平C	32	尾上イラウネ	52	池端前
13	小平B	33	野台（第Ⅱ文化層）	53	広野北
14	中村分	34	中尾	54	広野
15	天台B	35	尾尻	55	高見丘Ⅳ
16	台崎C	36	鉄平	56	中峠
17	台崎	37	小塚A	57	梶池
18	台崎D	38	日本平	58	前原Ⅷ
19	初音ヶ原B（第４地点）	39	吹木原		
20	ナーゴ山	40	風西		

図１　東海東部の細石刃文化遺跡の分布

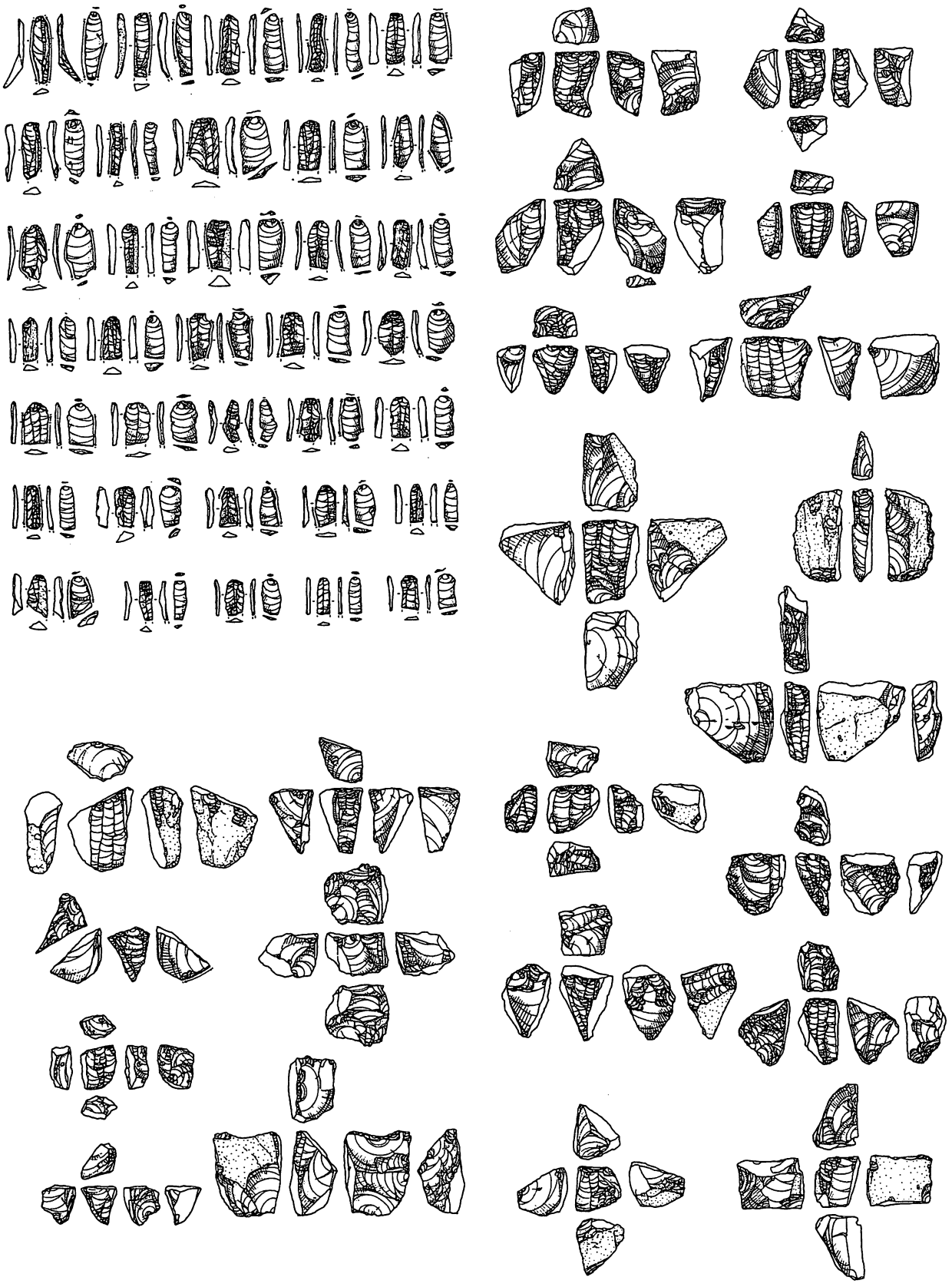


図2　　山中城E（山中城跡三ノ丸第一地点）

図３　　大奴田場Ａ遺跡

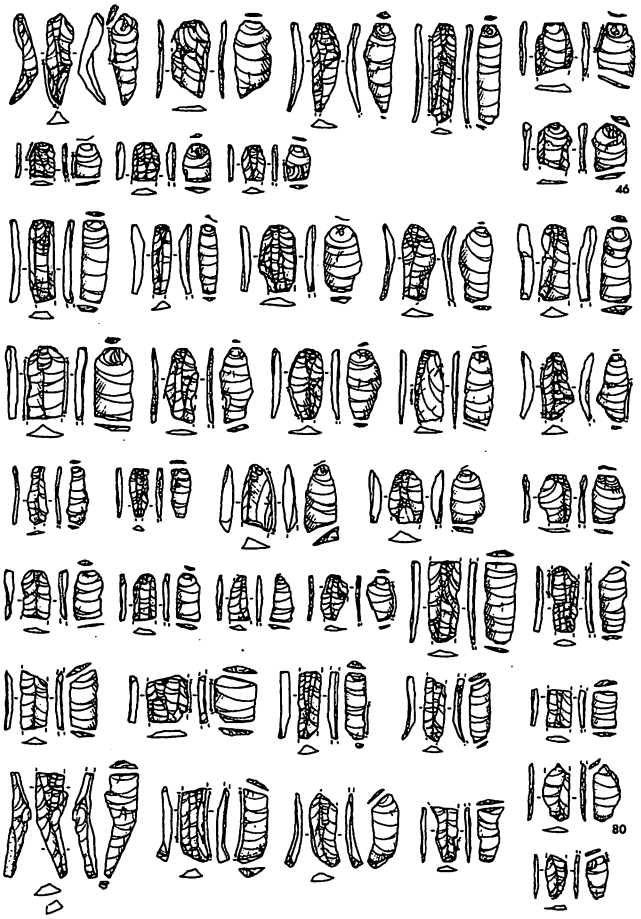


図４　　柳沢Ｂ遺跡

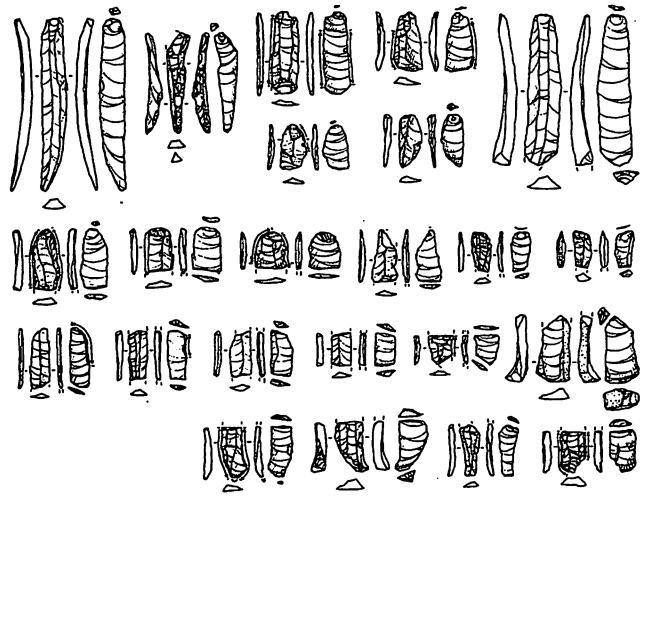


図５　　柳沢Ｃ遺跡

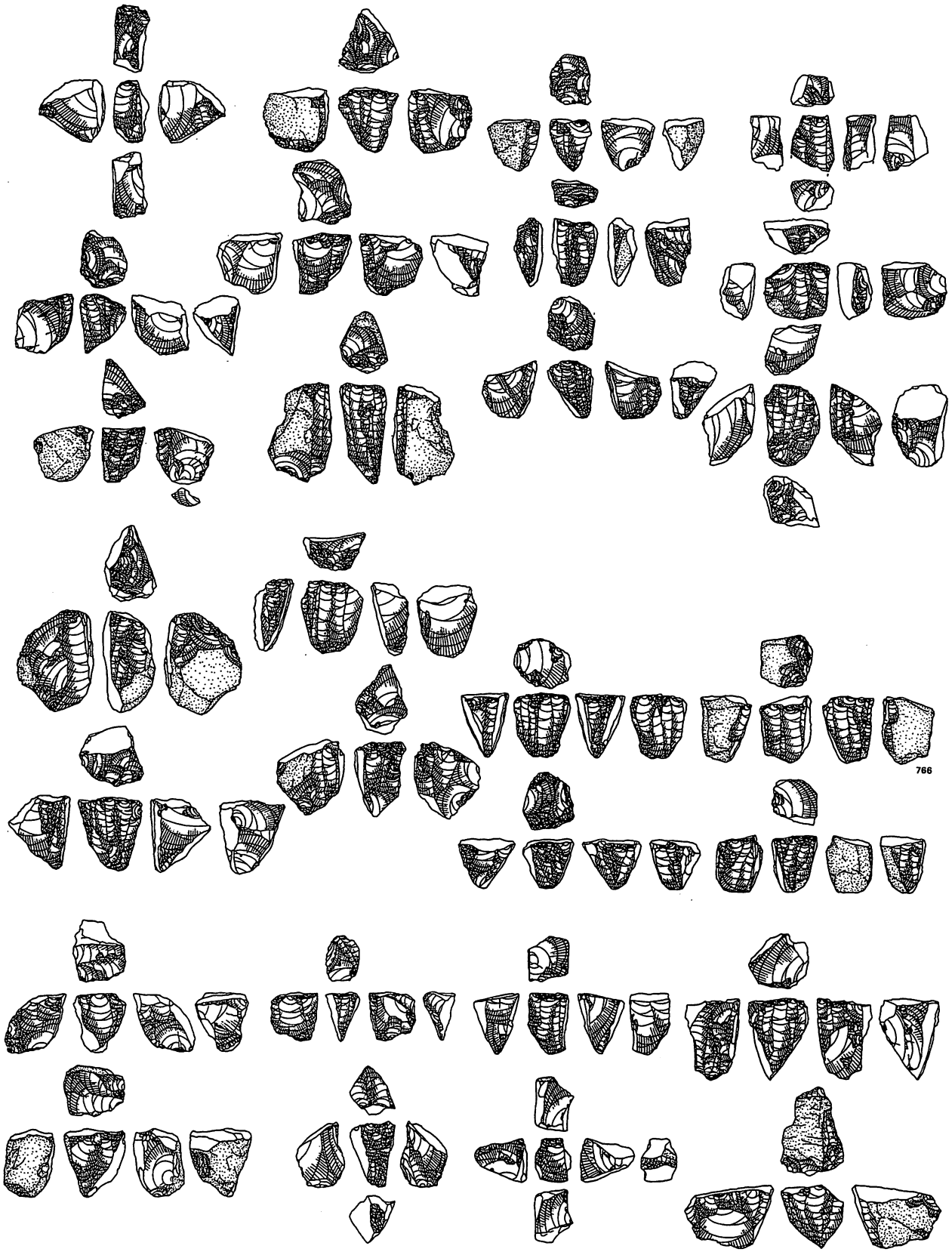


図6　上原遺跡

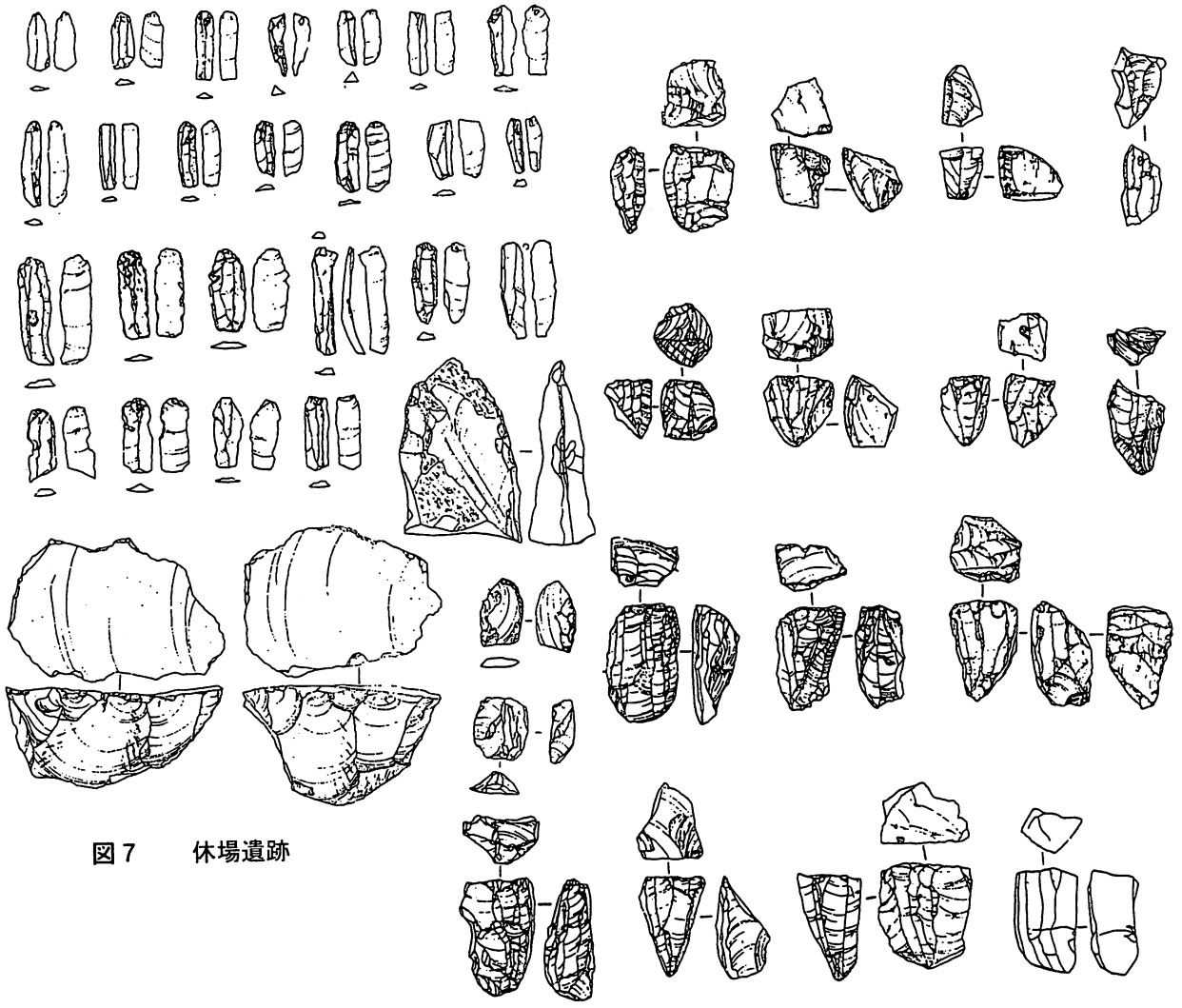


図７　　休場遺跡

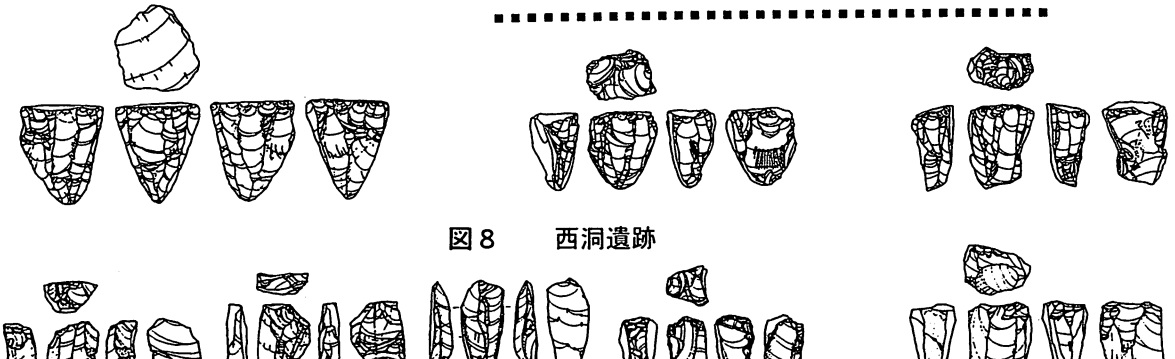


図８　　西洞遺跡

図９　　十石洞遺跡

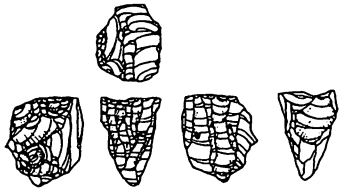


図 10　　観音洞Ｇ遺跡

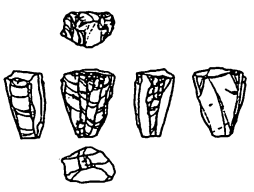


図 11　　五輪遺跡

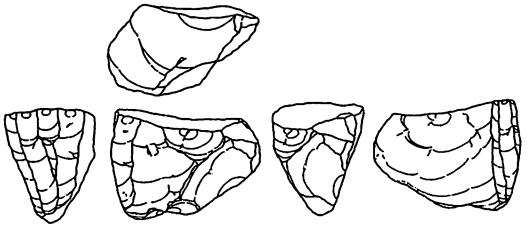


図 12　　土手上遺跡

図 13　中尾遺跡

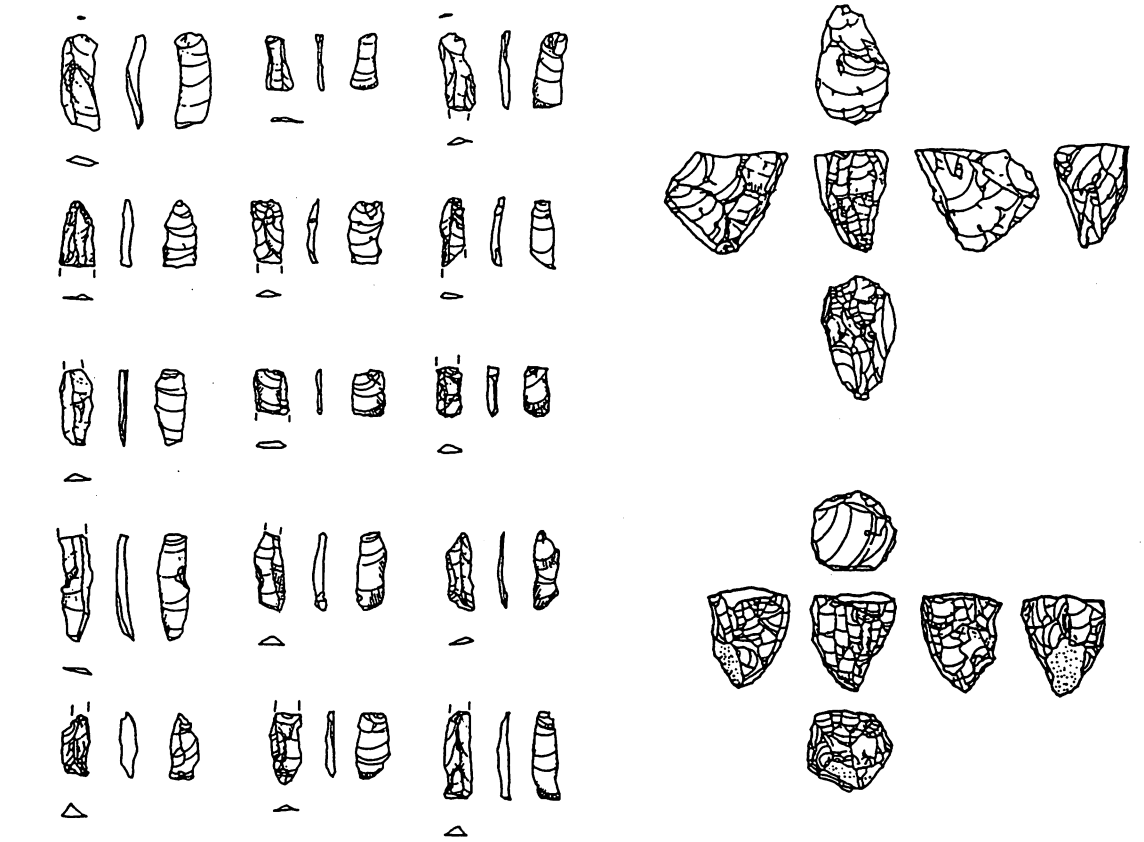


図 14　野台遺跡

図 15　　中見代第Ⅲ遺跡

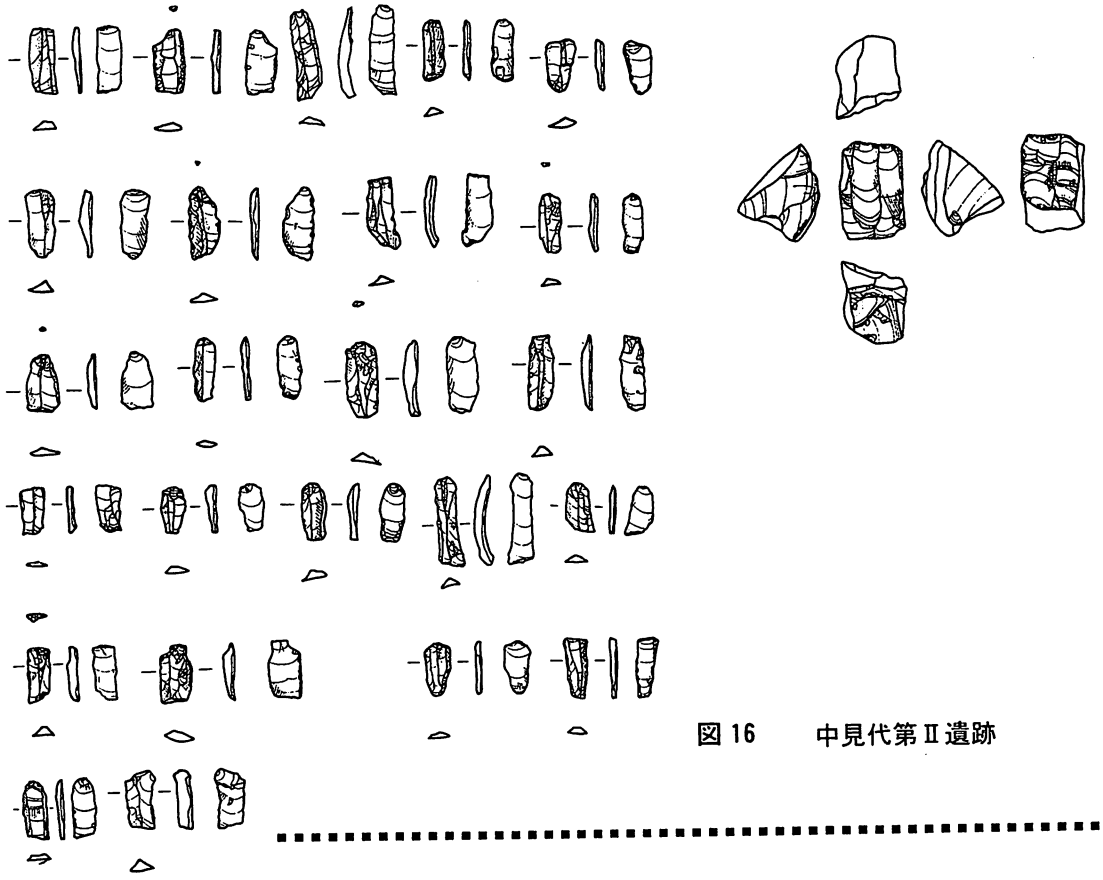


図 16　　中見代第Ⅱ遺跡

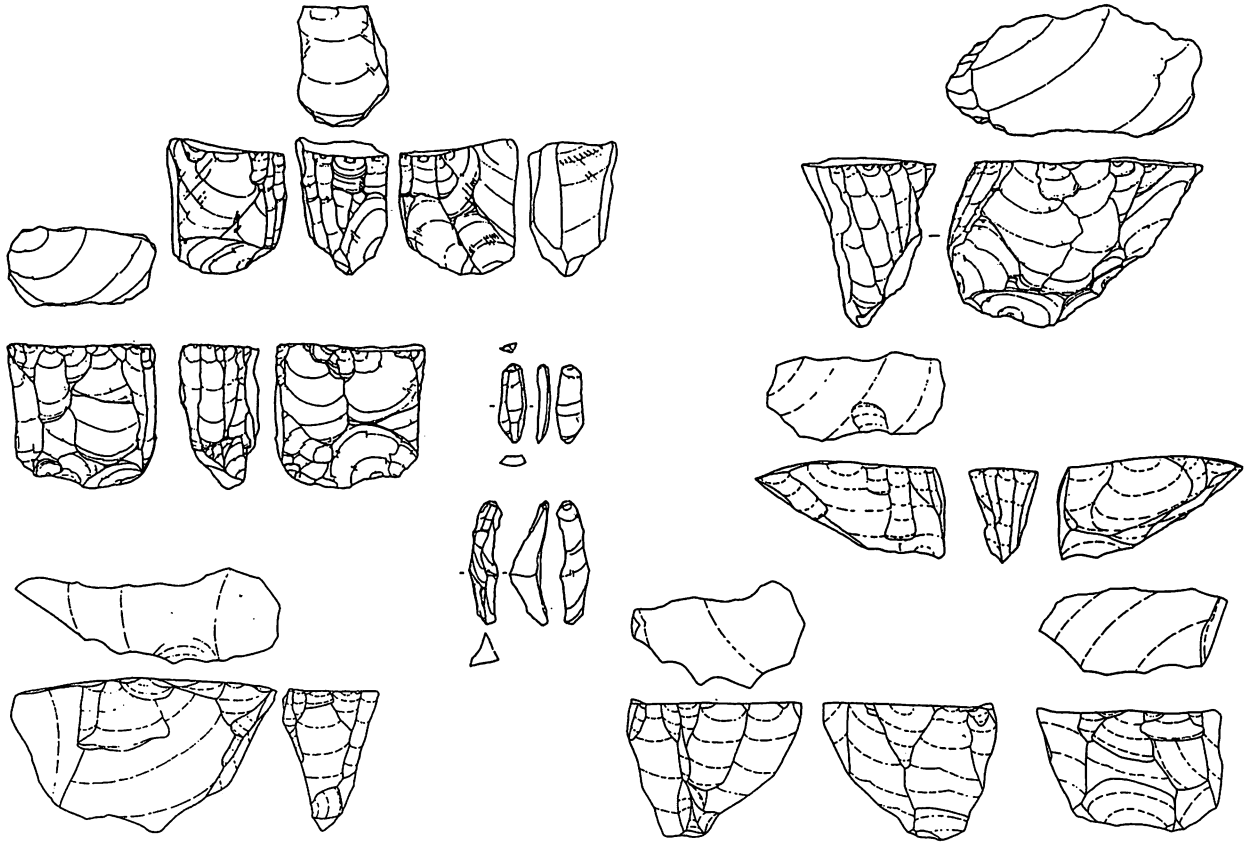


図 17　　小塚 A 遺跡

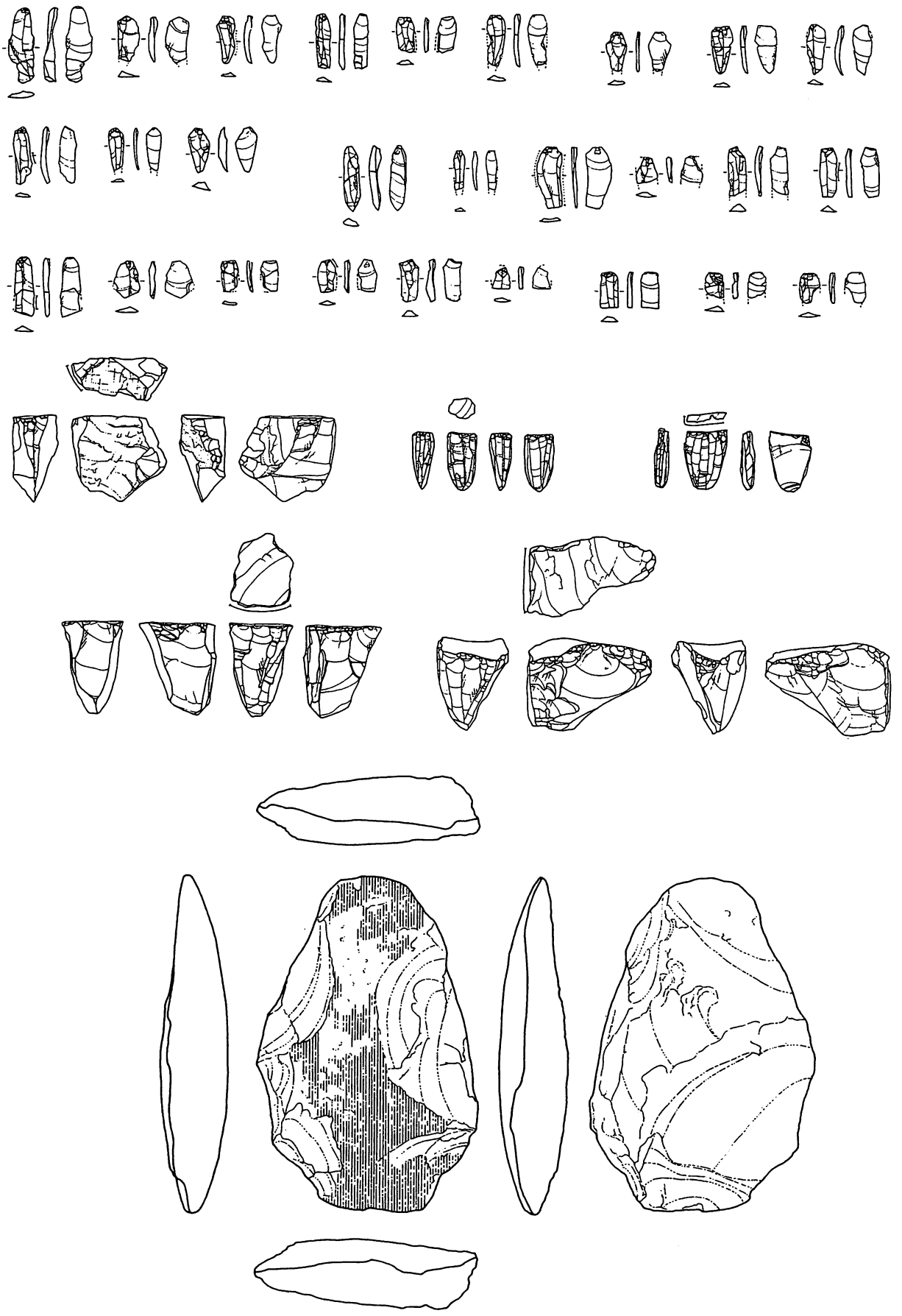


図 18　広野北遺跡

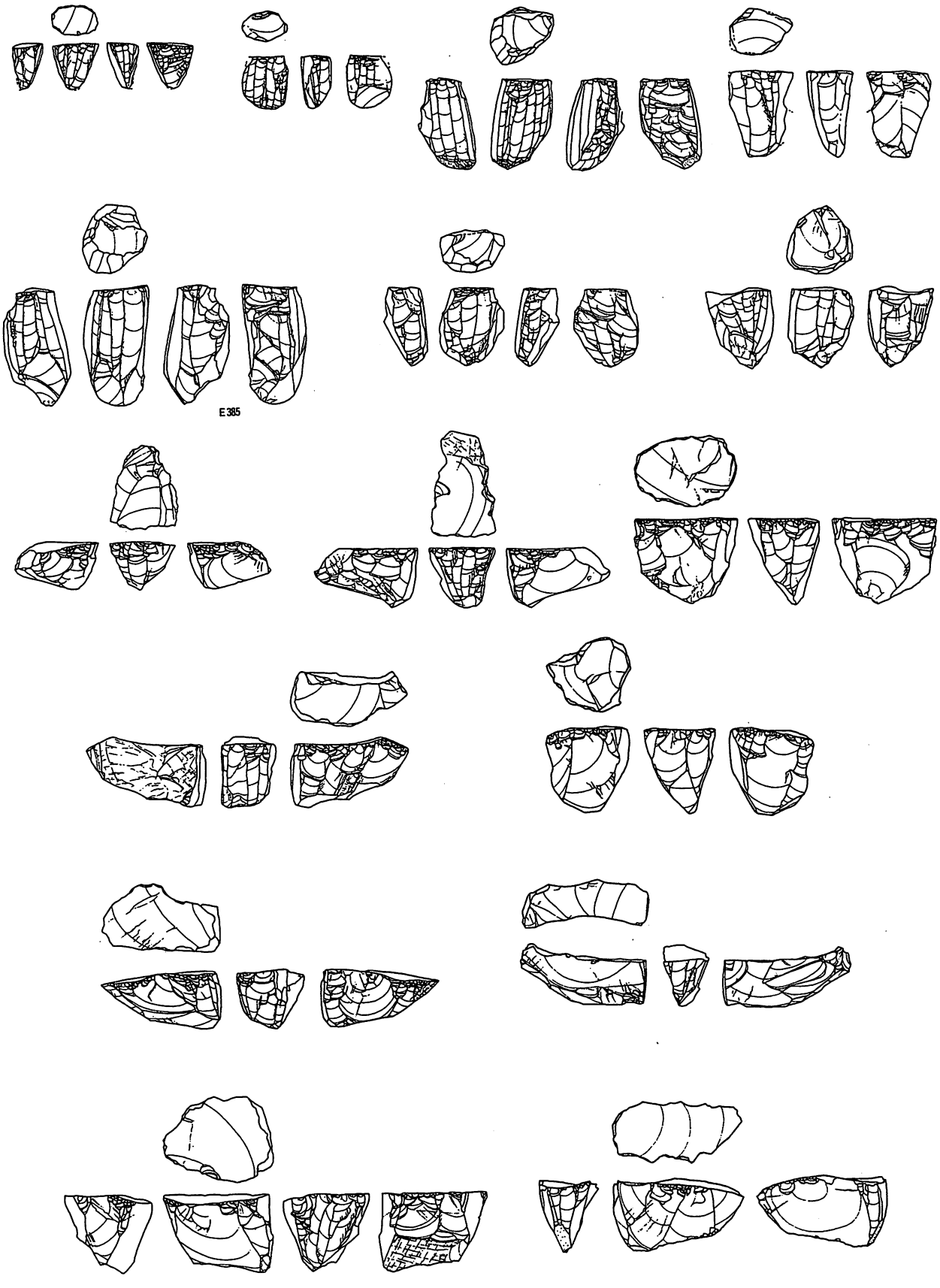


図 19　　匂坂中遺跡

図 20　　高見丘Ⅳ遺跡

表１　東海東部の細石刃文化遺跡一覧表

NO.	遺跡名	組成 細石刃	細石核	削器	掻器	彫器	錐	楔形石器	打製石斧	局部磨製石斧	礫器	磨石	敲石	ナイフ形石器	尖頭器	削片	土器	総計	石器集中	遺構	発掘	標高	地域	文献
1	大越	67	2	26	5	9	5	1			6			135	66			322	28箇所	礫群4基	有	238m	箱根西麓	山村ほか1995
2	十石洞（第３地点）		1															1			有	120m	箱根西麓	寺田1989
3	中村C	342	17															359			有	250m	箱根西麓	池谷・芦川1992
4	観音洞G		3															3			有	410m	箱根西麓	芦川・池谷1994
5	観音洞B	32	3	130	46	5		2						637	35			890			有	410m	箱根西麓	芦川・池谷1994
6	焼場（A地点）	1	2															3			有	130m	箱根西麓	笹原1994
7	五輪		1															1			有	431m	箱根西麓	芦川・池谷1994
8	酪洞E	29	2	38	15	7		11						284	25			411			有	359m	箱根西麓	芦川・池谷1994
9	山中城E（第Ⅰ文化層）	259	29		2			3										293	14箇所	礫群１基、配石１基	有	556m	箱根西麓	鈴木ほか1995
10	海老ノ木平		1															1			表面採集	不明	箱根西麓	
11	顕合寺		1															1			表面採集	578m	箱根西麓	
12	小平C	1	2	6	1			1						21	9			41	5箇所		有	120m	箱根西麓	池谷・寺田1997
13	小平B	36	4	2	2									15	7			66	10箇所		有	122m	箱根西麓	池谷・寺田1998
14	中村分		1	4										25	6			36	12箇所		有	340m	箱根西麓	池谷・寺田1998
15	天台B	32	1	76	7		1	1						210	157			485	44箇所		有	370m	箱根西麓	池谷・寺田1998
16	台崎C	2	1	2	1									5	2			13			有	355m	箱根西麓	池谷・寺田1998
17	台崎		1															1			表面採集	不明	箱根西麓	
18	台崎D	6	2															8			表面採集	300m	箱根西麓	
19	初音ヶ原B（第４地点）	1												2				3	2箇所	礫群１基、土坑２基	有	88m	箱根西麓	芦川2002
20	ナーゴ山	?																			有	?	箱根西麓	鈴木1949（未確認）
21	柳沢B（第Ⅱ文化層）	42	2															44			有	331m	箱根西麓	伊藤・長野1989
22	柳沢C	23	6															29	4箇所		有	308m	箱根西麓	伊藤・長野1989
23	大奴田場A（第Ⅰ文化層）	750	13	1	4	1	1					1		1				772	16箇所		有	327m	箱根西麓	伊藤・長野1989
24	上原（第Ⅰ文化層）	723	79		9	8		17						3				839	18箇所		有	160m	箱根西麓	伊藤2001
25	下人原	3	3															6			表面採集	105m	箱根西麓	
26	休場	924	36		2	4								2				968		石囲炉２基	有	280m	愛鷹山麓	杉原・小野1965
27	中沢田円丸																				有	40m	愛鷹山麓	鈴木・瀬川1978
28	中見代第Ⅱ	18		12	3			6			10	7	4	27	3			90	22箇所	礫群23基	有	177m	愛鷹山麓	高尾1988
29	中見代第Ⅲ	155	30	2	6		1	9			13	8	1	17	3			245	23箇所	礫群38基	有	184m	愛鷹山麓	高尾1988
30	土手上（b・c区）	1		12	10		2	2				2	2	104	7			142	68箇所	礫群68基	有	200m	愛鷹山麓	山本1995
31	西洞（b区－１）	3	2															5		配石５基	有	160m	愛鷹山麓	笹原1999
32	尾上イラウネ	1		59	18	8	3	18			2		51	315	111			586	82箇所	礫群28基、配石14基	有	195m	愛鷹山麓	岡野・鈴木1992
33	野台（第Ⅱ文化層）	27	11		1	4								17				60	6箇所	石囲炉２基、礫群62基	有	150m	愛鷹山麓	平川・廣瀬・前嶋1986
34	中尾	16	5	6	3	5								36	6			77	12箇所	礫群26基	有	172m	愛鷹山麓	平川・廣瀬・前嶋1986
35	尾尻		3															3			有	56m	愛鷹山麓	秋本1968
36	鉄平		1															1			表面採集	100m	愛鷹山麓	
37	小塚A	2	6	1														9			有	200m	富士川流域	小野・秋本1972、高尾1981
38	日本平		1															1			表面採集	216m	日本平	
39	吹木原		1															1			表面採集	116m	牧之原台地	
40	風西	1																1			表面採集	59m	牧之原台地	磯部1971
41	山田西原		1															1			表面採集	117m	磐田原台地	
42	山田原Ⅱ		1															1			表面採集	116m	磐田原台地	鈴木1980
43	山田原Ⅲ		1															1			表面採集	113m	磐田原台地	
44	寺谷	7	4	6			1		2		1		3	162	1			187	11箇所	礫群11基、配石11基	有	92m	磐田原台地	鈴木1980
45	京見塚	12	4	42		2	3	1				10	15	176	2			267		礫群32箇所　土坑1基	有	27m	磐田原台地	山村・小林1982
46	匂坂中	44	41	2	1								2					90	7箇所	配石1基	有	75m	磐田原台地	鈴木1994、鈴木・竹内1996
47	匂坂上６		2															2			表面採集	79m	磐田原台地	
48	匂坂上７		1															1			表面採集	78m	磐田原台地	
49	藤上原３		1															1			表面採集	100m	磐田原台地	
50	藤上原６	2	4															6			表面採集	43m	磐田原台地	
51	大谷原１		1															1			表面採集	112m	磐田原台地	
52	池端前		2															2			表面採集	109m	磐田原台地	
53	広野北	127	5	1						1			4	1				139	3箇所		有	49m	磐田原台地	山下1985
54	広野		8															8			表面採集	42m	磐田原台地	
55	高見丘Ⅳ	27	5									1						33	1箇所		有	51m	磐田原台地	富樫1998
56	中峠		1															1			表面採集	122m	磐田原台地	鈴木1980
57	梶池		1															1			表面採集	28m	三方原台地	
58	前原Ⅶ		1															1			有	76m	三方原台地	佐野・太田1989

近畿・東海西部の細石刃文化

松浦　五輪美

１．研究の経過

近畿地方

1960 年以前　踏査・採集活動によって発見された石器のなかに、細石刃・細石刃核とされるものが含まれていたが、積極的に公表されることはなかった。当時は高校のクラブや同人の活動によるものも多く、それらの資料の一部が一般に紹介され始めるのは旧石器時代の研究が本格化し始めてからである。

1960 年代　踏査・採集活動による石器の収集は増加してくる。兵庫県や京都府では「細石器的」なものがそのなかに認められるが、実は、細石刃・細石刃核ではないという資料も含まれ、未だ混沌とした状況が続く（都出・四手井　1971）。

1970 年代　旧石器時代遺跡の発掘調査が自治体でも行なわれ始めるのに伴って、大阪府の讃良川や羽曳野台地などでは発掘調査による細石刃・細石刃核の出土が見られるようになる。当時既に角錐状・船底状・円柱状等の様々な形態の細石刃核が認められており、さらに大阪府誉田白鳥遺跡の資料など北方系湧別技法の存在も窺うことができる。

また、この頃は各地で県史・市町村史の発刊が相次ぎ、採集資料等の一部が公表される。しかし未だその資料は乏しく、一地域内の細石刃文化について論及されるには至らない（松藤　1978、中原　1979）。

1980 年代　旧石器時代研究が盛んになるにつれ、過去の採集資料の再整理・報告が増加してくるなか、細石刃・細石刃核も図示して紹介され始める。1980 年には兵庫県下の旧石器時代遺跡が紹介され、加古川流域の細石刃関連資料も紹介される（今里　1980、藤原・浅原　1980、佐藤　1980）。1982 年にも同じく加古川流域の細石刃核が紹介されている（松本ほか　1982）。1985 年には鎌木義昌・小林博昭によって、初めて「近畿」という地域的名称を冠した概説がなされたが近畿地方に関しては資料的制約が大きく、多くは言及されていない（鎌木・小林　1985）。1988 年には中原正光によって、和歌山県下の旧石器時代が紹介されるなかで、細石刃細石刃核出土遺跡も報告されている（中原 1988）。この頃大阪府羽曳野台地で出土した細石刃文化関連の資料が、他の旧石器とともにまとめられている（(財）大阪文化財センター　1990）。

1990 年代　1990 年大阪府西大井遺跡の調査でサヌカイト製の細石刃核が出土（橋本　1992）。1992 年には松藤和人によって近畿地方の細石刃核出土地の分布図が作成され、初めて近畿地方の細石刃文化の様相について論及された（松藤　1992）。1993 年には「シンポジウム　細石刃文化研究の新たなる展開」の基礎資料として松浦が集成を行なっている（松浦　1993）。

また、1994 年に淡路島のまるやま遺跡の発掘調査によって板状の細石刃核が出土し、淡路島にも細石刃文化の広がりを確認することとなった（山本　2002）。

東海西部

1960 年以前　踏査・採集活動によって細石刃・細石刃核が発見され、一部の資料が紹介されている（鈴木　1955、岩野　1957、河合ほか　1959）。

1960 年代　岐阜県海老山遺跡の発掘調査が行なわれる。過去の採集試料なども紹介される（紅村　1963）。

1970年代　各県・市町村史の発刊が増加するなかで資料紹介がなされる。奥義次が三重県の旧石器時代遺跡を紹介するなかにおいて細石刃核の出土が報じられる（奥　1976）。鈴木忠司によって東海地方の細石刃文化の研究が発表され、「海老山技法」が提唱される（鈴木　1979）。

1980年代　1985年に岐阜県寺田・日野１遺跡が調査され、初めて発掘調査によって細石刃文化期が抽出される（吉田ほか　1987）。三重県では自動車道建設に伴う調査によって神子柴型石斧と共に細石刃核が出土する（田村ほか　1989）。奥義次は三重県下の旧石器時代遺跡の分布図を作成するなかで、細石刃文化期の遺跡分布図を作成している（奥　1985）。

1990年代　名古屋城の発掘調査に伴って、細石刃核が出土する（小澤　1990）。沢田伊一郎が岐阜県各務原台地の旧石器を紹介するなかで、細石刃核の資料についても言及する（沢田　1992 ほか）。三重県上野市において細石刃核が出土し、山間部にも細石刃文化が波及したことが確認される（舘　1997）。なお、シンポジウムの基礎資料として松浦が集成を行なっている（松浦　1993）。

2000年以降　新田剛が三重県カリコ遺跡の資料紹介を行なっている（新田　2001）。

２．遺跡の分布

当地域はおおよそ紀伊山地を境として東西に分けることができる。西は大阪湾を中心とした瀬戸内海沿岸、東は伊勢湾を中心とした地帯に遺跡は分布している。本稿では前者を近畿、後者を東海西部として扱う。現在のところ日本海側では良好な資料は知られておらず、滋賀県・福井県での発見例も知られていない。遺跡のほとんどが大河川の流域に存在し、低・中位段丘面から発見される場合が多い。標高は100mを超えるものは少なく、岐阜県を除けばほぼ低地の遺跡といえる。基本的には後期旧石器時代後半の遺跡の立地・分布と重なっており、同じ遺跡でナイフ形石器などが採集されているところも多い。島嶼部にも新たに遺跡が確認されており、近畿北部日本海側でも今後発見される可能性は高いと思われる。全体的には散漫な分布状況であるが、加古川流域、宮川・櫛田川流域、各務原台地、矢作川・豊川流域に若干の集中が認められる。

加古川流域

加古川市から明石市にかけて広がる大久保台地において多数の旧石器採集地点が存在する。そのうちいくつかの地点で細石刃・細石刃核も発見されているが、各遺跡とも１～２点のみである。角錐形、船底形とともに南大塚遺跡では湧別技法も認められる。

羽曳野台地

羽曳野丘陵の先端部の低・中位段丘に旧石器時代の遺跡が多数分布し、中位段丘には国府遺跡、低位段丘にははさみやま遺跡、翠鳥園遺跡など近畿を代表する旧石器時代遺跡が存在する。細石刃関連資料はほかの石器群とともに１～２点含まれている状況である。瀬戸内系の板状の細石刃核や湧別技法によるものなど、細石刃核の形態は様々である。

宮川・櫛田川流域

宮川・櫛田川および出雲川流域は旧石器時代遺跡が多数分布している。細石刃関連資料はそれらとともに１～２点ずつが採集されている状況である。角錐形・船形のものがある。出雲川上流から分水嶺をこえた木津川の上流でも遺跡が発見されており、西と東をつなぐルートがこのあたりとなる可能性がある。

各務原台地

木曽川北部に広がる各務原台地には旧石器時代遺跡が分布している。細石刃文化期の遺跡は台地の北西部にある低位段丘や台地東南部の段丘に存在し、各遺跡に１～２点の細石刃核が含まれる。角錐形・船形のものが多い。木曽川と長良川に挟まれた地域は、さらに北部の美濃市、関市、美濃加茂市あたりまで分布が及んでいる。

矢作川・豊川流域

集中域といってもかなり広範囲に分布し、沿岸部の低地から上流域まで各地に点在するといった状況である。細石刃核は角錐形・船形が多い。この地域の分布状況は静岡県磐田原台地へと繋がっていくものと思われる。

3．細石刃技法と石材

技法

資料のほとんどが採集または単独出土であるため、接合資料や調整剥片などから技法を復元することは困難である。細石刃核の特徴から推定できる技法は大きく４つに分けられる。

1．湧別技法

南大塚遺跡、誉田白鳥遺跡の資料に窺うことができる。両者とも打面再生剥片と考えられるもので、側面の一方が、より細かな調整が行われている点は札滑型の特徴を示している。南大塚遺跡例は黒曜石。誉田白鳥遺跡例はチャートとされているが、珪質頁岩のような石材で、在地の石材ではないようである。このほか、舟橋遺跡例も札滑型のブランクの可能性がある。

2．野岳・休場技法

明確にこの技法によって作られたと判断されるものはほとんどない。日岡山遺跡、和田新池遺跡のものは角錐状を呈し、野岳・休場型の特徴をもつが、打面調整は顕著ではない。讃良川床遺跡例は両設打面の円柱状でやや異質な趣がある。日岡山遺跡例が黒曜石、他は安山岩である。

3．船野技法（海老山技法）

和歌山県から東海西部にかけてはほぼこの範疇に含まれるもので占められる。形態的には船形と角（円）錐形の二者があり、打面再生剥片や作業面再生剥片も伴っている。平池北岸遺跡、壁川崎遺跡ではサヌカイトや頁岩が利用され、三重県下ではほぼチャート、岐阜県・愛知県ではチャート・流紋岩が用いられている。

4．羽佐島技法

瀬戸内海島嶼部に見られる板状の細石刃核の製作技法である。青山遺跡、桜ヶ丘遺跡第１地点のようなタイプと、まるやま遺跡のようなタイプがある。また西大井遺跡例もこの範疇で捉えられる。石材はいずれもサヌカイトを用いている。

以上の４技法は技法というよりも形態的特徴による分別に他ならない。個々に見ると、いずれの技法によるものか判然としない不定形なものも存在する。また細石刃核であるかどうかさえ微妙なものもある。全体的に見ると、近畿側には様々な技法によるものが認められるが、東海地方では船野技法が主体をなしているといえよう。

石材

細石刃・細石刃核に利用された石材は、基本的にその地域で後期旧石器時代から利用されてきたものと変わらない。石材としては、安山岩（サヌカイト）、チャート、頁岩、流紋岩が多く、黒曜石、下呂石などがわずかに認められる。近畿では安山岩を利用したものが多い。瀬戸内島嶼部で用いられるハリ質安山岩は認められない。そのなかで湧別技法をもつ南大塚遺跡、誉田白鳥遺跡例が在地石材と異なる石材（原産地不詳）を利用している点は興味深い。また、羽佐島技法によるものは専らサヌカイトを利用しているようである。板状のブランクを得るためにサヌカイトが適していると考えられるが、むしろサヌカイトを利用した場合、この形態が作りやすかったとも考えられる。同じ様に、東海地方の細石刃核も、船野技法を用いるためにその石材を利用したのではなく、前時代から石器に利用されてきたチャート等を利用する場合、この作り方が最も適していたと考えるべきであろう。湧別技法を除けば、技法が波及するというより、石材の分布状況によって技法が制約されていたと見るべきであろう。

大まかに見ると、瀬戸内海沿岸のサヌカイト地帯、日高川流域の頁岩地帯、伊勢湾南岸のチャート地帯、各務原台地周辺のチャート地帯、豊川流域の流紋岩地帯に分かれるといえよう。

石材の確保や原産地についての詳細は、理化学分析がほとんど行われておらず不明である。なお、まるやま遺跡で利用されているサヌカイトは、岩屋海岸周辺に転礫として存在するもので、国府台や二上山から供給されたものではないようである。

４．組成について

当地域の資料についてその組成を知ることは困難である。発掘調査による出土は少ないうえに、発掘資料も明確に時期が分離できる状況で検出されたものはほとんどない。岐阜県寺田遺跡において唯一細石刃文化期として資料の抽出がなされているが、細石刃・細石刃核以外の石器は加工痕のある剥片が伴うのみで、定型的なトゥールを伴っていない。近畿地方においては翼状剥片や国府型ナイフ形石器とともに発見される場合が多く、それらが同一の石器組成とは認めがたい状況にある。東海地方の組成について、鈴木忠司氏は、本来的に掻器を伴う程度の単純な組成であろうと推定され、採集される節季の状況を積極的に評価しようとされた（鈴木　1979)。おそらく近畿地方においても同様のことが言えよう。ただし良好な掻器の発見も多いとはいえないのが現状である。湧別技法に特徴的に伴う荒屋型彫器については、単独での発見も知られていない。不定形な彫器がともに見つかっている遺跡もあるが、細石刃文化期のものと判断する根拠はない。しかし、さらに西の岡山県恩原遺跡において札滑型細石刃核とともに荒屋型彫器が発見されていることを考えると、当地域においても発見される可能性は高い。

また、船野型細石刃核の存続時期について、縄文時代草創期の長者久保・神子柴石器群と共存するという見解が示されているが（綿貫　1992)、その点についてみると、三重県上ノ広遺跡では御子柴型石斧がともに出土しているのは興味深い。ただし、そのほかの石器にはナイフ形石器から石鏃まで様々なものが伴っており、石斧のみが細石刃核と伴ったものとは言えないが注意すべき事例である。

当地域における細石刃文化期の石器組成については、明確な共伴遺物が無く不明といわざるを得ないが、先に述べた４つの技法による細石刃がそれぞれに異なる組成をもっていたことも十分に考えられよう。いずれにしても、現状から判断する限りにおいてはさほど豊富な器種組成であったとは考えられず、掻器・彫器が伴うにしても定型的なものではなかった可能性が高いように思われる。また、剥片をそのまま利用することも行われていたと考えられ、細石刃という石器の用い方同様に、他の器種も臨機応変的に剥片を用いた掻器・彫器・ＲＦ・ＵＦなどが組成されていた可能性を指摘しておく。

５．編年について

当地域の細石刃関連資料については、採集資料はもとより、発掘調査による出土品においても、その検出状態は純粋な堆積層からのものではなく、層位的事実からその時代的位置づけを行うのは困難である。発掘調査において細石刃文化期を抽出し得た寺田・日野１遺跡においても、層位的にはⅠ～Ⅲそうすべてにおいて当該期の遺物が検出されている。年代測定については報告の段階では結果は出ていない。したがって当地域において絶対年代のおさえられるものは皆無である。ならば、他地域との比較において、細石刃核形態や技法を基に推測するしかない。

まず、細石刃文化の存続期間をどのくらいと見るかが一つの問題となる。管見では最も古いところは北海道柏台１遺跡の約 20000ｙ．Ｂ．Ｐであろうか。これは従来の細石刃文化の年代からすればいささか古い感があるが、北方系の細石刃核の大陸での年代測定値からみるとさほどおかしな数値ではない。最も新しい段階となると、正確な年代はわからないが、長崎県や鹿児島県で土器を伴う一群のものとなろう。従来の見解では約12000Ｂ．Ｐくらいであり、ざっと 8000 年間の存続幅が考えられることになる。しかしこれはむろん各細石刃生産技術法の相異や測定値の較正の問題もあり、さらに地域的な問題も大きい。少なくとも当地域の資料について、この年代幅で細石刃文化が存続したとは考えがたい。そこで、細石刃文化期の大きな画期と考えられる土器の出現を境として、その前後に分けた位置づけについて考えてみたい。

まず湧別技法によるものは、北海道でのあり方とは異なり、本州では土器を伴う時期に存在するものがある。一方、比較的純粋に石材に固執した湧別技法は土器を伴っていないようである。これは本州での湧別技法の展開に２段階あることを示唆するもので、第１段階は石材に固執し、荒屋型彫器を装備した北方の集団が移動によって直接残した石器群が点在する段階、第２段階は湧別技法自体が在地の細石刃生産に取り入れられていく段階で、

この段階には土器が出現するという図式である。この観点から言えば、当地域の湧別技法関連の資料は第１段階とみるべきで、土器出現以前と考えることが可能である。

次に野岳・休場型の角錐形の細石刃核についてみてみると、実際に野岳・休場型といえる資料は極めて少なく、この型式の中でも古期に位置づけられる茶園型は皆無である。不定形なものも多いが、それらは神奈川県吉岡遺跡群のＬ１Ｈ層で見られるような小形のものとも異なるようであり、土器以前と考えられる根拠は今のところ見受けられない。だからと言って土器を伴うといえるわけでもないが、少なくとも最古段階の細石刃核ではないようである。

船野型（海老山型）については鈴木忠司氏が東海地方の資料は土器の存在しない時期のものと判断されている。ただし、船野型細石刃核のなかには三重県上ノ広遺跡例のように長者久保・神子柴文化段階まで残っている可能性が考えられるものや、同県比土遺跡のように有舌尖頭器や石鏃とともに発見されている例もある。発見されている細石刃核全てというわけではないが、比較的新しい段階のものも含まれている可能性も考えられるであろう。

最後に羽佐島技法によるいわゆる瀬戸内系の板状の細石刃核については、筆者は以前より福井技法の影響を受けたものと考えており、その点から考えるとそれらは土器出現期に入っていると判断されるものである。

以上のことからいえば、南大塚遺跡や誉田白鳥遺跡の資料とまるやま遺跡や青山遺跡等の資料との間には新旧関係が想定できることになる。その他の多くの船野型はその中間に重複しながら位置づけることが出来るだろうか。ただし、湧別技法と羽佐島技法が近畿のみ、船野型がほとんど東海西部というふうに分布域を違えていることは技法に時間差以外の要因を求める必要があるかもしれない。

６.細石刃文化の様相

近畿・東海西部というくくりの中では、先に述べたように大きく２つの地域に分けて考えることができる。１つは大阪湾沿岸に広がる地域である。この地域には湧別技法、野岳・休場技法、船野技法、羽佐島技法の４つの技法的要素が認められる。湧別技法によるものは石材も外来のものであり、北方からのヒトの移入を想定させる。

主要な石材として旧石器時代を通じてこの地域ではサヌカイトが利用されるが、細石刃文化期には羽佐島技法において主に利用されている。しかし羽佐島技法は細石刃文化期でも後出のものと考えられ、細石刃文化がこの地に波及した段階ではサヌカイト地帯では細石刃生産があまり行われなかった可能性がある。野岳・休場型類似の資料が黒曜石製であることも、それが搬入品であることを窺わせる。和歌山県では頁岩を用いた船野型が多いが、サヌカイトの利用も認められる。このことは船野型がサヌカイトを細石刃に利用する時期、すなわち土器を伴う段階に至っても存続していた可能性を示唆するものともいえる。ただし、讃良川床遺跡例のような円筒形のサヌカイト製細石刃核も存在している。この細石刃核は上下両端に打面をもつ異質のものであり、類例はほとんど知られていないため今のところ評価は保留しておきたい。

三重県上野市で発見された比土遺跡の資料はこの地域の細石刃文化の広がりに新たな視点を与えるものであるといえる。大阪湾に注ぐ淀川からさらに木津川を遡ってその上流に位置するこの遺跡を通り、分水嶺を越えた出雲川流域の遺跡へとつながる一つの道筋が見えるようである。今後このルート沿いに遺跡の発見が期待される。

近畿地方では、外来の細石刃石器群の流入の後にサヌカイトを利用した細石刃石器群の広がりがあると考えることができ、この２つの段階が近畿地方の土器の始まりと実際にどう関係しているのかが今後究明すべき問題点の一つである。

東海地方における細石刃生産技法はほぼ船野技法（海老山技法）で占められているといえる。それらについての様相は鈴木忠司氏の研究成果を未だ大きく転換するものではない。ただし、その編年的位置づけに関しては、長者久保・神子柴石器群との共伴という視点も絡めて、ある程度の時間幅を想定する余地は生まれてきたのではないだろうか。また、近畿地方との分布的つながりも注意すべき点となっている。

近年、岐阜県北部において湧別技法の存在が確認されてきており、湧別技法がどういうルートで近畿に達しているのかについては日本海側の状況が不明である現状では、東海地方の細石刃石器群のあり方が一つの重要なポ

イントであろう。

近畿・東海西部は日本列島の東西に広がる細石刃文化の接点的位置にあたり、近畿地方と東海西部の関係はそのまま日本列島の細石刃文化の東西の関係に置き換えられることになるかもしれない。現段階では未だ良好な出土資料は乏しく、まだまだ様相は明らかとなっていないのが実情である。

7.今後の研究課題

当地域においては今後の研究課題は山積みといえる。10年前に当地域の細石刃文化研究はやっと始まったばかりであると述べたことがある（松浦　1993）。しかしこの10年間で特に大きな進展があったとは言いがたい。発掘資料はもとより採集資料でさえも大きな蓄積はみられなかった。したがって細石刃石器群の組成や年代的位置づけは未だ不明と言わざるを得ない。また各細石刃生産技法についても部分的な要素から他地域のものと類推するにとどまるのみで、当地域での石材の獲得や石器群全体のなかでの石器生産システムにおける位置づけなども解明するのは困難である。良好な細石刃石器群の資料増加が第一の課題といってしまえばそれまでであるが、しかしそれが早急に望めないと考えられる現状にあっては別の視点からアプローチするほかはない。

たとえば石器組成について、発掘調査や採集資料によってともに得られた石器類との母岩別分析を通じて細石刃文化に属すると判断される石器を抽出していくことはある程度可能な作業と考えられる。また、過去に採集された資料の石材の原産地分析も行っていけば、集団の移動に関する重要なヒントを得ることもできよう。そして今後細石刃・細石刃核が発見された場合には、まず細石刃文化に属する石器類をその混在する資料の中から抽出することが必要であろうと考える。この点に関して、当地域においては過去に細石刃・細石刃核として公表された資料の中に実はそうでないものがいくつか存在している（その多くは楔形石器であろう）。さらに細石刃については、それのみで判断しかねるものもあり、１～２点「細石刃様剥片」がある場合、伴う石器を見ると、そのような剥片が十分生じる可能性をもっており、細石刃とすべきものではない場合も見受けられる。このような状況にあって細石刃を単体で検出するのはなかなか困難であるが、その使用痕や剥片の細かな属性分析などを通じて細石刃を抽出する方法を確立していかなくてはならないだろう。それによって資料の増加も期待されよう。

以上のような実際の遺物に即した研究もさることながら、当地域においては、少ない資料を基にどのように細石刃文化の様相を理解していくかという方法論を確立していくことがむしろ必要なことであるかもしれない。同じ地域内に様々な技法が存在することについての解釈などが今後重要な研究課題となってこよう。

残念ながら当地域における細石刃文化研究は10年前の「新たなる展開」以後さほど進展しておらず、したがって研究課題も同様に残されたままで、当地で研究する者として反省すべきことである。今後の資料増加を期待しつつも、現状でアプローチできる課題もいくつか残されており、それらの課題を整理しておくことが、まず当地域における細石刃文化研究の進む方向ではないかと考える。

最後に今回の資料集成にあたって下記の方々に御協力をいただいた。末筆ながら感謝申し上げます。
奥義次・久保邦江・中原正光・山本誠（50音順）

参考文献

伊藤正人・川合　剛　1993　『名古屋の縄文時代　資料集』名古屋市見晴台考古資料館。

稲本賢治　1991　「一志郡嬉野町島田焼野古墳」『近畿自動車道（久居～勢和）埋蔵文化財調査報告書第３分冊４』三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター。

今里幾次　1980　「播磨における黒曜石及び石材の分布」『播磨考古学研究』今里幾次論文集刊行会。

岩崎　誠　1991　「二．旧石器時代」『長岡京市史』資料編一。

岩野見司　1957　「伊勢志摩における無土器文化」『石器時代』第４号。

岡田　登　2002　「津市高茶屋四ッ野Ｂ遺跡採集の旧石器・縄文時代遺物について」『皇學館大學文学部研究紀要』第四十一輯。

奥　義次　1976　「三重県の遺跡」『日本の旧石器文化』３　雄山閣。
奥　義次　1985　「三重県の先土器時代関連遺跡地名表」『上地山遺跡発掘調査報告書』玉城町教育委員会。
小澤一弘　1990　「Ⅰ期以前の遺物」『名古屋城三の丸遺跡（Ⅱ）』（財）愛知県埋蔵文化財センター。
鎌木義昌・小林博昭　1985　「近畿・中国・四国地域の細石刃研究」『考古学ジャーナル』243。
河合喜代治・吉田英敏・紅村　弘　1959　「岐阜県海老山遺跡における無土器文化の石器について」『考古学雑誌』第44巻第4号。
紅村　弘　1963　『東海の先史遺跡　総括編』。
（財）大阪文化財センター　1990　『南河内における遺跡の調査Ⅰ』。
佐藤良二　1980　「志方町・加西市および周辺の旧石器」『旧石器考古学』21　旧石器文化談話会。
沢田伊一郎　1992　「各務原台地とその周辺の旧石器（1）」『旧石器考古学』44　旧石器文化談話会。
沢田伊一郎　1993a　「各務原台地とその周辺の旧石器（3）」『旧石器考古学』46　旧石器文化談話会。
沢田伊一郎　1993b　「海老山遺跡とその周辺の旧石器」『旧石器考古学』47　旧石器文化談話会。
鈴木忠司　1979　「東海地方の細石刃文化について」『日本古代学論集』。
鈴木忠司　1994　「日本細石刃文化遺跡地名表」『京都文化博物館研究紀要　朱雀』第７集。
鈴木敏雄　1955　「考古学からみた一志郡」『一志郡史』下巻。
舘　邦典　1997　「石器と下層の調査」『比土遺跡発掘調査報告』上野市教育委員会。
田村陽一ほか　1989　『近畿自動車道（久居～勢和）埋蔵文化財調査報告書第１分冊１』三重県教育委員会。
都出比呂志・四手井晴子　1971　「京都府乙訓地方の石器－資料編－」乙訓の文化遺産を守る会。
中原正光　1979　「先土器時代の遺跡と遺物－日高平野周辺地域における様相－」『和歌山の研究』Ⅰ。
中原正光　1988　「和歌山県下における先土器時代石器の地域色」『旧石器考古学』36　旧石器文化談話会。
中原正光　2003　「紀ノ川流域の旧石器文化」『定本　紀ノ川・吉野川』郷土出版社。
新田　剛　2001　「度会郡玉城町カリコ遺跡の細石刃核関係資料」『きゅうさん』伊藤久嗣氏退職記念会。
橋本正幸　1992　「付章　西大井遺跡９０－１調査区の石器遺物について」『西大井遺跡発掘調査概要　1990年度』大阪府教育委員会。
藤井保夫　1984　『土生池遺跡第１次発掘調査概報』吉備町教育委員会。
藤原清尚・浅原重利　1980　「加古川市山之上遺跡採集の石器」『旧石器考古学』21　旧石器文化談話会。
松浦五輪美　1993　「近畿・東海西部の細石刃文化」『細石刃文化研究の新たなる展開Ⅰ』佐久考古学会・八ケ岳旧石器研究グループ。
松藤和人　1978　「第二章　第一節　土器以前の文化」『大阪府史　第一巻』。
松藤和人　1992　「２　火山灰の降るなかで」『新版　古代の日本⑤　近畿Ⅰ』角川書店。
松本正信・安川豊史・春成秀爾　1982　「播磨南部採集の旧石器」『旧石器考古学』24　旧石器文化談話会。
吉朝則富　1974　「新池遺跡」『ふたがみ』同志社大学旧石器文化談話会。
吉田英敏ほか　1987　『寺田・日野１』建設省・岐阜県・岐阜市教育委員会。
山本　誠　2002　「第３章　假田地点の調査」『まるやま遺跡Ⅱ』兵庫県教育委員会。
綿貫俊一　1992　「長者久保・神子柴文化並行段階の九州」『古文化談叢』第28集　九州古文化研究会。

1 横山Ｂ地点
2 日岡山
3 南大塚
4 山之上
5 和田新池
6 野々池
7 まるやま
8 中久世
9 下海印寺
10 讃良川床
11 舟橋
12 西大井
13 北岡
14 青山
15 誉田白鳥
16 城山
17 新池
18 桜ヶ丘第１地点
19 平ノ上池
20 山東大池
21 平池北岸
22 樫河池
23 土生池
24 尾ノ崎国道東部
25 壁川崎
26 比土
27 長田
28 東出
29 焼野古墳
30 上ノ広
31 上村池Ｂ
32 石川
33 マゝ田
34 そうれ場
35 カリコ
36 蚊山
37 出張
38 中野
39 次郎六郎
40 登茂山
41 寺田
42 日野１
43 土山西
44 桐野
45 嫁振
46 内野前
47 植野
48 向中野
49 松原
50 海老山
51 北野
52 大山北野
53 小竹原
54 境松
55 安毛
56 虎渓山Ｅ地点
57 入鹿池
58 三の丸
59 旧紫川
60 北沢
61 千鳥
62 大釜
63 上原
64 霊岩寺Ｂ
65 長興寺
66 大明神Ｂ
67 五本松
68 仁田
69 村上
70 枯木宮貝塚
71 牛ノ松
72 門前
73 馬越
74 大清水
75 丸山
76 大沢池
77 足山田
78 有海

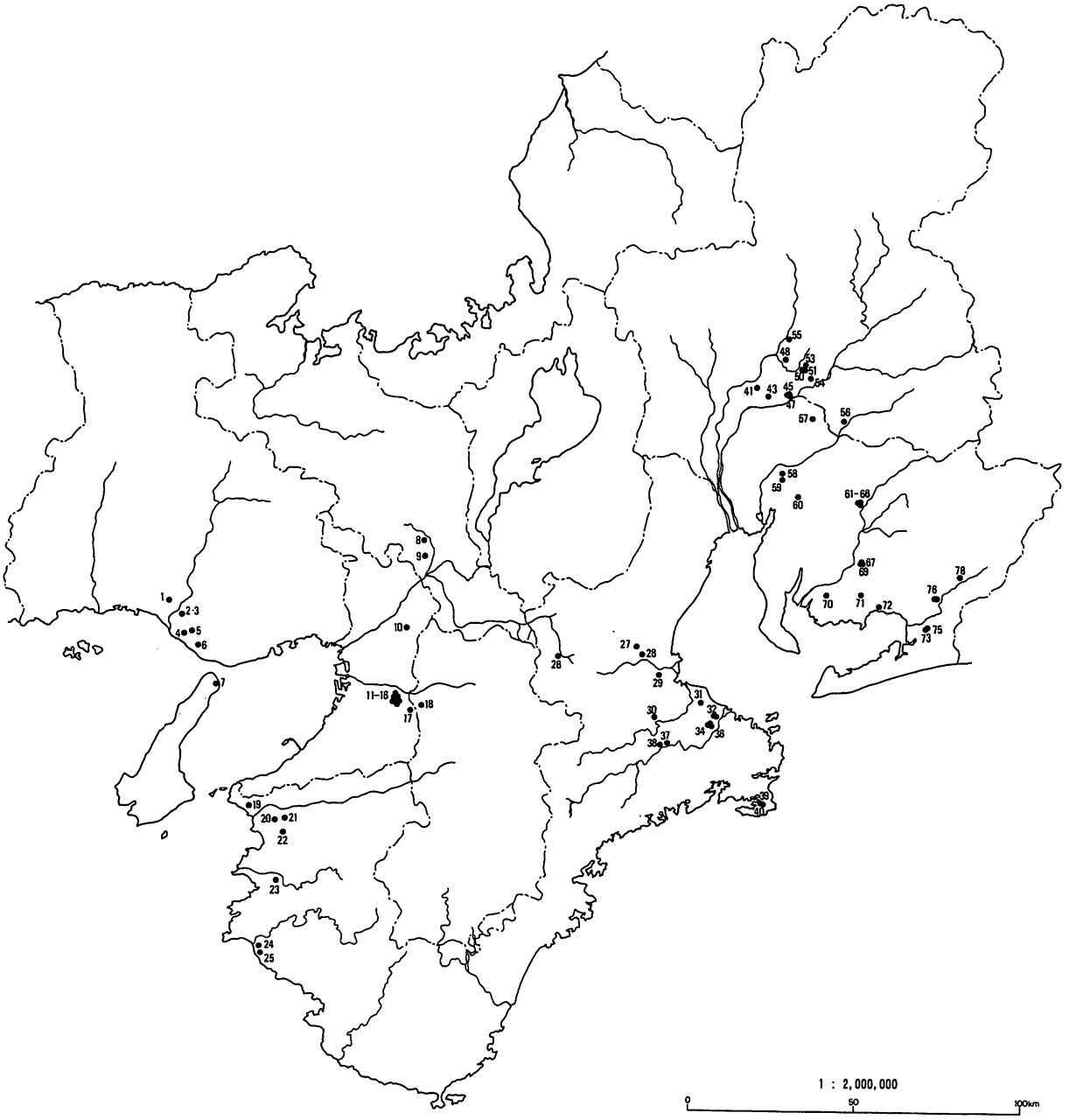
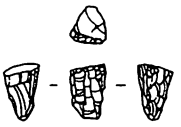
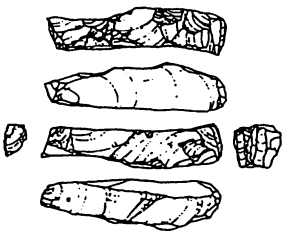


図　近畿・東海西部の細石刃文化遺跡の分布

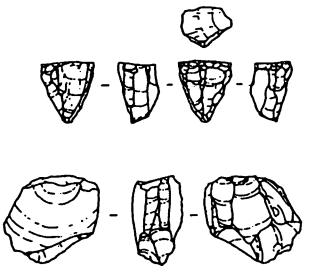
1．横山Ｂ遺跡



2．日岡山遺跡

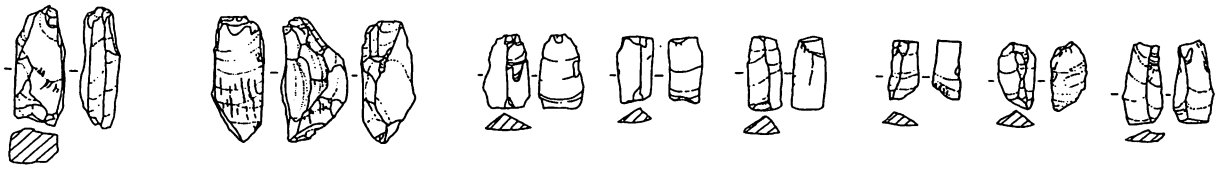


3．南大塚遺跡



5．和田新池遺跡

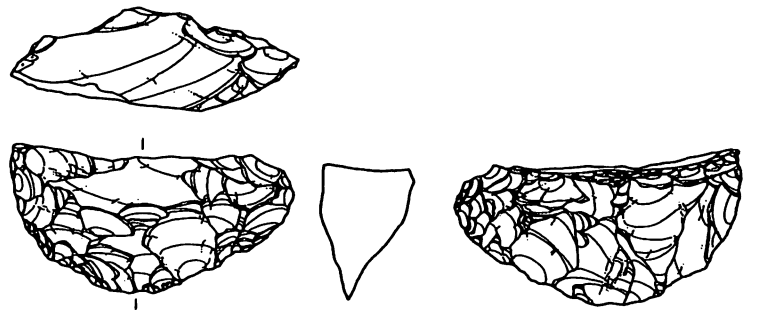
7．まるやま遺跡



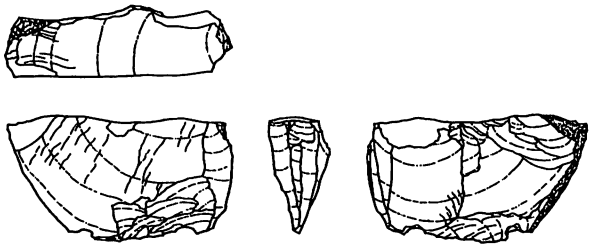
9．下海印寺遺跡

第１図　兵庫県・京都府の石器　(S=1/2)

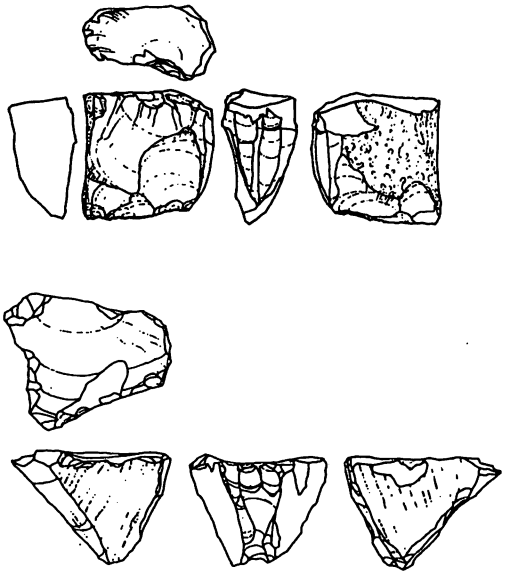
10. 讃良川床遺跡



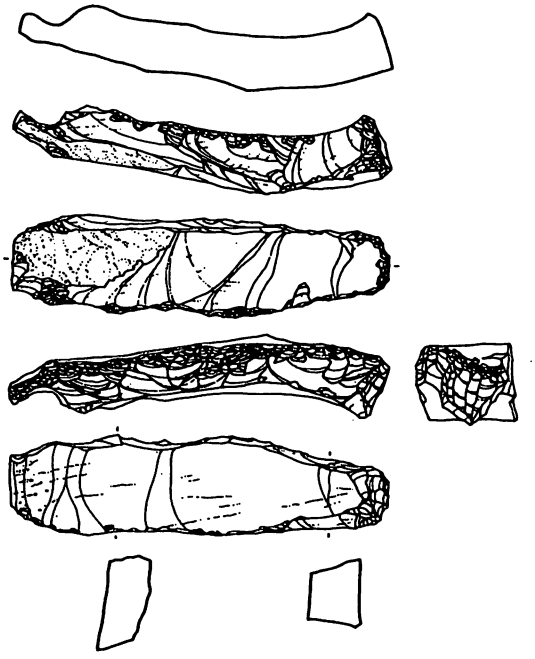
11. 船橋遺跡



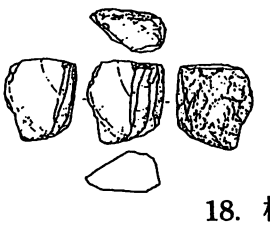
12. 西大井遺跡



13. 青山遺跡

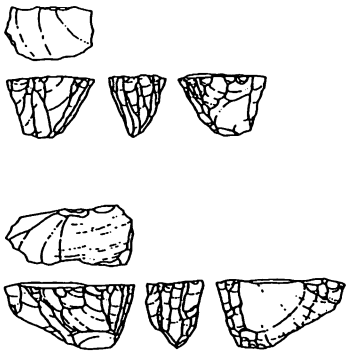


15. 誉田白鳥遺跡

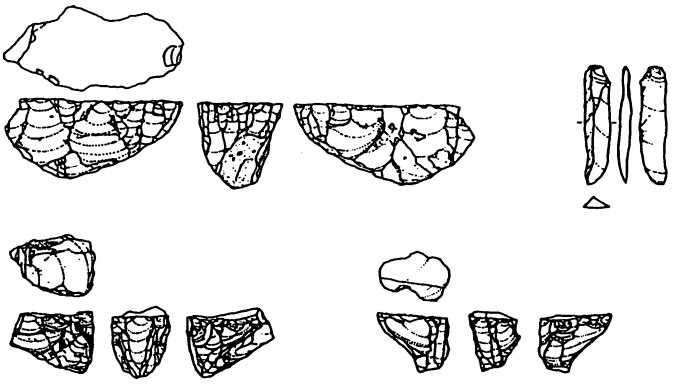


18. 桜ヶ丘１遺跡

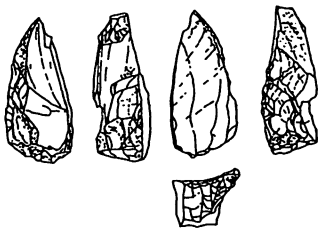
第２図　大阪府・奈良県の石器　(S=1/2)

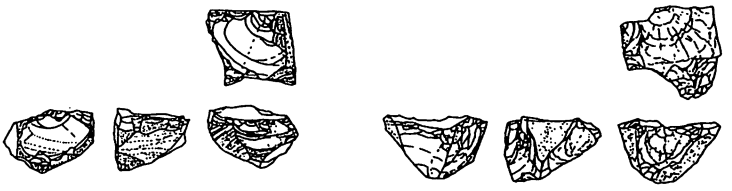


21. 平池北岸遺跡

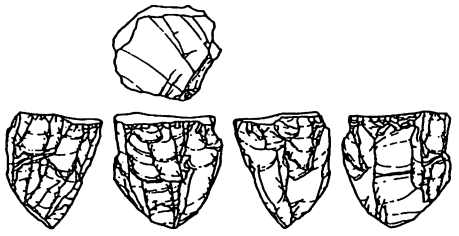


25. 壁川崎遺跡

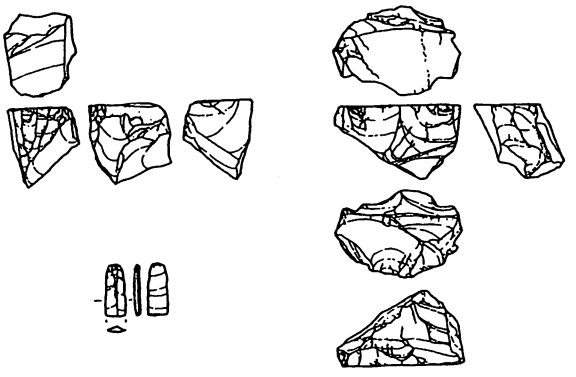




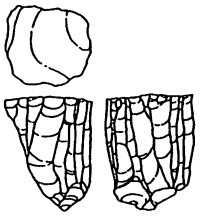
26. 比土遺跡



29. 焼野古墳

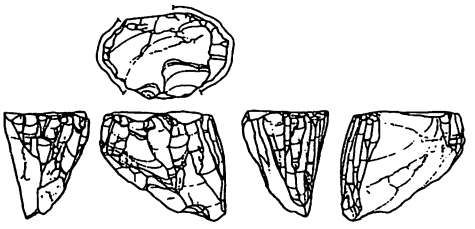


30. 上ノ広遺跡



34. そうれ場遺跡

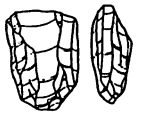
35. カリコ遺跡



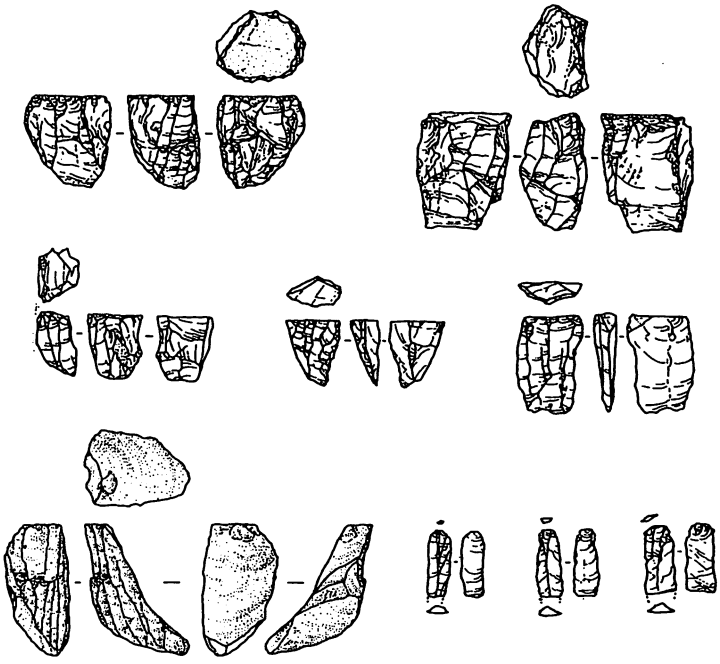
37. 出張遺跡

第３図　和歌山県・三重県の石器　(S=1/2)

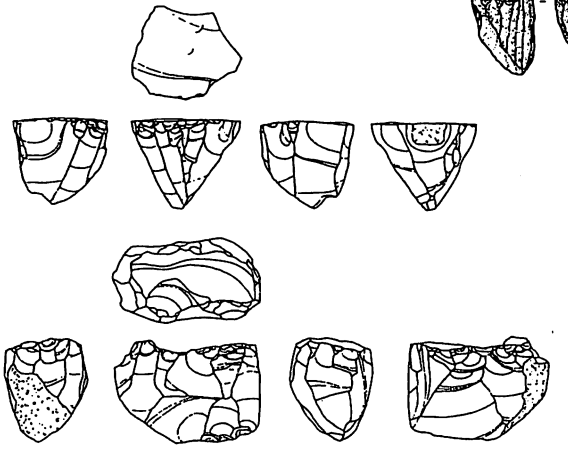
38. 中野遺跡



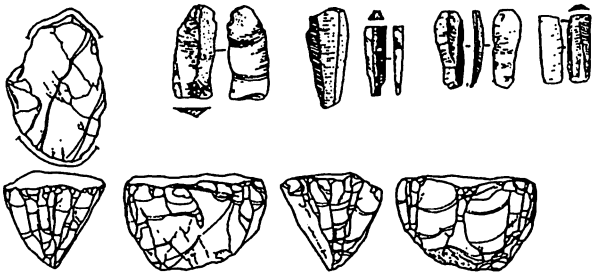
40. 登茂山遺跡

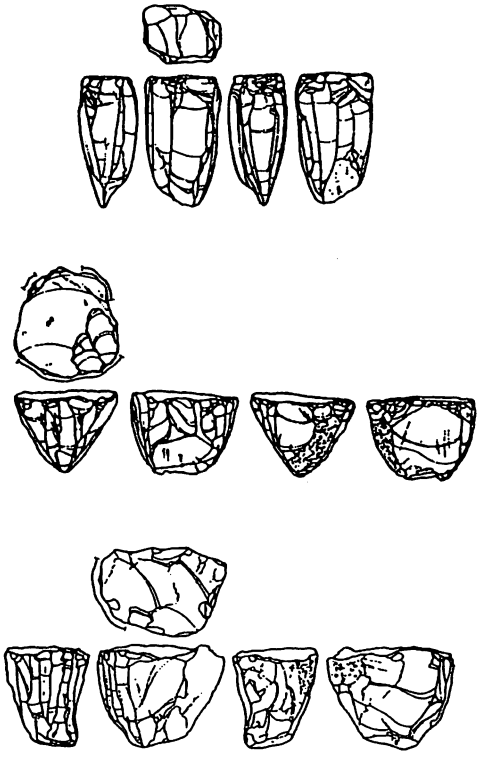


41. 寺田遺跡



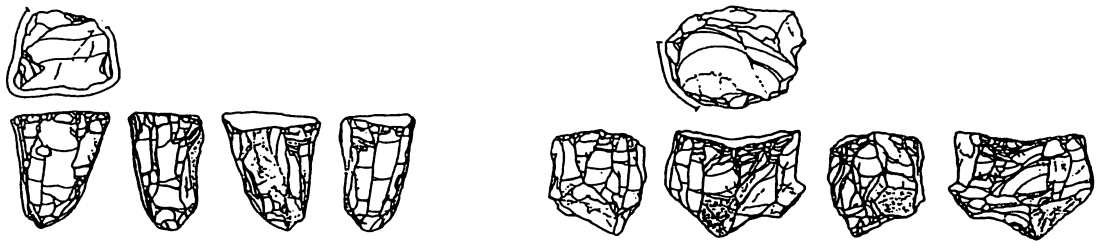
43. 土山西遺跡



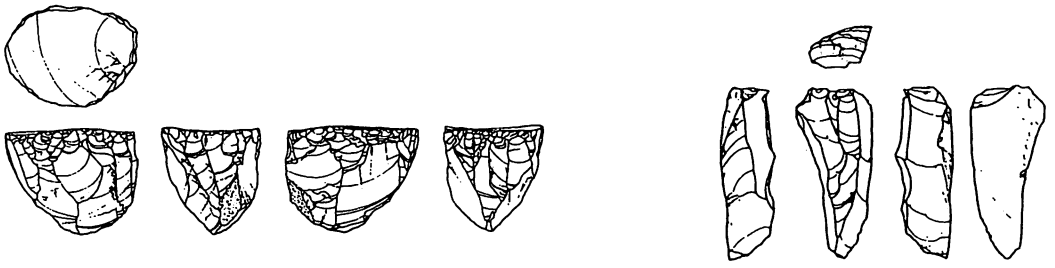


50. 海老山遺跡

第４図　三重県・岐阜県の石器　(S=1/2)



51. 北野遺跡

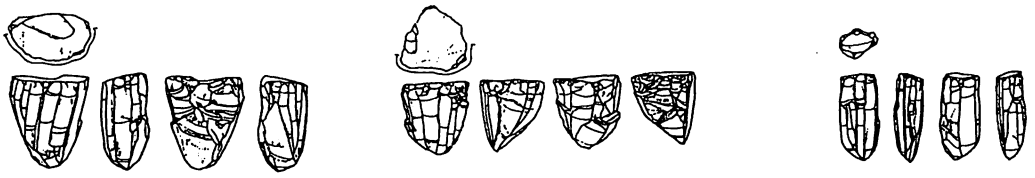


58. 三の丸遺跡

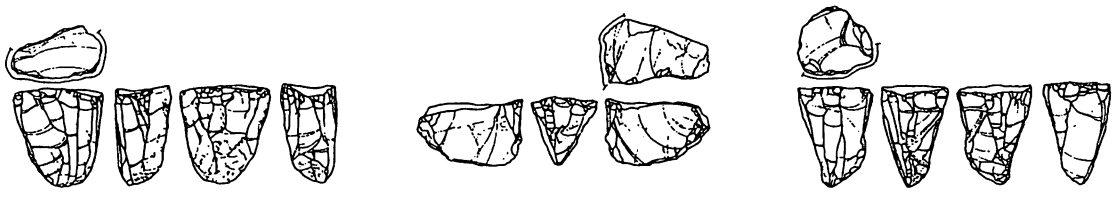
59. 旧紫川遺跡

63. 上原遺跡

64. 霊岩寺B遺跡

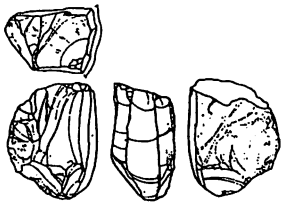


65. 長興寺遺跡



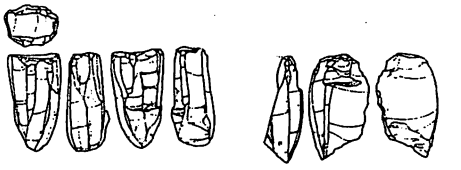
66. 大明神B遺跡

第5図　岐阜県・愛知県の石器　(S=1/2)

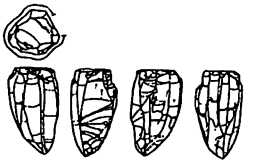


67. 五本松遺跡

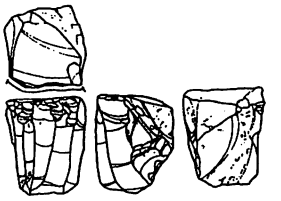
68. 仁田遺跡

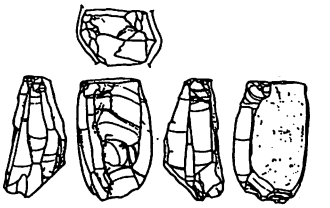


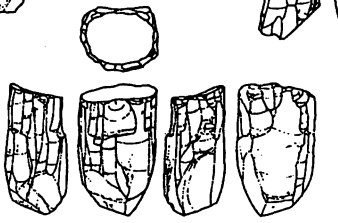
69. 村上遺跡



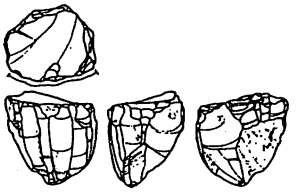
70. 枯木宮貝塚

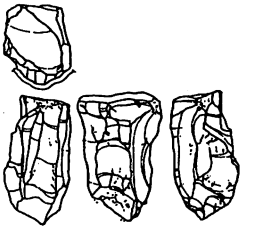


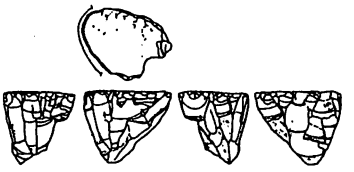




76. 大沢池遺跡







77. 足山田遺跡

78. 有海遺跡

第６図　愛知県の石器　(S=1/2)

表1　近畿・東海西部の細石刃文化遺跡の一覧表

NO.	遺跡名	組成 細石刃	細石核	削器	掻器	彫器	錐	楔形石器	局部磨製石斧	礫器	ナイフ形石器	尖頭器	有舌尖頭器	削片	土器	総計	発掘	標高	地域	文献	備考
1	横山B地点		1					1			15							40m	加古川流域	佐藤良二　1980	
2	日岡山		1								5							40m	加古川流域	松本・安川・春成1982	
3	南大塚		1								○							20m	加古川流域	今里幾次　1980	打面再生剥片
4	山之上	○	2		11	7					○		2					13m	加古川流域	藤原・浅原　1980	
5	和田新池		2															38m	加古川流域	松本・安川・春成1982	旧野際池
6	野々池		1	2							1		1	1				20m	明石川流域	松本・安川・春成1982	
7	まるやま	40	18								1					60	有	20m	淡路島	山本誠　2002	
8	中久世		1															20m	桂川流域	都出・四手井　1971	
9	下海印寺	○	○															40m	桂川流域	岩崎誠　1991	
10	蔵良川床	○	1														有	20m	枚方台地	松藤和人　1978	再堆積
11	舟橋		1								○						有	14m	羽曳野台地	大阪文化財センター1990	ブランクのみ
12	西大井		1		2			1				1	2			30	有	11m	羽曳野台地	橋本正幸　1992	
13	北岡		1	○							○		○					25m	羽曳野台地	大阪文化財センター1990	
14	育山		2		○	○					○		○				有	36m	羽曳野台地	大阪文化財センター1990	
15	誉田白鳥		1										○				有	28m	羽曳野台地	大阪文化財センター1990	打面再生剥片
16	城山		1	○	○			○		○	○	○					有	34m	羽曳野台地	大阪文化財センター1990	
17	新池		2															80m	二上山北麓	吉朝則宮　1974	
18	桜ヶ丘第1地点		1														有	70m	二上山北麓	松藤和人　1992	
19	平ノ上池	4	1								○								紀ノ川流域		中原正光氏のご教示による
20	山東大池		1								○	○							紀ノ川流域		中原正光氏のご教示による
21	平池北岸	200以上	12								○							50m	紀ノ川流域	中原正光　1988	
22	槻河池		1																紀ノ川流域		中原正光氏のご教示による
23	土生池		1								○						有	35m	有田川流域	藤井保夫　1984	
24	尾ノ崎国道東部	1	1								○						有	25m	日高川流域	中原正光　1988	
25	磯川崎	20以上	20								○	○						25m	日高川流域	中原正光　1988	
26	比土		1		1		1						1			14	有	180m	木津川上流	堀邦典　1997	
27	長田		1																出雲川流域	岡田登　2002	
28	東出		1																出雲川流域	岡田登　2002	
29	焼野古墳		1													1	有	40m	出雲川流域	福本賢治　1991	
30	上ノ広	1	1	5	6			5	2			8			早～後	891	有	60m	勝田川流域	田村陽一ほか　1989	
31	上村池B		1															40m	宮川流域	鈴木忠司　1979	
32	石川	1																	宮川流域	新田剛　2001	
33	マト田		2															5m	宮川流域	松藤和人　1992	
34	そうれ場		3															24m	宮川流域	松藤和人　1992	旧称　東仲
35	カリコ		3															20m	宮川流域	新田剛　2001	
36	蛟山		1															20m	宮川流域	新田剛　2001	
37	出張		5														有	50m	宮川流域	奥義次　1976	
38	中野		1															50m	宮川流域	鈴木忠司　1979	
39	次郎六郎		1																志摩半島	新田剛　2001	打面再生剥片のみ
40	登茂山		1															25m	志摩半島	鈴木忠司　1979	
41	寺田	7	5													344	有	21m	各務原台地	吉田英敏ほか　1987	作業面再生剥片有
42	日野1	3	1														有	21m	各務原台地	吉田英敏ほか　1987	作業面再生剥片有
43	土山西		1													4		17m	各務原台地	沢田伊一郎　1992	
44	桐野		○															18m	各務原台地	沢田伊一郎　1992	
45	線振		○															60m	各務原台地	鈴木忠司　1979	
46	内野前		○															55m	各務原台地	沢田伊一郎　1993a	
47	植野		○															42m	各務原台地	沢田伊一郎　1993a	打面再生剥片
48	向中野		○															85m	長良川流域	鈴木忠司　1979	
49	松原		○															40m	長良川流域	鈴木忠司　1979	
50	海老山	20以上	100以上		○						○	○					有	80m	長良川流域	鈴木　1979　沢田　1993b	
51	北野		○															70m	長良川流域	沢田伊一郎　1993b	
52	大山北野		○															80m	長良川流域	鈴木忠司　1979	
53	小竹原		○															95m	長良川流域	鈴木忠司　1994	
54	境松		○															85m	木曽川流域	鈴木忠司　1979・1994	
55	安毛		○															110m	長良川流域	鈴木忠司　1994	
56	虎渓山E地点		○															125m	庄内川上流	鈴木忠司　1994	
57	入鹿池		○															110m		鈴木忠司　1979・1994	
58	三の丸		1															15m	庄内川流域	小澤一弘　1990	
59	旧紫川		1									○	○				有	8m	庄内川流域	伊藤・川合　1993	
60	北沢		○								○	○						20m	天白川流域	伊藤・川合　1993	
61	千鳥		1															245m	矢作川流域	鈴木忠司　1979・1994	
62	大釜		○															85m	矢作川流域	鈴木忠司　1979・1994	
63	上原		○															60m	矢作川流域	鈴木忠司　1979・1994	打面再生剥片のみ
64	霊岩寺B		1															65m	矢作川流域	鈴木忠司　1979・1994	
65	長興寺		1															45m	矢作川流域	鈴木忠司　1979・1994	
66	大明神B		6															30m	矢作川流域	鈴木忠司　1979・1994	
67	五本松	59	8															35m	矢作川流域	鈴木忠司　1979・1994	
68	仁田	29	5															35m	矢作川流域	鈴木忠司　1979・1994	
69	村上	1	1															35m	矢作川流域	鈴木忠司　1979・1994	
70	枯木宮貝塚		1														有	10m	矢作川流域	鈴木忠司　1979・1994	
71	牛ノ松		○															25m		鈴木忠司　1979・1994	
72	門前		○															32m		鈴木忠司　1979・1994	
73	馬越		○															35m	豊川流域	鈴木忠司　1979・1994	
74	大清水		○															24m	豊川流域	鈴木忠司　1979・1994	
75	丸山		○															40m	豊川流域	鈴木忠司　1979・1994	
76	大沢池		4															45m	豊川流域	鈴木忠司　1979・1994	別称　鏡水
77	足山田		3															110m	豊川流域	鈴木忠司　1979・1994	別称　山舞子
78	有海		1															100m	豊川流域	鈴木忠司　1979・1994	

中国地方における細石刃文化

光石　鳴巳

1　研究の経過

中国地方における細石刃文化研究の嚆矢ともいえるのは、1946 年におこなわれた豊元国氏らによる宮脇遺跡(広島県芦品郡新市町[現在は福山市])の発掘調査だろう。豊氏は、発掘調査以前に細石器に類似した石片を採集したことから、日本列島に細石器文化が存在したことを推定していたという。調査報告の中で、打製石器のいくつかについて、細石器文化段階に属する可能性を指摘し、それらが押型文土器にともなうものとされた。石器群そのものについては、三枝健二氏による再検討の結果、それらが楔形石器など縄文時代に帰属するものであることが明らかになっており(三枝 2002)、宮脇遺跡を細石刃文化期の遺跡とすることは困難となっている。しかし、日本列島における旧石器文化の存否が不明であった岩宿以前の段階で、細石刃文化の存在を想定したことには、一定の学史的意義が与えられるだろう。

さて、宮脇遺跡の調査にも参加した鎌木義昌氏らは、「細石器」が押型文土器に伴うという前提に立ち、岡山県黄島貝塚、黒島貝塚などの調査をおこなった。その包含層中から細石器の検出を試みるが、もちろん、これらの試みは不成功に終わる。しかし、これらのことが刺激となって、岡山県鷲羽山周辺などで石器類の採集が進められたようである(鎌木・高橋 1965)。1949 年の岩宿の発見が、土器を伴わない文化の存在を前提とした研究への転換を促す契機になったことはいうまでもなく、鷲羽山周辺での採集資料中から細石核などの資料が見出されたことで、中国地方における旧石器研究は大きな転換期を迎えることになる。以後、香川県井島遺跡、鷲羽山遺跡などの調査がおこなわれ、刃器を主体とする「鷲羽山Ⅰ」、尖頭器を主体とする「鷲羽山Ⅱ」、宮田山型ナイフ形石器を主体とする「鷲羽山Ⅲ」、細石刃、細石核を主体とする「鷲羽山Ⅳ(井島Ⅱ)」と呼ぶ石器文化の編年観が提示される。こうして中国地方における先駆的な旧石器研究は、瀬戸内地域を主な舞台として進められた。その成果は 1965 年刊行の『日本の考古学Ⅰ　先土器時代』にまとめられることになるが、旧石器研究の進展において、細石刃文化の追求が重要な役割を担ったことは間違いない。

1970 年代以降になると、中国山地地域と宇部台地で旧石器石器群資料の蓄積が進む。とりわけ、良好な火山灰の堆積がみられる中国山地における知見は、中国地方の旧石器研究において重要な位置を占めている。1978 年の野原遺跡群早風A地点における調査が、中国山地地域における初のまとまった旧石器遺跡の調査だが、それ以後、岡山理科大学が蒜山原における一連の発掘調査を、岡山大学が恩原遺跡群の発掘調査を継続的におこなうことになる。ともに、細石刃文化研究に欠かせない資料の出土を見ている。とくに、恩原で湧別技法を持つ細石刃石器群が検出されたことで、東北日本からの集団の直接的な移動が想定されるようになった(稲田編 1996)。また隣接地域である近畿地方も含め、単独出土の湧別技法関連資料をより積極的に評価することが可能となったことの意義も見逃せないだろう。

一方、宇部台地の資料は表採が主体ながら、その採集地点は 50ヵ所にもおよび、およそ半数の 24ヵ所で細石刃関連資料が出土している。莫大な点数が蓄積されており、山口県旧石器文化研究会が『古代文化』誌上で継続的に報告を続けている。残念ながら何度かおこなわれた発掘調査では目立った成果はあがっていないが、中国地方でも随一の遺跡密度と遺物量を誇る地域で、九州との関連を考える上でもきわめて重要な内容である。

近年、とくに島根県内で新資料の増加が注目を集めている。玉髄・瑪瑙産地である花仙山周辺での湧別技法関連資料、黒曜石原産地である隠岐島内での細石核の出土がそれで、研究動向もにわかに活況を呈した観がある。

なお、細石刃文化期の集成作業も何度かおこなわれている。なかでも 1989 年に中・四国旧石器文化談話会が「中・四国地方における旧石器時代終末期の諸問題」と題しておこなった集成作業が最初のまとまった成果であろう。以後、筆者によるもの(光石1993)のほか、日本考古学協会2000年度大会における集成作業をあげることができる。また、各県単位では山口県(木村 1988)、島根県(湯村 1992、伊藤・丹羽野 2003)で旧石器遺跡の集成作業が進められている。

2　遺跡分布とその傾向

中国地方における細石刃文化期の遺跡が比較的集中する地域としては、次の4ヵ所があげられるだろう。すなわち、宍道湖周辺、中国山地の高標高地域、備讃瀬戸沿岸地域、そして宇部台地とその周辺である。このうち、中国山地は東半部にあたる岡山県地域に遺跡数が多く、巨視的には宍道湖周辺や鳥取県西部の大山山麓の遺跡群とのまとまりがとらえやすい。逆に、鳥取県東部や島根県西部、あるいは広島県の東部では、現在のところ細石刃文化期の資料が皆無という状況である。いずれにしても、宇部台地の遺跡群が比較的高い密集度を見せる以外は、各地域内の遺跡数も少なく、「遺跡群」と呼べるだけの密集度も認められない。なお、備讃瀬戸沿岸地域については、別に瀬戸内地域として四国側と一括されるので、本稿では取り扱わない。

宍道湖周辺の地域では、従来から断片的に細石核と考えられる資料の出土が知られていた。近年にいたって、玉髄・瑪瑙の原産地として著名な花仙山の北麓で、湧別技法関連資料が出土した杉谷・正源寺・宮ノ前・面白谷遺跡が集中する状況が明らかになったことが注目される。これらの遺跡は、いずれも花仙山(標高199.7m)から派生する40mまでの低丘陵上に立地する。また、黒曜石原産地として著名な隠岐島の東船遺跡でも細石核が出土しており、石材環境の面でも注目される。なお、他に日本海沿岸部では、大山山麓部でいくつかの事例が知られている。東麓部の丘陵上に位置する上神、高鼻は、ともに古墳の墳丘調査時に出土したもの、西麓の龍徳遺跡は、丘陵斜面の縄文時代遺跡での細石核の出土である。

中国山地の高標高地域に立地する遺跡群の代表的なものには、恩原1・2遺跡、蒜山高原の遺跡群があげられる。恩原1・2遺跡は、ともに吉井川の源流である恩原川に面し、北へ延びる舌状地形上に立地しており、恩原川と宮ヶ谷川の合流点を見下ろす位置にある。蒜山高原の遺跡群も、中国脊梁山脈の一部をなす蒜山三山から南へ延びる丘陵上で、南に旭川の上流域を望む位置にあたる。また、これらの遺跡が位置する丘陵地帯は、「鳥取県関金町、倉吉市に抜ける交通の結節点」(白石・小林 2001)に位置している。ほかには、野原遺跡群早風A地点、樽床遺跡群、そして湧別技法による資料も採集されている冠遺跡群があるが、いずれも断片的である。

宇部台地は、中国地方でも最も遺跡の密集度の高い地域である。東西約25km南北約20kmの範囲に細石刃関連資料が出土した24遺跡が知られている。瀬戸内海沿岸に近く、いずれもおおむね標高10～30mに立地する。特に台地南部の沢波川、浜田川の流域には南方遺跡、長桝遺跡といった大量の遺物が採集されている遺跡が知られており、この地域における中心的位置を占めている。

遺跡の標高について概観しておこう。まず目につくのは大部分が50mに満たない低標高地域に位置することだろう。実に36遺跡(地点)がこの帯域に属している。一方、中国山地の11遺跡(地点)が400m以上の地域に位置するが、とくに恩原、冠など7遺跡(地点)が700～800mの高標高地域に位置することが特筆される。これらの中間に位置するのはわずかに4遺跡(上神、高鼻、道上、高坂)だけである。こうした様相は、鈴木忠司氏が全国的な集成をもとに指摘した傾向(鈴木 1983)からさほどかけ離れていない。中国地方における細石刃文化期の遺跡分布は、低標高地域と高標高地域(高原地形)に二分されると言って良いだろう。

3　細石刃技法と石材

宍道湖周辺で従来から点々と出土し、細石核やその原形と考えられてきたものには、一部に細石核としての認定に問題のあるものも含んでいる。舟底形を呈し、船野型細石核の範疇で理解できるものには市場遺跡、首谷遺跡の資料がある。角柱形を呈し、これまで野岳・休場型の範疇に含められることの多かった資料にタテチョウ遺跡例があるが、転磨が進み細石刃剥離作業面に該当する剥離面に打点が観察されないなど、問題の多い資料で、今回の集成からは除外した。こうした状況を考慮の上で確実なものをあげていくと、船野型に類するものが主体との印象を受ける。市場で黒曜石が、勝木谷と首谷で玉髄が用いられている。

隠岐島の東船遺跡で出土した細石核が、船野型と呼んでもよさそうな舟底形であることは、上記の印象をさらに強くさせる。東船には、ほかに細石核原形の可能性が指摘される資料もある。いずれも黒曜石製で、長らく不明であった黒曜

石原産地における旧石器時代、とりわけ細石刃文化期の様相をうかがい知ることのできる貴重な事例といえるだろう。

一方、花仙山北麓の遺跡群から出土した資料は、いずれも湧別技法によると考えられるものである。出土している器種は細石核、同原形、削片、細石刃で、いずれも玉髄製である。後述する恩原石器群との関係が考慮されるべき資料である。

この他に日本海側で特筆すべきは、鳥取県倉吉市上神出土の細石核だろう[1)]。大型の船底状を呈するもので、九州的な「船野型」の範疇で考えるより、むしろ北方系の「幌加型」との印象が強い(松浦 1998)。使用石材については、隠岐産の黒曜石との分析結果が示されている。また、同じく倉吉市内の高鼻の細石核は、型式の詳細は不明だがチャート製とされている。龍徳遺跡出土の細石核は黒曜石製で、舟底形を呈するものである。

恩原1・2遺跡は、ともに湧別技法による細石核や削片を指標とする。残核や原形の形態にはいくらかの変異が認められるが、いずれにしても湧別技法が本来的にもつ変異幅の中で解釈できるだろう。また、恩原2遺跡には打面形成が側面調整に先行する、いわゆる「ホロカ技法」の手順に準じる細石核もあるが、石材の特性に臨機的に対応した結果と考えられる(光石 1996)。使用石材の主体となるのは玉髄・瑪瑙で、これに頁岩、黒曜石が加わる。なお、恩原2遺跡では黒曜石製角柱形細石核の打面再生剥片と考えられる資料が出土している。

蒜山高原の遺跡群では、舟底形の形態を示すものが主体である。いずれも黒曜石が用いられており、日本海側との密接な関係がうかがわれる。ところで蒜山高原で注目されるのは、戸谷遺跡第2地点の作業面再生剥片など3点が、いずれも珪質頁岩製ということだろう。現状では、恩原をのぞく中国地方で珪質頁岩製の細石刃関連資料はこの事例に限られ、東北日本系の要素の波及を考える上で見逃せない資料である。また同じく中国山地で、これまで円錐形細石核として扱われることの多かった野原早風A遺跡について、織笠昭氏は詳細な分析を踏まえて舟底形細石核に含めるのが妥当との結論を導いている(織笠 2002)。

中国山地でも広島県域の資料はいずれも断片的である。樽床遺跡群で「細石核」として報告されたものは、明瞭な細石刃剥離作業面が形成されず、細石核としての認定は難しい。ただし、細石刃とされたものには、それと認めて良さそうなものもあり、一概に細石刃石器群の存在を否定できるものでもない[2)]。「細石核」はすべて黒曜石、「細石刃」には黒曜石製と安山岩製のものがある。冠遺跡群の細石核はいずれも安山岩製で、C地点の細石核は井島Ⅱ型、第4地点のものは湧別技法によるものである。

宇部台地においては、細石核の形態は野岳・休場型に分類できるものが多数を占めており、ほかには、船野型、福井型、井島Ⅱ型といった諸型式に類似するものが散見される。使用石材については、全般的に黒曜石が多数を占めている。例をあげると、約 400 点の細石刃が採集されている長桝遺跡第1地点では黒曜石が 90%を占め、安山岩・ハリ質安山岩、水晶、チャートの順である。同様に約 350 点の細石刃が採集されている南方遺跡でも、黒曜石が8割程度、水晶が1割程度を占めるという。いずれの石器群においても、細石核の使用石材の傾向はこれに合致するとされている。とくに、野岳・休場型細石核には黒曜石、水晶が用いられる傾向が強い。また、南方遺跡、長桝遺跡第1地点では黒曜石の原産地分析の結果も示されている。南方遺跡の細石核 29 点については、隠岐島久見産1点のほかは、腰岳系 12 点、淀姫系7点、松浦産2点、古里または松浦産2点、不明5点となっている。長桝遺跡第1地点では8点のうち腰岳系6点、大崎産1点、不明1点である。いずれについても、北部九州産のものが圧倒的に多数を占める。

なお、宇部台地の川津遺跡では湧別技法による細石核原形が採集されている。玉髄製で、本州最西端の湧別技法関連資料である。使用石材にも日本海側との強い関連がうかがわれ、注目すべき資料である。

4　組成の特徴

資料の大部分が採集資料もしくは単独出土のため、石器組成のわかる資料はほとんど知られていない。細石刃が採集されている遺跡についても、細石核の出土がない場合にはその認定に問題が残るところである。もちろん宇部台地の遺跡群のように、各期を通じて多数の遺物が採集されている場合には、スクレイパー類などのいくらかが細石刃石器群に伴う可能性あるが、確認する術がないというのが実状であろう。こうした中、発掘調査によって石器組成を知ることができる事例として、恩原1・2遺跡と東遺跡があげられるのみである。

東遺跡では、細石刃と細石核・同原形の他に、スクレイパー、加工痕ある剥片(RF)、使用痕ある剥片(UF)と石核の出土が報告されている。スクレイパー、RF、UFはいずれも1～2点である。また、細石刃をはじめとするトゥール類がいずれも黒曜石製であるのに対し、石核は安山岩製1点、頁岩製2点で、他との有機的な関連が見出しにくい。いずれにしても、細石刃石器群においてスクレイパー類の組成率が低いという点で、西南日本における一般的なあり方とは矛盾しない。

一方、恩原遺跡では、第1・第2遺跡のいずれにおいても、湧別技法による細石刃製作に関連した各器種を中心として、削器・掻器や荒屋型彫器を伴う石器組成である。第1遺跡にのみ含まれる器種としていわゆる「角二山型」掻器、周縁加工尖頭器があることや、細石核の形態や各種の接合資料から復元される細石刃製作工程のバラエティなど、細部で若干の相違があるものの、両石器群はほぼ同一といっても良い内容である。

恩原との関係で、花仙山北麓遺跡群の石器組成が気がかりだが、現在までのところ確実に細石刃石器群を構成すると思われる器種は抽出されていない。今後の成果に注目していきたい。

5　細石刃石器群の様相と編年

ここまで述べてきたように中国地方においては、船野系あるいは野岳・休場系細石核を指標とする石器群がいわば「在地系」の石器群ととらえられる。もう少し詳しく見れば、中国山地高標高地帯と日本海沿岸地帯については、船野型に通じる舟底形細石核が主体、宇部台地については野岳・休場型細石核が主体と考えて良いだろう。そして、これに恩原に代表される湧別技法石器群が、外来的要素として断片的に各所で発見されており、いわばモザイク状ともいえる状況を呈している。しかし、資料の大半が採集資料で層位的事例に乏しい現状では、これらの在地・外来両者の関係について編年的な視点から展望を示すことは難しいだろう。編年の問題に関わって、中国山地の恩原1・2遺跡、東遺跡における層位的出土例をあげておこう。

中国山地における基本的な層序は、上から黒ボク層、漸移層、ソフトローム層、上のホーキ層、オドリ層、下のホーキ層、姶良Tn火山灰層と続く。恩原において、細石刃石器群は漸移層を主な出土層準としている。ちなみに、恩原2遺跡の出土資料431点の内訳をみると、黒ボク層213点、漸移層176点、ソフトローム層42点となっている。ソフトローム層は、横長剥片素材ナイフ形石器を指標とする石器群の主な包含層だが、細石刃石器群の本来の包含層が、ソフトローム層の上部を含んでいた可能性も皆無ではない。なお、恩原2遺跡では角柱形細石核の打面再生剥片と考えられる資料が出土している。平面分布の上でも北半にあたる第1集中部のほぼ中央に位置し、層位的な観点からも湧別技法関連資料との区分はできず、共伴を考えざるを得ない。

東遺跡での層序も基本的に上に述べたものとかわらない。東遺跡で示された層序では漸移層がⅡ層とⅡ'層に区分され、細石刃石器群である東区ブロックはⅡ層(漸移層)から出土している。尖頭器主体の石器群である西区ブロックはⅡ～Ⅱ'層から、同じく尖頭器主体の北区第1ブロックはⅢ層(ソフトローム層)上面で出土している。細石刃石器群はおおむね尖頭器石器群に後続するものとして理解できそうである。

6　研究の課題　—中国地方の石材環境と湧別技法集団—

今回の集成作業により、中国地方における細石刃石器群は49遺跡56地点にのぼることが明らかとなった。10年前の筆者による集成(光石 1993)では、瀬戸内沿岸の9遺跡を除くと37遺跡41地点であり、12遺跡15地点が増加したことになる[3)]。その中でも目につくのは、湧別技法関連資料が増加したことだろう。あらためて具体的にあげておくと、広島県冠遺跡第4地点、山口県川津遺跡での採集資料と、ここ数年の発掘調査で相次いで発見された島根県杉谷遺跡、正源寺遺跡、宮ノ前遺跡と面白谷遺跡の資料である。

恩原遺跡群での湧別技法石器群の確認を契機として、湧別技法による石器群をのこした集団が中国地方にまで達していたとの認識が、かなり広く受け入れられるようになった観があるが、ここにあげた資料の増加によって、その認識はさらに補強されることになるだろう。また、比較的早くから存在を知られていた大阪府誉田白鳥遺跡(一瀬編 1990)、兵庫県南大塚(今里 1980)といった資料もあわせて考えると、湧別技法集団の到達した範囲が本州のかなり広い範囲におよ

ぶことが明らかである。ただし、恩原の事例を除くと単独出土ばかりで、発掘調査による島根県内の資料も石器群としてのまとまりがない以上、その評価に一定の制約があることも確認しておかねばならないだろう。

これら湧別技法集団がのこした痕跡に、はたしてどのような意義が認められるのだろうか。もちろん筆者の力量を超える課題であるが、ここでは、恩原遺跡群で用いられている玉髄・瑪瑙、頁岩、黒曜石といった石材を軸に考えをめぐらせ、今後の課題を整理しておきたいと思う。

恩原では、第1、第2遺跡のいずれにおいても、「古い財産」として珪質頁岩が一定量含まれている。珪質頁岩を使用する資料のうち、東北地方との間で最も近い位置にあるのが、富山県日の宮遺跡A地区出土資料である(山本 1992)。地元では濃飛流紋岩と呼ばれる、灰色を基調とした色調を呈する石材を使用しており、質感は恩原で珪質頁岩と呼んでいるものとよく似ているという印象を受ける[4]。この資料は、断面三角形の削片を転用した細石核と説明されることが多いが、打面部の全長や幅も、削片と考えるとかなり大型で、これに対置できる細石核もかなりの大型品が考えられる。いずれにしても細石刃が安定して剥離されたものではなさそうである。

日本海側でも新潟より西の地域では、これ以外に湧別技法関連の資料に恵まれず、福井、京都北部、兵庫北部という空白地域が残る。また、珪質頁岩についても未知の産地が存在する可能性が皆無ではないだろうから、一足飛びに日の宮Aと恩原を結びつけることに躊躇するところである。しかし、西へ向かう足取りを考えるとき、富山平野という地域と、そこで入手できる頁岩質の石材(濃飛流紋岩)は無視できないだろう。ここで良質の石材を入手できたことが、湧別技法集団をさらに西へ向かわせる大きな契機となった可能性を考えておきたい。

頁岩に次いで、恩原集団が早い段階から所有していたと思われるのは黒曜石の一群である。これに関連して、日本海沿岸や中国山地地域で知られている細石核を概観すると、その形態によらず黒曜石を用いるものが多く目につくことがわかる。それらが隠岐産であることは、東船遺跡で細石核が出土したことや、上神の舟底形細石核の産地分析結果が隠岐産とされていることなどからも強く類推できる。また、蒜山原や早風Aで知られている細石核はすべて黒曜石製であり、玉髄・瑪瑙の使用は認められない。宍道湖周辺で一部の資料に玉髄を用いる以外、黒曜石の使用が一般的と言っても良い。こうした状況から、日本海沿岸から中国山地にかけて黒曜石を主に使用する在地集団が居住したことを想定するのも一案だろう。さらに想像をたくましくして、湧別技法保有集団が黒曜石原産地の所在を知るまでの過程において、在地集団との接触という局面が推定できないだろうか。

このことについて、恩原2遺跡の石器群にともに黒曜石製の、札滑型細石核と角柱形細石核の打面再生剥片が含まれることも傍証となるだろう。ところで、筆者は後者の資料に関連して湧別技法石器群と「在地系石器群との接触は、技術的な交流を伴うものではなかった」(光石 1996)と考えたことがあるが、それ以後、こうした問題を積極的に考えるだけの材料は得られていない。後述のように近畿・中国地方に限れば、そもそも在地集団の痕跡が希薄であるから、相互の関係を積極的に結ぶ機会に乏しいというのが実態だったのかもしれない。一方で、他地域に目を転じても、湧別技法石器群と「在地」石器群の共存例や、技術的交流の痕跡はさほど顕著ではないように思われるから、湧別技法集団の排他性や「典型指向」(稲田 1996)の強さが大きな要因かもしれない。いま少し考えていきたいところである。

恩原の集団が最も多く消費した石材は玉髄・瑪瑙である。恩原のものと非常によく似た外観の玉髄を用いる石器群が花仙山北麓の諸遺跡で発見されたことは、湧別技法石器群の資料が増加した中にあってももっとも特筆すべき事項だろう。これらの遺跡群では、遺物は古墳時代以降の玉作関連資料に混在するが、その技術的特徴が明確なために抽出することができている。細石核や削片などの湧別技法関連資料に用いられる石材は暗褐色を呈し、玉作に用いられる玉髄・瑪瑙とは明らかに識別できるとのことである。恩原出土の玉髄・瑪瑙の産地については出雲地域、それも花仙山周辺を有力視する見解を稲田孝司氏らが示してきているが、この仮説が一層現実味を帯びてきたといえるだろう。周辺を見渡すと、玉髄質の石材は恩原以外に川津や誉田白鳥の資料にも用いられている。いずれについても、その石材を花仙山と直接に結びつける根拠は薄弱だが、川津については、その報文中で宇部周辺には産出しない石材であること、「遠隔地からの搬入品である可能性が強い」(下瀬・藤野 1994)ことが指摘されている。一方で、南大塚のものや、恩原の一部が黒曜石製だが、少数に限られる。もっぱら珪質頁岩を好んで用いてきた湧別技法保有集団の嗜好に合致したのは、玉髄・瑪瑙質の石材だったらしい。

さて、ここまでもっぱら湧別技法石器群に関して思いつくままに述べてきたが、最後に「在地」の石器群についてもふれておこう。上に述べてきたように湧別技法関連資料が増加する一方で、近畿・中国地方においては、宇部台地周辺など一部を除き、そもそも細石刃文化期の遺跡分布が散漫である。したがって、これら湧別技法関連資料に対置できるような「在地」的様相もいまひとつはっきりしないというのが実感である。遺跡数が少ないということもさることながら、単独出土が多数を占めることは、関東・中部、あるいは九州と比較しても、ここで「細石刃文化」と呼べるものが実に低調であったと考えざるを得ないのである。

日本海沿岸地域と中国山地では、黒曜石主体で舟底形細石核を含む石器群が優勢であることが明らかになりつつある。一方、宇部台地とその周辺では野岳・休場型細石核と黒曜石が結びついて主体となること、船野型や井島Ⅱ型などの細石核型式が非黒曜石石材と結びつく状況が明らかである。とくに宇部台地の資料群は九州との関連を強く示唆しており、先に述べてきた湧別技法集団の到達とは対照的に映る。しかし、「在地」資料のいずれについても、石器組成をうかがうに足りる良好な発掘資料には恵まれておらず、細石核の形態からの推定という域を超えるものではない。依然として不明な点の多い「在地」の細石刃石器群の様相をより明らかにすることも、湧別技法集団の足取りを追求することと同様に重要な課題だろう。

本稿執筆にあたり多くの方々のご指導、ご助言をいただいた。遺物の実見にあたっては、稲田孝司、小林博昭、白石純、柳浦俊一、丹羽野裕、勝部智明、池野正男の諸先生・諸氏のご高配を賜った。また、個別の資料についての細々とした問い合わせや文献の検索について、藤野次史、根鈴輝雄、土井基司、松浦五輪美、多田　仁、沖　憲明、小南裕一、大川泰広の諸先生・諸氏を煩わせた。さらに、蒜山教育委員会、西伯町教育委員会からは刊行物のご寄贈をいただいた。末筆ながらここに記して感謝申し上げます。

註

1)　掲載した実測図は筆者原図による。掲載にあたっては根鈴輝雄氏のご快諾をいただいた。

2)　藤野次史氏の御教示による。なお、集成図版には報告書で「細石核」「細石刃」とされたものすべてを掲載した。

3)　増加分には、前回の集成から漏れていたものを補った５遺跡（高鼻、出雲玉作跡、江崎今津、原条、向川）と１地点（樽床N）が含まれ、前回ひとつの遺跡として掲載した幸崎を、今回は３つの地点とした。また、前回掲載したうち、様々な再検討の成果などを踏まえて３遺跡（タテチョウ、宮脇、紫野）と１地点（戸谷遺跡第５地点）を削除した。したがって、この10年間での実質的な新出資料は10遺跡と１地点（冠遺跡群第４地点）である。なお、これらの他に細石核の可能性が指摘された資料には島根県の雲垣遺跡と布志名大谷遺跡、広島県四日市西遺跡などがある。

4)　資料の実見にあたっては富山県埋蔵文化財センター、池野正男氏のご高配を賜った。

引用・参考文献

吾郷信一 編　2000『龍徳遺跡発掘調査報告書』西伯町埋蔵文化財調査報告書18　鳥取県西伯郡西伯町教育委員会
一瀬和夫 編　1990『南河内における遺跡の調査Ⅰ　旧石器時代基礎資料編Ⅰ』大阪府文化財調査報告書　第38輯、大阪府教育委員会
伊藤徳広・丹羽野　裕　2003「島根県出土の旧石器時代の石器について」『古代文化研究』第11号、島根県古代文化センター　pp.1～30
稲田孝司　1992「出雲地方玉髄・メノウ製石器研究の動向」『考古学研究』第39巻第2号、pp.115～124
稲田孝司 編　1996『恩原２遺跡』岡山大学文学部考古学研究室
稲田孝司・絹川一徳・光石鳴巳　1992「西日本の湧別技法」『岡山大学文学部紀要』第18号　pp.87～94
今里幾次　1980「播磨における黒曜石器及び石材の分布」『播磨考古学研究』今里幾次論文集刊行会　pp.182～188
岩崎仁志・大村秀典　1986『綾羅木郷台地遺跡（上ノ山地区）』山口県教育委員会
織笠　昭　2002「中国地方における船底形細石核の一様相」『環瀬戸内海の考古学―平井勝氏追悼論文集―』古代吉備研究会　pp. 19～41
鎌木義昌・高橋　護　1965「瀬戸内海地方の先土器時代」『日本の考古学Ⅰ　先土器時代』河出書房新社　pp.284～302
河村吉行　1985「宇部（小串構内）医学部体育館新営に伴う試掘調査」『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』山口大学埋蔵文化財資料館　pp.123～134
河村吉行　1991「小串構内医学部附属病院ＭＲＩ棟新営に伴う試掘調査」『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅸ』山口大学埋蔵

文化財資料館　pp.41～46
木村元浩　1988「先土器時代の山口地方　－遺跡の分布と立地－」『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅵ』山口大学埋蔵文化財資料館　pp.147～166
木村元浩　1989「吉田構内教育学部附属教育実践研究指導センター新営に伴う発掘調査」『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅶ』山口大学埋蔵文化財資料館　pp.5～22
木村元浩　1989「小串構内医学部附属病院病棟新営に伴う試掘調査」『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅶ』山口大学埋蔵文化財資料館　pp.67～84
小南裕一　2001「船頭遺跡採集の細石核」『陶窶』山口県埋蔵文化財センター　pp.19～22
三枝健二　2002「旧石器時代」『新市町史　通史編』　pp.152～167
下瀬洋一・藤野次史　1994「山口県宇部市川津遺跡採集の細石核」『旧石器考古学』48、旧石器文化談話会　pp.75～82
白石　純・小野　伸　1995「蒜山原採集の旧石器（Ⅱ）」『岡山理科大学自然科学研究所研究報告』21、岡山理科大学自然科学研究所　pp.31～33
鈴木忠司　1983「日本細石刃文化の地理的背景―先土器時代遺跡論の試み―」『角田文衛博士古稀記念　古代学叢論』平安博物館研究部　pp.1～24
高橋慎二　1978「小郡湾周辺における先土器時代遺跡の実態とその考察」『周陽考古学研究所報Ⅰ　山口県先史時代表採遺物集成ならびに編年的研究』周陽考古学研究所　pp.75～83
竹広文明　1997「広島県吉和村冠高原採集の細石核」『第14回中・四国旧石器文化談話会発表要旨』中・四国旧石器文化談話会　p.96
樽床遺跡群研究会　1986『樽床遺跡群の研究』芸北町教育委員会
中四国旧石器文化談話会　1989『第６回中四国旧石器文化談話会資料　―中・四国地方における旧石器時代終末期の諸問題―』
椿　徹・林　信行・西尾健司・岩崎仁志　2000『切畑南遺跡Ⅱ』山口県埋蔵文化財センター
津村弘臣　2002「恩原１遺跡M文化層の様相―遺跡形成と石器製作技術の特徴による時空間的位置づけ―」『中国山地東部の旧石器文化―恩原１遺跡を中心として―』第19回中・四国旧石器文化談話会実行委員会　pp.63～71
鳥取県埋蔵文化財センター　1988『旧石器・縄文時代の鳥取県』鳥取県埋蔵文化財シリーズ３
新谷俊典　2003『東遺跡Ⅰ』蒜山教育事務組合教育委員会
錦田剛志　2001「杉谷遺跡」『中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書５』島根県教育委員会　pp.143～209
日本考古学協会2000年度鹿児島大会実行委員会『旧石器から縄文へ―遺構と空間利用―』
丹羽野　裕　1991「島根県における旧石器時代研究の現状と課題　－宍道湖周辺地域を中心に－」『島根考古学会誌』第８集、島根考古学会　pp.57～66
根鈴輝雄　1991「鳥取県の旧石器研究」『島根考古学会誌』第８集、島根県考古学会　pp.51～56
平井　勝　1979『野原遺跡群　早風Ａ地点』岡山県教育委員会
藤野次史　1981「細石器」『広島県大百科辞典（上）』中国新聞社　p.578
藤野次史　1997「中国地方における細石刃石器群」『九州の細石器文化　－細石器文化の開始と編年研究－』九州旧石器文化研究会　pp.379～386
藤野次史　1998「広島県冠遺跡群採集の細石核様石核」『旧石器考古学』57、旧石器文化談話会　pp.95～98
藤野次史・山本一朗　1985『長桝遺跡発掘調査概報』山口県旧石器文化研究会
堀川　純　1983「蒜山高原採集の旧石器」『岡山理科大学蒜山研究所研究報告』第８号、岡山理科大学蒜山研究所　pp.55～74
堀川　純　1984a「岡山県八束村上長田牧野遺跡第１・４地点採集の旧石器」『岡山理科大学蒜山研究所研究報告』第９号、岡山理科大学蒜山研究所　pp.39～48
堀川　純　1984b「岡山県八束村牧野遺跡第５地点及び東遺跡採集の旧石器」『岡山理科大学蒜山研究所研究報告』第10号、岡山理科大学蒜山研究所　pp.33～36
松浦五輪美　1998「細石刃文化研究における二・三の問題」『旧石器考古学』57、旧石器文化談話会　pp.55～66
光石鳴巳　1993「中国地方の細石刃文化」『シンポジウム　細石刃文化研究の新たなる展開Ⅰ』佐久考古学会・八ヶ岳旧石器研究グループ　pp.152～171
光石鳴巳　1996「恩原２遺跡における細石刃石器群の技術論的考察」『恩原２遺跡』岡山大学文学部考古学研究室　pp.155～167
柳浦俊一　2003「島根県正源寺遺跡」『月刊　考古学ジャーナル』No.505、ニュー・サイエンス社　pp.27～30
柳浦俊一・丹羽野　裕　2002「島根県玉湯町　杉谷遺跡・正源寺遺跡・宮ノ前遺跡出土の細石刃石器群について」『中国山地東部の旧石器文化―恩原１遺跡を中心として―』第19回中・四国旧石器文化談話会実行委員会　pp.88～91
山口県旧石器文化研究会　1983「宇部台地における旧石器時代遺跡(1)－遺跡群の概要－」『古代文化』第35巻第12号、古代學協会　pp.32～43
山口県旧石器文化研究会　1985a「宇部台地における旧石器時代遺跡(3)－長桝遺跡第１地点　その(2)－」『古代文化』第37巻第２号、古代學協会　pp.42～46
山口県旧石器文化研究会　1985b「宇部台地における旧石器時代遺跡(4)－長桝遺跡第２地点・神楽田遺跡・吉田遺跡・南方裏遺跡－」『古代文化』第37巻第８号、古代學協会　pp.24～32
山口県旧石器文化研究会　1988「宇部台地における旧石器時代遺跡(7)－南方遺跡　その(3)－」『古代文化』第40巻第３号、古代學協会　pp.29～38

山口県旧石器文化研究会　1989a「宇部台地における旧石器時代遺跡(9)－常磐池遺跡　その(2)－」『古代文化』第 41 巻第 3 号、古代學協会　pp.50～54
山口県旧石器文化研究会　1989b「宇部台地における旧石器時代遺跡（10）　－岡ノ辻遺跡・川津遺跡・蛇瀬池遺跡－」『古代文化』41-6、古代學協会　pp.44～48
山口県旧石器文化研究会　1991「宇部台地における旧石器時代遺跡（14）－岩上遺跡　その(2)－」『古代文化』第 43 巻第 7 号、古代學協会　pp.43～47
山口県旧石器文化研究会　1992「宇部台地における旧石器時代遺跡（15）－小郡湾西部の旧石器時代遺跡－」『古代文化』第 44 巻第 4 号、古代學協会　pp.47～53
山口県旧石器文化研究会　1998「宇部台地における旧石器時代遺跡（19）－藤尾遺跡　その(3)－」『古代文化』第 50 巻第 2 号、古代學協会　pp.49～53
山本正敏　1992「小矢部市日の宮遺跡Ａ地区出土舟形細石核」『富山県埋蔵文化財センター所報』第 40 号　p.7
湯村　功　1992「島根県内の旧石器時代・縄文時代草創期資料について」『旧石器考古学』44、旧石器文化談話会　pp.85～106

1　上神
2　高鼻
3　龍徳
4　勝木谷
5　市場
6　杉谷
7　面白谷
8　宮ノ前
9　正源寺
10　出雲玉作跡
11　首谷
12　東船
13　早風Ａ地点
14　東
15　牧野第４地点
16　戸谷第２地点
17　恩原１
　　恩原２
18　冠Ｃ地点
　　冠第４地点
19　道上
20　樽床Ｃ地点
　　樽床Ｇ地点
　　樽床Ｎ地点
21　綾羅木郷台地
　　（上ノ山地区）
22　船頭
23　山口大学医学部構内
24　川津
25　常盤池
26　西吉沢
27　本郷
28　神楽田
29　白土
30　上ノ原
31　南方
32　長桝第１地点
　　長桝第２地点
33　岩上
34　丸塚
35　江崎今津
36　向川
37　原条
38　藤尾
38　幸崎第２地点
　　幸崎第３地点
　　幸崎第４地点
40　長浜
41　河原
42　長沢池
43　小浜
44　天田
45　宮ノ前
46　柴山裏
47　切畑南
48　吉田
49　高坂Ａ地点

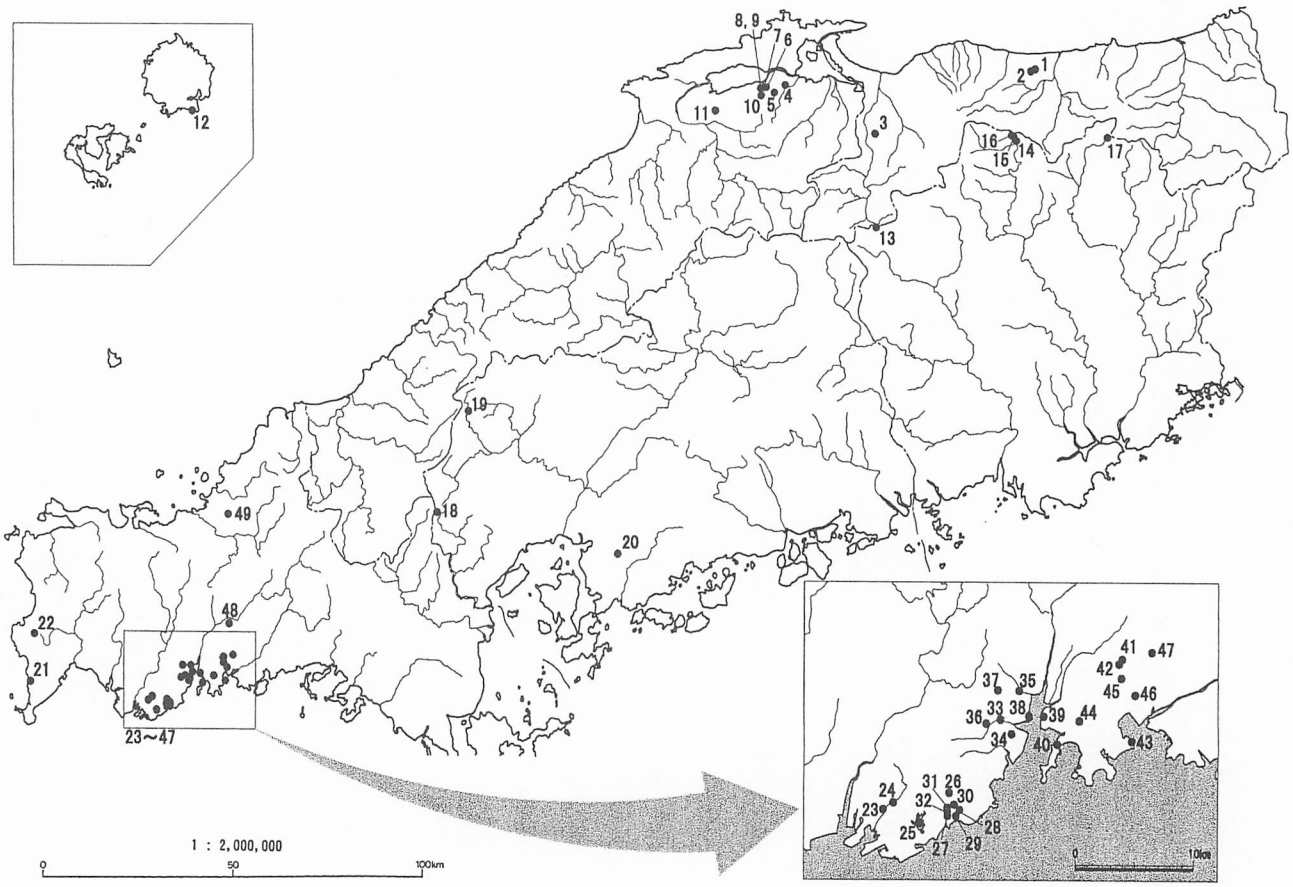
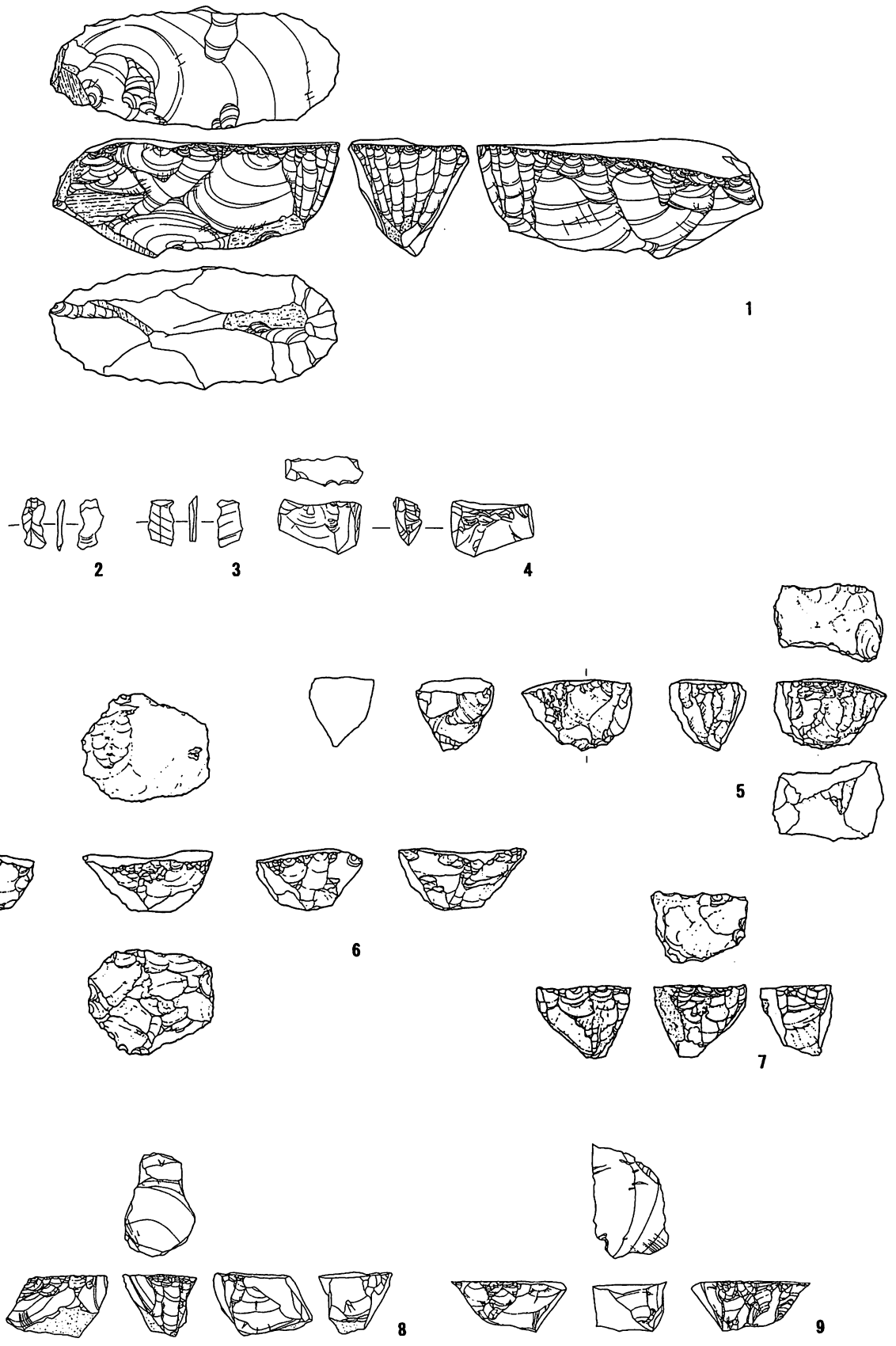
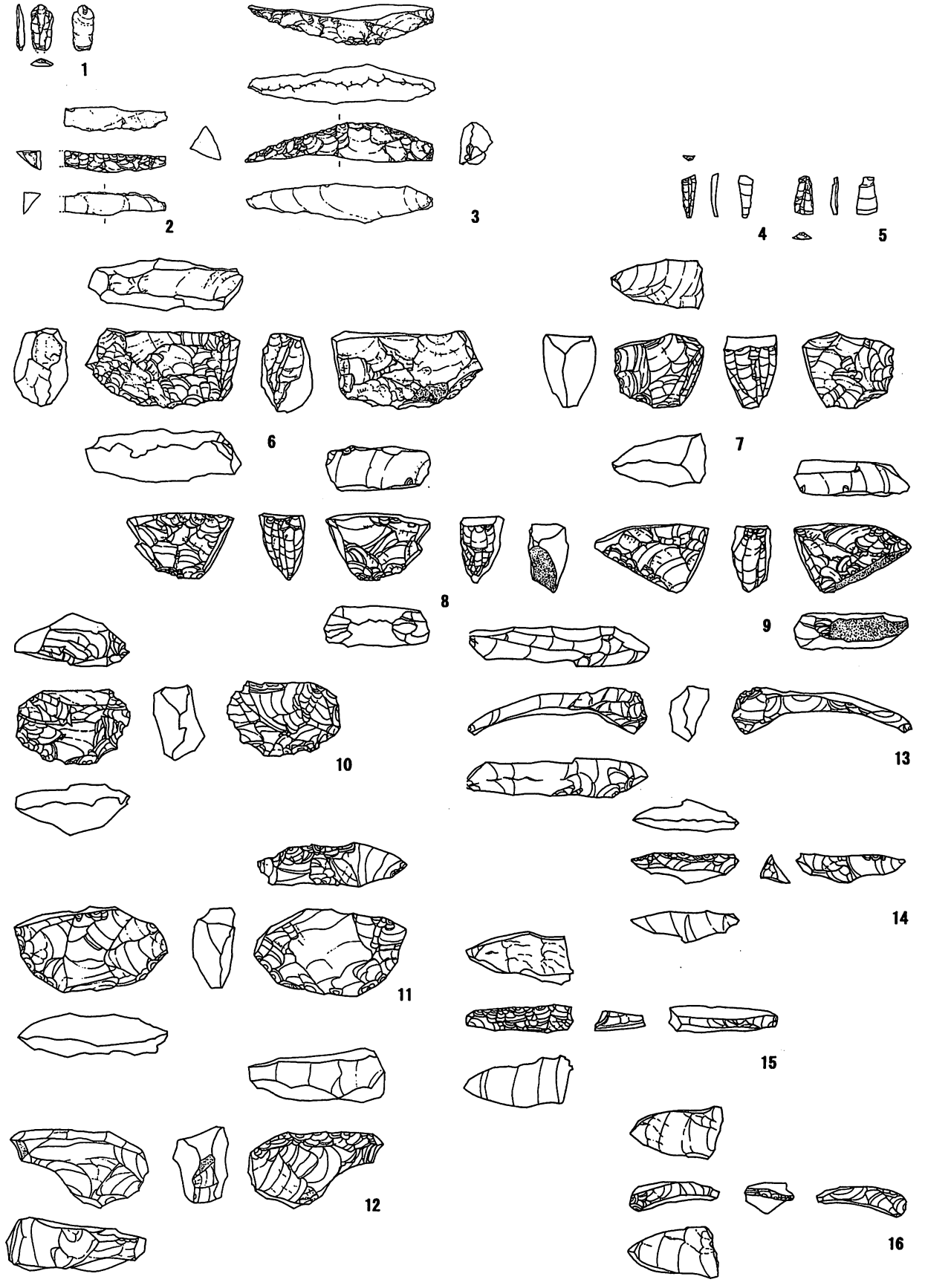


図　中国地方の細石刃文化遺跡の分布

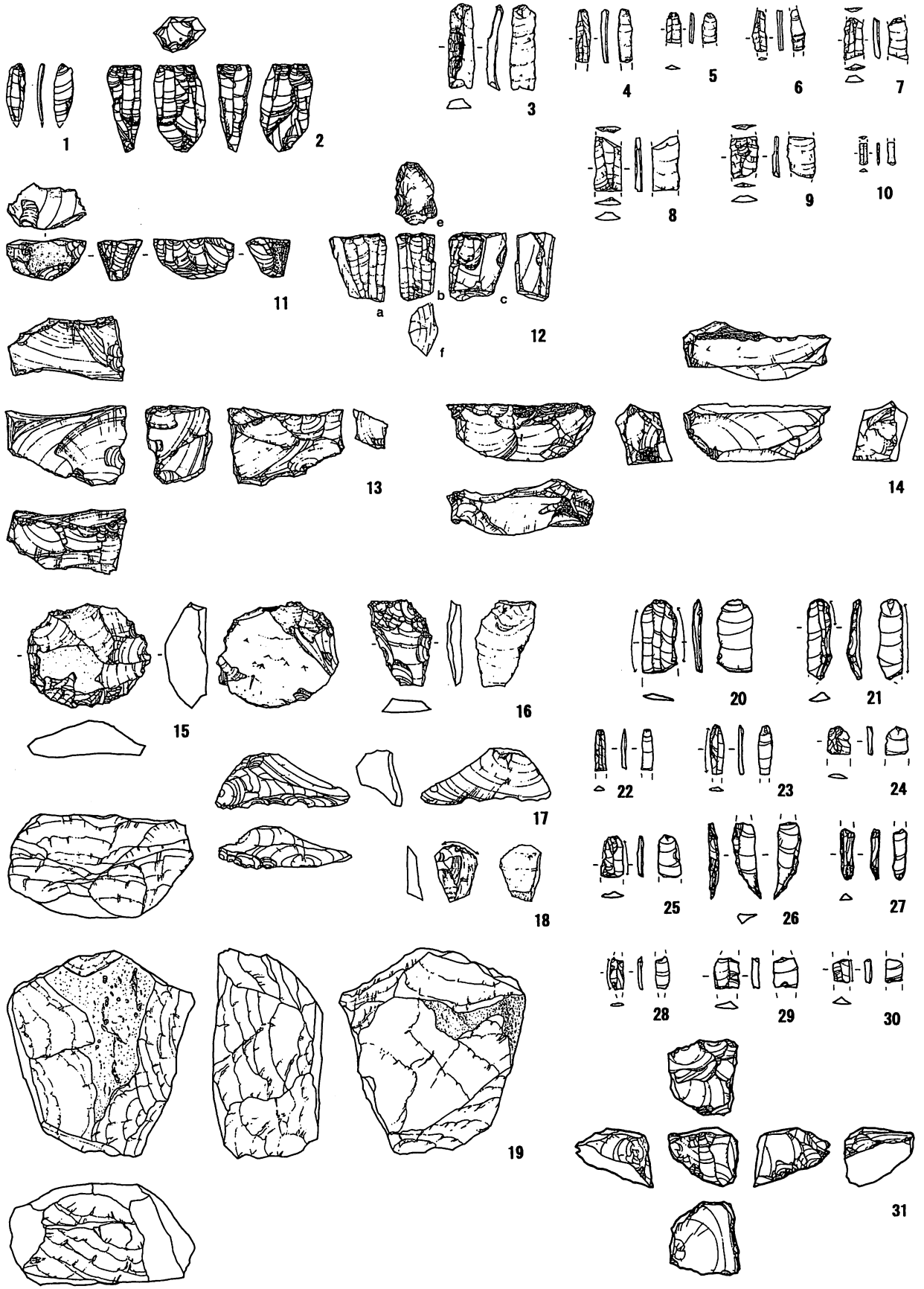


第１図　日本海沿岸地域の遺跡

1：上神(1)　2～4：龍徳(3)　5：市場　6：出雲玉作跡(10)　7：首谷(11)　8,9：東船(12)

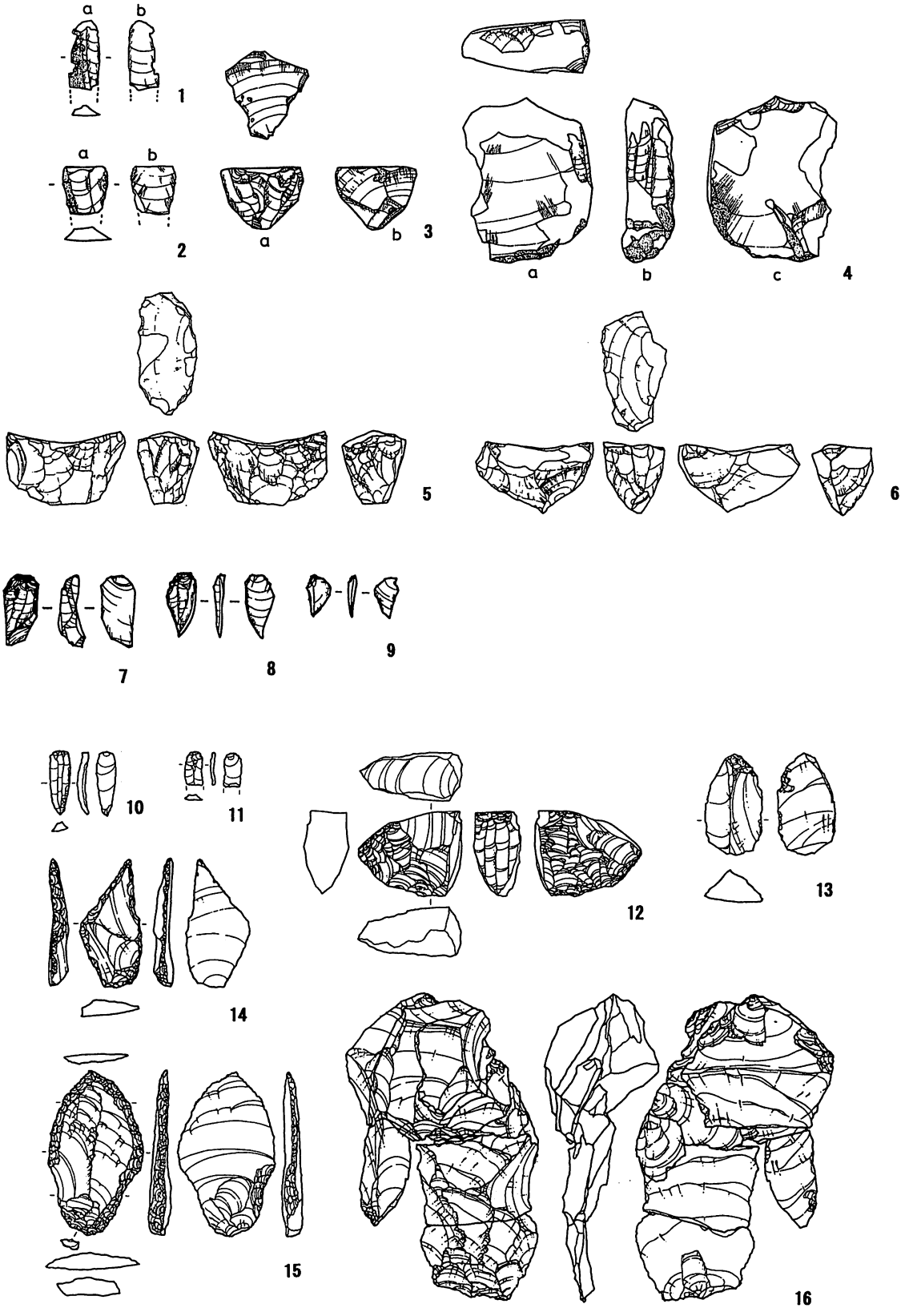


第２図　日本海沿岸地域（花仙山北麓）の遺跡
1～3：杉谷(6)　4～16：正源寺(9)

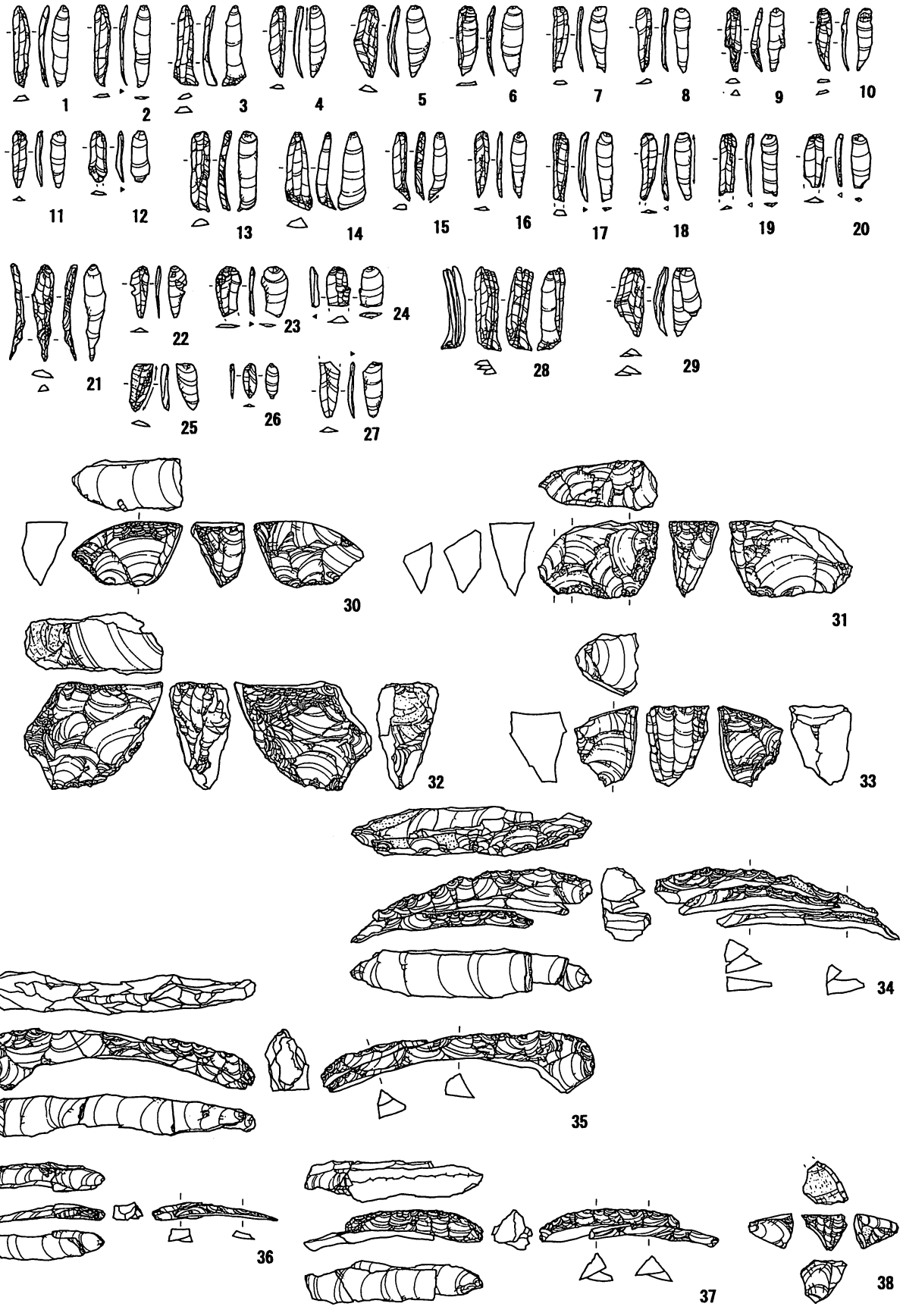


第３図　中国山地東部の遺跡

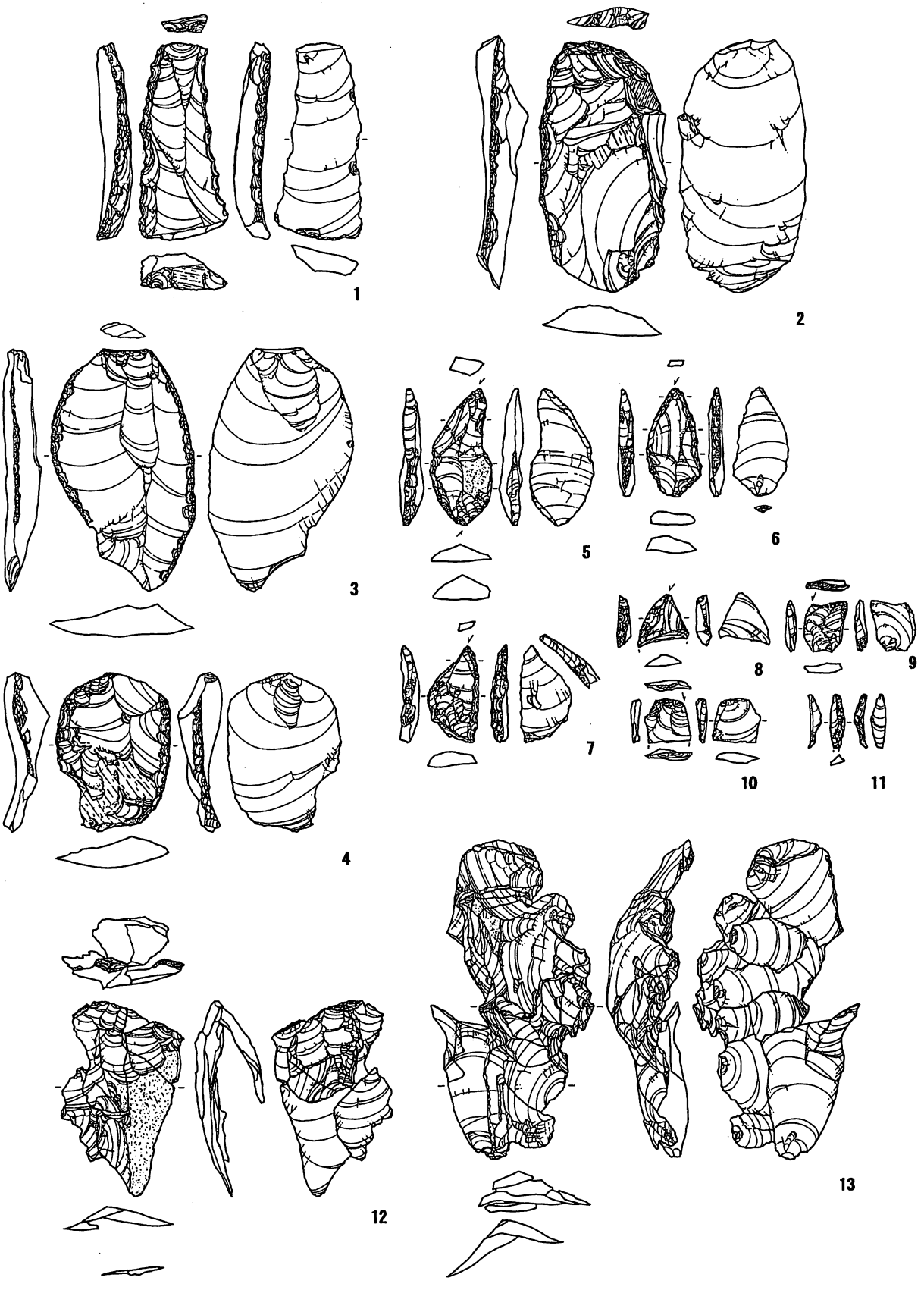
1, 2: 早風A (13)　3～19: 東[岡山理科大学調査] (14)　20～31: 東 [蒜山教育委員会調査] (14)



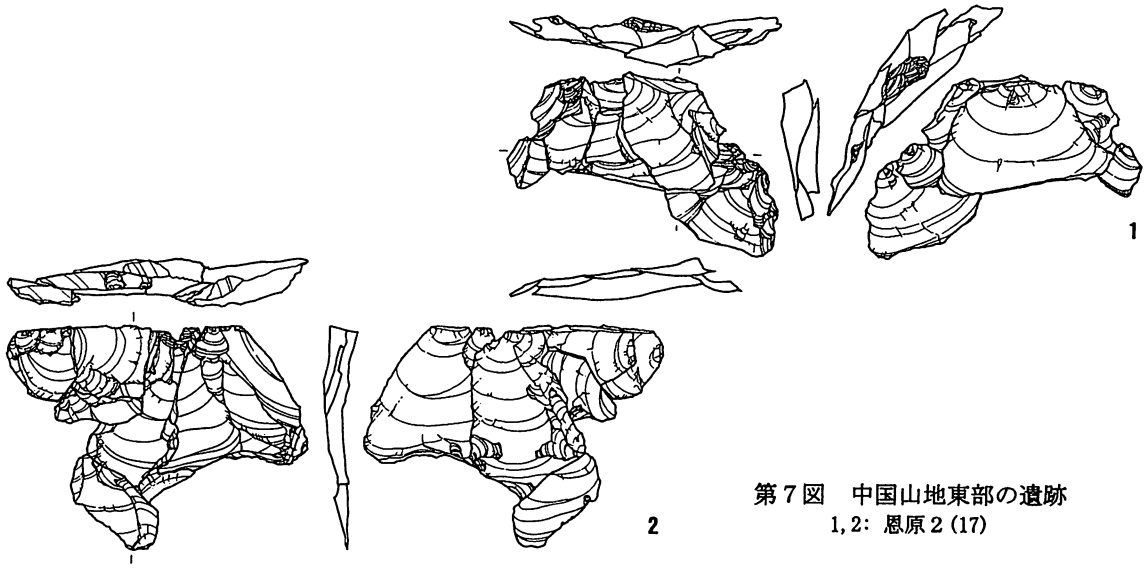
第４図　中国山地東部の遺跡
1～6：牧野４(15)　7～9：戸谷２(16)　10～16：恩原１(17)



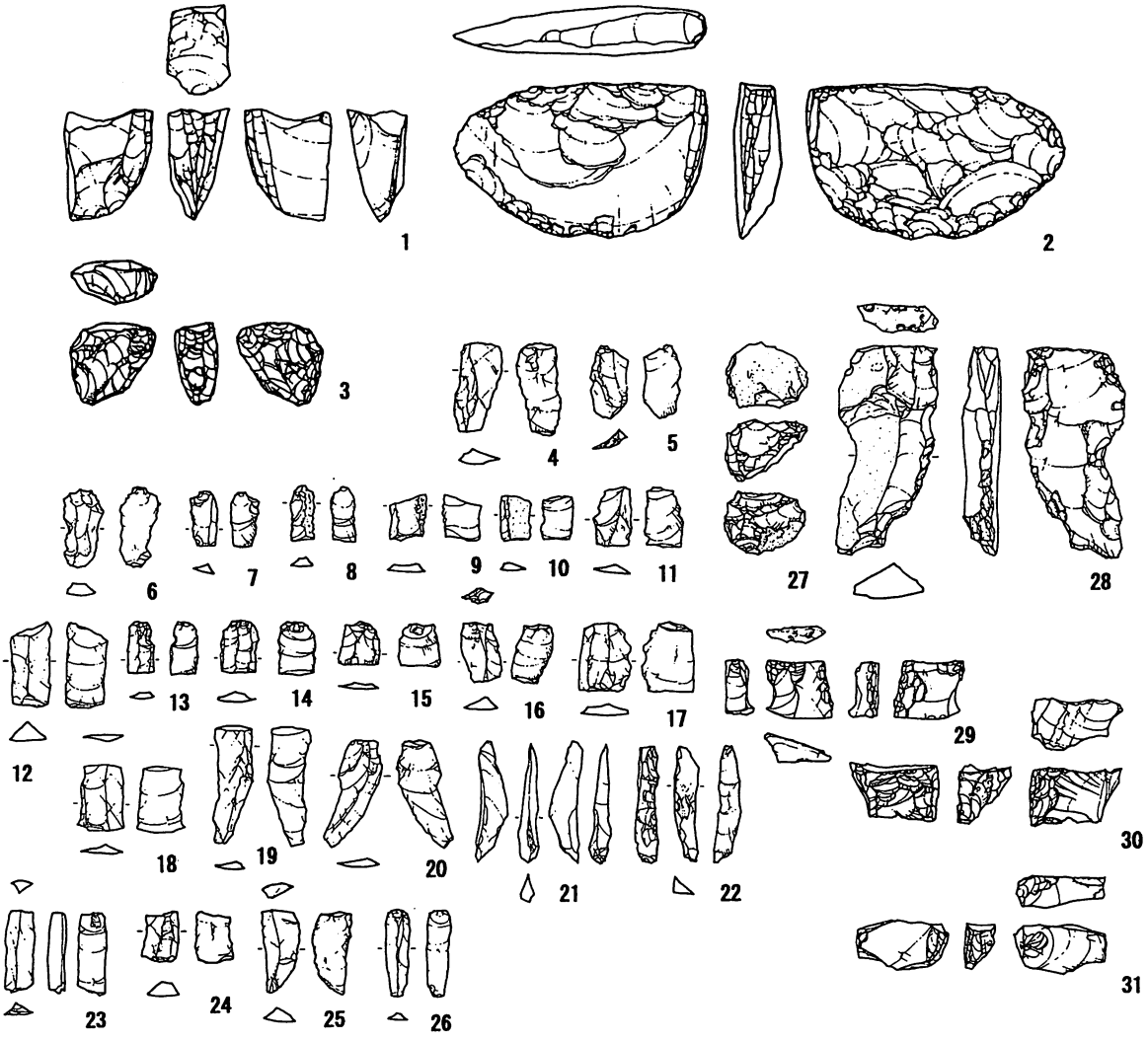
第５図　中国山地東部の遺跡
1～39：恩原２(17)



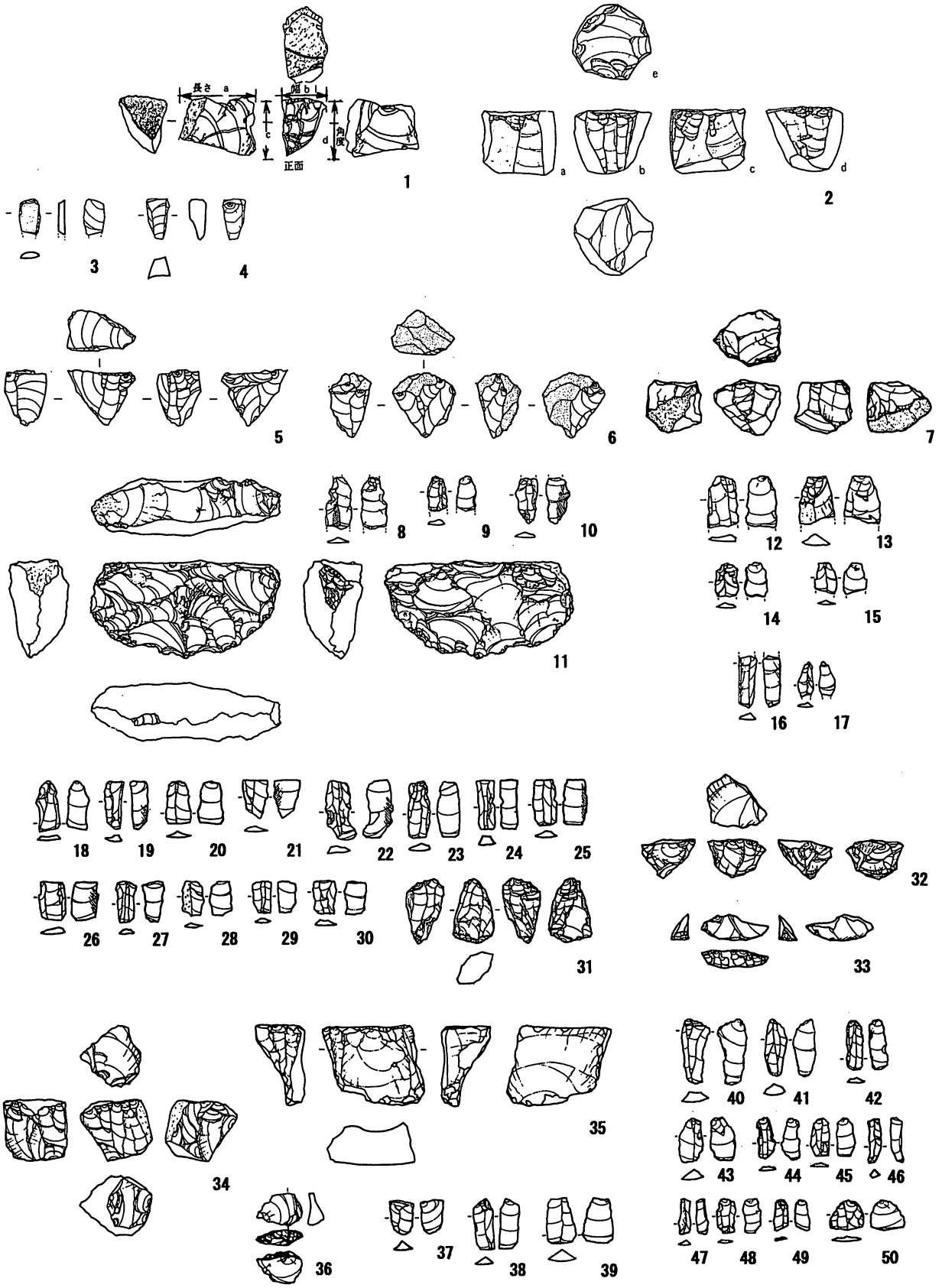
第６図　中国山地東部の遺跡
1～13：恩原２(17)



第７図　中国山地東部の遺跡
1, 2: 恩原２(17)

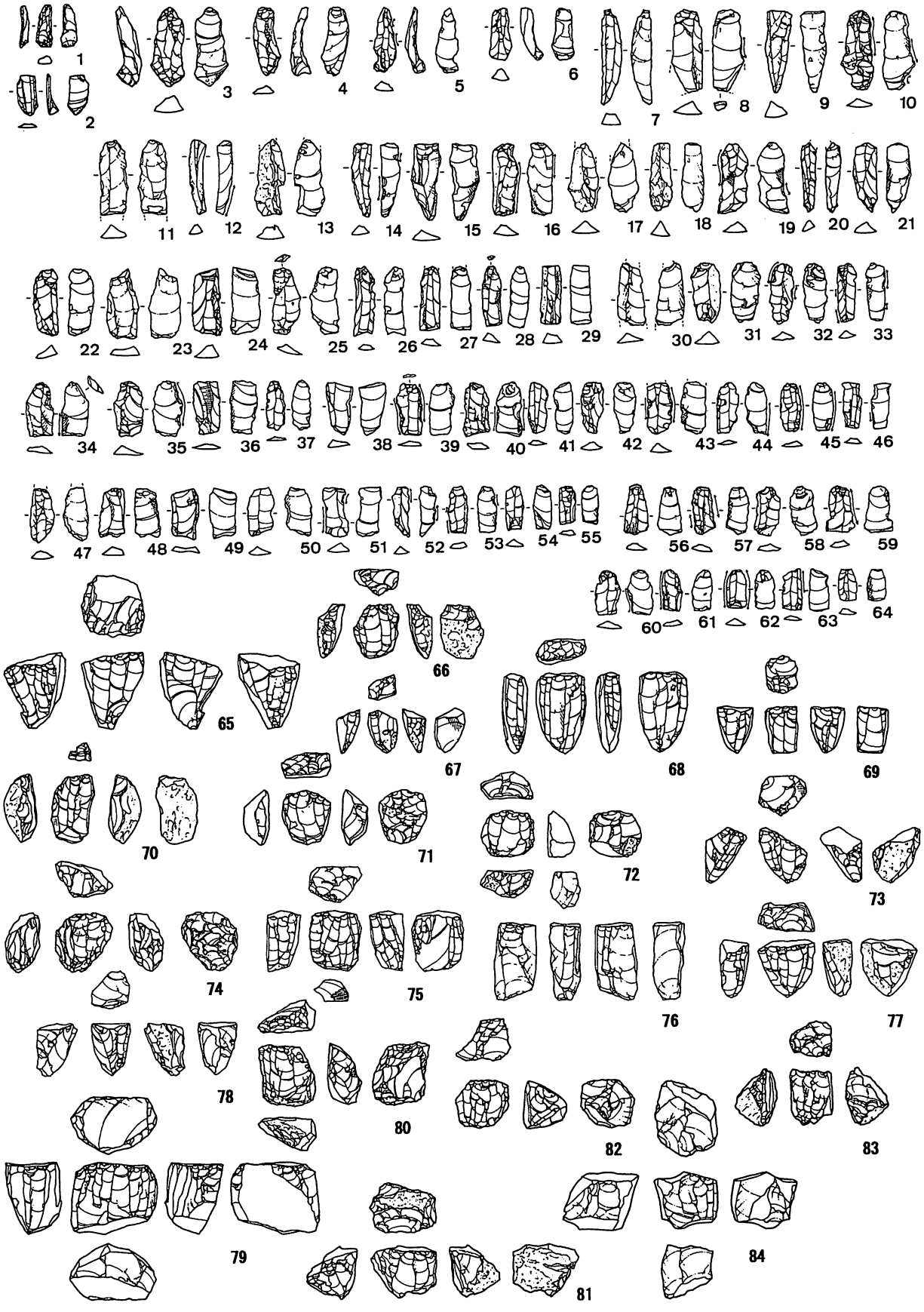


第８図　中国山地西部の遺跡
1: 冠C(18)　2: 冠４(18)　3: 道上(19)　4, 5, 28～30: 樽床G(20)
6～11, 27: 樽床C(20)　12: 樽床N(20)　13～26、31: 樽床[地点不明](20)

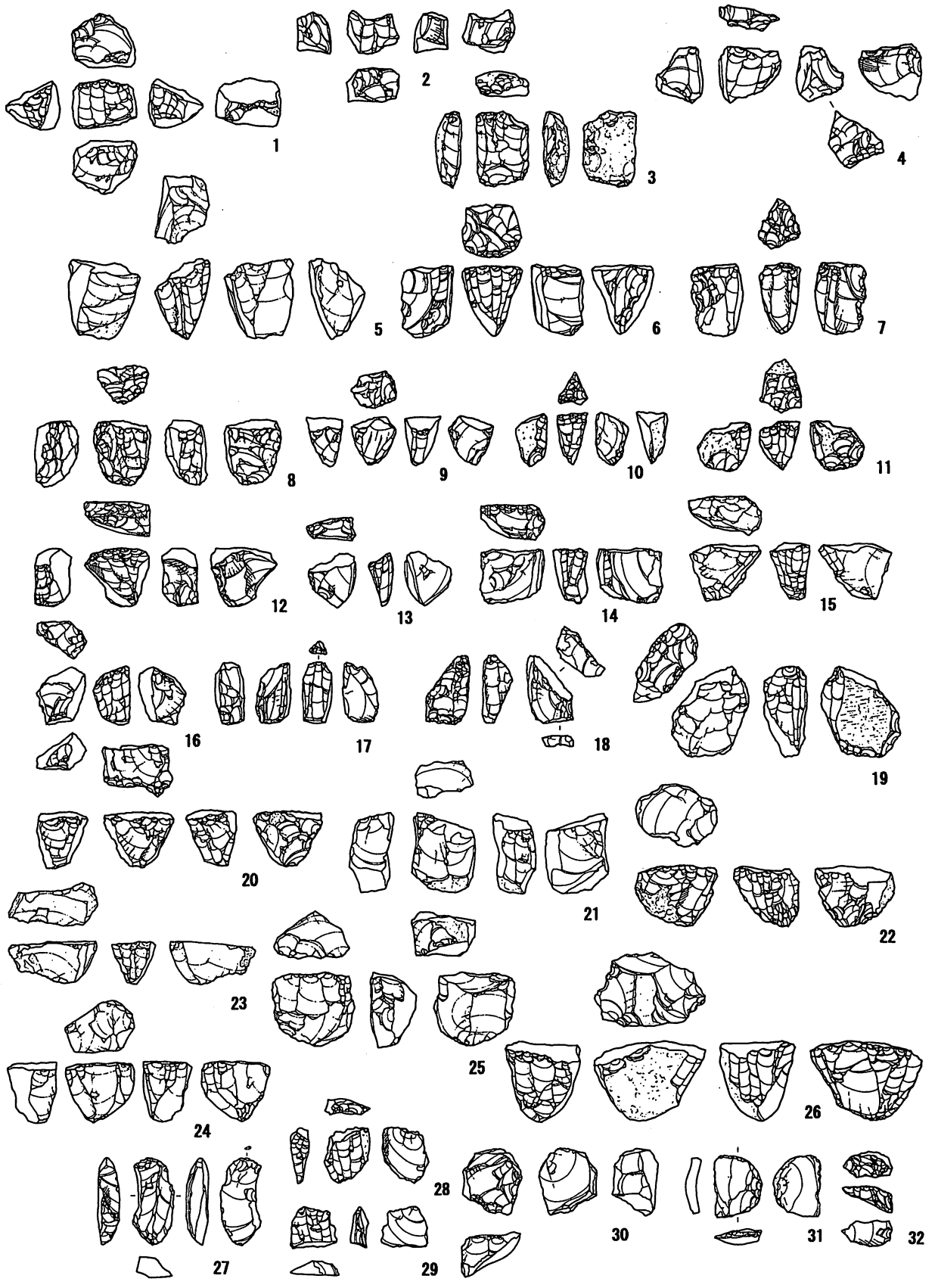


第９図　磐灘沿岸、宇部台地の遺跡

1：綾羅木郷台地(21)　2：船頭(22)　3～7：山口大学医学部構内(23)　8～11：川津(24)　12～15：常盤池(25)
16, 17：西吉沢(26)　18～33：本郷(27)　34～36：神楽田(28)　37～39：白土(29)　40～50：上ノ原(30)

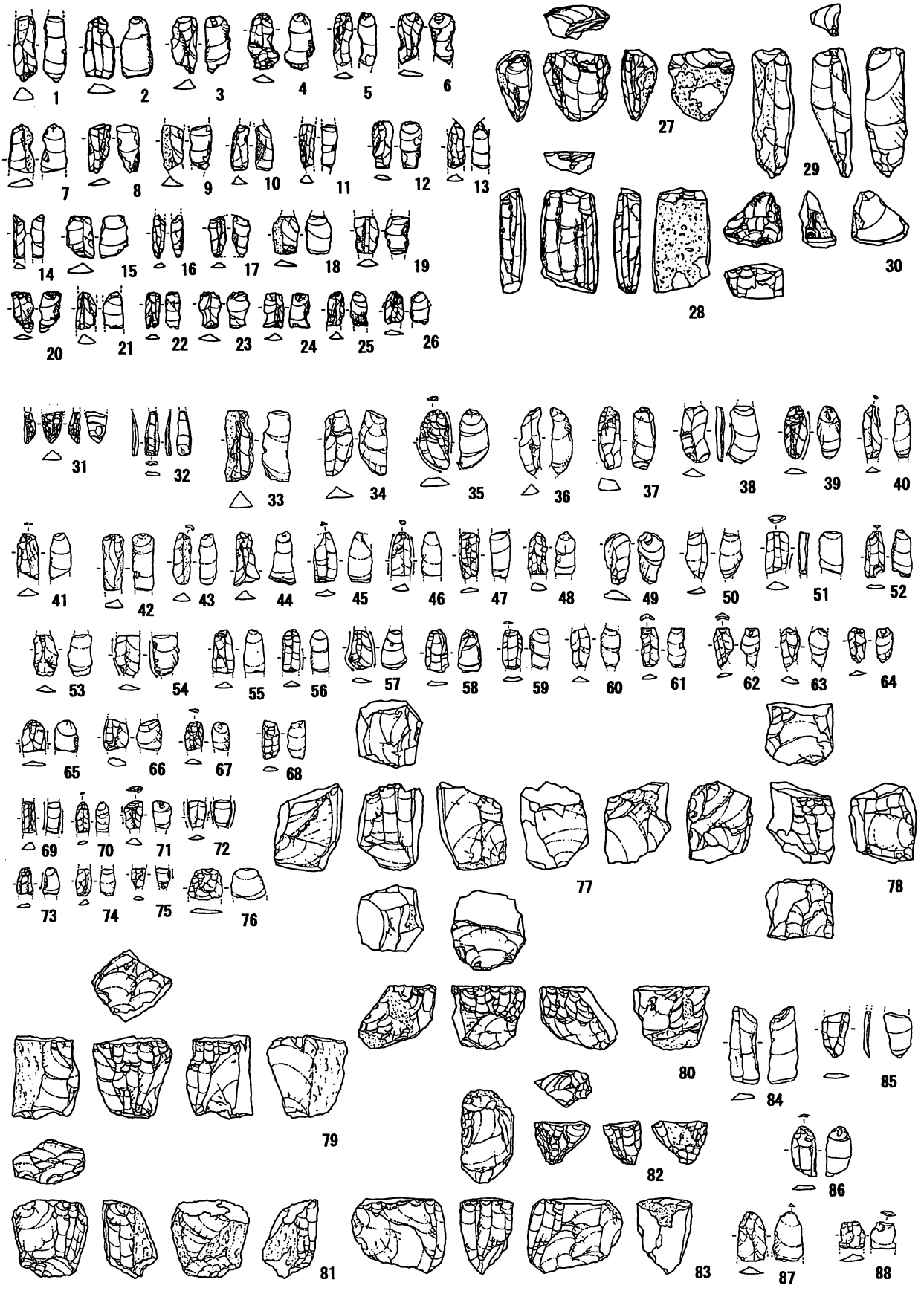


第10図　宇部台地の遺跡
1～84：南方(31)



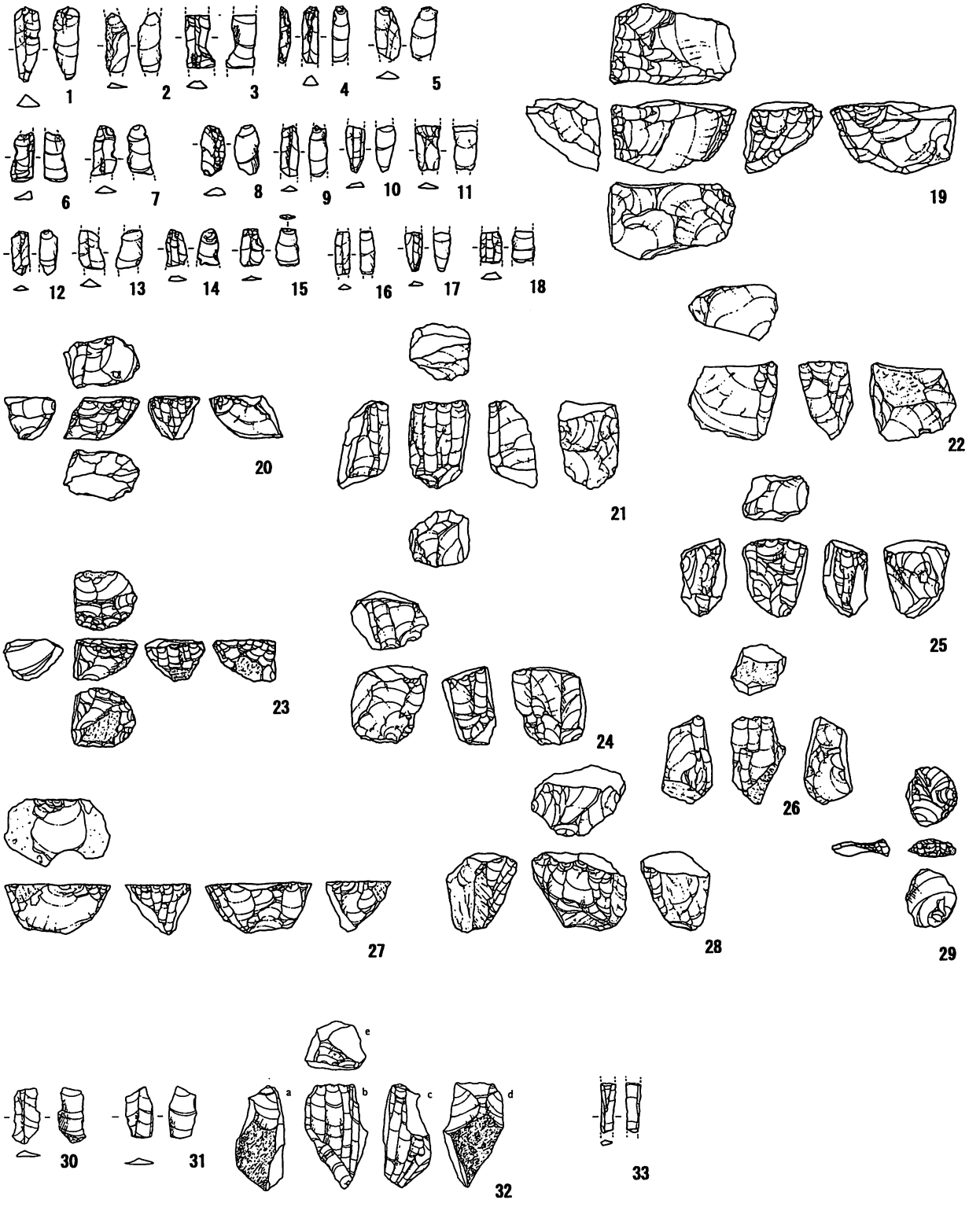
第 11 図　宇部台地の遺跡
1～32：南方(31)

第12図　宇部台地の遺跡
1～112：長柄1 (32)



第13図　宇部台地の遺跡

1～30：長桝2(32)　31～83：岩上(33)　84,85：江崎今津(35)　86：向川(36)　87,88：原条(37)



第14図　宇部台地と周辺の遺跡
1～29：藤尾(38)　30～32：切畑南(47)　33：吉田(48)

表１　中国地方の細石刃文化遺跡一覧表

NO.	遺跡名	細石刃	細石核	細石核原形	削器	掻器	彫器	錐	楔形石器	礫石	ナイフ形石器	尖頭器	有舌尖頭器	使用痕剥片	加工痕剥片	削片	彫器削片	土器	総計	石器集中	遺構	発掘	標高	地域	年代	文献	備考
		組成														成											
1	上神		1																1			有	170m	日本海沿岸 大山東麓		根鈴1991	
2	高鼻		1																1			有	20m	日本海沿岸		島取県埋蔵文化財センター1988	
3	醍徳	2	1													2?			5			有	65m	日本海沿岸		谷郷編2000	
4	勝木谷			1															1				-	日本海沿岸		丹羽野1991	
5	市場		1																1			有	22m	日本海沿岸		伊藤・丹羽野2003	
6	杉谷	1														2			3			有	17～20m	日本海沿岸		綿田2001	
7	面白谷															○						有	15～20m	日本海沿岸		伊藤・丹羽野2003	
8	宮ノ前															1			1			有	20～40m	日本海沿岸		柳浦・丹羽野2002	
9	正源寺	2	4	3												4			13			有	18～40m	日本海沿岸		柳浦2003	
10	出雲玉作跡			1															1				-	日本海沿岸		稲田1992	
11	首谷		1																1				-	日本海沿岸		丹羽野1991	
12	東船		1																1			有	20m	隠岐諸島		伊藤2002	
13	早風A地点	1	1																2			有	530m	中国山地		平井1979	
14	東	19	2	2	2	1								1	6				139			有	430m	中国山地		堀川1984b、白石・小林2001、新谷2003	
15	牧野第４地点	2	2																4				455m	中国山地		堀川1984a、白石・小野1995	
16	戸谷第２地点																		3				470m	中国山地		堀川1983	註 1)
17	恩原１	52	1		4	1	5					2		13	3	18	1		304	3		有	730m	中国山地		稲田・綿川・光石1992、稲田編1996、沖村2002	註 2),3)
	恩原２	59	4	3	4		7							63	15	14	1		435	2		有	730m	中国山地		稲田編1996	註 2),4)
18	冠C地点		2																2				780m	中国山地 冠遺跡群		藤野1982	
	冠第４地点		1																1				800m	中国山地 冠遺跡群		竹広1997、藤野1998	
19	道上		1																1				230～240m			藤野1997	
20	樽床C地点	6?	1?																7				760m	中国山地 樽床遺跡		梅本・三枝ほか1986	
	樽床G地点	2?	3?																5				740m	中国山地 樽床遺跡		梅本・三枝ほか1986	
	樽床N地点	1?																	1				740m	中国山地 樽床遺跡		梅本・三枝ほか1986	
21	綾羅木郷台地（上ノ山地区）	1?	1?																2			有	8m	響灘沿岸		山口県教育委員会1986	
22	船頭		1																1				30m	響灘沿岸		小南2001	
23	山口大学医学部構内	2	3																5			有	1.5m	宇部台地 真締川流		河村1985、1991、木村1989	
24	川津	3		1															4				8m	宇部台地 真締川流域		山口県旧石器文化研究会1989b、下瀬・藤野1994	
25	常盤池	4																	4				30m	宇部台地		山口県旧石器文化研究会1983a	
26	西吉沢	2																	2				30m	宇部台地 厚田川流		山口県旧石器文化研究会1983	
27	本郷	13	2																16				10～15m	宇部台地 沢波川流		山口県旧石器文化研究会1983	註 5)
28	神楽田		2																3				15m	宇部台地 沢波川流域		山口県旧石器文化研究会1985	註 5)
29	白土	3																	3				10～15m	宇部台地 厚田川流		山口県旧石器文化研究会1983	
30	上ノ原	11																	11				20m	宇部台地 厚田川流		山口県旧石器文化研究会1983	
31	南方	約350	46																402				30～35m	宇部台地 沢波川流		山口県旧石器文化研究会1988	註 5)
32	長柄第１地点	約400	15																418			有	20m	宇部台地 沢波川流域		山口県旧石器文化研究会1985a、藤野・山本1985	註 5)
	長柄第２地点	32	3																35			有	19～20m	宇部台地 沢波川流域		山口県旧石器文化研究会1985b、藤野・山本1985	
33	岩上	47	7																54				10～15m	宇部台地 十路石川		山口県旧石器文化研究会1991	
34	丸塚	○																					5～15m	宇部台地 十路石川		木村1988	
35	江崎今津	2?																	2				20m	宇部台地 今津川流		山口県旧石器文化研究会1992	
36	向川	1?																	1				15m	宇部台地 十路石川		山口県旧石器文化研究会1992	
37	原桑	2?																	2				20m	宇部台地 今津川流		山口県旧石器文化研究会1992	
38	藤尾	18	11																30				10～20m	宇部台地		山口県旧石器文化研究会1998	註 5)
38	幸崎第２地点	○	○																				10～20m	宇部台地		木村1988	
	幸崎第３地点	○	○																			有	10～20m	宇部台地		木村1988	
	幸崎第４地点	○	○																				10～20m	宇部台地		木村1988	
40	長浜	○	○																				10m	宇部台地		木村1988	
41	柯原	○																					20m	宇部台地 厚内川流		木村1988	
42	長沢池	○																					20m	宇部台地 厚内川流		木村1988	
43	小浜	○																					5～10m	宇部台地		木村1988	
44	天田	○																					5～10m	宇部台地		木村1988	
45	宮ノ前	○	○																				15m	宇部台地 厚内川流		木村1988	
46	柴山裏	○																					5～15m	宇部台地 厚内川流		木村1988	
47	切畑南	2	1																3			有	15～17m			椿・林・西尾・岩崎2000	
48	吉田	1																	1			有	18m	椹野川流域		木村1989	
49	高坂A地点	2	3	3		1	1					1							40				260m				

註 1) すべて珪質頁岩製で、うち２点は作業面再生剥片。
2) 点数には、発掘資料と表採資料のうち帰属の明確な器種を加えてある。
3) 彫器には彫器の原形と考えられるもの２点を含む。
4) 剥片には打面再生剥片１点を含む
5) 剥片は打面再生剥片、作業面再生剥片

四国・瀬戸内地域の細石刃文化

多田　仁

1　研究の経過

1954年　鎌木義昌氏らによる岡山県鷲羽山遺跡の発掘調査が行われる。確認された細石刃石器群は、鷲羽山４として設定された（鎌木1956）。

1954年　鎌木義昌氏らによる香川県井島遺跡の発掘調査が行われる。1955年には２次調査が行われた。確認された細石刃石器群は、井島第二（Ⅱ）石器群として設定された（鎌木1957）。

1960年　川畑 迪氏と高橋邦彦氏らが、香川県与島西方遺跡と与島東方遺跡の発掘を行う（高橋1961）。各遺跡で細石刃が確認される。

1965年　鎌木氏による井島Ⅱ型細石核の提唱と、瀬戸内地域で初の編年試案が提示される（鎌木1965）。『日本の考古学Ⅰ』（杉原荘介編・河出書房、1965年）の刊行。鎌木氏と高橋護氏は、「６　瀬戸内海地方の先土器時代」を執筆（鎌木・高橋1965）。

1968年　間壁葭子氏によって香川県坂出市櫃石島遺跡採集の細石核が報告される（間壁1968）。

1968年　片岡鷹介氏によって高知県高間原古墳群の調査で単独に出土した細石核が報告される（片岡1968）。高知平野周辺では初めての確認例となった。

1969年　山本慶一氏によって岡山県倉敷市鷲羽山遺跡採集の細石核が報告される（山本1969）。

1976年　瀬戸大橋建設に伴う大規模な発掘調査の開始。なお、1976・1977年には予備調査を実施している。

＜瀬戸大橋関連の調査一覧＞

1978・1979年　羽佐島遺跡（秋山・真鍋・渡部1984、大山・小西・藤好1984）

1977・1978・1980・1981年　西方遺跡（大山・藤好1985）

1979・1980年　花見山遺跡（西村・藤好・真鍋1989）　　1979年　長崎通り遺跡（林・藤好1983）

1979年　ヤケヤマ遺跡（林・藤好1983）　　1980年　大浦遺跡（秋山・藤好・真鍋1984）

1982年　岩黒初田遺跡（林・藤好1983）　　＊すべて香川県内の遺跡

1977年　松本敏三氏による櫃石島（花見山地区）における細石核の分類案（松本1977）。氏は、打面調整の状態や本体形状などからA～D類に４分類。瀬戸大橋関連で初めての分類案提示であった。

1978年　十亀幸雄氏によって、祝谷丸山遺跡の細石刃文化関連資料が報告された（十亀1978）。西瀬戸内では初めての報告例となったが、後に多田が否定的見解を述べた（多田1992）。

1979年　『駿台史学』47（駿台史学編会1979）の発刊。日本全土の細石刃文化に関する特集が組まれた。この誌上で小野昭氏が、備讃瀬戸地域における細石核を角柱状・板状細石核のⅠ類と、鱗状の石核調整が伴うⅡ類とに分類し、Ⅰ類からⅡ類への変遷を考えた（小野1979）。

1980年　藤好史郎氏が羽佐島遺跡の細石刃生産について、その工程復元を行った（藤好1980）。氏は細石刃生産技術のA系統とB系統を設定し、それらの工程模式図も提示した。

1982年　渡部明夫氏による羽佐島技法の提唱（渡部1982）。備讃瀬戸における細石刃文化研究で、初めて技法名が使用された。後に多田がこの技法に関する再評価を行い、羽佐島Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ型細石核を提唱（多田2001）。

1983年　西村尋文氏が、備讃瀬戸地域の細石核を第Ⅰ類から第Ⅳ類までの４分類８細分に分類した（西村1983）第Ⅰ類は分割礫素材、第Ⅱ類は板状剥片素材、第Ⅲ類は剥片素材で半舟底～舟底状、第Ⅳ類は両面加工で楔状の母型を準備するものとし、第Ⅰ類細石核を「野岳型細石核」、第Ⅱ類を野岳遺跡と矢出川遺跡の一部、第

Ⅲ・Ⅳ類を福井洞穴２・３層に対比した。

1985年　鎌木義昌氏と小林博昭氏によって、近畿・中国・四国地方の細石刃文化研究がまとめられた（鎌木・小林1985）。この時初めて、羽佐島遺跡における湧別技法の存在が明示された。

1988年　十亀幸雄氏によって、芸予諸島における細石刃文化関連資料が報告された（十亀1988）。このうち愛媛県金ヶ崎遺跡では８点の頁岩製細石核が提示され、船野技法との関連が示唆された。芸予諸島地域で細石刃文化関連の資料が確認されたのは、本遺跡が初めてのことであった。

1990年　山口将仁氏が高知県における旧石器時代の様相を考える中で、細石刃文化段階の遺跡に関してその変遷を示した（山口1990）。この地域の編年案が提示されたのは初めてのことであった。

1992年　稲田孝司氏、絹川一徳氏、光石鳴巳氏によって、近畿から備讃瀬戸の湧別技法関連資料が再評価された（稲田・絹川・光石1992）。また、湧別技法の拡散についても試論が提示された。

1995年　森格也氏は備讃瀬戸における細石核の打面形状や共伴したスポールの形状などから、羽佐島遺跡に代表される一群と、花見山遺跡に代表される一群の２系統の楔形細石刃核が存在することを指摘した。これら２者の系統については、羽佐島遺跡系統を湧別技法の直接的な系譜の中で捉え、花見山遺跡のものをその在地化した様相として評価した（森1995）。

1995年　木村剛朗氏と多田によって西南四国の船野型細石核が報告される（木村1995、多田1995）。愛媛県池ノ岡遺跡では細石核、同県深泥遺跡ではブランクの発見例である。

1996年　森格也氏が、剥片素材で下縁調整の施されるものを「花見山型細石刃核」、剥片素材で下縁調整の施されないものを「瀬戸内型細石刃核」として提唱した（森1996）。

1996年　高知県奥谷南遺跡の発掘調査が行われた（松村・山本2001）。

四国と瀬戸内に面した地域における細石刃文化の研究は、古くは鎌木義昌氏による井島Ⅱ型細石核の提唱に始まり（鎌木1957）、井島Ⅱ文化の評価と周辺地域における当該期文化の比定が中心であった。まず最初の大きな転換を促した出来事は、1970年代に開始された瀬戸大橋建設に伴う調査であろう。この調査が開始されるまで、備讃瀬戸では約40点程の細石核が確認されていたが、大規模な調査によって最終的に約440点の細石核を確認するに至った。そしてなによりも、この地域で旧石器時代の遺物が増加することに伴って、これを評価するための諸研究が充実してきたことも特筆すべき事であろう。ナイフ形石器文化の研究では藤好史郎氏によるナイフ形石器の分類と編年史案（藤好1989）、細石刃文化の研究では渡部明夫氏による羽佐島技法の提唱など（渡部1982）、数多くの石器群に対する解釈や評価が提示された。また、鎌木氏と小林氏は中・四国地方の細石刃文化研究史を触れる中で、瀬戸大橋関連調査、中国山地の調査、山口県旧石器文化研究会の調査を1980年代の新しい動きとして位置づけており（鎌木・小林1985）、この調査がいかに重要視されていたかを知ることができる。

そして1990年代に入って、次の転換期を迎えることになる。この時期、細石刃文化関連資料の再評価が相次いでなされた。特に瀬戸大橋関連で得られた資料の再検討と新見解が相次いで提示されている。一つは湧別技法関連資料の指摘であり、鎌木氏や稲田孝司氏らによる羽佐島遺跡の再検討は、四国における湧別技法の存在を明確に位置づけたことになった（鎌木・小林1985、稲田・絹川・光石1992）。さらに森格也氏による湧別技法の在地化論と「瀬戸内型細石刃核」・「花見山型細石刃核」の提唱は（森1995・1996）、後に細石刃文化の理解を巡る論争にまで発展した（松浦1998）。この他の動向としては、表面採集による資料が地道に報告されるようになるが（木村1995ほか）、高知県奥谷南遺跡の調査が開始され（松村・山本2001）、当該期研究者の視線は南四国に注がれるようになった。ここでは約300点の細石刃と約100点の細石核が確認されているが、こうした確認点数や安定した出土状況であったことは、四国・瀬戸内において貴重な資料として位置づけられた結果となった。

現在では表面採集による確認例があるのみで、発掘調査によって得られた新資料は、奥谷南遺跡の発見以降は目立った例がない。しかし、旧石器時代遺跡が密に分布する徳島県吉野川流域、愛媛県肱川流域、芸予諸島周辺などで細石刃文化段階遺跡の様相を把握することが、今後の課題となるだろう。

2　遺跡の分布や遺跡群の分布傾向など

四国とその周辺の瀬戸内では、現在45カ所の細石刃文化関連遺跡を数えることができる（第１図）。これを細かな地域別にみると、岡山県児島半島周辺と香川県を含む備讃瀬戸では29遺跡、徳島県吉野川流域では１遺跡、広島県と愛媛県の芸予諸島周辺では４遺跡、松山平野を含む伊予灘周辺では２遺跡、高知平野では２遺跡、愛媛県南部と高知県西部の西南四国では７遺跡となる。これら６カ所の地域区分と各地域の遺跡数からみれば備讃瀬戸に多くの遺跡が集中し、確認されている遺物数から考えてもその卓越した数に注意できるだろう。前項でも触れているが、各地域における細石核の点数からみると備讃瀬戸で約440点となり、この点でもその卓越性を知ることができる。また、高知平野では２遺跡でありながら約100点の細石核が確認されており、本稿で集成した細石核604点の内、約73％が備讃瀬戸である一方、高知平野での確認例は約18％を占める。

備讃瀬戸（29遺跡　１～29）

島嶼部と児島半島周辺で遺跡が密に分布する。標高10～30m前後を測る丘陵に立地する遺跡がほとんどで、島嶼部に立地する遺跡が多くを占める。本地域では細石刃文化段階の遺跡が密集する地域で、特に北の櫃石島から南の与島にかけては、１km以内で隣接する遺跡が多い。

吉野川流域（１遺跡　30）

吉野川流域では、徳島県佐城遺跡（Ⅱ）が知られるのみである（氏家ほか2001）。遺跡の標高は117mを測り、吉野川左岸に形成された河岸段丘上に立地している。なお、吉野川流域に形成される河岸段丘地帯は後期旧石器時代の遺跡が密集する地域として知られており（早渕1992）、その数は約40カ所を数えるが、細石刃文化段階の遺跡は佐城遺跡（Ⅱ）の１カ所のみである。

芸予諸島（４遺跡　31～34）

ここでは愛媛県平坂Ⅱ遺跡（作田1991）、同県金ヶ崎遺跡、広島県道上遺跡（藤野1997）、同県情島遺跡（敦賀2001）とが知られている。平坂Ⅱ遺跡は平野部に延びる丘陵地、金ヶ崎遺跡と情島遺跡は島嶼部の丘陵地に立地する。確認数が少数であるため確定的な判断はできないが、今後の遺跡増加を見込んだとしても、遺跡の分布・立地状況は備讃瀬戸のそれに近いものであると考えられよう。

伊予灘周辺（２遺跡　35・36）

愛媛県平松遺跡（小林1993）は沖積平野、同県唐崎遺跡（沖野1998）は海岸段丘上に立地している。共に低地または低地に近接した立地条件であるといえる。

高知平野（２遺跡　37・38）

高知県高間ヶ原古墳（片岡1968）は高知平野北部の独立丘陵上に、奥谷南遺跡は山地に囲まれた谷部に面した段丘上に立地している。沖積低地での確認例はなく、細石刃文化段階以外の旧石器時代遺跡についても、河岸段丘や丘陵地に遺跡の確認例が多い（松村・山崎2000）。

西南四国（７遺跡　39～45）

多くの遺跡が丘陵地や海岸・河岸段丘上に立地しているが、池ノ岡遺跡（木村1995、多田1995）は愛媛県と高知県との県境付近に展開する盆地内に、そして深泥遺跡（多田1995・2000a）は御荘湾に面した丘陵地に立地している。中でも池ノ岡遺跡は、四国・本州瀬戸内沿岸における細石刃文化段階の遺跡としては、最も標高の高い位置で確認された遺跡となる。

全体的な傾向としては、比較的標高の低い丘陵や河岸段丘、海岸段丘などに多くの遺跡が確認され、さらに言えば現在の海岸線に近接した立地であるといえよう。また、徳島県吉野川流域、愛媛県肱川流域、芸予諸島周辺などでは、後期旧石器時代から縄文時代草創期の遺跡が多く存在しているが、これらの地域では細石刃文化段階の遺跡が皆無に近い状況であり、この点についても注意しておく必要があろう。

3　細石刃技法と石材

羽佐島技法

剥片を素材とし、これを縦位に用いて細石刃剥離を行う羽佐島技法（多田2001、渡部1982）は、備讃瀬戸で最も密に確認することができ、この周辺でも少数ながら散見できる。羽佐島技法の中心的分布地である備讃瀬戸では、香川県坂出市周辺で産出されると考えられるハリ質安山岩が多用されており、他にサヌカイト、黒曜石、流紋岩が用いられている。備讃瀬戸ではハリ質安山岩が約９割の使用頻度を示しており、これに次いでサヌカイトが使用され、黒曜石や流紋岩は微量である。また、サヌカイトについては羽佐島Ⅰ型細石核にその使用頻度が偏ることが指摘されている（多田2001）。

備讃瀬戸以外の地域で認められる羽佐島技法の使用石材について、近隣である吉野川流域や伊予灘周辺でサヌカイトが使用されている例はあるが、より遠隔地となる高知平野ではチャート、西南四国では頁岩などのように、在地で産出される石材が用いられている。また、芸予諸島の金ヶ崎遺跡では頁岩が使用されているが、産地は不明であるものの、周辺の旧石器時代遺跡で同様な石材を確認することができる。これについても在地産出の石材使用であると判断してよいだろう。

野岳・休場技法

野岳・休場技法（鈴木1971）は、主に高知平野で確認することができる。ここでは奥谷南遺跡と高間ヶ原古墳のみの発見例であるが、野岳・休場技法の占める割合は高い。ここではすべてチャートが使用されており、この石材は在地で産出するものである。野岳・休場技法の比率が低い備讃瀬戸でも在地産出のハリ質安山岩が使用されている。また、西南四国のナシヶ森遺跡A地点（門脇ほか2001）や広見遺跡でも在地産出の頁岩が使用され、さらに伊予灘周辺の唐崎遺跡でも在地産出の赤色珪質岩が使用されている。

船野技法

西南四国と高知平野で密に確認できる船野技法（橘1979）は、各地域で在地産出の石材を使用している。つまり、西南四国では頁岩、高知平野ではチャートの使用頻度が高いことになる。また、僅かな確認例ではあるが、芸予諸島の情島遺跡ではサヌカイト、備讃瀬戸の羽佐島遺跡などではハリ質安山岩が使用されており、これらについても在地石材の使用であると判断できよう。

湧別技法

四国・瀬戸内地域における湧別技法の確認例は、山口県川津遺跡（下瀬・藤野1994）と備讃瀬戸の羽佐島遺跡である。本稿では羽佐島遺跡に触れておくが、ここでは２点の細石核と削片17点が確認されている。これらはすべてサヌカイト製で、本地域の普遍的使用石材であるハリ質安山岩は皆無である。

総じてみれば、細石刃剥離技術による使用石材の差を見出すことはできない。基本的には在地で安定的に産出する石材を細石刃生産に使用していると判断できよう。但し注意点として、伊予灘周辺、西南四国、高知平野などの地域では、先行するナイフ形石器文化の段階とほぼ同じ石材利用であるが、備讃瀬戸については大きく異なっていることがある。勿論、備讃瀬戸におけるナイフ形石器にはハリ質安山岩製のものは含まれているが、やはりサヌカイト製のものが主体であり、羽佐島Ⅰ型細石核で約半数のサヌカイト製のものがあることを考え合わせれば、その使用頻度は逆転しているとみてもよいだろう。とにかく、細石刃文化段階になってからの使用石材の差は備讃瀬戸で顕著に見て取れるようである。

4　組成の特徴

本地域における細石刃文化段階の遺跡について、未撹乱の状態で検出された例が少ないことは、既に先学の調査・研究などで既に触れられている。しかし近年、奥谷南遺跡の調査で細石刃・細石核の良好な組成関係が把握され、

これらに伴うと考えられる石器類も複数器種が確認できている。但し、ナイフ形石器と角錐状石器の混在や、スクレイパー・尖頭器などの時期認定が困難な遺物があり、細石刃以外の器種に関する組成関係は不明に等しい。ここでは細石刃文化段階の石器組成について示唆を与えると思われる現象を抽出し、その可能性を考えてみる。

まず奥谷南遺跡では、細石刃・細石核に一部の尖頭器やスクレイパー等を伴う可能性が報告されている（松村・山本2001）。なかでも尖頭器については29点が図示・報告されているが、これらは1～6類に分類され、このうち1・2類が細石刃文化段階のものとされている（第19図）。また、尖頭器と細石刃・細石核との関連が示唆できるのは、羽佐島遺跡南丘陵や花見山遺跡の尖頭器類であろう（第6図、第10図）。これら遺跡の尖頭器については、多田が四国の尖頭器を分類する中で、四国2群とした尖頭器石器群を細石刃文化後半期の所産としており、細石刃石器群との共時性を示唆している（多田2002）。但し、奥谷南遺跡の尖頭器石器群については、四国4群に比定できるもので、細石刃石器群との時間的接点を見出すことはできない。さらに尖頭器の様相からばかりでなく、細石核の型式組成をみても、羽佐島Ⅰ・Ⅱ型細石核が伴いながらも時期的に新相と考えられる羽佐島Ⅲ型細石核が存在しないことから、奥谷南遺跡の細石刃石器群には時期的に新しい要素を見出すことはできない。しかし一方では、船野技法の存在から時期的に新相とする考えも提示されるであろうが、この点は船野技法の時間的位置づけを根本的に再検討することが問題解決の一助となろう（多田2000b）。

さらに石器組成を検討する上での示唆を得られる現象として、池ノ岡遺跡や深泥遺跡の資料が挙げられるだろう。池ノ岡遺跡では船野型細石核が採集されているが、ほぼ地点を同じくしてスクレイパーや石斧も採集されている（第20・21図）。これらの資料をみると、スクレイパーは単剥離打面を幅広に残すもので、東九州の大分県上下田遺跡（橘1981・1983）や同県松山遺跡（橘1990・1991）などでは同形態のものが船野型・上下田型細石核に伴っている。また、採集された石斧は比較的小形な刃部磨製のもので、大分県市ノ久保遺跡（栗田1988）で伴出するものと同形態であると判断できる。また、船野技法によるブランクが採集された深泥遺跡でも刃部磨製の石斧が採集されており、各遺跡における共伴の条件には不備が残るものの、西南四国と東九州の様相がほぼ近似したものになることを想起できよう（多田1997）。

5　編年

四国・瀬戸内地域における細石刃文化の編年作業は、その堆積環境の不安定さから出土層位に基づく論証が困難であるが、古くは鎌木氏によって「半円錐形細石刃核文化」から「井島Ⅱ文化」への変遷が提唱され、細石核の形態・型式分類から積極的に時間差を導き出した試みであった（鎌木1965）。この後、細石核における型式・形態分類は複数提示されているが、それぞれの時期認定は主に西村氏の諸研究で展開されていた(西村1983・1993)。それは備讃瀬戸における細石核を野岳・休場型、福井型、船底形の3類型化し、それぞれの組み合わせで時間差があることを示唆したものである（西村1993）。詳細は割愛するが、基本的に福井型を新相に位置づけており、鎌木氏の示した編年観とほぼ同じものである。

また、岡山県恩原遺跡（稲田1996）の調査開始後に注目された羽佐島遺跡の札骨型細石核に関しては、稲田氏らがその時期認定について比較的新しい段階のものであることを示唆している（稲田・絹川・光石1992）。一方で多田は羽佐島遺跡における細石核の様相から、湧別技法の波及を羽佐島Ⅲ型細石核が残される以前の段階に考えている（多田2001、第22図）。羽佐島Ⅲ型細石核は福井技法の影響下に成立したものと考えられることから、羽佐島遺跡では少なくとも土器出現以前に湧別技法が残されたと結論づけられるが、この編年観は稲田氏らの示したものと大きく異なるものではない。

さらに多田は羽佐島技法の再評価を行い、これらに羽佐島Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ型細石核の3者が存在することを考えたが、これら3つのバリエイションに関して、それぞれの出現時期が異なる可能性を述べている（多田2001）。簡単に述べると、羽佐島Ⅰ型細石核にはサヌカイトが多用されており、備讃瀬戸地域における伝統的なサヌカイトの利用を踏襲した姿とも考えられることから古相に位置づけられている。さらに羽佐島Ⅲ型細石核は打面に残される横打調整から福井技法による福井・泉福寺型細石核（萩原2001）に類似すると考えられ、備讃瀬戸では比較的新相に位置

づけることができる。

備讃瀬戸地域以外でまとまった資料増加となった奥谷南遺跡に関して、報告では細石核の様相から縄文時代草創期にまで新しくは位置づけていないが（松村・山本2001）、一方では尖頭器共伴の可能性から、さらに新相となる可能性も示唆されている（前田2001）。周辺における類例の希薄さなどから、現状で奥谷南遺跡における細石刃文化段階の時間的位置づけが困難であることは確かだが、細石核の型式組成をみる限りでは、草創期に位置づけられる要素が見出せないことから、報告での指摘に近い編年を考えられるのではないだろうか。ここで問題となるのが、先述した尖頭器との共時性である。確かに細石刃文化段階で尖頭器の組成を確認できる事例は、羽佐島遺跡南丘陵や花見山遺跡などでも確認することができ、さらに池ノ岡遺跡でもその可能性を考えることができる。しかし奥谷南遺跡で確認される尖頭器に関しては、その法量などから縄文時代草創期段階に位置づけることができ（多田2002）、この点と細石核の型式組成を照合すれば大きな時間的隔たりがある。報告では草創期に位置づけないまでも尖頭器石器群との共伴を示唆しており、この評価が今後の研究に大きく影響する事は充分に予見できる。この問題解決の一助として、やはり細石刃石器群と尖頭器石器群における時間的位置づけの再評価が必要であることは言うまでもないだろう。

6　様相

本地域における細石刃文化段階の様相は、研究史をみても細石核の諸検討が主な手法であることがわかる。こうした手法は現状で最も相応しい手段であると考えるが、ここでは過去の調査事例を簡単に振り返り、既に先学によって指摘されていた現象を再評価することもねらいとしたい。

羽佐島遺跡の南北丘陵

羽佐島遺跡は南北２つの丘陵に別れ、各丘陵によって細石核の組成差を見出すことができることを既に述べた事がある（多田2001、第22図）。細石核の主な現象について述べると、羽佐島北丘陵では湧別技法による札骨型細石核が含まれるが、羽佐島南丘陵では皆無であること。さらに羽佐島南丘陵では羽佐島Ⅲ型細石核、船野技法による細石核などを含むが、羽佐島北丘陵ではこれらが皆無である。また、これに関連して湧別技法に伴うスポール（削片）の出土状況についても、羽佐島北丘陵に偏った分布を示すことは既に指摘しているが、報告段階でも「調査区北部での集中は一層顕著となる」ことは指摘されていた（秋山・真鍋・渡部1984）。

こうした丘陵単位による細石核の組成差は、時期差によって生じた現象であると考えられ、こうした分析が細石刃石器群の編年や組成を論証する上での一助となろう。特に羽佐島遺跡では湧別技法の波及時期が推察され、これに関連して札骨型細石核と羽佐島Ⅲ型細石核の時期差も確認できたことになる。

大浦遺跡の遺物分布

大浦遺跡では約40点の細石核が確認されているが、これらは２カ所のブロックを形成して残されていた。報告書段階でも詳細な分布の偏りは指摘されており（秋山・藤好・真鍋1984）、さらに後の鎌木氏らの研究でも石材による分布の偏りが考えられている（鎌木・小林1985）。これら先学の研究成果からはより細かなブロックが考えられるが、ここでは目視的に南北２つのブロックを認定した（第23図）。

まず細石核の型式組成についてみると、南北ブロック共に羽佐島Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ型細石核、野岳・休場型細石核を組成するが、北ブロックでは船野型細石核が認められている。このような型式差は時期的なものに起因すると考えられるが、備讃瀬戸における船野型細石核の時間的位置づけを論証する材料にもなろう。

また、使用石材による差も見出すことができる。南北ブロック共にハリ質安山岩を主体とすることは共通するが、北ブロックでは黒曜石と水晶、南ブロックではサヌカイトが組成している。比較点数の上で問題は残るが、重視される点は船野型細石核を含まない南ブロックでサヌカイトが存在することであろう。先述したようにサヌカイトの利用は古相段階により多く認められる可能性があり、これと関連した現象であるとも考えられる。

花見山遺跡と福井技法

花見山遺跡ではハリ質安山岩製の打面調整剥片などが報告されており、細石刃生産技術の理解に役立つ資料提示

が整えられている。多田は以前にこれらの関連資料を検討し、泉福寺洞穴における豆粒文土器段階に近似した様相であると理解した（多田2003）。この成果から導き出される現象面を考えれば、備讃瀬戸における福井技法の影響は、福井技法が西北九州で成立後に程なくして到達したとすることができる。

また備讃瀬戸における福井技法の影響は、この技法が盛行した西北九州へ羽佐島技法が流入することにもなったであろう。九州の類例については既に拙稿で触れているが、特に瀬戸内に面した地域により多くの類例が認められている（多田2003）。さらに、近年報告された吉武遺跡群第９次調査では、備讃瀬戸における細石刃文化との関連を示唆する細石刃石器群が確認されている（小畑・加藤2002）。これらの現象は、福井技法に伴って拡散したであろう羽佐島技法の動態を示すものであろう。

奥谷南遺跡の１・２号岩陰

奥谷南遺跡では２カ所の岩陰から３カ所のブロックが確認されている。これらのブロック単位で細石核組成を確認してみたが、特に目立った現象は捉えることができない（第24図）。つまり時期的にも大きな差を持たないことになるが、仮に接合作業などによって細かな時間差も見出すことができない結果となれば、一集団の構成単位を示すものとも考えられないだろうか。

これまでに備讃瀬戸などで丘陵単位やブロック単位での区分を述べてきたが、これらにはすべて時期的隔たりを想起でき、同時共存と考えられる複数ブロックの存在は確認できない。その意味では、奥谷南遺跡の残存状況は、当時の集団論を論述する上での好材料となる可能性を持っている。

７　研究の課題

本地域における今後の研究課題には、やはり良好な遺存状況を示す石器群の検出に尽きるが、これには極めて困難な諸作業がつきまとうことになる。また、これは類例を待つのみの研究姿勢であって、積極的に細石刃文化段階の論証には結びつかない結果となろう。これを打開するために、ここで大きく２つの課題を提起しておく。

まず第１点目には、過去における調査・研究事例の再評価である。先述したように、備讃瀬戸では約20カ所の遺跡で約1,000点にも及ぶ細石刃文化関連資料がありながらも、これを再評価した研究事例はまだ少ない。備讃瀬戸では遺物の埋没過程に問題があり、これを直ちに遺跡の残存状況に結びつけるのは危険が伴うのは確かであるが、平面的に大きな遺物の移動が考えられないことは評価すべきである。先学の報告を詳細に読めばこの点は明白であるし、新しい視点で論証すれば、新たな事実が確認できることもある。

また、当時の調査資料は行政機関などで保管されており、接合作業や個体別資料の分析など、再検討が可能な手法も数多くある。奥谷南遺跡の報告でも指摘されたように、時間を費やした接合作業が実現すれば、先述したブロック単位の諸問題にアプローチすることもできよう。さらには細石刃生産技法に関する情報も、より詳細に得られることになろう。

第２点目は個別器種の再検討であろう。特に奥谷南遺跡における編年的位置づけでも感じられたように、細石核組成によるアプローチと尖頭器共伴を仮定した場合では、大きな時間的較差を生じる結果が危惧される。これには各器種における詳細な検討が必要であり、各器種の評価をクロスチェックすることが有効な手法となろう。

なお、本稿執筆にあたり、文献検索などで以下の方々にご厚意を賜った。記して感謝したい。

沖 憲明　小嶋善邦　白石 純　眞鍋修身　光石鳴巳　安川豊史

（2003年９月５日）

参考文献

秋山 忠・真鍋昌宏・渡部昭夫1984『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ　羽佐島遺跡Ⅰ』香川県教育委員会。

秋山 忠・藤好史郎・真鍋昌宏1984『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ　大浦遺跡』香川県教育委員会。

稲田孝司1996『恩原２遺跡』恩原遺跡発掘調査団

稲田孝司・絹川一徳・光石鳴巳1992「西日本の湧別技法」『岡山大学文学部研究紀要』18

氏家敏之・金森映人・貞野保仁ほか2001『試掘調査総括　下突出遺跡　滝ノ宮遺跡　佐城遺跡（Ⅱ）　鶴射遺跡　原遺跡（Ⅱ）－四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告21－』徳島県埋蔵文化財センター

大山真充・小西正行・藤好史郎1984『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ　羽佐島遺跡Ⅱ』香川県教育委員会。

大山真充・藤好史郎1985『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅳ　西方遺跡』香川県教育委員会。

沖野新一1998『赤石をもつ狩人』青葉図書

小野 昭1979「瀬戸内沿岸地方の細石器文化」『駿台史学』47、駿台史学会

小野 伸・白石 純1995「岡山県玉野市出崎採集の旧石器」『旧石器考古学』51、旧石器文化談話会

小畑弘己・加藤良彦2002『吉武遺跡群ⅩⅣ』福岡市教育委員会

片岡鷹介1968「高知県高間原古墳出土の細石核」『とさ　高間原古墳群　四国考古学叢書』１、廣田典夫編

門脇 隆・岡村幹彦・坂本由美子・前田光雄2001『ナシヶ森遺跡』高知県幡多郡大月町教育委員会

鎌木義昌1956「岡山県鷲羽山遺跡調査略報」『石器時代』3、石器時代文化研究会

鎌木義昌1957「香川県井島遺跡」『石器時代』4、石器時代文化研究会

鎌木義昌1965「西日本の細石刃文化」『歴史教育』13－3、日本書院

鎌木義昌・高橋護1965「６ 瀬戸内海地方の先土器時代」『日本の考古学Ⅰ　先土器時代』杉原荘介編

鎌木義昌・小林博昭1985「近畿・中国・四国地方の細石刃研究」『考古学ジャーナル』243

鎌木義昌・小林博昭1986「３　竪場島遺跡」『岡山県史　第18巻　考古資料』岡山県

木村剛朗1995『四国西南沿海部の先史文化　旧石器・縄文時代』幡多埋文研

栗田勝弘1988『市ノ久保遺跡』犬飼町教育委員会

小林一郎1993『県道「伊予－川内線」関連埋蔵文化財発掘調査報告書』愛媛県埋蔵文化財調査センター

作田一耕1991「平坂Ⅱ遺跡」『四国縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター

下瀬洋一・藤野次史1994「山口県宇部市川津遺跡採集の細石核」『旧石器考古学』48、旧石器文化談話会

白石 純・小野 伸・小野 勢1997「岡山市犬島採集の旧石器」『古代吉備』19

鈴木忠司1971「野岳遺跡の細石核と西南日本における細石刃文化」『古代文化』23-8、古代学協会

十亀幸雄1978「愛媛県祝谷丸山遺跡の細石刃剥離技術」『古代学研究』88

十亀幸雄1988「芸予諸島の先土器時代資料」『遺跡』遺跡発行会

高橋邦彦1961「坂出市与島町西方及び東方遺跡の調査報告」『香川県文化財協会報』5、香川県文化財保護協会

多田 仁1992「松山平野の石器文化」『祝谷アイリ遺跡』松山市埋蔵文化財センター

多田 仁1995「四国南西部の船野型細石核」『旧石器考古学』51、旧石器文化談話会

多田 仁1997「西四国における旧石器時代終末から縄文時代草創期の石器群」『中・四国の縄文時代草創期の土器と石器』第８回中四国縄文研究会発表資料、中四国縄文研究会

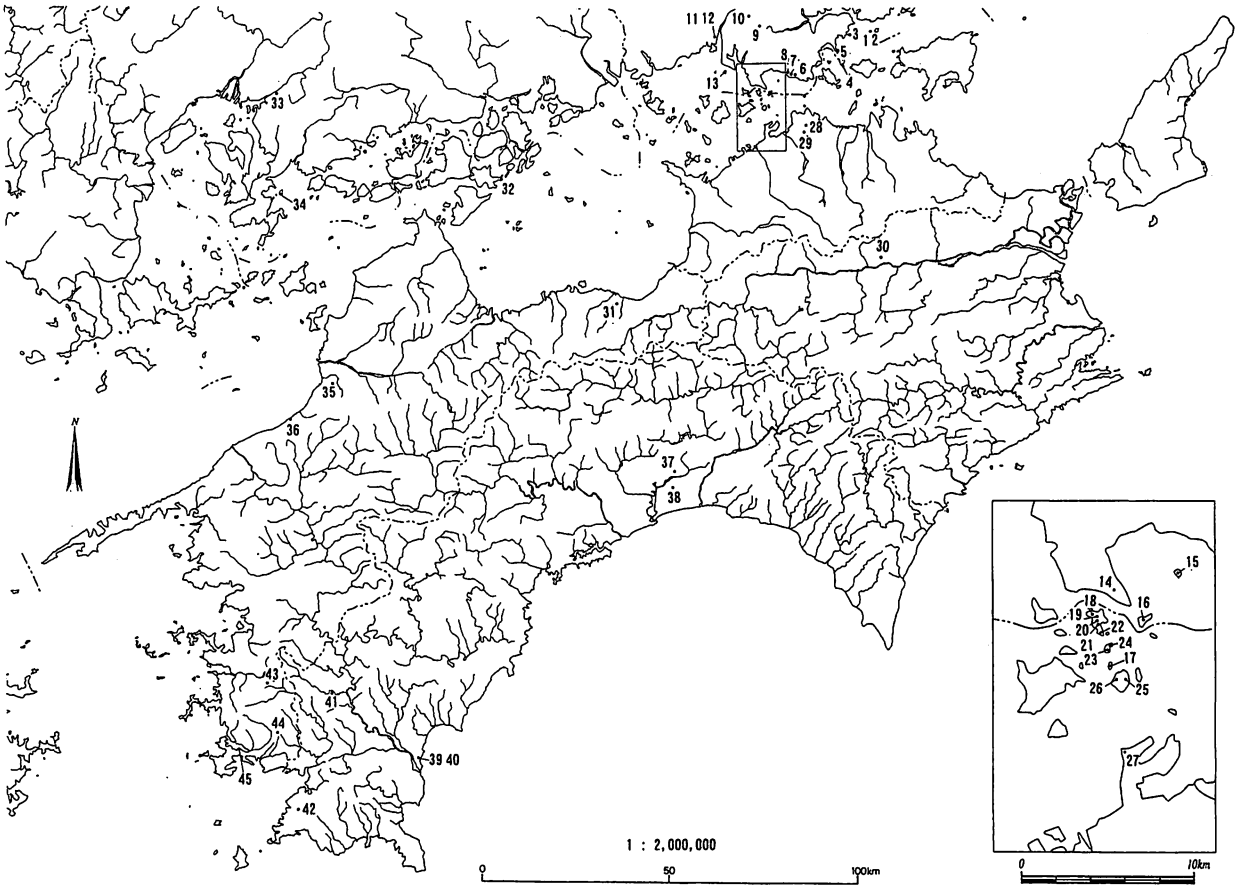
多田 仁2000a「四国地方中・西部における旧石器時代終末から縄文時代草創期の石斧」『紀要愛媛』創刊号、（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター

多田 仁2000b「船野技法による細石核の細分について」『九州旧石器　－橘昌信先生還暦記念特集号－』第４号、九州旧石　器文化研究会

多田 仁2001「羽佐島技法の再評価」『旧石器考古学』62、旧石器文化談話会

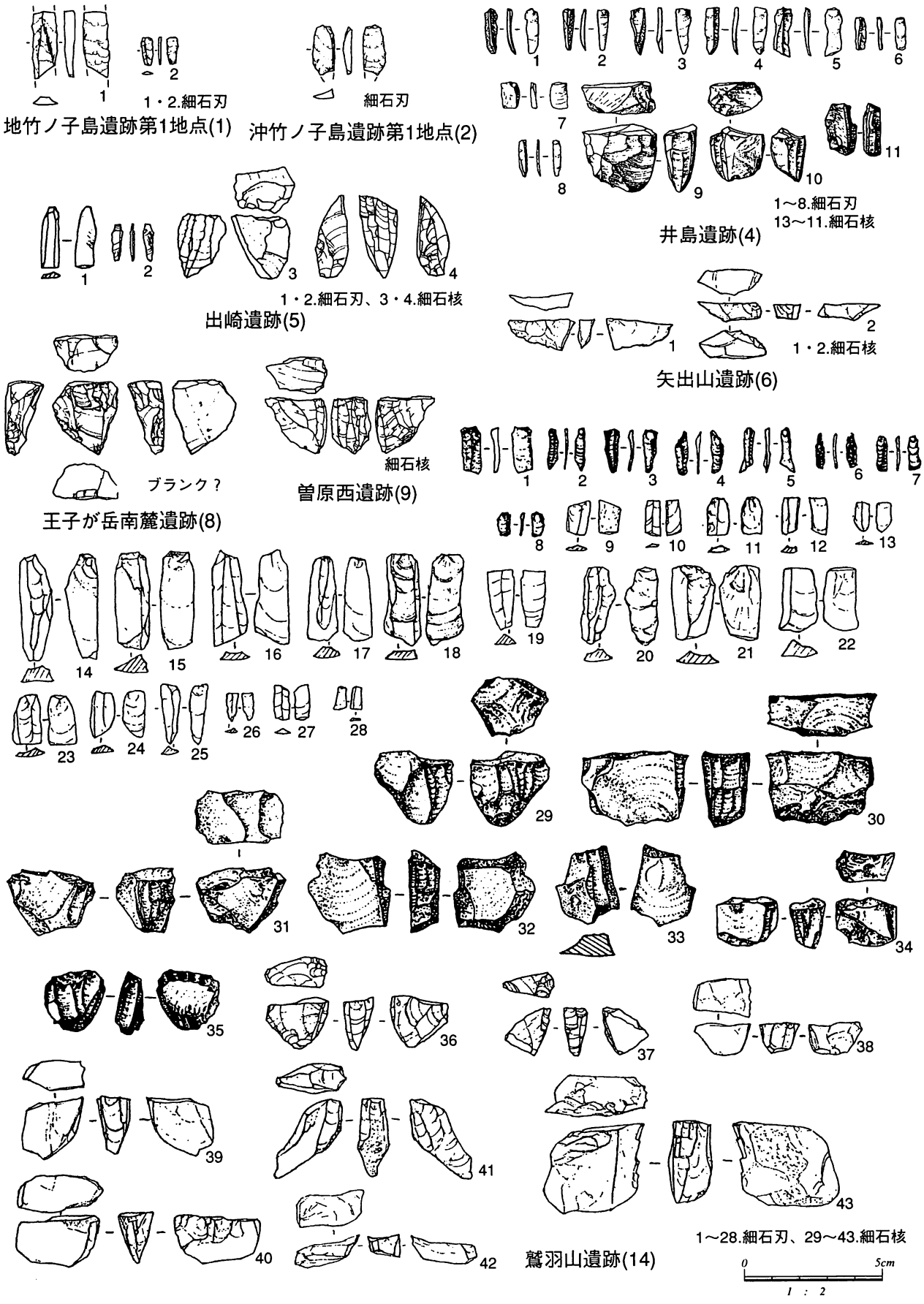
多田 仁2002「四国の尖頭器」『四国とその周辺の考古学』犬飼徹夫先生古希記念論文集刊行会

多田 仁2003「瀬戸内とその周辺における細石刃文化の一様相」『古代文化』55-8、古代学協会
橘 昌信1979「東九州における細石核」『考古学ジャーナル』167、ニュー・サイエンス社。
橘 昌信1981『大分県上下田遺跡発掘調査報告書』別府大学附属博物館。
橘 昌信1983『大分県上下田遺跡第２次発掘調査報告書』別府大学附属博物館。
橘 昌信1990『松山遺跡』別府大学附属博物館。
橘 昌信1991『松山遺跡　２次発掘調査』別府大学附属博物館。
敦賀啓一郎2001「広島県呉市情島採集の旧石器」『第18回中・四国旧石器文化談話会発表資料』中・四国旧石器文化談話会
西村尋文1983「中部瀬戸内地域における細石刃生産技術の検討」『旧石器考古学』26、旧石器文化談話会
西村尋文1993「四国・瀬戸内の細石刃文化」『細石刃文化研究の新たなる展開Ⅰ』佐久考古学会
西村尋文・藤好史郎・真鍋昌宏1989『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ　花見山遺跡』香川県教育委員会
萩原博文2001「縄文草創期の細石刃石器群」『日本考古学』第12号、日本考古学協会
林 茂・藤好史郎1983『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報（Ⅵ）－初田遺跡　ヤケヤマ遺跡　大浦浜遺跡　長崎通り　遺跡　長崎古墳』香川県教育委員会
早渕隆人1992「旧石器遺跡立地についての一視点」『真朱』創刊号、徳島県埋蔵文化財センター
福本 明1997「中山頼夫氏寄贈の考古資料」『倉敷埋蔵文化財センター年報』5、倉敷埋蔵文化財センター
藤野次史1997「（１）中国地方における細石刃石器群」『九州の細石器文化』九州旧石器文化研究会
藤原好二1992「倉敷市曽原西採集の細石核」『古代吉備』14
藤原好二ほか1995『王子が岳南麓遺跡』倉敷埋蔵文化財センター
藤原好二2002「山本慶一氏寄贈の資料Ⅱ」『倉敷埋蔵文化財センター年報』8、倉敷埋蔵文化財センター
藤好史郎1980「Ⅱ　羽佐島遺跡」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報（Ⅲ）』香川県教育委員会。
藤好史郎1989「備讃瀬戸におけるナイフ形石器文化終末期の様相」『旧石器考古学』38、旧石器文化談話会
前田光雄2001「南四国における縄文時代転換期の諸様相」『くろしお』11、高知大学黒潮圏研究所
間壁忠彦1970「第一編　原始」『玉野市史』玉野町史編纂委員会
間壁葭子1968「香川県坂出市櫃石島採集の石器」『倉敷考古館研究集報』4
松浦五輪美1998「細石刃文化研究における二・三の問題」『旧石器考古学』57、旧石器文化談話会
松村信博・山本純代2001『奥谷南遺跡Ⅲ』(財)高知県埋蔵文化財センター
松村信博・山崎真治2000「付編　高知県出土の後期旧石器時代新出資料と細石刃文化期の遺跡」『第17回中・四国旧石器文　化談話会発表資料』中四国旧石器文化談話会
松本敏三1977「櫃石島第Ⅱ調査区」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財予備調査報告（Ⅰ）』香川県教育委員会
松本豊胤1973『与島東方遺跡』香川県教育委員会
光石鳴巳1993「中国地方の細石刃文化」『細石刃文化研究の新たなる展開Ⅰ』佐久考古学会
森 格也1995「備讃瀬戸地域における楔形細石刃核の再検討」『研究紀要』Ⅲ、(財)香川県埋蔵文化財調査センター
森 格也1996「備讃瀬戸地域における細石刃文化終末期の様相」『研究紀要』Ⅳ、(財)香川県埋蔵文化財調査センター
安川豊史1987「第二章　先土器時代」『岡山県の考古学』近藤義郎編、吉川弘文館
山口将仁1990「＜土佐の考古学＞高知県における後期旧石器時代の様相」『旧石器考古学』41、旧石器考古学
山本慶一1969「鷲羽山遺跡採集の石器と土器」『倉敷考古館研究集報』6
渡部明夫1982「Ⅳ羽佐島遺跡の遺物整理」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報（Ⅴ）』香川県教育委員会

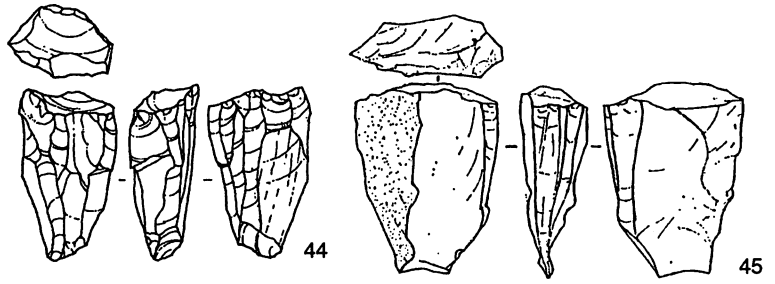


1　地竹ノ子島（第１地点）
2　沖竹ノ子島（第１地点）
3　大入崎
4　井島
5　出崎
6　矢出山
7　王子岳東方
8　王子が岳南麓
9　曽原西
10　清陵高校裏山（仮）
11　富田小学校西道口川底
12　岸本
13　上水島
14　鷲羽山（鎌木調査区）
　　鷲羽山（山本資料）
15　堅場島（第二試掘区）
16　釜島
17　羽佐島
18　櫃石島（間壁資料）
19　花見山
20　大浦
21　ヤケヤマ
22　長崎通り
23　黒岩初田
24　岩黒北丘陵
25　与島東方
26　与島西方（高橋調査区）
　　西方（香川県調査区）
27　沙弥
28　タンベ池
29　兎子山
30　佐城（Ⅱ）
31　平坂Ⅱ
32　金ヶ崎
33　道上
34　情島
35　平松
36　唐崎
37　奥谷南Ⅴ区
38　高間ヶ原
39　平野茶園
40　双海中駄場
41　広井駄場
42　ナシヶ森（A地点）
　　ナシヶ森（第2地点）
43　池ノ岡（A地点）
44　広見
45　深泥

第1図　四国・瀬戸内地域の細石刃文化遺跡分布図

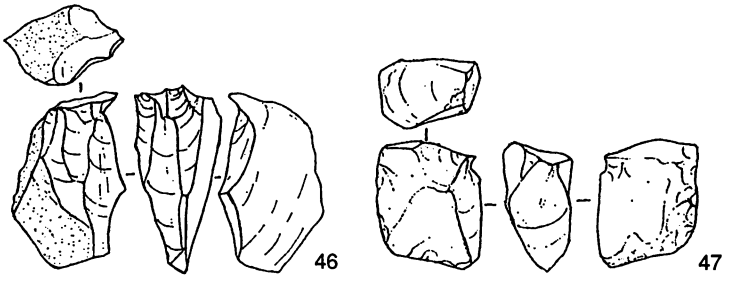


第２図　備讃瀬戸の細石刃文化関連遺物１



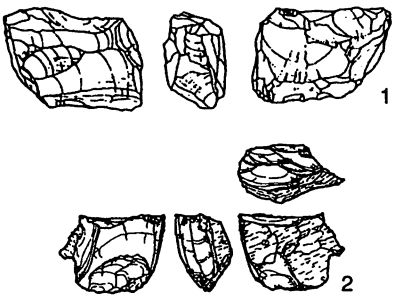
1.細石刃、2.細石核

堅場島遺跡(15)



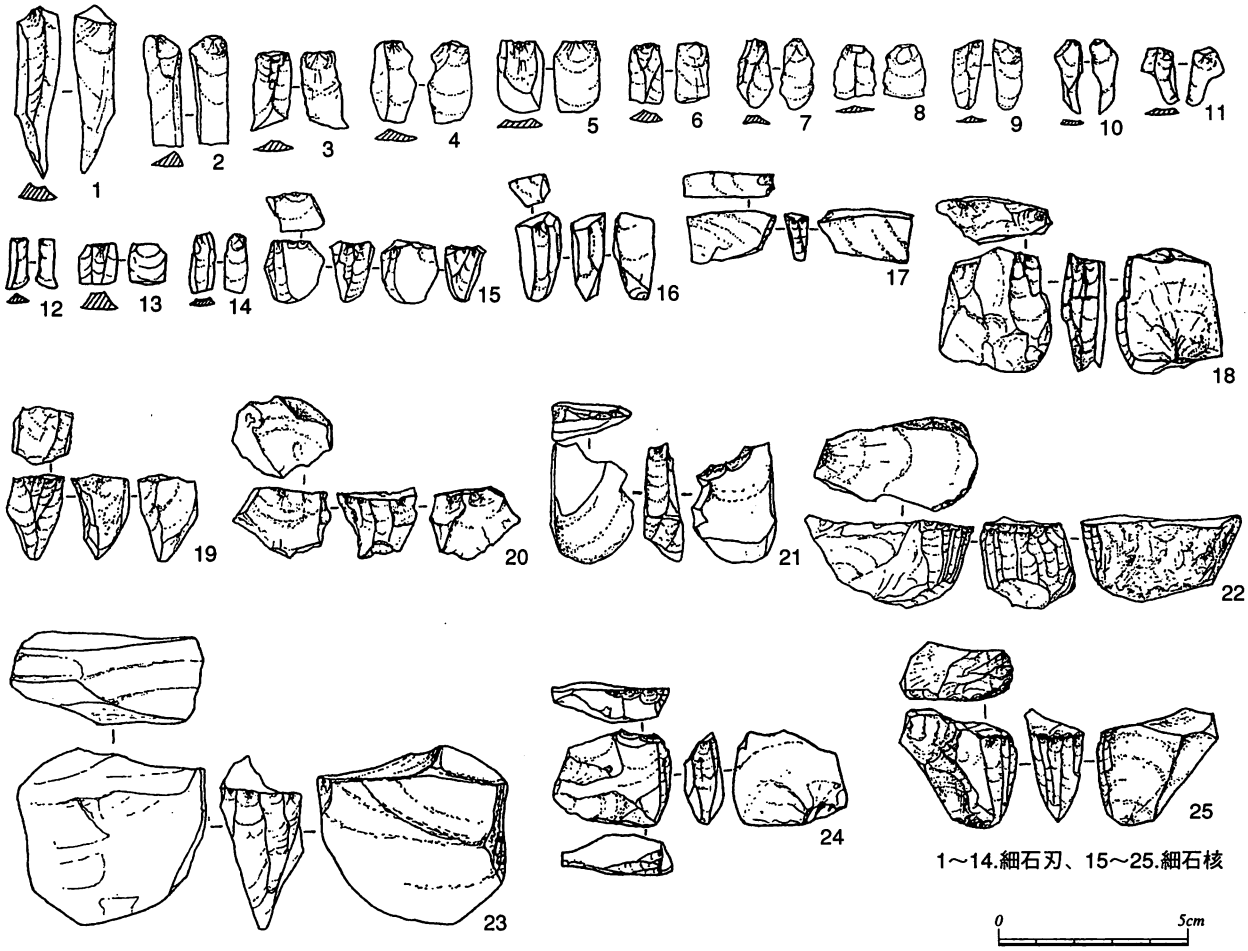
44～47.細石核

鷲羽山遺跡(14)



1・2.細石核

釜島遺跡(16)

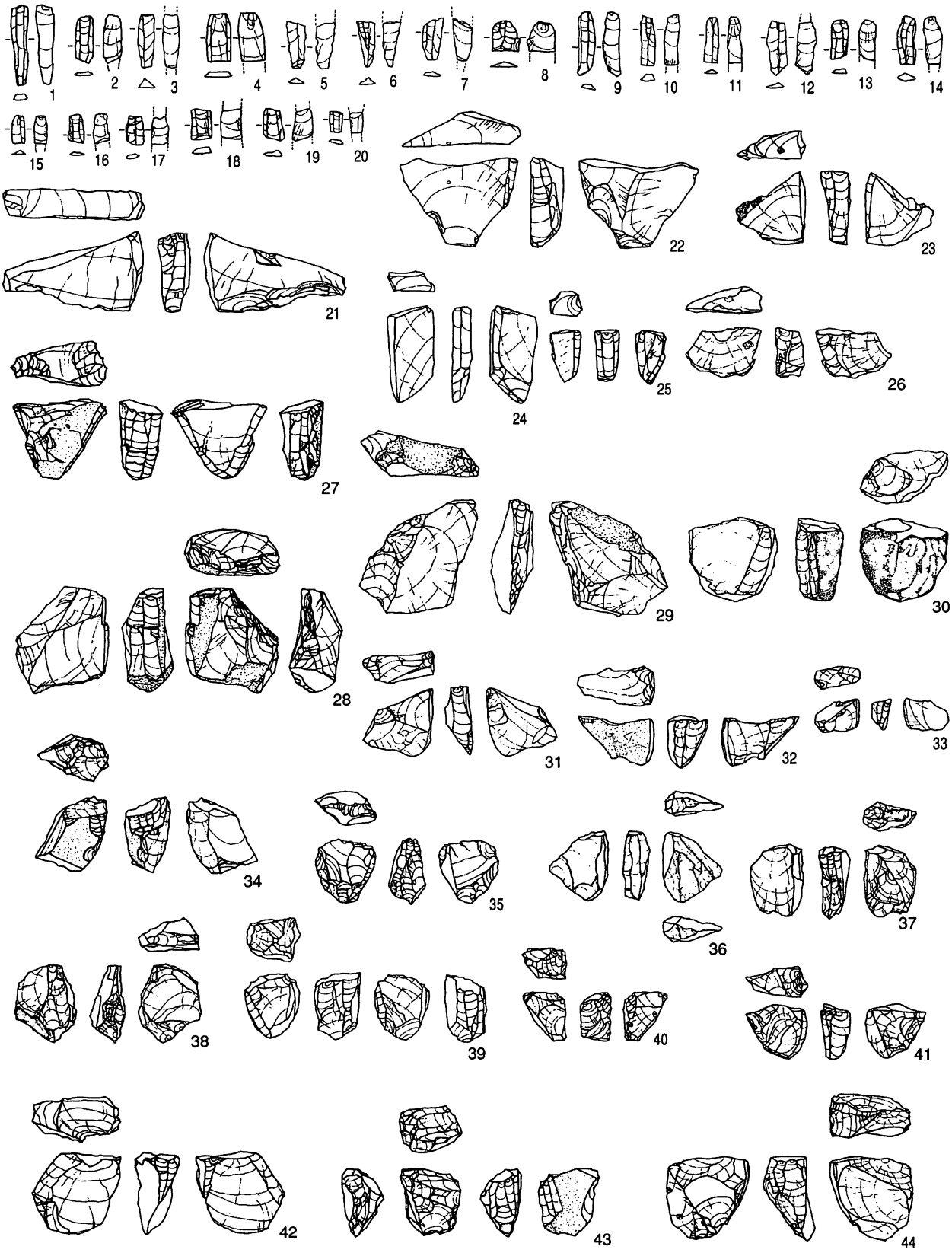


1～14.細石刃、15～25.細石核

0 5cm
1 : 2

櫃石島(18)

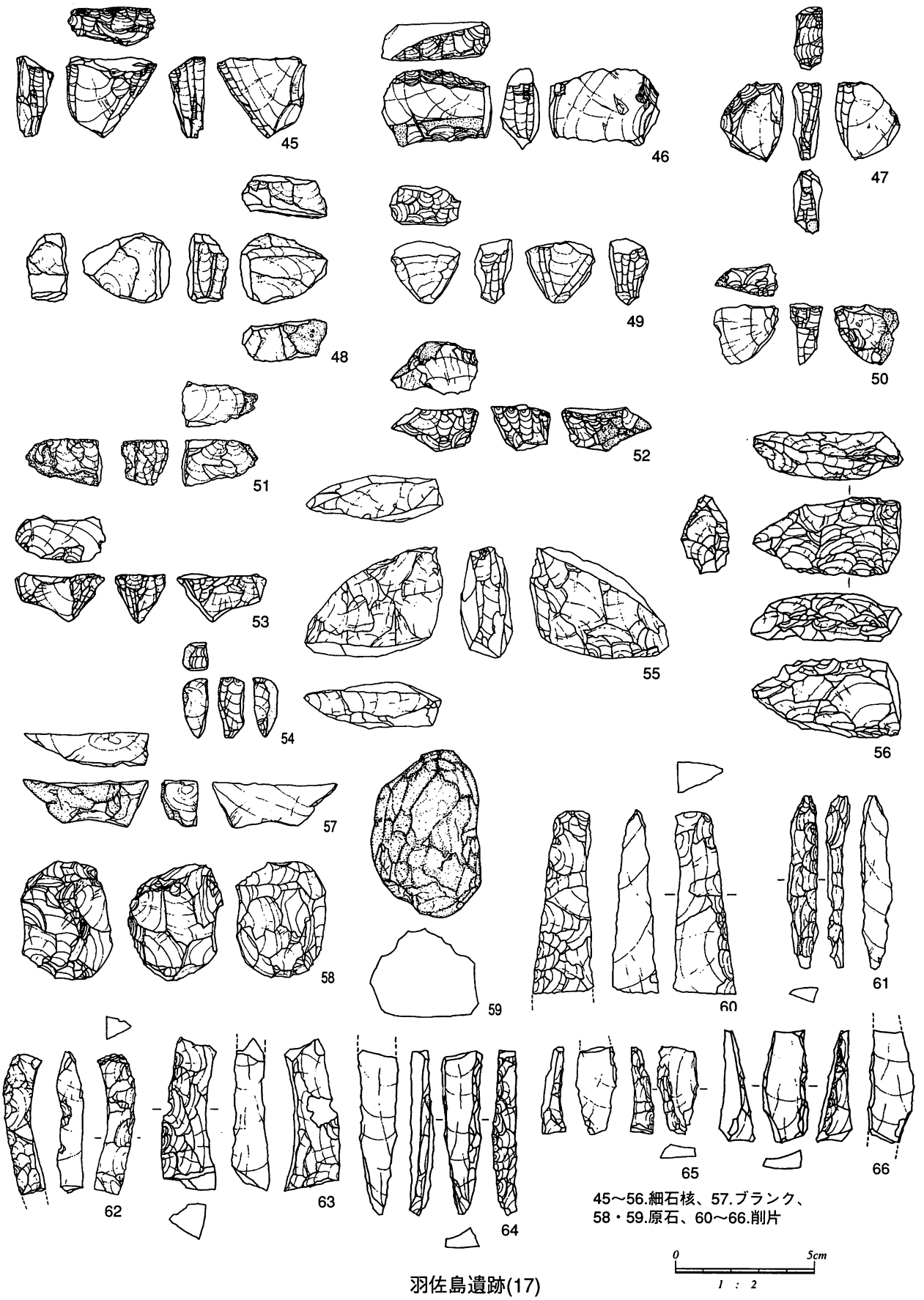
第３図　備讃瀬戸の細石刃文化関連遺物２



1～20.細石刃、21～44.細石核

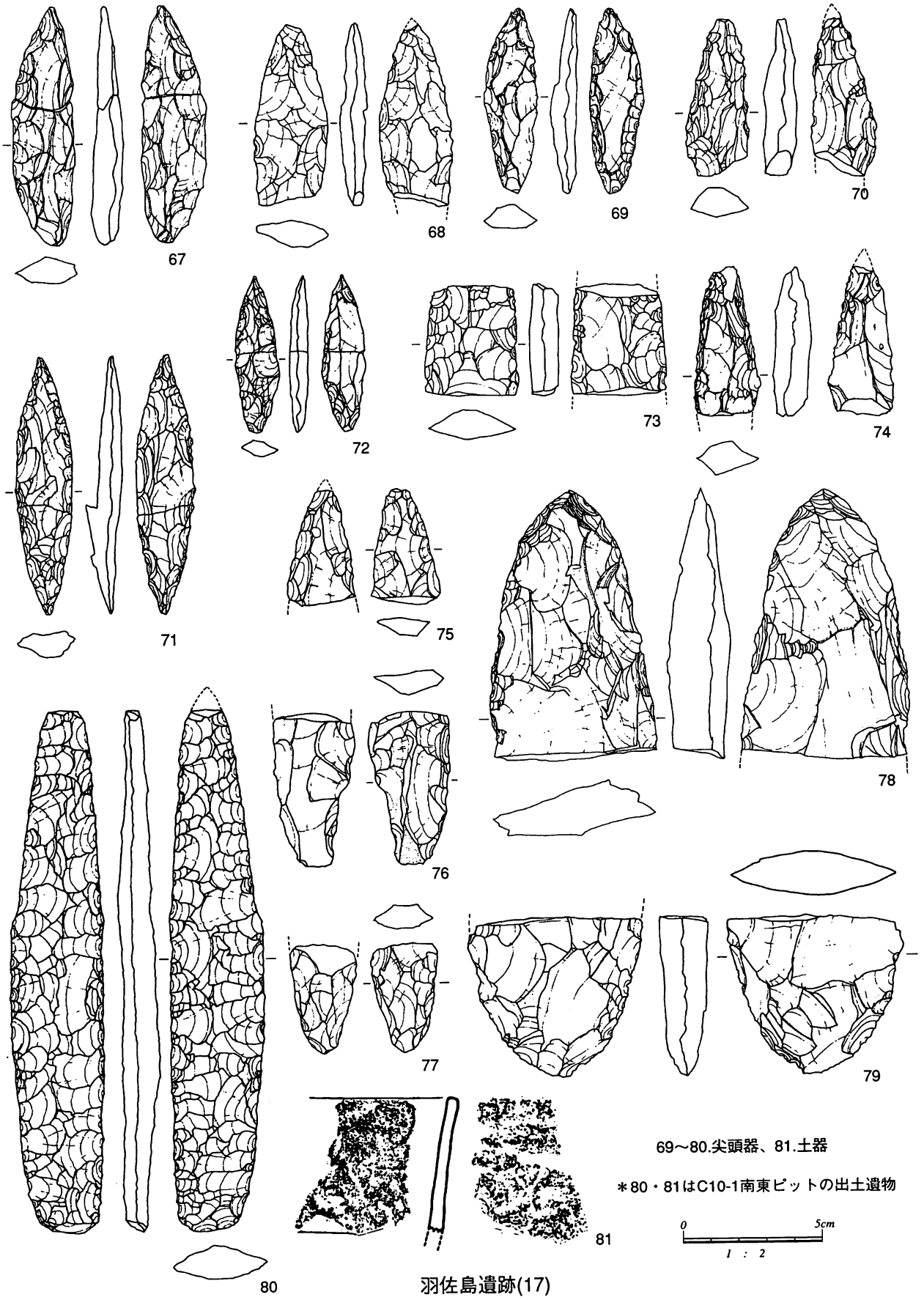
羽佐島遺跡(17)

第4図　備讃瀬戸の細石刃文化関連遺物3



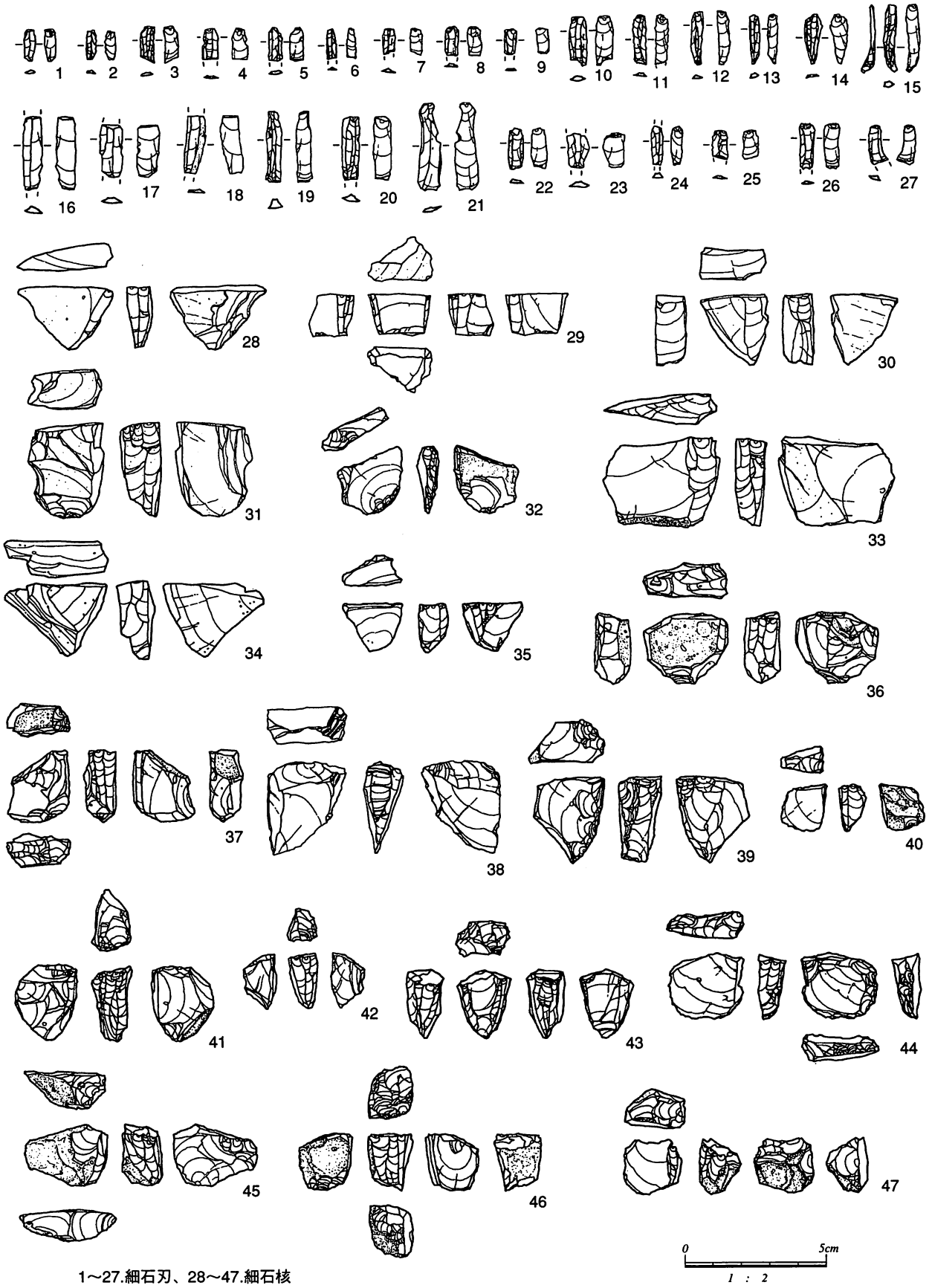
羽佐島遺跡(17)

第５図　備讃瀬戸の細石刃文化関連遺物４



羽佐島遺跡(17)

第6図　備讃瀬戸の細石刃文化関連遺物5



1～27.細石刃、28～47.細石核

花見山遺跡(19)

第７図　備讃瀬戸の細石刃文化関連遺物６

花見山遺跡(19)

第８図　備讃瀬戸の細石刃文化関連遺物７

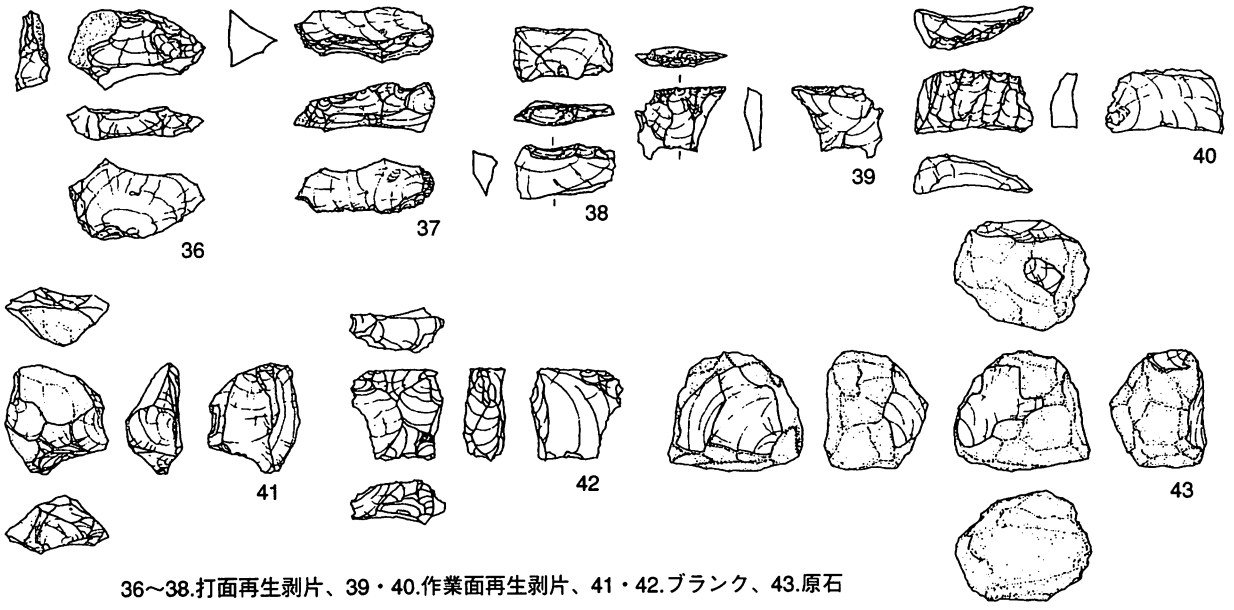
第９図　備讃瀬戸の細石刃文化関連遺物８

101～106.細石核、107～111.ブランク、112・113.原石
114～117.打面再生剥片（縦長・横長削片）、
118・119.作業面再生剥片、120～122.尖頭器

花見山遺跡(19)

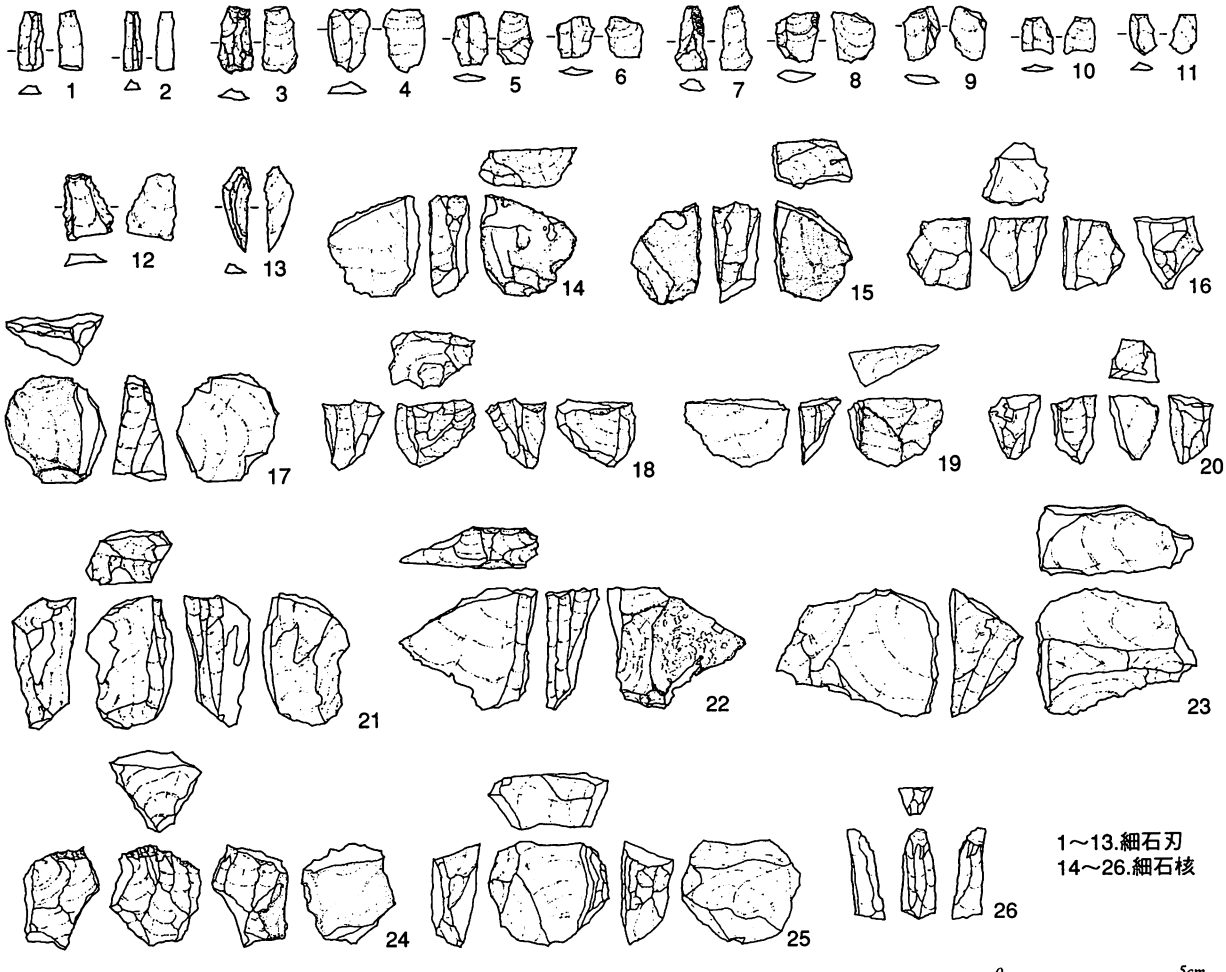
第10図　備讃瀬戸の細石刃文化関連遺物 9

第11図　備讃瀬戸の細石刃文化関連遺物10



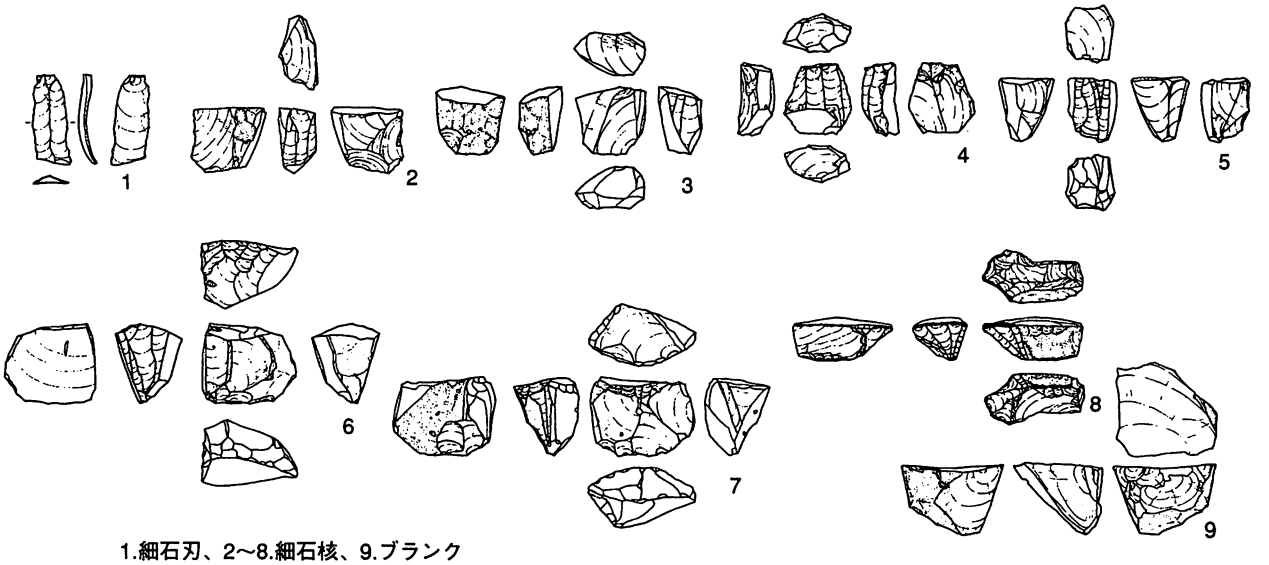
36～38.打面再生剥片、39・40.作業面再生剥片、41・42.ブランク、43.原石

大浦遺跡(20)



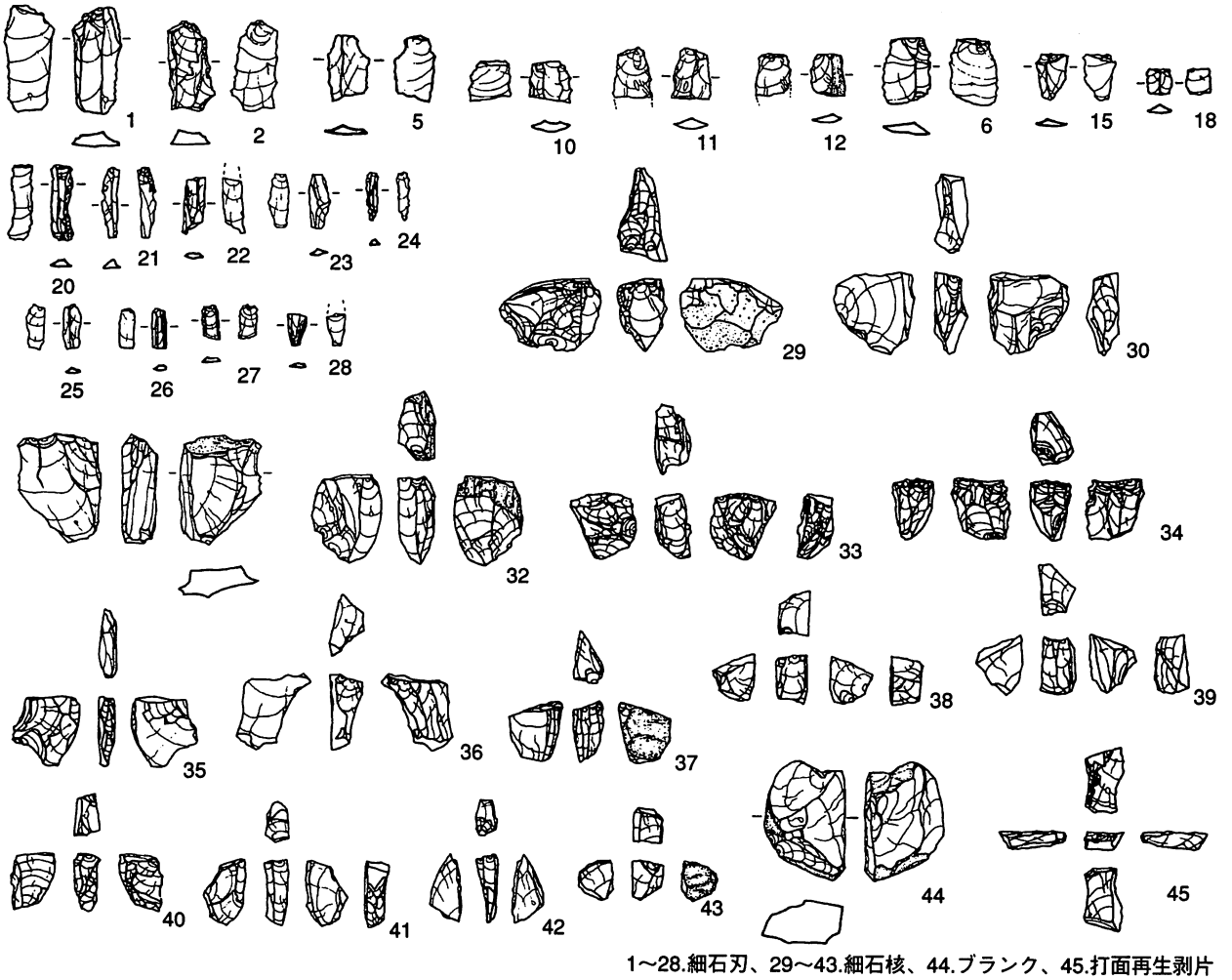
長崎通り遺跡(22)

第12図　備讃瀬戸の細石刃文化関連遺物11



1.細石刃、2～8.細石核、9.ブランク

岩黒初田遺跡(23)



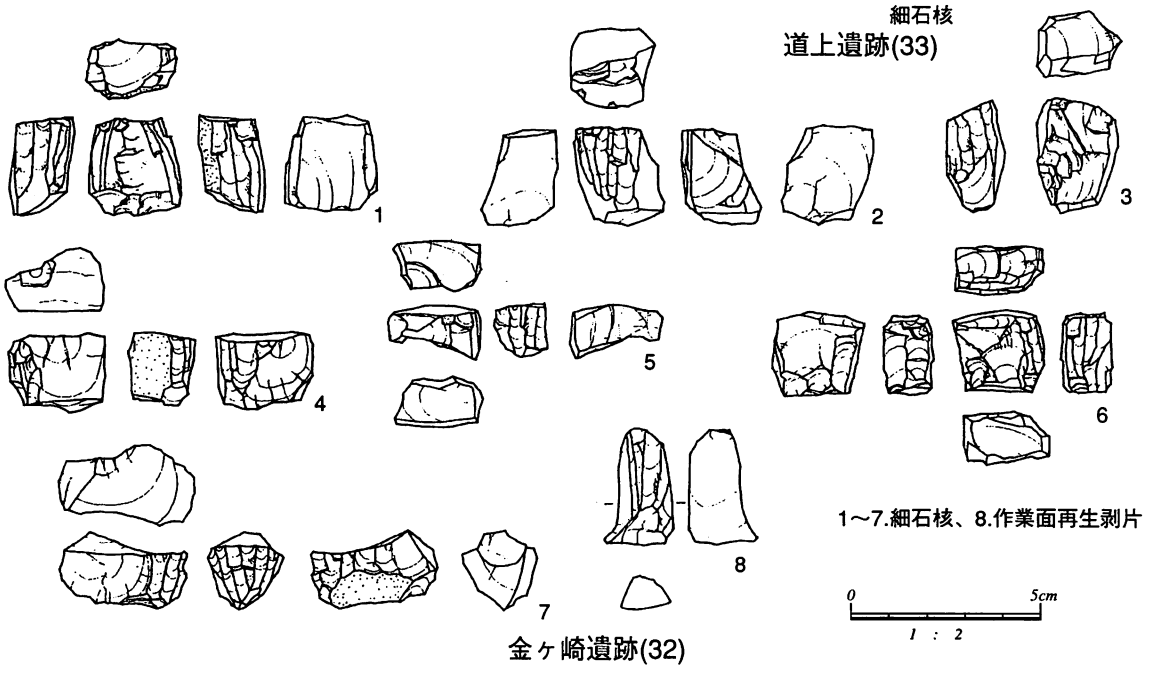
1～28.細石刃、29～43.細石核、44.ブランク、45.打面再生剥片

西方遺跡(26)

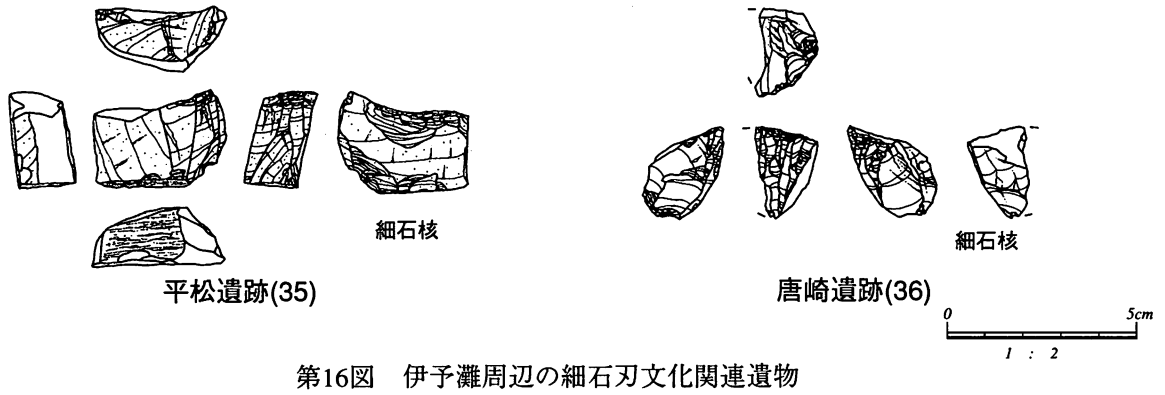
0　5cm
1 : 2

第13図　備讃瀬戸の細石刃文化関連遺物12

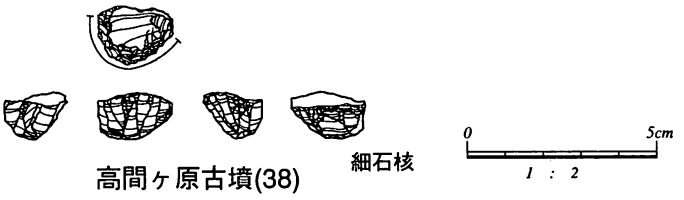
第14図　吉野川流域の細石刃文化関連遺物



第15図　芸予諸島周辺の細石刃文化関連遺物

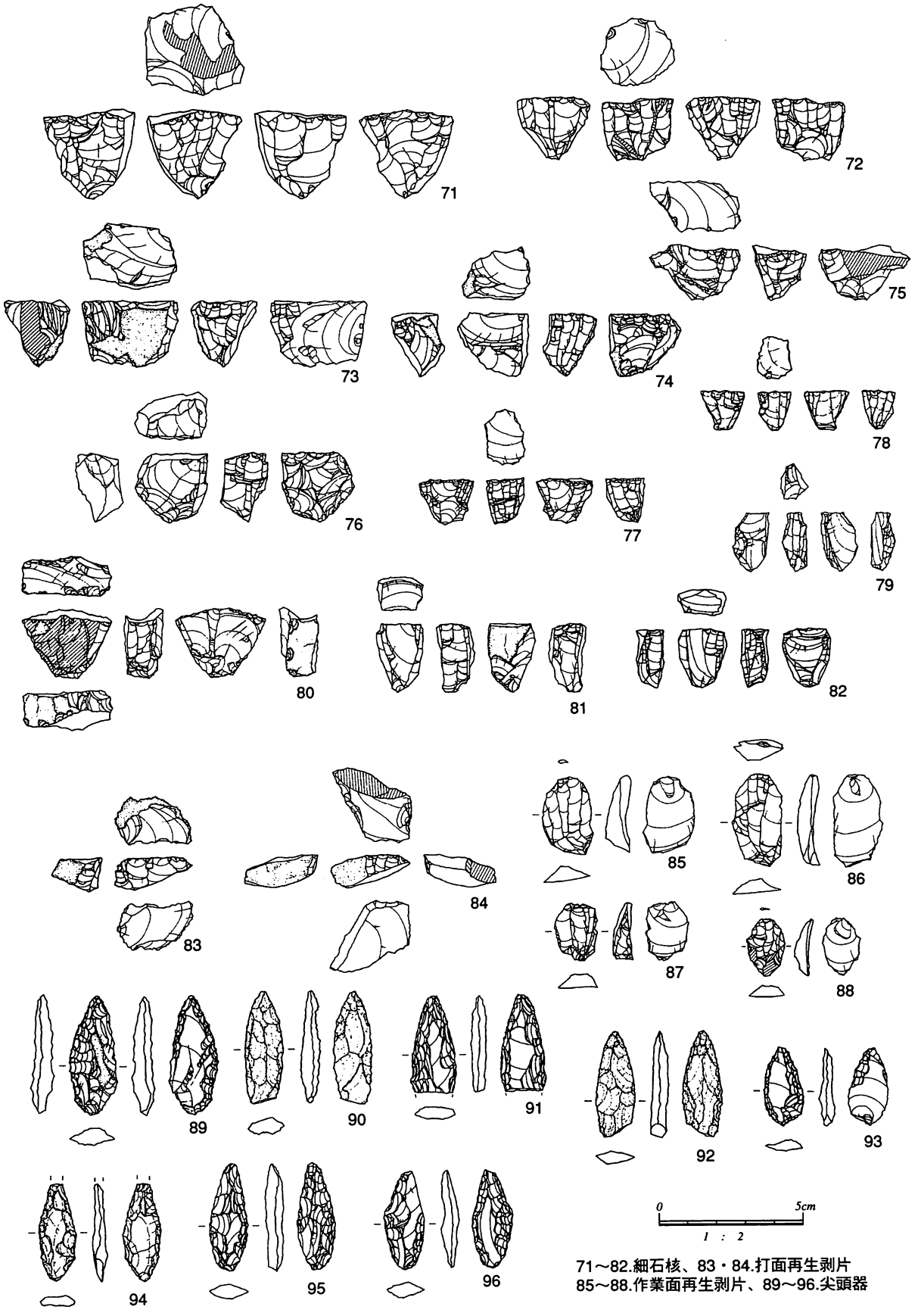


第16図　伊予灘周辺の細石刃文化関連遺物



第17図　高知平野の細石刃文化関連遺物 1

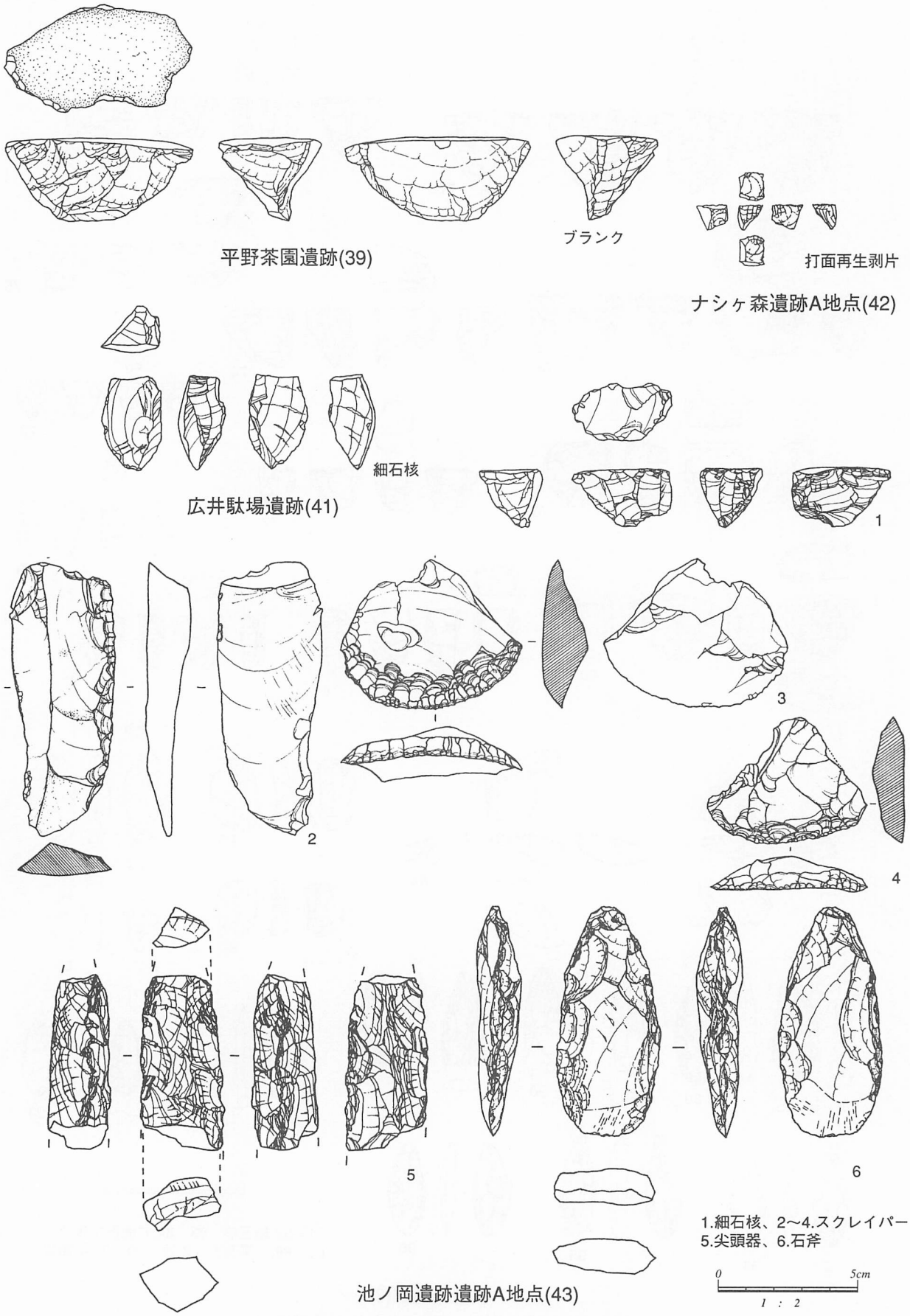
第18図　高知平野の細石刃文化関連遺物２



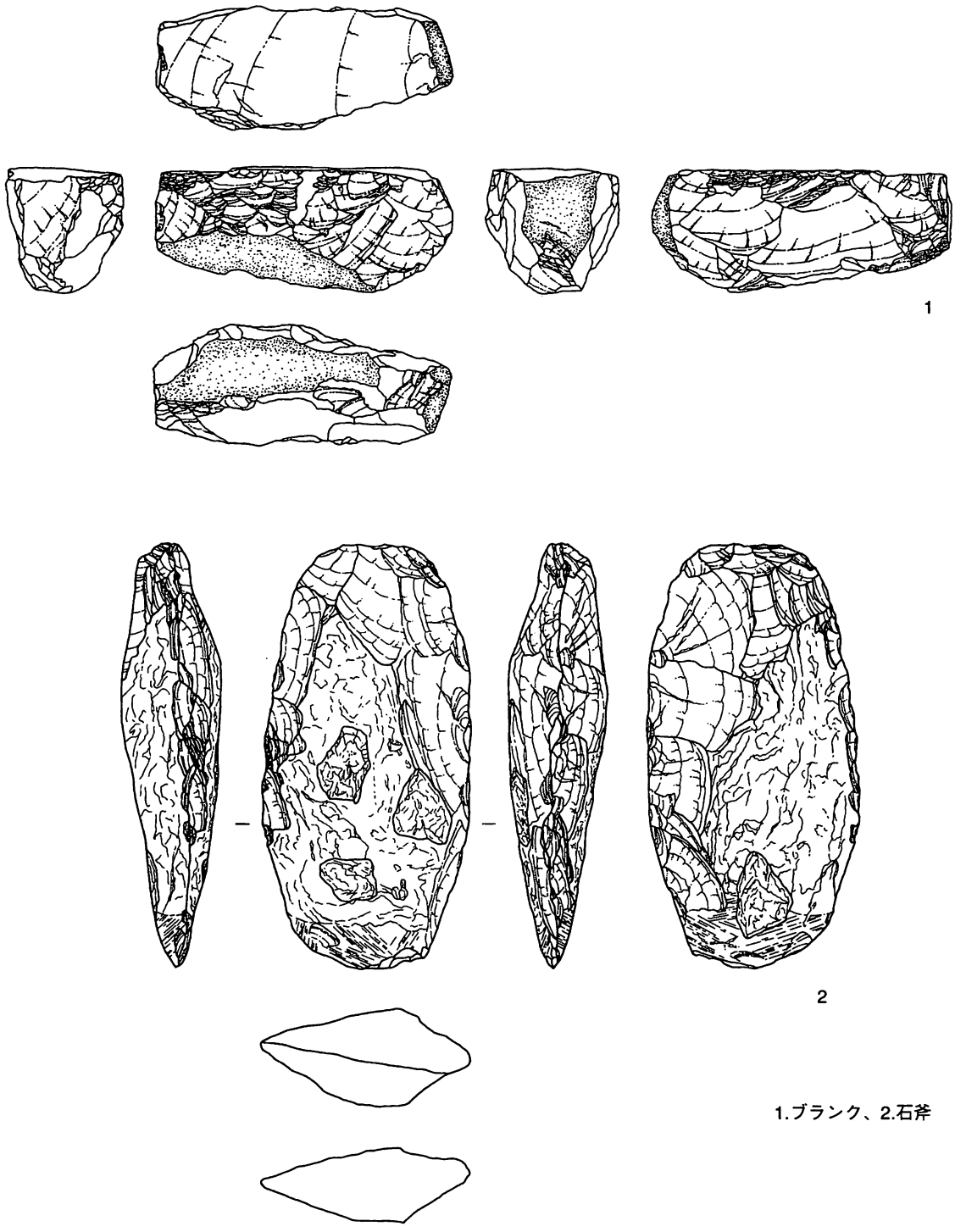
71～82.細石核、83・84.打面再生剥片
85～88.作業面再生剥片、89～96.尖頭器

奥谷南遺跡(37)

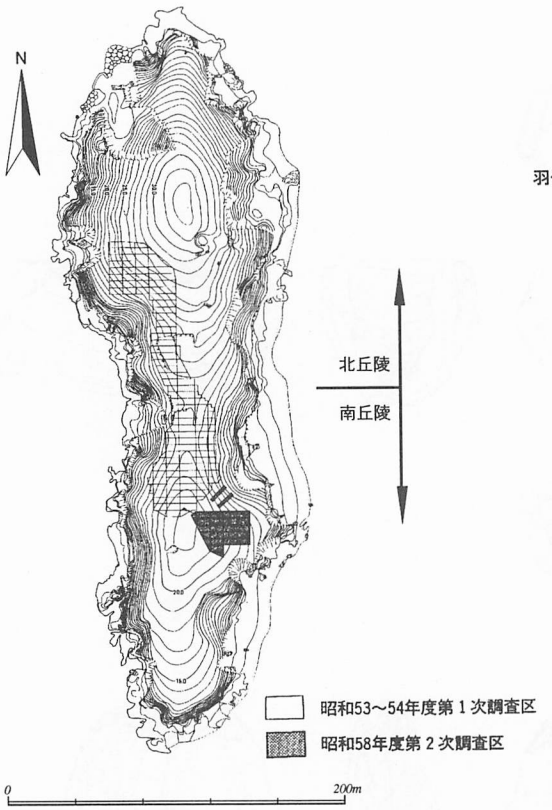
第19図　高知平野の細石刃文化関連遺物３

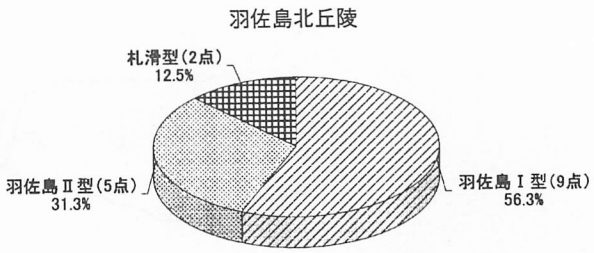


第20図　西南四国の細石刃文化関連遺物 1

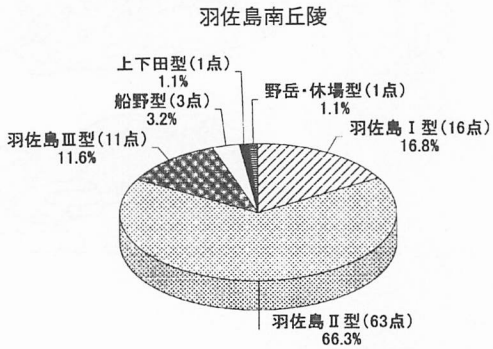


第21図　西南四国の細石刃文化関連遺物２





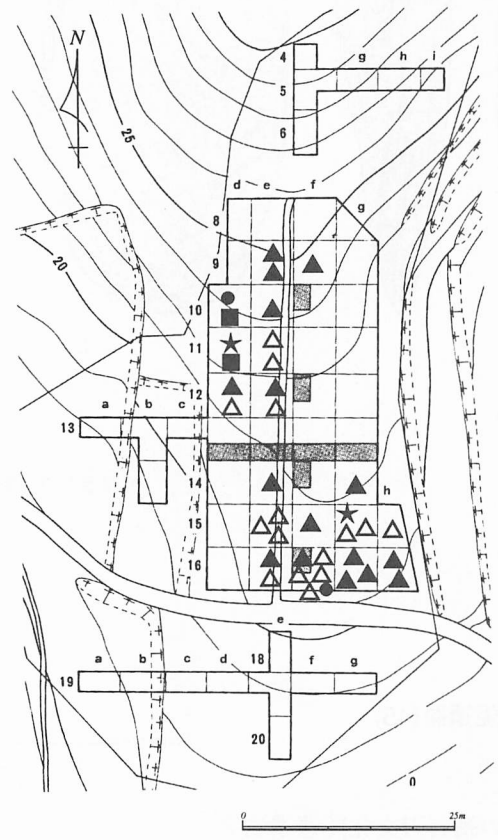
ハリ質安山岩（9点）：56.3%
サヌカイト　（7点）：43.8%

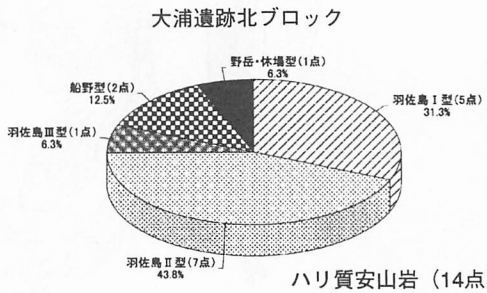


ハリ質安山岩（80点）：84.2%
黒耀石　（ 2点）：2.1%
サヌカイト　（13点）：13.7%

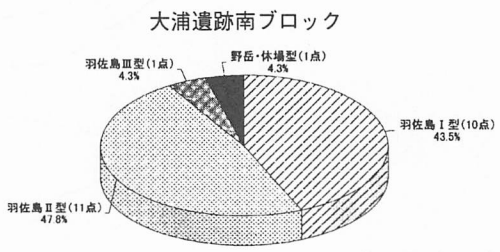
＊グラフは点数比。１・２次調査合計。

第22図　羽佐島遺跡の細石核組成





ハリ質安山岩（14点）：87.5%
黒耀石　（ 1点）：6.3%
水晶　（ 1点）：6.3%

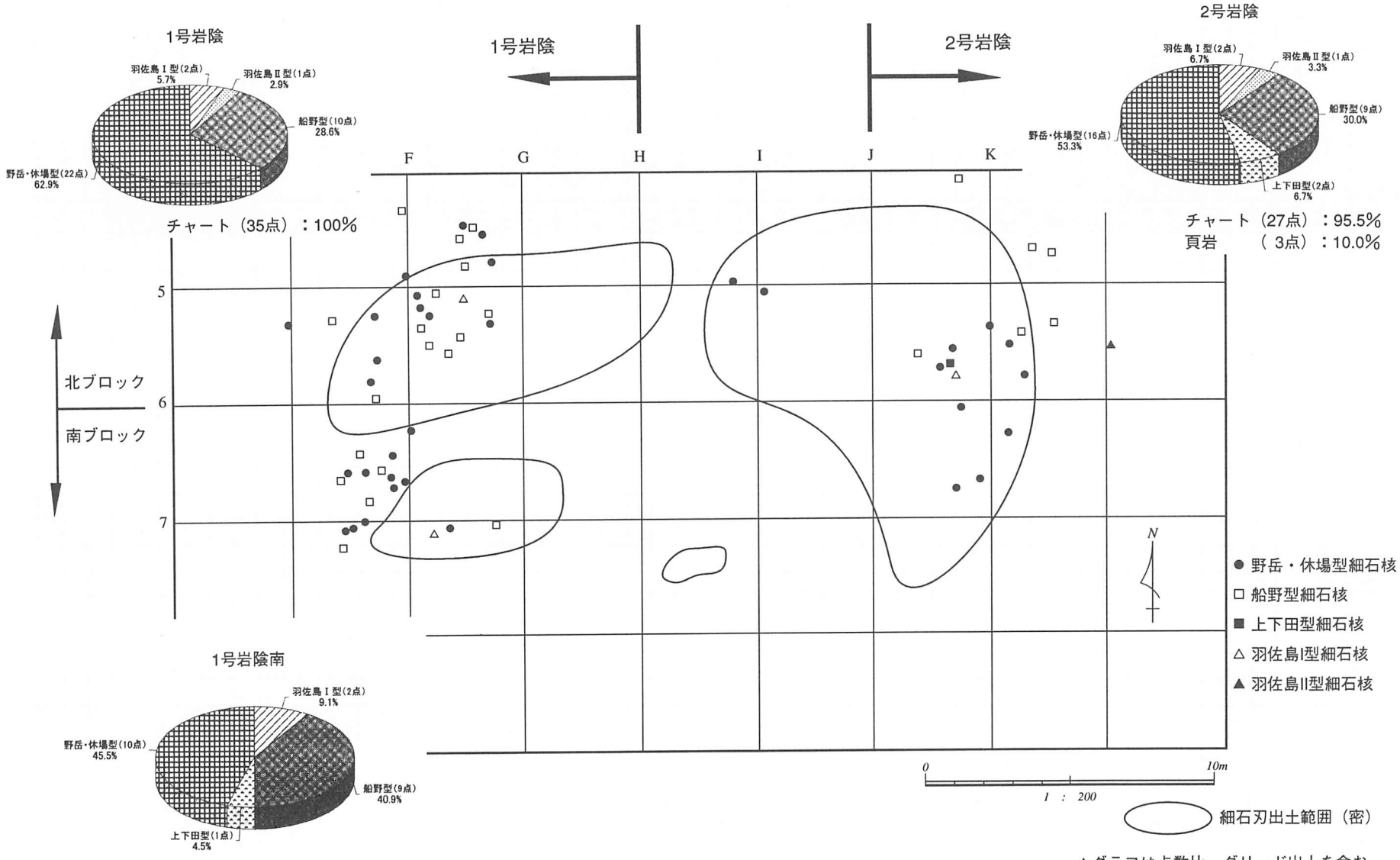


ハリ質安山岩（20点）：87.0%
サヌカイト　（ 3点）：13.3%

△ 羽佐島I型細石核
▲ 羽佐島II型細石核
★ 羽佐島III型細石核
■ 船野型細石核
● 野岳・休場型細石核

＊グラフは点数比。

第23図　大浦遺跡の細石核組成



第24図　奥谷南遺跡の細石刃・細石核分布

＊グラフは点数比。グリッド出土を含む。

表1　四国・瀬戸内地域の細石刃文化遺跡一覧表

NO.	遺跡名	組成 細石刃	細石核	細石核原形	削器	掻器	彫器	打製石斧	局部磨製石斧	礫器	磨石	敲石	ナイフ形石器	尖頭器	削片	土器	総計	石器集中	遺構	発掘	標高	地域	年代	文献	備考
1	地竹ノ子島（第1地点）	2															2				10	備讃瀬戸		白石　純・小野　伸・小野　勢1997	
2	沖竹ノ子島（第1地点）	1															1				17	備讃瀬戸		白石　純・小野　伸・小野　勢1997	
3	大入崎		○														0				－	備讃瀬戸		安川豊史1987	
4	井島	12	3														15			有	25	備讃瀬戸		鎌木義昌1957	
5	出崎	2	2														4				5	備讃瀬戸		鎌木義昌・高橋　護1965　間壁忠彦1970小野　伸・白石　純1995	
6	矢出山		2														2				－	備讃瀬戸		間壁忠彦1970	
7	王子岳東方	○															0				180	備讃瀬戸		安川豊史1987	
8	王子が岳南麓			1?													0			有	15	備讃瀬戸		藤原好二ほか1995	
9	曽原西		1														1				50	備讃瀬戸		藤原好二1992	
10	清陵高校裏山（仮）		○														0				－	備讃瀬戸		安川豊史1987	
11	富田小学校西道口川底	1															1				－	備讃瀬戸		福本　明1997	
12	岸本	1															1				－	備讃瀬戸		福本　明1997	
13	上水島	5	1														6			有	－	備讃瀬戸		光石鳴巳1993	
14	鷲羽山（鎌木調査区）	8	7														15			有	80	備讃瀬戸		鎌木義昌1956	
	鷲羽山（山本資料）	20	12														32				80	備讃瀬戸		山本慶一1969	
15	堅場島（第二試掘区）	1	1														2			有	45	備讃瀬戸		鎌木義昌・小林博昭1986	
16	釜島		2														2				20	備讃瀬戸		安川豊史1987藤原好二2002	
17	羽佐島	252	112	13										○?	17		394	2?		有	25	備讃瀬戸		秋山　忠・真鍋昌宏・渡部明夫1984 大山真充・藤好史郎・小西正行1984	
18	櫃石島（間壁資料）	14	11														25				70	備讃瀬戸		間壁葭子1968	
19	花見山	524	242	60										○?			826	1?		有	67	備讃瀬戸		西村尋文・藤好史郎1989	
20	大浦	315	45	6													366	2?		有	25	備讃瀬戸		秋山　忠・藤好史郎・真鍋昌宏1984	
21	ヤケヤマ	2															2			有	30	備讃瀬戸		秋山　忠・真鍋昌宏・渡部明夫1984 大山真充・藤好史郎・小西正行1984	
22	長崎通り	13	13	5													31			有	27	備讃瀬戸		林茂・藤好史郎1983	
23	黒岩初田	1	7	1													9			有	25	備讃瀬戸		林茂・藤好史郎1983	
24	岩黒北丘陵		○														0				25	備讃瀬戸		秋山　忠・真鍋昌宏・渡部明夫1984 大山真充・藤好史郎・小西正行1984	
25	与島東方	51															51			有	70	備讃瀬戸		高橋邦彦1961松本豊胤1973	
26	与島西方（高橋調査区）	28															28			有	70	備讃瀬戸		高橋邦彦1961	
	西方（香川県調査区）	28	15	1													44			有	71	備讃瀬戸		大山真充・藤好史郎1985	
27	沙弥	○															0				19	備讃瀬戸		秋山　忠・真鍋昌宏・渡部明夫1984	
28	タンベ池	○															0				－	備讃瀬戸		秋山　忠・真鍋昌宏・渡部明夫1984	
29	兎子山		○														0				－	備讃瀬戸		秋山　忠・真鍋昌宏・渡部明夫1984 大山真充・藤好史郎・小西正行1984「羽佐島遺跡（Ⅱ）」	
30	佐城（Ⅱ）		1														1			有	117	吉野川流域		氏家敏之・金森映人・貞野保仁ほか2001	
31	平坂Ⅱ		1														1			有	115	芸予諸島周辺		作田一耕1991	
32	金ヶ崎		7														7				40	芸予諸島周辺		十亀幸雄1991	
33	道上		1														1				－	芸予諸島周辺		藤野次史1997	
34	情島		1														1				88	芸予諸島周辺		敦賀啓一郎2001	
35	平松		1														1			有	15	伊予灘周辺		小林一郎1993	
36	唐崎		1														1				20	伊予灘周辺		沖野新一1998	
37	奥谷南Ⅴ区	280	108	40	○?							○?		○?			428	2?		有	25	高知平野		松村信博・山本純代2001	
38	高間ヶ原		1														1			有	50	高知平野		片岡鷹介1968	
39	平野茶園		1	1													2				40	西南四国		木村剛朗1995	
40	双海中駄場		1	2													3				20	西南四国		木村剛朗氏のご教示による	
41	広井駄場		1														1				55	西南四国		山口将仁1990	
42	ナシヶ森（A地点）																0				80	西南四国		門脇　陸・岡村幹彦・坂本由美子・前田光雄2001	
	ナシヶ森（第2地点）		1														1				70	西南四国		木村剛朗氏のご教示による	
43	池ノ岡（A地点）		1		3?				1?					1?			1				300	西南四国		多田　仁1995	
44	広見		1														1				90	西南四国		木村剛朗氏のご教示による	
45	深泥			1					1?								1				10	西南四国		多田　仁1995	

九州北部地域の細石刃文化

杉原　敏之

1．研究の経過

九州北部地域における細石刃文化研究は、1960年の福井洞穴の調査によって始まった（芹沢・鎌木1965）。Ⅲ層における細石刃石器群と隆起線文土器の共伴は、縄文文化起源の問題に大きな影響を与えた。さらに1970年以降、10次に亘る長崎県泉福寺洞穴調査では、豆粒文を始め、隆起線文、爪形文、押引文等の土器群と細石刃石器群が層位的に確認され、九州の草創期土器編年の大枠が確立された（麻生1984ほか）。

土層発達の少ない本地域では、層位的調査事例に乏しく石器組成や細石刃核の型式理解によって編年研究は進められてきた。1965年に麻生優が提示した、半円錐（福井Ⅳ層・宇久島）→円錐（野岳）→半船底状（唐津周辺）→船底状（佐世保周辺）という、細石刃核の変遷案は70年代を通して本地域の研究に影響を与え続けた（麻生1965）。また、1963年の佐賀県原遺跡や1970年の福岡県野黒坂遺跡や峠山遺跡の調査によるナイフ形石器群と細石刃石器群の「共伴」は、九州細石刃文化の系統・編年観の基底となった（杉原・戸沢1971、橘1979、1985）。その後、1970～80年代にかけて、本地域を始めとした九州地域の細石刃文化研究が行われた（鈴木1971、木下1976、安蒜1979、橘1979、木崎1981、小畑1983ほか）。この1990年代初頭までの本地域における細石刃核の型式理解や細石刃石器群の編年観の問題については、綿貫俊一によって研究史的に総括されている（綿貫1993）。

大分県市ノ久保遺跡の調査成果に基づく、綿貫俊一の「長者久保・神子柴文化」並行段階の設定は、九州の細石刃文化研究に新しい方向性を提示した（綿貫1992）。これは、横田義章の「神子柴型」石斧の研究（横田1981）によって問題提起されてきた九州の「神子柴文化」の問題を再度研究の俎上に挙げ、細石刃文化編年研究にも再考を促すこととなった。栗島義明も神子柴文化研究を深化させ、九州の細石刃文化にその文化要素を見出そうとした（栗島1991）。両者の研究以後、福井洞穴Ⅳ層石器群など神子柴文化の影響として理解されてきた。この「神子柴文化」の問題に関して、岡本東三は九州細石刃文化編年研究の問題未解決の先行評価と指摘する（岡本1997ほか）。筆者も細石刃核、槍先形尖頭器、石斧など個別要素の検討を行い地域性や型式理解の問題について指摘してきた（杉原2000・2003）。川道寛も分布や組成、個別形態の問題を指摘している（川道1998・2002）

1990年代以降、本地域における細石刃文化研究を大きく進展させることとなったのは、1997年に行われた茶園遺跡の調査である（川道1998）。Ⅴ層細石刃石器群は野岳型、「茶園」・「位牌塔型」を主体とし、Ⅳ層は、楔形細石刃核・西海技法関連資料で構成される。これは西北九州の開地遺跡において、系譜の異なる両石器群が層位的に検出された事例である。さらに、Ⅳ層細石刃石器群には、槍先形尖頭器、石斧が組成しており、西北九州における「神子柴文化」も改めて問題となった。また、同年開催された九州旧石器文化研究会による『九州の細石器文化』では、野岳型、船野型の型式理解や細石刃石器群の編年観の再整理が行われた（九州旧石器文化研究会編1997）。この中で、本地域における初期細石刃石器群に野岳型を主体とする細石刃核が位置づけられることで、ほぼ共通認識となった。現在、細石刃石器群の編年研究も再整理されつつある。萩原博文は、このような近年の研究動向を踏まえて九州縄文草創期の細石刃石器群の編年を提示した（萩原2001）。

本地域における細石刃剥離技術の研究は、麻生優の西海技法の設定に始まる（麻生1965）。その後、橋本勝雄による福井洞穴資料の検討や織笠昭による西海技法の研究がある（橋本1981、織笠1991）。また、楔形細石刃核を詳細に検討した小畑弘己の研究も含まれよう（小畑1989）。さらに近年では、細石刃核の残核形態からではなく細石刃核の接合や細石刃の頭部調整の検討による技術組織理解を提唱する小畑の研究がある（小畑2002）。これは、編年や文化系統論が主流であった九州地域の細石刃文化研究では見られなかった研究方法である。

2．遺跡分布

九州北部の細石刃文化は、西北九州の五島列島、北松浦～東松浦半島、福岡平野、筑後川流域、阿蘇外輪から八代海沿岸部付近までが含まれる。以下のように10地域に設定される。これらの遺跡群は、大きくは西北九州産黒耀石石材圏に包括され、各時期を通して細石刃核型式に共通性を見出せる。

〔北松浦半島～五島列島〕

佐世保～平戸周辺部、五島列島地域に細分される。佐世保周辺地域では、溶岩台地を基層とする丘陵・台地上や浸蝕された開析谷付近の斜面に立地する。さらに、砂岩壁の浸蝕や風化によって形成された洞穴利用の遺跡がある。代表例として相浦川流域の泉福寺洞穴（標高90m）や、福井川流域のサヌカイト原産地の福井洞穴（標高100m）がある。同地域では、星鹿半島、針尾島など周辺の黒耀石原産地も遺跡形成に影響を与えているとみられる。五島列島は、最終氷期最寒冷期には、佐世保・平戸地域から南に延びた半島の一部であったが、11,000年前頃の海水面の上昇により島嶼化した。そのため、細石刃文化期の中で石材供給システムなどに変化が生じたと考えられる。遺跡は、開析谷された小さな谷を持つ溶岩台地上縁辺の尾根部から緩斜面上に立地する。茶園遺跡（標高10m）、城ヶ岳平子遺跡（76m）がある。

〔東彼杵・島原半島〕

多良岳西麓の台地・丘陵を始めとする大村湾周辺、雲仙岳周辺の台地上に分かれる。前者では、野岳型の標式遺跡である野岳遺跡が標高280～300mの山麓台地緩斜面に立地している。百花台遺跡は、雲仙岳北麓の火山性扇状地の標高200～300mの台地上に立地している。このほか、長崎半島周辺部で僅かに確認される遺跡も大きくは、この地域に含まれる。

〔東松浦半島〕

主に、東松浦半島の上場台地から伊万里湾周辺部を中心とする。標高200m前後の上場台地は、平原状の丘陵で小河川によって開析されている。遺跡は、上場台地内の丘陵平坦部や緩斜面に立地している。いわゆる「半船底型」の楔形細石刃核を主体とする石ヶ元下道遺跡は、開析谷奥の低丘陵上に立地する。なお、多久盆地周辺の楔形細石刃核を主体とする遺跡群は唐津・伊万里周辺の地峡帯ルートを介しての影響と考えられる。

〔福岡平野・周辺部〕

福岡平野と東の糟屋平野、西の早良平野が含まれる。福岡平野では、那珂川・御笠川中流域の標高13m前後の尾根状を成した丘陵上や上流に近く開析谷を持つ標高30mの台地上に立地している。前者には井尻B遺跡、日佐遺跡が、後者には門田遺跡がある。糟屋平野では、多々良川中流域の標高10～30mの段丘上や丘陵に立地している。戸原遺跡、乙植木山城戸遺跡などがある。早良平野では、室見川中流域の標高30m付近の段丘、扇状地などに立地しており、吉武高木遺跡などがある。さらに西方の糸島半島付近には、大原D遺跡、元岡遺跡群がある。福岡・筑紫平野間の二日市地峡帯の丘陵上には、野黒坂遺跡、峠山遺跡がある。

〔筑後川流域〕

上流、中・下流域に分かれる。上流域は、大分県日田盆地、天瀬町五馬台地周辺が該当する。五馬台地は、上流（玖珠川）南の標高300mを越える東西に長い台地で、周囲は山塊と浸蝕の大きい谷部である。大坪遺跡、平草遺跡などがあり、主に西北九州の腰岳産黒耀石を使用した野岳型細石刃核主体の石器群が検出されている。近年では、標高800mを越える同台地上南方の亀石山遺跡で多量の細石刃が出土している。中・下流域は、福岡地域の筑紫・佐賀平野が含まれる。北の三郡山地より派生する丘陵や河岸段丘、耳納山西麓の丘陵上に遺跡群は立地している。春園遺跡、金山遺跡などがある。金山遺跡は、独立した城山（標高130.6m）西の河川に近接した標高30mの丘陵先端部に立地する。在地産頁岩を主体とした細石刃石器群である。

〔周防灘沿岸〕

京都・豊前平野、平尾台周辺を中心とする。遺跡数は少なく詳細不明だが、瀬戸内地域との関係が想定される。

〔菊池川流域〕

上流域を中心とする。沖積地に近接した台地・丘陵の端部付近に遺跡群は立地している。松崎・小野崎遺跡は、菊池川と合志川の合流部付近の台地突端部に立地している。頁岩を主体とした細石刃核が50点以上出土しており、

拠点的な性格を持つ。伊野A・B 遺跡は上流域の阿蘇北外輪西側の高原緩斜面上に立地し、西北九州の黒耀石使用の野岳型細石刃核が採集されている。遺跡立地から阿蘇外輪周辺遺跡群との関係が考えられる。

〔阿蘇外輪周辺〕

阿蘇外輪西～南麓の標高400～600m前後を中心とする尾根上に遺跡は立地している。西麓には河原遺跡群、南麓の緑川上流には大矢野原遺跡群がある。河原第3遺跡は、尾根上から延びる傾斜面が緩やかな平坦地となる谷際付近に立地する。主に腰岳産黒耀石を使用した野岳型細石刃核と多量の細石刃から成る細石刃石器群が検出されている。

〔熊本平野〕

白川・緑川下流の熊本平野部を中心とする。遺跡群は、河川流域の標高50m前後の丘陵上に立地する。上流の阿蘇外輪周辺遺跡群との関係が想定される。

〔八代海沿岸〕

宇土半島南、八代海沿岸を中心とする。遺跡群は、丘陵上に立地しているが数は少なく詳細は不明である。宇土半島北部、天草諸島は島原半島遺跡群との関係も想定される。

3．細石刃石器群の検討

（1）細石刃核と剥離技術

「細石刃技法」検討の前提として必要な接合資料は、同地域では数える程度である。そのため、残核形態からの検討となり、細石刃剥離技術の断片的理解に留まっている可能性もある。ここでは、九州北部で確認されている野岳型、船野型、西海技法・楔形細石刃核を中心に検討する。

① 野岳型

長崎県野岳遺跡と静岡県休場遺跡資料を併せて、鈴木忠司により「野岳・休場型」として提唱された（鈴木1971）。野岳遺跡資料に幾つかのバラエティーが存在することは既に指摘されていたが、その後漠然と型式理解されたため、時間的位置づけも流動的なものとなり編年研究に混乱を招いた（川道2002ａ）。

川道寛は、長崎県茶園遺跡Ⅴ層出土の細石刃石核を大きく2型式に分類している（川道1998、2002ｂ）。Ⅰ類は扁平「細石核」、Ⅱ類は稜柱状の「野岳・休場型」である。Ⅰａ類は背面に自然面を持ちブランク段階で確保された急傾斜打面を持つ「茶園型」、Ⅰｂ類は傾斜打面を持ち側面から背面調整が行われる「位牌塔型」である。Ⅱ類は作業面幅と打面の長さ等しい点がⅠ類との分類基準となる。茶園遺跡ではこれらの各型式が共伴し、時間的前後関係を見出し難い。同様の事例は、福岡県野黒坂遺跡、大分県亀石山遺跡、熊本県河原第3遺跡などでも認められる。河原第3遺跡では、茶園遺跡にみられる扁平な細石刃核のほかに残核形態が稜柱状となるものがある。打面再生により傾斜打面を確保しながら作業面を展開し、石材を有効に活用して細石刃剥離を行ったことが分かる。このことは、野岳型を単純に型式理解することの困難さを示している。ここでは、野岳型、「茶園型」、「位牌塔型」を含む一群を初期細石刃石器群の指標として、「茶園型細石刃剥離技術」と理解しておきたい。

② 船野型

宮崎県船野遺跡を指標とする船野型細石刃核は、ナイフ形石器や角錐状石器との「共伴」により九州島の初期細石刃石器群の一つとして位置づけられてきた。（橘1979ほか）。近年では、栗島義明、綿貫俊一によって「神子柴文化」並行段階の細石刃石器群として、時期的、形態的に等質なものとして理解されている（栗島1991、綿貫1992ほか）。この問題に対し筆者は、九州島内では、福井Ⅳ層、市ノ久保、船野第2地点タイプの3つに形態分類され、出現・展開に地域性が存在することを指摘した（杉原2000ほか）。

西北九州に分布する福井Ⅳ層タイプの船野型は、福岡平野の有田遺跡178地点や諸田仮塚遺跡（ブランクのみ）、東松浦半島の上場台地竹木場前田遺跡、北松浦半島の福井洞穴、長崎半島の重篭意遺跡などで出土している。いずれも残核形態であり接合資料はない。ブランクの主要剥離面や打面部付近に残る剥離面などから厚手の分割素材であることが分かる。石核調整は打面側より行われ一部下縁調整が行われる。素材面を打面とし調整はないが擦痕を持つものがある。

③ 西海技法・楔形細石刃核

北松浦半島地域を中心に、九州北部から南部地域に分布している。福井洞穴や北・東松浦半島地域の楔形細石刃核資料から、麻生優によって“西海技法”が設定された（麻生 1965）。福井洞穴や泉福寺洞穴の調査成果により、土器出現後に盛行する細石刃核と理解されている。

西海技法は、素材形状に応じて石核調整や削片剥離、打面形成を柔軟に変化させる細石刃剥離技術である（織笠 1991）。両面体あるいは素材を活かしたブランクの短軸から側方調整を行い、小口より細石刃剥離を行う。また、製作途上の剥片類が削器などにも転用される。福井洞穴資料を分析した橋本勝雄によれば、打面形成は長軸方向からの削片剥離だけでなく、短軸からの側方剥離後に長軸方向への削片剥離を行うものもあり多様性があるという（橋本 1983）。泉福寺洞穴では、各文化層より楔形細石刃核・西海技法関連資料が出土している。10 層では石核両端に作業面を持つ 10 層類型が、8ｃ層では面調整された稜柱状のブランク小口より長い細石刃剥離が行われる 8 層類型がある。上層の 6・5 層では、細石刃核打面は再び長軸傾向となり、削片も縦形のものが多くなる（萩原 2001）。ブランク形成における平面短冊形化の結果であろう。このような泉福寺洞穴における多様性は、腰岳、針尾島など黒曜石原産地周辺での豊富な素材利用の結果として理解される。周縁となる福岡地域の門田遺跡では、側方打面調整による「半船底形」が多い。これは小畑が指摘するように石材有効利用の結果とみられる。

楔形細石刃核を残核形態から整理すると、「船底形」・「半船底形」に分かれる。さらに、削片剥離の有無による打面形成から二分される。ただし「半船底形」のうち、丁寧にブランク形成され作業面側よりラグビーボールを半裁したような削片を剥離する、いわゆる「キールド・コア」については、上場台地の石ヶ元下道遺跡、東山Ⅰ遺跡などで形態的にもまとまって出土しており注意を要する。

④ その他

福岡平野周辺部の早良平野の吉武高木遺跡では、個体別資料は 20 に分けられている（黒曜石 14、サヌカイト 6、うち 29 点が細石刃核）（小畑 2002）。細石刃剥離技術は、大きく３つに分けられている。それらは、剥片素材で主要剥離面を側面とし、石核調整もほとんどなく主要剥離面側から数回の側方剥離や作業面からの 1 回の加撃による打面形成ののち細石刃剥離を行うもの（Ⅰａ類）や、薄手の剥片を使用したもの（Ⅰｂ類）。さらに、剥片・分割礫を素材として各柱状の石核整形を行い、打面を 1 方向ないし他方向からの剥離で形成し細石刃剥離を行い、時には作業面が 2 面以上になるもの（Ⅱ類）である。これらは、型式を越えて同一の個体別資料となるものがある。小畑は時期差を否定し、「吉武型細石刃剥離技術」を提唱している（小畑 2002）。

福井洞穴Ⅳ層では、船野型以外に剥片素材細石刃核が一定量出土している。かつて、綿貫俊一によって「岩土原型」と認識されたものである（綿貫 1992）。基本的には分割礫をそのままブランクとして、素材端部より加撃し打面形成をおこなう。打面調整は、基本的に作業面あるいは側方からの一撃の剥離によるもので頻繁でない。類例として福岡平野の峠山遺跡がある。

このほか福岡平野では、井尻Ｂ遺跡、隈西小田遺跡などで分割素材に石核調整を加えた細石刃核が出土している。特徴として、剥片素材細石刃核と同じく作業面側からの簡単な打面調整を行っている。

（２）使用石材

九州北部における細石刃石器群は、西北九州の黒曜石石材圏に包括される。ナイフ形石器文化期の段階で開発された伊万里の腰岳、星鹿半島の牟田、針尾島や淀姫など北・東松浦地域の黒曜石原産地を背景とする。

茶園遺跡Ⅴ層では、全ての細石刃石器群資料が黒曜石石材を使用している。淀姫針尾系、牟田系黒曜石とされ依存率は 97％以上である。同様の淀姫針尾系を第１石材とする傾向はⅣ層石器群段階も同じである。福岡平野の野黒坂遺跡、筑後川上流域五馬台地の大坪遺跡、阿蘇外輪の河原第 3 遺跡では、腰岳系黒曜石が使用されており、この野岳型細石刃核が含まれる段階では、西北九州産黒耀石の使用傾向は変らない（綿貫他 1989）。西北九州の福井Ⅳ層タイプの船野型は、いずれも腰岳・牟田、針尾島系の黒曜石が使用されている。ただし、五馬台地上でみられる福井Ⅳ層タイプと異なる船野型については流紋岩が使用される。楔形細石刃核を主体とする泉福寺洞穴では、淀姫・針尾島産黒曜石が第１石材として使用されている。福岡平野の門田遺跡では、腰岳系、淀姫針尾島

系が認められる。主に黒曜石が使用されているが、特定原産地石材と細石刃核型式の相関性は見出し難い。

吉武高木遺跡では、使用石材は大きく黒曜石とサヌカイトに分かれる。細石刃石器群に黒曜石が、スクレイパーなどの加工具にサヌカイトが使用されている。ただし、1 点サヌカイト製の細石刃核がある。黒曜石は、青灰色の淀姫針尾系、腰岳系などが中心となる。また、サヌカイトは、佐賀県小城周辺とみられる。

筑後川流域の金山遺跡では、頁岩、黒曜石が使用されている。黒曜石には、腰岳・牟田、淀姫・針尾、古里のほか、阿蘇火砕流堆積物に含まれるものなどがある。頁岩製の細石刃核 8 点は、いずれも剥片を素材としている。作業面あるいは側方からの調整により打面形成を行っている。黒曜石製 11 点については、打面再生を行い小型化したもの、分割礫に打面調製を行うサイコロ状、楔形などがある。西北九州産黒耀石使用の細石刃・細石刃核はいずれも小型である。これに対し、在地産頁岩使用の細石刃核は大型で細石刃剥離の全工程が含まれる。これは、西北九州産黒曜石枯渇による補完のための在地産石材使用による細石刃剥離技術の多様化と理解される。同様の事例として、菊池川流域の松島・小野崎遺跡がある。

（3）組成

茶園遺跡Ⅴ層細石刃石器群には、細石刃、細石刃核、打面再生剥片をはじめ、掻器、削器、彫器、ドリル、二次加工剥片、楔形石器、礫器などがある。掻器は、厚手幅広不定形剥片の側縁や端部に刃部加工されている。礫器は玄武岩製である。この野岳型や「茶園型」の細石刃石器群の石器組成は不明な点が多いが、本例をもって概期石器群の基本的な組成と見ることができよう。上層の茶園遺跡Ⅳ層は、楔形細石刃核出現以後で爪形文土器段階に比定される。細石刃、細石刃核、ブランク、スポールのほか、槍先形尖頭器、石鏃、石斧、掻器、削器、ドリル、楔形石器、二次加工剥片、礫器が出土している。槍先形尖頭器は、淀姫針尾系黒曜石のほか、福井洞穴周辺や多久地域のサヌカイト製であり製品で搬入されている。掻・削器の素材には縦長剥片が使用されている。

福井洞穴Ⅳ層では、細石刃、細石刃核、ブランクのほかに、槍先形尖頭器、円形刃部掻器が出土している。細石刃石器群は黒曜石石材を、槍先形尖頭器群は遺跡周辺のサヌカイト石材をそれぞれ使用している。どちらも製作の痕跡がある。円形刃部掻器は、厚手の横長剥片を素材としたサヌカイト製である。上層の 3・2 層では、細石刃石器群と共に石鏃、掻・削器が出土している。

泉福寺洞穴の 10 層豆粒文土器文化層、9～7 層の隆起線文土器文化層では、細石刃、細石刃核、削片、ブランクに石斧、削器、掻器、彫器、敲石、磨石、礫器が出土している。6・5 層では、これらに槍先形尖頭器が加わる。5 層押引文文化層出土例を「有茎尖頭器」と見る意見もあるが、西北九州における尖頭器群の変遷の中で筆者は小型槍先形尖頭器とみる。なお、石鏃については、5 層押引文化層段階で確実に組成するが、最近の事例からみれば下位の隆起線文土器文化層で出現する可能性もある。

吉武高木遺跡の黒曜石製細石刃石器群には、細石刃、細石刃核、削片、削器、石核などがある。サヌカイト製石器群では、個体別資料 18・20 に見られるような比較的整った縦長剥片素材の削器がある。基本的に石材によって器種の作り分けが行われている。

以上確認してきたが、野岳型、「茶園型」を主体とする茶園Ⅴ層石器群を概期石器組成の代表とみるが、その他の遺跡では不定形剥片素材のスクレイパーが伴う程度で組成は比較的単純である。この差違については、遺跡の立地、機能差なども考えられよう。さらに楔形細石刃核以後、土器出現段階で器種は豊富となる。また大きな画期として、泉福寺洞穴 6 層・爪形文土器文化層段階における槍先形尖頭器の組成が挙げられる。茶園遺跡Ⅳ層石器群では、槍先形尖頭器の他に石斧、石鏃も組成している。ただし、この段階までに、九州南部では独自の形態を持つ石斧が出現している。槍先形尖頭器についても、北松浦地域の福井洞穴Ⅳ層では楔形細石刃核以前に出現している。これらの出現背景については、「神子柴文化」の問題を含めた検討が必要である。

4．九州北部地域における細石刃文化の様相

（1） 細石刃石器群の編年

長崎県茶園遺跡Ⅴ層細石刃石器群は、野岳型、「茶園型」・「位牌塔型」細石刃核を主体とする。幅広の作業面と

傾斜打面を有する点において共通し他型式を含むことはない。層位的にも楔形細石刃核以前である。本地域の初期細石刃文化に位置づけられよう。土層堆積の発達しない九州北部地域でも単純遺跡は確認できる。東松浦半島の菅牟田黒龍遺跡、東彼杵半島の野岳遺跡、福岡平野の野黒坂遺跡、筑後川流域の大坪遺跡、亀石山遺跡、春園遺跡、阿蘇外輪周辺の河原第3遺跡などが挙げられる。このほか、沿岸部を中心に鹿児島地域まで分布が認められる（宮田1996、桑畑1997ほか）。

次に、福井洞穴Ⅳ層資料が位置づけられる。層位的にも楔形細石刃核出現以前である。船野型細石刃核、剥片素材細石刃核を主体とする。この福井Ⅳ層類似の船野型は、黒曜石石材圏の西北九州を中心に分布する。ただし、福井洞穴Ⅳ層以外は、いずれも遺跡規模は小さく、極めて散発的である。九州北部地域において普遍性を持つのかも不明である。剥片素材の細石刃核技術も一定量認められる。この作業面側からの簡単な打面調整をもつ分割礫素材の細石刃核は、福岡平野まで認められる。また、打面調整に着目すれば、井尻B遺跡や隈西小田遺跡例も含まれる。

次に楔形細石刃核の段階が位置づけられる。現段階では、土器出現以降の細石刃石器群として理解できる。層位的出土例として、福井洞穴、泉福寺洞穴が挙げられる。福井洞穴では、3層は隆起線文土器段階に、2層は爪形文土器段階にそれぞれ位置づけられるが、細石刃石器群の技術的差違は見出せない。泉福寺洞穴では、11層から5層まで細石刃石器群が出土している。10層・豆粒文土器、9～7層・隆起線文土器、6層・爪形文土器、5層・押引文土器段階となる。10層類型、8層類型など各文化層における西海技法を主体とする細石刃石器群の層位的傾向は指摘できるが、個別細石刃核からの明確な線引きは困難である。これは、周辺の門田遺跡、戸原遺跡、城ヶ岳平子遺跡など黒曜石を主要石材とする開地遺跡でも同様である。時期決定の要素として、土器の他に、石器組成、石材組成などが挙げられる。ここでは、土器を中心に四段階に細分するが、特に、槍先形尖頭器、石斧が細石刃石器群に組成する爪形文土器段階を大きな画期とする。なお、5層・押引文段階資料も島原地域の小ヶ倉A遺跡で認められる（辻田 2002）。また、北松浦地域の平戸市田崎遺跡では、条痕文土器段階と形態が類似する石鏃石器群と細石刃石器群が共伴しており最終末期的様相と考えられている。

ところで、「唐津タイプ」とされる半船底形の石ヶ元道下遺跡に見られる半円錐形については明確な位置づけがなされていない。ただ、技術的規則性などをもって漠然と古段階に位置づけられている（岡本2002ほか）。近年、大原D遺跡出土細石刃核を検討した吉留秀敏は、船底、半船底形の共伴や泉福寺6・5層段階における打面形成や長軸削片優勢の傾向から門田遺跡以後に位置づけた（吉留 2003）。筆者もこの点について、明確な答えを持ち合わせていないが、門田遺跡に一定量含まれることから爪形文土器段階前後を考えている。

吉武高木遺跡細石刃石器群の多様な石材利用は、東松浦地域、福岡平野をはじめとする黒曜石石材圏では、「異質」である。石核調整が簡略された楔形細石刃核出現以後時間の経過した時期の所産と考えられる。また、サヌカイトが一定量含まれる石材利用は縄文早期の様相に近い。以上のことから福岡平野周辺部における細石刃文化終末期段階の石器群と考えられる。在地石材使用しながら黒曜石製細石刃核などに規範性が見られる金山遺跡、松島・小野崎遺跡などは、この段階以前に考えられる。ところで、福岡平野周辺の大原D遺跡では、包含層であるものの、細石刃核と石鏃が出土し、AMS法により11,270±60BP（Beta-150225）、11,190±40BP（Beta-151737）の数値が得られている。本地域の細石刃文化終末期の年代はこのあたりに比定されよう。

ここでは、茶園遺跡Ⅴ層細石刃石器群段階をⅠ期前半、楔形細石刃核以前の船野型、剥片素材細石刃核の段階をⅠ期後半とする。さらに楔形細石刃核、土器出現期以降をⅡ期四段階に細分する。大きく6段階の編年を提示する（表1）。

（2）細石刃文化の様相

九州北部地域における初期細石刃石器群は、茶園遺跡Ⅴ層石器群に代表される。西北九州を中心に分布が認められる。この時期は、茶園遺跡などのデータによれば、ほぼ15,000年前頃にあたる（15,450±190Beta-107730）。これら初期細石刃石器群は、九州北部地域では、茶園型細石刃剥離技術をはじめとする細石刃核型式や西北九州産黒曜石の使用、組成などに共通する特徴が挙げられ、大きな時間差を見出し難い。このことは、初期細石刃石

表1　九州北部地域の細石刃石器群の編年

	型式	東彼杵・島原半島	北松浦半島・五島	東松浦半島	福岡平野・周辺部	筑後川流域	菊池川流域	阿蘇外輪	熊本平野
	無文・条痕		泉福寺4層		大原D(Ⅲ層)				
Ⅱd	押引文	小ヶ倉A	泉福寺5層　田崎		吉武				
Ⅱc	爪形文	百花台B-D	泉福寺6層　福井Ⅱ　茶園Ⅳ　石ヶ元道下　東山Ⅰ		門田　乙植木　戸原	金山	松島・小野崎　河陽F		谷尾崎
Ⅱb	隆起線文 豆粒文	百花台Ⅱ	泉福寺9～7層　福井Ⅲ 泉福寺10層 泉福寺10c層	広田	大宰府条坊				
Ⅱa	+		泉福寺11層						
Ⅰb		重篦	福井Ⅳ	竹木場前田 川原田	有田　峠山 井尻B	大草平		伊野A	
Ⅰa		野岳　鷹野	茶園Ⅴ	菅牟田黒龍	野黒坂	春園　大坪		河原3	

器群は渡来・波及後、在地化・変容することなく、ごく短期間のうちに拡散したと考えられる。また、本地域分布の周縁となる筑後川上流域や阿蘇外輪周辺部では、遺跡内に残された細石刃核の絶対量を越える細石刃が出土する。狩猟活動における細石刃機能の利便性の結果と理解される。これも初期細石刃石器群の一過的拡散の様相と見てとれよう。

楔形細石刃核を主体とする細石刃石器群は、完成された石核調整や削片剥離技術を備えて九州北部地域を中心に出現する。これらの細石刃石器群も九州島内では、野岳型と同様の分布状況を持っている。現時点で、九州島における両石器群の内在的発展・形態進化は認め難い。少なくとも2度、細石刃文化の大きな波及があったと理解される。この西海技法で代表される楔形細石刃核技術は、福井・泉福寺洞穴の調査成果によれば、比較的長期に亘って存続し、細石刃剥離技術にも多様性がある。これまでも指摘されてきたように、この細石刃剥離技術は、淀姫・針尾、牟田、腰岳などの黒曜石原産地を背景とするものであろう。黒曜石原産地周辺となる福岡平野の門田遺跡では、ブランク調整を行う半船底形に分割礫素材の「簡略化された楔形細石刃核」が共存する。さらに東の糟屋平野の戸原遺跡などでは、報告された細石刃核46点のうち60%以上に礫面を残すものがある。また、ブランク調整が簡略化された分割礫素材のままの「野岳型」型も存在する。五島列島の城ヶ岳平子遺跡でも同様の傾向が認められる。筑後川中・下流域の金山遺跡では、西北九州産黒曜石の不足を在地産頁岩で補完している。このように周辺部に向かうにつれて細石刃核が小形化、簡略化していることが分かる。このような変異は、黒曜石石材圏に包括される本地域の楔形細石刃核剥離技術が拡散後、短期間に終焉したのではなく比較的長期に亘り存続したことの結果と考えられる。

楔形細石刃核が出現する時期、遺跡立地や規模にも大きな変化が見られる（杉原2001）。前段階の野岳型、「茶園」型に代表される初期細石刃石器群は、開地遺跡では基本的にナイフ形石器群の在り方を踏襲し、遺跡立地・規模も大差はない。五島列島の茶園遺跡Ⅴ層、福岡平野の野黒坂遺跡、上場台地の菅牟田黒龍遺跡などがある。本格的な洞穴利用は、福井洞穴Ⅳ層段階に始まる。福井・泉福寺洞穴では、長期に亘る洞穴利用と、多量の石器製作の痕跡が残されている。大規模な石器製作痕跡として見た場合、開地遺跡の福岡平野部の門田遺跡や戸原遺跡、筑後川流域の金山遺跡、菊池川流域の松島・小野崎遺跡なども共通する。吉留秀敏は、このような石器群集中規模の拡大を継続、断続を含めた居住地利用の長期化やそれに伴う空間利用規制の結果によるものと理解した（吉留2003）。さらに洞穴利用については、寒冷・雨水対策などによる安定した覆屋を考えている。また、本地域における細石刃文化期の遺構としては、茶園遺跡Ⅴ層、鷹野遺跡、城ヶ岳平子遺跡など北松浦半島を中心に配石遺構が認められるが、これは礫群不在地域の特徴として認識されている（小畑2000）。

5．細石刃文化研究の課題

ここでは、九州北部地域における細石刃文化研究の課題を提示してまとめとしたい。

①九州細石刃石器群の起源

九州北部地域における細石刃石器群の出現は、終末期小型ナイフ形石器群にその技術的起源を求める考えがある（下川・萩原 1997 ほか）。ただし、現段階でこの自生説を裏付ける明確な資料は確認されていない。また、ナイフ形石器群と細石刃石器群の共伴も、否定的なこととして理解されている（小畑 1989、萩原 1989）。

初期細石刃石器群は、西北九州を中心に分布を示しており、同地域を窓口とする大陸・半島からの細石刃石器群の波及経路が理解される。楔形細石刃核を主体とする細石刃石器群も同様の分布状況がある。この九州の楔形細石刃核を東日本の湧別技法の波及と見る意見（栗島 1999、2000）もあるが、大分、宮崎など九州東部の分布が僅かなことから、やはり西北九州地域が波及の窓口であったと考えられる。

ところで、対馬水道北側の韓半島における細石刃文化を代表する遺跡として、スヤンゲ、海雲台、上舞龍里遺跡などがある。いずれも楔形細石刃核、船形細石刃核などが主体であり野岳型は認められない。また、これらの細石刃石器群は、黒曜石、硬質頁岩等の石材を使用し石刃技法を保持する。石刃技法不在の遺跡群は、主に韓半島の小白・蘆嶺山脈など脊梁山系の西南側に集中しており、細石刃核・石材は多様性を持っている。半島における細石刃文化の動向を見た場合、石刃技法の不在、組成の単純性など半島西側と九州島の細石刃石器群に幾つかの共通点が見出せる。これを念頭に置いた場合、九州細石刃文化の波及経路として黄海の海岸沿いを介した大陸・半島「ルート」も想定される。今後、半島西半の全羅南道の研究動向に注目する必要がある。

②「神子柴文化」と細石刃石器群

九州における「神子柴文化」の問題は、船野型細石刃核と共に綿貫俊一、栗島義明らによって積極的に位置づけられてきた。ただし、川道寛が指摘するように神子柴文化を代表する石器群の本来の組成を持つものはない（川道 2002ａ）。また、西北九州では楔形細石刃核と共伴する。

綿貫は、九州北部地域に多久三年山・茶園原遺跡に代表される槍先形尖頭器石器群だけの「細石刃文化断絶期」を想定し、その後に泉福寺 10 層、福井洞穴Ⅲ層を位置づけた（綿貫 1999）。しかし、福井洞穴Ⅳ層以後、「断絶」した槍先形尖頭器の泉福寺洞穴 6・5 層における「再登場」の説明はない。ここでは、詳述しないが福井洞穴Ⅳ層と多久三年山・茶園原遺跡群の槍先形尖頭器が一系統で理解できるかという本質的な問題がある。

栗島義明は、「神子柴文化西進説」をとる。その前提として、西海技法に湧別技法の残影を求め、船野型細石刃核を一系統に理解し大きな時期差を認めない。また、西北九州の船野型細石刃核の打面擦痕を東日本の湧別技法・白滝型の影響と理解し、さらには神子柴文化西進の根拠とする（栗島 1999）。本地域における船野型の出現理解については、近年の中国地方山間部の調査事例から筆者は、東日本あるいは韓半島などの影響を考えている。ただし、この問題を断片的な要素から拡大評価し、さらには文化論にまで止揚する栗島の意見には賛同しない。少なくとも個別器種のそれぞれの検討を行い総体として判断すべきである。いずれにせよ、九州各地の「神子柴文化」資料の詳細な検討によって細石刃文化との関係も理解されよう。

③始源土器と細石刃石器群

九州地域における細石刃石器群と始源土器は不可分の関係にある。九州北部地域では、福井・泉福寺洞穴、城ヶ岳平子遺跡、茶園遺跡、福岡平野では門田遺跡などに共伴事例がある。泉福寺洞穴では、隆起線文土器文化層下位の 10ｃ層下部に豆粒文土器単純層が存在する（川道 2002ｃ）。また、10ｃ層上部に豆粒文・隆起線併用文土器が、9 層中に隆起線文、豆粒文土器群がそれぞれ存在し、豆粒文の影響を受けながらの型式推移と時間的連続性が見られる。また、各文化層における特徴的な細石刃核の組成も一定の時間経過と理解できる。また、福井洞穴Ⅲ層資料も同段階に含めて理解できる。ところで泉福寺洞穴では、隆起線文土器と爪形文土器は層位的に検出され時間的な前後関係を持つ。ただし、前者は「貼付」、後者は「刺突」施文であり、土器施文法における型式的連続性はない。爪形文土器段階は、茶園遺跡Ⅳ層や門田遺跡の調査成果などにより、槍先形尖頭器や石斧が共伴する石器群における大きな画期にあたる。九州におけるこれら石器群の起源は、爪形文土器系譜の中で理解できるかもしれない。たとえ同系統でなくとも石器群と土器群の大きな変化が一致することは草創期の中でも大きな

画期として捉えられる。

このような視点で、九州最古の土器群と細石刃石器群の関係を捉え直した時、土器不在の泉福寺洞穴11層細石刃石器群が問題となる。11層細石刃石器群は、基本的に長軸削片剥離で統一される。このような細石刃核形態は、東松浦地域でも一定量認められ時期的設定ができる可能性が高い。また泉福寺洞穴では、10層細石刃石器群との技術的連続性が理解できる。ここに豆粒文以前の土器の段階を設定することも可能であろう。福井洞穴Ⅳ層細石刃石器群にも同様の問題がある。いずれにせよ、九州における細石刃石器群と始源土器の接触が一系統の波及により行われたのか、各要素それぞれ異系統の同時共存として理解するのか整理する必要がある。

④石鏃石器群と細石刃石器群

古段階とされる石鏃石器群は、九州南部に事例が多い。宮田栄二は、鹿児島県加栗山遺跡例を最古段階に置き、細石刃とは異なる石材利用や完成された形態から他地域からの波及とみる（宮田 1996）。これに対し、九州北部地域における細石刃石器群と石鏃の共伴事例として茶園遺跡Ⅳ層がある。茶園Ⅳ層例は、脚部の尖る小型二等辺三角形、平基などがある。これらは、型式的にも南九州の白鳥平B遺跡例などとも共通する。また泉福寺洞穴4層条痕文土器段階例よりも古段階に位置づけられる。現在、九州北部における石鏃の出現と細石刃の終焉が層位的に捉えられるのは泉福寺洞穴だけである。ただし、茶園遺跡例から、爪形文土器段階以前に九州北部に石鏃が登場するのは確実である。このことから、石鏃不在の細石刃石器群が存在するのも事実である。狩猟具の細石刃石器群とは遺跡内で共伴せずに並行する段階も想定されよう。ただし、その場合石鏃石器群の保持する組成、剥離技術などに細石刃石器群との共通性を見出せるかが、大きな問題となる。

以上、本論では九州北部地域における細石刃文化について考えてきた。その結果、幾つかの地域的特徴を指摘することができた。ただし、層位的に課題を残す地域であるため、福井・泉福寺洞穴の成果によるところが大きいのも事実である。そのため、今後も取り上げた対象資料の個別検討を繰り返し行っていく必要がある。その際、小畑などによって提唱された細石刃剥離技術組織の理解は、重要な視点となるであろう。

本稿執筆にあったては、以下の方々にお世話になった。記して感謝したい。

岩永雅彦、小畑弘己、川道寛、志賀智史、辻田直人、高橋慎二、中原一成、久村貞男、藤木聡、松本茂、宮田栄二、吉留秀敏、綿貫俊一

参考・引用文献

麻生優 1965「細石器文化」『日本の考古学―先土器時代―』Ⅰ　河出書房新社

麻生優編 1984『泉福寺洞穴の発掘調査記録』築地書館

井上裕弘・木下修他 1977『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』3　福岡県教育委員会

織笠昭 1984「細石器文化組成論」『駿台史学』60　駿台史学会

織笠昭 1991「西海技法の研究」『東海大学紀要文学部』54　東海大学文学部

岡本東三 1979「神子柴・長者久保文化について」『研究論集』Ⅴ　奈良国立文化財研究所

岡本東三 1999「神子柴文化をめぐる40年の軌跡―移行期をめぐるカオス―」『先史考古学研究』7

岡本東三 2002「九州島の細石器文化と神子柴文化」『泉福寺洞穴研究編』泉福寺洞穴研究編刊行会

小畑弘己 1983「九州の細刃文化」『物質文化』41

小畑弘己 1989「西南日本におけるクサビ形石核とその系譜について」『東アジアの考古と歴史』（中）

小畑弘己 1996「金山遺跡の細石刃石器群について」『九州考古学』第71号、九州考古学会

小畑弘己 2000「細石刃文化期の空間利用―九州の事例から―」『旧石器から縄文へ』日本考古学協会2000年度大会鹿児島大会

小畑弘己 2002「考察　2．細石刃剥離技術について」『吉武高木遺跡群ⅩⅣ』

加藤良彦編 2002『吉武遺跡群ⅩⅣ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第731集

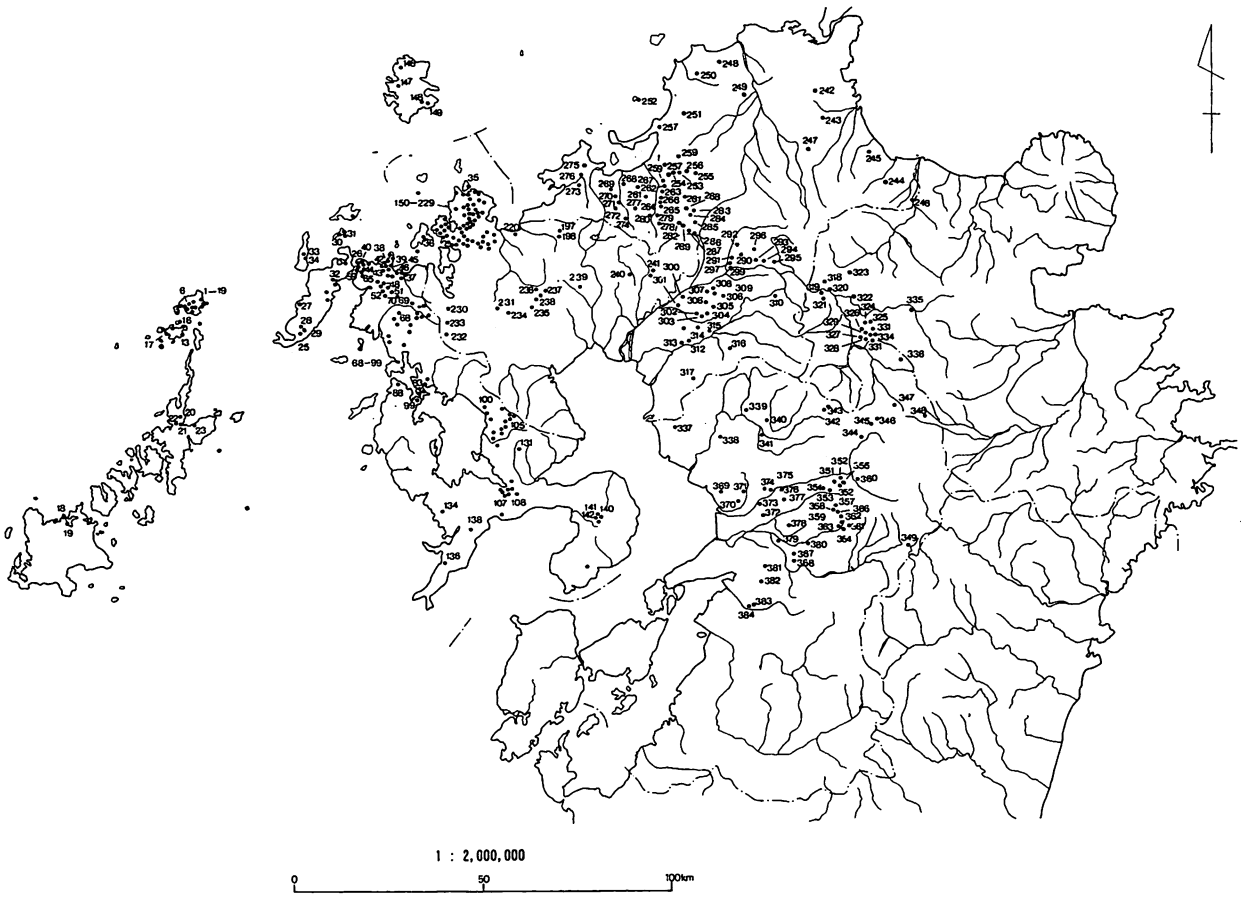
鎌木義昌・芹沢長介 1965「福井岩陰」『考古学集刊』3－1号　東京考古学会

鎌木義昌・芹沢長介 1967「2　長崎県福井洞穴」『日本の洞穴遺跡』日本考古学協会洞穴調査委員会

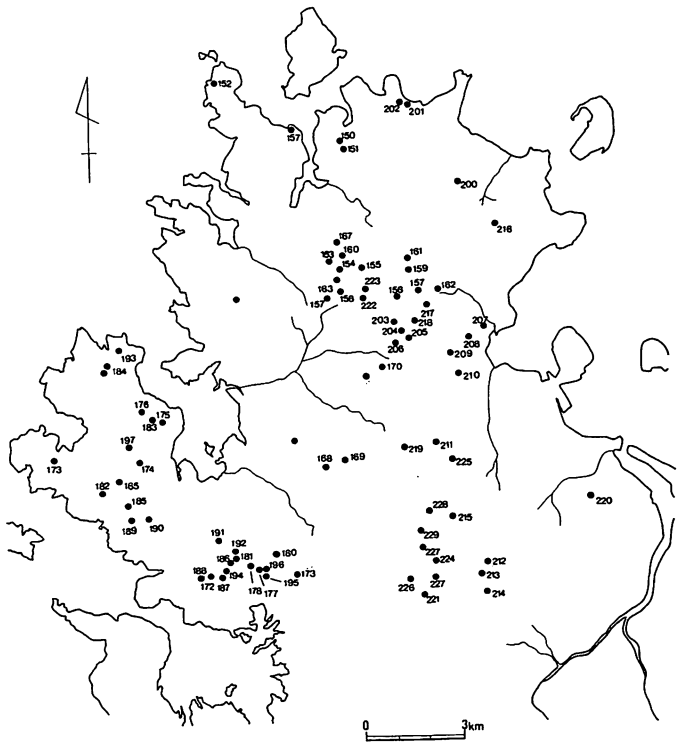
川道寛編 1998『茶園遺跡』岐宿町文化財調査報告書第3集　長崎県岐宿町教育員会

川道寛 2002ａ「九州地方の細石器研究の現状と課題」『九州旧石器』6　九州旧石器文化研究会
川道寛 2002ｂ「茶園遺跡の再評価―位牌塔型と茶園型の間に―」『九州旧石器』6　九州旧石器文化研究会
川道寛 2002ｃ「豆粒文土器単純層は存在した―泉福寺洞穴 3・4・5 トレンチの層位的再検討―」『泉福寺洞穴研究編』泉福寺洞穴研究編刊行会
木崎康弘 1981「九州地方の細石核」『熊本史学』55・56　熊本大学
木崎康弘 2002「九州細石器文化考―泉福寺洞穴の位置付けをめぐって―」『泉福寺洞穴研究編』泉福寺洞穴研究編刊行会
木下修 1976「門田遺跡」『日本の旧石器文化』3　雄山閣
九州旧石器文化研究会編 1997『九州の細石器文化』第 22 回九州旧石器文化研究会
九州旧石器文化研究会編 1998『九州の細石器文化Ⅱ』第 23 回九州旧石器文化研究会
九州旧石器文化研究会編 2000『九州の細石器文化Ⅲ』第 25 回九州旧石器文化研究会
栗島義明 1991「本ノ木論争―その学史的背景と今日的意義―」『日本考古学協会第 57 回総会研究発表要旨』
栗島義明 1999「神子柴文化の系統問題―ニーナ論文によせて―」『土曜考古』23　土曜考古学会
栗島義明 2000「神子柴文化の拡散と展開―九州地域に於ける草創期初頭の諸問題」『九州の細石器文化Ⅲ』九州旧石器文化研究会
桑波田武志・宮田栄二 1997「鹿児島県における旧石器研究の現状と課題」『鹿児島考古』31　鹿児島考古学会
小林達雄 1970「日本列島に於ける細石刃インダストリー」『物質文化』16
下川達弥・立平進 1983『城ヶ岳平子遺跡―第 1 次調査概報―』長崎県立美術博物館
下川達弥・萩原博文 1997「細石刃石器群の出現・展開と泉福寺洞穴」『人間・遺跡・遺物』発掘者談話会
杉原荘介・戸沢充則 1971「佐賀県原遺跡における細石器文化の様相」『考古学集刊』3－1
杉原敏之 2000ａ「九州における神子柴文化」『九州の細石器文化Ⅲ』九州旧石器文化研究会
杉原敏之 2001「細石刃文化成立期の様相」『筑紫野市史』資料編
杉原敏之 2003「九州島の様相―石器群と土器出現期―」『季刊考古学』83　雄山閣
橘昌信 1979「九州地方の細石器文化」『駿台史学』47　駿台史学会
橘昌信 1985「九州における細石器文化共伴遺物」『肥後考古』5　肥後考古学会
田島龍太 1984「石ヶ元下道遺跡」『後川内遺跡群Ⅱ』唐津市文化財調査報告書　唐津市教育委員会
田島龍太編 1996『竹木場前田遺跡 (2)』唐津市文化財調査報告書 71 集　唐津市教育委員会
田島龍太 2001 編『東山Ⅰ遺跡』唐津市文化財調査報告書第 97 集　唐津市教育委員会
徳永貞紹 1996「武雄市小路遺跡採集の細石刃核」『佐賀考古』4　佐賀考古学会
萩原博文 1989「西日本の細石器文化」『考古学ジャーナル』369　ニュウーサイエンス社
萩原博文 2001「縄文草創期の細石刃石器群」『日本考古学』12　日本考古学協会
橋本勝雄 1984「長崎県福井洞穴の細石刃生産技術について―第 2・3 層を中心に―」『考古学論叢』Ⅰ
肥後考古学会編 1985「熊本の旧石器文化」『肥後考古』5　肥後考古学会
宮田栄二 1996「南九州における細石刃文化終末期の様相」『考古学の諸相』坂詰秀一先生還暦記念会
横田義章 1981「いわゆる「神子柴型石斧」の資料」『研究論集』7　九州歴史資料館ほか
吉留秀敏 2003「遺跡分布から分かること―九州の事例から―」『旧石器人の活動を探る』大阪市学芸委員等　共同研究「朝鮮半島学術調査団」旧石器シンポジュウム実行委員会
吉留秀敏 2003「出土遺物－後期旧石器と細石器－」
池田祐司編 2003『大原Ｄ遺跡群４』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 741 集　福岡市教育委員会
綿貫俊一他 1989『五馬大坪遺跡』天瀬町教育員会
綿貫俊一 1992「長者久保・神子柴文化並行段階の九州」『古文化談叢』28　九州古文化研究会
綿貫俊一 1993「九州北部の細石刃文化」『細石刃文化研究の新たなる展開』Ⅰ　佐久考古学会ほか
綿貫俊一 1999「細石刃が欠落した九州の長者久保神子柴文化並行期の提唱」『おおいた考古』12

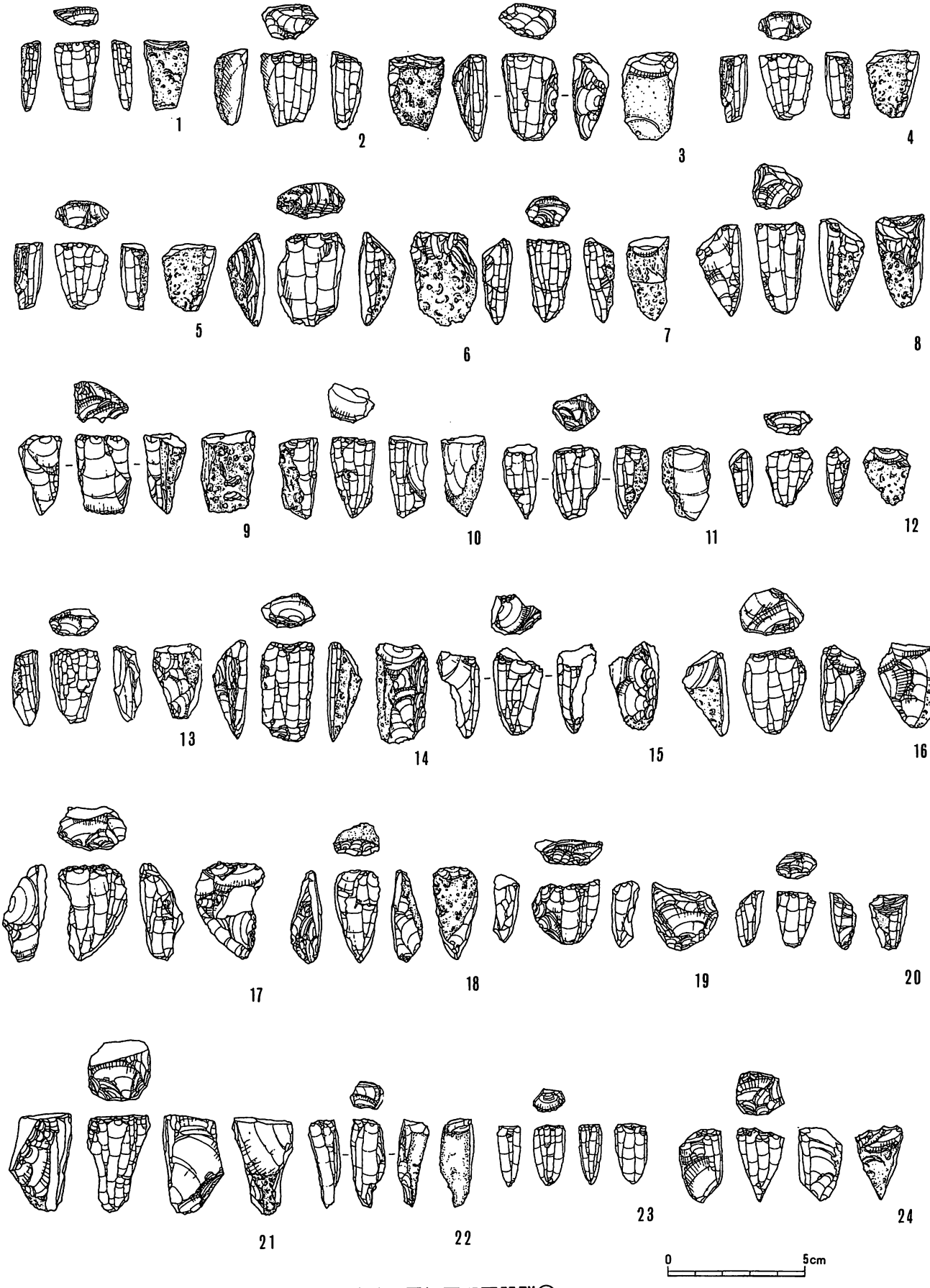
※　分布図中の番号は、本論文末の遺跡一覧表の番号と対応する。遺跡名は一覧表を参照のこと。



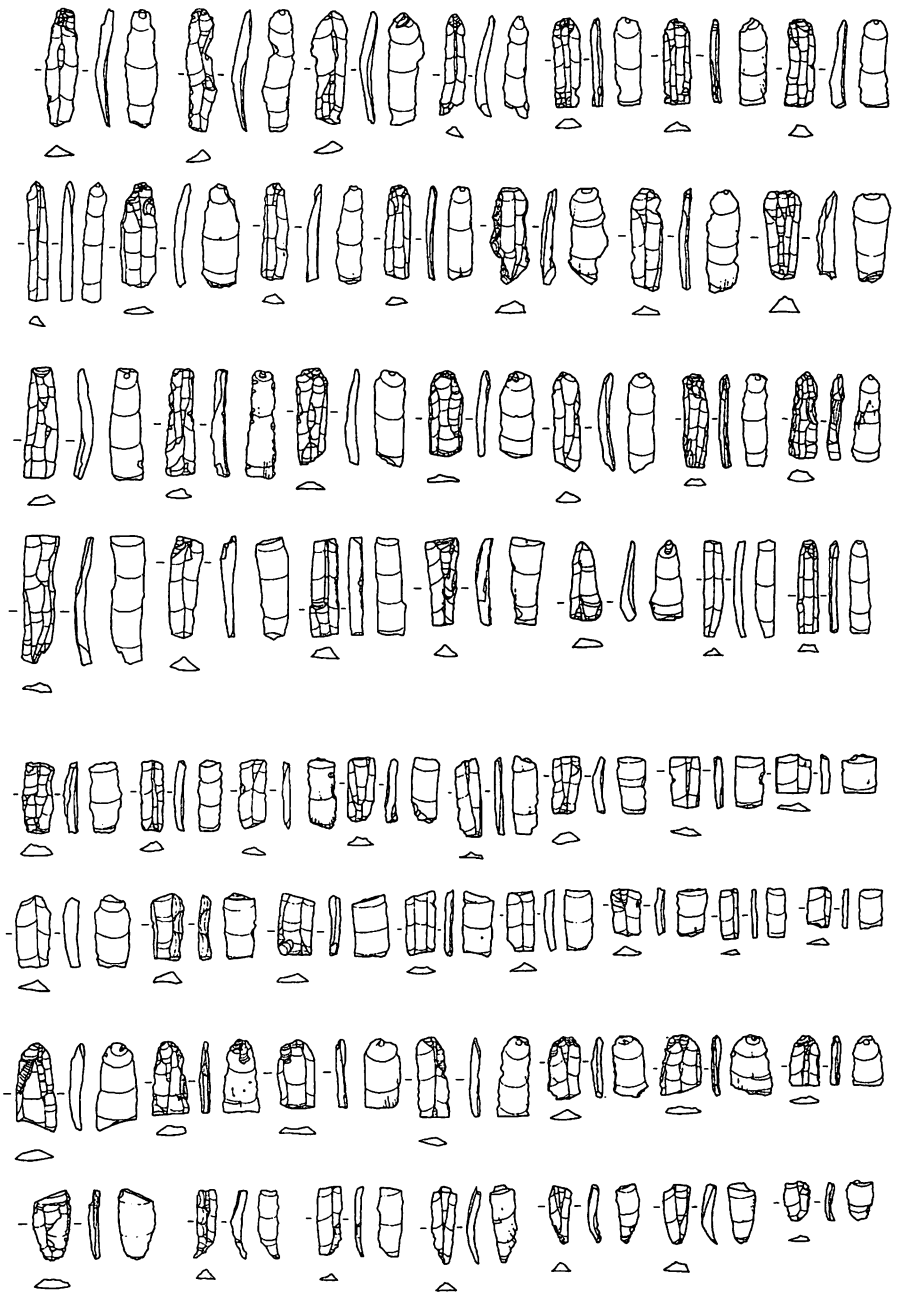
第１図　九州北部地域の細石刃石器群分布図

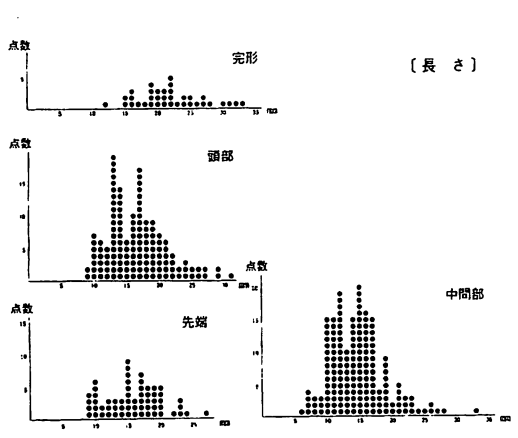


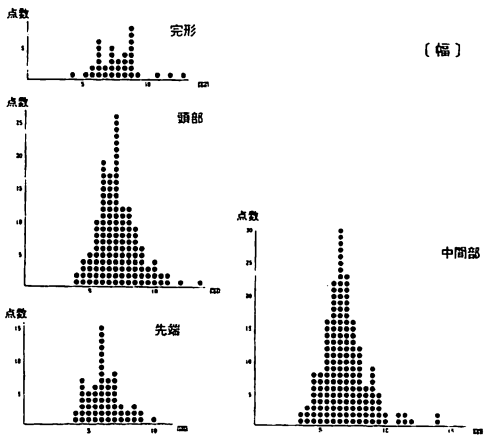
第２図　東松浦地域（上場台地）



第３図　茶園遺跡Ｖ層細石刃石器群①

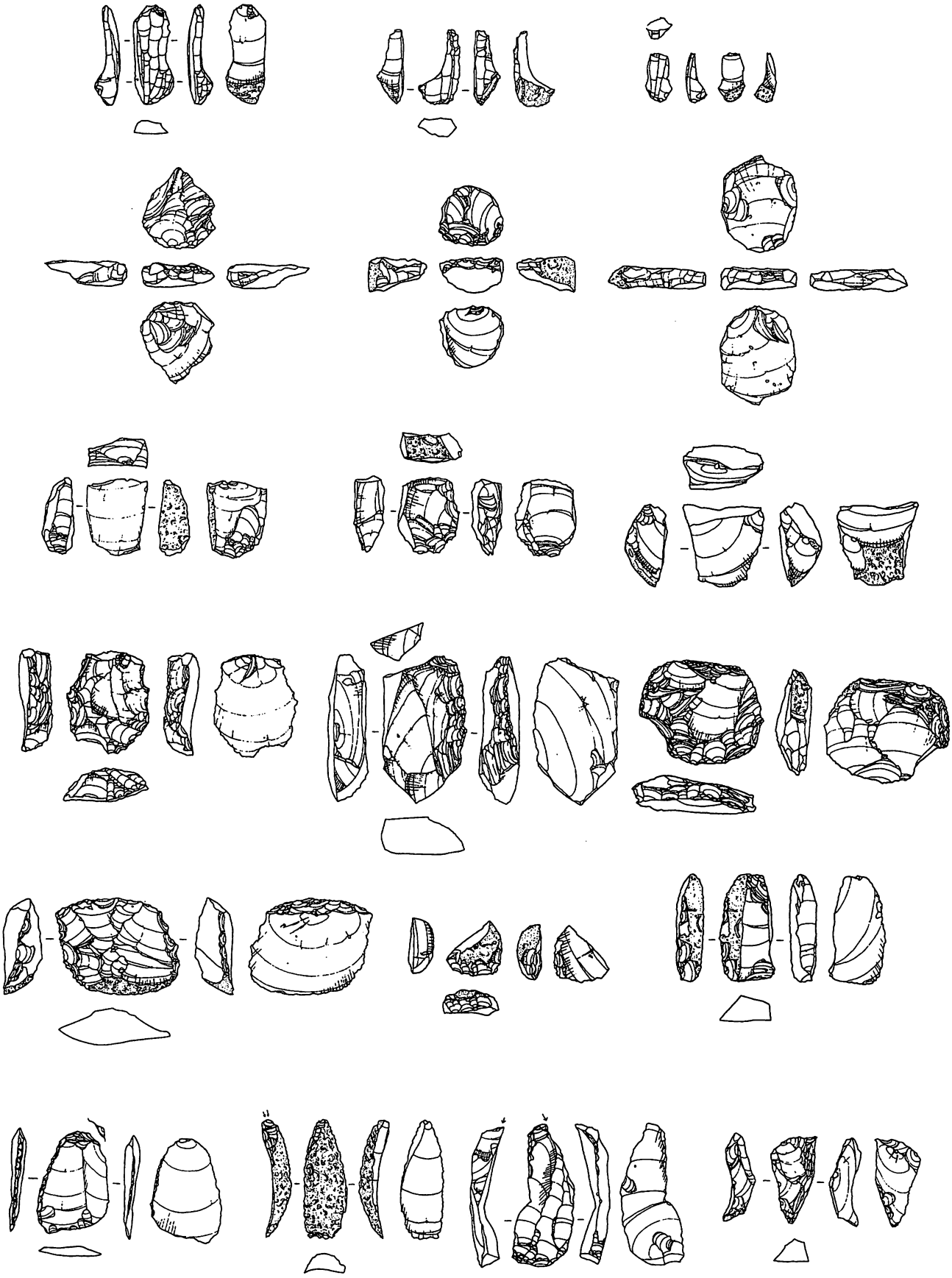




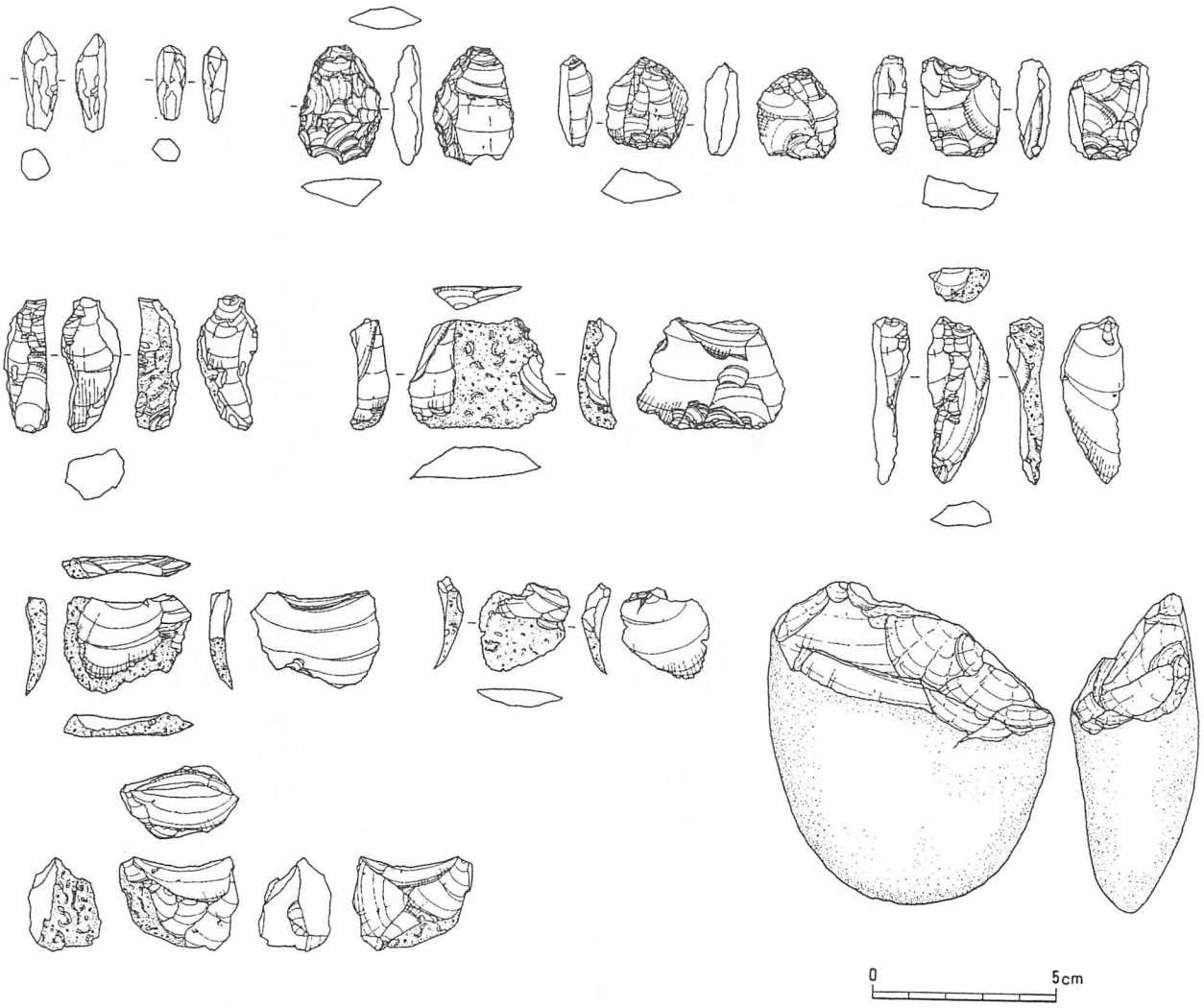


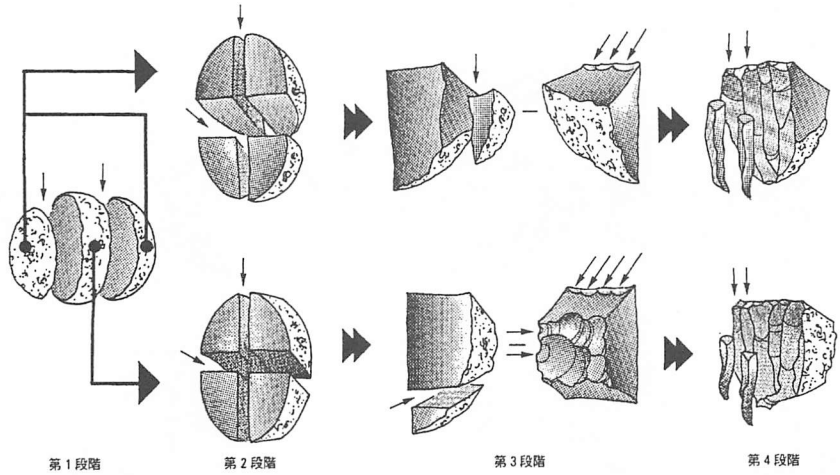
第14図　第Ⅴ層石器群の細石刃長幅グラフ

第４図　茶園遺跡Ⅴ層細石刃石器群②



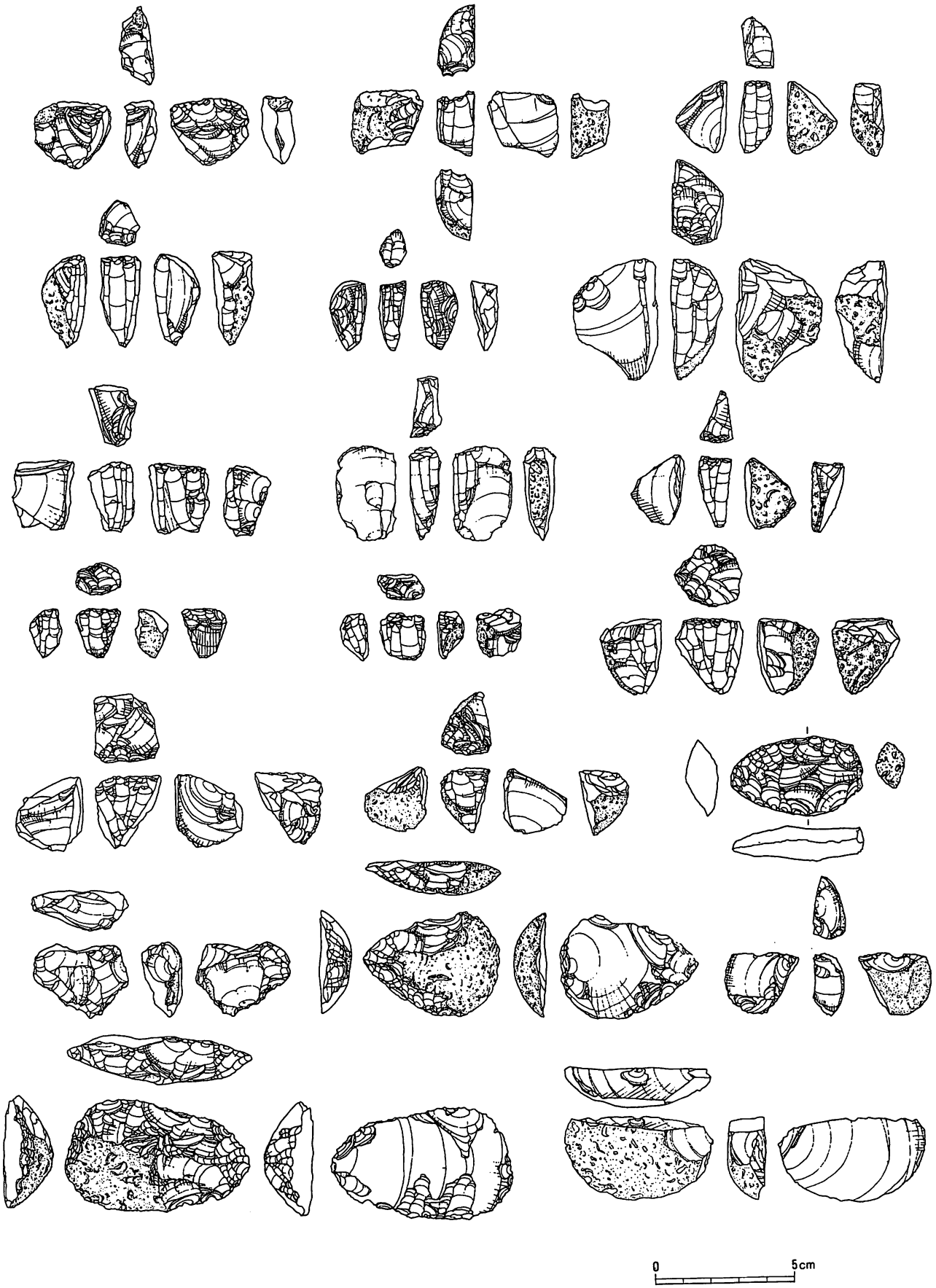
第５図　茶園遺跡Ｖ層細石刃石器群③



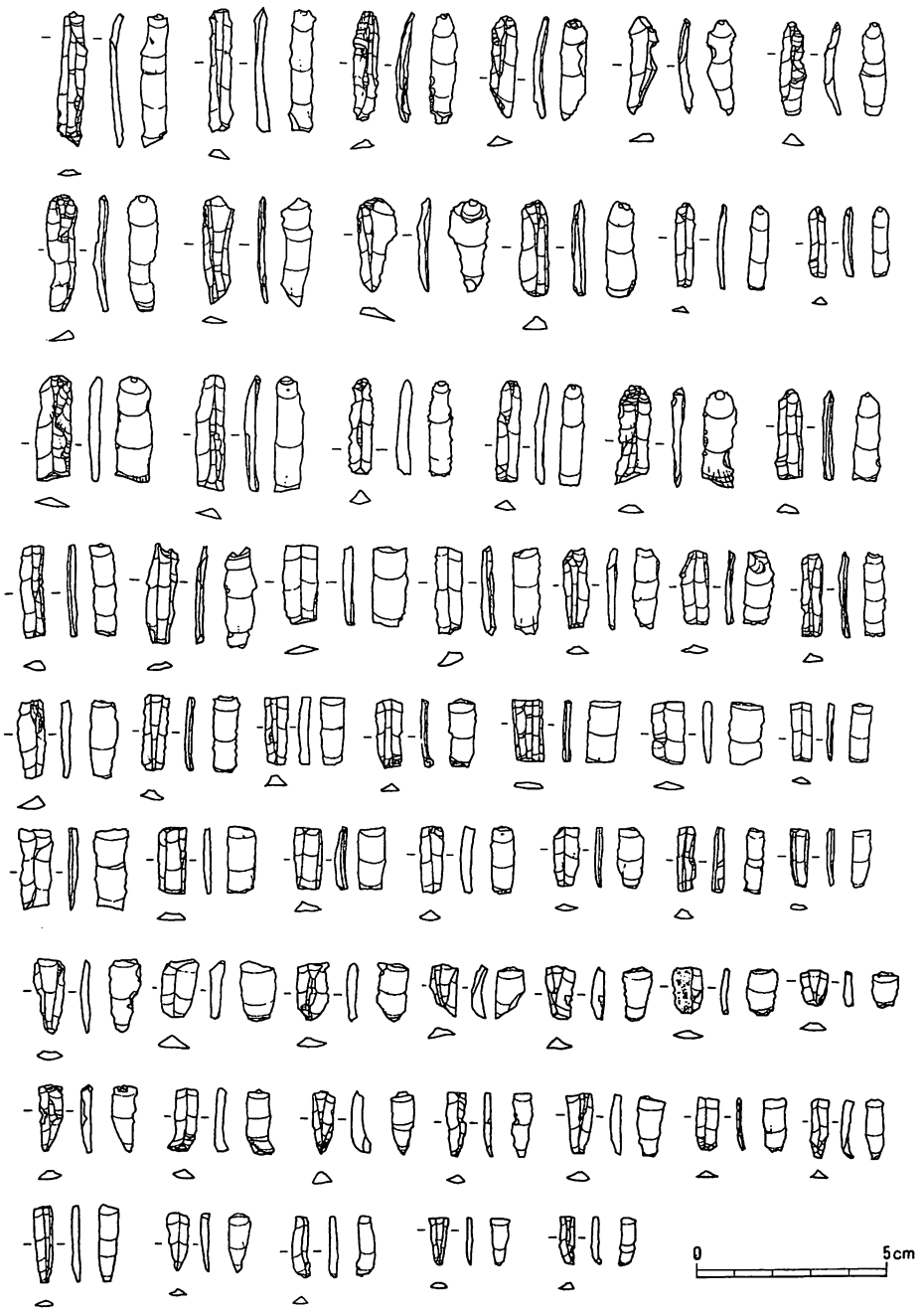


茶園技法（上段）と位牌塔技法（下段）

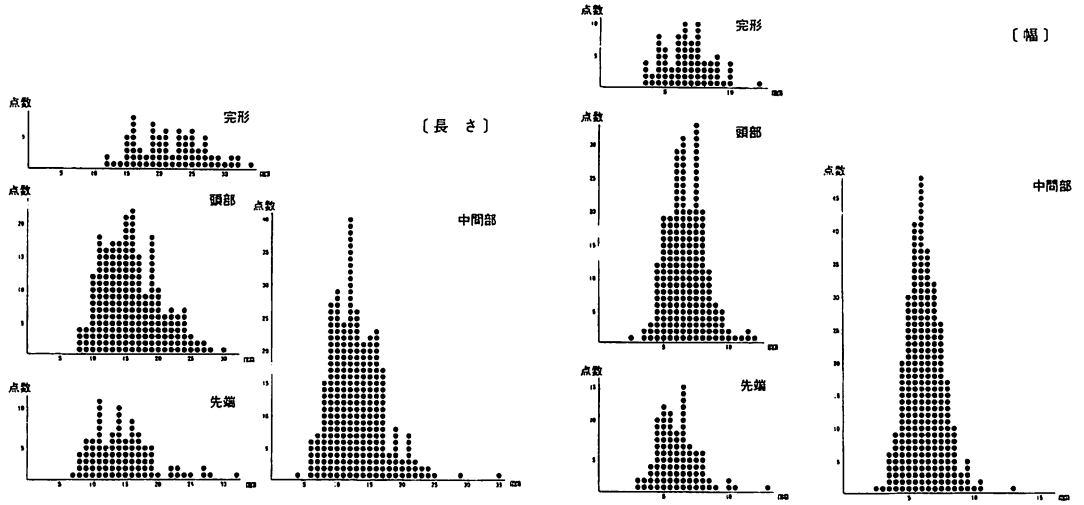
第6図　茶園遺跡Ⅴ層細石刃石器群④



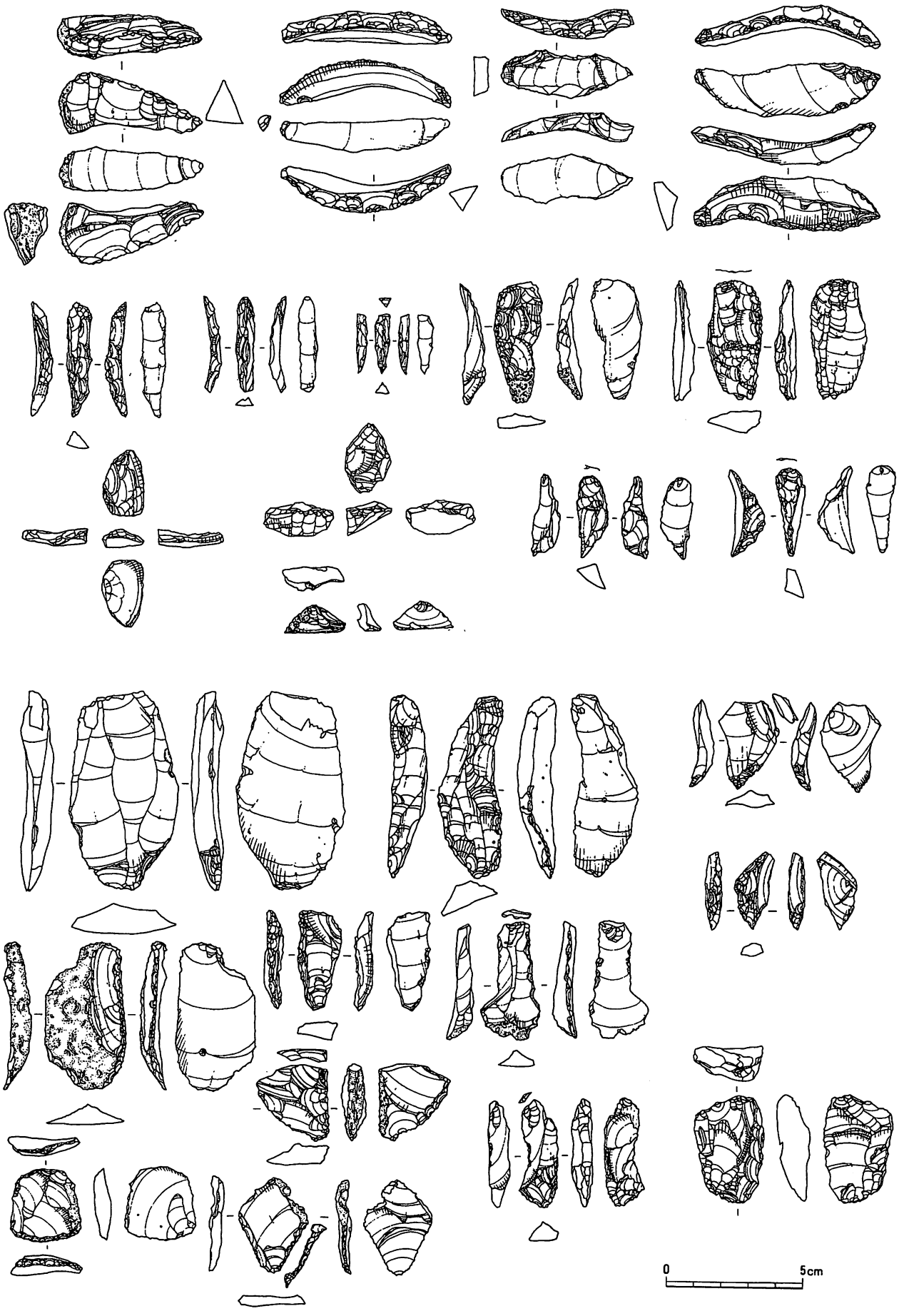
第７図　茶園遺跡Ⅳ層細石刃石器群①



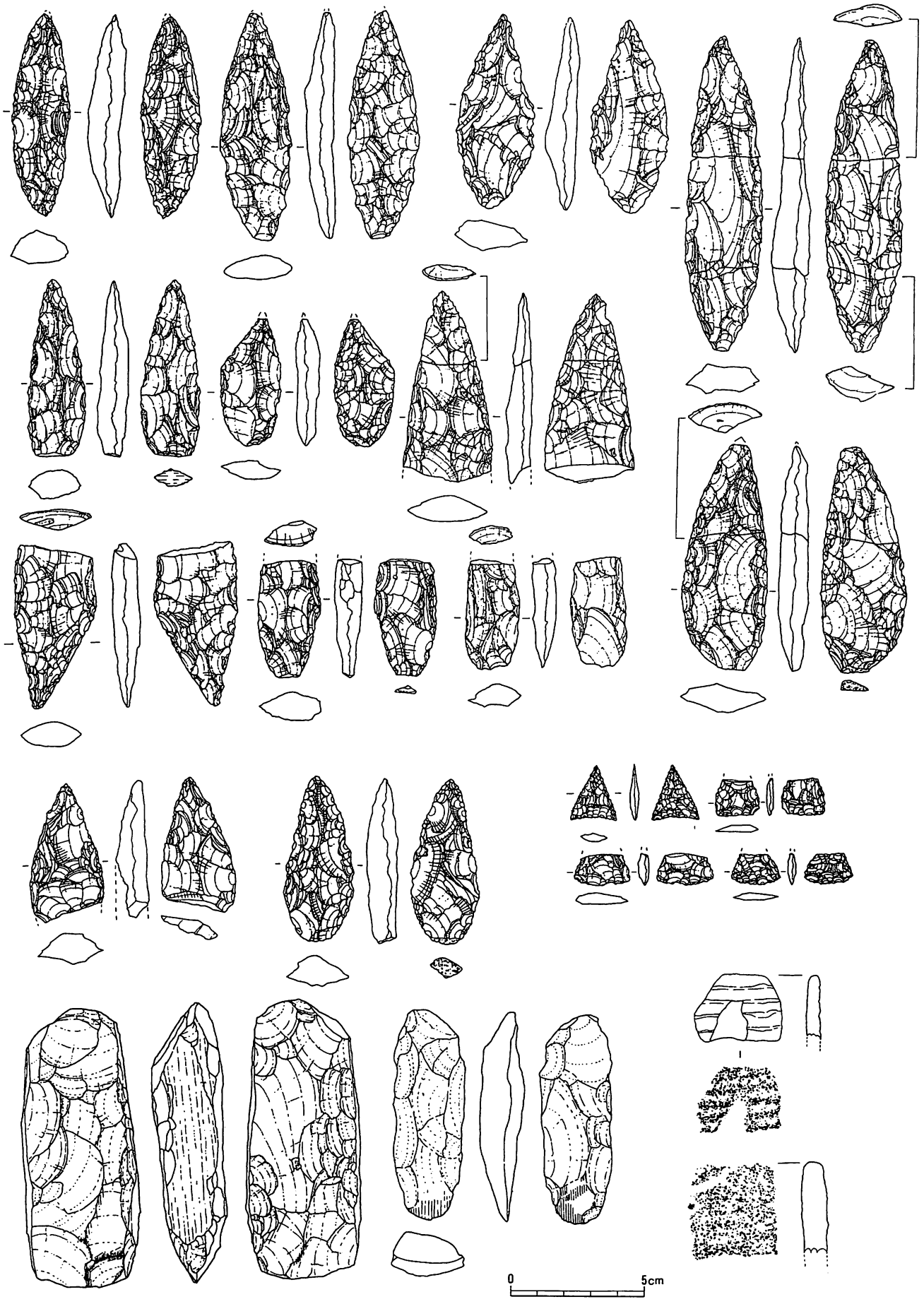
第８図　茶園遺跡Ⅳ層細石刃石器群②



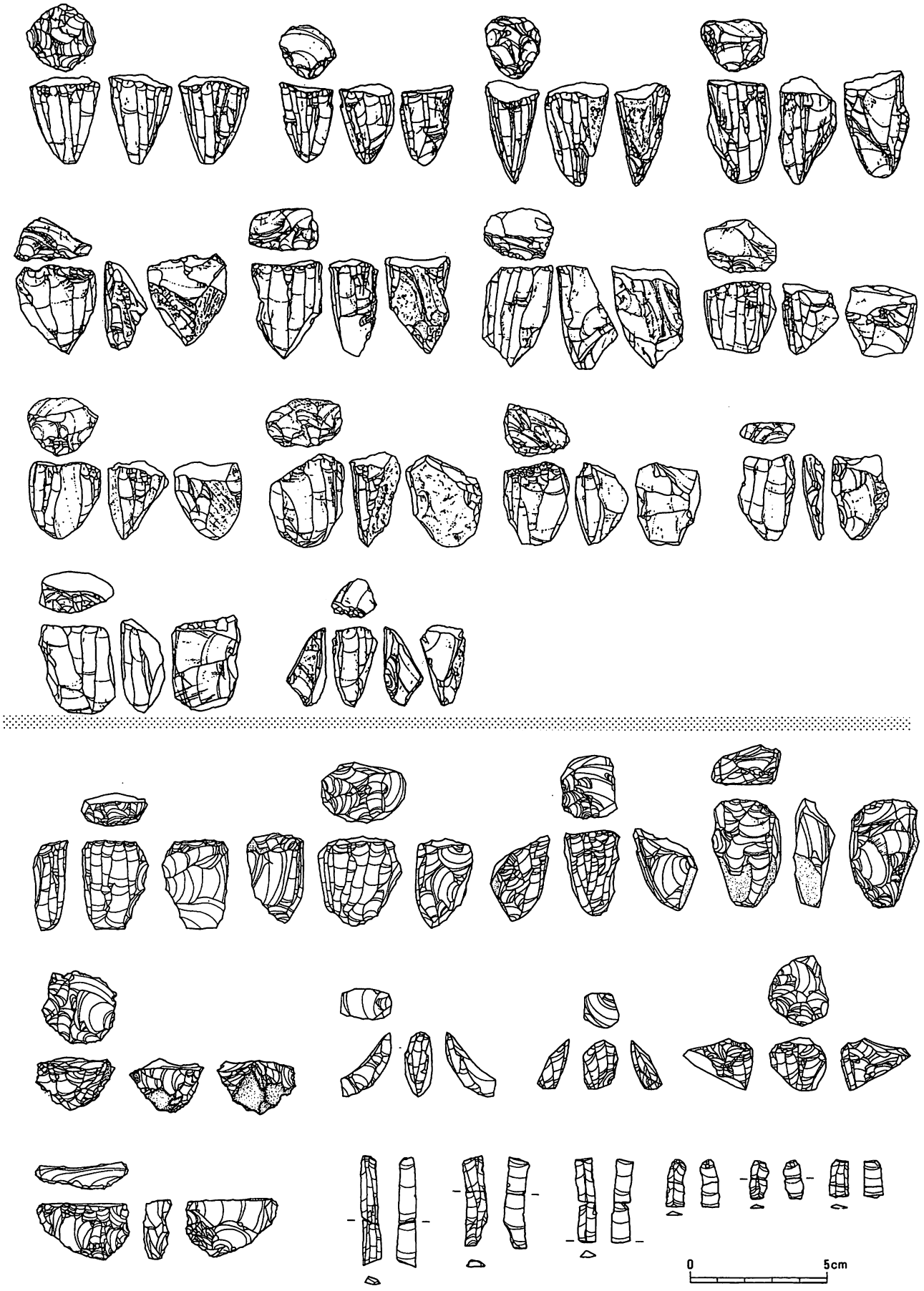
第24図　第Ⅳ層石器群の細石刃長幅グラフ



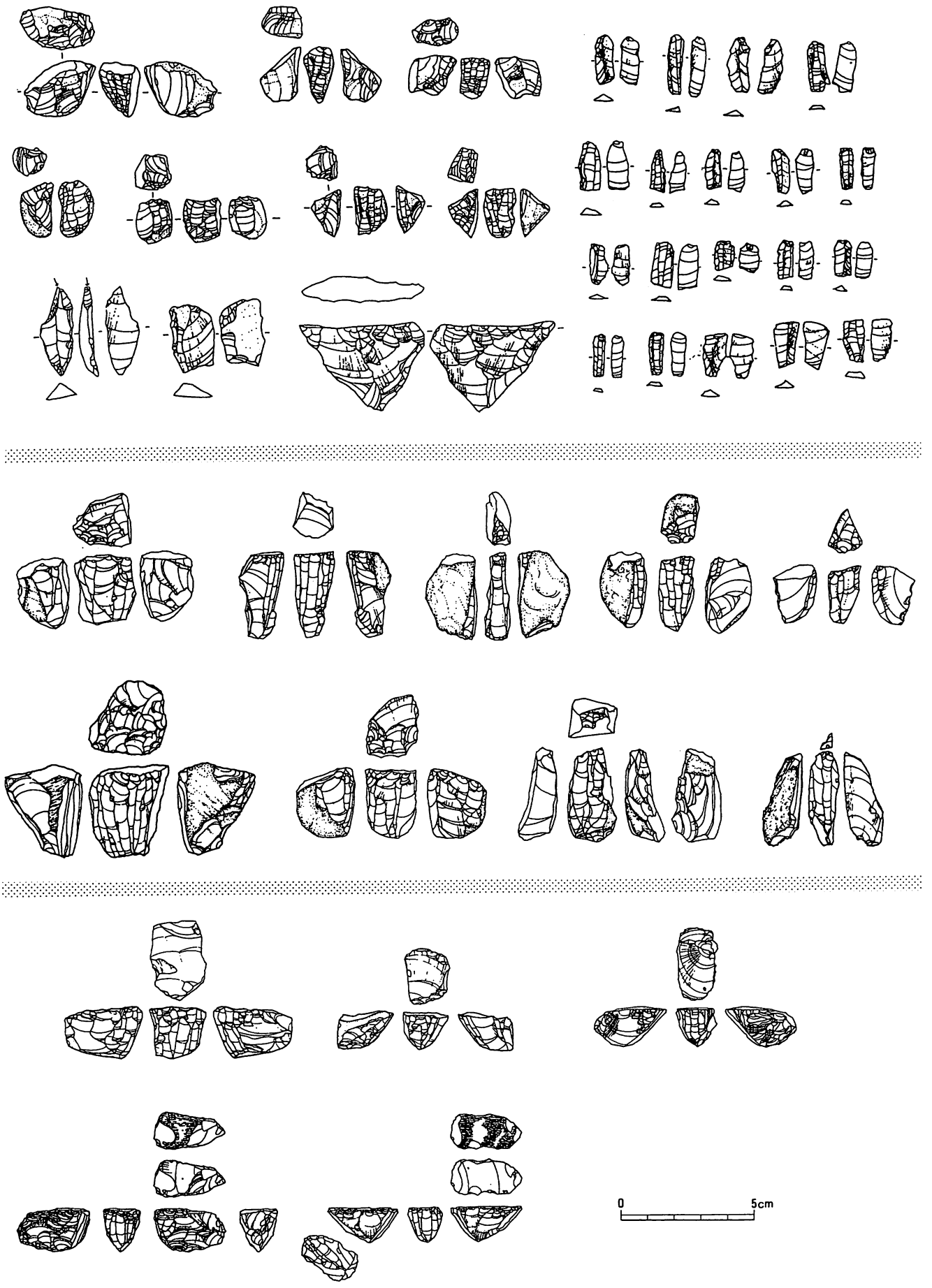
第９図　茶園遺跡Ⅳ層細石刃石器群③



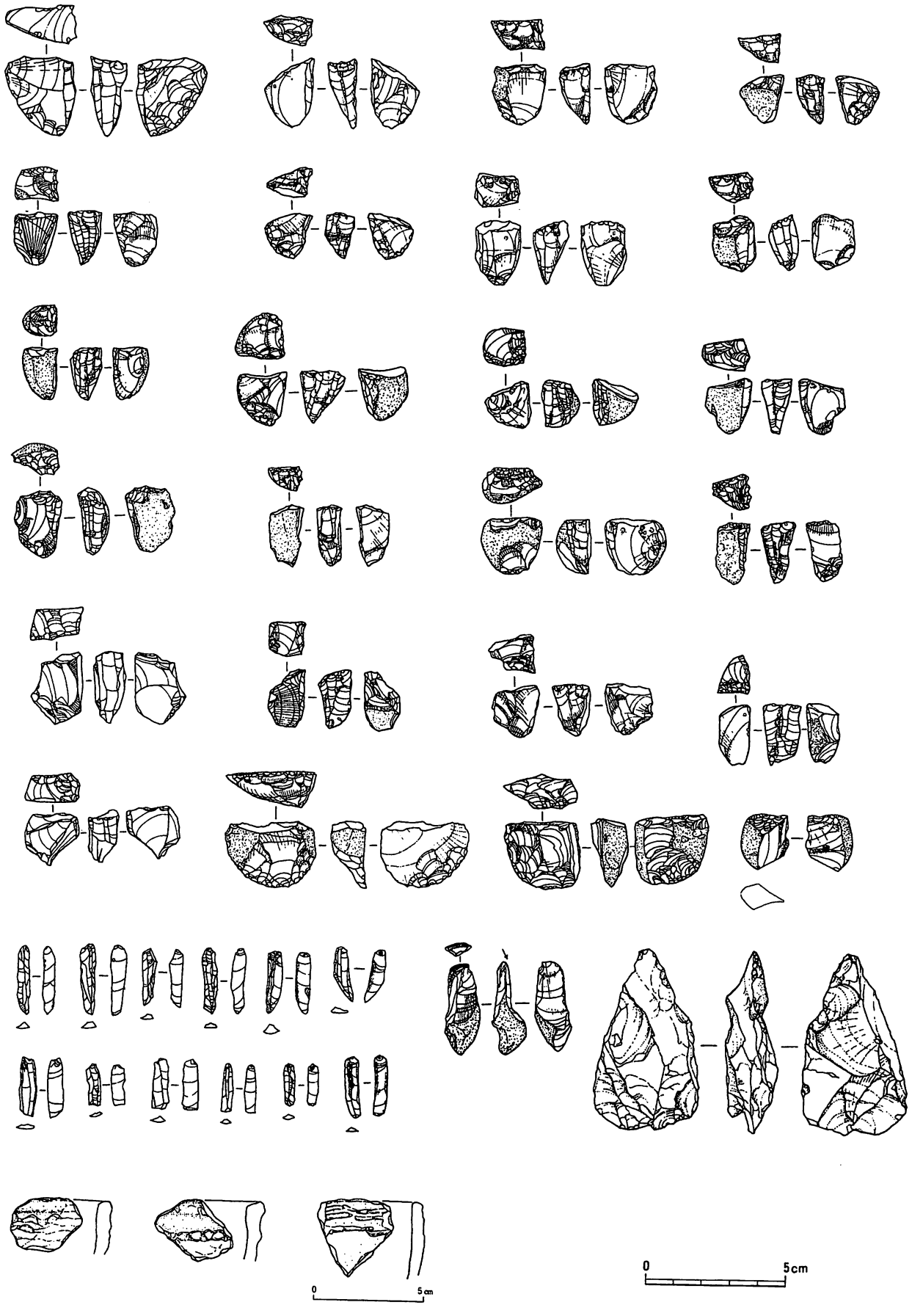
第 10 図　茶園遺跡Ⅳ層細石刃石器群④



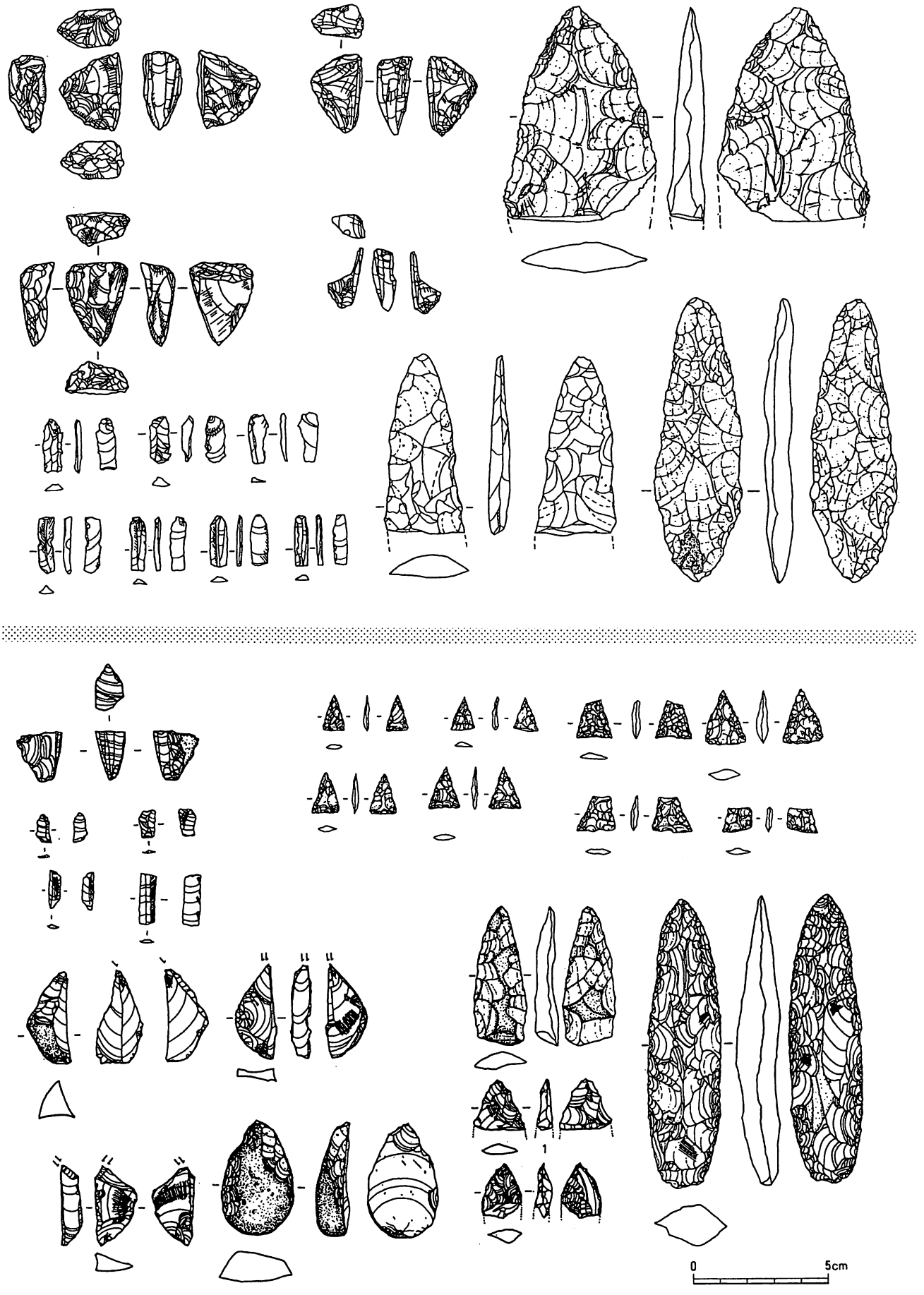
第 11 図　野岳遺跡細石刃核（上段）、鷹野遺跡細石刃石器群（下段）



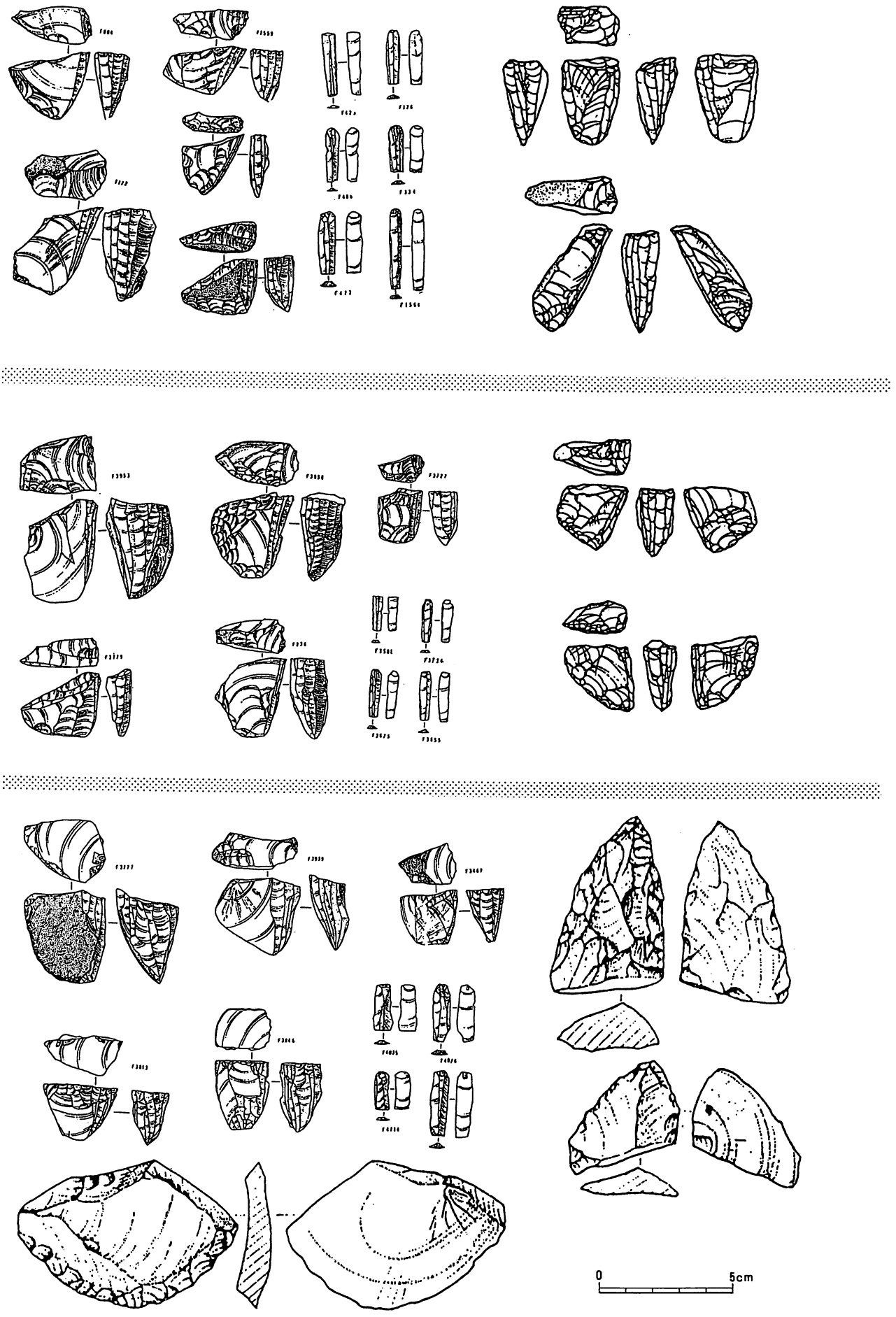
第 12 図　百花台遺跡 II 細石刃石器群（上段）、百花台遺跡 S 地点細石刃核（中段）、船野型細石刃核（下段、上左：西輪久道遺跡、右：白岳、下：重篭）



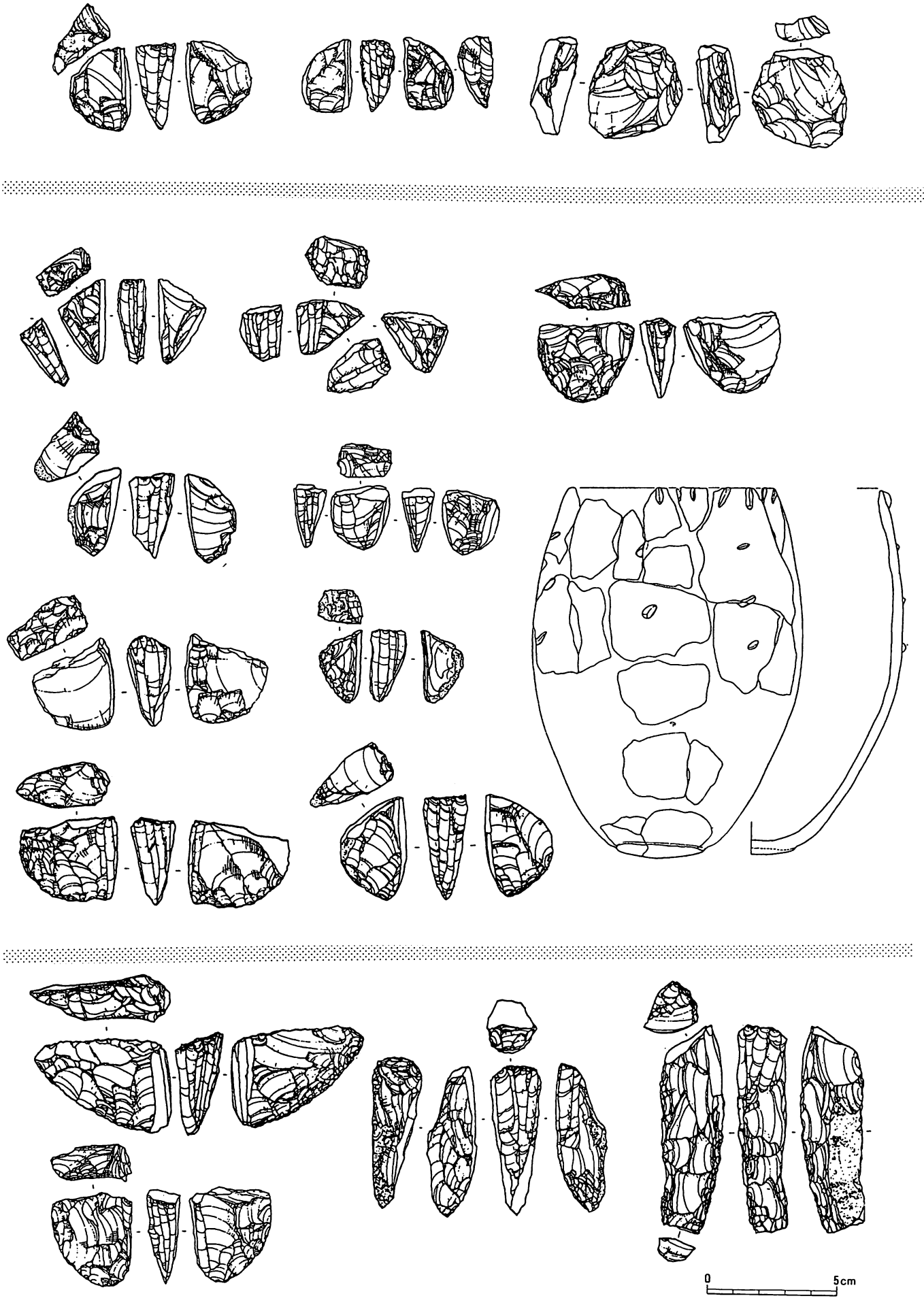
第 13 図　城ヶ岳平子遺跡細石刃石器群



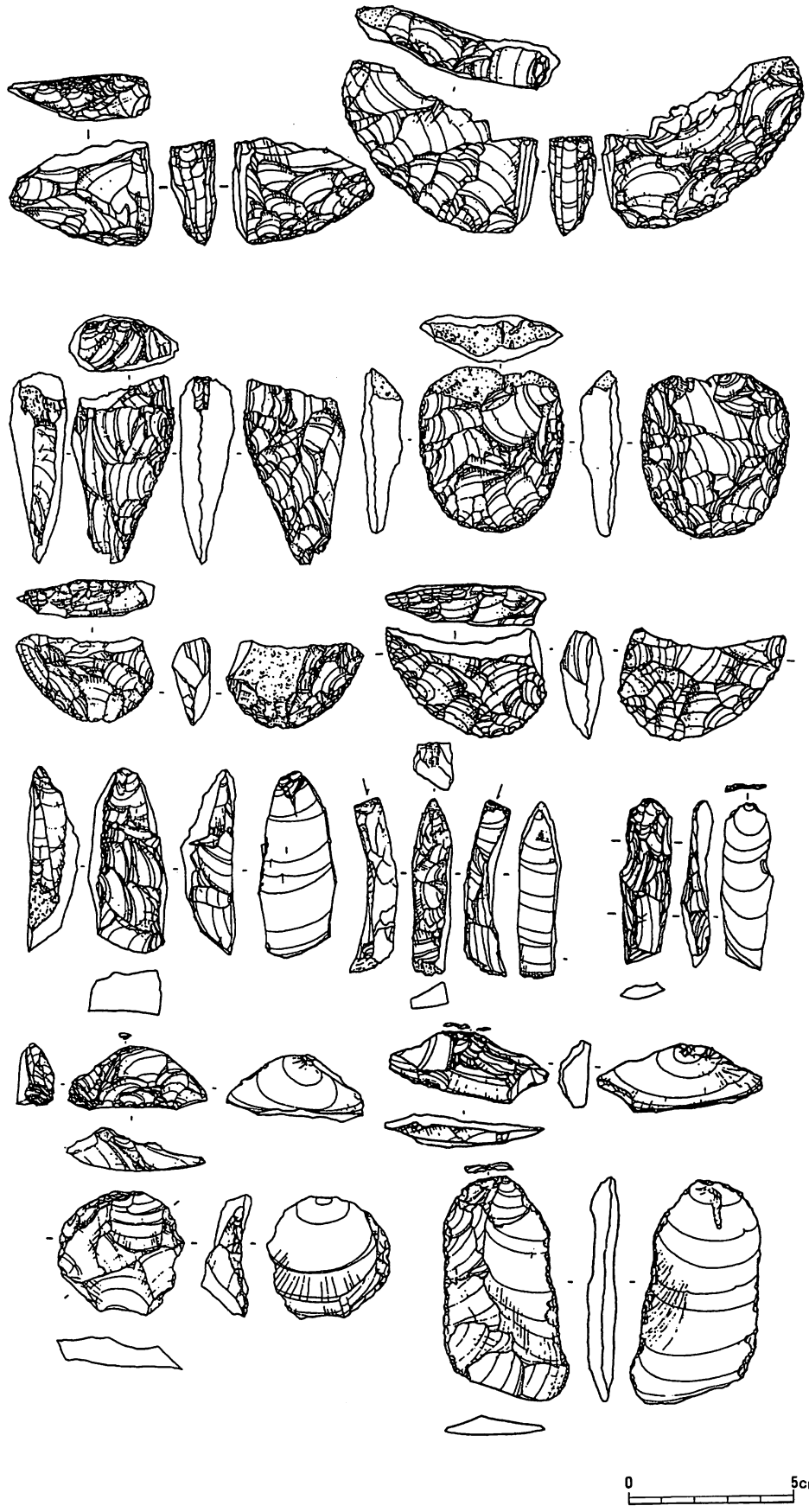
第 14 図　松山 A 遺跡細石刃石器群（上段）、田崎遺跡細石刃・石鏃石器群（下段）



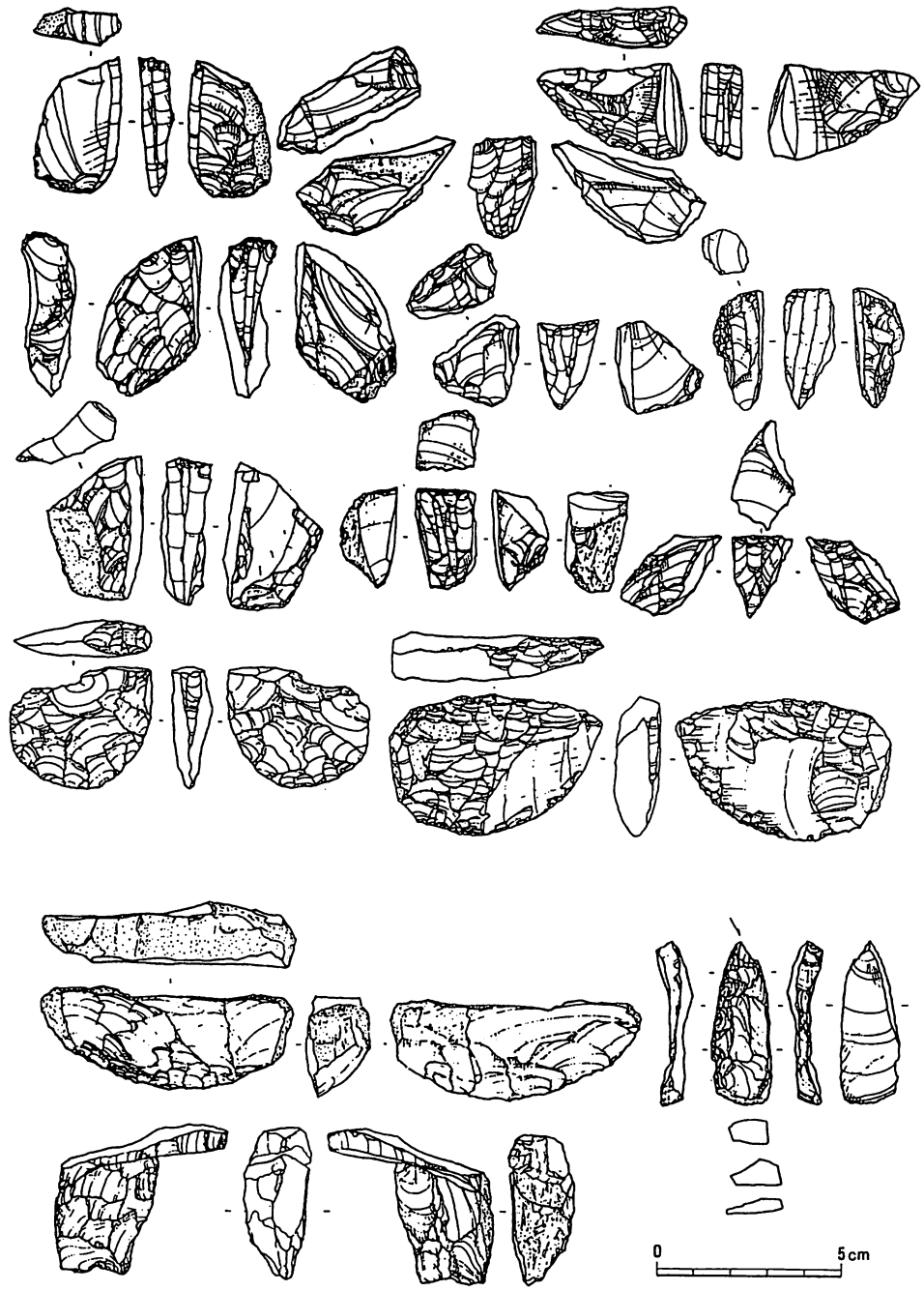
第 15 図　福井洞穴細石刃石器群（下段：Ⅳ層、中段：Ⅲ層、上段：Ⅱ層）



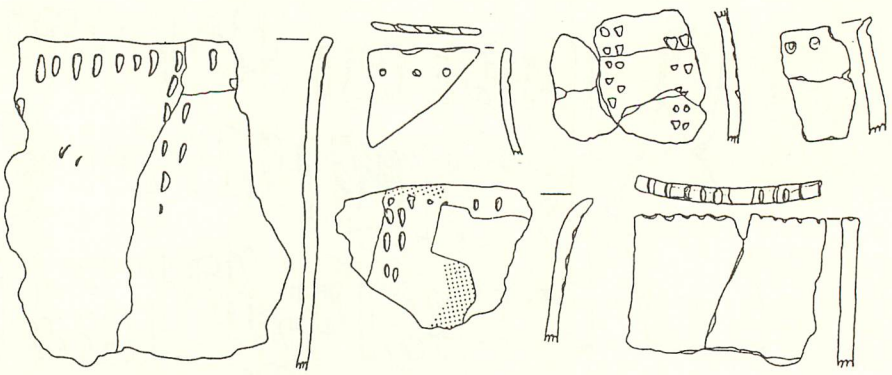
第 16 図　泉福寺洞穴細石刃石器群①（上段：11 層、中段 10 層、下段：7～9 層）



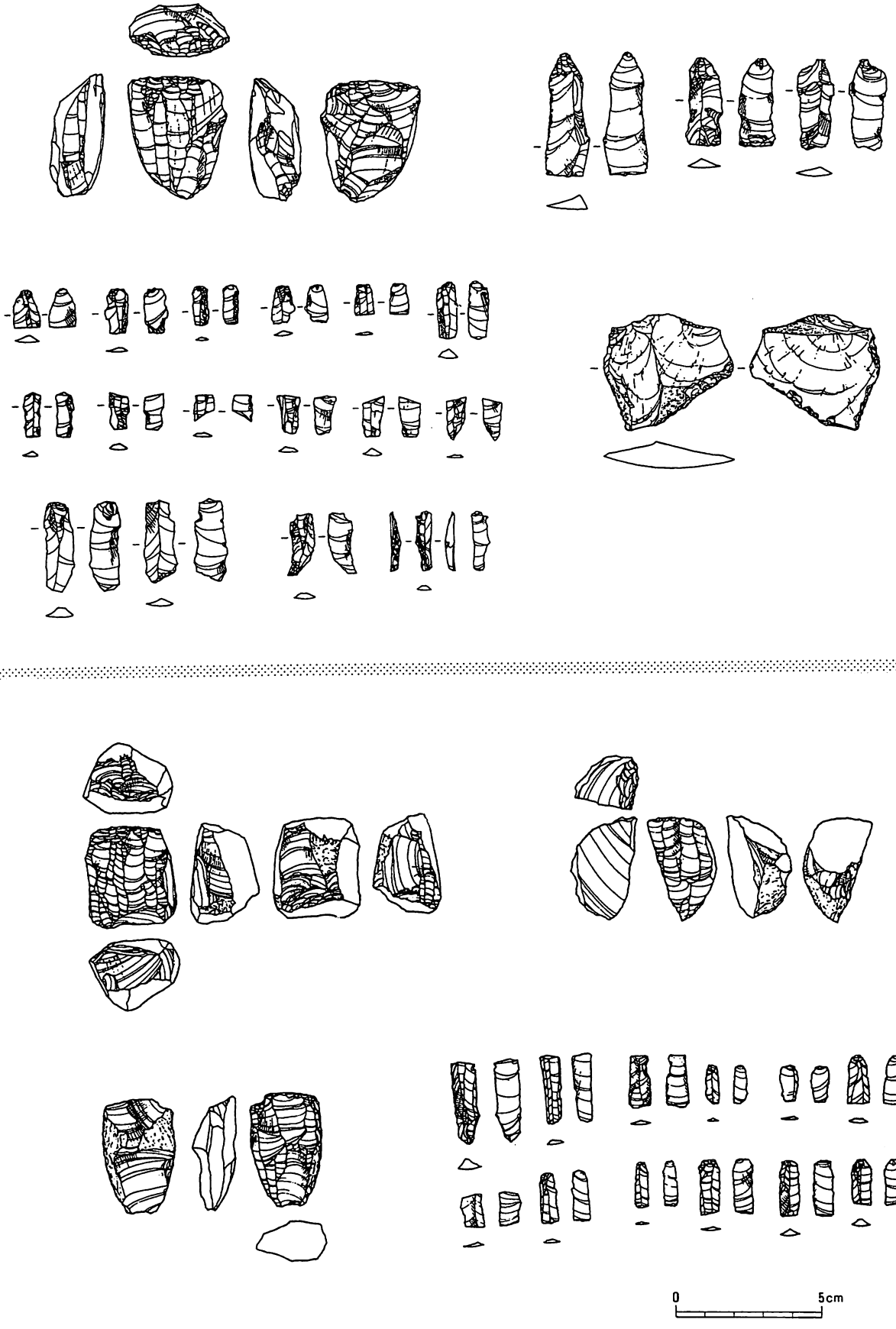
第 17 図　泉福寺洞穴細石刃石器群②（7～9 層）



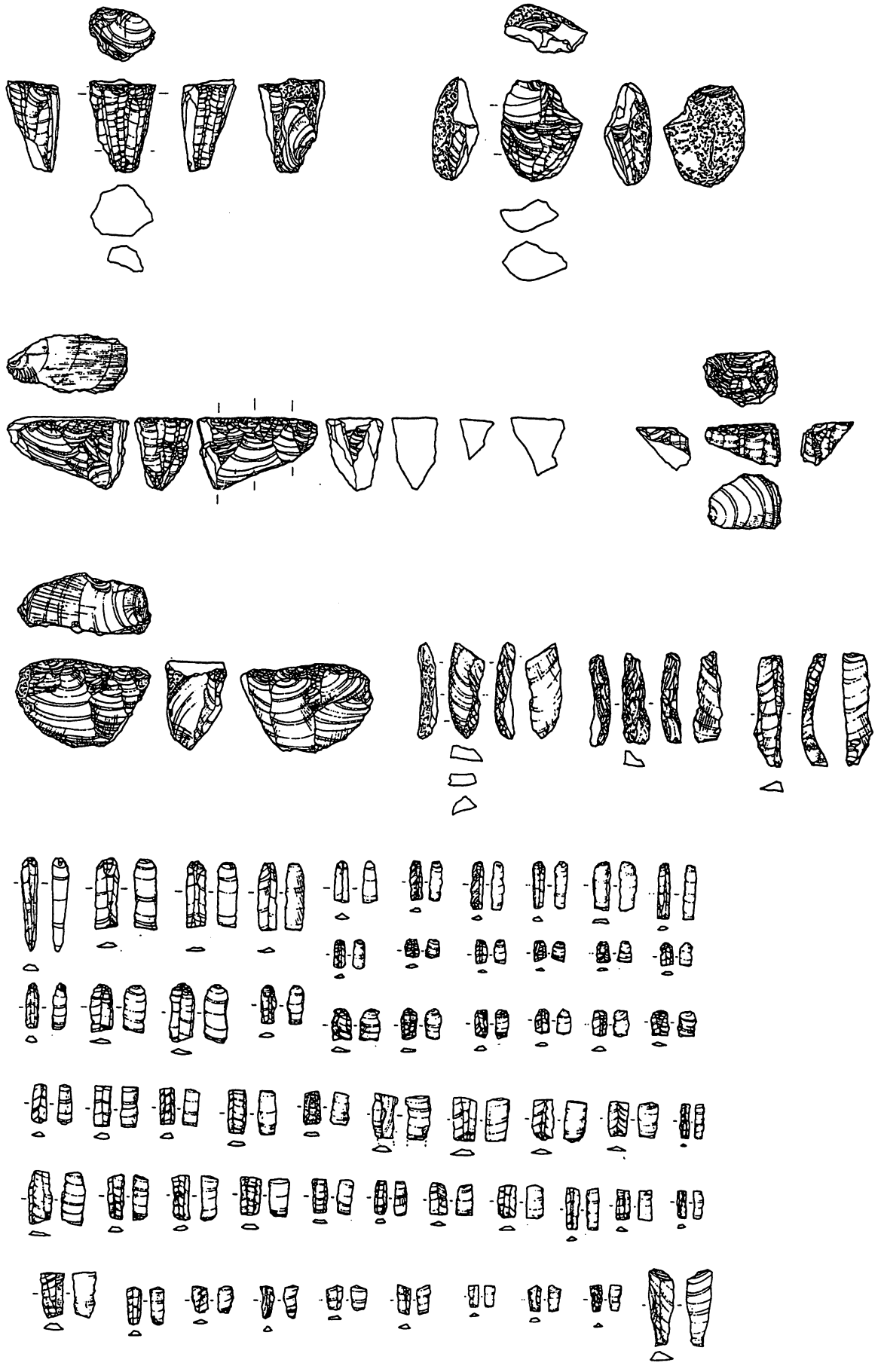
第 18 図　泉福寺洞穴細石刃石器群③（6 層）



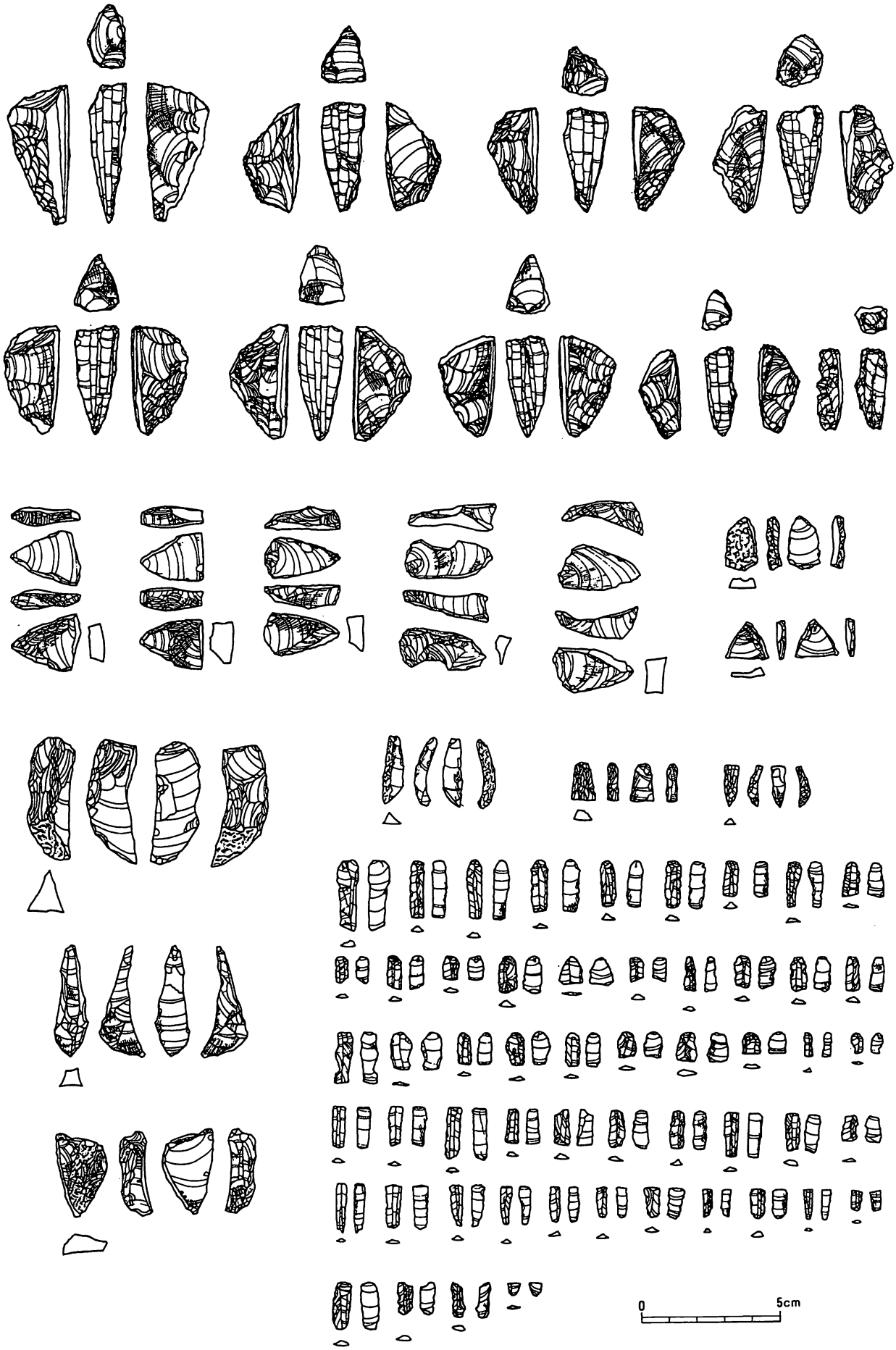
第 19 図　泉福寺洞穴細石刃石器群④（5 層）



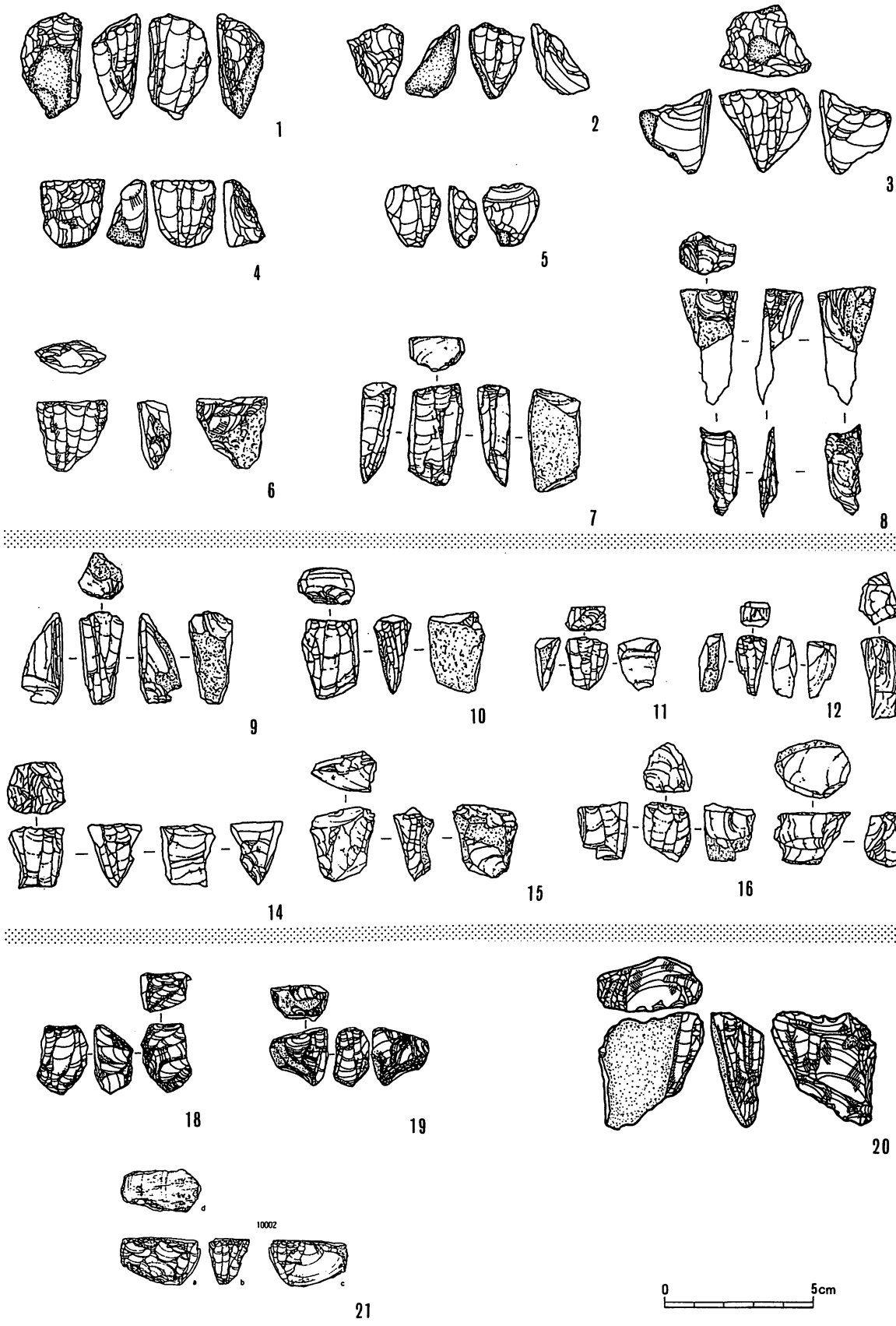
第 20 図　菅牟田黒龍遺跡細石刃石器群（上段）、川原田遺跡細石刃石器群（下段）



第 21 図　竹木場前田遺跡細石刃石器群

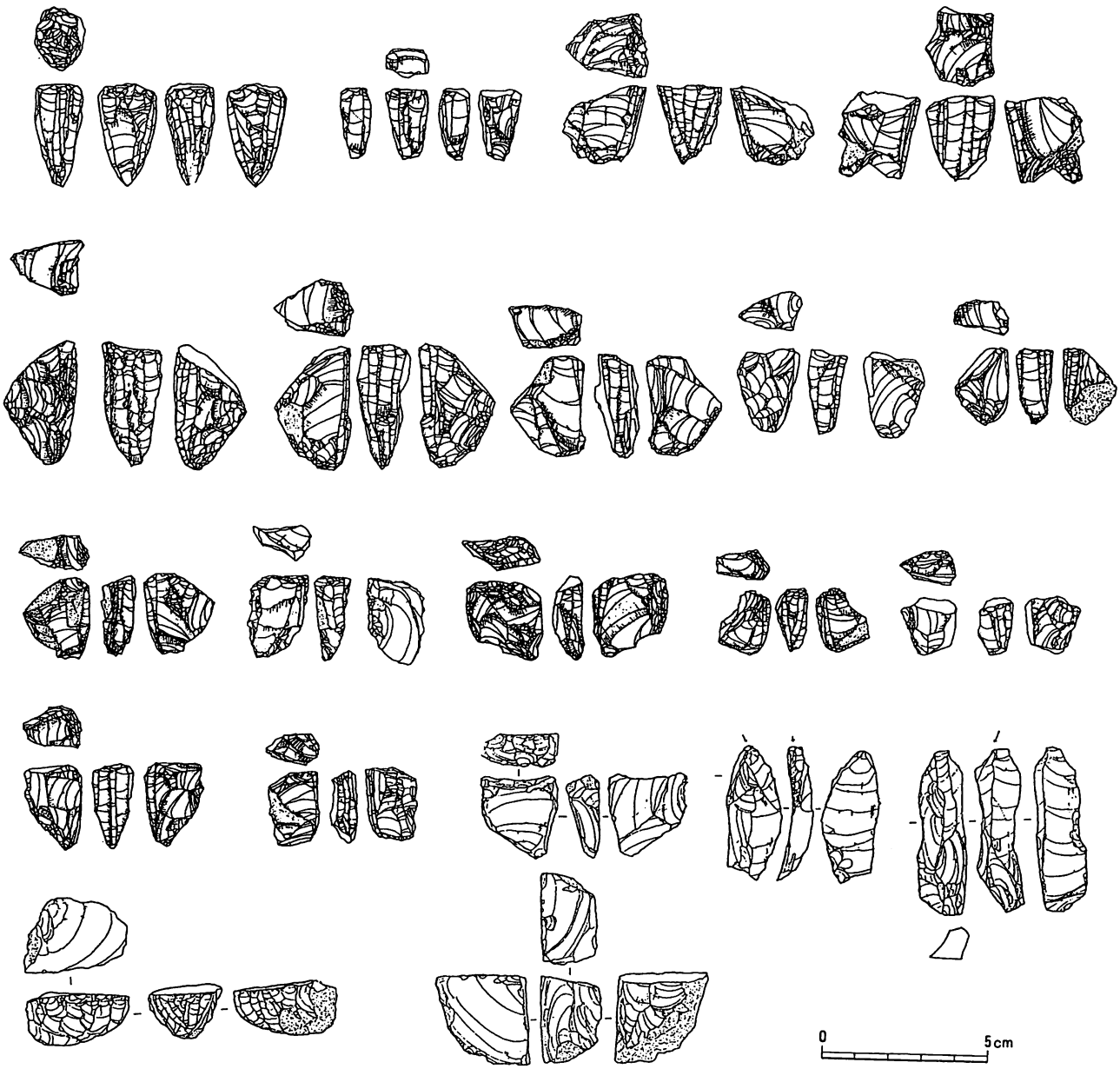


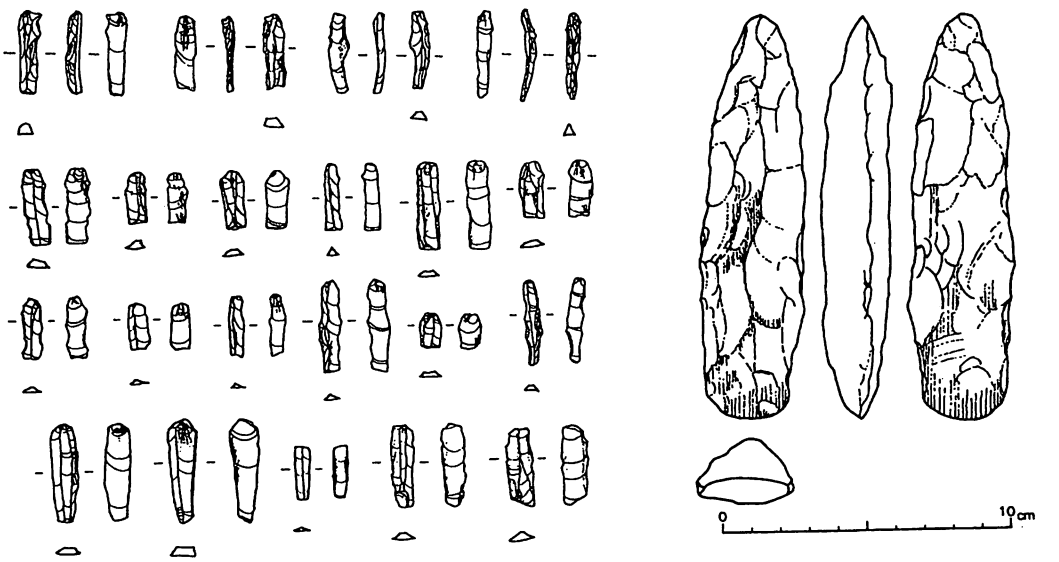
第 22 図　石ヶ元道下遺跡細石刃石器群



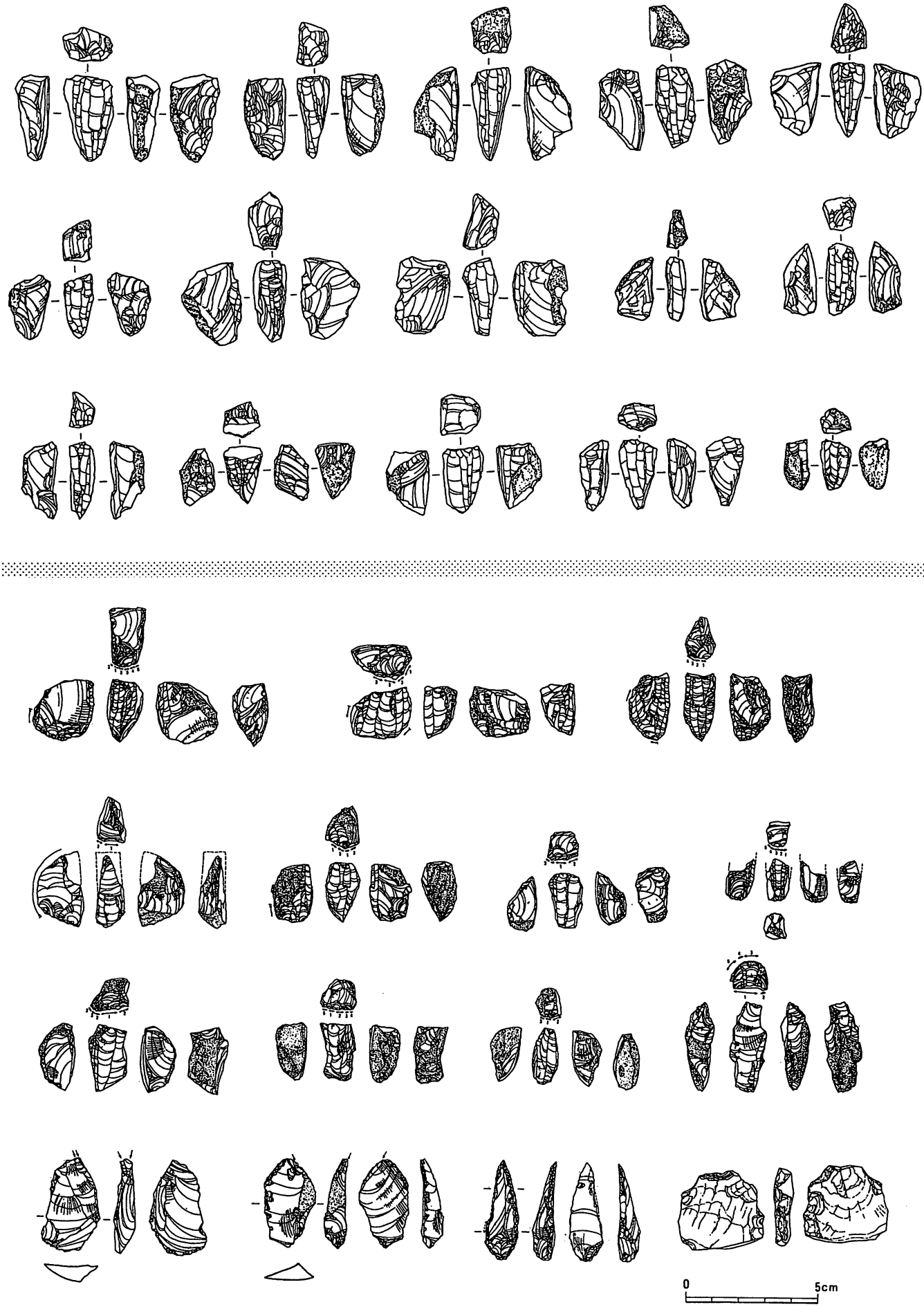
第 23 図　福岡平野・筑後後川流域の「楔形」以前の細石刃核

（上段；1～5 野黒坂、6 中原、7・8 春園、中段；大草平、下段；18・19 井尻 B、20 峠山 ）



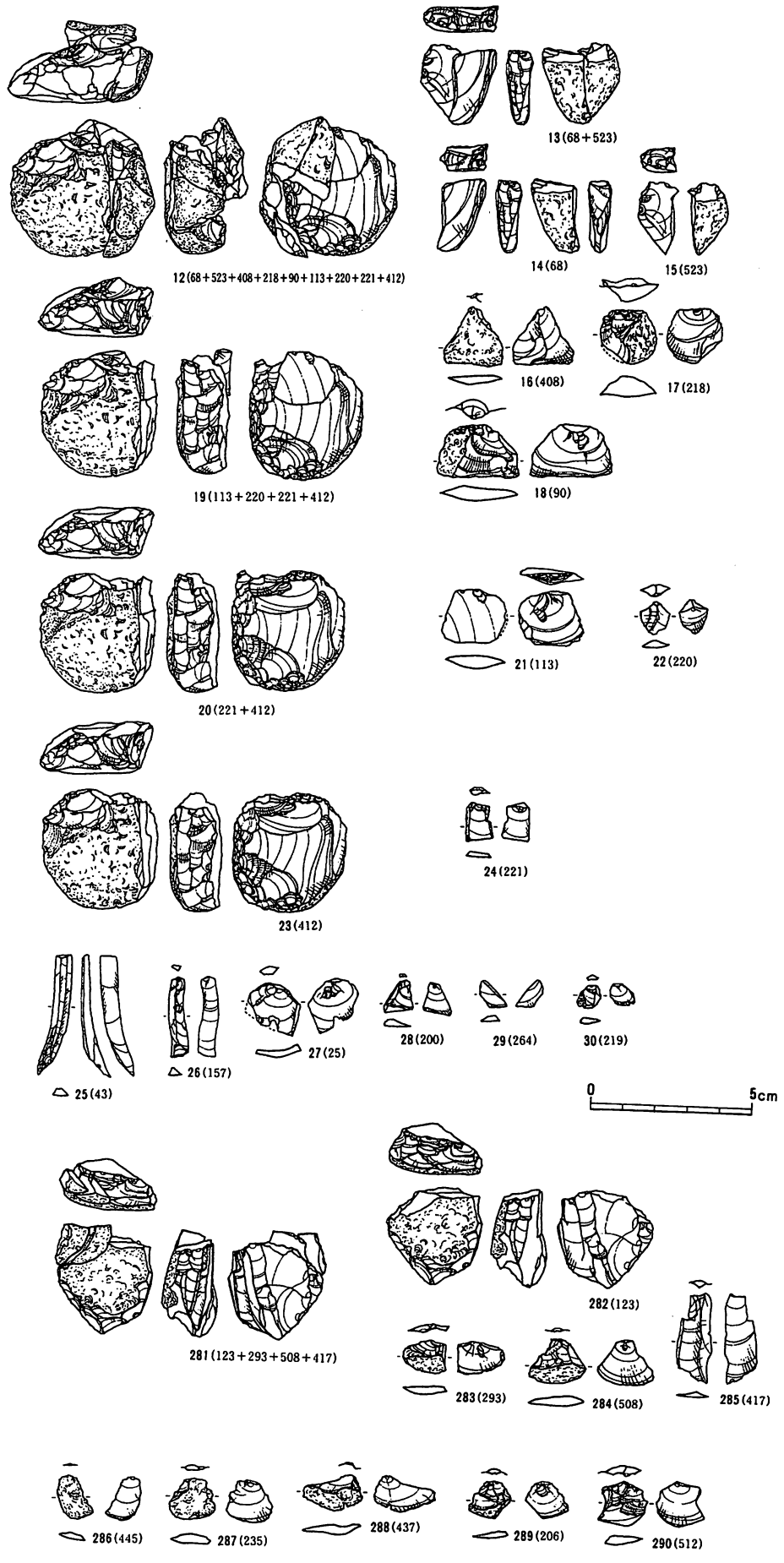


第 24 図　門田遺跡細石刃石器群

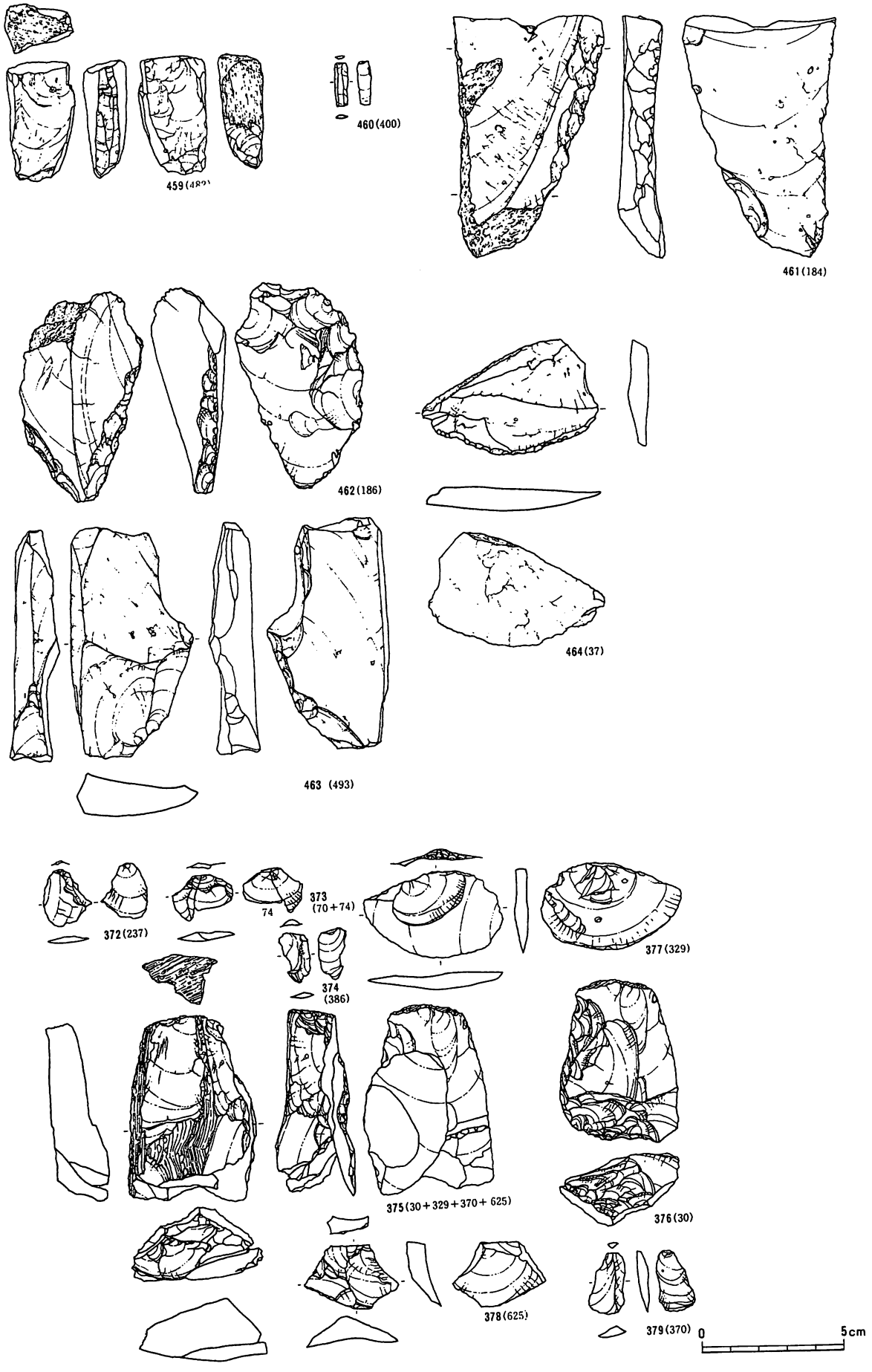


第 25 図　戸原遺跡細石刃石核（上段）、乙植木山城戸細石刃核（下段）

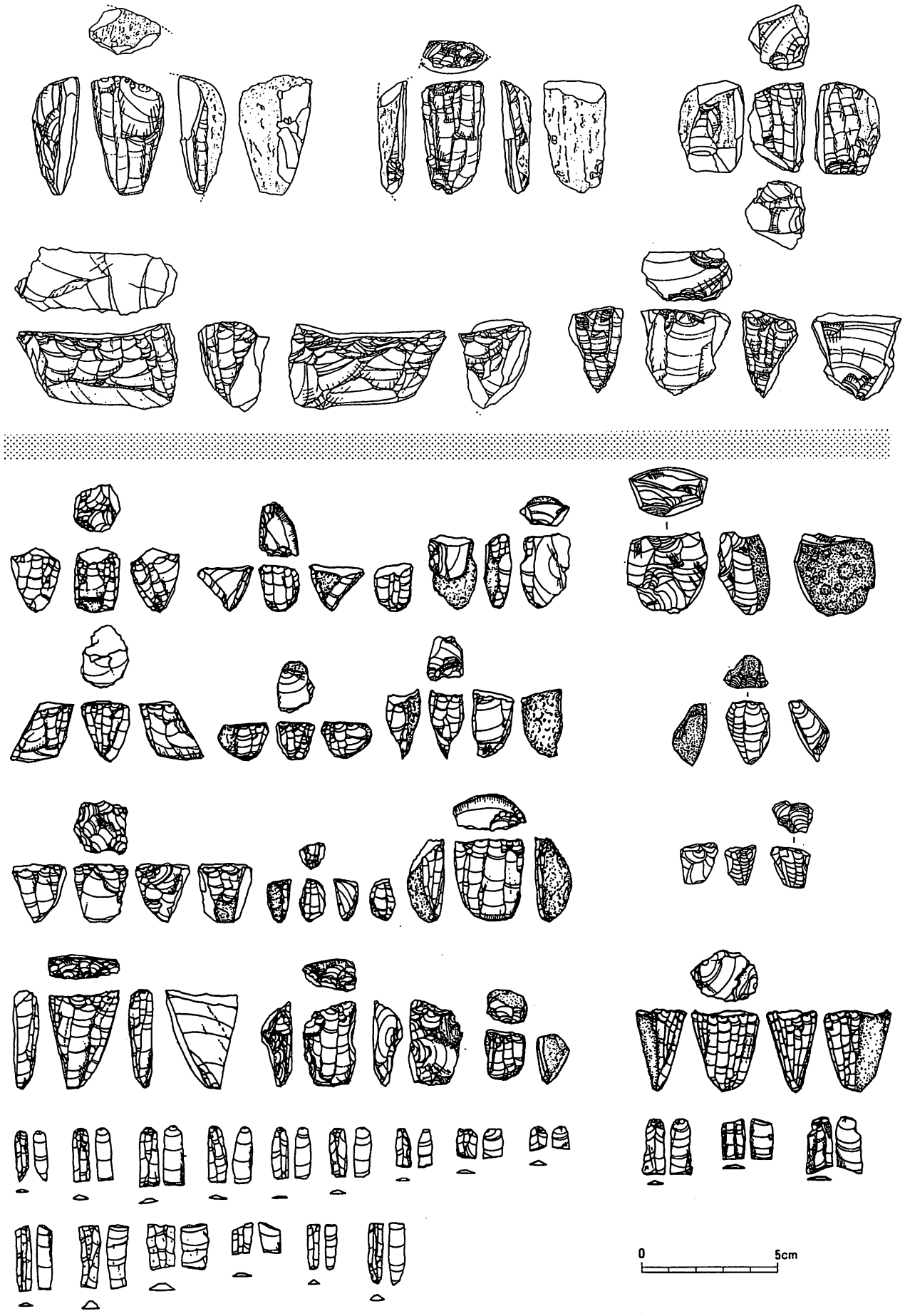
第 26 図　金山遺跡細石刃石器群



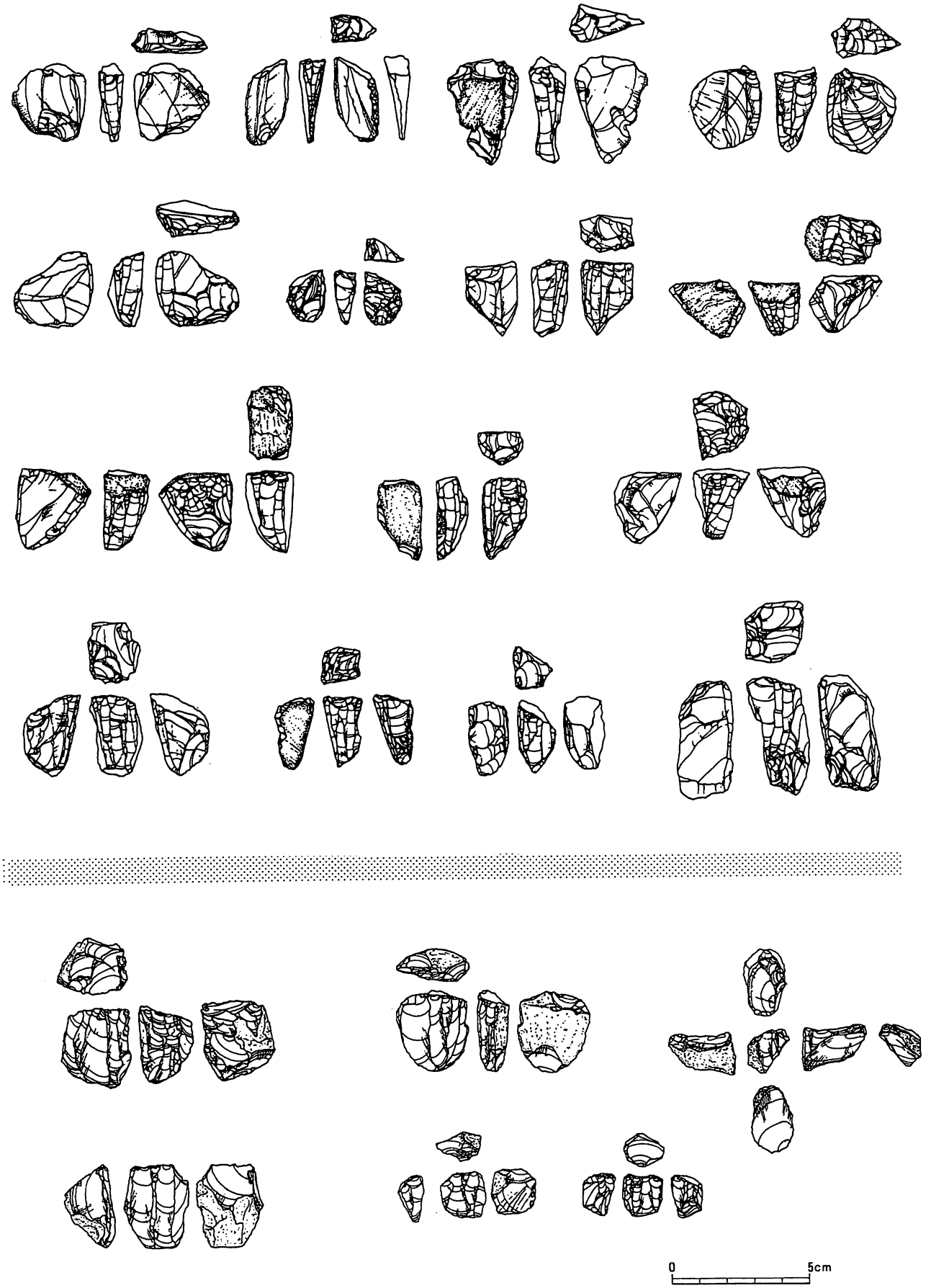
第 27 図　吉武遺跡細石刃石器群①



第 28 図　吉武遺跡細石刃石器群②

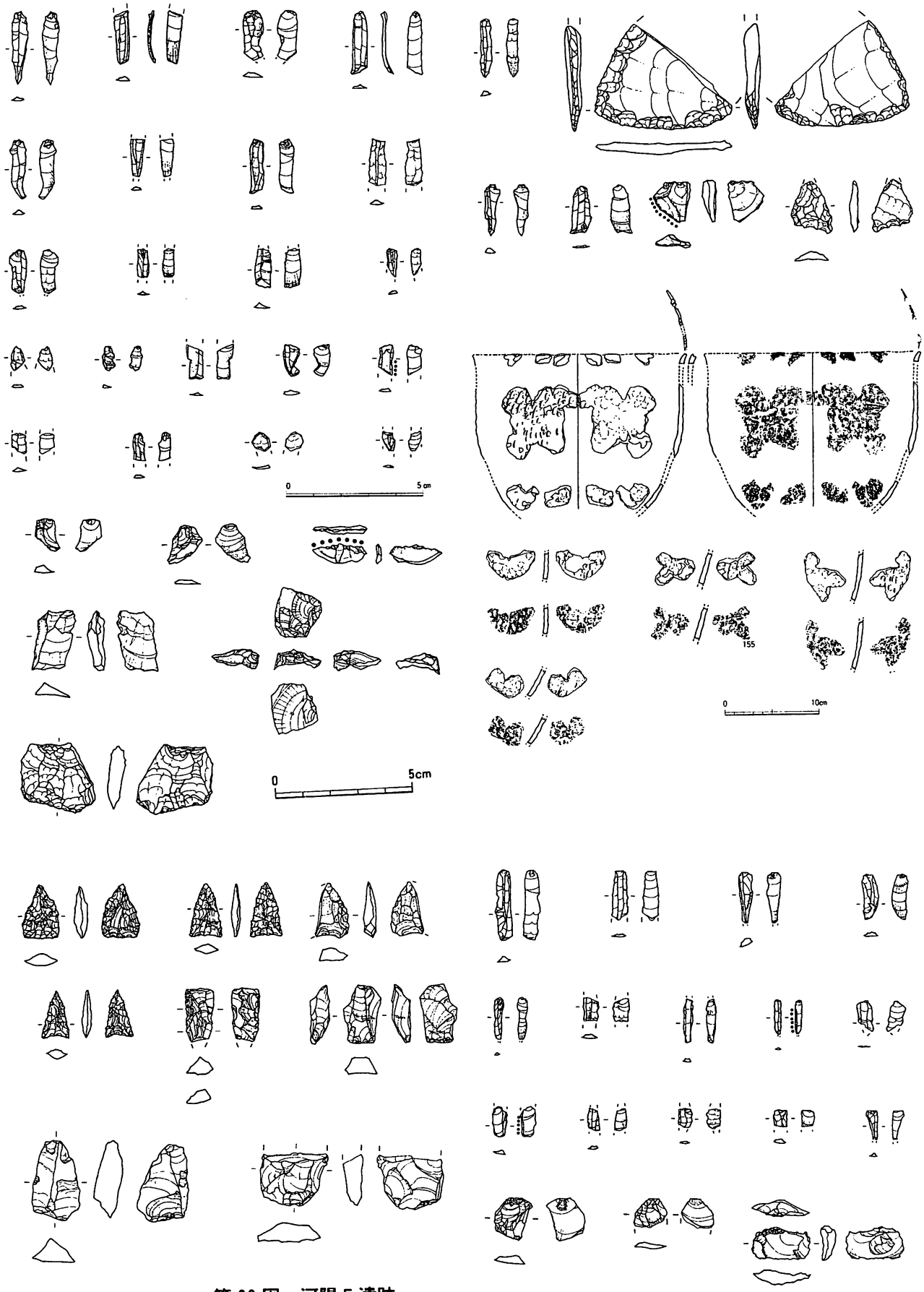


第29図　大坪遺跡（上段）、伊野A・B遺跡　（下段）

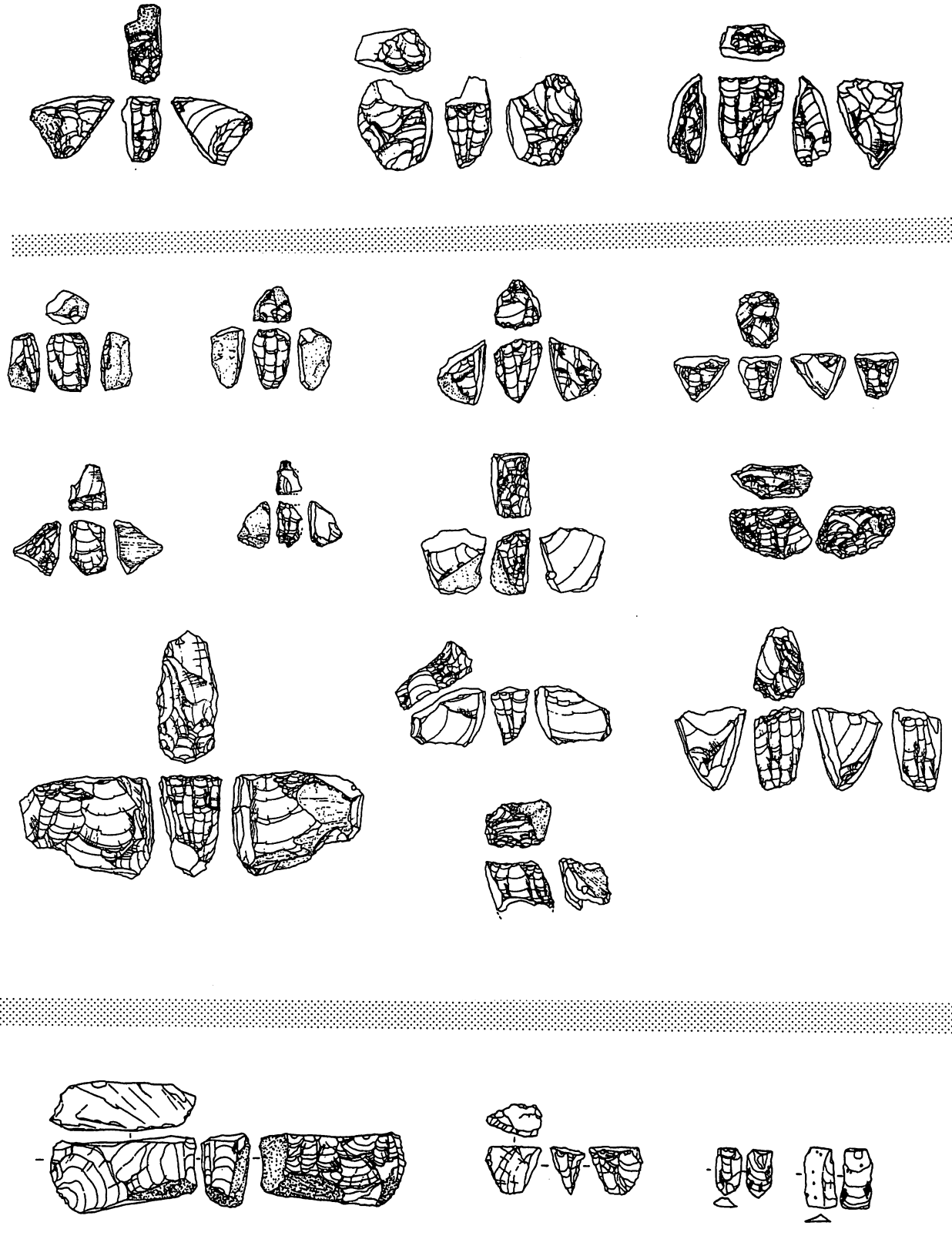


第 30 図　松島・小野崎遺跡（上段）、河原遺跡（下段）

第 31 図　河原 3 遺跡細石刃石器群



第 32 図　河陽 F 遺跡



第 33 図　大矢野原遺跡（上段）、谷尾崎遺跡（中段）、立神トドク遺跡（下段）

第2表　九州北部地域の細石刃石器群一覧表　（長崎1）

NO.	遺跡名	細石刃	細石核	削器	掻器	彫器	錐	楔形石器	打製石斧	局部磨製石斧	敲石	磨石	台石	ナイフ形石器	尖頭器	有舌尖頭器	石鏃	剥片	総計	石器集中	遺構	層位	標高	地域	年代	文献	備考
1	倉ノ首	○	○											○					?			表採	?m	北松浦半島～五島列島		長崎県教委1983	
2	コロノコ	○	○																?			表採	?m	北松浦半島～五島列島		長崎県教委1983	
3	福浦	○	○																?			表採	?m	北松浦半島～五島列島		長崎県教委1983	
4	長野北	○	○																?			表採	?m	北松浦半島～五島列島		長崎県教委1983	
5	早岡	○	○																?			表採	?m	北松浦半島～五島列島		長崎県教委1983	
6	城ヶ岳平子	98	29	3		1	1				2				1				786	3箇所	炉址	有	77m	北松浦半島～五島列島		下川達弥他1983	十器他4, ブランク24.
7	倉島																		?			表採	?m	北松浦半島～五島列島			
8	長崎鼻入口																		?			表採	8m	北松浦半島～五島列島			
9	長野原																		?			表採	90m	北松浦半島～五島列島			
10	長野																		?			表採	90m	北松浦半島～五島列島			
11	厄神社																		?			表採	15m	北松浦半島～五島列島			
12	志々岐神社																		?			表採	4m	北松浦半島～五島列島			
13	殿崎(1次)		1																1			有	5m	北松浦半島～五島列島		長崎県教委1986	
14	大坂	○	○							○					○				?			有	25m	北松浦半島～五島列島			
15	唐見崎大池	○	○																?			有	31m	北松浦半島～五島列島			
16	ヌゲ																		?			表採	15m	北松浦半島～五島列島			
17	矢櫃																		?			表採	3m	北松浦半島～五島列島			
18	寄神貝塚周辺		2																2			有・表採	16m	北松浦半島～五島列島		峰町教委1990	
19	茶園(V層)	422	29	7	4	3	50	2		1	3		1					11	1907	2箇所	炉址1, 土坑1	有	10m	北松浦半島～五島列島		川道寛1998	打面調整P9, 作業面調整P8, 不明82
	茶園(IV層)	738	14	1	7		47	3		2	1		1		17		4	14	2531	3箇所				北松浦半島～五島列島			ブランク10
20	丸尾	○																	?			表採	35m	北松浦半島～五島列島			
21	西ノ股																		?			表採	5m	北松浦半島～五島列島			
22	釣道																		?			表採	10m	北松浦半島～五島列島			
23	赤尾C	1	1																2			表採	25m	北松浦半島～五島列島			
24	上大垣	6																	6			有	78m	北松浦半島～五島列島		長崎県教委1992	
25	田崎	13	3		1	4									5		25		57			有	50m	北松浦半島～五島列島		長崎県教委1981	
26	中の原	129	3																132	1箇所		有	45m	北松浦半島～五島列島		萩原博文他1994	ナイフと併存
27	堤西牟田	2																	2	1箇所		有	30m	北松浦半島～五島列島		萩原博文1985	
28	津吉	9	2																11	1箇所		有	580m	北松浦半島～五島列島		萩原博文1986	
29	西中山		○																?			有	8m	北松浦半島～五島列島			
30	大戸																		?			有	60m	北松浦半島～五島列島		萩原博文他1990	
31	崎瀬第2																		?			表採	10m	北松浦半島～五島列島		萩原博文他1990	
	崎瀬第3																		?			表採	10m	北松浦半島～五島列島			
32	神の池A	○	○																?			表採	60m	北松浦半島～五島列島		萩原博文1991	
	神の池B	1																	1			有・表採	40m	北松浦半島～五島列島			
	神の池B(II)	3																	3				40m	北松浦半島～五島列島		萩原博文編1991	
33	上堤																		?			表採	?m	北松浦半島～五島列島			
34	浜柿池																		?			表採	120m	北松浦半島～五島列島			
35	長畑																		?			表採	100m	北松浦半島～五島列島			
36	長田池		1																1			表採	150m	北松浦半島～五島列島		下川達弥1985	
37	辻の尾	18	1																19			表採	20m	北松浦半島～五島列島		芝本一志・下川達弥1966	
38	牟田B	1	1																2			表採	20m	北松浦半島～五島列島		芝本一志・下川達弥1966	
39	大窄	1	2																3			表採	40m	北松浦半島～五島列島		松浦市教委1987	
40	宮ノ下	2	2															1	5			有	10m	北松浦半島～五島列島		松浦市教委1989	
41	北久保C		○																?			表採	25m	北松浦半島～五島列島			
42	池田C																		?			表採	15m	北松浦半島～五島列島			
	池田D																					表採	15m	北松浦半島～五島列島			
43	田川	1																	1			有	79m	北松浦半島～五島列島		松浦市教委1997	
44	姫神社																		?			表採	10m	北松浦半島～五島列島		下川達弥1984	
45	寺の尾A																		?			表採	85m	北松浦半島～五島列島		下川達弥1984	
46	提備田		2			○								○					2			有	9m	北松浦半島～五島列島		長崎県教委1985	
47	津崎		○																?			表採	30m	北松浦半島～五島列島			
48	白岳		1																1			有・表採	250m	北松浦半島～五島列島		長崎県教委1987	
49	堤原池																		?			表採	230m	北松浦半島～五島列島			
50	辻田池		1																1			表採	275m	北松浦半島～五島列島		長崎県教委1987	
51	福井洞穴(IV層)	○	○	○	○					○					○				?			有	100m	北松浦半島～五島列島		鎌木義昌・芹沢長介1965	
	福井洞穴(III層)	○	○	○															?						12,700±350B.P(C14)		
	福井洞穴(II層)	○	○	○															?						12,400±350B.P(C14)		
52	直谷岩陰	○	○																?			有	70m	北松浦半島～五島列島		日考協合同1967	
53	岩谷口第1岩陰		○																?			有	100m	北松浦半島～五島列島		九州旧文研1997	
54	黒石池																		?			表採	450m	北松浦半島～五島列島		九州旧文研1997	
55	観音木																		?			表採	630m	北松浦半島～五島列島		九州旧文研1997	
56	平川良池		1																1			表採	520m	北松浦半島～五島列島		九州旧文研1997	
57	坂山		2																2			表採	430m	北松浦半島～五島列島		九州旧文研1997	
58	牟田張		1																1			採集	320m	北松浦半島～五島列島		九州旧文研1997	
59	日ノ岳	○	○																?			有・表採	56m	北松浦半島～五島列島		長崎県教委1987	
60	野田		○																?			表採	50m	北松浦半島～五島列島		長崎県教委1987	
61	荻田		○																?			表採	125m	北松浦半島～五島列島		長崎県教委1987	
62	中瀬																		?			表採	30m	北松浦半島～五島列島		九州旧文研1997	
63	大崎																		?			表採	40m	北松浦半島～五島列島		九州旧文研1997	
64	里城址																		?			表採	40m	北松浦半島～五島列島		九州旧文研1997	
65	里田原	○	○																?			表採	40m	北松浦半島～五島列島		九州旧文研1997	
66	岳崎																		?			表採	30m	北松浦半島～五島列島		九州旧文研1997	
67	鴨山池																		?			表採	80m	北松浦半島～五島列島		九州旧文研1997	
68	泉福寺洞穴第1・2洞(11層)	28	13	38							1	5	1				12	3	618			有	90m	北松浦半島～五島列島		麻生優1984	石鏃混入, 砥石3, ブランク3, 原石3, その他9
	泉福寺洞穴第1・2洞(10c層)	429	78	44		2			4		2						2	6	2,760		焼土1, 土坑1						石鏃混入, ブランク23, その他17
	泉福寺洞穴第1・2洞(10a・b層)	815	68	27		1					6		4					33	4,121								石鏃混入, ブランク38, その他, 25
	泉福寺洞穴第1・2洞(8・7層)	666	12	16		1					4		2				2	49	2,962		焼土3,						石鏃混入, ブランク8, 原石2, その他12
	泉福寺洞穴第1・2洞(6層)	105	6	14											4		7	1	892		焼土2, 石組1 炭化物1						石鏃混入, ブランク2, その他22
	泉福寺洞穴第1・2洞(5層)	812	30	34		5			1		2		1		4				2,958		焼土19, 炉址6, 礫2, 敲石						ブランク5, その他30
	泉福寺洞穴第1・2洞(その他)	422	19															20	461								4層より上, ブランク20
	泉福寺洞穴第3洞(11層)	23	2	4														2	113								ブランク3
	泉福寺洞穴第3洞(10c層)	177	52	24		1			1		3							11	1,319		敲石上破損1, 焼土5						ブランク6, その他2
	泉福寺洞穴第3洞(10a・b層)	1,677	109	68		3			1		3	2						40	8,037		炉址3, 焼土2, 焼土2, 炭化物1				1,1840±740B.P (熱ルミネ)		ブランク18, 原石1, その他28
	泉福寺洞穴第3洞(9－7層)	8,890	329	181		8			4		15							165	36,754								ブランク108, 原石1, 砥石1, 矢柄研磨器2, その他169
	泉福寺洞穴第3洞(6層)	420	22	33		5			1		3				1			23	1,747								ブランク22, その他2
	泉福寺洞穴第3洞(その他)	188	3															8	199								4層より上
69	岩下洞穴		1																1			有	180m	北松浦半島～五島列島		麻生優1968	
70	菰田洞穴	4	1																5	1箇所		有	180m	北松浦半島～五島列島		佐世保市教委2003	3層は押型文, ほかブランク4
71	牟田原		1																1			表採	300m	北松浦半島～五島列島		中島真澄2002	
72	耳切		1																1			表採	320m	北松浦半島～五島列島		中島真澄2002	
73	中屋敷		○																?			表採	30m	北松浦半島～五島列島		中島真澄2002	
74	大潟																		?			表採	30m	北松浦半島～五島列島		中島真澄2002	
75	福田		1																1			表採	250m	北松浦半島～五島列島		中島真澄2002	
76	瀬戸越																		?			表採	140m	北松浦半島～五島列島		中島真澄2002	
77	矢峰																		?			表採	140m	北松浦半島～五島列島		中島真澄2002	
78	牟田堤	○	1																1			表採	240m	北松浦半島～五島列島		中島真澄2002	
79	相当原		1																1			表採	290m	北松浦半島～五島列島		中島真澄2002	
80	郷染谷		1							1									1			表採	525m	北松浦半島～五島列島		中島真澄2002	
81	烏帽子分校西方池		1																1			表採	430m	北松浦半島～五島列島		中島真澄2002	
82	皆瀬		2																2			表採	10m	北松浦半島～五島列島		中島真澄2002	
83	古里C		1												○				1			表採	45m	北松浦半島～五島列島		中島真澄2002	
	古里F																		?			表採	45m	北松浦半島～五島列島		中島真澄2002	
84	高島II		2																2			表採	15m	北松浦半島～五島列島		中島真澄2002	
85	西池	○	1		○										○				1			表採	60m	北松浦半島～五島列島		中島真澄2002	

第３表　九州北部地域の細石刃石器群一覧表　（長崎２）

		組成																									
NO.	遺跡名	細石刃	細石核	削器	掻器	彫器	錐	楔形石器	打製石斧	局部磨製石斧	礫器	磨石	敲石	ナイフ形石器	尖頭器	有舌尖頭器	石鏃	剥片	総計	石器集中	遺構	発掘	標高	地域	年代	文献	備考
86	焼野	○	1																1			表採	40m	北松浦半島～五島列島		中島真澄2002	
87	平川原		1																1			表採	?m	北松浦半島～五島列島		中島真澄2002	
88	ケイマンゴー																		?			有	50m	北松浦半島～五島列島		中島真澄2002	
89	小迎																		?			表採	40m	北松浦半島～五島列島		中島真澄2002	
90	串田池	5	1																6			表採	390m	北松浦半島～五島列島		中島真澄2002	
91	下宇戸		○																?			表採	350m	北松浦半島～五島列島		中島真澄2002	
92	濱場越		○																?			表採	390m	北松浦半島～五島列島		中島真澄2002	
93	松山	○	○																?			表採	100m	北松浦半島～五島列島		中島真澄2002	
94	牛石	○																	?			表採	40m	北松浦半島～五島列島		中島真澄2002	
95	下の原	○																	?			表採	25m	北松浦半島～五島列島		中島真澄2002	
96	上原(B地点)	19																	19			有	77m	北松浦半島～五島列島		長崎県教委1986	ナイフと併存
97	峰の前	○	1																1			表採	12m	北松浦半島～五島列島		中島真澄2002	
98	鹿ノ浦	○	○																?			表採	100m	北松浦半島～五島列島		中島真澄2002	
99	長与堂崎	21	28	2		3								3				3	64			有	50m	東彼杵・島原半島		長崎県教委1971	併存・表採
	長与堂崎(2次)	22	3																25			有	50m	東彼杵・島原半島		長与町教委1994	ナイフと併存
100	松山A(2·3層)	201	6		55						1			77	51				442	6箇所	集石6	有	60m	東彼杵・島原半島		長崎県教委1989	剥片尖頭器ナイフの時期併存、
101	里郷	12												11					23			有	117m	東彼杵・島原半島		長崎県教委1991	併存
102	遠目	4	2												○				6			有	560m	東彼杵・島原半島			
103	鍋打池																		?			表採	280m	東彼杵・島原半島			
104	大久保	25																	25			有	60m	東彼杵・島原半島		長崎県教委1991	併存
105	小菌	4	2																6			有	30m	東彼杵・島原半島		長崎県教委1991	併存
106	野岳	○	24	2											2				28			表採	260m	東彼杵・島原半島		鈴木忠司1971	
107	鵜石	2																	2			有	86m	東彼杵・島原半島		長崎県教委1983	併存
108	桜A遺跡	3	1																4			有	80m	東彼杵・島原半島		長崎県教委1983	併存
109	上水計	3																	3			有	70m	東彼杵・島原半島		長崎県教委1983	併存
110	島越	1																	1			有	45m	東彼杵・島原半島		長崎県教委1984	併存
111	嶽ノ下A	6																	6			有	37m	東彼杵・島原半島		長崎県教委1985	併存
112	野田古墳	4	1																5			有	70m	東彼杵・島原半島		長崎県教委1989	石鏃併存
113	葛城	1																	1			有	50m	東彼杵・島原半島		長崎県教委1990	併存
114	野田A	9	1																10			有	55m	東彼杵・島原半島		長崎県教委1990	併存
	野田B	1																	1			有	45m	東彼杵・島原半島		長崎県教委1990	併存
115	野田の久保	14	1												14				29			有	99m	東彼杵・島原半島		長崎県教委1989	併存
116	上八竜	1																	1			有	100m	東彼杵・島原半島		長崎県教委1991	併存
117	野岳平	○																	?			表採	265m	東彼杵・島原半島		長崎県教委1989	
118	鍋山	○	○																?			表採	270m	東彼杵・島原半島		長崎県教委1989	
119	大似田堤	○																	?			表採	80m	東彼杵・島原半島		長崎県教委1989	
120	ホーズキ谷		○																?			表採	150m	東彼杵・島原半島			
121	西輪久道	348	23	2	2									18					393	1箇所		有	30m	東彼杵・島原半島		長崎県教委1983	ナイフ・台形石器と併存
	西輪久道(上層)	33	1		2									13					49	4箇所	礫群1	有	24m	東彼杵・島原半島		長崎県教委1985	ナイフ・台形石器と併存
	西久輪道(下層)	4												6					10	3箇所	礫群2	有					ナイフ・台形石器と併存
	西輪久道(II層)	23												12					35			有					ナイフ・台形石器と併存
	西輪久道(表採)	5	1																6			有					
122	雀ノ倉	8												9					10			有	15m	東彼杵・島原半島		長崎県教委1981	ナイフ形石器と併存
123	浜田	1																	1			有	25m	東彼杵・島原半島		長崎県教委1981	ナイフ形石器と併存
124	石原	1																	1			有	65m	東彼杵・島原半島		長崎県教委1981	併存
125	東大久保		○																?			表採	7m	東彼杵・島原半島		長崎県教委1985	
126	岩下	2																	2			有	67m	東彼杵・島原半島		長崎県教委1984	併存
127	平	29	1																30			有	27m	東彼杵・島原半島		長崎県教委1983	縄文早期に混入
128	鷹野A(III層)	677	8															4	689	2箇所	炉址	有	35m	東彼杵・島原半島		長崎県教委1986	併存、石鏃のうちブランク3
129	鷹野B	34												20					54			有					併存
130	平山B	2																	2			有	50m	東彼杵・島原半島		諫早市教委1981	併存
131	位牌塔		2																2			表採	310m	東彼杵・島原半島			
132	峰の原	○																	?			有	70m	東彼杵・島原半島			
133	下峰原(3層)	26																	26			有	76m	東彼杵・島原半島			
	下峰原(2層)	126	3																130								
134	柿泊(B-1)	31	1											3					35		土坑3	有	141m			長崎市教委1997	ナイフと併存
	柿泊(B-3)	4													3				7		土坑3、焼土1						ナイフと併存
	柿泊(C-1)	2																	2								ナイフと併存
	柿泊(D)	6																	6		土坑12、炉址2						
135	平床B																		?			表採	20m	東彼杵・島原半島		九州旧文研1997	
136	竿ノ浦		○																?			表採	30m	東彼杵・島原半島		九州旧文研1997	
137	平木場		1																1			表採	20m	東彼杵・島原半島		九州旧文研1997	
138	重篭	5	3																8			有・表採	265m	東彼杵・島原半島		重篭遺跡発掘調査団2002	併存、細石刃1出土
139	杉峰城		1																1			有	35m	東彼杵・島原半島		長崎県教委1995	併存
140	百花台(II)	145	17	2		2								4					180	2箇所		有	210m	東彼杵・島原半島		和島誠一ほか1963麻生優ほか1976	
	百花台(A·D·ETrIII層)	3	1																4	1箇所		有	216m			松藤和人編1994	細石刃核は攪乱中、同大調査
	百花台(BTrI－III層)	5																	5			有	217m				
	百花台S	24	18															1	37			表採	200m			小畑弘己1982	
	百花台D(D区II－V層)	6	3																9			有	230m			長崎県教委1988	1982－85調査(公開)、併存出土
	百花台B·C·D(1地区II層)	34	53																88			有	190m			長崎県教委1994	1983－85調査(県調)
	百花台B·C·D(1地区III層)	48	28																77			有					1983－85調査(県調)
	百花台B·C·D(1地区IV層)	7																	7			有					1983－85調査(県調)
	百花台B·C·D(2地区II層)	46	23																69			有	210m				1983－85調査(県調)
	百花台B·C·D(2地区V層)		1																1			有					1983－85調査(県調)
	百花台B·C·D(2地区VI層)		1																1			有					1983－85調査(県調)
141	小ヶ倉A	○	1																400＋α			有	150m			辻田直人2002	
142	小ヶ倉B		1																1			有	150m				
143	猪の瀬	○																	?			表採	?m	東彼杵・島原半島			
144	今福	6																	6			有	20m	東彼杵・島原半島			併存
145	原の辻(2次)		2																2			有・表採	13m	東松浦半島		長崎県教委1977	表採
	原の辻	1	2																3			有	6m			長崎県教委1999	併存、1998調査
	原の辻		2																2			有	6m			長崎県教委2001	併存、2000調査
	原の辻		1																1			有	7m			長崎県教委2002	併存、2001調査
146	神田																		?			表採	40m	東松浦半島			
147	カラカミ																		?			表採	80m	東松浦半島		勝本町教委1985	
148	興触																		?			表採	13m	東松浦半島			
149	車出		1																1			有	17m	東松浦半島		長崎県教委1998	併存

第４表　九州北部地域の細石刃石器群一覧表　（佐賀）

		組成																										
NO.	遺跡名	細石刃	細石核	削器	掻器	彫器	錐	楔形石器	打製石斧	局部磨製石斧	礫器	敲石	砥石	ナイフ形石器	尖頭器	有舌尖頭器	石鏃	剥片	土器	総計	石器集中	遺構	発掘	標高	地域	年代	文献	
150	殿の浦岡A	○												○									表採	40m	東松浦半島			
151	殿の浦岡B		○																				表採		東松浦半島		佐賀県教委1981	
152	井樋田C		○																				表採	25m	東松浦半島		佐賀県教委1981	
153	丸林	○																					表採		東松浦半島		鎮西町教委1990	
154	早ケ田	2															14			20	1箇所		有	146m	東松浦半島			
155	境木場	43	1			1								5			2		隆線1、無文3	56			有	143m	東松浦半島		鎮西町教委1989	
156	中川原西（第2層）	4		4										3					刺突1条痕2、	14	1箇所	配石1土坑6	有	148m	東松浦半島		鎮西町教委1988	
	中川原西（第3層）	6										1	1	1						12								
	中川原西（第4層）													3						3								
157	古里	○												○			○						表採	45m	東松浦半島		佐賀県教委1981	
158	早田	○												○			○						表採	130m	東松浦半島		佐賀県教委1981	
159	藤原	○	○											○			○						表採	118m	東松浦半島		佐賀県教委1981	
160	中川原B		○																				表採	130m	東松浦半島		佐賀県教委1981	
161	中川原	○		○								○		○									表採	118m	東松浦半島		佐賀県教委1981	
162	原A	61	2											7						571			有	120m	東松浦半島			
	原B	243	5											16						1215								
163	畦木場	2	○											2									表採	125m	東松浦半島		佐賀県教委1981	
164	平尾野	10		1	2		1							○			3			17			有	140m	東松浦半島		堀苑孝志1994	
165	丹土	2	1											16						25			有	125m	東松浦半島		佐賀県教委1981	
166	敷田	7												20						27			表採	80m	東松浦半島		佐賀県教委1981	
167	三枚溜北	○				○								○			○						表採	170m	東松浦半島		佐賀県教委1981	
168	大島第三	○		○		○																	表採	240m	東松浦半島		佐賀県教委1981	
169	大島溜東	○		○																			表採	200m	東松浦半島		佐賀県教委1981	
170	日の出松		3											○						3			表採	100m	東松浦半島		佐賀県教委1981	
171	赤坂Ⅲ	1	1											4								土壙4	有	185m	東松浦半島		松尾法博1997	
172	頭無溜周辺		1																	1			表採	183m	東松浦半島		高橋慎二2001	
173	小平	20												○						20			有		東松浦半島		綿貫俊一1993	
174	入野東部	○															○						表採	90m	東松浦半島			
175	鶴牧西	○												○			○						表採	110m	東松浦半島		佐賀県教委1981	
176	鶴牧北部第Ⅰ、Ⅱ	○												○									表採	95m	東松浦半島		佐賀県教委1981	
177	小太郎	○												○									表採	170m	東松浦半島		佐賀県教委1981	
178	大浦溜周辺	3												4						3			表採	207m	東松浦半島		高橋慎二2001	
179	サカセ溜4	○	○														○						表採	180m	東松浦半島		佐賀県教委1981	
180	サカセ溜1	○	○														○						表採	180m	東松浦半島		佐賀県教委1981	
181	小萬1	○		○										○			○						表採	170m	東松浦半島		佐賀県教委1981	
182	楠谷	○	○																				表採	120m	東松浦半島		佐賀県教委1981	
183	鶴牧北部第Ⅵ	○				○											○						表採	100m	東松浦半島		佐賀県教委1981	
184	納所小北部	○																					表採	90m	東松浦半島		佐賀県教委1981	
185	磯道	58	2																	60	5箇所		有	130m	東松浦半島		佐賀県教委1981	
186	上倉溜周辺	○												○									表採	180m	東松浦半島		佐賀県教委1981	
187	高地木場	2												5			33						表採	180m	東松浦半島		佐賀県教委1981	
188	八斗蒔3	○												○			○						表採	175m	東松浦半島		佐賀県教委1981	
189	古保志気西第Ⅰ		○														○						表採	120m	東松浦半島		佐賀県教委1981	
190	古保志気西第Ⅲ	細石核調整剥片																					表採	80m	東松浦半島			
191	塔木池西方第2	○	○											○			○						表採	175m	東松浦半島		佐賀県教委1981	
192	八折栄		○																				有	190m	東松浦半島		佐賀県教委1981	
193	池ノ田	11		33		3						5		27			74			153			有	95m	東松浦半島		松尾法博1986	
194	川原田	135	3	15		2								21						171	2箇所	2箇所	有	186m	東松浦半島		松尾吉高1983	
195	生石	176	1											54						231	5箇所		有	190m	東松浦半島		佐賀県立博物館1979	2·3文化層から旧石器
196	新木場東	201		7		1								14			12			236	2箇所	2箇所	有	170m	東松浦半島		藤井裕司1991	遺構不明確
197	押川		2																	2			有		東松浦半島		綿貫俊一1993	
198	馬川谷口1·2区	89	9			4								34					押型・条痕	136			有	250m	東松浦		武谷和彦・徳富則久2001	縄文包含層
199	荒川峠		○														○			表採				600m	東松浦		武谷和彦・徳富則久2001	
200	霧透A					4		4						3			7			18			有・表採	130m	東松浦半島		田島龍太他1998	
201	野原	3					1										2			5			有	137m	東松浦半島		仁田坂聡2000	
202	馬館																						表採	138m	東松浦半島			
203	枝去木分校入口		2											○						2			表採	100m	東松浦半島		綿貫俊一1993	
204	枝去木牟田ノ辻																						有	130m	東松浦半島			
205	枝去木辻																						表採	100m	東松浦半島			
206	笹ノ尾	4				5								1						10			有	150m	東松浦半島		唐津市教委1998	
207	八幡溜	19	1			2								5						27			有・表採	129m	東松浦半島		高橋慎二1995	
208	八幡溜中島	2												2						6			表採	130m	東松浦半島		高橋慎二1995	
209	佐志田																						表採	150m	東松浦半島			
210	一本松	3																		3			表採	148m	東松浦半島		綿貫俊一1993	
211	石ケ元下道	85	9											○						94			有	165m	東松浦半島			混在
212	菅牟田馬館	56	1	4	1	3								10						388	3箇所		有	220m	東松浦半島		唐津市教委1985	
213	菅牟田西山		1	21	2	2		2						27			25		押型文4	113	3箇所		有	207m	東松浦半島		田島龍太2000	混在
214	荒谷	1												4						5			表採	210m	東松浦半島		佐賀県教委1981	
215	馬場野ゴルフ場		1																	1			表採	135m	東松浦半島		綿貫俊一1993	
216	湊中野																						表採	？m	東松浦半島			
217	馬部甚蔵山	13	5			67											42		船元類似	189	2a層8、・2b層6	3箇所	有	127.7m	東松浦半島		田島龍太1988	
218	枝去木山中	52	1	○	○									○						53	3箇所	3箇所	有	132m	東松浦半島		綿貫俊一1993	
219	中尾二ッ枝	96	15			7						1	3							154			有	150m	東松浦半島			
220	コクダシ	15	1											1						17			有		東松浦半島		唐津市教委1984	
221	熊ノ峰北	○	○											○			○						表採	200m	東松浦半島		佐賀県教委1981	
222	兎田	○												○									表採	135m	東松浦半島		鎮西町教委1990	
223	イッカン田	○												○									表採	135m	東松浦半島		鎮西町教委1990	
224	竹木場前田	105	4											○				3	112		2箇所		有	200m	東松浦半島			
225	大の馬場	○																					表採	190m	東松浦半島		唐津市史復刻版1991	
226	唐ノ川高峰		2																	2	2箇所		有	180m	東松浦半島		田島龍太1996	混在
227	唐ノ川丸尾	17	1			3								7			18			48	2箇所		有	157m	東松浦半島		田島龍太1997	混在
228	梨川内村前	20	2														25			47			有	113m	東松浦半島		内田孔明1996	
229	東山Ⅰ	91	4											1						96			有	207m	東松浦半島		田島龍太2001	
230	白蛇山岩陰	16	2		1															19			有		東松浦半島		綿貫俊一1993	
231	大光寺																						有		東松浦半島			
232	寺尾		1																	1			表採		東松浦半島		綿貫俊一1993	
233	ヤセギア		3																	3			表採		東松浦半島		綿貫俊一1993	
234	小路		1																	1			表採		東松浦半島		綿貫俊一1993	
235	山王	5	1																	6			有		東松浦半島		綿貫俊一1993	
236	西下	2	2																	4			有		東松浦半島			
237	広田	9	5																	14					東松浦半島			
238	横分	4	4																	8			有・表採		東松浦半島		綿貫俊一1993	
239	東分		1																	1			表採	50m	筑後川流域		綿貫俊一1993	
240	篠附E	1																		1			有		筑後川流域		綿貫俊一1993	
241	山古賀	1																		1			有		筑後川流域		綿貫俊一1993	

第５表　九州北部地域の細石刃石器群一覧表　（福岡）

		組								成																		
NO.	遺跡名	細石刃	細石核	削器	掻器	彫器	錐	楔形石器	打製石斧	局部磨製石斧	礫器	磨石	敲石	ナイフ形石器	尖頭器	有舌尖頭器	石鏃	剥片	土器	総計	石器集中	遺構	発掘	標高	地域	年代	文献	備考
242	片行		1																	1			有	29m	周防灘沿岸		山口信義1983	
243	平尾台	8	1																	1			表採	90m	周防灘沿岸		小池史哲1993	
244	青畑向原	○																					有	45m	周防灘沿岸		豊前市教委1999	ナイフ形石器と混在
245	原池		1																	1			表採	？m	周防灘沿岸		栗焼憲児1981	
246	池田池		1																	1			表採	？m	周防灘沿岸		小池史哲1993	縄紋谷製船野型
247	湯無田	1																		3			有	50m	周防灘沿岸		福岡県教委2003	原位置遊離
248	鏡塚	2																		2			有	21m	福岡平野周辺部		岡垣町教委1999	混在
249	汐井掛	6	1															1		8			有	77m	福岡平野周辺部		福岡県教委1979	混在
250	平等寺原		1																	1			表採	30m	福岡平野周辺部		平ノ内幸治1997	
251	峠下池		7											1						8			表採	？m	福岡平野周辺部		松尾健二ほか1994	
252	相島		1																	1			表採	？m	福岡平野周辺部		石井1997	
253	松ヶ上	3	1																	5			有	40m	福岡平野周辺部		志免町教委1996	混在
254	横枕	8	11					1												22			有	5m	福岡平野周辺部		志免町教委12003	
255	湖尻池		1																	1			有	55m	福岡平野周辺部		宇美町教委1984	
256	乙植木山城戸	37	11	3	3			1							1			5		62			有	37m	福岡平野周辺部		中間1995	
257	戸原		52																				表採	9m	福岡平野周辺部		平ノ内1989	
	三苫	10	3																	9	1箇所		有	5m	福岡平野周辺部		福岡市教委1996	
258	三苫	○	1																	1	1箇所		有				福岡市教委2003	
259	蒲田		3																	3			有	30m	福岡平野周辺部		福岡市教委1976	
260	板付		2																	2			有	8m	福岡平野周辺部		福岡市教委1977	
261	笹原2次		1																	1			有	12m	福岡平野周辺部		福岡市教委2000	
	笹原3次		1																	1								
262	諸岡	2	3																	7			有	20m	福岡平野周辺部		福岡市教委1980	
263	井尻B	24	2			1														27			有	15m	福岡平野周辺部		山口譲治1988	
	井尻B(6次)		1																	1			有					
264	日佐		1																	1			有	14m	福岡平野周辺部		山口譲治1988	
265	弥永B地点		1																	1			有	17m	福岡平野周辺部		福岡市教委1976	
266	麦野B	2																		2			有	18m	福岡平野周辺部			
267	野多目A 6次	9	2	1										1						30	1箇所	集石	有	14m	福岡平野周辺部		福岡市教委1999	ナイフ形石器と混在
268	有田		1											1						7			有	7m	福岡平野周辺部		福岡市教委1977	
269	笠間谷		1																	1			有	？m	福岡平野周辺部		福岡市教委1990	
270	羽根戸		1																	1			表採	58m	福岡平野周辺部			
271	吉武高木	87	29	7														7		624	2箇所		有	28m	福岡平野周辺部		福岡市教委2002	
272	湘江谷		1																	1			有	44m	福岡平野周辺部		福岡市教委2002	
273	飯氏	2	2	2											1					9			有	30m	福岡平野周辺部		福岡市教委1994	
274	脇山		1																	1			有	69m	福岡平野周辺部			
275	大原D4・14次	30	14														398		無文	442			有	33m	福岡平野周辺部		福岡市教委2003	
	大原D15次		1																	1			有					
276	元岡3次		1																	1			有	20m	福岡平野周辺部			
277	柏原N	21	3		1													3		28			有	20m	福岡平野周辺部		福岡市教委1988	
278	門田(辻田地区)	16	23	1		1								○						40			有	30m	福岡平野周辺部		福岡県教委1977	
	門田(門田地区)	35 192	9 6	1										○						242							木下修1974	
	門田(谷地区)	103	97	1						1				○						202								
279	柏田	2	2																	4			有	25m	福岡平野周辺部		福岡県教委1977	
280	向谷北	2																		2			有	40m	福岡平野周辺部			
281	大宰府条坊	11	3			1												2		17			有	30m	福岡平野周辺部		太宰府市史編纂室1992	福井型
282	萩原	○	3																	3			有・表採	65m	福岡平野周辺部		筑紫野市史編纂室2001	
283	野黒坂	○	6											○						6			有	50m	福岡平野周辺部		福岡県教委1970	ナイフと混在
284	峠山A	35	2		4									3	2					66			有	50m	福岡平野周辺部		別府大考古研究室1973	ナイフと混在
	峠山B	8	1		1	1								1	1					38								ナイフと混在
	峠山C	5			1	1								3	1					92								ナイフと混在
	峠山D	8	1		1	1														71								ナイフと混在
	峠山	2																		2			表採					
285	中原	3	1											○	○					3			表採	？m	福岡平野周辺部		筑紫野市史編纂室2001	ナイフと混在
286	隈・西小田13		1																	1			有	40m	福岡平野周辺部		筑紫野市史編纂室2001	混在
287	原田地区47	○																		?			有	？m	福岡平野周辺部		筑紫野市史編纂室2001	
288	諸田仮塚		2		1	1								○				1		5			有	50m	福岡平野		福岡県教委1998	細石刃核はブランク2
289	城山	11	3																	12			表採	50m	福岡平野周辺部		筑紫野市史編纂室2001	
290	本宮		1																	1			有	60m	筑後川流域		夜須町教委1999	原位置遊離
291	金山	92	19	3																270			表採	30m	筑後川流域		小畑・杉原1996	ブランク2
292	中島堤		1																	1			表採	50m	筑後川流域		福岡県教委1970	
293	原の東		1																	1			有	60m	筑後川流域		福岡県教委1999	
294	鎌塚		1																	1			有	55m	筑後川流域		福岡県教委1977	
295	金場	29																		29			有	60m	筑後川流域		福岡県教委1999	
296	矢野竹	2																		2			有	165m	筑後川流域		松尾尚1996	原位置遊離
297	津古	3	1																	4			表採	40m	筑後川流域		福岡県教委1970	
298	下高橋	1			1															2			有	？m	筑後川流域		福岡県教委1997	
299	春園(2層上下)	140	2	3		1								3						1062			有	17m	筑後川流域		福岡県教委1993	
300	赤坂		1																	1			表採	37m	筑後川流域		富永直樹1981	
301	松葉スワ池	1																		1			表採	40m	筑後川流域			
302	甲塚(1次)	○	2																	2			有	38m	筑後川流域		福岡県教委1970	
303	穴口	1	1																	3			有	10m	筑後川流域		久留米市教委1989	
304	安国寺(2次)		1																	1			有	8m	筑後川流域		久留米市教委1984	ブランク
305	ひょうたん山	4	1	1	1															6			有	50m	筑後川流域		富永直樹1981	
306	二本木(10次)	1																		1			有	27m	筑後川流域		久留米市教委1996	
307	庄屋野(3次)		1																	1			有	10m	筑後川流域		久留米市教委1989	
308	野口		2																	2			有	9m	筑後川流域		久留米市教委1981	1点はブランク
309	横道9次	1																		1			有	26m	筑後川流域		久留米市教委1999	
310	新川A	1	1																	2			有	？m	筑後川流域		浮羽町教委1997	混在
	新川B	10	1																	11								
311	立山山	2																		2			有	80m	筑後川流域		八女市教委1983	混在
312	鶴田牛ヶ池	2	2																	4			有	14m	筑後川流域		筑後市教委2002	
313	水田杉ノ元	2																		2			有	8m	筑後川流域		筑後市教委2002	
314	一木	1																		1			有	250m	筑後川流域		木下修編1983	
315	大草平	8	4	2	1									○						15			有	555m	筑後川流域		木下修編1983	
	大草平	13	5		1															19			有					攪乱・その他
316	高石原																						表採	95m	筑後川流域			
317	湘山																						有	40m	筑後川流域			

第６表　九州北部地域の細石刃石器群一覧表　（大分）

		組成																										
NO.	遺跡名	細石刃	細石核	削器	掻器	彫器	錐	楔形石器	打製石斧	局部磨製石斧	礫器	磨石	敲石	ナイフ形石器	尖頭器	有舌尖頭器	石鏃	剥片	土器	総計	石器集中	遺構	礫群	標高	地域	年代	文献	備考
318	田代A	○	○																					240m	筑後川流域		吉留秀敏1983	
	田代B	○																						230m	筑後川流域		吉留秀敏1983	
319	二串西原	○	○																				有	170m	筑後川流域		吉留秀敏1983	
320	荻尾	○	○																					110m	筑後川流域		吉留秀敏1983	
321	長者原B	○																						110m	筑後川流域		吉留秀敏1983	
322	松野原	○																						180m	筑後川流域		吉留秀敏1983	
323	一尺八寸山		○																					510m	筑後川流域		吉留秀敏1983	
324	五馬大坪	40	5																	45			有	380m	筑後川流域		綿貫俊一ほか1989	
325	宇土	20		3	2								3							33	1箇所		有	400m	筑後川流域		綿貫俊一ほか1986	
326	芋作台	○																						430m	筑後川流域		吉留秀敏1983	
327	烏ヶ塚	○	○																					550m	筑後川流域		吉留秀敏1983	
328	見竹	○																						510m	筑後川流域		吉留秀敏1983	
329	貸田台	○																						580m	筑後川流域		吉留秀敏1983	
330	亀石山	○	○										○										有	830m	筑後川流域		吉留秀敏1983 今田秀樹2002	
331	ノウサン		○																					660m	筑後川流域		吉留秀敏1983	
333	平草	32	3		1									1						37	1箇所		有	680m	筑後川流域		栗田勝弘1982	
334	塚田	○																						630m	筑後川流域		吉留秀敏1983	
335	四日市	○																					有	350m	筑後川流域			

第７表　九州北部地域の細石刃石器群一覧表　（熊本）

		組成																										
NO.	遺跡名	細石刃	細石核	削器	掻器	彫器	錐	楔形石器	打製石斧	局部磨製石斧	礫器	磨石	敲石	ナイフ形石器	尖頭器	有舌尖頭器	石鏃	剥片	土器	総計	石器集中	遺構	礫群	標高	地域	年代	文献	備考
336	麻生鶴A	2	1																	3			散礫	660m	筑後川流域		阿蘇狩人の会1999	
337	平山宿																						散礫	50m	菊池川流域		肥後考古学会編1995	詳細不明
338	中原	○	2																				散礫	30m	菊池川流域		高木正文・村木秀昭 1971	
339	長沖		1																				散礫	60m	菊池川流域		平岡勝昭1960	
340	瘤生下原		1																				散礫	55m	菊池川流域		富田紘一1976	
341	松島・小野崎	○	50＋α											○									散礫	50m	菊池川流域		肥後考古学会編1995	
342	伊野A	4(300)	2(11)																	6(311)			有・散礫	500m	菊池川流域		肥後考古学会編1995	
343	伊野B	4	1																	5			散礫	600m	菊池川流域		肥後考古学会編1995	
344	湯浦	○	1																	1			散礫	520m	阿蘇外輪周辺		肥後考古学会編1995	
345	長倉坂	1																		1		炉址	散礫	960m	阿蘇外輪周辺		阿蘇狩人の会1999	
346	大平	1																		1			散礫	670m	阿蘇外輪周辺		阿蘇狩人の会1999	
347	合鶴群C		○																				散礫	780m	阿蘇外輪周辺			
348	菅無田	12	1																	13			散礫	750m	阿蘇外輪周辺		阿蘇狩人の会1999	
349	大野		1																	1			散礫	610m	阿蘇外輪周辺		九州旧文研1997	
350	桑鶴土橋	11	2																	20		炉址？	有	230m	阿蘇外輪周辺		白木原和美他1978	
351	桑鶴小森	1																		1			散礫	？m	阿蘇外輪周辺		九州旧文研1997	採集地・詳細不明
352	桑鶴古屋敷																						散礫	290m	阿蘇外輪周辺		肥後考古学会編1995	詳細不明
353	千人塚																						散礫	270m	阿蘇外輪周辺			詳細不明
354	別辻																						散礫	160m	阿蘇外輪周辺			詳細不明
355	古池さん	○												○									散礫	350m	阿蘇外輪周辺		村崎孝宏1997	
356	谷頭		1																	1			散礫	400m	阿蘇外輪周辺		[illegible]1979	
357	河原第3(西原A)	○	4											○						4			散礫	600m	阿蘇外輪周辺		熊本大学考古学研究室2003	
358	河原第6(西原B)	11	3											○						14			散礫	600m	阿蘇外輪周辺		肥後考古学会編1995	
359	河原第14(西原F)1次Ⅱ文化層	15	1														1			209	1箇所		有	530m	阿蘇外輪周辺		熊本大学考古学研究室1996	
	河原第14(西原F)2次Ⅱ文化層	4	1																	39	1箇所		有				熊本大学考古学研究室1997	
	河原第14(西原F)3次Ⅱ文化層																	1		11	1箇所		有				熊本大学考古学研究室2000	
	共同牧場Loc.1																						散礫	530m	阿蘇外輪周辺		肥後考古学会編1995	
360	河陽F(1区③文化層)	39.(2)		1				1									1		爪形31[illegible]	[illegible]21	2箇所		有	520m	阿蘇外輪周辺	12,100±50(C14.AMS)(12C層) 12,340±50(C14.AMS)(13層)	[illegible]2003	
	河陽F(2区③文化層)							5											無文67		1箇所	集石1	有			11,300±40(C14.AMS)(SC028)		
361	大矢野原第69(小火器射撃場)		1																	1			散礫	620m	阿蘇外輪周辺		肥後考古学会編1995	
362	大矢野原第5(もみじ台)	16																		16			散礫	600m	阿蘇外輪周辺		肥後考古学会編1995	
363	大矢野原第3(牧原B)		1																	1			散礫	500m	阿蘇外輪周辺		新山聖1982	
364	大矢野原第7		1																	1			散礫	620m	阿蘇外輪周辺		肥後考古学会編1995	
365	大矢野原Loc.C																						散礫	？m	阿蘇外輪周辺			詳細不明
366	吉無田高原		1																	1			散礫	670m	阿蘇外輪周辺		肥後考古学会編1995	
367	大嵐																						散礫	70m	阿蘇外輪周辺		肥後考古学会編1995	
368	下横田																						散礫	65m	阿蘇外輪周辺		肥後考古学会編1995	
369	面木		2																	2			散礫	220m	熊本平野			
370	谷尾崎		12																	12			散礫	100m	熊本平野		肥後考古学会編1995	
371	花園・柿原	1																		1			散礫	50m	熊本平野		肥後考古学会編1995	
372	健軍神社周辺		1																	1			有	25m	熊本平野		[illegible]1996	後世の遺物と混在
373	新南部		1																	1			有	30m	熊本平野		[illegible]1996	後世の遺物と混在
374	鹿ノ前		5																	5			有	70m	熊本平野		[illegible]1997	後世の遺物と混在
375	山ノ神																						有	70m	熊本平野			後世の遺物と混在
376	石の本	○	○																				有	75m	熊本平野			
377	翁山		2																	2	2		有	65m	熊本平野		肥後考古学会編1995	
378	塔ノ平																						散礫	？m	熊本平野			
379	久保	1	1																	2			有	35m	熊本平野		肥後考古学会編1995	調査区外採集
380	南小池																						散礫	70m	熊本平野		肥後考古学会編1995	
381	捨田	2																		2			散礫	30m	熊本平野		肥後考古学会編1995	
382	馬立		1																	1			散礫	？m	熊本平野		野田拓治1990	
383	立神ドトク	3	2																	5			有	60m	八代海沿岸		江本直1979	
384	岩立C	1																		1			有	50m	八代海沿岸		村井[illegible]1979	

東南部九州地域の細石刃石器群

松本　茂

Ⅰ．研究の経過

Ⅰ－1．調査・研究のあゆみと成果

列島初の細石刃石器群が発見された1953年からやや時をおいた1960年，九州では長崎県福井洞穴から細石刃石器群研究の口火が切られた。60年代は，九州島内において続々と細石刃石器群が発見・調査された時期であり，東南部九州地域の関連研究史上，重要な遺跡として鹿児島県上場遺跡（1966～74年調査），宮崎県岩土原遺跡（1968年調査），同県船野遺跡（1970年調査）などが挙げられる。その後1970～1980年代を通して資料の蓄積が進んでゆく過程で，西北部九州において確認された細石刃石器群と草創期土器群との共伴現象の存否が東南部九州においても注視される一方，九州島内における細石刃核の形態・型式レヴェルの地域性も明らかとなった。南部九州の畦原型（茂山・大野1977）や加治屋園型（弥栄・長野1981）といった特異な細石刃核の一群，あるいは土器だけでなく石鏃と細石刃石器群との共伴現象（牛ノ濱ほか1981，出口・雨宮1990）などの確認は，とりわけ重要なトピックスといえる。

そうした研究の流れを受けて開催・実行されたのが三カ年にわたる研究会，『九州の細石器文化』であった（九州旧石器文化研究会1997，1998，2000）。この研究会では，九州各県の関連資料が集成され，縄文時代草創期までを射程にいれた各種論議がおこなわれた。今回の発表もこの共同の成果に負うところが多い。

そこで明らかにされた九州島の細石刃石器群の多様な存在様態からは，後期旧石器時代から縄紋時代への複雑な展開が想定される。こうした様相については様々な解釈・説明が試みられており，細石刃石器群における西北部九州から東南部九州への影響の評価や（宮田1988），九州島における神子柴・長者久保文化の評価とも関わる船野型細石刃核の編年的位置付けの再認識（綿貫1992，栗島1993）などは，特筆すべき見解といえよう。

また，石材利用論（桑波田1998，馬籠2002，宮田2002）や組成論（杉原1998，中原1998），技術論（小谷1998，宮田1998），既存資料の再検討（黒川・桑波田2000，松本2003）など，各論的にも研究の深化がはかられている。

今回，東南部九州地域の細石刃石器群出土遺跡を集成したところでは，計342遺跡を数えることになった。前回，1993年のシンポジウム以降も，細石刃石器群出土遺跡は大幅に増加しており，その分布の南限も種子島まで拡がった。以下に，列島南端を占める細石刃石器群の諸様相と研究の動向について触れてゆくことにしたい。

Ⅰ－2．研究の現状と諸課題

当該地域における調査・研究のおおまかな流れを確認したが，あらたな問題点も明らかとなっている。細石刃石器群の出現（課題①）から消滅（課題②）に至る歴史的プロセスを把握する方向性から，具体的課題の抽出を試みる。

課題①：東南部九州地域における細石刃石器群の出現

「当該地域における細石刃石器群の出現をいかに理解するか」は，古くかつ新しい問いである。

南部九州地域における出現期の細石刃石器群は，いわゆる野岳・休場型細石刃核単純相であるとの認識がなかば定着しつつある（宮田1993，桑波田1997，村崎1997）。ただし，大分県域や宮崎県域北半など東部九州地域においては野岳・休場型細石刃核の分布は希薄であり，地域差を考慮する必要がある。また，南部九州における当該型式細石刃核は黒曜石製の資料が卓越するが，東部九州では形態・型式を問わず黒曜石製のもの自体が少ない傾向にある。かわって東部において主体を占めるのは大野川・五ヶ瀬川流域にみられる流紋岩やホルンフェル

スを用いた船野型細石刃核である。

このような状況を確認するならば，当然，東部九州における細石刃石器群出現期の理解が問題となってくる。すなわち，九州島における出現期の細石刃石器群が，一律に野岳・休場型によって占められていたとすれば，東部九州と他地域との間には出現の時間差を想定せねばならなくなる。逆に，両地域の細石刃石器群の出現にさほどの時間差を認めない立場からは，黒曜石製野岳・休場型細石刃核単純相の石器群以外に，東部九州の細石刃石器群の初現を求める必要が生じるのである。こうした観点からは，中・四国地域の状況との関連も見逃せない。

細石刃石器群に先行する石器群としては，ナイフ形石器群が第一候補に挙がる。ナイフ形石器群との共伴関係を積極的に認める見解としては，安蒜政雄氏（1979）や木崎康弘氏（1981，1993），橘昌信氏（1973，1979）らの論考が挙げられる。これらは細石刃石器群荷担集団とナイフ形石器群荷担集団が同一であれ別個であれ，両者の石器製作技術が同時期に共存したとする考えである。

対して下川達彌氏と萩原博文氏の見解はナイフ形石器群との連続性を認める点では似ているが，共存する可能性に言及するのではなく，福井洞穴Ⅶ層の小石刃石核の技術的様相に細石刃生産技術の祖形を求める考えである（下川・萩原 1997）。

また，当該地域の細石刃石器群が自生なのか（萩原 1986，松浦 1993），他地域からの伝播なのか（木崎 1993，島立 1993）といった切り口からも先行研究の諸見解に異同を認めることができる。

先行研究にみられる諸見解は，今後“先行する石器群との接続”と“発生の契機”という二つの視点から整理される必要がある。

課題②：東南部九州地域における細石刃石器群の終焉

当該地域の細石刃石器群の終焉は，北部九州地域と同じ土俵のうえで“縄紋草創期の細石刃石器群”の消長を説明・解釈する必要がある。

ここではいくつかの先行研究を概観しておく。

宮田栄二氏は，南部九州地域の細石刃石器群を次に示す三つの編年段階に大別した（宮田 1993，1996）。

Ⅰ期：古相の野岳・休場型単純段階

Ⅱ期：古相・新相の野岳・休場型を主体とし船野型・畦原型・加治屋園型が共伴。この段階の終末期には石鏃が出現。

Ⅲ期：新相の野岳・休場型を主体にし，福井型やブランク形成をおこなう加治屋園型が共伴。石鏃にくわえ土器も出現。

とりあげるべき重要な論点として，“石鏃の出現”と“南部九州における細石刃石器群と土器との共伴”がある。

また，野岳・休場型細石刃核の時間的変容も見逃せない。この点について宮田氏は新相の野岳・休場型を「南九州型」と仮称し弁別する必要を説く（宮田 1996）。

萩原氏は，縄紋時代草創期の細石刃石器群を検討する論考中において，東南部九州地域の様相について言及した（2001）。西北部九州の細石刃石器群と東南部九州の技術的共通点の指摘や，草創期土器群との編年的関係について触れている。特に，西北部九州に爪形紋土器が出現した後にも東南部九州や本州・四国に隆起線紋土器や豆粒紋土器が残存した可能性を指摘した点は検討に値する。

綿貫俊一氏の論点は大きく二つある。第一点は，90 年代に至るまで半ば定説となっていた船野型の編年的位置付けを新しく神子柴・長者久保文化並行期とした点である（栗島 1991，綿貫 1992）。第二点は西北部九州における細石刃石器群の残存現象に関連した，“細石刃が欠落した九州の長者久保・神子柴文化並行期”＝“細石刃断絶期”（綿貫 1999）の提唱である。とりわけ後者の論点は，細石刃石器群の出自や展開する時間軸，石斧や槍先形尖頭器との関係など検討すべき多くの項目と関連しており，その妥当性について諸側面から検証する必要がある。

雨宮瑞生氏は，“細石刃核および細石刃の幅狭化現象”（雨宮 1991，1992a・b，1996）という論点を示し，最近では“幅狭化に逆行する幅広化現象”（雨宮 2000）についても言及している。雨宮の所説のうち，南部九州における細石刃核・細石刃の“幅狭化現象”を，福井洞穴２・３層に代表される西北部九州の細石刃石器群の影響

のもとに起こった現象と考え，製作技術の様相にみる異質性とは別に，両地域の共通性と捉えた点は肯定的に評価できる。ただし，現象面の類似性を指摘したにとどまり，その背景の説明は今後の課題として残されている。

終焉に関わる問題は，西北部九州地域の草創期に残存する細石刃石器群を見据え，共伴土器や，細石刃・細石刃核以外の石器組成などを考慮して検討する必要がある。

Ⅰ－3．小結

問題の解明に向けては，基礎的データの整理と同時に，とくに船野型や野岳・休場型細石刃核にかかわる形態・型式論や石材利用論などについての方法論的整備（課題③）もおそらく必要となる。上述の課題とその解決策を探るために，次章以降，当該地域の細石刃石器群について諸側面からの検討をおこなう。

Ⅱ．遺跡の分布について（「小地域区分と細石刃石器群出土遺跡の分布」参照）

Ⅱ－1．熊本県域（※　水俣市域は便宜的に鹿児島県域（上場・石飛高原）に含めた。）

A　**球磨川上流域**　人吉盆地を中心に球磨川流域の河岸段丘や丘陵上に15遺跡が分布する。細石刃核の出土数が最多の城馬場遺跡第2地点においても23点にとどまっており，遺跡の規模は概して小さい。

B　**天草諸島**　島嶼各所に7遺跡が確認されている。いずれも表面採集による確認であり，現時点では小規模な遺跡が点在する様相が窺える。

Ⅱ－2．大分県域

C　**周防灘沿岸**　駅館川下流域を中心に小規模な遺跡が分布する。

D　**別府湾岸北部**　国東半島の付け根，八坂川流域の南岸の台地と別府湾に臨む台地上に遺跡が確認されている。いずれも小規模な遺跡である。

E　**別府湾岸南部**　大野川・大分川下流域の台地を中心に遺跡が分布し，大分川上流域の湯平高原にも1遺跡が確認されている。

F　**大野川中・上流域**　大野川流域の本流・支流沿いに発達した河岸段丘や台地上に28遺跡が分布する。大野郡域では遺跡が比較的集中して確認されている。

Ⅱ－3．宮崎県域（※　えびの市近辺は便宜的に鹿児島県域（川内川上流域）に含めた。）

G　**五ヶ瀬川流域**　中・下流域の河岸段丘や台地を中心に遺跡は分布し，上流域には少ない。

H　**耳川・五十鈴川流域**　両河川の下流域，日向灘沿岸の台地上に遺跡が分布する。上流域に分布は広がらない。

I　**宮崎平野部**　小丸川，一ツ瀬川，大淀川を中心とする大・小河川が開析する海岸段丘，台地（通称“原（はる）”と呼ばれる地形）上を中心に遺跡が多く分布し，78遺跡を数える。

J　**清武川・加江田川流域**　両河川に開析されたシラス台地上に遺跡が確認されている。

K　**大淀川中・下流域**　流域沿いの河岸段丘，台地上に遺跡が散見される。

L　**大淀川上流域**　流域沿いや都城盆地周辺の台地・丘陵上に10遺跡が確認されている。細石刃石器群包含層より上位にローカルなテフラの堆積が著しい地域であり，当該時期の遺物の検出事例に乏しい。潜在的な遺跡密度は低くないと推定される。

Ⅱ－4．鹿児島県域（※　出水郡の島嶼域は熊本県域（天草諸島），福山・財部・末吉町域は宮崎県域（大淀川上流域）に便宜的に含めた。）

M　**出水丘陵**　折口川流域に4遺跡が確認されている。いずれも表面採集資料であり，小規模な遺跡が点在するものと推定できる。

N　**上場・石飛高原**　黒曜石原産地（日東）を控え，丘陵上に比較的集中して遺跡が分布する。

O　**川内川下流域**　本流・支流沿いの台地上に遺跡が点在する。黒曜石原産地（上牛鼻）が所在する。

P　**川内川上流域**　大口市の羽月川（川内川支流）の台地上に遺跡が少数確認されるほか，栗野盆地周辺に小規模遺跡が集中して分布する。宮崎県側えびの市域にも遺跡は点在する。桑ノ木津留，上青木などの黒曜石原産地が所在する。

Q　**薩摩半島北部**　小規模河川に開析されたシラス台地上に遺跡が多く分布し，42遺跡を数える。大規模な遺跡も多い。縄紋草創期遺跡も多く分布する。

R　**薩摩半島南部**　半島全域の台地上に遺跡は散在するが，万之瀬川流域には比較的集中して確認されている。

S　**姶良台地**　天降川の中・上流域に沿った台地上に遺跡が散在する。小規模な遺跡が多い。

T　**鹿屋原台地**　高須川下流域の台地上に集中して遺跡が分布する。大規模な遺跡の割合も高い。

U　**志布志湾岸**　志布志湾に注ぐ小規模河川沿いの台地上に遺跡は散在する。

V　**種子島**　現在，５遺跡が確認されており，縄紋草創期遺跡も目立つ。

Ⅲ．細石刃生産技術と石材について

これまでに確認されている当該地域の細石刃石器群について，詳細な細石刃生産技術の復元が可能な接合資料はさほど多くない。加治屋園型の細石刃核を含む接合資料や，大分県下の船野型細石刃核を含む接合資料などがあるが，少数にとどまる。より徹底した接合作業を推進する必要があるが，原石および残核の状態から推しても比較的単純な技術から生産される細石刃の存在も窺える。そこで，ここではさしあたり残核形態，素材供給パターン，使用石材の三つの観点からの整理を試みる。

Ⅲ－１．残核の類型設定

当該地域の細石刃石器群に関連して，これまでに数多くの残核型式の設定がなされてきた（表１）。ここでは既設定の型式について，いったん形態レベル（残核形態）に引き戻したうえでの再構成を試みる。

細石刃核残核の形態的特徴から，13類型を設定する。

Ⅰ類　…　ポジおよびネガを呈する複数の剥離面から構成される分割礫を素材とし，作業面側からの打面調整を施す。しばしば打面再生を伴う。各種石核調整を伴うことも多い。打面転位をおこない，複数の作業面を有する資料を含む。作業面幅は狭いか石核周囲をめぐるように残存する（≒野岳・休場型）

Ⅱ類　…　Ⅰ類とほぼ共通する仕様であるが，打面調整を施さない。（≒休場型）

Ⅲ類　…　Ⅰ類と共通する素材ないし剥片を素材とし，幅広い作業面を設定し，打面調整を施す。背面は自然面が残存するか，石核調整を施す。残核形態は概して扁平になる。（≒位牌塔型，茶園型，扁平型）

Ⅳ類　…　板状を呈する剥片の側面・原礫の平坦な自然面を打面とし，打面調整を伴わない。石核調整はみられない。（≒南九州型）

Ⅴ類　…　亜円礫・亜角礫の自然面を打面とし，打面調整・石核調整をおこなわず，細石刃生産を開始する。

Ⅵ類　…　円礫を半割した分割礫を素材に用い，分割面を打面とする。ごくまれに作業面側および側方からの打面調整・形成が観察される。（≒畦原型）

Ⅶ類　…　扁平礫を複数個に分割した素材を用い，その分割面を打面とする。縦形スポールの剥離工程や，下縁調整，背縁調整などを伴うこともある。（≒加治屋園型）

Ⅷ類　…　厚手の剥片や分割礫を素材とし，その主要剥離面や分割面を打面とする。細石刃剥離にさきだち，打面から側面調整を施す。底面に素材の礫面や剥離・分割面が位置し，細石刃剥離作業面を正面に据えたシルエットが逆台形ないしＵ字形を呈する。打面調整は観察されない。（≒船野Ⅰ型）

Ⅸ類　…　素材や打面からの側面調整を施す点はⅤ類と共通する。異なる点として，底面を持たず，下縁調整をしばしば伴い，細石刃剥離作業面を正面に据えたシルエットは逆三角形（Ｖ字形）を呈する。打面調整は観察されない。ごく少数のみの確認であるが，打面転位をおこない，複数の作業面を有する資料を含む。（≒船野Ⅱ型）

Ⅹ類　…　素材となる剥片の主要剥離面を側面に設定し，他の分割面や自然面を打面として細石刃剥離をおこなう。側面調整や下縁調整を伴うが，省略されるものも多い。（≒上下田型）

Ⅺ類　…　両面調整体もしくは剥片素材の片面調整体などを細石刃核母体とし，後に作業面となる小口側から

縦形スポールを剥離し打面作出をおこなう。(≒福井型)

XⅡ類 … 両面調整体・略両面調整体を素材とし，小口からの細石刃剥離の進行方向とほぼ直行する方向からの打面形成・調整剥離（側方打面形成・調製）を施す。小口側からの打面調整をしばしば伴う。(≒泉福寺型)

XⅢ類 … 主に剥片を素材とし，剥片の側縁を切断する格好で打面を確保する。この際，側方打面形成・調整および下縁調整を伴う。小口側からの打面調整をしばしば伴う。(≒岩土原型，宇久島型)

類似の試みは小畑弘己氏（1983）や桑波田武志氏（1998）によっても既におこなわれており，それとの対応も示しておく。なお，従来の大勢とはやや方法を違え，必ずしも全ての細石刃核に型式を設定する必要を認めず，新たに「無型式」というカテゴリーを設けている。

表1 東南部九州地域における既設定の細石刃核型式と残核の類型区分

型式名	残核類型	設定論文または言及文献	小畑1983	桑波田1998	備考
野岳・休場型	Ⅰ	鈴木忠1971	BⅠ	B	
休場型	Ⅱ	木﨑1981		B	
矢出川型	Ⅰ	木﨑1981	BⅠ	B	
位牌塔型	Ⅲ	下川・萩原1997			
南九州型	Ⅳ	宮田1996		B	
畦原型	Ⅵ	茂山・大野1977，茂山1980	DⅠ	A−Ⅱ′	
加治屋園型	Ⅵ，Ⅶ	弥栄・長野1981	DⅠ，DⅡ	A−Ⅱ，A−Ⅲ	
加治屋園型A類	Ⅵ，Ⅶ	宮田1988	DⅠ，DⅡ	A−Ⅱ，A−Ⅲ	
加治屋園型B類	Ⅶ	宮田1988	DⅡ	A−Ⅲ，D−Ⅱ	
船野型	Ⅰ，Ⅷ，Ⅸ	鈴木忠1973，橘1973	C	C−Ⅰa・b C−Ⅱa・b	
船野Ⅰ型	Ⅷ	綿貫1992	C	C−Ⅰa	
船野Ⅱ型	Ⅸ	綿貫1992	C	C−Ⅱa	
船野第2地点タイプ	Ⅷ	杉原2000	C	C−Ⅰa	
福井Ⅳタイプ	Ⅸ，Ⅹ	杉原2000		C−Ⅰb	打面上擦痕ある例を含む
市ノ久保タイプ	Ⅸ	杉原2000	C	C−Ⅱa	
上下田型	Ⅹ	橘1989	BⅡ	C−Ⅰb	
岩土原型	Ⅹ，ⅩⅢ	綿貫1992		C−Ⅰb D−Ⅰb′，D−Ⅱ	
福井型	ⅩⅠ，ⅩⅡ	安蒜1979，橘1979，小畑1987	AⅠ	D−Ⅰa	
泉福寺型	ⅩⅠ	小畑1987，白石1998	AⅡ	D−Ⅰb	泉福寺10層（白石1998）
羽佐島Ⅲ型	ⅩⅢ	多田2001		D−Ⅱ	
泉福寺・羽佐島Ⅲ型	ⅩⅢ	松本2003		D類	ブランク素材は多様
白滝型・札滑型	—	栗島2000			縦形スポール，打面上擦痕
無型式	任意	—	時間・空間のいずれの表象とも評価できない事例。		

Ⅲ－２．素材供給パターンからみた細石刃生産

細石刃生産のために用意される原材のサイズや，細石刃・細石刃核以外のトゥール製作との関係から，大きく三つの素材供給パターンが認定できる。ただし，接合資料によって検証できる例は少なく，残存する自然面の在り方や同一母岩を構成する石器組成などの観察からの設定であり，今後の検証を必要とする部分も多い。

パターンⅠ …　細石刃核ブランクを準備し，細石刃生産を開始するまでの過程において，打面作出剥片，打面，石核調整剥片など種々の剥片を剥離する。これらの剥片が主に削器の素材として供給されたり，あるいは二次加工痕ある剥片，微細剥離痕ある剥片などの素材となるものと考えられる。細石刃核ブランク以外のトゥールの素材は，目的的に獲得するというよりは，各工程においてその都度生産される剥片から目的に合致したものを選択するといった在り方が想定される。

パターンⅡ …　細石刃核ブランクを準備し，細石刃生産を開始するまでの過程が，パターンⅠよりも定形的であり，各工程の独立性の度合いが相対的に高い。打面作出に先立って細石刃核ブランクの成形をおこなうグループであり，打面作出の際に剥出されるスポールを彫器の素材に供給する場合がある。

パターンⅢ …　製作される細石刃核のサイズが小さく，その素材となる原材自体も小さい。あるいは，一個の原材から複数個の細石刃核ブランクを獲得する場合もあるが，副次的に生産される剥片は他のトゥールへの素材とはなっていない。細石刃生産をおこなう母岩と，他のトゥールの生産に関わる母岩とが独立している可能性が高い。

Ⅲ－３．石材原産地と石材利用の動向

当該地域の石材原産地について大局的に把握するならば，大分県域・宮崎県域北部の流紋岩（ホルンフェルス）原産地，鹿児島県域・熊本県域南部を主とした黒曜石原産地を二つの核とし，各地にその他のローカルな有用石材（頁岩，チャート，水晶，鉄石英，凝灰岩，ホルンフェルス）が点在するといった様相を示す。ただし，宮崎県域太平洋沿岸部や鹿児島県域東部および種子島などで使用されている石材について，従来肉眼的に流紋岩と判断されてきたものが当該地域を構成する四万十層群中に含まれる頁岩であるとの新知見がある。これは石材流通論にも関わる重要な事柄であり，今後より精緻な石材判定を進める必要がある。

石材流通論に関しては，宮崎平野部の細石刃石器群中に針尾産黒曜石や阿蘇象ヶ鼻産ガラス質溶結凝灰岩などの遠隔地石材が少量ながらも存在することが確認された。西北部九州産の黒曜石については，大分県域，鹿児島県域・熊本県域の東シナ海沿岸部では以前から確認されていたが，宮崎平野部での確認はより広域な石材流通圏の存在を示すものといえる。今後流通ルートの問題を含めた多角的な検討な必要とされる。

以上みてきたように，今後検討すべき課題は多いが，現在確認されている当該地域の細石刃石器群は使用石材の在り方において，二つのグループに大別できる。

Aグループ …　黒曜石の小礫を素材とすることが多く，チャート・鉄石英，水晶なども用いられる原石サイズおよびブランクとなる分割礫・剥片のサイズは小さい。

Bグループ …　流紋岩，凝灰岩，頁岩，砂岩などを用い，原石のサイズは拳大前後が多い。

Ⅲ－４．小地域にみる様相差

前節までに，残核形態，素材供給パターン，石材利用の三つの観点から細石刃生産の様相を整理した。ここで石器組成も含めて各項目を総合し，小地域毎に代表的な遺跡を概観し，様相をまとめておく。

熊本・鹿児島県域

球磨川上流域では城馬場第２地点，白鳥平Ａなどで，残核Ⅰ類が優勢な傾向がみられ，わずかにⅡ・Ⅲ類が伴う。素材供給パターンはⅢ，石材利用はＡグループを示す。別府ではⅡ，Ⅷ，Ⅸ，ＸⅠの残核類型がみられ，里の城ではこれにⅠ，Ⅴ類が加わる。ただし，いずれも同時期性は保証されない。隆起線紋土器を伴う可能性がある狸谷遺跡では残核Ⅰ，Ⅳ類がある。

天草諸島・出水丘陵は，表面採集資料からの観察になるが，素材供給パターンⅢ，石材利用Ａグループの残核Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ類に加え，素材供給パターンⅠの可能性がある残核ⅩⅢ類もみられる（涼松）。

上場・石飛高原では，日東を中心とする近傍産黒曜石に加え，桑ノ木津留産などのやや良質の黒曜石も素材として利用されている。西北部九州産の黒曜石も入っている可能性が高い。残核Ⅰ，Ⅱ類，素材供給パターンⅢ，石材利用はＡグループが優勢であり，上場遺跡などで観察される残核ⅩⅢ類なども，素材供給パターンとしてはⅢである可能性が指摘できる。

川内川上流域には桑ノ木津留，上青木などの黒曜石原産地が確認されており，えびの市内の遺跡ではそれらの黒曜石を用いた残核Ⅰ，Ⅳ，ⅩⅢ類が認められる。遺跡では桑ノ木津留産と推定されるやや黒曜石小円礫に下縁調整の認められる例もある。木場Ａ－２でも，やはり近傍産黒曜石の扁平礫の自然面を打面としながらも，スクレイパーエッジ状の下縁調整を施す例が認められる。また，矢岳高原第４では，上牛鼻産黒曜石を用いた残核ⅩⅢ類が１点ある。一方，山崎Ｂでは小円礫を素材とした残核Ⅲ類が２点みられる。他に桑ノ木津留，上牛鼻産黒曜石素材の残核Ⅰ類が認められるが，同時期性の保証はない。

注目されるのは新開原における西北部九州産黒曜石の可能性が高い残核ⅩⅠ，ⅩⅢ類の存在である。素材供給パターンも，Ⅱの可能性を考慮する必要がある。

川内川下流域では，西ノ平の残核Ⅶ類が注目される。他にⅠ類を伴う。成岡ではⅠ，Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ，Ⅴ，Ⅷ，ⅩⅢと多様な残核類型があるが，同時期性は保証されない。ただし，ほとんどが素材供給パターンⅢ，石材利用Ａにあてはまるものと考えられる。床並Ｂでは残核Ⅰ，Ⅲ類を中心とした，まとまった資料がある。鹿村ヶ迫では，上牛鼻産黒曜石を素材とした残核Ⅱ，Ⅷ，Ⅸ類があり，三者が連続的な様相を示す点で注目される。いずれもサイズは小さく素材供給パターンはⅢであろう。未報告ではあるが，大椿では西北部九州産の黒曜石を用いた残核ⅩⅡ類があり，注目される。

薩摩半島北部は大規模な遺跡も数多く，土器を伴出する例も多い。横井竹ノ山では石鏃，無紋土器とともに，残核Ⅰ，Ⅱ，Ⅳ類が認められ，他にⅩⅢ類のブランクの可能性が指摘される資料の存在が指摘されていたが，隣接する箇所を発掘した最近の調査でもⅩⅠ，ⅩⅡ，ⅩⅢ類の存在が確認されている。また，付近の瀬戸頭では，砂岩やチャートなど在地石材を用いたⅩⅡ，ⅩⅢに類する残核が認められ注目される。とくにチャート製の石ヶ元型（小畑 1987）に類する資料はやや特異な印象を受ける。

加治屋園では素材供給パターンⅢのⅠ，Ⅱ類残核に加え，在地の三船産黒曜石製のⅧ類のブランクと考えられる資料がある。これらの資料群の素材供給パターンとして，Ⅲのほかに Ⅰが想定できる。特に留意すべき器種組成上の特色として掻器・削器類の卓越がある。

加栗山では，ユニット毎に様相を違える。たとえば，大形の石皿と石鏃を含む 18 ユニットは，残核Ⅰ，Ⅱ類，素材供給パターンⅢ，石材利用Ａ，同じく石鏃を含む 29 ユニットでは残核Ⅸ，ⅩⅢ，Ⅵ類が中心となり，Ⅰ，Ⅱ類に類する資料にも下縁調整が認められる例が目立つ。素材供給パターンはⅢ，石材利用はＡである。31 ユニットでは残核Ⅰ類のほか，Ⅱ，Ⅷ，Ⅸ類があり，後三者が卓越する。32 ユニットでは残核Ⅱ，Ⅶ，Ⅹ類があり，定型的な掻器を伴う。最近おこなわれた再検討作業によって，ユニット間の接合資料の存在も明らかにされており（黒川・桑波田 2000），今後も多角的な検討が望まれる資料群といえる。

このほか，未報告の仁田尾の膨大な資料群や柊堀や前山の打面上擦痕を有する事例など，今後の検討を待つ事例が薩摩半島北部には多くある。

薩摩半島南部も資料の増加が進んでいる。登立や帖地，志風頭と細石刃核が 100 点前後にのぼる遺跡も目立つ。また，水迫では細石刃石器群に伴う可能性のある竪穴住居跡も検出されており，多角的な追求・検証が試みられ

ている。登立では，残核XⅢ類のブランクや，ＸⅠ類に伴う可能性があるスポールなどが注目される。志風頭では，残核Ⅰ，Ⅱ，Ⅷ，Ⅸ，ＸⅢ類と多様な資料が認められるが，素材供給パターンはほとんどがⅢであり，一部Ⅰの可能性が考慮される。土器や石斧，槍先形尖頭器との共伴が報じられた帖地においても，多様な細石刃核形態が観察される。ＩＡ・Ｂ区では，素材供給パターンⅢ，石材利用Ａの残核Ⅰ，Ⅱ，Ⅷ，Ⅸ類と，素材供給パターンⅠ，石材利用Ｂの残核Ⅷ，Ⅸ，Ｘ類から構成される二大別群が認められる。黒曜石が多用されるが，大半が三船，次いで上牛鼻と近傍産石材で占められており，わずかに針尾など西北部九州産の黒曜石が入る。２Ａ区では，残核Ⅸ，Ｘ類の豊富な接合資料が確認され，今後の技術論的検討に資するところが大きい。

姶良台地の石峰では，残核Ⅰ，Ⅱ類，素材供給パターンⅢ，石材利用Ａといった様相が認められる。ブロック外において検出された打製石斧も注目される。星塚では，素材供給パターンⅢ，石材利用Ａの残核Ⅰ，Ⅴ類に伴って，残核Ⅵ類が１点確認されている。Ⅵ類の消長を探るうえで注目される。

鹿屋原台地の西丸尾では，残核Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ類のまとまった資料があり，素材供給パターンⅢ，石材利用Ａ（水晶，黒曜石）といった様相を示す。器種組成としてわずかな掻・削器類のほかに磨・敲石と礫器が一定量存在する点で着目される。榎崎Ａ，Ｂにおいても，石斧を加え相似た様相がみられ，当該小地域の特色といえるかも知れない。榎崎ＡのＣブロックでは残核Ⅰ類に伴ってⅥ類があり，姶良台地の星塚とともに注目すべき資料といえる。

志布志湾岸では，道重，倉園Ｂ，井手平において，残核Ⅰ類が少数確認されている。石材利用はＡであり，黒曜石，タンパク石が用いられている。そのほか，中原から残核Ⅵ類が２点検出されているが，器種組成などは不明である。

種子島の細石刃石器群も５遺跡を数えるまでになった。いずれも石材利用Ｂグループに属する頁岩を用いた残核Ⅵ，Ⅶ類であるが，素材供給パターンは今後の解明に待つところが大きい。銭亀遺跡では残核同士の接合資料もあるらしく，期待される。

大分県域

周防灘沿岸は，遺跡数は少ないが，特色ある資料が確認されている。桐ヶ迫では円礫を四分割した素材を用い，わずかな打面調整を加えるほかは石核調整を施さない残核が１点，背面に自然面を残す細石刃が２点確認されている。いずれの資料も西北部九州産黒曜石を用いる。

尾畑では残核Ⅸ類が２点確認されているが，いずれも姫島産の黒曜石を用いる点で注目される。

別府湾岸北部では西北部九州産黒曜石を用いた残核ＸⅠ類が複数検出されたエゴノクチが注目される。スポールも確認されている。早水台においてもＸⅢ類と思われる資料があるらしい。また，目久保第１では有舌尖頭器が２点確認されている。

別府湾岸南部では，様相の分かる遺跡が少ないが，丹生の資料からは，残核Ⅸ類が安定して存在する様相が窺える。

大野川中・上流域に含まれる遺跡の多くは，素材供給パターンⅠ，石材利用Ｂであり，残核Ⅸ類が主体となる資料群である。市ノ久保，松山，上下田，宮地前，牟礼越などが挙げられる。器種組成上の特色として，尖頭状削器をはじめとする各種削器があり，市ノ久保，宮地前では定型的な掻器も含まれる。これら掻・削器類は素材供給パターンⅠに包摂される可能性が高いと考える。別個の素材供給のもとに，市ノ久保，松山，上下田で観察される石斧，上下田の槍先形尖頭器などが製作されている。少量ではあるが，素材供給形態Ⅲ，石材利用Ａ（西北部九州産黒曜石，チャート）の残核Ⅰ，Ⅲ類が伴う。三反田では素材供給形態Ⅲ，石材利用Ａ（西北部九州産黒曜石）の残核Ⅰ類が単純に確認されている。一方では，表面採集資料ながら，安面ではやや形態的様相を違え，自然面や剥離面で底面が構成される残核Ⅷ類が主体となる。

大野川上流部の政所馬渡では西北部九州産黒曜石と在地と思われる瑪瑙を用いたＸⅠ類が確認されている。また，田良原Ｂ，奥畑からも西北部黒曜石製の残核ＸⅠ，ＸⅡ，ＸⅢ類が確認されている。

宮崎県域

五ヶ瀬川流域では，最近，爪形紋土器が確認された阿蘇原上がある。残核ⅩⅢ類がまとまっており，これに土器，槍先形尖頭器，掻・削器類が組成に加わる。一見，西北部九州的な様相にみえるが，石材はチャートや水晶，流紋岩，ホルンフェルスといった在地石材をもっぱらとする。素材供給パターンはⅠの可能性が考えられる。

残核ⅩⅢ類は，他に岩土原，林でも確認されている。岩土原，慈眼寺霊苑，赤木，片田などでは残核Ⅸ類が主体となる。他に残核Ⅰ類が阿蘇原上，岩土原から確認されている。なお，岩土原の隆帯上に爪形紋を施す土器片については，縄紋草創期中葉以降に比定でき，細石刃石器群とは時期的に分離できるものと考える（松本2003）。

耳川・五十鈴川流域の様相は資料数も少なく明瞭でないが，分布論的に重要な地域である。寺迫では残核Ⅵ類が採集されており，現在のところ畦原型分布圏の最北限となる。また，仲野原第２では残核Ⅸ類とともにⅠ類も安定して確認されており，五ヶ瀬川流域とは様相を違える。Ⅰ類は黒曜石を用いており，今後，原産地の特定が望まれる。

宮崎平野部および**清武川・加江田川流域**では多種多様な細石刃石器群が確認されている。船野第２地点では残核Ⅷ類が組成上の特徴となっている。船野第１点では残核Ⅸ類が主体的であるのと対照をなす。残核Ⅷ類は，田上，七野第４からも確認されている。いずれも素材供給パターンⅠ，石材利用Ｂの様相である。

井野では，残核Ⅵ類のみが６点まとまって確認されている。長薗原でも10点の残核Ⅵ類が確認され，これに残核Ⅸ類が２点伴っている。表面採集資料ながら通山においても７点の残核Ⅵ類が確認されている。これらはいずれも素材供給パターンⅢ，石材利用Ｂの様相である。下屋敷では残核Ⅱ，Ⅳ，Ⅸ類，素材供給パターンⅢ，石材利用Ａの様相を示している。針尾産と思しき石材もあり注目される。

宮崎平野部および清武川・加江田川流域は，現在発掘中，整理中の遺跡においても多くの細石刃石器群が確認されており，諸形態・型式の相互関係について，今後の解明に待つところが多い。

大淀川中・下流域では，最近報告された小田元第２が注目される。素材供給パターンⅠ，石材利用Ｂの残核Ⅸ類と，素材供給パターンⅢ，石材利用Ａの残核Ⅰ，Ⅱ，Ⅳ，Ⅴ類，素材供給パターンⅢ，石材利用Ｂの残核Ⅵ類が同一文化層から検出されている。ただし，Ⅵ類３点は他とやや離れて分布しており，示唆的である。

大淀川上流域では，池増の素材供給パターンⅠ，石材利用Ｂ，残核形態Ⅷ，Ⅸ類のまとまった資料があり，とくにⅧ類が高率に含まれることが注目される。また，Ⅵ類のヴァリエーションを考慮するうえでも重要な石器群である。最近，発掘・報告されている城ヶ尾，桐木，耳取では，素材供給パターンⅢ，石材利用Ａの残核形態Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ類などが層位的に分離できるかたちで検出されており注目される。

Ⅳ．編年について

以上に概観してきた東南部九州地域の細石刃石器群の様相を踏まえ，編年試案を提示しておく。その際，示標となるのは，層位的にも古期であり，九州島内の他地域との形態比較のうえでも出現段階に位置付けられる西丸尾遺跡の残核Ⅲ類である。これに少量のⅡ，Ⅸ類が伴い，Ⅰ類は細石刃生産の工程差としてⅢ類と連続的に理解することができる。いずれも，素材供給パターンⅢ，石材利用Ａであることが重要である。

また，新しい段階の示標として示標として，西北部九州の動向と連動する可能性が高い，各種石核調整上の特徴（側方打面形成・調整，下縁調整）および細石刃核体形の扁平度＝作業面幅の狭小性が挙げられる。

上述のとおり，東南部九州地域の範囲内においても細石刃石器群の様相差＝地域差が著しいことが確認された。そこで，編年を組む際には，小地域を統合し，大きく三つのエリアを設定して整理しておく。そして，出現期，展開期，終末期の三つの編年段階をエリア毎に追うことにする。

エリア①（球磨川上流域，上場・石飛高原，天草諸島，出水丘陵，川内川流域，薩摩半島）

出現期の石器群として，床並Ｂの１，５ブロック，成岡のＢユニット（一部）などが挙げられる。城馬場第２地点，白鳥平Ａは，球磨川上流域では比較的古い様相を示すものと考えられる。素材供給パターンⅢ，石材利用Ａという様相が支配的である。

展開期には，加栗山の25，31ユニットなどの様相を想定しておきたい。素材供給パターンⅢ，石材利用Aという特徴を前段階から受け継ぐが，残核形態にはⅡ，Ⅸ類などのヴァリエーションが加わり，高率を占める場合もある。鹿村ヶ迫もこの段階に入る可能性がある。また，素材供給パターンⅠ，石材利用Bという様相の開始もこの段階に想定される。小牧３Aなどが相当する。

終末期は九州島内の細石刃石器群が広範囲にわたって連動した変化を遂げる過程であり，各地域毎の様相差を保ちつつも，共通した技術的特徴を看取することが可能な段階である。土器や石鏃の出現をこの段階中に想定し，それを境に前半と後半に分ける。

前半は，加栗山29，30，32ユニット，帖地２A区などがあり，素材供給パターンⅠ，石材利用Bの残核Ⅸ，Ⅹ類が特徴的である。

後半は縄紋草創期の細石刃石器群であり，多くの遺跡が認められる。高度なシステム化は達成していないが素材供給パターンⅡに類する技術的様相を持つ加治屋園，大椿，柊堀，前山，瀬戸頭，新開原などが代表的であり，西北部黒曜石製の残核ⅩⅠ，ⅩⅡ，ⅩⅢ類が組成する。横井竹ノ山，成岡などもこの段階が想定される。

エリア②（耳川・五十鈴川流域，宮崎平野部，清武川・加江田川流域，大淀川流域，姶良台地，鹿屋原台地，志布志湾岸，種子島）

出現期として，西丸尾，榎崎B，星塚，城ヶ尾Ⅱ～Ⅳ文化層，船野第１地点の黒曜石製の残核Ⅰ，Ⅲ類がある。他にやや後出する様相として上ノ原と赤木を付け加えておきたい。上ノ原の流紋岩製の残核Ⅰ類が同じく流紋岩製の残核Ⅸ類と共存する様相は赤木と共通し，型式名でいえば一見したところ船野型の範疇に入る赤木の細石刃核の一群は打面調整を省略した野岳・休場型と捉えたほうが理解しやすい。赤木のなかに打面調整を有する例や，砲弾状の残核が認められる様相は，通常の船野型細石刃核を含む石器群の様相とは若干の差がある。流紋岩製の砲弾状残核は霧島遺跡からも確認されているが，報告後の再検討において打面再生工程が確認されており，これも残核Ⅰ類（野岳・休場型）の範疇で理解できるとすれば，出現期に近い時期に位置付けられる可能性も残す。

展開期としては，小田元第２地点の第Ⅵ類を除いた様相，船野第２地点，前原西，池増などが考えられる。素材供給パターンⅢ，石材利用A，残核Ⅰ，Ⅱ，Ⅴ類と素材供給パターンⅠ，石材利用B，残核形態Ⅷ，Ⅸ類の様相が併存する。

終末期前半としては，船野第１地点，塚原などが挙げられるほか，表面採集の多くがこの段階に該当する。

終末期後半としては井野など小形の残核Ⅵ類がほぼ単純に確認される様相が考えられる。また，未報告ではあるが，唐木戸第３などで残核Ⅵ類とⅩⅢ類が共伴しており，この段階に比定できる。確実な残核ⅩⅠ，ⅩⅡ類の例は未確認であるが，南学原第１，築地原などにその可能性が残る。下屋敷では肉眼的に針尾産と推定される黒曜石製の残核Ⅸ類と，南部九州産の黒曜石を用いた残核Ⅳ類が共伴しており，エリア①と共通した終末期の一様相を示すものと考えられる。

エリア③（周防灘沿岸，別府江湾岸，大野川流域，五ヶ瀬川流域）

出現期としては，桐ヶ迫，三反田，松山（表面採集された黒曜石製の残核Ⅲ類），阿蘇原上の残核Ⅰ類などが挙げられるが，エリア②において言及したような在地石材を用いた出現期の石器群は未確認である。

展開期としては，安面，長谷などにその可能性が考えられるが，様相は判然としない。

終末期前半としては，上下田，松山，市ノ久保，宮地前，牟礼越のほか，多くの遺跡が該当する。展開期から継続する素材供給パターンⅠ，石材利用Bであるが，別個の素材供給形態として石斧・尖頭器などを組成に含むようになり，残核もⅨ，Ⅹ類が主体となる。これに少量の素材供給パターンⅢ，石材利用A（チャート，西北部九州産黒曜石）の残核Ⅰ類などを含む。

終末期後半としては，エゴノクチ，政所馬渡，阿蘇原上などが挙げられるが，在地石材を用いた石器群の様相は阿蘇原上をのぞき不明瞭である。終末期前半の様相が継続している可能性も残る。綿貫氏の“細石刃断絶期”の設定はこのあたりの事情にひとつの説明を与えるものであるが，九州島内にとどまらず，東北日本における同時期の動向の理解にも抵触する問題でもあり，積極的な議論の余地がある。

V．東南部九州地域における細石刃石器群の特質について

巨視的にみて，九州島の細石刃石器群に西北部九州と東南部九州という二つの大地域性が認められることは，これまでにも指摘されてきた。ここではさらに東南部九州地域内の地域性の諸レベルを俎上に挙げ，当該地域の細石刃石器群の特質について述べたい。

有効な視点の一つとして，西北部九州地域との接触・交流の把握がある。対西北部九州への門戸として，二つの地域・ルートが挙げられる。一つは九州島の西岸，東シナ海に面した天草諸島，出水丘陵，川内川下流域，薩摩半島北・南部，上場石飛高原などの小地域であり，もう一つは筑後川などの河川を通じて大分県域に，あるいは阿蘇山を介して宮崎県域北部，大分県域南部に至るルート上の小地域である。換言すれば，前者は海上，後者は内陸の交流ルートといえる。

こうした観点から，さきに設定したエリア①～③を位置付けるとすれば，海上の交流の舞台となるのが，エリア①であり，内陸の交流の舞台となるのがエリア③ということになる。エリア②はそうした二つの様相の中間地帯といえる。すなわちエリア①の九州南部産の黒曜石の流通はいまのところ五ヶ瀬川の北には認められず，残核Ⅵ類の分布もほぼ同様である。一方，素材供給パターンⅢ，石材利用Ｂ（頁岩）の残核Ⅷ，Ⅸ類の分布範囲の西限は大淀川上流域に求められる。あるいは，南は種子島から東は四国の高知平野あたりまで含められる可能性が有るエリア③的な様相に，エリア①的様相が貫入した状況が宮崎平野部の様相といえるかもしれない。そして，こうした地勢的環境にあること自体が，独自の地域性を形成する要因として捉えられる可能性がある。エリア②が残核Ⅵ類（畦原型）の主要分布域となっていることも示唆的であるが，その成立に関する解釈・説明は今後の課題としておく。

いずれにせよ，そうした交流の活発化は展開期に開始されたのであり，縄紋草創期のその後の展開にも引き継がれてったそれぞれの地域的特質は，終末期の段階に新たに醸成されたものといえる。

Ⅵ．課題

今回，私が担当した東南部九州地域は，前回（1993年）のシンポジウムでは，主に宮田栄二氏が担当された範囲であり，東部九州（概ね大分県域南半部と宮崎県域北半部）については，綿貫俊一氏が担当されていた部分を含んでいる。そこでまず，前回，両氏から提出された課題を確認しておきたい。

宮田氏は課題として，①細石刃石器群が展開した時期の自然環境や気候の変遷の把握，②使用石材とりわけ黒曜石の理化学的原産地同定の推進，③遺物相互の共伴関係の厳密な検討，の三点を挙げている。

綿貫氏は，④ナイフ形石器群から細石刃石器群への移行過程の実相把握，⑤いわゆる神子柴・長者久保文化並行段階における九州島の様相の解明，⑥他地域と比較し突出した九州島の細石刃石器群出土遺跡数の説明・解釈，⑦細石刃石器群から縄文文化的石器群への移行過程の実相把握，の四点を挙げた。

その後の研究の進展，論点の深化の状況について若干触れておく。

①については杉山真二による自然科学サイドからの言及（杉山2000）のほか，前述した雨宮氏の論考（雨宮1996，1997）などが挙げられる。隣接諸科学も交えて今後も追究されるべき課題である。

②については，現在も分析実施状況は多いとはいえないが，分析例は蓄積されつつある。データの増加を待って考古学的成果との突き合わせが期待される。

③・④の具体的方策として，私は大きく三つのアプローチを考えている。一つはいわずもがなであるが層位的出土事例の検出，二つ目に型式論的連続性・断絶性の理論的評価，三つ目には豊富な出土事例を持つ九州島の利点を活かした統計的蓋然性の判定である。

“ナイフ形石器群と細石刃石器群の共伴”については，総合的にみて，いまのところ成立し難いと私は考えている。無論，終末期のナイフ形石器群荷担者と最初期の細石刃石器群荷担者が同一者であった可能性あるいは両者が接触した状況は充分に想定できる。だが，問題はそうした状況が，我々に検知可能な考古学的痕跡を残しう

るか否かにある。換言すれば，考古学的に問題とすべきなのは，両石器群が文字通りの意味で共存したかどうかではなく，両者が現在，遺物に看取されるような独自性を相互に保ったままで一定期間存続したかどうかである。すなわち両者の接触から共存に至る過程が先史学的に評価可能な時間幅を有しているか否かが焦点となろう。問題をこのようにシフトさせたうえで，これまでのデータをみると，終末期ナイフ形石器群から細石刃石器群への移行はごくすみやかに進行した（否定論）と考えるのが合理的と考える。地層堆積条件を考慮すると，移行段階の認定（肯定）には確実な個体別・母岩別接合資料の量的保証が必要条件となろう。いずれにせよ，挙証責任は肯定論者に移ったといえる。

もう一つの“土器・石鏃と細石刃石器群の共伴”は，接合資料という材料が使えないだけに，難点は多い。たとえば，土器と細石刃石器群の共伴例は積極的に評価する立場（木崎 2002）と，慎重な立場（松本 2003）では認定数に大きな差が出る。今後，土器も含めた遺跡内分布の検討など進める必要がある。

⑤については，1992 年の論考以降も重ねられた綿貫氏の積極的な議論（綿貫 1992，1993，1999，2000）とその評価について本文中に少し触れた。氏の見解を肯定するか否定するかは，西北部九州でいえば福井４層と２・３層との間に連続性か断絶性のいずれを認めるか，エリア③でいえば，今回の編年の，終末期前半と後半の様相に連続性か断絶性のいずれを認めるかによって意見が分かれる。筆者は連続するとみる立場にあるが，その傍証としては阿蘇原上の様相を挙げておきたい。すなわち，土器や細石刃核の技術・形態的様相は西北部九州との共通性を強く示しながらも，使用石材はもっぱら在地産を用いるという一定程度の在地化が進んだ様相である。だが，問題の解明には資料数も少なく，綿貫氏の所説を反駁するまでには至っていない。東北日本の様相も含めて，終末期細石刃石器群について議論を重ねる必要がある。

⑥突出した遺跡数を示す要因について，綿貫氏は九州島における細石刃石器群存続期間の長さに理由の一端を求めた（綿貫 1993）。筆者も同様の見解であり，とりわけ縄紋草創期に残存する細石刃石器群の多さがこの現象の原因であろう。本文に述べたように，西北部九州と東南部九州には共通性とともに明瞭な地域差もあり，編年網の整備とともに今後その詳細を把握し綿貫氏の考えを検証する必要がある。また，それとは別に，北海道地域と同様に大陸・韓半島への窓口としての西北部九州という地勢学的要因や，石材原産地との関係およびこれに連動した移動形態論的観点からのアプローチも開拓すべき方向性として挙げられる。

⑦については，⑥とも関連して本文中にも述べたように後期旧石器時代終末期研究と縄紋時代草創期研究とのすりあわせがいっそう求められる。

他に新しく明らかとなった課題も多くあるが，本文の随所で触れた範囲にとどめる。

謝　辞

本発表に際し，次の方々からのご助力，ご助言を頂いた。記して感謝したい。

秋成雅博・今田秀樹・牛ノ濱修・岡本真也・遠部　慎・鎌田洋昭・栗山葉子・桑波田武志・乗畑光博・志賀智史・杉原敏之・重留康弘・立神勇志・近沢恒典・中谷正和・永友良典・中原一成・藤井法博・藤木　聡・宮田栄二・吉留秀敏・八木澤一郎・綿貫俊一

引用・参考文献

雨宮瑞生　1991　「九州細石刃核の共通性と南九州の地域性　－南九州の細石刃核・その編年研究の現状－」『鹿児島考古』第 25 号　鹿児島考古学会

雨宮瑞生 1992　「南九州縄文草創期資料の新旧関係」『鹿児島考古』第 26 号　鹿児島考古学会

雨宮瑞生　1996　「南九州の幅狭型細石刃核」『考古学雑渉　西野元先生退官記念論文集』　西野元先生退官記念会

小畑弘己 1983　「九州の細石刃文化」『物質文化』第 41 号　物質文化研究会

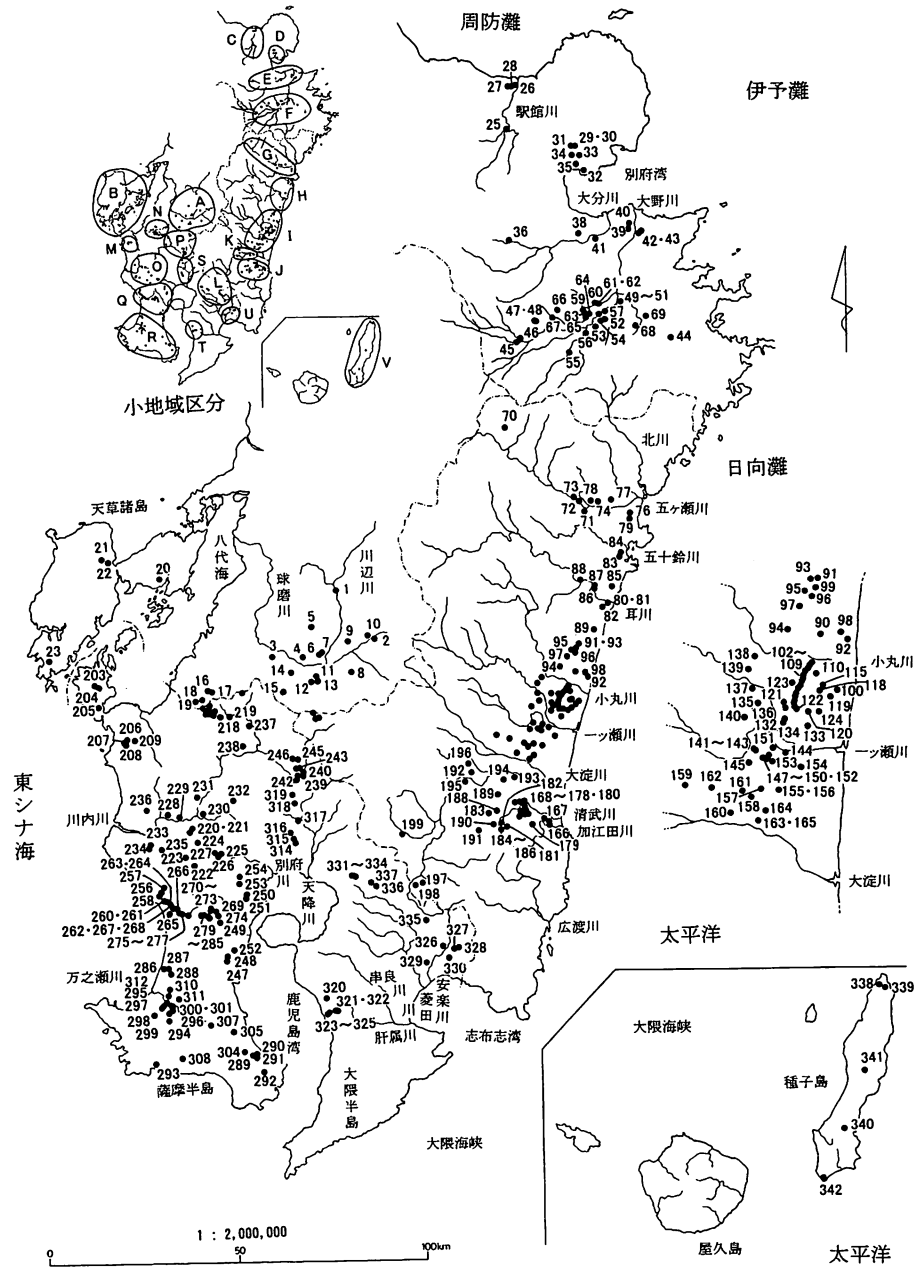
小畑弘己 1987　「西南日本の楔形石核とその系譜について」『東アジアの考古と歴史』中巻

木崎康弘 1981　「九州地方の細石核」『熊本史学』第 55・56 号合併号　熊本史学会

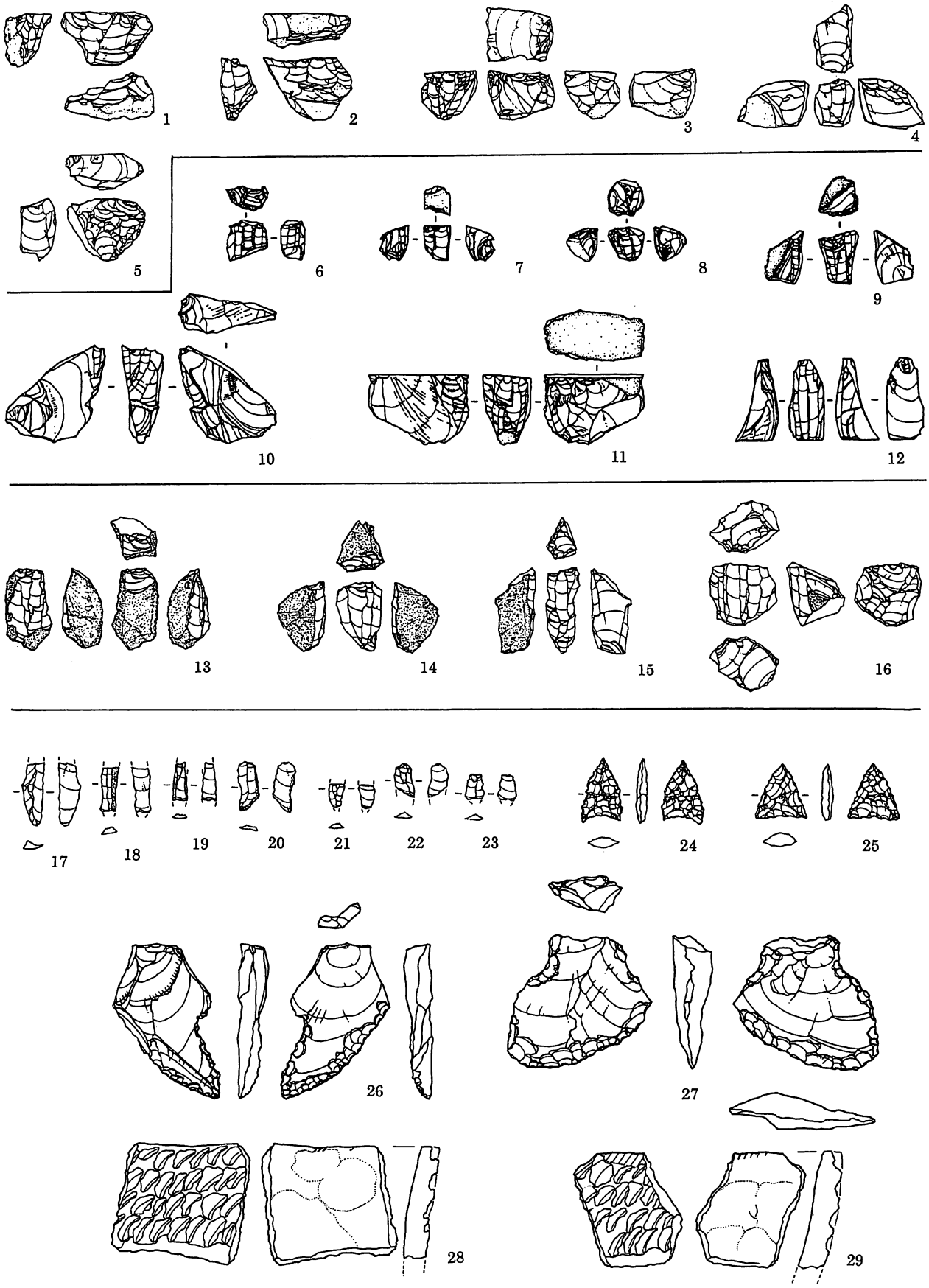
木崎康弘 1993 「九州で細石器文化がはじまったころ」『細石刃文化研究の新たなる展開』Ⅱ 佐久考古学会
九州旧石器文化研究会 1997 『九州の細石器文化 －細石器文化の開始と編年研究－』 九州旧石器文化研究会・鹿児島県実行委員会
九州旧石器文化研究会 1998 『九州の細石器文化 －九州島における細石器文化の石器と技術－』 九州旧石器文化研究会・宮崎県実行委員会
九州旧石器文化研究会 2000 『九州の細石器文化Ⅲ 九州における更新世末期の環境と人類の適応 －縄文文化への鼓動－』 九州旧石器文化研究会・鹿児島県実行委員会
栗島義明 2000 「神子柴文化の拡散と展開 －九州地域に於ける草創期初頭の諸問題－」『九州の細石器文化Ⅲ 九州における更新世末期の環境と人類の適応 －縄文文化への鼓動－』九州旧石器文化研究会・鹿児島県実行委員会
桑波田武志 1997 「鹿児島県の細石刃石器群編年」 『九州の細石器文化 －細石器文化の開始と編年研究－』 九州旧石器文化研究会
桑波田武志・宮田栄二 1997 「鹿児島県における旧石器時代研究の現状と課題」『鹿児島考古』第31号 鹿児島県考古学会
重山郁子 1997 「宮崎県における細石器文化の編年への試案」 『九州の細石器文化 －細石器文化の開始と編年研究－』 九州旧石器文化研究会
下川達彌・萩原博文 1997 「細石刃石器群の出現・展開と泉福寺洞穴」『人間・遺跡・遺物』３ 麻生優先生退官記念論文集 発掘者談話会
杉原敏之 2000 「九州における「神子柴文化」」『九州の細石器文化Ⅲ 九州における更新世末期の環境と人類の適応 －縄文文化への鼓動－』 九州旧石器文化研究会・鹿児島県実行委員会
鈴木重治 1973 「宮崎県岩土原遺跡の調査 －土器伴出文化の一例－」『石器時代』第10号 石器時代文化研究会
鈴木忠司 1971 「野岳遺跡の細石核と西南日本における細石刃文化」『古代文化』第23巻第8号 古代学協会
鈴木忠司 1987 「上野Ⅱ文化層の位置付けをめぐって」『大和のあけぼのⅡ』 大和市文化財調査報告書第32集 大和市教育委員会
多田 仁 2000 「船野技法による細石核の細分について」『九州旧石器』第４号 九州旧石器文化研究会
多田 仁 2001 「羽佐島技法の再評価」『旧石器考古学』第62号 旧石器文化談話会
橘 昌信 1973 「九州における細石器文化 －細石核の分類と編年試論－」『考古学論叢』第1号 別府大学考古学研究会
橘 昌信 1975 「宮崎県船野遺跡における細石器文化」『考古学論叢』第3号 別府大学考古学研究会
橘 昌信 1979 「東九州における細石核 －船野型細石核－」『考古学ジャーナル』第167号 ニュー・サイエンス社
橘 昌信 1979 「九州地方の細石器文化」『駿台史学』第47号 駿台史学会
橘 昌信 1989 「船野型細石核のバリエイション」『おおいた考古』第2号 大分県考古学会
萩原博文 1989 「西日本の細石器文化」『考古学ジャーナル』第306号 ニュー・サイエンス社
萩原博文 2001 「縄文草創期の細石刃石器群」『日本考古学』第12号 日本考古学協会
馬籠亮道 2002 「南九州の黒曜石原産地について」『Stone Sources』No.1 石器原産地研究会
松浦五輪美 1993 「西南日本の細石刃文化について －特に「野岳・休場型」、「船野型」細石核を中心に－」『考古論集』潮見浩先生退官記念論集
宮田栄二 1988 「南九州の細石器 －福井型細石刃核の波及について－」『鹿児島考古』第22号 鹿児島県考古学会
宮田栄二 1993 「九州地方南部の細石刃文化」『シンポジウム 細石刃文化研究の新たなる展開』 八ヶ岳旧石器研究グループ・佐久考古学会
宮田栄二 1996 「南九州における細石刃文化終末期の様相」『考古学の諸相』 坂詰秀一先生還暦記念論文集
宮田栄二 2000 「細石刃の打面と頭部調整について －細石刃製作技術の追求のために－」『九州旧石器』第４号 九州旧石器文化研究会
宮田栄二 2002 「鹿児島県の非黒曜石石材と原産地」『Stone Sources』No.1 石器原産地研究会

綿貫俊一 1992 「長者久保・神子柴文化並行段階の九州」『古文化談叢』第18集 九州古文化研究会
綿貫俊一 1993 「九州北部の細石刃文化」『シンポジウム 細石刃文化研究の新たなる展開』 八ヶ岳旧石器研究グループ・佐久考古学会
綿貫俊一 1999 「細石刃が欠落した長者久保・神子柴段階の提唱」『おおいた考古』第12集 大分県考古学会
綿貫俊一 2000 「細石刃文化と細石刃文化の間に位置する長者久保・神子柴文化並行期」『九州の細石器文化Ⅲ 九州における更新世末期の環境と人類の適応 －縄文文化への鼓動－』 九州旧石器文化研究会

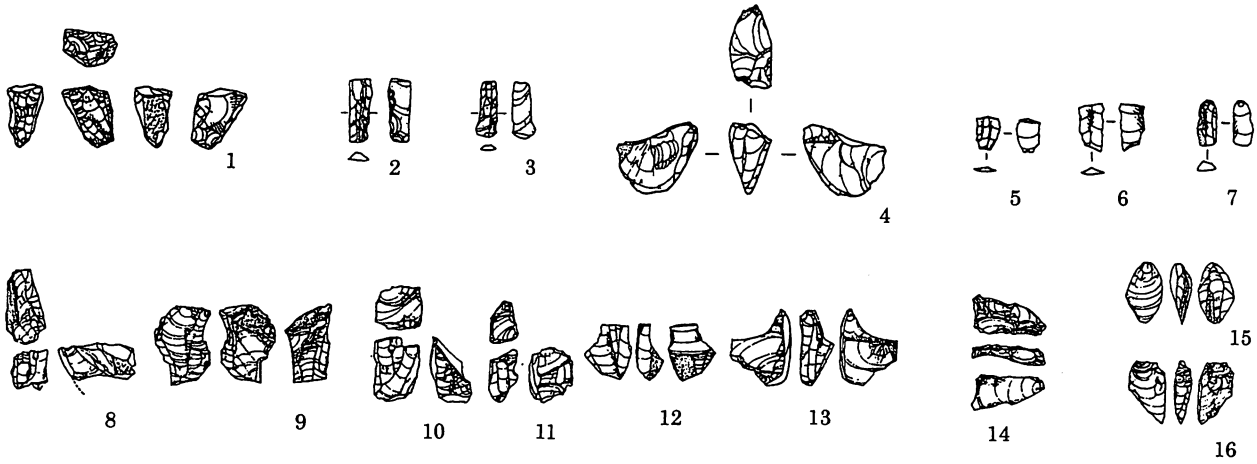
※ 分布図中の番号は、本論文末の遺跡一覧表の番号と対応する。遺跡名は一覧表を参照のこと。



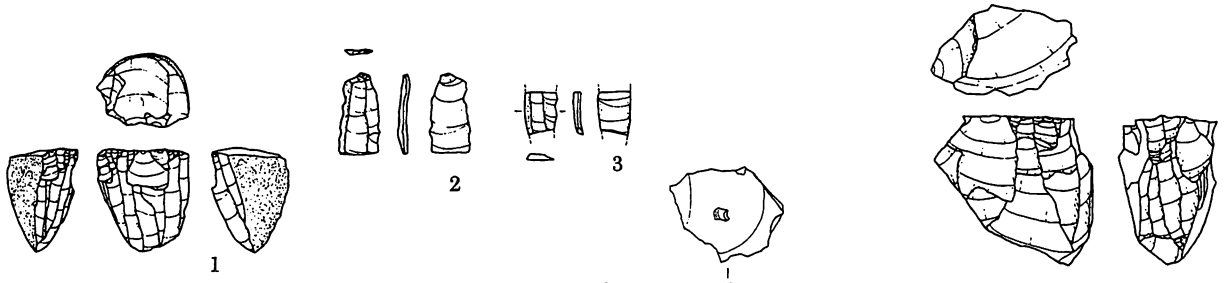
第1図 東南部九州地域の細石刃石器群の分布



第２図　Ａ　球磨川上流域　上段から別府、里の城、白鳥平Ａ、白鳥平Ｂ

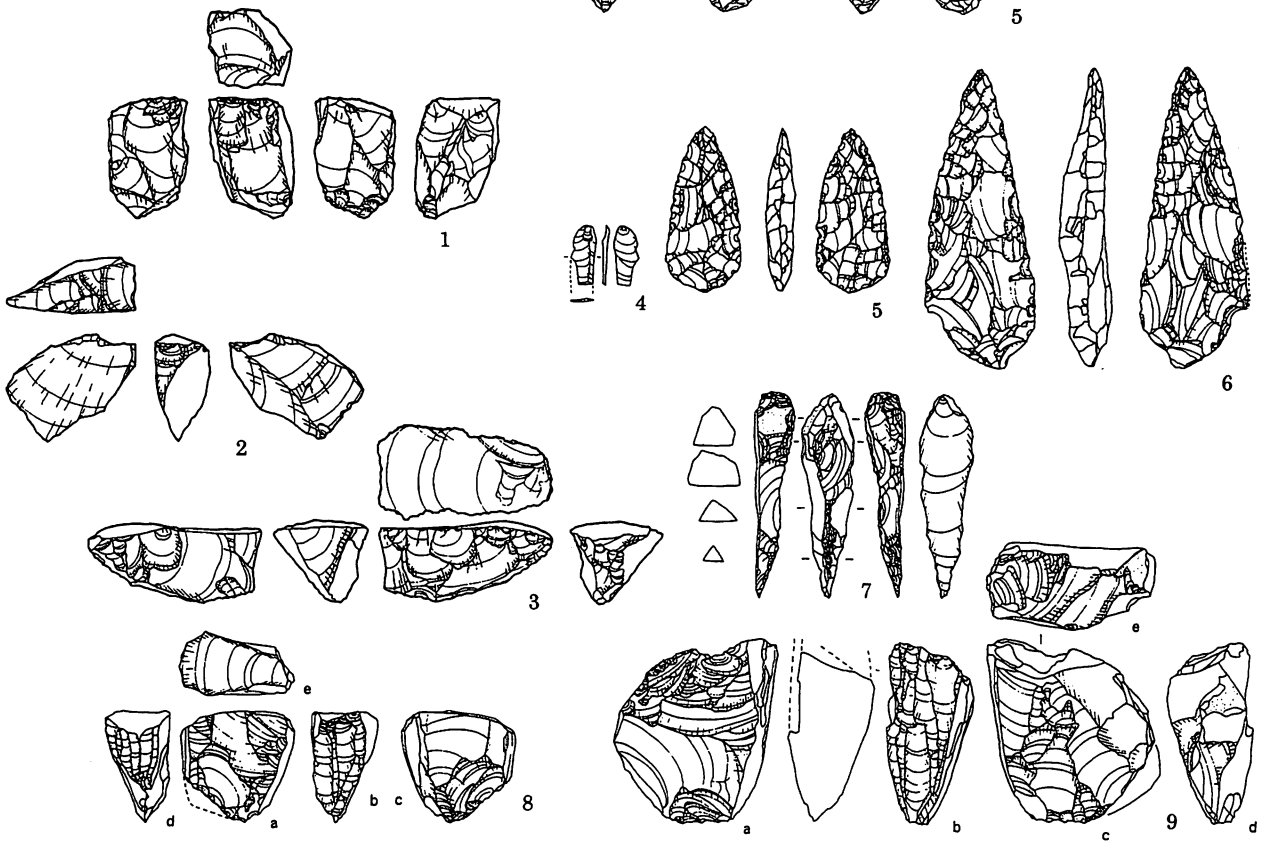


第３図　B　天草諸島　上段　1：棚底下塔尾　2・3：内ノ原　4-7：山門野　下段：尻無平

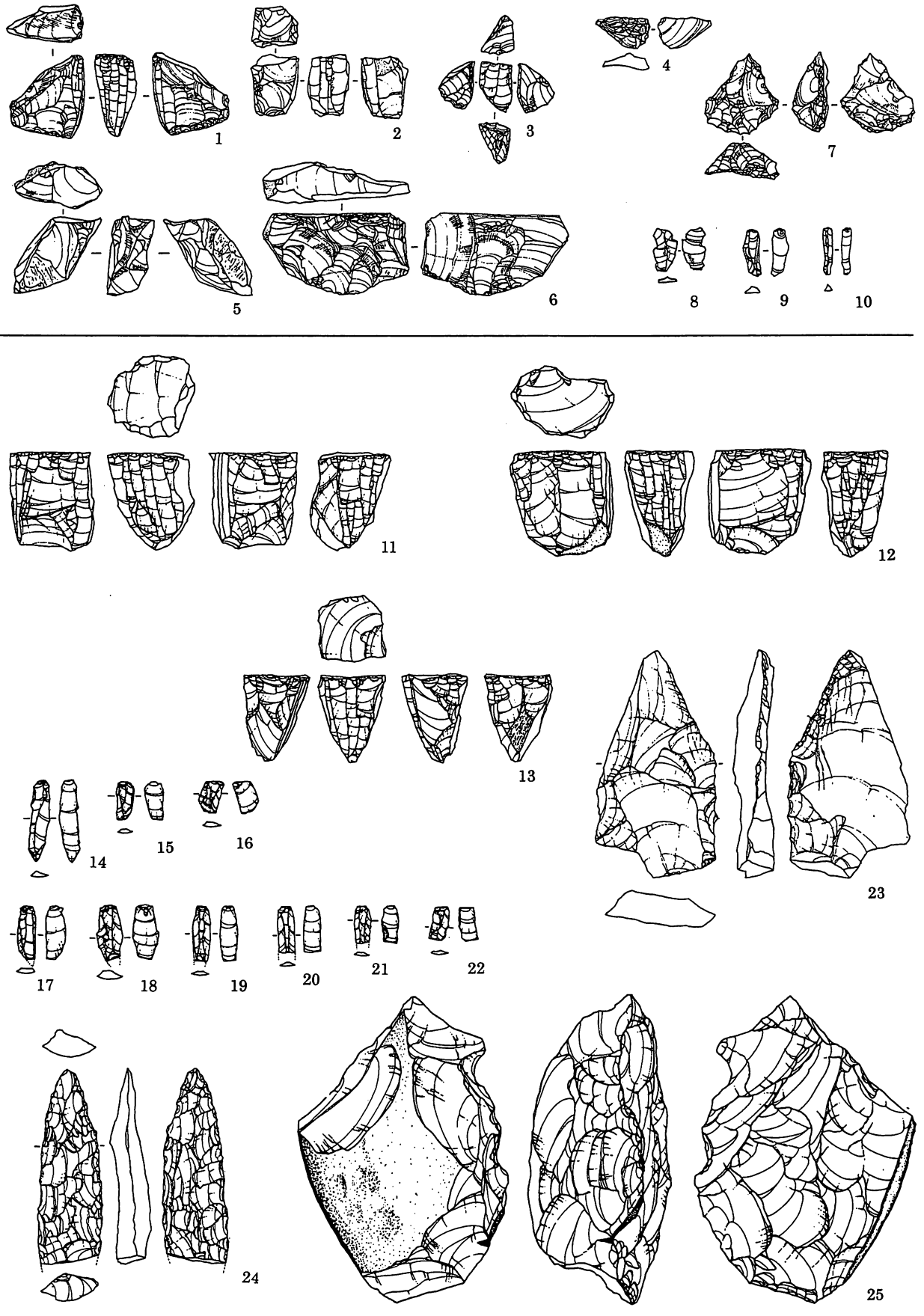


第４図　C　周防灘沿岸

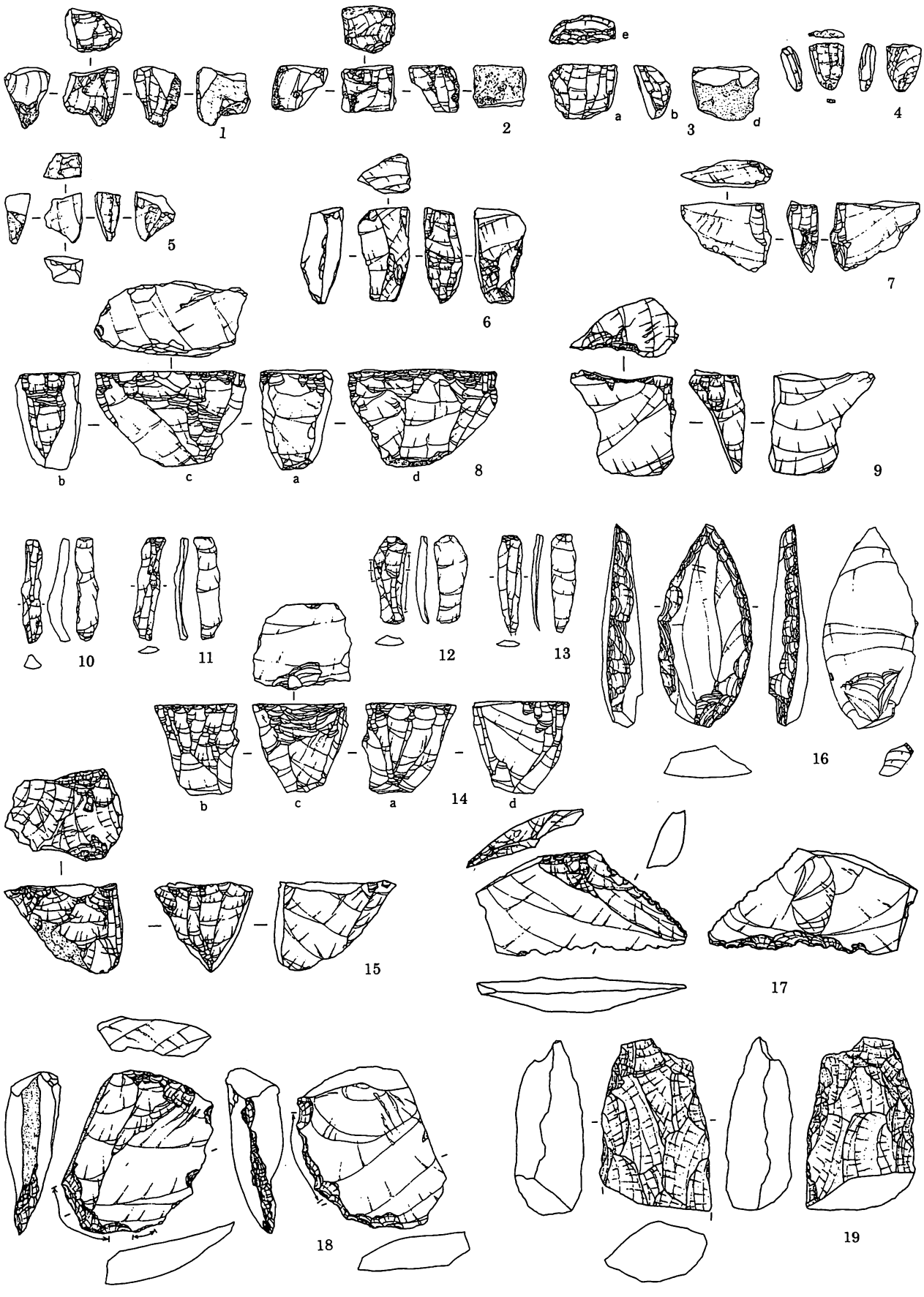
1-3：桐ヶ迫　4・5：尾畑



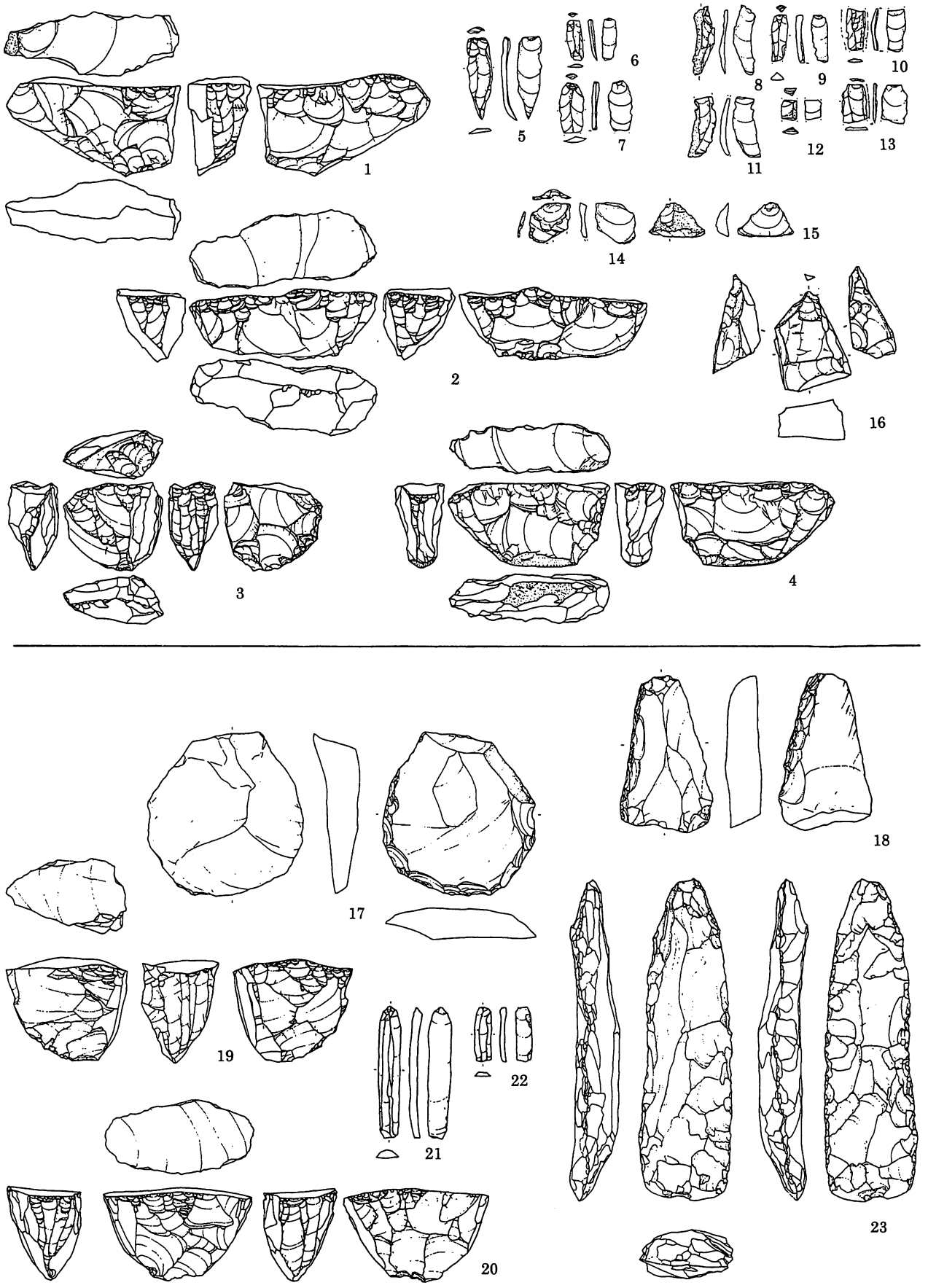
第５図　D・E　別府湾岸南・北部　1-3：下野　4-6 目久保第１　7-9：エゴノクチ



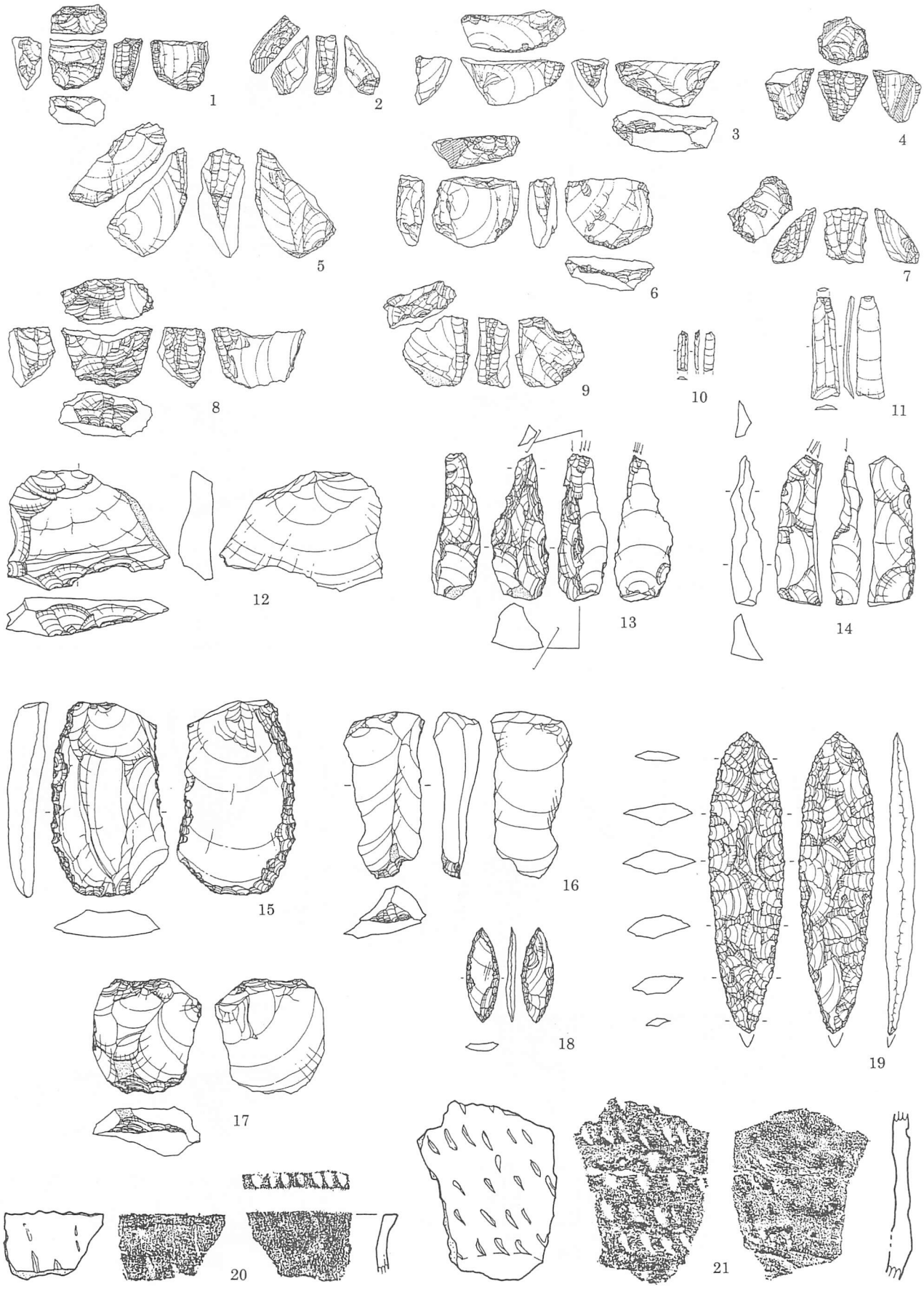
第６図　Ｆ　大野川中・上流域（１）　上段：政所馬渡　下段：上下田



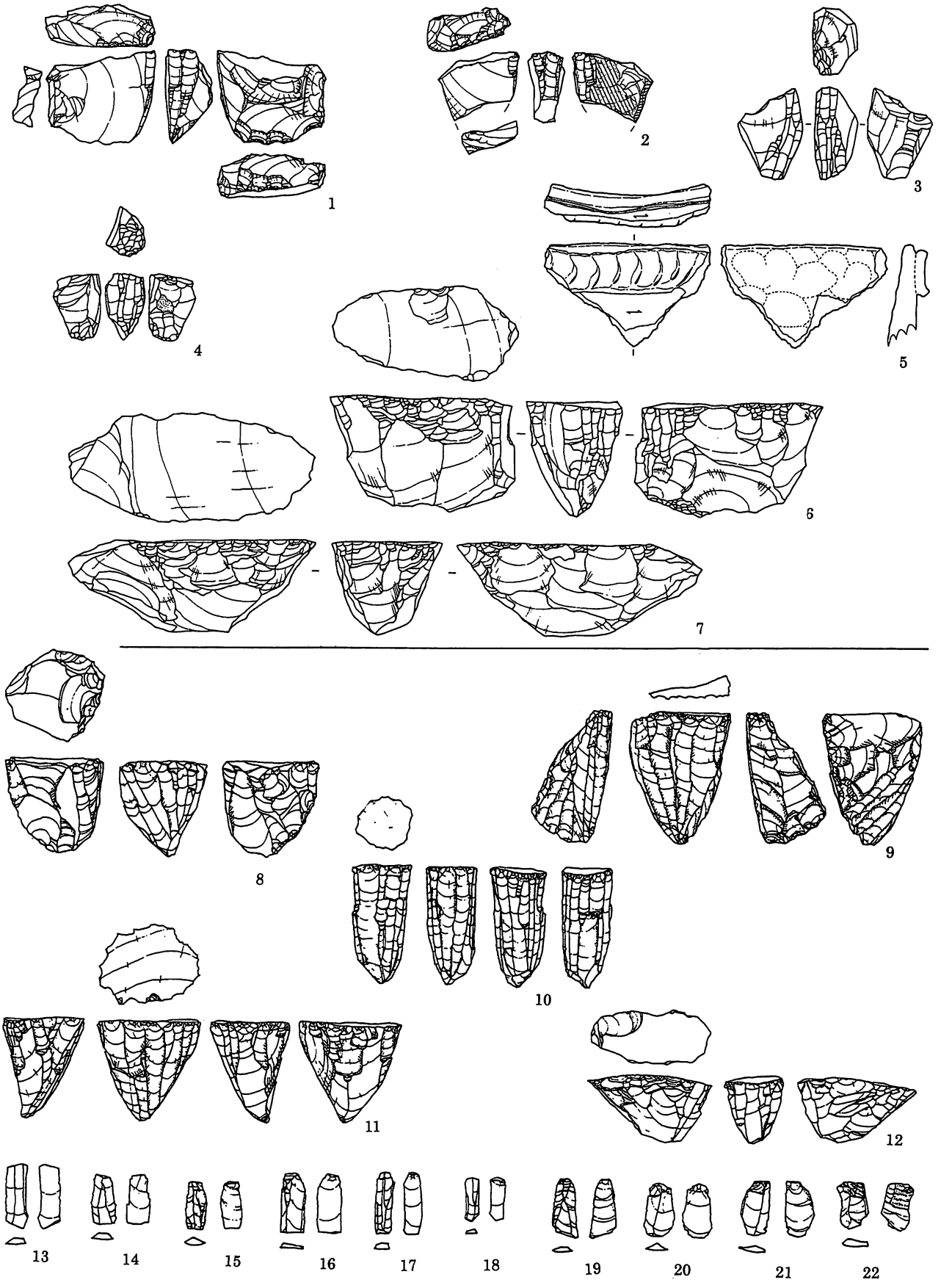
第７図　Ｆ　大野川中・上流域（２）　松山



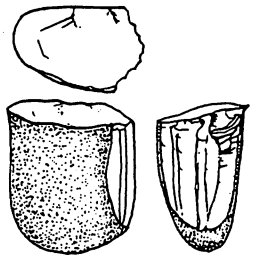
第８図　Ｆ　大野川中・上流域（３）　上段：牟礼越　下段：市ノ久保

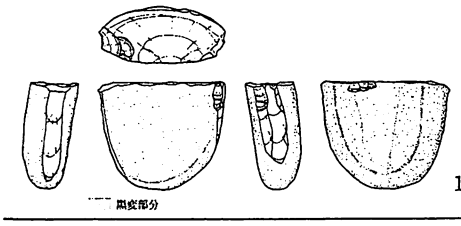


第９図　Ｇ　五ヶ瀬川流域（１）　阿蘇原上

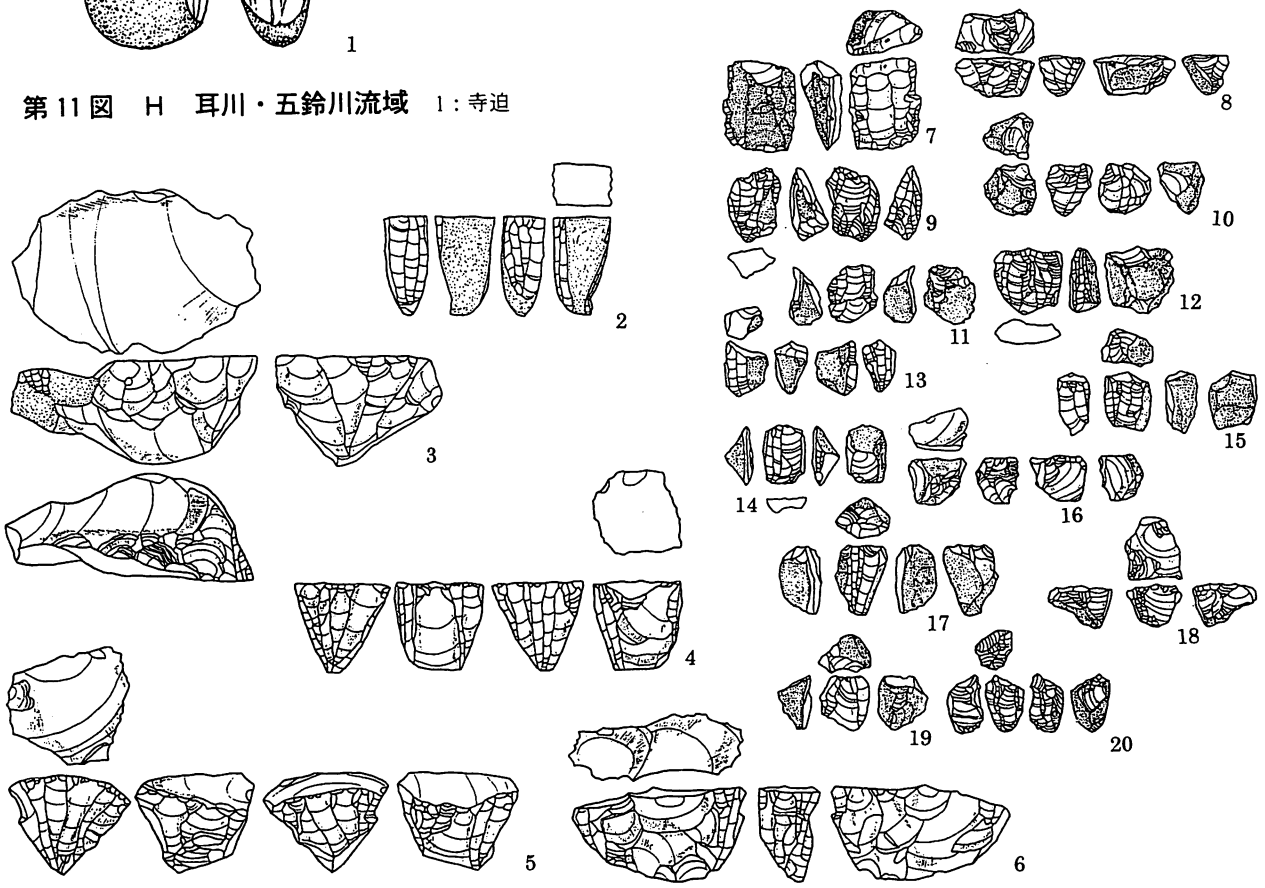


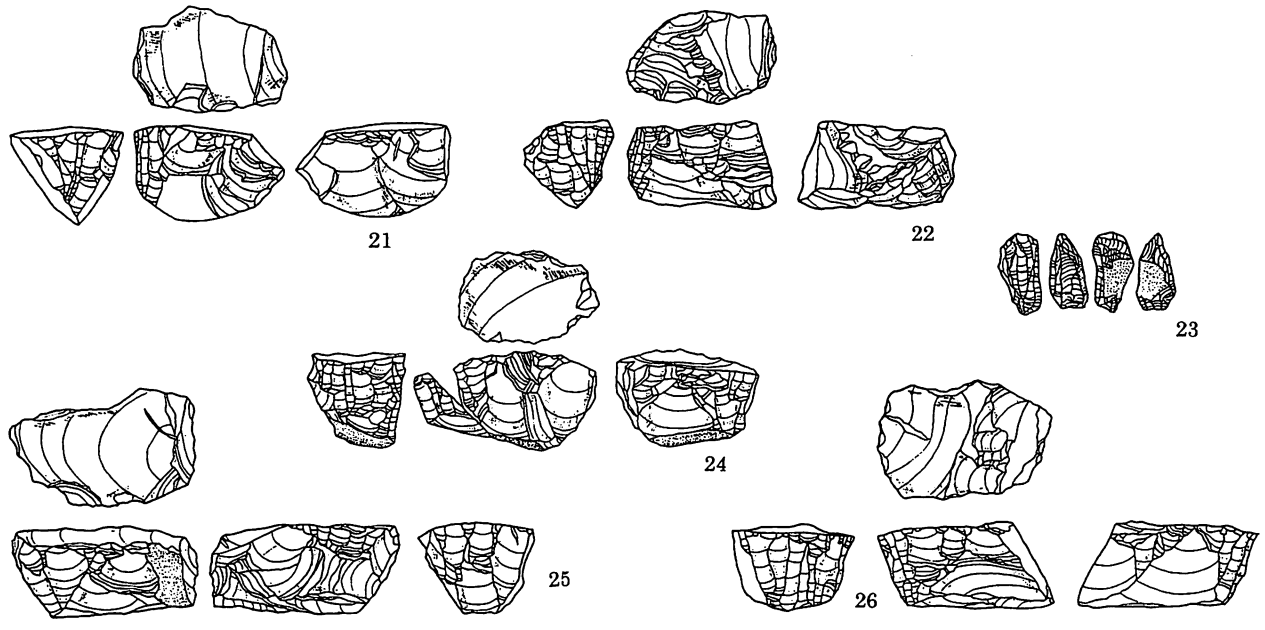
第10図　G　五ヶ瀬川流域（2）　上段：岩土原　下段：赤木



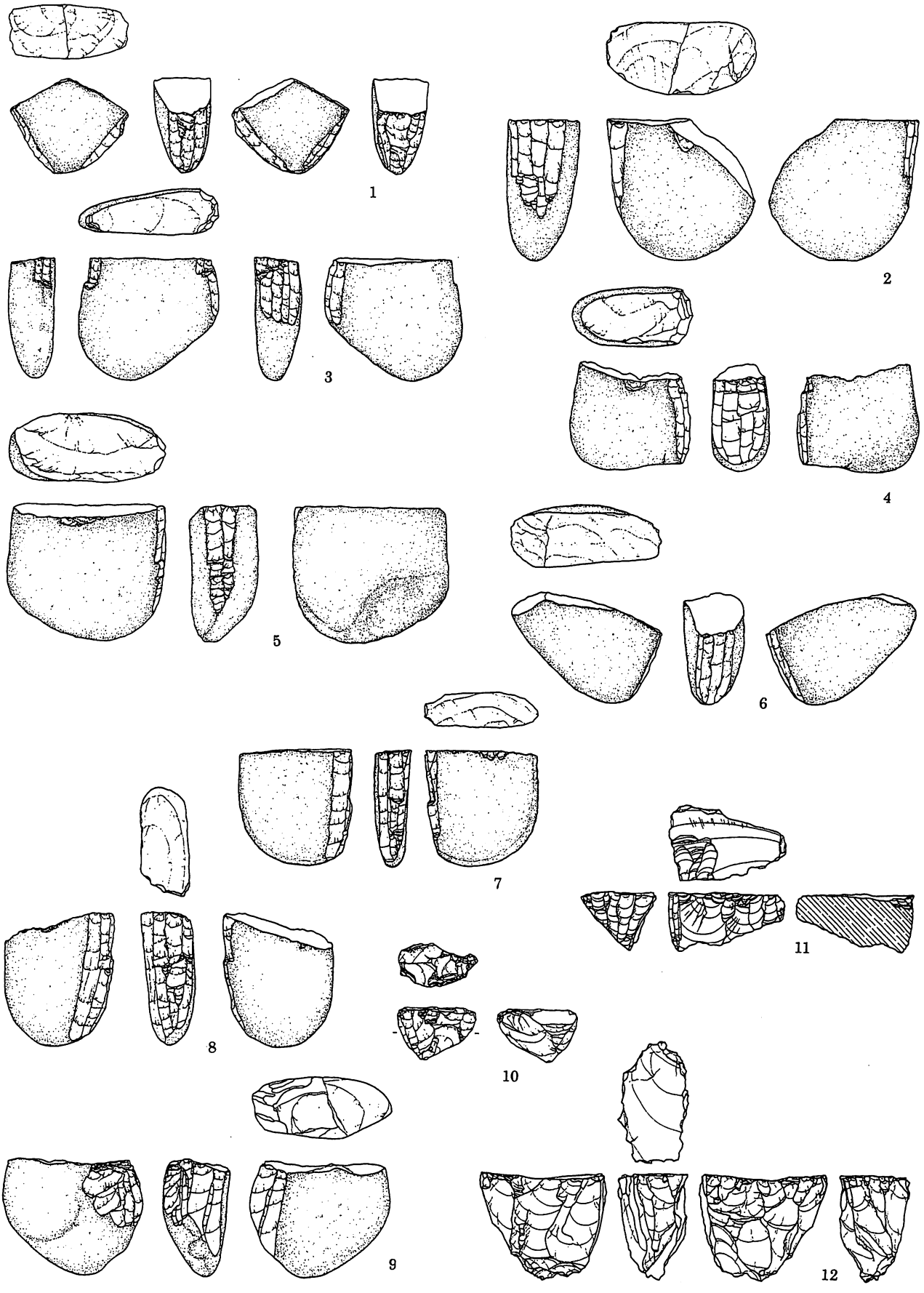


第 11 図　H　耳川・五鈴川流域　1：寺迫

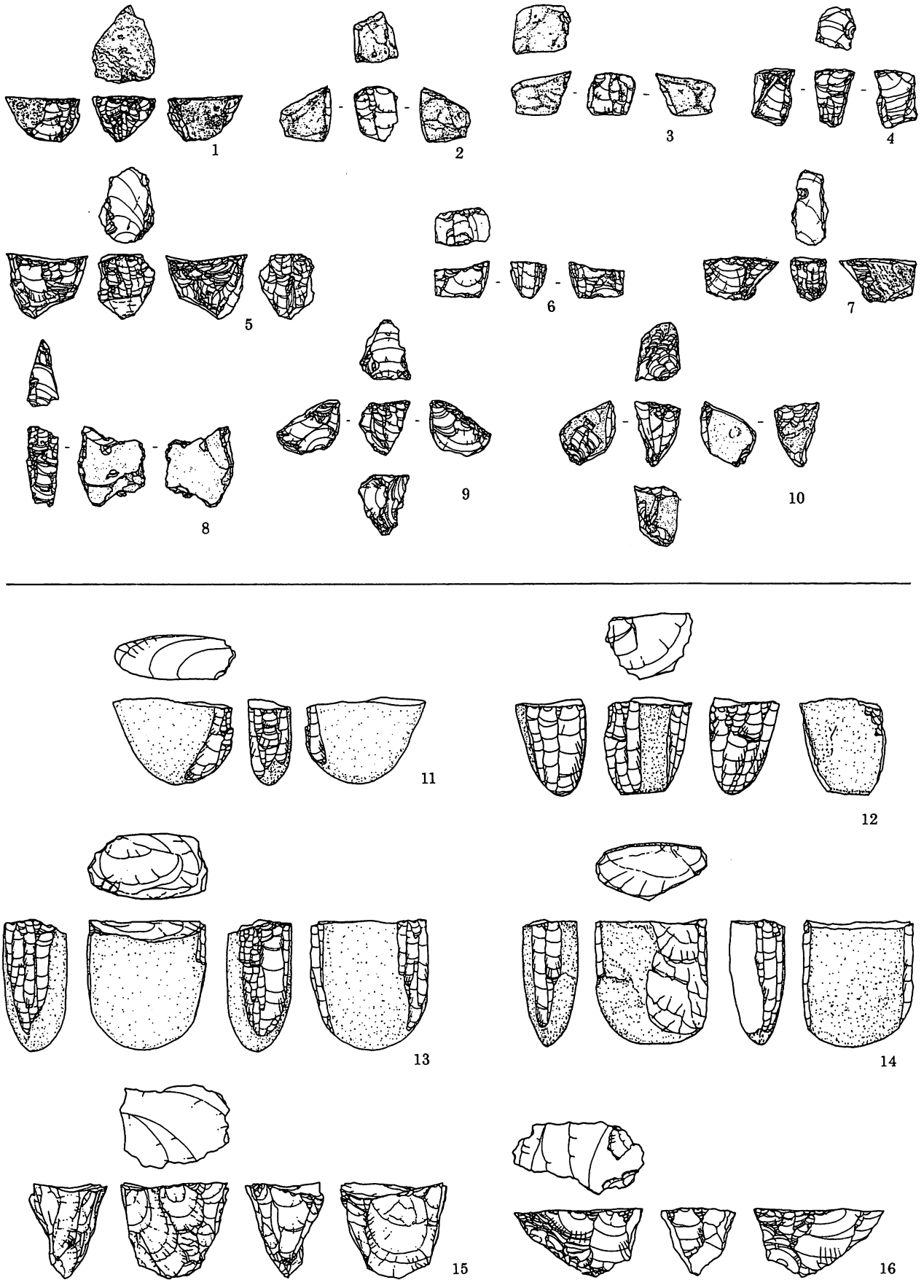




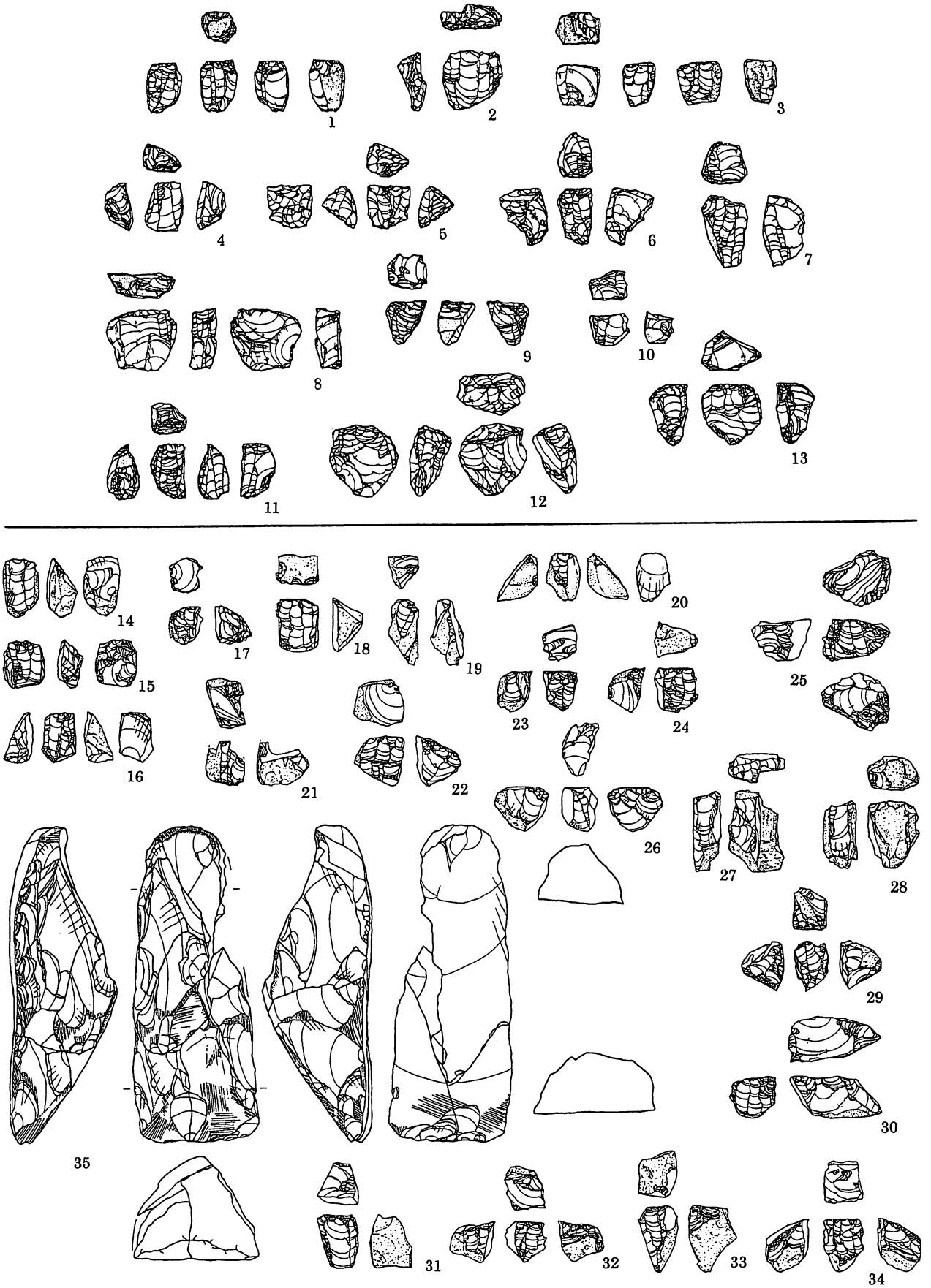
第 12 図　I　宮崎平野部（1）　上段：西ヶ迫　中段：船野第 1　下段：船野第 2



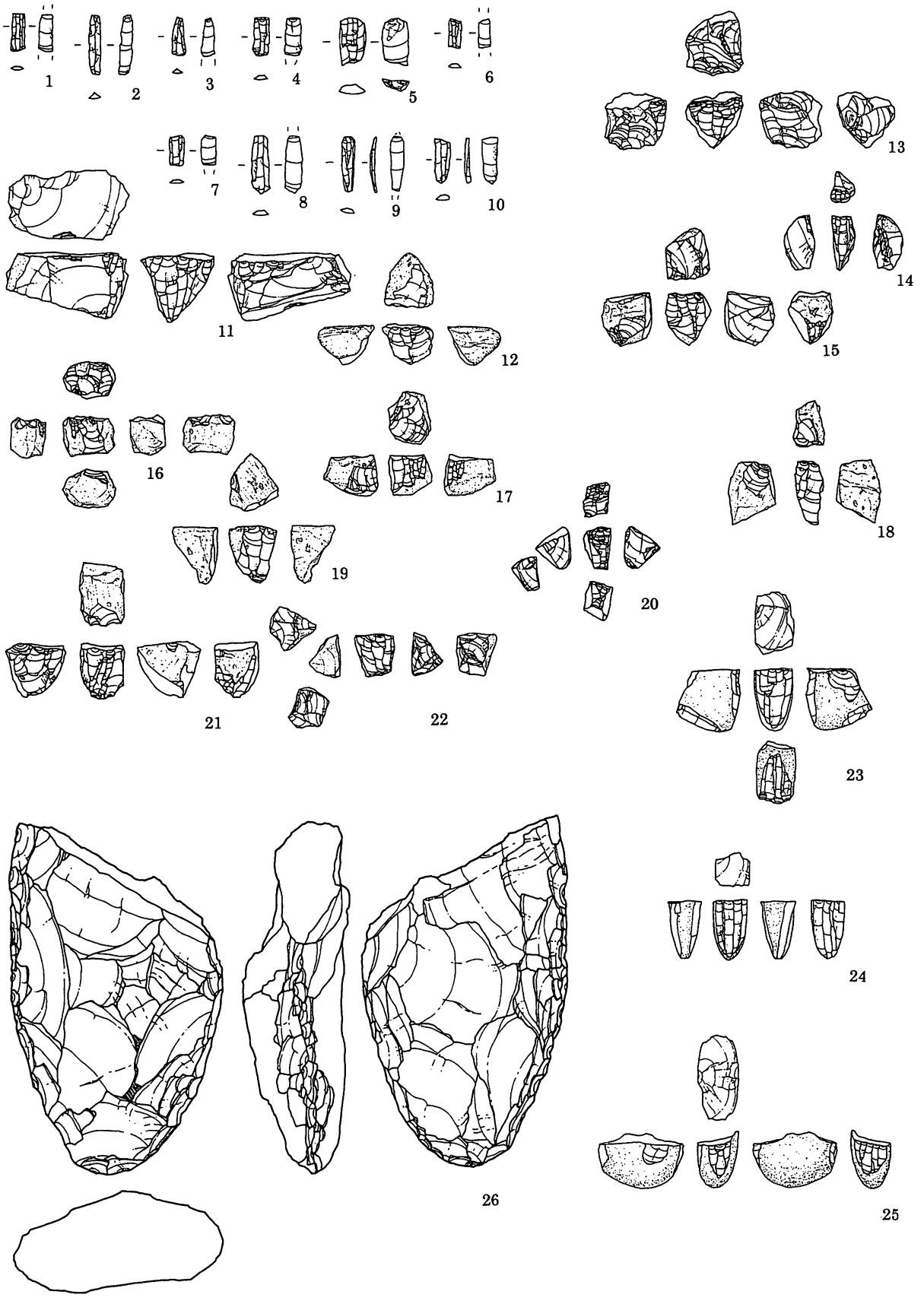
第13図　I　宮崎平野部（2）　長菌原



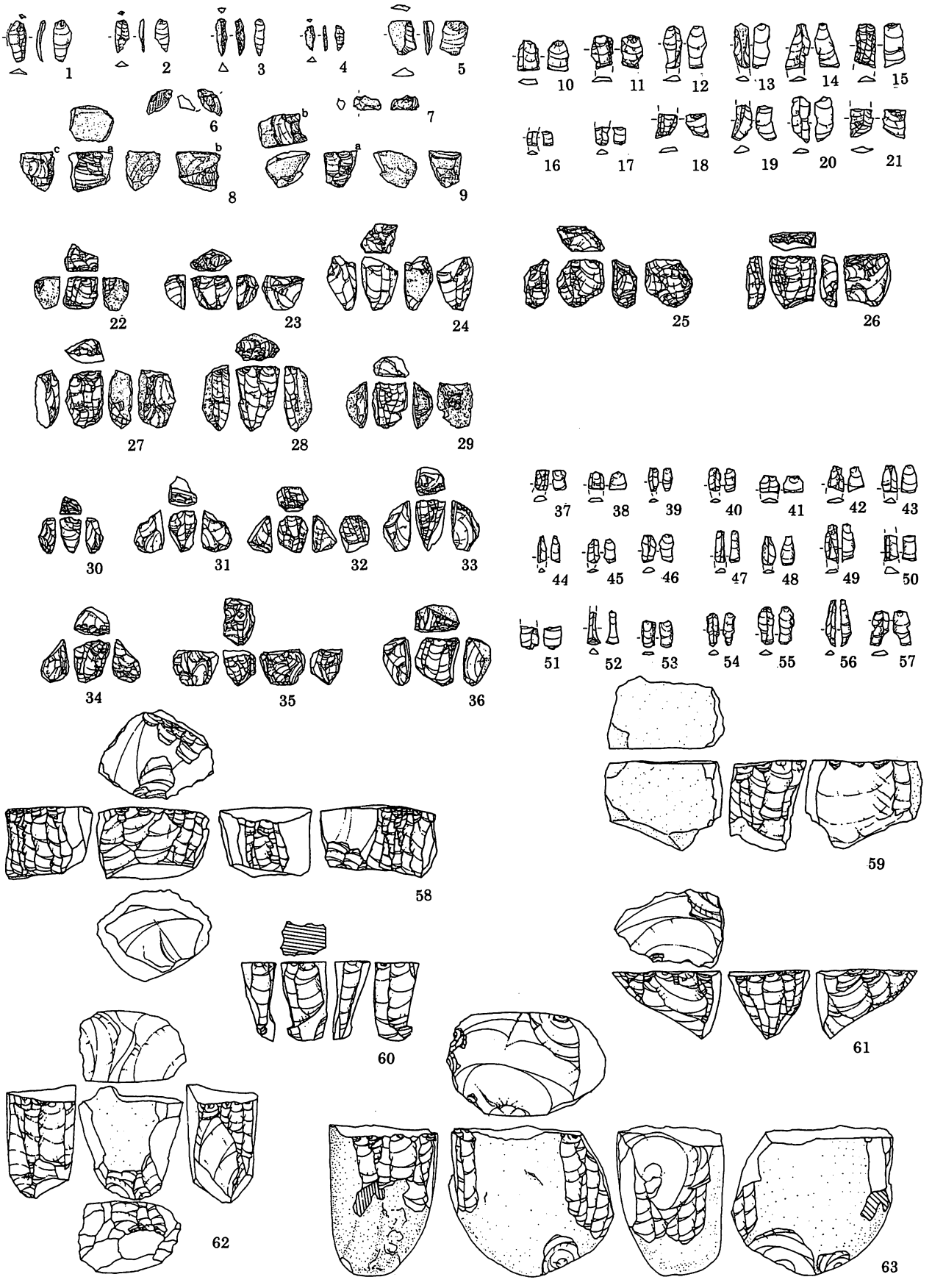
第 14 図　I　宮崎平野部（3）　上段：下屋敷　下段：塚原



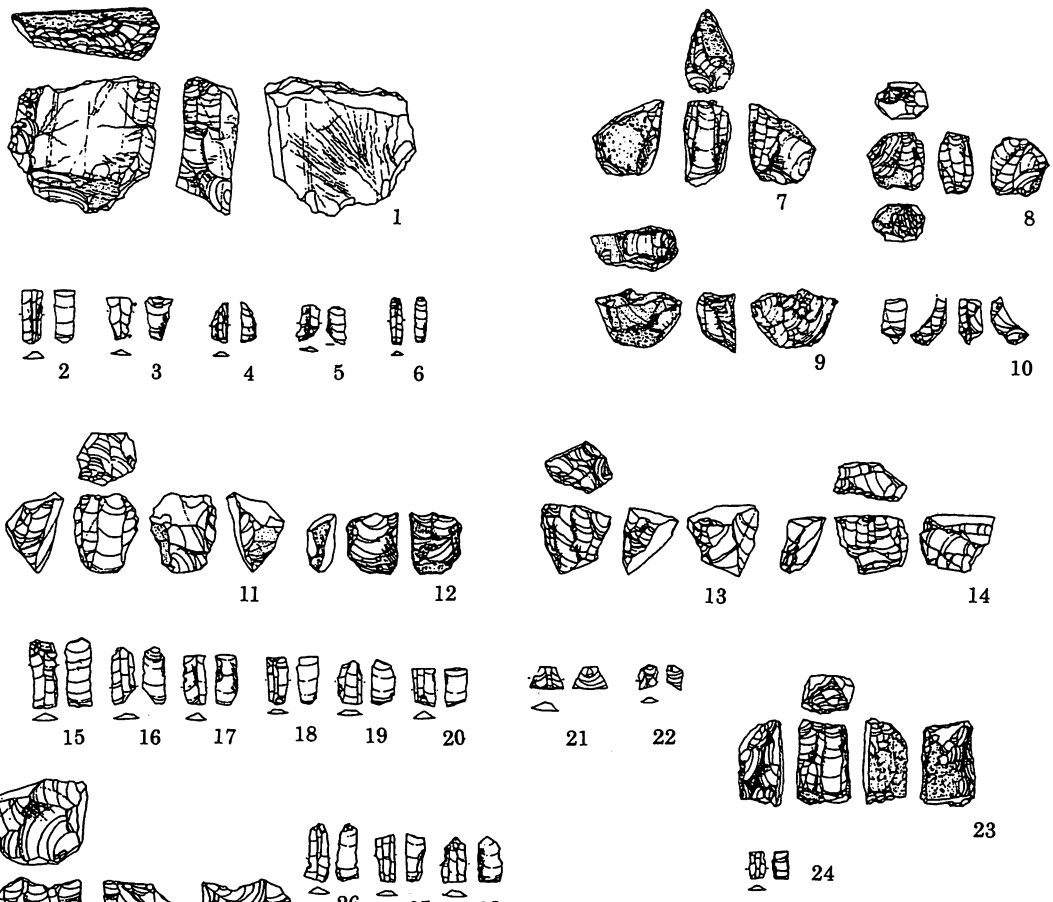
第 15 図　J　清武川・加江田川流域　上段：下星野　下段：白ヶ野第２・第３



第 16 図　K　大淀川中・下流域　小田元第 2

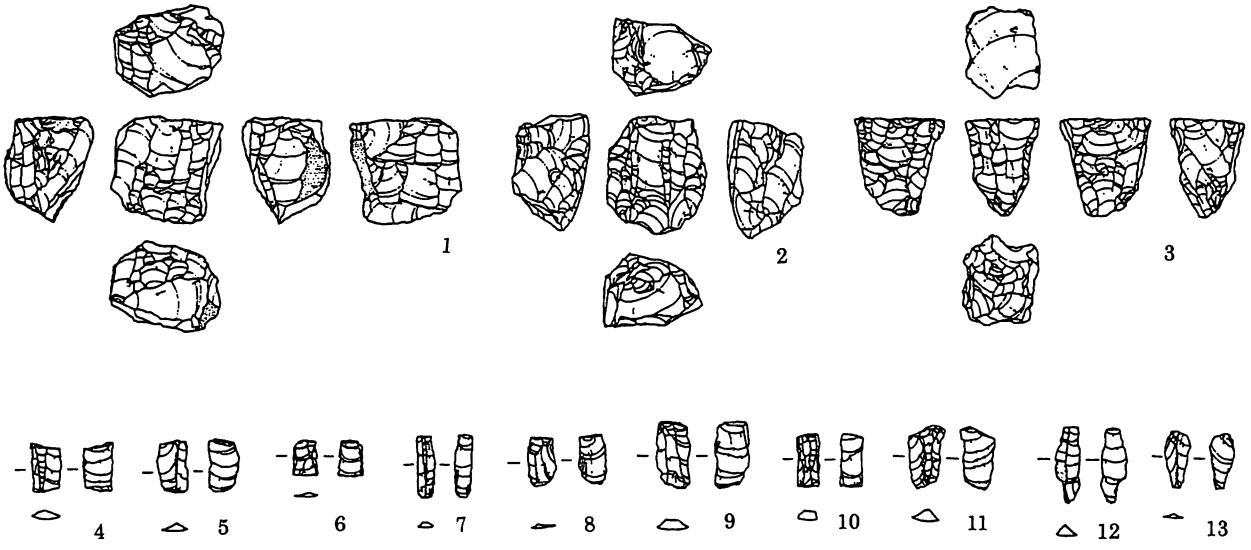


第 17 図　L　大淀川上流域　1-9：大岩田上村　10-29：城ヶ尾Ⅳ文　30-57：城ヶ尾Ⅴ文　58-63：池増

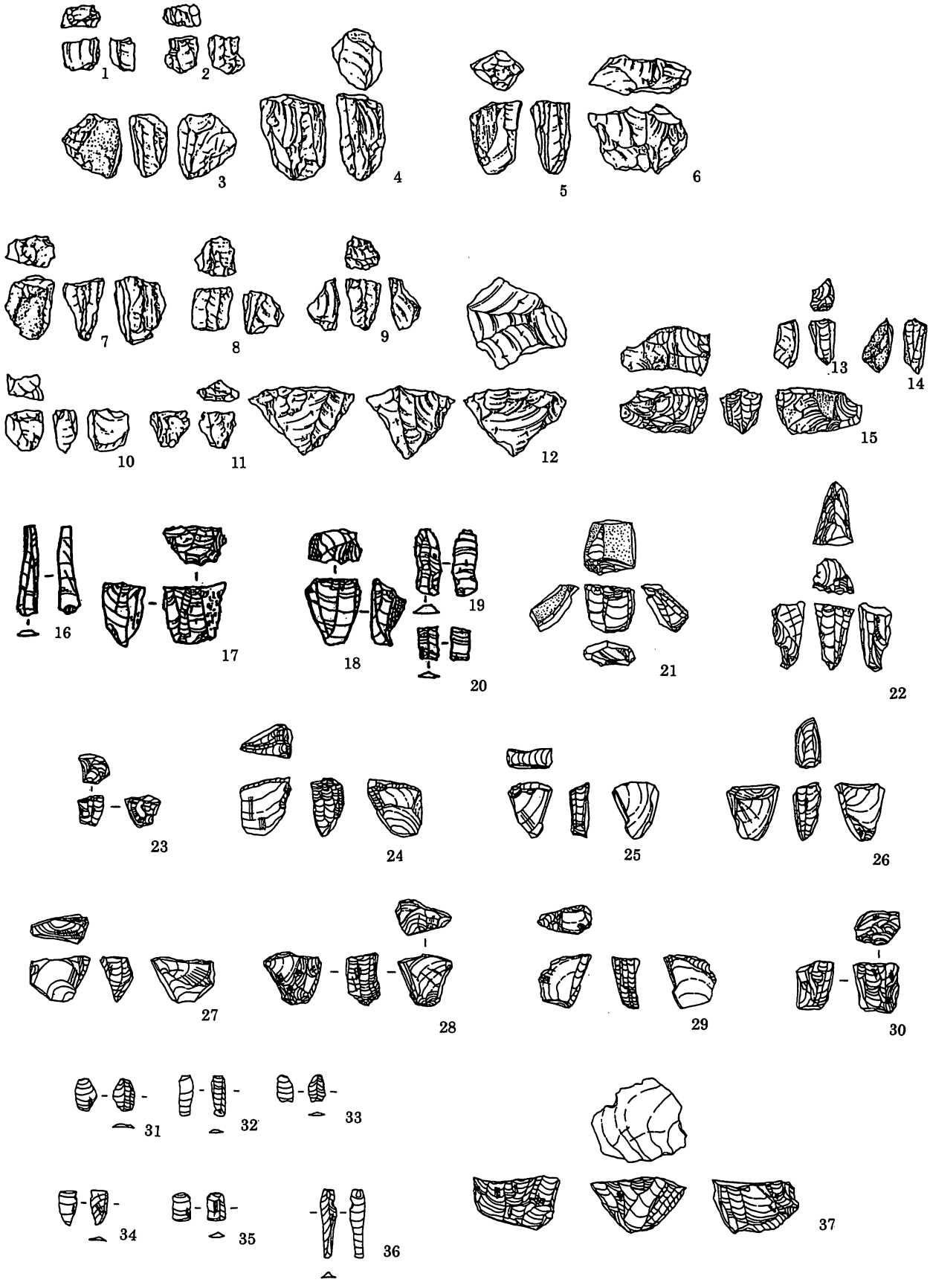


第18図　M　出水丘陵　1-10：涼松

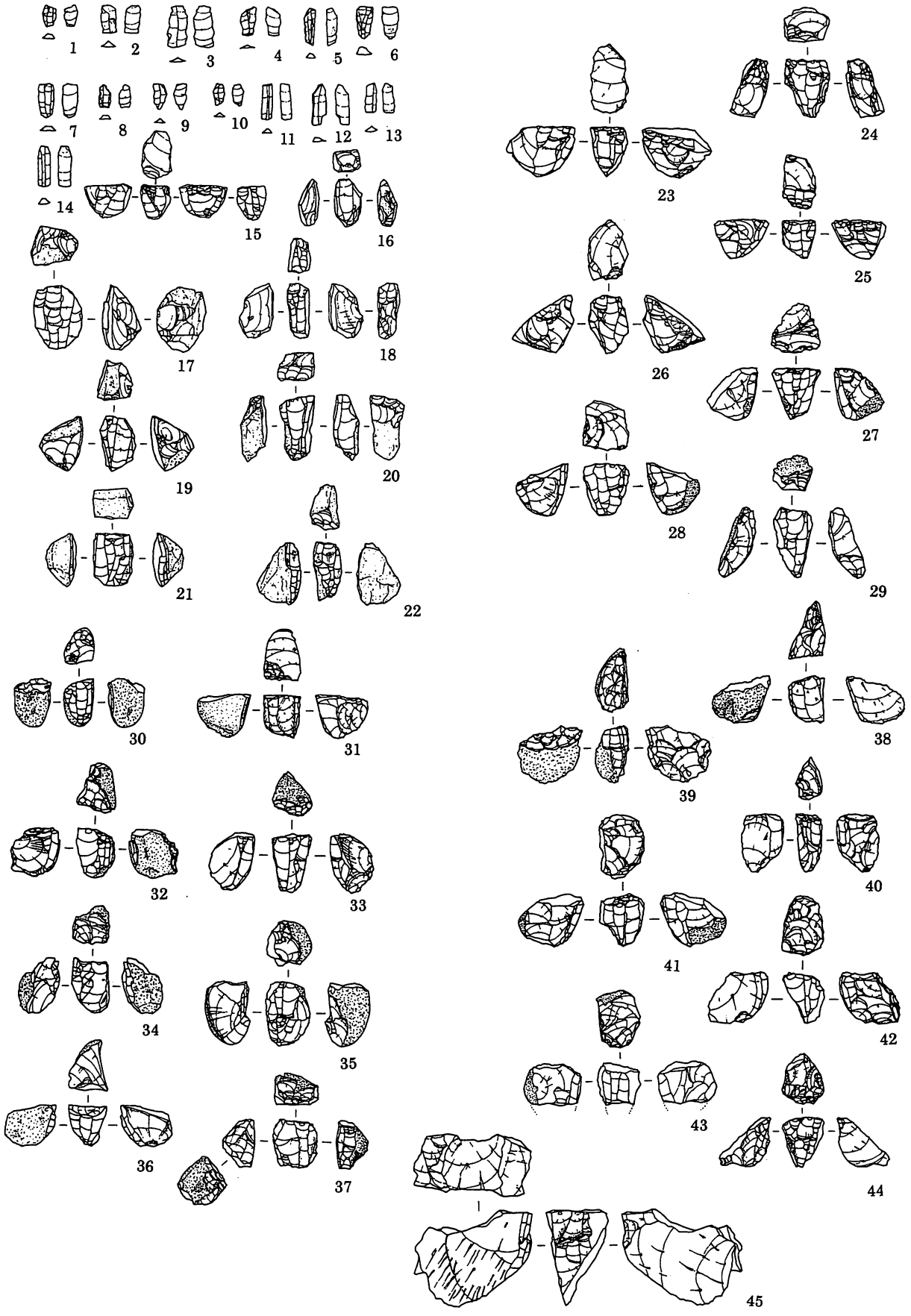
11-22：赤剥　23・24：中尾　25-30：日暗



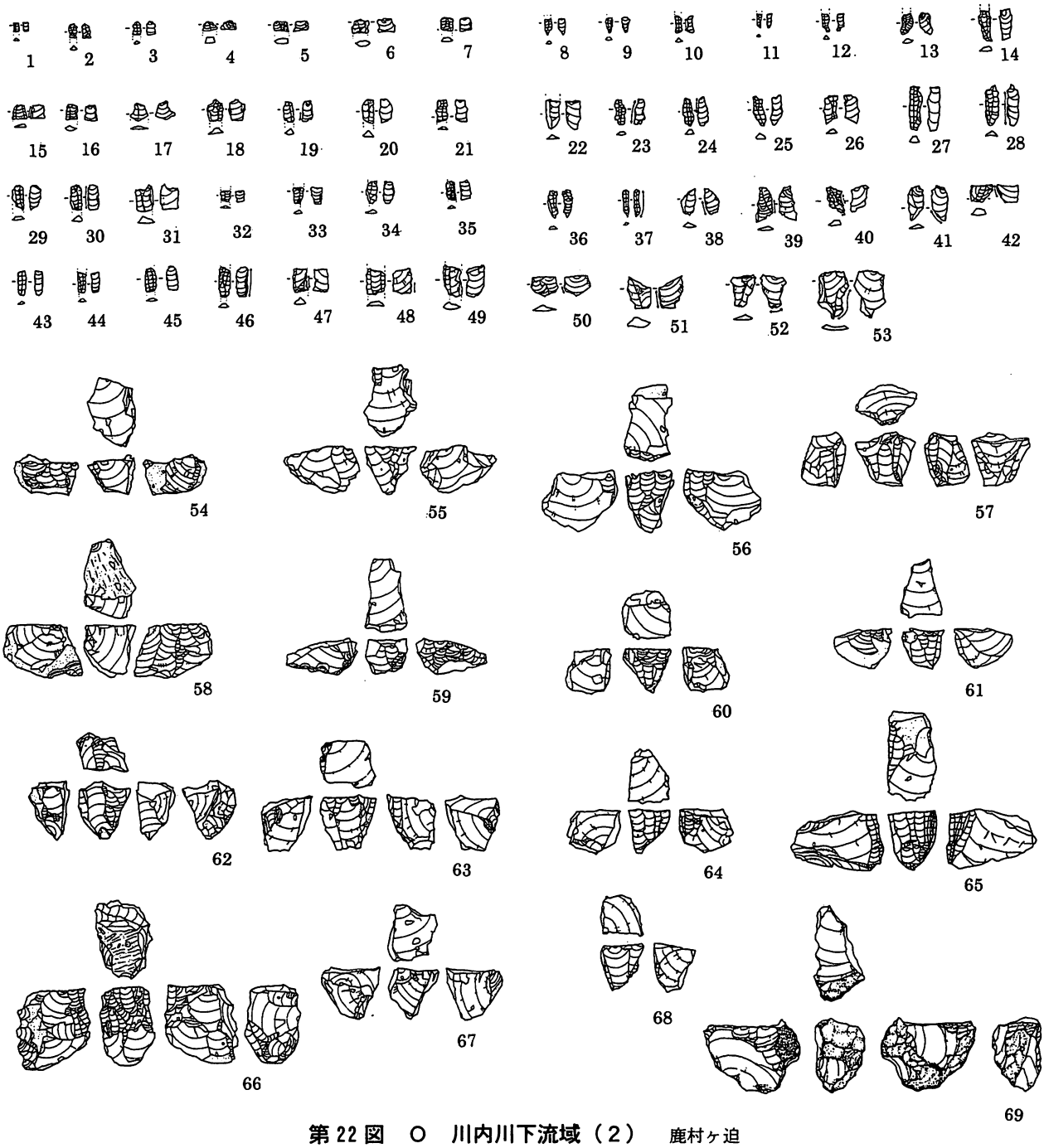
第19図　N　上場・石飛高原（1）　小原野



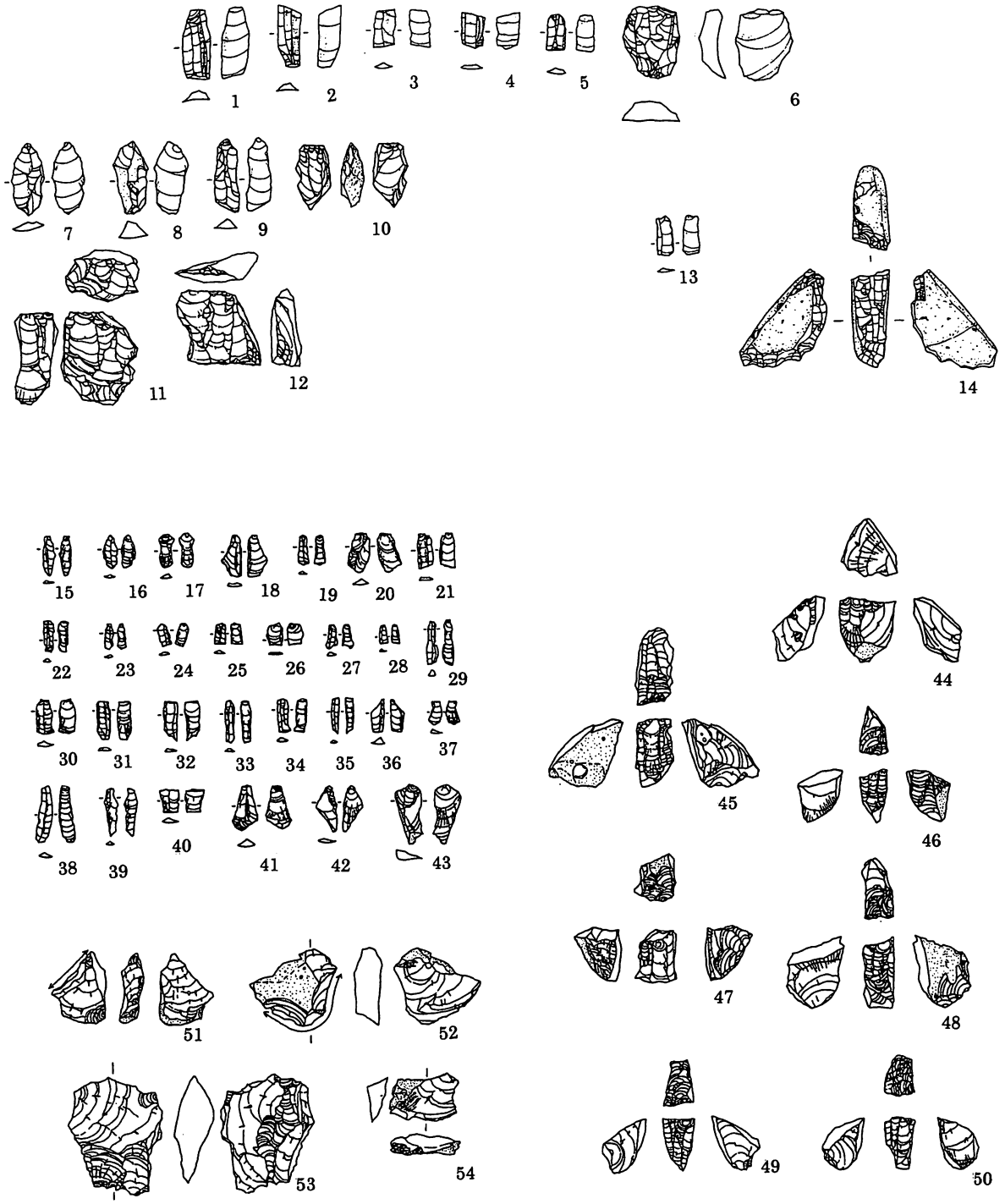
第 20 図　N　上場・石飛高原（２）　1-6：上場２層　7-15：上場３層　16・17：ぐみの木段
18-20：五目木　21・22：石飛　23-37：石飛東



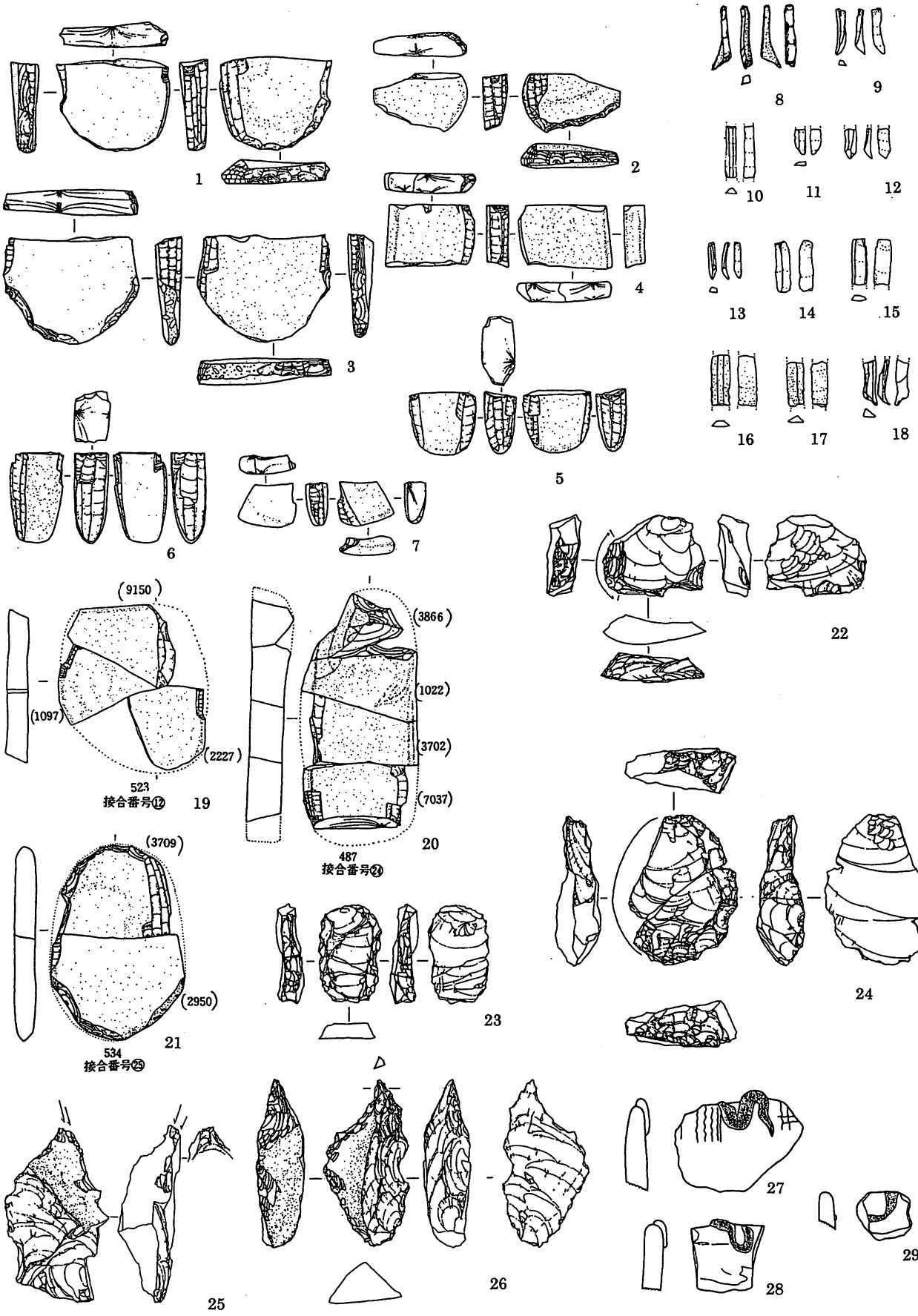
第21図　O　川内川下流域（1）　成岡　1-22：Bユニット　23-45：Cユニット



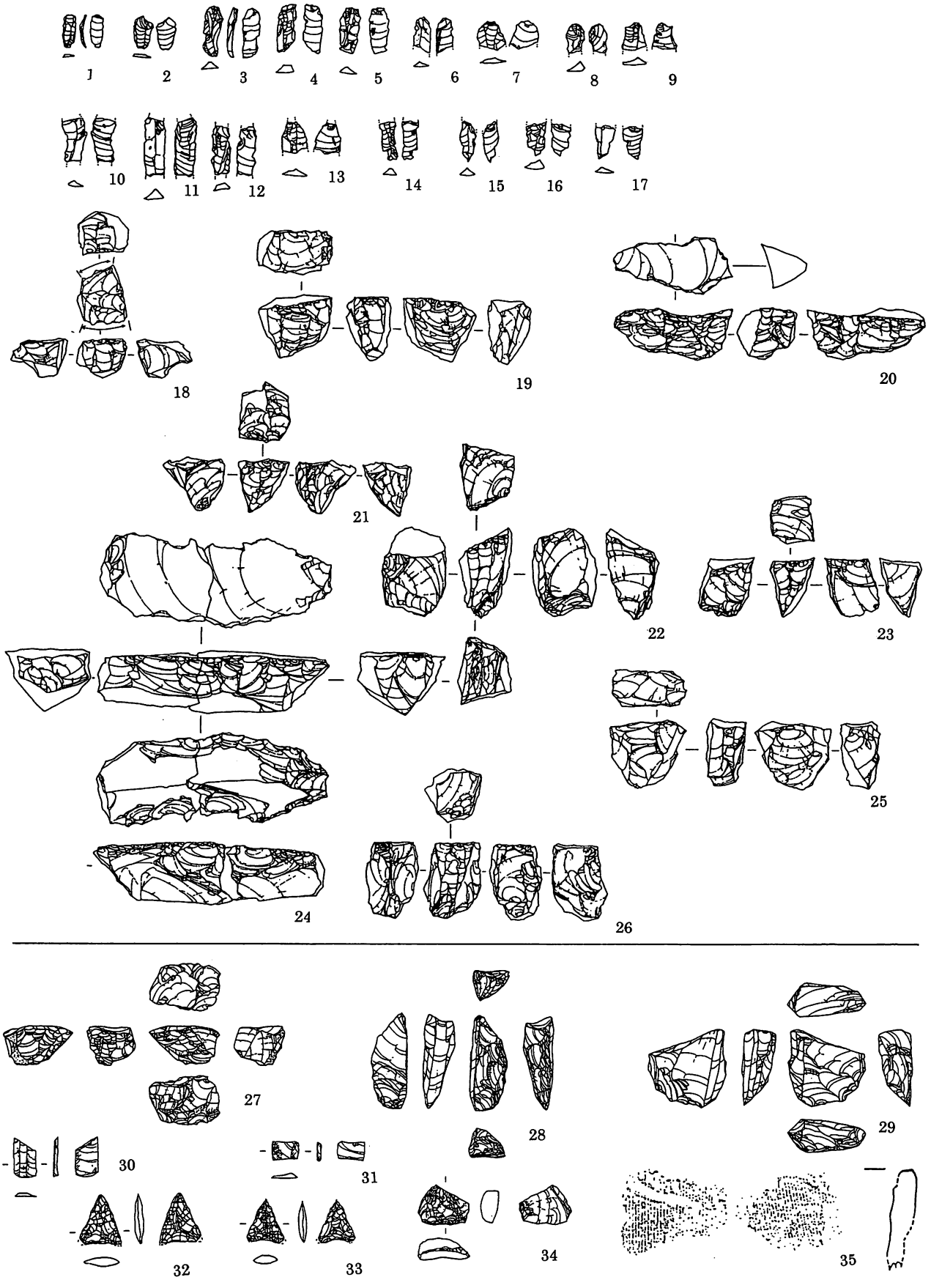
第 22 図　O　川内川下流域（２）　鹿村ヶ迫



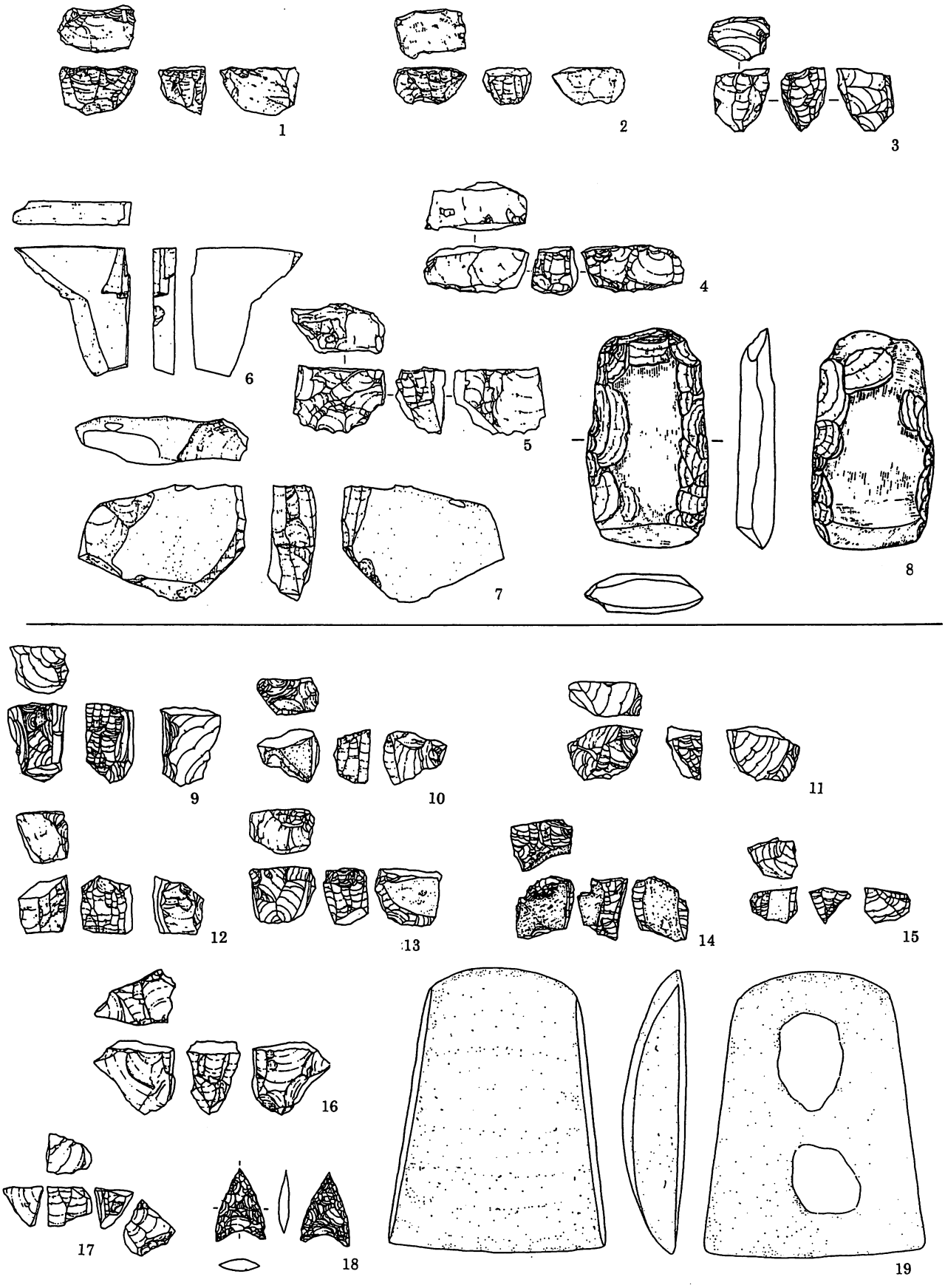
第23図　P　川内川上流域　1-12：木場A　13・14：木場A-2　15-54：新開原



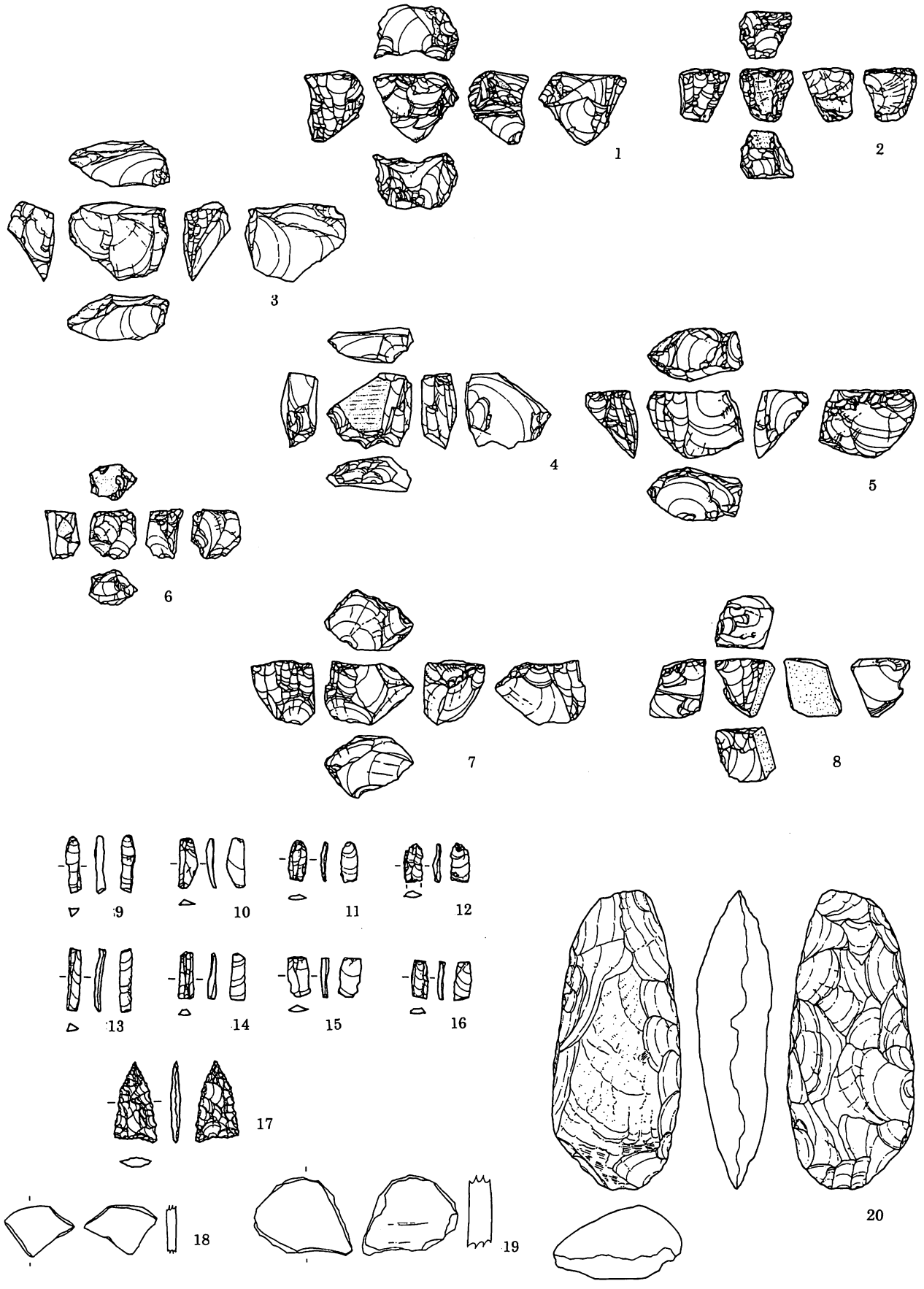
第 24 図　Q　薩摩半島北部（1）　加治屋園



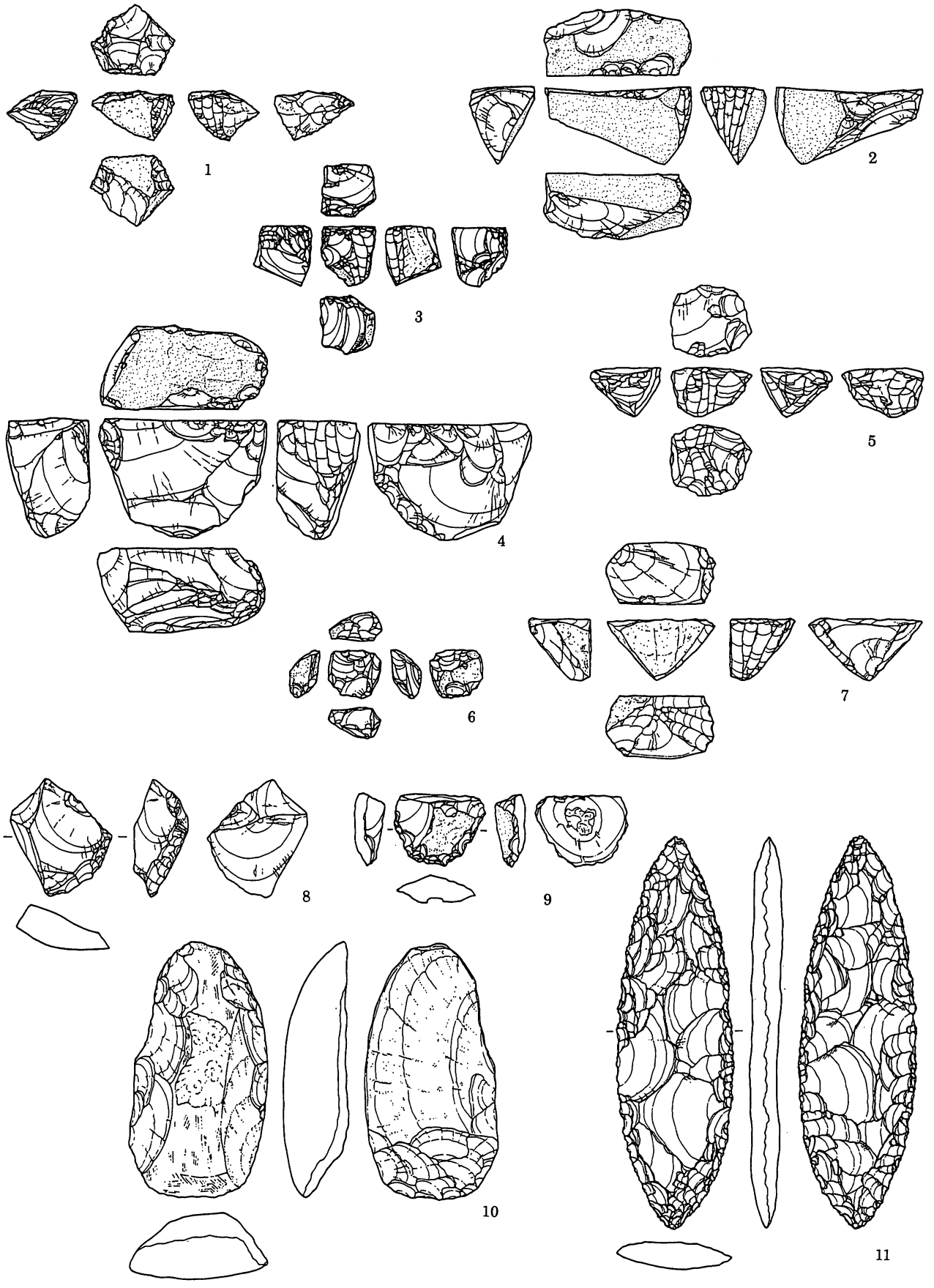
第 25 図　Q　薩摩半島北部（2）　上段：加治屋園　下段：瀬戸頭



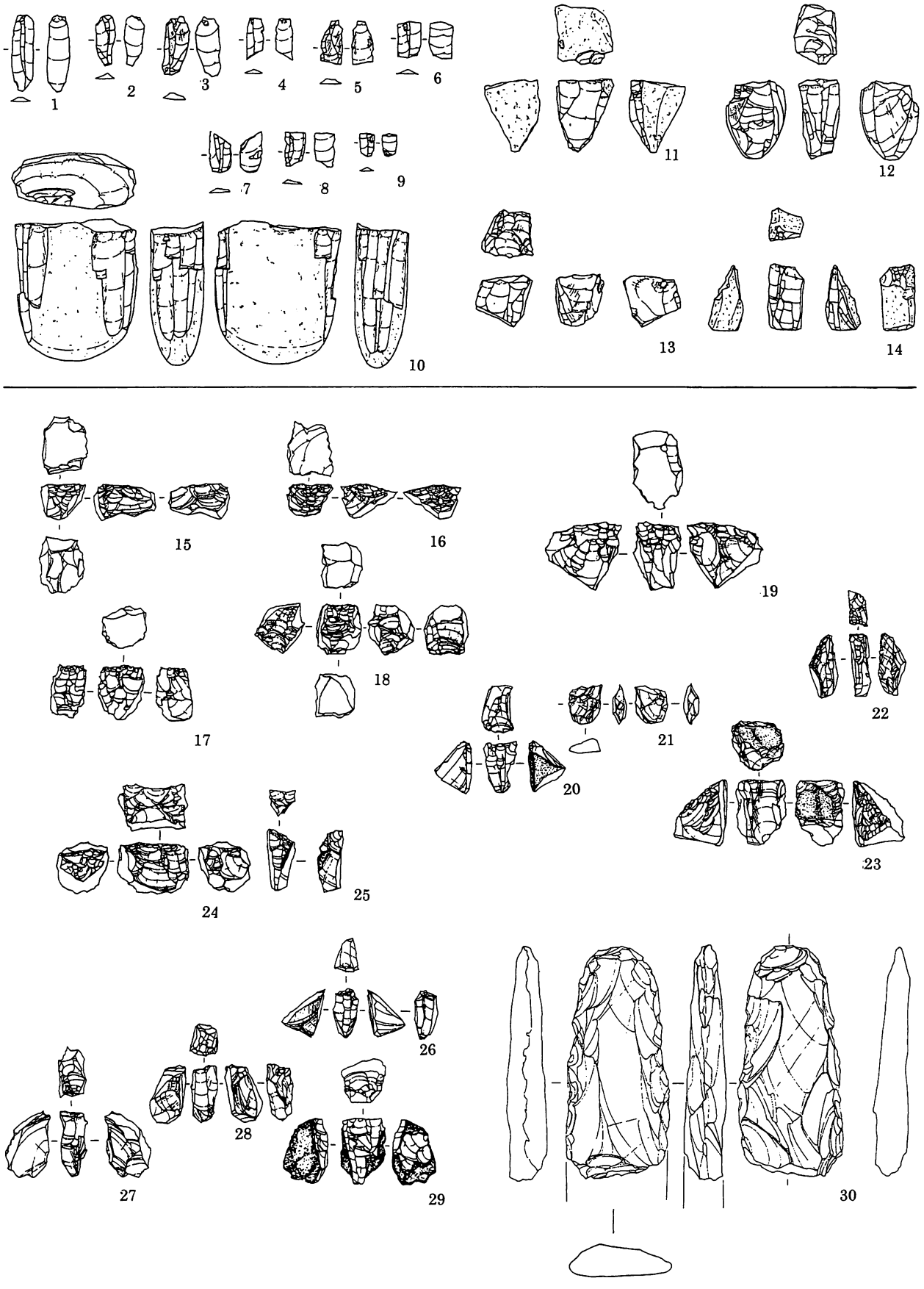
第 26 図　Q　薩摩半島北部（3）　加栗山　上段：30 ユニット　下段：18 ユニット



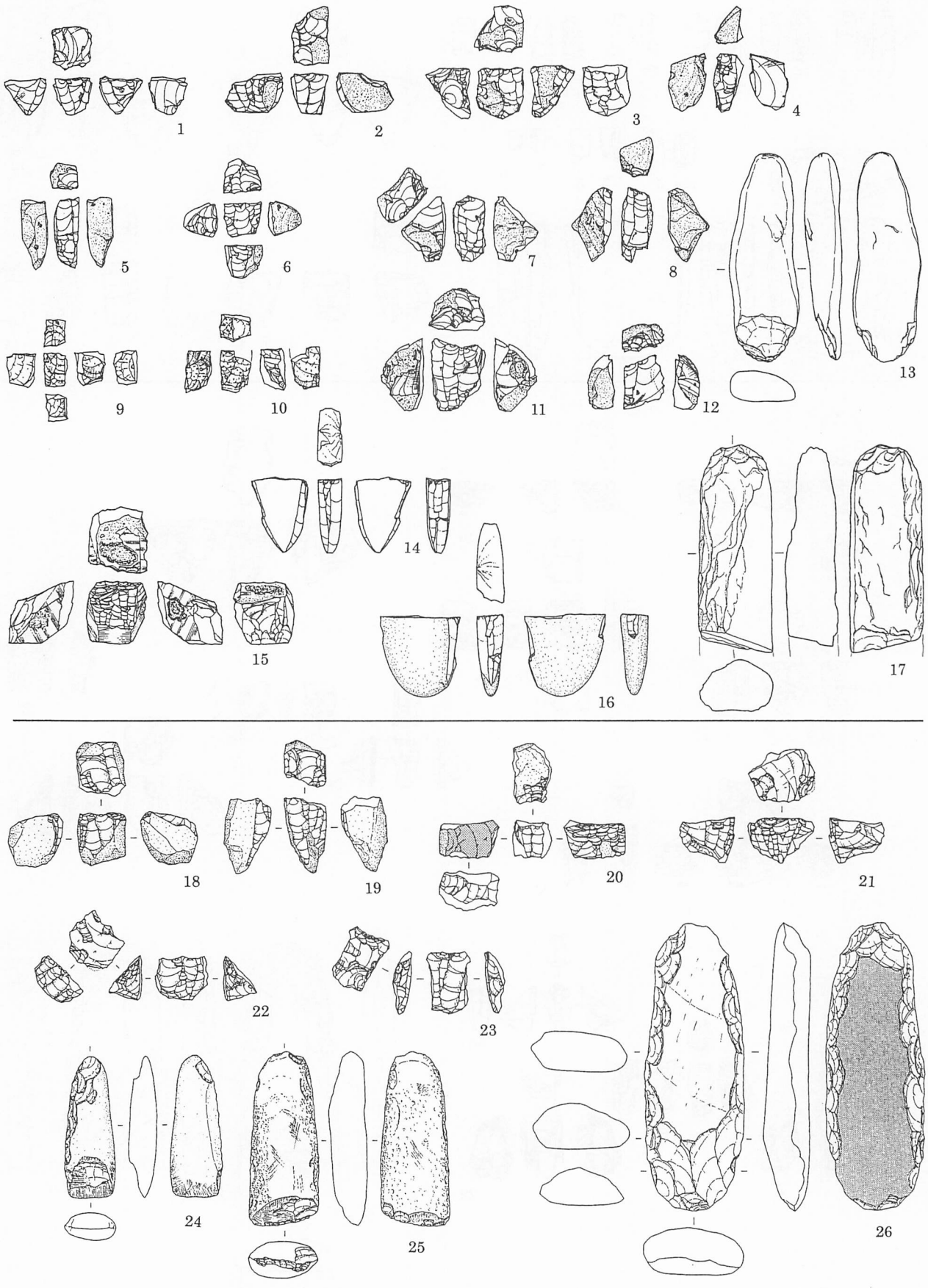
第27図　R　薩摩半島南部（1）　帖地1A・B区



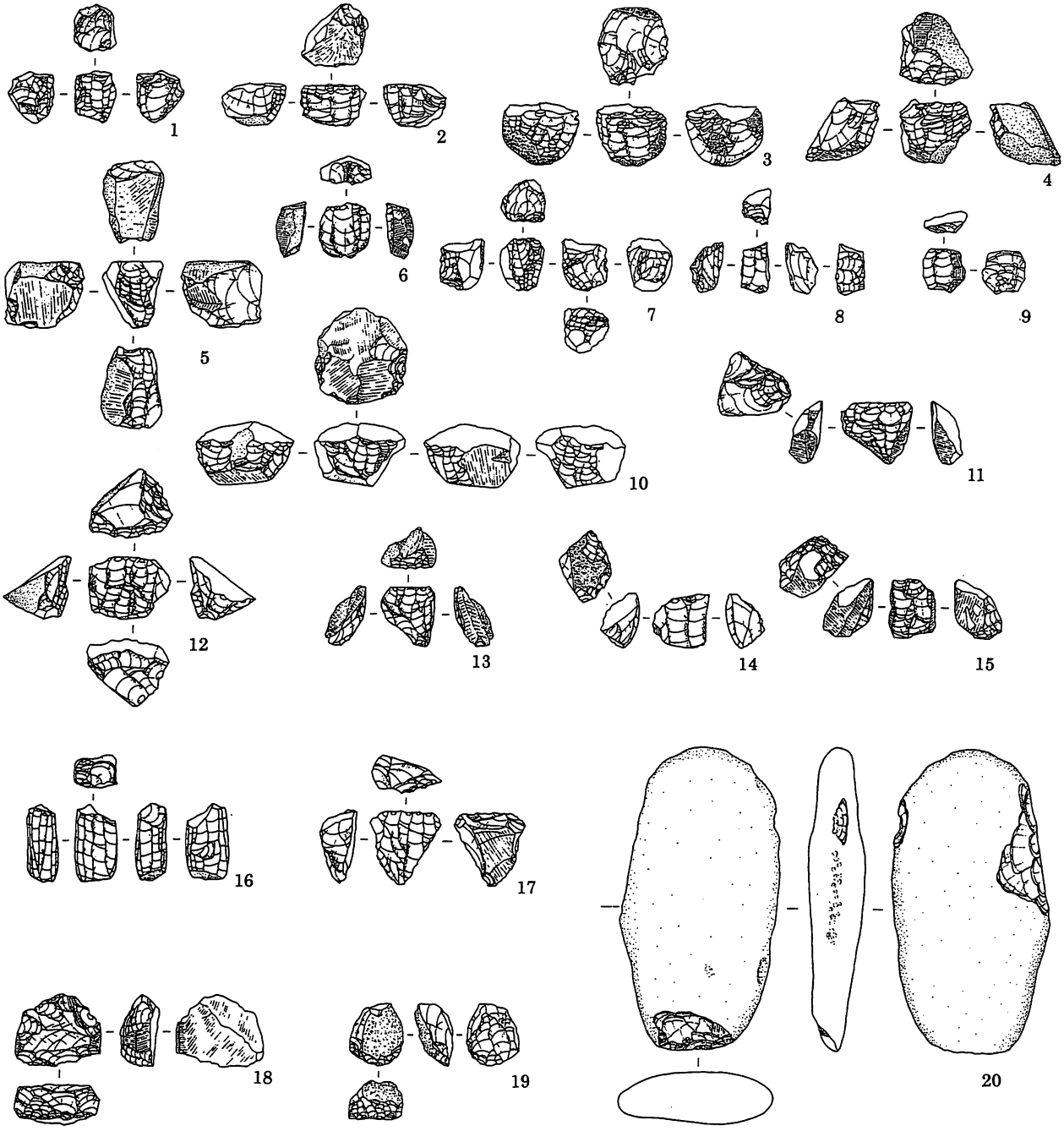
第28図　R　薩摩半島南部（2）　帖地2A区



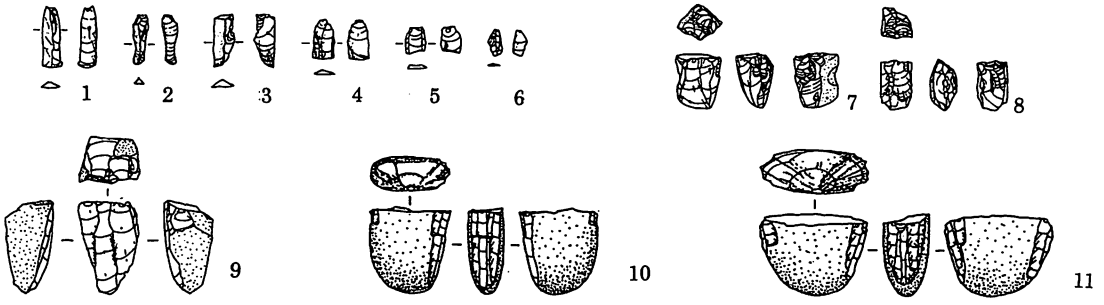
第29図　S　姶良台地　上段：星塚　下段：石峰　　※　30のみS＝1/4



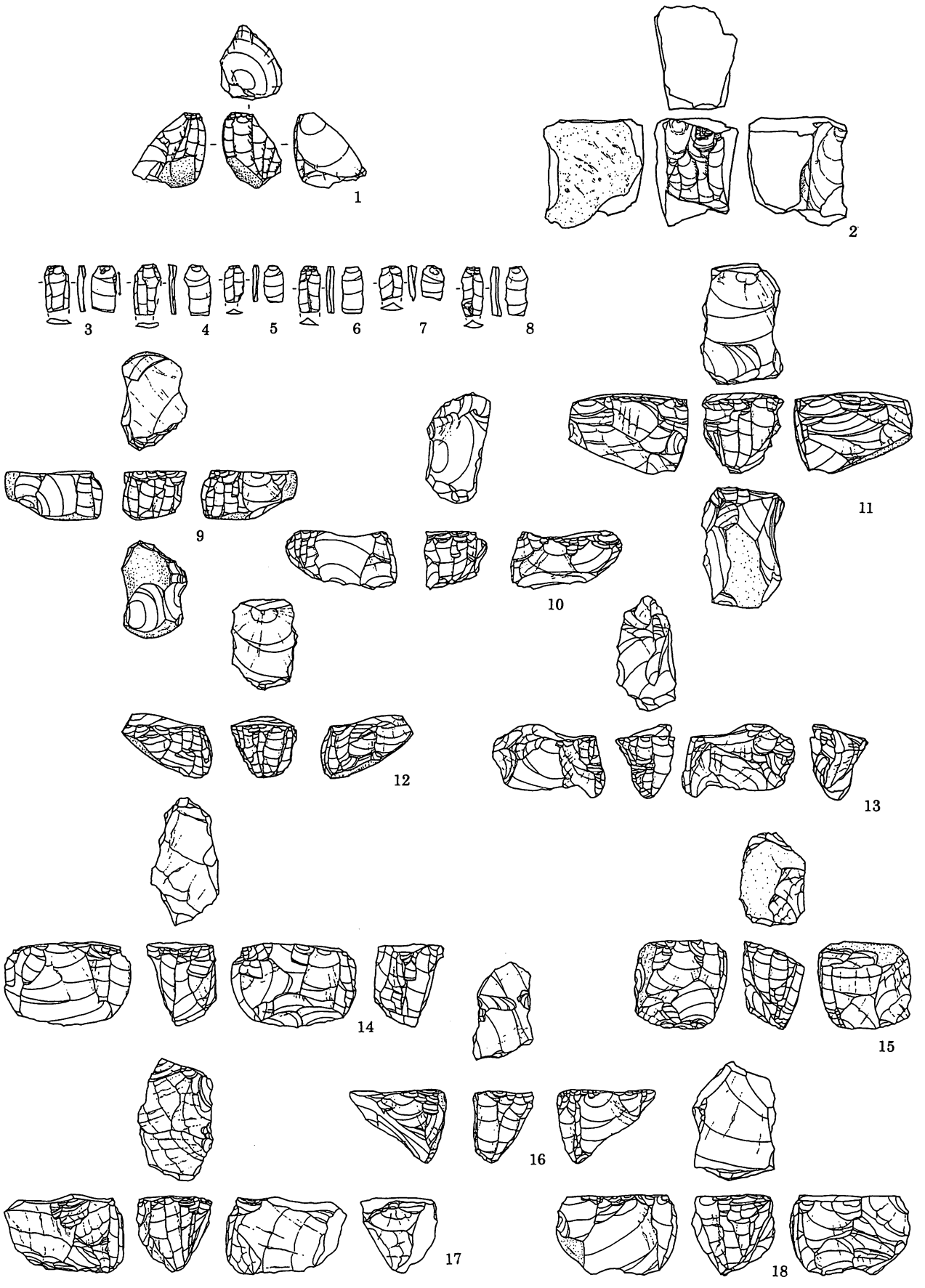
第 30 図　T　鹿屋原台地（1） 上段：榎崎A　下段：榎崎B　　※　13・17・24・25・26 S＝1/4



第 31 図　T　鹿屋原台地（2）　西丸尾



第 32 図　U　志布志湾岸　1-8：道重　9：井出平　10・11：中原



第33図　V　種子島　1：湊　2：三角山　3-18：大中峰

表1　東南部九州地域の細石刃石器群一覧表

NO.	遺跡名	細石刃	細石核	削器	掻器	彫器	錐	楔形石器	打製石斧	局部磨製石斧	礫器	磨石	敲石	ナイフ形石器	尖頭器	有舌尖頭器	石鏃	剥片	土器	計	石器集中	遺構	発掘	標高	地域	年代	文献	備考
1	頭地田口A		1																	1			有	310m	球磨川上流域		山城敏昭編　2002	縄文時代早期包含層に混在。霧島火山灰の北限。
2	田上																						表面	？m	球磨川上流域		木崎康弘　1991	
3	久保	1	1			1														3			有	216m	球磨川上流域		木崎康弘編　1993	
4	城馬場第2地点	27	23																	50			有	136m	球磨川上流域		熊本旧石器文化研　1997	
5	狸谷	7	3																隆起線文	10			有	185m	球磨川上流域		木崎康弘編　1987	
6	深水谷川		1	1																2			有	175m	球磨川上流域		坂田和弘・古森政次編　1994	
7	深水小園	1																		1			有	160m	球磨川上流域		木崎康弘　1990	
8	尾鈴		○																				表面	240m	球磨川上流域		熊本旧石器文化研　1997	
9	別府		5																	6			有	179m	球磨川上流域		木崎康弘・古城史雄・木村元浩編　1997	
10	里の城	17	9	1		1		1					1		1					33			有	176m	球磨川上流域		大田幸博・下村智編　1980	
11	白鳥平A	11	11																	22			有	189m	球磨川上流域		宮坂孝宏編　1993	
12	白鳥平B	33		4	1		1	5					14		1		65		爪形文70	1851			有	170m	球磨川上流域		宮坂孝宏編　1994	
13	鳥洞		3																	3			有	160m	球磨川上流域		山城敏昭編　1993	縄文時代早期包含層に混在。
14	高山	1	1																	2			表面	160m	球磨川上流域		木崎康弘　1985	
15	泉水松（田野）	○	○																				表面	660m	球磨川上流域		木崎康弘　1985	
																											鶴嶋俊彦編　1991	
16	石飛分校	○	○	○							○			○				○					有	500m	上場・石飛高原		池水寛治　1968	第2層下部と第3層から細石刃石器群が出土。
																											池水寛治　1970	
																											長野真一　1985	
17	石飛東	6	9																	15			有	510m	上場・石飛高原		江本直　1986	
18	ぐみの木段	1	1											○						2			表面	500m	上場・石飛高原		池水寛治編　1970	
																											木崎康弘　1985	
19	五目木	2	1																	3			表面	420m	上場・石飛高原		池水寛治編　1970	
																											木崎康弘　1985	
20	棚底下塔尾		1																	1			表面	10m	天草諸島		甲本眞之　1990	
21	丸尾ヶ丘																						表面	？m	天草諸島		熊本旧石器文化研　1997	未報告。細石刃石器群の詳細は不明。
22	妻の鼻																						表面	？m	天草諸島		木崎康弘　1991	細石刃石器群の詳細は不明。
23	内ノ原	2																		2			表面	95m	天草諸島		松舟博満　1989	
24	本城野		4																	4			表面	？m	？		綿貫俊一　1993	詳細不明。
25	須山																						表面	？m	周防灘沿岸		宮田剛　1997	未報告。細石刃石器群の詳細は不明。
26	尾畑		2																	3			有	20m	周防灘沿岸		牧尾義則　1995	
27	四日市		1																	1			表面	16m	周防灘沿岸		清水宗昭　1983	
28	桐ヶ迫	2	1																	2			有	40m	周防灘沿岸		高松永治　1991	
29	目久保第1	1														2			隆帯文1	3			有	320m	別府湾岸北部		高橋信武　1993	
30	目久保第2	1																		1			有	320m	別府湾岸北部		高橋信武　1993	
31	口野尾	1																		1			有	275m	別府湾岸北部		高橋信武　1993	
32	早水台A・B	1	4																	5			有	35m	別府湾岸北部		八幡一郎　1965	
																							有	34m	別府湾岸北部		八幡一郎他　1965	
																											清水宗昭　1983	
33	天俣C		2																	2			有	250m	別府湾岸北部		綿貫俊一　1993	
34	エゴノクチ	3	4															1		8			有	410m	別府湾岸北部		佐幸二・綿貫俊一　1993	
35	下野	1	5																	6			有	100m	別府湾岸北部		綿貫俊一編　2002	
36	山下ノ池																						表面	750m	別府湾岸南部		綿貫俊一　1993	細石刃石器群の詳細は不明。
37	下黒野																						有	？m	別府湾岸南部		綿貫俊一　1993	細石刃石器群の詳細は不明。
38	吉野臭畑																						表面	？m	別府湾岸南部		宮田剛　1997	細石刃石器群の詳細は不明。
39	一方平Ⅰ	2	1																	3			有	55m	別府湾岸南部		綿貫俊一編　1999	
40	猪野新土井	○	○																				有	40m	別府湾岸南部		宮田剛　2000	細石刃石器群の詳細は不明。
41	雄城台		1																	1			有	60m	別府湾岸南部		清水宗昭　1975	弥生時代包含層に混在。
																											橘昌信　1987	
42	丹生台地		3																	3			表面	40～	別府湾岸南部		清水宗昭　1983	
																											橘昌信　1987	
43	丹生第2地区H地点		1																	1			有	55m	別府湾岸南部		高田眞美　1992	
	第7地区D地点		5																	9			有	66m	別府湾岸南部		山口明子　1992	
44	聖嶽洞窟	3	1					1												14			有	150m	大野川中・上流域		賀川光夫　1964	台形石器1
																											春成秀爾編　2001	
45	上岩戸	7	1	1																9			表面	540m	大野川中・上流域		橘昌信　1983	
																											清水宗昭　1983	
46	政所馬渡	2	5		1														無文2	13			有	520m	大野川中・上流域		賀川光夫・下村悟史・白井昭一・瀬尾周三編　1982	
47	前田Ⅲ	1	2																無文1	3			有	460m	大野川中・上流域		高橋信武・綿貫俊一編　1989	
48	三反田	5	2																	7			有	460m	大野川中・上流域		渋谷忠章・吉武学編　1985	
49	市ノ久保	○	○	○	○				○	○	○	○	○	○								礫群	有	130m	大野川中・上流域		栗田勝弘編　1988	本報告未刊。総点数8000点以上。細石刃核約120。台石。複数の石器集中部
50	松山	78	23	7	1				1				2	2	1					356		礫群	有	115m	大野川中・上流域		橘昌信編　1990	
	（第2次）	46	10	6	3								6	5						443		礫群3、土坑1					橘昌信編　1991	
51	長谷		1																	1			有	110m	大野川中・上流域		綿貫俊一編　1990	
52	百枝小学校		1																	1			有	140m	大野川中・上流域		綿貫俊一　1993	
53	上下田（発掘調査資料）	77	14	17		2					1		17		2					699			有	140m	大野川中・上流域		橘昌信編　1981	
																											橘昌信編　1983	
	（表面採集資料）		1																	1			表面	140m	大野川中・上流域		橘昌信編　1992	
54	牟礼越	24	9				1							2						108	4箇所		有	165m	大野川中・上流域		橘昌信編　1999	
55	木南切（櫃津留）		2								1									3			表面	218m	大野川中・上流域		宮田剛　1997	細石刃石器群の詳細は不明。
56	岩戸	3	1																	4			有	120m	大野川中・上流域		橘昌信　1985	
57	高畑	○	5																	5			表面	90m	大野川中・上流域		綿貫俊一　1993	
58	原田第1（長田）	4	3	1																12			表面	85m	大野川中・上流域		橘昌信　1989	
59	花立	2																		2			表面	230m	大野川中・上流域		綿貫俊一　1993	未報告。細石刃石器群の詳細は不明。
60	安面		5											○						5			表面	200m	大野川中・上流域		宮田剛　1997	未報告。細石刃石器群の詳細は不明。
61	小牧B	10	2	1																13			表面	185m	大野川中・上流域		橘昌信　1983	細石刃石器群の詳細は不明。
62	小牧A（牧上）		○																				表面	180m	大野川中・上流域		橘昌信　1983	細石刃石器群の詳細は不明。
63	松本		1																	1			有	220m	大野川中・上流域		牧尾義則・荻田野光弘編　1980	

表２　東南部九州地域の細石刃石器群一覧表

NO.	遺跡名	組成																										
		細石刃	細石核	削器	掻器	彫器	錐	楔形石器	打製石斧	局部磨製石斧	礫器	磨石	敲石	ナイフ形石器	尖頭器	有舌尖頭器	石鏃	剥片	土器	総計	石器集中	遺構	発掘	標高	地域	年代	文献	備考
64	宮地前（発掘資料）	24	2	4	1															53	180		有	250r	大野川中・上流域		橘昌信編 1988	
	（表面採集資料）		5	3	6				1											17			表面	250r	大野川中・上流域		綿貫俊一 1993	
65	田尾		1																	1			表面	250r	大野川中・上流域		綿貫俊一 1993	
66	一丁田		1																	1			表面	240r	大野川中・上流域		綿貫俊一 1993	
67	田村	1																		1			有	180r	大野川中・上流域		綿貫俊一 1993	
68	奥畑Ⅰ		3																	3			表面	120r	大野川中・上流域		吉留秀敏 1989	
69	田良原B		1																	1			表面	130r	大野川中・上流域		吉留秀敏 1989	
70	阿蘇原上	2	18	3	5	1		14				1	2		11		15		爪形文11	1299			有	333r	五ヶ瀬川流域		甲斐貴充・松本茂編 2003	細石刃・細石刃核・尖頭器以外の器種はⅨ層以下の遺物をカウント。
71	岩土原		7					1											隆帯文1	8			有	120r	五ヶ瀬川流域		鈴木重治 1973	
																											鈴木重治 1973	
																											松本茂 2003	
72	慈眼寺霊苑	○	○						1						○					1			有	50m	五ヶ瀬川流域			石斧1は神子柴型類似。
73	矢野原		○																				表面	122r	五ヶ瀬川流域			ブランクの可能性ある表面採集資料。
74	赤木	24	5																	80		礫群	有	48m	五ヶ瀬川流域		永友良典編 1987	細石刃核・細石刃以外の石器組成は詳細不明。
	赤木（第７次）	11	2																	13			有				山田聡・東方鼎一・高浦哲編	細石刃核・細石刃以外の石器組成は詳細不明。
75	延岡市内		1																	1			表面	？m	五ヶ瀬川流域			厳密な表面採集地点不明。
76	片田		2																	2			有	18m	五ヶ瀬川流域		山田聡編 1990	
77	今井野	○	○																				有	40m	五ヶ瀬川流域		重山郁子1997	
78	黒土田	3	1																	4			有	45m	五ヶ瀬川流域		山田聡編 1995	細石刃核・細石刃以外の石器組成は詳細不明。
79	林		1																	1			有	8m	五ヶ瀬川流域			未報告。
80	百町原	2																		2			有	38m	耳川・五十鈴川流域		緒方博文編 1994	
81	霧庭																						有	70m	耳川・五十鈴川流域		重山郁子1997	未報告。細石刃石器群の詳細は不明。
82	寺迫		1																	1			表面	20m	耳川・五十鈴川流域		茂山護・大野寅夫 1977	厳密な表面採集地点不明。
																											茂山護 1980	
83	寺ノ上		○																				有	20m	耳川・五十鈴川流域		緒方博文編 1995	実測図は未掲載。
84	庄手地区		1																	1			有	20m	耳川・五十鈴川流域		横川裕佐編 2000	
85	本村																						有	30m	耳川・五十鈴川流域		重山郁子1997	未報告。細石刃石器群の詳細は不明。
86	上野原	1																		1			有	30m	耳川・五十鈴川流域		太川裕晴編 2003	
87	仲野原第２	○	○																				有	20m	耳川・五十鈴川流域		東郷町教育委員会 1999	現在整理中。
88	又江野		1																	1			有	50m	耳川・五十鈴川流域		東郷町教育委員会 1999	未報告。
89	黒萩		1																	1			表面	30m	耳川・五十鈴川流域		茂山護・大野寅夫 1977	
																											小野信彦 1995	
90	西番野地（番野地）		4																	4			表面	60m	宮崎平野部		茂山護・大野寅夫 1977	
																											長津宗重・日高孝治・菅富敦 1983	
																											小野信彦 1995	
91	蔵座村	1	2																	3			有	142r	宮崎平野部		甲斐貴充編 2002	縄文時代早期包含層に混在。
92	通山（大久保）		10																	10			表面	60m	宮崎平野部		茂山護 1980	畦原型8、船野型2
																											小野信彦 1995	
93	銀座第１		○																				有	118r	宮崎平野部			現在整理中。
94	白髭		1																	1			表面	100r	宮崎平野部		茂山護・大野寅夫 1977	
95	椎原		1																	1			表面	200r	宮崎平野部		茂山護・大野寅夫 1977	
96	谷ノ口		2																	2			表面	？m	宮崎平野部		長津宗重・日高孝治・菅富敦 1983	
97	住吉B		1																	1			表面	200r	宮崎平野部		長津宗重・日高孝治・菅富敦 1983	
98	後牟田		2																	2			有	54m	宮崎平野部		橘昌信・佐藤宏之・山田哲 2002	
99	霧島	2	5																爪形文,	7			有	95m	宮崎平野部		東憲章編 1997	
100	雲雀山	5																		5			表面	50m	宮崎平野部		茂山護・大野寅夫 1977	
101	青木	○													○				隆起線文				有	18m	宮崎平野部		宮崎県埋蔵文化財センター	現在整理中。
102	野首第１		○																				有	25m	宮崎平野部			現在調査・整理中。
103	野首第２	○	○																				有	35m	宮崎平野部		宮崎県埋蔵文化財センター	現在調査・整理中。
104	老瀬坂上	○	○																				有	100r	宮崎平野部		宮崎県埋蔵文化財センター	現在整理中。
105	下耳切第３	○	○																				有	90m	宮崎平野部		宮崎県埋蔵文化財センター	現在整理中。
106	北牛牧第５	○	○													○							有	84m	宮崎平野部		宮崎県埋蔵文化財センター	現在整理中。
107	唐木戸第１	○	○																				有	80m	宮崎平野部			現在整理中。
108	唐木戸第３	○	○																				有	85m	宮崎平野部		宮崎県埋蔵文化財センター	現在整理中。
109	唐木戸第４	○	○																無文				有	70m	宮崎平野部		宮崎県埋蔵文化財センター	現在整理中。
110	中尾原		5																	5			表面	80m	宮崎平野部		茂山護・大野寅夫 1977	
																											小野信彦 1995	
111	小並		4																	4			表面	80m	宮崎平野部		茂山護・大野寅夫 1977	
112	小並第１	○	○																				有	80m	宮崎平野部		宮崎県埋蔵文化財センター	現在整理中。
113	牧内第１	○	○																				有	92m	宮崎平野部		宮崎県埋蔵文化財センター	現在整理中。
114	牧内第２	○																	隆帯文				有	95m	宮崎平野部		宮崎県埋蔵文化財センター	現在整理中。
115	毛作		1																	1			表面	70m	宮崎平野部			
116	音明寺第１	○	○																				有	100r	宮崎平野部			現在整理中。
117	音明寺第２	○	○																				有	90m	宮崎平野部			現在整理中。
118	新山		1																	1			表面	70m	宮崎平野部		茂山護・大野寅夫 1977	
119	上日置城空堀跡	3	1		2									1						427			有	63m	宮崎平野部		福田泰典編 2003	角錐状石器1
120	湯ノ宮		1																	1			表面	70m	宮崎平野部		茂山護・大野寅夫 1977	
121	川床		3																	3			表面	80m	宮崎平野部		茂山護・大野寅夫 1977	
122	一丁田		1																	1			表面	60m	宮崎平野部		茂山護・大野寅夫 1977	
123	黒坂		1																	1			表面	100r	宮崎平野部		茂山護・大野寅夫 1977	
124	湯風呂		2																	2			表面	50m	宮崎平野部		茂山護・大野寅夫 1977	
125	西畦原		5																	5			表面	80m	宮崎平野部		茂山護・大野寅夫 1977	
																											小野信彦 1995	
126	西畦原第１	○																					有	78m	宮崎平野部		宮崎県埋蔵文化財センター	現在整理中。
127	西畦原第２	○	○																				有	87m	宮崎平野部		宮崎県埋蔵文化財センター	現在整理中。
128	東畦原		5																	5			表面	100r	宮崎平野部		茂山護・大野寅夫 1977	
																											小野信彦 1995	
129	東畦原第１	○	○																				有	90m	宮崎平野部		宮崎県埋蔵文化財セ 2003	現在整理中。

表３　東南部九州地域の細石刃石器群一覧表

NO.	遺跡名	組成 細石刃	細石核	削器	掻器	彫器	錐	楔形石器	打製石斧	局部磨製石斧	礫器	磨石	敲石	ナイフ形石器	尖頭器	有舌尖頭器	石鏃	剥片	土器	総計	石器集中	遺構	発掘	標高	地域	年代	文献	備考
130	東畦原第３	○	○																				有	85m	宮崎平野部		宮崎県埋蔵文化財セ　2001	現在整理中。
131	上新開		○																				有	75m	宮崎平野部			現在報告中。
132	瀬戸口	3	1																	4			有	70m	宮崎平野部		日高孝治編　1986	
133	溜水第２	1	1																	2			有	65m	宮崎平野部		有田辰美編　1995	
134	春日地区第２地点	5	21																	26			有	70m	宮崎平野部		柳田宏一・加藤学編　2003	実測図未掲載。細石刃核・細石刃以外の石器組成は詳細不明。
135	諏訪		3																	3			表面	40m	宮崎平野部		茂山護・大野寛夫　1977	
136	大日川		10																	10			表面	90m	宮崎平野部		茂山護・大野寛夫　1977	
137	宝財原		2																	2			表面	80m	宮崎平野部		茂山護・大野寛夫　1977	
138	東原		1																	1			表面	？m	宮崎平野部		茂山護・大野寛夫　1977	
139	串木		1																	1			表面	70m	宮崎平野部		茂山護・大野寛夫　1977	
140	松本		2																	2			表面	50m	宮崎平野部		茂山護・大野寛夫　1977	
141	別府原	○	○	○																		陥し穴18	有	100m	宮崎平野部	12960±	日高広人編　2002	細石刃石器群の詳細は未報告。
142	別府原第２		1	1	1							2								33			有	94m	宮崎平野部		日高広人編　2002	
143	西ヶ迫		1																	1			有	90m	宮崎平野部		日高広人編　2002	細石刃核1は畦原型で被熱痕跡有り。
144	久保土		1																	1			表面	50m	宮崎平野部		茂山護・大野寛夫　1977	
145	山内		1																	1			表面	m	宮崎平野部		佐土原町教委編　1991	
																											重山郁子1997	
146	佐土原町内		1																	1			表面	？m	宮崎平野部			詳細な表面採集地点不明。
147	上酒下	1	4																	5			表面	50m	宮崎平野部		小谷桂太郎・金丸武司　1994	
148	船野第１地点	87	28	44	2	5	2				4		4	21						752		礫群1、十	有	87m	宮崎平野部		橘昌信　1975	細石刃核・細石刃以外の石器組成は図版を集計。
149	船野第２地点	42	11	4	2	2							2	9						246			有	85m	宮崎平野部		橘昌信　1975	細石刃核・細石刃以外の石器組成は図版を集計。
150	南学原第１（発掘資料）	5	15	34	1							13	3	59						879		礫群11	有	81m	宮崎平野部		山田洋一郎・日高広人編　20	混在の可能性有り。剥片の可能性が指摘される資料が２点。
	（表面採集資料）		1																	2			表面	81m	宮崎平野部		小谷桂太郎・金丸武司　1994	
151	上ノ原	6	5									1								14		陥し穴26	有	88m	宮崎平野部	11370±	日高祐司・木本雅康ほか編　2002	
152	下屋敷	14	14	1										9						303	12箇所		有	90m	宮崎平野部		古牟田浩一・山田洋一郎編　2002	
153	長薗原	43	13																	56			有	86m	宮崎平野部		時任和守・山田洋一郎編　20	ナイフ形石器群と分離困難。
154	下那珂		○																				有	50m	宮崎平野部			
155	垂水第１	1																		4		陥し穴2	有	96m	宮崎平野部		久富なをみ・中山豪編　1994	細石刃1、剥片4は陥し穴埋土上部から検出。
156	阿部ノ木	1																		1			有	80m	宮崎平野部		久富なをみ・中山豪編　1995	
157	亀ノ甲		1																	1			表面	90m	宮崎平野部		茂山護・大野寛夫　1977	
158	開拓		1																	1			表面	？m	宮崎平野部		茂山護・大野寛夫　1977	
159	法華岳		1																	1			表面	150m	宮崎平野部		茂山護・大野寛夫　1977	
160	六日町																						表面	50m	宮崎平野部		重山郁子1997	詳細不明。
161	六野原		3																	3			表面	100m	宮崎平野部		茂山護　1980	
162	井野		6																	15		礫群	有	64m	宮崎平野部		岩永哲夫編　1991	
163	木脇A区	7	4																	11			有	49m	宮崎平野部		倉永英季編　2001	
	E区	1	2																	3				32m	宮崎平野部			
164	松元	1	1																	2			有	55m	宮崎平野部		面高哲郎・竹井眞知子編　2001	
165	塚原	8	8																	16			有	34m	宮崎平野部		面高哲郎・竹井眞知子編　2001	
166	堂地西	1								1							2		爪形文。	4			有	50m	清武川・加江田川流		北郷泰道編　1985	細石刃石器群と爪形文土器群は分離できる可能性。
167	前原西	○	○																				有	17m	清武川・加江田川流		永友良典編　1988	第２地点において「細石刃」、「黒曜石製の細石刃核」の記載有り。実測図
168	上の原第１	4	1																	5			有	84m	清武川・加江田川流		面高哲郎・日高広人編　2002	
169	上の原第３	1																		1			有	90m	清武川・加江田川流		東憲章編　1999	表土中から出土。
170	白ヶ野第２・第３	6	23							1										29			有	88m	清武川・加江田川流		吉本正典編　2002	
171	滑川第２	1	3																	4			有	80m	清武川・加江田川流		井田篤編　1998	報告には未掲載。縄文時代早期包含層に混在。
172	山田第１	5	1																	6			有	83m	清武川・加江田川流		井田篤・松原一哉編　2000	報告には未掲載。
173	須田木		1																	1			有	50m	清武川・加江田川流域			未報告。
174	田上		1																	1			有	25m	清武川・加江田川流		北郷泰道編　1985	細石刃核1は表面採集資料。
175	寄掛		1																	1			表面	100m	清武川・加江田川流		茂山護・大野寛夫　1977	茂山・大野1977では「田野町寄掛」と記載有り。
176	下黒野	10	13	1	1														無文2、(	185		礫群3、十	有	70m	清武川・加江田川流		島原幸伯編　2001	
177	竹ノ内		8																	8			有	60m	清武川・加江田川流		高山富雄・山田洋一郎編　20	掲載された実測図は楔形石器の可能性有り。
178	杉木原	19		6										4						98			有	81m	清武川・加江田川流		山田洋一郎・日高裕司・高山	ナイフ形石器群と分離困難。
179	田代堀第１		1																	1			有	50m	清武川・加江田川流		伊東但編　1989	縄文時代包含層に混在。
180	永ノ原	1	1																	2			有	65m	清武川・加江田川流		山田洋一郎・日高裕司・高山	縄文時代早期包含層に混在。
181	築地原		1																	1			有	150m	清武川・加江田川流		重山郁子1997	細石刃核1は白色夾雑物を含む黒曜石製のブランクの可能性が指摘される。
182	高野原		2																	2			有	107m	清武川・加江田川流		金丸武司編　2000	
183	七野第４	1	4																	5			有	207m	清武川・加江田川流		金丸武司編　1997	
																											金丸武司　1998	
184	黒草第２		○																				有	180m	清武川・加江田川流域			未報告。
185	本野原		○																				有	180m	清武川・加江田川流		田野町教委　2002	
186	元野河内		2												1					3			有	190m	清武川・加江田川流		金丸武司編　1997	
																											金丸武司　1998	
187	ズクノ山第２Ｆ地区	1																		1			有	105m	清武川・加江田川流		金丸武司編　2002	
	Ｃ地区	1																		1							森田浩史・金丸武司編　2003	
188	長薮		1																	1			有	213m	清武川・加江田川流		森田浩史編　1994	
189	砂田		1																	1			有	200m	清武川・加江田川流		長友郁子・森田浩史編	
190	井手ノ尾																						有	244m	清武川・加江田川流		森田浩史編　1992	細石刃石器群の詳細は不明。
																											金丸武司　1998	
191	天神河内第１	1	15																	16			有	280m	清武川・加江田川流		日高広人　2000	
192	小田元第２	21	24							1										46			有	190m	大淀川中・下流域		島田正浩編　2003	
193	高野原第２地点		1																	1			有	79m	大淀川中・下流域		鷹田晶子編　2002	細石刃核1は船野型ブランク。
194	二反野		2																	2			表面	220m	大淀川中・下流域		茂山護・大野寛夫　1977	
195	雀ヶ野第３		1																	1			有	160m	大淀川中・下流域			未報告。
196	東城原第１	2	4		1															7			有	175m	大淀川中・下流域		北郷泰道編　1990	縄文早期遺物と混在。
197	中床丸		1																	1			有	150m	大淀川上流域			未報告。縄文早期遺物と混在。畦原型。

表４　東南部九州地域の細石刃石器群一覧表

No.	遺跡名	細石刃	細石核	削器	掻器	彫器	錐	楔形石器	打製石斧	局部磨製石斧	礫器	磨石	敲石	ナイフ形石器	尖頭器	有舌尖頭器	石鏃	剥片	土器	総計	石器集中	遺構	発掘	標高	地域	年代	文献	備考
		組成																										
198	大岩田上村	4	2																	10			有	159r	大淀川上流域		南正覚雅士編　2001	
199	池増	50	67																	129			有	170r	大淀川上流域		金丸武司・永友良典　1997	
																											金丸武司　1998	
200	矢岳高原第４遺跡	13	3																	30			表面	650r	川内川上流域		藤木聡　2003	
201	内牧	2																		2			有	237r	川内川上流域		東憲一編　2002	未報告。
202	妙見	11	4																	15			有	283r	川内川上流域		戸高眞知子ほか編　1994	
203	仁田元		○																				表面	220r	天草諸島		堂込秀人・倉元良文編　1995	
204	尻無平	72	6																	81			表面	240r	天草諸島		池崎譲二・吉留秀敏　1979	
205	山門野	3	1																	4			表面	80m	天草諸島		牛ノ濱修・宮田栄二編　1983	表土層中からの出土。
206	赤剥	8	4																	12			表面	30m	出水丘陵		児玉健一郎　1976	
																											吉留秀敏　1979	
207	中尾	1	1																	2			表面	25m	出水丘陵		児玉健一郎　1976	
																											吉留秀敏　1979	
208	日暗	5	1																	6			表面	20m	出水丘陵		児玉健一郎　1976	
																											吉留秀敏　1979	
209	涼松	5	5																	10			表面	40m	出水丘陵		吉留秀敏　1979	
210	大久保	4	7		4		1							1			4			68		陥し穴1	有	510r	上場・石飛高原		岩崎新輔編　1997	細石刃・細石刃核が主に出土するIII層資料を集計。
211	鶴田	○	○																				表面	500r	上場・石飛高原		牛ノ濱修・宮田栄二・戸崎勝	1970年代に出水高校考古学部による学術調査。
212	狸山	○	○																				有	510r	上場・石飛高原		岩崎新輔編　1997	
213	上場（I層）	6			1												○		条痕文	8			有	500r	上場・石飛高原		池水寛治　1967	現在再整理中。未報告資料多数。
	上場（II層）	31	6														1		爪形文10	43		竪穴住居跡2					池水寛治　1974	現在再整理中。未報告資料多数。
	上場（III層）	44	6														○		爪形文2	52							牛ノ濱修・宮田栄二・戸崎勝	現在再整理中。未報告資料多数。
	上場（IV層）	14	1											1						26							宮田栄二　2002	現在再整理中。未報告資料多数。
214	上場B		2																	2			有	470r	上場・石飛高原		岩崎新輔編　1997	細石刃・細石刃核が主に出土するIII層資料を集計。
215	池ノ段B	1												1						7			有	480r	上場・石飛高原		岩崎新輔編　1997	細石刃・細石刃核が主に出土するIII層資料を集計。
216	壱里塚		1	1	1															4			有	500r	上場・石飛高原		岩崎新輔編　1997	細石刃・細石刃核が主に出土するIII層資料を集計。
217	五女木														○								表面	460r	上場・石飛高原		池水寛治　1968	細石刃石器群の詳細は未報告のため不明。
																											牛ノ濱修・宮田栄二・戸崎勝洋・繁昌正幸編　1986	
218	日東																						有	520r	上場・石飛高原		池水寛治　1968	黒曜石原産地遺跡。細石刃石器群の詳細は未報告のため不明。
																											出水高校考古学部　1975	
																											牛ノ濱修　2003	
219	小原野	20	18																	38			有	580r	上場・石飛高原		中村守男編　1999	黒曜石原産地（日東）に近接。
																											中村守男編　2003	
220	池頭		○																				表面	25m	川内川下流域		青崎和憲・堂込秀人編　1993	未報告。
221	池頭A		○												○								表面	26m	川内川下流域		青崎和憲・堂込秀人編　1993	未報告。
222	岩下		○																				表面	100r	川内川下流域		青崎和憲・堂込秀人編　1993	未報告。
223	下井手		○					○															表面	100r	川内川下流域		青崎和憲・堂込秀人編　1993	
224	松山ヶ迫	○	○																				有	60m	川内川下流域		吉永正史編　1989	未報告。
225	床並B	406	27	2	4	3								7							12箇	礫群2	有	230r	川内川下流域		堂込秀人編　1993	
			○																								井ノ上秀文編　1992	
226	鹿村ヶ迫	44	12	2				1					2							623		陥し穴2	有	112r	川内川下流域		藤井法博・今村敏照編　1997	
227	中津原	○	○																				有	220r	川内川下流域		戸崎勝洋・吉永正史編　1990	未報告。
228	小田・小田原	○	○																				表面	60m	川内川下流域		青崎和憲・堂込秀人編　1993	
229	大栫	○	○							○								○					有	90m	川内川下流域		南九州石器文化談話会　1997	未報告。
230	米山（米ノ山）																						表面	80m	川内川下流域		堂込秀人・鶴田静彦編　1994	未報告。剥片は細石刃核調整剥片。
231	小松原B	○	○																				表面	65m	川内川下流域		青崎和憲・堂込秀人編　1993	未報告。
232	中津川城跡		1																	1			有	158r	川内川下流域		村瀬政樹・児玉健一郎編　1999	
233	西ノ平		3	6										1						10			有	25m	川内川下流域		川畑昭光ほか編　1983	
234	成岡	3	4																	8			有	20m	川内川下流域		川畑昭光ほか編　1983	
		714	195	22		1							5	6	12					7571	3箇所						牛ノ濱修・宮田栄二編　1985	
235	大原野B																						有	80m	川内川下流域		九州旧石器文化研　2000	未報告。細石刃石器群の詳細は不明。
236	前畑	5	5																	11			有	73m	川内川下流域		宮田栄二・平木場秀男編　2003	
237	郡山城跡	○	○																				有	190r	川内川上流域		吉永正史・五味克夫・三木靖編　1987	
238	新開原	50	7		2	1		1										1		493	3箇所		有	181r	川内川上流域		堂込秀人・東和幸編　1993	
239	木場A	5																		7			有	260r	川内川上流域		牛ノ濱修・出口浩・池畑耕一	剥片2は細石刃核の作業面再生剥片の可能性有り。
	木場A（第３次）	2	3																	8			有	270r	川内川上流域		新屋恭樹・児玉健一郎編　19	作業面再生剥片1以外は縄文時代早期包含層に混在。
240	木場A－２	2	7																	9			有	260r	川内川上流域		牛ノ濱修編　1982	細石刃核・細石刃以外の石器組成は角錐状石器主体石器群と分離困難。
241	諏訪（諏訪岡）																						有	220r	川内川上流域		林昭男・米満重満　1973	細石刃石器群の詳細は不明。
242	山崎B	4	9																	13			有	207r	川内川上流域		牛ノ濱修ほか編　1982	縄文時代包含層および砂礫層中からの出土。
243	九日田	2	5																	7			表面	260r	川内川上流域		池畑耕一編　1993	
244	麦生田	11	4																	15			表面	210r	川内川上流域		林昭男・米満重満　1973	
245	七ッ谷	4	1																	5			有	490r	川内川上流域		盛園尚孝・藤井義明編　1999	縄文時代早期包含層に混在。
246	石打	9	6																	15			有	430r	川内川上流域		盛園尚孝・藤井義明編　1999	細石刃・細石刃核各1点ずつを除き縄文時代早期包含層に混在。
247	掃除山	○	○																				有	70m	薩摩半島北部		出口浩・雨宮瑞生・岡元満子・成尾英仁編　1992	
248	苦辛城跡																						有	75m	薩摩半島北部		吉永正史・五味克夫・三木靖	細石刃石器群の詳細は不明。
249	横井竹ノ山	88	23			1		4				7	3				25	2	無文23	1777	3箇所	礫群	有	193r	薩摩半島北部		出口浩・上村俊一・雨宮瑞生・牛ノ濱修編　1990	
250	加治屋園	340	343	6	12	3	3						2						粘土貼付文3、無文111				有	155r	薩摩半島北部		弥栄久志・長野眞一編　1981	複数の石器集中部が存在。
251	加栗山	2532	398	##									13				12			####	38箇所		有	170r	薩摩半島北	10220±	牛ノ濱修編　1981	
252	鹿児島大学構内医学部桜ヶ丘団地																						有	50m	薩摩半島北部		南九州石器文化談話会　1997	細石刃石器群の詳細は不明。
253	大原																						有	230r	薩摩半島北部		南九州石器文化談話会　1997	1952、53年に発掘調査。細石刃石器群の詳細は不明。
254	向得原																						有	？m	薩摩半島北部		吉永正史ほか編　1987	細石刃石器群の詳細は不明。
255	宮ノ上	10	12	1				1												600			有	180r	薩摩半島北部		大久保浩二編　2002	
256	瀬ノ段	10	13	5				2				1	1				46		刺突文3	142		舟形配石	有	15m	薩摩半島北部		新町正編　1999	土器胎土に繊維を含む資料有り。
257	才野ヶ原	10	3							1										23			有	105r	薩摩半島北部		新町正編　1999	局部磨製石斧1は破片。
258	上城詰城跡	2	1																	3			有	37m	薩摩半島北部		新町正・西久保敏彦編　2000	
259	東下原																						有	110r	薩摩半島北部		繁昌正幸・倉元良文編　1992	細石刃石器群の詳細は未報告のため不明。
260	市ノ原																						有	60m	薩摩半島北部		繁昌正幸・倉元良文編　1992	細石刃石器群の詳細は未報告のため不明。
261	今里	325	101															2		430			有	84m	薩摩半島北部		樋口勝昭編　2002	本来的な石器組成は不明。

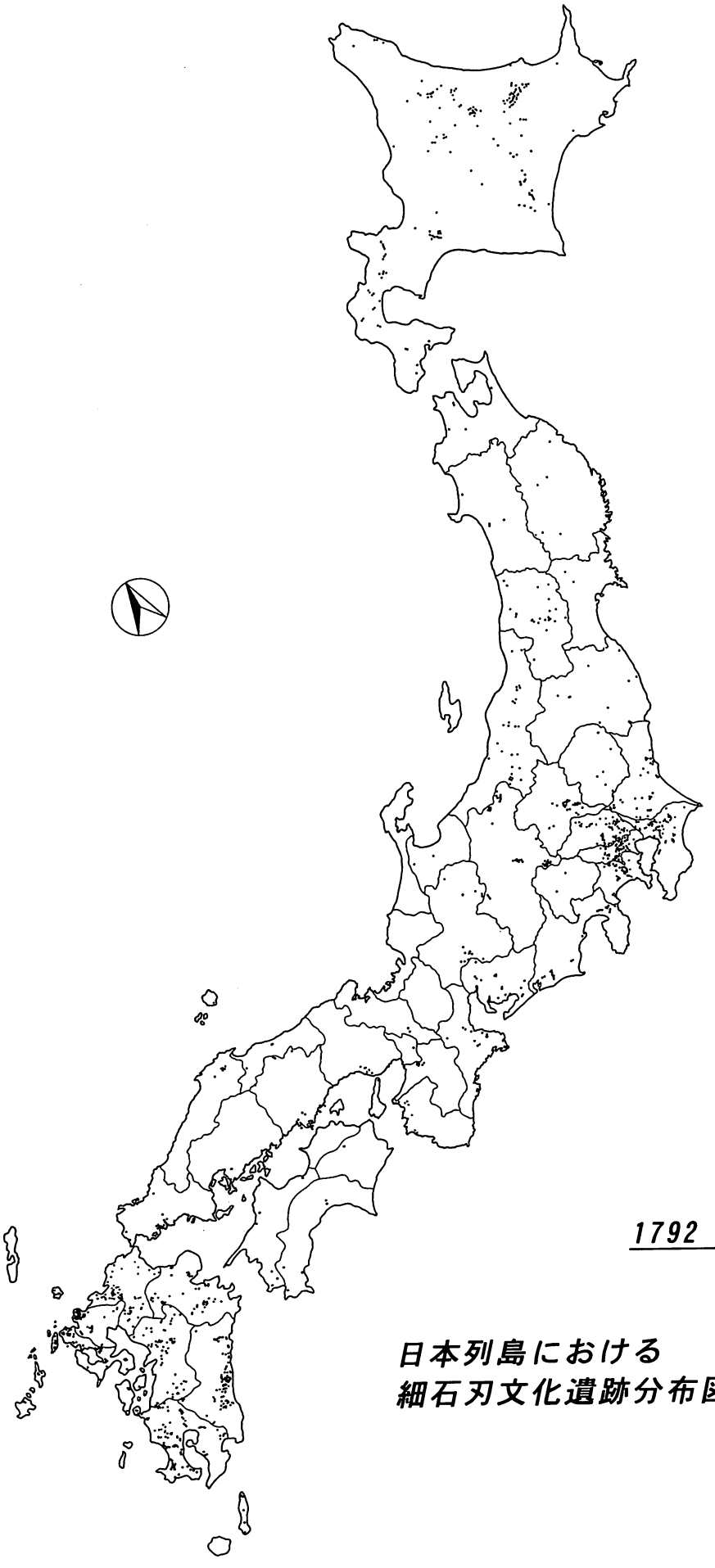
表5　東南部九州地域の細石刃石器群一覧表

NO.	遺跡名	細石刃	細石核	削器	掻器	彫器	錐	楔形石器	打製石斧	局部磨製石斧	礫器	磨石	敲石	ナイフ形石器	尖頭器	有舌尖頭器	石鏃	剥片	土器	総計	石器集中	遺構	包含	標高	地域	年代	文献	備考
262	犬ヶ原	1	1																	4			有	66m	薩摩半島北部		牛ノ濱修編　2003	
263	向栫城跡	○	○																				有	40m	薩摩半島北部		吉永正史・五味克夫・三木靖編　1987	
264	宮園平																						有	60m	薩摩半島北部		繁昌正幸・倉元良文編　1992	細石刃石器群の詳細は未報告のため不明。
265	老ノ原	○	○																				有	40m	薩摩半島北部		繁昌正幸・倉元良文編　1992	未報告。
266	池之頭	22	3	1										1						536	1箇所		有	100m	薩摩半島北部		宮田洋一編　2002	
267	背山	1	1																	2			有	94m	薩摩半島北部		宮田洋一・岡明寛・三垣恵一	撹乱層からの出土。
268	猿引	15	1																	16			有	114m	薩摩半島北部		宮田洋一・岡明寛・三垣恵一	ナイフ形石器群と分離困難。本来的な石器組成は不明。
269	瀬戸頭	2	3	1													2		無文1	27		礫群1	有	180m	薩摩半島北部		楠北浩一編　1999	他に砕片多数。
270	瀬戸頭A																						有	190m	薩摩半島北部		九州旧石器文化研究会2000	細石刃石器群の詳細は未報告のため不明。
271	瀬戸頭B																						有	190m	薩摩半島北部		九州旧石器文化研究会2000	細石刃石器群の詳細は未報告のため不明。
272	瀬戸頭C																						有	190m	薩摩半島北部		九州旧石器文化研究会2000	細石刃石器群の詳細は未報告のため不明。
273	松ヶ迫		○																				表面	170m	薩摩半島北部		九州旧石器文化研究会2000	未報告。
274	竹ノ山B																			33		陥し穴2	有	170m	薩摩半島北部		黒川忠広・桑波田武志　2001	層位的にナイフ形石器文化終末期～細石器文化期と推定される。
275	上山路山																						有	140m	薩摩半島北部		九州旧石器文化研究会2000	未報告。細石刃石器群の詳細は不明。
276	永迫平																						有	100m	薩摩半島北部		九州旧石器文化研究会2000	未報告。細石刃石器群の詳細は不明。
277	大田城跡																						有	120m	薩摩半島北部		九州旧石器文化研究会2000	未報告。細石刃石器群の詳細は不明。
278	上ノ平																						有	150m	薩摩半島北部			未報告。細石刃石器群の詳細は不明。
279	前原														○								有	180m	薩摩半島北部		南九州石器文化談話会　1997	未報告。細石刃石器群の詳細は不明。
280	前山	○	○																		○		有	195m	薩摩半島北部		桑波田武志　1997	未報告。細石刃文化期のブロック数箇所、総点数5000点以上。
281	宮ヶ迫	327	28	1	3								2				13			1297	10箇所		有	186m	薩摩半島北部		八木澤るみ子・桑波田武志・児之原博孝編　2000	
282	桐木	225	47	7											1		1			4578	19箇所	礫群1	有	187m	薩摩半島北部		牛ノ濱修・元田順子編　2001	
283	西ノ原B	45	7	9										4						2861	13箇所	礫群1	有	192m	薩摩半島北部		牛ノ濱修・元田順子編　2001	
284	仁田尾中B	○	○																				有	180m	薩摩半島北部		馬籠亮道　2003	未報告。細石刃石器群が二層に細分可能。
285	仁田尾	○	○	○					○	○	○	○					○		無文		○	陥し穴11	有	195m	薩摩半島北部		鹿児島県立埋蔵文化財センタ	未報告。細石刃文化期のブロック30箇所以上、総点数６万点以上、細石刃
																											牛ノ濱修　1995	
286	塚ノ越		○																				有	20m	薩摩半島北部		宮田栄二・児玉健一郎編　19	縄文時代早期包含層に混在。
287	岩之元（瑞松廃跡）	○	○																				表面	10m	薩摩半島北部		井ノ上秀文・宮田栄二編　1988	
288	磨見ノ上																						表面	70m	薩摩半島北部		井ノ上秀文・宮田栄二編　19	細石刃石器群の詳細は不明。
289	西多羅ヶ迫		○																				有	100m	薩摩半島南部		馬籠亮道　2003	
290	岩本		4																	4			有	50m	薩摩半島南部		長野眞一編　1978	本来的な石器組成は不明。
																											長野眞一編　1996	
291	小牧３Ａ	21	16							1										38			有	66m	薩摩半島南部		長野眞一　1979	本来的な石器組成は不明。
																											長野眞一編　1996	
292	水迫	26	18	1		1		1			1		1	8						481	1箇所	竪穴住居跡	有	126m	薩摩半島南部		指宿市教委編　2001	ナイフ形石器群と分離困難。
																						道跡3、土坑2					指宿市教委編　2001	
																											下山覚・中摩浩太郎ほか　2003	
293	奥木場	2	1																	3			有	30m	薩摩半島南部		宮田栄二　1987	
294	祝原	3	2	2	2								1	1						37			有	60m	薩摩半島南部		上東克彦編　1995	
295	栫ノ原	5	5																	10			有	28m	薩摩半島南部		上東克彦・福永裕暁・田宮瑞生	黒曜石原産地分析実施。
296	平田尻	1	3	1	1															22		礫群1	有	50m	薩摩半島南部		上東克彦編　1995	
	（第２次）	72	9	8																371	1箇所						上東克彦・福永裕暁・田宮瑞	黒曜石原産地分析実施
297	志風頭	475	102	42				4	4	1	2	4	1	1			23		隆帯文2	2591	3箇所	陥穴群2,	有	61m	薩摩半島南	11860±	上東克彦・福永裕暁編　1999	削器には背部二次加工細石刃石器5を含む。局部磨製石斧1は報文では局部磨製
																											亀科哲男　2000	黒曜石原産地分析実施。
298	ヘゴノ原	11	3	18				1	1	1							4			174	1箇所		有	50m	薩摩半島南部		上東克彦編　1997	黒曜石原産地分析実施。
299	愛宕Ｂ		1	2													1		無文2	22		散礫	有	47m	薩摩半島南部		上東克彦・福永裕暁・樋口匡・亀科哲男編　2000	
300	湯関原																						有	60m	薩摩半島南部		九州旧石器文化研究会2000	細石刃石器群の詳細は不明。
301	村ノ後																						有	60m	薩摩半島南部		九州旧石器文化研究会2000	細石刃石器群の詳細は不明。
302	西大原		1	2							1			1			1			6		礫群1	有	54m	薩摩半島南部		上東克彦・福永裕暁・樋口匡・亀科哲男編　2000	
303	内ノ田		1																	1			表面	20m	薩摩半島南部		上東克彦・福永裕暁・樋口匡・亀科哲男編　2000	
304	帖地１Ａ・Ｂ区	41	33	2			3			2		1	5	4			1		無文7	1245		礫群1	有	100m	薩摩半島南部		永野達郎編　2000	土器胎土に繊維を含む資料有り。局部磨製石斧2のうち1点は表面採集。
	２Ａ区	56	61	9	2		1	6				4	1	18	2				無文1	1913		礫群9					永野達郎編　2000	
305	鍋尾	14	8	1																656	6箇所		有	180m	薩摩半島南部		児玉健一郎編　2003	
306	東郷坂A	○	○												○								有	130m	薩摩半島南部			未報告。
307	石坂上	○	○																				表面	180m	薩摩半島南部		九州旧石器文化研究会2000	
308	桜立	281	102	7	22		3	7	1	1	2		5	16			2		隆帯文・	3429	2箇所	散礫	有	125m	薩摩半島南部		上田　耕編　2001	
309	農業開発総合センター遺跡群																						有		薩摩半島南部		九州旧石器文化研究会2000	
310	山野原		1																	3			有	22m	薩摩半島南部		宮下貴浩編　1995	
311	宇治野原	2	5																	10		礫群1	有	90m	薩摩半島南部		宮下貴浩編　1992	
312	小中原																					陥し穴	有	30m	薩摩半島南部		宮下貴浩編　1995	層位的にナイフ形石器文化終末期～細石器文化期と推定される。
313	上焼田		○																				有	20m	薩摩半島南部		戸崎勝洋・立神次郎ほか編　1977	
314	長ヶ原		1										3							39			有	240m	姶良台地		諏訪昭千代・弥栄久志ほか編　1978	
315	柳ヶ迫		10																	45			有	220m	姶良台地		諏訪昭千代・弥栄久志ほか編　1978	
316	石峰	177	23	5	4				1								2		○	534	7箇所		有	280m	姶良台地		長野眞一編　1980	
317	東免	○																					有	26m	姶良台地		九州旧石器文化研究会2000	未報告。
318	桑塚	9	9	3									2		1					338			有	153m	姶良台地		新東晃一・中村和美編　1993	石器総数は分布図ドットをカウント。正確な石器組成は不明。
319	中尾田		○																				有	200m	姶良台地		新東晃一・中島哲郎・井ノ上秀文・出雲茂人編　1991	
320	榎木原																					陥し穴12	有	？m	笠野原台地		永濱功治　2001	層位的に細石器文化期と推定される。
321	榎崎Ａ	67	15	7				2	6		1		2							479	3箇所		有	105m	笠野原台地		青崎和憲・児玉健一郎・中村和美　1992	
322	榎崎Ｂ	162	33	5						3	6	1	2							1700	3箇所	礫群9、ヒ	有	115m	笠野原台地		宮田栄二編　1993	
323	西丸尾	252	36	2	5					1	13	5	4							1500	2箇所	礫群4	有	120m	笠野原台地		宮田栄二・児玉健一郎編　1992	
324	西丸尾Ｂ		1																	2		土坑1	有	127m	笠野原台地		湯之前尚・関明恵編　1994	
325	山ノ上Ｂ																					陥し穴	有	160m	笠野原台地		山口俊博・松元敏幸編　1996	層位的にナイフ形石器文化終末期～細石器文化期と推定される。
326	道重	21	3																	24			有	150m	志布志湾岸		堂込秀人編　1990	
327	倉園B	7	2																	9			有	120m	志布志湾岸		牛ノ濱修・長野眞一編　1983	
328	井手平		1																	1			有	110m	志布志湾岸		戸崎勝洋・宮田栄二・峯崎幸清編　1984	
329	中原（曲瀬）															○							有	50m	志布志湾岸		立神次郎・中村耕治編　1980	
			2																	2							瀬戸口望・新東晃一・成尾英	縄文時代早期包含層に混在。
330	鎌石橋	2	1											1						5		炉跡1	有	39m	志布志湾岸		河口貞徳・峯崎幸清・上田耕　1982	

表6　東南部九州地域の細石刃石器群一覧表

NO.	遺跡名	組成																			石器集中	遺構	研究	標高	地域	年代	文献	備考
		細石刃	細石核	削器	掻器	彫器	錐	楔形石器	打製石斧	局部磨製石斧	礫器	磨石	敲石	ナイフ形石器	尖頭器	有舌尖頭器	石鏃	剥片	土器	総計								
331	前原和田（前原）																						有	400r	大淀川上流域		宮永正史・井ノ上秀文編　19	未報告。細石刃石器群の詳細は不明。
332	永磯																						有	350r	大淀川上流域		南九州石器文化談話会　1997	未報告。細石刃石器群の詳細は不明。
333	供養元																						有	390r	大淀川上流域		宮永正史・井ノ上秀文編　19	未報告。細石刃石器群の詳細は不明。
334	城ヶ尾（第Ⅱ文化層）	17															1			18	63点	礫群18	有	380r	大淀川上流	21110±	有馬孝一・馬籠亮道ほか編	第Ⅱ・Ⅲ文化層はナイフ形石器群主体の文化層。細石刃核・細石刃・石鏃の
	城ヶ尾（第Ⅲ文化層）	15																		15	31点	土坑1、礫	有			13130±	古環境研究所　2003	
	城ヶ尾（第Ⅳ文化層）	122	13		2			9				1	4	37						239	10点	礫群6	有					
	城ヶ尾（第Ⅴ文化層）	35	11		2		1	1					6	7			7			108	3箇所		有					
335	掛尾B		○	○																			有	250r	大淀川上流域		宮永正史・宮田栄二編　1988	
336	桐木	○	○																				有	295r	大淀川上流域		永濵功治　2001	未報告。細石刃石器群が二層に細分可能。
337	耳取	○	○																				有	350r	大淀川上流域		長野眞一　2001	未報告。細石刃石器群が二層ないし三層に細分可能。
338	大中原	42	11																	113			[illegible]	80m	種子島		桑波田武志・大久保浩二　2000	
339	湊		1																	1			[illegible]	70m	種子島		南九州石器文化談話会　1997	細石核1は作業面再生剥片。
340	立切		4																				有	120r	種子島		堂込秀人　1998	
341	三角山Ⅰ		1																	1			有	240r	種子島		菅牟田紀・藤崎光洋・上床真　2002	
342	銭亀	○	○																				有	80m	種子島		[illegible]　1993	細石刃核が10数点、細石刃核3点とブランク1点から最大の円錐に復元さ

※　各遺跡の報告・参考文献は、膨大なため印字をおこなわず、付録のデジタルデータ中に収録した。ご了承されたい。



1792　遺跡

日本列島における
細石刃文化遺跡分布図 2003

八ヶ岳旧石器研究グループのシンボルマーク

旧石器時代の食料といわれるハシバミの葉をデザインしてあり、その下縁は
八ケ岳の稜線を描いている。ハシバミは現在でもたくさん野辺山に自生する。

シンポジウム　日本の細石刃文化　I

― 日本列島における細石刃文化 ―

発行者：八ヶ岳旧石器研究グループ
発行日：2003年10月18日
編集者：堤　　隆
印刷所：ほおずき書籍株式会社

連絡先：〒385-0022　長野県佐久市岩村田1292-4
堤　隆方　八ヶ岳旧石器研究グループ
Ｅメール　tsutsumi@avis.ne.jp